

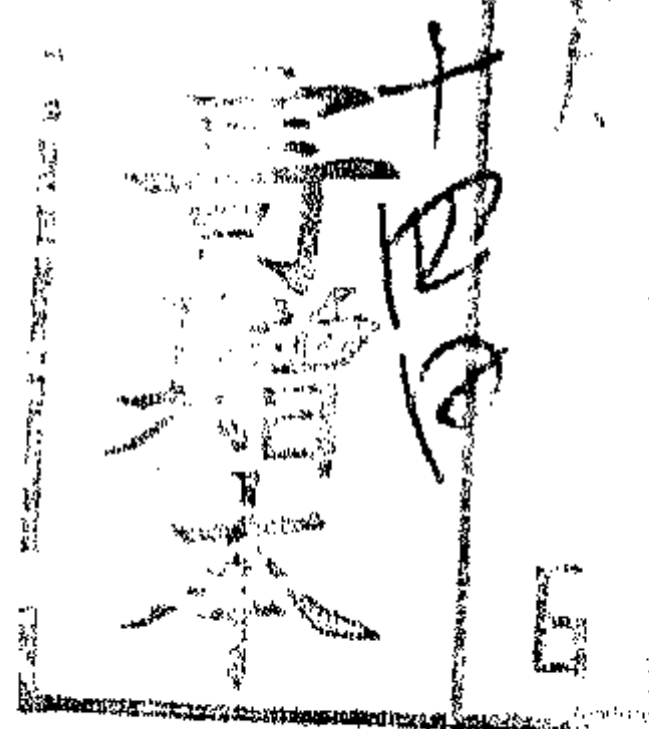
MONO3198023006

朝鮮總督府編纂

最近朝鮮事情要覽

一九三二年一月

金成漢





大正七年最近朝鮮事情要覽

凡例

本書は最近朝鮮に於ける施設經營の一斑及内地人發展の狀況其他朝鮮の事情を記述し兼て統計表を附し概括的觀察の便に供せむことを期せるものなり

大正七年一月

朝鮮總督府

大正七年 最近朝鮮事情要覽目次

第一章 沿革	頁
第一節 併合顛末	一
第二節 併合後の施設	二三
一 朝鮮總督府の設置	二三
二 總督府官制の施行	二四
三 職員の任用	三〇
四 行政區劃の整理	三三
五 財政の整理	三三
六 物産共進會の開設	三八
七 新政施行の治績と諭告	四一
八 總督の更迭と施政の方針	五二

第二章	風俗習慣	五五
第三章	地誌	六五
第一節	地形及地勢	六五
第二節	氣候	六六
第三節	戶口	七六
第四節	重要市街地	八五
第四章	交通	一〇七
第一節	關釜連絡概況	一〇七
第二節	道路	一〇八
第三節	港灣	一一九
第四節	鐵道	一二一
第五節	海事	一二六
第六節	江運	一四七

第五章 通信……………一五五

第一節 通信事業……………一五五

第二節 電氣事業……………一六五

第六章 地方行政……………一六九

第一節 道府郡島……………一六九

第二節 公共團體……………一七一

一 地方費……………一七一

二 府……………一七九

三 面……………一八五

四 學校組合……………一八八

五 水利組合……………一九五

第三節 府郡島臨時恩賜金事業……………二〇〇

第四節 濟生院……………二〇五

第五節 治療機關……………二一八

第七章 財政及經濟

第一節 財務	二二七
一 歲計	二二七
二 繼續費	二三五
三 帝國一般會計より支出の朝鮮經營費	二三六
四 朝鮮總督府特別會計所屬國債	二三八
五 租稅	二四〇
第二節 貨幣	二六二
第三節 金融	二六四
一 金融機關	二六四
二 金利	二六八
三 朝鮮銀行	二六九
四 農工銀行	二七二
五 普通銀行	二七八

六	手形交換所	二七八
七	地方金融組合	二八〇
第八章	農業	二八五
第一節	土地	二八五
第二節	農業者	二九二
第三節	農產物	二九五
第四節	勸農機關	三二四
第九章	拓殖事業	三三一
第十章	林業	三三九
第一節	森林	三三九
第二節	森林保護	三四一
第三節	殖林事業	三四三
第四節	造林貸付	三六〇

第五節	林野調査	三六二
第六節	營林廠	三六九
第七節	朝鮮の木材	三七三
第十一章	鑛業	三七五
第十二章	水産業	三九三
第一節	水産業の保護獎勵	三九三
第二節	水産業發展の狀況	四〇〇
第三節	水産業改良の獎勵	四〇四
第四節	製鹽業	四一五
第十三章	商業	四一九
第一節	朝鮮人の商業	四一九
第二節	内地人の商業	四二四
第三節	商業地	四二四

第四節	會社	四二六
第五節	商業會議所	四二九
第六節	米穀檢查	四三〇
第七節	商品陳列館	四三一
第八節	度量衡	四三四
第十四章 貿易		
第一節	總說	四三七
第二節	國別貿易	四三八
第三節	港別貿易	四四〇
第四節	輸移出重要品	四四三
第五節	輸移入重要品	四四四
第六節	陸接國境貿易及通過貿易	四四六
第七節	貿易船舶	四四七
第八節	稅關	四四八

第十五章 工業……………四五三

第一節 朝鮮人の工業……………四五三

第二節 内地人の工業……………四五八

第三節 官營工業……………四六八

第四節 中央試験所……………四七〇

第五節 地方工業傳習所……………四七一

第六節 工業所有權の保護……………四七一

第七節 工業獎勵……………四七三

第八節 勞銀……………四七四

第十六章 土地調査……………四七七

第十七章 宗教及享祀……………四八五

第一節 宗教……………四八五

第二節 享祀……………四九一

第十八章 古蹟及遺物……………四九五

第十九章 教育……………五〇一

第一節 内地人の教育……………五〇一

第二節 朝鮮人の教育……………五〇九

第三節 留學生……………五二三

第二十章 衛生……………五二五

第一節 醫療機關……………五二六

第二節 藥品取締……………五三四

第三節 飲食物取締……………五三五

第四節 痘苗製造……………五三六

第五節 屠場及屠肉……………五三七

第六節 牛乳搾取所及牛乳取締……………五三九

第七節 檢査……………五四〇

第八節 汚物掃除	五四二
第九節 墓地、火葬場	五四二
第十節 飲料水	五四四
第十一節 傳染病	五四七
第二十一章 警察	五五一
第二十二章 司法	五六七
第一節 裁判制度	五六七
第二節 適用法規	五七〇
第三節 不動產登記制度	五七三
第四節 民籍事務	五七四
第五節 公證事務	五七五
第六節 執達吏事務	五七六
第七節 監獄	五七七

大正七年最近朝鮮事情要覽

第一章 沿革

第一節 併合顛末

東洋永遠の平和を維持し日韓兩國を結合する利益共通の主義を鞏固ならしむる目的を以て明治三十七年二月在京城の帝國代表者は韓國政府と重要なる協商を遂げ同月二十三日兩國代表者に於て左記議定書の調印を了せり本議定書は即ち日韓兩國の關係を一新し其の後に於ける兩國關係推移の端を啓きたるものなり

- 一 韓國政府が帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シテ其ノ忠告ヲ容ルルコト
- 二 韓國皇室ノ安全廉寧ノ保證
- 三 韓國ノ獨立及領土保全ノ保證

四 第三國ノ侵害若ハ内亂ニ依リ韓國皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ニ帝國政府ハ臨機ノ措置ヲ取り韓國政府ハ之ニ對シテ十分ノ便益ヲ與フルコト竝帝國政府ハ軍事上必要ノ地點ヲ收用シ得ルコト

五 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ本協約ノ趣意ニ違返スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルヲ得サルコト

六 帝國代表者ト韓國外部大臣トノ間ニ未悉ノ細條ヲ臨機協定スルコト

尋て八月二十二日に至り日韓兩國政府代表者は京城に於て更に一の協商を遂げ財政外交兩顧問の傭聘竝韓國政府と諸外國との條約締結其の他外國人に對する特權讓與若は契約等の處理に關しては豫め帝國政府と協議すへきことを協定し兩國の關係を一層明確ならしめたり蓋し前記二月の議定書に依り兩國の關係大に進捗したりと雖韓國に於ける施政改善の實を擧げむと欲するは決して容易の業にあらざるのみならず外交に關する同議定書の趣意を實行するに當りては一般に互り猶詳細なる取極を要するものありたるに因るなり

翌三十八年九月日露兩國間に締結せられたるポーツマス條約に於て露國政府は帝國が韓國に於て政治上軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有することを承認し帝國が韓國に於て必要と認むる指導保護及監理の措置を執るに方り之を阻害し又は之に干渉せざるべきを約したり是より前年八月十二日調印せられたる日英同盟約款も亦日本國は韓國に於て政治上軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有するを以て大不列顛國は日本國が該利益を擁護増進せむか爲に正當且必要と認むる指導監理及保護の措置を韓國に於て執るの權利を承認すと規定し即ち一方に於ては日英同盟約款の支持他方に於ては日露講和條約の承認に依り日韓兩國の關係は日露戰爭終結と前後して一大進捗を來たし韓國に對する帝國の地位益鞏固且明確を加ふるに至れり帝國政府は此の新關係に基き韓國に對する保護指導を完ふし益兩國を結合する利益共通の主義を鞏固ならしめむことを欲し此の目的を以て同年十一月十七日所謂日韓新協約を締結せり本協約の成立するや韓國保護政治の基礎愈確立するに至れり茲に於て同年十二月二十日勅令第二百六十七號を以て統監府及理事廳官制を發布し同時に在韓國の帝國公使館及領事館を撤廢し侯爵伊藤博文統監に任せられ翌三十九年二月一日各其の事務を開始せり統

監府既に設置せられ韓國の外交は擧げて帝國政府の監理に歸し施政の改善漸く其の歩を進むるを得たりと雖一朝にして積年の宿弊を一洗し保護の實績を擧げむとするは固より容易の業に非ず加之維新更始の際に當り上下の人心動もすれば其の鋪嚮する所を誤り種種の妨碍頻發せり偶明治四十年夏に至り海牙密使事件の起るや統監は日韓兩國の關係を一層密邇せしむるの必要を認め同年七月二十四日更に韓國政府の代表者と一の協約を訂立せり即ち左の如し

- 一 韓國政府ハ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト
- 二 法令制定及重要ナル行政上ノ處分ニ付豫メ統監ノ承認ヲ受クヘキコト
- 三 司法事務ト普通行政事務トノ區別ヲ爲スコト
- 四 高等官吏ノ任免ニ統監ノ同意ヲ要スルコト
- 五 統監ノ推薦ニ依リ日本人ヲ韓國政府ニ任用スルコト
- 六 統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ傭聘セサルコト
- 七 財政顧問ノ傭聘ヲ廢止スルコト

斯の如く韓國に對する我が保護權行使の範圍を擴張し一轉内地人官吏をして從來間接指導の地位に在りしを直接施政の衝に當らしめ政務機關全般に亙る官制改革を斷行し宮中府中を燦然區別し司法制度の獨立を企圖し中央地方各般行政の刷新に努めたりしも當時韓國財政の狀態は司法制度を整備するの財力を有せざるのみならず法典の整備と司法官の養成とは一朝にして之を行ひ得べきに非ざるを以て明治四十二年七月韓國の司法及監獄事務を舉げて我が政府に委託せしむるの件を協定し同年十一月より之を實施し同時に韓國に於ける此等の機關を廢止し統監府司法廳、裁判所及監獄を設置し以て韓國に在留する帝國臣民及韓國臣民の生命財産を均等に保護するの基礎を確立するに至れり

斯の如くにして帝國政府は韓國政府の委託に依り施政の改善を試み著著其の實績を舉げむさせしも猶未だ遽に民衆の福利を増進し公共の安寧を保持し秩序を恢復するに足らず暴徒草賊は處處に出沒し良民其の堵に安せず又不逞の徒は民衆を煽動使嗾し官吏に對し暴行を加へ職務の執行を阻礙する等人心の動搖甚たしく遂に明治四十二年十月二十六日哈爾濱に於て前伊藤統監を暗殺するに至れり

尋て同年十二月二十二日首相李完用の兇害を見るありて國內の形勢日に不穩にして到底韓國を併合するにあらざれば完全に統治の目的を達し有終の美果を收むること能はざるの狀勢瞭然たるものあり茲に於てか併合の議漸く動きしも未だ遂行の機運に至らざりしか會明治四十三年五月三十日統監子爵曾彌荒助病を以て職を辭するや陸軍大臣子爵寺内正毅統監に兼任せられ茲の歲六月二十四日帝國は韓國の警察事務を繼承し統監府警察官署官制を公布し同年七月一日之を實施するに至れり尋て同年七月二十三日寺内統監の朝鮮に赴任するや當時の狀勢併合の一日も忽諾に付すへからざるものあるを察知し韓國政府の當局者と折衝し兩國將來永遠の福利を増進せむか爲韓國皇帝自ら進みて統治權を我か天皇陛下に讓渡するの時宜に適切なることを提議せしに兩國政府の意見一致したるを以て八月二十二日寺内統監は韓國總理大臣李完用と左記日韓併合條約を締結調印せり

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ハ兩國間ノ特殊ニシテ親密ナル關係ヲ願ヒ相互ノ幸福ヲ増進シ東洋ノ平和ヲ永久ニ確保セムコトヲ欲シ此ノ目的ヲ達セムカ爲ニハ韓國ヲ日本帝國ニ併合スルニ如カサルコトヲ確信シ茲ニ兩國間ニ併合條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲日本國皇帝陛下ハ統監子

齋寺内正毅ヲ韓國皇帝陛下ハ内閣總理大臣李完用ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ右全權委員ハ會同協議ノ上左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 韓國皇帝陛下ハ韓國全部ニ關スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ日本國皇帝陛下ニ讓與ス

第二條 日本國皇帝陛下ハ前條ニ掲ケタル讓與ヲ受諾シ且全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトヲ

承諾ス

第三條 日本國皇帝陛下ハ韓國皇帝陛下太皇帝陛下皇太子殿下其ノ后妃及後裔ヲシテ各其ノ地

位ニ應シ相當ナル尊稱、威嚴及名譽ヲ享有セシメ且之ヲ保持スルニ十分ナル歳費ヲ供給スヘキ

コトヲ約ス

第四條 日本國皇帝陛下ハ前條以外ノ韓國皇族及其ノ後裔ニ對シ各相當ノ名譽及待遇ヲ享有セシ

メ且之ヲ維持スルニ必要ナル資金ヲ供與スルコトヲ約ス

第五條 日本國皇帝陛下ハ勳功アル韓人ニシテ特ニ表彰ヲ爲スヲ適當ナリト認メタル者ニ對シ榮

銜ヲ授ケ且恩金ヲ與フヘシ

第六條 日本國政府ハ前記併合ノ結果トシテ全然韓國ノ施設ヲ擔任シ同地ニ施行スル法規ヲ遵守スル韓人ノ身體及財産ニ對シ十分ナル保護ヲ與ヘ且其ノ福利ノ増進ヲ圖ルヘシ

第七條 日本國政府ハ誠意忠實ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ相當ノ資格アル者ヲ事情ノ許ス限リ韓國ニ於ケル帝國官吏ニ登用スヘシ

第八條 本條約ハ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タルモノニシテ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右證據トシテ兩全權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十三年八月二十二日

統 監 子爵 寺 內 正 毅 印

隆熙四年八月二十二日

內閣總理大臣 李 完 用 印

之ニ同時に帝國政府は韓國ニ條約を有し又は韓國に於て最惠國待遇を享けつつある獨逸 亞米利加

合衆國、奧地利、洪牙利、白耳義、支那、丁抹、佛蘭西、大不列顛、伊太利、露西亞の各國政府に對シ左の宣言を爲したり

明治三十八年日韓協約成リテヨリ茲ニ四年有餘其ノ間日韓兩國政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ從事シタリト雖同國現在ノ統治制度ハ尙未タ十分ニ公共ノ安寧秩序ヲ保持スルニ足ラス衆民疑懼ノ念ヲ懷キ適歸スル所ヲ知ラサルノ狀アリ韓國ノ靜謐ヲ維持シ韓民福利ヲ増進シ憐セテ韓國ニ於ケル外國人ノ安寧ヲ計ルカ爲ニハ此ノ際現制度ニ對シ根本的ノ改善ヲ加フルノ必要アルコト瞭然タルニ至レリ日韓兩國政府ハ前記ノ必要ニ應シテ現在ノ事態ヲ改良シ且將來ノ安固ニ對シテ完全ナル保障ヲ與フルノ急務ナルヲ認メ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ承認ヲ經兩國全權委員ヲシテ一ノ條約ヲ締結セシメ全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトト爲セリ

該條約ハ八月二十九日ヲ以テ之ヲ公布シ同日ヨリ直ニ之ヲ施行スヘク日本帝國政府ハ同條約ノ結果朝鮮ニ關スル統治ノ全部ヲ擔當スルコトトナレルヲ以テ茲ニ左ノ方針ニ依リ外國人及外國貿易ニ關スル事項ヲ處理スヘキコトヲ表明ス

一 韓國ト列國トノ條約ハ當然無效ニ歸シ日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラルヘシ

朝鮮ニ在留スル諸外國人ハ日本法權ノ下ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有シ且其ノ適法ナル既得權ノ保護ヲ受ク

日本帝國政府ハ併合條約施行ノ際現ニ朝鮮ニ於ケル外國領事裁判所ニ繫屬スル事件ハ最終ノ決定ニ至ル迄其ノ裁判ヲ續行セシムルコトヲ承諾スヘシ

二 日本帝國政府ハ從來ノ條約ニ關係ナク今後十年間朝鮮ヨリ外國ニ輸出シ又ハ外國ヨリ朝鮮ニ輸入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル外國船舶ニ對シ現在ト同率ノ輸出入税及噸税ヲ課スヘシ

朝鮮ヨリ日本ニ移出シ又ハ日本ヨリ朝鮮ニ移入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル日本船舶モ亦今後十年間前項ノ貨物及船舶ニ對スルト同率ノ課税ヲ受クルモノトス

三 日本帝國政府ハ今後十年間日本國トノ條約國ノ船舶ニ對シ朝鮮開港間及朝鮮開港ト日本開港間ノ沿岸貿易ニ從事スルヲ許スヘシ

四 從來ノ開港場ハ馬山浦ヲ除クノ外舊ニ依リ之ヲ開港トナシ更ニ新義州ヲモ開港トシ内外船艚ノ出入及之ニ依ル貨物ノ輸出入ヲ許スヘシ

又亞爾然丁、伯刺西爾、智利、格倫比亞、西班牙、希臘、墨西哥、諾威、和蘭、祕露、葡萄牙、暹羅、瑞典、瑞西の各國政府に對し左の宣言を爲したり

明治四十三年八月二十二日日本國ト韓國トノ間ニ締結セラレタル條約ニ依リ韓國ハ日本國ニ併合セラレ本日ヨリ日本帝國ノ一部ヲ成スコトトナレリ爾今日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラルヘク該現行條約ヲ有スル列國ノ臣民又ハ人民ハ朝鮮ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有スヘシ

日韓併合條約の成立するや同月二十九日左記詔書の煥發と共に前記條約を公布せり

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確定セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セヨ

同日高麗國皇帝は高麗國臣民に對し左の勅諭を發せられたり

朕智徳ニシテ艱大ナル業ヲ承ケ臨御以後今日ニ至ル迄維新ノ政令ニ關シ亟圖シ備試シ用力未タ嘗テ至ラスンハアラスト雖由來積弱ヲ爲シ疲弊極處ニ至ル時日固ニ挽回ノ施措望ナシ晝夜憂慮善後ノ策茫然タリ此ニ任シ支離益甚シケレハ自ラ終局拾收シ得サルニ底ラン寧ロ大任ヲ人ニ託シ完全ナル方法ト革新ナル功效ヲ奏セシムルニ如カス故ニ朕於是盟然内ニ省ミ靡然自ラ斷シ茲ニ韓國ノ統治權ヲ從前ヨリ親信信仰シタル隣國大日本皇帝陛下ニ讓與シ外東洋ノ平和ヲ鞏固ニシ内八域ノ民生ヲ保全セントス惟フニ爾大小臣民國勢ト時宜トヲ深察シ煩擾スルコト勿ク各各其ノ業ニ安ンシ日本帝國ノ文明新政ニ服從シ幸福ヲ共受セヨ朕ノ今日ノ此ノ舉ヤ爾有衆ヲ忘ルルニ非ス唯爾有衆ヲ救済セントスルノ至意ニ出ツ爾臣民等ハ朕ノ此ノ意ヲ克ク體セヨ

と以て兩國素志の相融和せるを見るべく何等の騷擾を見ることなくして併合の事成り面積一萬四千百二十三方里の領土は新に附加せられ韓國を改めて朝鮮と稱し朝鮮總督を置き天皇に直隸し委任の範圍内に於て陸海軍を統率し諸般の政務を統轄せしめらる茲に於て寺内統監は朝鮮總督に任せらる

る。同時に各地理事官に訓令を發して經營指導宜しきを得、施政の効果を擧ぐるに遺漏なからしめんことを期せり其の訓令に曰く

本日公布ノ併合條約ニ依リ韓國ハ帝國ニ併合セラレ自今朝鮮ト改稱シテ帝國領土ノ一部トナリ域内ノ人民ハ悉ク帝國ノ治下ニ立チ政令是ヨリ一途ニ出テ皆皇化ノ惠澤ニ浴スヘシ然レトモ朝鮮現時ノ狀態ハ未タ全ク帝國內地ト同シカラサルモノアリ故ニ帝國法令ニシテ直ニ朝鮮ニ適用セラルルモノノ外併合ノ結果朝鮮ニ於テ效力ヲ失フヘキ帝國法令及韓國法令ハ爾後總督ノ命令トシテ其ノ效力ヲ存續シ將來時勢ノ進運ニ從ヒ漸チ逐テ改修ヲ加フヘシ居留民團ハ元來外國ニ住居スル帝國臣民ノ設立スル團體ニシテ朝鮮カ帝國ノ版圖ニ歸シタル以上ハ自然地方行政機關ニ編入セラルヘキモノナリト雖今俄ニ之ヲ廢止スルニ便ナラサル事情アルニ依リ暫ク其ノ存在ヲ認メ將來之ニ代ルヘキ地方制度ノ完成ヲ待テ其ノ整理ヲ爲サシムヘシ又韓國及外國間ノ諸條約ハ消滅ニ歸シ帝國及外國間ノ諸條約ハ事情ノ許ス限り朝鮮ニ適用セラレ該條約國ノ臣民及人民ハ帝國內地ニ於ケルト同様ノ權利及特典ヲ享有スルト共ニ總テ帝國ノ法權ニ服從スルトトナリ隨テ朝鮮ニ在留ス

ル外國人ニ係ル訴訟事件ハ之ヲ帝國裁判所ニ於テ管轄スルコト恰モ他ノ一般人民ニ關スル場合ト同一ナルヘシ關稅ニ至テハ之ト稍其ノ事情ヲ異ニシ今直ニ帝國ノ關稅法又ハ協定稅率ヲ適用スルトキハ管ニ外國貿易ニ劇變ヲ與フルノミナラス内國ノ經濟關係ニ對シ重大ナル影響ヲ及スヘキカ故ニ帝國政府ハ當分ノ内總テ從來ノ慣例ヲ繼續スルコトニ決シ條約上ノ規定ニ拘ラス朝鮮ノ輸出入貨物ニ對シテハ從來ト同率ノ關稅ヲ課シ又帝國内地ト朝鮮トノ間ニ出入スル貨物ニ付テモ從來ト同率ノ移出入稅ヲ課スルコトト爲セリ

元來併合ノ趣旨タルヤ兩國相合シテ一體ト爲リ彼我ノ差別ヲ撤去シ相互全般ノ安寧幸福ヲ増進セムトスルニ外ナラス然ルニ之ヲ以テ強弱兩國ノ成敗ト爲シ驕慢自ラ持シ輕浮ノ言行ニ出ツルカ如キコトアラム是レ實ニ其ノ本旨ヲ没却スルモノト謂フヘシ從來本邦ノ居留民ハ多クハ異郷ニ僑居スルノ想ヲ爲シ動モスレハ自ラ高ウシテ他ヲ蔑視スルノ弊アリ若今日ノ改革ニ際シ一層倨傲ノ心ヲ增長シ新附ノ人民ニ凌辱ヲ加フルカ如キコトアラハ却テ彼等ノ惡感隔意ヲ招キ事毎ニ杆格ヲ生シ將來永ク相融和スル機ナクシテ遂ニ不測ノ禍ヲ醸スニ至ルヘシ今幸ニ此ノ更始一新ノ時ニ會ス

宜シク其舊愆前愆ナ一變シ新附ノ領民ハ卽我方同胞タルコトヲ念ヒ之ニ接スルニ同情ヲ以テシ之ヲ待ツニ友誼ヲ以テシ相提携シテ處世ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ隆昌ニ貢獻スルコトニ努ムルヲ要ス貴官ハ以上ノ趣旨ニ基キテ管下一般ノ居住民ヲ指導シ將來施政ノ效果ヲ舉クルニ於テ遺漏ナキコトヲ期セラレヘシ

明治四十三年八月二十九日

統監 子爵 寺内 正毅

又總督は朝鮮上下の民衆に諭告し施政の綱領を示して曰く

觀望文武 天皇陛下ノ大命ヲ奉シ本官今ヤ朝鮮統轄ノ任ニ膺ルニ際シ茲ニ施政ノ綱領ヲ示シテ朝鮮上下ノ民衆ニ諭告ス

夫レ疆域相接シ休戚相倚リ民情亦昆弟ノ誼アルモノ相合シテ一體ヲ成スハ自然ノ理必至ノ勢ナリ是ヲ以テ大日本國 天皇陛下ハ朝鮮ノ安寧ヲ確實ニ保障シ東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持スルノ緊切ナルヲ念ヒ前韓國元首ノ希望ニ應シ其ノ統治權ノ讓與ヲ受諾シ給ヒタリ自今前韓國ノ皇帝陛下ハ昌德宮李王殿下ト稱セラレ皇太子ハ王世子トナリテ後嗣長ヘニ相繼承シ萬世無窮タルヘク太皇帝陛下

トハ德壽宮李太王殿下ト稱セラレ竝ニ皇族ノ禮遇ヲ賜ハリ其ノ秩俸ノ豐厚ナル皇位ニ在スノ時ト異ル所ナカルヘシ朝鮮民衆ハ盡ク帝國ノ臣民ト爲リ 天皇陛下撫育ノ化ヲ被ムリ長ヘニ深仁厚徳ノ惠澤ニ浴スヘシ殊ニ忠順ニ新政ヲ翼賛スル賢良ハ其ノ效勞ニ準シ榮爵ヲ授ケラレ恩金ヲ賜ハリ又其ノ材能ニ應ジ帝國ノ官吏トシテ或ハ中樞院議官ノ班ニ列セラレ或ハ中央若ハ地方官廳ノ職員ニ登用セラルヘシ

又班族儒生ノ耆老ニシテ恭謙能ク庶民ノ師表タル者ニハ尙齒ノ恩典ヲ與ヘラレ孝子節婦鄉黨ノ模範タル者ニハ褒賞ヲ賜リ以テ其ノ德行ヲ表彰セラルヘシ曠ニ地方官吏ノ職ニ在リ國稅欠運ノ行爲アリタル者ハ其ノ責任ヲ解除シ特ニ其ノ未勵金ノ完納ヲ免セラルヘシ又從前法律ニ違反シタル者ニシテ其ノ犯罪ノ性質特ニ惡諒スヘキ者ニ對シテハ一律ニ大赦ノ特典ヲ與ヘラルヘシ

如今地方ノ民衆積弊ノ餘孽ヲ受ケ或ハ業ヲ失ヒ產ヲ傾ケ又甚シキハ流離饑饉ニ瀕スル者アリ依テ先ツ民力ノ休養ヲ圖ルノ急務ナルヲ認メ隆熙二年度以前ノ地稅ニシテ今尙未納ニ係ルモノハ之ヲ免除シ隆熙三年以前ノ貸付ニ係ル社穀ハ其ノ還納ヲ特免セシメ且本年秋季ニ徵收スヘキ地稅ハ特

ニ其ノ五分ノ一ヲ輕減シ更ニ國帑約一千七百萬圓ヲ支出シ之ヲ十三道三百二十有餘ノ府郡ニ配與シ以テ士民ノ授産、教育ノ補助並凶歉ノ救濟ニ充テシムヘシ是皆斯ノ更始一新ノ時ニ方リ惠撫慈養ノ聖旨ヲ昭ニスル所以ナリ然リト雖國政ノ利澤ヲ蒙ル者其ノ分ニ應シテ國費ヲ負擔スルハ天下ノ通則ニシテ古今東西皆然ラサルハ莫シ故ニ克ク這般救恤ノ本旨ヲ體シ或ハ恩ニ徂レテ奉公ノ心ヲ失ハサランコトヲ期スヘシ

凡ソ政ノ要ハ生命財産ノ安固ヲ圖ルヨリ急ナルハ莫シ蓋シ殖産ノ方興業ノ途之ニ次テ振作スルヲ得ヘケレハナリ從來不逞ノ徒頑迷ノ輩遐邇ニ出沒シ或ハ人ヲ殺シ財ヲ掠メ或ハ非謀ヲ企テ騷擾ヲ爲ス者アリ是ヲ以テ帝國ノ軍隊ハ各道ノ要所ニ駐屯シテ時變ニ備ヘ憲兵警官ハ善ク都鄙ニ互リテ專ラ治安ノ事ニ從ヒ又各地ニ法廷ヲ開キテ公平無私ノ審判ヲ下スニ努ム是固ヨリ奸兇ヲ懲罰シ邪曲ヲ芟除セムカ爲ナリト雖畢竟國內全般ノ安寧秩序ヲ維持シ各人ヲシテ其ノ堵ニ安シテ業ヲ營ミ産ヲ治メシメムトスルニ外ナラス

今朝鮮ノ地勢ヲ通觀スルニ其ノ南土ハ肥沃ニシテ農桑ニ適シ其ノ北地ハ概ネ礦物ニ富ミ内河外海

亦魚介多シ遺利餘澤ノ獲收スヘキモノ鮮少ナリトセス其ノ開發ノ方法宜シキヲ得ハ産業ノ振作期シテ待ツヘシ而シテ産業ノ發達ハ主トシテ運輸機關ノ完成ニ俟タサルヘカラス是事ヲ創メ業ヲ起スノ階梯ナレハナリ今通路ヲ十三道ノ各地ニ開キ鐵道ヲ京城元山間及三南地方ニ新設シ漸チ以テ全土ニ及サムトス斯ノ如クニシテ大成ヲ將來ニ期スルト共ニ其ノ開鑿敷設ノ工程ニ於テ衆民ニ生業ヲ與ヘ其ノ窮乏ヲ拯フノ一助タルヘキヲ疑ハス朝鮮古來ノ流弊ハ好惡乖逆唯利ヲ以テ相爭フニ在リ是ヲ以テ一黨勢ヲ得レハ忽チ他派ヲ戕ハムトシ一派力ヲ占ムレハ輒チ他黨ヲ仆サムトシ頽頽排濟其ノ窮極スル所ヲ知ラス終ニ産ヲ破リ家ヲ亡ホス者尠シトセス是尺害アリテ寸益ナシ爾後黨ヲ樹テ社ヲ結ヒ徒ニ輕舉妄動ヲ事トスルカ如キコトアルヘカラス但シ政令洽ク下ニ及ハス民意動モスレハ上ニ達セスシテ上壓下怨ノ弊ヲ釀スハ古今其ノ例ニ乏シカラス依テ中樞院ノ規模ヲ擴張シ老成ノ賢良ヲ網羅シテ其ノ議官ニ列シ重要ナル政務ノ諮詢ニ應セシメ又各道及各府郡ニハ參事官又ハ參事ノ職ヲ設ケ能士俊材ヲ登用シテ之ニ充テ其ノ言議ヲ徵シ其ノ獻策ニ聽キ以テ政令ト民情ト相抵牾スル所ナカラントナ期ス

凡ソ人生ノ憂患ハ疾病ヨリ酷シキハ莫シ從來朝鮮ノ醫術ハ未タ幼稚ノ域ヲ脱セスシテ以テ痛苦ヲ救ヒ天壽ヲ全ウセシムルニ足ラス是最モ痛嘆スヘキ所ナリ蓋ニ京城ニ中央醫院ヲ開キ又全州清州及咸興ニ慈惠醫院ヲ設ケテ以來衆庶ノ其ノ恩波ヲ蒙ル者極メテ多シト雖未タ全土ニ普及セサルヲ遺憾トシ既ニ令ヲ發シテ更ニ各道ニ慈惠醫院ヲ増設セシメ名醫ヲ置キ良藥ヲ備ヘ汎ク起死回生ノ仁術ヲ施サシメムトス

願フニ人文ノ發達ハ後進ノ教育ニ俟タサルヘカラス而シテ教育ノ要ハ智ヲ進メ德ヲ磨キ以テ修身齊家ニ資スルニ在リ然ルニ諸生動モスレハ勞ヲ厭ヒ逸ニ就キ徒ニ空理ヲ談シテ放漫ニ流レ終ニ無爲徒食ノ遊民タル者往往ニシテ之レ有リ自今宜シク其ノ弊ヲ矯メ華ヲ去リ實ニ就キ懶惰ノ陋習ヲ一洗シテ勤儉ノ美風ノ涵養スルコトニ努ムヘシ

信教ノ自由ハ文明列國ノ均シク認ムル所ナリ各人其ノ崇拜スル教旨ニ倚リ以テ安心立命ノ地ヲ求メムトスルハ固ヨリ其ノ所ナリト雖宗派ノ異同ヲ以テ漫ニ紛争ヲ試ミ又ハ名ヲ信教ニ藉リテ明ニ政事ヲ議シ若ハ異圖ヲ企テムトスルカ如キハ卽チ良俗ヲ荼毒シ安寧ヲ妨害スルモノナルヲ以テ當

ニ法ヲ案シテ處斷セサルヘカラス然レトモ儒佛諸教ト基督教トヲ間ハス其ノ本旨ハ畢竟人生世態
ノ改善ニ在ルカ故ニ固ヨリ施政ノ目的ト背馳セサルノミナラス却テ之ヲ裨補スヘキモノタルヲ疑
ハス之ヲ以テ各種ノ宗教ヲ待ツニ毫モ親疎ノ念ヲ挾マサルハ勿論其ノ布教傳道ニ對シテハ適當ナ
ル保護便宜ヲ與フルニ吝ナラサルヘシ

本官今 聖旨ヲ持シテ此ノ地ニ莅ムヤ一ニ治下生民ノ安寧幸福ヲ增進セムト欲スルノ外他念アル
ナシ是レ竝ニ諄諄トシテ其ノ適從スヘキ所ヲ諭示スル所以ナリ尙漫ニ妄想ヲ逞リシ敢テ施設ヲ妨
碍スル者アラハ斷シテ假借スル所ナカルヘシ若シ夫レ忠誠身ヲ持シ謹慎法ヲ守ルノ良士順民ニ至
ラズテハ必ス皇化ノ惠澤ニ霑ヒ其ノ子孫亦永ク恩波ニ浴スヘシ爾等恪テ新政ノ宏謨ヲ奉體シテ苟モ
違フ所アル勿レ

明治四十三年八月二十九日

統 監 子爵 寺 内 正 毅

斯くて併合の事成るや同日優詔を下し給ひて舊韓國の皇帝及皇族は帝國皇族の禮を以て之を待ち子
孫をして其の榮錫を世襲し永く寵光を享けしむること爲れり即ち舊韓國皇帝を冊して王と爲し昌

德宮李王と稱し舊皇太子及將來の世嗣を王世子と爲し舊太皇帝を太王と爲し德壽宮李太王と稱し又李王の懿親李媼及李熹を以て公と爲し孰れも其の僮匹を王妃、王世子妃、太王妃、公妃と爲し殿下の敬稱を用ゐしめられ殊に李王家の歳費は在位の時と異なる所なく年年一百五十萬圓を給與せられ日常の供御も従前に比し毫も差異なく其の祭祀典禮の如きも亦削減を加へずして祖宗崇敬の道を盡すに遺憾なからしめられたり又勳功ある朝鮮人に對しては朝鮮貴族令を定め榮爵を授けられ之に依り同年十月貴族に列せられたる者七十六名即ち侯爵六人伯爵三人子爵二十二人男爵四十五人あり而も聖恩の優渥なる更に赤子を體卹するの意を昭示し給ひ舊刑諸般の罪囚中情狀の憫諒すへき者に對しては特に大赦を行ひ且積年の逋租及當年の租税は之を減免し給へり囚人にして此の惠澤に浴したる者一千七百七十七人に及へり又特に臨時恩賜公債三千萬圓を朝鮮に下賜せられたり貴族及功勞者並其の遺族勅任奏任判任の官吏にして此の惠恤に與りたる者三千六百三十八人此の金額八百二十四萬六千八百圓班族儒生の耆老にして恭謙能く庶民の師表たる者に對し尙齒の恩典を與へられたる者一萬二千百五十人此の金額三十萬圓孝子節婦鄉黨の模範たる者に對し褒賞を賜りたる者三千二百九人錄

寡孤獨の憐愍すへき者に對し惠恤せられたる者七萬九百二人此の金額合計二十三萬五千九百圓以上は一時の恩賜にして斯の惠澤に浴したる者上下擧て感泣せざる者なしと雖未だ以て一般の民衆をして永遠無窮の天恩に均霑せしむること能はざるを以て更に臨時恩賜金の中一千七百三十九萬八千圓を全道の府郡に分與し之を基金として永久に保存し其の利子を以て士民の授産教育及凶歉救濟の資金に充てしめられたり又同五十萬圓を以て孤兒の教養盲啞者の教育及精神病者の救療基金に充て二百八十五萬五千八百圓を以て一般貧民の救療基金とし尙二十五萬圓を以て經學院基金と爲し文廟の祭祀經學の講究を繼續せしめ風教の維持に努め更に同二十一萬三千五百圓を以て行路病者救療基金に充てられたり

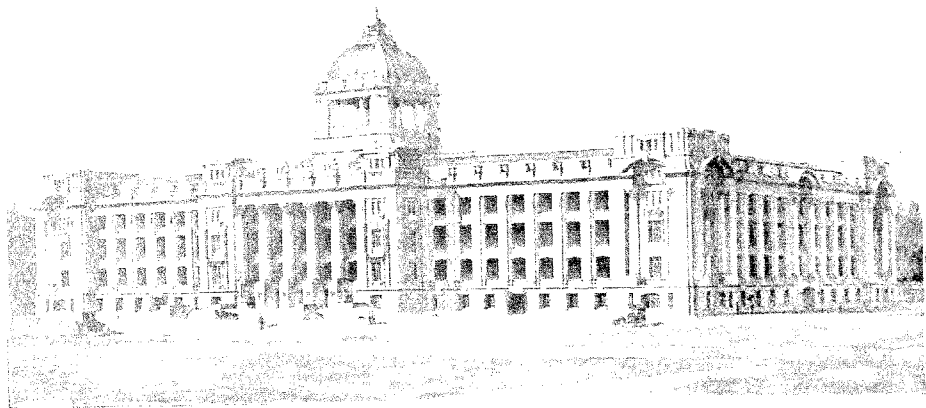
第二節 併合後の施設

一 朝鮮總督府の設置

明治四十三年八月二十九日併合條約の公布と同時に朝鮮總督府を設置し當分の間統監をして朝鮮總

督の職務を行はしめらる是より前キ舊韓國政府は明治二十七八年改革の際日本の制度を模倣し中央に内閣、中樞院、及外部、内部、度支部、軍部、法部、學部、農商工部の七部を設けたり。雖宮中の勢力常に府中を壓し内閣の更迭頻繁にして殆ど朝令暮改の狀ありしか其の後明治三十八年十一月日韓協約の結果帝國が韓國の外交事務を監理するや同年十二月統監府の開設と同時に外部を廢止し尋て明治四十年六月内閣官制を改正し總理大臣の權根を明かにし内閣會議を經へき事項を改定し同年七月日本人を各部次官以下要路に任用し且各部官制並地方官官制を改正して行政機關の統一を企圖し同年七月帝國が司法事務の委任を受くるや同年十月法部を廢し其の事務を統監府司法廳に引繼きたり斯の如くにして併合當時に於ける舊韓國の統治機關は中央に内閣以下内部、度支部、農商工部、學部、中樞院地方に道、府、郡廳、財務監督局、財務署等ありしか帝國政府は別に舊韓國政府の委託に係る政務を執行し且在留帝國臣民を管轄する爲統監府以下理事廳、司法廳、裁判所、警察官署、鐵道管理局、通信官署、特許局等を有したりしなり

二 總督府官制の施行



朝鮮總督府新廳舎の模倣

明治四十三年十月一日朝鮮總督府及所屬官署官制を施行し人員一千四百有餘人經費七十六萬五千圓を節約することを得たり總督府は總督官房(武官、祕書課、參事官)總務部(文書課、外事局、人事局、會計局)内務部(庶務課、地方局、學務局)度支部(庶務課、稅關工事課、司稅局、司計局)農商工部(庶務課、殖産局、商工局)司法部(庶務課、民事課、刑事課)の一官房及五部より成り所屬官署は中樞院、取調局、地方廳、警務總監部、裁判所、監獄、鐵道局、通信局、臨時土地調査局、稅關、專賣局、印刷局、營林廠、醫院及附屬醫學講習所、平壤鑛業所、勸業模範場、工業傳習所、土木會議及各官立學校とす總督は陸海軍大將を以て之に充て委任の範圍内に於て陸海軍を統率し一切の政務を統轄すべく總督の下に政務總監を置き總督を補佐し各部局に長官局長を置き府務を統轄せしむ此の月三日寺内總督は新官制發布の趣旨を本府及府屬官署の長に訓示して曰く

一昨一日ヲ以テ官制改正ノ公布アリ之ト同時ニ不肖竝山縣ニ對シ夫夫總督、政務總監ノ御親任アリタリ之ト同時ニ本日會合ノ諸君ニ對シテモ夫夫任命ノ發表アリタルコトト信ス又同日ヲ以テ韓國併合後ニ實施スヘキ朝鮮統治ノ政務機關ヲ御決定仰出サレタルヲ以テ同日直ニ諸官ヲ會シ俱ニ

聖意ヲ拜セムコトヲ傳ヘムトセシモ時恰モ山縣總監歸任ノ途ニ在リ一方ニハ百般ノ要務輻湊ノ際ナリシ爲心ナラスモ遷延シ本日ヲ以テ茲ニ會合スルコトヲ得タル次第ナリ

不肖今次總督ノ大命ヲ拜スルニ膺リ此ノ暗黒ナル當地ヲシテ漸次文明ニ開導シ鮮民ヲシテ満足ヲ得セシムルコトハ實ニ至難ノ業ナリト考フ然シナカラ今日迄已ニ併合以後其ノ任ヲ辱フセルカ故ニ今後モ引續キ微力ノ限ヲ竭シテ 聖恩ニ答フル所アラントス然リ而シテ其ノ職責ヲ完フセムニハ各其ノ政務ヲ分擔スル所ノ諸君ノ協力ト補助ニ待タサルヘカラサルハ勿論ナルヲ以テ本日茲ニ諸君ヲ會シ親シク將來ノ施政ニ關シ一言訓示スル所アラムトス

今回朝鮮總督府及所屬官署官制公布セラレテ職員ノ任命アリ新政ノ機關ハ茲ニ一先ツ完備セリト謂フヘシ

抑モ朝鮮ノ今日アルハ一朝一夕ノ故ニ非ス帝國政府カ其ノ提撕ノ任ニ膺リテヨリ以來殆ト五年ノ歲月ヲ閱シ其ノ間效果ノ觀ルヘキモノ尠カラサリシト雖保護制度ニ依リテハ到底施政ノ改善ヲ全フスル能ハサルヲ以テ遂ニ併合ノ實行ヲ見ルニ至レリ此ノ事タルヤ素ヨリ一ノ手段ニ屬シ終局ノ

目的ニ非ス是ニ依リテ複雑ナル舊制ヲ改メテ統一ノ組織ト爲シ以テ治績ヲ舉ケムトスル 叙慮ニ出テタルニ外ナラス

惟フニ目下ノ急務ハ新領土ノ秩序ヲ維持シ富源ヲ開發シ新附ノ人民ヲ扶掖シテ治平ノ恩澤ニ浴セシムルニ在リ然レトモ急劇ノ變革ハ確實ナル成功ヲ望ムノ途ニ非サルノミナラス却テ人心ノ動搖ヲ來スノ處ナシトセス殊ニ弊習ノ矯正スヘキモノアルト同時ニ良俗ノ助長スヘキモノ亦尠カラサルコトヲ忘ルヘカラス且夫レ如何ニ善美ノ施設タリトモ實際ノ事情ニ適應スルニ非サレハ以テ其ノ效ヲ收ムルニ由ナカルヘシ故ニ常ニ世態人情ヲ審ニシ本末ヲ稽ヘ緩急ヲ量リ漸ヲ追フテ改善ノ事業ヲ進捗スルコトニ努ムルヲ要ス

今ヤ帝國ノ版圖ハ海ヲ越エテ東亞ノ大陸ニ及ヒ新ニ千有餘萬ノ人口ヲ加ヘタリ朝鮮ノ改善ヲ圖ルハ即チ帝國全般ノ安寧ト東洋ノ平和トヲ庶幾スル所以ニシテ其ノ施政ノ成敗ハ延テ國威ノ消長ニ影響スル所アラムトス然ルニ若シ舊態依然一新ノ實ヲ舉クル能ハスムハ終ニ併合ノ本旨ヲ空フスルニ至リ内ハ國民ノ輿望ニ背キ外ハ列國ノ譁議ヲ招カム非常ノ時運ニ際會スル者ハ亦非常ノ覺悟

ナカルヘカラス本官ハ此ノ機ニ臨ミ當局職員ノ奮勵ヲ望ムコト殊ニ切ナラサルヲ得ス

凡ソ官吏ハ國家ノ選良ニシテ宜シク衆民ノ儀表タルヘシ其ノ地位ニ上下ノ差アリ其ノ職守亦相同シカラサルモノアリト雖忠誠國事ニ盡瘁スルノ義務ヲ負フニ至テハ即チ一ナリ而シテ施政機關ノ運用ハ上官下僚ノ一致ト各部機關ノ協同トニ俟タサルヘカラス各員宜シク規律ヲ重シテ放縱ヲ戒メ簡捷ヲ主トシテ繁文ヲ省キ秋毫ノ支吾凝滯ナキコトヲ勉ムルト其ニ清廉ノ操節ヲ持シ高潔ノ品位ヲ保チ勵精其ノ任務ノ遂行ニ竭シ以テ更始ノ緒業ヲ翼賛シテ 聖明ノ宏謨ニ副ヒ奉ラムコトヲ期スヘシ

翌四十四年五月本府官制を改正して視學官、編修官、視學及編修書記を置き又十一月新に官公立諸學校の官制を制定施行し更に其の翌四十五年四月官制の一部に改正整理を行ひ事務の統一と簡捷さを圖れり即ち本府に於て總務部を官房總務局に改め各部の庶務課を廢して其の事務を總務局總務課に移屬統一し官房に土木局を新設して從來本府諸部に分屬せし築港道路、治水、營繕等に關する土木行政事務を統一し所屬官署に在りては取調局、專賣局及印刷局を廢して其の事務を本府諸部に移

屬せしめ從來内務部の主管たりし衛生事務並度支部の主管たりし海港檢疫及移出牛檢疫、密漁取締及港則執行の事務を警務總監部に移屬し又所屬官署に在りては新に中央試験所を設置して從來度支部の主管たりし醸造試験及農商工部の主管たりし工業に關する試験分析並鑑定事務を之に移し同時に工業傳習所を之に附置し鐵道局に於ては從來の八課を六課とし同時に同局及警務總監部所屬の印刷工場を廢止して其の事務を官房總務局印刷所に統合し臨時土地調査局に於ては總裁及副總裁を廢して局長を置き事業の進行に伴ふて所要の人員を増置し通信局を遞信局と改稱し其の所管たりし觀測事務を内務部學務局に移し度支部の所管たりし海事に關する事務を同局に移屬せしめたり
司法制度は四級制度を改めて地方法院、覆審法院及高等法院の三級制度と爲し裁判所令を改正し之と同時に民事及刑事に關する實體法及手續法を整理統一し朝鮮民事令、朝鮮刑事令其の他關係法規を制定せり

敘上整理の結果職員一百八十七人、經費四十七萬八千圓を節約することを得其の後大正四年四月に至り既往三年間の經驗に徴し三たび官制を改正し本府に在りては從來の九局中總務、土木及學務の

三局を存して外事、地方、司税、司計、農林、殖産の六局を廢し從來參事官室の取扱ひたる舊慣及制度調査事務を中樞院に移せり所屬官署に在りては新たに濟州島及鬱陵島に島廳を設け島司を置き其の事務を管掌せしめたり此の結果本年度に於て俸給十萬餘圓廳費三萬餘圓を節減し其の他諸般の經費に於て總額一百十五萬圓を節約することを得たり

大正五年四月一日専門學校官制を公布し京城專修學校、醫學專門學校、工業專門學校の三校を設置し別に總督府令を以て教育の綱領其の他必要なる事項を規定し外に教授上注意すべき事項を訓令せり

大正六年七月三十一日從來朝鮮に於ける國有鐵道の業務を南滿洲鐵道株式會社に委託し新に總督官房に鐵道局を設け鐵道の一般計畫及委託鐵道並私設の輕便鐵道、軌道の監督事務を處理せしむることとせり

三 職員の任用

舊韓國政府時代に在りては官吏任用の方法は科擧の制ありしも年所を經過するに隨ひ有名無實と爲

り之に應ずる者は僅に名門の出に止まるのみならず尅直行はれ其の厚薄に由り採否を決定するか如き弊風を馴致するに至れり然るに併合後新に官吏任用規定を制定し試験制度を設け何人か雖其の實力を有する者は之に應試し登庸せらるることを得べく雇員の如きも採用規定を設け年齢を制限し一定の試験に合格したる者より採用すること爲せり蓋し併合以前に在りては任用令に依るの外別に何等の規定なく内地人に在りては考試の方法及養成の機關なく朝鮮人に在りても舊韓國政府時代に於ける官吏を襲用するのみにして新に銓衡の道なかりしか茲に至り原則として内地人朝鮮人の區別なく委任官は試補判任官は見習より採用の制を定め殊に判任官に在りては毎年四月及十月に於て見習試験を行ひ判任文官たるの資格を有する者に就き内地人に在りては朝鮮語、朝鮮人に在りては國語を必須科目として相當學力の試験を行ひ其の合格者を見習に採用して各官廳に配屬し行政事務を練習せしむること一年以上を経過し初めて之を本官に任用することに定めたり

郡守は併合以後に於ても依然舊職員を存置し且其の選任に付ても一般の任用令に依らず舊韓國政府高等官の職に在りて相當の技能を有し且國語を解する者の中より採用することに定め一方に於ては

判任官中よりも採用することとし特に學識經驗ある者を登庸することとせり

四 行政區劃の整理

明治三十九年統監府設置當時に在りては韓國地方制度は全國を分ちて漢城府及十三道とし更に各道を通し一牧三府及三百四十一郡に分ち道に觀察使、牧に牧使、府に府尹、郡に郡守を置き別に開港地に監理を置きたりしか明治四十二年始めて地方費法及民籍法を制定し行政區劃も亦隨時多少の改正を加へ併合當時に於ては十三道十二府三百七十七郡なりしか大正三年三月一日を以て府郡の廢置分合を行ひ同年四月一日を以て面の廢置分合を行ひ二百二十郡とし大正四年四月濟州鬱陵の二郡を廢して二島廳を置き二百十八郡とせり而も亦數次の廢合を行ひ現在に於ては二千五百十二面と爲せり

五 財政の整理

併合前に於ける舊韓國の財政は紊亂其の極に達し毎年歲計の豫算なきにあらざりしも唯其の名のみにして各官廳は任意に支拂命令を發して其の支出を要求し又收入に付て之を見るも税制は複雑して統一を缺き地稅の如きも其の賦課の基本たるべき結數は李朝の宣祖及仁祖の代に於て調査に係るも

のを踏襲し而かも其の當時は一百四十五萬餘結なりしも其の後政綱の弛廢に伴ひ地方に於て恣に結數を加減したる結果所謂隱結と稱するものを生し官民相率ゐて結數を欺隱するの弊風行はれ爲に表面上の課税地は一百萬結を下るに至れり況んや復暴官汚吏誅求を恣にし剩へ幣政亦紊亂し私鑄僞造盛に行はれ市場物價の高低常なきの狀況なりしか明治三十七年十月財政顧問の設置に依り之を整理の端を啓き會計法の勵行徵稅機關の統一貨幣の整理金融機關の設備等銳意刷新を圖り著著整理の歩武を進めしも其的確の計數を得るに至りたるは實に統監府設置以後なりとす而して明治四十年に於ては日韓協約の結果行政各部の擴張、裁判所の構成、産業上の施設、土木營繕等各種事業の發展に伴ひ明治三十九年度の歳出總額（七百九十六萬七千三百八十八圓）の倍額以上に膨脹し漸次増加の傾向ありて到底其の支出を辨し難きを以て帝國政府は明治四十年年度以降同四十五年度に至る六箇年度内に總計一千九百六十八萬二千六百二十三圓を無利子無期限にて舊韓國政府に立替へむことを約定し明治四十年年度に一百七十六萬九千五百三圓、同四十一年度に五百二十五萬九千五百八十圓、同四十二年度に四百六十五萬三千五百四十圓、同四十三年度に一千四百二十八萬二千六百二十三圓を

立替へ來りしか併合當時に於ては經常の歳入にては豫期の施設經營を實行すること能はざるに依り明治四十四年以降中央政府の一般會計より一千二百三十五萬圓の補充を仰き應急の策を畫せしか爾後諸般の事業を整理し經費を節約し大正二年度に於て該補充金中より二百三十五萬圓を減し尙大正三年度以降五箇年を期し全然補充金の供給を止め朝鮮に於ける收入を以て其の支出に應ずべき計畫を樹て已に同年度及四年度に於て各一百萬圓を遞減せり而して朝鮮特別會計の獨立計畫を實行せむか爲には一方に於て諸般制度の整理を行ひ行政費を節約し他方に於ては産業獎勵の必要に逼まれるを以て確實なる財源を求むるの要あり依て地稅の増徴並市街地稅及煙草消費稅の新設を企劃し大正三年より之を實施せり茲の歲三月十六日寺内總督は各道長官に對し新稅令に付左の如く訓示せり其の後大正五年七月酒稅令を發布し同年九月一日より實施せり

併合以來茲ニ三年此ノ間本府ハ専ラ力ヲ殖産興業ノ振作ニ效シテ民力ノ涵養ニ勉メ施設經營スル所尠カラス或ハ鐵道ヲ敷設シ道路ヲ改修シテ以テ交通ヲ便ニシ或ハ農耕ヲ改善シ諸種ノ實業ヲ獎勵シテ以テ生産ノ増殖ヲ圖リ之カ爲ニハ歲歲巨額ノ國費ヲ投シタルノミナラス又一面官制ノ整理

テ遂ク冗員ノ淘汰ヲ爲シ事務ノ簡捷ヲ計リ諸般行政費ノ節約ヲ行ヒ其ノ節約シ得タルモノハ舉クテ之ヲ民福ノ増進ニ資スヘキ經費ニ充用セリ人民亦克ク本府ノ意ノ在ル所ヲ諒トシテ協贊ノ實ヲ示シ幸ニ諸般ノ施設著著其ノ效果ヲ顯ハシ併合後日尙殘キニ拘ラス産業ノ發達大ニ見ルヘキモノアリ現ニ大正二年ニ於ケル貿易額ハ一億二百餘萬圓ニ達シ米穀ノ輸移出額ノミヲ以テスルモ千四百餘萬圓ヲ算スルニ至リシ如キ亦以テ諸般事業發達ノ一端ヲ窺フニ足ルヘシ

本府ハ又負擔ノ公平ヲ期セムカ爲地稅其ノ他租稅ノ整理ヲ行ヒタリ而シテ租稅徵收ノ成績ハ年々逐テ良好ニ趨キ漸次國庫收入額ヲ増加シツツアリ然ルニ朝鮮經營ニ要スル費額ハ實ニ五千餘萬圓ニ達シ到底從來ノ歲入ヲ以テ之ヲ支辨スルコト能ハサルニ依リ從來一般會計ヨリ補充ヲ受ケルコト千二百三十五萬圓ナリシカ是レ單ニ普通行政費ノ補充ニ過キス此ノ外中央政府ハ朝鮮ニ於ケル國防ノ施設其ノ他ニ對シ巨額ノ經費ヲ負擔セリ而シテ本府ハ中央政府ノ財政方針ニ基キ經費ノ節約ヲ圖リタル結果既ニ大正二年度ニ於テ補充金二百三十五萬圓ヲ減シ更ニ大正三年度ニ於テ百萬圓ヲ削減セリ今後遞次減少シテ五箇年ノ後ニ於テハ全ク之カ廢止ヲ見ルニ至ルヘシ

抑朝鮮經營ニ要スル費用ニ對シ一般會計ノ補充ヲ仰クハ洵ニ已ムヲ得サル所ニシテ目下未タ俄カニ之ヲ全廢スルノ機運ニ到達セスト雖產業ノ發達殊ニ農産物ノ増殖及其ノ價額ノ騰貴ニ伴ヒ經濟狀態益優良ニ赴キ人民負擔力ノ増進セルコト併合當時ト全然其ノ面目ヲ異ニスルノ今日ニ於テ徐ニ一般會計ノ補充金ヲ遞減スルノ方法ヲ策シ漸チ逐ウテ財政ノ基礎ヲ鞏固ニスルハ固ヨリ適當ノ措置ニ屬ス依テ本府ハ今回財政上ノ需要ト人民ノ負擔力トヲ考覈シ急激ナラサル程度ニ於テ地稅ノ增徴並市街地稅及煙草消費稅ノ新設ヲ企畫シタリ

地稅ハ明治三十五年舊韓國政府ニ於テ稅率ヲ改正セシ以來現今ニ至ル迄全然增率ヲ爲ササリシノミナラス統監府設置後明治四十一年ニ於テハ貨幣整理ノ爲平安黃海京畿及江原ノ一部分ヲ除キ其ノ他ノ各道ニ對シテハ一般ニ三分一ノ減率ヲ行ヒ以テ負擔ノ均衡ヲ圖レリ又現行地稅ハ之ヲ土地ノ收益ニ比較スルニ極メテ輕微ノ負擔ニ過キス特ニ近年地方經濟ノ發達ニ加フルニ一昨年來朝鮮輸移出稅並內地ニ於ケル朝鮮産米及靛稅入稅ノ廢止ハ著シク穀價ヲ騰貴セシメ延テ土地ノ價格ヲ昂進シ土地所有者ノ利益ヲ増加シタルコトハ顯著ナル事實ニシテ現行地稅ニ對シ四割程度ノ增率

ナ行フモ克ク其ノ負擔ニ耐フヘキハ疑ハサルナリ

從來ノ地稅結價ハ十三級ノ多キニ區分セラレ一見公平ナ期スルカ如キモ中級以下ノ結價ハ固ト往時ノ經濟狀態ニ基キ査定シタルモノニシテ輓近交通ノ發達、經濟ノ昂進ニ伴ヒ大ニ負擔ノ公平ヲ失スルニ至レリ是レ今回此等中級以下ノ結價ニ對シ稍其ノ増率歩合ヲ高メ以テ負擔ノ均衡ヲ圖ル所以ナリ又從來地稅ニ關スル事項ハ多ク慣例ニ依リタルモ此ノ際之ヲ明文ニ規定シ以テ取扱ノ明確ナ期スルト共ニ新ニ荒地及開墾地ニ對スル免稅年期ノ制ヲ定メ荒地ノ還起又ハ開墾ヲ容易ニシ以テ土地ノ利用ヲ促進セシメ且災害地免稅ノ特典ヲ設ケ以テ負擔過重ノ患ヲ除カムコトヲ期セリ舊韓國時代ニ於テハ諸種ノ名義ヲ以テ地稅ニ附加シタルモノ頗ル苛重ナリシカ併合後ニ於テハ漸次之ヲ輕減シ昨年度ニ至リ面費附加ノ最高限度ヲ定メ以テ叨リニ經費ヲ膨脹シ負擔ヲ増加スルヲ許ササルコトトシ本年ニ於テハ面ノ廢合ヲ行ヒ猶一層面費ノ節約ヲ圖リ之カ爲更ニ面費附加ノ限度ヲ低減シ地稅ノ増加アルモ一面附加稅ノ輕減ニ依リ結局著シキ負擔ノ増加ヲ來ササルコトヲ圖レリ

市街地稅ハ市況殷賑ナル市街地ヲ選定シ其ノ區域内ノ土地ニ對シ課稅スルモノトス此等ノ市街地ハ從來概ネ地稅ヲ負擔セサリシカ近年交通機關ノ發達並諸般ノ施設ニ伴ヒ此等市街地ノ發達顯著ニシテ土地ノ收益ヲ増加シタル狀況ナルヲ以テ之ニ對シ適當ノ課稅ヲ爲シ一般地稅ト共ニ負擔ノ公平ヲ圖ラムトスル趣旨ニ外ナラス又煙草消費稅ノ賦課ハ納稅者ニ苦痛ヲ與フルコト比較的少クシテ容易ニ收入ヲ得ルノミナラス近年製造煙草ノ需要増加ニ伴ヒ朝鮮内ニ於ケル製造業遽ニ勃興シタルヲ以テ之ニ對シ相當ノ賦課ヲ爲スヲ以テ適宜ノ措置ト認メタリ

以上ハ今回增稅ヲ計畫シタル理由ノ大要ニ過キスト雖租稅ノ増加ハ人民ノ利害休戚ニ關スルコト重且大ナルヲ以テ各道長官ハ能ク其ノ趣旨ノ存スル所ヲ諒得シ人民モ亦國運ノ發展ニ伴ヒ應分ノ負擔ヲ分ツハ其ノ國家ニ對スル一大義務ナルコトヲ思ヒ克ク政府ノ方針ニ獎順スヘキ旨ヲ管下一般ニ懇諭シ以テ施行ノ圓滿ヲ期スヘシ

六 物産共進會の開設

併合以後五載の星霜を経過し朝鮮統治の基礎漸く就りて諸般の施設經營愈進捗し産業の發達制度文

物の改善共に成績の見るべきものあり仍りて大正四年九月十一日より十月末日迄五十日の間に於て朝鮮物産共進會を京城に開催せり共進會の趣旨は一は以て始政五週年を記念し一は以て朝鮮將來の發展を期圖せむとし普く朝鮮物産を蒐集陳列し産業改良進歩の實績を明示して一般朝鮮人の奮發心を喚起し出陳生産品並生産事業の優劣得失を審査攻殻して當業者を鼓舞作興するに止まらず併せて行政、教育、交通、經濟等諸般施設の狀況を展示し加之朝鮮舊來の文物中特に參考に資すべきものを以てし新舊施政の比較對照を明にして朝鮮民衆に新政の惠澤を自覺せしめ更に他面に於ては内地物産中特に朝鮮に關係あるものの出陳を促し以て朝鮮に於ける産業貿易の發達に資すると共に進歩改善の標的を範示して朝鮮人の苟安を警醒せしめ朝鮮人をして深く自ら反省啓發して奢侈遊惰の陋習を戒め勤儉力行の美風を助長し拮据勉勵以て益産業の改良發達と國富の増進とを圖らざるべからざる所以の理を覺らしめむとするに在り本共進會が其の施設經營上成るべく浮華を避けて實實を旨とし一意其の實を擧げむことを期したるは畢竟此の趣旨に外ならざりき此の好機會を利用し渡鮮觀光の内地人に對しては遊覽の傍ら成るべく廣く朝鮮各地の現狀を視察研究せしめむか爲各地に協賛會

を設け中央地方相呼應して旅行者をして便宜を得せしめむことを期したり

會場は舊景福宮内を以て之に充て陳列館は第一號館、第二號館、審勢館、美術館、機械館、博愛館、農業分館、水産分館、參考館に分ち別に參考美術館、印刷寫真館、鐵道局館、營林廠特設館、觀測館、東洋拓殖株式會社特設館、牛舎、鶏舎、羊豚舎等に分てり

出品點數は朝鮮内出品三萬二千六百五點朝鮮外參考品八千六十點總計四萬六千六百六十五點なりき

經費は主として國費に仰き本府豫算より支出したるもの五十萬圓にして各地方廳に於ける地方費支出額並民間の寄附金に依りて成立せる各地協賛會の費用を合すれば其の總額七十萬圓に達せり

受賞者は名譽金牌受領者二十人金牌受領者百七十三人銀牌受領者六百九十九人銅牌受領者千七百三人褒狀受領者四千三百七十人なりき

觀覽者は内地人二十一萬九千七百三人にして朝鮮人四十四萬三千八百十一人支那人三千九百五十四人其の他外國人二千六百三十七人なり

茲に特記すべきことは本會の開會に方て 天皇陛下に於かせられては御名代として御懿親たる閑院

宮殿下を御差遣あらせられたる一事是なり殿下は妃殿下御同道にて大正四年九月二十三日東京御發途神戸より軍艦常磐に御乗艦あらせられ海上三晝夜の後同月二十八日仁川港に著御あらせられ即日京城に御入御一、二日を経て十月一日兩殿下は共進會開會式に臨御あらせられ令旨を下し給へり斯くて數日御滯京の後十月五日御歸東遊されたり

七 新政施行の治績と諭告

叙上列記の外通信、農商工業、貿易、拓殖、鑛業、水産業、林業、宗教、教育、裁判、監獄、警察、衛生等施政の治績は以下章を逐て記述すへきも大正五年一月六日發布せられたる寺内總督の諭告に其の大綱を盡くせり仍て左に之を掲ぐ

新政朝鮮ニ施カレテ以選既ニ五星霜山河面目ヲ改メ窮民蘇息シ昭代ノ治化將ニ全土ニ洽カラムトス本總督ハ茲ニ願ミテ既往五年間ニ於ケル實績ヲ略叙シ尙其ノ成績ニ鑑ミ將來ニ對スル要望ヲ披陳シ管下一般ニ諭示スル所アラムトス

嚮ニ 明治天皇神略英斷半島ノ統治權ヲ收メ給フニ方リ本總督ハ至仁ノ 皇猷ヲ體シ特ニ諭告ヲ

發シテ施政ノ大綱ヲ宣明シタリ然レトモ荒廢ノ邦土ヲ振興シ窮困ノ生民ヲ拯濟スルハ寔ニ容易ノ業ニ非ス歲月空シク逝キ易ク或ハ實行ノ言約ニ違ハムコトヲ恐レ爾來夙夜忡忡トシテ寢食ヲ安ンセス唯思ウテ到ラサル所アラムカ將々行ウテ及ハサル所アラムカヲ憂ヒタリ幸ニシテ百般ノ經營逐次其ノ歩ヲ進メ概ネ豫期ノ籌畫ト支吾スル所ナク殊ニ昨秋開催セル始政五年記念朝鮮物産共進會ニ依リ全般ノ實績ヲ總覽シ有形無形ノ施設ヲ通シテ改善進歩ノ迹頗ル顯著ナルモノアルヲ認メタリ是レ職トシテ官民一致克ク施政ノ方針ニ順應シ機宜ノ措置ヲ愆ラサルニ由ラスムハアラス畏クモ 今上陛下深ク朝鮮ノ休戚ヲ軫念シ給ヒ該物産共進會ノ開催ニ方リ特ニ陸軍大將大勳位載仁親王殿下ヲ差遣シ給フ殿下親シク會場ニ臨ミ特ニ令旨ヲ賜ウテ曰ク全土方ニ劃一ノ法ヲ奉シ群氓漸ク同仁ノ澤ヲ懷ヒ居民堵ニ安ンシ統治緒ニ就ケリ物産ノ改良事業ノ發達亦以テ實驗ヲ既往ニ徵シ進歩ヲ將來ニ資スルニ足ルト懇諭剴切誰カ感荷セサラムヤ然リト雖今日ノ進境ハ唯纔ニ朝鮮經營ノ基礎ヲ作りタルニ過キスシテ固ヨリ日進月歩ノ世運ニ副フニ足ラス何ヲ以テカ逸豫ヲ懷フニ暇アラムヤ凡ソ創業過渡ノ時期ニ在リテハ銳意奮勵疆メテ息マサルモ漸ク守成ノ域ニ移ルニ及ハ

ハ則チ往往ニシテ倦怠ノ心ヲ生スルハ人ノ常情ナリ是レ官民ノ孰レチ間ハス齊シク箴成ヲ要スル所タリ本總督カ毎ニ勤勉力行ノ氣風ヲ鼓吹シテ止マサルハ決シテ一時ノ奮勵ヲ促カスノ意ニ非ス各自其ノ本來ノ任務職業ニ盡瘁シ終始一貫須臾モ渝サラムコトヲ望ムカ故ナリ若シ夫レ刻下ノ進度ニ満足シテ心驕リ氣緩ムカ如キコトアラムカ既成ノ效果ヲ空ウスルハ勿論遂ニ將來ノ大成ヲ期スルニ由ナカラムトス豈戒メサルヘケムヤ

惟フニ朝鮮統治ノ宏謨ハ洵ニ高遠ニシテ全土ノ安寧ヲ保チ群黎ノ福利ヲ進メ帝國ノ丕基ヲ鞏固ニシ東洋ノ平和ヲ維持スルニ在リ或ハ中央地方ノ行政制度ヲ釐革シテ綱紀ノ振肅ヲ圖リ或ハ司法直治安ノ機關ヲ整備シテ生命財產ノ安固ヲ保障シ或ハ産業ヲ勸メテ富源ノ開發ヲ促カシ或ハ教化ヲ施キテ人文ノ普及ニ資スル等是レ皆赤子撫育ノ聖旨ヲ顯揚セムカ爲ニ外ナラス又當面ノ急要ニ應ゼムカ爲臨時恩賜金一千七百三十餘萬圓ヲ各府郡ニ分與シ以テ授産、教育、救災ノ資ニ充テシメ尙恩賜財團濟生會ノ分配金並 明治天皇 昭憲皇太后兩陛下崩御ノ際朝鮮ニ下賜セラレタル多額ノ賑恤金ハ悉ク之ヲ治病救貧ノ資ニ供シ其ノ效果ノ既ニ顯著ナルモノアルハ世間周知ノ事實ニ屬

ス朝鮮ニ於ケル施設ノ急務一ニシテ足ラスト雖農耕ノ改善ヨリ先ナルハ莫シ蓋シ人口一千五百萬ノ中其八割ハ農作ヲ以テ生業ト爲ス者ナレハナリ是ヲ以テ一面ニ於テ模範場、傳習所、學校等ヲ増設シテ農業智識ノ普及ヲ圖リ他方ニ於テハ實地ニ就テ耕種、灌溉、養畜ノ方法ヲ指授シタル結果作物畜牛ノ改良増殖及耕地ノ擴張並養蠶、養鷄、養豚、製紙、機織、果樹栽培ノ如キ副業ノ發達等相俟ツテ其ノ生産物ノ總價額ハ既往五年間ニ於テ殆ト倍加スルニ至リ今ヤ優ニ三億圓ヲ超エ米穀ノ如キハ内ニ用キテ尙餘アリ内地及外國ニ搬出シタルモノ最近一年間ニ於ケル總價額約二千四百萬圓ニ上レリ又貯蓄稷副業稷等ノ數全土ヲ通シテ六千六百餘其ノ貯金額八十餘萬圓ニ達シ尙朝鮮人ノ郵便貯金ハ總額百六十餘萬圓ヲ超ユ亦以テ一般富力ノ増進ヲトスルニ足ルヘシ然レトモ是レ畢竟多年ノ頽勢ヲ挽回シテ纔ニ進歩ノ道程ニ登リタルニ過キス朝鮮ノ全土極北礮礮ノ地方ヲ除クノ外概ネ地味肥沃ナルニ拘ラス現今ノ耕地面積ハ二百八十餘萬町歩ニ止マリ之ヲ全面積ニ比スレハ尙僅ニ百分ノ十二ニ過キス而カモ其ノ利用未タ完カラサルモノ夥シトセス之ニ加フルニ山麓又ハ干潟ニ散在スル未墾地一百万町歩ヲ以テス農作ノ餘地斯ノ如ク廣濶ニシテ農家ノ勞力亦頗

ル餘アリ若シ此ノ餘力ヲ舉ケテ農耕ノ改善擴張ニ盡シ尙進ンテ副業ノ發展ニ勉メハ將來農業ノ隆興蓋シ思ヒ半ニ過クルモノアラム又旱魃洪水ノ災害ヲ防カムカ爲ニハ灌溉及水利ノ施設ヲ急務トシ而シテ其ノ完全ナル實績ヲ舉ケムトセハ殖林事業ニ俟ツ所多シ蓋シ樹林ノ效用タルヤ廣汎ニシル或ハ土壤ノ潰崩ヲ防止シ或ハ水源ヲ涵養シ或ハ風致ニ資シ又ハ築材薪炭ノ料タルヘシ本總督ノ殖樹造林ヲ獎勵スル所以ノモノハ獨リ旱災水害ニ備ハムカ爲ノミニ止マラサルナリ

農業ノ外富源ノ開發ニ資スヘキモノハ鑛業及漁業ナリトス舊時ニ於テハ兩者共ニ幼稚ノ域ヲ脱セス鑛産額ノ如キハ五年以前ニ於テ一年間六百萬圓ヲ出テサリシカ政府ノ施設ト相俟チ斬新ノ方法ニ依リ採鑛ニ從事スル者頓ニ増加シタル爲今ヤ約一千萬圓ヲ算スルニ至レリ將來各種鑛物ノ發見及事業ノ進展ニ伴ヒ益鑛産額ノ劇増ヲ見ムトス又漁業ニ至テハ一面ニ於テ水産物ノ濫獲酷漁ヲ禁シテ漁利ヲ永遠ニ維持セムコトヲ期シ他方ニ於テ漁場ノ開拓及漁法ノ改良等ヲ獎勵シタル結果漁獲物次第ニ増加シ其ノ總價額舊時ニ於テ七百萬圓内外ナリシモノ今ヤ一千二百萬圓ニ上レリ尙一般ノ商工業モ一層長足ノ進歩ヲ爲シ工業製產品ハ既往五年間ノ首尾ヲ對照スルニ年額一千五百五

十萬圓ヨリ二千九百五十萬圓ニ進ミ又商事會社ノ投資額ハ八千五百萬圓ヨリ一億四千萬圓ニ増加セリ以上ノ概況ニ依リテ察スルモ各種ノ事業皆均シク順調ノ發展ヲ遂ケタルコトヲ類推スルニ難カラサルヘシ

凡ソ産業ノ振作ハ一朝一夕ノ能クスル所ニ非ス直接獎勵ノ必要ナルト共ニ交通運輸機關ノ設備如何ニ俟ツ所多シトス然ルニ舊時ニ在リテハ全土ノ道路殆ト壞廢ニ歸シ總督府設置以前ニ於テ改修ヲ加ヘタルハ僅ニ二十二線二百五里ニ過キス是ヲ以テ爾來一定ノ改修計畫ニ依リテ全長約五千五百里ノ道路網ヲ確定シ緩急ヲ計リテ銳意其ノ工程ヲ進メ既往五年間ニ於テ三千五百餘里ノ改修ヲ終リ稍人馬ノ往來ニ便スルヲ得タリ鐵道ハ既設ニ係ル釜山新義州間縱斷線並其ノ支線ノ外湖南、京元線ノ新設ヲ實行シ其ノ當初ノ十一年計畫ヲ改メ五年間ニ於テ其ノ全部ノ營業ヲ開始スルニ至リ尙成鏡線ノ敷設ニ著手シ既ニ其ノ一部ヲ開通シ今ヤ鐵道ノ全延長一千六哩ニ達シ重要ナル港灣ノ修築ト相俟ツテ國內運輸ノ便ヲ完ウスルト同時ニ歐亞交通ノ要路トシテ遺憾ナキニ至レリ又通信機關ハ都鄙ニ互リテ六百餘ノ多ニ上リ此等機關ノ所在地ニハ毎日一回以上遞送郵便物ノ到着セ

サルハナク平均一日ノ集配延里程ハ實ニ一萬五千里ヲ超エ之ヲ五年以前ノ實況ニ對照スレハ三倍ノ劇増ヲ見ル尙最近一年間ノ郵便物引受數ハ七千八百五十餘萬箇、郵便爲替金額ハ二千七百二十餘萬圓、電報發信數ハ二百二十五萬餘通ニ上リ孰レモ既往五年間ニ於テ殆ト從前ニ倍加スルノ盛況ヲ呈セリ亦以テ通信機關ノ擴張ニ伴ヒ其ノ利用者ノ頗ル劇増セル事實ヲトスヘシ

歐洲ノ戰亂ハ益其ノ範圍ヲ擴大シ慘禍ノ波及スル所眞ニ測リ知ルヘカラサルニ拘ラス我帝國ハ依然トシテ昇平ノ慶ヲ失フコトナク外國品ノ輸入ニ幾分ノ減少ヲ來シタル外何等ノ影響ヲ蒙ルニ至ラス殊ニ朝鮮ニ於テハ貿易上却ツテ良好ナル傾向ヲ呈シ最近ノ貿易年額ハ出入總計一億八百六十餘萬圓ニ達シ之ヲ五年以前ニ比スレハ殆ト倍加スルノ盛況ニ在リ就中輸移出額ハ從前ノ一千六百萬圓ニ對シ今ヤ四千九百四十餘萬圓ヲ算シ宛モ三倍ノ増加ヲ見タルハ亦以テ朝鮮ノ生産物カ此ノ短期間ニ於テ如何ニ長足ノ進歩ヲ爲シタルカヲ推知スルニ足ル殊ニ往時ニ於ケル輸移入超過ノ割合ハ輸移出ニ對シ十割強ヲ示シタルニ今ヤ僅ニ二割弱ニ減シタルハ歡フヘキ現象ナリ然レトモ出入ノ均衡未タ全ク回復スルニ至ラス輸移入超過額尙一千萬圓ニ達セムトシ輸移入品中機械類ノ如

キ必要品ノ外奢侈品四百二十餘萬圓、飲食物五百二十餘萬圓、合計九百五十萬圓ニ達セムトスルハ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ按スルニ有無相通シ彼我互ニ益スルハ國際貿易ノ原則ナリト雖國內ニ於テ生産シ又ハ製造シ得ヘキ物品ヲモ海外ニ仰キ爲ニ出入ノ均衡ヲ失スルカ如キハ健全ナル經濟ノ發展ヲ企圖スル所以ニ非ス是レ一般官民ノ戒心留意ヲ要スル所ナリトス

子弟ノ教育ハ本總督ノ夙ニ顧慮シテ措カサル所ナリ依テ先ツ初等教育ヲ施スヘキ公立普通學校ノ擴張ニ努メ既往五年間ニ於テ従前ノ一百校ニ加ヘテ更ニ三百數十校ヲ増設シ尙時勢ノ進運ニ隨ヒ高等普通教育ハ勿論農商工業、醫術、法律、經濟等ニ關スル教育機關ノ改善擴張ヲ圖ルノ目的ヲ以テ既ニ必要ノ措置ヲ執リタルニ依リ今日ニ於テハ朝鮮人ノ學生ヲシテ其ノ處世上必須ノ學術、技藝及實習ヲ修得セシムルニ於テ略遺憾ナシト謂フヘシ然レトモ凡ソ人材ノ養成ハ獨リ學校ノ教育ニノミ依ルヘキニ非ス家庭ノ好尚及社會ノ風潮モ亦子弟ノ感化ニ多大ノ影響ヲ與フルモノトス父兄タル者ハ常ニ心ヲ學生ノ訓誡ニ致シ或ハ智ニ傾イテ却ツテ奸猾ニ流レ又ハ德ニ偏シテ情弱ニ陷ルコトナク忠順勤勉必ス其ノ學修セル所ヲ實地ノ業務ニ應用セシムルヲ主眼トシ徒ラニ理論ニ

走り空想ニ耽リテ一生ヲ誤ルカ如キコトナカラシムヘシ

人生ノ痛恨ハ疾病ノ災ニ遭ウテ醫療ノ途ヲ得サルヨリ甚シキハ莫シ是レ本總督カ施政ノ初ニ當リ
力ヲ醫療機關ノ擴張ニ效シ臨時恩賜金ヲ基本トシテ疾ク慈惠醫院ヲ各道ニ開設シ貧民ノ救療ニ充
テタル所以ナリ今ヤ其ノ恩澤ニ浴スル者一年間ノ延人員六百五十萬人ノ多ニ上ル又濟生院ヲ設ケ
孤兒及盲啞ノ教養ニ充テ之ニ加フルニ公醫ノ配置、醫師ノ養成、衛生ノ設備ヲ以テス細民ノ疾苦
ヲ輕減スルニ於テ頗ル實效アルヘキヲ疑ハス然レトモ病者貧民ハ由來限ナシ專ラ政府ノ恩惠ニノ
ミ依頼スヘキニ非ス疾病ノ豫防ハ多ク各人ノ自衛ニ俟ツヘク窮民ノ救助ハ鄰保相扶クルノ情誼ニ
由ラサルヘカラス自ラ衛リ人ヲ助クルハ郷黨ノ美風ナリ宜シク之ヲ助長スヘシ

今ヤ政務ノ機關既ニ整備シ利用厚生ノ施設モ亦殆ト遺漏ナキニ至レリ之カ運用ノ局ニ當ル者固ヨ
リ誠意ヲ盡シテ其ノ任務ニ執掌スヘキハ言ヲ俟タスト雖若シ一般人民ニシテ自覺奮勵之ニ對應シ
テ其ノ歸嚮チ一ニスルニ非サレハ如何ナル制度モ遂ニ其ノ實效ヲ發揮スルニ由ナカラムトス既往
五年間ニ於テハ幸ニシテ官民一致ノ協心戮力ニ依リ百般ノ事項ニ涉リ頗ル迅速ノ進歩ヲ遂ケ之ヲ

民業ノ發達ニ徴スルモ殆ト其ノ富力ヲ倍加スルノ盛況ヲ呈セルモ朝鮮開發ノ大業ヨリ見レハ是レ唯初期ノ小成ニ過キサルノミ然ルニ流離窮乏ノ舊態ヲ脱シテ家給シ人足ルノ時運ニ及ヘハ漸ク進取ノ元氣ヲ消失シ其ノ弊ノ赴ク所放逸驕慢ニ流レスンハ輕佻浮華ニ陷ラムトス是レ最戒ムヘキ所ナリトス今日ノ朝鮮人ニ於テ殊ニ此ノ弊ヲ見ル近時奢侈品及飲食物ノ輸移入年額九百五十萬圓ニ上ラムトスルハ寒心スヘキ現象ナリトス是レ實ニ本總督カ終始勤勉力行ト儉約貯蓄トヲ勸奨スルノ旨趣ニ違ヘリ各人若シ衣食ノ費妻子ノ俸共ニ適度ヲ旨トシ毎ニ浪費ヲ省キテ不時ノ支出ニ備ヘ進ンテ生業ノ發展ニ資セハ自ラ富ミ兼テ國益ニモ裨補スル所アルヘシ若シ夫レ國內ノ富源餘アルニ拘ラス好ンテ生計ノ料ヲ海外ニ仰クニ至テハ國民ノ恥辱ト謂ハサルヘカラス戰禍泰西ニ瀰蔓シテ以來我國民ハ歐洲ノ製品產物ニ依頼スルノ便ヲ失ハムトス是レ寧ロ自作自給ノ機運ヲ促進スヘキ好機會ナリ今ヤ苛斂誅求ノ弊ナク火賊橫行ノ患ナク而シテ交通運輸ハ勿論金融ノ諸機關モ亦略具ハリ甞ニ各人日常ノ便宜ニ資スルノミナラス企業者ノ活動ヲ迎ヘツツアリ各自宜シク拮据颯勉日新ノ進歩ニ後ルルコトナク國產ヲ興シ富力ヲ進ムルコトニ最ムヘシ

凡ソ國民ノ進歩ヲ完ウセムトセハ單ニ物質的ノ發達ヲ以テ足レリトモス又當サニ忠實ナル意思ト
穩健ナル氣風トノ向上ニ俟タサルヘカラス若シ夫レ利慾ニ急ニシテ理義ヲ沒却シ法綱ノ及ハサル
ヲ僥倖シテ奸計詐略ヲ廻ラシ或ハ無用ノ事端ヲ開キテ健訟ノ弊ヲ馴致シ又ハ詭言ヲ弄シテ良民ヲ
誑惑スルカ如キハ當ニ自ラ其ノ身ヲ誤ルノミナラス流毒ヲ他人ニ及ホシ遂ニ民福ヲ進メ國利ニ資
スルノ目的ヲ阻礙スルニ至ラムトス豈猛省セサルヘケムヤ

夫レ國家ノ益ハ個人ノ利ナリ個人ノ福ハ國家ノ慶ナリ其ノ揆一ニシテ固ヨリ二途アルニ非ス何人
モ自己ノ私利ノ外國家ノ公益アルコトヲ忘ルヘカラス 今上陛下即位ノ際下シ給ヘル大詔ニ曰ク
義ハ即チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトシト萬世一系列聖相承ケテ群黎ヲ子愛シ給モ臣民亦純忠
至誠ヲ以テ 主上ニ事ヘ奉ルハ是レ我帝國ノ精華ニシテ萬邦ニ冠絶スル所以ナリ今ヤ朝鮮ハ帝國
ノ疆域ニシテ其ノ屬邦ニ非ス朝鮮人ハ帝國ノ臣民ニシテ其ノ隸庶ニ非ス建國以來易姓革命窮ナキ
小邦ノ屬民ヨリ一躍シテ帝國臣民タルニ至リタル者宜シク其ノ地位ノ高クシテ其ノ境遇ノ幸ナル
ヲ會得シ 聖世ノ良民トシテ報效ノ誠ヲ竭スノ覺悟ナカルベカラス又從來内地人ニシテ朝鮮ニ投

資シ又ハ來住シテ各種ノ職業ニ從事スル有力者及企業家勲シトセス此等ノ内地人ハ學術、技能又ハ經歷ニ於テ能ク他ノ儀表タルヘキヲ以テ後進ノ朝鮮人ヲ指導シ又ハ之ト提携スルニ於テハ全土ノ開發ヲ促進シ内鮮人ノ融合同化ヲ圓滑ナラシムルニ與ツテ力アルヘキハ本總督ノ信シテ疑ハサル所ナリ

新政施行以後五年間ニ於ケル朝鮮ノ發達ハ縱令之ヲ舊時ニ比シ霄壤ノ差アリトスルモ要スルニ唯豫期ノ成績ヲ收メ得テ大過ナシト謂フニ過キス宜シク既往ノ實驗ニ徵シテ將來ノ進歩ニ資シ官民協戮一層ノ勵精努力ヲ以テ殖産興業ノ發展ニ盡瘁シ今後適當ノ時期ニ於テ再ヒ進歩ノ狀況ヲ測定スルノ機會ニ至ラハ更ニ今日ニ倍蓰スルノ實績ヲ示シ以テ拓地撫民ノ 叡慮ニ應ヘ奉ラムコトヲ期スヘシ

八 總督の更迭と施政の方針

大正五年十月九日寺内總督の内閣總理大臣兼大藏大臣に轉任せらるるや同月十六日元帥陸軍大將伯爵長谷川好道新に總督の印綬を帯び同年十二月十日著任し翌十一日本府職員及在府所屬官署の職員

を總督府に召集し一場の訓示を試み就任の挨拶を兼ねて施政の方針を示せり其の梗概に曰く新政の
惠澤漸く全土に洽からむとするも積年の痼弊未だ猝に蠲脱せず今尙創始の時期に屬し全く守成の域
に達せず畢竟生産未だ一般の利用厚生に資するに足らざるの結果に外ならず故に今後専ら力を殖産
興業の開拓に效ささるへからず徒らに當面の便に驅られ施設制度の變更を事とするか如きは豈啻に
民衆をして疑惑を介抱せしむるのみならず多年勤勞の效を徒勞に歸せしむるの虞尠からず仍て此の
趣旨を體し民衆を指導啓發し以て醇厚忠良の風に化せしめ國利民福を増進せしむへし云云

여 백

第二章 風俗習慣

朝鮮に於ては開國五百三年改革の時に至る迄王族たる宗親の外士族庶民及賤民の區別を認めたり士族は之を兩班と稱し文武兩列の意にして文武官に任したる者の一族を稱し文武官の任用は科擧及陸叙の制に依りしものなり兩班は社界の上位に立ちて諸種の特權を有し文班を東班と稱し武班を西班と稱す又地方に於ける豪族を上班と稱したり庶民は常民と稱し農商工之に屬し別に中人なる者あり醫、譯官、胥吏の輩之に屬し賤民は之を公賤、私賤に分ち公賤は官奴婢、官妓、驛卒、獄卒等にして娼婦、巫覡、僧尼、私奴婢の類は私賤に屬したり而して朝鮮人は皆姓を稱せしも奴婢は之を稱せず唯名のみを用ゐたり又兩班が土地家屋等を賣買するに當りては特に奴婢の名を用ゐ隨て土地臺帳たる量案には所有者として奴婢の名を用ゐるを例としたり然れども是等の制度風習は改革の時より漸次廢滅し併合後に於ては王族及遺族の外族稱上の區別を認めず又賤民中に白丁なる者あり十三道中各所に部落を成して散在し一種の穢人として待遇せられ皮革、獸肉、履物等の製造販賣を生業とせ

しか今は其の區別を認めざるに至れり

往古朝鮮には支那文物の輸入と共に夙に儒教の傳播を見しか後佛教高句麗を経て新羅及百濟に傳はり高麗に及びて最も其の隆昌を極め殊に新羅、高麗に在りては王家の尊信特に深く宮闕を以て寺院と爲し王、王妃等の雍髪して僧尼となる者あるに至れり然れども儒教は此の間修身齊家の學として士大夫より庶人に至るまで一般に之を講究し又一面に於ては老莊より出てたる道教は風水地相の説と共に新羅の時より傳來し隱然勢力を有したり而して高麗の末朱熹の學說朝鮮に入り李氏朝鮮に迫りては儒學を以て國教と爲し文廟の制を擴張して到る處郷校の設置を見ざるなきに至れり又佛教を疎外し寺刹の創建を禁せしか朱子學の弊は遂に老成派と少壯派の論争を生し國を擧げて唯性理の學に沈溺せしめたり而して佛教は萎微として振はさりしと雖歷代の王家は陰に之を信仰し陵園墓には大抵願寺を置けり殊に併合後に於ては佛教再興の氣運に向へり此の他耶蘇教は李氏朝鮮の中葉より入傳し殊に近來に及びて廣く傳播するに至れり又別に巫覡あり往古より一部の社界に其の勢力を有し今日に於ては儒教、佛教、耶蘇教の外諸種の神道亦入傳し殊に朝鮮人間には檀君教、侍天教、天道教等

の名を以て一種の教義を傳播しつつあり

家屋には從來瓦屋、草屋、石葺、木皮葺等の數種あり大抵温突と稱し石を以て床下に火坑を築造し土を以て床を塗り朝夕燃火して暖を取る組織となれり家屋の構造は土石を混して築きたる牆壁を繞らし内外二重の門を設け婦人の居室たる内房、男子の客室たる舍廡、厨房、下人房、別室たる越房其の他に分ち又別に祖先の神主を安置せる祠堂を設くるものあり宮室、官衙、廟、壇、祠、院、寺刹等は其の建築極めて宏壯なるも民家は富豪の外大抵矮少なる草屋に過ぎず而して従前に於ては二層建の家屋を建つることなかりし

衣は大抵綾紗、紬、苧麻及木綿を用ぬ男子は筒袖の上衣及袴を著け又襪衣を上衣の下に著け周衣を重ね漆笠を被り腰に巾褌を著け鞋を穿ち四時褌を解かず又吐手を穿ち扇を携ふる風あり古來白衣を禁せしか好て白衣を用ぬ又従前に在りては官吏の禮服あり革帶を結び冠を戴き靴を穿ちしか今尙一般婚儀に之を用う又小兒は式祭日に褌巾を戴く習あり雨日には多く傘を用ぬす油紙を將て笠を奄ふのみ然れども木屐を用うることは往時よりの習なり女子は上衣を著け袴を重ね更に裙を纏ふ鞋を穿

つも周衣は多く用ぬす指環を飾し襟に飾環及び刀子を結ふ又吐手を穿ち襪を用うるこゝ男子に異らす外出には轎に乗り又は長衣を被り平安、威鏡の地方にては竹笠を被り或は手巾を頭に纏ふ又平安兩道地方には未婚婦か耳に環を附する風あり

食は米飯を常食とし獸肉、魚肉、蔬菜の類を調理して副食物となし脚床を用う器皿には主として鍬器を用ぬ又陶器を用う喫飯には鍬匙を用ぬ副食物には箸を用う又米飯に水を注ぎて食し麵汁を嗜む好て蕃椒及蒜を用ぬ調理渣物總て之を省くこゝなく又最も沈菜渣物を愛用す山間に在りては粟、稗、黍の類を食し寺刹にては山菜、木芽、草根を食す酒は火酒、藥酒、濁酒を嗜好す男女共喫煙し從來大抵朝夕二食なりしか今は往往三食を爲す者あり

朝鮮に於ては男子は必ず冠禮を行ふこゝこゝなれり冠禮は童幼成人の域に入るの禮にして一に元服ともいひ本來は齡十五を過ぎて之を行ふべきものなるも風俗早冠を競ひ十一二歳にして之を行ふ者さへあり又婚約成ると同時に之を行ふ例なるを以て娶妻の資なき者は壯年を過ぎて尙冠禮を行はざる者あり而して冠禮を行ふ前に在りては皆髪を編みて後に垂れ之を總角と稱す然るに冠禮を行ひたる

後は髻を結び漆笠を戴き十五歳以下の者は特に草笠を用う又冠禮を行ふと同時に幼名を改めて本名を定め之を冠名ともいふ但近年大抵幼名を以て本名と爲すに至れり冠名は五行相生即ち木生火、火生土、土生金、金生水、水生木の次に依り父、火行の文字を用うれば子は必ず土行の文字を擇ふ文字の五行は偏、旁、頭、尾、割、義等を標準とし根字は木偏なるを以て木行とし烈字は火尾なるを以て火行とするか如し今は斬髪を行ふ者漸く多く髻を結び笠を戴く者漸次減少せりと雖冠禮を行ふの習は革まらず

女子には笄禮あり男子の冠禮に相當す未嫁の女は髪を編みて後に垂るること男子に異らす然るに婚禮の日に至れば其の且を以て髪を結び髻を挿む之を笄禮といふ而して既婚の女は常に髪を結び以て未婚の女と區別す

婚姻は女か男の家に入るを本則とし例外として男か女の家同居することあり之を招婚又は贅婚と稱す而して朝鮮には婿養子、入夫等の習なし近親間及男系の血族間に於ける通婚を避くることは嚴格に行はれ男系の血族は幾世を経るも断して婚姻を爲さず男系の血族なること否とは姓及本に據りて

之を別つ即ち人の姓は父の姓に因りて定まり身分及戸籍に移動あるも變更せず故に父子は常に同姓にして男系の血族は皆同姓なり然れども男系の血族に非ずして同姓の者あるを以て別に本を稱す本は族祖の出でたる地名にして血族に非ざる同姓は必ず本を異にするより本及姓の同じき者は皆男系の血族なり而して本及姓は之を戸籍に登録し日常對話の間にも亦之を用う

一夫一婦は儒教に於ける婚姻の本義にして婚姻は必ず一男一女に間に成立するものなるも婚姻の目的は後繼子を得て祖先の祭祀を絶たざるに在りし此の趣意に於て子なき者は妾を娶ることを許しかが遂に滔滔として風を成し一人にして數妾を蓄へ寧ろ之を誇とするに至れり但近年漸く之を改むるの氣運に向へり

婚姻を爲すには父祖又は長上を主婚者と爲し其の合意を普通婚姻成立の要件と爲せしか現今は當事者の意思を尊重するの傾向を示し父祖長上の同意を得て婚姻を爲すを認むるに至れり又婚約前に於ける會見の習なきを以て男女は行禮の日に至り始めて相見のみ婚姻の儀式は女家に於て行ひ其の夕新夫は新婦を伴ひ歸りて父母に見えしめ更に女家に至り留ること三日にして歸家するを例とす

婚姻の年齢は舊制男十五歳女十四歳以上なりしか早冠を競ひ冠禮は婚約成りて後之を行ふより遂に男子早婚の風を馴致し女子は十五六歳を通例とするも男子は十一二歳にして婚姻を爲す者あるに至り唯現今實際の取扱としては男滿十七歳以下女滿十五歳以下の婚姻届を受理せず慣習に従ひ有效に婚姻を爲したる者の間に生れたる子も雖父母が此の年齢に達するまでは庶子として戸籍に登録するることせり

離婚には所謂妻七去の制あり又所謂三不去の法ありしも現今は行れず

寡女の再嫁は之を禁し世人亦之を卑みしより寡女は已むことを得ずして妾となることあり又寡女を強奪して同棲する者ありしか甲午改革の時より其の禁を解けり

儒教に依れる朝鮮の葬式は親戚知音のみにて行ひ神官、僧侶の之に干與することなし又火葬は最も忌む所にして皆土葬を爲し夫妻は大抵合葬す棺は横棺を用ぬ大抵先山に葬るも又別に地區を選ふことあり風水地相の説古より傳り李朝に至りて最も甚しく之かために種種の弊害を生し山訟絶ゆることなかりしか墓地規則の制定後原則としては共葬地の制を執り其の弊を杜絶せんことせり又従前には

界限の制あり身分品階等に依り方百歩より十歩の差あり界限内は所有の如何を問はず他人の入葬を許さざりしか是亦近年之を廢せり

裏は五服の制を守り三年より三月に至る五服さは斬衰、齊衰、大功、小功及總麻にして斬衰は粗麻を用ゐ下邊を緝縫せず期間は三年にして父の喪に子此の服を著く齊衰は粗麻を用ゐ下邊を緝縫す期間は三年、一年、五月、三月等にして齊衰三年は子母のために著く大功は粗練の麻布を用ゐて製し期間は九月にして妻夫の祖父母のために著く小功は稍細練の麻布を用ゐ期間は五月にして長孫婦の爲めに著く總麻は熟布にして期間は三月なり衆孫婦の爲に著く此の服制に各階級を通して行はれ到る所裏服の人を見ざるなし

祖先祭祀は儒教の最も重する所にして久しく儒教の感化を受けたる朝鮮人は亦最も之に重を置けり而して朝鮮人は特別の信仰を有する者の外神を祭らず又佛を拜せず祖先は自己より遡りて四代までの神主を祠堂に於て祀り五代以上は神主を墓所に埋安す祠堂は住家の後部に別に建つべきものなるも多くは住家の一室を之に充つ而して未婚者は祀らず妻婦は其の夫に附祀す祭祀を行ふ者は男系の

子孫たる男子に限り之なき時は伯叔父兄弟等攝祀を行ひ又妻婦權祀を行ふ祭祀は祠堂及墓所に於てし忌日の外正朝、寒食、端午、秋夕、冬至、大臘等を祭祀の日とす

朝鮮に於ける相續は祭祀の承繼を主たる目的とし家系の承繼は同時に祭祀者たる地位の承繼なり而して之を承繼する者は男系の長男子にして之なきときは長孫承重を爲し又長男子孫未婚の儘なる時は次子孫之を承繼す又男子孫なき時は養子を爲し之を承繼者とす養子と爲すことを得る者は義父となる者の子の列に當る者に限り之を昭穆の序と稱す男子孫なく又養子を爲すことを得ざる時は茲に家系の斷絶を生し一家の絶滅を來すものとす

여 백

第二章 地誌

第一節 地形及地勢

朝鮮は亞細亞の東南に斗出せる一大半島にして地形南北に長く東西に短し南北最長の處は百九十里に達し最短の處は雖百五十里を下らず東西最狭の處は僅かに四十餘里最廣の處は雖七十里を越えず東經百二十四度十三分より百三十度五十四分に至り北緯三十三度十二分より四十三度二分に互り面積約一萬四千百二十三方里を有す東は日本海に面し西は黃海に臨み北は長白山脈鴨綠江及豆滿江の一部を以て滿洲及露領沿海州に連り南は朝鮮海に瀕す日本海と朝鮮海との間に對馬島あり以て對馬及朝鮮の二海峽をなす對馬海峽は一に東水道と稱し朝鮮海峽は一に西水道と稱す

朝鮮の海岸は東方と南方及西方とを比較するに著しき差違あり東海岸は出入極めて少なく岬灣島嶼甚だ稀にして從て良港に乏しく僅に元山、城津、清津等あるに過ぎず然るに南及西の海岸は長汀曲浦相連り恰も鋸の齒の如く大小の島嶼星羅棋布して幾多の内海浦灣を形成するを以て釜山、木浦、

群山、仁川、鎮南浦等の港灣を始めとし、錨地頗る多し

翻て朝鮮の地勢を見るに北境には長白山脈蜿蜒として東方より西南に沿ひ一枝南に延び平安、咸鏡兩道の境を劃して江原道に入り東海岸線に沿ひ南方に駛走し以て半島の脊梁骨をなす此の如く大山脈東方に偏在するを以て山脈以東の地は斜面急峻にして殆んど平野を稱すへきものなく従つて江河の大なるものなし之に反し山脈以西は比較的緩なる斜面をなし平野處處に少なからず鴨綠江、大同江、漢江、錦江、洛東江等其の間に縈流して舟楫の便灌漑の利あり地味概して豊饒なり

第二節 氣候

氣溫 平均氣溫は南部は攝氏(以下同し)十三四度にして漸次北方に遞減し京仁地方より元山地方に至れば十度餘又龍岩浦附近より城津附近は八度内外にして北鮮内陸に入れば三乃至四度なり之を本土に比較すれば南岸は福井地方に中部は信濃地方に比すべく又北鮮の沿海地方は函館地方に内陸高原は恰も北海道内陸と相似たり而して年中最暖なるは八月最寒なるは一月にして其の差南部は二十五六度中部は二十七八度北部は三十二度内外にして就中國境地方は四十度を越ゆること稀ならず之

を彼の本土の中部沿岸地方は此の差概ね二十一二度内陸は二十四五度北海道内陸の三十度弱なるに比すれば寒暑の差稍大なるを見る今各地に於て從來觀測せる氣温の高低極を掲ぐれば左の如し

地名	高 <small>度</small>	氣温 高低極		極	低 <small>度</small>	極
		高	低			
木浦	三四・七	大正三年八月二十二日	(-) (-)	同	一四・二	大正四年一月十三日
釜山	三三・六	明治三十九年七月二十七日	(-) (-)	同	一四・〇	同
大邱	三九・〇	大正四年八月五日	(-) (-)	同	一八・六	同
仁川	三四・七	同 三年七月二十六日	(-) (-)	同	二〇・九	同
京城	三五・六	明治四十二年八月八日 大正三年七月二十六日	(-) (-)	同	二一・五	明治四十四年一月十三日
江陵	三七・三	大正三年七月十七日	(-) (-)	同	二〇・二	大正四年一月十三日
平壤	三五・五	明治四十年七月二十四日	(-) (-)	同	二六・七	明治四十四年一月十三日
元山	三九・六	同 三十九年七月二十日	(-) (-)	同	二一・九	大正四年一月十三日
龍岩	三三・六	同 四十一年六月二十三日	(-) (-)	同	二六・七	同 四年一月十五日
城津	三五・五	同 四十二年七月二十五日	(-) (-)	同	二四・六	同 四年一月十三日

地名	高	極	低	極
中江鎮	三五・五 ^度	大正五年八月十五日	(-)四〇・八 ^度	大正四年一月三十日
雄基	三二・一	同 三年七月二十九日	(-)二四・三	同 四年一月十二日
本表中(-)印を附せるは氷點以下の溫度を示す以下氣溫に關する諸表皆同し				

即ち高極は西岸及南岸は三十四度内外其他に在りては三十五乃至三十九度に達す斯の如き暑氣は本土に於ては到る所に遭遇する所なるも寒氣に於ては零下十五度に達する事あるは美濃地方乃至福島、山形地方にして同二十度以下に降るは北海道の各地に在り更に零下二十五度以下に降るは北海道内陸の十勝上川地方に間間起ることあるのみ故に寒氣に於ては本土の各地に比し甚だ酷烈なるを見る氣溫晝夜の差も亦稍著しく沿岸は八度内外にして内陸は十度餘北部の内陸高原に於ては十五度に達する地方あり

風 全半島を通して季節風の勢力卓越するを以て主風の方角は季節に因り略一定せり即ち十月より四月迄は北乃至北西風にして六月より八月までは一般に南風なり兩季節風の交替期なる五月及九月前後は風向區區にして一定せず又西岸及南岸は冬季の北西風を受くるか故に此の季節に於て風力殊に強く之に反し東岸は朝鮮山脈に遮らるるに因り概して弱し而して冬季大陸に發生したる低氣壓の滿洲又は朝鮮北部を過ぎて日本海方面に通過したる後大陸方面に高氣壓發達するときは強烈なる北乃至北西風を起すと共に氣温頓に降り甚しきときは前日との差十度以上に達する事あり而して大陸の高氣壓衰退して低氣壓の顯はれむとするや風力減衰し寒氣亦退くを以て冬季に於ては寒暖の日交錯するを常とす俚俗に三寒四温の語あるは蓋し之を謂ふなり

雨雪 雨雪の年量は半島の大部分は八百乃至千耗なるも南岸及中部東岸は之よりも多く釜山及元山地方は千四百耗以上に達す是れ半島に於ける最多雨の地方なり而して北部内陸高原地方に於ては六百耗内外に過ぎず之を本土の各地方に比するに南岸地方は略瀬戸内地方に比すべく元山地方を除く中部以南は信濃及兩毛地方と相似たり己に氣温に就きても亦前記兩地方の相似たるを述べたるか之

を以て見るも近年蠶桑の半島に適するを稱道せらるる所以の偶然にあらざるを知るに足る而して北部寡雨の地方は本土に於ては之に比すへき地方なし然れどき半島に於ては降雨の季節略一定し十月より翌年三月に至る乾燥季に際しては其の量極めて少く此の六箇月間の雨雪量は降雨季一箇月の量にも充たす之に反し六月より九月に至る降雨季箇中に年量の大部分を降下するを常とす故に北部地方も雖降雨季の雨量を以て比較するときは北海道地方と敢て譲らざるを見る斯く冬季に於ける量は寡少なるを以て北部に於ても積雪は甚た少し雨天日数は概して百日内外にして木浦、元山及雄基地方は百三十日内外又中江鎮地方は百五十日餘に達す而して降雨季に於ては月中三分の一以上の雨天日数を算することあるも概して降雨の時間短く本土に於けるか如く霖雨數日に渉るか如きは殆ど見ざる所なり

蒸發 斯の如く雨量多く空氣乾燥にして且日照多きを以て蒸發量は甚た多し其の一箇年間の合量は北部は千耗餘西岸は千四百耗餘南岸の釜山地方は千五百耗餘なり本土に於て蒸發量の多き瀬戸内地方と雖半島中蒸發寡少なる地方と相匹敵するのみ西岸地方に於て天日製鹽業の著著效を收めつつあ

る故ありと云ふへし而して東岸の西岸に比して蒸發の少きは前述の如く同地方の風力弱きもの其の一原因ならん

霧 朝鮮近海の濃霧は日露戰役以來世人の注目する所となれり濃霧は半島の東西沿岸を流るる所の暖流方面に於て三月より八月に至る間に屢起り殊に七月に於て最頻繁なり同月仁川沖合方面に於ては全月殆ど濃霧を見ざるこゝなき程なり濃霧の一度襲來するときは冥濛として眞に咫尺を辨せず其の甚たしきは三晝夜に渉ることあり之が爲に船舶の航行を妨げらるる事尠なからず

敘上半島風土の大要を明にするを得へし從來朝鮮全土を以て寒暑共に酷烈なりとなし又は雨量寡少にして農耕に適せずとすなすか如き説をなす者往往あり然れども從來の實測は全く其の然らざるを示すのみならず却て本土の或地方に比すれば居住に適順にして且農桑にも佳良なるは近來の實績に徴するも明なり況んや暴風雨の如き本土に比し極めて尠なく稍強烈なるものは年に一二回に過ぎず又本土に於て時々多大の損害を齎す所の地震の如きは全く無しと云ふも可なり

氣温及雨雪量

天氣日數

地名	氣		溫 (攝氏)		雨 雪	
	平均	最高	平均	最低	平均年總量	最多月量
木浦	一三〇	一七四	九・八	九・八	一〇三七・〇	二〇〇・一
釜山	一三・六	一七・四	九・九	九・九	一五〇一・八	二五〇・九
大邱	一二・七	一八・六	七・六	七・六	一〇二九・一	一三一・五
仁川	一〇・六	一四・八	七・一	七・一	九六六・六	二二九・九
京城	一〇・八	一六・二	六・〇	六・〇	一一四四・一	二五四・七
江陵	一二・四	一七・一	八・一	八・一	一二九二・八	二一〇・二
平壤	九・一	一四・四	四・四	四・四	九一五・五	一六七・四
元山	一〇・二	一五・四	五・九	五・九	一四三七・三	二四三・〇
龍津	八・〇	一二・七	四・〇	四・〇	八七五・四	一六四・六
城中	七・八	一二・七	三・七	三・七	六九五・四	一八七・二
江津	三・三	一〇・二	二・八	二・八	八九五・一	六六・八
雄基	五・七	九・七	一・八	一・八	七六六・七	二〇八・五

地名	雨天	電雷	霧	霜	快晴	曇天	暴風
木浦	一二六	八	一五	五二	五二	一三三	一七八
釜山	一〇九	九	四	一八	九五	一〇五	二二九
大邱	九八	九	三	九〇	七七	一一四	一九
仁川	一〇四	一二	三九	六二	八〇	一〇六	一七五
京城	一一三	一二	一三	九五	六八	一〇五	二〇
江陵	一一三	五	二	五一	八二	一二六	九一
平壤	一〇八	一三	二〇	一一七	八九	九六	一九
元山	二二四	九	九	七八	一〇〇	一一二	三八
龍津	一〇三	一五	一五	九六	一〇三	八八	一三九
城中	一一〇	六	一七	七七	八五	一一六	八七
江津	一五八	二〇	七	一六二	四九	一三五	三六
雄基	一二四	七	四六	五七	七〇	一三一	一八七

本表中雨天は一日の降水量十分の一以上、快晴は雲量十分の二以下、曇天は同十分の八以上、暴風は風速度一秒間十米以上ありたる日とす

霜雪の季節

地名	初霜		終霜		霜		初雪		終雪	
	平年月日	最早年月日	平年月日	最晚年月日	平年月日	最早年月日	平年月日	最晚年月日	平年月日	最晚年月日
木浦	一〇・二一	元・二一	四・七	同 三・八	一・二二	同 三・八	一・二二	同 三・八	三・二〇	大正 三・四
釜山	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
大邱	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
仁川	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
京城	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
江陵	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
平壤	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
元山	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
龍岩浦	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
城津	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
中江鎮	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四
雄基	一〇・二五	元・二〇	四・一三	同 三・四	一・二二	同 三・一	一・二二	同 三・一	三・一〇	同 三・四

本表は各測候所創立以來大正六年初に至る統計なり

江河結解氷の季節

名	稱	結氷		解氷	
		年	月	年	月
鴨	綠江	一・二・六	大正元・一・二四	三・一七	大正四・三・三一
大	同江	一・二・三	同四〇・二・一	三・六	明三三・三・一九
漢	江	一・二・一七	同四三・二・九	三・三	大正二・三・一八
豆	滿江	一・二・三	同元・一・二一	四・一	同二・四・二二

本表中鴨綠江は明治三十八年以降、大同江は同三十四年以降、漢江は同四十年以降、豆滿江は同四十三年以降各大正六年初に至る統計なり

測候所創立年月日及統計年數

測候所	創立年月日	統計に用ひたる年数	測候所	創立年月日	統計に用ひたる年数
木浦測候所	明治三七・三・二五	二二	平壤測候所	明治四〇・一・一	一〇
釜山測候所	同 三七・四・四	二二	元山測候所	同 三七・四・一〇	二二
大邱測候所	同 四〇・一・七	九	龍岩浦測候所	同 三七・五・一	二二
觀測所(仁川)	同 三七・四・一〇	二二	城津測候所	同 三八・五・二三	一一
京城測候所	同 四〇・一〇・一	九	中江鎮測候所	大正 三・五・一	三
江陵測候所	同 四四・一〇・一	五	雄基測候所	同 三・五・一	三

第三節 戸口

大正五年十二月末日の調査に據れば現住内地人戸數は九萬三百五十戸人口三十二萬九百三十八人、朝鮮人戸數三百七萬二千九十二戸人口一千六百三十萬九千七百七十九人、外國人戸數四千九百二十戸人口一萬八千十二人なり

左に戸口に關する各種の統計を掲ぐ

現住戸口累年比較

年	内地				支那				其の他				合計
	内地人	朝鮮人	支那人	其の他	内地人	朝鮮人	支那人	其の他	内地人	朝鮮人	支那人	其の他	
明治四十三年末	五〇、九五二	二七、四九九	二七、九〇	五、六五	二八〇、四一〇	一七、一五四	一三、二八七	一、八八	八、七六	一三、三三〇	一、一七	一三、三三〇	
同 四十四年末	五二、六三三	二八、一三五	二八、八九	四、三三	二八七、九七〇	二〇、六八九	一三、八三三	一、六三七	九、六七	一四、〇五五	一、八六九	一四、〇五五	
大正元年末	七〇、六八八	二八、八五四	三〇、四七	四、四九	二九五、九九六	二四、三二九	一四、五六七	一、〇七	一四、八七	一五、四〇一	一、〇七	一五、四〇一	
同 二年末	七七、二二九	二九、六四一	三〇、八七五	四、六九	三〇四、五八六	二七、五九一	一五、一六九	一、六三三	一、二七	一五、四五六	一、八六三	一五、四五六	
同 三年末	八三、四〇六	三〇、三三八	四〇、七六	四、七三	三一一、七八一	二九、三二七	一五、六三〇	一、六八四	一、四一	一五、九二九	一、九六二	一五、九二九	
同 四年末	八六、二〇九	三〇、二七四	三八、二一	四、六九	三二七、九三三	三〇、三六五	一五、九七六	一、五八八	一、三三	一六、二七六	一、三八九	一六、二七六	
同 五年末	九〇、三五〇	三〇、七二〇	四四、四八	四、七三	三三六、七三二	三二、〇三八	一六、三〇九	一、六九〇	一、〇八	一六、六四八	一、二一九	一六、六四八	

本表内地人戸口は在朝鮮軍隊員を包含せず以下内地人に關する諸表皆同し

現住戸口道別

大正五年十二月末日

道	戸數						合計	人口					
	内地人	朝鮮人	支那人	其他の 外国人	合計	内地人		朝鮮人	支那人	其他の 外国人	合計		
京畿道	二四、九三四	三三、一九六	一、〇一六	一、五〇	三九、九〇六	二九、八三四	一、六六八、六二六	四〇、六四〇	三五六	一、七五六、〇〇〇			
忠清北道	二〇、三七七	一五、五二六	一〇、四	二	四六、三六八	六四、四五五	七三、二八四	三八九	一九	七三、九六七			
忠清南道	四、六七八	二〇、四〇五	四、四三三	二六	二〇、九三二	一七、六五八	一〇、七二、〇〇三	一、五五九	四三	一〇、九〇、二五九			
全羅北道	五、七九	二四、三六〇	二、三三	一九	二四、三三	一九、七三三	一〇、七三、九九九	七三三	四〇	一〇、九四、四七八			
全羅南道	六、七二三	三五、〇、四四七	一、四一	三三	三五、七三三	二四、五六七	一八、二九、九三六	四二	八〇	一八、五五、〇〇四			
慶尙北道	七、三〇九	三七、五九一	一〇、八	二七	三七、九〇三	三五、五三二	一九、七三、二二五	三三三	六六	一九、九八、一四五			
慶尙南道	一、五七九	三三、一九三五	一、二一三	三三	三三、七九〇	六二、五三六	一、六八五、一四八	四一六	四八	一、七四八、一四八			
黄海道	三、一三〇	三五、一八五三	二、八七	五六	三五、三三五	九五、九六	一、二五八、二六五	一、三三九	一三	一、二六九、二〇三			
平安南道	五、四九七	一九、九、八〇	三三	二八	二〇、五八三六	一九、〇四五	一〇、五八、九〇九	一、〇八六	七六	一〇、七九、二一六			
平安北道	三、三三六	二〇、七三三五	九六三	八七	二一、七三三	一〇、〇八四	一、一八九、九四八	四、三三四	一七四	一、二〇四、五〇〇			
江原道	二、三三二	二〇、六四五六	一〇六	八	二〇、八八九一	五九、八六	一、一〇、三四七	三五二	二九	一、一〇、七六三			
咸鏡南道	四、六五三	一九、七四八〇	二五七	一八	二〇、四四〇八	一五、三二六	一、一七七、四九九	八九一	四一	一、一九三、七四七			
咸鏡北道	四、一八八	八、〇八七九	三五七	八	八、五四三三	二一、六三八	五〇八、三〇六	一、三三三	三三	五三二、一八九			
總計	九〇、三五〇	三、〇七二、〇九一	四、四四八	四七二	三、一六七、七六二	三三〇、九三八	一、六三〇、九一、七九	一、六九、〇〇四	一、一〇八	一、六六四、八、二二九			

現住人口諸比例

年	人口百に付		男百に付女		平均一方里に付	
	内地人	朝鮮人 外國人	内地人	朝鮮人 外國人	内地人	朝鮮人 外國人
明治四十三年末	一・二九	九八・六二	八四・九	八八・八	一一・九	九二・九六
同 四十四年末	一・五〇	九八・四一	八三・六	九〇・二	九・三	九七・九四
大正元年末	一・六四	九八・二四	八五・三	九二・〇	九・〇	一〇三・一四
同 二年末	一・七六	九八・一三	八五・七	九二・七	九・二	一〇七・四一
同 三年末	一・八三	九八・〇六	八六・五	九三・二	一〇・二	一一〇・六〇
同 四年末	一・八七	九八・〇三	八六・三	九四・八	一一・七	一一二・九九
同 五年末	一・九三	九七・九七	八六・九	九四・四	一一・八	一一五・四八

現住戸口職業別

(一) 戸數

年	農、林、牧、漁業等			工業			商業及交通業			公務及自由業			其の他の業者			無職業及職業者			合計
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
大正元年末	七三九六	一〇八五八	三三、二一六	一六、四四一	一一、二三九	二六、六八八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	七〇、六八八
同二年末	九、五二四	一〇、三〇五	三三、七六九	一八、二二七	一二、五〇三	二七、三二九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	七七、三二九
同三年末	一一、四八〇	一〇、一五九	三三、五五〇	二一、八九三	一四、九六〇	二八、〇〇六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	八三、〇〇六
同四年末	一二、五一八	九、四三三	三三、三三〇	二四、七三三	一一、九二三	二八、一〇九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	八六、一〇九
同五年末	一二、三三七	一〇、四三三	三三、九二五	二九、九三一	九、二八七	二八、五五〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	九〇、五五〇
大正元年末	二、四〇三	四、〇〇一	一、九四九	三、二一六	二、七五二	二、八八五	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	二、八八五
同二年末	二、五二一	四、四三六	一、九八二	三、八〇八	一、三九七	二、九〇九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	二、九〇九
同三年末	二、六二一	四、五二五	一、八八二	三、七〇五	一、三二四	三、〇三六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	三、〇三六
同四年末	二、六三三	四、一〇八	一、六八二	三、七四〇	一、〇四一	三、〇七四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	三、〇七四
同五年末	二、六四四	六、四三三	一、八四二	四、五二六	八、二八〇	三、〇七二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	三、〇七二
大正元年末	五九九	三三二	一一、〇三三	三〇八	五二六	三八七六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	三八七六
同二年末	五八七	三三八	一一、〇〇九	三三三	五七三	四、三四四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	四、三四四
同三年末	六二七	三〇〇	一一、〇〇九	三三三	六五五	四、五四九	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	四、五四九
同四年末	七三三	二五三	一一、〇〇九	三五四	七九五	四、二〇〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	四、二〇〇
同五年末	七九八	四七三	一一、〇一五	四六三	八八七	四、二一〇	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	四、二一〇

(二) 人口

現住内地人口累年比較

年	内地人			朝鮮人			外国人		
	大正元年末	二年末	三年末	同	同	同	同	同	同
農業、牧畜、林業、漁業等	二七、四七〇	三六、一〇八	四二、四一三	一、二〇八、一五三〇	一、二八、九七五〇	一、六六、〇〇六三三	一、四〇、〇三三三三	一、四、一九〇、六七七	二、一六四
工業	三、五九七七	三、五三、五五五	三、四、五三九	二、〇八、三二五	三、二四、四七七	二、三、五〇五	一、九、七〇九	三、六、一〇、三六	一、七三四
商業及交通業	八〇、五五八	八九、二九五	八六、〇八九	九、九〇、三六五	九、七八、八九〇	八、七、九二二	八、一四、七四六	九、四、三三三	七、四六四
公務及自由業	五、四〇二	六、一、三〇六	六、九、四六七	一、七、五九九五	二、〇八、七〇五	一、八、九六、三八	一、七、七、三二五	二、一、六、三、七六	八、四九
其他の有業者	三、七九六三	四、三、四〇〇	五、三、四三七	六、六、二、一六九	六、九、〇、四六六	六、三、四、六七三	五、二、八、一七三	四、一、八、三、三、四	四、一〇一
無職業及職業者	七、七六一	一〇、一八九	五、三三七	四、四、七、四一九	一、六、九、六、三、五	一、一、四、三、六、〇	二、二、八、四、〇、六	三、〇、八、四、五、四	二、七七
合計	二、四、三、七、九	二、七、一、五、九二	二、九、一、三、七	二、〇、五、六、六、七、八三	二、五、一、六、九、九、三三	二、五、六、三、〇、七、一〇	二、五、九、五、七、九、三〇	二、六、三、〇、九、一、七、九	一、六、五、八、九

年	戶數	人		計	戶數	人口
		男	女			
明治三十九年末	二二、一三九	四八、〇二八	三五、二八七	八三、三一五	一〇〇	一〇〇
同 四十年末	二八、二七二	五五、六六九	四二、三三二	九八、〇〇一	一二七	一一七
同 四十一年末	三七、一一一	七〇、一四五	五六、〇二三	一二六、一六八	一六七	一五一
同 四十二年末	四三、四〇五	七九、九四七	六六、二〇〇	一四六、一四七	一九六	一七五
同 四十三年末	五〇、九九二	九二、七五一	七八、七九二	一七一、五四三	二三〇	二〇六
同 四十四年末	六二、六三三	一一四、七五九	九五、九三〇	二一〇、六八九	二八二	二五二
大正元年末	七〇、六八八	一二一、五一八	一一二、二一一	二四三、七二九	三一九	二九二
同 二年末	七七、一二九	一四六、二一五	一二五、三七六	二七一、五九一	三四八	三二五
同 三年末	八三、四〇六	一五六、一四九	一三五、〇六八	二九一、二一七	三七六	三五三
同 四年末	八六、二〇九	一六三、〇一二	一四〇、六四七	三〇三、六五九	三八九	三六〇
同 五年末	九〇、三五〇	一七一、七二三	一四九、二二五	三二〇、九三八	四〇八	三八五

現住内地人戸日本籍別

大正五年十二月末日

府縣	戶數	人口		府縣	戶數	人口	
		男	女			男	女
(一)山口縣	八、五二七	一七、一六四	一五、九四六	(二)愛知縣	二、一〇七	四、一四四	三、三三〇
(二)福岡縣	七、〇〇四	一三、九一二	一二、四八〇	(二七)德島縣	一、四六四	二、九六八	二、四三九
(三)長崎縣	五、七七七	一一、三〇一	一〇、七八三	(二八)三重縣	一、四七一	三、八四〇	二、二八四
(四)廣島縣	五、六七〇	一〇、八八六	九、九四三	(二九)高知縣	一、三五五	二、六八四	二、三五〇
(五)熊本縣	四、四六〇	八、四二七	七、七一三	(三〇)静岡縣	一、二九七	二、六八八	一、九七一
(六)大分縣	四、二七〇	七、九四七	七、〇三〇	(三一)京都府	一、三二三	二、四一三	二、〇五六
(七)佐賀縣	三、六五九	七、〇四三	六、三五六	(三二)石川縣	一、二七八	二、三七七	一、九八六
(八)岡山縣	三、五七五	六、六六七	五、六六〇	(三三)福井縣	一、三三五	二、三八四	一、九七三
(九)愛媛縣	二、七五八	五、二一〇	四、五一七	(三四)和歌山縣	一、二〇八	二、四四四	一、九〇六
(一〇)東京府	二、六四四	四、九七一	四、四九三	(三五)新潟縣	一、三四〇	三、二七八	一、八六三
(一一)鹿兒島縣	二、七四九	四、九一七	四、〇〇三	(三六)岐阜縣	一、一八六	二、二七四	一、七七九
(一二)大阪府	二、四三三	四、四八六	四、〇六九	(三七)滋賀縣	一、一四五	二、二七八	一、六八〇
(一三)島根縣	二、四九一	四、六一四	三、九三二	(三八)福島縣	一、一一八	二、〇四三	一、六一〇
(一四)兵庫縣	二、三二五	四、二二六	三、七五七	(三九)鳥取縣	一、〇八三	二、〇〇一	一、六四八
(一五)香川縣	二、〇七七	四、〇七六	三、四八一	(四〇)長野縣	一、一〇四	二、〇三八	一、五二〇

府 縣	戶 數	人 口		府 縣	戶 數	人 口	
		男	女			男	女
(三)宮城縣	一、〇三六	一、七九四	一、五三二	(四)宮崎縣	五六九	一、〇〇九	七八〇
(三)富山縣	八四八	一、五八八	一、三三八	(四)群馬縣	五五九	九四七	七三三
(三)茨城縣	七六九	一、三三三	一、一〇〇	(四)栃木縣	五四三	九三九	七二二
(四)神奈川縣	七〇〇	一、三三三	一、三〇九	(四)秋田縣	五二〇	九一一	七二五
(三)千葉縣	七三七	一、三六七	一、〇三四	(四)埼玉縣	五四一	八八三	七〇六
(三)山形縣	七三五	一、二六六	一、〇三三	(四)殿手縣	四〇八	六九三	五五八
(三)奈良縣	七三〇	一、二八三	九五九	(四)青森縣	四三二	六六五	五一九
(三)北海道	六〇九	一、一八四	九九七	(四)沖繩縣	五八	九四	六〇
(三)山梨縣	五七七	九九七	八七六	總計	九、三五〇	一七、七三三	一四、三三五
			一、八七三				三、〇〇九

本表府縣の順序は現住人口の多寡に依り之を排列せり

現住外國人人口國籍別累年比較

年	支那	北米	英吉	佛蘭	獨逸	露西	濠太	諸威	希臘	其の他	合計
明治三十九年末	四、七九四	二九五	一三八	一〇三	五四	一三	六	一一	六	一一	五、四三三
同 四十年末	七、九〇二	二九七	八六	五二	三五	一〇	六	五	三	二二	八、四一八
同 四十一年末	九、九七八	三九七	一七八	九〇	三九	一八	六	七	四	一〇	一〇、七二七
同 四十二年末	九、五六八	四九三	一七〇	九六	四五	一八	六	九	二	一〇	一〇、四二七
同 四十三年末	一一、八一八	五一三	一六〇	八八	四九	二一	六	八	八	二二	一一、六九四
同 四十四年末	一一、八三七	五六八	一八三	一〇〇	四九	二六	六	二	四	一九	一二、八〇四
大正元年末	一五、五一七	六三〇	二二二	一〇三	五五	二四	五	一四	四	二五	一六、五八九
同 二年末	一六、二二三	六六一	二二五	一〇六	六七	二三	九	一〇	一三	二三	一七、三四九
同 三年末	一六、八八四	六八七	二三〇	九七	五三	一九	一	一一	一七	二七	一八、〇二五
同 四年末	一五、九六八	五六二	三七五	七一	五五	二一	一	一〇	一六	二三	一七、一〇〇
同 五年末	一六、九〇四	七〇〇	二三九	六八	四八	二二	一	八	一一	二三	一八、〇二二

第四節 重要市街地

京城

は曾て漢城又は漢陽と稱す李朝五百年の都府なりしか今は全く昔時の面目を一變し道路の

改修、家屋の改築等殆ど内地の大都會と選ぶ所なきに至れり人口二十五萬三千有餘、内、内地人六萬七千餘人、外國人約二千二百人あり四方山嶽を繞らし東方は駱駝山、西方に仁王山、北方に白岳山、東南に南山峙ち西南の一隅開通し漢江其の東南を流る内鮮人相混して商業取引を爲すも内地人の多くは南山山麓より南大門附近に密集す朝鮮總督府廳舎は南山の中腹に在り李王の昌德宮、李太王の德壽宮、京畿道廳、京城府廳、高等法院、覆審法院、地方法院、警務總監部、憲兵隊司令部、遞信局、工業專門學校、醫學專門學校、京城專修學校、中學校、高等女學校、總督府醫院、測候所、朝鮮銀行、第一銀行、十八銀行、百三十銀行、京城銀行、漢湖農工銀行、漢城銀行、朝鮮商業銀行、韓一銀行、東洋拓殖株式會社京城支店、朝鮮郵船株式會社、東亞烟草株式會社、京城電氣株式會社等あり遊覽地としては南山公園、漢陽公園、パゴダ公園、獎忠壇、關帝廟、總督府博物館、李王職の經營に係る博物館、植物園及動物園、總督府商品陳列館等あり鍾路の巨鍾、パゴダ公園内の舍利塔は五百年前の工藝を語るへし一たび郊外に散策すれば清涼里に閔妃及嚴妃の陵あり孔德里に大院君の陵あり北門外には石坡亭あり牛耳洞の櫻林、蠶島の農圃、月谷里の農園皆一瞥の値あり



京 城 市 街 の 一 部

電車は東大門外清涼里より鍾路及西大門を經、麻浦に達し又鍾路より南大門を經、龍山の新興市街に達す又黃金町通より光熙門を經て往十里に到る、年年市區改正を行ひ道路入達平坦砥の如し交通機關の整備と同時に電信、電話、電燈、瓦斯、水道等の設備完備して市街の光景全く舊觀を一新し文明的都市の壯觀を呈す

神社は京城神社、菅原神社共に南山に在り寺院は東西本願寺別院、日蓮宗、淨土宗、曹洞宗、眞言宗等各派の寺院あり布教に従事す基督教は日本基督教會、日本組合基督教會、日本メヂスト教會、聖公會、佛蘭西教會(天主公會)朝鮮耶穌教長老會、救世軍、露國正教會等あり
 今京城總督府を起點とし各道廳に到る距離を示せば左の如し

京城より各道廳所在地に到る距離

道		所在地	鐵道	陸路	水路	道		所在地	鐵道	陸路	水路
		廳	哩分	里町				廳	哩分	里町	哩分
京畿道	京城	—	—	〇・二六	—	忠清南道	公州	八〇・八	—	六・二〇	—
忠清北道	清州	—	八〇・八	四・三〇	—	全羅北道	全州	—	一七四・五	—	—

道		道廳所在地	鐵道	陸路	水路	道	道廳所在地	鐵道	陸路	水路
全羅南道	慶尙北道	光州	哩分 二二一・七	里町 三・二七	哩分	平安北道	義州	哩分 三一・三	里町 四・三四	哩分
慶尙南道	大邱	大邱	二〇三・〇	—	—	江原道	春川	—	二二・〇三	—
黃海道	海州	海州	二七四・八	一・一八	七五・〇	咸鏡南道	咸興	一五〇・四	—	四四・五
平安南道	平壤	平壤	一六四・七	—	—	咸鏡北道	鏡城	一四〇・四	四・二八	二〇五・五

龍山 は京城の一部にして漢江に臨める形勝の地なり京龍の間は電車汽車の往來頻繁なり從來龍

山浦と稱し漢江の舟楫の便あり物貨輻濟す總督官邸、駐劄軍司令部、第十九師團司令部、清鐵京城

管理局、總督府印刷所等の在る所なり、京釜京義兩鐵道線の分歧點にして又京元線の基點なり

近時内地人續續移住し日に殷賑に向ひつつあり小學校あり一千餘の兒童を收容す金融機關として

百三十及十八銀行の出張所あり

漢江橋は漢江の本流に架設し長さ一千四百四十九呎漢江小橋は其の支流に架設し長さ六百二十一呎

共に大正五年三月起工し同六年十月竣工せり

永登浦

漢江の沿岸に在る一小驛に過ぎずと雖始興郡廳の所在地にして且京釜、京仁線の分岐點たるを以て漸次發展の途に在り警察署、郵便局、監獄分監、尋常小學校、朝鮮皮革株式會社あり附近より農産物、煉瓦等を産出す

仁川

京畿道の西端に突出せる小半島にして月尾島、小月尾島、沙島等前面に横はりて内港を圍み八尾島遙に外廓を畫きて外港を爲す内港は水淺くして巨船を入るを得ず殊に潮水の干満甚しくして大潮時には其の差三十二尺に及ぶ而も平安、黄海、京畿、忠清各道の貨物を吞吐し内地諸港及滿洲諸港との定期航海あるを以て貿易は朝鮮に於ける第二位を占め其の額二千四百五十三萬三千圓に達す人口約三萬二千八百人、内、内地人一萬二千人を占む府廳、地方法院支廳、觀測所、税關、郵便局、小學校、高等女學校、病院等の設備あり電燈、電話、水道等の設備亦完備せり

築港は明治四十四年四月起工し大正八年三月竣工の豫定にして目下工程九分を進行しつつあり

水原

京城を距る南二十六哩に在り京釜線に乗り一時間にして到るへし往時正宗大王の居城にし

て今は廢址に歸せしも華虹門、訪花隨柳亭、龍頭閣、華寧殿、杭眉亭等の遺蹟尙存せり西湖は其の眺望甚た宜し勸業構範場あり種苗家畜を培養し各道農事の模範を垂る地方法院支廳、慈惠醫院、警察署、農林學校、樹苗圃、守備隊等あり内地人の住居する者約一千三百人あり

開城

京城を北に距る四十八哩餘に在り京義線中有數の驛なり高麗朝四百七十年間の首都にして

一に松都と稱す高麗時代の舊跡は滿月臺、善竹橋、崧陽書院、壽昌宮址、敬德宮址、太平館、成均館、大興山城、七重石塔、朴淵瀑布、杜門洞、華藏寺、觀音寺、穆清殿、顯陵、關王廟、彩霞洞等にして善竹橋は鄭夢周が李成桂の爲に殺されたる處にして橋上の血痕今尚消へずと傳ふ近時滿月臺の城址を發掘せしに當年の礎石井然として具はれるを見る朝鮮紅蔘は此の地の名産にして近時三萬斤以上を産す其の價額約二百餘萬圓に達す人蔘畑は一畝の價値あり彼の高麗燒は人蔘と共に此の地の名産にして青磁白磁の兩種あり桃も亦此の地の名産にして單に其の花の天天たるのみならず其の果實も亦太く美味甌賞すへし内地人の居住する者約一千五百人、地方法院支廳、警察署、專賣課出張所、銀行、郵便局等あり

平澤、成歡 共に京釜線に沿ひたる一小驛に過ぎざるも將來農業發展の地として矚目せらる平澤附近は平野にして米、大豆の産出多し雁、鴨、山七面鳥、鶴、雉子等鳥類に富み獵客の遊ふもの多し成歡は日清戦争の古戦場にして平澤と共に農産地として將來有望の地なり同地には小學校、憲兵分遣所あり

清州 忠清北道廳の所在地にして地方法院支廳、監獄分監、道警務部、警察署、憲兵隊、同分隊、慈惠醫院、郵便局、銀行等あり人口約五千人、内、内地人一千四百餘人あり邑内の石橋及鐵幢は古來有名なり京釜線鳥致院より陸路四里三十町、忠州へは陸路十七里三十二町にして達すへし何れも自働車の便あり

公州 忠清南道廳の所在地にして鳥致院驛より陸路六里二十町自働車の便あり英江驛より舟に乗り錦江を下れば四時間にして達すへし邑内の雙樹亭雄心閣に古來著名なり地方法院、道警務部、警察署、監獄、憲兵隊、守備隊、慈惠醫院、地方金融組合、銀行等あり人口約七千人、内、内地人一千七百六十人あり

鳥致院

忠清南北兩道及全羅北道に通ずる要地にして古來有名なる市場あり附近の農産物輻輳し近時頗る發展せり内地人の居住する者八百餘人、憲兵分遣所、郡廳、地方金融組合等あり

大田

湖南線の分岐點にして京釜線中大邱に亞く物貨集散地なり郡廳、歩兵聯隊本部、地方法院支廳、警察署、憲兵分隊、歩兵第七十九聯隊本部、郵便局、專賣課出張所、産婆傳習所、農工銀行、地方金融組合、京城中學校分教室等あり内地人約五千人あり此の地を西に距る三里許の所に備城の溫泉あり白働車にて往復すへし此の外忠清南道には溫泉の溫泉あり京釜線天安驛より約三里白働車の便あり

論山

湖南線の要驛にして内地人約八百人あり論山郡廳の所在地にして漢湖農工銀行出張所、精米所等あり本驛を距る東南一里許の所に石造の大彌勒佛あり所謂恩津の彌勒にして盤若山瀆燭寺境内に安置す高麗光宗十九年僧慧明の建立にして鮮人の歸依頗る厚し石佛の身長八十八尺八寸あり

江景

湖南線の要驛にして群山と呼應し錦江を利用し舟楫の便あり水陸の便あるよりして貨物集散し朝鮮三大市場の一に數へらる内地人一千七百餘人あり警察署、郵便局、地方法院支廳等あり

全州

湖南第一の都會にして全羅北道廳の在る所なり北方茫茫たる所謂全州の平野を控へ米穀鹽富なり此の地方に於て内地人の農業經營を爲す者多く彼の細川農場、東山農場、大橋農場の如きは其の規模の大なるものにして農事改良の如きも著著其の歩を進め貯水灌漑の如き水利は他道に於て多く其の比を見す即ち沃漑西部水利組合、臨益水利組合、全益水利組合、臨益南部水利組合、臨沃水利組合の如き是なり人口一萬四千四百人、内、内地人三千百餘人あり地方法院支廳、監獄分監、道警務部、警察署、守備隊、慈惠醫院、農工銀行、地方金融組合、農業學校等あり邑内に慶基殿あり城南に多佳山あり山上に大神宮遙拜所を設く山の上下を通して全州公園と稱す湖南線裡里驛より陸路六里餘、人車、自働車の便あり又輕便鐵道を敷設し(十五哩五分)交通機關完備せり

群山

開港の遲速と位置の關係上木浦と兄弟の感あり(木浦は明治三十年、群山は同三十二年開港す)共に南鮮に於ける貿易港にして其の額七百六十五萬一千餘圓、仁川、木浦及内地と定期航路あり此の地に到るには海路の外江景、公州より錦江乘船の便あり又裡里驛より鐵道の便あり内地人約五千四百人、府廳、地方法院支廳、警察署、監獄分監、税關支署、地方金融組合等あり

光州 全羅南道廳所在地にして湖南線松汀里驛を距る三里十七町の地に在りて自働車の便あり人口約一萬九百人、内、内地人二千五百餘人あり地方法院、警察署、慈惠醫院、監獄、守備隊、道警務部、郵便局、農工銀行、地方金融組合、東洋拓殖會社派出所等あり産物の主なるものは米、麥、棉花等なり棉花は一般に對し紡績の原料に好適なる米國陸地棉の栽培を獎勵せしに其の成績概して良好なるも殊に此の地方は其の主産地にして品質も亦佳良なり

木浦 湖南線の終點にして其の海運上の地位群山と相呼應す市街は諺達山を背面に負ひ前面島嶼を以て抱擁す貿易の主なるものは米穀、棉花、海産物にして最近の貿易額四百九十萬一千三百圓なり内地諸要港及沿海各地との間に定期航路ありて商業繁盛を極む内地人五千六百人、府廳、地方法院支廳、警察署、監獄分監、郵便局、税關支署、測候所、地方金融組合、水産、棉業會社、農工銀行、十八銀行の支店等あり松島公園は東南の小丘に在り園内に松島神社及金比羅神社を祠れり

大邱 慶尙北道廳の所在地にして京釜線中大驛の一なり人口約三萬五千九百人、内、内地人凡そ一萬人を占む西方十餘町の丘上に達城公園あり山頂平坦眺望詩に入る中央に大神宮を祠れり此の地

附近一帯平野にして土壤肥沃農業に適す穀類、果樹、棉花、煙草等を産す古來有名の市あり東門市は陰曆毎月七、九の日に西門市は二、七の日に開催す最近の貿易額は二百七十六萬二千六百圓なり覆審法院、地方法院、府廳、道警務部、警察署、歩兵第四十旅團司令部、歩兵第八十聯隊本部、慈惠醫院、專賣課出張所、測候所、郵便局、農工銀行、地方金融組合等あり

慶州

大邱の東方十七里十七町にして自働車にて往復すへし、新羅九百餘年間の王都にして瞻星

臺、石氷庫、臨海殿址、雁鴨池、鷄林、鮑石亭、春陽橋趾、半月城、滿月城、明治城、南山城、六村陵墓、五陵、武烈王陵、金庾信墓、芬堂寺九層塔、柏栗寺、四面石佛等、城墟、古墳、靈刹、金石佛、巨鐘等考古の資料となるべきもの多し郡廳、地方金融組合等あり内地人五百七十人あり此の地を距る四里の所に佛國寺あり境内に多寶塔、釋迦塔あり寺後の吐含山上に石窟庵あり圓形の石造にして穹窿狀の天井を爲し其の上部を土にて覆ひ入口の左右に四天王、仁王の像、内部の圍壁に十一面觀音、十六弟子、梵天帝釋の像を彫刻し中央の蓮臺に釋迦如來の座像を安置す新羅期遺品中白眉を推すへし

密陽、三浪津

密陽は慶尙南道に在る小都會にして三方に山を負ひ南方の一面遠く平野に連り凝川溶溶として其の間を縫ひ榆川より密陽に至る沿岸の地風光明媚の所少なからず凝川の清流又結を産す近時農産地として漸次發展せり三浪津は密陽の南洛東江の東北に在り馬山鐵道線の岐るる所にして穀物、果實、野菜の産地として知らる

晋州

馬山を距る十八里餘の所に在り自働車の便あり又釜山より海路三千浦に上陸し泗川を經八里三十餘町を自働車にて到るへし文祿の役日本軍の再度苦戦したる所なり慶尙南道廳の在る所にして人口約一萬一千七百人、内、内地人二千二百餘人あり、地方法院支廳、監獄分監、憲兵隊、守備隊、道警務部、警察署、慈惠醫院、郵便局、農工銀行、地方金融組合等あり名所舊蹟としては矗石樓の眺望義谷寺の幽邃あり矗石樓は其の結構宏大にして樓下斷崖數十丈南江崖下を流る涉川里の沃野を遠望し眼界開豁轉た雄懷に勝へず義谷寺は鳳谷山の山間に在り滿山紅葉霜林の景詩家を憐す

馬山 馬山府廳の所在地にして内地人約四千五百人京釜線三浪津驛より鐵路一時間餘にして達すへし東に丘陵を負ひ巨濟島を外廓として鎮海灣其の前方に横ばる又海路三十九湮にして釜山港に到

るへし地方法院支廳、警察署、税關支署、病院、銀行、地方金融組合等あり最近貿易額は鎮海と合して百二十四萬二千四百餘圓なり

鎮海 鎮海灣は馬山半島と固城半島との間に在りて巨濟島其の南に横はり灣内水深くして堡に幾多の巨艦を碇泊せしむるに足る新市街は昌原郡鎮海面に在りて山を負ひ水に臨み頗る形勝の地たり内地人四千八百餘人、陸軍要塞司令部、陸軍重砲兵大隊、海軍鎮海要港、海軍建築部支部等あり

釜山 關釜連絡の咽喉にして海陸接續唇齒輔車の關係を爲す築港事業も漸次進行し又停車場の設備も完成せり府廳、地方法院、警察署、守備隊、陸軍運輸支部、郵便局、税關、測候所、中學校、高等女學校、農工銀行、各種銀行支店出張所等あり穀物、青物、水産物市場あり就中魚類は半島第一位を占む貿易額も亦首位にして其の最近額は三千七百九十萬三千五百餘圓を算す輸出品の主なるものは米、大豆、海草、魚類、生牛、牛皮、牛骨、砂金等にして輸入品の主なるものは木綿、金巾、石油、食鹽、酒、煙草、醬油、燐寸、紡績絲、砂糖其の他雜貨類なり其の輸移出先は内地、支那、浦鹽斯德、新嘉坡等にして其の輸移入地は内地、支那、米、英、露、佛等なりとす其の繁榮今や旭日

昇天の勢あり人口六萬一千有餘、内、内地人二萬八千餘人にして尙年年移住者増加の傾向あり遊覽地としては金比羅山即ち龍頭山の公園、龍尾山神社、天馬山、峨嵋山、伏兵山等何れも風光頗る明媚にして一たび岳上より市街を瞰下すれば幾年所を逐ふて如何に内地人か此の地の開發に努力せしか苦心の跡歴歴として四指するを得へし釜山の北三里許の所に東萊の温泉あり電車にて直行すへし東萊の東二里許の海岸に海雲臺の温泉あり釜山東萊間電車線南門停留場より自働車にて直行すへし松島半島は釜山を距る一里許に在りて海水浴場たり

海州 京義線沙里院驛を距る十八里二十三町、自働車の便あり黃海道廳の所在地にして人口一萬

四千八百人を有し、内、内地人一千五百餘人あり、地方法院、監獄、憲兵隊、道警務部、警察署、此の地の古蹟には濯熱亭、百世清風碑、梵字石塔あり、慈惠醫院、郵便局、地方金融組合等あり

新幕、沙里院 共に黃海道に在り京義線の完成に伴ひ發展したる新開地なり新幕は薪炭、米穀、

大豆等を産出し新溪地方の産出茲に集り内地商人の入り込む者少なからず學校、警察署、郵便局等あり、沙里院附近一帶の地は廣漠たる沃野にして米穀、大豆等の産出頗る多し鳳山郡廳、銀行、學

校、郵便局等あり内地人の居住するもの六百五十人あり沙里院の西南に曠野あり土地豊沃にして農業に適す東洋拓殖會社、朝鮮興業會社等各出張所を置き盛に農事經營に従事す

黃州、兼二浦 黃州は京義線に沿ふ一驛に過ぎず雖多數の朝鮮人軒簷を列へ市場頗る盛なり穀物鐵礦の産出ありて近時邦人の移住する者多し此の地より鐵路分岐し半時にして兼二浦に達するを得、兼二浦は鎮南浦の東に在る一河港にして航行の利あるを以て曾ては鎮南浦との間に一日數回汽船の航行あり近海に於ける漁魚者は多く茲に集まりしか平南線の開通に因り平壤鎮南浦間の交通便利となりしを以て今や近日の便益を有せざるに至れり三菱製鐵所は其の規模大にして殷盛を極む黃州には郡廳、學校、警察署、郵便局、興業會社等あり

平壤 京城を距る百六十四哩餘、京義線中の大驛にして高勾麗の舊都なり東南大同江に臨み北方大城山を負ひ頗る要害の地たり北鮮に於ける物貨輻輳の中心にして附近一帶に茫漠たる平野連互し土壤豊沃にして諸穀の産出多く平壤米は品質良好にして其の名高し最近貿易額は三百六十八萬四千四百餘圓なり道廳、府廳、歩兵第三十九旅團司令部、歩兵第七十七聯隊本部、覆審法院、地方法院、

道警務部、警察署、慈惠醫院、監獄、税關、郵便局、平壤中學校、農業學校、簡易商業學校、測候所、高等女學校、高等普通學校、女子高等普通學校、農工銀行、漢城、朝鮮、百三十銀行各支店、電燈會社等あり人口四萬六千六百人、内、内地人九千餘人あり、此の地新舊戰場にして文祿の役には小西行長此の地に據り日清の戦には皇軍清兵を茲に攻め今猶牡丹臺、乙密臺、七星門、玄武門、大同門、船橋里等の戦蹟あり又練光亭、浮碧樓、綾羅島の眺望は悉く畫圖に入り市街も亦電燈、電話、水道、旅館等の設備充分にして其の殷賑なること京城に亞けり

鎮南浦 平南線の終點にして平壤を西に距る約三十四哩餘に在り大同江口の貿易港にして最近の額は一千二百七萬六千四百餘圓なり仁川、下關を経て阪神に至るものと仁川、群山、木浦、釜山を経て達するものとこの二航路あり又支那安東及大連等に到る航路あり今や築港完成し大艦巨舶を泊せしめ冬季流氷の爲め航路杜絶の虞なし飛潑島は港の東方に在り老松鬱蒼として雅致掬すへし此の地日清戦争前は一漁村に過ぎざりしか日清、日露兩役後内地人の移住者多く忽ちにして一要港と爲り内地人五千六百餘人あり府廳、地方法院支廳、警察署、税關、監獄分監、郵便局、朝鮮銀行、農工

銀行各支店等あり築港は明治四十四年四月起工し大正四年三月竣工せり久原精煉所は其の規模大なり本驛を距る五里許の處に廣梁灣鹽田あり一箇年約五千萬斤を製造す

義州 平安北道廳の所在地にして新義州を距る東北四里三十町の所に在り自働車の便あり鴨綠江を隔てて遙に支那九連城に對す日清、日露の兩役には皇軍の渡河點たり人口約六千二百人、内、内地人八百餘人あり憲兵隊、守備隊、道警務部、地方法院出張所、慈惠醫院、郵便局、農工銀行支店、地方金融組合、產業傳習所等あり邑内西北の邱上に統軍亭あり古色蒼然懷古の情に勝へず日清、日露の役には我軍砲兵陣地たりき

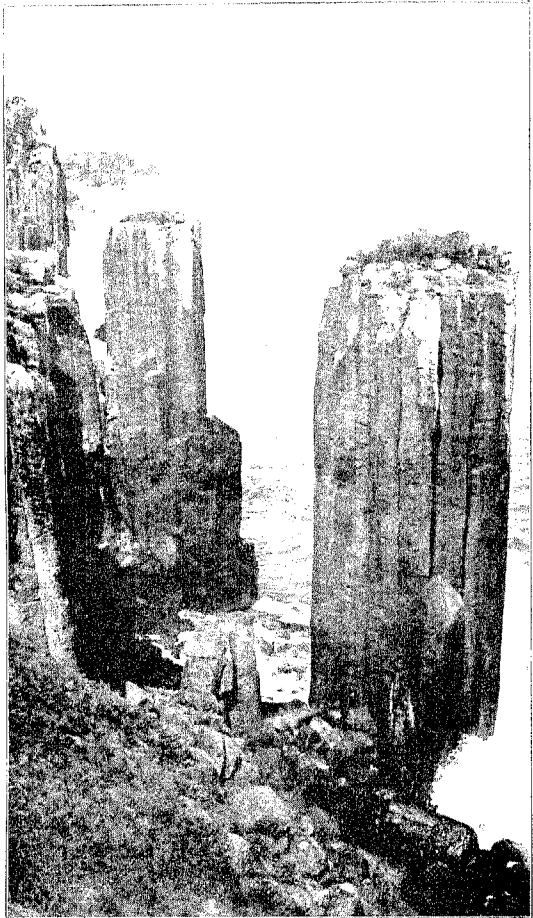
新義州 京義線の終點にして鴨綠江を界して支那安東に接す鴨綠江は源を白頭山附近に發し長流二百有餘里其の舟楫の便を有すること八十餘里なり新義州と安東縣とを連結するの鐵橋は明治四十四年十月の竣功に係り延長三千九十八呎にして中央三百呎の橋桁を開閉式とし船舶の航行に便ならしめ又橋梁の兩側に幅八呎宛の歩行道を設け通行の便に供す此の橋梁に由り滿鮮を連絡し安奉線に由りて哈爾濱に達す更に西比利亞線に由りて歐洲に到るへし此の地に於ける貿易額は下流龍岩浦を

合し六百十一萬三千二百餘圓を算す府廳、警察署、守備隊、地方法院支廳、税關支署、監獄分監、郵便局、營林廠、朝鮮銀行出張所、平安農工銀行支店、電氣會社等あり内地人約三千人あり

春川 京城を距る東北二十三里餘の所に在り江原道廳の所在地にして京城より自働車の便あり僅に四時間にて到達するこゝを得人口約三千五百人、内、内地人一千百餘人、地方法院支廳、監獄分監、憲兵隊、大隊本部、道警務部、警察署、郵便局、蠶業傳習所、機業所、地方金融組合等あり邑内北方の清平山に城址あり是れ額圖の地にして二千年前の古蹟たり又靺鞨塚あり素蓋鳴尊の占領地と傳ふるものも亦此の地なり

鐵原 鐵原は江原道の西北部にして京城を距るこゝ六十二哩餘、京元線の間驛にして其の繁榮昔日に倍蓰し百貨集散主要驛の一に算するに至れり往時弓裔の占據せし地なるを傳ふ

金剛山 金剛山の奇勝は其の名近來殊に天下に播けり金山廣袤海陸を併せ十數里に互り一萬二千の巒峯重疊相倚り相擁し數百丈の巖巖簇立し或は萬物相の雄と爲り或は海金剛の勝と爲る鬱林之を繞り蒼苔雲根を埋め萬水飛瀝し懸りては九龍淵の瀑と爲り碎けては十二瀑の玉と爲る幽禽法を説き



剛金山海剛金叢石亭の内

清潭佛を語る山寺の鐘聲は圓寂の常樂を告ぐ足を一たひ此の仙境に容れは杳として太古の想あり山中衆峯の最も高きものを擧ぐれば白馬峯にして毘盧峯、水精峯之に亞く日出獄、月出獄、獅子峯、香爐峯、青鶴峯、雁門嶺、白雲臺、望軍臺、遮日峯、彌勒峯、釋迦峯、長慶峯、地藏峯、觀音峯等の奇嶂群峙せり其の規模の壯にして且大なる日光、耶馬溪と雖同日の談にあらず、今旅客の此の勝を探らむとするには海陸の二途あり乃ち先づ内金剛を觀むとする者は陸路を採り京城南大門驛より京元線に依り平康驛に下車し金化、金城、新安、末輝里に至る三十三里七町の間は人力車及自働車の便あり末輝里より長安寺に至る二里三十三町の間は人力車通す是より行行内金剛の探勝を爲すへし末輝里より溫井嶺を経て溫井里に至る七里二十八町の内末輝里細洞間四里は人力車の便あり又摩訶衍より榆岾寺を経て溫井里に至る間十一里二十八町は徒歩し溫井里より長笛に至る二里十六町及高城附近の各所に至るには自働車の便あり又外金剛各所の勝景を探らむとするには溫井里より萬物相に至る二里十町は徒歩にして溫井里より神溪寺に至る一里二十町は人力車の便あり神溪寺より九龍淵に至る一里三十町の間徒歩すへし又外金剛を觀むとする者は海路を採り元山より乗船し長

箭に著し二里餘にして温井里に到着し夫れより前記の道を辿るへし

元山 元山府廳の在る所にして北鮮第一の貿易港なり灣内潮流緩漫にして水深く大船を泊すへし

市街は望徳山の麓に在り地形上日本海沿岸に於ける貨物及露領よりする貨物は茲に輻輳す京元線の開通と同時に釜山、仁川を經すして直に京城及朝鮮内地に輸入せらる最近貿易額は八百六十一萬八千九百圓なり地方法院支廳、警察署、守備隊、監獄分監、税關、測候所、郵便局、病院、銀行、地方金融組合等あり内地人約七千三百人あり

元山より各處に通する道路は頗る不完全なりしか平壤元山間の道路(五十五里)の改修竣功し他の道路も亦殆ど完成せり又元山近海は魚類に富むも販路頗る不便なりし爲漁業に従事する者少かりしか京元鐵道の完成と共に其の増加を見るに至れり

咸興 咸鏡南道廳の所在地にして北は盤龍山を負ひ西北に城川江を控へ西南は廣漠たる平野に望み邑内六箇の樓臺あり人口一萬六千二百人、内、内地人二千五百人、地方法院、監獄、歩兵第七十四聯隊本部、憲兵分隊、道警務部、警察署、郵便局、農工銀行、地方金融組合等あり名所舊蹟とし

ては邑内西門に樂民樓あり城川江に臨み四季の眺望絶佳なり附近の和樂亭より市街を瞰下し西湖津方面の山陵を遠望すへし樓下に萬歲橋あり東南一里許に本宮あり東北里餘に慶興殿あり共に李朝太祖の舊邸なり此の外歸州寺、定和陵等あり此の地に至るには元山より乗船し半日にして西湖津に上陸し輕便鐵道にて直行即日到着すへし

鏡城 咸鏡北道廳の所在地にして南に鏡城川を控へ北に勝巖山を負ひ地形西に逼り東に開き三角形を爲す人口五千三百人、内、内地人約七百人、地方法院支廳、憲兵隊本部、道警務部、警察署、郵便局、農工銀行出張所、地方金融組合等あり、邑内西北に巖山あり登れば市街を瞰下し鏡城灣を望み眺望頗る佳なり元帥臺は城南里餘に在りて鏡城川の河口に臨めり觀海寺は西方一里餘、山の中腹に在り春秋共に散策に佳なるも霜葉の時節を最となす此の地に至るには元山より乗船し清津に上陸し手押式軌道に由り羅南を経て到着すへし

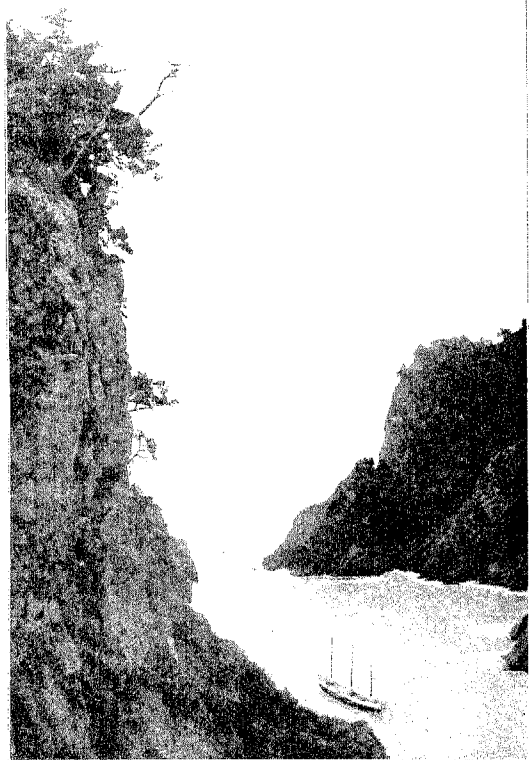
清津 北鮮の要港にして露領浦鹽斯德は海上百三十哩の所に在り北鮮一帶の貨物農産物の集散地たり清會線の基點にして間島、會寧、鏡城、羅南に出入する咽喉に當れるが故に市街繁盛を極む内地人三千四百人、府廳、地方法院支廳、警察署、郵便局、稅關支署、憲兵分遣所、露國副領事館等

あり最近貿易額三百二萬五千五百圓を算す

城津 元山の北方百二十四哩餘の所に在り咸北一帯の貨物並に輻湊す輸移出品の主なるものは大豆、生牛、銅等にして輸移入品は金巾、木綿、紡績等なり最近貿易額は百七十四萬七千九百圓を算す内地人七百餘人あり

羅南 鏡城の北方一里餘の所に在り東西南の三面は丘陵に圍まれ東北二隅は平野にして清津より來れる手押式軌道は此の地を経て鏡城及輪城に通す郵便局、小學校、憲兵分隊、歩兵第三十七旅團司令部、歩兵第七十三聯隊、騎兵第二十七聯隊、野砲兵第二十五聯隊あり内地人二千二百人あり

會寧 豆滿江の右岸に在る一小都邑にして江を渡れば直に間島に入るへし間島龍井村は西北十三里許の所に在り江水一たび氷結すれば人馬自由に氷上を往來すへし上流に茂山あり下流に鍾城あり清津より來れる咸鏡線の一部たる清會線は豊山に通し(約三十九哩)豊山より會寧に到る間は手押式軌道十五哩あり此の地間島貿易の要衝にして市街電話を有し商業盛なり最近貿易額三十七萬三千五百圓を算す郡廳、郵便局、公立普通學校、憲兵分隊、守備隊、工兵第十九大隊、朝鮮銀行出張所、地方金融組合等あり内地人一千百人あり



鬱陵島の道洞港口

第四章 交通

第一節 關釜連絡概況

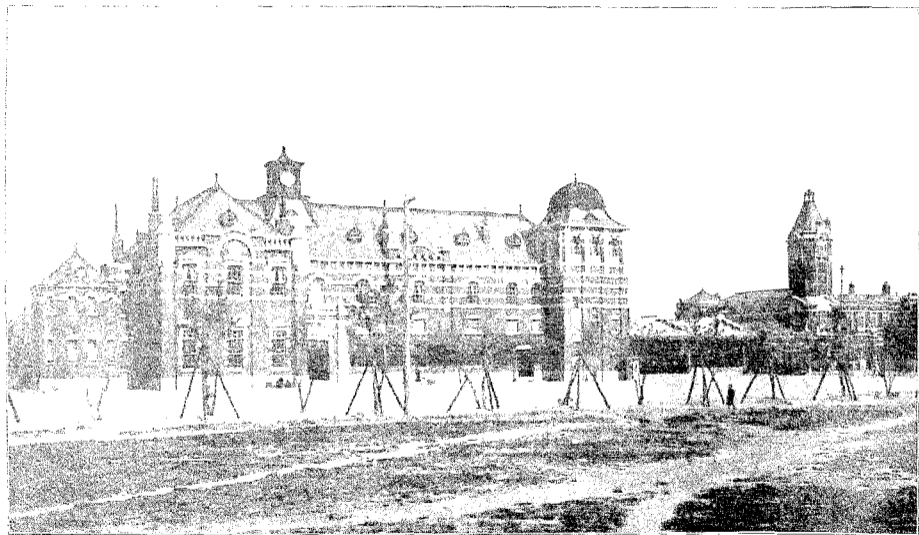
關釜連絡船は壹岐丸（一、六〇〇噸）、對馬丸（二、六〇二噸）、高麗丸（三、〇二八噸）、新羅丸（三、〇三二噸）、さくら丸（三、〇五八噸）の五隻にして關釜間を晝夜二回往復す東京大阪方面よりの旅客は下の關にて下車し長崎鹿兒島よりの旅客は門司に於て下車し孰れも船上の客を爲り海上百二十二哩を十時間半にして釜山棧橋に著しそれより鐵道にて朝鮮の要所に至るへし若し鮮滿直通列車（一週一回運轉）に乘車すれば京城、新義州を經、鴨綠江の架橋を渡り滿洲より西比利亞鐵道に由り歐洲大陸に直行すへし今假りに東京驛を一日の午前に發車するませば二日午前下の關著、直ちに乘船すれば其の夕釜山著、即夜釜山驛より乘車し三日の朝京城に著すへし左に大正元年度以降關釜間連絡の概況を表示すへし

關釜連絡概況

年	度	航海		客			貨物		郵便物	
		度數	旅	計	貨物	手荷物	小荷物			
内地行	大正元年度	七〇九	三三二五	一三三四四	七九五七	九六〇九六	二六八六三	四六〇六二	一六三九〇	六三、一九一
	同 二年度	七四〇	三三五七	一三三六二	七八二八	九三、〇二〇	四二、三二九	六四、五七〇	二五、五二八	五、八三〇
	同 三年度	七三三	二六〇三	一三三四六	八〇、五五二	九六、四九九	六七、三七九	六五、九三二	三八、三〇八	七三、五八二
	同 四年度	七〇九	二九〇五	一四〇、七六	八三、三九二	一〇〇、三七三	九九、八九二	六四、七四五	五一、二七六	六九、〇二四
	同 五年度	七七三	三、五六三	一六一八二	九一、九三七	一一、六八二	一九九、〇三九	五八、八二六	八一、二九	七六、九三九
	大正元年度	七〇七	三、二七五	一四〇、九五	八七、九九八	一〇五、三六八	六三、一五七	八六、六三六	一七〇、四三七	一四四、〇〇〇
	同 二年度	七四〇	三、二八七	一五〇、一五	九一、六五三	一〇九、九五五	八二、三七	八〇、五五八	一六、七六一	一三三、五九〇
	同 三年度	七二一	二、七二七	一四、一七九	八二、八六八	九九、七六四	八六、七六五	七九、二二六	一三八、九七五	一四八、三四三
	同 四年度	七三二	三、〇五四	一四、三〇七	八六、四四四	一〇三、七五五	一〇三、二二四	八〇、三〇一	一七四、四四五	一四六、〇四五
	同 五年度	七八〇	三、五〇六	一五、四六三	八三、八八八	一〇二、八五七	一九、一二二	八〇、六九七	一〇七、六六〇	一六〇、九四八
朝鮮行	同 二年度	七二一	二、七二七	一四、一七九	八二、八六八	九九、七六四	八六、七六五	七九、二二六	一三八、九七五	一四八、三四三
	同 三年度	七二一	二、七二七	一四、一七九	八二、八六八	九九、七六四	八六、七六五	七九、二二六	一三八、九七五	一四八、三四三
	同 四年度	七三二	三、〇五四	一四、三〇七	八六、四四四	一〇三、七五五	一〇三、二二四	八〇、三〇一	一七四、四四五	一四六、〇四五
	同 五年度	七八〇	三、五〇六	一五、四六三	八三、八八八	一〇二、八五七	一九、一二二	八〇、六九七	一〇七、六六〇	一六〇、九四八
	同 大正元年度	七〇九	三、三二五	一三、三四四	七九五七	九六、〇九六	二六、八六三	四六、〇六二	一六、三九〇	六三、一九一

第二節 道路

朝鮮の道路は從來京城を基點として義州街道、慶興街道、平海街道、釜山街道、仁川街道、鎮南浦



釜山停車場

街道、羅州街道、保寧街道、江華街道の九街道に分ちしも幅員狹隘にして而かも凸凹起伏甚しく運輸は人肩馬背に倚るの狀態に在りしか統監府設置以來中央地方共に道路の修築に努め加ふるに京釜、京義、湖南及京元鐵道の全通並咸鏡線の開通するに及て曾て不便を感せし交通も頓に昔時の面目を一新せり總督府の設置せらるるや朝鮮全道に互り道路網を規畫制定せり則ち一等道路を十七線總延長七百七十四里八分二等道路を七十九線總延長二千二百九十七里七分合計九十六線總延長三千六十八里五分なりとす此の中緩急を計り最も急施を要するものを第一期に於て改修を施すこととし別表に示せる一、二等道路計三十四線延長六百八十五里を總工費一千萬圓を以て明治四十四年度以降七箇年の繼續事業と爲し改修に著手し大正六年十月竣功の豫定なり

然れども急速なる地方の發展は到底國の施設のみに俟つこと能はざるの事情あるを以て地方に於ても地方費又は夫役を以て道路の改修に努め國庫より補助金を交付して之を助成し以て地方の開發を促したり今明治四十三年度以降大正五年度末迄に於て國庫補助に依り改修したる治道の成績を示せば一等道路七十三里、二等道路二百七十七里一分、三等道路百一十一里一分市街其の他の道路十四里

二十一町餘總計四百七十六里餘此の總工費二百六十二萬九千四百六十五圓にして内國庫補助百六十五萬七千五百三十六圓なり

第一期(國費經營)七箇年繼續治道工事

大正六年六月末日

路線	等級	幅員	總距離	著手	竣功	計離	進工	摘	要
清津寧線	一	四間	二三・一八里町	—	二三・二三里町	二三・二三里町	竣功		
平壤山線	一	四	五五・〇〇	—	五六・二七	五六・二七同	同		
京城山線	一	四	五七・〇〇	—	五七・〇〇	五七・〇〇同	同		
海州寧線	二	三	一五・一八	—	一三・三〇	一三・三〇同	同		
安州鎮線	二	三	六一・二九	一一・二〇	五〇・〇一	六一・二一九・九	九・九		江界滿浦鎮間を除く 武陵里江界間未成
清州城線	二	三	一一・〇〇	—	一〇・三三	一〇・三三竣功	竣功		

晉州線 尚州線 順天線 全州線 利川線 長湖院線 利川線 江陵線 城津線 甲山線 新浦線 惠山鎮線 雄基興線 慶興線 京城線 利川線 公州線 論山線 忠州線 陰城線

第四章 交通

二	一	二	一	二	二	二	二	一	二	二
三	四	四	四	三	三	三	四	三	三	三
六・一八	一〇・〇〇	一一・一八	九・〇〇	五四・〇〇	一七・〇〇	四八・一八	七・一八	三二・〇〇	四四・〇〇	
				七・一四		八・〇八				
七・一一	八・一五	一五・二四	九・二七	二五・〇五	一七・〇三	四四・二一	七・〇七	三三・三〇	四七・〇九	
七・一一	八・一五	一五・二四	九・二七	三二・一九	一七・〇三	五二・二九	七・〇七	三三・三〇	四七・〇九	
同	同	同	竣功	九・五	竣功	九・七	同	同	同	

東沙里邱山間未成

新豐里前後未成

路 線	等級	幅員	總距離	著 手 竣 功	著 手 中	計 離	進 工 程 度	摘 要
會寧營線	一	四町	六・一八里町	五・三〇里町	—	五・三〇里町	竣功	端川居山間を除く
行營線	一	四町	一一・一八里町	一四・二八里町	—	一四・二八里町	同	
北青津線	一	四町	一四・〇七	一五・二二	—	一五・二二	同	
河東津線	二	三	七・〇〇	七・二五	—	七・二五	同	
公院田線	二	三	六・一八	六・一八	—	六・一八	同	
輪城院線	二	三	三三・〇〇	一四・〇〇	—	一四・〇〇	同	
忠州山線	一	四	二二・一八	一七・一五	—	一七・一五	同	
京州城線	二	三	二二・〇〇	二二・〇〇	—	二二・〇〇	同	
春川線	二	三	八・〇〇	八・〇〇	—	八・〇〇	同	
麗水線	二	三	八・〇〇	八・〇〇	—	八・〇〇	同	

第四章 交通

市京	全論	小水	洪天	尚大	慶行	雲孟	長元	吉城	長忠
街城	州山	井里	州安	州邱	興營	山里	山	州津	湖院
線	線	線	線	線	線	線	線	線	線
	一	一	二	一	二	二	二	一	一
至一 二九	四	四	三	四	三	三	三	四	四
	二〇七	三・一一	一六〇〇	一八〇〇	六・一八	六〇〇	二七〇〇	一〇〇〇	九〇〇
〇・二八	二〇七	三〇三	一五・三四	一八〇〇	七〇四	六〇五	二七〇〇	一〇〇〇	八・二
〇・二八同	二〇七同	三〇三同	一五・三四同	一八〇〇同	七〇四同	六〇五同	二七〇〇同	一〇〇〇同	八・二同

同

一部改修

路線	等級	幅員	總距離	著手中	竣工	進工	摘	要
京川線	-	同	漢江架橋長 三五〇〇〇	里町	里町	里町	九・三	大正六年十月竣工の豫定
總計			六八五・〇〇 三五〇・〇〇	二七〇・六	六三七・〇七	六六四・一三	九・七	進工程度は豫定總距離に對する竣工距離の歩合なり

改修道路

大正六年六月末日

路線	所在廳名	幅員	總距離	工費	竣工年月	摘要
水原利川間	京畿道	三町	一・二・二八	一七八・二一三	明治四十三年十月	
利川長湖院間	同	四町	七・〇七	一一二・八九八	大正二年八月	
京城利川間	同	四町	一五・二四	二一七・四七二	同 三年十一月	
仁川市街	同	三町	〇・〇五	二六・五八三	明治四十三年六月	
京城市街	同	三町	一・二八	七二〇・一六三	大正二年十月	
京城春川間	江原道	三町	二・二〇〇	八九・九六三	同 四年三月	局部改修

第四章 交通

利川	京城	元山	清州	清州	陰城	忠州	公州	公州	天安	公州	天安	公州	平壤	鎮南浦	新安州	平壤
江陵間	元山間	長箭間	鳥致院間	陰城間	忠州間	長湖院間	小井里間	溫泉里間	論山間	洪州間	鳥致院間	鎮南浦間	廣梁浦間	寧邊間	元山間	
江原鐵道	江原鐵道	咸鏡南道	咸鏡南道	忠清北道	忠清北道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	同	同	同	平安南道	同	平安南道	平安南道	咸鏡南道
三	四	三	三	三	三	四	三	三	三	三	三	三	三	二	二	四
四八・一八	五七・〇〇	二七・〇〇	四・二二	一〇・二二	七・一一	八・〇二	八・二九	三・二八	八・一五	一五・三四	六・一八	一三・〇四	三・二〇	七・三五	五・六七	五・二七
六四二、八六〇	二七、一九六	三七、三九一	三六、〇〇〇	一三九、四六三	六八、六四六	五一、〇八〇	一二四、三二〇	二四、〇〇〇	八一、八七五	二九、九八四	四一、八〇六	四八五、三七〇	二八、三三二	一〇六、八一四	一、〇二〇	二五四
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
六年九月	三年十月	四月十月	明治四十五年三月	大正二年五月	同	同	明治四十三年七月	同	大正二年十二月	同	同	明治四十四年十一月	同	同	同	同
內四里二十一町鐵切	局部改修	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

路線	所在廳名	幅員	總距離	工費	竣功年月	摘要
安州滿浦鎮間	平安北道	同	五〇・〇一 里町	八九五、四七一 円	大正七年三月	九果滿浦鎮間を 除く
新義州麻田洞間	同	二・八	〇・一三	四、二八四	明治四十一年十一月	
孟中里雲山間	同	三	六・〇五	三六、六一二	大正四年八月	
永興柳島間	咸鏡南道	二・五	五・一一	四八、〇〇〇	明治四十四年十一月	
咸興西湖津間	同	三	三・二五	五二、六一一	同 四十五年三月	
西天臺咸興津間	同	二・五	四・〇〇	五二、六九三	同	
北青城津間	咸鏡北道	四	一五・二二	二八一、八六八	大正四年十月	端川居山間を 除く
新浦惠山鎮間	咸鏡南道	三	二五・〇五	五〇九、三四六	同 七年三月	
城津甲山間	咸鏡北道	三	一七・〇三	一五三、六三七	同 五年十一月	局部改修
清津鏡城間	咸鏡北道	二・八	五・一五	六二、五〇〇	明治四十三年十一月	
蒼坪全巨離間	同	二・八	一・二八	二九、五七三	同 四十四年八月	
清津會寧間	同	四	二二・二二	四一〇、六六五	大正二年十月	
雄基慶興間	同	四	九・二七	一三五、一三七	同 年十一月	
會寧行營間	同	四	五・三〇	八九、九五四	同	
行營穩城間	同	四	一四・二八	一四二、五〇七	同 四年十二月	

第四章 交通

黃州	海州	木浦	河東	晉州	尙州	尙州	大邱	大邱	慶州	大邱	大邱	海南	順天	筏橋	全州	群山
同停車場間	龍塘浦間	光州間	院田間	馬山間	晉州間	忠州間	尙州間	漆谷間	浦項間	慶州間	市街	河東間	麗水間	海倉間	順天間	全州間
同	黃海道	全羅南道	同	慶尙南道	慶尙北道	忠清北道	同	同	同	同	慶尙北道	全羅南道	同	全羅南道	全羅北道	全羅北道
二・八	二・八	三・三	三	二・八	三	四	四	四	二・二	三・三	六	二・二	三	二・二	三	三・九
〇・二八	一・二一	二・〇五	七・二五	一八・〇二	四七・〇九	一七・一五	一八・〇〇	一・〇四	七・二三	一八・〇三	〇・二四	四一・二八	八・〇〇	〇・三二	三三・三〇	一四・一二
一〇・七三八	二七・九一九	四三七・三一四	八二・七三九	三四一・四五七	五二四・九二六	三一〇・一八三	四二・七三六	一一・一一〇	六〇〇・〇〇	三三七・七四五	一九・九四九	一七六・五九七	三五・九二四	二・四〇三	三五一・一一九	二六九・一七五
同	同	明治四十三年十二月	大正三年三月	明治四十四年三月	同	同	大正六年三月	同	同	同	同	明治四十四年二月	大正四年一月	明治四十三年九月	大正二年九月	明治四十四年二月
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

路		線		所在廳名	幅員	總距離	工費	竣功年月	摘要
沙里院	載	寧間	黃海道	同	三	四・二九里町	四八、〇〇〇円	大正元年十二月	
海州	載	寧間	同	三	一三・三〇	一九四、八七五	同	二年三月	
輸城	茂	山間	咸鏡北道	三	一四・〇〇	二〇三、五四一	同	四年八月	
行營	慶	興間	同	三	七・〇四	一〇七、三〇三	同	五年九月	局部改修
城津	吉	州間	同	四	一〇・〇〇	一〇、一三三	同	三年十一月	同
論山	全州	州間	全羅北道	四	二・〇七	一一、九五六	同	五年六月	一部
水原	小井里	間	忠清南道	四	三・〇三	一一、七三七	同	五年十一月	同
漢城	仁川	統洞	京畿道	格黎長	三・五〇	八六四、〇〇〇	同	六年十月	未成工

本表路線の總里數は八百八十九里三十三町にして内、竣功距離八百四十五里十三町なり

國庫補助工事道路改修

大正六年三月末日

道		改修		里數		計		工費	
京畿道	二八・〇三	等	一二	等	三等其の他	合計	總額	內國庫補助額	費
	里町			里町	里町	里町	円	円	円
	三・〇六			一九・二三	五〇・三二	三三三、八三六	二四四、〇九四		

第三節 港灣

忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	總計
七・一九	一四・三三	一五・一一	一六・三〇	二六・〇七	三二・二〇	五六・二五	五七・三〇	四六・三五	一七・二三	六・三〇	七・〇三	七五・一四
二二・二八	一一・一八	二〇・三一	三二・二四	四・一七	二四・一八	—	一・二七	七・二〇	〇・三五	一・〇七	一三・二〇	一一・二六
二〇・一一	二二・二〇	四一・二七	二〇・一八	三二・二一	五八・二一	五六・二五	五九・三五	五四・一九	二六・二六	八・〇一	二五・〇六	四七八・一〇
一〇九、二七一	一八六、七一六	一六六、〇六〇	二〇六、一三五	三八五、七四四	三一七、三二五	二一八、九六三	二三四、二四〇	一五五、七四七	一一七、二六一	一四一、七九八	六六、三六九	二、六二九、四六五
七五、五〇〇	一二六、八〇〇	一〇二、五四六	一一二、一九八	一八四、〇四三	一七六、〇五〇	一三八、八〇〇	一三九、八七五	一〇七、〇〇〇	九〇、〇〇〇	九四、五八三	五六、〇四七	一、六五七、五三六

朝鮮に於ける各開港場の港灣設備は從來人工を加へたるもの極めて少くして僅に天然の地形を利用

せるに過ぎざりしか此くては今日文明發展の趨勢に應し難きを以て海陸聯絡設備計畫を立て明治三十九年以來工事に著手し併合の際に於て更に必要に應し設備擴張を計畫せるものあり即ち明治四十四年度以降大正七年度に至る八箇年繼續事業に屬する海關工事費は八百二十七萬千八百二十九圓にして釜山、仁川、鎮南浦、平壤の四港に對する海陸聯絡設備なりとす尙大正四年度に於て元山港海陸聯絡設備を計畫し工事費を百五十六萬圓とし大正四年度以降大正八年度に至る五箇年繼續事業と爲したるを以て海關工事費の總額は九百八十三萬千八百二十九圓となれり今其の工事の功程を掲ぐれば左の如し

		海關工事豫算及功程	
種別	豫算總額	功程	竣功豫定年度
釜山港工事	三、八二四、〇六〇 <small>円</small>	九步六厘	大正六年度
仁川港工事	三、四八三、三九四	八步三厘	同 七年度

元山港工事	一、五六〇、〇〇〇	三	同	八	度
鎮南浦港工事	八三五、〇〇〇	大正四年三月竣功	同		
平壤港工事	一二九、三七五	同 三年三月竣功	同		
總計	九、八三一、八二九				

第四節 鐵道

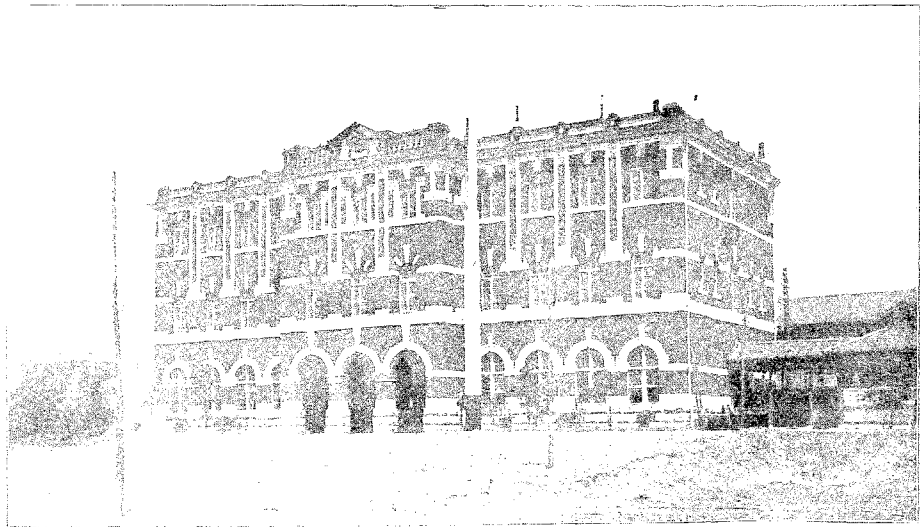
明治三十四年始めて京釜鐵道起工せられ同三十九年京義線竣成す此の二大線は合して一幹線と成り半島を縦貫し南端釜山より起り北端新義州に到り鴨綠江を渡り支那安東に達す全延長五百九十二哩一分あり湖南線は京釜線大田より起り木浦に達する幹線と裡里より分岐して群山に到るの支線より成り其の延長百七十六哩京元線は京釜線龍山より分岐して元山に達する延長百三十八哩四分又咸鏡線は京元線元山に起り會寧に至るものにして已に開業せるもの元山永興間延長三十三哩九分及清津會寧間五十八哩一分あり其の他支線中永登浦より岐れて仁川に至るものを京仁線、三浪津より馬山に達するものを馬山線、平壤より鎮南浦に至るものを平南線、平壤より寺洞に向ふものを平壤炭續線、黃州より兼二浦に達するものを兼二浦線とす如斯にして今や全線延長實に一千七十六哩六分を算

するに至れり

軌條の幅員は本線支線共何れも四呎八吋半の廣軌にして車輛は「ボギー」式を用ひ客車は廣濶壯麗貨車亦長大にして一輛克く二十六噸を搭載し得べく主要列車には食堂車寢臺車を連結し殊に鮮滿直通列車は歐米に譲らざる優良なる車輛を以て編成せり而して南は釜山より關釜間連絡船に由り一日二回内地との連絡を保ち北は國境鴨綠江の橋梁に由り南滿洲鐵道に直通し釜山安東間二回急行列車の外釜山長春間に一週一回の直通急行列車を運轉し以て内鮮滿を聯絡し歐亞大陸交通上至大の利便を供しつつあり

大正二年五月より東清及烏蘇里鐵道主要驛に旅客手荷物の聯絡運輸を開始し次て日支旅客、手荷物聯絡は同年十月日滿貨物聯絡は大正三年一月又日滿露旅客及手荷物聯絡運輸は大正三年十一月より實施せり更に日支旅客及手荷物の聯絡運輸は京奉鐵道の外新に京綏、京漢、津浦、滬寧、滬杭甬の各鐵道に擴張し尙西比利亞經由國際交通も亦近く之を開始するの豫定なり

一般旅客の旅行に便する爲大正二年より釜山、新義州停車場樓上に洋式の旅館を設け京城に亦大規



新 義 州 停 車 場

横なる旅館即ち朝鮮ホテルを建設し大正三年十月より營業を開始せり尙金剛山探勝客の便を圖り
麓温井里に洋式旅館を設け毎年夏期より秋期に互り營業を爲すこゝとし大正四年より之を實施せり
附記 鴨綠江の架橋は總延長三千九十八呎にして朝鮮側より二百呎六連三百呎六連の鋼桁を架し
支那側に達するものにして明治四十二年八月起工し四十四年五月橋臺橋脚を竣成し同年十月に橋
桁工事の建設を終へたり該橋梁は朝鮮側より第九連の梁を開閉式と爲し船舶の航行に便ならしめ
又橋梁の兩側に幅八呎宛の歩行道を設け通行の用に供せしむ尙各桁の最下端は平時満潮水面上二
十五呎干潮水面上三十八呎なるを以て普通の船舶は優に橋梁の下を通過するを得へし橋脚は河中
に潜水函を沈下し以て基礎工事を施したるものなり

左に朝鮮鐵道の狀況を表示すへし

鐵道線路

大正六年十月一日

總計	線路		區間		哩程	摘要
	線	路	區	間		
	京釜線	本 仁 線	西大門(京城)	釜山	二八一・二	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	馬山仁線	馬山仁線	永登浦	仁川	一八・四	
	兼二浦線	兼二浦線	龍山	馬山	二四・八	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	京義線	平壤炭鐵線	平壤	兼二浦	三一〇・九	
	京義線	平壤炭鐵線	平壤	鎮南浦	八・二	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	京義線	新義州荷扱所線	新義州	寺洞	三四・三	
	京元線	龍山	龍山	元山	六・七	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	湖南線	大田	大田	木浦	一・一	
	咸鏡線	群山	元里	群山	一三八・四	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	咸鏡線	清津	清津	永興	一六一・七	
	咸鏡線	元山	元山	永興	一四・三	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	咸鏡線	豐山	豐山	豐山	三三・九	
	咸鏡線	豐山	豐山	豐山	四二・七	旅客のみを取扱ふ 貨物のみを取扱ふ
	咸鏡線	豐山	豐山	豐山	一〇七六・六	

鐵道營業成績

大正五年度

線路	旅客人員	旅客延程	小手荷物	貨物噸數	貨物延噸	運輸收入
京釜線	二,九三〇,三〇〇人	一〇一,〇三五,五〇〇人哩	一七,二九八,八六三斤	一,〇六三,四七〇噸	二七,七〇六,〇七八哩	四,一九九,八八九円
京義線	一,五七〇,四〇二	五九,〇二九,五六八	五,五五〇,六四三	八五六,五三三	一七,七五三,六九八	三,〇七四,一一五
京元線	三九八,八九七	一五,四五一,八三六	一,四四九,一三一	一七三,七三八	一五,二二五,六七三	六,五七〇,〇〇〇
湖南線	七〇一,四二七	一七,五七一,四八八	二,三三四,七五三	三二六,二四八	一一,三六六,九六七	六,七五二,五九九
咸鏡線	二天,八五五	二,一五二,一七六	一三〇,六八九	四三,九九二	一,〇七二,四〇二	七四,五五三
總計	五,三八八,八七一	一九五,二八〇,七八八	一八,六〇四,八九二	一,八九六,八八八	二二,三二七,八六一	八,六八〇,八三五

本表各線の計數を積算して尙總計に於て不足を見るは二線以上に互りて輸送せしものは之を各線別に計上せしも總計に於ては其の輸送せし貨數を掲上し各線に於て重複せし數を控除したるに由る

鐵道營業成績平均

年 度	一 日 平 均		一 哩 平 均		一 哩 一 日 平 均					
	旅 客 人	小 手 荷 物 斤 數	旅 客 人	貨 物 噸 數	旅 客 人	貨 物 噸 數				
大 正 元 年 度	三,四七七	三,四一八三	三,一五四	一六,六〇〇	二〇,五五八	二,五七六	七,二四七	五,六三	三,四五	一,九八六
同 二 年 度	一,四七五七	三,九八五九	四,〇五二	一八,五三三	一,九〇,六二七	一,五五,四七一	六,九六九	五,三三	三,七二	一,九〇九
同 三 年 度	一,三,一六八	四,〇,一七四	三,八二九	一七,七三三	一,六九,三三四	一,四一,七五四	六,五〇七	四,六四	三,八八	一,七八三
同 四 年 度	一,三,八八八	四,四,九七八	四,五四五	二〇,〇七六	一,八六,七七五	一,七九,五三三	七,三〇二	五,一〇	四,九二	一,九九五
同 五 年 度	一,四,九五三	五,二,六〇一	五,三六三	二四,五四三	一,八九,一〇七	二,七三,七〇一	八,四〇二	五,一八	七,五〇	三,一〇一

第五節 海 事

(イ)船舶 船舶の朝鮮置籍か内地又は關東州に置籍するよりも有利なるよりして船舶業者の大型汽船を朝鮮に置籍する者多かりしか歐洲戰亂の影響を受けたる爲か此一二年間に於て著しき増加を見す今最近に於ける船舶數を表示すれば左の如し

船舶現在數

大正六年六月末日

種別	汽船		帆船		合計	
	數	總噸數	數	總噸數	數	總噸數
朝鮮に船籍港を有するもの	七九	四二、三五九	二六七	七、六六一	三四六	五〇、〇二〇
	七三	七二六	五、〇七五	四九、六四八	五、一四八	五〇、三七四
内地に船籍港を有し朝鮮沿岸のみを航行するもの	一三	八二四	二	八五	一五	九〇九
	一〇	一二五	?	?	一〇	一二五
總計	一七五	四四、〇三四	五、三四四	五七、三九四	五、五一九	一〇一、四二八
朝鮮に船籍港を有する不登簿帆船數は	大正五年十二月末日現在なり					

(ロ) 船燈、信號器、救命具 船燈は從來朝鮮内に其の製造業者なく悉く内地製品に仰ぐの結果高價に苦しみしか大正四年十二月免許せられたる仁川に於ける碇船燈及乙種兩色燈の製造者は其の製品を比較的廉價に市場に供給して相當の成績を挙げつつあるは航海業者にさりても亦至倖と爲すべし

今朝鮮に於ける船燈、信號器、救命具の製造免許及請賣認可を得たる種別及人員を掲ぐれば左の如し

船燈、信號器、救命具製造及請賣人員

大正六年六月末日

種別	製造免許人員	請賣認可人員	種別	製造免許人員	請賣認可人員
船燈	—	—	救命具	—	—
信號器	—	—	總計	—	—
				一九	一二
				一二	四三

(ハ) 船員

船員現在數

大正六年六月末日

種別	内地人		朝鮮人		外國人		合計	種別	内地人		朝鮮人		外國人		合計
	人	人	人	人	人	人			人	人	人	人	人	人	
朝鮮にて手帖を交付したる者	五三九	八二七	—	—	—	—	—	手帖を受有せざる者	四八四	七六	—	—	—	—	—
	九八六	五七	—	—	—	—	—		二、〇〇九	九六〇	三〇	—	—	—	—
内地交付の手帖を受有する者	—	—	—	—	—	—	—	總計	—	—	—	—	—	—	—
									一、三九六	一、〇四三	—	—	—	—	—
									二、〇〇九	九六〇	三〇	—	—	—	—
									二、九六〇	二、九六〇	—	—	—	—	—

(二) 船舶職員

一、海技免狀受有者の現在数を示せば左の如し

海技免狀受有者

大正六年三月末日

種別	朝鮮にて登録のもの		内地にて登録のもの		合計
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	
甲板部	二七四	二二	一九四	一	四九〇
機關部	六九	一一	一三七	三	二二〇
總計	三四三	三三	三三一	四	七一〇

二、船舶職員試験

大正五年七月より同六年六月に至る間に於て朝鮮船舶職員定期試験を釜山に

於て三回、仁川三回、同臨時試験鎮南浦二回、及木浦一回合計九回執行し受験者總數三百二十

人中二百十七人の合格者を出せり

(ホ)水先人 大正四年十月朝鮮水先令施行以來同令附則第二項に依り水先人名簿に登録を経水先人

として従業せる者を掲ぐれば左の如し

水先免狀受有者

大正六年六月末日

水先區	人員	水先區	人員
釜山水先區	一	鴨綠江水先區	三
仁川山水先區	一	總計	七
群山水先區	三		

仁川水先區の分は釜山水先區水先人にして其の免狀を併有せるものなり

(一)海員審判

海員審判所取扱件數及人員		自大正五年七月一日 至同六年六月三十日	
種別	裁		決
	衝突	三	
乘揚	二	汽機損傷	三
顛覆	一	汽罐損傷	二
沈没	一	義務違背	二
火災	一	計	一五
		未決	三
件數		合計	一〇

本表の外理事官に於て審判不要として處理したるもの四十二件四十二人あり

人員	三	三	一	一	一	三	二	二	一六	二	四	三三
----	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	----

(ト)定期航路 大正六年六月末現在航路は(一)朝鮮内に限るもの (二)内地を起點として朝鮮に往來するもの (三)内地を起點として朝鮮を經由し外國に到るもの (四)朝鮮を起點として内地又は外國に到るもの (五)外國を起點として朝鮮に來るものの五種にして朝鮮總督府命令に依るものは(一)種又は(四)種の内に屬す別に鐵道院の經營及福岡縣命令に依る(二)種陸軍省特種命令に依る(二)種遞信省命令及長崎縣命令に依る(三)種及關東都督府命令に依る(五)種の航路あり又補助命令に依らず自營を以て定期航海を爲すもの等あり今之等の航路に配在せる船舶の大勢を示せば

(一)に屬するもの 一八五艘 五、九八七噸 (四)に屬するもの 五艘 四、一六八噸
 (二)に屬するもの 一九艘 二六、六六九噸 (五)に屬するもの 四艘 四、一五四噸
 (三)に屬するもの 八艘 一四、九八八噸 總計 一二二艘 五五、九六六噸

近海及沿岸を航行するもの

總計	合計	自營計	命令(官營を含む)	一	一	一	一	二	三	四	五	六	
				二四	一	一	一	二	三	四	五	六	
				三五、七四一	四八一	五二四	一、三八〇	一、八九九	二、二九三	六、三九二	五、三九四	四、一六八	一三、二一〇

一、朝鮮沿岸(河川を含む)のみを航行するもの

鐵道院	朝鮮郵船株式會社	大阪商船株式會社	日本郵船株式會社	大連汽船株式會社	株式會社互光商會	阿波國共同汽船株式會社	對馬運輸株式會社	淺見	大阪商船株式會社	尼崎汽船部	日本郵船株式會社
-----	----------	----------	----------	----------	----------	-------------	----------	----	----------	-------	----------

種別	線路	寄航港	航海 度數	船名 總噸數	經營者
朝鮮總督 府命令	元山雄基線 <small>（底）月四五回 （往）往航寄 （還）ナ航ア （長）ニ長 （蓄）ニ長</small>	西湖津、前津、新浦、新昌、遮 湖、端川、城津、泗浦、大良化、 漁大津、獨津、清津、梨津、西 水羅、退潮、執三里、陸臺、厚湖、 乾自浦、群仙、沙飛津、日 新、梁浦、德葛、麻浦、明川、 郡浦、項、黃津、五常津、接 王津、集三、連津、龍濟、榆 津に臨時寄港	月回 六 鐘	城城丸 丸丸 三七三 三七三	朝鮮郵船株式會社
自營	同	同上 隨時途中寄港	四	三浦丸	三六三同
同	元山清津線	隨時途中寄港 雄基、西水羅に隨時延長	四	千代丸	九九本岡卯之吉
同	同	西湖津、新浦、新昌、遮湖、端 川、城津、泗浦、大良化、獨津	四	新庄丸	一六八田口回漕店
同	釜山元山線	浦項、盈德、竹邊、三陟、江陵 襄陽、杆城、長箭、庫底	三	慶寶丸	一七七朝鮮郵船株式會社

第四章 交通

同	同	同	同	自營	同	朝鮮總督府命令
洛東江内 龜浦仙巖線	同 釜山金海線	洛東江行 釜山龜浦線	同	釜山牧島線	釜山浦項線	釜山鬱陵島 (道洞)線
					蔚山、方魚津、甘浦、九龍浦 海雲臺、大邊に臨時寄港	浦項、盈德(江口)、寧海(大津)、平海、竹邊、鬱陵島臺霞 洞(月二回寄港) 甘浦、九龍浦、丑山浦に臨時寄港
數日	一五	日航	同	一時間 四	日發	五盈德丸
回	同	富士江丸	第一島丸 第二島丸 第二木下丸 第一玉成丸 第二玉成丸	富士江丸	江陽丸	
七八	一〇	一〇	八八	八	一八六	二四〇
田中兼次郎	竹内貞三	同	同 人外五名	釜山 田中若太郎	同	同

種別	線路	寄航港	航海		船名	總噸數	經營者
			度數	回			
自營	釜山馬山線 (曳船用)	加德、熊川、鎮海	日	四回	鳥羽丸	四七噸	釜山兄弟商會
同	馬山鎮海線	飛鳳里	三日	一回	第一鎮海丸	一六噸	澤山喜多路
同	釜山統營線	行巖、舊馬山、新馬山、塘洞、 城浦、加德、熊川、實里島に臨時寄港	日	發	榮城丸	六三 五七	釜統汽船組合
同	釜山筏橋線	統營、麗水	五	隆	榮丸	五三噸	金谷一二
同	同	麗水 統營に臨時寄港	五	三	榮丸	四〇噸	澤山兄弟商會
朝鮮總督府命令	釜山麗水線	行巖(縣洞)、舊馬山、新馬山 統營、三千浦、船津、辰橋、露 梁津、下浦 河東に臨時寄港	日	發	海州丸 統營丸 巨濟丸	二五七 一八二 一五二	朝鮮郵船株式會社

朝鮮總督府命令線	自營同	同	同
木浦濟州島	同	木浦麗水線	釜山濟州島線
<p>東廻及西廻 所安島、港門島、山地、朝天、金寧、城山浦、表善里、西歸浦、摩羅島、慕慈浦、狹才里、翰林、楸子島、島</p> <p>右の内港門島、摩羅島は月二回寄港</p> <p>巨次島、涯月里に臨時寄港</p>	<p>右水營、莞島、青山島、長興、興陽、羅老島</p>	<p>右水營、莞島、長興、興陽、羅老島</p> <p>古今島德洞、青山島二臨時寄港</p>	<p>長承浦(巨濟島)、麗水、巨文島、城山浦、金寧、朝天、山地、翰林、狹才里、慕慈浦、西歸浦、表善里</p> <p>彌助島、涯月里に臨時寄港</p>
四	一〇	一〇	五
慶興丸	南陽丸	順天丸	五昌平丸
一九九	八五	一〇五	三二
同	同	同	同

別線	寄航港	航海度數	使用船舶名	總噸數	經營者
朝鮮總督府令	木浦多島海 (黑山島)線	月回 三度	興丸	一九九噸	朝鮮郵船株式會社
自營	莞島 荊花線 島 金日島線 新智島、古金島 荊花島線 青山島、所安島	各 一五	第一明神丸	三合	莞島巡航船運輸組
同	木浦海南 (貢稅浦)線	日	第一海南丸	二四	海南運輸株式會社
同	木浦靈巖線 (前線接續)	同	正福丸	一六	海倉里 靈巖共運社 同漕部
同	木浦西倉線	同	喜久丸	二	木浦 玉置喜一郎
同	木浦珍島線	一五	第七號 蛭子丸	三三	三木市藏
同	群山龍塘線	日回	盛航丸 錦江丸	一〇 五	群山 橋本 央

第四章 交通

同	朝鮮總督府命令	仁川海州 (龍塘浦)線	江華島、喬桐島 延平島に臨時寄港	日發 (三十一日休)	全錦 江州丸	九二 六一	同
同	朝鮮總督府命令	仁川本浦線	安眠島、大旺燈島に臨時寄港	六麗	晉州丸	一六四 一六〇	朝鮮郵船株式會社
同	同	仁川甲串線	舊島、安興、鰲川、群山、於青島、末島、古群山島、蠟島、苗浦、法聖浦、鞍馬島、荏子島、智島	同	第二臨津丸	七高	橋勝之
同	同	仁川舊島線	舊島、安興、鰲川、群山、於青島、末島、古群山島、蠟島、苗浦、法聖浦、鞍馬島、荏子島、智島	日航	薩摩丸	二五	同
同	同	仁川仙掌線	漢津、富里浦	三安	城丸	三九	仁川中作二

種別	線路	寄航港	航海 度數	使用船名	總噸數	經營者
朝鮮總督 府命令	仁川鎮南浦 線	海州、龍湖島、釜津、小靑島 (月)航海寄港、湖浦九味 浦、德洞、夢金浦 白翎島に臨時寄港	月 回	宗信丸	二〇三 噸	朝鮮郵船株式會社
自營	鎮南浦北倉 線	猪島	日 航	第二明王丸	一〇	鎮南浦 岩本直太郎
同	鎮南浦新換 浦線	石浦 外岩浦外六箇所に臨時寄 航	同	第二大同丸	八	鎮南浦汽船合資會 社
同	鎮南浦今卜 線	營串津ニ臨時寄航	二日 回	第一大同丸	八	同
同	鎮南浦兼二 浦線	外岩浦ニ臨時寄航	一五 常	盤丸	二四	同
朝鮮總督 府命令	鎮南浦江線 津	載寧線 外岩浦、東倉河口、石海、 舟踰、壽易浦、海昌 津江浦線 猪島、今卜、席島、金山浦、 椒島(月五回以上寄航)	各 一五 常	櫻保丸	三八 三一 二四 同	同

廣梁灣に臨時寄航

同		
新義州中江 鎮江界線		
北下洞、義州、清城鎮、九寧 浦、安哥浦、甲岩里、昌城、私 倉里、大吉里、碧潼、忠滿江 口、楚山(新島場)東川里、直 洞、渭原、舊邑、江界江口(以 上兩線)	新義州ヨリ 高瀨舟	
高山鎮、伐登鎮、滿浦鎮、文 岳里、舊城洞、慈城江口、 土城里(以上中江鎮線)	楚山迄 碧潼迄 私倉里迄 子(三箇月間)	一 二 二 四
支那側 安東縣、長甸河口、蒲石河口 外察溝、通溝、帽兒山	渭原舊邑迄 滿浦鎮迄 慈城江口迄 中江鎮迄	一 一 四 五 九 三 五 高瀨舟 三艘 一〇〇艘
		新義州 高羽秀吉

二、朝鮮を起點として内地又は外國に到るもの、内地又は外國を起點として朝鮮に來るもの及朝鮮を經由して外國に到るもの

種別	線路	寄航港	航海度數	使用船舶名	總噸數	經營者
朝鮮總督府命令	雄基門司線	朝鮮側一其の他	月回	京畿丸 忠清丸 （以上元山寄） 咸鏡丸 柳川丸	九九四 七一九 七五〇 五七八	朝鮮郵船株式會社
同	元山浦鹽斯 德線	清津、獨津、漁大津、泗浦、城津、瑞川、遮湖、新昌、新浦、前津、西湖津、元山、長箭、杆城、襄陽、江陵、三陟、竹邊、丑山浦、浦項、蔚山、釜山、西水羅、榆津、梨津、龍洛、連津、集三、接王津、五常津、大良化、黃津、明川郡、浦項、葛麻浦、梁浦、德、日新、沙飛津、群仙、乾自浦、厚湖、陸奎、執三里、庫底、高城、五里津、束津、水山、津、南涯津、安木、金津、墨湖津、臨時寄港	城津、清津	三平壤丸	二、二七同	同
自營	仁川芝罘線 （休就中相し） （七月下旬より開始）	大連、青島	三平原丸	七三三同	同	同

第四章 交通

自營	同	陸軍省特 殊命令	福岡縣	官營
大阪群山線	大阪清津線	神戸清津線	博多釜山線	關釜連絡線
釜山、馬山(往) 航のみ月一回 寄港)木浦	釜山、元山、西 湖津(往航又 は復航寄港 以下同し)新 浦、城津	釜山、元山、西 湖津(往航又 は復航寄港以 下同し)、新浦 城津	月二回鎮海寄 港	
神戸、門司又 は下關	神戸、宇品、門 司	大阪、宇品(往 航寄港)門司	嚴原、佐須奈	
		年		日
七天 信濃川丸	四宮須安 島磨平丸	一八第三悲平丸	五天 天真丸	二 △壹對新高 御岐馬羅麗 嶽丸丸丸丸丸
七九三 六四〇	一、六〇四 一、五三七 一、五二九	一、八九九	五二四	三、〇五八 三、〇二八 三、〇三三 一、六〇二 一、六〇〇 八九〇
同	大阪商船株式會社	株式會社互光商會	嚴原 對馬運輸株式會社	鐵道院

種別	線路	寄航	朝鮮側	航	其の他	港	航海	使用	船名	總噸數	經營者
自營	大阪仁川線	釜山、木浦、群山	仁川(復航は月二回寄港)	荷客の都合により安東縣へ延航	神戸、門司	神戸、門司	八回	神代丸、吉丸、秀丸、大丸、君代丸	九七三、七〇八、六五二、六五一	尼崎汽船部	
同	大阪鎮南浦線	仁川(復航は月二回寄港)	荷客の都合により安東縣へ延航	神戸、門司	神戸、門司	五回	南頭丸、油丸	九九〇、九五九	大阪商船株式會社		
關東都督府命令	大連芝罘仁川線						四回	第二十一丸、共同丸	一、三八〇	阿波國共同汽船株式會社	
同	大連芝罘安東縣線						四回	第二十五丸、永田丸	四八一	淺見亮	
同	大連安東縣天津線						六回	天潮丸、濟通丸	二、二六一、一、〇三三	大連汽船株式會社	

命 遞 信 省 令	自 營	命 長 崎 縣 令	自 營
橫濱牛莊線	橫濱大連線 (七月以 降休)	長崎大連線	神戸浦鹽線
往航 仁川	群山(往航寄 南浦、仁川、鎮)	釜山、木浦、群 山(往復寄港) 仁川、鎮、南浦	釜山、元山、清 津(臨時略す るこあり) 城津に臨時 寄港
又(往 天津) 航寄港)	往航 名古屋、大阪 又(往神戶、門 司)	伊萬里(往航 寄港)、郷浦、 嚴原 長崎碇泊中 臨時若津へ 延航するこ あり	大阪、門司
四日市又は名 古屋(往航寄 神戶、大沽、約 司、大連、天津)	三 福 漳 州 州	二 安 東 丸	三 立 神 和 歌 浦 丸 二、四八四 三、四〇三
三 高 相 三 砂 模 河 丸 丸 丸 一、八三三 一、八三三 一、六七三	丸 丸 一、五三一 一、四五五	七 二 四 大阪商船株式會社	二、四八四 三、四〇三 日本郵船株式會社
日本郵船株式會社	同		

大連芝罘安東縣線及大連安東縣天津線は純然たる朝鮮航路とは認め難きも事實朝鮮側にも關係を有するを以て便宜之を掲上せり
 △印は貨物船なり

(チ)朝鮮總督府命令航路 大正五年度に於ける朝鮮近海及沿岸命令航路の業務成績を掲ぐれば左の如し

朝鮮總督府命令航路業務成績		大正五年度					
受命者	航路	使用船數	總噸數	航海度數	航海延遲數	搭載貨物	乗客人員
朝鮮郵船株式會社	朝鮮近海航路	二三	八、〇五一	一、七一五	六二〇、五九〇	二七二、四六九	二二四、二九〇
	大連同江航路	三	九四	二六九	二一、六五二	六四七	四、六二八
高羽秀吉	大連同江航路	一一一	一、〇〇〇	一八二	四九、二七八	一三、七四三	一、一八〇
	大連同江航路	一五七	九、一四五	二、一六六	六九一、五二〇	二八六、八五九	二二〇、〇九八
總計							

本表使用船數及總噸數は大正六年三月末日現在なり

(リ)航路標識 朝鮮に於ける航路標識は明治三十六年以降漸次建設したるものにして最近五箇年間の比較を表示すれば左の如し

年 度	燈 標				標		霧 警 號		合 計	
	燈臺	燈竿	導燈	柱燈立標 柱燈浮標	立標	導標	浮標	霧筒 霧砲		
大正元年度末	四七	—	—	一三	一三	四〇	六六	一五	二	二〇九
同 二年度末	五〇	—	—	一四	一一	四一	六八	一五	二	二一五
同 三年度末	五二	—	—	一四	二二	三三	六七	一五	二	二一八
同 四年度末	五三	—	—	一五	二二	三三	六八	一五	二	二二三
同 五年度末	五六	—	—	一六	二二	三三	六八	一五	三	二二八

本表導標中には灣標及量水標を含む

第六節 江 運

漢江、洛東江、大同江、豆滿江、鴨綠江は朝鮮の五大江と稱し何れも多少舟楫の便を有せざるなく其の他錦江、臨津江亦交通の便を有す然れども朝鮮人は從來造船の術に拙劣にして構造粗笨加ふるに鐵釘を用ぬざるを以て頗る脆弱を免れず殊に操縦遲鈍にして水運を利するの技に拙なりし爲に天與の江河も空しく拋棄して有益に利用すること尠く漸く小舟筏に據りて運輸に資するに過ぎざりき左に主要なる江河運輸の概況を述ふへし

(イ)漢江 黃海に注ぐ一大河なり源を江原、咸鏡兩道の境なる鐵嶺に發する北漢江及江原、忠北兩道の境上小白山脈に發する南漢江は河口を距る三十里なる高安附近に於て相合し一大江流を成し河口に到りて又臨津江、禮成江と相合す流勢概ね緩漫にして水深く且清し流域各地に形勝の地多く又都邑少からず河口より龍山に到る十七里の間克く小蒸汽船を航行すへし龍山より上流南江の沿岸北倉に至る三十八里の間五六十石の河舟を通すへく北倉より上流永春に到る十六里の間及南北兩江の合流點より北江の上流春川に到る間は尙小舟を溯航せしむへし沿岸の都邑華川、春川、高安(以上北漢江)、永春、丹陽、北倉、彈琴臺、驪州、楊平(以上南漢江)、蘓島、龍山、麻浦、楊



橋 江 漢

花津等は貨物の運搬頻繁なり殊に龍山は古來雞林八道貢米の集積地として知られ漢江上流の木材の舟筏に據りて陸揚せらるるもの毎年十數萬圓に及へり冬時結氷期に際しては江流梗塞して舟筏を遣るに由なく河水凍結氷上人馬の往來するを見る

(ロ)臨津江 河口に於て漢江と合して黃海に注ぐ江流大ならざるか故に水運の利少なきも潮汐を利用せば克く十四五里を溯航し得へし沿岸都邑の主なるものを汶山浦(河口より八里の上流に在り)、高浪津、砂浪里、朔寧、伊川等とす就中汶山浦は京畿道北部に於ける著名の貨物集産地にして高浪津は大豆の産出を以て名あり

(ハ)錦江 亦黃海に注ぐ大河にして源を全羅、慶尙兩道の境なる六十嶺の西麓に發し流路延長百里に及ぶ河口群山浦附近は幅員十二町餘を有し約二千噸の汽船を碇泊せしむへし沿岸都邑の主なるものを美江、公州、窺岩、江景、群山等と爲す殊に江流の兩岸は沃野相連り米、大豆、麥、棉花等農作物に富むを以て舟楫の往來頻繁なり

(ニ)洛東江 半島の南岸朝鮮海峡に注ぐ大江にして源を太白山脈に發し有直嶺、蔚時嶺等より發す

る諸水を集め安東郡に出て大邱の西を走り三浪津を経て河口數脈に岐れ釜山に近く多太浦の西に注ぐ流路延長百二十六里江口より洛東津に到る六十里の間は舟楫の便ありて數十石の帆船を通すべく目下釜山龜浦、龜浦仙岩、釜山金海間には各小汽艇を以て定期航路を開けるあり水多きときは上流安東に到る迄小舟を溯航せしむへし本江は所謂大邱の平原を貫流し灌漑の便あるに加へて江岸各所に貨物の集散に適せる都邑多きを以て釜山よりする物貨の吞吐頻繁なり沿岸都邑の主なるものを安東、醴泉、尙州、倭館、密陽、洛東、三浪津、龜浦、金海、下端等とす

(ホ)大同江 西海岸の黄海に注ぐ大江にして源を平安、咸鏡の境なる狼林山脈に發し所謂妙香山脈の南麓を西南に流れ沸流江、南江の二流を合せ平壤、兼二浦等を経て鐵島に到り更に載寧江と合して一大流域を成し幅員著しく濶大を爲り約半里に亘る是より西流して鎮南浦に沿ひ漁隱洞に到りて河幅一里餘の大江と爲る鐵島附近に在りては水深約十數尋に達し優に數千噸の汽船を碇泊せしむべく鐵島の上流平壤を下ること約二里半萬景岱附近に到る間は水深四尋乃至六尋に及び亦數百噸の汽船を航行せしむへし萬景岱、平壤間には三箇所の淺瀬あるを以て高潮の時と雖吃水五尺以

上の船舶は航行し難く荷客は之を小艇に移して平壤に送るへし而して其の河口鎮南浦附近は幅員水深共に増加し渺茫として海洋を望むか如く數千噸の船舶は築港岸壁に碇泊し海陸の連絡を爲す大同江下流に於ける潮流干満の差は二十一呎にして平壤に到りては約五尺に減す。雖潮流の速力は常に四節半の勢を以て干満に應し上下するを以て帆船の如きも其の風位に拘はらず潮流を利用して滿潮に上り干潮に下る故に舟楫の便甚た可なり殊に本江は半島有數の農産地たる平壤及載寧の大沃野に連なり沿岸には平壤、兼二浦、鐵島、鎮南浦、漁隱洞の如き商業地あるを以て運輸交通に資する所大なり又載寧、安岳等の鐵礦石、黃州、載寧、平壤各平野の農産物等の移輸出頗る多きを以て去大正元年度より鎮南浦汽船合資會社は總督府の命令に依り鎮南浦を起點とし載寧及津江浦間に至る二航路に定期船を運航し以て貨客の運輸交通に便せり又鎮南浦より北倉、新換浦間及兼二浦間には各小汽艇の定期航路あり上流一帶の地より筏に依り伐材の平壤に下るもの尠からず然れども本江上流は冬期約四箇月(十二月、一月、二月、三月)の間結氷し鐵島より下流なる三角江は幸に結氷せざるも流氷の爲舟楫杜絶するに至る

(一)鴨綠江 朝鮮五大江中の最大江にして鮮支の國境を劃す源を白頭山の西麓に發し咸鏡南道惠山鎮に於て南方より來る虛川江を合せ長白山脈の諸谿谷より發する數多の小流を集めて西北に流れ楚山に到りて滿洲より南下する渾河と合し更に義州の上流に於て滿洲の饒河を容れ河流は九里島、於赤島、黔同島、中江臺等の砂洲に由りて三分し下りて沙河鎮に至り三江再び合して一江と成り更に威化島を堆成して濶大なる三角江を爲し黃海に入る其の流路百四十里に及ふと雖河床の傾斜急にして岩礁多く激流奔湍の箇所少からざるを以て航運河としては其の價值少なし河口龍岩浦より溯るこゝ十五湮なる安東縣迄は高潮時に於て約二千噸の船舶航行し得べく其の間水路狹隘にして曲折多く航行困難なれとも免許水先人を要招するの便あり戎克船は辛ふして江口を距る二百四十四湮の帽兒山附近に航行し得べく大正三年四月より在新義州高羽秀吉は命令に依り新義州を起點とし高瀬舟及艚子を以て中江鎮及江界に至る間各定期航路を開始したり沿岸一帶の地には貨物の集散地少からずと雖商港として數ふるに足るもの唯安東縣及龍岩浦あるのみ然れとも江の上流には有名なる鴨綠江の大森林ありて巨樹大木鬱生し其の富源無盡藏と稱せられ近年其の伐材の

筏に據り流下せらるるもの年年數百萬に及ふ支那人が鴨綠江流域の富源に著目したるは僅に三十餘年以前のこゝにして其の富源開發を共に新に勃興したるもの安東縣及大東溝等とす其の沿岸には戎克船輻輳し舟筏連亙す

(ト)豆滿江 東岸日本海に注く大河なり源を白頭山の東南麓に發し白頭、江南、妙香の諸山脈より發する諸流を合せ茂山郡に到りて稍大流と成り會寧、鍾城の諸郡を經穩城の北に到り間島より南下せる布爾哈圖河と合し更に慶源に於て琿春河と會し水量益増大し其の間右曲左折し谿谷の間を流下す下流は露領と境界を爲し造山灣と露領ポーシエツト灣との間なる西水羅の東方に到り日本海に注く流域全長九十里に亙り河口より慶興に到るの間は百噸内外の汽船を溯航せしむへし然れども流水一帯に急奔にして降雨に際しては河水氾濫し濁流沿岸を嚙み舟楫の危険少からず加ふるに河口には土砂の堆積して洲を爲す所多きを以て航行の便宜しからず

여 백

第五章 通信

第一節 通信事業

朝鮮に於ける帝國の通信事業の開始は明治三十八年四月韓國通信機關委託に關する取極書締結の結果同年七月舊韓國政府の郵政を舉て遞信省の管理に屬せしめたるを以て嚆矢とす其の後統監府の設置せらるるや其の事務を繼承し日韓併合と共に朝鮮總督府に繼屬し以て今日に至れり今や通信機關の配置都鄙を通して六百有餘の多きに達し併合當時に比し實に百有餘を増加せり通信機關の整備と相俟て其の主要機能たる郵便遞送及郵便集配の敏活正確を期せむか爲幾多の改良を加へたる結果此等機關の所在地に於ては交通至難の島嶼を除くの外毎日少くとも一回以上郵便物の發着なきはなく郵便局所在地外に於ても咸鏡南北道及平安北道中極めて僻陬なる地方を除きては少くとも隔日集配を爲さざる地なきに至れり又年年主要なる地點には電信及電話を開始し尙電信利用の増進を期せむか爲明治四十三年十一月電報料金の大輕減を行ふと同時に電信回線の整理及通信の敏速疏通を圖

りたる等施設上大に舊來の面目を一新したるに伴ひ諸般通信業務の取扱數は以下各項に掲ぐるか如く累年増進の趨勢を呈し従前に比し既往十年間に於て約三倍餘既往五年間に於て殆んど倍蕪するの盛況を現し隨て其の收支狀況の如きも亦年年順調に向へり

郵便局所數

年 度	郵便局	同分室	郵便所	電信 電話所	鐵道 電信 取扱所	合 計	郵便切手 賣捌所
大正元年度末	一七九	四	三〇二		七四	五五九	一、七八二
同 二年度末	一七九	四	三一七		八三	五八三	二、二三八
同 三年度末	一八〇	四	三三一		八四	五九九	二、五二八
同 四年度末	一七九	四	三三三	一	八六	六〇三	三、一四一
同 五年度末	一八〇	四	三四二	一	九一	六一八	三、五八〇

郵便所に於ては左の事務を取扱ふものとす

郵便局 郵便、爲替、貯金、電信、電話、歲入歲出金受拂、年金恩給交付

郵便所 同

電信電話所 電信、電話

電信取扱所 電信

年 度	郵 便 線 路		鐵 道		水 路	
	單里程	平均一日延遲程	單哩程	平均一日延遲程	單湮程	平均一日延遲程
大正元年度末	二、四九〇 _里	五、〇六六 _里	八四九 _哩	四、八六四 _哩	一〇、七〇八 _湮	三、六七一 _哩
同 二年度末	二、五三九	五、二六八	九八四	五、二四七	一〇、八六八	四、二六三
同 三年度末	二、七六五	五、七七二	一、〇二四	五、三四三	一〇、八三五	三、八三八
同 四年度末	二、八五七	五、九五三	一、〇四六	五、四三一	九、八〇八	三、五六五
同 五年度末	二、八七九	五、九七四	一、一二五	五、八四五	八、六四六	三、二〇五

電信及電話線路

年 度	電 信 線 路		市 內 電 話 線 路		市 外 電 話 線 路	
	互 長	延 長	互 長	延 長	互 長	延 長
大正元年度末	一、五三二	三、九〇〇	一五六	四、七五五	八六七	二、五〇三
同 二年度末	一、六八四	四、五三九	一七〇	五、〇二五	八八〇	二、五五九
同 三年度末	一、七四八	四、七三四	一七五	五、五二六	九二〇	二、六〇三
同 四年度末	一、九五六	五、四九五	一八一	五、八九二	九六九	二、六八八
同 五年度末	一、九九四	五、七九六	一八七	六、〇二三	一、〇〇二	二、七七一

郵便物取扱數

年 度	通 常 郵 便 物		小 包 郵 便 物		年 度	通 常 郵 便 物		小 包 郵 便 物	
	引 受	配 達	引 受	配 達		引 受	配 達	引 受	配 達
明治四十四年度	五、三〇九	六、三三三	七、七	一、二六	大正三年度	七、四〇	八、九三	一、〇九	一、三五
大正元年度	六、七三五	七、七四〇	九、六三	一、三五二	同 四年度	八、四八五	九、二九一	一、二〇四	一、四七四
同 二年度	七、〇〇四	八、三三〇	一〇、九九	一、三八七	同 五年度	八、五七三	九、七三〇	一、三二七	一、五九三

從來朝鮮に於ては郵便爲替及貯金の制なく只少數の日本在外郵便局に於て其の取扱を爲したるに過ぎざりしか明治三十八年七月日韓郵便事業合同以來漸時一般に擴張し其の事務の範圍も居宅拂、交換拂、便宜拂、局待拂等を實行せり

郵便爲替金の受拂額は逐年増進の狀況なりしも大正三年度に於て著しく減少したるは注目し値すへし其の原因は振替貯金制度の普及に従ひ郵便爲替の利用を減したるを併合後社會上の秩序整頓し居住内地人の家族を呼寄せたる結果内地に送金するの必要を減したるこそ其の他一般財界の不振等に因るものなりしか大正四、五兩年に至りて歐洲戰亂の影響を受け鑛業熱の勃興輸移出の激増戰時用品の製造及其の他一般企業界の好況に伴ひ其の取扱高も亦再び増進を見るに至れり尙大正五年八月より郵便取立金は郵便爲替として處理することとなり之か計數は總て從來の郵便爲替に合算せしを以て更に其の數を増加するに至れり左に其の取扱高を表示すへし

郵便爲替

年 度	内國爲替		外國爲替		振 出		口 拂
	振 出	拂 渡	振 出	拂 渡	口 數	金 額	
大正元年度	三四三八四、七六 ^四	二六八九四、七六〇 ^四	九二六九三	二六六四三 ^四	一七五三三	三、四四七、六八六 ^四	一〇五四、三六九、三七〇、一四三 ^四
同 二年度	三四二、〇三三	二七〇、三六六、〇〇〇	九二、五七七	一三三、四四六	一八七、〇三三	三、四二二、九〇九	一一八八、九〇〇、二七、一六九、〇四六
同 三年度	三二七、四五七、七六	二五六三六、四八一	一三四、〇六四	一七三、二八〇	一八八、七四七	三、二八七、九七八〇	一一、四、五六七、三、八〇八、七六一
同 四年度	三七、五三三、一七一	三〇、一八五、四四九	六、一七〇、五	一三七、〇六〇	一八、九二五、四三	三、七六二、五八七六	一、七五七、二一八、三〇、三三三、五〇九
同 五年度	四四、〇四〇、七六	三七、三四五、四八四	六九、七五七	一八五、一七一	二〇、一六六、五四四	四、一〇九、八三三	一、三六九、九七二、三七、五三〇、六五五

朝鮮に於ける郵便貯金は利率の引上、局待拂の開始、即時拂戻金額制限の撤廢、預入手續の簡便を圖りたる等取扱の改善を施したる結果年年良好なる成績を示せり而して内地人貯金は殆ど一定の増加歩合を以て徐徐として増進し朝鮮人貯金は實に驚くべき高率の増加を示し倍倍發展向上しつつあり大正三年度に於ては歐洲戰亂の餘波を受け金融界に變調を來し一般企業振はさるか故に勞銀の散布動く又米價下落の結果農民の收入豊かならずし爲めか豫期の成績を擧げ得ざりしか大正四、五兩年度に至りては各地鑛業の勃興海外輸出品の製造等に因り企業界活氣を呈したるに米價の騰貴等に

因り労働者及農民の收入潤澤なりし結果著しく預入額の増加を見るに至れり其の取扱高は左の如し

年 度	郵便貯金			平均一度の金額			
	預入	拂	戻	預入	拂	戻	
大正元年度	度數 一八〇〇三三〇	金額 一〇、四〇七、一四五 <small>円</small>	新規人員 二六八三八〇	度數 三七五、六七〇	金額 九、五五四、四三七 <small>円</small>	全額拂戻人員 五、四四五五	平均一度の金額 五、七八 <small>円</small>
同 二年度	度數 二〇五九、八八五	金額 二二、〇八四、一七三	新規人員 二六八、七四一	度數 四六九、二七四	金額 一一、五九八、二四六	全額拂戻人員 六、五〇八七	平均一度の金額 五、八七 <small>円</small>
同 三年度	度數 一八七、三五六	金額 一三、〇〇五、四六九	新規人員 一六八、四四九	度數 五、四四五九〇	金額 二二、三七六、七七七	全額拂戻人員 八、九四五五	平均一度の金額 六、九五 <small>円</small>
同 四年度	度數 二、四六三、〇六四	金額 一六、八八八、五四八	新規人員 二四一、六八〇	度數 六、三三六、六六五	金額 二五、三二七、一四三	全額拂戻人員 九、二〇六	平均一度の金額 六、八六 <small>円</small>
同 五年度	度數 二、八五九、六〇六	金額 二〇、四五一、三三三	新規人員 二八八、〇七五	度數 七、七七六、八一	金額 一八、五四七、三九三	全額拂戻人員 八、九五一四	平均一度の金額 七、二五 <small>円</small>

朝鮮人郵便貯金比較

年 度	内地人		朝鮮人	
	人員	金額	人員	金額
大正元年度末	一四三、三九八	三、三九〇、八一 <small>円</small>	二九四、一二〇	七、四四、六五四 <small>円</small>
同 二年度末	一六〇、三七五	四、六七四、三五五 <small>円</small>	四八〇、七九八	一〇、一七、七〇三 <small>円</small>
				二、五三 <small>円</small>
				二、一一 <small>円</small>

年 度	内地人貯金		朝鮮人貯金	
	人 員	金 額	人 員	金 額
大正三年度末	一七二、〇七七五、二二七、九三六	円	五四八、〇九〇、一三一、六八四	円
同 四年度末	二二一、二二三六、五七四、五八二	円	六四九、五二八、四七〇、六八三	円
同 五年度末	二四二、〇九七八、二九四、六一五	円	八二七、二五一、八九三、八〇〇	円
		一人平均額		一人平均額
		三〇・三八		二・〇七
		二九・七二		二・二六
		三四・二六		二・二九

近年郵便振替貯金を利用する者漸次増進の趨勢を呈し明治四十三年三月末口座加入者現在數二百七十九人なりしか僅僅七箇年の歳月を経過したる今日に於ては已に四千十四人の多きを算するに至り取扱金額亦左の如き増率を見つつあり

年 度	郵便振替貯金		出	
	度 拂	金 額	度 拂	金 額
大正元年度	二九五、三七八	一六、四〇六、二八五	九九、六〇九	一一、九七二、四五六
同 二年度	三七二、六二一	一八、八六六、七〇〇	一三一、二六一	一四、三三四、一二八

同	三年度	四五二、八六七	二三、六七二、四九一	一四三、七三〇	一四、三九四、九四四
同	四年度	五八二、六六三	三〇、七六五、九七五	一五三、九七一	一八、四一五、二九七
同	五年度	七〇六、一七七	四六、九四九、六三二	一八七、五六〇	二四、二六一、七三九

郵便振替貯金口座受拂

年度	受拂		入		拂渡		出		年度末現在
	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	
大正元年度	一四三、七五三	三、三〇六、八〇六	一〇、〇三三	三、一七六、三六六	一〇、〇五五	七、九九七、一三四	一六八、一三三	八、四八〇、七三九	一、三〇三
同 二年度	一九九、八四六	五、八二〇、一三六	一七、六二七	四、四〇五、五三二	一三、四六三	一〇、三九三、九八八	二七、六八五	九、七三三、〇七二	二、九六七、八六六
同 三年度	二五〇、七五〇	八、九〇九、七五五	二五、〇七三	六、八三六、四八〇	一五、二一八	二、九九四、一五九	三七、八八八	三、六七六、九一〇	三、七一一、四五二
同 四年度	三三三、二七三	一、八六九、七七一	三三、七〇二	一、二七五、七五五	一六、六〇二	一、四四四、一七五	四九、八一〇	一、九二六、九六四	三、三三四
同 五年度	三六四、六四八	二、九三三、四〇九	四四、四五四	一、六二七、八二七	一〇、〇〇七	一、九三七、三九五	六六、三六二	三、八二一、八〇一	四、〇一四
									七、七二八、三三三

電報取扱數

年 度	發 信		著 信		中繼信
	和文	英文	和文	英文	
大正元年度	21000	2474	2736	2199	33030
同 二年度	19893	2396	2355	2151	30068
同 三年度	20058	3326	2796	2182	36214
同 四年度	20659	2469	4014	2371	38899
同 五年度	23762	3708	4030	2733	44491

電 話 取 扱 數

年 度	呼 出		請 求		年 度	呼 出		請 求	
	市内	市外	合計	度數		市内	市外	合計	度數
明治四十四年度	803	2834	3637	950	950	3736	2126	5862	211
大正元年度	896	3540	4436	1216	1216	4137	2108	6245	246
同 二年度	1058	3756	4814	1440	1440	4937	2638	7575	310

本表*印を附したるは長距離加入者の再掲なり

第二節 電氣事業

大正六年三月末に於ける電氣事業經營數は營業用二十一、官廳用十、自家用二十二合計五十三なり
 今其の概況を示せば左の如し

營業用電氣事業

大正六年三月末日

事業者	目的	資本金	拂込資本金	原動力	發動力	代表者	種別
朝鮮瓦斯電氣株式會社	電氣供給、電	三、〇〇〇	一、三五〇	瓦斯力	六〇〇 K.w.	香椎 源太郎	開業
京城電氣株式會社	電氣供給、電	六、〇〇〇	五、五五〇	汽力	二、五〇〇	正 矣	同
同	電氣供給			同	五〇〇	同	同
同	電氣供給			同	一二五	同	同
同	電氣供給			同	—	同	同

事業者	目的	資本金	拂込資本金	原動力	發動力	代表者	種別
元山水 株式業社	電氣供給	一五〇	一五〇	瓦	一三五	葭濱 忠太郎	開業
力電氣 株式會社		一五〇	一〇五	瓦	六〇	中村 辰五郎	同
鎮南浦電氣株式會社		一五〇	一〇五	瓦	二四八	內藤 氏雄	同
大田電氣株式會社		一二〇	八〇	同	一〇〇	宮川五郎三郎	同
平壤電氣株式會社		三〇〇	一五〇	汽	二〇〇	小倉 武之助	同
大邱電氣株式會社		一〇〇	五〇	瓦	二二五	青木 十三郎	同
木浦電燈株式會社		二〇〇	八八	汽	七五	樋口 虎三	同
群山電氣株式會社		一六〇	六四	瓦	六〇	杉山 正太郎	同
朝鮮電氣株式會社		五〇〇	一七五	同	一三〇	大倉 喜八郎	同
大倉喜八郎		一、〇〇〇	八七五	汽	三、〇〇〇	有城 貞治郎	同
清州電氣株式會社		五〇	二四	瓦	四〇	香山 弘	同
水原電氣株式會社		六〇	四五	同	四〇	田中 健士	同
新義州電氣株式會社		六〇	二一	汽	七五	寺本 幸太郎	未開
咸興電氣株式會社		四五	一一	瓦	五〇	岡村 寛	同
全州電氣株式會社		六〇	同	同	五〇	同	同

光州電氣株式會社
開城電氣株式會社

同 同

五〇 五〇

一三 一
同 同

七〇 四〇

金發起人總代基
武之助

炯 同
同 同

第五章 通信

여 백

第六章 地方行政

第一節 道府郡島

朝鮮に於ける地方行政機關は第一章第二節第四に記述したる如く舊韓國政府時代より幾多の變遷を經以て今日の制度に至れり即ち京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黃海道、平安南道、平安北道、江原道、咸鏡南道、咸鏡北道の十三道、京城、仁川、群山、木浦、大邱、釜山、馬山、平壤、鎭南浦、新義州、元山、清津の十二府及二百十八郡二島二千五百十二面と爲す道、府郡島は内地の府縣市郡島に相當し面は町村に匹敵す但し府及面は國の行政區劃たると共に公共團體の地域を成せり

道、府郡島面に道長官、府尹、郡守、島司、面長を置く就中府尹、面長は官廳事務を行ふと共に公共團體の事務を統轄す道には道長官の外其の補助機關として參與官、事務官、通譯官、技師、書記、技手、通譯生を置き之を長官官房、第一部、第二部に配し第一部長及第二部長は道事務官を以て之に

充つ而して長官官房に於ては機密、人事、褒賞に關する事務を第一部に於ては地方行政、學務、勸業、土木、會計等の事務を第二部に於ては稅務、理財の事務を各分掌す又府郡島に於ては府尹、郡守、島司の外補助機關として書記、通譯生を置き尙府には場合に依り府事務官島には須要ある場合に技手を置くことを得へし郡島に在りては庶務、財務の二係に府に在りては右の外府尹の定むる所に依り會計、内務、土木、衛生、民籍等の諸係に分屬せしむ尙此の外道、府郡島に諮問機關として道に三名府郡島に二名の參事を置けり

叙上地方行政廳の職務權限は大體内地の地方行政廳に酷似すれども朝鮮に於ける警察事務に付ては各道に警務部長を特設し警務總長の監督に屬せしめ一般行政事務と處管を異にするも道長官は地方の警察及衛生事務に關して警務部長をして必要なる命令を發し又は必要なる處分を爲さしめ尙警務部長の發する法規命令は豫め道長官の承認を受け其の他道行政の執行に關しては道長官は管内の警察官を使用し得る權限を有し兩者の連絡統一を計り相互に支梧扞格なきを得せしむ又國稅徵收に關する事務は内地に於ては稅務官署を特設せるも朝鮮に於ては道長官之を管掌し主として道第二部稅

務係及府郡財務係に於て處理しつつあり其の他不動産登記令を施行せざる郡に在りては郡守は不動産證明事務（内地の不動産登記事務）及民事裁判の結果裁判所の囑託に依る強制執行事務（内地の執達吏の事務）を取扱ふこと等は内地の地方行政廳に比し著しく相異せり

第二節 公共團體

一 地方費

地方費は隆熙三年（明治四十二年）發布の地方費法に基くものにして各道に之を設け其の財源は賦課金及國庫補助金を主とし土木、勸業、教育、衛生等に關する公共事業を經營す併合以前に在りては其の歲計豫算額全道を通し百萬圓に満たず且制度の行はれたる期間僅に一年有半に過ぎざりしか故に其の施設未だ見るべきものなかりしか併合以來地方の發展に伴ひ賦課金收入漸次確實を加へ逐年增收を算するのみならず國庫補助金亦年年其の額を増加し殊に從來國費を以て經營せし林業苗圃、種苗場並仁川及釜山商業學校を明治四十四年度より地方費經營に移され殊に從來別途經濟を以て經

理し來りたる臨時恩賜金は經理の便宜上大正六年度より地方費豫算に編入し今や歳計豫算額全道を通じて四百五十餘萬圓に達し内臨時恩賜金に屬する分百四十五萬圓を控除するも尙三百十餘萬圓を算し従て各般の事業著しく擴張を示し其の經營亦著著歩を進むるに至れり今地方費歳入歳出豫算及地方費賦課金課目課率を掲ぐれば左に如し

地方費豫算

大正六年度

(一) 歳入

道	賦		課			金計
	地稅附加稅	市街地稅附加稅	市場稅	屠場稅	屠畜稅	
京畿道	三六、六〇六	九六七三	三〇、五六二	八五、三三九	四一、三五八	二〇三、五三八
忠清北道	二七、六五七	六二	一一、八八〇	二九、八〇〇	—	六九、三九九
忠清南道	五二、九七三	三三三	一五、四七五	五一、四三二	—	一〇六、二五三
全羅北道	五八、二九六	四七三	一二、五七二	三四、五四一	一、〇四〇	一〇六、九二二
全羅南道	七四、七一九	八二三	二六、三七八	四〇、四一三	二、三六六	一三四、六九九

道	臨時恩賜金受入	前年度繰越金	國庫補助金	其他	合計
慶尚北道	六二、七八一	一、〇二七	四六、一二八	五一、三〇七	四、六三七
慶尚南道	五七、五〇〇	二、三六〇	二五、〇〇〇	四五、六三六	二、三六四
黃海道	四四、六九九	一五三	一八、〇〇〇	五〇、〇〇〇	一一、八五二
平安南道	三九、七二九	一、二〇四	二〇、三四二	四九、八二七	一三、一九八
平安北道	二六、三四四	八八	一五、一七六	五三、二〇〇	九四、八〇八
江原道	一〇、七六〇	—	一一、一九四	三一、五六〇	五三、五一四
咸鏡南道	三三、九八〇	五六六	一四、〇〇〇	二五、三〇〇	八四〇
咸鏡北道	一一、六四二	九五	—	一九、〇〇〇	九二六
總計	五三七、六八六	一六、八九七	二三六、七〇七	五六七、三五五	六六、七二九
大正五年度	五三七、四二〇	一六、九七一	二〇三、五四八	四八七、一〇四	三五、二二五
同四年度	五三四、九〇一	一七、四三〇	一九六、四九二	四〇二、六七八	一一、七五、八六三
同三年度	三九五、二九七	一七、七九九	一九一、四七七	三六七、三四八	二六、七五〇

京畿道

一九四、〇二五

二四、九五七

一五一、九八九

一八〇、六五六

七五五、一六五

道	臨時恩賜 金受入	前年度繰越金	國庫補助金	其の他	合計
忠清北道	四九、二七四	一、一〇〇	五二、五五九	一四、九一五	一九八、一四七
忠清南道	九九、六六四	一三、四一九	八〇、四一二	一八、七〇八	三三三、四五六
全羅北道	八四、一二四	六、〇〇〇	一〇三、一七四	一一、七一	三一一、九三一
全羅南道	一二五、二七四	五三、七七八	一〇〇、九四一	一〇、二〇六	四二四、八九八
慶尙北道	一二四、七二四	三七、〇〇〇	一〇六、一八五	一四、二五五	四四八、〇四四
慶尙南道	九八、六六三	三、〇〇〇	一一九、六七七	五四、八三一	四〇九、〇三一
黃海道	八九、八九二	二八、四〇〇	五九、五六五	六、九二七	二九七、六三六
平安南道	八〇、七八〇	二二、一二九	一一五、三五	四〇、二九二	三八二、八五二
平安北道	九九、九四三	五四二六	一一五、八二一	一〇、三三八	三二六、三三六
江原道	八〇、七五五	一五、九三二	八三、四九四	一四、八〇八	二四八、五〇三
咸鏡南道	七〇、六七五	二三、九七五	八二、五二六	五、四二一	二五六、二八三
咸鏡北道	四〇、三七三	一〇、〇〇〇	一〇六、四一四	二、一四五	一九一、五九五
總計	一、二三八、一六六	二五六、〇一六	一、二七八、一〇八	三八五、二一三	四、五八二、八七七

大正五年度	二九四、四三一	一、三一九、一九二	一、二八、二九一	三、〇二二、一八二
同四年度	一八四、八一四	一、二五六、九六四	五〇、一三三	二、六六七、七六四
同三年度	一三〇、六四九	一、二五二、〇七六	七三、九四三	二、四五五、三三九

(二) 歳出

道	土木費	衛生及病院費	救恤及慈善費	勸業費	授産費	教育費	國庫金	其の他	豫備費	共進會費	合計
京畿道	一〇六、六七九	八、四四五	一五、七三六	一〇三、五三三	二五九、六六六	一八〇、一七四	一三三、三三三	一四四、八八一	五三、一三九	X	七五五、一六五
忠清北道	四八、九〇七	四、四三三	四、〇八〇	五三、〇七三	三二、二六五	四四、三三四	三、九七〇	四二、五九九	二一、三三三	X	一九八、一四七
忠清南道	六一、八六四	四、七六〇	七、八八四	八六、一〇四	五二、七八五	九九、一一一	七、〇七九	六六、〇六六	六二、六三三	X	三三二、四五六
全羅北道	七九、二六二	六、五八七	七、一五四	七〇、六九四	四四、八三五	三三、三九五	三、六三五	九五、九二二	六八、八九九	X	三二一、九三一
全羅南道	七四、三八五	六、九〇七	一〇、〇七九	七二、〇七九	七八、六五六	七四、四一五	八、五五五	九五、八八九	二九、四六六	X	四四八、八九八
慶尙北道	一三、七三三	二、一三三	一、二六九	八、九三〇	七八、七八九	九五、二一〇	—	九四、九三三	一三、九五七	X	四四八、〇四四

道	土木費	衛生及 病院費	救恤及 慈善費	勸業費	授産費	教育費	恩賜金 経展金	其の 他	豫備費	共進 會費	合計
慶尙南道	八六八五九	一〇、四九〇	九二七五	八八五八七	八三六六	一〇、八七五	五九三三	八〇六〇	一五二七三	—	四〇九、〇三二
黃海道	六四、三四〇	六、六〇〇	六、三三三	六三、七一一	六〇、五五八	七、七七八七	五、六八三	五、〇一一	一一、四四三	—	二九七、六三六
平安南道	八五、〇六一	七、四四〇	六、七三三	六四、一〇五	四七、三三三	一四、〇七五八	四、九一五	八、一〇三	一八、四九九	—	三、八二八五二
平安北道	五七、一七三	七、七四〇	五、九七二	七二、六八九	六三、八七〇	一〇、一六四	五、九〇六	四、八五二	七、〇六六	—	三、二六三三六
江原道	四〇、〇三四	二、五三二	六、四一〇	五三、三三三	五八、三七六	七、三六六〇	四、五〇〇	四、三三五	六、二七三	—	二、四八五〇三
咸鏡南道	六七、三九九	四、一一〇	五、二九一	五〇、九〇〇	四二、七五六	七、三九六四	四、四一五	四、三三〇	三、一九七	—	二、五八二八三
咸鏡北道	三四、一六三	一、九五六	三、一六四	三六、三六六	三三、〇〇九	八、〇六六八	三、五〇七	三、三三九	六、五三三	—	一、九一五九五
總計	九四三、三四〇	一四、五五七	一〇、一八七	九〇、一三四	九三、五六九	一、三三、五四〇	七、一三〇	八八、六二〇	一、八一、一九〇	—	四、五八二、八七七
大正五年度	九九〇、六六〇	一三、四六〇	一三、一三三	七七、四六一	—	九五九、五八一	—	八四、九一九	七五、一一八	—	三、〇三三、一八二
同 四年度	七六一、二七八	九、三七〇	一三、三四八	八一、一五四	—	七十七、三七二	—	七九、二一九	七二、〇三二	—	二、六六七七六
同 三年度	七三八、九一四	九、八九〇	一〇、三六八	七六、五五六	—	七二、五六七	—	六六、七四二	四九、三六〇	—	二、四九、五三九

本表×印は恩賜金受入に依る支出額の再掲なり
 其の他とあるは徴兵旅費、繰替金、財産管理費、雑支出、地方費取扱費等にして補助及奨励費は當該事業費に併算し水道費は衛生費に算入せり

地方費賦課金課率

道

地稅 市街地稅
 附加稅 附加稅

市 場 稅

屠場稅

屠畜稅

京畿道
 京城府
 其他の府郡

本稅百分
 の五

一等月額四百圓乃至
 二十等月額二圓

放賣價格百分の一

豚牛 二二 錢圓

羊豚牛 二二 錢圓

豚牛 二二 錢圓

羊豚牛 二二 錢圓

豚牛 二二 錢圓

豚牛 十二 錢圓

豚牛 二二 錢圓

豚牛 二二 錢圓

忠清南道
 忠清北道
 全羅北道

同

同

同

道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	黃海道	江原道	平安南道	平安北道
附加稅	本稅百分の五	同	同	同	同	同	本稅百分の十
市街地稅	本稅百分の五	同	同	同	同	同	同
市場稅	市場規則第一條第三號該當市場金額百分の五	右以外市場放賣價格百分の一	放賣價格百分の一	同	同	同	市場規則第一條第三號該當市場金額百分の五
屠場稅	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 三二錢圓
屠畜稅	豚牛 二二錢圓	豚牛 二十五錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 二二錢圓	豚牛 三二錢圓	豚牛 三二錢圓

咸鏡南道	同	右以外の市場 放賣價格百分の一	豚牛	二十錢圓	豚牛	二十錢圓
咸鏡北道	同		豚牛	二十錢圓	豚牛	二十錢圓

二府

朝鮮に於ける地方的團體は初め内地人に於て日本人會又は居留民會等を組織し必要なる公共事務を處理し來りしか明治三十八年居留民團法の施行せらるるや京城、仁川、群山、木浦、大邱、釜山、馬山、平壤、鎮南浦、新義州、元山各地の内地人は居留民團を組織し教育、衛生、土木、救助の事務を處理せり又仁川、群山、木浦、馬山、鎮南浦、城津の在留各國人は各國居留地會を組織し仁川、釜山、元山の内地人又は支那人間には專管居留地あり京城には内鮮人を以て組織せる漢城衛生會ありしか此等の諸機關は何れも其の機能充分ならず而も京城、大邱、平壤、元山其の他の市街地に於ては朝鮮人は内地人に比し或は四倍の人口を有するに拘らず地方公共事務を處理すへき何等の機關をも有せず特に居留民團、各國居留地會、專管居留地及漢城衛生會の如きは外國の領土なることを前提と

して組織せるものなれば日韓の併合と共に當然其の存在を喪ふへかりしものなりしも俄に之を廢止するに便ならざる事情ありしを以て一時權宜の措置として暫く其の存續を認め大正二年十月制令第七號を以て府制を發布し翌三年四月一日より施行す内地人、朝鮮人、外國人に共通せる制度にして此の施行と共に從來の居留民團、各國居留地會、專管居留地及漢城衛生會は之を廢止し居留民團の事務中教育に關するものは之を學校組合に承繼せしめ其の他の事務並各國居留地會、專管居留地、漢城衛生會の事務は共に之を府に承繼せしめたり尤も城津各國居留地會の事務は城津郡守をして之を處理せしめたり

(イ)府の區域 法人たる府の區域は行政區劃たる府の區域に依れり其の所在地は京城、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津是なり

(ロ)府の事務、府住民の權利義務 府は官の監督を承け一般公共事務及法令に依り府に屬する事務を處理し府内に住所を有する者を以て住民とす府住民は府制の規定に依り府の營造物を共用する權利を有し府の負擔を分擔するの義務を負ふものとす

(六)府税、使用料及手数料 府税は國税たる市街地稅、家屋稅の附加稅及特別稅とし府内に住所を有する者、三月以上府内に滞在する者、府内に於て土地家屋の物件を所有し使用し若は占有し、府内に營業所を設けて營業を爲し又は府内に於て特定の行爲を爲す者は其の土地家屋物件營業若は其の收入に對し又は其の行爲に對して之を賦課す尤も國又は公共團體に於て公用に供する土地家屋物件及營造物、恩賜金事業の用に供する土地家屋物件並神社寺院祠堂佛堂の用に供する建物及其の境内地教會所、説教所の用に供する建物及其の構内地、墓地、外國政府の所有に屬する領事館及其の敷地等には府税を課せざるものとす

府は營造物の使用に付使用料を徵收し又特に一個人の爲にする事務に付手数料を徵收することを
得るものとす

(二)府の機關及權限 國の官吏たる府尹は府を統轄し及代表す必要あるときは府費を以て府吏員を置くことを得府吏員は府尹之を任免し懲戒するの權限を有す

府に協議會を置き府尹を以て議長とす協議會員は府住民中より名望識見ある者を選択し朝鮮總督

の認可を受け道長官之を命ず協議會員は名譽職とし其の任期は之を二年とす而して協議會員の定員及協議會に諮問すへき事項は左の如し

協議會員定員

京城府	一六 ^人	大邱府	一〇 ^人	鎮南浦府	八 ^人
仁川府	一〇	釜山府	一二	新義州府	六
群山府	六	馬山府	八	元山府	一〇
木浦府	八	平壤府	一二	清津府	六

諮問すへき事項

- 一、府條例を設け又は改廢する事
- 二、歳入出豫算を定むる事
- 三、府債に關する事
- 四、歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲す事

五、基本財産、特別基本財産及積立金穀等の設置又は處分に關する事

六、府の廢置又は境界變更の場合に於ける財産の處分に關する事

七、前各號の外府尹に於て必要と認むる事

府に府出納吏を置き府の官吏又は府吏員の中に就き府尹之を命し出納事務を掌らしむ故に府尹は府出納吏に對し收支の命令を爲すことを得れども自ら現金の出納を爲すことは得ざるものとす又府には現金の出納及保管の爲府金庫を置くことを認めらる而して其の府金庫は府出納吏の通知あるに非されば現金の出納を爲すことを得ざるものとす

(ホ)豫算 今府の歳入歳出豫算を掲ぐれば左の如し

府	歳入			歳出		
	經常部	臨時部	合計	經常部	臨時部	合計
京城府	三四〇、七四五	二八、四一五	三六九、一六〇	三〇五、六五五	六三、五〇五	三六九、一六〇

府	歲入		歲出	
	經常部	臨時部	經常部	臨時部
仁川府	六四、九二四	一三、二七九	四五、一六三	三三、〇四〇
群山府	四五、七三三	六、五七八	三四、〇三三	一八、二七八
木浦府	四六、三二八	三、五四二	二九、二五〇	二〇、六二〇
大邱府	五一、八四〇	二八七、九七三	三九、八八七	二九九、九二六
釜山府	二三〇、三〇二	四六九、八六〇	一五六、二八〇	五四三、八八二
馬山府	一三、九二六	一一、四六二	一三、九〇八	一一、四八〇
平壤府	八四、〇六〇	一六、七二〇	四八、三〇三	五二、四七七
鎮南浦府	三九、二八九	四、六五四	三四、五三七	九、四〇六
新義州府	一六、五一九	二、七八四	九、〇六五	一〇、二三八
元山府	六四、一六三	二、七八九	四七、二四九	一九、七〇三
清津府	一六、二二七	六二、六二六	一六、二二七	六二、六二六
總計	一、〇一四、〇五六	九一一、六八二	七七九、五五七	一一、四六六、一八一
大正五年年度	九四四、八〇〇	八九四、六六九	七五二、三〇三	一、〇八七、一六六
同四年年度	九三六、〇一四	一、〇二一、五八五	七五七、〇七八	一、二〇〇、五二一
同三年年度	八一四、六九五	一、三四〇、一三六	七九三、三八〇	一、三六一、四五二
合計	二、九〇四、四七九	三、一四五、三九〇	二、二〇二、〇九〇	三、六八四、二三九

三 面

面制は大正六年六月公布せられ同年十月一日より府を除きたる地に施行せられたり面は面制に依り事業を經營し財産權の主體を爲り府と等しく朝鮮に於ける最下級の地方公共團體たる實質を備ふるものなり面制施行前に在りては國の事務處理に要する面長手當及面事務執行に要する費用は面の負擔とし面賦課金を賦課するの途ありしも法令事業經營の能力なし従て費用の徴收力なく只協議費の名の下に其の費用を醸集し以て契組合等地方必要の公益事務を處理し來れり然れども是等は法令上何等の根據なく其の組織任意なるが爲延て地方事務の統一を缺き或は負擔徒に増加せむとする傾向を呈したるを以て從來の事務を整理し面制を布き地方制度を確立するに至れり

(イ)面の事務 面は法令に依り面に屬せしめたる事務を處理するものなるも民度未だ低く負擔力も亦乏しきが故に無制限に其の事務の範圍を放任せば事の緩急機宜を愆り延て面民の負擔を過重ならしむる虞なきに非らず仍て左の如く其の事務の範圍を限定せり

- 一 道路橋梁渡船、河川堤防、灌漑排水

二 市場、造林、農事養蠶畜産其の他の産業の改良普及、害鳥蟲驅除

三 墓地、火葬場、屠場、上水、下水、傳染病豫防、汚物の處置

四 消防、水防

以上列記の外面の状況に由りては其の事業の必要を生したるときは朝鮮總督の認可を受け之を處理し得ることとなれり尙面制以外の法令に於て面の事務を規定したるもの例へば國稅の徵收、地方費賦課金の徵收等の如き處理事務あり

(ロ)面の職員 面には國政機關たる面長の外面書記、區長を置き又朝鮮總督の指定したる面には相談役を置く面書記は有給面吏員にして面長の命を受け庶務に従事し特に會計員を命せられたる者は出納其の他の會計事務を掌る區長は無給にして町洞里(内地の市町村の區又は大字に類す)内に於ける面の事務にして洞里内に告知を要するもの又は面の經營する事業にして洞里内に關係あるものに就き之を補助執行するものにして面書記、會計員、區長は共に郡守、島司之を命免す相談役は内鮮人多數集團し且其の經營事業資力等の關係に於て普通の面と趣を異にせるものに就き面

内有力者の意見を聴取する爲面長の諮問機關として設置せらるるものにして道長官之を任命す面制施行の際朝鮮總督の指定したる面左の如し

京畿道（水原郡水原面、開城郡松都面、始興郡永登浦面

忠清北道（清州郡清州面

忠清南道（公州郡公州面、大田郡大田面、論山郡江景面、燕岐郡烏致院面

全羅北道（全州郡全州面、益山郡益山面

全羅南道（光州郡光州面

慶尙北道（金泉郡金泉面、迎日郡浦項面

慶尙南道（晉州郡晉州面、昌原郡鎮海面、統營郡統營面

黃海道（海州郡海州面

平安北道（義州郡義州面

江原道（春川郡春川面

咸鏡南道へ咸興郡咸興面

咸鏡北道へ鏡城郡羅南面、城津郡城津面、會寧郡會寧面

(ハ)面の財務 面は其の財産より生ずる収入、使用料、手数料其の他面に屬する収入及賦課金を以て其の必要なる費用及法令に依り面の負擔に屬する費用を支辨するものにして賦課金として賦課し得べきは地稅割、市街地稅割、戸別割及特別賦課金とす而して是等の賦課金は面内に住所を有する者、三月以上面内に滞在する者、面内に於て土地家屋物件を所有し使用し若は占有し、面内に營業所を設けて營業を爲し又は面内に於て特定の行爲を爲す者に對し之を賦課するものとす

(ニ)面組合 面に於て處理すべき事務は概ね其の面のみの關係に止まり他面との利害直接相關聯すべきものは稀なりと雖其の事務の種類に依りては隣接面と共同して之か經營を爲すに非されは十分に其の目的を達し難き場合あるを以て是等の場合に於ては朝鮮總督の認可を受け關係各面の組合を設け共同して其の事務を處理し得るものとす

四 學校組合

從來朝鮮に於ける内地人の教育は日本人會又は居留民團に於て經營せしか明治四十二年十二月統監府令の發布と共に此等の事務は學校組合に於て處理することとなりたれども土地の狀況に因りては附帶事業として衛生事務を處理することを認めたり併合後内地人の渡鮮する者逐年増殖し從來の日本人會は漸次其の組織を學校組合に變更するに至れり其の後大正三年四月府制の施行と同時に學校組合令を改正し舊居留民團所在地たる府の區域に施ても亦内地人教育に關する學校組合を組織せしめ全土を通して其の制を統一せり現行學校組合令に施ては教育事業の經營を主とせしも從來屠場、水道、火葬場、墓地等を經營し來りたる組合に對しては當分之を繼續せしめたり

(イ)學校組合の人格及目的 學校組合は法人にして官の監督を承け法令の範圍内に於て主として内地人の教育に關する事務を處理するを以て其の存立の目的とす

(ロ)學校組合の設置と組合規約及組合員の權利義務 學校組合を設置せむには發起人區域を定め其の區域内に住所を有し獨立の生計を營む内地人三分の二以上の同意を得て組合規約を作り朝鮮總督の許可を受けざるべからず而して組合員は營造物を共用する權利を有すると同時に組合の負擔

を分任するの義務を有す

(ハ) 學校組合會と議決事項 學校組合には組合會を置き組合會議員は之を選舉す組合會議員は名譽職とす議員の被選資格は組合規約を以て之を定む組合會の議決事項は左の如し

- 一 組合規約を變更する事
- 二 歳入出豫算を定むる事
- 三 決算報告を認定する事
- 四 基本財産、特別基本財産及積立金穀等の設置管理及處分に關する事
- 五 不動産の管理及處分に關する事
- 六 財産及營造物の管理方法を定むる事但し法令に規定あるものは此の限に在らず
- 七 法令に定むるものを除くの外使用料組合費及夫役現品並其の賦課徴收に關する事
- 八 組合債に關する事
- 九 歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲す事

十 組合に係る訴訟及和解に關する事

(三) 學校組合管理者と組合吏員 學校組合に管理者を置く管理者は組合員中より道長官之を命ず其の任期は三年とす但し府の區域を包含する學校組合に在りては府尹其の管理者の職務を行ふ管理者は名譽職たることを原則とすれども必要に依り有給と爲すことを得

學校組合には管理者の外に有給又は無給の吏員を置くことを得其の任免懲戒處分及譴責等は管理者之行ふ有給の管理者及吏員に對しては組合規約の定むる所に依り退隱料、退職給與金、死亡給與金又は遺族扶助料を給することを得名譽職たる管理者及吏員に對しては職務の爲要したる費用を辨償するの外勤務に相當する報酬を給することを得

(ホ) 學校組合の經費と徴收及寄附又は補助 組合は營造物の使用に付使用料を徴收するの外組合財産より生ずる收入其の他組合は屬する收入を以て其の經費を支出し仍不足を生ずるときは組合費及夫役現品を賦課徴收することを得組合は費用の徴收を爲すのみを以て能事と爲さず進て内地人の教育に關し必要な場合に於ては寄附又は補助を爲すことを得

(ハ)組合の監督 學校組合の監督は第一次を郡守島司、第二次を道長官、第三次を朝鮮總督とす但し府尹管理者の職務を行ふ場合に於ては第一次を道長官とし第二次を朝鮮總督とす組合規約の變更、組合の起債及其の方法、利息の定率、償還の方法及其の變更には朝鮮總督の許可を要す而して道長官は組合管理者に對し懲戒を行ふことを得左記事項に付ては許否の權を有す

一 基本財産の管理及處分に關する事

二 特別基本財産及積立金穀等の設置管理及處分に關する事但し積立金穀等を其の目的の爲使用する場合は此の限に在らす

三 不動産の處分に關する事

四 寄附又は補助を爲す事

五 使用料、組合費及夫役現品の賦課徴收に關する事

六 一時の借入金を爲す事

七 繼續費を定め又は變更する事

八 歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し及權利の抛棄を爲す事
左に最近の組合數、戸口及豫算の狀況を表示す

學校組合數及組合戸口

大正六年四月一日

道	組合數	戸數	人口	道	組合數	戸數	人口
京畿道	三二	二二、七八六	九〇、〇九四	平安南道	一六	五、二一八	一八、七二八
忠清北道	一二	一、四一八	四、八八〇	平安北道	一七	二、二一九	九、四九三
忠清南道	二八	三、八一四	一四、八九三	江原道	一四	一、四六七	三、九七六
全羅北道	二九	五、〇五八	一八、五一五	咸鏡南道	一四	三、三一一	一一、八一四
全羅南道	四〇	五、五五六	二一、一三四	咸鏡北道	七	二、八七六	九、〇六九
慶尙北道	四三	六、五七七	二四、〇三三	總計	三二九	七八、六七五	二九三、八七六
慶尙南道	五九	一五、一三三	五九、六〇二	大正五年四月一日	三〇一	七五、一八一	二七五、六一二
黄海道	一八	二、二四〇	七、六四五	同四年四月一日	二九六	七一、三〇一	二六二、一〇五

學校組合歳入歳出豫算

大正六年四月一日

道	經歲			入計			出計			平均一戶 常課金
	常	臨時	合計	常	臨時	合計	常	臨時	合計	
京畿道	三三三九九	九〇一八七	四二四一〇六	三三三三三六	八〇六七〇	四一四一〇六	八五五七			
忠清北道	三〇四五〇	一五四五〇	四五九〇〇	三六三一八	九五八六	四五九〇四	七五六八			
忠清南道	五九二二九	三七九六一	九七〇九〇	七三〇五三	三三、六七	九七〇九〇	九五九九			
全羅北道	六一七三四	四四、〇〇四	一〇五七三八	八三八八〇	二二八四八	一〇五七二八	八七四九			
全羅南道	七九〇六八	四四、六二八	一三三六九六	九六八七〇	三六、八二六	一三三六九六	八六一六			
慶尙北道	七五二二八	八四、三三三	一五九五四〇	九八八七〇	六〇、六六六	一五九五四〇	八二一四			
慶尙南道	一八五、六八九	九三、一〇三	二七八八九二	三三四四二	五四、四八一	二七八八九二	七九三一			
黃海道	三〇二九三	三三、八三四	五三、一六	四三、一〇三	一〇、〇三	五三、一六	八〇八二			
平安南道	六四八八七	四三、六三八	一〇八五二五	八一、九三三	三六、六〇三	一〇八五二五	八八七八			
平安北道	三三三八	二四、五〇一	五七、六二九	五二、六五八	四九、七一	五七、六二九	七〇二三			
江原道	一五、四一一	一一、七三三	二七、二四四	二二、五六九	三五、五五	二七、二四四	八一五三			
咸鏡南道	四八、五五四	二二、四二五	六九、九七九	六三、七四四	六三、三五	六九、九七九	九四八七			
咸鏡北道	三七、四五二	一六、〇五三	五三、五〇四	四一、六三〇	一一、八七四	五三、五〇四	八六六六			
總計	一、〇四五、二三五	五五九、七〇八	一、六〇四、八三三	一、二五五、八六八	三五〇、九六五	一、六〇四、八三三	八四八二			

大正五年 同 四年度	五八八八八 八八七二四	四一六八四八 四三〇八二六	一三五五七四六 一三二八〇三〇	一七二八七三三 一〇八一七四五	三三三〇三四 二四六二八五	一三五五七四六 一三二八〇三〇	八〇九七 八三二七
---------------	----------------	------------------	--------------------	--------------------	------------------	--------------------	--------------

五 水利組合

朝鮮水利組合令は大正六年七月公布せられ同年十月一日より施行せられたり舊水利組合條例は韓國政府時代の制定に係り時勢の進運に適應せざるを以て之を改正し組合制度を確立し以て近時發達せる農事思想に合致せしめむとするものなり

(イ) 水利組合の人格及目的 水利組合は法人にして官の監督を承け耕地の改良を行ひ農産物の増殖を得むか爲灌漑排水、水害豫防を以て其の存立の目的とす

(ロ) 水利組合の區域及組合員 水利組合は組合事業の爲利益を受くる土地を以て其の區域と爲す而して灌漑排水を目的とする組合に在りては番と爲さむとする畑若は未墾地等の土地所有者を以て組合員とす水害豫防を目的とする組合に在りては田番墾の所有者及事業の爲利益を受くる家屋工

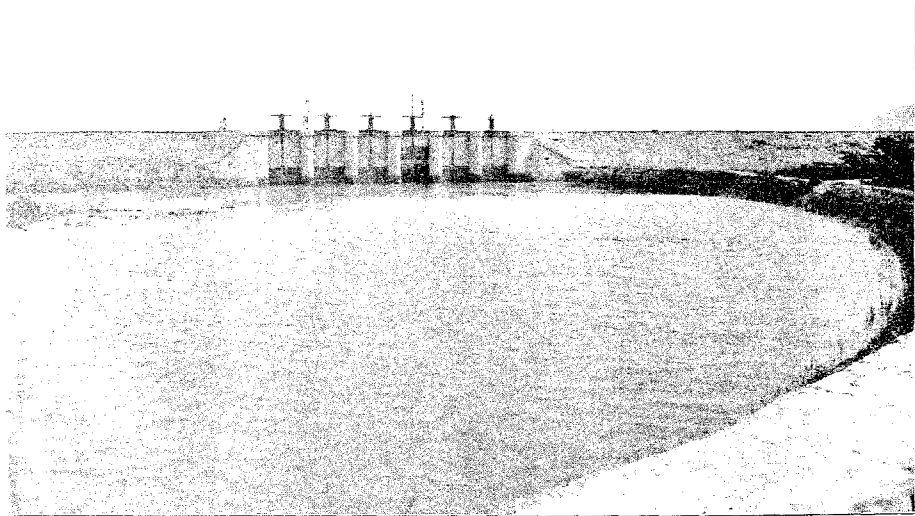
作物の所有者を以て組合員とす例外として未墾地の利用者を土地所有者と看做し組合員と爲す

(ハ)水利組合の設置合併分割又は廢止 水利組合の設置は組合員たるべきもの五人以上創立者と爲り組合規約を作り組合員たるべき者の二分の一以上にして組合の區域と爲るべき地の總面積の三分の二以上に當る土地所有者の同意を得て朝鮮總督の認可を受けるを要す而して其の合併分割又は廢止を爲さんとするときは組合員の同意を得朝鮮總督の認可を受けざるべからず但し廢止の場合に於て負債を有するときは債務を完了したる後に非されば之を廢止することを得ず

(ニ)水利組合の機關

一 組合長及組合吏員 組合を代表し其の事務を管理する爲組合長を置き書記及技士をして其の事務を補助せしむ必要な場合には組合規約に依り副組合長、理事、出納役、技士長又は委員を置くことを得

而して組合長副組合長は共に道長官之を任命し孰れも任期を四年とし無給を本則とすれども組合規約を以て有給と爲すことを得又必要な場合に於ては朝鮮總督は府尹郡守又は島司をして組



慶南金海郡大渚水利組合水池の水送りの光景

合長の職務を行はしむることを得理事、出納役、技士長、書記及技士は有給とす出納役は組合規約を以て無給と爲すことを得此等の吏員は組合長之を任免し理事、出納役及技士長の任免は評議會に諮問し道長官の認可を受くるを要す

二 評議會 評議會は組合長又評議員を以て組織し組合の豫算組合費夫役現品使用料加入金の賦課徴收起債其の他重要事項の諮問機關にして評議員は組合員中より互選し道長官の認可を得て就職す其の任期を四年とす

(ホ)水利組合の經費 水利組合は事業經營の爲毎年豫算を編成し經費を支辨す之れが爲組合員に對し組合費を賦課す即ち灌漑排水を目的する組合に在りては土地に對し水害豫防を目的とする組合に在りては土地の外家屋及工作物に對し組合費を賦課す場合に依りては夫役現品を以て之を代へ又組合員以外の者と雖組合區域内に居住し其の利益を享くる者に對しては夫役を賦課す組合區域の擴張したる場合には新に編入せられたる土地の所有者より加入金を徴收す其の他營造物に對し使用料を徴收し或は積立金を爲し起債等を爲すことを得

(ハ)水利組合聯合會 組合區域の近接せる間に在りては用水引用の施設其の他に關し他の組合と共同行爲を必要とする場合には水利組合聯合會を設け水利組合に準し法人として其の事務を處理することを得

(ト)水利組合の監督 水利組合の監督は第一次を府尹郡守島司、第二次を道長官、第三次を朝鮮總督とす但し府尹郡守又は島司組合長の職務を行ふ場合又は組合の區域數府郡に跨るときは第一次を道長官、第二次を朝鮮總督とす又組合の區域二以上の道に互るときは第一次を朝鮮總督の指定したる道長官、第二次を朝鮮總督とす

道長官の認可事項は(一)不動産の管理方法及處分に關すること(二)積立金品の設置、管理方法及其の處分に關すること但し積立の目的に従ひ處分する場合は此の限りに在らず(三)寄附又は補助(四)一時の借入金(五)豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲すこと等とす朝鮮總督の認可事項は(一)組合格約の變更(二)組合の起債方法、利率償還方法及其の變更(三)組合事業の計畫變更等とす

水利組合概況

大正六年六月末日

組 合	事 務 所 所 在 地	組 合 區 域	事 業 費	設 置 認 可 年 月 日
沃溝西部水利組合	全羅北道群山府	二七七 町	夫役 九三二人 七〇〇 円	明治 四一—二一—八 年 月 日
臨益水利組合	全羅北道益山郡黃登	三、〇〇〇	四四一、四〇三	四二—二—一
密陽水利組合	慶尙南道密陽郡府內面駕谷洞	六三三	一〇〇、〇〇〇	四二—二—五
馬九坪水利組合	忠清南道連山郡夫人處面馬九坪	二七二	五七、五〇〇	四二—三—一
全益水利組合	全羅北道益山郡大場村	一、〇〇〇	一五、〇〇〇	四三—一—二四
臨益南部水利組合	全羅北道益山郡裡里	二、三八四	四四〇、〇〇〇	四二—二—二四
臨沃水利組合	全羅北道群山府	二、八〇〇	一三二、〇〇〇	四四—四—二〇
金海水利組合	慶尙南道金海郡左部面東上里	一、七〇〇	二五〇、〇〇〇	大正元 一—一—九
大正水利組合	平安北道龍川郡內面龍巖浦	六、八〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	三一—〇—三一
迎日水利組合	慶尙北道迎日郡浦項面浦項洞	一、四〇〇	二〇〇、〇〇〇	五一—二—二
古阜水利組合	全羅北道井邑郡古阜面下坪里	三、六〇〇	六一二、〇〇〇	五一—五—二
上南水利組合	慶尙南道密陽郡上南面禮林里	二六二	三四、四〇〇	五一—九—九

組 合	事 務 所 所 在 地	組合區域	事業費	設 置 認 可 年 月 日
大渚水利組合 三橋川水利組合	慶尙南道金海郡大渚面出斗里 平安北道龍川郡楊下面立岩洞	一、九七〇 <small>町</small> 四五〇	二九三、〇〇〇 <small>円</small> 四三、〇〇〇	大正 五―一―一四 六―五―一八

第三節 府郡島臨時恩賜金事業

臨時恩賜金に關しては既に第一章第一節に於て其の由來を記述したるを以て、茲には府郡に於ける臨時恩賜金事業の概況を記すへし之を記するに先ち明治四十三年十月八日寺内總督が道長官及府尹郡守に對し之の趣旨、管理、配與、事業等に付訓示せるものあり左に之を掲ぐ

今ヤ曩日ノ諭告ニ基キ茲ニ臨時恩賜金一千七百三十九萬八千圓ヲ朝鮮各道十二府三百十七郡ニ配與セムトス直接之レカ管理ノ任ニ俾ルヘキ道長官及府郡有司ハ克ク其ノ趣旨ノ在ル所ヲ顧念シ之レカ活用ノ良法ヲ講シ以テ民力休養ノ實績ヲ舉クルコトヲ期スヘシ

抑モ我帝國政府カ斯ノ如キ巨額ノ國帑ヲ朝鮮各道府郡ニ配與スル所以ノモノハ固ヨリ其ノ金額ヲ

直チニ府郡士民ニ配分シ此ノ恩典ヲシテ僅カニ一時ノ急ヲ救フニ止マラシムカ爲メニアラス蓋シ政府ハ府郡士民カ多年積弊ノ餘孽ヲ受ク多ク流離困頓ノ窮境ニ在ルチ憫ミ資金ヲ郡府ニ配與シ道長官ヲシテ管理セシメ之ヲ基本トシテ士民ニ産業ヲ授ク其ノ教育ノ發展ヲ補助シ凶歉アルニ際シテハ之カ救濟ノ資ニ供セシメ府郡士民ヲシテ永ク其ノ惠澤ニ浴セシムトスルニ外ナラス宜シク此ノ意ヲ體シ基金ヨリ生スル利子金額ハ凡ソ其ノ五分ノ三八授産ニ五分ノ一・五ハ教育ニ五分ノ〇・五ハ之ヲ凶歉救濟ノ資ニ充ツルノ方針ヲ以テ事業ヲ計畫シ若ハ適切ナル事業ニ對シテ補助ヲ與ヘ洽ク士民ヲ救濟シ以テ惠撫慈養ノ本義ニ副フヲ要ス素ヨリ之カ管理使用ノ如何ハ偏ニ管理者ノ經營ニ待タサルヘカラスト雖大體左記各項ニ遵由シ努メテ其ノ事業ノ性質經過ヲ覈査シ其ノ效力最モ的確ニシテ其ノ經營最モ實情ニ適切ナルモノヲ選ミ特ニ凶歉ノ救濟ニ關シテハ最モ其ノ方法ノ採擇ヲ慎重ニシ罹災者ヲシテ賑恤ノ實ヲ得セシムヘク苟モ其ノ給與ヲ濫リニシ爲メニ士民ヲシテ恩ニ徇レ勤勞ヲ厭フノ弊風テ生セシメ惠撫慈養ノ本義ニ悖ルカ如キコトナカラシムルヲ要ス

授産 授産ハ先ツ兩班儒生ノ如キ恆産ナキ者ニ對シ産業ヲ授クルノ主旨ナルニ由リ是等ノ者ヲ惠恤スルヲ以テ第一ノ目的トナスヘシ而シテ其ノ經營又ハ補助スヘキ事業ハ地方既ニ素地アリ既ニ國內ニ多少存在スル漉紙及養蠶等ノ如キ經營最モ容易ニシテ奏功確實假令輕微ナルモ依テ以テ糊口ノ資トナスニ足ルヘキモノヲ選擇スルヲ要ス

教育 教育ニ在リテハ力メテ資金ヲ基トシ郷校財産其ノ他ノ收入ヲ加ヘ普通學校ヲ設立スヘシ然レトモ學校ヲ設立スルニ當リテハ教師其ノ人ヲ得基礎確實ニシテ永續ノ見込アルモノナラサルヘカラス若シ俄カニ如此學校ヲ設立シ雖キ場合若クハ既設ノ學校アリテ新ニ設立ヲ必要トセサル場合ニ在リテハ他ニ存スル私立學校ヲ補助シ漸次ニ普通學校ト同一ノ程度ニ進マシムルノ注意ヲ要ス

凶歉ノ救濟 凶歉ノ救濟ハ萬已ムヲ得サル場合ニ之ヲ行ヒ濫施スヘカラサルハ勿論其ノ之ヲ行フニ當リテモ力メテ生業扶助又ハ現物給與等時宜ニ適應セル工夫ニ出シコトヲ要ス

授産事業に在りては兩班儒生其の他恆産なき者に生業を授くるを以て本旨とし且成るべく普遍的に之を施設し其の惠澤の均霑せむことを期したるを以て其の事業は府郡毎に其の情況を參酌して之を

選定せしむ從て事業の種類は甚だ多様に渉れるも大體に於て之を總括すれば養蠶、機業、農事、製絲、製炭、製紙、製麻及水産等に關する傳習事業は最主要なる事項に屬し其の他巡回教師の設置、農蠶、林業、畜産、水産及各種工業等に關する種苗、種畜、器具其の他材料の配付亦概ね各地方に於て施設せる事項たり而して右傳習事業中比較的長期の養成を目的とする傳習所の數は明治四十四年度に於て百八十六箇所生徒數二千五百十二人、大正元年度に於て百三十八箇所生徒數二千六百七十一人、大正二年度に於て百三十六箇所生徒數二千七百五十六人、大正三年度に於て百三十六箇所生徒數二千二百七十九人、大正四年度に於て百十二箇所生徒數二千五十人、大正五年度に於て百〇七箇所生徒數千七百九十六人、大正六年度に於て七十六箇所生徒數千八百四十一人に達し此の外蠶具、蓆、繩、稲扱、製麻、漁撈等に關する短期簡易の傳習は到る所に行はれ其の傳習を受くる者亦毎年數千人を算しつゝあり

教育事業に在りては主として公立普通學校經費を補助し又地方に依り私立學校等にも補助す現に補助を受くる公立普通學校四百四十一校にして此の補助を基礎とし新に公立普通學校を設くるに至りしもの明治四十四年度に於て百三十四校、大正元年度に於て百七校、大正二年度に於て二十四校、大

正三年度に於て十六校、大正四年度に於て十八校、大正五年度に於て二十二校、大正六年度に於て二十一校合計三百四十二校に達せり

凶歉救済事業としては種穀、農具、食糧を主とし其の他必要に依り醫藥、家屋料、被服等を給與するの方法を設けたるも實施以來未だ甚しき凶歉に際會せず二三の道に於て水災又は旱害に因り種穀及食糧給與を行ひたるに過ぎざるは寧ろ幸を調ふへし

今臨時恩賜金配與額を示せば左の如し

道	臨時恩賜金配與額			
	臨時恩賜金配與額	一年度分利子額	事業費	業費
京畿道	二、六四四、五〇〇 円	一三三、二二五 円	七九、三三五 円	三九、六六七 円
忠清北道	七九四、〇〇〇	三九、七〇〇	二二、八二〇	一一、九一〇
忠清南道	一、四五七、七〇〇	七二、八八五	四三、七三一	二二、八六五
全羅北道	一、三一四、八〇〇	六五、七四〇	三九、四四四	一九、七二二
				凶歉救済費
				一三、二二二 円
				三、九七〇
				七、二八八
				六、五七四

全羅南道	一、六九四、〇〇〇	八四、七〇〇	五〇、八二〇	二五、四一〇	八、四七〇
慶尙北道	二、〇四一、三〇〇	一〇、二〇六五	六一、二三九	三〇、六一九	一〇、二〇六
慶尙南道	一、五七七、七〇〇	七八、八八五	四七、三三一	二三、六六五	七、八八八
黃海道	一、〇九四、〇〇〇	五四、七〇〇	三三、八二〇	一六、四一〇	五、四七〇
平安南道	一、〇四六、〇〇〇	五二、三〇〇	三一、三八〇	一五、六九〇	五、二三〇
平安北道	一、一四九、〇〇〇	五七、四五〇	三四、四七〇	一七、二三五	五、七四五
江原道	一、一四六、〇〇〇	五七、三〇〇	三四、三八〇	一七、一九〇	五、七三〇
咸鏡南道	八八三、〇〇〇	四四、一五〇	二六、四九〇	一三、二四五	四、四一五
咸鏡北道	五五六、〇〇〇	二七、八〇〇	一六、六八〇	八、三四〇	二、七八〇
總計	一七、三九八、〇〇〇	八六九、九〇〇	五二一、九四〇	二六〇、九七〇	八六、九九〇

第四節 濟生院

設立の由來 朝鮮に於ては併合以前孤兒養育、不具者救濟等に關する施設は僅に外國人か布教の傍經營せるもの二三を數ふるの外朝鮮人の事業として唯一の京城孤兒院在りたるのみ該院は朝鮮人李蔭和なる者の創始せる所にして當時九十餘名の孤兒を收容しつつありたりと雖基礎薄弱にして經

營極めて困難に、加ふるに實際教養の状況亂雜にして單に衣食を給して漢文の素讀を課するの外何等薰陶教化の術を施さず放縱遊惰に任せ居たりしか明治四十四年六月府令第七十七號を以て濟生院を設立し孤兒の教養、盲啞者の教育及精神病者救療の事業を行ふことなるや京城孤兒院の請願を容れ孤兒全部を濟生院に收容し京城西大門外獨立門通に於て同年九月一日より其の教養事務を開始し養育部と稱せり當時濟生院の基本財産は臨時恩賜金五十萬圓及別に國債報償金の殘餘十一萬三千百五十九圓とを併せて之に充當し事業に要する經費は該基金より生ずる收入、國庫補助金及寄附金を以てせり次で同年八月更に朝鮮に於ける貧民救療資金として恩賜金二百八十五萬五千八百圓の下附ありたるを以て濟生院に於て有する資金は合計三百四十六萬八千九百五十九圓に達せり明治四十五年二月濟生院は當初の事業目的の一たる精神病者救療事業を總督府醫院構内に開始し醫療部と名けたり同年四月朝鮮總督府濟生院官制發布せられ同時に總督府醫院、道慈惠醫院並總督府濟生院を以て組織せる一の特別會計法の發布を見たり仍て前に府令に依り設立せる從來の濟生院は單に資

金を有するに止め其の資金より生ずる利子収入は擧て之を右の特別會計に寄附し一部は貧民救療の資に一部は總督府濟生院事業の經費に充つることとし其の養育部及醫療部の事業全部は其の儘官廳たる總督府濟生院にて繼承せしか同年十二月に至り總督府濟生院は其の養育部を西大門外より北部新橋洞元宣禧宮に移すと共に舊養育部建物に大修繕を加へ盲啞生教育事務の開始を爲し翌年四月より新學期の授業を開始せり大正二年四月に至り同一目的を有する二箇の機關即資金を擁するのみにして事業を營まさる從來の濟生院と是より寄附を受けて事業を營む總督府濟生院とを併存せしむるの必要なきを認め明治四十四年府令第七十七號に依り設立せる濟生院は其の有する資金全部の用途を指定し前記特別會計に寄附して解散せり之と同時に總督府濟生院は從來の濟生院より引繼經營し來れる醫療部の事業は更に之を總督府醫院に附屬せしめたるを以て總督府濟生院は専ら孤兒及盲啞者の教養のみを掌ることとし以て現時に至れり

(イ)養育部 當初京城西大門外獨立門通元崇義廟に在りしか家屋狹隘にして豫定の孤兒を收容する

こゝ能はざるに因り北部新橋洞所在元宣禮宮の建物を以て之に充當し必要なる改築、修繕並一部建物の新營を行ひ大正元年十二月同處に移轉せり構内は廣濶にして北方に綠樹繁茂せる丘陵を負ふて南面せる高燥の地域を占め敷地一萬五百十四坪五一を有す而して構内の建坪は六百坪に近く事務室、教室、作業室、倉庫、炊事場、浴室、衛生室及院兒宿舍並職員官舎等に分れたり而して院兒宿舍は全部在來の溫突舎にして一號より七號に至る七宿舍を有し乳兒及男女別に由り之を區分收容せり曾て京城孤兒院に收容したる者は市井に放浪せる者又は乞丐の群より收容したる者の如し而して此等兒童は孤兒院の放漫なる教養に育成せられて久しく遊惰放逸に慣れたり然るに濟生院に收容したる後は、學齡(八歳)に達せる者は部内に施設せる學校に入學せしめ規律的教育を課すると共に日常節制ある起居を爲さしめ主として精神陶冶に重きを置き從來の弊風たる放逸の性を改め勤勉力行の習性を馴致することを圖れり然るに從來放逸に慣れたる彼等は猝に規律ある生活を頗る苦痛とせるものの如く貧兒の多くは扶養者を説いて退院方を出願し來り又院兒にして逃走を企つる者往往ありたりしか幸に薰陶逐次其の效を奏し現今は殆ど逃走者の跡を絶ちたるのみ

ならず規律的生活に起居し喜んで各種の作業に服するに至れり

部内施設の學校は普通學校の教科程に準し實科教育を重するの方針を執り之が修業年限は當初四箇年と定めたるも大正四年四月の新學期より三箇年程度に改め學齡に達せる者に對し教育を施せり又就學年齡未滿の者には別に幼稚園教育を爲しつつあり左に就學者を示すへし

幼稚園教育を受くる者	一六	男	二	女	一八	計
第一學年在學者	一三		二		一五	
第二學年在學者	一一		一		一二	
總計					四六	六
第三學年在學者	六	男	一	女	七	計

作業は主として簡易なるものを選定し藁仕事、園藝、袋張乃至家事の手傳、特に掃除、炊事補助、被服類の洗濯等を爲さしめ努めて自助の精神並勤勞の習慣に導かむことを期せり

院兒の宿舍内に於ける起居に關しては當初主として幼稚者の外は男子職員を以て之を監督指導に當らしめたるも綿密なる注意と周到なる愛護とは女性を以て之に當らしむるの便なるを認め大正三年末より此の方針の下に保姆の増員を行ひ各宿舍は一名乃至二名を配屬し直接院兒と起居を共

にせしめ以て薄倅なる彼等兒童をして寂寞の境地より救ひ家庭的情味中に保育薰陶を加へつつあり

現在院兒の區分及之の教養に直接關係ある職員左の如し

院 兒

養育部内現在の者	六三	被備中の者	八人
里預け中の者	五五	部外入學中の者	一
農場收容中の者	三一	總計	一五八

院兒教養直接關係者

主 事	一人	保 姆	六人
訓 導	二		
雇 員	三	總 計	一二

又院兒の精神的訓育の效果をして一層切實ならしむる必要より部内に天照皇大神を奉祀し早天神前に參集禮拜を行はしむるのみならず時々訓話を爲し以て化育の本旨に副はしめむとせり
院兒中幼少なる者は成るべく人乳哺育に據るを便さし幼弱者の全部五十五名は目下里預けと爲せ

り院児の體質健康は一般兒童に比し稍劣るを免れず特に新に收容する院児の多數は最も不良の状態に在るを常とすされば之が改善に關しては十分の注意を爲せるは勿論初て之が收容を爲す者の如きは假に隔離室に入れ異常なきに及て混同收容するを例とし以て其の健康の恢復を圖りつつあり京城孤兒院より引續收容せる當時の院児の衛生状態は甚しく不良にして各種皮膚病、眼病、胃腸病等多かりしも之が治療撲滅に關し大に努むる處ありたる結果不良なる衛生状態も逐次改善の實を擧げ現下の佳良なる状況を促進せしめ得たり而して部内には衛生室を設け患者ありたるときは之に移し囑託醫葺看護に従事すべき專任保母を置きて之が治療を擔任せしむ

左に收容院児に關する概況を示すへし

年 度	院 児 收 容			院 児 退			計 數
	收容 數	新收容 數	計	退 數	逃走 數	死亡 數	
大 正 元 年 度	七 七	三 二	一 〇 九	一 五	七	一 〇	七 〇

年 度	收容兒數		退院兒數		逃走死亡		計
	現在原數	四月一日新收容	引扶益取退	院活	院活	院活	
大正二年度	七〇	三八	一〇八	一〇	九	一〇	三〇
同三年度	七八	五二	一三〇	二	四	一三	二二
同四年度	一〇九	四八	一五七	六	三	二〇	二九
同五年度	一二八	二七	一五五	八	二	七	一七
同六年(自四月至六月)	一四九	一九	一六八	六	一	四	一〇
							一五八

年 齡	收容原因				合計
	孤兒	棄兒	迷兒	貧兒	
三歲未滿	三	三九	一	一	四三
五歲未滿	一	一一	一	一	一四
八歲未滿	六	一〇	三	一	二一
十歲未滿	一	三	九	一	一五
					合計

院兒年齡並收容原因別

大正六年九月末日

十二歳未満	四					一七
十五歳未満	一〇					二四
十八歳未満	六					九
二十歳未満	五	一	一	二		一一
二十歳以上	三					四
總計	三八	六七	二七	二五	二	一五八

(ロ)農場 京城を距ること約三里京畿道楊州郡蘆海面に在り大正二年十一月の開始に屬す附屬用地として國有未墾地及同林野地の交附引繼を受けたるものにして面積總計約百七十町歩あり大正二年及同三年に於て其の内未墾地の一部に開墾工事を加へ必要なる溝渠、堤防等の築造を爲し必要に應じ墾田を得るの施設を爲せり

農場建物は大正二年中の新營にして四戸建百七十五坪を有す各戸には宿舍の外農家として必要なる各般の建物及施設を加へたり而して其の宿舍は院兒居室に接して直接院兒の農業指導者たる農夫の室を設けたり

一圓以上二圓未満
二圓以上三圓未満
三圓以上二十圓未満
二十圓以上二十五圓未満

一
三
三
八

一七・六五〇
八・五四〇
五三・六七〇
一八四・八二〇

三十圓以上四十圓未満
四十圓以上五十圓未満
五十圓以上

總計

六
七
七
六〇

二一九・八二〇
三一六・二二〇
三九五・九八〇
一、二八〇・五九〇

(ハ)盲啞部 京城西部天然洞に在り元養育部に於て使用したる建物を以て之に充てたり位置聊か偏在するの嫌あるも市井の雜沓を避け寧ろ盲啞者の養育に利益多き地點を擇へり由來朝鮮に於ては盲啞者に對する特種教育の如き殆んど其の施設を見ず僅に平壤に於て外國人が布教の傍經營せるもの一あるに過ぎずして鮮人は一般に盲啞教育の必要を認めざるか如く盲者にして衣食足るの徒は終生徒食し然らざる者は卜筮を業とし乞丐の如く各戸に就きて施與を受け僅に生活を營むを例とす稀に賦治の技を習ふ者ありと雖到底自活の資を得ること能はず終に乞丐の群に投するを免れざりしか如し次に啞者は盲者に比し廣き職業の範圍を有したるも是亦云ふに足らず斯の如く是等不具者救済に對する特種教育は全然等閑に附せられ之か施設として見るべきもの絶てなかりしか大正二年本院は當初の事業目的たる盲啞教育の事務を開始し之か準備を了るゝ共に生徒の募集を

爲し同二年四月一日より新學期の教授を始めたり

盲啞教育事業が前記の如く未だ朝鮮人間に重要視せられざりしのみならず全然等閑に附せられたる現状より之を見るときは本院に於ける此の特種教育開始に際し應募生徒数は極めて僅少なるへきを豫想したりしも第一回(大正二年三月)に於て三十四名、第二回(大正三年三月)に於て二十三名、第三回(大正四年三月)に於て二十一名、第四回(大正五年三月)に於て二十三名、第五回(大正六年三月)に於て三十名の應募者を見るのみならず各回とも相當の自費志願者を數へ更に女子の志望者を算したるか如きは寧ろ意外とする所なり今盲啞生徒の狀況を掲ぐれば左の如し

盲啞生徒

大正六年六月末日

科別	學年	給費		白費		合計	
		男	女	男	女	男	女
盲本 科 (卒業年限 三箇年)	一	九	一	一	一	一〇	一
	二	四	二	二	二	六	二
	三	六	一	一	一	六	一
計	年	一九	二	三	四	二二	三
	年	九	一	一	一	一〇	一
	年	九	二	一	一	六	二
	計	二五	三	五	七	二〇	八

總計	啞本科 (修業年限 五箇年)				
	五年	四年	三年	二年	一年
三三	一四	三	二	二	五
六	四			二	一
三九	一八	三	二	四	三
一五	二	二	一	一	八
六	五	一		一	二
二一	一七	三	一	二	一〇
四八	二六	五	三	三	二
一二	九	一		三	三
六〇	三五	六	三	六	一六

給費生は男女共全部寄宿舎に入らしめ食事、被服及學用品等一切を官給し卒業後に於ける何等の制限又は義務を附することなく全然救恤の方針の下に之を收容せり生徒の教育に就ては最も深き注意を拂ひ専ら實用的方面に重きを置き各科の修了者は他の補助なくして善く自活し得らるるの技術を教習せしめむとし盲生には鍼治及按摩を啞生には製縫を課せり而して之が實蹟を見るに啞本科は修業年限の關係上未だ卒業生を出さず從て之が需用並自活の狀況を知る能はさるも大正三年三月及大正四年三月の兩度に於て盲速成科を卒業したる者及大正五年三月盲本科を卒業せる生

徒の狀況は極めて良好なるものあり右卒業生は合計三十一名にして内八名は總督府醫院又は道慈惠醫院に於ける「マツサーヅ」技工として雇傭せられ其の他は各出身地又は其の他の都市に於て開業を爲し各相當の收入を得つつあり

第五節 救療機關

併合後帝國が新に朝鮮全道に施したる德澤は固より二三にして止らすと雖就中慈惠救療の機關を設けて其の疾患を治し天壽保全の計を興へたるの一事は亦民心を新政に歸せしめたる所以ならずとせむや而して之が施設としては總督府醫院一、道慈惠醫院十九計二十院を算せり

朝鮮總督府醫院は元大韓醫院と稱せり現在敷地總坪數五萬六千六百八十四坪餘建坪三千五百七十三坪餘を算し患者約四百人を收容することを得へし建物宏壯にして綠樹蒼鬱たる城東の丘上に位し市井の塵寰を隔たり

道慈惠醫院は各道廳(京畿道を除く)所在地及水原、安東、濟州、小鹿島、楚山、江陵、會寧の各地に一院宛を設置し計十九院を算す是等各院は開設當時多くは舊式建物を利用し急須の増築改造に依り

當面の所要に應せしめつつありしか爾來逐次新營又は改築を行ひ舊時の面目を改めたるもの尠しき
 せず又國境對岸地方に於ける救療の普及を圖る爲東間島の鮮人に對し行ひつつある間島施療病院の
 經營を擴張すると同時に巡回診療の日數を増加し又は種痘の普及を圖り更に瑯春地方に於ける者に
 對しても同地方に於ける信用ある開業醫に救療を委託し以て同地方に於ける鮮人綏撫の途を講せり
 而して是等各院の患者總收容力は約千四百人にして其の敷地總坪數六萬五百五十六坪餘建坪七千七
 百十五坪餘を算す

(イ)診療の成績 日韓併合以來大正六年六月末日迄各醫院に於て取扱ひたる總患者實數は三百二十
 萬三百八十二人にして其の延人員は實に千六百六十萬二千三百七十一人の多きに達せり今最近五
 簡年間に於ける統計を掲ぐれば左の如し

朝鮮總督府醫院
 及道慈惠醫院 患者累年比較

年	患者		一箇月平均	千分比例	千分	比例
	總數	延人員				
大正元年	二七七、八九九	一、八八二、二三八	三三、一五八、一五六、八五三	三三九・五	六六〇・四	二八四・九
				八	八	八
						七一四・七
						〇・三

年	患者總數		一箇月平均		千分比例		千分比例	
	總數	延人員	患者數	延人員	普通	施療	內地人	朝鮮人
大正二年	四一五、一六七	二、六四六	二六六	三、四二〇	二八四・一	七一五・九	二三四・七	七六四・二
同三年	四四三、八六八	二、七七〇	八〇六	三、六九二	二九二・四	七〇七・五	二三八・一	七六〇・七
同四年	四九五、八八八	三、一四四	九五五	四、一三二	二八〇・八	七一九・一	二二六・八	七七一・六
同五年	一、一九二、五九六	三、七九二	一、〇八九	三、八八三	三二五・七	六七四・二	二六八・六	七二六・三

本表中大正五年に於て患者總數の激増を見るは從來患者數は毎年の實數を計上したるも五年よりは日日診療人員を積算したるに由る

種別	患者總數		千分比例		千分比例	
	內地人	朝鮮人	合計	普通	施療	一日平均
普通	一三四、二五一	三五、一四三	六四〇	一七〇、〇三四	二四三、三四三	六六六・六九
施療	九、五〇六	六〇、九五五	六四〇	七〇、四六一	一一二、八六八	三〇九・三二
計	一四三、七五七	九六、〇九八	六四〇	二四〇、四九五	三五六、二一一	九七五・九二

朝鮮總督府醫院
及道慈惠醫院
取扱患者

大正五年

朝鮮總督府醫院

道慈惠醫院	普通		總計
	治療	計	
普通	三二〇、二二三	六五、五四七	七九八
治療	七、〇二三	五六七、〇九〇	一、四三〇
計	三一七、二三六	六三三、六三七	二、二二八
普通	四四四、四六四	一〇〇、六九〇	一、四三八
治療	一六、五二九	六二八、〇四五	一、四三〇
計	四六〇、九九三	七二八、七三五	二、八八八
普通			三七六、五五八
治療			五七五、五四三
計			九五二、一〇一
普通			五〇九、四九五
治療			六四六、〇〇四
計			一一、八八二
普通			一、八二五、〇七
治療			四、八四八、六一
計			六、六七三、六九
普通			二、四九一、七六
治療			五、一五七、八四
計			七、六四九、六一

(口)巡回診療 巡回診療は大正元年度中より之が實施を爲し各道慈惠醫院をして専ら之が實行に當らしめつつありたるも更に大正四年度より濟州、楚山、會寧の三院を加へ之を施行せしめつつあり本診療は初め出張診療なる名稱の下に地方往診の途次又は隨時出張の際便宜診療に従事せしめ爲に何れも著大の効果を収めたれども未だ普く各地に之が實施を爲す能はざるを遺憾としたりしか幸に鮮人救療費として巨額なる臨時恩賜金の下附ありたるを以て從來施行せる隨時的の出張診療を廢止し組織的巡回の方法を講し醫員及補助員各一名を以て當時各郡を遍歴せしむることとせしに施行以來の成績極めて良好にして民衆の歡喜云ふへからざるものあるか如し今開始以來大正五

年迄の取扱数を掲ぐれば左の如し

道慈惠醫院巡回診療取扱患者

年	患者		合計	同上延人員	一日平均 患者數
	内地人	朝鮮人 外國人			
大正元年	普通	506	336	4368	?
	施療	72	24,356		
同 二年	普通	578	24,692	13,102	4,50
	施療	1,866	345		
同 三年	普通	311	11,872	6,382,257	2,450
	施療	2,177	119,066		
同 四年	普通	1,419	270	6,147,743	2,293,38
	施療	1,27	109,944		
同 五年	普通	1,546	110,214	6,235,564	2,322,67
	施療	1,413	338		
同 六年	普通	81	26,488	6,883,342	2,696,62
	施療	1,494	26,826		

同 五年 計	普通	一、六四九	一、〇二〇	二、六六九	八、六七八	三、六六	
	施療	三三三	一三六、八一九	二、四七三	一三九、三二五	六〇三、五二六	二五四、六五
		一、六八二	一三七、八三九	二、四七三	一四一、九九四	六一二、二〇四	二五八、三一

(ハ)教育事業 朝鮮總督府醫院附屬醫學講習所は元大韓醫院附屬醫學學校の組織を改めたるものにして朝鮮人醫師及内鮮人助産婦、看護婦の養成を掌れり開始以來各科の卒業生徒數は未だ多しと云ふ能はさるも醫科に於て百十二名、助産婦及看護婦科に於て合計七十一名を出せり卒業生の大多數は自宅開業し其の他は官私醫院又は慈惠醫院等に奉職し孰れも相當の信賴を受けつつあり然るに同所は大正五年度より別に獨立せる京城醫學專門學校と改稱せられ主として醫師の養成を掌ることとなりたれば總督府醫院に於ては耐來單に助産婦、看護婦の養成のみを取扱ひ目下兩科を通し現在生徒十七名を算す

助産婦及看護婦の養成は前記の外各道廳所在地の慈惠醫院に於ても之を取扱ひつつあり内地人朝鮮人併せ收容するの組織なるも之か希望者極て僅少なり然れども助産婦普及の要は志望者の漸増

を俟つ能はざるものあるを認め大正二年度より速成助産婦科を設置し短期養成の方法を講し之か生徒には主として憲兵（下士以下）又は巡査の家族中より志望者を收容することとし給費制度を開き之を收容教育せるに其の成績は極て良好にして既に卒業者を出すに至れり生徒數左の如し

種 別		助産婦科		看護婦科		速成助産婦		合 計	
給費	生	二	一三	二七	四二	二	一五	三二	四二
自費	生	二	一五	二七	四二	二	一五	三二	四二
總計	生	四	二八	四二	七四	四	三〇	六四	八四

助産婦及看護婦養成

大正六年三月末日

朝鮮總督府醫院及道慈惠醫院に關する經費は朝鮮總督府濟生院の經費と共に朝鮮總督府醫院及濟生院特別會計の支辨に屬す而して該特別會計は若干の政府支出金、資金利子、院收入並寄附金其の他の收入を以て之か歳出に充當せり而して本特別會計に於て有する現在資金中有價證券並現金は左の

如く總計四百二萬六千六百九十二圓の多きに上れり此の巨額の資金中大部分は恩賜金に屬するものなり

		維持資金及特別資金		
種別	公債(額面)	現金	合計	
總督府醫院	一七九、一〇〇 <small>円</small>	一一四 <small>円</small>	一七九、二一四 <small>円</small>	
道慈惠醫院	三、四九一、一五〇	六	三、四九一、一五六	
濟生院	三五六、一〇〇	三三二	三五六、三三二	
總計	四、〇二六、三五〇	三四二	四、〇二六、六九二	
濟生院には特別資金なし				

여 백

第七章 財政及經濟

第一節 財政

一 歲計

舊韓國政府時代に於ては豫算の編成なきにあらざりしも唯形式のみにして確的なる歲計を知ることはざりしか統監府設置後明治四十年に至り初めて之れを整理の緒に就くを得次で明治四十三年併合の事あるや其の十月一日より朝鮮總督府特別會計を設定せられたり然るに當時未だ朝鮮に於ける歲入のみを以て獨立經營を爲す能はざりしを以て一部は一般會計よりの補充金を仰き之を支辨することなれり

右の狀況なりしを以て新政施行後は専ら諸般の制度を改善し、民力の充實、財源の涵養等に勗め其の後三箇年を経過したる大正三年度に至り特別會計設定の主旨に従ひ一般會計よりの補充金は同年

度以降五箇年内に於て漸次之を遞減し大正八年度以降は全く之を辭し獨立自營の實を擧ぐるの計畫を樹て現に之が實行中にあり

今明治四十年年度以降の歳入歳出を表示すれば左の如し

舊韓國政府歳入歳出

年	歳入			歳出		
	經常	臨時	合計	經常	臨時	合計
明治四十年	九,九一六,三三三 円	六,五四二,四三八 円	一六,四五八,七六〇 円	一〇,一九三,二七六 円	七,一八二,六五五 円	一七,三五五,九三一 円
豫算同 四十一年	一三,四一〇,三四七 円	九,八六二,八八九 円	二三,二七三,二三六 円	一四,七一一,九三四 円	八,六三七,九二五 円	二三,三五八,八五七 円
同 四十二年	一五,二七八,九〇三 円	一四,〇四九,一〇八 円	三九,三三八,〇一一 円	一八,二六三,八五二 円	一〇,九六三,六九七 円	二九,三二七,五四九 円
決算同 四十三年	八,八七四,九四七 円	四,五三二,一四九 円	一三,四〇七,〇九六 円	八,五九三,二八〇 円	四,八七五,三五二 円	一三,四六八,六三二 円

本表明治四十三年は八月二十八日迄の歳計なり

朝鮮總督府特別會計歳入歳出

年 度	經 常 歲		臨 時 入		經 常 歲		臨 時 出			
	入	計	入	計	入	計	入	計		
特別會計 明治四十三年度 製用豫算 大正元年度 同 二年度 同 三年度 同 四年度 同 五年度 同 六年度	一、九五三、二七二	四	一〇、三六八、四七五	四	三三、三二一、七四七	四	八、三四〇、三九〇	四	一八、二五七、三八三	
	七七八、四三四		二、二二二、一九五		二、九〇一、六一九		一、五四三、五四一		一、三三〇、一三三	二、八六三、六五四
	二、五五六、四一七		二、六七〇、二八八		五、三二八、四六四		二、五五六、一〇五		二、〇六一、二五七	四、六一七、三三〇
	二、八七六、四七〇		三、三三六、一五四		六、二二六、八九四		二、八〇〇、二七八		三、七七八、〇九六	五、一七八、一三四
	三、一三四、七五四		三、一七四、九四四		六、三〇九、三、四八七		三、一六九、〇三〇		二、一七六、四二四	五、三、四四、四八四
	三、五六九、二三八		二、六三五、五三三		六、二〇四、七六〇		三、二二七、七四九		三、二八三、〇八五	五、五〇九、九八三
三、八八六、九三〇		三、三八九、三一六		六、二七三、四九五		三、四七三、四八三		三、一四五、〇九四	五、六八六、九四七	
四、一五二、一六六		一、八二八、七三三		五、九八四、八九八		三、七〇七、一五五		三、二七五、八四三	五、九八四、八九八	
四、四五一、八三四		一、八〇七、〇九六		六、二五八、九三〇		三、八九一、三三四		二、三六四、〇二五	六、二六三、一五九	

本表明治四十三年度は同年十月一日朝鮮總督府特別會計設置以後にして平壤鑛業所特別會計歳入歳出を併算せり、製用豫算は八月二十九日より九月三十日迄の歳入歳出なり

朝鮮總督府特別會計歳入歳出豫算科目別

(一) 歳入

科 目	大正六年度		大正五年度		比 較	
	增	減	增	減	增	減
經 常 部	租 稅	一八、〇八八、七九〇 円	一六、六八四、九二八 円	一、四〇三、八六二 円	〇	〇
	印 紙 收 入	二、四六六、七八〇	二、四〇二、七八七	六三、九九三	〇	〇
鮮 朝 入	驛 屯 賭 收 入	一、四六五、五一六	一、五二〇、八五七	〇	五五、三四一	〇
	官 業 及 官 有 財 產 收 入	二一、六八四、九七七	二〇、〇九八、三八五	一、五八六、五九二	〇	〇
入 合 計	雜 收 入	八一二、二八三	八五四、六六九	〇	四二、三八六	〇
	入 合 計	四四、五一八、三四六	四一、五六一、六二六	二、九五六、七二〇	〇	〇
臨 時 部	事 業 費 資 金 借 入 金 受 入	〇	一〇、五八五、〇〇〇	〇	一〇、五八五、〇〇〇	〇
	補 充 金	五、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	〇	二、〇〇〇、〇〇〇	〇
前 年 度 繰 入 金	公 債 募 集 金 受 入	〇	七〇二、三七二	〇	七〇二、三七二	〇
	合 計	一八、〇七〇、九六三	一八、二八七、三七二	〇	二一六、四〇九	〇
入 總 計	六二、五八九、三〇九	五九八四八、九九八	二、七四〇、三一	〇	〇	

(二) 歲出

科	目	大正六年度	大正五年度	比	較
經 常 部	李王家歲費	一,五〇〇,〇〇〇 <small>円</small>	一,五〇〇,〇〇〇 <small>円</small>	〇	〇
	總督府費	三,四六八,九九〇	三,三〇〇,六七三	一六八,三一七	〇
	裁判及監獄費	二,八三八,八三〇	二,七二四,二六九	一一四,五六一	〇
	警務費	三,三四九,九五六	三,三一四,四七二	三五,四八四	〇
	地方學費	四,二九〇,九八八	四,二七三,九〇一	一七,〇八七	〇
	諸學校關	四六四,二〇四	四六七,九一八	〇	三,七二四
	稅業模範場	六〇六,五四九	五九五,五七三	一〇,九七六	〇
	勸業模範場	二一六,四四〇	二一一,三〇四	五,一三六	〇
	平壤鑛業	一,〇五三,七五五	七八五,七五一	二六八,〇〇四	〇
	中央試驗所	一一四,九八六	一一三,四五二	一,五三五	〇
	營林試驗所	一,四四八,四三九	一,二〇四,九二四	二四三,五一五	〇
	遞信業費	三,八五九,九八〇	三,七七五,八四三	八四,一三七	〇
	鐵道作業費	七,六八七,一七四	七,六九〇,四五五	〇	三,二八一

科		目		比		較	
		大正六年度		大正五年度		增減	
部	經常	修繕支出金	三三七,五〇〇	三二〇,〇〇〇	一七,五〇〇	四	四
	一般會計繰入金	三六三,〇一五	三六三,〇一五	〇	〇	〇	〇
部	朝鮮醫院及濟生院支出金	五,四七〇,五〇八	五,〇一一,六〇六	四五八,九〇二	〇	〇	〇
	豫備金	四二〇,〇〇〇	四二〇,〇〇〇	〇	〇	〇	〇
合計		三八,九九一,三一四	三七,〇七三,一五五	一,九一八,一五九	〇	〇	〇
臨	勸業	二五〇,七九五	二三二,五九〇	一八,二〇五	〇	〇	〇
	憲兵補助員費	一,一〇四,四二九	一,一〇四,四二九	〇	〇	〇	〇
臨	朝鮮部隊費	一二七,九七三	一二七,九七三	〇	〇	〇	〇
	臨時土地調查費	一,三四五,九六九	三,七八五,一六四	二,四三九,一九五	〇	〇	〇
臨	補助費	三,〇一二,二二六	三,〇五〇,六〇八	三八,三八二	〇	〇	〇
	臨時出資金	六四,〇〇〇	六四,〇〇〇	〇	〇	〇	〇
營	臨時出資費	一一,二九一,八八七	一,〇八四,〇八七	二〇七,八〇〇	〇	〇	〇
	土木繕修費	三,九五一,三六六	三,二〇二,五一一	七四八,八五四	〇	〇	〇

朝鮮鐵道用品資金及朝鮮森林の兩特別會計は明治四十四年度より施行せられたり、雖概ね各從前の韓國鐵道用品資金及韓國森林特別會計を繼承したるものなり、左に其の他の特別會計をも併記掲出すへし、但し朝鮮森林特別會計は大正四年度限廢止せられたり。

歳	出	總	計	時		部	
				鐵道建設及改良費	平壤鑛業所探鑛費	合	計
				九、四二〇、〇〇〇	八、三九〇、〇〇〇	一、〇三〇、〇〇〇	〇
				二六、四八一	三九、八八〇	〇	〇
				六一四、一〇六	五六〇、五三〇	五三、五七六	〇
				二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	〇	〇
				四六、九九一	四六、九九一	〇	〇
				三六一、〇〇〇	三六一、〇〇〇	〇	〇
				三七二、八三八	四〇六、二二八	〇	三三、三九〇
				〇	二九九、八五一	〇	二九九、八五一
				一、二五五、九六三	〇	一、二五五、九六三	〇
				三七四、二二一	〇	三七四、二二一	〇
				二三、六四〇、二四五	二二、七七五、八四三	八六四、四〇二	〇
				六二、六三一、五五九	五九、八四八、九九八	二、七八二、五六一	〇

各特別會計歲入歲出

年 度	入 歲					出 歲								
	明治四十四年度	大正元年度	二年年度	三年年度	四年年度	同	同	同	同	同				
朝鮮鐵道用品資金	三、八六〇、〇一九	四、一〇六、〇二〇	四、三二二、六六四	四、三九五、一二二	四、三九一、一二五	五、五五八、二一七	五、五五六、八七〇	三、七七九、二七七	四、四一四、三八九	四、二二三、六〇三	四、四五三、三〇二	四、三三二、四〇四	五、五五八、二一七	五、五五六、八七〇
朝鮮森林資本勘定	九六一、二〇一	九五〇、六九五	九三一、六二一	八七八、〇八八	八一二、五八六			一〇、五一九	一九、五三五	五三、五三三	六七、二二八	一一、一三五		
朝鮮森林收益勘定	一、一〇七、九一八	一、三三三、六四四	一、二七九、六三七	八九〇、三七六	九八六、〇九九			一、〇七七、二九四	一、二四九、八七九	九二五、九〇六	九八四、二九〇	八七〇、三七三		
朝鮮醫院及濟生院	九三三、〇三三	九三七、五四七	九〇九、六七七	一、〇〇二、六七二	一、〇二七、六二二	一、〇四六、三七七		七二〇、四六九	八六五、六七四	八〇〇、八三二	九二〇、五九五	一、〇二七、六二二	一、〇三二、九四二	
同資金部	三二四、八六五	四八、三〇四	七一、四九五	一三、五〇〇	七、六〇三			二〇六、三四九	一一四、〇五五	六三、八〇〇	七三、三一三	四九、七五五		

本表大正四年度迄は決算額にして同五年度以降は豫算額なり

一 繼續費

繼續費に屬する費目の總額及其の年割額左の如し

費目	總額	繼續費總額及年割額									
		大正五年 度以前 支出額	大正六 年度	大正七 年度	大正八 年度	大正九 年度	大正十 年度	大正十 一年度	大正十 二年度		
總督府廳 舍新營費	三〇〇〇,〇〇〇 円	一〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円	五〇〇,〇〇〇 円
道路修築 費	一八七〇,〇〇〇 円	一〇三七,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	一五〇〇,〇〇〇 円	八三〇,〇〇〇 円
海關工事 費	一三,四二八,九九五 円	九,〇六三,九九五 円	一三,四五〇,〇〇〇 円	九,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円	一,一〇,〇〇〇 円
仁川港碎 岩費	四三,一〇六一 円	三七五,二五七 円	五五八,〇〇〇 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円
釜山港陸 上設備費	五〇〇,〇〇〇 円	— 円	三〇〇,〇〇〇 円	一〇〇,〇〇〇 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円
鐵道建設 及改良費	九六七,九六二,二八七,七六二,六二二 円	九四〇,〇〇〇 円	— 円	九七五,〇〇〇 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円	— 円

費目	總額	大正五年以前												
		支度額	支度額	支度額	支度額	支度額	支度額	支度額	支度額	支度額	支度額			
平壤鐵業所擴張費	2,900,000 円													
鎮南浦水道工事費	2,100,000 円													
赤田川改修費	1,045,000 円													
京城郵便局新營費	2,000,000 円													
新義州江津及市街整理費	2,200,000 円													
總計	1,578,737,749 円	1,487,027,700 円	1,419,676,713 円	1,385,888 円	3,178,149 円	2,300,000 円	1,900,000 円	1,100,000 円	2,000,000 円	2,000,000 円				

三 帝國一般會計より支出の朝鮮經營費

最近數年間に帝國政府が朝鮮經營の爲に支出したる經費は左の如し

朝鮮經營費

所管	決算		現計		豫算	
	大正二年度	大正三年度	大正四年度	大正五年度	大正六年度	
	円	円	円	円	円	
經常部	陸軍	三、七三九、七二三	三、六一二、一四五	三、三八一、五八八	六、三七七、六五八	六、五一七、七四二
	海軍	一一九、〇六五	一一四、八五八	二〇二、二三〇	二六〇、一三〇	二九二、八五七
合計	三、八六八、七八八	三、七二七、〇〇三	三、五八三、八一八	六、六三七、七八八	六、八一〇、五九九	
臨時部	陸軍	一〇、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
	海軍	三、五四三、九五二	二、九一一、九七〇	二、八二八、五四二	一、七一〇、七八〇	二、六九〇、二七七
合計	八二〇、八六〇	四三〇、六九九	五五八、七三七	三八九、〇三〇	四二七、八八二	
總計	一四、三六四、八二二	一二、三四二、六六九	一一、三八七、二七九	九、〇九九、八一〇	八、一一八、一五九	
總計	一八、二三三、六〇〇	一六、〇六九、六七二	一四、九七一、〇九七	一五、七三七、五九八	一四、九二八、七五八	

本表の外大正六年度に於て朝鮮兵器製造所豫算額臨時部二、〇〇〇、〇〇〇圓あり

前表を軍事費及行政費に區分すれば左の如し

第七章 財政及經濟

所管	決算		現計		豫算	
	大正二年度	大正三年度	大正四年度	大正五年度	大正六年度	
軍陸	七、二八三、六七五	六、五二四、一一五	六、二一〇、一三〇	八、〇八八、四三八	九、二〇八、〇一九	円
海軍	九四九、九二五	五四五、五五七	七六〇、九六七	六四九、一六〇	七二〇、七三九	
軍費合計	八、二三三、六〇〇	七、〇六九、六七二	六、九七一、〇九七	八、七三七、五九八	九、九二八、七五八	
行政費	一〇、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	

四 朝鮮總督府特別會計所屬國債

大正六年九月末現在の國債額は七千八百六十八萬七千二百八十圓にして内起業資金公債及第一回四分利公債千四百一萬六千五百七十圓は舊韓國政府の起債に係り道路修築、海關工事、水道工事、金融及官業の資金、土地調査、教育及衛生設備等に使用し其の他の國庫債券及借入金六千四百六十七萬七百十圓は朝鮮總督府特別會計設定後朝鮮事業公債法に依り起債したるものにして鐵道の建設及改良、道路の修築、海關工事等の諸事業費に使用せしものなり

國債現在額

大正六年九月末日

種別	発行及借入年月	発行及借入額	利子歩合	据置年限	償還年限
起業資金債	明治四十一年十二月	一、二、九六三、九二〇	六分五厘七毛一	十箇年	十五箇年
第一回四分利公債	同 四十三年二月	一、〇五二、六五〇	四分	同	五十箇年
朝鮮事業費國庫債券	大正二年四月	二九、九九九、五〇〇	五分		大正六年十二月
事業費借入金	同 自三年至五年	二七、一七一、二一〇	五分五厘		大正六年十二月
同	同	一、五〇〇、〇〇〇	六分		大正六年十二月
同	同	六、〇〇〇、〇〇〇	六分		大正六年十二月
同	同	七、八六八七、二八〇	六分一厘		大正六年十二月
總計					大正六年十二月

國債及借入金の過去五年間に於ける各年度末現在を對照すれば左の如し

種別	大正元年度	大正二年度	大正三年度	大正四年度	大正五年度
第一起業資金債	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇	—	—
第二起業資金債	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇
第一回四分利公債	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇

種別	大正元年度	大正二年度	大正三年度	大正四年度	大正五年度
朝鮮事業費國庫債券	二、〇九四、六七七	三〇、〇〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇、〇〇〇	二九、九九九、五〇〇
特別會計一時借入金	—	—	—	—	—
事業費借入金	二四、九〇〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇	一五、一四〇、八七一	二五、〇八六、二一〇	三四、六七一、二一〇
總計	四六、〇一一、二四七	五六、五一六、五七〇	六二、六五七、四四一	六九、一〇二、七八〇	七八、六八七、二八〇

五 租 稅

(一)地稅 地稅は朝鮮現行内國稅の首位を占め大正六年度に於ける之が豫算額は九百五十八萬九千五百十三圓にして内國稅豫算總額千三百六十三萬四千七百二十三圓の七割に當れり

地稅は大正三年制令第一號地稅令に依り田(畑)、畝(田)、塋(宅地)、池沼、雜種地又は有料借地の社寺地に之を課し地稅施行地域中土地調査完了の地域は土地臺帳、土地調査未施行の地域は結數連名簿(土地臺帳に該る)に登録したる土地の所有者、質權者、典當權者又は地上權者より徵收す地稅の課稅標準は結と稱す、結とは一定量の收穫を獲へき地積の稱呼にして束を單位とし十束を一頁、百頁を一結と稱す而して一結當の地積は土地の肥瘠に由りて異同あり其の廣大なるもの即

地味の瘠悪なるものは一萬二千百坪、其の狹少なるもの即地味の肥沃なるものは三千二十五坪なるあり其の廣狹は一筆地毎に相同しからず

地税の稅率は之を結價と稱し十一圓、九圓、八圓、六圓、五圓、四圓、二圓の七種に區分せり斯の如く稅率に區分を設けたるは地税の物納制を金納制に改めたる際各地の交通の便否又は穀價の高下を斟酌したるに職由す

地税の納期は第一期は十二月一日より同月二十八日限にして第二期は翌年二月一日より同月末日限なり

今道別に結數及地稅額を表示すれば左の如し

道	結數				合計	稅額
	田(畑)	畚(田)	堡(宅地)	池沼		
京畿道	二六、九九三・六	四四、九七七・七	三、〇五三・六	三・八	七五、三二七・四	七四七、〇七五
忠清北道	二三、二一八・四	二七、八七一・〇	二、九六一・五	一・二	五四、〇六〇・六	五四六、九〇二
忠清南道	二三、二八四・八	六九、六六二・六	四、八〇六・七	五・七	九七、九二六・一	一、〇七〇、三九九
					結 計	四
						稅 額

結數及稅額

大正六年一月一日

道	結				合	計	稅額
	田(畑)	畚(田)	袋(宅地)	池沼			
全羅北道	二一、八八四・七	八二、八七九・九	四、五六二・八	一・七	二六八・三	一〇九五九七・五	一、一八八、一二三
全羅南道	三五、八五四・五	九六、〇六二・四	六、五二三・八	一・六	四四五・八	一三八、八八八・二	一、五二六、三八一
慶尙北道	五〇、七五〇・五	九、九三九・八	六、一〇六・二	一三・五	九七・四	一三六、九〇七・六	一、二五四、八一七
慶尙南道	三二、七九九・九	七三、二四一・八	四、九八五・六	九・九	五三三・三	一三、五七一・八	一、一八〇、八六四
黃海道	五七、七九一・九	二二、五四四・九	三、一〇〇・〇	一・二	六八二・八	八五、一一〇・九	一、八九三、八四四
平安南道	五二、九八六・五	一〇、五九〇・八	二、三五九・六	〇・一	二九四・七	六七、二三一・九	三九九、四五七
平安北道	三八、二九三・八	九、八七二・四	一、六一九・三	〇・六	四三六・八	五〇、二二三・一	二六四、六〇八
江原道	一四、五二八・一	一〇、七七〇・八	一、一〇三・〇	三・九	六九・〇	二六、四七五・〇	二三八、二七六
咸鏡南道	五七、一八八・七	一〇、〇五三・五	二、六六七・九	—	一、四七四・六	七一、三八四・八	三三三、一二三
咸鏡北道	四二、六七五・六	一、七八九・〇	七三〇・三	—	四一七・〇	四五、六一二・一	一二六、六一六
總計	四七八、二五一・八	五四一、二五七・一	四四、五八〇・九	四三・七	八、二四三・一	一、〇七二、三七六・七	九、七七〇、四八五

(口)市街地稅 市街地稅は大正三年制令第二號市街地稅令に依り左記二十六市街地に在る田(畑)、畚(田)、袋(宅地)、雜種地又は有料借地の社寺地に之を課し土地臺帳に登録したる土地の所有者、

質權者、典當權者又は地上權者より徵收す

市街地税は土地の時價を標準として決定したる地價を課税標準とし其の千分の七を課す而して地價は十年毎に一般に之を改正す

市街地稅施行市街地

道	市街地	地名
京畿道	京城府、仁川府、水原郡水原面、開城郡松都面	
忠清北道	清州郡清州面	
忠清南道	公州郡公州面、大田郡大田面、論山郡江景面	
全羅北道	群山府、全州郡全州面	
全羅南道	木浦府、羅州郡羅州面、光州郡光州面	
慶尙北道	大邱府、金泉郡金泉面	
慶尙南道	釜山府、馬山府、晉州郡晉州面	
黃海道	海州郡海州面	
平安南道	平壤府、鎭南浦府	

平 安 北 道 新義州府、義州郡義州面
 咸 鏡 南 道 元山府、咸興郡咸興面
 咸 鏡 北 道 清津府

今市街地坪數、地價及市街地稅額を掲ぐれば左の如し

市街地坪數、地價及市街地稅額

大正六年一月一日

道	市		街		地		社寺地	合計	地價		市街地稅	
	川(畑)	一畝(田)	一袋(宅地)	池沼	雜種地	坪			坪	坪	坪	円
京畿道	二八五三三五	二九〇二四	三三三九四	七四	二九一三二	四八二	一	六五七四〇六八	二九五三七〇三三	二〇六七五九		
忠清北道	三三、四一八	三九、〇七九	八〇、六四五	一	四八二	一	一	一五三、六二四	一六七、八三九	一、一七四		
忠清南道	二二九、一六七	一八四、八三一	三八七、三八〇	一	二四、四六八	五九六	一	八四六、四四二	一〇八、三九六五	七、五八七		
全羅北道	二二、三四五	七六、二八〇	四四二、二四六	六三	四一、八九三	一	一	七四三、三九六	一、四二一、四五五	九、九五〇		
全羅南道	二七〇、九八四	二三八、二〇七	六三八、〇八八	一	九三、八四六	一	一	二、四〇三、一六九	二、九一八、六六九	一、六八三		
慶尙北道	七五、九六四	八七、六七〇	四四六、二八二	二七五	一四、七四九	一	一	二、一〇〇、〇九六	二、九一八、六六九	二、〇四三		
慶尙南道	一六三、〇八一	二二〇、六三六	八八一、六七九	四、四三二	四二、三八〇	一	一	三、七二七、二九八	六、九〇四、〇三三	四、八三二		

黃海道	四三〇三二	三六九四九	二五三六八九	一	三、一六七	一	七六六八三七	四三九八七四	三〇七九
平安南道	五二九、八一六	八五五四四	七四九四三	一	一八五〇〇〇	一	一、五四九、七六二	三、四六六、二八〇	二、四二六三
平安北道	一〇五、七八〇	四〇、八二三	二二六三三	一	三五、八一七	一	二、七〇、〇三三	二、五五、六〇八	一、七九九
咸鏡南道	五五〇、五二二	五二、〇四四	五〇四、一六一	一	一〇、一五五	一	二、〇〇八、三四七	一、六五八、五五三	二、六〇九
咸鏡北道	九二六、一四七	一	一一二、四〇九	一	一	一	一、〇三八、五五六	二、四、三二六	一、八三六
總計	八、五九九、三四四	三、〇九〇、六二七	七、九五一、六五〇	七九二	六八、二四五六	五九六、二〇二	二、九二五、八七七	五、〇五一、八七七	三、五三、六三三

(ハ)戸税 戸税は自己の家屋に居住すると否かを問はず一戸を構へ獨立の生計を爲す者に對し一戸に付一箇年金三十錢を賦課す

戸税の納期は二期にして其の年四月十分の五及其の年九月其の十分の五を納付せしむ

戸税は家屋税法を施行する市街地以外の地域に居住する者に賦課す

(ニ)家屋税 家屋税は隆熙三年法律第二號家屋税法に依り指定したる市街地に在る家屋所有者に對し毎年四月の現在家屋に依り一構毎に左の等級、課税標準及税率に依り五月及十一月の二期に分ち之を賦課す

家屋税課税標準及税率

等級	課税標準	税	率	等級	課税標準	税	率
一等	三十間以上	甲種 金八 乙種 金五	圓圓	三等	四間以上	甲種 金八 乙種 金五	十錢
二等	十間以上	甲種 金二 乙種 金一圓三十錢	圓	四等	四間未滿	甲種 金四 乙種 金三	十錢

甲種とは石造、煉瓦造又は瓦葺の家屋を謂ひ乙種とは甲種に屬せざる家屋を謂ふ間を以て計算し難き構造の家屋は方六尺を一間として計算す

家屋税法を施行する市街地は大正元年十月朝鮮總督府令第二十三號を以て指定せらる

(ホ)酒税 酒税は大正五年七月制令第二號酒税令に依り之を賦課す

酒税令に於て酒類と稱するは酒精及酒精を含有する飲料を謂ひ之を左の三類に分つ

一、醸造酒 清酒、濁酒、藥酒、麥酒の類にして醱其の他の醱酵液より製成したるもの

二、蒸餾酒

燒酎、高粱酒、酒精の類にして醪其の他の醱酵液、諸酒の原料、酒粕其の他の物より蒸餾して製成したるもの

三、再製酒

白酒、味淋、松露酒、甘紅露、梨薑酒の類にして醸造酒又は蒸餾酒の一種と他の酒類又は其の他の物とを混和して製成したるもの

酒類を製造せむとする者は製造場一箇所毎に免許申請書を所轄府郡島に提出して免許を受くるものとする

酒類を製造する者又は酒類を保稅地域より引取る者に對しては其の造石數又は引取石數に應し左の割合に依り酒稅を課す

一、醸造酒

朝鮮酒たる濁酒

一石に付

七十錢

朝鮮酒たる藥酒

一石に付

一圓五十錢

麥酒

一石に付

二圓

前記以外の醸造酒 一石に付 五 圓

二、酒精以外の蒸餾酒

原容量百分中純酒精の容量三十以下のもの

一石に付 二 圓

原容量百分中純酒精の容量四十五以下のもの

一石に付 五 圓

原容量百分中純酒精の容量四十五を越ゆるもの

一石に付 原容量百分中純酒精の
容量一箇毎に二十錢

三、酒 精 一石に付 原容量百分中純酒精の
容量一箇毎に二十錢

四、再製酒 一石に付 原容量百分中純酒精の容量一箇毎に二十錢
但し一石に付六圓に満たざるときは六圓とす

一酒造場に於て一酒造年度間清酒は百石以上、麥酒は五百石以上、酒精又は朝鮮酒に非ざる濁酒

は五十石以上、朝鮮酒たる焼酎は二石以上其の他の酒類は一種に付五十石以上を製造する者に非ざれば酒類製造の免許を與へず

酒類製造者前項の制限石數以上の製造を爲さざりしときは變災其の他已を得ざる事故に因ることを證明するに非ざれば制限石數に相當する酒税を課す此の場合に於て製造を爲さざりし石數に對する酒税は一石に付酒精以外の蒸餾酒は二圓、酒精は七圓、再製酒は六圓の割合とす

(ハ)煙草税 煙草税は大正三年三月制令第五號煙草税令に依り之を賦課す

煙草を耕作せむとする者は免許申請書を耕作地の所在を管轄する府郡島に提出して免許を受くるものとす

煙草を製造し又は煙草を販賣せむとする者は製造場又は店舗一箇所毎に免許申請書を製造場又は店舗の所在を管轄する府郡島に提出して免許を受くるものとす

煙草税を分ちて耕作税、製造税、販賣税及消費税の四種とす

耕作税に左の區別に従ひ煙草耕作者より毎年之を徴收す

二五〇

第一種耕作

植付株數九百未滿

五十錢

第二種耕作

植付株數

九百以上
二萬未滿

二圓

第三種耕作

植付株數二萬以上

四圓

製造税は製造場一箇所毎に毎年一月一日現在工場の坪數に依り左の區別に従ひ煙草製造者より之を徴收す

工場の坪數三十坪未滿

三十圓

工場の坪數

三十坪以上
五十坪未滿

五十圓

工場の坪數

五十坪以上
百坪未滿

百圓

工場の坪數百坪以上は百坪迄を増す毎に五十圓を加ふ

販賣税は店舗一箇所毎に左の區別に従ひ煙草販賣者より毎年之を徴收す

煙草卸賣者

十圓

煙草小賣者

第一種 賣上金見込年額三百圓未滿

一圓

第二種 賣上金見込年額三百圓以上

二圓

煙草製造者又は販賣者が七月一日以後新に免許を受けたるときは其の年分の税金は半額を徴收す

消費税は製造煙草の小賣定價百分の十の割合を以て製造煙草を製造場又は保税地域より引取るべき其の引取人より之を徴收す

朝鮮外に製造煙草を輸移出するときば消費税を免除す

(ト)關稅 關稅は輸移入貨物又は輸移出貨物の價格に従ひ之を課す

關稅を大別して輸移入税及輸移出税の二とす輸移入税の稅率は貨物の種類に依り最高二割以下一割五分、一割、八分、七分五厘及五分の區別あり輸移出税の稅率は總て五分とす

(チ)噸稅 噸稅は外國貿易の爲外國に往來する船舶開港に入港したるとき之を課す其の稅率は登簿噸數一噸又は積量十石に付二十五錢とす但し噸稅納付の日より四箇月間は何れの開港に於ても之を納付するを要せず

(リ)鹽稅 鹽稅は光武十年(明治三十九年)十一月勅令第六九號鹽稅規程に依り之を賦課す
鹽の製造を爲さむとする者は免許申請書を所轄府郡島を經由して朝鮮總督に提出し其の免許を受くるものとす

鹽稅は鹽製造者に對し製造斤數百斤に付金六錢の稅率を以て賦課す但し百斤未滿の端數は百斤と

して計算す

(ヌ) 鑛税 鑛税は大正四年十二月制令第八號鑛業令に依り鑛業權者に之を賦課す而して鑛税とは鑛産税及鑛區税の二者を總稱したるものなり

鑛産税は鑛産物の價格百分の一の割合を以て之を課す

鑛區税は鑛區千坪又は河床延長一町毎に一箇年金六十錢を課す但し千坪又は一町未滿の端數は之を千坪又は一町として計算す

(ル) 法人の所得税 法人の所得税に關し大正五年七月勅令第八十三號に依り明治三十二年法律第十七號所得税法中法人の所得税に關する規定を朝鮮に施行せられたるか内地と同一なれば茲に贅せず

(チ) 漁業税 漁業税は明治四十五年二月制令第一號漁業税令に依り之を賦課す

漁業税は漁業者に對し漁業の種類に従ひ左の課税標準及税率に依り之を賦課す

一、一定の水面を區劃して魚類の養殖を爲す漁業

區劃水面千坪迄毎に

年額 一圓

二、免許に依る漁業にして前號に該當せざるもの

其の漁場に於ける一年の採捕物見積價格千圓以上のものに在りては百圓迄毎に

年額 二圓

同上五百圓以上千圓未滿のものに在りては百圓迄毎に

年額 一圓五十錢

三、捕鯨業

捕獲の鯨一頭毎に

四 十 圓

四、「トロール」漁業

螺旋推進器を備ふる漁船（補助機關として備ふるものを除く）一隻毎に

年額 五百圓

補助機關として螺旋推進器を備ふる漁船一隻毎に

年額 二百圓

其の他の漁船一隻毎に

年額 百圓

五、潜水器を使用する漁業

潜水器一臺毎に

年額 二十圓

六、鯨族以外の海獸獵業

銃器一挺毎に

年額 十圓

七、風力、潮流又は螺旋推進器に依り漁船を運航せしめ蠶網を引曳して爲す漁業（「トロール」漁業を除く）

螺旋推進器を備ふる漁船（補助機關として備ふるものを除く）一隻毎に

年額 六十圓

補助機關として螺旋推進器を備ふる漁船一隻毎に

年額 四十圓

其の他の漁船にして肩幅十尺以上のもの一隻毎に

年額 三十圓

其の他の漁船にして肩幅七尺以上十尺未満のもの一隻毎に

年額 十圓

同上肩幅七尺未満のもの一隻毎に

年額 五圓

八、海濱に於て場所を一定せず漁網を曳揚げ若は曳寄せて爲す漁業又は河湖に於て漁網を曳揚げ

若し曳寄せて爲す漁業

淨子繩の長百五十尋以上の曳網類を用ゐるものに在りては網一統毎に

年額 十二圓

淨上繩の長百五十尋未満の曳網類を用ゐるものに在りては網一統毎に

年額 四圓

鯛地漕網を用ゐるものに在りては網一統毎に

年額 十圓

九、漁船を以て囊網を張置し又は繰寄せて爲す漁業

肩幅四尺以上の漁船一隻毎に

年額 五圓

肩幅四尺未満の漁船一隻毎に

年額 二圓

十、捲網類を用ゐて爲す漁業網一統毎に

年額 十五圓

十一、漁網を張下し又は流下し網目に魚類を刺さしめ又は纏はしめて爲す漁業

螺旋推進器を備ふる漁船一隻毎に

年額 百圓

其の他の漁船にして總噸數二十噸以上のもの一隻毎に

年額 三十圓

其の他の漁船一隻毎に

年額 六圓

十二、前各號に該當せざる漁業

一漁船に三人以上乗組み漁網を用ゐて爲す漁業は漁船一隻毎に

年額 四圓

一漁船に三人以上乗組み延繩其の他釣鈎具を用ゐて爲す漁業は漁船一隻毎に

年額 三圓

其の他漁船を用ゐる漁業は漁船一隻毎に

年額 一圓

漁船を用ゐざる漁業は漁業者一人毎に

年額 五十錢

免許漁業者は未だ何人も漁業を爲したることなき漁場に於て漁業を爲すときは朝鮮總督に申請して三年以内の期間を限り税額の減免を受くることを得

漁業税は所定の納付書に收入印紙を貼用して所轄府郡島に納付するものとす但し漁業者に於て便宜とするときは現金を以て納付することを得

漁業税は左の時期に之を徴收す

一、前記漁業税(チ)第二項第五號乃至第十二號の漁業は許可狀又は鑑札の有効期間全部の税額を許可を與ふるとき又は鑑札を交付するとき

二、同第二項第一號、第二號及第四號の漁業は初年度分の税額を免許又は許可を與ふるとき

三、前號の漁業の二年以後に於ける漁業税は其の年度の四月

四、同第二項第三號の漁業の漁業税は毎年二月

(ロ)船税 船税は大正三年四月制令第一三號船税令に依り之を賦課す

船税は朝鮮船舶令第一條の日本船舶所有者及朝鮮各港の間に於て運送を爲す船舶法第一條の日本船舶所有者より左の區別に従ひ毎年之を徴收す

一、總噸數十噸又は積石數百石未滿の船舶 四十錢

二、總噸數十噸又は積石數百石以上の船舶 一噸又は十石迄毎に 四 錢

漁業専用船、倉庫船、船橋組成の爲定繋する船舶其の他航行の用に供せざる船舶、端舟其の他櫓

權のみを以て運轉し又は主として櫓權を以て運轉する舟、總噸數五噸又は積石數五十石未満の帆船等に對しては船税を賦課せず

(カ)人蔘税 人蔘税は隆熙二年七月法律第一五號人蔘税法に依り之を賦課す

人蔘税法は紅蔘專賣法に指定せる人蔘特別耕作區域(京畿道開城、長湍の二郡、黃海道金山、瑞興、平山、鳳山、黃州、遂安の六郡及平安南道中和郡)を除きたる以外の地方に於て人蔘を耕作する者に施行す

人蔘税は人蔘耕作者より毎年收穫すへき蔘圃一間に對し金十錢の割合を以て徵收し其の納期は毎年十一月末日とす

(コ)登録税 登録税は明治四十五年制令第十六號朝鮮登録税に依り之を徵收す不動産に關する登記又は證明を受くるときは左記の區別に従ひ登録税を納むるものとす

- 一、相續に因る所有權の取得は不動産價格の千分の七
- 二、贈與、遺贈其他無償名義に因る所有權の取得は不動産價格の千分の五十

- 三、賣買其の他有償名義に因る所有權の取得は不動産價格の千分の三十五
- 四、所有權の保存は不動産價格の千分の五
- 五、共有物の分割は分割に因りて受くる不動産の價格千分の五
- 六、永代の地上權の取得は不動産價格の千分の二十五
- 七、地上權、永小作權の取得は存續期間十年未滿は不動産價格の千分の二、二十年未滿は千分の三、三十年未滿は千分の四、三十年以上は千分の五、存續期間の定めなきものは千分の五
- 八、賃借權の取得は存續期間十年未滿は不動産價格の千分の一、十年以上は千分の二存續期間の定なきものは千分の一
- 九、地役權の取得は要役地價格の千分の一
- 十、先取特權の保存又は取得は債權金額又は不動産工事費用豫算金額の千分の六
- 十一、質權、抵當權の取得は債權金額の千分の六
- 十二、競賣、強制管理の申立の債權金額は千分の六
- 十三、假差押、假處分の債權金額は千分の四

十四、抵當ある債權の差押は債權金額の千分の六

十五、相續財産の分離は所有權に付ては不動産價格の千分の六、所有權以外の權利に付ては不動産價格の千分の一

十六、請求又は申立に因り抹消せられたる登記の回復は不動産每一箇二十錢

十七、假登記は不動産每一箇二十錢

十八、附記登記又は附記證明は不動産每一箇十錢

十九、登記又は證明の更正、變更又は抹消は不動産每一箇十錢

以上の外船舶登記に關する登録税は(一)相續に因る所有權の取得(二)贈與、遺贈其の他無償名義に因る所有權の取得(三)一、二以外の原因に因る所有權の取得、(三の二)委付(四)所有權の保存、(五)賃借權の取得(六)抵當權の取得、(七)競賣の申立(八)假差押、假處分(九)抵當ある債權の差押(十)請求又は申立に因り抹消せられたる登記の回復(十一)假登記(十二)附記登記(十三)登記の更正、變更又は抹消とす

船籍の登録税は(一)新規登録(二)轉籍(三)除籍(四)登録の變更の四とす

海員の登録税は(一)新規登録(二)登録事項の變更の二とす

財團法人又は營利を目的とせざる社團法人の登録税は(一)法人の設立、設立後の事務所設置又は事務所の移轉(二)登記事項の變更消滅若は廢止、登記の更正若は抹消法人の解散、清算人の選任解任若は變更又は清算の結了とす

商事會社其の他營利を目的とする法人の登録税は(一)合名會社、合資會社の設立(二)合名會社、合資會社の出資増加(三)株式會社、株式合資會社の設立(四)株式會社株式合資會社の資本増加(五)株式會社、株式合資會社の第二回以後の株金拂込(六)合併又は組織變更に因る會社の設立(七)合併に因る會社資本の増加(八)社債(九)第二回以後の社債拂込(十)支店設置(十一)本店又は支店の移轉(十二)支配人の選任又は代理權の消滅(十三)登記事項の變更、消滅又は廢止(十四)登記の更正又は抹消(十五)合名會社、合資會社設立の取消(十六)解散(十七)清算人の選任、解任又は變更(十八)清算の結了とす
礦業權に關する登録税は(一)礦業權の設定(二)礦業權の變更(三)同上移轉(四)抵當權の設定(五)順位の變更に因る抵當權の變更(六)抵當權の移轉(七)共同礦業權者の脫退(八)滯納處分以外の原因に因る礦業權又は抵當權の處分の制限(九)廢業に因る礦業權の消滅(十)登録の更正、變更

又は抹消とす

右の外(一)商號の設定又は取得(二)支配人の選任又は代理權の消滅(三)商法第五條又は第七條の規定に依る登記(四)民法第七百九十四條、第七百九十五條又は第七百九十七條の規定に依る登記(五)前各號の登記事項の變更、消滅若は廢止又は登記の更正若は抹消(六)船舶管理人の選任又は代理權の消滅(七)法人の合併に因る權利の取得に付不動産又は船舶に關する登録税あり

第二節 貨幣

朝鮮の幣制は從來幾多の變遷を重ねたりしか明治三十八年に至り貨幣の根本的整理に著手し先づ幣制を改正し其の品位量目を帝國貨幣と同一となし新貨幣を發行して其の流通普及に努め舊白銅貨及葉錢の回收に努めたり而して舊白銅貨は明治四十二年十二月限り全く其の通用を禁止し葉錢は漸次引上の結果其の流通額大に減少し新貨幣も亦到る處圓滿に流通するに至れり而して明治四十三年八月併合以來朝鮮の通貨は帝國貨幣を以て統一するの方針を採り舊韓國貨幣は一切鑄造を停止し明治四十四年三月より從來發行したる分は漸次帝國貨幣と交換して引上ぐることをせり而して韓國銀行

は朝鮮銀行と改稱せられたるを以て銀行券改刷の必要を生じ百圓券は大正三年九月、壹圓券は大正四年一月、五圓券拾圓券は同四年十一月より發行するに至りたり
 今最近數年間に於ける貨幣流通高及朝鮮銀行券發行高を掲ぐれば左の如し

年	貨幣流通高				
	内地各通貨	舊韓國貨	朝鮮銀行券	葉錢	合計
大正元年末	三、七三六、七七九	三、九八八、六七八	三、二八六、一三三	九、三三六	一〇、〇〇〇
同 二年末	三、四四六、六九三	三、〇三三、六八三	二、一五二、二七六	—	九、六三二
同 三年末	三、三五一、三三六	二、〇九九、五六四	一、七三六、四三二	—	七、一四三
同 四年末	四、七五七、三三三	一、八〇九、九〇九	三、〇四六、二八〇	—	九、六一三
同 五年末	五、四〇一、〇〇二	一、九〇二、一四四	三、三六三、六二七	—	一〇、六六六
同六年六月末日	五、四六四、三三四	一、八八六、一六〇	三、八〇六、二〇〇	—	一〇、一五六

朝鮮銀行券中には滿洲に於ける流通額を包含せるも其額判明せず

朝鮮銀行券及小額仕拂手形發行高

年	百圓券	拾圓券	五圓券	壹圓券	五錢券	貳錢券	拾錢券	合計	指數
大正元年末	— 円	九六六〇〇〇 円	四七三〇五〇〇 円	二二二八八〇〇 円	二六六〇 円	三〇〇〇 円	五五三〇〇 円	二五五五〇〇〇 円	100
同 二年末	— 円	一〇六七〇〇〇 円	三九一八五〇〇 円	一〇九三七〇〇 円	二六六〇 円	三〇〇〇 円	五五三〇〇 円	二五六九三三六〇 円	101
同 三年末	一七五〇〇〇〇 円	八二八八〇〇〇 円	二二七二五〇〇 円	九〇七三九〇〇 円	二六一〇 円	二九八〇 円	五三八〇 円	二二八五〇三七〇 円	105
同 四年末	二五五〇〇〇〇 円	一八三五〇〇〇 円	四八七五〇〇 円	一五二七四一〇〇 円	二六一〇 円	二九六〇 円	五三三〇〇 円	三四三八七五〇〇 円	134
同 五年末	二五二八〇〇〇 円	一六四〇五〇〇〇 円	七五五四五〇〇 円	一〇一八二七〇〇 円	X 四八八八五〇〇 円	X 三二七八〇〇 円	X 二五六四〇〇 円	四六六七〇八〇 円	182
同 六年六月末日	二二〇九〇〇〇 円	一四九六三〇〇〇 円	六七三三五〇〇 円	一五八八七〇〇〇 円	X 三八九〇〇〇 円	X 二五五〇〇〇 円	X 三六三〇〇〇 円	三九八九三七〇〇 円	156

本表中×印を附したるは満洲にのみ流通する小額仕拂手形にして外書とす

第三節 金融

一 金融機關

朝鮮に於ける金融機關の濫觴は明治十一年第一銀行釜山支店設置に始まり次て十八、百三十銀行等各

地に支店を設け之を前後して朝鮮人に依り大韓天一(朝鮮商業)、漢城の諸銀行設立せられたり超へて同三十九年農工銀行、同四十年より地方金融組合、同四十一年東洋拓殖會社の各設立を見又韓國銀行は中央銀行として同四十二年設立せられ後朝鮮銀行と改稱したり而して現今に於ける銀行店數は本店十九にして朝鮮内に八十六と内地及滿洲其の他に十四の支店出張所を有するに至れり

各種銀行一覽

大正六年六月末日

銀行	支店及出張所	資本金及支店元金		開業年月日	銀行	支店及出張所	資本金及支店元金		開業年月日
		千円	千円				千円	千円	
朝鮮銀行	三	三〇〇〇〇	三〇〇〇〇	明治四十二年十一月二十四日	朝鮮商業銀行	六	一〇〇〇	明治三十二年三月七日	
第一銀行支店	二	八〇〇	八〇〇	同十一年五月四日	韓一銀行	四	五〇〇	同三十九年八月八日	
十八銀行支店	八	二五〇	二五〇	同二十三年一月一日	湖西銀行	三	三〇〇	大正二年七月四日	
百子銀行支店	四	六五〇	六五〇	同二十五年七月二十日	三和銀行	一	三〇〇	同五年十一月十日	
密陽銀行	一	五〇	五〇	同四十年三月一日	大邱銀行	一	五〇〇	同二年七月七日	
七星銀行	一	五二	五二	大正元年八月一日	鮮南銀行	一	三〇〇	同元年九月二日	
京城銀行	一	一〇〇〇	一〇〇〇	同二年九月五日	慶南銀行	一	五〇〇	同元年九月二十一日	
漢城銀行	七	三〇〇〇	三〇〇〇	明治三十六年二月七日	釜山商業銀行	三	五〇〇	同二年四月二十一日	

銀行	支店及出張所	資本金及支店元金	開業年月日	銀行	支店及出張所	資本金及支店元金	開業年月日
漢湖農工銀行	一〇	千円 一〇〇〇	明治三十九年六月二日	光州農工銀行	五	千円 三〇〇	明治三十九年八月六日
慶尙農工銀行	七	六〇〇	同 三十九年六月十六日	咸鏡農工銀行	五	二〇〇	同 三十九年九月二十日
平安農工銀行	八	二〇〇	同 三十九年六月二十五日	總計	八六	三三三〇一	
全州農工銀行	四	三〇〇	同 三十九年七月七日				

本表中「印」を附したるは支店元金なり

各金融機關總況

(イ) 運轉資金の内譯

種別	大正六年 上半期末	同五年末	同四年末	同三年末	同二年末	同元年末	明治四十 四年末
政府貸下金	二九四、四七六	二九九、一四七	三〇〇、九五八	三〇一、七五六	三〇五、五九六	三三三、六六六	三二四、六七七
拂込資本金	二九、九七三	二六、三三八	二六、九五七	二五、八三九	二二、七〇四	二〇、五〇一	一五、七〇〇
積立金及繰越金	三、七三三	一四、五三〇	二七、四三三	二七、〇七九	一五、七五五	一七、〇一八	四九、二四九

銀行券發行高	五九八五七三〇	四六、六七〇、八〇〇	三、四三、八七、五〇〇	二、一八五、〇三、七〇〇	二、五、六、九三、二六〇	二、五、五、〇、四〇〇	二、五、〇、〇、六、四〇〇
農工債券發行高	X 100,000	X 100,000	二、三、九、五、〇〇〇	二、九、一、〇、〇〇〇	二、九、九、〇、〇〇〇	一、七、八、〇、〇〇〇	一、八、七、〇、〇〇〇
諸預り金	五〇、八、一、六〇〇	四、四、二、九、三、五、六〇	三、五、九、〇、三、九、三、八	三、三、五、二、一、六、一	三、四、三、七、八、二、九	二、八、七、二、一、九、九	二、〇、六、二、三、四、五、〇
借入金及爲替尻	七、三、三、九、七、九、七	七、九、九、五、九、三、一	八、〇、五、四、七、四、三	一、〇、一、三、三、九、四、四	七、六、六、〇、五、五、四	七、六、四、五、〇、七、七	五、二、九、七、七、五、二
外國爲替賣	二、八、九、三、三	—	—	—	—	—	—
雜勘定	二、六、三、三、三、七	二、八、七、五、六、九、三	三、五、九、三、五、九、一	四、二、一、〇、〇、七、九	四、七、三、一、四、七、四	四、一、四、一、八、二、八	二、一、一、五、七、六、一
總計	一、四、〇、四、九、一、〇、一、四	一、三、五、三、八、四、六、二、一	一、一、六、四、〇、〇、九、三、七	一、〇、一、三、三、一、〇、八、八	一、〇、一、七、三、一、三、八、四	九、九、七、〇、五、八、八、七	七、三、三、四、七、六、七

本表中×印を附したるは小額仕拂手形發行高なり

(ロ)資金運轉の狀況

種別	大正六年 上半期末	同五年末	同四年末	同三年末	同二年末	同元年末	明治四十 四年末
政府貸上金	七、五、〇、〇、〇、〇、〇 円	七、五、〇、〇、〇、〇、〇、〇 円	七、五、〇、〇、〇、〇、〇、〇 円	七、五、〇、〇、〇、〇、〇、〇 円	七、五、〇、〇、〇、〇、〇、〇 円	一、〇、〇、九、四、六、七、七 円	四、五、九、四、六、七、七 円
農工及拓殖 資金貸付	一、五、七、四、〇、七、三、〇 円	三、三、一、八、七、〇、〇、〇 円	二、二、九、七、一、八、三 円	二、一、七、四、八、七、六、三 円	八、六、七、七、八、〇、九 円	四、八、三、〇、一、七、三 円	三、四、一、九、六、八、四 円

種別	大正六年						
	上半期末	同五年末	同四年末	同三年末	同二年末	同元年末	明治四十 四年末
第一銀行券償却 資金貸付其他	五七九六九三四 円	五八〇、五八四 円	五七三三八九〇 円	六二二、三六六 円	六、五三三、六六六 円	六九二四、八六六 円	七一九一八六 円
銀行券發行	一三三三三、〇四〇	一七、二八、一、五四〇	一、一六〇〇、五四〇	七、四三三、三〇〇	八、九三三、九五〇	八、七六六、六二〇	六一九〇、四九〇
正貨準備	四八一八七、三六三	五、二六五、九二九	四三〇、九、八八三	四三、二六八、九八六	四、五二二、〇八三	四、二六〇、一〇九九	三〇、二五三、一七三
諸貨出金	三三三三三、七八一	一九、一六八、四〇三	一六、七五二、二九七	一五、四二四、一八一	一四、八三二、五八一	一三、九七七、一五五	一〇、八六三、一八一
所有物 <small>土地、建物、什器 有價證券、地金銀</small>	四四七、八一四〇	三、四八三、〇〇二	三、五八八、六二八	一、六二六、八三五	一、五三三、二九五	三、六〇七、一七二	二、七八三、七四六
預け金及爲替尻	三九七、八二〇	—	—	—	—	—	—
外國爲替買	—	—	—	—	—	—	—
雜勘定	二二七、七六九三四	一四、五八九、一五四	七、三六四、七三六四	六八、一七〇、六五	五、三三四、〇九三	五、三二〇、五八	五、三八三、七四〇
手許在高	二、五五六、二八三	二、七三三、七〇九	二、三〇八、一八一	二、三七〇、五九三	二、九一四、九〇八	一、三三七、七四七	二、六五九、七三〇
總計	一四〇、四九一、〇二四	一、三三二、八四六、三二	一、一六四、〇〇九、九七	一、〇二三、三三〇、八八	一、〇一七、二一三、八四	九二七、〇五八、八八七	七三三、四七六、七

朝鮮銀行鮮外支店出張所の分は本表中に算入せず

二 金利

從來朝鮮に於ける金利は非常に高率に失し爲に産業の發達上勢からさる障害ありしを以て農工銀行地方金融組合を各地に設置して之を低下に易めたる結果漸次低落を示し來りたるか尙一般金利に制限を附し準據すへき規矩を示すの必要を認め明治四十四年十一月朝鮮利息制限令を發布せり其の利率左の如し

一 元金百圓未滿

年三割以下

一 元金百圓以上千圓未滿

年二割五分以下

一 元金四千圓以上

年二割以下

但質屋營業者の貸借元金五十圓未滿及市場に於ける貸借元金三十圓未滿の利息には適用せず

三 朝鮮銀行

朝鮮に於ける國庫金の出納、銀行券の發行、其の他中央銀行の業務は從來株式會社第一銀行京城總支店をして之を取扱はしめたるか、財政の膨脹經濟の發展に伴ひ別に金融の中樞たる中央銀行設置の必要を認め明治四十二年十月設置せられたる韓國銀行は第一銀行より中央銀行としての業務を繼承し

同年十一月より業務を開始せり而して併合後四十四年三月朝鮮銀行法の發布と共に同行は朝鮮銀行と改稱せり

朝鮮銀行の資本金は二千萬圓にして中央銀行として國庫金の出納、銀行券の發行を爲すの外左の業務を營む

(一)爲替手形其他商業手形の割引、(二)平常取引する諸會社銀行又は商人の爲手形代金の取立、(三)爲替及荷爲替、(四)確實なる擔保附貸付、(五)諸預り金及當座貸越勘定、(六)金銀貨貴金屬及諸證券の保護預り、(七)地金銀の賣買及貨幣の交換、(八)尙政府の認可を受くるときは公團體に對し無擔保貸付を爲すことを得、營業の都合に由りては國債證券、地方債券其他確實なる有價證券を買入るることを得るものとす

朝鮮銀行は本店を京城に置き朝鮮内樞要地に支店出張所を設け尙ほ爲替の調節及貿易助長の爲め内地に在りては東京、大阪、神戸、滿洲に在りては安東縣、大連、奉天、長春、哈爾濱、四平街、開原、營口、吉林、龍井村又露領浦鹽に松田銀行部の名稱の下に支店出張所を設置せり而して滿洲

に在りては金本位制の補助貨缺乏の爲め商取引に困難を感ずるを以て小額仕拂手形を發行することとなり發行準備其の他に就ては銀行券に準し大正五年六月十二日より五十錢、二十錢、十錢券の三種を發行したるか大正六年六月末日に於ける發行高は十萬七百二十圓に達したり

朝鮮銀行總況

年	公稱 資本金	稱拂 金	込 金	積立 金	政下 府金	借入 金額	貸出 金	銀行 發行高
大正元年末	10,000,000	7,500,000	5,353	1,100,000	3,000,000	3,334,707	3,093,344	25,500,000
同 二年末	10,000,000	7,500,000	13,400	1,100,000	3,000,000	1,865,073	3,369,241	25,693,260
同 三年末	10,000,000	10,000,000	32,000	1,100,000	4,925,260	1,605,519	3,278,890	21,850,370
同 四年末	10,000,000	10,000,000	37,500	1,300,000	3,000,000	2,578,188	3,031,042	34,375,100
同 五年末	10,000,000	10,000,000	51,000	1,100,000	3,000,000	1,728,088	3,560,345	46,270,800
同六年六月末日	20,000,000	15,000,000	15,415	1,100,000	3,000,000	2,057,888	3,340,158	39,825,780
								1,007,100

本表中×印を附したるは滿洲にのみ流通する小額仕拂手形にして外書とす
本表には朝鮮外支店の分を包含せず

朝鮮銀行利率

大正六年六月末日

預金利率		貸出利率	
常座預金	特別常座預金	諸貸出金	常座貸越
日歩 最高 最低 普通	日歩	割引手形	日歩 最高 最低 普通
五厘 五厘 五厘	一錢	二錢七厘 一錢九厘 二錢四厘	二錢七厘 一錢 二錢六厘
定期預金	諸預金	諸貸出金	日歩 最高 最低 普通
年利 一箇年以上 六箇月以上	日歩 最高 最低 普通	日歩 二錢二厘乃至三錢一厘	二錢七厘 一錢 二錢六厘
五五分	九厘 七厘 一厘		

四 農工銀行

農工銀行は舊韓國財政整理の當時徵稅制度の變革に伴ひ地方金融の梗塞を慮り先づ樞要地に政府倉

庫を設け其の資金を貸付けたりと雖固より一時の急を救済せむとするの施設に過ぎざりしか故に産業の興起、金融の調節に關する根本方策を確立する目的を以て明治三十九年三月農工銀行條例を發布し政府は其の株式を引受け或は無利子貸下金を爲して其の創設を援け之を設立を見たるものにして政府は毎に周到なる指導監督を加へ其の發展を助長するに勗めたるが現今本店六（京城、平壤、大邱、全州、光州、元山）及支店三十九を有し地方産業の開發に貢獻したる事尠からず而して財界の進運に伴ひ大正三年五月新に農工銀行令を發布したり今各農工銀行の業務要項を列記すれば左の如し

(イ)二十年以内の年賦償還の方法に依る不動産を抵當とする貸付、(ロ)五年以内の定期償還の方法に依る不動産を抵當とする貸付、(ハ)農業者又は工業者二十人以上連帶して債務を負ふ者に對する五年以内の定期償還の方法に依る無擔保貸付、(ニ)公共團體に對する第一號又は第二號の方法に依る無擔保貸付、(ホ)地方金融組合、漁業組合其他營利を目的とせざる産業に關する法人に對する第一號又は第二號の方法に依る無擔保貸付、(ヘ)朝鮮の産物を擔保とする貸付、(ト)朝鮮の産物の貯藏を主たる目的とする倉庫業者の發行する預證券、質入證券若は倉荷證券に對する貸

付又は地方金融組合の發行する倉荷證券に對する貸付、(チ)朝鮮に於て農業又は工業を營むことを主たる目的とする株式會社の株券又は社債券に對する貸付、(リ)爲替及荷爲替、(ヌ)手形の割引にして右第イ號乃至第ハ號の貸付は資金を左の事項に使用する場合に限る

一、開墾、排水、灌漑又は耕地土質の改良

二、耕作道路の築造又は改良

三、殖林、牧畜

四、種苗肥料其の他農業用又は工業用の原料の購入

五、農業用又は工業用の器具、機械、舟車、獸畜の購入

六、農業用又は工業用の建物の築造又は改良

七、前各號の外農業又は工業の改良

尙當分の内普通銀行業務を兼營繼續することを得せしめたり

銀行	資本金	拂込 本金	積立金	預金	貸出金	農工債券 發行高	政下 金府
漢湖農工銀行	1,000,000 円	550,000 円	134,870 円	238,062 円	394,105 円	1,000,000 円	421,500 円
平安農工銀行	200,000	100,000	131,800	218,664 円	315,699 円	500,000	396,900 円
慶尙農工銀行	600,000	300,000	151,500	180,330 円	255,915 円	600,000	290,000 円
全州農工銀行	300,000	150,000	88,400	82,998 円	138,941 円	400,000	60,700 円
光州農工銀行	300,000	150,000	61,500	91,141 円	108,829 円	300,000	90,000 円
咸鏡農工銀行	200,000	119,890	73,000	135,381 円	133,057 円	100,000	160,110 円
總計	2,600,000	1,469,890	524,070 円	947,798 円	1,347,114 円	3,000,000 円	1,499,990 円
大正五年末	2,600,000	1,469,890	440,155 円	801,710 円	1,171,338 円	1,739,000 円	1,459,990 円
同 四年末	2,600,000	1,469,890	417,031 円	645,637 円	1,146,278 円	2,319,500 円	1,459,990 円
同 三年末	2,600,000	1,469,890	416,682 円	471,882 円	1,155,468 円	2,910,000 円	1,459,990 円
同 二年末	2,600,000	1,467,945 円	479,339 円	459,992 円	1,158,363 円	2,990,000 円	1,469,990 円
同 元年末	2,600,000	1,348,710 円	386,277 円	446,965 円	1,045,676 円	1,780,000 円	1,479,990 円

五 普通銀行

普通銀行中第一、十八、百三十、密陽、七星、京城及三和の七銀行は内地人の設立に係り内密陽、七星、京城及三和の四銀行は朝鮮に本店を有するも其の他の三銀行は支店、出張所なり

漢城及朝鮮商業銀行は政府に於て相當援助を爲し業務の發達を助け來りしか漢城は曩に三十萬圓を三百萬圓に増資し朝鮮商業は元天一銀行と稱したるか改稱後漢城共同倉庫會社を併合したり其の他韓一及湖西銀行も朝鮮人の設立に係り又大邱、鮮南、慶南及釜山各商業銀行は朝鮮人合同經營に屬するものなり

從來内地人と朝鮮人とに適用の銀行法規を異にせしも朝鮮人間の經濟的關係益密接を加ふるに隨ひ朝鮮人合同經營銀行の設立せらるるもの多く法規適用上支障尠からざるを以て之を統一を計る爲め大正元年十月銀行令を發布せり

銀行	公稱 資本金	拂込資本金	積立金	政下 府金	預金	貸出金
第一銀行支店	—	八〇〇,〇〇〇	—	—	五,九五五,五七四	四,二五三,九〇七
十八銀行支店	—	一,二五〇,〇〇〇	—	—	三,五七八,七六三	四,六三六,一三九
百三十銀行支店	—	六五〇,〇〇〇	—	—	三,一七一,一一九	二,一二〇,二三三
密陽銀行	五〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇	九,五〇〇	—	四三,二四一	八七,二八九
七星銀行	五一,〇〇〇	五一,〇〇〇	—	—	四〇,一二八	八九,五九五
京城銀行	一,〇〇〇,〇〇〇	三五〇,〇〇〇	八二,〇〇〇	—	五〇三,八三六	五九九,八三一
漢城銀行	三,〇〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	七四,〇〇〇	四〇,〇〇〇	三,一三一,四二九	三,二四五,二五七
朝鮮商業銀行	一,〇〇〇,〇〇〇	六八一,二五〇	二七〇,三〇〇	二四五,四九七	一,九三四,六二七	二,〇九一,九二五
韓一銀行	五〇〇,〇〇〇	二五〇,〇〇〇	一九〇,〇〇〇	—	八九二,三一二	一,三三五,六四六
湖西銀行	三〇〇,〇〇〇	一五〇,〇〇〇	七〇〇〇	—	四三,二三〇	一六〇,一七五
大邱銀行	五〇〇,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇	一八,〇〇〇	—	二三九,三八九	四六七,九八〇
鮮南銀行	三〇〇,〇〇〇	七五,〇〇〇	一〇,九〇〇	—	一六一,五一七	二一三,五四六
慶南銀行	五〇〇,〇〇〇	一二五,〇〇〇	一三,〇〇〇	—	一三六,二八一	三〇八,三一五
釜山商業銀行	五〇〇,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇	六,九〇〇	—	三二六,一八二	三九八,九五四
三和銀行	三〇〇,〇〇〇	七五,〇〇〇	—	—	一〇五,九〇五	一二四,九二〇

銀行	公稱		積立金	政府		預金	貸出金
	資本	金		貸下	金		
總計	八、〇〇一、〇〇〇	三、七〇七、二五〇	六八一、六〇〇	二八五、四九七	二〇、二六三、五三三	二〇、一三三、七〇三	
大正五年末	七、五七六、〇〇〇	三、三七六、〇〇〇	六〇二、七二〇	三三一、四九七	一九、四二七、三八八	二一、二八九、五三七	
同 四年末	七、二九〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	五六〇、〇一五	三四九、五三六	一三、三八八、五一四	一八、八八一、五五五	
同 三年末	七、二九〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇	四八五、八六〇	三六七、五七六	一一、五四六、五一七	一七、八三〇、九七九	
同 二年末	七、二九〇、〇〇〇	三、一七〇、〇〇〇	四一九、八八三	三八五、六一六	一一、一八六、〇六二	一八、五四五、〇五七	
同 元年末	四、九九〇、〇〇〇	二、三六五、〇〇〇	二六一、二二九	五四一、六九六	一〇、一二三、三九五	一六、六八一、一三五	

本表中*印を附したるは支店元金なり

六 手形交換所

輓近朝鮮財界發展の結果商業取引漸次頻繁を加へ手形殊に小切手の授受盛なるに伴ひ銀行間に於て手形交換及不渡手形に對する制裁の必要を感ずるこゝ切なるに至りたるを以て京城に於て明治四十

三年七月一日手形交換所を設立し京城各銀行を其の組合銀行とし組合銀行間の手形小切手の交換を開始し次て仁川に於ては明治四十四年一月四日、釜山に於ては同年四月一日何れも手形交換所を設立して交換事務を開始したり今各交換所に於ける交換高を表示すれば左の如し

手形交換所手形交換高

種別	手形交換所手形交換高					
	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	計	
交換所	枚數	220,111	284,396	307,021	391,098	1,208,626
	交換金額	6,453,337	10,967,619	11,100,349	13,333,333	41,846,636
交換所	枚數	111,801	109,676	118,100	133,333	472,910
	交換金額	15,228,221	19,726,109	21,849,158	29,888,481	86,792,069
總計	枚數	331,912	394,072	425,121	524,431	1,676,536
總計	交換金額	21,681,558	30,693,728	32,949,507	43,221,814	136,546,607
交換種別	小切手	259,455	364,454	377,303	344,903	1,346,765
	送金爲替手形	25,494	29,622	28,351	30,669	107,736
約束手形	34,888	1,174	5,034	5,955	47,071	

種 別	大正二年		大正三年		大正四年		大正五年	
	枚數	交換金額	枚數	交換金額	枚數	交換金額	枚數	交換金額
仕掛命令及出給命令	二四五四	一〇三三三三三	二六二六五	一〇〇五三三六〇	三〇〇三三	九九七六九九九	三〇〇三〇	二二六八一三九
郵便爲替證書	六七三三	五二四二八八三	七四八一九	五四二二三〇七	八八八八八	六四一〇七三二	一一三七五八	八二八九三五七
公債債券同利札	二二二二	九七九二四	二八二六七	八三一三七	三二五四〇	八三二七八	三六七四二	八二五三
雜 證 票	四〇八五	五三三三三三三	九〇四一	六〇七〇四六七	五八三三	六四六二二九〇	六五八〇	九三七八五五〇
總 計	四〇七四六	一〇二二八〇〇七一	四三四一九八	九〇八三三、六〇	四六八、〇一〇	九六七、四八五八	五九九、〇三四	一三二、九七一、八九

七 地方金融組合

地方金融組合は地方農民の金融を緩和し其し經濟の發達を企圖するの趣旨に依り明治四十年以來各地に設立せられたるものにして毎年二三十箇所の増設を爲し業務の發展亦見るべきものありしと雖其の準據法たる地方金融組合格則は舊韓國政府時代の制定に係り時勢の進運に伴ひ之か改正を必要とするに至りたるを以て大正三年五月地方金融組合格令を發布し同年九月一日より之を施行せり改正令に於ては組合員の權利義務を明かにし組合業務の範圍を擴張したるを以て之か運用に依り組合團

體の機能を遺憾なく發揮するを得るに至れり今組合經營の要項を略記すれば左の如し

(イ) 地方金融組合の組合員は其の業務區域内に於て一年以上引續き住所を有するものにして農業に従事し獨立の生計を營むものに限る殊に組合設立の趣旨に鑑み主として中小農民の階級に屬するものを加入せしめつつあり、(ロ) 組合員には出資一日以上(一日金十圓)を負擔せしめ之に對し少許の利益配當を爲す又組合員の責任は其の出資額を限度とす(ハ) 組合には組合長一人、理事一人、監事二人以上及評議員七人以上を置く理事は朝鮮總督の任免する所にして内地人を以て之に充て組合の業務を執行し組合長監事及評議員は總會に於て組合員中より之を選任す(ニ) 組合の資金は出資金、預り金及借入金の外政府の下附に係る組合基本金(一組合一萬圓) 每事業年度の剩餘金中より積立つる缺損補填準備金及特別準備金等より成り組合は之を運用して左に掲ぐる事業を營む

- 一、組合員に農事必要なる資金を貸付する事
- 二、組合員の爲に預り金を爲す事
- 三、組合員の爲に種子、種苗、肥料、農具其の他農業上必要なる材料を購入し又は分配する事

- 四、組合員に農具其の他農業上必要なる材料を貸付する事
- 五、組合員の委託に依り其の生産物を販賣する事
- 六、組合員の爲に其の生産物を倉庫に保管し又は之に對し倉荷證券を發行する事
- 七、組合員共同の利益の爲に農事上の施設を爲す事
- 八、朝鮮總督の認可を受け組合員に非ざる者の預り金を爲す事
- 九、朝鮮總督の認可を受け農工銀行の業務を代理し又は之か媒介を爲す事
- 十、朝鮮總督の命令ありたるときは地方金融の調節に關する業務を營む事

地方金融組合事業概況

大正六年六月末日

道	組合員數		出資金	政 府		積立金	預り金	借入金及		貸付金	共同購入立	
	數	人		下附金	府			借入金及	借入金		共同購入立	借入金
京畿道	二二	九三三八	九九〇八〇	二三八七三〇	五九九四一	五四八三三	三九〇〇〇	二七三六五六	二九九	五〇一四〇	共同購入立	農工銀行
忠清北道	三三	四三四二	四五〇四〇	二二五五〇〇	四二五三八	二九一六〇	二二〇〇〇	一六七九七三	五九三〇	三〇、三七七	委託及委託	代理及媒介
忠清南道	一九	六七二〇	八五、六九〇	一九六六〇〇	四四、六九二	五五、八六一	三四、六九九	二六三〇三九	五六一五	二八〇、三三三	販賣前渡金	貸付金

全羅北道	20	六七八	七八一〇	二〇六〇〇	六九〇八七	三五、二四	三五〇〇〇	二六九三三	三五三七	四〇、九五
全羅南道	23	八四九	一〇、三五〇	三三九七〇〇	一〇、三二九	六三八一五	三九、〇〇〇	二、二四五五	九八九	七〇、三八八
慶尙北道	25	一、三二九	一三八、七四〇	二五八九〇〇	七四、四四〇	四八、四六八	七、五〇〇	三、三三九五	二、三三三	八七、三一八
慶尙南道	22	一〇、一一三	一三六、九八〇	二二七、二〇〇	六二、一〇八	三六、三〇二	四〇、〇〇〇	二七、九四〇	五、七七七	一六三、〇三六
黃海道	19	六四一七	六八、二八〇	一九三、五〇〇	五〇、〇二七	二、三九三五	三三、〇〇〇	一七六、五二二	八四	二二〇、七六
平安南道	17	五〇九一	五二、四〇〇	一七六、〇〇〇	二五、三六八	二、七二二九	三、三〇〇	一六、四九〇六	一九〇	一〇、九六三
平安北道	22	一〇、八八七	一一三、一六〇	二〇八、六〇〇	四、五五九二	六六、三三九	四一、七〇〇	二、三四、七五〇	一、三三〇	一〇、七四二
江原道	22	九三七二	九四、五九〇	二二、三七〇〇	四八、五七九	三九、九七四	三、七九、五五	二、七五、四九六	三七五	五九、〇九四
咸鏡南道	17	六八八三	七四、四七〇	一七四、二〇〇	三四、七〇九	四、四七、五〇	三、二五〇〇	一〇、一八四八	九、二二八	二四、〇六六
咸鏡北道	22	四〇、三四	四二、三四〇	二四、五〇〇	二、二六九三	一、五八、五五	二六、〇〇〇	一一、四〇六八	四〇五	二、三六八
總計	250	一〇一、五七一	一、三八、一三〇	二、五七〇、二二〇	六八〇、五〇三	五、四一、六三六	四八、三六、五四	三、〇二八、八三六	三五、七三三	五、八九、七二四
大正五年度末	250	九四、六六八	一〇、六四、六八〇	二、五七〇、二二〇	五八三、六四九	四、五八、三〇四	四七、〇〇、一九	二、八八、八八九	四四、四八四	四、四八、五四〇
同 四年度末	240	六九、七二九	六〇、二、三三〇	二、四六五、二二〇	五三、一八、五九	二、七、二三四	四七、八、五五二	二、〇、九五、一四一	九三、三、八〇	二、六九、〇三三
同 三年度末	232	五四、三三三	—	二、一八四、二二〇	四九、一四、一八	三、一、六三九	四三、九、一七二	二、二、四、九四四	一、五、一、〇一三	四、四三、七、七六六
同 二年度末	208	八〇、九三三	—	二、一三七、三九五	三九、六、三三〇	—	四四、一、四六六	二、一〇、七、一六〇	八〇、五、三四	三、三、一、〇、二七六
同 元年度末	189	六七、九一四	—	一、九三〇、五〇〇	二七、五、九六一	—	三〇、四、四六八	一、七、三、九四六	一九、四、七、六	三、三、三、二、四

本表借入金及預入金中四十四萬圓は補助貨散布資金なり

第八章 農業

第一節 土地

朝鮮半島の地は農業に適し殊に南部地方は氣候溫暖にして農作物の發育最も佳良なり冬季は稍寒氣強しと雖麥類の如き冬作物の枯死する感なく且四月以降は氣温上るか故に生育に宜しく空氣は乾燥せるを以て收穫物の品質良好なり夏作物中水稻の如きは氣候の關係よりせば其の生育良好なるへきも用水の完備せざるを以て插秧意の如くならず或は旱害を被ることあり故に灌漑の設備に留意すれば好果を收むること必せり今最近統計に依る耕地面積を掲ぐれば左の如し

道	耕地面積			田(畑)	合計	内	
	一毛作	二毛作	計			自作	小作
京畿道	一九六、二〇八町	六六、二〇〇町	一九六、八七〇町	一八六、一七九町	三八三、〇五〇町	一一三、九三七町	二七〇、一三三町
忠清北道	五五、三七六町	一三、七二九町	七〇、一〇四町	八九、八三三町	一五九、九三八町	六九、〇二五町	九〇、八七五町

大正五年十二月末日

道	番(田)		計	田(畑)		合計	内	
	一毛作	二毛作		自作	小作			
忠清南道	町 一四八,三〇三	町 二二,九八七	町 一六一,二九九	町 八二,四六〇	町 二四三,五八九	町 八六,二五三	町 一五七,三六六	
全羅北道	一〇九,八七五	一三,六七三	一二三,五四八	二八,五〇八	一六三,〇五九	四三,三六八	一一九,七八八	
全羅南道	一〇,四〇五	二七,六四七	三八〇,五二九	一〇九,九八八	二四八,〇五二	三〇,三四四	一一七,七六八	
慶尙北道	一一一,六〇一	七六,五六七	一八九,一六八	二〇三,二五四	三九二,四三六	一八二,六八三	二〇九,七五三	
慶尙南道	一〇三,二二三	五九,四五六	一六二,六三八	一一八,〇六一	二八〇,七〇一	一一三,五八七	一六七,一一一	
黃海道	九一,〇六九	二四四〇	九一,三二八	二七一,五二二	三六二,八四二	一四一,五九八	三三三,三三三	
平安南道	六二,〇四三	—	六二,〇四三	三二四,七五一	三七六,七九四	一七四,〇二四	二〇二,七六九	
平安北道	五二,七四七	—	五二,七四七	二八八,七三三	三四一,四七〇	一六六,四一八	一七五,〇五二	
江原道	五二,〇二六	七四七三	五一,七四二	一六六,五七七	二二八,三五〇	二八二,三九八	九〇,〇八九	
咸鏡南道	三四,〇三四	三三〇	三四,〇六六	二二六,五四九	三五〇,六一九	一七九,一〇三	七二,五〇八	
咸鏡北道	六,八八一	—	六,八八一	一六二,七五一	一六九,六三二	一四八,六五〇	二〇,九七四	
總計	一,三四,六八〇	二〇,五六四	一,三四,〇三五	一,二四九,一七一	三,五八九,五〇三	一,六七四,九四八	一,九一四,五四八	
大正四年末	一,〇一,六五三	一六〇,九九五	一,一七七,五三〇	一,九九三,〇七三	三,二七〇,六〇二	一,五〇九,二六一	一,六六二,三四八	
同 三年末	九五〇,六三三	一三六,六八七	一,〇八九,三二〇	一,八六八,八三〇	二,八九九,一五八	一,四二二,〇八一	一,五三八,〇五七	

朝鮮に於ける未墾地は一般産業の開発と共に之か利用の有利なるを覺る者多く到る處新起田畝の開墾を見るに至れり今最近の調査に係る未墾地面積を掲ぐれば左の如し

		未墾地面積					
道	國有	民有	合計	道	國有	民有	合計
京畿道	三、九一〇 ^町	一、三四〇 ^町	五、二五〇 ^町	黃海道	七一七 ^町	三、三〇〇 ^町	四、〇一七 ^町
忠清北道	四二〇	四五八	八七八	平安南道	二、三三〇	二、五九七	四、九二七
忠清南道	二、七三三	二、四七七	五、二〇〇	平安北道	一、三二一	三〇六	一、六二七
全羅北道	一、一五〇	二、二四七	三、三九七	江原道	七、八七三	一、九四六	九、八一九
全羅南道	二、〇五八	一、二〇八	三、二六六	咸鏡南道	二、二四七	一、七三八	三、九八五
慶尙北道	一、七六六	一、五二〇	三、二八六	咸鏡北道	一〇、八七一	二、六七八	一三、五四九
慶尙南道	三、一四六	一、五〇二	一四、六四八	總計	四〇、五三二	三三、三二七	七三、八四九

本表には山林原野の内山麓緩傾斜地の大部分及干潟地を包含せず

前記の外海岸に散在せる干潟地あり其の面積の如き一箇所にして數百町歩に互れるものあり是等の利用に對しては築堤水門等の設備に多少の費用を要すも雖成功後には田畝の地味肥沃なるべきを以て之を加功前に比すれば其の利益尠少ならざるを見る故に之を利用を出願する者漸次増加し著實なる事業家の投資を爲す者多きを加ふるに至れり左に國有未墾地の貸付したるもの並事業成功により付與(拂下をも含む)したるものを掲ぐれば

國有未墾地貸付地目別

大正六年六月末日

道	原野		荒蕪地		草生地		沼澤地		干潟		合計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京畿道	二二	一六五	四	一	三三	三、一八四	一	一九	四二	四、七五六	八四	八、二五〇
忠清北道	三	一	一八	四一	二八	四一三	—	—	—	—	一四九	四、五五
忠清南道	一五	二五八	一一	一七二	三七	八九一	二	三	一三八	四、〇八一	三〇三	五、四〇五
全羅北道	一一	二五	六	二〇	二〇	八四七	—	—	二	八七六	二四九	一、七六八
全羅南道	一七	三三三	二〇	一六	二四	一、二二二	三	二	一一五	四、九八八	三八九	六、二五一
慶尙北道	六	八二	四	一八七	〇〇	六一四	四	二	—	—	一五二	八八五

事業成功に由り付與(拂下を含む)したるもの

大正六年六月末日

本表は國有未墾地利用法施行以來貸付したる全部を記せり

慶尙南道	一七 一五六	六九	五四六	一〇九	一、三一二	六	四三八	三六	一、六三八	二三七	四、〇九〇	
黄海道	一五 五九	六二	二一八	一六一	一、三一四	七	二八	一二五	五、六〇〇	三七〇	七、二一九	
平安南道	二 二〇	三	五	六一	七三〇	二	一	五六	二、四五六	一一二	三、一九二	
平安北道	二 二〇	三	二六	一〇五	一七四	一	一〇九	五、七四三	二二〇	二二〇	五、九六四	
江原道	一三 六〇	一五	五二	九〇	五〇五	五	五七	三	四	一二六	六七八	
咸鏡南道	三 四一	四	一六八	三一	三三七	一〇	五六	七	八	五五	六一〇	
咸鏡北道	一 六	八	一〇	二一	一、四八四	五	二	二	八	三二	一、五〇八	
總計	一二五 九〇六	三〇六	一、五八七	一、七一九	一三、〇一七	五四	六〇七	一、〇四二	三〇、五八三	二、四五四	四六、二七五	
大正四年末	八六	八四五	二五六	一、五一六	二八五	一一、一二二	四〇	五八三	七三八	二六、三七二	四〇五四〇	四三八
同 三年末	六〇	六〇二	二〇三	一、四一四	八二四	九、六二六	三五	四二〇	五九一	二四、四六七	一、七三三	三六、五二九
同 二年末	三八	五三三	一三五	一、三一六	四〇八	六、六八五	一五	二六三	三二六	一六、九三三	九二二	二五、七三〇
同 元年末	二一	四五三	四六	九七三	二三〇	四、八九四	一一	二二六	一五〇	一一、六九二	四五八	一八、二三七

道	番(田)		田(畑)		植樹		其の他		合計
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	
京畿道	六二	八二八	四八	三五〇	三	二〇一	八	三三	一、四二二
忠清北道	一一	五	二五	一一	四	四	一	四一	三一
忠清南道	一三	三七	一八	三三	三	一九	四	三六	二〇三
全羅北道	三七	二六	二五	二七	二	二	八	四	五九
全羅南道	一七	五〇	一一	一一	二	四	八	七二	九三
慶尙北道	八	六	三〇	二八二	一	三	五	六	二九七
慶尙南道	一九	一〇〇	二七	一六〇	一	一	七	四三	三〇四
黃海道	四八	一七七	七五	一八四	一	二	九	六四	三〇四
平安南道	九	二二	一一	六三	一	一	一	二二	三七四
平安北道	八三	二二七	一四	一五	一	一	一	二四	三〇八
江原道	一一	一一	一一	一五	二	二	二	九七	二二二
咸鏡南道	一	一	六	七五	一	一	一	七	二九
咸鏡北道	二	一三	四	七	一	一	四	一〇	七六
總計	三二二	一、六九二	三〇七	一、二四四	一九	三四八	六五	一五五	三、四三九

同 元年末	同 二年末	同 三年末	大正四年末
四	一九	九四	一七〇
六九	二六〇	四四二	五三一
一七	三一	六三	一三五
一九五	三六九	五六一	七九七
一	二	二	九
三	四一	四一	二八六
一六	二〇	三〇	四四
二一	六〇	六四	一三〇
三八	七二	一八九	三五八
二八八	七三〇	一、一〇八	一、七四四

本表中其の他さあるは果樹園、漁業用地、鹽田、共同墓地、建物敷地、蓮栽培等なり

國有未墾地利用法は未墾地の利用を奨励するの趣旨を以て明治四十年發布せられ大正三年に至り之
 か一部の改正を行へり其の概要左の如し

未墾地の貸付を受けむとする者は願書を土地所在地の道長官を經由して朝鮮總督に提出し許可を受
 くへし貸付期間は十箇年にして公共の利益となるべき事業に供するもの又は農民若は漁民の宅地に
 供するものは事業成功後付與せらるへし開墾牧畜植樹の事業に供するものは特別の事由ある場合を
 除くの外同しく付與せらるへし其の他の利用に付ては拂下を受くるものとす貸付料は一町歩年額五
 十錢とし特別の事由ある場合は之を減免す

第二節 農業者

朝鮮に於ける耕地の大部分は概して大地主の所有に係れり而して朝鮮人の多くは農を業とし他人の田畑を耕作し一生小作に甘むる者比比として然り而して大地主の多くは都會に住居し悠悠自適田邑には其の代理人を置いて小作地を管理し小作料を徴收するもの普通なり小作の方法は概ね左の如し

(一) 秋收期検見を行ひ生産額の二分の一乃至三分の一を標準とし小作料を定むるもの(二) 收穫に際し其の粃を折半し其の一を小作料と爲すもの(三) 年の豊凶に拘らず一定の小作料を定め置くもの三種とす而して小作は多くは成文の契約あるにあらず年限の定あるにあらず唯口約を以て之を定むるのみ又小作人は地主に對して怠納を爲すこと稀なり啻に朝鮮人地主に對してのみならず内地人地主に對しても從來嘗て約に違ひし事なく寧ろ安んして長く小作人たらんことを希ふものの如し故に内地人の農業經營者は意外に便利を感じつつあり

農業者戸口

大正五年十二月末日

道	戸				合計	人				
	内地人	朝鮮人	支那人	其の他の外国人		内地人	朝鮮人	支那人	其の他の外国人	
京畿道	一七三九	二四四、一〇三	一八八	一	二四六、〇三二	六、九四三	一、二六三、〇九四	六七一	三	一、二七〇、七一一
忠清北道	一三三	一三〇、三六八	四	—	一三〇、五〇四	五、二五	六六八、〇三〇	九	—	六六八、〇三九
忠清南道	七二四	一七九、〇八二	三七	—	一七九、四四三	二、八七〇	九〇三、二九六	八二	—	九〇六、二八八
全羅北道	一、四七九	一九四、九〇七	四五	—	一九六、四三一	五、三八五	九六七、三七七	九二	—	九七二、八五四
全羅南道	一、四一〇	三二五、八九九	三三	—	三二七、三三三	五、五七六	一、六〇六、二三七	三三	—	一、六一一、八四六
慶尙北道	一、二三四	三三二、一五三	三五	—	三三三、二九二	四、三三三	一、六二七、六七三	三六	—	一、六三三、〇〇六
慶尙南道	二、二五三	二六六、三九一	九	—	二六八、五五三	七、九三四	一、三八六、八七三	一七	—	一、三九四、八二三
黄海海	四、五二	三三〇、五三九	六四	—	三三二、〇五五	一、六四一	一、二二一、五九九	一六二	—	一、二二三、三九八
平安南道	二、四九	一六六、七二四	三九	二	一六七、一〇〇	一、〇四八	八四二、二一九	四七一	八	八四二、七四六
平安北道	七〇	一七九、〇八〇	六六	三	一七九、二一九	二、一〇	九六七、四四二	三三三	八	九六七、九三一
江原道	七四	一八三、六二八	八	—	一八四、〇一〇	二、三三	九七五、八九三	一五	—	九七六、一三〇
咸鏡南道	一〇五	一六〇、三三〇	七七	二	一六〇、五三三	三、一〇	九四九、三〇七	二二九	一	九四九、八二八
咸鏡北道	六二	六八、一五三	三九	—	六八、二七四	一、九八	四三三、〇八〇	一三	—	四三三、二一九

道	戸				合計	人			
	内地人	朝鮮人	支那人	其の他の外国人		内地人	朝鮮人	支那人	其の他の外国人
總計	九七七七	二六三〇六七六	六九四	七	二六四一、一五四	三七、二〇七	三六、九九一	二、一九二	二〇、三三八、五三三
大正四年末	九五七三	二六、一八八、二八	六一五	五	二六、二九〇、一一	三五、四四五	三三、四〇七、五九二	一、七六九	二一、三四四、八二六
同三年末	八六三三	二五、八八一、三五	四七五	一三	二五、九〇二、三三七	三三、四九一	三二、七五四、五三六	一、三〇七	二一、七八七、三六五
同二年末	七六一三	二五、六四九、七七	四三四	一〇	二五、七三〇、四四	二五、六三四	三二、三三七、七八	一、四二六	二一、三五〇、八二九
同元年末	四、三六三	二四、二八八、三四	三八七	五	二四、三三六、〇九	一四、五〇五	二五、九八五、五七	一、二八〇	二一、一六一、四三三

農業者種類別戸數

大正五年十二月末日

道	専業兼業合計			地内			
	専業	兼業	合計	地主	自作	自作兼小作	
京畿道	二八、三三三	二七、六六九	二四、〇一一	九、一一五	二四、九八五	九四、三七四	一七、五四七
忠清北道	一〇、八九九	一一、八〇五	一三、〇五九	二、四〇九	一七、三三八	五八、六一三	五、一四四
忠清南道	一五、四〇〇	二五、八四三	一七、九八四	三、三四四	一五、三三六	七二、四九六	八、八六七
全羅北道	一六、二五二	三、八七九	一六、四三二	二、五二五	一四、七三一	三〇、一三三	一〇、九〇七

全羅南道	二五〇、三二六	六六九、八六六	三三、七三三	四、九〇〇	五、六二七	一五、〇九九	一〇五、〇四七
慶尙北道	二七五、七七一	四四七、二一〇	三三、三九一	七、三三七	五、九七〇	一六、〇七三	九四、五一八
慶尙南道	三三三、三九一	四七二、六〇〇	三八、八五五	五、一三二	三、〇四九	二二、八四一	一〇四、四一四
黃海道	一九一、三三四	二九九、三三一	三三、〇五五	七、八二〇	四、一七二	八、一三三	九〇、八三〇
平安南道	一四三、八九七	二二二、〇三三	一六、七〇〇	五、四一〇	四、〇七七	七、七四六	四四、一四四
平安北道	一五八、二四四	二〇九、七五五	一七、九二九	九、九〇八	四、八五六一	五、二七四	六八、〇〇四
江原道	一五九、六六二	二四三、四八八	一八、四〇〇	四、六二五	五、八三三	六、〇二四	六〇、八〇七
咸鏡南道	一四一、三三六	一九三、九六六	一六、〇五三	二、六七二	七、九九六	五、〇一八	二七、七三八
咸鏡北道	六、三三三	七〇、五三三	六、八二七	一、六〇一	四、二七五	一五、六四九	八、二六五
總計	二、二四八、〇八六	三、九三〇、〇六八	二、六四一、二五四	六、六、五九一	五、三〇、一九五	一、〇七三、三六〇	九、七、二一〇

第三節 農産物

(イ)米 朝鮮農産物中最重要品にして輸移出する高亦甚多し其の産出は慶尙南道、全羅南道最多く黃海道、忠清南道、京畿道等之に次ぎ咸鏡南道は最も振はず朝鮮内に於て消費せらるる高少なからざるも尙大正五年に於ける輸移出高は百六十萬五千六百九十九石にして其の價額一千九百三十五萬六千七百七十八圓に及へり

(ロ)大豆 各道到る所其の栽培を見ざるなく大正五年に於ける輸移出高九十三萬二千四百五十三石
 其の價額六百一萬一千六百九十六圓にして主として内地に仕向けられ米と共に輸移出品中の重要なるものなり

(ハ)麥 大麥、小麥を主とし稈麥は甚た少し大麥には春蒔、秋蒔ありて京城以北は春蒔多く以南は秋蒔多し小麥は秋蒔に屬す

主要農産物作付段別及收穫高

大正五年

道	作付		收穫		一段步收穫高	
	水稲	陸稻	水稲	陸稻	水稲	陸稻
京畿道	一七三、八六五〇 <small>町</small>	一、九三三 <small>町</small>	一、六四一、六五八 <small>石</small>	一、五三八八 <small>石</small>	〇、九五〇 <small>石</small>	〇、八〇〇 <small>石</small>
忠清北道	五二、二八二	一一三九	五八二、六九二	一一、四四五	一一、四〇	一、〇二四
忠清南道	一四三、七三五	八六三六	一、五五五、二八七	七、五七九	一、〇九〇	〇、八七八
全羅北道	三三、三五二	二〇一八	一、三〇六、三三三	二、〇一八	一、〇七六	一、〇〇〇
全羅南道	一三六、三九八七	二、六五五九	一、六〇八、七八五	一一、六八〇	一、一七九	〇、四四〇
慶尙北道	二二〇、四七六九	四七六九	一、五七四、八八二	五、二三四	一、三〇七	一、〇七四
			四、五二、二九七	三、〇八三、三三三		〇、六八三

第八章 農業

道	作付		段別		收穫		高		一段步收穫		高	
	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥
慶尙南道	一七、一九九九	二三八・六	三九五三二八	一五六、九一六	一四、五二四	二五二七九六	一、三三六	〇、六〇〇	〇、六五七	〇、六五七	〇、六五七	〇、六五七
黃海道	九〇、八九二五	五、四四五	四、五五二〇	八、四、一七四	四、〇七四	二九九六一	〇、九五二	〇、七七七	〇、六五八	〇、六五八	〇、六五八	
平安南道	四九、三六三七	四、四三〇〇	三、四、九〇九七	四、八〇、七三三	三、三八五	三、三、〇〇〇	〇、九七六	〇、七六三	〇、六三六	〇、六三六	〇、六三六	
平安北道	五、二六七〇七	七、〇、四	四、四、三八三	五、〇七、六九五	四、七八五	二、七〇、二六四	〇、九六四	〇、六二九	〇、六〇九	〇、六〇九	〇、六〇九	
江原道	五、一六八四・六	二、四、一	三、六、五七九七	四、〇八、三七五	一、三八	一、九〇、五七三	〇、七九〇	〇、五七三	〇、五三二	〇、五三二	〇、五三二	
咸鏡南道	三、二、六五九三	八、六、四	四、五、一〇八四	三、〇〇、九四〇	四、六、五	二、八三、五八七	〇、九二二	〇、五三八	〇、六二八	〇、六二八	〇、六二八	
咸鏡北道	四、五、八七八	—	三、八、三八七九	三、一、九四六	—	一、九五、四四九	〇、六九六	—	〇、五〇九	〇、五〇九	〇、五〇九	
總計	一、四、四三、八九九八	一、四、四、四一・三	四、六、八、五二、四一	一、二、四、三〇、二八四	一、〇〇、七、三五	二、九、五七、三三六	一、〇八七	〇、六九七	〇、六三一	〇、六三一	〇、六三一	
大正四年	一、二、三、六二六・九	一、四、四、六・二	四、六、〇、七二、一〇	一、二、二、七九、五三一	九、四、四、三二	二、七、七八、五六一	一、〇三三	〇、六五五	〇、六〇三	〇、六〇三	〇、六〇三	
同三年	一、〇、六、五七、三七五	一、三、五、一・三	四、五、四、五九〇	一、三、〇、五七、四三四	一〇、一、六九〇	二、四、六、四、六一三	一、一三三	〇、七五九	〇、五八〇	〇、五八〇	〇、五八〇	
同二年	一、〇、三、一、八四一・三	一、四、二、二〇、五八	四、〇、五、七〇、三七七	一、〇、〇、一、五八七	八、九、〇、五八	二、四、一、五、三八五	〇、九六九	〇、六二七	〇、五九五	〇、五九五	〇、五九五	
京畿道	六、一、三、七、七・三	二、〇、六、八、六一	一、一、一、一〇	五、一〇、二、四四	一、三、六、五、四三	六、七、〇、九	〇、八三二	〇、六六〇	〇、六〇四	〇、六〇四	〇、六〇四	
忠清北道	三、三、八、四、三・九	一、〇、〇、〇、八三	三、五、〇、五九	四、〇、二、七、九一	四、四、九、〇三	二、四、九、九	一、二九〇	〇、七四八	〇、七二三	〇、七二三	〇、七二三	
忠清南道	三、六、七、七・六	九、九、九、六、七	一、六、一、六三	三、五、七、四、四六	五、九、一、九三	三、二、八、二八	〇、九七三	〇、五九二	〇、七九四	〇、七九四	〇、七九四	

道	作付段別			收穫			一段步收穫高		
	大麥	小麥	稞麥	大麥	小麥	稞麥	大麥	小麥	稞麥
全羅北道	三三,八七六 ^附	七,六三五 ^附	四,五四〇 ^附	二四,八六八 ^石	五,四一九 ^石	三,四八三 ^石	一〇,九九〇	〇,七一〇	〇,七六八
全羅南道	七三,〇四八	一四,五三五	九,五七六	七八,四二四	七,八三九	六,五七四	一〇,八八八	〇,五三九	〇,六八七
慶尙北道	九二,九五〇	二二,五三九	八,六六五	八七,四二四	一三,八三〇	三,七四三	〇,九五二	〇,五八八	〇,四三三
慶尙南道	七七,八〇七	二二,〇三三	四,六四〇	八二,五七九	七,九七八	三,三三七	一〇,四九九	〇,六六四	〇,七二四
黃海道	一〇,四六三	六,九八五	三,〇七〇	八,〇三三	三,八六二	一,六九五	〇,七六七	〇,五五四	〇,五五二
平安南道	二二,九八八	二九,八六九	二二,〇五六	二八,一三九	一〇,六〇三	三,一九七	〇,九八七	〇,五三四	〇,六三三
平安北道	六,九三七	一,二四五	—	五,三二〇	四,八九七	—	〇,七六七	〇,三九五	—
江原道	二〇,八七一	一,七七三	三,三五四	一九,八三六	一〇,一九三	二,二八九	〇,九五三	〇,五七五	〇,六八二
咸鏡南道	二四,二八九	四,七七三	二,〇〇〇	一六,二四六	三,五二〇	九四四	〇,六六九	〇,五二八	〇,四七〇
咸鏡北道	三二,〇七八	四,〇三〇	—	一八,四六四	一,四八四	—	〇,五九四	〇,三六八	—
總計	五〇三,五七五	一一三,三〇七	三三,二一九	四八〇,一一〇	一三四,七六三	二二,〇五二	〇,九五四	〇,五八八	〇,六三三
大正四年	四八,二四六	二〇,三七五	三,三三六	五二,八二〇	一,一〇〇	一,五二四	一〇,七七	〇,五八九	〇,七八一
同三年	四九,一五八	一九,三三八	三,一〇七	四六,三二五	一,一四二	一,三九六	一〇,三六	〇,五六三	〇,七〇七
同二年	四二,〇五九	一八,九八一	三,〇三六	五二,三三〇	一,二七〇	二,五四〇	一,三三八	〇,六六九	〇,八三八

(三)棉花 棉は江原道の東海岸及咸鏡南北道を除くの外各地殆ど之を栽培せざるなきも就中全羅南北道及慶尙南北道は其の主産地にして忠清南北兩道之に亞く棉質纖維長くして彈力に富み各種の用途に適せり從來朝鮮人は衣料に供すへき木棉を製するは自ら棉種を蒔き自ら紡績し自ら製織して需用に供する慣習なりしも内地より精練なる紡績絲の移入するや棉花の紡績漸く減少せしも一方に於て朝鮮産棉花を内地に移出するの途開け販路擴張し漸次好況を示すに至れり然れども在來種は其の品質優良ならざるを以て明治三十九年以來政府保護の下に收量纒綿歩合共に多く纖維の細長にして紡績原料に好適する米國種陸地棉の栽培を奨励せしに成績良好にして年年其の栽培反別を増加するに至れり明治四十三年に於ては陸地棉作付反別千百二十三町歩其の栽培者僅に三百餘名なりしに大正五年に至り四萬七千九百四十七町歩其の栽培者實に三十七萬一千九百八十九人の多きに及び更に大正六年に至りては作付反別六萬六千三百二十六町歩其の栽培者四十六萬六千六百餘人の多きに達せり勸業模範場木浦棉作支場に於ける既往九箇年間の陸地棉及在來棉の比較試験成績に依るときは朝鮮在來棉一反歩收穫高は百七十二斤にして陸地棉は二百六十六斤なり此

の數字は共に陸地棉在來棉の優良なるものに付きての比較なるを以て優に兩棉優劣の如何を窺ふに足るへし最近の作付反別收穫高及輸移出額は左表の如し

棉作付段別收穫高及輸移出額

年	作付		別計	收穫		計	輸移出額
	在來棉	陸地棉		在來棉	陸地棉		
大正二年	四三九二・〇	一三九六七・三	附	三三、〇九九三・三	一三、四四五、二八一	三、五五四四・五九四	九、二四九・四五
同三年	四〇、四九五・三	二一、五〇〇・九	附	一八、六三三、〇七六	五七、四七一、四五一	七、六一三、五三〇	一〇、一七九・五三
同四年	三四、九七七・五	三〇、三三三・九	附	一六、三三八、一五〇	二八、六六八、三七一	四、五、〇〇六・五三二	一一、五七六・六四
同五年	二九、二六〇・七	四七、九四七・五	附	一四、〇〇四、〇九一	三二、三三二、四一四	四、五、三三五・〇〇五	一七、四九七・七七

(ホ)煙草 朝鮮に於ける特殊農産物中最も重要な物にして全道到る所其の栽培を見ざるはなく京畿道龍仁、廣州、長湍、平安南道成川、陽德、江原道寧越、旌善、平昌、忠清北道清州、忠州、槐山、報恩、全羅北道錦山、全州、任實、鎭安、茂朱、慶尙南道河東、居昌、黃海道谷山、新溪の各郡は何れも主産地に屬し殊に龍仁、廣州、成川、寧越の煙草は古來銘葉を以て稱せらる煙草

に關する調査は明治三十九年以來之を繼續し四十四年に至りて大體の調査を完了せり又明治四十二年以降前記の主産地に専門の技術官吏を派遣し耕作の改良、産地の發展を獎勵し其の成績見るべきものあり其の他大邱、大田及忠州に度支部專賣課出張所を設け煙草に關する事務を分掌せしめ居れり大邱、大田に於ては主として各種煙草の試作並調理上の試験を行ひ忠州に於ては専ら黃色葉煙草の耕作を行ひ且模範耕作を行ひ簡易なる試験を直營する傍、忠州、陰城、堤川、槐山各郡の耕作者に肥料を無代にて交付し以て其の指導の下に之を耕作に従事せしめしか其の成績頗る良好にして漸次耕作反別を増加し其の耕作總反別は大正六年度に至り五百餘町歩に上り生産額二十三萬餘貫匁に達すべき見込みなり而して其の産葉は耕作者に相當の代價を交付して之を煙草耕作組合に納付せしめ再乾燥を行へり抑此の種葉煙草は兩切紙卷煙草の主要原料にして兩切煙草は朝鮮人の嗜好に適すき雖其の原料の大部分は外國又は内地よりの輸移入品なるを以て自然製品の高價なるを免れざるも今後朝鮮に於て前記の如く指導誘掖の結果之を多量に生産するに至らば自ら低廉なる製品を供給するに至るへし近來内地人にして内地種煙草を栽培する者漸く多きを加へ大

邱、密陽附近各地に亙り大正二年度に於ては耕作反別九百七十町步餘に激増せり。雖其の結果遂に生産過剩を來し延びて價格の暴落を見るに至りたるか爲大正三年度に於ては耕作反別三百町步餘に急減し大正五年度に於ても亦水害等の爲二百七十八町餘步に減少せり。今各種煙草を通し各道別に耕作人員、段別收穫高等を掲ぐれば左の如し

煙草耕作人員、段別及收穫高

大正五年

道	耕作人員		收穫高		道	耕作人員		收穫高	
	人員	町	一段	一段歩當		人員	町	一段	一段歩當
京畿道	四四七二	一六六五五	五〇九五九	三〇五九七	平安南道	四三三二	九九八五	二六九六八	二七〇〇九
忠清北道	二六七二	一四四八	二九〇五九	二五・三六二	平安北道	七四八八	一三三五六	二七七六〇	三〇七七五
忠清南道	二五七四	四八六六	二九七七一	二六六六九	江原道	六五三六	一八八一八	五六四三	二九九九〇
全羅北道	一九五九	七三・四	一九七二六	二七六八三	咸鏡南道	五二八三	一〇〇〇五	二七〇三三	二七〇〇〇
全羅南道	二四七三	三八四七	九八六一四	二五六三四	咸鏡北道	二二〇九	三九一一	一〇〇三五	二〇五一五
慶尙北道	六二五七	一四〇〇七	三三一九〇七	三三・五六八	總計	五九一八	一三三二七	三三八九二	二六六七七
慶尙南道	六二・四九	八〇〇〇	一八五三三	二二・一五三	大正四年	五五五・三三	一三五七六	三六七五二	二七〇七〇
黃海道	六六・七四	九六四・〇	二六四二四	二七・四二二	同三年	五一九・四七	一〇九九〇	二六三二九	二二九九八

(へ)人蔘 人蔘は朝鮮到る所多少産せざるなしと雖古來高麗蔘と稱し世に珍重せらるるは京畿道開城附近に産する物に限れり故に此の地方は古來人蔘栽培盛に行はれ従て耕作法も亦大に進歩せり往時其の栽培の最も盛なりしは明治三十五年の頃にして官私蔘を併せ十萬斤以上の收穫を得し、とあり然るに十數年前より人蔘に赤病と稱する病毒蔓延し漸へ蔘業衰頽の徴を顯はせしより明治四十一年蔘政事務を度支部所管に移し尋て紅蔘專賣法を施行して以來蔘政の改善を圖ると與に極力蔘病の防遏に努め一面諸種の獎勵法、資金融通の道を講ずる等萎靡せる蔘業の興復を圖りし結果努力遂に其の功を奏し近來俄に斯業の勃興を見るに至れり然れども人蔘は一般作物と異り播種より六七年の星霜を經るに非されば收穫するを得ず今大正六年度に於ける人蔘生産高及收入額の豫測は收穫間數二十九萬間收納高十一萬八千、紅蔘製造高三萬三千七百九十五斤、此の價額二百二萬七千七百圓を算するを得なり

人 蔘 收 穫

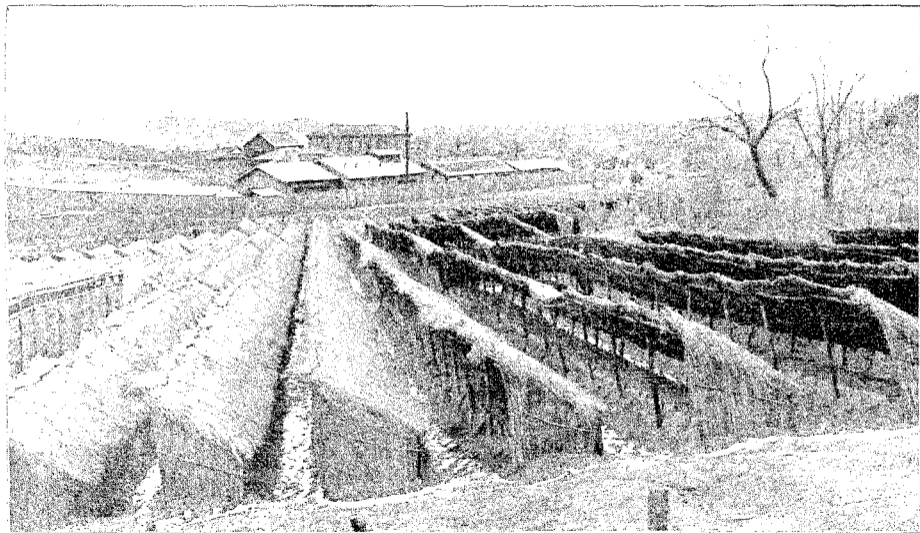
年	掘採間數	收納水蓼	紅 製造高	年	掘採間數	收納水蓼	紅 製造高
明治四十四年	一四、三四五 ^間	七、七一九 ^斤	二、二九九 ^斤	大正三年	一九二、三九〇 ^間	六四、四七七 ^斤	一七、七〇〇 ^斤
大正元年	五六、四六四	一八、八〇五	五、八八六	同 四年	二四五、九七九	九九、九五三	三五、七二〇
同 二年	一一〇、九四一	五三、一〇〇	一七、一一二	同 五年	三四六、八二三	一六三、三七三	六一、二三六

本表間と稱するは蓼圃地積の單位にして長約六尺、幅約三尺通路を併せて約一坪の地積なり

以上人蓼特別耕作區域即ち政府の專賣に係る紅蓼原料產地以外に於ても相當の人蓼産額あり大正五年に於ける蓼圃間數十五萬九千七百七十四間收穫水蓼二萬六千四百五十九斤にして同年中に取引せられたる白蓼六萬三千六百六十六斤此價格二十一萬七千四百十二圓に及へり

右は何れも政府の免許を受け人蓼税を納付せるものにして十道四千九百七十箇所に渉り耕作人員二千八百七十人を算す

人蓼は其の製法に依り紅蓼、白蓼の二種に區別す紅蓼は水蓼(生蓼)を蒸して日光及火熱に依り乾



開 城 人 藝 畝

燥せしめて製し白蔘は水蔘を單に日光に乾かして製す前者は價貴く後者は廉にして兩者共に形體の大なるを尙ふ而して紅蔘は専ら支那に輸出するものにして同國に於ては古來上下共に人蔘を愛用し萬能の靈藥として用ゐるの外贈答用として富豪大官の間に尊重せらる内地、米國等亦人蔘を産すれども朝鮮蔘は品質形體共に他に比類なしと激賞せらる試みに支那に於て消費する各國産人蔘の數量價格の概要を擧ぐれば左の如し

米國	花旗蔘	八〇、〇〇〇 斤	平均一斤 小賣價格	二〇 円	朝鮮	高麗蔘	三〇、〇〇〇 斤	平均一斤 小賣價格	一五〇 円
日本	東洋蔘	一四〇、〇〇〇		五	滿洲	關東蔘	一六〇、〇〇〇		八

(ト)家畜

(一)牛 農耕運搬用を兼ね又肉用として需用多く稀には乳牛として飼養せしる體格偉大體質強健にして而かも性質溫順なるを以て十歳の兒童も能く之を牧御し得へし其の價廉にして且役用及

肉用に適するを以て内地に移出し又露領亞細亞及支那に輸出せらるるもの多し大正五年に於ける生牛及牛皮の輸移出額は四百四十八萬餘圓に上れり牛一頭の價約四十圓内外なり

(二)馬 對州馬の如く體軀矮小なれども比較的力強く能く險路峻阪の跋渉に耐ゆ乘駄兩用に供し耕耘には使用せず性質順良にして御し易し一頭の價約四十圓なり

(三)驢 乘駄兩用に供せらるるも其の數少なく一頭の價約二十圓なり

(四)豚 普く農家に飼養せられ其の生産牛に次ぐ從來此の地に飼養し來れるものは體軀矮小晩熟種にして品種優良ならず多くは冬時の食用に供す鮮人は剥皮することなく熱湯を注ぎ毛を去りて食す一頭の價約二圓五十錢

(五)山羊 黑色小軀にして其の生産甚少し皮は防寒に用ぬ肉は食用に供す乳汁を搾取するもの少し一頭の價二圓乃至三圓なり

(六)家禽 雞多數を占め鶩及鶖は其の數甚少し、雞は農家にして之を飼養せざるなく在來種は内地の地雞に酷似すと雖稍小形にして一層野生的なり卵小にして豐産ならず一羽二十五錢乃至三



咸鏡南道永興郡畜産品評會の狀況

十五錢にして卵十箇十錢より十七八錢なり近年改良雞の飼育漸次多きを加へつつあり

(七)犬 數の多きこと遙に内地に超え其の體軀日本在來種に酷似すれども氣勢なし朝鮮人は主として食用の爲飼養し夏期に於て膳に上す一頭の價一圓内外なり

家畜及家禽數

年	牛		計	馬	驢	騾	豚	山羊	綿羊	雞
	牡	牝								
大正元年末	二九八七〇	七四三〇二	一〇四一七二	四六、五六五	一一、五八七	五八〇	六、六九四	一〇、三七三	八二	三、九三一、六三三
同二年末	三五〇、六〇	八六〇、三八七	一二一〇、〇一	五〇、六五二	一三、三三五	八〇三	七、六一八	一〇、四五六	五六	四、一九四、三三五
同三年末	三九八、九三七	六三九、四六四	一、〇三八、四〇一	五二、五四五	一三、七四七	一、〇六九	七、五七八	一、六一〇	四四	四、一〇一、三四
同四年末	四〇七、九一一	九四九、五〇〇	一、三五五、四一一	五四、六三元	一三、三二八	一、〇三六	七、六五四	一、四三三	三三〇	四、二七八、三三九
同五年末	四二二、三四〇	九四〇、八六八	一、三五五、二〇八	五三、〇四四	一三、六〇二	一、四三三	七、八〇七	一、三九五	二八九	四、四〇〇、三五二

(チ)繭 家蠶繭は特殊農産物中最重要なるものにして今や全道到る處に其の生産を見ざるはなく就中慶北、平南、平北、京畿、江原の五道を其の生産地とす、從來の蠶種は雜駁劣等なる三眠蠶にして

桑樹は畦畔宅地等に散植し培養を加へざりしか故に葉質粗悪なりしも明治三十九年以來特に品種の改良に努めたる結果市平、魯桑の如き優良桑樹の栽培に努めたるも一方又昔、新屋、白龍の如き優良蠶種の飼育は年々共に普及し生産繭の品質は育蠶技術の進歩と相俟て近來著しき向上を見るに至り家蠶繭の内地移出は實に驚くべき増加を爲せり今最近の家蠶統計を表示すれば左の如し

家 蠶

大正五年

道	桑畑		蠶種掃 立枚數	繭 産 額			製絲 戸數	生絲 産 額	
	段 別	戸 數		春蠶	夏蠶	秋蠶			
京 畿 道	一五〇五三	二一六八四	三六五一	六六六九	五七六	一三〇〇	八四八五	七〇三	二六七一
忠 清 北 道	七八二四	八五七三	一一三三五	三三二	—	一五九	二二七〇	二二五	三〇八
忠 清 南 道	二三五七	一五六〇七	一八七〇三	二七六七	四九	四二六	三三三八	一〇二六五	一三〇七
全 羅 北 道	六八二一	一〇二一六	三二八三	一七〇一	—	四二	二二二三	五四八三	八八五
全 羅 南 道	一一八一	一六二七六	一六八七六	三二七一	三	三四八	三三三三	一〇二八四	一五八七
慶 尙 北 道	二二五七九	四六四九五	五六〇八	二二六二九	一六五	一三五	一四〇〇九	一四六六一	四六五六
慶 尙 南 道	八一九	二二九六三	一六九七	二〇六六	三一	八三	二九一〇	六六五五	一〇四一

黄 海 道	九〇九五	二二八五一	二二、六九九	三、四五一	三三七	四、〇九〇	六六一五	二、四九三
平 安 南 道	一三三五六	三六、二〇〇	四九、五六九	九、六三四	八六二	一、三六二	一〇、五六一	三、八七三
平 安 北 道	一六七四五	二六、七七一	四七、三九九	七、一六一	—	一、四四四	八、六〇五	二、一八二
江 原 道	一、二〇、三三	三三、三六八	三六、八四四	六、三五五	四五〇	三、五〇	七、二五	二、一〇九
咸 鏡 南 道	八六、四四	一五、〇九〇	一八、五六三	三、四二〇	二二一	三、六五〇	九、六五三	一、四六四
咸 鏡 北 道	二五、九四	一、三三五	一、七六五	二、三三	一六〇	—	一、五八八	二、三三
總 計	一五四七八五	三三七三五	三、四七、八二〇	六、一四六八	二、八四〇	七、六三三	七、一九三二	一〇三、四六三
大 正 四 年	三二、八三三二	二〇、一九六三	二八、五、三六七	五、二二〇	三、一七五	三、七二二	五、九、一五六	一〇一、四〇四
同 三 年	一〇、三四六三	七、七三三〇	二二、八、〇四三	三、九三九	三、四八〇	三、三三三	四、六、一九四	一〇〇、五三三
同 二 年	七、四六一五	一、六七、三四二	一〇、三、七一一	三、三、七〇九	一、九八三	二、六八一	三、六、八七一	一〇八、六六七
同 元 年	五、三三六四	一、四九、九三七	一、七、九三九	二、六三二七	一、三五六	一、七五七	二、九、四四〇	九、二、七五

本表蠶種は二十八蛾付を一枚とし養蠶戸数は春蠶飼養戸数を掲記せり

柞蠶繭は平安北道の特産物にして創業日尙淺きを以て當業者の育蠶技術に未熟なるを自然木に蠶
兒を飼育結繭せしむるものなるが故に時に天然の障害を被り豊凶常ならざる憾あるをにより時に

産額の減少を見る今最近數箇年の統計を示せば左の如し

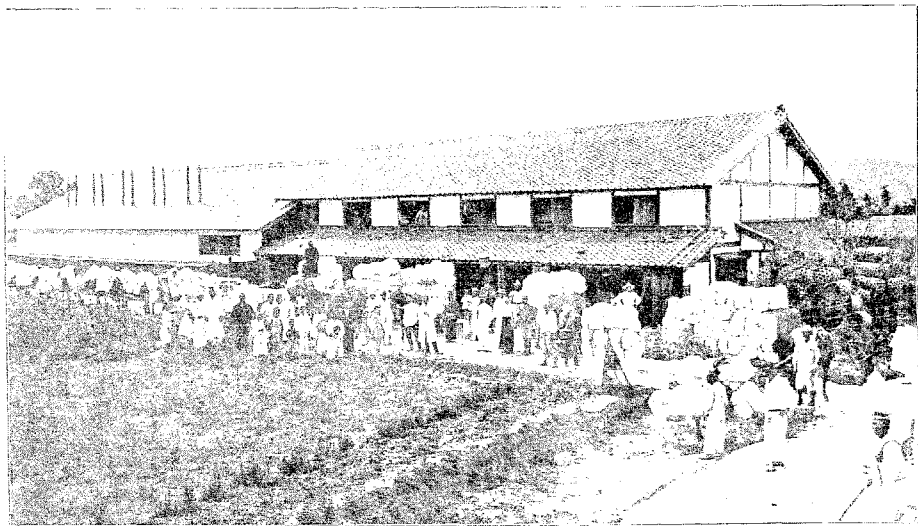
三二〇

柞 蠶

年	飼養林		飼養		放養		繭産額		製絲額		繭輸出額		柞蠶絲輸出額	
	段別	戸數	戸數	戸數	千頭	千兩	貫	數量	價額	數量	價額	數量	價額	
大正元年	町 三六六三	四九〇	三六四三	四九八六四	四二二	三〇,五九〇	一一〇七	?	?	?	?			
同 二 年	三八六六	三三三	二八一八	三八,四三七	一一四三	四九,七八二	七六〇三	?	?	?				
同 三 年	四一六六	二四〇	二,四二二	四八,五六五	一,九四三	一〇七,五〇五	一四,六六四	九,三三七	一九,六九四					
同 四 年	二六四四	一八二	三,〇八〇	三八,四五四	二,二五五	九六,三四五	一四,一〇四	二九,五九五	四七,〇八九					
同 五 年	三二八五	二二五	二,七〇八	三二,五二〇	一,二四八	八〇,六七九	二四,三六六	一七七二四	二八,七六六					

(リ) 養蜂 朝鮮人は古來食用及薬用として蜂蜜を使用せしを以て蜜蜂を飼養する者尠からず江原道平安南北道、咸鏡南道、慶尙北道最盛なり養蜂は農家の副業として好適のものにして將來發展の望あり

(ヌ) 野生鳥獸 野生獸には虎、豹、野猫、熊、ヒグマ 狼、ヤマイヌ 豺、猪、鹿、ノロ 犛、カモシカ 羚羊、狐、狸、アナグマ 貉、



慶尙北道安東郡東安に於ける蠶搬出の状況

水獺、鼠、貂、鼬、兔、栗鼠、ハリネズミ、蝟等あり朝鮮人は良、陷穽等を以て獸類を捕獲す從て其の毛皮の産類少からず野生鳥は其の種類分明ならざるも内地と大差なきが如し但し黃鳥、ワウテウ、戴勝、ヤツガシラ其の他内地に於て見ざる種類あり鶴、ノガン、鶻、ハクテツ、ト、ト、キ、朱鷺等は現今尙多數に棲息せりと雖、ヤマトリ、鵲は多からず狩獵規則に依る捕獲鳥は雁、兔、雉、鶉、シギツグミ、バン、クヒナ、秋鷄、ヒヨドリ、鳩、ヒヨドリ、鵲、ヒヨドリ、鶉、ヒヨドリ、金翅雀、カワラヒロ、アホシ、花鷄、ホシロ、鶯、ウツ、鶯、ウツ、鷹、ダカ、隼、ハヤブサ、カラス、カササギ、カシドリ、鶻、カシドリ、鴈鳥、雀にして鶴(鍋鶴は捕獲する、こゝを得)其の他の野生鳥は捕獲することを得ず(捕獲の方法は銃器、張網、鷹)

(ル)果實 朝鮮の風土は極めて果樹の生育に適するを以て近時京城、仁川、大邱、黃州、平壤等を始め其の他各地に於て新に果樹栽培に従事する者年年増加せり

一、栗 各道産せざるはなきも就中平安南道の咸從栗は其の澁皮剝離易しくして甘味に富むこと遠く内地産に優れり京畿道、平安南道には栗林を成せる所尠からず朝鮮人は其の落果を集めて都會に販出す一斗一圓内外なり

二、棗 京畿道、忠清北道に多く産出し味佳なり之を支那産に比すれば形小なるも内地産よりは

遙に大なり生食又は乾果として糖料に用う

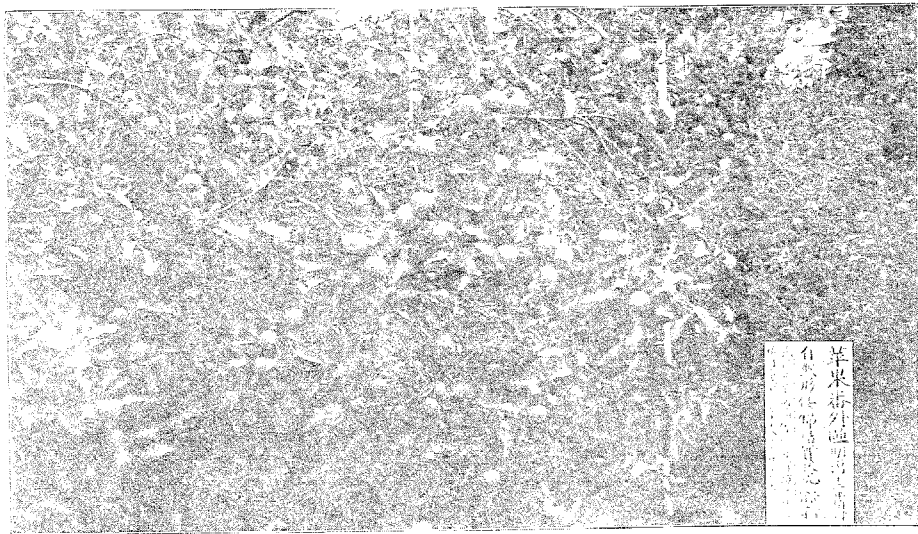
三、柿 概ね澁柿にして鹽湯にて澁を抜き或は臥に投して熟柿とし或は剥皮して乾果と爲す各地より京城、仁川に移出するもの少からず全羅北道、慶尙北道等産出多し

四、桃 毛桃は水蜜桃に類し味稍佳なれども毛無桃は從來の内地桃に類し品質劣れり京城南大門外芝坊、西大門外弘濟院等は桃林相連り陽春滿開の期に際しては春色都門を賑はすものあり近來京城、開城、三浪津等に於て改良種の良果を産出す

五、苹果 在來林檎は産額少く小形にして品質劣等なり洋種苹果は結果極めて良好にして漸次産出額増加しつつあり

六、梨 在來梨は咸興梨の如き稍良品なきに非ざるも一般に味佳良と云ふへからず内地種は能く良果を結び栽培目に増加せり又洋種の結果は内地に比し著しく優れり

七、葡萄 風土能く洋種葡萄に適し内地に於て栽培困難なる良種も容易に結果す
今最近五箇年間に於ける果樹栽培及收穫高を掲ぐれば左の如し



苹果赤外臨明高尾山
有果形作常實此等
...

苹果の成熟状況

果樹栽培及收穫高

年	桃		梨		柿		苹果		葡萄		栗	
	栽培面積	收穫高	栽培面積	收穫高	栽培面積	收穫高	栽培面積	收穫高	栽培面積	收穫高	栽培面積	收穫高
大正元年	町 八四・四	町 一三四四	町 五四六・七	町 一〇五・一	町 三六八・九	町 三八五・九	町 六五六・二	町 一三六	町 六六・二	町 二七	町 九三四〇・八	町 三九八〇
同 二年	町 二四二・二	町 一三五五	町 一三五六・四	町 九四七・一	町 一九九・四	町 三九七・九	町 一七三・一	町 四八二	町 二二〇・三	町 三〇	町 一三、七七・二	町 四〇四五
同 三年	町 二六七・三	町 一三七八	町 一六五一・〇	町 一、三五〇	町 一、〇七三・七	町 三八一・六	町 一、六〇七・〇	町 七八一	町 一三九・八	町 一五五	町 一、七五二・五	町 三六二八
同 四年	町 二八二・二	町 一、三五〇	町 一、八〇二・九	町 一、二六四	町 一、一四一・一	町 二、四七二	町 一、七六九	町 八〇〇	町 一、四〇・二	町 一五五	町 二、三二六・一	町 三、六四八
同 五年	町 五〇〇・六	町 四、四四四	町 一、〇九八・七	町 八三〇	町 一、〇九三・六	町 四、四二九	町 一、六三六・三	町 一、〇九二	町 九・三	町 一八二	町 二、八九七・〇	町 四、七四四

本表栽培面積は一段歩に付桃、梨、苹果の樹數各七十五本、柿三十本、葡萄三百本、栗十本として算出せり尙大正五年に於ける桃、梨、苹果、葡萄は各道に於て優良と認むる品種のみに就き之を掲上せり

(チ)蔬菜 従來白菜、蘿蔔、甜瓜、南瓜、水芹、蒜等の栽培多く行はれ開城白菜の如き其の尤なるものなり近來内地人の移住増加に伴ひ種種なる蔬菜類の栽培行はれ胡瓜、茄、牛蒡、胡蘿蔔、菠薐

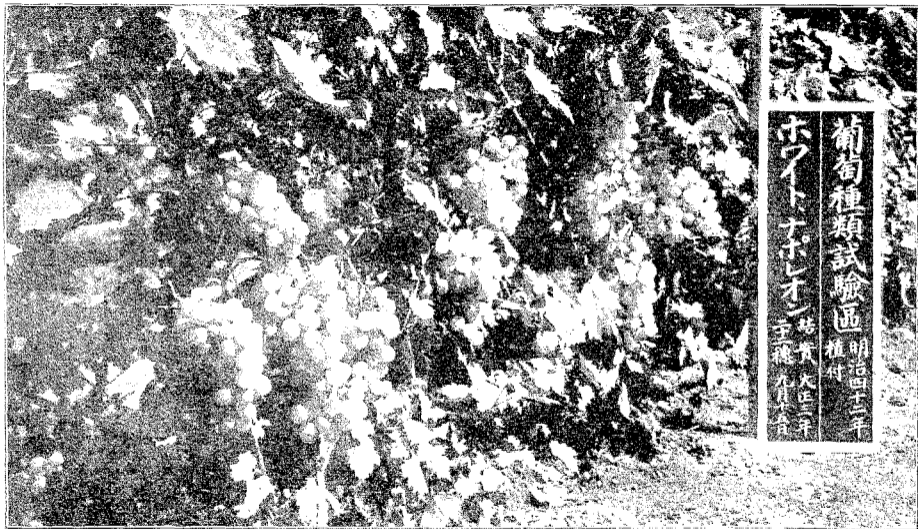
草、野蜀葵、菜豆、蕎麥、苧苧、苧蒿、葱、甘藍、西洋甜瓜等の類漸次増加するに至れり

第四節 勸農機關

農業は朝鮮の産業中最重要の位置を占め國民の經濟は一に繫りて其の振否如何に在るを以て之の改良指導の途を講ずる爲勸農機關を設くること左の如し

(イ) 勸業模範場

一、本場は明治三十九年日本政府之を京畿道水原に設置し産業の改良發達上に資する調査、試験、農事の模範、實地指導、講習、講話、種苗、蠶種、種禽、種豚の配付等を主要の目的とし其の出張所を大邱、平壤、木浦に設け明治四十年三月之を舊韓國政府に譲り爾來一年に其の實を擧ぐるに至りしか日韓併合の結果總督府の管轄に歸し水原を本場とし大邱、平壤、龍山、木浦及蘆島に支場を設け又大正元年に於て元山に出張所を設けたり然るに大正三年四月大邱、平壤、龍山の三支場を廢止し前二者は其の業務を各所在道廳に於て種苗場として繼承せしめ後者は更に原蠶種製造所及女子蠶業傳習所として水原に於て其の業務を行ひ又元山出張所を德源支場と



葡萄種類試驗區
明治三十二年
植付
 ホワイナポロ
場貫大正二年
至徳九頁音

葡萄栽培狀況

改稱し江原道洗浦に出張所を設け更に大正五年江原道蘭谷面に牧馬事業を開始せしか事業緒に就くに及び大正六年同面に牧馬支場を設置すると同時に洗浦出張所を洗浦牧羊支場と改め又從來の木浦支場を木浦棉作支場に蘇島支場を蘇島園藝支場に徳源支場を徳源園藝支場に原蠶種製造所を蠶業試験所と改正せり

二、蠶業試験所 水原に在り原蠶種の製造配付及蠶業に關する試験調査を行ふ所とす從來是等の事業は主として龍山支場に於て行ひ來りしが大正三年四月龍山支場を廢すると同時に本所に於て専ら之を行へり

三、女子蠶業講習所 水原に在り本所は明治三十八年七月創設の舊大韓婦人會養蠶講習所に胚胎し同四十三年四月官立となり四十四年二月勸業模範場龍山支場附屬となし大正三年四月同場を廢止すると同時に水原に移すこととし同年十一月移轉せり講習期間は十箇月にして蠶業に關する學理及實地を講習す大正六年の卒業生は十八名にして之に従前の卒業生を加ふるときは其の總數百五十七名に及へり

四、勸業模範場木浦棉作支場 全羅南道木浦に在り明治三十八年朝野の有志相謀りて棉花の栽培協會を設立し紡績原料に適せる陸地棉を朝鮮南部一帶に普及せしめむことを企畫し之を經營の實行に就き當時の日韓兩國政府に請願する所あり當局其の請を容れ當時の勸業模範場木浦出張所を以て陸地棉の試験を行ひ傍其の普及に努力せしむると同時に繰綿工場を建設して種子の蒐集に勉めしむる等幾多施設を爲し期待せる成績を擧げ得たるに由り明治四十一年之を栽培の獎勵機關として臨時棉花栽培所を置き益陸地棉の普及を圖り來りしか四十三年十月之を勸業模範場の所轄に移せり大正元年度には棉採種圃の數を三十箇所となし獎勵の便宜を圖らむを爲すも之を其の所在地各道廳の所管に移し同場にては棉作に就ては試験調査の外主として米國より新規輸入の種子馴化に勉めしむること爲せしか其の栽培區域の擴張に伴ひ棉採種圃制度を以て之を指導監督を爲すは不便なるを以て大正二年度よりは從來の棉採種圃を全廢し陸地棉栽培地の各府郡には其の所管道廳をして棉作に經驗ある技術員を駐在せしめ府郡の職員と協力して栽培指導を爲さしむることとなせり

五、勸業模範場蘇島園藝支場 京城府外蘇島に在り園藝模範場と稱し明治三十九年八月の創立に係りしか明治四十三年十月移して勸業模範場支場と爲せり園藝に關する試験及模範的栽培を爲し廣く公衆の觀覽に供せり

六、勸業模範場徳源園藝支場 咸鏡南道徳源に在り大正元年の創設に係り北鮮地方に於ける園藝の試験及模範的栽培に努めつつあり

七、勸業模範場洗浦牧羊支場 江原道平康郡洗浦に在り緬羊の蕃殖、配付を爲すを主なる目的とす大正二年度より其の業務に著手し同三年度に於て業務略整ひたるを以て之を勸業模範場出張所と爲し更に大正六年に至り勸業模範場支場と爲せり

八、勸業模範場蘭谷牧馬支場 江原道淮陽郡蘭谷面に在り馬匹の飼養及蕃殖試験を行ひ朝鮮に適應する馬種を産出し之が普及を圖るを目的とし大正五年四月より其の設備に著手し大正六年三月勸業模範場支場と爲せり

(ロ) 種苗場

種苗場は京城、清州、公州、全州、光州(濟州島に支場を設く)、大邱、晉州、海州、平壤、(江西、順川、江東、孟山に支場を設く)義州、春川、咸興、鏡城(城津、會寧、穩城に分場を設く)の十三箇所に設く各其の所在道廳の所屬にして其の地方に適する種苗、蠶種、種卵、種禽及種豚の配付又は種畜の種付、農事に關する模範、農産の改良増殖に關する試験及調査、農用器具器械の貸與、農事に關する講習、講話、傳習及實地指導を爲す事等を以て其の主なる業務となす

附

朝鮮總督府農林學校 京畿道水原に在り勸業模範場に附屬す明治三十九年四月の創立に係り農林業に必要なる智能技術の普及を謀り兼て徳性涵養の目的に出でたるものにして本科を三箇年、速成科を一箇年とす(速成科の生徒は當分募集せず)本校設置以來本科卒業生を出せしこと十回此の人員二百八十一名速成科修業者を出せしこと三回(林業科二回、獸醫學科一回)此の人員三十九名、(林學科十九名、獸醫學科二十名)なり大正六年度より専門科を置き専門學校の素地を作ることとなれり

朝鮮農會 明治三十九年の創立に係り朝鮮に於ける農林業の改良發達を圖るを以て目的とし本會を水原に置き開城、清州、公州、全州、群山、光州、大邱、晉州、黃州、平壤、鎭南浦、義州の十二箇所に支會を設け其の事業として毎月一回日鮮文會報を發刊し其の他圖書の編輯出版質問應答、農事の講習、講話、傳習會、品評會の開催、牛畜鶏種の改良、模範果樹園、蠶業傳習所の設置種苗の育成配付又は其の供給の仲介をなす等官民の間に介立して直接間接に指導勸奨に努めつつあり

여 백

第九章 拓殖事業

朝鮮に於ける拓殖は獨り東洋拓殖株式會社のみならず他に幾多の經營者ありき雖其の規模較や小なるを以て本章には特に該會社の拓殖事業に關する最近の概況を掲げて其の一斑を示さむとす同會社の經營する事業の種類は(一)農業、(二)拓殖上必要なる土地の賣買及貸借、(三)同土地の經營及管理、(四)同建築物の築造、賣買及貸借、(五)同移住民の募集及分配、(六)同資金の供給、(七)移民及朝鮮農業者に物品の供給並其の生産又は獲得したる物品の分配にして本社を東京に支店を京城に置き別に一般業務執行の爲め朝鮮に十箇所、移民の募集分配事務の處理並業務案内の爲め下關に一箇所の出張所を設け以て朝鮮に於ける拓殖事業を行ひつつあり

會社の資本金は一千萬圓(總株數二十萬株、一株額面五十圓大正二年七月全部拂込済)にして株式は總て記名式とし内鮮人に限り之を所有することとせり外に大正二年三月政府の保證により佛國巴里に於て第一回社債五千萬法(邦貨千九百三十五萬圓)を發行し又朝鮮各農工銀行發行農工債券の引

受に充つる爲大正六年四月第二回社債として金二百萬圓を大藏省預金部より借入れたり
 今最近五箇年間に於ける營業概況を示せば左の如し

東洋拓殖株式會社營業概況

年 度	資本金		拂込政府準備金		補助金		損益		配當金	職員數
	資本	拂込	出資	金	金	總益	總損	利益		
大正元年度	10,000	7,500	2,250	2,900	3,000	1,050	2,645	1,491	45,000 (年六分五厘強)	285
同 二年度	10,000	10,000	3,000	4,300	3,000	5,648	3,626	2,338	69,000 (年七分強)	288
同 三年度	10,000	10,000	3,000	5,100	3,000	3,333	3,394	2,386	65,000 (年六分五厘)	239
同 四年度	10,000	10,000	3,000	5,800	3,000	3,533	3,095	2,073	65,000 (年六分五厘)	243
同 五年度	10,000	10,000	3,000	6,600	4,695	3,196	2,113	1,043	65,000 (年六分五厘)	239

本表大正三年度以降に於て益金の減少を見るは主として米價暴落の結果に依る

一 土地の經營 會社の經營せる土地は二種類より成る即ち出資地及買收地是なり出資地は舊韓國政府が引受株式六萬株に對し拂込に代へて提供せる土地を謂ひ買收地は會社自ら之を買收せるも

のにして併合の年即ち明治四十三年度末に於ける總面積は一萬千三十五町步餘に過ぎざりしが今や左表の如く七萬三千三百町步餘の多きに達せり之等の土地は移住民割當地並果樹園、造林地、林業苗圃地の如き直營地外の耕地は從來の慣例に依り朝鮮人をして小作せしめ一面堤防用水路溜池等の修理改善を行ひ土地の改良生産の増加に努めつつあり

東洋拓殖株式會社經營土地

大正六年六月末日

道	田	畑	山	林	雜種地	合計
京畿道	四、四七四・三 _町	三、五三六・〇 _町	四七・九 _町	一七七・四 _町	八、二三五・六 _町	
忠清北道	七二四・一	四九四・九	〇・二	四五・一	一、二六四・三	
忠清南道	四、六〇九・一	七六六・五	六・〇	七〇・〇	五、四五一・六	
全羅北道	八、五〇二・二	七〇四・八	一七六・三	一〇四・九	九、四八八・二	
全羅南道	九、七七〇・六	二、三八四・二	九〇一・五	三〇六・四	一三、三六二・七	
慶尙北道	三、八三九・一	一、六六八・二	二二四・八	一一二・〇	五、八五四・一	
慶尙南道	四、九四〇・一	一、九三五・六	三一五・五	二五一・四	七、四四二・六	

道	田	畑	山林	雜種地	合計
黃海道	九、六九七・五 <small>町</small>	三、七四一・六 <small>町</small>	五一七・五 <small>町</small>	九五九・一 <small>町</small>	一四、九一五・七 <small>町</small>
平安南道	六四九・四	一、三七二・〇	一・三	一一〇・四	二、一四三・一
平安北道	七一六・八	四三五・四	九二・二	一三一・〇	一、三七五・四
江原道	二〇〇・六	一、四九九・九		一四・六	一、七一五・一
咸鏡南道	八九八・四	一、一〇九・二		一三六・三	二、一四三・九
總計	四九、〇二二・二	一九、六四八・三	二、二八三・二	二、四三八・六	七三、三九二・三
大正四年度末	四九、〇八〇・四	一九、五九四・四	二、二四四・三	二、四四四・八	七三、三六三・九
同三年度末	四六、六四二・一	一八、七五三・七	二、二六五・八	二、四八二・四	七〇、一四四・〇
同二年度末	四三、〇五七・三	一七、四七一・七	一、九六八・六	二、三六四・八	六四、八六二・四
同元年度末	三二、八九七・〇	一一、六五二・四	一、六四七・二	一、八四〇・五	四八、〇三七・一

二 農事改良 内鮮農民に對し稻作の改良獎勵の爲明治四十三年以來毎年各地に採種小作田を設け優良種子の生産並普及に努め苗代の設置施肥、插秧、除草、害虫驅除豫防、調製法等の實地指導

を試み又一面種肥料耕牛の貸付を爲しつつありしか大正六年の終りには採種小作田二百九十四町歩を設け改良種普及地二萬三千町歩に達する見込にして大正七年には社有畝中改良種の栽培全部の完了を見るに至るへし

三 果樹園經營・京城東大門外露島果樹園は明治四十二年の創設に係り全面積二十三町三反歩にして苹果三千七百餘本、梨千八百餘本、葡萄二千四百本を栽培す生産物中苹果は逐年供給過多の傾向あるに鑑み其の販路を大正二年來露領滿洲方面に開拓し相當の効果を收めつつあり

四 殖林經營・明治四十三年以來年年經營の歩武を進め大正六年六月迄に國有山野の貸付を受けたるもの黃海道に於て一萬五千八百五十八町歩、咸鏡南道に於て四千八百九十六町歩、江原道に於て二百七十町歩、合計二萬一千二十四町歩にして目下貸付出願中のものを合せ近く三萬三千町歩の面積を得薪炭採取林及用材林の經營を爲すに至るへし此の外黃海道に於て一千二百二十三町歩の民有林を買収し大正二年以來カシハ、ナラ、マツ等の天然生雜樹を保育中なれば今後三、四年を経過すれば薪炭材を供給するこゝを得へし又造林用苗木養成の爲明治四十四年以來京城を距る

一里許の往十里に十三町步餘の地をトシクヌギ、ニセアカシヤ、クリ、カラマツ等の苗を養成し社有造林地に山出を爲し又一般需要者に供給したるもの數からす

五 竹林經營 朝鮮の南部は竹林經營の適地なるも從來多くは天然に委し濫伐を極め年年荒廢する

の状態なりしを以て明治四十五年以來慶尙南道及全羅南道に於て民有竹林九十五町步餘を買收し之を改良して模範林の經營に著手し一面には竹林新植の模範を示す爲國有未墾地の貸付を受け或は民有未墾地を買收し大正二年及同三年の兩年間に於て八十町步餘に苗竹林の新植を爲したるに其の生育頗る佳良なり此くの如く朝鮮に於ける竹林新植の嚆矢は本會社にして其の成績良好なり

六 水利開墾

(イ)平安北道秦川水利工事 大正二年五月平安北道龜城郡五峯面秦川郡西面及南面の三面に跨る川坊江(大寧江の支流)流域畑地の改耕に著手し大正四年十二月竣功したるも更に工事の完全を期し大正五年三月以來改良工事を起し同年十一月完成せり其の灌漑區域は田約一千九百町步にして用水は川坊江に井堰を設けて引水するものなるか主要なる竣功工事は水路幹支線延長五萬

九千三百餘間隧道三箇所長七百餘間井堰一箇所伏越十箇所流込二百十六箇所分水樋九十五箇所
橋梁三百四十二箇所堤防延長二千六百間等にして其の工費は四十八萬五千六百餘圓を算せり

(ロ)宮三面機力用水工事 全羅南道羅州郡良谷面及旺谷面は榮山江の左岸に在りて土地肥沃なるも河水は耕地面より十數尺低く流るる爲嘗て灌漑の用に供したることなく従て毎年用水缺乏し收穫意の如くならざりしを以て會社は揚水機械を据付け灌漑施設を爲すべく大正五年六月工事に着手し同年十二月之を竣工し現に本年より蒙利地域水田二百餘町歩は一反歩に付平均糶四石の收穫を得へき見込なり而して主要なる竣工工事は揚水機械(吸入瓦斯機十四吋セントリフュールガル唧筒)一臺機械及其の他附屬建物四棟、水路延長三千二百三十八間、暗渠及土管九箇所掛樋一箇所土橋十一箇所等にして其の工事費は金二萬八千七百餘圓なり

(ハ)長安坪開墾工事 本工事は京畿道高陽郡蘆島面長安坪所在國有草生地五百餘町歩を開墾し漢江の氾濫を防止し移住民の收容を目的とするものにして大正元年九月起工し同四年七月竣工を告げ開墾整理地面積四百二十八町歩餘を得て目下鮮人に貸付し假に試作中に屬す竣工工事の主

なるものは堤防延長九千五百八十四間、閘門四箇所、用排水路二萬一千九百二十一間、道路二萬九千七百四十九間、橋梁三十箇所等にして竣功後更に之が完全を期する爲め改良増築工事を施し其の工事費は通計金三十三萬四千餘圓に及へり

(三) 羅岩里開墾工事 本工事は全羅北道益山郡望城面羅岩里所在國有未墾地百四十餘町歩の開墾を目的として錦江の氾濫を防止し灌漑排水の途を講せんとするものにして大正五年四月起工し同九月竣功し水田百十四町歩の新開墾地を得本年は反常平均粃四石の收穫を得へき見込なり而して工事の主なるものは堤防二千五百餘間、用悪水路七千四百餘間、道路四千八百四十餘間、樋間四箇所等にして其の工費は金三萬三千百餘圓なり

(ホ) 梁山郡上西面改良工事 慶尙南道梁山郡上西面曾山里所在の社有地約八十町歩は從來堤防脆弱にして年年洛東江の水害を被り爲に大正二年度には僅かに粃百石同三年度には五十石を收穫したるに過ぎず爾後は全然荒廢に歸し收穫皆無の状態に在りしを以て防水工事を施すと同時に用悪水路を疏通せるものにして大正六年三月起工し同六月竣功せり竣功工事は堤防二千二十六

間取水樋管一箇所、排水管一箇所等にして其の工費は金一萬四千九百九十二圓八十二錢を要したり而して本年より直ちに約五十町歩の作付を爲したるも收穫意の如くならず粃僅に五百石に過ぎず

(へ)方丑池埋立工事 本工事は全羅南道羅州郡旺谷面方丑里所在舊溜池面積十三町八反一畝二十一步を埋立て之を水田に墾成利用の目的を以て大正六年六月起工し同年八月五日竣工耕地整理を行ひ良田十二町八反一畝十四歩を墾成せり用水は池塘に新設せる調節門に依り宮三面機力用水を利導すると共に雨水を貯へて之を補給に充て同時に排水を良好ならしめたり而して工事の主なるものは土工二千八百間、調節水門一箇所、階段工一箇所、橋梁六箇所、幹線水路百七十二間、排水土管三箇所、その他附帯工事等にして其の工費は二千五百二十七圓九十五錢を要せり

七 移民事業 會社は明治四十三年以來拓殖事業の經驗に鑑み大正六年二月移住規則を改正し土地讓渡、移住費貸付等に對して便法を講し純農業者以外に農業兼營者移住の途を開き拓殖事業經營

者の爲めに土地の譲渡若は移住費を貸付する事とし又第二種移住民の一時拂込金並利率を低減し而して移住民の農業上の指導副業の奨励は勿論組合を組織して其の共同販賣並購買を斡旋し且移住地の選定に一層周到なる注意を拂ふと共に移住民募集の方法を改正し本年四月より下關市に出張所を設け堅實なる移住民の招致を圖れり且教育、宗教、衛生、交通其の他の施設に關しては從來に比し其の保護厚うせむことを期せり又移住民選奨手續なるものを定め優其移住民に對しては特別の保護を與ふる外褒狀及賞品を授け永く之を旌彰するの途を開けり今既往七回の移住民成績を擧ぐれば左表の如し

東洋拓殖株式會社移民事業

大正六年五月末日

回	期	應募戸數	承認戸數	現在戸口		割當地 面積	移住費 貸付高
				戸數	人口		
第一回(明治四十三年)		一、二三五	一六〇	一、二四	五六〇	二二七	二〇、一四六
第二回(同 四十四年)		一、七二四	七二〇	三六一	一、六二七	六三〇	四一、四〇八
第三回(大正元年)		二、〇八六	一、一六七	七二七	三、二七三	一、三二七	七五、九五〇

第四回(同)	二年	三、四七二	一、三三〇	六四七	二、九一五	一、一五七	五二、三三一
第五回(同)	三年	一、九六二	一、一〇六	四八五	二、一八五	八七九	二二、六八〇
第六回(同)	四年	一、二八四	七七四	三三三	一、五〇〇	六四八	一三、四三〇
第七回(同)	五年	一、一〇一	五四二	二九七	一、三四〇	五一八	九、三五〇
累計		一、二、八五四	五、七九九	二、九七四	一三、四〇〇	五、三八六	二、三六、二九五

本表對當地面積及移住費貸付高は現在戸數に對する分のみを掲上せり

次に各道に於ける移住民分布の狀況を示せば即ち左の如し

東洋拓殖株式會社移住民分布

大正六年五月末日

道	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回	第七回	合計
京畿道	一三	四二	一三五	八九	七一	六二	三六	四四八
忠清北道	一	一	一	一	一	一	一	九
忠清南道	三	三三	四八	六一	三九	二二	二二	二二八
全羅北道	三五	三五	八一	八三	一〇四	四五	二一	四〇四

道	第一回	第二回	第三回	第四回	第五回	第六回	第七回	合計
全羅南道	一一	三三	一五六	一三九	七八	五三	五六	五二六
慶尙北道		七一	九八	六五	七〇	三四	二一	三五九
慶尙南道	六二	一四六	一一七	七四	五七	五二	四七	五五五
黃海道		一	九二	一三三	四七	五二	八七	四二二
平安北道						七		七
平安南道					一一	四		一五
咸鏡南道				三	八			一一
總計	一二四	三六一	七二七	六四七	四八五	三三三	二九七	二、九七四

又移住民戸數の府縣別を表示すれば左の如し

東洋拓殖株式會社移住民府縣別

大正六年五月末日

府	戶數	府	戶數	府	戶數	府	戶數
山口縣	三三四	佐賀縣	三三七	福岡縣	三二四	高知縣	二六三

德島縣	岐阜縣	大分縣	長崎縣	廣島縣	香川縣	熊本縣	岡山縣
七九	七九	九八	一〇四	一二三	一三三	一六三	一六七
福島縣	鹿兒島縣	三重縣	和歌山縣	福井縣	愛知縣	新潟縣	愛媛縣
三六	四四	五八	六〇	六四	六七	六九	七七
山梨縣	北海道	兵庫縣	山形縣	宮崎縣	石川縣	鳥取縣	宮城縣
一五	一八	一八	一八	二六	二七	二八	三一
總計	其他	富山縣	長野縣	奈良縣	島根縣	京都府	靜岡縣
二、九七四	五七	一〇	一〇	一三	一五	一五	一五

會社の移住民は之を分ちて二種とす第一種移住民は一月に付田畑二町歩以内の割當を受け其の土地代金に年六分の利子を附し五箇年據置二十五箇年以内に年賦拂込みたる後該土地を所有するものにして全部自作することを要す第二種移住民は割當地田畑十町歩以内にして土地引渡の際土地代金の四分の一以上を一時に拂込み残額は年七分の利子を附し二十五箇年以内の年賦拂込みに依り土地所有權を讓渡せられ割當地の一部を自作すれば他は小作せしむることを得るなり移住後の成績良好なる第一種移住民は前記拂込の方法に依り三町歩以内の土地の讓渡を受け又第一種及第

二種共移住後五年を経過したる後土地代金及移住費貸付金の二分の一以上を拂込むときは其の土地の所有權を取得することを得而して半農移住民として本業の傍ら農業を營み永住土著の根據を作らむとする者に對しては適當の耕地を割當て第一種移住民と同様の條件に依り土地を讓渡し移住費を貸付け保護を與へて第一種移住民たることを承認することあり以上の外鑛山業其の他拓殖事業經營者の業務に従事する傍ら農業を營まむとする者に對して其の經營者連帶保證の下に第一種移住民として承認せる特種移住民及五戸以上申合せ社有地以外の土地の買入を會社に要求し會社が該土地を買入れ之を割當てて第一種移住民たる事を承認せる買入讓渡移住民あり其の他移住民に薪炭供給の目的を以て移住地附近に適當なる造林用地あるときは可成之を貸付し又住家納屋の建築費又は購入費、種苗、肥料、農具及耕牛の購入費の補助として第一種移住民に對し一戸に付移住費二百圓以内の貸付を爲す外住家建築材料の一部又は購入費の一部を受くることを得せしむ而して移住民に對し船重賃割引券を交付し邊陲地方の移住民に對しては特に土地代金拂込方法及移住費貸付に關し特殊の方法を設け又は其の他の特殊の保護を與ふるこゝあり

移住申込の手續は毎年二月頃會社が其の年募集すべき移住民の戸數並移住地を官報及主要なる新聞に公告するを以て同社移住民ならむとする者は同社移住規則に依り移住申込書を作成の上市區町村長の證明を得て内地在住者は下關出張所に朝鮮在住者は京城支店に申出つへく申込書には最近の戸籍謄本又は民籍謄本を添附することを要し毎年九月末日迄に提出すへきものとす

八 資金貸付 會社は拓殖上必要なる資金を貸付す其の方法左の如し

一 定期償還貸付 (イ) 移住民及朝鮮農業者に對し朝鮮に於ける不動産を擔保とする五年以内の貸付、(ロ) 移住民及朝鮮農業者に對し其の生産又は獲得したる物品を擔保とする貸付、(ハ) 朝鮮に於ける不動産を擔保とする三年以内の貸付、(ニ) 朝鮮に於ける公共團體に對し五年以内の無擔保貸付、(ホ) 移住民及朝鮮農業者にして二十人以上の連帶債務者に對し五年以内の無擔保貸付

二 年賦償還貸付 (イ) 移住民に對し二十五年以内の移住費貸付、(ロ) 移住民及朝鮮農業者に對し朝鮮に於ける不動産を擔保とする十五年以内の貸付、(ハ) 朝鮮に於ける公共團體に對し二十年以内の無擔保貸付

九 農工銀行令に依る農工銀行の發行する農工債券の引受及荷爲替

拓殖資金の需要は逐年遞加の趨勢を示す即ち左表の如く併合の年なる四十三年度末の貸付總額は百三十二口、五十八萬七千五百三十圓に過ぎざりしか大正六年六月末には一千九百六十六口、九百四十四萬七千九百二十七圓七十三錢となり差引千八百三十四口、八百八十六萬三百九十七圓七十三錢の増加を呈し尙將來益増加するの傾向を有す而して之か使途は農工債券引受高三百萬圓の外土地開墾及改良、水利、築堤、農事經營、藝圃經營、殖林、果樹栽培、公共事業等各種の拓殖方面に互り就中近來水利事業の放資多きを占むるは産業開發上好現象なりと云ふへし

東洋拓殖株式會社貸付金

種 別	明治四十三年度末		大正六年六月末日	
	口 數	金 額	口 數	金 額
定期償還貸付金	内地人	三八	二五四、二五〇	二一〇、三三二
	朝鮮人	八八	一七五、四八〇	八六五、七七五
	内鮮人連帶	—	—	六、三六一
	公共團體	—	—	二二一、二七六
計	一二六	四二九、七三〇	八三一	一、三〇三、六三四

年賦償還貸付金	内地人		朝鮮人		公共團體	計
	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人		
農工債券引受高	二〇、四五〇	一七八	八三〇	一	一三五、三五〇	一三五
總計	五三六、九一三	一、五九五、三六一	一、二二四	一一一	一五七、八〇〇	一、九六六
	五〇〇	三、〇一一、五一九	五、四四、二九三	三、〇〇〇、〇〇〇	五八七、五三〇	九、四四七、九二八

移住費貸付高は別表移民事業の部に表示せしを以て本表中之を省く
 貸付金の利率は普通最高年一割二分、最低七分にして農工債券は年六分三厘及五分七厘の

二種あり

여 백

第十章 林業

第一節 森林

朝鮮に於ける林野の總面積は約一千六百萬町歩を算し全土の七割三分を占め世界に稀なる山國なるに拘らず古來林政不備にして特殊の保護林たる封山の如きものを除く外は所謂公山と稱し一般人民の自由樵採に委して顧みさりしか李朝の末に至り此の保護林制度も廢たれ到る處濫伐を肆にし或は火田を起し或は急斜地を開墾して毫も植栽を志す者なく爲に林野の大部分は荒廢を極め僅に陵園墓附屬の森林及鳴綠、豆滿兩江の流域等に於て見るに足るの林相を保つに過ぎずして禿山曠野起伏し滿目荒涼を極め延て産業の發達を妨げ國土の保安を害し其の災禍擧て算ふへからず之か復舊改善の策を講ずるは洵に焦眉の急務に屬せり茲に於て舊韓國政府は隆熙二年(明治四十一年)一月森林法を發布し一般山野の保護、整理、増殖を圖り盛に殖林を奨勵したりしか半島の民情に適せざる點少から

さるものあるを以て明治四十四年六月朝鮮總督府に於て新に森林令を布き從來の森林法を廢して國土の保安、危害の防止、水源の涵養、公衆の衛生、魚附又は風致の爲必要ありと認むるものは之を保安林に編入し伐採、開墾若は放牧を爲すことを得ざらしめ又永年禁養林讓與の途を開き以て愛林の美風を助長するに努め或は造林貸付の特典を設け造林事業促進の策を講ずる等刻下の急務に努めつつあり今最近に於ける林野の概算面積を掲ぐれば左の如し

森林面積

道	道		道		道		
	成林地	雑樹發生地	成林地	雑樹發生地	成林地	雑樹發生地	
京畿道	千町 二二二	千町 四一二	千町 一一一	千町 七三七	千町 一、〇〇五	千町 六・三	
忠清北道	七一	三〇八	二二六	六三三	一三〇	九九九	
忠清南道	九二	一八八	八七九	一、〇八五	四三一	二、三九五	
全羅北道	二四三	二四七	六六七	九六〇	二七八	一、九〇五	
全羅南道	二二三	五九〇	一、四八一	五九二	四七一	二、五四四	
合計	千町 七一五	千町 七・八	千町 二、七〇	千町 七・五	千町 六・三	千町 八・一	
		全面積に對する林野の割合				全面積に對する林野の割合	

慶尙北道	一八四	七六五	三六八、三一七	六・九	咸鏡北道	八八一	二二四	五二三	一、六一八	八・三
慶尙南道	一八四	四八七	二一〇	八八一	總計	五、四八四	七、二八三、一八一	一五、八八三	七・三	

即ち全面積大凡一千六百萬町歩の内成林地（疎生又は散生地を含む）は約三分の一に止まり殘地の内約三分の二は天然生稚樹の生育地にして三分の一は草生又は禿裸地に屬せり

半島の氣候は南北に於て差等あり隨て北寒帶より南暖帶に到る迄各種の樹木を生し其の分布亦地方に由り同しからず北部鴨綠江及豆滿江の兩流域上流地方其他の高山に於てはタウヒ、テウセンカラマツ、テウセンハリモミ、タウシラベ、テウセンマツ、シラカバ等を主として鬱蒼たる樹林を形成し中部より南部に互り到る處テウセンアカマツ多く又クロマツ、ナラ、クヌギ、ケヤキ、エノキ、ハンノキ、クリ等を生し最南部に至ればカシ、シヒ等の常綠樹及竹林の存生するを見る概して森林樹木の種類に富み其の數七百種の多きに達せり從て造林樹種は比較的容易に之を撰擇し得べし

第二節 森林保護

國有林野の保護に就ては舊韓國政府に於て京城府内の森林に四保護區を特設し之を取締に努め明治四十五年五月府令を以て國有森林山野保護規則を制定し地方長官をして國有森林山野保護の責任者たらしむるに共に特に保護の急要を感じたる京畿外八道の重要林野十六箇所に保護區を増設し各保護區に山林監守一人山林監守補數人を配置し次て大正二年九月に至り保護の要ある十二箇所の森林に對し山林監守所を新設し各所に憲兵上等兵一人若は二人憲兵補助員二人乃至三人を配置し且濟州島に四箇所の巡查出張所を特設し巡查一名巡查補二名つつを駐在せしめ専ら國有林野の保護取締に當らしめ又大正六年五月平安南道寧遠郡、江原道杆城郡、咸鏡北道富寧郡に三箇所の森林保護區を増設せり

尙其の他の國有林野に對しては從來の如く一般警察官憲をして保護取締の任に當らしめつつあり而して森林令に於ては地元住民に對し其の連帶の責任を以て國有林野の保護を命し報酬として之に林産物の一部を讓與することを得るの制を設け國有林野の保護を圖ると同時に地元住民に傾益を與ふることをし大正三年一月實施以降大正六年九月迄の箇所數二百四十三其の區域面積六十萬八千百五

十七町歩に上れり

又私有林野に在りても單に私人の保護に委するに於ては動もすれば濫伐に流れ林野の荒廢を招くの虞あるを以て道長官は森林令に基き夫道令を發して之か保育並伐採を制限し以て其の取締を厲行しつつあり此くの如く今日に於ては保護の施設略備り其の成績漸次良好に向ひ林相年を逐ふて改善せられつつあり

第三節 殖林事業

明治四十年以降國費を以て京城附近其の他に造林を行ふと同時に一般に種苗の無償下付を爲し又地方費及恩賜金經營に屬する苗圃に於ても苗木の下付を行ひ且各道に於て地方費模範造林を實行し又一面に於て國有林野の内存置を要せざる部分は民間に造林貸付を爲し事業成功の後無償にて付與し得ることとし大に造林の獎勵を行ひつつあり故に民間に於ける殖林事業は輒近異數の發達を遂げ各地に大小の企業家簇出して空前の盛況を呈せり就中東洋拓殖株式會社、釜山府並釜山學校組合、三井合名會社、朝鮮貴族林業組合普植園、川崎農場等に於て既に大規模の造林を行ひ又内鮮人富豪の造

林計畫を立つるもの少なからず

上述の如く殖林事業逐年勃興の結果大正五年に於ける官民の植樹總本数は八千八百五十九萬餘本に達し之を明治四十三年の併合當年の二百八十二萬餘本に比すれば約三十一倍の激増を示せり惟ふに朝鮮の林野は一般に甚だ荒廢に屬すこ雖概ね其の地質造林に適し樹木生育状態の如きも内地と殆ど異なる所なきと造林用樹種の多種なること即ち北部寒帶より南部暖帶に跨り生する七百種の樹木中喬木に屬するもの針葉樹十九種闊葉樹百三十六種外竹類三種ありて造林樹種の選定に苦しむか如きことなく人夫賃低廉にして且殆ど地摺費を要せざる爲多く造林費を要せず且貸付を受け得べき林野は各地に散在するを以て希望する造林地を各道に求め得べく朝鮮各地共木材の高價なると同時に木材の大消費國たる支那に近接し居る等の得點あるを以て朝鮮の殖林事業は將來頗る有望なり借地造林に關する手續等に就ては本府に於て刊行せる「借地造林手引」あり造林樹種の選定養苗及造林方法等殖林上の注意に關しては「殖林手引」の記述あるを以て企業者は先づ之等に依り一般的概念を得るに足る



況状育生の秋年四後栽植ヤシカアセニ

朝鮮の林野副産物は多種にして其の用途も極めて廣し其の中主要なるものは樹實類に於てはクリ、クルミ、テウセンマツ、イテウ 等にして就中クリは毎年約十萬石の生産あり近來内地に移出せらる樹皮類に於てはハギ、シナノキ、ナラ、カシハ、アベマキ 等あり殊にナラ、カシハは鞣皮原料として毎年三十萬貫内外を消費す其の他漆樹は其の本數八十萬本を超え殆ど全土に渉り其の生育に適し漆液の品質も内地上等品と伯仲の間に在り採漆容易なること勞銀低廉なること爲漆業亦漸く勃興の機運に向ひつつあり又椎茸、五倍子、藥料等も相當の生産額を見る

上述の如く朝鮮の殖林事業は概して有望なるを以て努めて民間に於ける養苗を奨励し以て斯業發展の基礎を養ひつつあり其の状況次の如し

(イ)官營苗圃事業 官營苗圃は明治四十年に於て國費苗圃三箇所を設置したるを嚆矢とし爾來歲々共に之を増設せしも其の後一箇所を除く外總て之を道の經營に移せり地方費及恩賜金に於ても各所に苗圃を開設し大正五年度末には其の數實に百二十六箇所此の面積二百七十町歩餘に達せり其の箇所數及面積を掲ぐれば左の如し

官營苗圃一覽

年 度	國費經營		地方費經營		恩賜金經營		合 計	
	箇所	面積 <small>町</small>	箇所	面積 <small>町</small>	箇所	面積 <small>町</small>	箇所	面積 <small>町</small>
大正元年度末	二	二五・一	二六〇	一四六・一	四八	四四・四	三二〇	二二五・六
同 二年度末	一	一七・五	七六	一五九・六	四二	四一・二	一一九	二二八・四
同 三年度末	一	一七・五	八〇	一六四・〇	四一	四〇・五	一一三	二二二・一
同 四年度末	五	三三・八	八八	一九三・六	四〇	四七・二	一三三	二七四・六
同 五年度末	五	三二・六	七八	一九八・四	四三	四〇・〇	一二六	二七〇・九

本表大正元年度以降同三年度迄に於て國費經營苗圃の著しく減少せるは之を地方費の經營に移したるに由り又大正二年度以降地方費經營苗圃の著しく減少せるは整理の結果京畿道の郡、面及學校等の補助苗圃を私營に移属したるに由る尙大正四年に至り國費苗圃の増加せるは林業試驗苗圃及營林廠の苗圃を算入せるに由る

此等苗圃の一部分は未だ創設時代に屬するものあれども大正五年の生産成苗數は二千七百十四萬本

の多きに達し其の内山植苗として大正六年春季に無償下付を行ひたるもの千七百三十七萬本國費及地方費の造林に用ゐたるもの三百五十萬本なり今國費、地方費、恩賜金に分ち苗圃の概況を記述すれば左の如し

一、國費經營苗圃 國費經營苗圃は明治四十年水原、平壤及大邱の三箇所に同四十二年京城、木浦及鏡城の三箇所に又同四十四年清州、晋州、全州、海州、義州、咸興、公州及春川の八箇所に新設し以て各道に一箇所（京畿道は二箇所）つつ計十四箇所を置き其の合計面積百二町歩に達せしも明治四十五年春季及大正二年春季の二回に涉り京城苗圃のみを國費に残存して他の十三箇所は地方費の經營に移し其の事業費を補助することとせり而して京城苗圃は約十八町歩の面積を有し専ら京城附近荒廢地に對する國費造林用の苗木を養成するに止めたり其の養苗樹種はアカマツ、クロマツ、ニセアカシヤ、クメギ、ヤマハンノキ、ハンノキ等にして大正五年秋季に於ける生産成苗數二百二十四萬四千餘本に上れり

二、地方費經營苗圃 地方費經營に屬する苗圃は明治四十三年忠清南道に於て之を開設し爾來全

羅北道及黃海道を除くの外各道共に之を設置し漸次其の數を増加したるのみならず國費苗圃十
 三箇所此の面積八十七町歩を地方費に移屬したる結果大正五年度末には七十八箇所百九十八町
 歩に達せり而して地方費苗圃に於ける養苗樹種はアカマツ、ニセアカシヤ、白楊類、クヌギ、
 クリ等を主なるものとす今各道に於ける狀況を表示すれば左の如し

地方費經營樹苗圃一覽

大正六年三月末日

道	苗圃數	面積	播種		挿條		業		成苗數
			種	石	條	床	替	据	
京畿道	三	三九・四	三四	一五一	一、四三七	三七	一、四八〇		
忠清北道	一〇	一八・六	一六	二七四	一、二八七	三七	二、一一一		
忠清南道	七	二二・六	七四	五〇	二、三四三	三七	二、二八二		
全羅北道	二	七・九	一七	二四	五二〇	三七	六三七		
全羅南道	二二	一九・一	四四	五五四	四六五	三七	一、八三二		
慶尙北道	六	二一・〇	三五	三九	一、三八二	三七	二、一一八		
慶尙南道	一五	一六・一	一四	一九三	九五七	三七	一、一六八		

總計	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	黃海道
七八	四	一	一	三	三	一
一九八・三	八・〇	七・〇	七・五	七・四	一六・一	七・六
四四六	二	七	三一	一一	一九	四二
一、九八四	一六六	九〇	一三三	一	一九〇	一二九
一一、四二〇	二、二〇八	九〇	三三八	三六二	六四〇	三九一
四二石						二
一六、一六三	一、〇三一	七九七	三二四	二四七	一、五一六	六二〇

三、恩賜金經營苗圃 恩賜金を以て經營する苗圃は明治四十四年全羅北道外五道に於て開設し同年度末に於て四十四箇所に上り更に大正元年度に於て四箇所を増設せる爲一時四十八箇所此の面積四十四町歩に達せしも整理の結果大正五年度末には四十三箇所面積三十九町歩餘に減せり今其の狀況を掲ぐれば左の如し

恩賜金經營樹苗圃一覽

大正六年三月末日

道	苗圃數	面積	播種			成苗數
			石	條	床	
全羅北道	一四	二二・〇	二二	一四	千本 五一五	千本 一、〇〇五
黃海道	九	一・〇	七二	一三二	千本 二九九	千本 五三〇
平安南道	一	二・八	四	九五	千本 三四	千本 三〇七
平安北道	二	一・一	五	二	千本 一八〇	千本 一八六
江原道	?	?	一七	一三三	千本 四一三	千本 五五五
咸鏡北道	八	三・〇	〇	五六	千本 四九〇	千本 一四九
總計	四三	三九・九	一二二	五二二	千本 一、九三一	千本 二、七三二

(口)私營苗圃事業 前項に述べたるか如く官營苗圃の養苗數漸次増加せりと雖駁駁たる殖林事業の發展は其の産苗數の下付のみを以て之を充すこと能はず遂に各所に私營苗圃の開設を見るに至れり而して其の成苗數は明治四十二年に在りては二百五十八萬本に過ぎざりしも大正五年には五千七百八十六萬本に達し過去九年間に於て約二十二倍するの盛況を呈せり尙既往に於ける私營養苗は概ね個人の經營に屬し小規模のもの多かりしも近年は殖林組合林業契等の組合苗圃殖林企業者

造林用の大苗圃又は販賣を目的とする苗木商の大苗圃等續續設置するの氣運に向へり今大正五年に於ける生産苗の概數を掲ぐれば左の如し

私營苗圃生産苗概數

大正五年

道	成苗數	幼苗數	合計	道	成苗數	幼苗數	合計
京畿道	八、四八一 <small>千本</small>	八、一〇四 <small>千本</small>	一六、五八五 <small>千本</small>	黃海道	一、八九四 <small>千本</small>	一、五三一 <small>千本</small>	三、四二五 <small>千本</small>
忠清北道	七、九四三	三、六四八	一一、五九一	平安南道	三、三七七	八八八	四、二六五
忠清南道	六、三五五	一一、七二一	一八、〇七六	平安北道	四、七六五	三、三四九	八、一一四
全羅北道	四八四	七九〇	一、二七四	江原道	一、七二〇	一、八〇〇	三、五二〇
全羅南道	二、三四五	三、三七五	五、七二〇	咸鏡南道	三、八二〇	四五八	四、二七八
慶尙北道	三、二五〇	五、三六九	八、六一九	咸鏡北道	四八五	三七六	八六一
慶尙南道	一一、九四一	二二、七一三	三五、六五四	總計	五七、八六〇	六四、一三二	一二二、九八二

(ハ)官營殖林事業 殖林事業の官營に屬するものは國費及地方費の經營にして前者は明治四十年以降後者は明治四十四年以降毎年引續き實行しつつ在り今最近六箇年間に於ける成績を掲ぐれば左

の如し

官營殖林事業

年	國		地方		合		計
	植栽面積	植栽本數	植栽面積	植栽本數	植栽面積	植栽本數	
大正元年	五三七・四町	一、一八九千本	一一〇・二町	三九八千本	六四七・六町	一、五八七千本	四・九石
同二年	一〇九・一町	一、〇一四千本	二二〇・二町	八三六千本	三一九・三町	一、八五〇千本	三・四石
同三年	一三四・七町	一、三七八千本	二四九・一町	一、一六二千本	三八三・八町	二、五三九千本	
同四年	一八三・二町	一、四六〇千本	二五〇・五町	一、三〇五千本	四三三・七町	二、七六四千本	
同五年	二二六・六町	一、八一一千本	二八四・三町	一、二二三千本	五一〇・九町	三、〇四七千本	
同六年	二五七・〇町	一、四四五千本	四六二・〇町	一、六六五千本	七一九・〇町	三、一一〇千本	

一、國費經營事業 造林の模範を示し風致の増加を圖り且植栽に關する試験を行ふを目的とし明

治四十年京城白雲洞及平壤牡丹臺の二箇所に殖林を開始し爾後水原、大邱、開城地方にも造林を行ひたりしか近年に至り京城附近に於ける荒廢山野の造林に主力を注ぐこととし砂防植栽及



忠清道北清州郡無心川水防林

普通植栽を行ひつつあり植栽樹種はアカマツ、クロマツ及ニセアカシヤを主としヤマハンノキ、クヌギ、白楊類之に次ぎ外に試植せる種類少なからず明治四十年以降大正六年に至る十一箇年間に於ける植栽面積は二千五百五十七町歩にして植栽苗數千二百七萬八千本に達し播種高二十八石餘に上れり

二、地方費經營事業 明治四十四年江原道に於て施行し大正元年には忠北、全南、慶北及江原の四道に同二年には更に京畿、忠南、全北、黄海、平南及平北の六道を加へ同三年には慶南及咸南を除きたる各道に於て同四年には各道に於て同五年には平北を除く他の十二道に於て同六年には各道に於て植栽を實行せり其の植栽面積千五百七十二町歩餘、植栽苗數六百六十七萬本に達せり而して其の樹種はアカマツ、クロマツ、クヌギ、ニセアカシヤ、クリ及白楊類を主とせり

右の外大正二年以來天然雜樹發生地に補植を行ひ之を保育禁養せる面積大正六年に於て一千二百十四町歩餘に達せり

天然稚樹發生地保育成育

年	國		地		合	
	保育面積 町	補植本數 千本	保育面積 町	補植本數 千本	保育面積 町	補植本數 千本
大正二年			一六四・五	一九	一六四・五	一九
同三年			二六・二	三八	二六・二	三八
同四年	一〇〇	六〇	四六五・六	二四	四七五・六	八四
同五年			五八二・九	八	五八二・九	八
同六年			一一一四・八	一八	一一一四・八	一八
累計	一〇〇	六〇	二、四五四・〇	一〇七	二、四六四・〇	一六七

(三)私營殖林事業 民間に於ける殖林事業は近年長足の進歩を爲し造林企畫者各地に簇出せり就中

釜山府竝釜山學校組合の殖林事業は既に相當の林相を呈し斯業上參考に資すべきもの尠なからず又東洋拓殖株式會社及三井合資會社を始め各所に大規模の企畫者を續出し又一面地方住民中にも殖林の實行者勃興し新に植栽を行ふのみならず天然生の稚樹發生地を保育禁養し極めて僅少なる

經費に依り比較的廣大なる殖林の實を擧げつつあるを以て私營殖林事業の前途は頗る多望にして大正五年に於ける植栽反別は二萬八千五百四十九町步餘に上り植栽樹數八千五百五十三萬七千餘本に達せり

(ホ)記念植樹 愛林思想を涵養し殖林の事業を奨勵せむが爲明治四十四年四月三日併合後第一回の神武天皇祭日を期し朝鮮全道を擧げて記念植樹を實行せしに豫想外の好結果を收め總本數四百六十五萬本に達せり爾後回を重ねるに従ひ益好況を呈し大正六年に於ける第七回の記念植樹の如きは總本數二千八百八十二萬四千本を植栽し之を第一回舉行の際に於ける植付本數に比すれば一千七百十七萬本を増加し約五倍に達せり而して從來の記念植樹に於ける植栽用苗木は國費、地方費及恩賜金經營苗圃の生産苗の無償下付せるものを充てたりしも下付苗木不足の爲天然苗の移植を行へるもの多かりしか故其の植栽後の成績に於て遺憾の點多かりしも殖林思想の普及に伴ひ漸次其の不利益なるを知得し豫め團體又は地方富豪、篤農者等に於て苗木を購入し置きて植栽に供するもの多きに至れるは最も欣ぶべき現象にして其の成績頗る良好なり

記念植樹は前述の如く回を重ねる毎に常に本數を増加せるのみならず廣く殖林の方法及森林愛撫

の必要等を直接間接に一般人民に周知せしめたる効果頗る大なり又記念植樹は將來繼續施行すへきを以て關係當局に於ては倍倍其の方法に考慮を加へて其の成績を擧ぐるに努むるは勿論一面植林の範を示し指導獎勵方法として之を利用するに於て遺憾なからむことを期せむとす

植栽地は官公衙學校等の構内、道路の兩側、壇地又は部落の前後等人目を惹き易き場所を主とせしも面模範林、御大禮記念林等各方面に設置せられて以來郡面の記念植樹は殆ど此の種の山野に行はるるに至れり都邑、村落附近の國有又は公有地に互り都鄙を論せず普く記念植樹を施行し之れが植付を爲すには官公衙の職員、學校職員生徒、守備隊、憲兵、面里洞長、金融組合員、農林業篤志者等は勿論一般人民老幼男女の別なく多數來會して之に従事するを常とす今植付本數を道別に擧ぐれば左の如し

記念植樹

道

第一回(明治四十四年)

第二回(大正元年)

第三回(大正二年)

第四回(大正三年)

第五回(大正四年)

第六回(大正五年)

第七回(大正六年)

京畿道	千本 三一四	千本 五三九	千本 五一二	千本 六六三	千本 一〇四七	千本 一、三九六	千本 一、五二三
忠清北道	三五二	四三六	三四〇	九九六	七五四	六〇七	七三四
忠清南道	三〇五	三、五二九	二、八二六	二、五三六	二、一四〇	一、七一	三、五五九
全羅北道	二五二	八二四	三〇〇	三七一	五六〇	六二七	七二二
全羅南道	二九一	三四〇	三八七	四四三	八二六	一、六一八	一、〇五一
慶尙北道	六〇八	七四〇	八八七	一、六八九	七四四	一、七三四	一、七〇一
慶尙南道	四二七	八七八	八五二	一、一七一	一、二四〇	一、五九九	一、〇六〇
黃海道	一三九	一五八	五六九	三二七	七三一	一、一五九	一、〇三四
平安南道	四一八	七六七	五二四	五二〇	三五一	二、二一五	三、二〇二
平安北道	二九九	二九五	一九七九	一、八六九	二、三八二	二、二七四	三、三六七
江原道	四七	一六一	一四二	八二六	一、四九五	二、八七五	一、一二七
咸鏡南道	一、〇三二	一、一〇三	二、四三七	一、六一三	二、三一六	一、九四〇	一、八九一
咸鏡北道	一八〇	三九七	六七七	五四三	七九九	七二〇	八五三
總計	四、六五三	一〇、一六五	一二、四三一	一三、五六七	一五、三八四	二〇、四七五	二一、八二四

(一) 御大典記念殖林事業 大正四年秋季に於て舉行あらせられたる 御即位の大典を記念せむか爲
殖林事業を計畫實行したるもの少からざるも就中道、而又は學校組合等の公共團體の經營に屬す

るものにては一面造林の模範を示すへき趣旨に依り一定の制限面積内に於て國有林野を讓與することとせり而して其の讓與したる件數及面積を掲ぐれば左の如し

國有林野讓與件數及面積 大正六年六月末日

道	地方費模範林		模範林		學校林		合計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京畿道	一	二六町	六四	八二四町	四	三九町	六九	九七九町
忠清北道	四	四	七	八	五	五	一六	一七
忠清南道			二五	三四二			二五	三四二
全羅北道			三〇	三〇〇	二	二六	三二	三二六
全羅南道			一〇三	七九五	四	六四	一〇七	八五九
慶尙北道			一九〇	一、八〇六	二五	二〇三	二一五	二、〇〇九
慶尙南道			九六	三五二	三	一七	九九	三六九
黃海道	一	五〇七	一六八	一、七九九	七	六七	一七六	二、三三三
平安南道			一一〇	一、〇二九	一	一〇	一一一	一、一三〇
平安北道			七一	八〇九	一	一	七二	八一〇
江原道			一五四	七四六	七	二四	一六一	七七〇

咸鏡南道		四〇	四四一		四〇	四四一
咸鏡北道		四五	六七三	二	一〇	六八三
總計	六	六二七	一一〇三	七一	五五七	一一、一〇八

(ト)種苗下付 明治四十二年以降民間殖林獎勵の爲國費、地方費及恩賜金經營苗圃にて養成せる苗木及購入種苗の無償下付を行ひ其の數大正六年春迄に種子約千五百五十九石、苗木約一萬二千五百八十三萬本に達し逐年増加しつつあるも未だ民願を充たすに足らざるの狀況なり而して下付種苗の主なる樹種はアカマツ、ニセアカシヤ、クヌギ、白楊類及クリ等なり

(チ)林業試驗事業 朝鮮の風土は内地に比し著しく相違せる爲森林山野の狀態も自ら特異の點あり其の荒廢の程度、治水及農牧等の關係並適良森林樹木等は内地と趣を異にするもの多く従て殖林事業上試驗及調査を要する事項尠からざるを以て從來地方廳をして要求の事項に就き小規模の試驗を行はしめしも地方廳は業務多端にして試驗事業の如き細密なる業務を行ふに適せず良好の結果を得難きを以て大正二年度に於て京城城外及京畿道抱川郡蘇屹面光陵の二箇所に林業試驗地を

設置し本府に於て必要適切の試験及調査を行ふこととせり而して京城試験地に於ては主として荒廢山野に對する殖林及内外樹種の適否並生育に關する試験を行ひ光陵試験地に於ては主として天然林の更新、樹林下に於ける養苗と人工下種及普通荒廢山野の殖林に關する試験を行ひ既に成績を擧げたるもの四十三あり

次に試験事業の一部として大正二年度より野生植物の調査を開始せり即ち本府職員及各實業學校職員等をして採集せしめたる標本に付囑託専門家をして鑑定を爲さしめ以て森林樹木、食用及救荒植物、工業植物、有毒及藥用植物並飼料植物の各植物篇を編纂し各種産業の開發に資することとせり而して大正四年十月迄には既に濟州島、莞島、智異山、鷲峯、白頭山、金剛山及鬱陵島の各植物調査書、藥料植物調査書及森林植物編中樹科、殼斗科、樺木科、蕭線菊科、櫻桃科、梨科、薔薇科、躑躅科の編纂を了へたり

第四節 造林貸付

國有林野に於ける造林事業の經營に關しては舊森林法に於ては單に部分林又は貸付の制を設けたる

に過ぎざりしも現行の森林令に於ては朝鮮の現状に鑑み此等の方法を廢し新に造林貸付に關する特典を設け努めて造林を奨励し急速に荒廢山野の救済を圖らむとする趣旨に出てたり即ち造林の目的の下に貸付したる國有林野は事業成功の曉には貸付期間の満了と否とに拘らず之を無償にて貸付者に付與するの特典あるを以て此の制度に基き出願するもの比年激増するに至れり今最近數年間に於ける貸付件數及其の面積を掲ぐれば左の如し

		造林貸付					
年	度	貸付件數	面積	年	度	貸付件數	面積
明治四十四年度迄		八九	二、一七一 <small>町</small>	大正四年度		九、〇二二	四八、〇六〇 <small>町</small>
大正元年度		三、〇八九	一一四、五三三	同 五年度		六、五七八	六〇、七八二
同 二年度		八、〇七〇	六九、九三四	同 六年六月迄		一、〇七四	一〇、一三三
同 三年度		七、四二五	九七、三二〇				

本表大正元年度申十萬二千町步及同二年度申二萬五千八百八十二町步は帝國大學演習林と

して無料貸付せるものなり

第五節 林野調査

朝鮮に於ける森林山野は明治四十三年中林籍調査を行ひたる結果其の分布の概況及面積の大要を知ることを得たりと雖尙國有私有の區分不明にして不便を感ずること甚しき故に速に其の區分を立て且國有林野の要存、不要存の區分を調査するの必要あり仍て明治四十四年度より之を調査に着手しつゝあり今其の概況を示せば次の如し

(イ)従來の方針 營林廠所屬要存豫定林野約二百萬町歩は大正二年度より大正十一年度に至る十年間に同廠の事業として調査し其の他の要存豫定林野約三百萬町歩と第一種不要存林野約三百萬町歩計六百萬町歩は本府の事業として明治四十四年度より開始し主として權利關係の複雑なる地域荒廢甚しくして民間造林の急施を要する地域及河川水源地にして保護上重要なる地域より着手し

つつあり

(ロ)實施の方法 要存豫定林野に對しては境界を定め標識を設け五萬分一見取圖及調書を作製し其の複本を關係道、府、郡保護區又は警察官署に送付し又第一種不要存林野に對しては査了後直に造林貸付等の處分を要するを以て各箇所毎に境界を査定し標識を設けたる上簡易なる實測を行ひ六千分一圖及調書を作製し其の複本を關係道、府、郡に送付す

(ハ)實施の成績 明治四十四年度に於ては最困難なる京畿道京城府及高陽郡内の調査に著手して二千百餘町歩を査了し大正元年度に於ては高陽郡内の調査續行及新に一府十郡の調査を行ひ二萬九千二百餘町歩を査了し大正二年度に在りては前年度來の繼續として一府、六郡及新規三十七郡、面積二十一萬八千六百餘町歩の調査を施行し大正三年度に於ては前年度の繼續十九郡、新規三府、七十六郡、七十四萬七千七百餘町歩を査了し大正四年度に於ては前年度來の繼續二府四十五郡一島新規三十七郡面積八十一萬三千餘町歩を査了し大正五年度に於ては前年度來の繼續二府六十四郡新規十七郡一島面積六十七萬七千七百餘町歩を査了し大正六年度に於ては九月迄に前年度末の

繼續二十郡新規九郡面積三十六萬七千二百餘町歩を查了し累計二百七十八萬五千餘町歩を查了するに至れり

今其の調査成績を表示すれば左の如し

年 度	林 野 調 査		調査組數	延 調 組 數	延 調 日 數	調 査 面 積
	新 規	繼 續				
明治四十四年度	二	一	二	一六	一二九	二、一〇四町
大正元年度	一一	一	三	二〇	七二七	二九、二四九
同 二 年 度	三七	七	七	三二	一、〇六三	二一八、六三九
同 三 年 度	七九	一九	一五	六一	二、五三四	七四七、七三六
同 四 年 度	三七	四八	一五	四〇	二、五七〇	八一三、〇七九
同 五 年 度	一八	六六	一五	三八	二、二二六	六〇七、七四二
同 六 年 九 月 迄	九	二〇	一五	一三	八五五	三六七、二三五
累 計	一九三	一六一	七二	二一九	一〇、〇九四	二、七八五、七八四

尙前記區分調査の外造林貸付、讓與及賣却の民願に基き特に處分上必要なる調査を行ひたるもの
及帝國大學演習林としての貸付地を調査し從て國有林の區域判明したるもの左の如し

年 度	種 別	調査箇所數	調査延組數	調査日數	調査面積
明治四十四年度	造林貸付	六四	一組	四三日	二、三一四町
大正元年度	造林貸付	二四	七	一八九	二〇、六三二
	大學演習林貸付	三	二	五九	一〇二、〇〇〇
同 二年度	造林貸付及林野賣却	一六九	一〇	三五七	四八、一四七
	大學演習林貸付	一	一	一四	二五、八八二
同 三年度	造林貸付、林野賣却及讓與	九四四	一四	七一二	三四、三八五
	造林貸付及牧草採取地貸付	一九	三	六	五、〇四八
同 四年度	造林貸付及林野賣却	四五	一〇	一六九	一八、八九三
同 五年度	造林貸付及林野賣却	二	二	八	六〇
同 六年九月迄	造林貸付及林野賣却				

年 度	種 別	調査箇所數	調査延組數	調査日數	調査面積
累 計	造林貸付、林野賣却及讓與 大學演習林貸付	一、二六七	四七組	一、四八四日	一、二九、四七九町
		四	三	七三	一、二七、八八二

第六節 營林廠

營林廠は明治四十年四月の設置に係り曾て統監府の所屬官署たりしか明治四十三年日韓併合と同時に朝鮮總督府の所管と爲り本廠を平安北道新義州に置き鴨綠江流域に於ては咸鏡南道惠山鎮及平安北道中江鎮の二箇所支廠を、平安北道高山鎮に出張所を設け豆滿江流域に於ては咸鏡北道延岩及西水羅に出張所を置き更に木材販賣上の便宜の爲京城に一出張所を置き以て鴨綠、豆滿兩江流域に於ける國有林野を管理經營しつつあり

(イ)所管面積、樹種及材積 營林廠所管林野は咸鏡南北道及平安北道の三道に跨り其の内要存豫定林野の面積は約二百二十萬町歩に達し恰も内地國有林野全面積の半に上り其の成林地面積は凡そ

九割三分即ち二百四萬町歩にして秋田、青森、木曾の三大森林を併せたるものよりも大なり管内は主として寒帯の樹種を以て蔽はれ全面積に對し針葉樹約七割、濶葉樹約三割を占む營林廠に於ては主として其の主林木たる紅松、杉松、落葉松を伐採利用しつつあり今最近の調査に係る主要樹種の占領面積及材積を示せば左の如し

成林地面積及材積

種別	鳴緑江流域		豆満江流域		合	
	面積	材積	面積	材積	面積	材積
紅松	萬町歩 二二	萬尺締 二二、九四九	萬町歩 一	萬尺締 一四七	萬町歩 二二	萬尺締 二四、〇九六
杉松	六五	四二、五七〇	一〇	一〇、六〇五	七五	五三、一七五
落葉松	二九	二二、一七三	二〇	一九、三四七	四九	四一、五二〇
計	一一六	八八、六九二	三一	三〇、〇九九	一四七	一一八、七九一
濶葉樹	四七	一一、五二八	一〇	四、七一九	五七	一七、二四七
總計	一六三	一〇一、二二〇	四一	三四、八一八	二〇四	一二六、〇三八

(一) 紅松 ホンソウ テウセンマツ即ち朝鮮五葉松の俗稱にして直徑三尺以上の大材麁からす其の材質は内地産扁柏材ヒノキと赤松材との中間に位し木理直く色澤佳良にして反歪又は伸縮するこゝと比較的少く加ふるに工作を施し易きを以て漸次其の長所を認められ各種建築用材家具用材として近來其の需要激增せり

(二) 杉松 サスン タウヒ、タウシラベ及テウセンハリモミを併せたる俗稱にして北海道のエゾマツ、トドマツに類似す價格低廉工作容易なるが故に廣く建築用材、函材、木羽板其の他製紙原料、燐寸軸木及包装用經木原料等として使用せらる

(三) 落葉松 テウセンカラマツの俗稱にして樺太のシコタンマツに類似す樺太産は細丸太を主とし大材麁きも廠材には直徑二尺内外の大材稀ならず年輪緻密材質強硬にして且耐久力に富むを以て建築、橋梁、船艦、枕木、電柱、棺材等に好適す

(四) 赤柏松 イチキ又アララギの俗稱にして材質の優美なるこゝ古來針葉樹中の王と稱せらる即ち上等の茶棚、机、箱類、火鉢、茶器、杖、箸、櫛等の小細工に賞用せられ又良材は天井板、床柱等に

用ゐて雅致を極む内地に於ては容易に得難き貴重材なるも廠の賣價は比較的低廉なり

(五) 檀木 ナノチレタンバの俗稱にして材質極材よりも堅きを以て従來車輛材として使用せられ又近來は床柱、杖、盆、度量衡器、櫛等各種の-new用途を開きつつあり

(六) 其他 瀾葉樹中にハエンジユ、マンシウグルミ、ヤチダモ、ヘリギリ、キハダ、マンシウシ
ナノキ、ニレ、ナラ類、カバ類、テウセンヤマナラシ、ドロノキ類等種種あるもテウセンヤマナ
ラシ、マンシウシナノキ及ドロノキ類を燐寸軸木用材として伐採する外尙未だ盛に利用せらる
るの時機に達せず

(ロ) 伐木、運材及著材 鴨綠江流域に於ては咸鏡南道甲山、三水、長津の各郡及平安北道厚昌、慈
城、江界郡内の森林より直營を以てテウセンカラマツ、テウセンマツ、タウヒ、タウシラベ、テ
ウセンハリモミ等の丸材、角材、電柱、丸太、小丸太等を伐採しつつあり伐採は秋冬兩期に於て
し運材方法として冬季地上の積雪及結氷を利用して牛曳、木馬、修羅、輕鐵等に依り江岸なる編
筏土場まで搬出し五月頃解氷の時期に至れば編筏を行ひて流筏す流筏は通例五月より開始するも

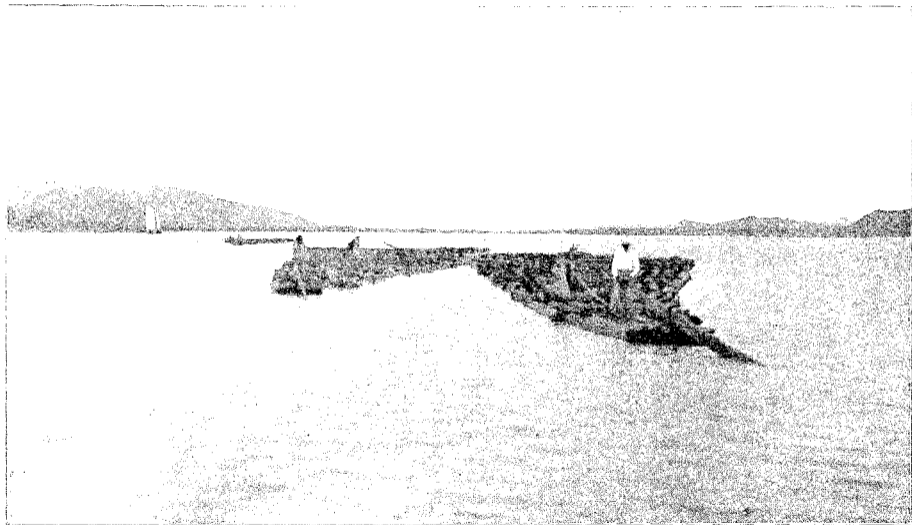
六月より九月に至る四箇月間最も盛にして十月下旬に至り終了す流筏事業に従事する筏夫は水路急にして比較的作業困難なる上流に於ては内地人筏夫を使用し水路緩にして比較的作業の容易なる下流に於ては主として朝鮮人筏夫を使役し少數の内地人筏夫をして指導監督せしめつつあり今最近五箇年間に於ける伐木、運材及著筏の材積を示せば左の如し

伐木、運材及著筏

年 度	伐 木	運 材	著 筏	年 度	伐 木	運 材	著 筏
大正元年度	一〇二、二四二 <small>尺締</small>	一三二、三五三 <small>尺締</small>	一四五、七九九 <small>尺締</small>	大正四年度	一七八、五一八 <small>尺締</small>	一九一、二四七 <small>尺締</small>	二七一、九三二 <small>尺締</small>
同 二年度	一〇六、〇四八	一二四、四七九	九三、二九八	同 五年度	三四四、九四七	三二五、二九七	二五二、九五三
同 三年度	二四五、九〇三	一九九、六八九	八九、一九八				

(ハ)立木拂下 營林廠所管森林の立木拂下を出願する者に對しては調査の上支障なきときは之を許

可す今最近五箇年間に於ける立木拂下材積及其の價格を示せば左の如し



鴨綠江流筏の狀況

立木拂下材積及價格

年 度	材 積	立木代	平均單價	年 度	材 積	立木代	平均單價
大正元年度	三〇、六一七 <small>尺</small>	一五、九七七 <small>円</small>	〇・五三二 <small>円</small>	大正四年度	六五、五一七 <small>尺</small>	一七、六〇四 <small>円</small>	〇・二六九 <small>円</small>
同 二年度	七七、九九八	五一、二八五	〇・六五八	同 五年度	一四二、七四三	三四、〇五三	〇・二三九
同 三年度	七五、七八二	四四、三九二	〇・五八六				

大正三年度以前に於て平均單價の著しく高きは高價なる檀木の賣却多かりしに由る

(三) 漂流木整理 明治四十二年三月鴨綠江採木公司と漂流木整理方法に關し協定を遂げ相互漂流木整理規則を定め朝鮮側に漂著せしものは營林廠に於て整理し支那側に漂著せしものは採木公司に於て整理することとし大正三年中更に相互委員を設け整理上同一歩調を執り協力して之を行ふこととしたるか大正五年度中に於て營林廠の拾集せしもの五千四百五十尺締あり

(ホ) 製材 製材は第一、第二の二工場に於て各種建築用材函材等を製作しつつあり一日の製材力に

約四百尺縮にして夜間作業を行ふときは約七百尺縮に上る今最近五年間に於ける製材及之に要せし資材の材積等を示せば左の如し

製材及資材							
年 度	製 材	製材に要せし資材	歩 留	年 度	製 材	製材に要せし資材	歩 留
大正元年度	九六、一六九	一六二、六五二	五九	大正四年度	一三三、四〇四	二三七、八六八	五六
同 二年度	一〇八、五三六	一八〇、七二八	六〇	同 五年度	一五六、四四一	三〇五、六六四	五一
同 三年度	八四、一九八	一三三、〇七六	六三				

大正三年度に於ける製材量の著しく減少せるは同年度に於ては第二、第三工場の移轉工事を開始し八月以後は該兩工場を休止せしに由る

(ハ)販賣 營林廠木材の販賣は當初主として朝鮮に於ける各官衙の建築用材を供給し民間の需要數は極めて僅少なりしも明治四十二年七月營林廠木材及製品の賣却代金延納に關する勅令を公布せ

られしと併合後朝鮮内建築工事の増加せしみに因り逐年民間に於ける需要を増加し今や其の販路朝鮮全道に及へり而して大正四年十月以降は大口取引制度を採用し大口取引契約者たる三井物産株式會社京城支店長及大阪清水榮次郎の連帶經費並新義州木材株式會社をして極力安價且簡便を旨として販賣せしめつつあり

第七節 朝鮮の木材

營林廠の經營に係る鴨綠江及豆滿江流域の産出材は主として朝鮮内地の需要に充てられ一部は支那等に輸出せらる而して右兩江流域以外の森林よりも多少木材の産出なきに非されとも是等は其の材質一般に良好ならず各種の需用を充し難く加ふるに朝鮮内陸の發展に伴ひ主として内地人家屋用材の需要増加し營林廠材のみを以て全部の補給に當るに足らず爲に内地及外國産木材の輸入亦尠からず

여 백

第十一章 鑛業

從來朝鮮の鑛業行政は何等方針なく中央地方の官憲は孰れも任意に鑛業の許可を與へ頗る統一を缺きしか統監府設置後伊藤統監は舊韓國政府に勸告して明治三十九年七月新に鑛業法及砂鑛採取法を公布せしめ同年九月十五日より之を施行し且内地人官吏を招聘し其の局に常らしめ大に鑛業を奨勵し舊弊を一掃せり爾來内外資本家の朝鮮鑛業に注目する者頓に増加し操業の方法漸次改善せられ堅實なる發達を爲し朝鮮鑛業に一新紀元を劃したり而して右法令は併合後も依然其の效力を認め來りしか時勢の進運は舊姿の墨守を允さず遂に大正四年十二月二十四日朝鮮鑛業令を制定し續て朝鮮鑛業令施行規則及朝鮮鑛業登錄規則を發布し大正五年四月一日より之を施行せり同令は外國人が新に鑛業權を取得するを禁し舊法に規定なき新發見の重要鑛物を鑛業令の支配に屬せしめ鑛業權を物權とし不動産に關する規定を準用し鑛業上必要なる土地の使用及收用に付土地收用令中の規定を準用して一層鑛業權を保護せり之が實施に因りて鑛業出願者數の激増を見るに至れり左に大正元年以降

に於ける鑛業出願及許可件数を掲ぐ

鑛業出願及許可件数

年	出願件数			許可件数		
	内地人	朝鮮人	外國人	内地人	朝鮮人	外國人
大正元年	三九七	二〇七	二九	一九六	一一一	九
同 二年	三八五	二一五	一〇	二〇七	一三五	一〇
同 三年	三五八	一七九	五	二二四	九三	一
同 四年	三八一	四〇三	三〇	二〇五	一五七	一八
同 五年	一九三二	一〇八一	七二	四二二	三〇八	七四
			三、〇八五			八〇四
			六三三			三二六
			六一〇			三五二
			五四二			三〇八
			八一四			三八〇
			三〇			三〇八
			七二			三〇八
			二九			三二六
			二〇七			三五二
			二一五			三〇八
			一七九			三八〇
			四〇三			三〇八
			三〇			三〇八
			七二			三〇八
			三、〇八五			三二六
			四二二			三五二
			二〇五			三〇八
			一五七			三八〇
			三〇八			三〇八
			七四			三〇八
			八〇四			三〇八

大正五年末に於ける許可鑛區数は一千八百二十一件にして前年末に比し五百六十件を増加せり左に之が鑛種別鑛區及坪数を掲ぐ

許可鑛區及坪数鑛種別

大正五年十二月末日

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
金銀鑛	七七八	三五七、〇〇八、二九三	石炭	七四	三四、八〇八、七九三
銅鑛	三五	一二、三七七、七一九	雲母	五	一、四四一、二一六
水銀鑛	二	四一八、六八三	石綿	三	三九六、九五五
鐵鑛	一四九	五六、一九七、四〇二	高嶺土	三	一六一、三六九
タンガステン鑛	四三	一五、六〇五、〇四九	矽砂	一六	八五、八〇九
水鉛鑛	七	一、一一九、八二二	砂金	三三三	三五、一〇二、〇四九
タンガステン鑛	九	三、八五八、〇五二	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
水銀鑛	一九三	七一、七八二、五〇五	砂錫及砂鐵	二	一、二八、二五
鉛鑛	二	四四、三六四	砂錫及砂鐵	四	一九三、三五七、四四一
燐鑛	一六三	二八、二五四、八二二	砂錫及砂鐵	四	八一、二、一一、六九七
黒鉛	一六三	二八、二五四、八二二	砂錫及砂鐵	四	一三五、三五、一一
金銀鑛	七七八	三五七、〇〇八、二九三	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
銅鑛	三五	一二、三七七、七一九	砂錫及砂鐵	二	一、二八、二五
水銀鑛	二	四一八、六八三	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
鐵鑛	一四九	五六、一九七、四〇二	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
タンガステン鑛	四三	一五、六〇五、〇四九	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
水鉛鑛	七	一、一一九、八二二	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
タンガステン鑛	九	三、八五八、〇五二	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
水銀鑛	一九三	七一、七八二、五〇五	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
鉛鑛	二	四四、三六四	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
燐鑛	一六三	二八、二五四、八二二	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
黒鉛	一六三	二八、二五四、八二二	砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
大正四年末	一、二六一		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
總計	一、八二二		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
大正四年末	一、二六一		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
總計	一、八二二		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
大正四年末	一、二六一		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
總計	一、八二二		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
大正四年末	一、二六一		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四
總計	一、八二二		砂錫及砂鐵	二	九一、三五四

本表には本府所屬金鑛區三件、石炭鑛區一件及雲山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを掲上せり×印は河床の延長に依り許可したるものにして單位を里、町、間とす次表亦同し

大正五年末現在鑛區千八百二十一件に就き稼行數を見るに其の中多少に係らず鑛產物を產出せるもの四百七十八件にして總鑛區に對し百分中二十六強に相當し前年に比し百六十九件を増加せり即ち左表の如し

稼行鑛區及坪數鑛種別

大正五年十二月末日

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
金銀鑛	二四九	一三六、五八三、九八六	黑鉛	四八	七、八九五、九六九
銅鑛	七	四、六九七、六八八	石炭	一五	四、〇二六、一〇八
鐵鑛	一一	五、〇七三、〇五九	砂金	一〇三	一四、四九〇、五三四
タンカステン鑛	一一	三、三一一、七一一	一切鑛物	四	一九三、三五七、四四一
水鉛鑛	一	六四八、二九五	總計	四七八	三八三、七四四、八三三
金銀銅鑛	二九	一三、六五八、〇四〇	大正四年末	三〇九	四四六、三二七、四三六
鉛亞鉛鑛					三四、一七〇、八

大正五年中に於ける鑛產價額は千四百七萬八千八百八十八圓にして前年に比し三百五十六萬二千二百二十二圓を増加せり左に之を表示すへし

鑛産額

大正五年十二月末日

種別	數量	價格	種別	數量	價格
金	一、六三〇、〇九三 <small>匁</small>	七、三七九、〇三六 <small>円</small>	亞鉛鑛	四九、六七〇 <small>匁</small>	五、五三〇 <small>円</small>
砂金	二二〇、三五二 <small>匁</small>	八九〇、四七五	鐵鑛	二四五、四一八 <small>匁</small>	三八五、七七四
金銀	五、三八八、二三一 <small>匁</small>	六三九、三六四	タンガステン鑛	二四、五三六 <small>匁</small>	二七九、二二九
汰銀鑛	二、一八四、九九九 <small>匁</small>	二、八一六、一七三	黒鉛	一三、一〇三、九三〇 <small>匁</small>	三九四、七七九
銀鑛	二〇七、一九一 <small>匁</small>	三三、七三一	石炭	一九〇、七六〇 <small>匁</small>	八一九、二二一
銅鑛	一一、七四四 <small>匁</small>	三〇八、八四六	其の他の鑛物	一四七、八〇三 <small>匁</small>	三二、五七二
鉛鑛	四六七、二九〇 <small>匁</small>	九三、四五八	總計	—	一四、〇七八、一八八

(イ)鑛床調査 鑛床の一般調査は明治四十四年度以降毎年施行し來りたるが、其の目的は從來不明瞭なりし朝鮮に於ける鑛床の性状を概査し以て其の鑛業的價値を窺知するに共に一面鑛業行政の參考に資し他而企業家の調査に便するに在り即ち事業開始の初年度には平安北道の北部、平安南道の西半部、黃海道西部及咸鏡南道の南部を大正元年度には平安北道の南部及西部、平安南道の

東半部及咸鏡南道の中部を大正二年度には平安北道の殘部、黃海道の東部、咸鏡南道の北部及咸鏡北道一圓を大正三年度には京畿道及江原道一圓を大正四年度は忠清北道の大部及慶尙北道一圓を大正五年度は忠清北道の殘部、慶尙南道及全羅南北道一圓の調査を爲し以て朝鮮全道の概查を終了したり而して大正六年度に於ては一部調査未了の地方及調査後新に發見せられたる重要鑛床に就き補足調査を行ふことせり

(ロ) 特許鑛山 明治二十七八年戰役後諸外國人にして朝鮮半島の利權に注目する者頓に増加し互に相競ふの狀況なりしか明治二十九年四月十七日米國人「セームス、アール、モールズ」に雲山郡一圓に於ける一切鑛物を採掘するの權利を特許したり是れ實に外國人に鑛山を特許したる嚆矢にして在留諸外國使臣をして最惠國條款を名とし時の政府に對し續續其の要求を提起せしむるの備を作りたるものにして即ち同年咸鏡北道慶源、鍾城鑛山を露國人に、三十年江原道金城鑛山を獨逸人に、三十一年平安南道殷山鑛山を英國人に、三十三年稷山鑛山を日本人に、三十四年昌城鑛山を佛國人に、三十八年厚昌鑛山を伊太利人に、同年遂安鑛山を英國人に各特許したり而して慶源鍾城

鑛山は事業著手の機に至らずして日露戦役に遭遇し明治三十七年五月韓國政府は露韓兩國間の條約並露國人民若は會社に對する特許合同等は總て之を廢罷する旨勅令を發布したる爲本特許は消滅に歸し金城及殷山鑛山は鑛況不良の爲之を拋棄し稷山鑛山は其の後日本人より内外人共同組織の稷山鑛業株式會社に讓渡し同會社は更に鑛業令に依り鑛業權を取得すると同時に特許權を拋棄し現時存続するものは雲山、遂安、昌城、厚昌の四鑛區なりとす

一 雲山鑛山 明治二十九年四月十七日朝鮮王室と米國人「ゼームス、アール、モールズ」と共同して一會社を組織し雲山郡一圓に於ける一切の鑛物を契約の日より二十五箇年間採掘するの特許を與へ會社は資本を百株に分ち王室は其の二十五株を所有し鑛山所屬の財産及生産物の課税を免し外國より輸入する材料及生産物輸出の關税を免除すること等協定の下に成立したるものなりしか明治三十二年三月二十七日前協約を更訂し王室の持株二十五條は全部之を鑛山會社に下附すると同時に會社は二十五萬圓を進獻し以來毎年二萬五千圓を上納することと爲し鑛山は全然米國人の手中に歸せり而して前記「モールズ」の組織したる會社は該鑛山に關する一切の權利

義務を擧て東洋合同鑛業會社に讓渡し今日に及へり

同鑛山は現時九坑の採鑛所五箇の搗鑛混汞場及青化製鍊場を有し鑛夫雜夫約二千人を使役し大規模の操業に従事し最近一箇年の産額は三百十七萬一千七百七十九圓二十八錢にして事業開始以來の産額累計五千百四十八萬六千四百二十六圓四錢に達す

二 遂安鑛山 明治三十八年十月四日英國人「アーサー、レウエレンピヤース」特許を受け翌年八月十五日「コレアン、シシヂケート」の所屬に歸し現時「セウル、マイニング、コムパニー」之が經營に當れり明治四十二年事業著手以來漸次規模を擴張し現時笏洞及楠亭の二箇所に採鑛場及製鍊場を設け大規模の操業に従事せり最近一箇年の鑛産額は三百七十三萬四千五百五十三錢に達し雲山鑛山を凌駕するに至れり

三 昌城鑛山 本鑛山は明治三十四年六月七日佛國人「サルタレル」之舊韓國政府との間に締結したる採鑛特許合同に因り取得したるものなり

採鑛場及製鍊場は東倉面大楡洞に在り最近一箇年の鑛山收入は八十七萬七千九百五十三圓十二

錢にして操業に要せし經費六十六萬三千三百五十圓七十五錢を控除し二十一萬四千六百二圓三十七錢の純益ありしと云ふ

四 厚昌鑛山 本鑛山は現時伊國人「チリオロ」商會主に於て小規模に採鑛の傍探鑛中にして鑛業上の價值未だ判明せず

(ハ)金 金は朝鮮に於ける主要なる鑛産物にして其の産額年約一千二百萬圓に達す金の産地として最顯著なるは雲山金坑なり該坑は米國人の設立せる「オリエンタル、コンソリテーターズ、マイニング・カンパニー」(Oriental Consolidated Mining Company)の經營に係り其の鑛區の廣き平安北道雲山郡全部を包括し六坑場に分れ朝鮮に於ける最大規模の設備を有す最近一箇年間に於ける産額は三百十七萬餘圓に及へり次に著名なるは黃海道遂安鑛山とす該山は英國人の設立せる「コレアン、シンシケート」の所屬にして「セウル、マイニング、カンパニー」の代理營業に係り最近一箇年の産額三百七十三萬餘圓なり昌城佛國人金山、稷山金山亦内外人の經營に屬し將に大規模の操業に着手せむとす龜城古河金山の探鑛は大正三年に入り大に進捗し同年五月製鍊場の建築に着手し

大正五年四月完成し直ちに製鍊を開始したり朔州金鑛地は前者に比し小鑛業家の割據する所にして未だ組織的操業を見るに至らざるも鑛脈豊富なるを以て早晚重要鑛産地たるべきを疑はず順安は最重要なる砂金地にして毎年五十萬圓以上の産金を擧げつつあり稷山砂金地と共に近く機械的操業を執るへしと傳ふ其の他長淵、永同、秦川、熙川及淮陽等に於ける諸鑛山竝大正三年度より本府に於て試掘に著手せる尙州、義州及新興の三金鑛地は何れも探鑛に勉め居るを以て其の價値の闡明せらるること遠からざるへし金鑛製鍊の方法は混汞青化の二法夙に行はれ而かも完備せる設備を施行せる者は寥寥たりしか大正三年に至り久原鑛業株式會社は鎮南浦に熔融製鍊所の創立を企て大正四年十月中完成の上買鑛製鍊を開始したり該製鍊法は朝鮮金鑛に通有なる混汞青化の難物たる硫化鑛の處理に最も適するか故に今後朝鮮金鑛山の開發を促進する尠少に非ざるへし

(二)鐵鑛 朝鮮は鐵鑛に富み殊に褐鐵鑛の産出最多し黃州及黑橋驛附近より西兼二浦に到る間及平安南道价川郡に見出さるる者は褐鐵鑛にして載寧、殷栗の鑛山も亦此の類なり而して褐鐵鑛に亞き産出の多きは赤鐵鑛にして安岳鐵山は即ち是なり磁鐵鑛も亦各所に見出されざるに非らずと雖

採鑛未だ盛ならず鐵鑛中最産出の多きものを載寧、殷栗の二鑛山となす共に黃海道に在り從來舊韓國政府の經營に係り明治四十一年より採掘を開始したりしか四十三年一月農商務省の所管に移れり而して大正五年中の産額は兩鑛山合して十五萬餘噸に上れり安岳鐵山も近時五萬噸の産額あり价川鐵山は出鑛の機運到來し大正三年十二月中坑所より新安州驛に至る間専用輕便軌道の敷設に著手し大正四年六月竣功を告げ七月より營業を開始し大正五年中約三萬五千噸の出鑛を見たり兼二浦、黑橋驛附近の鐵山も探鑛愈進歩し兼二浦製鐵所の竣功を俟ちて採掘搬出を見るに至るへし其の他瑞山、端川、利原、茂山地方に鐵鑛床の發見せられたるあり現時専ら探鑛中に屬す供給の現況は單に八幡製鐵所の需用額約二十萬噸を載寧、殷栗及安岳の三鑛山より供給し本溪湖煤鐵公司需用の三萬餘噸を三井鑛山株式會社の价川鐵山より供給するに過ぎされども製鐵事業の發展に伴ひ産額漸次増加すへし

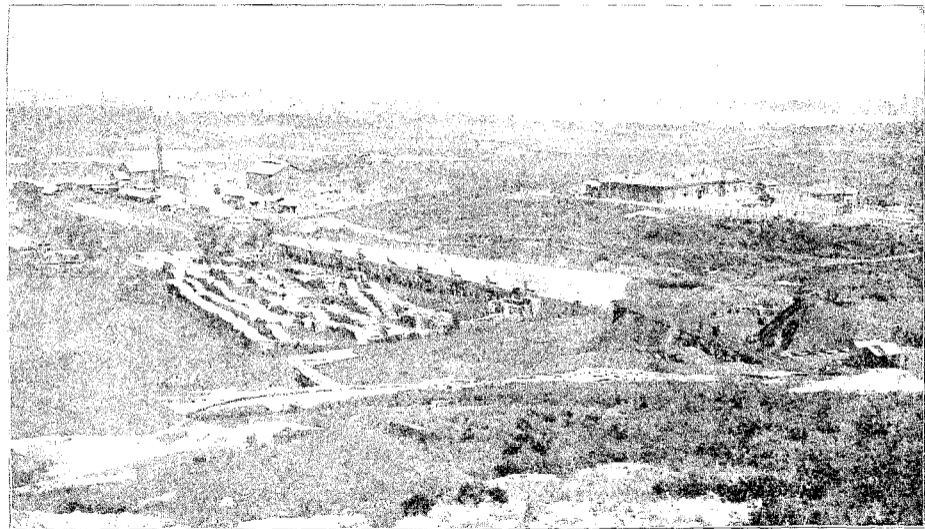
(ホ)石炭 平壤無煙炭の名漸く世人に知られ明治四十年以降官營を爲り政府は此の處に平壤鑛業所を設置し大同、江東の二郡を鑛區と爲して採掘せり採炭場は日下五箇所あり鑛量頗る豐饒にして

品質優良なり其の百分中に於ける主成分は揮發分七乃至二〇、骸炭七〇乃至九〇、灰分四乃至一五にして硫黄を含むこと甚た少し最近數年間に於ける産額及販賣高は左の如し

平壤鐵業所採炭額

年	採掘高	販賣高	同上價額	年	採掘高	販賣高	同上價額
明治四十四年	二七三、二四 <small>噸</small>	八三六、三三 <small>噸</small>	七〇、〇八二 <small>円</small>	大正三年	一五二、五四九 <small>噸</small>	一三三、九九九 <small>噸</small>	一三、五七六四八 <small>円</small>
大正元年	二八、六八九	一〇、一〇五	八七、一六四	同四年	一九、六九七	一七〇、五〇〇	一五、七、一〇一〇
同二年	一一三、〇七七	九四、五九八	八、五八三〇	同五年	一七六、二〇五	一三八、〇八三	一三〇、四六七八

採出炭は平南線に由り鎮南浦より内地に積出し其の大部分は山口縣德山海軍煉炭製造所に供給す從來知られたる無煙炭賦存地は前記平壤鐵業所採炭區域たる平壤無煙炭田のみなりしと雖鐵床調査の結果單に之に止まらず平安南道价川、順川、徳川及孟山の諸郡に互れる一大無煙炭田の布行せるを確め其の品質實に平壤無煙炭に劣らざるのみならず尙堅硬なる塊炭を存するを知るに至れり



平壤寺洞炭坑の全景

褐炭は慶尙北道迎日郡、平安南道安州郡、咸鏡南道新興郡及咸鏡北道鏡城郡等に産す品質中位に在り其の主成分は左の如し

種別	揮發物	固形炭素	灰分	硫黄
迎日炭	二六・八〇	二四・一四	三六・九三	三・二二
安州炭	四一・一〇	三八・二〇	八一・八	〇・一九
新興炭	四三・七七	四〇・一三	三〇・三	—
鏡城炭	五六・九四	三二・二四	九・三二	〇・五八

(へ) 黒鉛 鱗狀、纖維狀、葉理狀、土狀等の種類あり鱗狀、纖維狀の良質のものは主成分百分中九〇以上の炭素を含有し多く咸鏡北道、平安北道に産し葉理狀及土狀の品位の稍劣れるものは南朝鮮に産出す平安北道龜城、楚山、昌城並朔州附近より産出するものは鱗狀を爲して品質優良なり主として内地鑛業家に依り採掘せられ鱗狀黒鉛は大部分内地の需要に供し土狀黒鉛は海外に輸出す而して近時製鋼事業の發展に伴ひ結晶黒鉛の需要増加し新に採掘に着手せるもの續出するに至

れり

(ト)銅 銅鑛の既知のものを擧ぐれば咸鏡南道の甲山及慶尙南道の昌原に指を屈すへし近時又平安北道の厚昌を採鑛せられつつあり甲山は米國人の經營に係り採鑛大に進捗したりしか大正五年五月久原鑛業株式會社の所有と爲り大規模の設備に依り採鑛製鍊に著手せり

(チ)亞鉛 亞鉛鑛床は銀鉛と共生するを常とするを以て從來銀、鉛鑛と認められ従ひて其の發見は實に近年の事に屬するに拘らず今や有望なるもの少なからざるに至れり其の主要なるものを平安北道寧邊郡蘇長洞及咸鏡南道端川郡檢徳に於けるものと共以往古銀鉛山として稼行し共生せる多量の亞鉛鑛を遺棄せるものなり而して前者は現時合名會社藤田組に由り採掘せらる後者は未だ採掘に著手するに至らず

(リ)タングステン 歐洲戰爭勃發後需用激増し價格著しく騰貴したると共に之が發見採掘に従事するもの續出するに至れり既知鑛床の内江原道金剛山を遶り一帯の地及忠清南道青陽郡に存するものは望を囑すべく其の他諸所に發見せらるるもの數からず

左に最近五箇年に於ける重要礦産物の輸移出價額を掲ぐ

重要礦産物輸移出額

種別	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年
金	九、一三五、三七三	九、九五四、五一二	九、六五二、〇七七	一一、二一九、二四八	一四、四二七、一〇九
金礦及汰礦	二七四、九三八	三九二、四〇〇	五六九、七一三	九二九、六一九	一、〇四四、四四〇
含金銀粗礦	三一、六八八	三四八、五九二	四一八、四四四	五〇一、九五〇	三、八八〇、二〇〇
鐵礦				二四一、五六一	五六八、六一七
亞鉛礦				九〇、四七八	七、三三九
タンガステン礦				二〇二、六九一	一、六三八、四二六
黒鉛	一六五、二七九	二四八、八五八	一九二、一八七	六二九、一七五	五七六、七九二
石炭	三三四、三八一	三五七、七九七	四五八、一八四	三〇七、三四九	四六八、八八八
其の他の礦物	九、九八四	一〇八、一九一	一一八、七六二	一四、三八一、八六三	八二、九三五
總計	一〇、三三一、六四三	一一、四一〇、三五〇	一一、四一九、三六七	一一、四、三八一、八六三	二二、六九四、七六六

本表大正三年以前の亞鉛礦及タンガステン礦は其の他の礦物中に包含せり

今各道に於ける鑛産物の種類を掲ぐれば左の如し

鑛産物一覽

産地	鑛産物
京畿道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、硫化鐵、タンガステン、水鉛、黒鉛、石炭、石綿、高嶺土、砂金
忠清北道	金、銀、銅、鉛、錫、亞鉛、鐵、硫化鐵、安質母尼、タンガステン、水鉛、黒鉛、石炭、高嶺土、砂金、砂錫、砂鐵
忠清南道	金、銀、銅、鉛、錫、亞鉛、鐵、安質母尼、タンガステン、水鉛、黒鉛、石炭、石綿、砂金
全羅北道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、タンガステン、水鉛、黒鉛、石綿、砂金
全羅南道	金、銀、銅、亞鉛、鐵、水鉛、黒鉛、石炭、珪砂
慶尙北道	金、銀、銅、鉛、蒼鉛、亞鉛、鐵、タンガステン、水鉛、黒鉛、石炭、石綿、高嶺土、珪砂、砂金
慶尙南道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、水鉛、石炭、雲母、高嶺土、珪砂、砂金

黃海道
 平安南道
 平安北道
 江原道
 咸鏡南道
 咸鏡北道

金、銀、銅、鉛、蒼鉛、安質母尼、水鉛、亞鉛、鐵、タングステン、黒鉛、石炭、石棉、珪砂、砂金
 金、銀、銅、鉛、水銀、亞鉛、鐵、黒鉛、石炭、雲母、石棉、砂金
 金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、硫化鐵、タングステン、水鉛、黒鉛、石炭、砂金
 金、銀、銅、鉛、安質母尼、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、黒鉛、石炭、石棉、高嶺土、砂金、砂錫、砂鐵
 金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、硫化鐵、タングステン、水鉛、黒鉛、石炭、雲母、石棉、珪砂、砂金
 金、銀、銅、鉛、安質母尼、鐵、格魯謨鐵、水鉛、黒鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金

여 백

第十二章 水産業

第一節 水産業の保護獎勵

(イ)水産業の概況 朝鮮は海岸線の延長八千餘浬に達し地勢、氣候及潮流の關係上水産物頗る豊富にして鰻、石首魚、明太魚、鯖、鱒、鱈、鮭、鮫、太刀魚の如き回遊性のもの鯛、鱒、鱧、鱧、鰈、目張魚、鮭、鮎の類を初め鯨、海豚、烏賊、章魚の如き魚族及蝦、蟹の如き甲殻類、鮑、玉珧貝、貽貝、蛤の如き介類、石花菜、海藻、和布、海苔の如き海藻類に至る迄其の數二百餘種に及ぶ然れども從來朝鮮人漁業は頗る幼稚にして漁獲少なく近時漁業の改良進歩と漁業者の増加とに因り年年著しく漁獲高を増進し明治四十二年に於て朝鮮人の漁獲高三百六十九萬餘圓、内地人の漁獲高三百五十五萬餘圓合計七百二十四萬餘圓なりしもの大正五年に至り朝鮮人の漁獲高七百九十六萬餘圓、内地人の漁獲高七百九十九萬餘圓合計一千五百九十五萬餘圓に達せり漁業に對する施設は總督府及各道に於て漁業の秩序を維持し生業の安固を得せしむるは勿論水産に關する試験

調査を行ひて遺利の開發に努め尙地方費及臨時恩賜金の事務として水産業の指導獎勵に懈らざる等種種の方法に依り其の發展を企劃しつつあり

(ロ)漁業の手續 現行漁業令は明治四十四年制定せらるる漁業を分ちて免許漁業、許可漁業、届出漁業の三種とす此等の願届出は皆府郡廳を經由せざるへからず、免許漁業は一定の水面に漁具を建設又は敷設し一定の漁期間之を定置するもの、不定の水面を區劃して養殖を爲すもの、海濱一定の場所に於て一定の漁期間繰り返し漁網を曳寄せて爲すもの、一定の水面に於て一定の漁期間繰り返し漁網を建設又は敷設して爲すもの、一定の水面に漁類を集合せしむる設備を爲し經營するもの、此の外水面を専用して爲すものの六種とす免許を受けたる者は漁場及保護區域を定め他人を排斥して漁業を營むことを得許可漁業は捕鯨業、トロール漁業、潛水器漁業、鯨族以外の海獸漁業其他合計九種の漁業にして漁業の種類に従ひ或は朝鮮總督に於て或は道長官に於て之を許す固より免許漁業と異り漁業權を發生せず従つて排他的效力を有せず又財産權的性質を附與せられず其の許可の目的は水産動植物の蕃殖保護及漁業取締に在るのみ届出漁業は前二種の漁業に屬

せざる凡ての漁業にして單に届出をなし鑑札の下附を受くれば足れり漁業の出願其の他の手續を爲す者は府令の規定に依り一定の手数料を納付し且漁業税を賦課せらる

(ハ)水産物の保護 水産物保護の方法は一定の漁業の許可を受けしむる事、一定の綱目以上の綱目を禁ずる事、一定の漁業に對し區域を制限する事、魚介藻の採捕期又は其の形態を制限する事、有毒物爆發物使用の禁止等とす而して之に關する法規は一般的东西限地的ものとあり限地的のものは各道に委任して之を取締を厲行せり

(ニ)漁業に關する組合 漁業組合に二種あり即ち水産組合及漁業組合是なり水産組合は漁業者又は水産物の製造若くは販賣を業とする者か水産業の改良發達水産動植物の蕃殖保護其の他水産業に關し共同の利益を圖る爲朝鮮總督の許可を受けて設立するものにして現在に於ては朝鮮全體の漁業者を網羅せる朝鮮水産組合あり漁業組合は一定の地區内に住居する漁業者か漁業權を取得し又は其の貸付を受け組合員の漁業に關する共同の施設を爲すを目的とし朝鮮總督の許可を受け設立するものなり大正五年末に於ける漁業組合の數は四十九箇所なり

(ホ)漁業の指導獎勵及保護 漁業者に對する直接の指導獎勵は主として地方廳をして之れに當らしむ地方廳に於ては地方費又は臨時恩賜金を以て其の方法を講しつゝあり今各道に於て實行せる主なるものは漁撈製造、養殖の試験及傳習、漁具、漁船の配付、貸付又は其の購入費の補助、製造養殖業の指導補助、水産講話等とし總督府に於ては此等の地方費事業を獎勵するの目的を以て毎年若干の金額を地方費に補助せり大正六年度に於ける各道の當該事業費の總額は地方費豫算額授産費を合せ九萬二千四百五十一圓とす

(ヘ)漁船避難港修築補助 朝鮮の沿岸には漁船の避難に充つべき港灣にして往往岩礁寄洲等の爲避難港として不適當なるものあり總督府は年年若干の金額を補助して之を修築を企てつつあり既に完成せるものを忠清南道於青島及慶尙北道江口港、慶尙南道彌勒島、江原道汀羅津、全羅南道別刀港及楸子島と外に大正六年度中に著手の豫定のもの一箇所あり

(ト)朝鮮水産組合の補助 上述の朝鮮水産組合は其の初め外國領海水産組合法に依り設立せる舊韓國沿海に出漁する内地人の組合なりしか併合と共に内鮮人を網羅し漁業令に依る水産組合となし

本部を釜山に支部を各道に又出張所を各樞要の漁村に設け専ら漁民の保護及指導獎勵に任し或は法令に依る出願の代辨をなし又は水難救済、醫療施藥を行ひ通信貯金の便を計る等内鮮漁民共同の利益を圖り一方本府及各道と相呼應して行政上の補助機關なる作用を爲し重要なる公共的團體なるを認め韓國政府時代より引續き年額四萬圓の補助を與へつつありしも大正五年度より三萬圓に減少せり朝鮮水産組合本部及支部所在地左の如し

朝鮮水産組合本部 慶尙南道釜山

朝鮮水産組合京畿道支部 京畿道仁川

同 忠清南道支部 忠清南道鰲川

同 全羅北道支部 全羅北道群山

同 全羅南道支部 全羅南道木浦

同 慶尙北道支部 慶尙北道浦項

同 黃海道支部 黃海道龍湖島

朝鮮水産組合平安南道支部

平安南道鎮南浦

同 平安北道支部

平安北道龍岩浦

同 江原道支部

江原道注文津

同 咸鏡南道支部

咸鏡南道元山

同 咸鏡北道支部

咸鏡北道清津

(チ)海藻の移出検査

朝鮮の海藻は石花菜、海藻を初めとし内地に移出するもの毎年四十三萬圓以

上にと雖調製の不良なると奸商等の悪手段を行ふことに因りて頗る聲價を墜せしを以て大正二年以來移出検査を實行するこゝまなれり施行日淺しと雖原産地及移出業者の注意を喚起し同時に大阪地方に於ける朝鮮海藻の聲價を恢復するに至れり現在に於ける海藻検査所は仁川、釜山、元山税關及木浦税關支署の四箇所とす

(リ)水産調査及試験

水産に關する調査試験は各道に於ける小規模のものを除くの外本府に於て朝

鮮海に於ける水棲物の種類分布の状態及習性等を調査し有望なる水族に對する漁法、漁獲の處理

及人工生産増殖の方法を研究し遺利の開發と斯業の發達に資する目的を以て大正元年度以降豫算に水産試験費を置き水産調査及各種試験を行へり水産調査中沿岸の觀測は沿海十二道に於ける朝鮮水産組合支部水産技術員及燈臺に囑託し其の所在地近海に於ける一定の場所に於て之を行ひ海洋の觀測は大正六年二月より始め主要なる海流を探險し暖寒流の分布區域及分派の狀況を闡明にし此等兩流に特有なる水産物の狀況を考究しつつあり

水産試験は之を漁撈、製造及養殖の三部に別て施行す

漁撈試験は重要な水産物に付其の分布、去來又は生殖の狀態、蕃殖又は回游の季節、漁法の適否、漁業經濟を探檢調査するものにして從來施行し且現に施行しつつあるものは蝦、鱒、大鰻、蟹、秋刀魚、柔魚等を主とす又潜水器を使用して底棲魚介藻類及海底の狀況を探檢し漁場の開發、漁法の改良及新漁業の發見等に因り實地は當業者を指導啓發し效果の顯著なるものあり

製造試験は輸移出鹽魚、乾魚、鹽乾魚の製造に付之を行ふ就中成績の最も顯著なるものは寒天製造試験にして慶尙北道大邱及全羅南道長城の二箇所に於て之を行ふ由來朝鮮には寒天の原料たる

石花菜の饒産するに拘はらず全部原料の儘内地に移出し寒天に製造したるものなし仍りて本府は前記二箇所に於て其の製造を試みたるに内地の製品に比し遜色なきを認めたりかくて朝鮮に於ける寒天製造事業の頗る有望なることを一般に示し既に民間事業として慶尙南道密陽、梁山郡及馬山の三箇所に於て起業を見るに至れるを以て大正三年度限り本府試験を廢止し試験場は之を民間に貸與し事業を繼承せしむ大正五年度より仁川府に鹽魚貯藏庫を建設し夏季低廉なる魚類を醃藏し冬季魚類闕乏の時に方り之を朝鮮、内地及支那に輸移送して魚價の調節を圖ると同時に輸入鹽魚の防遏に資するなり養殖試験は大正元年度より引續き咸鏡南道高原上山面に於て鮭の人工孵化試験を行ひ其の生育稚兒を毎年數百萬尾を放流しつつあり又大正四年度より更に慶尙南道密陽郡穿火山外面に養殖試験場を増設し池沼河川又は稻田利用の目的を以て鱒、鯉等の淡水魚族の孵化養殖試験を行ひ斯業獎勵の爲其の養殖稚魚は當業者の希望に由り之を配付すへし

第二節 水産業發展の狀況

(イ)日本海方面 豆滿江口より釜山港に至る日本海方面沿岸は東朝鮮灣を中心として、く字形に突

入し沙濱懸崖相連りて好箇の海岸漁場を形成せり潮汐の干満は微少なれども水深く各種水族の滯溜に適し而もリマン海流は北よりして寒帶性水族を輸送し對馬海流は南よりして暖帶性魚族を腐らして共に水産の分布を濃厚ならしめ捕魚の利無盡藏と稱せらる就中朝鮮人の經營に係る咸鏡道の明太魚、鱒、鮭、江原道の鱈、慶尙道の鰈^{ニシ}鰈業等の如き又内地人の經營に係る捕鯨業及鱒、鯽、鱈、鰈等の漁業は此の地方屈指の大漁業として推奨するに足る

(ロ)多島海方面 釜山港より木浦附近に至る沿海は大小の島嶼密布散點し多島海の稱あり此の沿岸は犬牙錯綜して半島岬灣相交り廣漠たる海域を占め水深概ね八十尋内外にして漁具の使用に便なるのみならず寒暖兩海流の影響を受け水産の分布豊かにして而も廣大なる平野に接し市場、大河、港灣に富み九州中國方面の連絡容易なるか故に漁獲物の集散便にして内鮮人の漁業共に進歩し釜山馬山近海に於ける鱒、鰈漁業の如き鎮海灣附近の鱈漁業の如き羅老、青山、巨文の各島及安島近海の鯛、鱒、鱒、鰈漁業の如き濟州島沖に於ける鱒、鮑、石花菜、鱈漁業汝自灣に於ける鰈漁業及麗水灣に於ける玉珧貝漁業等の如きは其の最著名なるものとす

(ハ) 黃海方面 木浦附近より鴨綠江口に至る黃海方面の沿岸は西朝鮮灣及仁川近海群山近海等に由りてろ字狀に屈曲し河口、溲灣、潟洲、礁脈、淺灘及孤島群嶼相食みて海岸線の錯綜名狀すへからず海底は遠淺を爲して黃海の中心に至るも水深五十尋を超えざるを以て寒冷の候暖帶性水族の滯溜に適せず雖暖潮の影響を受け潮汐の進退強度なるを以て春季八十八夜前後約五十日間に至れば石首魚、鯛、鯖、鮫、鰻等産卵の爲に二十尋以内の淺所に群集し内鮮漁船の輻輳實に壯觀を極む就中全羅道の七山灘、忠清道の煙島近海、黃海道の延平灘及平安道の魚泳島近海に於ける石首魚漁業の如きは咸南の明太魚、慶南の鱈漁業と共に朝鮮海三大漁業の一と稱せらる尙此の方面に於ては蛤蜊等の介類多く棲息し且各種魚介類の養殖に適當の場所多きも内鮮漁民未だ普く之を利用するに至らず

上述の如く朝鮮沿岸は其の海勢千態萬狀にして其の漁業も亦各地良否の別ありと雖概して將來有望の漁場として進歩發展の餘地あるを見る今各道沿岸漁場に於ける内鮮人の漁獲及製造高を掲ぐれば左の如し

內鮮人漁獲及製造高

大正五年

道	漁獲物價額	製造品價額	合計	主要生產物
京畿道	三二七、三五六 円	二二六、五六二 円	五四三、九一八 円	蝦、石首魚、鯛、鮫、鹽蝦、鹽石首魚
忠清北道	一、〇八六	—	一、〇八六	鰻、鯉、目張魚
忠清南道	七一九、三八〇	四四四、〇七五	一、一六三、四五五	鱒、石首魚、鯉、鯛、大刀魚
全羅北道	四八七、三〇九	一五六、一五四	六四三、四六三	鯛、石首魚、鱒、鹽石首魚、鯛
全羅南道	二、七一三、六九一	一、五八二、一二五	四、二九五、八一六	石首魚、鯉、蝦、大刀魚、海蘿、和布、榨粕
慶尙北道	一、四九九、三〇〇	五五二、〇二四	二、〇五一、三二四	鯉、鯖、鱒、鱒、和布、鮑
慶尙南道	五、五九〇、九一三	三、八一八、一九二	九、四〇九、一〇五	鯉、鯖、鯛、大刀魚、鯖、荑干
黃海道	六七〇、九六三	二二六、四六六	九〇七、四二九	石首魚、鮫、鯛、鱒、鹽石首魚
平安南道	三一四、八六一	八四、八六七	三九九、七二八	鯛、鱒、蝦、鹽石首魚
平安北道	四八五、一四三	一四八、八二三	六三三、九六六	石首魚、火魚、鱒、鯛、鮫、鹽火魚

道	漁獲物價額	製造品價額	合計	主要生産物
江原道	七三一、三六六 ^円	四九二、四六七 ^円	一、二二三、八三三 ^円	鯉、和布、鯖、明太魚、干鯉、鮑、罐詰
咸鏡南道	一六九六、七四〇	一、三八〇、二八九	三、〇七七、〇二九	明太魚、鯖、練、鰈、乾明太魚、鹽明太魚卵
咸鏡北道	七二七、八一四	六五九、八〇九	一、三八七、六二三	明太魚、和布、鮭、練、乾明太魚
總計	一五九五五、九二二	九、七八一、八五三二五、七三七、七七五		
大正四年	一三、二三四、九四一	七、七九五、二四六二一、〇三一、一八七		
同三年	一二、〇六四、六八五	六、九一一、八九六一八、九七六、五八一		
同二年	一一、五一一、九一五	五、四三〇、四四四一六、九四二、三五九		
同元年	八、〇二三、〇三三	四、六〇三、八七〇一二、六二六、九〇三		

第三節 水産業改良の奨励

水産業改良の方法は漁船漁具及漁法の改良、漁業者の知識技能の養成、水産に關する調査試験の施

行、水産物の處理、販賣方法の改善及關係機關の普及發達並販路の擴張、水産物の人工増殖の獎勵需給の調節及産額の増進、内地人漁業者の移住及内鮮人漁業者間の統一融和、水産組合又は漁業組合の設立、漁業者の副業及勤儉貯蓄の獎勵是なり改良漁業、漁具、漁船の普及に就ては本府及沿海各道に於て漁業改良獎勵の結果鮮人漁業者の内地式漁具漁法に依るもの近年著しく増加し就中一本釣延繩等の釣漁業最も發達し地曳網流網鮫鱈網等の網漁業之に次ぎ其の漁獲成績の如き内地人漁業者に比し甚しき遜色を見ず又大敷網巾著網揚操網壺網等の大規模漁業を經營する者あるに至れり漁船の改良は漁法の改良に比し素より遲遅たるを免れさるも改良漁船の數は明治四十四年に於て八百八十二隻に過ぎざりしか大正五年末に至り七千八百隻を算し之を大正四年末に比すれば四千七百隻の増加とす

(イ)内鮮人の漁業 大正五年中に於ける内鮮人漁獲高は内地人七百九十九萬四千九百四十圓朝鮮人七百九十六萬九百八十二圓合計一千五百九十五萬五千九百二十二圓にして之を大正四年の漁獲高に比すれば内地人に於て百十二萬五千六百六十八圓朝鮮人に於て百五十九萬五千三百十三圓合計

二百七十二萬九百八十圓の増加なりとす今最近五年間に於ける内鮮人漁業發展の概況を示せば左の如し

朝鮮沿海漁業概況

年	出漁船數			出漁人員			漁獲概算高			平均漁獲高		
	内地人	朝鮮人	計	内地人	朝鮮人	計	内地人	朝鮮人	計	一船二付	一人二付	一人一付
大正元年	五六三三	一〇五〇一	一六一五五	二二、四八八	一六〇、八〇九	一八三、二九七	七〇、三〇三	五九、九三五	一二〇、二三八	一、七三三	五七〇、二九五	三、七
同 二年	六、〇一一	一三、三五一	一九、三六三	二五、五四〇	一八七、一七三	二一三、七三三	五九、三五四	六、一八七	六五、五三八	三、三三三	一、九三	三三
同 三年	六、一〇〇	一五、一五三	二一、二五三	二七、九四八	二二四、〇〇一	二五一、九五〇	七、四四九	五、六一五	一二、〇六四	一、〇四〇	三、七	二五
同 四年	六、五七五	一六、三七二	二三、九四七	二九、〇六三	二四一、六二七	二七〇、六九〇	六、八六九	六、三六五	一三、二三四	一、〇四五	三、八	二六
同 五年	一〇、六二二	三四、六二七	四五、二四八	六三、一八六	二二六、二五五	二七九、四八一	七、九九四	七、九八二	一五、九七六	一、五九三	三、〇	三六

(ロ)内鮮人養殖業 漁業の奨励と同時に水産物濫獲の取締を爲し其の蕃殖を保護し更に進て人工増殖と需給の調節を圖る目的を以て養殖業を奨励し本府に於ては鮭、鱒及鯉の人工孵化養殖を試験

し各道に於ては海苔、^{わけまき}鱒、牡蠣、^{ほら}刺、鯉、^{ほら}鰻等の養殖試験を行ひ範を實地に示すと共に適地を調

査して適種魚介藻類の養殖を奨励したる結果著しく斯業に對する觀念を普及せしも未だ以て之が盛況を見るに至らず現在民間事業として最も發達せるは全羅南道及慶尙南道管内に於ける海苔養殖とし之に次くは咸鏡南道永興灣の牡蠣養殖にして京畿道管内の鱧、鯉、魴及慶尙南道管内に於ける魴の養殖は規模大ならずと雖成績較や見るべきものあり

(ハ)捕鯨業 現在捕鯨業を許可せるものは東洋捕鯨株式會社及日韓捕鯨合資會社にして其の根據地は五箇所にして捕鯨船數は十隻に限定す大正五年に於ける捕獲高は頭數二百十六頭にして此の價額二十一萬一千九百六十六圓なり左に最近五箇年に於ける概況を表示すへし

捕 鯨 狀 況		年	捕 鯨 頭 數	同 上 價 額	一 隻 平 均 頭 數	一 頭 平 均 價 格
大	正	元 年	三三三	四四三、〇四八	二七・七	一、三三三
同	二	年	二九九	四〇四、二六一	一六・六	一、三五二
同	三	年	二八五	二四二、七五五	一五・八	八五二

年	捕鯨頭數	同上價額	捕鯨頭數平均	一頭平均價格
大正四年	三〇五 <small>頭</small>	二六五、七五〇 <small>円</small>	二一・八 <small>頭</small>	八七一 <small>円</small>
同五年	二一六	二一、九六六	二一・六	九八一

(三)内鮮人水産物製造業 朝鮮人間に於ける水産物の加工は鹽藏又は乾製等頗る簡單且拙劣なりしも之が指導獎勵の結果從來製法の改善と利用の發達を見内地人製造業の發達と共に著しく生産額を増加せり大正五年に於ける内鮮人水産物製造高は内地人四百二十三萬一千二百八十二圓朝鮮人五百五十五萬五百七十一圓合計九百七十八萬一千八百五十三圓にして之を大正四年の製造高に比較するに内地人に於て八十萬九千六百五十七圓朝鮮人に於て百八萬六千九百五十圓合計百八十九萬六千六百七圓を増加せり即ち左表の如し

水産物製造高				
年	内地人	朝鮮人	合	計
大正元年	一、四八八、二三七 <small>円</small>	三、二一八、一五四		四、六〇六、三九一 <small>円</small>

同	二	年	一、九九九、二五三	三、四四一、一九一	五、四四〇、四四四
同	三	年	二、九五三、八五四	三、九一〇、三四二	六、八六四、一九六
同	四	年	三、四二一、六二五	四、四六三、六二一	七、八八五、二四六
同	五	年	四、二三一、二八二	五、五五〇、五七一	九、七八一、八五三

(ホ)内地漁民通漁 内地漁民の通漁は併合後著しく發展し其の漁場區域は朝鮮全沿海に亘り南及東海岸に於ては縛網、巾著網流網西海岸に於ては鮫鯨網等大中漁業の發達殊に顯著にして且通漁者は出漁地方に依り各團體を組織し漁獲物の處理運搬及物資の供給其の他共同の作業に任し其の組織的働作頗る整然たるものあり此の如く秩序ある發達は主として朝鮮に於ける一般水産業の獎勵開發、行政機關の整備及交通の發達並内鮮人の融和に基因せすんばあらず

朝鮮海出漁團體

大正五年十二月末日

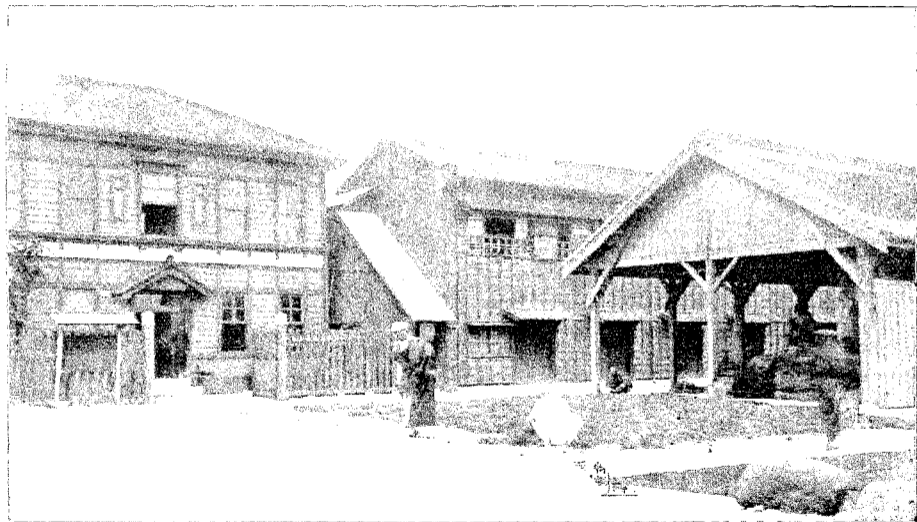
名	稱	位	置	團體員	團體金	補助金	事務所費	漁業根據地	設立年月
長崎縣遠洋漁業團	業	長崎縣廳内	内	一、〇〇〇人	〃円	〃円	〃円	全羅南道明治島三	四十三年

名稱	位置	團體員	團體金	團體積立金	府縣補助金	事務所經費	漁業根據地	設立年月
佐賀縣鮮海出漁組合	佐賀縣廳內	四〇〇人	10,000円	—	四三〇円	二七〇〇円	全羅南道水浦羅老島	明治四十年一月
香川縣出漁團	香川縣廳內	二〇〇	—	—	八〇〇	二六〇	同 高興郡蓬萊面	同 四十二年三月
岡山縣出漁團	岡山縣廳內	一〇〇	—	—	三〇〇	二六〇	同	同 四十年五月
香川縣朝鮮出漁團	香川縣高松市	一〇〇	五,000	八〇〇	二,100	六〇〇	慶尙北道迎日郡九龍浦	大正元年九月
長崎縣出漁團	長崎縣廳內	四〇	—	—	四,000	一,000	同	同
林兼組	慶尙北道迎日郡九龍浦	一〇	五,000	—	—	二五,000	同	明治四十四年十月
日生組	岡山縣日生村	一〇〇	—	—	—	—	同	不詳
愛媛縣朝鮮海出漁組合	慶尙南道釜山府南濱町	二〇〇	—	—	—	—	慶尙南道釜山府絕影島統營郡長承浦	同 四十二年四月

鹿兒島朝鮮海出漁組合聯合會	鹿兒島市	七九〇				九	同	釜山府同	四十二年
三重縣遠洋漁業團	山下町	五七四	三九			同	釜山府	同	四十二年
長崎縣遠洋漁業團	三重縣廳內	三〇九				同	釜山府	大正元年十月	
香川縣朝鮮海出漁團	長崎縣廳內	二二〇〇				同	釜山府	大正元年十月	
岡山縣和氣郡同生町朝鮮海出漁團	香川縣廳內	一九三				同	釜山府	大正元年十月	
岡山縣日比朝鮮海出漁團	慶尚南道蔚山郡方魚津	二六四				同	釜山府	大正元年八月	
床波出漁團	同	三二				同	釜山府	大正元年八月	
輒出漁團	山口縣吉敷郡西岐波村	四〇				同	釜山府	大正元年八月	
	廣島縣輒町	八				同	釜山府	大正元年八月	

第十二章 水產業

總計	名 稱								位 置	團 體 員 數	基 金 體 積 立 金 補 助 金	經 務 所 費	漁 業 根 據 地	設 立 年 月
	同	同	同	同	同	同	同	同						
六、七、五	九	五	五	三	三	九	五	四	六	人				
六、五、三、九										円				
七、三、五、九						三、五、〇				円				
三、三、一、二、八						一、〇、〇				円				
五、一、〇、五、九						九、一、一				円				
	同	同	同	同	同	同	同	同	同		慶尙南道統 營郡統營面	大正二、三、四、月		
	同	同	同	同	同	同	同	同	同		東部面 河清面 昆德面 山陽面 二運面 巨濟島 閑山面 沙等面			



釜山海藻檢査所及檢査場一部

(ハ)内地漁民の移住及漁村經營 内地漁民の移住は通漁の發展に伴ひ南朝鮮地方より漸次北鮮地方に普及するに至り今や邊陲の地と雖單獨移住を爲す者少からず其の移住村落を爲すものは五十三にして經營狀況は良好の成績を呈せり

年	漁業		養殖業		水産物製造業		水産物販賣業		合計	
	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口
大正元年	二、六一八	七、一一〇	一六	三九	三四四	九〇一	七〇三	一、六四一	三、六八一	九、六九一
同二年	二、一〇九	七、八六二	二一	七二	四五五	一、九七二	九〇五	二、三二六	四、九〇一	一一、二三二
同三年	二、二一五	七、四四六	一九	五四	三二八	一、一〇一	八一三	二、四二七	三、三七五	一、〇二八
同四年	二、三一六	八、五一三	三五	一一三	三〇四	一、〇七五	八七四	二、七九二	三、五二九	二、五〇三
同五年	二、五七九	九、〇七五	二〇	六一	三八五	一、一八二	一、〇〇二	二、七三五	三、九八六	一、三、〇五三

(ト)水産業獎勵に關する中央地方配置技術人員及指導狀況 水産業獎勵の爲中央及地方配置技術員の總人員は國費に依る者四十三人地方費及臨時恩賜金に依る者五十三人合計九十六人にして本

府及道在勤技術員は必要の時期に沿海各地に出張せしめ地方費及恩賜金に依る技術員又は實習教師を重要な地點に配置し孰れも水産の調査試験又は傳習若くは講習等に依り實際に就き當業者指導の任に當らしむ

(チ)地方水産傳習及講習 大正五年度に於ける各道地方水産の實習概況を表示すれば左の如し

道		地方水産實習		大正五年度	
道	實習事項	回数	日數	實習人員	備考
京畿道	漁業傳習、漁具製造講習、漁業傳習、漁業傳習、漁業傳習	三	四三一	三二	鮫鱧網、懸繩、延繩一本釣漁法
忠清南道	漁業傳習	二	一七三	五	鮫鱧網船延繩船建造法
全羅北道	漁業傳習、漁具製造講習	二	一四〇	二〇	鮫鱧網、延繩漁法
全羅南道	漁業傳習、漁具製造講習、水産製造講習	六	一八〇	一九	編網及漁具製作講習
慶尙南道	漁業傳習、漁具製造講習	一	四〇	一〇	釣魚網漁の漁具製造漁獲物處理運搬法、錫、煮乾魚、鹽乾魚
		二	三〇〇	二〇	緞絲調製、機械編網
		一	一八〇	三九	延繩漁業、釣漁業

慶尚南道	漁業傳習	二	一八〇	五〇	鱧、鯽、雜魚、延繩漁業
黃海道	漁業傳習	二	一八〇	九	鹽乾魚、鱈搾粕製造
平安南道	漁業傳習	二	三六	二二	空釣、網延漁
平安北道	水産講習	一	一一	一八	水産業漁業令の大意、鮫鱈網延網編成法
江原道	漁具製造傳習	一	三〇	三〇	鮫鱈網製造
咸鏡北道	漁業傳習	五	一九九	三〇	釣鈎擬餌製作、漁具修理、流網延繩釣魚、漁船運用、延繩一本釣、漁船運用航海方法、漁獲物處理製造方法
總計		三五	三、三二〇	四四六	

第四節 製鹽業

朝鮮に於ける製鹽は總て煮熬法に依り海水を直に煎熬し若は海水を鹽田に導き撒砂に依りて濃厚なる鹹水を採り之を煎熬して製鹽するものなり。雖其の方法頗る粗雑幼稚にして生産費高く爲に輸入鹽の壓迫を受け漸次衰頹の傾向あり而して朝鮮に於ける鹽の總需要量は推定約三億斤乃至四億斤に

して内一億五千萬斤は朝鮮の鹽田より生産供給せられ其の他には官鹽及輸移入鹽に依りて供給せらる然るに朝鮮鹽は勞力と燃料とを費すこと多く隨て其の生産費百斤當り平均一圓以上なるに比し支那天日鹽は仁川に於て特に高價の時に於てすら百斤七八十錢にして甚しく低落の場合には三十錢内外を以て供給せらるるか故に年年其の輸入を増し漸次朝鮮鹽を壓倒せむとするの趨勢を示せり茲に於てか舊韓國政府は明治四十年地を京畿道仁川府朱安面に卜し面積一町歩の天日製鹽試驗場を設け試驗の結果朝鮮に於て天日製鹽は確實に成立すべく其の産額は豐饒にして而も其の品質は支那鹽に比し遙に優越し臺灣鹽に匹敵し一等鹽の如きは煎熬鹽に比し毫も遜色を見ず其の化學的成分に至りては前記各種鹽に比し優越し純食鹽分は九〇%を越え日本内地の一等鹽に相當するものを得るに至れり此の結果に由り天日製鹽を官營とすることとし先づ第一期事業として面積一千町歩の天日製鹽田を築造することに決し明治四十二年度より着手し大正元年に竣成したり其の面積は朱安鹽田九十七町六反四畝十歩廣梁灣鹽田九百三十三町一反八畝十六歩合計一千三十町八反二畝二十六歩にして工事進行中一部分竣成したる鹽田より其の製造を開始し大正二年度よりは全鹽田に互り生産するに至

れり

今最近五箇年間に於ける輸移入高及前記鹽田の面積並産出高を左に掲ぐ

鹽輸移入高及價額

年	輸移入				其他	合計	價額
	内地鹽	臺灣鹽	關東州鹽	支那鹽			
大正元年	七、六四七 <small>百斤</small>	五、六五八 <small>百斤</small>	四、五三九 <small>百斤</small>	二、三、五一五 <small>百斤</small>	一六 <small>百斤</small>	一八二、二二八 <small>百斤</small>	七六五、五〇二 <small>円</small>
同 二年	九、二二七	—	三、七五三	一〇四、一一七	八六七	一五一、七八四	七五五、五七一
同 三年	一、二四五	—	二、九〇五	九三、四九八	二	一二三、七九八	五五五、〇六八
同 四年	三二	—	五、三五九	一三六、六三五	一	一九〇、二五七	八五二、二〇九
同 五年	二、三九	一、五〇	六、六七一	一七五、九五四	二	二四三、〇六三	一、〇九六、七四六

鹽田面積及製鹽高

第十三章 商業

第一節 朝鮮人の商業

近來常設店舗を設けて商業に従事する者漸次増加す。雖由來朝鮮人の取引の大部分は市場に於て行はるるを各地一般の慣例とす而して此等の市場は毎月五回若は六回定期開市せられ其の入市者は附近の住民は勿論遠く八九里の地より到る者尠しとせず朝鮮に於ける市場の數は大正五年末に於て一千二百十箇所にして一箇年の賣買高五千萬圓以上を算す市場は朝鮮に於ける重要な商業機關にして其の設置變更は地方經濟に影響する所少からざるを以て大正三年九月市場規則を發布せられ其の組織及監督に付詳細の規定を設けられたり尙朝鮮人商業の機關として重要なもの四あり曰く客主曰く居間、曰く監考、曰く典當是なり

(イ)客主 本來の業務は委託を受けて取引を爲し又は手形の引受、割引、貸金及貨幣の交換等を爲

し併せて華客を宿泊せしむるものにして其の商行爲とする所恰も内地に於ける問屋業に類す客主が委託販賣をなす貨物は大概穀物、煙草、牛皮等にして客主は絶えず市場の相場を通報し委託者は機を見て其の所有貨物を客主に送り指定價格を表示して之が販賣を委託す之と同時に客主は委託者に對し預り證書を交付し而して客主が委託者の指定價格を以て販賣したるときは所定の口錢其の他諸經費を控除し殘額を委託者に交付す

(ロ)居間 賣買業者の中間に介在し諸般の周旋を爲し一定の口錢を受くることを本業とする者にして恰も内地の仲立人に似たり居間は常に客主の店舗に出入し其の依頼を受け賣買者を探索紹介し賣買成立の曉に於て報酬として口錢を得るものなり普通居間に二種ありて一は一定の出入客主を有し其の使用人となりて周旋の勞に當るものを云ひ一は一定の客主を有せず苟も事件あれば孰れの客主に對しても周旋の勞を取るものを云ふ而して其の行動稍客主業と相似たるものありと雖兩者の間には自ら劃然たる區別の存する在りて客主は委託者の爲に賣買を紹介すると同時に表面自ら取引の當業者となり權義の主體たるに反し居間は單に賣買業を紹介するに止まり取引に關し何

等關與する處なし

(ハ)監考 地方に依り其の取扱ふ商品一定せされども市場取引の米穀は必ず監考之を升量し其の手數料として一升到一斗に充たさる端數の米穀を收受するの慣習あり

(ニ)典當業者(質屋業) 多くは金貸業者か兼業として之を營む者にして純然たる典當業は殆んど皆無と稱して可なり而も金貸業者の全部か當然典當業を兼ねる者に非ざるか故に金貸業者の數の多きに比し典當業者は其の數少なし而して典當業者の取扱ふ典物は金銀細工、衣冠竝家具、什器等多く貸金の比準は借主の信用に由り異なること雖評價の三割乃至五割を以て普通とす而して期限は一定せざるも普通の典物に在りては三箇月を以て一期とし金銀の如き價格移動の少きものに在りては稍長く細民に融通する場合に在りては時期の頗る短きものあり然れども何れも利息支拂に由り延期し得ること及流質となりたる場合に典當業者當然に典物を賣却處分し得ることは内地質屋業と異なるなし

其の他商業機關として市場取引、契等に關し慣行なきに非ざるも行政の刷新と共に次第に其の面

目を改むるに至れり

現時朝鮮人の商店は概ね内地人商店と其の名稱を同うするに至りたるも尙舊來の名稱を踏襲するものあり其の主なるものを擧ぐれば左の如し

毛物塵 毛皮及毛皮製品並主なる朝鮮雜貨を賣る店

鞋塵 鞋を賣る店

布木塵 織物類を賣る店

笠子宕巾網巾塵 笠子、宕巾、網巾を賣る店

鍮器塵 銅器及眞鍮製食器家具等を賣る店

櫥塵 箆筒、衣盒等を賣る店

瓷器塵 素焼物を賣る店

砂器塵 陶磁器を賣る店

册肆 本屋

銀 房 銀細工屋

玉 房 玉細工屋

飯饌假家 日用食料品(主として乾物)を賣る店

乾劑樂局 漢藥を賣る店

具物塵 玉製裝身具を賣る店

喪頭都家 喪具を貸貸する家にして喪具に限り都家といふ

貰物塵 主として冠婚葬祭の儀式に用ふる衣裝器具を貸貸する店

福德房 土地家屋の賣買、貸家の仲介等を業とす

典當局 内地の質屋

其の他商塵の名稱種種あれども是等は概ね其の名稱に依りて判別し得べきものなるか故に之を省略す

第二節 内地人の商業

從來朝鮮に於ける内地人商業の範圍を見るに京城、仁川、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、元山、清津、平壤、鎮南浦、新義州等内地人の集團地を中心とし概ね其の附近に限られたる状態なりしも爾來警備、交通機關の完備すると共に今や都鄙の別なく全土到る處内地人の商賈を見るに至り朝鮮商業に關しては常に優越なる地歩を占むるに至れり

内地人の商業は貿易商を主とし各種商品の卸賣並小賣商にして貿易商は穀物、海産物、牛皮等朝鮮物産の輸移出を爲すもの或は各種雜貨、綿絲布類、酒醬油、砂糖、燐寸等の商品を内地より移入するものの類是なり而して日用雜貨を始め米穀、吳服、煙草、酒醬油、文房具、菓子、荒物、青物類の商品は概して京城、仁川、釜山等の卸商より各地の小賣商に供給せらるる状況なり

第三節 商業地

各道に於ける主なる商業地を掲ぐれば左の如し

道 一 主要商業地



況 状 の 買 賣 花 棉 て 於 に 浦 木

京畿道	京城、水原、開城、永登浦、仁川、平澤、安城、漣川
忠清北道	清州、堤川、忠州、永同
忠清南道	大田、江景、公州、烏致院、洪州、禮山、天安、論山
全羅北道	群山、全州、萬浦、南原、金堤、裡里、井邑
全羅南道	木浦、羅州、榮山浦、南平、光州、麗水、順天、濟州
慶尙北道	大邱、金泉、慶州、安東、浦項、尙州、倭館、慶山
慶尙南道	釜山、東萊、龜浦、金海、密陽、蔚山、馬山、鎮海、統營、晉州、河東、居昌
黃海道	載寧、黃州、兼二浦、沙里院、新幕、海州
平安南道	平壤、安州、鎮南浦、廣梁灣、成川
平安北道	新義州、義州、龍岩浦、車輦館、宣川、定州、江界
江原道	春川、江陵、鐵原、原州、平康
咸鏡南道	咸興、元山、北青、西湖津
咸鏡北道	清津、鏡城、羅南、會寧、城津、雄基

第四節 會社

朝鮮に於ける會社の設立は之を自由に放任せず明治四十四年一月發布の會社令に依り總督の許可を受けしめ來りたるが爾來産業の發達に伴ひ會社事業は年々共に増加し漸次大規模の企業の勃興を見るに至り殊に近來各種工業を目的とする大會社の設立せられむとする氣運に向へり左に會社に關する諸種の統計を掲ぐ

朝鮮に本店を有する會社

大正五年十二月末日

種別	會社數	資本金	拂込資本金	種別	會社數	資本金	拂込資本金	
内地人設立	合名會社	一七	五九〇、五〇〇 円	朝鮮人合同設立	株式會社	三三	九〇、五三〇、〇〇〇 円	
	合資會社	五四	五、三〇、九〇〇		合資會社	三六	九、七九五、三四〇	四、七六〇、〇〇〇 円
	株式會社	七六	二六、八四一、八〇〇		株式會社	四	一五九、〇〇〇	一五、一〇〇
	計	一四七	三三、七四三、二〇〇		計	二四	一七、五三三、〇〇〇	一、三八九、四〇〇 円
朝鮮人設立	合名會社	四	三七六、七〇〇	計	株式會社	二八	一、七六二、七〇〇	一、四〇三、九一〇 円
	合資會社	九	三六五、六四〇					
	計	一三	七四二、三四〇					

朝鮮に支店を有する内地又は外國會社

大正五年十二月末日

種別	會社數	資本金		種別	會社數	資本金	
		日本金	拂込			日本金	拂込
日米人	1	11,000,000	21,000,000	大正四年末	26	5,516,740	3,248,666
合同設立	2	9,671,000	5,781,313	同三年末	22	5,597,210	3,851,431
株式會社	67	5,835,540	5,363,470	同二年末	19	5,284,870	3,746,011
合名會社	2	3,147,800	3,818,650	同元年末	17	5,032,650	3,927,645
合資會社	2	3,147,800	3,818,650	同元年末	17	5,032,650	3,927,645
株式會社	2	3,147,800	3,818,650	明治四十四年末	15	3,976,450	2,590,815
總計	71	32,133,940	37,910,111				

種別	會社數	資本金		種別	會社數	資本金	
		日本金	拂込			日本金	拂込
内地會社	4	1,800,000	1,800,000	合名會社	4	1,800,000	1,800,000
合名會社	3	6,017,733	6,017,733	合資會社	5	1,033,773	1,033,773
合資會社	3	1,088,250	874,996	株式會社	39	1,128,650	9,097,744
株式會社	3	1,088,250	874,996	株式合資會社	1	5,000,000	5,000,000
株式合資會社	1	5,000,000	5,000,000	總計	49	11,060,723	9,881,115
計	11	12,626,273	9,483,375				
外國會社	2	3,944,000	3,547,380	大正四年末	50	11,980,170	9,274,866
合資會社	2	3,944,000	3,547,380	同三年末	48	11,560,200	8,993,764
株式會社	2	3,944,000	3,547,380				
計	4	7,888,000	7,094,760				

種別	會社數	資本金	拂込資本金	種別	會社數	資本金	拂込資本金
大正二年末	五十一	111,800,100 円	81,471,100 円	明治四十四年末	三	86,849,700 円	66,015,510 円
同 元年末	四	95,036,1100	74,444,950				

朝鮮に本店を有する會社營業別

年	農業及林業	商業	工業	水産業	鑛業	銀行業及金融業	運輸業	瓦斯氣業	其他	合計
明治四十四年末	一一	六六	二七	一	一	一九	一九	七	一	一一五
大正元年末	一四	七一	三三	一	二	二一	一九	九	一	一七一
同 二年末	一六	八三	三七	一	三	二三	一九	一	一	一九四
同 三年末	二一	八八	三二	二	三	二三	二一	一	一	二一一
同 四年末	二四	八六	三二	二	三	二三	二五	一	一	二一六
同 五年末	二三	八五	二九	二	三	二四	二五	一	一〇	二二二

朝鮮に支店を有する内地又は外國會社營業別

商業會議所は商業に關する公益團體として重要なる機關たるに拘はらず從來何等據るべき法規なく

第五節 商業會議所

年	種別		同 五年末		同 四年末		同 三年末		大正二年末	
	内地會社	外國會社	計	計	計	計	計	計	計	
農 林 業	三	三	三	三	三	〇	〇	三	三	
商 業	一三	二	一四	一四	一七	三	一四	一四	二	
工 業	八	八	五	四	四	六	六	八	八	
水 産 業	四	四	二	二	二	二	二	四	四	
礦 業	二	三	五	二	三	五	二	三	五	
銀 行 業	四	四	三	四	四	四	四	四	四	
運 輸 業	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
瓦 電 氣 業	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
合 計	四六	五一	四三	四八	四五	四四	四八	五一	四六	

其の事業上又監督上遺憾少からざりしを以て大正四年七月朝鮮商業會議所令を發布し同十月より之を實施し以て有效に其の機能を發揮せしむることせり抑も朝鮮に於ける商業會議所は内地人の設立せるもの十一、朝鮮人の設立せるもの十四を算し多くは府制施行地に於て内鮮人各別に之を設立し其他朝鮮入の設立せるものにして殆ど商業會議所存立の意義を有せざるもの亦尠からざりしか新令施行に伴ひ之を整理し内鮮人共同して商工業の進歩發達を圖らしむる爲一地區一商業會議所たらしめ其の組織權限及監督に關しては一律に之を規定し以て會議所自體の地位資格を明にし所期の目的を成就せしむるに便し併せて適當の監督を加へ目的外に逸脱して諸種の弊害を誘起するか如きことなからしめたり現時新令に基き商業會議所を設立せるもの京城、仁川、群山、木浦、釜山、大邱、平壤、鎮南浦、元山の九箇所なり

第六節 穀物検査

米は朝鮮物産の大宗にして又輸移出品の首班たるを以て其の改良に付ては夙に種種の施設を加へ大正四年二月米穀検査規則を發布し輸移出米の検査を施行し漸次良好なる成績を挙げ來れるも既往の經驗に鑑み規定改正の必要を認め大正六年九月改正規定を發布し同年十月一日より之を實施せり検査は主として玄米に付道長官之を行ひ必要に應し中白米及白米の検査をも行ふこととし品質乾燥の

程度夾雜物包裝及容量に付一定の標準を定めて特等以下三等及不合格の五階級に分ち不合格米は其の輸移出は勿論他の道に搬出することをも禁止し又特に蝦米を混入するものは絶対に之れを搬出を禁止せり次に容量に關しては之を四斗に限定せり又大豆は米に亞くの重要農産品にして其の改良は最も緊要なるものあるを以て米穀検査規則の改正と共に大體同令に準し大豆検査規則を發布し各道に於て普く輸移出及道外搬出大豆の検査を施行せしむることせり

第七節 商品陳列館

商品陳列館は大正元年十一月三日の創設にして京城府永樂町に在り本府の經營に係る敷地約一千四百坪、本館は煉瓦造二階建にして階上階下を通して四百餘坪又棟を別にして附屬賣店あり三百餘坪の庭園は玄關前噴水を中心として全館を圍繞す

(イ)施設 本館は廣く朝鮮産物を網羅して朝鮮の産業狀況を明にし以て朝鮮産物利用の途を圖るに共に一面多額の輸移入ある内地及外國商品を蒐集陳列し營業者をして産業の改善、商品の選擇及販路の擴張に資せしめむとす

(ロ)陳列品 陳列品は營業者より陳列並販賣の希望を以て委託せられたる物、同じく陳列の希望を以て寄贈せられたる物及本府に於て参考上必要と認め購入又は製作加工したる物の三種とす最近

の調査に依る陳列品の類別及點數は左の如し

種別	陳列品點數				種別	大正六年九月末日			
	朝鮮產	内地產	外國產	合計		朝鮮產	内地產	外國產	合計
農業	一、五三七	二二二	二二三	一、七七二	化學製品及藥劑	一〇五	二六八	一	三七四
林業	二六〇	四〇	二	三〇二	携帶品及裝身具	一四五	三八九	二	五三六
鑛業	一四七	三四	二二	二〇三	文房具及玩具	六九	一四七	—	二一六
水産業	二八九	七三	八	三七〇	飲食品及釀造品	一六〇	三二六	—	四八六
織物及其の製品	六三〇	九四六	七六	一、六五二	機械及器具	七八	九九	三	一八〇
窯業製品	二八五	七二三	—	一、〇〇八	雜工品	一九八	一六七	—	三六五
金屬及玉石製品	二九七	六七六	一四	九八七	參考資料	一二三	七二	—	一九五
漆器及木竹製品	一五一	八五八	—	一、〇〇九	總計	四、五九六	五、五一	一六四	一〇、二七一
紙及其の製品	一二二	四八一	一三	六一六					

(ハ) 出品及寄贈 本館に出品又は寄贈を爲さむとする者は所定の申込書用紙(申出に依り本府より

交付す)に其の品名、數量、賣價其の他參考となるべき事項を記載し口頭又は書面を以て申込むものとす本府は之に對し即時其の諾否を通知す

出品物の荷造及運搬費は出品人の負擔とし返送に要するものは本府に於て支辨す

寄贈品の荷造及運搬費は本府に於て支辨す

(ニ)委託販賣 販賣を委託せられたる出品物は出品人の希望に依り廣く之を紹介する爲附屬賣店を

設け本府指定の確實なる商人をして販賣せしむ但し販賣手数料は販賣價額の一割とす

賣上代金は常月分(五圓未滿は五圓に達したるとき)を翌月七日迄に送付せしむ

關稅は便宜賣上金の内より納付の手續を爲すものとす

(ホ)來觀人員 開館以來の來觀者は左の如し

觀覽人員

年	觀覽人員			合計	開館日數	一日平均觀覽人員
	内地人	朝鮮人	外國人			
大正元年	九、一〇六	一一、六二九	六四	二〇、七九九	四四	四七三
同二年	三三、一六一	一五四、九四六	三四八	一八七、四五五	二九九	六二七
同三年	二四、〇五一	九三、二四七	五一九	一一七、八一七	二九七	三九七
同四年	二九、八三九	九五、六一八	二九六	一二五、七五三	二九六	四二五
同五年	二八、八七四	五五、五一二	三七二	八四、七五八	二九八	二八四

第八節 度量衡

朝鮮の度量衡は從來一定の標準なく亂雜を極めたりしか明治四十二年九月（隆熙三年）現行度量衡法に改正し爾來地域を定め順次之を施行し明治四十五年六月全土に施行の完了を見るに至れり

度量衡の名稱、命位は内地度量衡法と同一にして度量衡器は政府の專賣と爲し資産信用確實なる者に委託販賣を爲さしめ醫療用測量用並學術用等特殊の度量衡器は内地官廳の檢定を経たるものに限

り政府の特許を受け之を移入販賣を爲さしむ改正法實施以來年年多數の法定度量衡器を普及し來り

人民に在りても取引上正確なる法定器物を使用するの便利なるを識り商工業者は勿論一般農民亦略之が使用に習熟し従來取引上不統一なりし悪慣習も漸次改善せらるるに至れり今最近數年間に於ける委託販賣者及特許移入販賣者數を示せば左の如し

度量衡器販賣者及修理者

年	委託販賣者		特許移入販賣者		修理特許者			
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人		
大正元年末	二四一	六三	三〇四	三二八	二四	一	二七	六
同 二年末	二五三	五四	三〇七	三二七	二六	一	二七	八
同 三年末	二五四	五二	三〇六	三二六	三〇	一	二七	一六
同 四年末	二五八	五四	三二二	三二六	三二	一	三〇	二〇
同 五年末	二六一	五〇	三二二	三二二	三三	一	三三	二二
同 六年六月末	二六五	四六	三二二	三三三	三三	一	三三	二二

여 백

第十四章 貿易

第一節 總說

朝鮮の貿易は經濟の發達に伴ひ漸次増進の趨勢を示し殊に併合後は政府の産業上に於ける諸般の施設と民間企業の興隆に因り著しき發展を告ぐるに至れり今最近五年間の貿易額を示せば左の如し

年	貨物		金銀地金		合計		輸移出 入超過		
	輸移出	輸移入	輸移出	輸移入	輸移出	輸移入			
大正二年	三〇八七九	七二五八〇	九九六六	八九	一〇〇七五	四〇八六五	七二六六九	一一三、五三四	(-)
同三年	三三三八九	六三三三二	九六七五	六五	九七四〇	四四〇六四	六三二六六	一〇七、三六〇	(-)
同四年	四九四九二	五九一九九	一一七一	三三	一一、五九五	六〇八六三	五九四三三	一一〇、七六六	(+)
同五年	五八八〇二	七四四七七	一五六五	一一、九三	一六、九四八	七三、四九七	七五、七五〇	一四八、一〇七	(-)
同六年六月迄	三、七九六	四、八四七	七、七三	一〇八	四、八七一	四〇、五六一	四、四九五	八、五五一大	(-)

大正三年及同四年輸移入貨物の大正二年に比し減退を示せるは時局の影響、一般財界の不況、土木及建築工事の不振、米價下落に伴ふ鮮人購買力の減退並外國米、滿洲粟、小麥粉等の如き鮮米代用品の入減等に基く又大正五年金銀地金の出入好況なるは金鑛業の發展に伴ふ産金額の増加と北滿洲方面よりの流入増加せし結果なり

第二節 國別貿易

朝鮮貿易の對手國は廣く世界の各方面に渉り其の數少からざるも就中内地との關係最密接にして之を大正五年の貨物貿易額に就て觀察するに輸移出貿易の七割六分及輸移入貿易の七割一分は内地朝鮮間の貿易に屬し外國貿易は輸出二割四分、輸入二割九分に過ぎず而して諸外國中主要なるものは輸出に在りては支那及露領亞細亞にして輸入に在りては、支那、北米合衆國、英吉利、暹羅、獨逸、英領印度、佛領印度、蘭領印度等とす主要通商國に對する最近五年間の貨物貿易額を示せば左の如し

貿易價額國別

(一) 輸移出

年	内地	支那	亞細亞諸國	露領其の他	通計	年	内地	支那	亞細亞諸國	露領其の他	通計
大正二年	千円 二五三二四	千円 四一八四	千円 一〇一〇	千円 三七一	千円 三〇八五九	大正五年	千円 四三六四	千円 八〇六二	千円 四七五	千円 一〇六一	千円 五六八〇二
同三年	千円 二八八八七	千円 四五一八	千円 一、一〇九	千円 一七五	千円 三四三八九	同六年六月迄	千円 三七、一八四	千円 五〇〇〇	千円 一八三	千円 一七四二	千円 三五、七九八
同四年	千円 四〇九〇一	千円 五五九九	千円 二九〇四	千円 八	千円 四九四九三						

(二) 輸移入

年	内地	支那	英領印度	蘭領印度	佛領印度	露領亞細亞	暹羅	英吉利	獨逸	白耳義	北米合衆國	其の他諸國	通計
大正二年	千円 四〇四九	千円 九七六五	千円 一三九	千円 三三三	千円 六五二	千円 六	千円 一、〇二七	千円 七五四五	千円 一六八六	千円 一四二	千円 七、八九〇	千円 八三二	千円 七一、五八〇
同三年	千円 三九〇四七	千円 七七一	千円 五〇七	千円 三三八	千円 四〇三	千円 一〇三	千円 一、八三七	千円 五、四三四	千円 九一八	千円 一八八	千円 六、三三七	千円 五七九	千円 六三、三三二
同四年	千円 四一五五五	千円 八〇三三	千円 九九	千円 三三四	千円 四三	千円 一〇七	千円 三三三	千円 四、七八〇	千円 一九二	千円 六三	千円 三、六三四	千円 四八一	千円 五九、一九九
同五年	千円 五二四九九	千円 九五六五	千円 二三〇	千円 一八七	千円 二二	千円 一七二	千円 三二	千円 四、九三三	千円 二二	千円 一	千円 六、五五二	千円 五三六	千円 七四、四七七

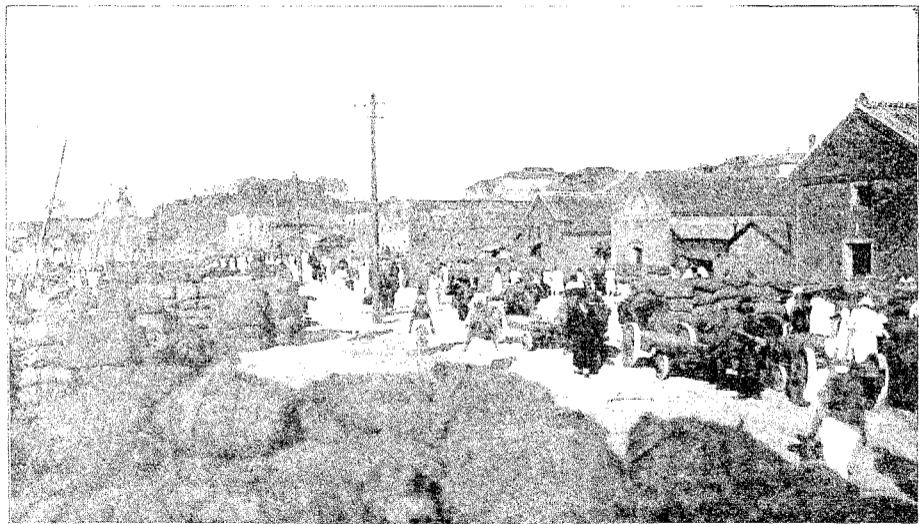
年	内地	支那	英領 印度	蘭領 印度	佛領 印度	暹羅	英吉 利	獨逸	白耳 義	北米 合衆國	其の他 諸國	通計
大正六年六月迄	千円 二九七九六	千円 六九一七	千円 一五九	千円 五	千円 三三	千円 一〇九	千円 一五	千円 一七四七	千円 一	千円 五三八〇	千円 二九一	千円 四四八四七

大正四年以來露領亞細亞に對する輸出激増したるは時局の影響として皮革製品及米の出荷巨額に上りたる爲、大正二、三年に於て英領印度、佛領印度及暹羅よりの輸入激増を示せるは外國米の輸入巨額に上りしに因り又大正五年以降米國よりの輸入激増せるは時局のため歐洲交戰國產品の輸入杜絶又は澁滞より之か補充として米國產品に對する需要一般に増加せし結果なり

金銀地金の輸移出入に在りては殆んど内地との關係に屬し外國との間に出入する者は極めて僅少にして唯だ大正五年以降北滿洲方面より金地金の輸入稍や見るべきものあるに過ぎず

第三節 港別貿易

現今朝鮮に於ける開港は仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、木浦、清津、城津、新義州、龍巖浦の十港なるも其の他馬山及鎮海は内地朝鮮間貿易船の出入を許され又京城、大邱、平壤には税關出張



仁川港穀物堆積物の状況

所を置き開港より保稅運送に依る貨物の輸移出入を取扱ふ而して以上諸港の中釜山港は貿易額第一位を占め仁川港之に亞く此の兩港は實に朝鮮の二大關門にして釜山港は内地朝鮮間貿易を以て顯はれ仁川港は支那其の他歐米諸外國に對する外國貿易を以て聞ゆ其の他貿易額の大なるものは輸移出に在りては鎮南浦、群山、元山、木浦、新義州等にして輸移入に在りては京城、元山、鎮南浦、平壤、新義州等なりとす今各地に於ける最近五年間の貨物貿易額を示せば左の如し

貿易額 港別

港	輸 出					輸 入				
	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年(六月迄)	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年(六月迄)
仁川	五八二八	五二五六	八二二二	七二二九	四八四七	一七五八九	一四二二七	三三三三四	一七三九四	一〇七四六
釜山	九八四五	一一七九四	一七八九九	二二〇六九	二二八九九	一七五五五	一六九一〇	一四三五六	一六八三五	一〇三〇一
元山	一三三七	一一四三	三三四三	四三七四	一七九四	五三八七	四二〇〇一	三三〇八	四二四四	二七九六
鎮南浦	四二八四	三九六〇	四九八七	八二二三	四六三九	三〇三三	二三五九	二九四三	三八四四	二七二五
京城	三三七	六三三	一〇九〇	二二三	九四六	一一〇五〇	一一三六	一一四四五	一四七六	八五〇一
群山	四一九九	六二七七	七二八九	五三六〇	三五七五	三七八二	三七一四	三三三三	三二九	一七二四

港	輸 出						輸 入					
	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年 (六月迄)	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年 (六月迄)		
木浦	千四 一、九五四	千四 二、四三九	千四 二、六八八	千四 三、〇九三	千四 二、七三六	千四 二、八三三	千四 一、八六八	千四 一、五五八	千四 一、八〇八	千四 九七〇		
大邱	二八	二四八	三九三	三三六	七五	一、五三三	一、四三九	一、六五一	二、五三六	一、七六八		
馬山及鎮海	一七一	一六〇	二二七	二七六	三三四	一、二一九	九八九	九一七	九六六	四九四		
清津	一〇四	一七二	一八一	五五二	三〇〇	一、二六六	一、四七七	二、〇九七	二、四七四	一、一三三		
城津	五六九	三三三	五〇三	八二七	一、四七七	七二四	七六二	五六八	九二二	五二九		
新義州及鎮南浦	一六三〇	一七六二	二、〇〇六	二、九六八	二、二八三	三、〇五五	二、三三七	三、一三三	三、一四六	一、八四九		
平壤	四三三	二八五	四三〇	四三三	一八三	三、一九五	二、八五一	二、五五四	三、二三三	一、九八七		
總計	三〇、八七九	三四、三八九	四九、四九三	五六、八〇三	三五、七九八	七一、八〇〇	六三、三三二	五九、一九九	七四、四七五	四四、八四七		

鎮南浦港の輸移出大正五年以來急増せるは久原製鍊所の設置に依り合金銀粗銅の移出多額に上れる爲、清津港の輸移出大正五年以來激増せるは時局の影響に因り隠元豆及豌豆の移出せられたるに主因し、城津港の輸移出大正六年に入り急増せるは久原甲山銅山の經營に伴ひ銅塊の移出巨額に上りし爲又群山港の輸移出大正五年に於て不振を示せるは同年米穀

移出不振なりしに因るものなり

鎮南浦港の輸移入大正五年以來著しく増加せるは主として兼二浦製鐵所設備材料の輸移入せられたるに因るものなり

第四節 輸移出重要品

朝鮮の輸移出品は農産物及鑛産物を主とし就中米、金及大豆は實に三大貿易品たり其の他含金銀粗銅、銅塊、牛皮、棉花、魚類、紅蔘、繭、金鑛、鐵鑛、石炭、生牛、肥料、海蘊、鯨肉等は何れも重要なる輸移出品なりとす今是等主要貨物に付き最近五年間の輸移出額を示せば左の如し

輸移出重要品價額

品名	價額					
	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同六年
米	千円 一四、四九四	千円 一七、〇九九	千円 二一、四七五	千円 一九、三九七	千円 一三、四二七	千円 一三、四二七
大豆	千円 五、五三六	千円 五、八一九	千円 五、一〇〇	千円 六、〇三三	千円 四、七二八	千円 四、七二八
鮮魚、乾鹽魚	千円 八、四二	千円 八、八三	千円 八、九七	千円 一、三〇九	千円 一、三〇九	千円 一、三〇九
鯨肉	千円 三、三三	千円 三、三三	千円 三、三三	千円 三、三三	千円 三、三三	千円 三、三三

品名	品名				
	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年 (六月迄)
人蔘	5,000	4,900	12,200	12,800	7,500
棉花	9,500	11,000	11,500	12,500	19,100
金	9,900	9,600	11,300	15,600	4,750
金鑽及汰鑽	3,900	5,700	9,100	10,800	4,800
鐵鑽	3,400	4,100	5,000	5,600	1,300
重石	1	1	1	1,600	9,000
石炭	3,500	4,600	6,200	4,600	1,700
黑鉛	2,000	1,400	2,000	5,700	3,300
合金銀粗銅	1	1	3,600	3,800	12,300
銅(塊及錠)	1	1	3	1	1,200
牛草	1,300	1,500	3,500	3,500	9,500
煙草	500	3,900	2,400	600	4,600
生牛	300	4,600	3,800	4,500	3,300
海藻類	3,100	3,400	5,900	4,300	1,300
肥料	7,700	9,500	9,100	10,600	6,800

本表の外大正四年以來時局の影響を受け露國向皮革製品の出荷巨額に上り其の額大正四年二百九萬三千圓、大正五年三百十一萬九千圓、大正六年(六月迄)二十三萬圓を算せり

第五節 輸移入重要品

朝鮮の産業は農業を主とし工業は古來極めて幼稚なるを以て輸移入品は多く工業製造品に屬し就中綿織物は實に輸移入貿易品の大宗たり其の他小麥粉、砂糖、酒、石油、藥材、綿絲、麻織物、絹織

物、紙、鐵、鐵道材料、機械、石炭、木材及板等は何れも重要なるものにして、最近企業の増進に伴ひ各種原料品の輸移入増進の趨勢あり、今最近五年間に於ける主要品の輸移入額を示せば左の如し

輸移入重要品價額

品名	輸移入重要品價額				
	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年 (六月迄)
米	二九二八	二七三三	三二七	二二五	四三
粟	二八九八	一、二四八	七六六	九	八三
小麦	一、九八八	一、二三七	六八四	八六五	四六四
食鹽	七五六	五五五	八五二	一、〇九七	四八三
砂糖	一、八七一	一、五二一	一、五四一	一、八九九	九六三
酒類	一、七四三	一、五七四	一、五二七	一、四八六	七七七
藥材、化學油	一、二八五	一、二三四	一、七二七	一、五三三	九〇九
石綿及打綿	二、〇三三	一、四八七	一、七〇一	二、三三七	一、〇八
繅織絲	七〇	五三七	六九五	七〇七	一五六
綿織絲	一、八五一	一、〇四〇	一、三六三	三、〇八一	二、三三八
綿織物	一、三七三	一、二九九七	二、八五九	一、五八三	七、二四七
麻織物	一、九七	一、六一七	一、一八五	一、六六三	二、三三五
毛織物	一、〇三	七八九	五六六	五七六	二六三
絹織物	一、一八四	九六	九七三	一、二〇八	三三六
紙類	一、五二	一、三三〇	一、五〇四	一、九七一	一、五五
鐵及鋼	一、八五〇	一、八三五	一、四一〇	二、一九九	一、四一〇
軌條	八五〇	五九二	七三三	五八八	四四九
橋梁材料	?	六三五	一五八	三五二	四四九
車輛及船舶	二、〇八	一、八四	九六四	一、〇一	九二九
諸機械類	一、五五	一、四八一	一、三三三	二、〇一	一、七九七

品名	大正					
	二年	三年	四年	五年	同六年 (六月迄)	同六年 (六月迄)
石炭	千円 一七六〇	千円 一七五二	千円 一七六三	千円 一八四〇	千円 一三三二	千円 一三三〇
木材及板	千円 一、八五八	千円 一、六九四	千円 一、四三七	千円 一、三三八	千円 六八六	千円 九五五
セメント及石灰	千円 五三〇	千円 五二七	千円 六三三	千円 八三三	千円 八三三	千円 五八二
吹繩及籐	千円 九五五	千円 一、〇三三	千円 一、一〇三	千円 九三九	千円 四〇六	千円 四〇六

本表大正二年及三年に於て米及粟の輸移入巨額を示せるは大正元年の米作不良の爲産米不足し米價騰貴の結果鮮米代用品として輸入激増したるに因るものにして一時的現象に過ぎざるものなり

第六節 陸接國境貿易及通過貿易

朝鮮の貿易は紋上開港の關係に依るものの外鴨綠江及豆滿江陸接國境に於て滿洲及露領との間に入するものあり其の大正五年に於ける貿易額は輸出百一萬六千圓、輸入七十一萬三千圓合計百七十二萬九千圓を算し漸次増進の趨勢に在り而して同地方出入貨物の主なるものは輸出に在りては生牛

を第一とし石油、大豆、米、魚類、紙卷煙草等にして輸入に在りては粟、木材、穀物、人蔘、生馬等なり

現今朝鮮に於ける通過貿易は内地、滿洲間に出入する貨物にして釜山、新義州間朝鮮鐵道を經由するもの、内地と間島琿春間出入貨物にして清津港を經由するもの二者を主なるものとす而して大正五年に於ける通過貿易額は總計二千九百四萬四千圓にして之を前記經路別に掲記せば前者に在りては滿洲向二千四百七十五萬七千圓、内地向三百三十二萬九千圓後者に在りては間島及琿春向八十二萬四千圓、内地向九萬八千圓なり

第七節 貿易船舶

朝鮮開港に於ける貿易船舶の出入港は年に依り多少の消長を免かれずと雖輸移出入貨物並通過貨物の増加に伴ひ逐年増進の趨勢に在り而して此等貿易船舶は大部分日本船にして且内地朝鮮間の貿易船に屬し外國船は極めて僅少なるのみならず其の大部分は支那戎克とす今最近五年間に於ける入港船舶を示せば左の如し

貿易船舶入港

年	隻		合計	噸		合計
	汽船	帆船		汽船	帆船	
大正二年	四、一八七	五、七九三	九、九八〇	三、九四二	一三五	四、〇七七
同三年	四、一九三	四、八八六	九、〇七九	三、九一〇	一二六	四、〇三六
同四年	四、三九七	五、九四五	一〇、三四二	三、八四四	一二八	三、九七二
同五年	三、八八四	七、六九四	一一、五七八	三、〇〇八	一三九	三、一四七
同六年六月迄	一、六〇五	三、七〇二	五、三〇七	一、二五八	六三	一、三二一

第八節 税 關

朝鮮に於ける開港は明治九年十月釜山の開港を以て嚆矢とす次て同十三年五月元山同十六年一月仁川を開港す而して明治十六年釜山、元山及仁川の三港に税關を設置し更に同三十年鎮南浦及木浦の二港、同三十二年群山、馬山及城津の三港を開港し同時に税關を増設す其の後我が保護政治時代に移るや其の施設の一端として同三十九年京義鐵道開通後に於ける鮮滿貿易の爲税關支署を新義州に

設置し京城、平壤及大邱に税關出張所若は保税貨物取扱所を設けて鐵道聯絡貨物其の他保税回送貨物に對する通關事務の取扱を開始し又鴨綠江口なる龍巖浦は三十七八年戰役後事實に於て開港を爲りたるを以て同港に新義州税關支署の出張所を設置し次て四十一年北鮮地方に於ける交通貿易の發展に資せむか爲新に清津港を開港として税關支署を設置したり

併合後從來の開港の外更に新義州を開港と爲し從來の開港中馬山浦は四十四年一月以後之を閉鎖せるも之と同時に内地、臺灣及樺太と朝鮮との間に通航する船舶は税關の特許を受け馬山浦及行巖灣に出入するを得ることなれるを以て馬山税關支署は依然之を存置し鎮海には翌四十五年一月新に税關支署を設置せり即ち現在の開港は仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、木浦、城津、清津、新義州及龍巖浦の十港にして開港貿易貨物の通關事務を執行する爲仁川、釜山、元山及鎮南浦の四箇所には税關、群山、木浦、馬山、鎮海、城津、清津及新義州の七箇所には税關支署、京城、大邱、平壤及龍巖浦の四箇所には税關出張所を設置せり其の他陸接國境貿易の爲指定せる各交通地點には税關出張所を設置し其の數咸鏡北道に十四箇所、咸鏡南道に四箇所、平安北道に十四箇所あり又鮮滿

國境列車直通に關する日支協約の成立に伴ひ四十四年十一月以後南滿洲鐵道安東停車場には稅關官吏を派出して鐵道聯絡貨物に對する通關事務の取扱を爲すことなれり尙關稅取締の爲全沿岸を通じて十六箇所の稅關監視署を設置し仁川及釜山の兩稅關には各百噸級、鎮南浦稅關には八十噸級の監視汽船を配置し龍巖浦稅關出張所及要地に在る稅關監視署五箇所には各五噸乃至七噸の發動機巡邏艇を配置しあり

		收 稅 額			大 正 五 年	
港	輪 移 出 稅	輪 移 入 稅	噸 稅	稅 關 雜 收 入	合 計	
仁川	五〇、四〇二 円	一、〇二二、一二七 円	一八、五六九 円	一、一六八 円	一、〇八二、二六六 円	
釜山	二九八、〇八〇	一、〇〇六、六三二	二六、一三五	二八、六九五	一、三五九、五三二	
元山	三三、〇九〇	二四九、七二九	二、九八七	二、七一〇	二八八、五一六	
鎮南	八五、三七七	一、二四、一一五	八、七二六	六四二	二一八、八六〇	
京城	五八、九〇七	八六五、八六〇	—	五、一一五	九二九、八八二	

總計	陸境	龍浦	新義州	平壤	咸興	清津	鎮海	馬山	木浦	大邱	群山
六三六、六五八	八六	一七、九九七	二〇、一四一	三二、五二七	五、三五二	一三三	六七五	九、一四七	四、〇九五	二〇、六四九	
四、三九四、九二〇	四六、六九一	一九九、九六一	二〇七、二六〇	五四、四三三	一四四、九〇六	七、六九四	四一、四一七	一〇九、六一二	一六五、六六五	一四八、六〇〇	
六九、二七七	六八七	二、八八一		一、一九〇	二、一一一	二、一七五	七六五	一、二三九		一、八一三	
四六、〇四一	二、〇五二	二、三九九	一、二六一	一〇八	七〇七		一〇〇	三三〇	四三〇	二六四	
五、一四六、八九六	四八、七四三	一一、〇六二	二二三、二三八	二二八、六六二	八八、二五七	一五三、〇七六	一〇、〇〇二	四二、九五七	一一〇、三二八	一七〇、一九〇	一七一、三二五

여 백

第十五章 工業

第一節 朝鮮人の工業

朝鮮の工業は高麗朝時代に在りて一時高度の發達を遂げたることは之を當時の建築に見高麗燒に徴するも其の一斑を窺ふに足るへし然れども爾來國力と共に次第に衰微し纏に機業、窯業、製紙、釀造、金屬品業等小規模の工業として僅かに其の片影を留むるのみ而も技術幼稚器具亦不完全にして其の製品見るに足るものなし日常生活の必需品も大部分は之を輸入に俟つの状態なりしを以て總督府に於ても夙に之を獎勵に努めたる結果機械器具の改善技術の進歩産額の増加等漸く復活の機運に向ふに至り就中近時織物を始め鑄物、指物類は著しく其の面目を改め其の他板金細工、莞草製器、石鹼、蠟燭及蔓細工等の工業品新に生産せらるるに至り漸次斯の種輸入品に代らむとするの氣運に向へり

(イ)機業 機業は朝鮮に於ける最重要なる工業なるを以て其の改良發達を圖る爲主要産地の道に於

ては機業教師を置き實地指導の任に當らしめつつあり

一 木綿織物 綿布は各地到る所産出せざるなく就中慶尙南北道、平安南北道、黃海道及京畿道産出最も多く朝鮮全土の大正五年に於けるの産額は三百十萬圓に達す多くは農家婦女子の副業的産物にして棉花を手紡し居織機にて製織する平織白木綿の粗なるものなり近來紡績綿絲を用ゐ「バツタン」織機又は足踏織機を以て製織するもの漸次増加し尙小規模の工場を經營するもの各地に散見するに至れり

二 絹織物 江原、平安南北及慶尙北道に産出し多くは明紬と稱する平絹の類にして平安道成川、泰川、寧邊、熙川、三徳川の紬、江原道鐵原の紬、咸鏡南道永興の紬最名あり是等は皆織り上げの後灰汁を以て精練し且染色し男女の衣料に供す一箇年の産額約七十萬圓なり

三 麻織物 忠清南道、慶尙南北道、咸鏡南北道、江原道最も産出多く重要な産物の一なり何れも白無地のものにして之を製織するには豫め麻を清水に浸し日光に晒して自然漂白をなし纖維を割きて細絲として居織機に依りて製織し夏の衣料、裏服、帆、袋及雑用に用ふ全道産出額

苧布、麻布を合せて約三百四十萬圓に達す

(ロ) 窯業 高麗時代に於て隆盛を極めし窯業も其の後時勢の變遷と共に衰微し殆んど見るべきもなく唯各地に於て極めて粗造なる日用品の製造を見るのみなりしか近時漸く窯業復興の曙光を見るに至り現に朝鮮人にして大規模を以て改良式窯法に依り工場を設けむとする者少なからず平壤磁器製造株式會社の如き其の一例なり

朝鮮には陶磁器の原料頗る豊富なり即ち慶南の河東、山淸、固城の各郡及黃海道海州郡に高陵土、又平南の大同郡、黃海道の遂安郡、江原道の楊口郡、慶北の青松、慶山二郡に磁石又咸北の會寧、鏡城、明川、城津の各郡に耐火粘土を産するか如きは斯業界の天與と爲す處なり此の外長石、珪石の産地亦乏しからず

(ハ) 製紙業 製紙は朝鮮工業中有望なるもの一なり慶尙北道慶州、慶尙南道三嘉、陝川、全羅北道全州には製紙業に従事する者多く産額亦多し各所に於ける製紙原料は總て楮を以てす朝鮮人製紙の方法は頗る簡易にして張板を用ぬす晴天を選び河岸に於て漉洒抄製し河原又は溫突にて乾燥

す一箇年の産出額約百萬圓にして高麗紙と稱し窓紙用及衣服申入用として支那に輸出せらるるも毎年十萬餘圓あり尙近來朝鮮に於ける和紙洋紙の需要増加するに従ひ朝鮮人にして其の製造に従事する者漸次増加するに至れり

(二)金屬品 朝鮮人は古來眞鍮製の器具を多く使用する習慣あり食器、金盃、火鉢、便器等の眞鍮製品各處に産出す鐵器類は鍋釜及農具を主要なるものとし就申釜は堅牢を以て名あり其の他婦人の裝飾品たる指輪、筭、簪等の銀又は眞鍮製品各所に製作せらるるも加工彫刻の見るべきもの少し

(ホ)雜工品

一 華筵 京畿道江華島、全羅南道寶城の特産物として知らる又慶尙北道金泉は産を以て名あり無地織なるものあり雲鶴模様又は福壽等の文字を織出せるものあり近來内地人に於ても大邸に製筵合資會社を設立し朝鮮産莞草を用ひ高麗筵及疊表を製造し又岡山縣に於て多年花筵の製造に従事し斯業に經驗ある早島物産商會なる者京城東大門外に工場を建設し輸向工藝品を製造

しつあり

二 木竹細工 籬、扇子、煙管竹等の竹細工品は巧妙にして全羅南道潭陽の竹器及羅州の籬は其の名高し木工品は概、箆筍、漆器等僅に存すれども見るに足るものなし唯漆器中慶尙南道統營地方に産する螺鈿細工は産出多からざるも雅致ある工藝品として推賞する價値あり

(一)醸造業 朝鮮人の飲用する酒類は藥酒、濁酒、白酒、燒酎、過夏酒、梨薑酒、甘紅露、松筍酒、合酒等種類多しと雖藥酒、白酒、濁酒、燒酎及過夏酒は其の主要なるものにして需要者多く從て醸造高は各酒を通して百萬石に上るへし

一 藥酒 小麥麴、糯米、粳米等を混合し醸造したるものにして他酒に比し品質稍や良好なり黃海道以南殊に京城附近に於て汎く飲用せられ酒中の珍として宴會祭日等に於て必須のものさせらる其の優良のものは果實酒に類する味を有し酒精分一〇乃至二〇%を有し帶黃赤色を呈す耐久性なく貯藏し難きを以て多くは冬期自家用として醸造せらる

二 濁酒 小麥粉及粗麴を蒸し又は煮たる糯米、粳米及水を加へて醸造したるものを揉潰して濾

過せる白濁液にして一般下層社會の嗜飲物たるか故に需要頗る多し腐敗し易きを以て四季を通じて隨意醸造す

三 焼酎 小麥、粗麴、粳米、糯米及黍等を以て醸造したるものにして各地に於て飲用せらる酒精度比較的低く三十度内外を普通とし北方に到るに従ひ其の度を増し五十度に到るものあり京城以南に在りては夏季のみ之を飲用するか故に製造高僅少なれとも北鮮地方に於ては四時常に飲用し醸造高從て多大なり

四 白酒 藥酒と濁酒の混成物にして水を以て稀薄となしたるものなり寧ろ濁酒に近し

五 過夏酒 小麥麴、麥芽、糯、焼酎を加味し醸造したるものにして恰も我が味淋に似たり其の酒精分は一〇乃至一八%にして他酒に比し飲用量多からず

六 其の他紅酒、甘紅露、梨薑酒等の諸酒は孰も焼酎を基とし之に糖蜜類を加味したる混成酒に過ぎず

第二節 内地人の工業

内地人經營の工業は未だ大成の域に達せざるも漸次堅實なる發達を遂げつつある狀況にして精米、鐵工、煙草、煉瓦、瓦製造、醸造、電氣、製材、製革業等其の主なるものにして近來内地人の投資を促進し製粉、製糖、パルプ製紙、紡績、セメント、陶磁器、燐寸等の製造業に付大規模の組織を以て事業を計畫する者續出するに至れり

(イ)精米業 朝鮮人の收穫米は粃の儘にて賣買せらるるもの多く朝鮮人の食用として白米の賣買せらるるものなきに非ざるも粃より直に精白したる一種の中白米に過ぎず然るに粃は輸移出に不便多く中白米は内地人の口は適せざるのみならず滿洲方面に對しては精米を以て輸出するを利益とするを以て主要地に於ては内地人にして稍大規模に粃摺業を兼ねたる精米業を營む者尠からず

(ロ)鐵工業 は從來鍛冶職の傍ら小道具の製造諸機械の修繕を營むに過ぎずして機械を應用し大規模の工場を經營せる者甚た少なりしか近時鑛山業の勃興に伴ひ鑛山用機械の需用を喚起し延いて斯業の發展を促し加ふるに朝鮮人の勞銀は低廉なるを以て鐵工業の前途極めて有望なり

(ハ)煙草製造業 朝鮮内に於て消費せらるる煙草は年年五六百萬圓の多額を算す爲に京城、釜山、

大邱等に於ては内地人の煙草製造業に従事せる者少からず就中京城に於ける東亞煙草株式會社の如きは其の規模宏大にして平壤、全州に分工場の設けあり従前朝鮮に於て消費せらるる卷煙草は大部分内地、上海等より輸入せられたるも本業の發達と共に漸次市場より驅逐せられ今や葉卷煙草、金口煙草等高價品の若干輸入せらるるの外殆ど凡て朝鮮産品を以て其の需要を充たすに至れり

(三) 窯業 朝鮮人は食器及便器に金屬器を使用する慣習ありしか漸次之を陶磁器に代ふるの傾向を生じ且前述する如く朝鮮は優良なる陶土に富むを以て内地人茲に著目し窯業の各所に勃興しつつあるを見る又古雅なる高麗燒を復興して内地人の嗜好に充てむとするもの亦尠からず鎮南浦の富田儀作、京城海市商會の製出する擬高麗燒磁器の如きは是なり又全羅南道黃海道海岸並其の附近島嶼は硃砂の存在豊富なるを以て之を原料とし硝子製造業に従事するものあり

(ホ) 煉瓦及瓦製造 全土到る處原料に富み麻浦、永登浦等に於ては監獄作業として煉瓦土管製造の經營せらるるものの外内地人及支那人の經營せるもの多し唯燃料に乏しき爲陶器業と同じく其の

發展を阻害せらるる虞なき能はずと雖建築業の進歩と共に有望なる一事業なり

(一) 醸造業 内地人の移住と共に清酒の需要激増したるを以て近時内地人の各地に於て清酒醸造に従事する者頗る多く京城、仁川、釜山及馬山等主なる醸造地に於ては既に大規模の設計に出づるものすら無きに非ず殊に牛島内は原料安價なるに加ふるに職工の勞銀低廉にして且腐敗の虞なきを以て収益少からず加ふるに販路廣く賣捌容易なるを以て研究改良を加へなば酒造業の前途頗る有望なり

内地人酒類醸造高

年 度	製造場數	釀 造					其の他の酒	合 計
		清 酒	燒 酎	濁 酒	味 淋	混成酒		
大正二年度	二二三	二四、二〇五	一、七五五	六六一	二〇五	七四九	八	二七、五八三
同 三年度	三八二	二七、六五二	九八〇	一、一四三	七八	—	二一	二九、八七三
同 四年度	三一五	二七、九七〇	四一一	九八二	八八	—	二五	二九、四七六
同 五年度	五三六	二七、八四二	一、五七三	二、三〇〇	一三二	一一七	七二	三二、〇三六

(ト)醬油味噌製造業 近時漸く隆盛を致し漸次内地移入品を防遏するの兆を示せり殊に味噌の醸造は頗る盛にして朝鮮内の供給に對しては最早移入を仰ぐの必要なく醬油も近來京城噲仁川、釜山、平壤、大田等に於て内地品に劣らざる精良のもの醸出せらるるに至りしかば從來内地人の移入に係りし醬油は痛撃を加へられたるの觀あり朝鮮内製醸の原料豊富にして而も低廉なるを以て該業の前途は有望なり今最近數年間に於ける内地人の醬油醸造者及石數を掲ぐれば左の如し

内地人醬油醸造人員及石數

年	醸造人員	醸造高	年	醸造人員	醸造高
明治四十四年	九〇	二四、九二五 <small>石</small>	大正三年	一九九	四四、〇九三 <small>石</small>
大正元年	一〇〇	二八、二五六	同四年	三一〇	三九、〇三七
同二年	一八六	三九、九九五	同五年	三六八	三七、五七八

(チ)電氣事業 從來米國人コールプランの經營に屬せし韓美電氣會社は京龍間の電車、電燈事業を營みつつありしか龍山に日韓瓦斯會社(資本金七十萬圓)設立せられ京龍間の瓦斯事業を經營す

るに至り四十二年八月韓美電氣會社の電氣事業を買収し電氣及瓦斯事業は該會社獨占に移れり是れ現今の京城電氣株式會社とす近時主なる都市は概ね電燈の設備を有するに至り會社組織を以て電氣事業を開始するもの漸く増加し既に當該官廳の許可を得たるもの十七にして内、現に開業せる者左の如し

電氣事業を營む會社

大正六年九月末日

會社	本店所在地	支店所在地	事業の目的	供給區域	資本金
朝鮮瓦斯電氣株式會社	東京	釜山	電燈、電力、電鐵	京城、仁川、馬山、海山	三、〇〇〇 <small>千円</small>
京城電氣株式會社	同		同電燈、電力	京城、仁川、馬山、海山	六、〇〇〇
鎮南浦電氣株式會社	鎮南浦		同電燈、電力	鎮南浦	一五〇
大田電氣株式會社	大田		同	大田	一二〇
大邱電氣株式會社	大邱		同	大邱	一〇〇

會社	本店所在地	支店所在地	事業の目的	供給區域	資本金
平壤電氣株式會社	平壤	—	電燈、電力	平壤	三〇〇千円
元山水力電氣株式會社	元山	—	同	元山	一五〇
朝鮮電氣株式會社	清津	—	同	清津、羅南	五〇〇
群山電氣株式會社	群山	—	同	群山	一六〇
木浦電燈株式會社	木浦	—	同	木浦	二〇〇
清州電氣株式會社	清州	—	同	清州	五〇
新義州電氣株式會社	新義州	—	同	新義州	六〇
水原電氣株式會社	水原	—	同	水原	六〇
光州電氣株式會社	光州	—	同	光州	五〇

(リ)製材業 近時交通機關の整備に伴ひ各地著しく建築事業旺盛となり一面造船業の發達は益用材の需要を喚起し製材業の勃興を促せり從來朝鮮に於ける需要の大半は内地材、北海材の占むる所なりしに材質優良にして價格低廉なる鴨綠江材に壓倒せらるるに至りしより益斯業の隆盛を致し加ふるに將來鴨綠江材が大渠港に使用せらるるに至るべきを以て斯業の前途亦有望なり

(ヌ)製革業 從來朝鮮に於ては大規模の製革業を營む者なかりしか内地に於て皮革の需要増加せるを朝鮮に於て原料牛皮の豊富なるを以て斯業の興起を促かし明治四十四年九月永登浦に於て朝鮮皮革株式會社設立せられ百萬圓の資本を以て百五十馬力の機關を具へ一箇年に數萬枚の牛皮を使用し軍需皮革、クローム用革皮靴底革の製造販賣を主とし尙靴革具、布具類の製造販賣を營みつつあり殊に同社は歐洲戰亂勃發以來數次露國より靴、彈藥盒等軍需品の注文を引受け一時其の製産力を緊張せしめたり

(ル)石鹼製造業 從來石鹼の多くは殆ど輸移入品にして其の使用亦内地人を始め一部朝鮮人に限られたるか如きも爾來漸次需要を増加し其の範圍を擴大せむとし加ふるに朝鮮は一面豊富なる原料を抱擁するを以て茲に斯業の勃興を促し既に京城、釜山、平壤等に於ては工場を設け事業に従事せる者あるに至れり

(チ)纒綿業 全羅南道を主とし兩鮮五道に於て陸地綿の栽培獎勵せらるるを共に原棉の産出額増加したる爲朝鮮棉業、天平商會、木浦棉業(以上木浦)田中善工場(釜山)等規模稍大なる纒綿工場の

外各地に於て企畫せらるるもの頗る多く殊に朝鮮製綿株式會社(京城)が露國行脱脂綿の製造を試みたるは戦亂に伴ふ一時の現象なりとするも又斯業發展の一證左として見るへし今内地人の經營に係る工場統計を表示すれば左の如し

種別	工場數	資本金	職工數			生産品價格
			内地人	朝鮮人	外國人	
染織業	一四	一〇六、八〇〇 円	四七	五七六	六二三	一二九、五四六 円
製綿業	一八	一、八三六、三〇〇	一二〇	一、五〇七	一、六二七	二、二八〇、三三三
製紙業	一	一〇、〇〇〇	三	三〇	三三	六、九三八
製革及皮革製品業	六	六二九、五〇〇	一〇四	一、〇二九	一一、三三三	五、二八七、二七二
窯業	五五	三四一、七三六	三三一	一、二四一	一、六六〇	四二八、二七四
石鹼製造業	六	五五、〇〇〇	一一	一五	二六	九五、三九四
蠟燭製造業	四	九、五〇〇	一五	四五	六〇	三二〇、〇〇〇
染料製造業	一	五、〇〇〇	四	二六	三〇	八八、〇〇〇

内地人經營工場

大正五年十二月末日

肥料製造業	三	二四〇,〇〇〇	一九	六〇	七九	一一五,一五二
金屬工業	五九	三五一,一四九	三五〇	三三二	六八二	五一五,一六八
木工業	一六	三七,一〇〇	八五	六一	一五五	一三三,〇〇一
製材業	一二	二七四,一〇〇	四二	八八	二〇七	四一一,四〇〇
船舶製造業	四	六三,三〇〇	五六	八八	五六	三四,〇九〇
精穀業	一二一	二,七〇二,九〇〇	七五八	五,九〇九	三五	六,七〇二,二二一,七五三,〇七四
製粉業	七	二九,五〇〇	二一	二九	五〇	六四,三四九
製麵業	七	一八,〇〇〇	一〇	一三	二三	四一,〇四一
菓子製造業	二八	八二,六五〇	一〇六	五七	一六六	一一〇,一三三
煙草製造業	二一	三,九八四,四六八	三二四	三,六二九	三,九五三	四,一〇三,七〇九
貝細工業	五	一二,三〇〇	四	五四	五八	三一,三四〇
釀造業	九二	一,五八七,五五九	四一一	二四八	六六三	一,三五五,四六九
製冰業	一	〇	五	七	一一	二二,五五五
清涼飲料製造業	四	二五,五〇〇	二一	二二	四三	四五,四五〇
製鹽業	一六	三九九,〇〇〇	二七	二六四	二九一	五三九,〇七五
罐詰製造業	一五	一五六,七〇〇	九三	一三九	二三二	一五六,九七四
印刷業	五六	七六二,一〇〇	四六九	八四六	五	一,二〇九,四七六

第十五章 工業

種別	工場數	資本金	職工數			計	生産品價格
			内地人	朝鮮人	外國人		
裁縫業	一〇	七〇、五五〇 円	八二 人	六三 人	— 人	一四五 人	一七八、二〇〇 円
精煉業	二一	三、一三三、一九一	三三四	一、一八一	—	一、六〇七	四、九三〇、七四八
瓦斯電氣業	一五	四、〇二二、七九五	一四三	一四五	五	二九三	二、二二〇、一九七
其他	二六	二二七、九六〇	一五五	六六三	—	八一八	二四八、〇九三
總計	六四四	二一、一四四、六五八	四、一四〇	一八、二七九	三二八	二二、七四七	四六、九六四、四四〇

本表は内地人經營に係る工場中職工五人以上を使用するもの又は職工五人以下なるも原動力を使用するもの若は一箇年の生産品價額五千圓以上のもののみを掲上せり

第三節 官營工業

官營工業としては龍山印刷所に於ける印刷業、平壤鑛業所に於ける煉炭製造業、新義州營林廠に於ける製材業是なり左に其の梗概を記すへし

(イ)印刷業 龍山印刷所は併合前明治四十年(隆熙元年)以來事業の擴張を計り工場の新築機械の増

置技術者の傭聘等に努め銀行券其の他精巧なる印刷物を出版せり今最近五箇年間に於ける事業の概況を表示すれば左の如し

印刷所事業概況

年 度	石炭		職工及雜役		給料總額		職工及雜役		平均一日 作業時間	生產品 格
	消費高	員	人員	延人員	員	職工及雜役	一日平均一 人の給料			
大正元年度	二、一九六	八八	五八七	一九二、七二〇	五四、二三一	九一、三三〇	〇・四二四	九・〇〇	三六五	五三一
同 二年度	二、一八八	八九	四六五	一六九、七二五	五九、四五三	八七、五八三	〇・五一六	九・二〇	三一四	七八三
同 三年度	一、七一四	八四	四五八	一六七、一七〇	五八、〇〇二	八〇、三〇四	〇・四八〇	九・二〇	三三二	六三二
同 四年度	一、五四三	七七	四〇四	一四七、八六四	五一、七二六	六八、六四二	〇・四六四	九・二五	三一	三七〇
同 五年度	一、六六五	七六	四三〇	一五六、九五〇	五〇、四一三	七一、六八〇	〇・四五七	九・三〇	四〇〇	八〇四

(ロ) 煉炭業 煉炭は逐年需要増加の傾向ありて其の種類に關せず賣行頗る良好なり (第一種煉炭は

ツチ入小型) (第二種煉炭粘土入小型) 此の趨勢に鑑み大正五年度に於て第一種煉炭五千噸第二種煉炭六千噸製造の目的にて之に著手し大正六年度末迄には兩者合せて一萬六千八百噸を製造する

の豫定なり

(ハ)製材業 營林廠に於ては原木を販賣すると共に一面に於ては直營の製材事業を行ひ以て需要者の便益に供しつつあり而して其の製材の種類は従來は建築材の普通製材種類三十七種にして之を品質及樹種別に區別すれば一千五百二十種の多きに上りしを以て大正五年二月より其の種類を九百九十種に減殺せり

第四節 中央試験所

中央試験所は明治四十五年の創設に係り其の業務は之を分ちて分析試験、應用化學試験、窯業試験、染織試験、醸造試験、衛生試験の六部と爲し各其の専門に屬する工業及衛生試験に關する試験分析及鑑定に従事す本所は他より依頼に係る是等事項の試験に従事すると共に朝鮮に産する各種の原料に就て之の利用の道を講究し以て一般の參考に資するに努めつつあり従來再次に互り試験事項の成績を發表したりしか青化「アルカリ」の製造、合成石炭酸、朝鮮産植物染料として槐花の色素、紫根、「シ」ンナム」葉の利用、咸鏡北道産粘土の研究調査、粃殻を原料とせる醋酸製造法、硬化油、岩泉「ラジ

ウムエマナチオレ」測定、朝鮮金剛山中の薬用植物、葡萄酒製造法、赤葡萄酒開放式釀造試験、各種罐詰類製造試験、柞蠶布製織試験、手紡麻苧絲の漂白試験等は其の中に就き主たるものなり

第五節 地方工業傳習所

機業、製紙、繩索製造其他副業として最も適當なる簡易工業を朝鮮人に普及する爲恩賜授産事業又は地方費事業として或は個人又は組合か政府の補助を得此の種工業の簡易なる傳習事業を經營する者尠からず將來此等傳習所を卒業したる技工の就職する者増加するに及ばば朝鮮の工業發達に資する所更に尠からざるへし今各道に於ける傳習所數を種類別に掲ぐれば左の如し

種別	地方工業傳習所數										合計	
	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道		
機業及染色業	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	九
製紙業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
												二

大正五年十二月末日

種別	道										合計	
	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道		
漁具製造業	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
金工木竹工業	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
蠟石細工業	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
總計	2	1	1	5	2	1	2	1	1	1	1	26

第六節 工業所有權の保護

從來朝鮮には工業所有權保護の制度存せざりしを以て帝國政府は明治四十一年八月米國と條約を締結し米國は其の本國に於て朝鮮人に對しても工業所有權の保護を與ふると同時に發明、意匠、商標の保護に關しては朝鮮に於ける治外法權を撤退し日本國は内地に行はると同様の法令を朝鮮に施行し以て米國人の發明、意匠、商標を朝鮮内に於て保護すへきことを約せり仍て帝國政府は同年八月十六日を以て韓國特許令、同意匠令、同商標令を施行し四十二年十一月一日より韓國實用新案令を施行し統監府特許局に於て之を管理し此等に關する一切の事務を處理せしめたりしか併合と同時に

に韓國特許令外三令並統監府特許局を廢止し新に特許法、意匠法、商標法、實用新案法を朝鮮に施行し工業所有權保護に關する事務一切は特許局に屬することと爲れり而して従前の四令に依りて既得せられたる權利は特許法外三法に依りて設定せられたるものと同一に看做され其の權利の效力は我領土全部に及ぶと共に本國に於て既得せられたる權利は當然に朝鮮に於ても其の效力を保有するものと爲せり統監府特許局設置以來其の廢止に至るまで（自明治四十一年八月至同四十三年八月）に取扱ひたる事件數は特許四百六十八、意匠百二十三、商標千百十四、實用新案五十九合計一千七百六十四件なり

第七節 工業獎勵

篤志者にして工業傳習事業を企畫する者又は有益なる工業を經營するも事業創始の際收支償ふ能はざる者に對しては總督府又は地方廳は金品を補助し以て工業の發達に勗めつつあり又並に韓國併合の際朝鮮人授産の爲下賜せられたる恩賜金の利子の一部を以て從來一般に副業として行はるる機業、製紙業等の改良を計り或は從來全く存せざるも將來有望なる副業たるへき繩臥製

造等の技術を傳習せしむる爲三箇月乃至六箇月の短期を以て習業し得へき工業の傳習所を各地に起し或は實地指導を爲す爲巡回教師を置く等各種の方法を講して手工業の改良發達を圖りつつあり

第八節 勞 銀

朝鮮に於ける内地人の勞銀は内地に於ける内地人の勞銀か昂騰せるに反し年年低落の現象を示すは蓋し從來朝鮮に於ける内地人の勞銀は過渡時代に於ける一時的の變態にして新政の普及と共に各種の施設經營其の歩武を進むるに従ひ漸次需要供給相調節し其の常態を出現すればなり尤も朝鮮人の勞銀は種類に由り一様ならざるも漸次昂騰の傾向を呈せり
左に主要地に於ける勞銀を表示すへし

職 業		勞 銀	
大 工 内地人 朝鮮人	京城	円	1.350
	仁川	円	1.400
	平壤	円	1.250
	鎮南	円	1.250
	新義州	円	1.200
	群山	円	1.300
	木浦	円	1.300
	釜山	円	1.300
	大邱	円	1.200
	元山	円	1.450
	清津	円	1.330
	平均	円	1.280

指物職(内地人)	左官(内地人)	石工(朝鮮人)	木挽(内地人)	瓦葺(内地人)	煉瓦積(内地人)	ハンキ職(内地人)	鐵力職(内地人)	鍛冶職(内地人)	疊職(内地人)	土方(内地人)
一・三二〇	一・三六〇	一・八一〇	一・三〇〇	一・三七〇	一・一〇〇	一・三五〇	一・三〇〇	一・四〇〇	一・三三〇	〇・八六〇
一・五〇〇	一・五〇〇	〇・八五〇	一・五〇〇	〇・九〇〇	〇・八〇〇	一・六〇〇	一・五〇〇	一・四〇〇	一・五〇〇	一・〇〇〇
一・四五〇	一・四五〇	一・四五〇	一・五〇〇	一・五八〇	一・一五〇	一・四八〇	一・五八〇	一・四五〇	一・六三〇	〇・七八〇
一・四五〇	一・四五〇	〇・六五〇	一・一五〇	〇・六五〇	一・五五〇	一・五五〇	一・四〇〇	一・六〇〇	一・三八〇	一・〇〇〇
一・五〇〇	一・五〇〇	一・八〇〇	一・三〇〇	一・五〇〇	一・六〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・〇〇〇
一・三〇〇	一・五〇〇	〇・九〇〇	一・五〇〇	〇・八〇〇	〇・八〇〇	一・五〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・六〇〇	〇・八五〇
一・四〇〇	一・四〇〇	一・五〇〇	一・四〇〇	一・五〇〇	一・七〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・五〇〇	一・三〇〇	一・〇〇〇
一・二〇〇	一・三〇〇	〇・五五〇	一・五〇〇	〇・五〇〇	〇・六〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・三〇〇	〇・八〇〇
一・三〇〇	一・三〇〇	〇・五五〇	一・五〇〇	〇・五〇〇	一・六〇〇	一・三〇〇	一・二五〇	一・三〇〇	一・三〇〇	〇・九〇〇
一・四〇〇	一・五五〇	〇・八六〇	一・六五〇	一・二〇〇	一・六五〇	一・三五〇	一・三〇〇	一・三〇〇	一・五〇〇	一・八〇〇
一・六〇〇	二・〇〇〇	〇・八〇〇	一・七〇〇	二・〇〇〇	〇・八〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・五〇〇	一・〇〇〇
一・四〇〇	一・四八〇	〇・七三〇	一・四八〇	〇・七六〇	一・六四〇	一・四七〇	一・三九〇	一・四四五	一・四二〇	〇・九一〇

職業	京城		仁川		平壤		浦鎮南		州新義		群山		木浦		釜山		大邱		元山		清津		平均		
	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	
土方(朝鮮人)	〇・五三〇	〇・五〇〇	〇・三七〇	〇・六〇〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・六〇〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇	〇・四〇〇	〇・四五〇
活版職(内地人)	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・二〇〇	〇・七〇〇	一・五〇〇	〇・八〇〇	一・二〇〇	〇・九〇〇	一・〇〇〇	〇・九〇〇	一・〇〇〇	一・一〇〇	〇・九〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・一〇〇	一・一〇〇	一・一〇〇	一・一〇〇	一・〇〇〇	一・一〇〇	一・〇〇〇
表具師(内地人)	一・三六〇	一・六〇〇	一・四八〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・三三〇	一・三〇〇
靴製造職(内地人)	〇・七四〇	〇・九〇〇	〇・七九〇	〇・六〇〇	—	〇・七〇〇	〇・六〇〇	—	〇・七〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・五〇〇	—	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇
洋服職工(内地人)	一・〇〇〇	一・一六〇	一・〇〇〇	〇・八〇〇	一・三〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇	一・二〇〇
車夫(内地人)	〇・八二〇	一・五〇〇	一・七〇〇	〇・七八〇	—	一・五〇〇	一・五〇〇	—	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・五〇〇	一・二四〇
車夫(朝鮮人)	〇・六六〇	〇・九〇〇	一・四〇〇	〇・四八〇	—	〇・七〇〇	一・〇〇〇	—	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇〇〇	一・〇八〇
人夫(内地人)	〇・七七〇	〇・九〇〇	〇・七三〇	〇・八〇〇	一・〇〇〇	〇・八〇〇	—	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・六〇〇	〇・八〇〇
人夫(朝鮮人)	〇・四〇〇	〇・五〇〇	〇・三九〇	〇・三五〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	—	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四〇〇	〇・四三〇

本表は大正五年三月、六月、九月及十二月に於ける勞銀の平均額なり

第十六章 土地調査

(イ)目的 土地調査の目的は土地所有權を確認し權利の紛争を未然に防止せむことを期し土地の有主、地目、疆界及面積を調査測量して地積を明かにし且財政の基礎を確實にし負擔の公正を期せむが爲土地の品位、等級を調査するに在り元來朝鮮の土地は舊法典たる大典會通及最近施行の土地家屋證明規則、土地家屋典當規則、國有未墾地利用法、土地家屋所有權證明規則等に依り個人の所有權を認めたるものと謂ふべきも證明規則に依るの外は其の所有權を證明すべき方法なく而も其の證明方法たる當該官廳に土地臺帳の設備あるにあらすして單に證明の出願に對し調査するに過ぎず其の往往にして正嶋を失するものあるも亦固より其の所なり若し夫れ未だ證明を経ざる土地の所有者に在りては之が賣買等に際し作成する私文記若し占有の事實に依りて所有權を主張するの外他に的確なる證明方法あることなし是の故に屢權利の紛争を生し解決の爲實地を踏査するも其の判定尙容易ならず縱令裁判の判決あるも其の執行亦頗る困難なるを免れず從來の制度

既に斯の如し是れ速に土地調査を行ひ以て地籍を明かにし査定の確定したる地域より既往の證明制度を革め不動産登記令を實施して土地の所有權を確保し財政の基礎を鞏固ならしめむとする所以にして彼の單に増税を目的としたる従前の量田と同日の談に非らず

(口)效果 一國の政治經濟の發達は土地所有權の確認に基くこと多大なるは歐米諸國及其の殖民地の歴史上顯著の事實なりとす之を朝鮮の實況に鑑みれば土地臺帳の備はれるものなく土地所有權の確認亦殆ど之あるなし加之其の面積は斗落と云ひ日耕と稱し之が廣狹を算定するの準規漫として捉ふへからず然れども調査の進捗は開局以來大正六年六月迄に各市街地、舊居留地及京畿外九道に渉る百五十六郡二島の査定を了し大正三年五月以來逐次其の確定地方に對し登記制度の實施を見るに至りたれば土地調査完成の曉には其の效果の及ぶ所單に産業及財政の基礎を鞏固ならしむるに止らず今其の效果の主なるものを擧ぐれば左の如し

一 地籍を明かにし土地の所有權其の他土地に關する諸般の權利を確認するか故に土地の經濟的價値を増進し其の價格を騰貴せしむ

二 土地の權利に關する證明又は登記の制度を的確に實行することを得て賣買、讓與及抵當權等の設定を容易ならしめ土地の經濟的利用を増大せしむ

三 世運の進歩人文の發展に伴ひ必然生ずべき土地の紛争を未然に防止することを得

四 地稅の基礎を確實にし負擔の公正を得せしむるか故に歲入の増進を期し得べく財政の運用をして圓滿ならしむ

五 産業の開發其の他行政の施設改善は地權の整理を待て確實なる效果を擧ぐることを得へし

(ハ)計畫 朝鮮の土地調査に關しては外國の事例を參照したるものありと雖主として範を執りたるは日本内地に於ける地租改正、沖繩に於ける土地整理及臺灣に於ける土地調査なりとす

一 調査機關 土地調査は業務の性質に隨ひ外業の成果を内業に移して統一す其の一般計畫、紛争地審査、査定事務等は總務課之を掌理し技術課は三角測量及地形測量、調理課は準備調査並地位等級調査、測量課は圖根測量及細部測圖を主管し製圖と面積計算とは製圖課、土地臺帳其の他諸帳簿調製は整理課の擔任する所なり

二 調査の範圍及成功期限 調査の範圍は耕地、宅地を主とし山林原野(其の多くは國有に屬す)は單に調査地間に介在するものみに止め其の他は事業費等の關係上姑く之を除外せり調査地の總面積四百四十萬八千町步此の筆數一千八百四十五萬一千六百七筆にして明治四十三年三月開局の時より滿八箇年十箇月を以て調査を完了する豫定なり

三 従事員の養成 調査及測量の従事員は其の指導監督の任に當るものを除くの外専ら朝鮮人を養成して之に充つ即ち一面に於ては技術員の養成を各地の農業學校等に委託する外局員養成所を京城に設け(當初は舊官立漢城高等學校及同外國語學校に臨時事務員若は技術員養成所を附設し委託養成の方法を採りたり)土地調査局直接經營の下に事務員及技術員を養成し他面に於ては同局に於て局員に對し講習又は實習の道を開き又別に製圖積算見習生を募集し以て事業の必需に應ずべき此等従事員の養成を爲し居れり

四 諮問機關 土地所有權及疆界の調査は之を地方土地調査委員會に諮問して調査の適否を審理せしめ土地調査局長之を査定す(地方土地調査委員會は各道長官主宰の下に之を開設す)而して

其の査定に對し異議ある者には高等土地調査委員會に再審且最終の審判を求むることを得せしむ

五 土地臺帳及地圖 土地調査の終了に隨ひ土地臺帳及地圖を調製す土地臺帳及地圖の調製を終りたるときは之を臺帳保管廳へ移付し土地所有權移轉登録の方法を開始し一般民衆をして成るべく速に土地調査の効果を享受せしめむとす

(二)實地調査、細部測圖の著手及完成年度は左の如し

實地調査、細部測圖著手及完成年度

道	著手年度	完成年度	道	著手年度	完成年度	道	著手年度	完成年度
京畿道	明治四十三年	大正四年	全羅南道	大正二年	大正四年	平安北道	大正四年	大正五年
忠清北道	大正元年	同	慶尙北道	明治四十三年	三年	江原道	同	同
忠清南道	同	三年	慶尙南道	同	四十四年	同	四年	同
全羅北道	同	四年	黃海道	大正三年	同	咸鏡南道	同	五年
	二年	同	平安南道	同	二年	咸鏡北道	同	同

(ホ)大正六年六月末日以前に於て土地調査の内外業の全部を完成し所管廳に土地臺帳及地籍圖の引繼を了したる市街地及府郡島を掲ぐれば左の如し

市街地

京城、仁川、開城、水原、清州、公州、大田、江景、全州、群山、光州、羅州、木浦、
 金泉、大邱、馬山、晋州、釜山、海州、平壤、鎮南浦、義州、新義州、咸興、元山、
 清津、鏡城、羅南、會寧

京畿道

宮川郡、始興郡、金浦郡、江華郡、水原郡、振威郡、安城郡、龍仁郡、
 利川郡、開城郡、坡州郡、漣川郡、楊州郡、高陽郡、長湍郡、抱川郡、
 楊平郡、廣州郡、驪州郡、加平郡(富川郡所屬島嶼未了)

忠清北道

沃川郡、鎮川郡、永同郡、報恩郡、清州郡、陰城郡、堤川郡、槐山郡、
 丹陽郡、忠州郡(完了)

忠清南道

禮山郡、牙山郡、天安郡、青陽郡、燕岐郡、唐津郡、瑞山郡、公州郡、
 大田郡、論山郡、扶餘郡、洪城郡、保寧郡、舒川郡(完了)

郡
島

全羅北道

沃溝郡、茂朱郡、淳昌郡、益山郡、全州郡、扶安郡、鎮安郡、錦山郡、長水郡、高敞郡、金堤郡、井邑郡、南原郡、任實郡(完了)

全羅南道

濟州島、谷城郡、和順郡、光州郡、光陽郡、求禮郡、麗水郡、海南郡、靈光郡、靈巖郡、長城郡、潭陽郡、康津郡、長興郡、高興郡、咸平郡、務安郡、(務安郡附屬島嶼未了)

慶尙北道

達城郡、高靈郡、清道郡、慶山郡、鬱陵島、軍威郡、尙州郡、青松郡、善山郡、漆谷郡、義城郡、星州郡、迎日郡、慶州郡、盈德郡、永川郡、安東郡、金泉郡、英陽郡、聞慶郡、醴川郡、榮州郡、奉化郡(完了)

慶尙南道

密陽郡、梁山郡、東萊郡、昌寧郡、蔚山郡、金海郡、咸安郡、宜寧郡、昌原郡、晉州郡、泗川郡、咸陽郡、山淸郡、陝川郡、居昌郡、河東郡、固城郡、統營郡、南海郡(泗川、南海二郡附屬島嶼未了)

黃海道

海州郡、延白郡、金川郡、松禾郡、殷栗郡、安岳郡、瑞興郡

—— 平安南道 安州郡、平原郡、江西郡、大同郡、龍岡郡、孟山郡、中和郡、寧遠郡

江原道 春川郡

(へ)地形測量 本測量は軍事其の他一般行政上の施設及國民經濟開發等の計畫に對し極めて必要なるものにして即ち大三角點、小三角點及測地圖根點を基礎とし尙既成地籍圖の成果を利用し測板上に一般の地貌及地物を測圖し且行政區劃を明示せる地形圖を調製す而して府及重要なる地區は一萬分一、府及重要なる地區の周圍は二萬五千分一の縮尺を用ゐて之を測圖し尙五萬分一の縮尺を以て朝鮮全土を通し地形圖を調製するの外名勝舊蹟地の案内に使せむか爲開城、扶餘、慶州、金剛山等を各一葉に收めたる地圖をも發行すべく已に大正三年度の實施以來著著進行せるを以て大正六年度に至り外業を完了する豫定にして此の測量は逐次進捗するに隨ひ參謀本部に於て製版發行し各地の書林をして販賣せしめ以て一般の需要に應せむとし既に刊行済みのもの少からず

第十七章 宗教及享祀

第一節 宗教

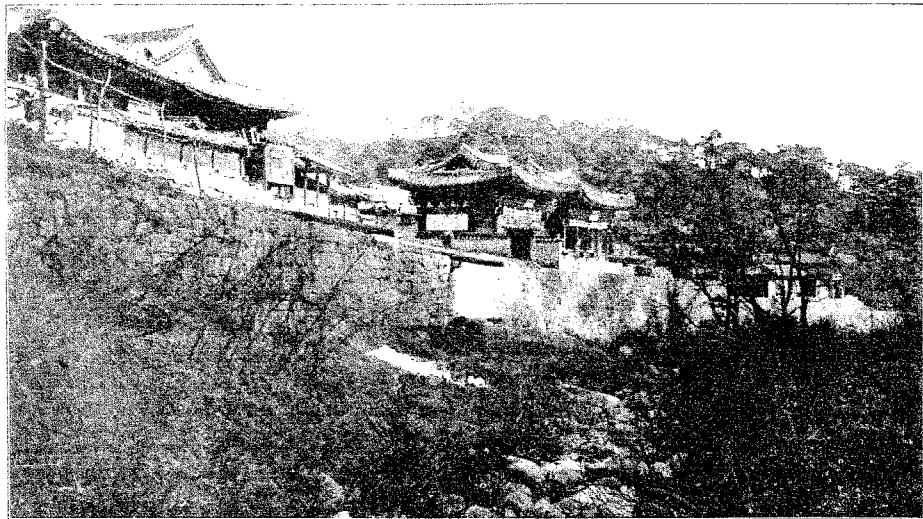
現時朝鮮に於て宗教と稱するは神道佛教及基督教の三種にして神道は國典に基き日本特有の惟神の大道を宣揚し佛教と基督教とは各各所依の經典に基き立教開宗の旨趣を宣明し以て布教に従事せり就中内地人の經營に係る布教設備は神道、佛教及基督教とも最初居留地内に發達せしも明治三十九年（光武十年）統監府令を以て宗教の宣布に關する規則を定めしより公然居留地外に出て徐徐と教勢を暢るに至れり

（イ）神道 は日本特有の宗教にして其の團體を爲し特立せるもの十三派ありと雖併合前より今日に至るまで各地に教師を派遣し相應の設備を爲して布教に従事するは天理教、金光教、神理教、大社教の四派にして最近數年間に於ける各派の布教狀況は概して平穩順調の趨勢を保てるも其の信徒の大部分は内地人にして著しき發展の成績を見ず其の概要を表示すれば左の如し

神道布教狀況

年	布教所數	布教師	信徒		合計
			内地人	朝鮮人	
大正元年末	?	七〇	七、九八九	五、三一二	一三、三〇一
同二年末	五二	六四	七、七九九	四、七九五	一二、五九四
同三年末	六七	七四	九、四〇三	四、〇五一	一三、四五四
同四年末	五二	九一	二五、三六五	一〇、五八五	三五、九五〇
同五年末	六五	一〇三	二七、八〇一	八、五五三	三六、三五四

(口)佛教 朝鮮に於ける佛教は其の傳來甚だ古く高句麗の時(仁德天皇壬辰二十年)支那東晉より初めて佛經を傳來し其の後四十年を経過し復た同國より佛像を傳致し百濟、新羅を経高麗の末期に至る迄寛大なる格護の下に隆昌を極めしも李朝に至り寺刹の新創を停め或は度僧を制限し特に近古二百有餘年來其民の僧尼を爲るを禁する等政府の抑壓劇甚なりし爲僧侶は一般人民より輕侮せられ社會の上層に立ちて世人を感化するか如きは夢想たにも及ばず屏息以て無爲に歲月を送りし



釋 王 寺 の 全 景

併合後明治四十四年九月寺刹令實施後は從來羈束せし種種の制限を解除し寺刹の體用を完ふし併せて布教を爲すことを許可せられしより僧侶は殆ど蘇生の思を爲して布教興學共に丹精を凝らし向上の血路を啓くことを得徒弟の教育は勿論財力智力を費して四恩報謝の本分を完ふせむことを覺悟するに至れり今最近數年間に於ける寺刹及僧尼の數を表示すれば左の如し

朝鮮人設立寺刹及僧尼數

年	寺刹數	僧尼		合計數
		僧	尼	
大正元年末	一、二八三	六、八三四	一、〇六六	七、九〇〇
同 二年末	一、二三七	六、七六九	一、〇六六	七、八三五
同 三年末	一、三八五	六、九七二	一、一九八	八、一七〇
同 四年末	一、四〇一	六、九六三	一、二八四	八、二四七
同 五年末	一、四二二	六、九二〇	一、四二〇	八、三四〇

本表寺刹數の増加を見るは新設せしものに非ずして調査漏發見に係るものなり

然り而して内地に於ける佛教各宗派の内朝鮮の布教に最も早く著手せしは眞宗大谷派本願寺にして同派の僧侶が初めて朝鮮に渡航し釜山に上陸せしは文政年間に在り故に維新後明治九年修好條約成立して釜山の一地域が開港場となるや在留内地人僧侶は布教の外に日鮮人の間に介在して意思の疏通を圖り貿易上に貢獻したる事功も亦渺ならず而して釜山に亞き元山、仁川其の他開港場の増加に伴ひて淨土宗曹洞宗眞宗本派本願寺等より逐次教師を派遣して布教を開始し併合後は布教者派遣の數頓に増加し信徒の結集寺院教會所等の設備も年々共に増加するに至れり其の概要を表示すれば左の如し

年		佛教布教狀況		信徒		合計
布教所數	布教師	内地人	朝鮮人	合計		
大正元年末	?	一八九	五八、三四二	二四、六四五	八二、九八七	
同二年末	二〇八	二〇九	六四、七〇一	九、九九七	七四、六九八	
同三年末	二二二	二二四	六九、〇一〇	七、八三二	七六、八四二	

同	同	四年末	二二一	二〇五	八六、〇二〇	七、八五四	九三、八七四
同	同	五年末	二〇九	二八二	一〇四、一六九	八〇、一三九	一八四、三〇八

各宗派及其の所屬教師に於て自動的に施設するものの外内地よりの移住者にして佛教に歸依する者相協力して寺院を設け各祖先來奉する宗旨を標榜せる道場に於て葬祭追福を營まむとするもの年々共に加はり其の狀勢内地と異ならざるに依り統制ある規律の下に立しむるを必要と認め大正四年八月府令第八十二號を以て寺院に關し必要なる規則を定め十月一日より之を施行し内地に於ける社寺取扱方と略其の規矩を同ふるに至れり今最近に於ける寺院創立許可の數を掲ぐれば左の如し

創立許可寺院數

大正六年六月末日

宗派	寺院數	宗派	寺院數	宗派	寺院數
眞宗本願寺派	一四	曹洞宗	一五	眞義眞言宗智山派	二
同大谷派	二	日蓮宗	四	眞言宗高野派	四
淨土宗	一三	法華宗	一	總計	五五

(ハ)基督教 朝鮮に傳來後年を経ること久しと雖公然信教の自由を許されたるは開國五百五年即明治二十九年以後のことなりき爾來朝鮮人は進て外國人居留地に到り宣教師に就て教を聽き道を求むる者日に月に増加し且在來の佛教は布教止息の境遇に在りたるを以て弘教に最も便宜なる地位を占め何時となく居留地外に出てて教線を張り到る處に教會堂講義所集會所の類を設け朝鮮唯一の宗教たる觀を呈するに至り内地人も亦教會等を設け之か傳道に従事する者あり今や山村僻陬の地に至るまで教會堂或は講義所又は集會所を鋪設せざるはなし且外國人宣教師は學校病院等の附設事業を經營して慈惠救濟の事に當り爲に教勢年と共伸張せり今最近數年間の布教狀況を表示すへし

基督教布教狀況

年	基督教布教狀況		信徒數			
	布教所數	布教師	内地人	朝鮮人	外國人	合計
大正元年末	二,二四五	二,六九三	二,〇二七	二七一,四七八	九六	二七三,六〇一
同 二年末	二,一三六	二,八四七	六七八	一七一,九八〇	一五二	一七二,八一〇
同 三年末	二,三〇四	三,一二一	七一六	一八八,六七四	一七九	一八九,五六九

同	同	二、九五四	一、九五二	二、九一九	二六四、二八四	五二六	二六七、七二九
同	四年末	三、一六四	二、三〇五	二、九七六	二七九、五八六	四六〇	二八三、〇三二
同	五年末						

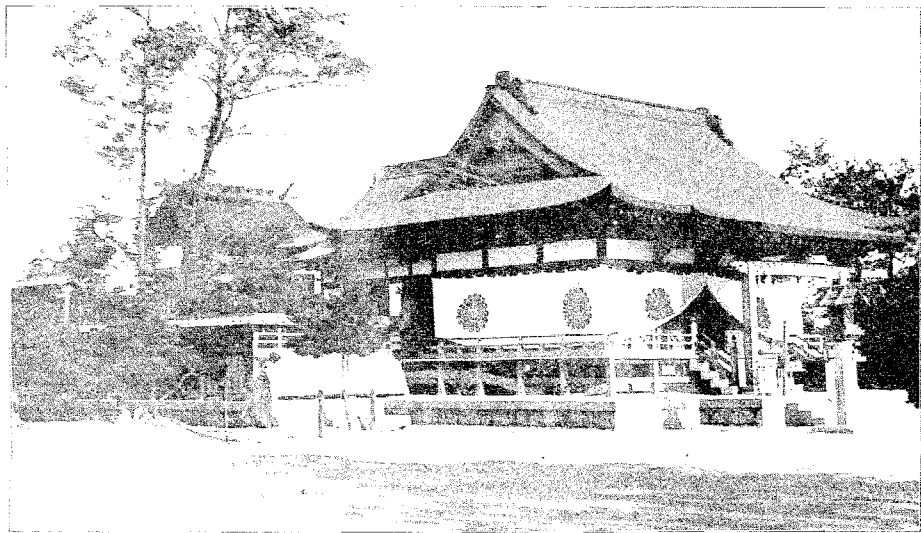
第二節 享 祀

(イ) 陵墓守護 朝鮮に於ては歴代王陵に守護人を置き尊尙地として人民の侵略濫行を制止する法ありしも近年其の保護弛み監守者なきに乗じて放牧、侵墾、採樵等の弊害少なからざるに由り明治四十五年度より陵の大小を所在地の距離等を斟酌して八十五人の守護人を配置し監守を爲さしむることとせり即ち京畿道に於ては開城、長湍、江華及高陽の四郡に高麗王歴代の陵墓あるを以て茲に五十人を配置し又慶尙北道慶州郡には新羅王歴代の陵墓あるを以て三十人を配置し慶尙南道金海郡には駕洛國(國史に任那と書するもの)王陵あるを以て二人を配置し平安南道に於ては平壤府に箕子陵、中和郡に高勾麗王の陵あるを以て之に三人を配置し以て如上の弊害を生ずることなからしむることとせり

(ロ)祭祀 朝鮮に於ては新羅及高麗朝の時より社稷祭を行ひ李氏朝に至ては各道府郡の治廳所在地に各一箇所つゝ社稷壇を設け毎年春秋二季に於て祭祀を行ふを一國の禮典とせり是れ國制の新年祭、新嘗祭に該當するものなり

然るに併合の今日に至りては春季の新年祭、秋季の新嘗祭とも伊勢神宮及官國幣社に幣帛を班ちて祭祀を行はせらるるに由り右以外の場所に祭壇を設け幣帛を班て祭祀を行ふ必要なきものと認め明治四十四年春季祈穀祭の時より之を行はさるこことせり

(ハ)神社 神祇を崇敬するは日本國民特有の風習にして朝鮮各地の開港場を始め凡そ内地人の移住して農商工業を營む集團の地には多くは神社を設け以て表敬の齋場と爲さざるなし故に一方に於ては國風移植の要求を充たさしむる爲又一方に於ては統制ある規律の下に立しむるの必要を認め大正四年八月府令第八十二號を以て神社に關し必要な規則を定め同年十月一日より之を施行し内地に於ける神社取扱方と略其の規矩を同ふするに至れり今大正六年六月末に於ける創立許可の神社數を擧ぐれば左の如し



仁 川 神 社

創立許可神社數

大正六年六月末日

道	神社數	道	神社數	道	神社數
京畿道	四	慶尙北道	一	咸鏡南道	三
忠清南道	二	慶尙南道	五	咸鏡北道	二
全羅北道	三	平安南道	二	總計	二七
全羅南道	三	平安北道	三		

(三) 神祠 内地人居住者少なくて神祠を創立し之を維持するに其の力乏しき地方人民に敬神思想を發現せしむるは朝鮮現下の狀勢に鑑みて最も必要なるを認め大正六年三月府令第二十一號を以て神祠に關する規定を設け同月二十二日より之を施行せしも事創草に屬し未だ完全なる調査を爲すの餘日なく統計に據りて之を表示すること能はざるを遺憾とす

여 백

第十八章 古蹟及遺物

(イ)古蹟調査 朝鮮總督府に於ては明治四十二年以來韓國政府に於て計畫實行中の古建築物並古蹟の調査を繼續し大正二年一旦其の終結を告げ既に「韓紅葉」「朝鮮藝術の研究」「同續編」「古蹟調査略報告」等を發行し之を世に公にし別に「朝鮮古蹟圖譜」と題する圖録を公にせしか朝鮮に於ける古來の遺蹟及遺物は其の數極めて多く從來の調査は其の一斑を闡明したるに過ぎざるのみならず比年交通機關の發達並產業勃興に隨ひ遺蹟及遺物は散逸又は湮滅に歸するの虞あるを以て速に之を調査を遂げ且之を保存の方法を講ずる必要を認め大正五年四月計畫を更新し略五箇年を期して一應の調査を遂ぐる、こゝとし調査事項を先史遺蹟(貝塚、遺物包含層、遺物散布地、竪穴其の)古墳(高麗以前に屬する墳墓の調査並遺物の蒐集、李氏)史蹟(都城、宮殿、城柵、關門、交通路、驛)朝鮮中期以前に屬する主要なる墳墓の形狀の調査(樓臺、祠宇、壇廟、客館、校舍、寺刹、橋梁、陶窯等の遺址、戰跡其の他主要なる史實に關係ある遺蹟の調査並遺物の蒐集)古建築物(歷史上又は工藝上參考となるべき宮殿、城門、等)金石其の他考古物(佛像、塔、燈、碑、石刻、幢竿、石獸、石人、石槽、鐘、香燈、鏡、祭器、樂器、繪畫、冊板、懸額、陶磁器、漆器其の他歷史上又は工藝)

上の参考となすべき金石製作）古文書（歴史其の他考事の資料となすべき古文書の調査並蒐集）等に分ち調査地域を第一年度は漢置郡及高句麗の遺蹟並有史前の遺蹟に付黃海道、平安南道、平安北道、京畿道、忠清北道、第二年度は前年度の殘餘及三韓、伽倻、百濟及有史前の遺蹟に付京畿道、忠清南道、忠清北道、慶尙南道、慶尙北道、全羅南道、全羅北道、第三年度は前年度の殘餘及新羅並有史前の遺蹟に付慶尙南道、慶尙北道、全羅南道、全羅北道、第四年度は前年度の殘餘及穰貊、沃沮、渤海、女真等の遺蹟並有史前の遺蹟に付江原道、咸鏡南道、咸鏡北道、平安南道、平安北道、第五年度は前年度の殘餘及高麗並有史前の遺蹟に付京畿道と各其の範圍を定め李氏朝鮮期に屬する調査は各年度に於ける地域の區分に依り便宜之を行ふこととし各時代の遺蹟にして豫定の地域外に屬するものは其の地方の調査を爲す際便宜之を行ひ臨時急速を要する事情あるとき及博物館陳列品として急速蒐集の必要あるものは豫定地域外と雖特に調査を爲すこととし大正五年九月より調査に着手し六年末迄に第二年度に屬する地域中慶尙南道の一部を剩し他は之を終了せり而して毎年の調査は報告書を印刷して公にすることとし同六年中第一年度の調査報告書を印刷し更に七年度に於て

平安南道に於ける漢置郡及高句麗の遺蹟に關する詳細なる報告書を發行する豫定なり又古蹟調査の計畫並實行の方法、順序等を審議し及古蹟の保存、遺物の蒐集、古蹟、遺物、名勝地等に影響を及ぼすべき施設に關する事項並古文書の調査蒐集に關する事項を審議し及實地の調査に當らしむる爲古蹟調査委員を置き委員長及幹事を任命して隨時委員會を開くことせり、同五年七月古蹟遺物及遺物保存規則を制定し貝塚、石器、骨角器類を包有する土地及堅穴等の先史遺蹟、古墳並都城、宮殿、城柵、關門、交通路、驛站、烽燧、官府、祠宇、壇廟、寺刹、陶窯等の遺址及戰跡其他の史實に關係ある遺蹟年代を経たる塔、碑、鐘、金石佛、幢竿、石燈等にして歴史、工藝其他考古の資料となすべきものの中保存の價値あるものに付名稱、種類、形狀大小、所在地、所有者又は管理者の住所氏名若は名稱、現狀、由來傳説、管理保存の方法等を臺帳に登録し此等の古蹟又は遺物を發見したる者は三日内に届出てしめ臺帳に登録したる物件に付現狀を變更し移轉、修繕、處分等を爲すには總督の許可を受けしむることとし同六年末までに百九十二點の登録を了し同時に主要なる古墳、建物、石塔、石碑等に付順次保存工事を施行せり

(リ)博物館 大正四年五月新に博物館係を置き同年十一月施政五年記念物産共進會の終了と同時に其の會場たりし景福宮の一廓を博物館の區域とし直に開館の準備に着手し十二月一日より一般の觀覽を許し同時に觀覽人心得を告示し觀覽時間は本府の出動時間に準し日曜及祝祭日の翌日を休館日とし覽觀料を金三錢と定めて觀覽券を發賣し同伴の小兒は無料とせり又二種の特別觀覽券(無料)を發行し一種は使用を一回限とし一種は使用期間を一年とせり

開館當時に在りては共進會の際新に建築せし美術館を以て本館とし寺内伯爵の寄附に係る朝鮮古來の書畫、佛像、佛具、食器、服飾品、婦人用具、陶磁器、漆器の外本府に於て購入せし物品並古蹟調査に依り蒐集したる物品及遺失物法に依り國に歸屬したる埋藏物等を陳列し又共進會の陳列館たりし審勢館(各道の産業、教育等の進歩の狀況を示すへき現出圖表統計を陳列す)及鐵道館(鐵道に關する模型、寫眞、地圖、繪畫其の他の參考品を陳列す)を存置し鐵道館には土木及通信其の他交通に關する參考品を併せて陳列し名を交通館と改め思政殿及勤政殿廻廊に石碑、鐵製及石造の佛像、石棺及兵器類を陳列し庭園には石塔、石碑の類を配置し案内圖を發行せしか翌五年

五月久原房之助氏の寄附に係る西域蒐集品（大谷光瑞師の前後四年に互り支那新疆省及甘肅省地方にて蒐集したるもの）を修政殿に陳列し年末に至り其の後購入したる物品、蒐集したる物品並發見埋藏物、寄附品、寄託品を加へ陳列替を爲し七月審勢館を閉鎖し六年末に至り康寧、慶成、秋成の三殿を修理して陳列室を増設し蒐集したる古墳壁畫、同墓寫金石文、並之に關係ある蒐集品、古墳出土品、先住民の遺物對照及地圖、繪畫、寫真等を陳列し陳列品中優秀なるものを撰ひて寫真版を爲し又陳列品目錄を印刷し共に之を發賣せり開館以來の觀覽人一日平均百數十名にして晴雨寒暑に拘らず一日として觀覽者を見さることなし

本府博物館は朝鮮に於ける唯一の官設博物館たる地位に在るを以て其の陳列品は朝鮮を主とし更に進みて支那、印度等の參考品を併せて陳列する方針にて陳列品の種類を概れ制度、風俗、文藝、宗教、美術、工藝其の他歴史の徵憑及參考となるべき物品並先住民に關する遺物とし専ら之が充實完備に力を效せり

여 백

第十九章 教育

第一節 内地人の教育

朝鮮に於ける内地人の教育事業は明治十年釜山に共立學校なる小學程度の學校を設けたるを以て嚆矢と爲す次で元山仁川及京城に小學校を設置し更に日清戰役後に於て漸次居留民の増加に由り隨處の内地人集團地に小學校を設置せりと雖未だ微微として振はさりしか明治三十九年二月統監府の開設と共に居留民の激増を來せりと新に國庫補助金を給し其の施設を容易ならしめたるに由り年々多數の小學校を設置し朝鮮總督府設置常時に於ては百二十校を數ふるに至れり爾來内地人の發展に伴ひ益教育施設の普及を見大正六年九月には三百五十餘校の多きを算するに至れり而して中等教育の施設も亦明治三十九年釜山に高等女學校及商業學校を設置せるを始とし爾來必要の地點に中學校高等女學校及商業專修學校を設置せり

内地人の教育制度は明治四十二年初めて統監府令を以て小學校規則を發布し其の設置廢止は理事官

の認可を要することとし又職員の進退は學校管理者の申請に依り理事官之を任免し以て其の監督權を明にしたるも設立者の資格には何等の制限なく從て其の設立は居留民團立、日本人會立、學校組合立等區區に涉れり次て四十三年三月統監府中學校官制及中學校規則を發布せりと雖高等女學校實業學校等に付ては何等の規程なく唯内地の相當學校に準據して取扱ひ來れり而して總督府設置後は元理事官に屬せし職權を道長官及府尹に移屬せしめたるのみにて教育制度に付ては何等の變革を加へず姑く従前の儘に措き其の教育の方針學校の組織統一並職員の身分等基礎規定を定むる上に於て深く調査研究を重ね明治四十五年三月を以て朝鮮公立小學校同高等女學校同實業專修學校及簡易實業專修學校官制並是等諸學校規則を發布し茲に始て内地人教育制度の確立を見るに至れり

内地人の教育方針は素より内地に於けるさ何等の差異なく教育の本旨修業年限教科編制等大體同一にして内地の相當學校と彼此轉入學の關係に就ても互に聯絡を保てりと雖朝鮮の實狀に鑑み生徒教養上自ら特別の規定を必要とするものあり此等は特に規則に明示せり而して公立學校の設置廢止は朝鮮總督の認可事項にして又其の設立者は學校組合に限ることとせり

内地人教育機關は分ちて小學校、中學校、高等女學校、實業專修學校及簡易實業專修學校の五種とし中學校を除くの外は悉く學校組合立なり小學校は近時内地人の發展と共に著しく進歩普及し大正六年九月には三百五十餘校三萬八千餘の兒童を有するに至り尙年年増設の機運を示せりと雖僻陬地にして未だ小學校の設けなく就學の便を得ざる者の爲に京城、木浦、群山、平壤、義州、會寧、元山等其の他二三の教育會若は學校組合に補助釜を給し兒童學寮を設備せしめ此等の兒童を收容し所在小學校に通學の便を開けり中學校は官立にして京城、平壤、釜山に各一校及大田に京城中學校分教室一校あり京城中學校には臨時小學校教員養成所を附設し中學校卒業者又は之と同等以上の學力を有する者を選拔入學せしめ一箇年間教育を施し以て朝鮮に於ける小學校教員の養成機關とし明治四十五年以來六回百八十四人の卒業者を出せり又女子中等教育機關として京城釜山仁川平壤大邱鎮南浦に公立高等女學校、元山馬山群山木浦に公立實科高等女學校を設置し實業教育には釜山及仁川に公立商業專修學校、平壤鎮南浦及京城仁川に公立簡易商業專修學校あり京城に京城工業專門學校附屬工業傳習所ありて内地人の入學を許す私立學校は其の數甚た少なく僅に數校を數ふるに過ぎずと雖

専門教育を授くるものに東洋協會植民専門學校京城分校あり實業教育を授くるものに財団法人善隣商業學校あり共に相當の成績を挙げ居れり尙専門教育として京城醫學專門學校、京城工業專門學校及水原農林學校専門科に内地人の入學を許す其詳細は次節を參照すへし

公立學校に對しては年年國庫補助金を給し其の施設を資け私立學校に在りても成績良好なる者に對しては特に國庫補助金を給し之を保奨獎勵せり左に各種の統計を掲ぐ

公立小學校一覽

大正六年五月底日

道	學校數	學級數	教員數		學生數		徒數	
			男	女	男	女	男	女
中學校附屬小學校	一	一	一	一	三三	一七	四九	
京畿道	三九	一一三	一九五	六八	二六三	五、八七七	五、三三一	一一、一〇八
忠清北道	一一	二三	一七	一一	二九	三七八	三三四	七一一
忠清南道	二八	六一	四八	二四	七二	一、〇三一	九九〇	二、〇二一
全羅北道	二九	七一	六二	二七	八九	一、三三五	一、一六四	二、四九九
全羅南道	三八	八三	七一	三三	一〇四	一、五八五	一、三八五	二、九七〇
慶尙北道	四四	八四	七三	四一	一一四	一、六四二	一、四一六	三、〇五八

中學校 一覽

大正六年五月末日

本表教員中には兼務者を包含す以下教育に關する諸表皆同し

慶尚南道	六三	一九五	一六七	七四	二四一	四、二〇二	三、七八五	七、九八七
黄海道	一八	三七	二九	一六	四五	五〇九	四九四	一、〇〇三
平安南道	一七	五七	四七	一九	六六	一一六七	一、〇九七	二、二六四
平安北道	一八	三一	三〇	一五	四五	四七六	四六四	九四〇
江原道	一三	一八	一七	一〇	二七	二四七	二四五	四九二
咸鏡南道	一五	四一	四三	一二	五五	九一八	八一七	一、七三五
咸鏡北道	七	二六	二六	七	三三	五五七	五一六	一、〇七三
總計	三四二	九四一	八二六	三五九	一、一八五	一九、九五六	一七、九五五	三七、九一一
大正五年五月末日	三一七	八四八	七二八	三二九	一、〇五七	一八、五八五	一六、五七六	三五、一六一
同 四年五月末日	二九二	七六八	六九三	二九二	九八五	一六、七一一	一四、八一	三一、五二三
同 三年五月末日	二六二	七二二	六二七	二五四	八八一	一五、二七六	一三、三三二	二八、五九八

學 校	設立年月	學級數	職員數	學生數					管 理 者		
				第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年			
京城 中學校	明治四十三年四月	一六	一	四	三三	二〇四	一五九	一三九	一一五	內科 一〇	七三八
同 大田分教室	大正六年四月	一	一	三	三	四九					四九
同校附屬臨時小	明治四十四年四月	一	一			三四					三四
學校教員養成所	大正二年四月	九	一	二	一八	一〇二	九六	七五	六八	四一	三八二
釜山 中學校	大正五年四月	六	一	一	一四	一〇五	九五	七五			二七五
平壤 中學校	大正五年四月	三	三	七	六八	四九四	三五〇	二八九	一八三	內科 一一	一四七八
總 計		三三	三	五八	七	六八	四九四	三五〇	二八九	一八三	一四七八

高等女學校一覽

大正六年五月末日

學 校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數	管 理 者
京城 公立高等女學校	京 城	明治四十一年四月	一四	二六	六六一	京城學校組合
仁川 公立高等女學校	仁 川	大正二年四月	四	一一	一一四	仁川學校組合
大邱 公立高等女學校	大 邱	大正五年四月	三	八	一五一	大邱學校組合

釜山公立高等女學校	釜山	明治三十九年四月	九	一七	三六四	釜山學校組合
平壤公立高等女學校	平壤	大正二年四月	四	五	一六七	平壤學校組合
鎮南浦公立高等女學校	鎮南浦	六年四月	三	八	五九	鎮南浦學校組合
群山公立實科高等女學校	群山	五年四月	二	四	四一	群山學校組合
木浦公立實科高等女學校	木浦	六年五月	一	五	二七	木浦學校組合
馬山公立實科高等女學校	馬山	四年四月	一	三	三三	馬山學校組合
元山公立實科高等女學校	元山	二年十二月	二	四	三一	元山學校組合
總計			四三	九一	一、六四八	

商業專修學校一覽

大正六年五月末日

學 校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數		管 理 者
					本科	豫科	
仁川公立商業專修學校	仁川	明治四十四年四月	三	一二	一〇六	—	仁川學校組合
釜山公立商業專修學校	釜山	大正四年三月	六	一五	一二四	一七四	釜山學校組合
私立善隣商業學校第一部	京城	大正二年十月	四	一六	一五七	六三	財團法人善隣商業學校
合 計			一三	四三	三八七	二三七	

學	校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數	管理
京城	公立簡易商業專修學校	京城	大正五年五月	七	九	一七〇	京城學後組合
仁川	公立簡易商業專修學校	仁川	大正六年六月	二	九	一七〇	仁川學校組合
平壤	公立簡易商業專修學校	平壤	大正六年六月	二	五	五七	平壤學校組合
鎮南浦	公立簡易商業專修學校	鎮南浦	大正六年六月	一	四	三三	鎮南浦學校組合
合	計			一二	二七	二七五	

專門學校		校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數	管理
私立	東洋協會植民專門學校	京城	京城	大正四年十月	一	二四	一八	東洋協會

各種認可學校一覽

大正六年五月末日

學 校	所在地	設 立 年 月	職 員 數	生 徒 數	管 理 者
私立善隣商業學校夜學部	京 城	明治四十一年四月	一三	一七六	財團法人善隣商業學校
私立京城女子技藝學校	同	同 四十三年四月	一一	一七九	井 上 要 二
私立京城夜學校	同	同	五	七〇	同
私立釜山實習女學校	釜 山	大正四年十二月	六	八八	三 島 チカエ
總 計			三五	五一三	

第二節 朝鮮人の教育

從來朝鮮に於ける教育機關は京城に成均館及東、西、南、中の四學あり各府郡に郷校あり各面洞に書堂あり書堂より郷校四學に進み更に成均館に入りて最高の學問を修むるを順序させり此等の諸機關は唯儒學を授くるに止り他に日用の知識を授けず明治二十七年(開國五百三年)の交科擧の制廢止せらるると共に四學自ら止み郷校亦文廟の享祀に舊態を存するのみにして子弟の教育を行はず明治二十八年當時の韓國政府は庶政の改善を行ふと共に教育の制度を立て小學校、師範學校、中學校、

外國語學校其の他の學校を設立したりと雖悉く日本の制度を模倣したるものにして當時の時勢民度に適せず又其の運用宜しきを得ざる等の理由に因り效果の著しきものなかりき然るに明治三十七年日韓協約の結果所謂顧問政治の開始せらるるや當時の學部亦内地人參與官を置き亞て統監府設置せられ其の指導の下に更に教育の刷新に従事し法令の改廢を行ひ普通學校、高等學校、外國語學校、高等女學校及實業學校等を設置し内地人教員を配置し教科書を編纂し大に舊態を改めたり而して明治四十三年韓國併合に際し諸般官制の改革ありたりと雖獨り教育の制度は事根本の問題に屬するを以て暫らく舊制を存續し先づ時世の變遷に伴ふ當然の改廢を加へ新政に戻る所なからしめ爾來併合後に於ける時世の趨向、民度の實際に鑑み周到なる調査と研究とを重ねて新制度を樹て明治四十四年八月朝鮮教育令を發布し同十月各學校官制及諸規則を發布し十一月之を實施したり

朝鮮教育令は朝鮮人教育に關する主義綱領を明にしたり即ち朝鮮人の教育は教育に關する勅諭の御趣旨に基き忠實なる國民を育成するを本義とし時勢民度に適する教育を施し以て徳性の涵養と國語の普及に力を致し日常生活に必須なる知識技能を授け學校の系統及程度を簡約にして時務に遠さか



黃州公立普通學校手工課杞柳細工

らしめざることは力めたり

普通教育の機關としては普通學校、高等普通學校及女子高等普通學校を置き實業教育の機關としては農業學校、商業學校、工業學校及簡易實業學校を又専門教育の機關としては専門學校を設くることと爲せり而して普通學校教員養成の機關に至りては師範學校を特設せず官立高等普通學校に師範科を設くることとせり

新制實施後に於て普通教育機關は著しく普及するに至り公立普通學校の如き併合當時一百校に過ぎざりしもの今や四百四十餘校約八萬三千の生徒を有するに至れり而して之を維持に關しては併合の際下賜せられたる臨時恩賜金利子を基礎とし國庫及地方費の補助、郷校財産收入、基本財産收入、授業料等を合して之に充て尙必要あるときは設立區域内の朝鮮人に負擔金を賦課することを得せしむ官立高等普通學校は京城、平壤、大邱に各一校同女子高等普通學校は京城及平壤に各一校あり大邱高等普通學校及平壤女子高等普通學校を除くの外は何れも修業年限一箇年の師範科を置けり又京城高等普通學校には臨時教員養成所を附設し従來朝鮮人教員を養成し來りしも大正二年度より之を

廢し同年四月より内地人にして普通學校教員たるべきものを養成することとし中學校卒業者又は之と同等以上の學力を有するものを入學せしめ一箇年間教育を施すこととせるか大正三年以來四回百三十一名の卒業生を出せり

實業教育機關は大正六年十月現在に於て公立農業學校十五校、同商業學校二校、同商工學校一校にして地方費の經營に屬し年年國庫より補助金を下付せり又簡易卑近の實業教育を授くる爲簡易農業學校五十九校、同水産學校二校、同商業學校七校、同工業學校七校を有し悉く公立普通學校に附設せり

専門教育に就ては其の規定存して其の實なかりしか近來普通教育の普及と同時に高等専門學校の必要を感じて大正五年四月舊來の京城專修學校、朝鮮總督府醫院附屬醫學講習所、朝鮮總督府中央試驗所附設工業傳習所の組織を變更し新に京城專修學校、京城醫學專門學校、京城工業專門學校を設置し京城專修學校を除くの外は内鮮人共同教育を施し入學資格は朝鮮人に在りては高等普通學校卒業又は之と同等以上、内地人に在りては中學校卒業又は之と同等以上の學力を有する者とせり京城

專修學校は修業年限三年にして主として法律經濟の學科を授け現在生徒百三十八名を有し京城醫學專門學校は修業年限四年にして内地人五十名朝鮮人二百三名を收容せり京城工業專門學校は修業年限三年にして窯業科、染織科、土木科、應用化學科、建築科、鑛山科の六學科とし現在生徒内地人五十五名朝鮮人五十八名あり尙本校には附屬工業傳習所を置き修業年限三年にして木工科、金工科、織物科、化學製品科、陶器科の五科とし主として徒弟の養成を目的とし現在生徒内地人八十三名、朝鮮人八十六名を收容せり

右の外大正六年四月より水原農林學校に専門科を設け朝鮮人の外幾分の内地人も收容することとし修業年限三年にして入學資格は朝鮮人に在りては高等普通學校卒業者又は之と同等以上内地人に在りては中學校卒業者又は之と同等以上の學力を有する者とす現在朝鮮人十五名内地人七名を收容せり本校は明治三十九年四月の創立に係り修業年限三年の本科の外に速成科（修業年限一年當分募集せず）を置き農林業に必要な知識技能を授くること共に徳性の涵養に努め來りしか本年四月専門科施設と同時に本科生の募集を廢止せり現在本科生徒五十名を收容し創立以來本科十回二百八十一

名速成科三回（林業科二回獸醫科一回）此の人員三十九名（林業科十九名獸醫科二十名）の卒業者を出せり

私立學校は全道に亙り現在九百八校を數へ内三百六十餘校は外國宣教師の管理に係り學科中に宗教の一科を課す私立學校は一時濫設の爲併合當時に在りては二千餘校を數へたりしも漸次整理の結果著しく其の數を減し且之が指導監督に力めたるに由り其の教科課程を公立學校に準するもの多く一時の状態に比し頗る面目を改めたりと雖尙一層之が改善整理の實を擧げしめむか爲大正四年三月私立學校規則を改正し私立學校にして普通教育、實業教育又は専門教育を施さむとするものは當該學校に關する規定に準據して各其の教科課程を定めしむること爲したる結果教科目中宗教を課し又は之が儀式を行ふことを得ざらしめ且教員の資格をも定めたり然れども現在私立學校中には遽に改正規則に準據し難きものあるべきを以て相當の期間之が適用を猶豫せり之が實施後は此の種の學校も進んで改正規則に準據して教科課程を整理改善し又は宗教科目を廢し尙進んで其の組織を變行して普通學校、高等普通學校等と爲さむとするの傾向を示せり

公立普通學校一覽

大正六年五月末日

道	學校數	學級數	教員數		計	學生數		
			內地人	朝鮮人		男	女	
京畿道	六〇	二五五	九〇	二二九	三一九	一〇、九七〇	一、四七六	一二、四四六
忠清北道	一九	六三	二四	五八	八二	二、五九二	二六一	二、八五三
忠清南道	四三	一五〇	五六	一三四	一九〇	六、一一六	六一八	六、七三四
全羅北道	三五	一三一	六〇	一一六	一七六	五、七〇一	五九五	六、二九六
全羅南道	三四	一三〇	四五	一一五	一六〇	五、三一九	四六三	五、七八二
慶尙北道	四七	一四四	五六	一三〇	一八六	五、五九九	三六七	五、九六六
慶尙南道	三六	一三四	五六	一一七	一七三	五、六五九	一、〇二九	六、六八八
黃海道	二三	八二	二九	八〇	一〇九	三、三一四	四〇三	三、七一一
平安南道	四一	一九五	五八	一八〇	二三八	八、四一三	一、三六〇	九、七七三
平安北道	三五	一五四	五五	一四一	一九六	七、三一五	七六〇	八、〇七五
江原道	二八	一一一	三八	九八	一三六	四、九一一	六九七	五、六〇八
咸鏡南道	二二	八八	三四	七八	一二二	三、六九五	二九五	三、九九〇
咸鏡北道	一八	七一	三三	六二	九五	三、一六四	七五三	三、九一七

道	學校數	學級數	教員數		生徒數			
			內地人	朝鮮人	男	女		
總計	四四一	一、七〇八	六三四	一、五三八	二、一七二	七二、七六八	九、〇七七	八一、八四五
大正五年五月末日	四二一	一、五六〇	五九六	一、四二五	二、〇二一	六四、六八六	七、一六八	七一、八五四
同 四年五月末日	三九七	一、三九九	五四二	一、三一四	一、八五六	五五、九一七	五、八一六	六一、七三三
同 三年五月末日	三八一	一、三三三	四八七	一、二八〇	一、七六七	五一、九五七	四、九六八	五六、九二五

學 校		教 員		生 徒	
學校數	學級數	內地人	朝鮮人	男	女
附屬普通學校	二	一〇	五	三五三	一六一
總計	一三	一〇	五	三五三	一六一

京城高等普通學校及附屬普通學校
京城女子高等普通學校

大正六年五月末日

高等普通學校及女子高等普通學校一覽

立	官		所在地	開校年月	學級數	職員數 <small>內地人 朝鮮人</small>	學生數	徒
	科	科						
京城高等普通學校	本	師範科	京城	明治三十九年九月	一八	三一	七六四	一
平壤高等普通學校	本	師範科	平壤	大正二年四月	一六	六	七二八	一
附設臨時教員養成所	本	師範科	平壤	明治三十九年九月	一	二	一一	一
平壤高等普通學校	本	師範科	平壤	大正二年四月	一	二	一一	一
大邱高等普通學校	本	師範科	大邱	大正三年三月	一	二	一一	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	明治四十二年四月	九	五	四〇六	一
大邱高等普通學校	本	師範科	大邱	同	四	二	二二	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	七	四	一一	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	明治四十一年四月	三	一	二〇八	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	三	一	一四五	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	三	一	二八	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	一	一	三五	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	三	一	二〇二	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	六	二	二〇二	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	三	一	二二七	一
京城女子高等普通學校	本	師範科	京城	同	三	一	二二七	一

私立		官立		學級數	職員數	學生數	
合計	技藝科	合計	技藝科			男	女
私立養正高等普通學校	同	同	同	四	七	一九三	一九三
私立培材高等普通學校	同	同	同	七	三	一〇四	三七一
私立松都高等普通學校	同	同	同	四	二	一四〇	一四〇
私立東萊高等普通學校	同	同	同	四	三	八四	八四
私立咸興高等普通學校	同	同	同	四	四	二〇〇	二〇〇
私立淑明女子學校	同	同	同	五	二	一六	五三
本	同	同	同	三	一	四一	四一
技藝科	同	同	同	二	一	一二	一二
私立進明女子學校	同	同	同	四	八	一三	六五
高等普通學	同	同	同	四	五	一三	六五
合計	三	四	四	一	一九	一〇〇	一七九
所在地	京城	京城	京城	京城	京城	京城	京城
開校年月	大正二年十月	同	同	同	同	同	同

立 公	道	科 別	學校數	學級數	職 員		計 數	生徒數
					內地人	朝鮮人		
京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尙北道			
商業	農業	商業	商業	商業	商業			
一	一	一	二	二	三			
三	二	四	二	二	三			
六	三	一	五	七	六			
一	二	三	一	一	二			
七	五	一	四	六	八			
一	二	三	二	二	三			
二	七	九	三	九	一			
三	九	一	三	一	七			

農業及商業學校一覽

大正六年五月末日

總 計	立 本	
	技 藝	科 科
計	三	三
七六一二〇	三九	一
六一八一	四二	一
二、三六九	八二	一
五二八	九八八	一
二、八九七	一一八	三
	三	六二
	一、〇六	六二

簡易實業學校一覽

大正六年五月末日

立私	立							公		道	
	京畿道	合	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	平	黃海道	慶尙南道		計
商業	商業	商業	農業	農業	農業	工業	農業	商業	商業	科別	
學校數	一	二	一	二	二	一	二	一	一	學校數	
學級數	三	五	六	三	四	二	四	五	四	學級數	
職 員 數	一	四	五	二	六	八	七	四	七	五	內地人
	二	二	三	一	七	二	一	二	二	二	朝鮮人
生徒數	一六	七	一五	八五	九	五	九	七	九	九	計
	一五二	一五三	三二五	一、四三〇	一九三	八四	一九〇	一五三	一八〇	八二	生徒數

		立 公							道	科 別	學校數	學級數	內地人	朝鮮人	員 數	生徒數	
		黃 慶 慶 全 全 忠 忠 京	海 尚 尚 羅 羅 清 清 畿	道 南 北 南 北 南 北 道	道 道 道 道 道 道 道												
第十九章 教育	農	農	農	水	商	農	工	水	農	同	農	工	商	農			
	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業			
	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業			
		一	二	三	一	三	一	一	四	一	一	七	六	一	二	四	二〇
		三	二	三	一	四	一	二	五	三	二	七	六	一	三	五	三二
		三	三	六	二	六	二	二	七	四	三	一	四	一	二	五	三〇
		三	二	三	一	三	一	一	四	一	一	二	七	二	五	五	三一
		六	五	九	三	九	三	三	一	五	四	二	六	一	八	四	六一
		二九	五七	一〇〇	一四	五五	二三	八〇	一五四	二〇	三〇	一六二	一三一	二七	五七	一七三	四〇二

五二一

立私	立						公						道
	合		咸鏡北道		咸鏡南道		江原道		平安北道		平安南道		
平安北道	計												
工業	計		工業	商業	水產業	農業	農業	商業	農業	工業	商業	農業	科別
二	七四	七	七	二	五八	五	一	三	一	三	一	一	學校數
三	八九	一三	一〇	三	六三	六	一	三	一	三	二	二	學級數
二	一四六	一八	二二	五	一〇一	九	二	六	二	六	二	六	內地人職員數
一	一〇〇	一三	八	二	七七	六	一	三	一	三	三	一	朝鮮人職員數
三	二四六	三一	三〇	七	一七八	一五	三	九	二	九	五	七	計數
六五	二〇二九	一四五	三四一	五三	一、四九〇	二二二	三七	九七	七三	二五	五一	二〇	生徒數

官立專門學校一覽

大正六年五月末日

學 校	所在地	開校年月	學級數		職員數		生徒數		
			內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人	
京城專修學校	京城	明治四十四年十一月	三	一	一	一	一三八	一三八	
京城醫學專門學校	同	大正五年四月	四	四	一	一	二〇三	二五三	
京城工業專門學校	同	同	一八	三六	四	一三八	一四四	二八二	
本 附屬工業傳習所			一〇				五八	一一三	
水原農林學校	水原	明治三十九年四月	三	一五	二	一	八六	一六九	
本 科			二				六五	七二	
專 門 科			一				五〇	五〇	
總 計			二八	一〇九	八	一一七	一九五	五五〇	七四五

第三節 留學生

從來官費內地留學生は試験の上其の合格者を派遣したりしも明治四十四年六月舊留學生規程を改正

し新に朝鮮總督府留學生規程を發布し官費留學生は特に必要なる學術技藝を履修せしむる爲朝鮮總督の指定する官立若は公立の學校、傳習所又は講習所の卒業者にして校長若は所長の推薦に係る優秀者を抜き總督之を命すること爲せり官費留學を命せられたる者は大正元年に二十一名同二年に十三名同三年に十九名同四年に四名同五年に十三名同六年に十名にして現に留學せるもの三十三名あり私費留學生は其の數五百餘名を數へ東京を主とし各地に散在す此の規程に依れば私費を以て留學せむとするものは地方長官を經由して總督に届出つることとなれり而して留學生に對しては特に留學生監督を東京に置き寄宿舎を設置し彼等をして専念學事に勉勵せしむることを期せり今現在留學生の學科別を表示すれば左の如し

官費留學生學科別

大正六年九月末日

種別	工業	商業	農業	教育	醫學	その他	合計
從來在學者	三	一	四	三	七	三	二三
大正六年留學者	二	一	一	二	四	一	一〇
總計	五	四	五	五	一一	三	三三

第二十章 衛生

往時朝鮮は一般に衛生思想乏しく一旦疾病に罹るも醫療に頼らず大抵分つ巫女、賣卜者の言を徴するの風習あり隨て其の迷信を利用し衣食を事とする輩のみ多く學識技能を有する醫師の如きは實に寥寥晨星を數ふるの狀況なりき又社會的衛生施設甚だ不備なる爲飲料水の如きも極めて不潔にして常に消化器系傳染病流行の原因を爲し肺「ヂストマ」の如き亦各地に蔓延して殆ど底止する所なかりき是を以て新政施行に際しては深く此の點に留意し總督府醫院の外各道に十九の慈善醫院を設置して博く救療を開始し又警察醫を各地に配置して傍ら一般患者の診療に従事せしめ大正三年四月よりは新に公醫制度を布きて醫療機關不備の地には公醫を配置し警察醫と相待て一般に醫藥の便を興へ飲料水改良方法としては京城、仁川、釜山、木浦、群山、平壤、鎮南浦、元山、羅南、會寧、鎮海、義州等の市街地に水道を敷設し又は敷設せしめ一面國費を各道に補助して共同井戸の掘鑿を獎勵し傳染病及獸疫の豫防に付ては毎年多額の國費を支出し機宜の措置を爲し除穢事業の如き亦常に厲行

を怠らざる爲何れも良好の成績を収めつつあり左に其の梗概を記述すへし

第一節 醫療機關

舊韓國政府は光武四年(明治三十三年)醫師に關し醫師規則を發布したりしと雖民間に遵由せられたるの實跡なく隨て朝鮮人たる醫師は全く自由開業の状態にして唯元韓國官立學校及大韓醫院附屬醫學科等を卒業したる者又は私立醫學校に於て修業し如上の出身者と同等以上の學力ありと認めたる者に對し其の開業を認許したりと雖此の認許は單に其の學識の保證に過ぎず而して業務上の取締に關しては舊韓國政府及帝國領事館又は理事廳に於て發布したるもの共に具體的の規定を缺き僅に警察官憲に於て臨機之か取締を爲したるに過ぎざりき此の故に醫師は其の業務上自然放縱疎漫に流れ其の弊害に堪へざるの狀況なりしを以て大正二年十一月醫師規則、齒科醫師規則、醫生規則を發布し何れも大正三年一月一日より施行せり爲に從來の積弊を一洗するに至れり

第二十章 衛生

五二七

道	官立	私立	計	內地人	朝鮮人	外國人	計	醫生	限地 醫業	齒科 醫師	藥劑 師	產婆	看 婦
京畿道	二	一三一	一三三	一二九	六三	六	一九八	六四九	七	一七	二九	一八六	二〇二
忠清北道	一	一	二	一六	二	二	二〇	二〇九	四		一	一〇	八
忠清南道	一	三	四	二九	四	一	三四	二一三	一			二八	一八
全羅北道	一	七	八	三七	三	二	四二	二八一	四		四	三一	四
全羅南道	三	五	八	三五	六	二	四三	三〇四	一三		二	三三	一五
慶尙北道	二	〇	二	四一	四	二	四七	五六五	八		三	四八	三六
慶尙南道	一	三一	三二	八五	八	三	九六	七三〇	一七	七	四	七二	九一
黃海道	一	九	一〇	二三	二	四	五一	一八六	六	一	二	三一	九
平安南道	一	三二	三三	三四	四	四	七九	五二八	五	二	六	二七	三三
平安北道	二	九	一一	二七	二	二	五三	五五〇	五		二	二六	一六
江原道	二	一	三	二三	四	二	二九	二二六	二		一	八	一一
咸鏡南道	一	九	一〇	三五	一	一	五〇	八八〇	五	二	二	二五	一一
咸鏡北道	二	一四	一六	二六	五	一	三二	三〇五	六	二		一五	一
總計	二〇	二六二	二八二	五四〇	二〇二	三三	七七四	五、六二六	八一	三五	五六	五四〇	四六五
大正四年末	一九	二七〇	二八九	六二七	二〇九	三六	八七二	五、八〇四	八一	四〇	六三	五一七	二一五

道	醫(病)院		醫		師		醫生		限地		齒科		藥劑		產婆		看護婦	
	官立	公私立	計	内地人	朝鮮人	外國人	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
大正三年末	一九	一四五	一六四	六四九	一四四	三三	八二六	五、八二七	九一	二〇	五三	三九七	一八六	一九	一四五	一六四	六四九	一四四
同 二年末	一九	二一五	二三四	三九五	一八三	三八	六一六	一、四六二	二九	二一	五四	三三八	四四五	一九	二一五	二三四	三九五	一八三
同 元年末	一九	一二六	一四五	三五三	七二	三二	四五七	一、六五三	四二	一五	四一	二七八	四四二	一九	一二六	一四五	三五三	七二

醫師、齒科醫、藥劑師、產婆及看護婦にして官衙奉職の者は本表中之を掲記せず

年	傳染病院		隔離病舎		合計	
	官立	公立	官立	私立	計	計
大正元年末	—	—	—	—	—	—
同 二年末	—	—	—	—	—	—
同 三年末	—	—	—	—	—	—
同 四年末	—	—	—	—	—	—

傳染病院及隔離病舎

て公醫を配置し以て民間診療を主とし兼て各官廳共通的に衛生事務に従事せしむることとし大正二年十一月公醫規則を發布し同三年四月より之を施行せり公醫は公務に服すること同時に一面に於ては開業の責任を負はしめ以て醫療機關の缺陷を補足せしめむる爲山間僻陬中比較的人口多く而かも醫療機關絶無の地に配置し其の手當は開業に伴ふ收入を豫想し人口の多寡等を斟酌して月額三十圓以上九十圓以下を給することとせり

公醫の配置を爲したる場所の外尙警察醫務の繁劇なる地に於ける警察署、憲兵分隊、同分遣所等には専務囑託警察醫を配屬するの必要を認め從來の囑託警察醫を其の儘繼續し又は新に配屬を行へり公醫及囑託警察醫の定數左の如し

		公醫及囑託警察醫				大正六年九月末日	
道	公醫	囑託	合計	道	公醫	囑託	合計
		警察醫				警察醫	
京畿道	一五	九	二四	忠清南道	一一	二	一三
忠清北道	一〇	—	一〇	全羅北道	一五	—	一五

道	公醫	警囑 察醫託	合計	道	公醫	警囑 察醫託	合計
全羅南道	一七	—	一七	平安北道	一六	—	一六
慶尙北道	二二	—	二二	江原道	二二	—	二二
慶尙南道	一五	四	一九	咸鏡南道	一六	—	一七
黃海道	一七	—	一七	咸鏡北道	—	—	—
平安南道	一四	—	一五	總計	二〇〇	一九	二一九

本表の外囑託檢疫醫十四人あり

(口)醫生 は大正二年十一月發布の醫生規則に依り朝鮮人にして本規則發布前二年以上醫業を爲したる者及醫生に就き三年以上醫業を修習したる者に五年以内の期限を附し免許せられたる者にして朝鮮全土に分布せられ朝鮮人は主として之に依り醫業を加ふるものなれば醫療機關の一たるを失はず故に醫生に對しては或程度迄醫術教養の必要を認め教育規程を發布し公醫之か教師と爲り目下教養獎勵中に在り

(ハ)産婆 従來朝鮮人にして産婆に就業する者なきのみならず一般人は分娩に際し他人の介補するを嫌忌せしか近時産婆の技能を認め之が效用を感じるに隨ひ稍歡迎するに至れり而して内地人の産婆は内地人の増殖に伴ひ漸次其の數を加へつつあれども其の多くは都會の地に開業し偏鄙の地に至つては殆ど其の影を見ず爲に産婦は出産期に際して他所に移居し又は内地に歸還する者多く移住者の不便尠からざりしを以て大正二年冬期より各慈惠醫院に於ては助産婦及速成助産婦の養成を肇め又大正三年七月産婆試験規則を發布して各道に於て産婆試験を行ふこと爲し以て産婆の増加を圖れり

(ニ)看護婦 醫師病院の増加に伴ひ看護婦の需要亦漸次増加し來り各地に於て看護婦の業務に衣食する者尠からず然るに従來看護婦の資格及其の業務範圍等に關する規定を缺如せしを以て中には看護に關する學術技能に習熟せざる者ありて衛生上危害を醸すの虞あり故に規定を設けて資格を限定し且業務上の取締を爲すの必要を認め大正三年十月府令を以て看護婦規則を發布し同年十一月一日より施行し看護婦は總て免許を受けしむることとし尙試験の制を設け各道に於て試験を舉

行することとし其の免許は道警務部長に於て之を行へり

(ホ)種痘認許員 種痘普及の爲醫師の缺乏を補はむか爲明治三十二年各道に種痘認許員を設置し其の素養ある朝鮮人男女共に之を認許せり内地人に對しては特に婦人にのみ之を許せるか是れ朝鮮婦人は男子に近接するを忌むの風習あるか爲なり

種痘認許員

年	内地人	朝鮮人	合計	年	内地人	朝鮮人	合計
大正元年末	六六	一一〇一	一一六七	大正四年末	四八	九六六	一、〇一四
同 二年末	六八	一一一七	一一八五	同 五年末	五一	八九七	九四八
同 三年末	七一	一一七七	一二四八	同六年六月末日	五一	八九七	九四八

第二節 藥品取締

(イ)藥品 藥品に關しては從來何等の取締方法なく單に阿片煙の輸入、製造販賣に關して刑法及刑
法大全の規定に依り之を取締を爲せるのみなりしか明治四十五年三月制令を以て藥品及藥品營業

取締令を發布し尙朝鮮總督府令を以て之か施行規則を設け藥劑師、製藥者、藥種商、賣藥業者等の各業務範圍を限定し毒藥、劇藥の販賣、授與に嚴重なる制限を設け賣藥検査の法を定め且大正二年七月朝鮮總督府令を以て藥品巡視規則を發布し之に依り藥品巡視を施行し漸次藥品及賣藥の精良を期し併せて一般藥業者に對する取締を厲行しつつあり

(ロ)藥劑師 内地に於て其の資格を享有せる者及前記制令の規定に依り朝鮮總督府の免許を受けたる者のみを認め其の届出に依り開業を許せり尙大正五年四月總督府令を以て藥劑師試験規則を發布し同年十月第一回の試験を實施せしか受験者は内地人十五名、朝鮮人三名にして合格者は内地人六名に止まれり

第二節 飲食物取締

飲食物に關する取締は從來極めて不完全にして衛生上の危害を防制するに足らず殊に併合後に於ては社會の趨勢急變し飲食物其の他物品の製造及輸移入等日に増加し之と同時に不良物品又續續市上に現はるるに至り曩に市上賣く處の清酒中に「フォルムアルデヒド」又は多量の「ザリチール酸」

を含有し飲食用器具其の他飲食物中に不良有害のものを発見したるに因り一層之を取締を爲すの必要を認め牛乳營業取締規則、衛生上有害飲食物及有害物品取締規則、清涼飲料水及氷雪營業取締規則、「メチールアルコホル（木精）取締規則等を發布して取締を履行し尙飲食物及飲食用器具並藥品等にして化學的試験を要するものは從來各道より警務總監部衛生課衛生試験室に送付せしか遠隔の地に於ては處理上敏活を缺き且衛生試験を要すへき營業願届等の處分に多大の不便あるを以て大正二年度に於て慶尙北道、全羅南道、平安南道、咸鏡南道の各警務部に大正四年度に於て慶尙南道、咸鏡北道、江原道、黃海道の各警務部に衛生試験室を附置し藥劑師たる技術員を配屬し該道及最寄各警務部管内に於ける試験を施行しつつあり而して未設の忠清北道、忠清南道、平安北道、京畿道の内京畿道に屬する試験物は警務總監部衛生試験室に於て試験を施行し平安北道は新義州海港檢疫所内細菌試験室内に設備し實施しつつあり尙忠清北道、忠清南道及全羅北道に對しては漸次設置の計畫なり

第四節 痘苗製造

痘苗製造は舊韓國政府の創業に係り幾多の沿革を経て現時警務總監部衛生課に屬す價格は一具（五人分）五錢を以て定價す尤も朝鮮總督府醫院、慈惠醫院及警察官署に於て施行する種痘用のものは無料とし藥劑師、藥種商の請求に依り賣下くるものは二割減す間島は地域相接し同地に於ける種痘の疎密は直に朝鮮に影響すべきを以て同地公種痘に對しては特に無料配布を爲しつつあり大正元年に於ける痘苗配布具數は七十二萬三千七百三具にして逐年種痘の普及に因り痘瘡患者の減退に伴ひ其の需用亦漸次減少し大正五年に於ては三十三萬四千百六十六具に低下せり

第五節 屠場及屠肉

屠場の取締に關しては曩に舊韓國政府の發布に係る屠獸規則及各理事廳の發布に係る規定に依り尙各道警務部に於ては適宜其の施行細則を制定し施行しつつあり現今朝鮮に於ける屠場は京城に於ては公私設の屠場各二箇所あり共に府の管理に屬せり此の二箇所は其の構造設備等稍模範的なりと雖他の各道に於ては小規模のもの多し尤も近時一般に公設屠場を獎勵し從來個人の經營に係りしものも衛生組合、學校組合等の經營に移さしめつつありしが面制の施行と共に漸次面に於て經營せしむ

るの方針を執りつつあり屠畜検査獸醫は經費の關係上未だ周密配屬の域に達せずと雖漸を以て歩武を進めつつあり

朝鮮人は固より穀食を主とすれども副食には好て獸肉を用ふ殊に獸肉は慶弔時に於て缺くへからざる必要物たるを以て屠畜は各地方共に甚だ熾なり今最近五箇年間に於ける屠畜頭數を表示すれば左の如し

年	屠場數	屠畜頭數				
		牛	馬	豚	羊	犬
大正元年	一、五三六	二二六、〇九四	二一六	二六四、三〇七	二、一〇四	七一、六一二
同二年	一、六八九	二二〇、七一三	三五八	三三五、二七四	二、三〇〇	九九、八八六
同三年	一、八二九	二七一、一七八	三三五	三六六、六九九	二、一一一	一一、八五〇
同四年	一、九三六	四〇〇、六六〇	二三七	三四一、六〇四	二、三三二	一〇八、七七八
同五年	一、八六四	三〇九、四六七	三八八	三七一、二五三	二、五七六	一四九、八五四

本表屠場は公設及私設の總數にして各年末現在なり

第六節 牛乳搾取所及牛乳取締

朝鮮人は從來牛乳を用うるこゝ少く唯内地人又は外國人間に於て需用せらるるのみなりしを以て朝鮮人側には之に關し何等法規の存するものなかりしか世態の變遷に伴ひ漸次營業者の増加を來すこゝ同時に營業上種種弊害の依て生ずるものあり乃ち明治四十四年當該規則を發布して之を取締を爲すこととせり

乳牛は主として外國種又は雜種なれども朝鮮種も亦少からず朝鮮種は乳量に於て他に劣れり雖結核に對しては殆ど免疫の素質を有せるものの如し之に反し外國種又は雜種には結核に罹れるもの甚た多く而かも是等の畜牛は主として内地より移入せらるるもの多し之が豫防上大正二年八月以來釜山に於て輸移入乳牛の検査を行ひつつあり

牛乳搾取高			
年	搾乳場數	搾乳乳牛數	搾乳數量一價額
大正元年	六五	五五三三〇〇八	一四八、二九七
		石	円
年	搾乳場數	搾乳乳牛數	搾乳數量一價額
大正二年	六三	四〇八三、三三六	一五四、九六〇
		石	円

年	搾乳		乳牛數		搾乳 數量	乳 價	乳 高	額
	場數	數量	數量	數量				
大正三年	六八	四五六三、一八一	一五八、四八六	石	四			
同四年	六九	四六八三、〇三六	一七三、八三七	石	四			
大正五年	六三	三八七、二九三五	一七九、〇三五	石	四			

本表搾乳場數及乳牛數は各年末現在數なり

第七節 檢 査

由來朝鮮に於ては蝸甫と稱する公娼至る處に散在するも曾て之に對して檢査を行ひたることなく唯京城其の他の大都市に於て新政施行以來漸く之が施行を見たるのみなりしか一面に於て内地人の増殖に伴ひ内地人賣笑婦の數も歳々共に増加し之に對しても取締の必要あるを以て大正五年三月三十一日朝鮮總督府警務總監部令を以て藝妓酌婦藝妓置屋營業取締規則及貸座敷娼妓取締規則を發布して内鮮人及外國人共各其の業體に依り區別を確立し娼妓に對しては土地の狀況に應じ定期健康診斷を行ひ藝妓酌婦に對しては實際の必要に應じ健康書の提出を命ずることとし一般的の統一を爲し以

て花柳病の豫防を期しつつあり

健康診断所は京城府内に於て内地人娼妓に對しては五日毎に又朝鮮人娼妓に對しては一週一回之を施行す。雖地方に於ける健康診断期日は一週一回又は旬日一回等一樣ならず而して其の事務は健康診断醫若は警察醫か警察官署の指揮に依り従事しつつあり健康診断場所は特設のものもあれども多くは慈惠醫院又は警察醫の自宅等に於て之を行ふ其の特設箇所六十五特設なき場所百六十九箇所なり健康診断の結果治療を要すを認めたる者の治療場所は特設に係るもの京城府に於て四箇所あり他の地方に於ても慈惠醫院、私立病院等に於てする者あるも多くは自宅治療なり、其の特設治療所六十設置なき場所百七十四箇所なり

大正五年十二月末に於ける檢査受檢賣笑婦は全道を通し内地人三千五百九十三人、朝鮮人一千百八十六人、外國人三人計四千七百八十二人なり

密賣淫犯罪者及密賣淫の常習者に對する強制治療は從來之を行ひたることなかりしが大正三年七月行政執行令發布の結果之を厲行しつつあり

第八節 汚物掃除

京城府内に於ける各戸塵芥除去、屎尿の汲取、公共便所の設置、道路の掃除、撒水及除雪、溝渠及下水の浚渫等の除穢事業は明治四十一年日韓協約の下に成れる漢城衛生會設立以來同會に於て行ひ來りしか大正三年四月一日府制實施と共に京城府の經營に移屬するに至りたるも警察官憲は依然之が實行の援助を爲すを以て其の事績は年と共に擧かり不潔を以て有名なりし京城も漸次舊態を革めつつあるは喜ふへし然れども首都の面目として下水道築造の如き根本的に施設すべき事項尙少からず唯此等の事業は經濟事情の關係上急速に完成し難きを遺憾とす

各都邑に於ても近時官憲の指導と人民の自覺とに依り衛生思想漸次發達し春秋二季の清潔方法の如きも習慣的に行はるるに至れり尙一般に衛生的觀念を注入する爲衛生講話を開催しつつあり其の效果は固より之を數字に表はし難しと雖漸を追ふて衛生思想の向上を來しつつあるは蓋し其の返響ならむ

第九節 墓地、火葬場

朝鮮人は古來墓地に對する迷信熾にして之を選擇する爲には家産を蕩盡するも意させざる者多し例へは墓地の適否は一家の浮沈子孫の禍福に關るこし地師一たび指せば他人の土地を雖之を侵すは勿論甚しきは他人の墳墓を發掘して自家の墳墓を築くか如き非行を敢てし争鬭常に絶へず之か爲に犯罪者を出すこも少からず此の如きは單に衛生を害し風教を亂るこも夥たしきのみならず土地經濟に於て更に憂ふべき現狀なるを以て明治四十五年六月總督府令を以て墓地、火葬場、埋葬及火葬取締規則を發布し京城府内に同年九月一日より施行したるを始めし他の各道に於ても逐次準備の整頓を俟つて之を施行し大正四年三月忠清南道に施行したるを終りしとして之を全道に實施したり本令の内容は集葬制にして特別の場合を除く外共同墓地以外に埋葬するを得さらしむ大正五年末に於ける全道の共同墓地は二萬四千九百八箇所にして其の面積四千二百五十二萬六千五百七十一坪なり各道中墓地數最も多きは村三千三百箇所、少きは村六百箇所なり何れも多くは官有山野の無償交付を受けたるものなりとす

由來朝鮮の墓地には何等の施設を爲したるものなく隨所亂葬の有様なりしを以て墓地の尊嚴を保持

する爲之に相當の設備を施すの必要を認め先づ京城の墓地に之を設備して模範を示し他は各地の實況に應じ漸次施設を普及するの計畫を立て既に京城府模範墓地は二箇所選定の上之を施設を完成せり尙朝鮮には火葬を忌み傳染病の死體を雖悉く土葬するの風習あるを以て漸次火葬の習慣を馴致し舊弊の掃除を期せむとす大正五年末に於ける火葬場數は全道を通し内地人經營のもの五十一箇所朝鮮人經營のもの十九箇所にして合計七十箇所を算す

第十節 飲料水

(イ)水道 朝鮮は一般に飲料水不良にして之を改良は忽諸に附すべからざる一大要務たり故に併合以來毎年國費及地方費補助の下に地方をして水道の敷設及模範的公共井戸の掘鑿を行はしめつつあり現今水道の設備あるは京城、仁川、釜山、平壤、木浦、鎮南浦、群山、羅南、會寧、元山、義州、鎮海の十二箇所にして此の外大邱、海州、光州、清津は且下工事なり其の他の各地は何れも井水、河水、泉水等を使用せり而して市街地若は集團地に於ける井水は一般に不良にして飲用に適せざるもの多し蓋朝鮮人は習俗として住家に便所を設けず隨所に放尿し下水の如き自然の流下に委して施設を加へざりし有様なれば積年の穢陋深く地層に浸潤し爲に水質をして汚悪なら

しめたるに歸因す從て消化器系傳染病比年各地に流行し彼の「ジストマ」の如き諸處に傳播し病毒極めて濃厚を呈せり故に水質の改良は當面の急務なるを以て各地に簡易の水道布設、鑿井の開掘を見るに至れり今各地既設及工事施行中の水道の現況を掲ぐれば左の如し

水道一覽

大正六年六月末日

水道	管理者	鐵管延長	工費總額	豫定給水量 人口	給水栓數 一人一 日水二	給水栓數 專用 共用	消火栓數	船舶給水栓	設計方法	給水開始年
京城水道	京畿道	六三七八九	二、八〇六、五五三	一、一〇、〇〇〇	四、四九一	一、八二〇	六二七	一	唧筒式	明治四十一年八月
仁川水道	同	三、一七、七二	一、一〇〇、八三二	七〇、〇〇〇	四、一三三	三、七二	二〇八	一	同	同 四十三年十二月
平壤水道	平安南道	三、一、九二	一、一四〇、三三一	六〇、〇〇〇	四、一七〇	五、五	二四三	一	同	同 年七月
釜山水道	釜山府	二、〇、八九	一、〇九七、七九	五五、〇〇〇	三、一、三三	四、五、六	三三三	四	貯水式	同 四十三年九月
木浦水道	木浦府	一、七、〇三	五、一〇、八	一、〇〇〇	三、三、四	二、六	五八	二	同	同 年四月
群山水道	群山府	九、六、三	二、八、九〇	一〇、〇〇〇	二、二、五	五、四	七、四	三	同	大正四年四月
元山水道	元山府	一、一、一〇	三、五、八、三三	一〇、〇〇〇	三、五	六、八	一〇、一	四	自然流入式	同 年十一月
鎮南浦水道	平安南道	一、三、二、八	四、六、五、〇九	一三、〇〇〇	三、二、四	一、三、三	七、三	一	貯水式	同 三年十一月

水道	管理者	鐵管 延長	工費 總額	人口	豫定給水量 一人一日	給水栓數 專用 共用	消防栓數	船給水 栓	設計 方法	給水開始 年月
羅南水道	咸鏡北道	1,100	2,556	2,000	1	1	1	1	自然流 入式	大正四年一月
會寧水道	會寧學 校組合	八七六	八七六	2,000	1	1	1	1	同	同二年十二月
大邱水道	大邱府	1,557	2,500	2,000	1	1	1	1	同	同七年四月
鎮海水道	總督府	五五五	2,500	5,000	1	1	1	1	貯水池 式	同四年三月
義州水道	平安北道	1,000	20,000	5,000	1	1	1	1	唧筒式	同五年九月
海州水道	黃海道	2,000	22,800	1,800	1	1	1	1	自然流 入式	同六年九月
光州水道	全羅南道	2,000	22,150	10,000	1	1	1	1	同	同八年三月
清津水道	清津府	3,100	180,000	10,000	1	1	1	1	唧筒式	同

本表中×印を附したるは工事施行中に係る水道なり

(口) 公共井戸 公共井戸の改良に就ては明治四十三年以降國庫補助に依り掘鑿又は改修せしめ同年度に於て五十八箇所、大正四年度に於ては掘鑿百十九箇所改築修理十四箇所にして大正五年度に

於ても從來の程度に依り企畫實行せり此の外個人の共同負擔のみに依り擱置したるものも尠からずして漸次普及の傾向あり

十一節 傳染病

(イ) 虎列剌 最近朝鮮に於ける虎列剌病の流行は大正元年九月長崎、福岡、山口等各地流行の餘波を受け黃海道、全羅南道、慶尙南道の各地に流行し總數百五十人の患者を出たせしより爾來絶て流行なかりしか大正五年七月二十七日香港を發しマニラ、長崎、神戸、四日市、清水港を経て横濱に入港したる大阪商船會社汽船布哇丸船客の病系を承け内地流行の餘響を被り同年八月二十日同病釜山港に發生し亞て方魚津、三千浦等の各港及其の他の沿岸各地に散發し殊に仁川及其の附近の如きは頗る慘狀を極め京城其他に蔓延し十二月末日迄全道の患者總數實に二千六十六死者一千二百五十三名の多きに達し同月末漸く終熄を告げしも内地の虎列剌病は歲を踰へて尙全滅に至らざるを以て之に對し朝鮮に於ても沿岸各地の警戒を繼續し大正六年五月に至り漸く之が警戒を解除せり

(ロ) 痘瘡 痘瘡は朝鮮に於ては殆ど地方病の觀を呈し百來より四季を通し各地に發生し年年多少の

流行を見ざるはなし由來衛生思想の幼稚なる朝鮮人間に於ては痘瘡は人生必ず經過せざるへからざるものにして到底人力を以て濟ふへからざる災厄なりとさし之に對して毫も豫防の方法を講せざるのみならず同病に罹るを以て寧ろ自然の命數なりと思惟する者多かりき從て種痘の效力を解せし者の如きは極めて鮮少にして官より種痘施行の命を受るや徒に疑懼の念を抱きて之を忌避し其の甚しきは往往故らに隱遁奔竄を企つる如き狀況なりしか故に種痘の施行に際しては各警察官憲兵に於て努めて其の迷信を誠諭し種痘は痘瘡豫防の最善なる唯一の良法なるを示し之が普及に努力したる結果近時漸く之を受くる者多きを加ふるに至れり今最近五箇年間に於ける種痘人員を掲ぐれば左の如し

年	内地人		朝鮮人		合計
	男	女	男	女	
大正元年	一一五三五	二一〇三三	七六八五九	五八七二六〇	一、三五五七五〇
					一、三七九、三三三

同	二年	二七、四九九	二八、五三二	五六、〇三〇	一、三二八、七七七	九五八、五四二	二、一八七、三一九	二、二四三、三九九
同	三年	二九、九一四	二七、八二八	五七、七四三	一、〇六三、一〇九	七九一、三一九	一、七九四、四三八	一、八五二、一八〇
同	四年	一五、四三七	二五、三三八	五〇、七七五	七九、九七五	六三三、九七五	一、四三三、二五〇	一、四八六、〇三三
同	五年	三三、〇四四	三三、〇三八	四二、一三三	七三、一八七	五六七、〇三五	一、二八八、八五二	一、三三〇、九七四

(ハ)赤痢 赤痢病は年年各地に發生しつつあるを以て患者發見に就ては常に周密なる檢病的戸口調査を厲行しつつありと雖朝鮮人部落に於ては土地、飲料水等概して不衛生的にして傳染病流行の因を爲すに依り容易に之が終熄を期する能はざるは頗る遺憾なりとす仍りて之が豫防の根本策として清潔方法を厲行し上水下水の改良を圖り一面豫防液の注射を行ひ専ら其の防遏に努めつつあり

(ニ)腸窒扶斯 腸窒扶斯も年年各地に發生し之が豫防に就ては特に注意し居るも發生數未だ減少するに至らず而して本病は他の熱性病と混同し易く且之が診定には或程度の期間を要するか爲既に本病として發見せらるる迄には病毒他に蔓延し居るの疑なきにあらず故に其の防遏上一層の困難を感ず

(ホ)爾餘の傳染病中「パラチアス」、猩紅熱、實布埜里亞は各地に散發するも其の數多からず更に發疹チアス等に至りては其の發生極めて僅少なり今最近五箇年間に於ける傳染病患者を掲ぐれば左の如し

傳染病患者

年	虎列刺赤痢	腸空	痘瘡	發疹チアス	猩紅熱	實布埜里亞	パラチアス	合計
大正元年	一一九	一九一五	一、五二四	一、一三五	三五	一五七	一三八	五、〇三六
同二年	—	一、三四二	一、八六二	二二九	一五	一八二	二五三	三、九四五
同三年	—	一、四〇九	一、九九五	一三〇	一一	一八三	四六一	四、五三二
同四年	—	一、三四四	二、五九六	四八	二四	三三六	三八〇	五、三三三
同五年	二、〇六六	一、一八九	二、三六四	四八	三六	二二三	三一〇	六、六〇六

第二十一章 警察

(イ) 警務機關の配置 曾て暴徒の戡定と秩序の恢復に全力を傾注せし警察も新政の普及と共に諸般の産業振興し民心頗る靜謐に歸せしを以て警備の方法も亦自ら一變せざるへからず仍て從來執り來りし警察力集中の方鍼を變更し分散的警務機關を配置し其の管轄區域は平均一郡弱に對し凡そ一警察署又は警察事務を取扱ふ憲兵分隊若は分遣所を設置せり即ち左の如し

警 務 機 關

大正五年十二月末日

名 稱	府郡島數	警察署	巡 査		警察事務を取扱ふ憲兵隊	合 計
			派出所	駐在所		
京畿道警務部	一一二	一一	五七	四三	八	二一八
忠清北道警務部	一〇	六	一	三四	四	五八
忠清南道警務部	一四	八	一	四四	三	二七
全羅北道警務部	一五	七	三	四三	六	一〇六
					九	一〇七

名 稱	警察事務								合 計
	府郡島數	警察署	派出所	巡查所	駐在所	警務分署	密接分署	密接分署	
全羅南道警務部	二三	八	三	五四	五	六	二五	二五	一一六
慶尙北道警務部	二四	一一	五	六九	六	五	二四	四三	一六四
慶尙南道警務部	二一	一一	一五	四三	四	八	九	三〇	一一〇
黃海道警務部	一七	七	一	三五	七	〇	三四	四九	一四二
平安南道警務部	一六	五	一	三二	五	八	一四	六〇	一三五
平安北道警務部	二〇	七	一	三八	八	七	三九	四九	一四九
江原道警務部	二一	六	一	二八	一〇	一〇	三七	五一	一四二
咸鏡南道警務部	一七	六	三	二〇	八	一一	三五	五六	一三九
咸鏡北道警務部	一一	五	二	二九	七	一一	三七	三六	一一七
總 計	二三二	九九	一〇二	五二二	七八	九七	三一七	五五三	一、七五八
大正 四年末	二三二	九九	一〇二	五二二	七七	九六	三一九	五四九	一、七五四
同 三 年末	二三二	一〇一	一一二	五〇八	七八	九九	三一七	五〇一	一、七六一
同 二 年末	三二九	一〇〇	一一三	四九八	七八	一〇七	三二七	四四三	一、六六六
同 元 年末	三二九	一〇〇	一〇九	四六四	七八	五七	三九四	四一三	一、六一五

警察事務之取扱及憲兵隊

合 計

(ロ)水上警備 警備船は其の設置の當初は専ら海賊及暴徒の掃蕩に供用せしも匪賊戡定後は漁業の振興海運の發展に従ひ船舶を要する警察事務漸く多きを加へ而も其の用務は沿海全岸に互り必要なるを以て明治四十四年一月以來數次に陸軍所管船の借入揮發油發動機船の購入税關鐵道局及海軍省所屬船の管理換等に依り漸次船舶を増加し目下沿岸十九箇所に配置の警備船は汽船九隻、發動機船十六隻合計二十五隻を有す

(ハ)警察官の養成 警察官養成上の唯一の機關として警官練習所を京城に設置せり同所は從來警務總監部警務課の分掌に過ぎざりしか大正六年三月警務課より分離して警務總監部の一課となし各道缺員補充の爲新に採用したる巡查及京畿道に配置すへき巡查補に約四箇月間初級警察官として必須なる學術及實務を教授し尙別に現職の警部を召集して補充教育を施しつつありて將來尙擴張の計畫なり京畿道以外に在勤せしむへき巡查補の教養は各道に於て警官練習所に準し之を養成しつつあり

(ニ)富籤類似其の他取締 懸賞又は富籤類似其の他の射俸の方法を用ゐむことを提供し又は投票を

募集せむとするもの漸く増加し動もすれば弊害の之に伴ふものあるを以て明治四十四年四月朝鮮總督府令を發し是等の所爲を爲さむとする者は警務部長の許可を受くべきことを爲し而して事項の學術技藝に關するものに就き懸賞の方法を用ひむとするものに在りては之を除外せり

(ホ)引火質物貯藏所取締 石油、揮發油、酒精、燃寸、煙火の貯藏所を建設するもの漸次増加し危険の虞あるに由り明治四十四年六月朝鮮總督府令を以て引火質物貯藏所取締規則を發布し是等物件の貯藏所は建設地管轄警務部長の許可を受くるに非されは建設することを得ざらしむ

(ヘ)信用告知業取締 他人の商取引、資産其の他信用に關する事項を依頼者に告知するの業を爲すもの少からず之を取締を加ふるの必要を認め明治四十四年七月朝鮮總督府は府令を發し信用告知業取締規則を定め其の業務を爲さむとする者は所轄警務部長の許可を受けざるべからず

(ト)狩獵取締 從來朝鮮に於ては狩獵に關する法規なく其の保護鳥獸たるを否かを問はず之を捕獲は各自の自由たりしか時世の進運に伴ひ漸く之を取締の必要を感じ遂に明治四十四年四月狩獵規則を發布し之を取締を爲せり(大正元年九月及同四年九月其の一部を改正せり)本規定の要旨は野

生鳥獸の捕獲、野生鳥類の巢又は卵及雛の採取狩獵の場所、狩獵の方法(銃器、張網、鷹)及時季、學術研究又は有害鳥獸驅除の爲其の他特別の事由に因る保護鳥及狩獵期間外の特別捕獲狩獵免狀、免狀の有効期間免許手数料、剝製品若は羽毛の輸出營業等に關する事項にして狩獵期間は毎年十月一日より翌年四月三十日の七箇月間なるも威鏡南北道、平安南北道及黃海道の五道は毎年九月十五日より翌年四月三十日迄さす而して免許手数料は甲乙特別の三種にして甲種は(張網若は鷹)三圓、乙種は(銃器)七圓、特別は(藥用材料の爲銃器にて鹿熊其の他一定の野生獸類を捕獲せむとする者に一年間の免許有効期間を付するもの)五十圓又免狀の再下付は一圓の手数料を要するこゝと爲せり大正五年五月一日より大正六年四月三十日迄免狀の下付を受けたる者一萬四千百九十人にして前年に比し一千七百七十人を増加せり

(チ)銃砲火藥取締 從來朝鮮に於ては銃砲火藥類の取締に關し内地人に對しては各領事館令理事廳令を以て規定を設けありしも不備の點多く且其の規定事項も區區に互りたるか爲執行上の寬嚴其の帆を一にする能はざるの嫌あり又朝鮮人に對しては隆熙元年九月法律第五號銃砲及火藥類團束

法の適用ありしと雖銃砲火藥類の如き危険物の取締に付ては製造、販賣、貯藏及運搬等は最も嚴重の方針に依ること緊要なるのみならず其の他に伴ふ詳細の規定を要すへきか故に敍上諸種の事由に依り内鮮人を同一法規の下に取締るの必要を認め大正元年八月銃砲火藥類取締令同十月同施行規則及同施行細則を發布し何れも大正元年十二月一日より之を施行せり

(リ)古物商取締 古物商取締に關しては舊韓國政府時代は何等法規の制定せられしものなく古物の賣買讓與は自由に放任せられたるか爲朝鮮人古物商に就ては全く取締の途なく又内地人に就ては領事廳令又は理事廳令を以て規定せられたるものありたるも其の規定區區に互り且不備の點多く殊に近年開港地は勿論其の他朝鮮内各地に内地人の移住する者漸次増加し従て内鮮人古物商の數亦多きを加へ從來の如き不備の法規にては到底之が取締の目的を達する能はざるのみならず朝鮮人に在りては其の生活状態は併合以來著しく變遷を來し物價の騰貴と内地人増加に伴ふ就職の困難は延て彼等の生計に影響を及ぼしたること尠からず此等の原因は即ち生活上の困難と爲り強竊盜、詐欺、横領等犯人の増加を見且他方には不正の物品を賣買、交換する者増加したるを以て明

治四十五年三月之が取締令を發布し同年四月一日より之を施行せり

(マ)質屋取締 質屋の取締に關し朝鮮人に適用すへき法規としては光武二年十一月法律第一號典當舖規則及農商工部令第三十一號典當舖細則ありしか爲取締上甚しき不便なかりしも内地人に就ては領事館令又は理事廳令を以て取締法規の定めありしのみ其の規定事項甚しく區區に互り從て取締上の緩嚴其の宜しきを得ざるのみならず尙取締法規なき地方に於て支障尠からず殊に併合以來内地人の朝鮮内に移任する者逐年増加し來り開港地は勿論其の他の地方にも内地人の質屋業を爲す者益多きを加へ全朝鮮内に施行すへき共通法規の必要を感するに至りたるのみならず内地人との朝鮮人との取締上の權衡亦甚しき差違あり不都合尠からざるを以て明治四十五年三月制令を以て質屋取締法に依らしめ内鮮人を同一法規の下に取締まることを爲せり但し朝鮮にては經濟上の狀態と其の業務上の舊慣とは内地と同一に律すへからざるものあり仍て利子制限、流質期限、質物處分及質物の滅失又は毀損の場合に於ける損害の負擔に關しては別段の規定を設くることを得へき特例を認め制令施行規則を發布し其の條項中に利子の割合、流質期限、質物の滅失又は毀損の

場合に於ける損害負擔の方法は認可を受くべき旨を定め舊慣あるものにして弊害なき以上は可成認可するの方針を採り且經濟上の關係より利子の割分は取締法の制限に依らざることを得る旨の例外規定を認めたり

(ル)遺失物取締 遺失物に關しては從來何等特別の法規なく朝鮮人に對しては拾得の場合に於ける届出又は隠匿に就き刑法大全の規定あるのみにて内地人に對しては内地の遺失物法に準し之を取扱ひ來りしも斯くては之が統一を闕くのみならず其の不便尠からざるを以て明治四十五年五月遺失物其の他の物件に關する規定を發布し犯罪者の置去りたるものと認むる物件誤て占有したる物件他人の置去りたる物件逸走の家畜又は埋藏物に關しては遺失物法に依ることと同時にか施行規則を發布し同年六月一日より實施せり

(チ)寄附金品募集取締 從來朝鮮人に對しては舊韓國の寄附金品募集取締規則に依り朝鮮總督之を許可し内地人及外國人に對しては明治三十九年四月發布の統監府令保安規則に依り京城に於ては警務總長其の他の地方に於ては警務部長に於て認可し來たりしか該規則は取締官廳と許可官廳と

を異にし不便尠からざるを以て明治四十四年十一月朝鮮總督府令を以て密附金品募集取締規則を發布し内外人たるを朝鮮人たるを問はず之を取締ること爲せり

(ロ)市街地建築取締 從來朝鮮に於ける建築取締に付ては各地區區に互り内地人の多數居住する市街地に限り領事館令又は理事廳令を以て之を取締規則を設けたる地方あり又併合後は警務部令を以て内鮮人共通の取締規則を設けたる地方あり又は未だ全く此等親則の設けなき所ありしを以て全道同一法令の下に之を取締を統一するの必要を認め大正二年二月市街地建築取締規則を發布し總督の指定したる市街地に對し施行することとし京城市街地に於ては大正二年七月十七日より之を施行せり

(カ)道路取締及荷車取締 從來道路取締及荷車取締に付ては各道區區に互り内地人に對しては理事廳令を適用し朝鮮人に對しては舊韓國政府時代の道令を適用するあり又併合後は警務部令を以て内鮮人に適用する等不統一の嫌ありしを以て全道同一法令の下に取締を爲すの必要を認め大正二年五月共に取締規則を制定發布し何れも同年七月一日より實施せり

(三)行政執行 朝鮮に於ては從來行政執行に關する根本法規なく其の必要に應じ適宜處理し來りしか動もすれば法令上何等の根據なくして人民の權利を侵害するやの批難を免かれざりしを以て大正三年七月行政執行令を同年八月同令施行規則を發布し共に同年九月一日より施行せり本令は内地と概ね其の内容を同ふせるも朝鮮は其の事情自ら異なるを以て彼の檢束の如きも其の期間を延長し内地に於ては翌日日後に至るを得ずと爲せしも交通不便なる朝鮮に於ては三日を超越することを得ずと爲し又密淫賣者入院治療費の如きも内地に於ては無資力者は地方費の負擔せせるも朝鮮に於ては國庫の支辨と爲したるか如き差異なきにあらず

(四)湯屋營業取締 湯屋營業取締令は大正三年七月警務總監部令を以て之を規定せり其の要旨は火災豫防に關しては燃料置場、火焚場、火消場及煙突の構造、衛生に關しては汚水の排除、浴槽、洗場、湯氣拔等の構造、風俗に關しては出入口、脱衣場、浴槽等の構造設備に關する事項を制限したり本令は内鮮人營業者を通し全道統一的に施行せらるるも雖鮮人部落に於ては 構造設備等を完成するの點に於て困難なるを以て土地の狀況に因り特別の事情あるものは警察署長の許可を受け

所定の制限に依らざることを得ることせり

(レ)宿屋營業取締 宿屋營業取締法規は從來各道に於て制定發布せしも其の規定の内容區區に涉り不統一なるに因り大正五年三月警務總監部令を以て之を取締規則を發布し同年五月一日より之を施行せり規定の要旨は營業用建物の構造、設備に關する事項、出願若は届出の事項、營業者の遵守すべき事項等にして宿泊人の安靜又は衛生を保ち火災若は盜難の豫防又は風俗の維持に關し必要なる制限を定めたり

(ロ)料理屋飲食店藝妓酌婦藝妓置屋貸座敷娼妓取締 上記諸業の如き風俗上に關する營業取締法規は從來各道各別に制定し施行上不統一に付大正五年三月警務總監部令を以て料理屋飲食店營業取締規則、藝妓酌婦藝妓置屋營業取締規則、貸座敷娼妓取締規則を發布し同年五月一日より全道を通じて施行したり規定の要旨は特に風俗上取締を要する貸座敷及娼妓業を爲す者は指定地域内に限局するを原則とす料理屋は藝妓の招聘、酌婦の寄寓を許し飲食店は飲食を爲さしむる外遊興を許さず藝妓置屋は藝妓を寄寓せしむるの外客を受くることを得ず其の他藝妓、酌婦、娼妓の業に關

する事項を定め尙營業用建物の構造、設備に關する事項、願届の事項、營業者の一般に遵守すべき事項等なり

(ツ)人力車、馬車、自働車取締 輓近道路機關の發達に伴ひ居住内地人の増加、事業の勃興等は各地方に於ける旅客の激増を爲り従て人力車、馬車、自働車等の營業者續出し逐年著しく其の數を増加せるを以て全道統一的に之を取締を爲すの必要を感じ従來自働車に付ては何等取締規則なく人力車、馬車に付ては全然取締規則なきに非ざるも區區に涉り取締上不便尠からざるを以て人力車に關しては大正三年七月馬車に關しては同年八月自働車に關しては大正四年七月警務總監部令を以て各其の取締規則を制定發布し車體及附屬品の構造設備、車夫、馬匹、驅者、馬丁、運轉手等の資格並に従業中に於ける遵守事項特に自働車に付ては運轉路線及速度其の他取締上必要なる事項を制限し人力車、馬車の取締規則は大正三年九月一日、自働車の取締規則は大正四年八月一日より自轉車取締規則は大正七年一月一日より各之を施行することとなれり

(ホ)消防 消防組に關する法規は各道共舊理事廳令を以て定めたるものありと雖朝鮮人に適用なく

又規定事項區區に涉り不便尠なからざるを以て之が統一の必要を認め大正四年六月總督府令を以て消防組規則を發布し同年八月一日より施行したり規定の要旨は消防組の組織、設置、地域、設備、費用の負擔、出動方法及消防組の指揮監督並之が設置に關する權限等の條項を設け本令施行前既に設置したるものは本令に依り設置したるものと看做すこととせり然れども此等既設の消防組をして速に規定の設備に依らしめ難き事情あるものは地方の實狀に應じ漸次改善すべき方法に依りたるに付施行上支障なく完全に行はれつつあり

(ナ)代書業取締 輒近朝鮮人の權利思想發達し訴訟其の他願届等の書類作成劇増し其の間弊害尠からざるものあるを以て從來の規定を改正し大正四年七月警務總監部令を以て代書業取締規則を發布施行したり規定の要旨は代書業者の資格、人員の制限、業務の範圍、出願及禁止事項及代書業者の責任、義務其の他取締上必要なる條項を設けたり

(ラ)開港取締 朝鮮に於ける開港取締に關する從來の法令は舊韓國政府發布の仁川港口停泊船隻暫行章程あり釜山港及元山港にも同一法規ありたるも其の規定頗る簡に失し取締の目的に副はず其

の他七箇所の開港には據るべき法令の存せざるを以て大正四年七月總督府令を以て開港取締規則を發布し同年八月一日より之を施行したり其の開港は仁川、群山、木浦、釜山、鎮南浦、新義州、龍岩浦、元山、清津、城津の十港にして規定の要旨は船舶の出入信號及願届事項、港界内に於ける禁止事項又は許可を受くべき事項、危険物積載船舶の遵守事項、變災の場合に於ける措置及信號方法、航方速力若は碇泊に關する制限其の他港務保安上必要なる事項なり

(ム) 汽罐汽機發動機取締 汽罐汽機發動機の取締は各道共營理事廳令を以て諸營業取締中に規定ありしと近營業以外に汽罐汽機發動機を使用するものを生し且理事廳令は朝鮮人に適用されず執行上不便なるに付大正四年八月十九日總督府令を以て汽罐汽機發動機取締規則を發布し九月一日より施行したり規定の要旨は汽罐汽機發動機据付の願届及使用認可申請の手續、定期又は特別検査の標準及其の時期又は汽罐汽機發動機に異状を生し若は危険の虞ある場合の届出方並適當の設備を命し使用を停止し、取扱主任者の變更を命する等其の他取締上必要なる詳細の條項を規定せり

(ウ) 犯罪狀況 大正六年上半期に於ける犯罪件数は四萬二千二件、檢事件数三萬二千百五十三件に

して之を大正五年の同期に比すれば犯罪件數に於て、七千四百八十件、檢舉件數、三千七百十件の増加を見る而して犯罪發生件數中増加せしは竊盜、詐欺、横領、恐喝等の如き所謂智能的犯罪にして之等犯罪の逐年増加の傾向あるは社會狀態の複雑を來せると同時に一般民智の昂上に伴ひ狡猾の徒増加せるに基因す此等の徒に對しては警務機關に於て平素其の動靜を查察警戒すると共に一面生業を獎勵し専ら之を豫防檢舉に努めつつあり

(牛)犯罪即決　大正六年上半期に於ける犯罪即決件數は、三萬二千四百六十六件にして之を處斷人員別は有罪四萬九千五十二人、無罪十一人、その他三百四十二人合計四萬九千五百五人なり之を大正五年の同期に比すれば件數に於て五千五十三件を増加せり斯の如く逐年増加の傾向ある原因は畢竟時勢の進化するに伴ひ各般の行政法規頒布され又警務機關は漸次周到するに至り諸般の取締普及するの結果行政法規違反及警察犯處罰規則違反等の増加するに外ならず然るに一般人民は即決處分に對し處斷敏速にして且公正なりと稱し其の感想良好にして從て正式裁判を請求するが如き者極めて尠し

(乙)民事争訟調停 大正六年上半期に於ける争訟調停受理件数は三千九百七十九件にして其の内既濟三百八十六十七件、未濟百十二件なり之を大正五年の同期に比すれば受理件數一千六百七十八件の減少を來せり之か原因の重なる點は逐年朝鮮人の權義思想發達し隨て比較的少額の債權、債務等は相互に可成紛議を避けんとしつつあるに因れり

(オ)警察官吏の取扱に係る執達吏事務取扱 從來專務執達吏取扱の設けありしは釜山、晋州、馬山、統營、大邱、鎮南浦、新義州の七箇所のみなりしか後更に京城、仁川、論山、全州、群山、南原、光州、木浦、順天、平壤、定州、寧邊、元山、水興、咸興の十五箇所を増設し專務執達吏事務を取扱をしめしか警察官吏の取扱ふ事務は此の外の地方に於て憲兵分隊同分遣所の憲兵に於て之か取扱を爲しつつあり

第二十二章 司法

第一節 裁判制度

朝鮮に於ける民刑事の裁判及非訟事件に關する事務は朝鮮總督府裁判所之を掌る而して裁判所は三審制度に則り分つて高等法院、覆審法院及地方法院の三種とす地方法院の事務の一部又は全部を取扱はしむる爲地方法院支廳を設置し又登記及公證の事務を取扱はしむる爲地方法院出張所を設置せり

地方法院は民事及刑事に付第一審裁判を行ひ且非訟事件に關する事務を取扱ふ覆審法院は地方法院の裁判に對する控訴及抗告、高等法院は覆審法院の裁判に對する上告及抗告に付裁判を行ひ且高等法院は裁判所構成法に定めたる大審院の特別權限に屬する職務を執行す

地方法院は判事單獨にて裁判を爲すと雖訴訟物の價額千圓を超過する民事事件、人事訴訟事件、破産事件、刑法第七十四條及第七十六條の犯罪事件、本刑死刑無期又は短期一年以上の懲役若は禁錮

に該る犯罪事件(裁判所構成法に定めたる大審院の特別権限に屬する事件を除く)並此等の刑事事件の共犯事件にして本事件と同時に審判する場合は三人の判事覆審法院は三人の判事高等法院は五人の判事を以て組織したる部に於て合議裁判し且各裁判所に檢事局を併置し檢察事務を掌らしむ而して朝鮮人にして判事又は檢事たる者は民事に在りては原告、被告とも朝鮮人たる場合、刑事に在りては被告人が朝鮮人たる場合に限り其の職務を行ふものとす

裁判所一覽

大正六年九月末日

	高等法院	覆審法院	地方法院	地方法院 支廳	地方法院 出張所
京城	京城	開城 鐵原	驪州 原州	×水原 ×仁川 ×春川	永登浦 金城 江華 平澤
					安城 文城 金長場 利川 廣州
					楊口 抱川 楊平 加平 寧越 華川
					平昌 寧越 華川 麟蹄

京城

大邱			平壤									
光州	釜山	大邱	海州	平壤	咸興	公州						
<small>×</small> 順天 <small>×</small> 錦山 <small>×</small> *木浦 <small>×</small> 南原 <small>×</small> 井邑 <small>×</small> 長興 <small>×</small> 濟州 <small>×</small> *全州	<small>×</small> 蔚山 <small>×</small> 居昌 <small>×</small> *馬山 密陽 統營 <small>×</small> *晉州	金泉 蔚州 尙州 蔚珍 安東 義城 慶州	<small>×</small> 瑞興 載寧 松禾	定安 安州 德川 寧邊 江界 鎮南 浦山 楚山 新義州	北青 會寧 元山 慶興 永興 江陵 清津	<small>×</small> 大邱 <small>×</small> 清州 江景 忠州 洪城 瑞山 天安						
康津 光陽 扶安 谷城 羅州 陝川 咸安 昌寧 醴泉 永川 軍威 慶山 馬山 殷栗 梁山 孟州 義州 鏡城	羅州 固城 泗川 梁山 咸陽 金海 河東 南山 宜寧	醴泉 永川 軍威 慶山 高靈 倭館 善山 清道 鬱陵 青島	長淵 延安 金川 安岳	寧遠 永柔 江東 江西 中和	鏡城 扶餘 永同 禮山 溫陽 沃川 大恩 報恩 鳥致院 唐津	海求 南禮 靈潭 陽順 長水 高麗 茂朱 高麗 高麗 咸平	蔚山 居昌 馬山 密陽 統營 晉州 蔚山 居昌 馬山 密陽 統營 晉州	蔚山 蔚州 尙州 蔚珍 安東 義城 慶州	瑞興 載寧 松禾	定安 安州 德川 寧邊 江界 鎮南 浦山 楚山 新義州	北青 會寧 元山 慶興 永興 江陵 清津	大邱 清州 江景 忠州 洪城 瑞山 天安
康津 光陽 扶安 谷城 羅州 陝川 咸安 昌寧 醴泉 永川 軍威 慶山 馬山 殷栗 梁山 孟州 義州 鏡城	羅州 固城 泗川 梁山 咸陽 金海 河東 南山 宜寧	醴泉 永川 軍威 慶山 高靈 倭館 善山 清道 鬱陵 青島	長淵 延安 金川 安岳	寧遠 永柔 江東 江西 中和	鏡城 扶餘 永同 禮山 溫陽 沃川 大恩 報恩 鳥致院 唐津	海求 南禮 靈潭 陽順 長水 高麗 茂朱 高麗 高麗 咸平						

本表中 *印を附したるは合議部の制ある地方法院支廳にして×印は豫審を取扱ふ地方法院支廳なり

第二節 適用法規

適用法規は明治四十五年四月一日より施行の民事令、刑事令に依り内地の法規を適用せり。雖民事に付ては民法中能力、親族及相續に關する規定は之を朝鮮人に適用せずして從來の慣習に依ることと爲し又不動産に關する物權の種類及效力に付ては民法に定めたる物權を除くの外尙慣習に依ることとせり

刑事に付ては殺人罪、強盜罪に限り當分の内朝鮮人に對し舊韓國刑法大全の效力を有せしむることとし又朝鮮固有の刑たる笞刑は従前の制度に改正を加へ朝鮮笞刑令を制定して明治四十五年四月一日より施行し朝鮮人に對してのみ適用することとせり

民事、刑事、豫審及檢事捜査事件新受件數

種別	民事訴訟		刑事訴訟		豫審事件		檢事搜查事件		民事雜事	
	第一審事件	控訴事件 上告事件	第一審事件	控訴事件 上告事件	事件	事件	第一審	控訴 審	第一審	控訴 審
大正元年	三四、七四一	二、二二七	三七、一九五	一一、三二二	四三四	二四、九七五	三一、四五四	三一	三一、四九〇	五
大正二年	三五、三二七	二、八五三	三八、五三九	一五、四七一	五二八	三一、二八二	五八、一一二	三四	五八、一四六	一
大正三年	三三、四三三	二、六九一	三六、六八〇	一六、三五四	五八五	三四、八三四	一一三、〇九〇	三一	一一三、一二七	六
大正四年	三四、三七五	二、一一九	三六、八〇五	一八、四〇五	五八〇	三八、八五六	二四四、一八七	二七	二四四、二一九	五
大正五年	三二、四〇三	二、〇九三	三四、八二五	二一、九二五	五九二	四六、六〇七	三七八、一三九	三二	三七八、一七六	五

種別	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年
刑事第一審	四〇四	四四六	五〇七	四八〇	四六五
刑事控訴審	二二	二〇	三〇	四二	三八
刑事上告審	七	七	一〇	四	二
計	四三三	四七三	五四七	五二六	五〇五
檢事局共助事件	一、三四七	一、六二七	二、一七八	二、四三七	二、五四八
總計	一〇九、三九九	一四七、五二二	二一四、七七〇	三四三、四七一	四八七、一三七

本表には故障及再審事件を包含す

民事及刑事雜事件欄に掲記したる事件の種類左の如し

民事 抗告、和解、督促、假差押、假處分、強制執行、不動産競賣、破産、禁治産準禁

治産及失踪の宣告、各種登記、非訟事件手續法に依る非訟事件、公證、確定日附、

共助及其他の申請事件

刑事 抗告、附帶私訴及共助事件

第三節 不動産登記制度

不動産の登記に關しては明治四十五年制令を以て朝鮮不動産登記令を發布し原則として内地の不動産登記法に依ることを定めたり抑朝鮮に於ける不動産所有權の得喪に關しては古來文記又は文券と稱する私署證書の引渡に由り之を行ふに過ぎざりしを以て併合前韓國政府時代既に土地建物證明規則並土地建物所有權證明規則を發布し賣買、贈與、交換、典當の各事項の外所有權の保存に付府尹又は郡守をして之に證明を與へしめ其の權利の確保を期する方法を講したりしか爾來時勢の推移に伴ひ複雑なる權利關係を生し之を確保する上に於て缺如する所尠からず仍りて明治四十五年改めて不動産證明令を發布し府尹郡守を以て證明官吏と爲し證明すべき權利を所有權、典當權の二種に限りたること舊規則に異ならずと雖民事令施行の結果證明を以て第三者に對抗するの要件となし權利確保上舊規則の缺點を補ひへり元來不動産證明令の施行は土地臺帳の設備に至る迄一時權宜の處置たるに過ぎざるを以て土地調査の進行に伴ひ土地臺帳を設備したる地域に對しては不動産登記令を施行と同時に證明事務を廢止するの順序なりしか大正三年五月初めて京城外十一府十七市街地に

施行し其の後大正六年九月に至る迄十二府百四十二郡二島に及へり是等の府郡は地方法院及其の支廳の所在地又は之に接續したる郡は當該地方法院又は支廳をして之を取扱はしめ其の他の郡は土地臺帳所管廳たる郡廳所在地に地方法院出張所を設置して其の事務を取扱はしむ

第四節 民籍事務

朝鮮に於ける民籍は李朝成宗の朝に式年の制を定め每三年(子、卯、午、酉)に一回戸口の數を調査せしめたるに始まり爾來四百有餘年此の遺制を襲踏し來りしか明治二十八年に至り之を改めて戸口調査の規程を設け府尹郡守等管掌の下に面長、洞里長等をして戸口を調査せしめ一方人民に申告義務を負擔せしむることとしたれども、民籍は依然其の實を擧ぐるに至らざりしか、其の後明治四十一年民籍事務を警務機關の管掌に移し尋て明治四十二年民籍法を制定發布し人民の申告を督勵し且警察官をして戸口の實査を爲さしめ翌四十三年五月に至り民籍の形式茲に漸く成れり其の後地方行政機關漸次備はり府面の事務亦其の面目を一新するに至りしかは大正四年四月民籍法及宿泊居住規則を改正し此の事務を府尹面長の管掌に移し道長官郡守をして之を監督せしむることとし之が主管

を警務總監部より司法部に移屬せしめ一般の取扱例を定め事務の統一を圖り専ら民籍の完全を期したり而して近時人民亦權利思想の發達に伴ひ漸次民籍の重要にして苟且に附し難きを自覺し自ら進んで申告を爲すの傾向を呈し昔日の面目を一新するに至れり民籍法は固より朝鮮人に限り適用せらるるものにして一般居住の内地人は其の身分に付ては勿論内地の戶籍法の適用を受くと雖其の居住關係に付ては朝鮮人及外國人と等しく宿泊及居住規則に依り居住又は轉居の届出を爲すべきものとす而して内鮮人關係の民籍取扱方に付婚姻に關しては女が内地人たる場合には夫たる朝鮮人の家に妻として入籍せしめ女が朝鮮人たる場合には民籍より之を除き以て當事者をして當然夫妻たることを得しめ其の間に生したる子は嫡出子の取扱を爲し又養子に關しては朝鮮人の男子が養子又は婿養子縁組に因り内地人の家に入りたるときは其の民籍を除かず女子が養子縁組に因り内地人の家に入りたる場合は之を除くべき取扱を爲す定めにして朝鮮人が内地人を養子とするときは朝鮮に於ける慣習の認めざる所なるを以て之が取扱を爲さず

第五節 公證事務

大正二年五月初めて朝鮮公證令を施行し公證人の職務は専ら地方法院同支廳及出張所をして之を取扱はしめ來れるも京城の如き都會に在りては専務の公證人設置の必要を認め大正四年三月府令を以て公證令施行規則及公證手数料規則に所要の改正を加へ同四月一日京城地方法院所屬の専務公證人一人を任命し裁判所外に於て其の事務を取扱はしめ同院(支廳及出張所を除く)に限り該事務の取扱を廢したり

第六節 執達吏事務

執達吏に屬する職務は朝鮮の現狀に適應せしむる爲内地に於けるが如く純然たる専務の執達吏の職制を設けず從來主として警察官吏(警察事務を取扱ふ巡兵を含む)をして之を取扱はしめつつあるも輒近に至り其の事務漸く増加し本務の繁劇なる警察官吏をして之を兼掌せしむるは時勢の趨向に適應し難きを以て先づ地方法院及主要なる地方法院支廳に漸次非官吏にして能く關係法規に通曉し又は該事務に經驗を有する者を指命し専ら執達吏の職務を取扱はしむることせり現に非官吏なる執達吏職務取扱者を設置したる箇所は左の如くにして其の他の地域に於ては仍ほ警察官吏に於て其の

事務を取扱へり

執達吏職務取扱者設置地

京城 仁川 江景 咸興 北青 永興 元山 平壤 鎮南浦 新義州 大邱 釜山 晋州 統營
馬山 光州 木浦 全州 群山 順天 井邑 (以上執達吏事務全般を取扱ふ)
安州 定州 寧邊 (以上送達事務に限り取扱ふ)

第七節 監獄

監獄は從來警察の一部として舊韓國内部の管轄に屬し其の事務は警察官の兼掌する所なりしか明治四十年十二月監獄官制を公布し法部の所管に屬せしめ典獄以下の職員を置き明治四十一年一月京城監獄の事務を開始し次て七箇の監獄及十二箇の分監を開設し明治四十二年十一月統監府監獄を開設し舊韓國監獄及内地人囚徒を收容したる理事廳監獄の事務一切を承繼し明治四十三年十一月朝鮮總督府監獄を開設し統監府監獄の事務一切を承繼し以て現時に至れり目下朝鮮に於ける監獄は京城、西大門、公州、咸興、平壤、海州、大邱、釜山、光州の九監獄にして分監は永登浦、仁川、春川、

清州、元山、清津、鎮南浦、新義州、馬山、晉州、木浦、全州、群山の十三分監なり左に在監人員を表示すへし

年	在 監 人 員				合 計			
	受 刑 者	刑 事 被 告 人	勞 役 場 留 置 者	男	女			
大正元年末	八、三八七	三九三	七五〇	三三	二二	九、一四九	四三二	九、五八一
同 二 年 末	八、六八〇	四四七	七四二	二四	二〇	九、四四二	四七二	九、九一四
同 三 年 末	八、〇四六	五〇四	八五九	二六	三五	八、九四〇	五三四	九、四七四
同 四 年 末	八、三二二	五三〇	八六二	五四	二	九、二二四	五八六	九、八〇〇
同 五 年 末	九、三六四	六一六	八一三	四三	二八	一〇、二〇五	六六四	一〇、八六九

(イ)拘禁及行刑 舊韓國監獄制度改正以前に於ける各地の監獄は獄舎狹隘且不完全にして拘禁の過度不規律殆ど想像たも及ばざる状態なりしか爾來漸次監房の新築増築を行ひたるを以て各監獄に於ける拘禁状態稍緩和となりたるも未だ監人の種類、罪質、犯數、年齢、性格等法定の分類を嚴行

すること能はざるのみならず往往未既決をも別異することを得ざるものあり然れども能ふ限り分
 類を爲し檢束の保全を期すること共に可成適實なる處遇を施しつつあるを以て遷善悔悟の兆候を認
 むる者多きに至れり大正六年六月迄に假出獄を許可したる者左の如し

假出獄人員	
年	人員
大正元年	一六三
同 二年	一〇九
年	人員
大正三年	一八五
同 四年	一六四
年	人員
大正五年	一九八
同 六年六月迄	九五

(ロ)作業 監獄作業は近年著しき發達をなし就役囚亦増加し疾病又は事故に依る休役を除く外受刑
 者全部を就役せしむるに至りたり然れども其の業種に至りては未だ監獄作業として適當と認むへ
 きもの鮮きを免かれず將來は一般商工業の發展に由り適當なる業種に此の勞力を利用すへき時機
 の到來せむことを期待して止まざるなり

受刑者就業人員

種別	大正元年末同	二年末同	三年末同	四年末同	五年末	同 六年 六月末日
就業人員	六、四三四	八、〇四二	七、九七三	八、五〇七	九、五五八	一〇、二二六
受刑者百に對する歩合	七三	七五	九三	九四	九六	九五

監獄作業收入

年 度	囚徒			年 度	囚徒		
	工錢	製作收入	農業收入		工錢	製作收入	農業收入
大正元年度	五九三二四円	一四一三三円	三三二二円	大正四年度	六四九七五円	六六七三三円	六四七九円
同 二年度	六三、八七九	九四、四三三	五、〇三〇	同 五年度	七二、九四〇	二八、五九六	六、七二五
同 三年度	六六、七五八	九〇、五七三	五、二五三		一六四、四八四		一九七、二五二
合計	七六、八三六	一六三、三三二	一六、三三二	合計	一五八、二二六		

大正二年度の作業収入額前年度に比して著しく増加せしは同年四月總督府直營たりし煉瓦、土管兩工場の業務全く京城監獄の管掌に移り監獄作業の一部となりなるに由るものにして兩工場の收

入は全作業収入の約半を占むるの盛況を呈せり而して左表の如く大正三年以降煉瓦の販賣數著しく減少したるは經濟界不振の影響なりしも幸に土管の賣行良好なりしと一般作業の發展に因りて全作業収入に大なる減收を見ず大正五年度に入りては漸く頽勢を挽回し煉瓦の需要頓に増加して土管並一般作業亦益活氣を呈するに至れり今最近五箇年に於ける土管及煉瓦の製造及賣却高を掲ぐれば左の如し

年 度	煉 瓦		土 管	
	製造數	賣却數	製造數	賣却數
大正元年度	五、四三一、〇一一	四、四三五、六八二	五〇、六三〇	四八、四〇七
同 二年度	六、二七八、〇九〇	五、一七三、五二〇	三六、二四一	三八、八一九
同 三年度	五、五九〇、八八五	三、三七〇、六〇二	五四、二四一	六〇、〇〇二
同 四年度	五、二七三、三〇八	二、六六七、〇四〇	五四、七九一	六二、九〇八
同 五年度	二、四一五、〇八四	四、〇七九、一八三	六五、一三七	一〇五、一〇八
			同上價額	同上價額
			四	四

(ハ)指紋 朝鮮監獄に於ける指紋の徴取は明治四十三年八月韓國併合に因る恩赦に基き多數の出獄者ありたる際に始まる爾來幾多の研究改良を加へ逐年良好の成績を見るに至れり今其の狀況を表示すれば左の如し

年	指紋徴取及前科發見數		年	指紋徴取及前科發見數	
	原紙數	發見數		原紙數	發見數
大正元年	一二、四六一	一八六	大正四年	一五、七一二	四四一
同 二年	一一、五九六	三八四	同 五年	一八、七八一	五六〇
同 三年	一一、七一九	四五八	同六年六月迄	一〇、五七〇	三七二
大正六年六月末に於ける保管指紋原紙數は八萬七千百四十五枚なり					

(ニ)免囚保護 從來朝鮮に於ける出獄人保護機關は徴取たりしか故に十分なる効果を擧ぐるを得ず而かも一面出獄人は比年其の數を増加するを以て本機關の完備を圖るは頗る緊要なりと大正二

年五月免因保護事業補助金下付手續を制定し同年度より毎年金五千圓を交付し其の發達を促進せしめたり其の結果總督始政の當時に在りては僅に一保護團體の設立ありたるのみなりしか爾來官民有志の協力に依り各地相隨て設立せられ大正五年末に於ては其數二十を算し各本分監悉く保護團體との聯絡を保つを得事業成績亦漸く面目を一新するに至れり今其の狀況を掲ぐれば左の如し

出獄人保護機關

大正五年

保護團體	所在地	收容保護人員	一時的保護人員	收入	支出	資産
京城救護會	京城	一三一	二三一	三、五二〇	四、八一四	六、五三五
仁川救護院	仁川	七	二八	八七八	五九三	七四六
春川保護會	春川	—	九	三〇	二	一七七
公州慣業院	公州	三七	七九	二、四五八	二、二六二	一、五三七
忠北有隣會	清州	四	一五	七一五	六六四	一、〇一二

保護團體	所在地	收容保 護人員	一時的 保護人員	收 入	支 出	資 產
咸興保護會	咸興	七	三五	六五七	二七五	一、三七〇
元山保護會	元山	九	二五	二八五	六七	一、〇一一
清津保護會	清津	九	二五	八五五	四九六	九二〇
平壤保護會	平壤	一六	八二	七九二	一九〇	三、六九五
鎮南浦獎善院	鎮南浦	一	二	一九一	四	五六七
平北保護會	新義州	二	四六	二九一	七一	一九八五
海州保護會	海州	八	五九	一、二〇五	一、三〇五	二、一〇九
大邱常成會	大邱	三六	一二四	一、六五六	九五七	五、〇五五
釜山保護會	釜山	三	二〇	六四七	一一〇	三、三二四
馬山保護會	馬山	一三	一九	二二一	一一七	二、〇一九
晉州扶掖館	晉州	二一	一六	四四六	九四	一、三三三
光州保護會	光州	八	四七三	一、二二〇	八八九	二、二二七
木浦保護會	木浦	一〇	四〇一	七六一	二七三	二、五七四
全州保護會	全州	一三	二八	五二四	一七六	一、五七一

總計	群山保護會
	群山
三三三	七
一、八〇九	九二
一七、九一〇	六五八
一三、五四四	二八七
四一、〇二五	一、三六八

大正七年
最近朝鮮事情要覽 終

大正七年一月一日印刷

大正七年一月三日發行

朝鮮總督府編纂

朝鮮總督官房總務局印刷所印刷

MONO3198023006

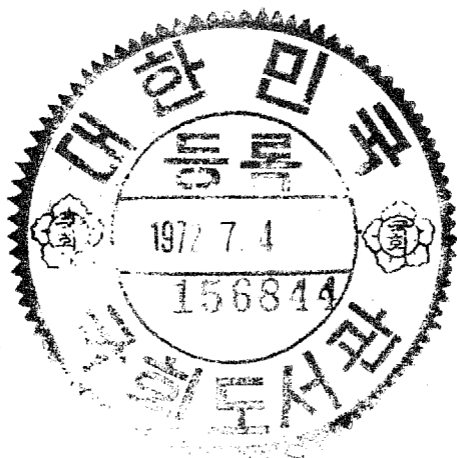
朝鮮總督府編纂

最近朝鮮事情要覽

국회도서관



00156844



大正八年 最近朝鮮事情要覽

月 例

本書は最近朝鮮に於ける施設經營の一斑及内地人發展の狀況其他朝鮮の事情を記述し兼て統計表を附し概括的觀察の便に供せむことを期せるものなり

大正八年一月

朝鮮總督府

大正八年 最近朝鮮事情要覽目次

第一章 沿革	頁
第一節 併合顛末	一
第二節 併合後の施設	三
一 朝鮮總督府の設置	三
二 總督府官制の施行	四
三 職員の任用	三
四 行政區劃の整理	三
五 財政の整理	三
六 物産共進會の開設	三九
七 新政施行の治績と諭告	四二
八 總督の更迭と施政の方針	五三

第二章	風俗習慣	五五
-----	------	----

第三章	地誌	六五
-----	----	----

第一節	地形及地勢	六五
-----	-------	----

第二節	氣候	六六
-----	----	----

第三節	戶口	七六
-----	----	----

第四節	重要市街地	八六
-----	-------	----

第四章	交通	一〇九
-----	----	-----

第一節	關釜連絡概況	一〇九
-----	--------	-----

第二節	道路	一一一
-----	----	-----

第三節	港灣	一一一
-----	----	-----

第四節	鐵道	一一三
-----	----	-----

第五節	海事	一一三
-----	----	-----

第六節	江運	一一三
-----	----	-----

第五章 通信……………一五九

第一節 通信事業……………一五九

第二節 電氣事業……………一六九

第六章 地方行政……………一七三

第一節 道府郡島……………一七三

第二節 公共團體……………一七五

一 地方費……………一七五

二 府……………一八三

三 面……………一八九

四 學校組合……………一九三

五 水利組合……………一九九

第三節 府郡島臨時恩賜金事業……………二〇四

第四節 濟生院……………二〇九

第五節 救療機關……………二二〇

第七章 教育……………三三九

第一節 内地人の教育……………三二九

第二節 朝鮮人の教育……………三三七

第三節 留學生……………二五三

第四節 經學院……………二五四

第五節 教科用圖書……………二五五

第八章 財政及經濟……………二五九

第一節 財政……………二五九

一 歲計……………二五九

二 繼續費……………二六九

三 帝國一般會計より支出の朝鮮經營費……………二七二

四 朝鮮總督府國債
特別會計所屬……………二七四

五 租稅……………二七六

第二節 通貨……………三〇三

第三節 金融……………三〇五

一 金融機關……………三〇五

二 金利……………三〇〇

三 朝鮮銀行……………三〇〇

四 朝鮮殖産銀行……………三二三

五 普通銀行……………三一六

六 手形交換所……………三一九

七 金融組合……………三三二

第九章 農業……………三三七

第一節 土地……………三三七

第二節 農業者……………三三四

第三節 農産物……………三三七

第四節 勸農機關……………三六一

第十章 商業……………三六七

第一節	朝鮮人の商業	三六七
第二節	内地人の商業	三七二
第三節	商業地	三七二
第四節	會社	三七四
第五節	商業會議所	三七八
第六節	穀物検査	三七八
第七節	商品陳列館	三八〇
第八節	度量衡	三八三
第十一章 工業		
第一節	朝鮮人の工業	三八七
第二節	内地人の工業	三九二
第三節	官營工業	四〇三
第四節	中央試験所	四〇五
第五節	地方工業傳習所	四〇六

第六節	工業所有權の保護	四〇七
第七節	工業獎勵	四〇八
第八節	勞銀	四〇九
第十二章 貿易		
第一節	總說	四一九
第二節	國別貿易	四二〇
第三節	港別貿易	四二二
第四節	輸移出重要品	四二五
第五節	輸移入重要品	四二七
第六節	通過貿易	四二八
第七節	貿易船舶	四二九
第八節	稅關	四三〇
第十三章 林業		
第一節	森林	四三五

第二節	森林保護	四三七
第三節	殖林事業	四三九
第四節	造林貸付	四五七
第五節	林野調査	四五八
第六節	林野整理調査	四六一
第七節	營林廠	四六二
第十四章	鑛業	四七一
第十五章	水産業	四八九
第一節	水産業の保護獎勵	四八九
第二節	水産業發展の狀況	四九八
第三節	水産業改良の獎勵	五〇二
第四節	製鹽業	五一三
第十六章	拓殖事業	五一七

第十七章	土地調查	五三七
第十八章	宗教及享祀	五四三
第一節	宗教	五四三
第二節	享祀	五四九
第十九章	古蹟及遺物	五五三
第二十章	衛生	五九九
第一節	醫療機關	五五九
第二節	藥品取締	五六八
第三節	飲食物取締	五六九
第四節	痘苗製造	五七〇
第五節	屠場及屠肉	五七一
第六節	牛乳搾取所及牛乳取締	五七二
第七節	檢驗	五七四

第八節	汚物掃除	五七五
第九節	海港檢疫	五七五
第十節	墓地、火葬場	五七六
第十一節	飲料水	五七八
第十二節	傳染病	五八一
第十三節	細菌檢查	五八五
第十四節	地方病	五八六
第十五節	獸疫	五八八
第十六節	移出牛檢疫	五八九
第二十一章	警察	五九一
第二十二章	司法	六〇九
第一節	裁判制度	六〇九
第二節	適用法規	六一二
第三節	不動產登記制度	六一六

第四節	民籍事務·····	六一七
第五節	公證事務·····	六一九
第六節	執達吏事務·····	六一九
第七節	監獄·····	六二〇



圖陣戰作の氏津島るけ於に役の辰壬

大正八年 最近朝鮮事情要覽

第一章 沿革

第一節 併合顛末

東洋永遠の平和を維持し日韓兩國を結合する利益共通の主義を鞏固ならしむる目的を以て明治三十七年二月在京城の帝國代表者は韓國政府と重要なる協商を遂げ同月二十三日兩國代表者に於て左記議定書の調印を了せり本議定書は即ち日韓兩國の關係を一新し其の後に於ける兩國關係推移の端を啓きたるものなり

- 一 韓國政府カ帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シテ其ノ忠告ヲ容ルルコト
- 二 韓國皇室ノ安全康寧ノ保證
- 三 韓國ノ獨立及領土保全ノ保證

第一章 沿革

四 第三國ノ侵害若ハ内亂ニ依リ韓國皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ニ帝國政府ハ臨機ノ措置ヲ取り韓國政府ハ之ニ對シテ十分ノ便益ヲ與フルコト竝帝國政府ハ軍事上必要ノ地點ヲ收用シ得ルコト

五 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ本協約ノ趣意ニ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルヲ得サルコト

六 帝國代表者ト韓國外部大臣トノ間ニ未悉ノ細條ヲ臨機協定スルコト

尋て八月二十二日に至り日韓兩國政府代表者は京城に於て更に一の協商を遂げ財政外交兩顧問の僱聘並韓國政府と諸外國との條約締結其の他外國人に對する特權讓與若は契約等の處理に關しては豫め帝國政府と協議すへきことを協定し兩國の關係を一層明確ならしめたり蓋し前記二月の議定書に依り兩國の關係大に進捗したりと雖韓國に於ける施政改善の實を擧げむと欲するは決して容易の業にあらざるのみならず外交に關する同議定書の趣意を實行するに當りては一般に互り猶詳細なる取極を要するものありたるに因るなり

翌三十八年九月日露兩國間に締結せられたるポーツマス條約に於て露國政府は帝國が韓國に於て政治・軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有することを承認し帝國が韓國に於て必要と認むる指導・保護及監理の措置を執るに方り之を阻害し又は之に干渉せざるべきを約したり是より前年八月十二日調印せられたる日英同盟約款も亦日本國は韓國に於て政治上・軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有するを以て大不列顛國は日本國が該利益を擁護増進せむが爲に正當且必要と認むる指導・監理及保護の措置を韓國に於て執るの權利を承認すま規定し即ち一方に於ては日英同盟約款の支持他方に於ては日露講和條約の承認に依り日韓兩國の關係は日露戰爭終結と前後して一大進歩を來たし韓國に對する帝國の地位益鞏固且明確を加ふるに至れり帝國政府は此の新關係に基き韓國に對する保護指導を完ふし益兩國を結合する利益共通の主義を鞏固ならしめむことを欲し此の目的を以て同年十一月七日所謂日韓新協約を締結せり本協約の成立するや韓國保護政治の基礎愈確立するに至れり茲に於て同年十二月二十日勅令第二百六十七號を以て統監府及理事廳官制を發布し同時に在韓國の帝國公使館及領事館を撤廢し侯爵伊藤博文統監に任せられ翌三十九年二月一日各其の事務を開始せり統

監府既に設置せられ韓國の外交は擧げて帝國政府の監理に歸し施政の改善漸く其の歩を進むるを得たりと雖一朝にして積年の宿弊を一洗し保護の實績を擧げむとするは固より容易の業に非ず加之維新更始の際に當り上下の人心動もすれば其の歸嚮する所を誤り種種の妨碍頻發せり偶明治四十年夏に至り海牙密使事件の起るや統監は日韓兩國の關係を一層密邇せしむるの必要を認め同年七月二十四日更に韓國政府の代表者との協約を訂立せり即ち左の如し

- 一 韓國政府ハ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト
- 二 法令制定及重要ナル行政上ノ處分ニ付豫メ統監ノ承認ヲ受ケヘキコト
- 三 司法事務ト普通行政事務トノ區別ヲ爲スコト
- 四 高等官吏ノ任免ニ統監ノ同意ヲ要スルコト
- 五 統監ノ推薦ニ依リ日本人ヲ韓國政府ニ任用スルコト
- 六 統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ傭聘セサルコト
- 七 財政顧問ノ傭聘ヲ廢止スルコト



斯の如く韓國に對する我が保護權行使の範圍を擴張し一轉内地人官吏をして從來間接指導の地位に在りしを直接施政の衝に當らしめ政務機關全般に亙る官制改革を斷行し宮中府中を燦然區別し司法制度の獨立を企圖し中央地方各般行政の刷新に努めたりしも當時韓國財政の狀態は司法制度を整備するの財力を有せざるのみならず法典の整備と司法官の養成とは一朝にして之を行ひ得べきに非ざるを以て明治四十二年七月韓國の司法及監獄事務を擧げて我が政府に委託せしむるの件を協定同年十一月より之を實施し同時に韓國に於ける此等の機關を廢止し統監府司法廳、裁判所及監獄を設けし以て韓國に在留する帝國臣民及韓國臣民の生命財産を均等に保護するの基礎を確立するに至れり

斯の如くにして帝國政府は韓國政府の委託に依り施政の改善を試み著者其の實績を擧げむとせしも猶未だ遽に民衆の福利を増進し公共の安寧を保持し秩序を恢復するに足らず暴徒草賊は處處に出沒良民其の堵に安せず又不逞の徒は民衆を煽動使喚し官吏に對し暴行を加へ職務の執行を阻礙する人心の動搖甚たしく遂に明治四十二年十月二十六日哈爾濱に於て前伊藤統監を暗殺するに至れり

尋て同年十二月二十二日首相李完用の兇害を見るありて國內の形勢日に不穩にして到底韓國を併合するにあらざれば完全に統治の目的を達し有終の美果を收むること能はざるの狀勢瞭然たるものあり茲に於てか併合の議漸く動きしも未だ遂行の機運に至らざりしか會明治四十三年五月三十日統監子爵曾彌荒助病を以て職を辭するや陸軍大臣子爵寺内正毅統監に兼任せられ茲の歲六月二十四日帝國は韓國の警察事務を繼承し統監府警察官署官制を公布し同年七月一日之を實施するに至れり尋て同年七月二十三日寺内統監の朝鮮に赴任するや當時の狀勢併合の一日も忽諾に付すへからざるものあるを察知し韓國政府の當局者と折衝し兩國將來永遠の福利を増進せむか爲韓國皇帝自ら進みて統治權を我が天皇陛下に讓渡するの時宜に適切なることを提議せしに兩國政府の意見一致したるを以て八月二十二日寺内統監は韓國總理大臣李完用と左記日韓併合條約を締結調印せり

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ハ兩國間ノ特殊ニシテ親密ナル關係ヲ願ヒ相互ノ幸福ヲ増進シ東洋ノ平和ヲ永久ニ確保セムコトヲ欲シ此ノ目的ヲ達セムカ爲ニハ韓國ヲ日本帝國ニ併合スルニ如カサルコトヲ確信シ茲ニ兩國間ニ併合條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲日本國皇帝陛下ハ統監子

齋寺内正毅ヲ韓國皇帝陛下ハ内閣總理大臣李完用ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ右全權委員ハ會同協議ノ上左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 韓國皇帝陛下ハ韓國全部ニ關スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ日本國皇帝陛下ニ讓與ス

第二條 日本國皇帝陛下ハ前條ニ掲ケタル讓與ヲ受諾シ且全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトヲ承諾ス

第三條 日本國皇帝陛下ハ韓國皇帝陛下太皇帝陛下皇太子殿下其ノ后妃及後裔ヲシテ各其ノ地位ニ應シ相當ナル尊稱、威嚴及名譽ヲ享有セシメ且之ヲ保持スルニ十分ナル歳費ヲ供給スヘキコトヲ約ス

第四條 日本國皇帝陛下ハ前條以外ノ韓國皇族及其ノ後裔ニ對シ各相當ノ名譽及待遇ヲ享有セシメ且之ヲ維持スルニ必要ナル資金ヲ供與スルコトヲ約ス

第五條 日本國皇帝陛下ハ勳功アル韓人ニシテ特ニ表彰ヲ爲スチ適當ナリト認メタル者ニ對シ榮爵ヲ授ケ且恩金ヲ與フヘシ

第六條 日本國政府ハ前記併合ノ結果トシテ全然韓國ノ施設ヲ擔任シ同地ニ施行スル法規ヲ遵守スル韓人ノ身體及財産ニ對シ十分ナル保護ヲ與ヘ且其ノ福利ノ増進ヲ圖ルヘシ

第七條 日本國政府ハ誠意忠實ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ相當ノ資格アル者ヲ事情ノ許ス限リ韓國ニ於ケル帝國官吏ニ登用スヘシ

第八條 本條約ハ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タルモノニシテ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右證據トシテ兩全權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十三年八月二十二日

統 監 子爵 寺 內 正 毅 印

隆熙四年八月二十二日

內閣總理大臣 李 完 用 印

之ニ同時に帝國政府は韓國ニ條約を有し又は韓國に於て最惠國待遇を享けつつある獨逸、亞米利加

合衆國、墺地利、洪牙利、白耳義、支那、丁秣、佛蘭西、大不列顛、伊太利、露西亞の各國政府に對し左の宣言を爲したり

明治三十八年日韓協約成リテヨリ茲ニ四年有餘其ノ間日韓兩國政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ從事シタリト雖同國現在ノ統治制度ハ尙未タ十分ニ公共ノ安寧秩序ヲ保持スルニ足ラス衆民疑懼ノ念ヲ懷キ適歸スル所ヲ知ラサルノ狀アリ韓國ノ靜謐ヲ維持シ韓民ノ福利ヲ増進シ併セテ韓國ニ於ケル外國人ノ安寧ヲ計ルカ爲ニハ此ノ際現制度ニ對シ根本的ノ改善ヲ加フルノ必要アルコト瞭然タルニ至レリ日韓兩國政府ハ前記ノ必要ニ應ジテ現在ノ事態ヲ改良シ且將來ノ安固ニ對シテ完全ナル保障ヲ與フルノ急務ナルヲ認メ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ承認ヲ經兩國全權委員ヲシテ一ノ條約ヲ締結セシメ全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトト爲セリ

該條約ハ八月二十九日ヲ以テ之ヲ公布シ同日ヨリ直ニ之ヲ施行スヘク日本帝國政府ハ同條約ノ結果朝鮮ニ關スル統治ノ全部ヲ擔當スルコトトナレルヲ以テ茲ニ左ノ方針ニ依リ外國人及外國貿易ニ關スル事項ヲ處理スヘキコトヲ表明ス

一 韓國ト列國トノ條約ハ當然無效ニ歸シ日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラレヘシ

朝鮮ニ在留スル諸外國人ハ日本法權ノ下ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有シ且其ノ適法ナル既得權ノ保護ヲ受ケ

日本帝國政府ハ併合條約施行ノ際現ニ朝鮮ニ於ケル外國領事裁判所ニ繫屬スル事件ハ最終ノ決定ニ至ル迄其ノ裁判ヲ續行セシムルコトヲ承諾スヘシ

二 日本帝國政府ハ從來ノ條約ニ關係ナク今後十年間朝鮮ヨリ外國ニ輸出シ又ハ外國ヨリ朝鮮ニ輸入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル外國船舶ニ對シ現在ト同率ノ輸出入税及噸税ヲ課スヘシ

朝鮮ヨリ日本ニ移出シ又ハ日本ヨリ朝鮮ニ移入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル日本船舶モ亦今後十年間前項ノ貨物及船舶ニ對スルト同率ノ課税ヲ受ケルモノトス

三 日本帝國政府ハ今後十年間日本國トノ條約國ノ船舶ニ對シ朝鮮開港間及朝鮮開港ト日本開港間ノ沿岸貿易ニ從事スルヲ許スヘシ

四 從來ノ開港場ハ馬山浦ヲ除クノ外舊ニ依リ之ヲ開港トナシ更ニ新義州ヲモ開港トシ内外船舶ノ出入及之ニ依ル貨物ノ輸出入ヲ許スヘシ

又亞爾然丁、伯刺西爾、智利、格倫比亞、西班牙、希臘、墨西哥、諾威、和蘭、祕露、葡萄牙、暹羅、瑞典、瑞西の各國政府に對し左の宣言を爲したり

明治四十三年八月二十二日日本國ト韓國トノ間ニ締結セラレタル條約ニ依リ韓國ハ日本國ニ併合セラレ本日ヨリ日本帝國ノ一部ヲ成スコトナレリ爾今日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラレヘク該現行條約ヲ有スル列國ノ臣民又ハ人民ハ朝鮮ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有スヘシ

日韓併合條約の成立するや同月二十九日左記詔書の煥發と共に前記條約を公布せり

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國力禍亂ノ淵源タルニ顧ミ爰ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確定セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セヨ

同日舊韓國皇帝は舊韓國臣民に對し左の勅諭を發せられたり

朕否德ニシテ艱大ナル業ヲ承ケ臨御以後今日ニ至ル迄維新ノ政令ニ關シ亟圖シ備試シ用力未タ嘗テ至ラスンハアラスト雖由來積弱痼ヲ爲シ疲弊極處ニ至ル時日間ニ挽回ノ施措望ナシ晝夜憂慮善後ノ策茫然タリ此ニ任セテ支離益甚シケレハ自ラ終局ヲ拾收シ得サルニ底ラン寧ロ大任ヲ人ニ託ミ完全ナル方法ト革新ナル功效ヲ奏セシムルニ如カス故ニ朕於是瞿然内ニ省ミ廓然自ラ斷シ茲ニ韓國ノ統治權ヲ従前ヨリ親信依仰シタル隣國大日本皇帝陛下ニ讓與シ外東洋ノ平和ヲ鞏固ニシ内八域ノ民生ヲ保全セントス惟フニ爾大小臣民國勢ト時宜トチ深察シ煩擾ヲ爲スコト勿ク各各其ノ業ニ安ンシ日本帝國ノ文明新政ニ服從シ幸福ヲ共受セヨ朕ノ今日ノ此ノ舉ヤ爾有衆ヲ忘ルルニ非ス唯爾有衆ヲ救活セントスルノ至意ニ出ツ爾臣民等ハ朕ノ此ノ意ヲ克ク體セヨ

と以て兩國素志の相融和せるを見るべく何等の騷擾を見ることなくして併合の事成り面積一萬四千百二十三方里の領土は新に附加せられ韓國を改めて朝鮮と稱し朝鮮總督を置き天皇に直隸し委任の範圍内に於て陸海軍を統率し諸般の政務を統轄せしめらる茲に於て寺内統監は朝鮮總督に任せらる

ると同時に各地理事官に訓令を發して經營指導宜しきを得、施政の効果を擧ぐるに遺漏なからしめんことを期せり其の訓令に曰く

本日公布ノ併合條約ニ依リ韓國ハ帝國ニ併合セラレ自今朝鮮ト改稱シテ帝國領土ノ一部トナリ域内ノ人民ハ悉ク帝國ノ治下ニ立テ政令是ヨリ一途ニ出テ皆皇化ノ惠澤ニ浴スヘシ然レトモ朝鮮現時ノ狀態ハ未タ全ク帝國內地ト同シカラサルモノアリ故ニ帝國法令ニシテ直ニ朝鮮ニ適用セラルルモノノ外併合ノ結果朝鮮ニ於テ效力ヲ失フヘキ帝國法令及韓國法令ハ爾後總督ノ命令トシテ其ノ效力ヲ存續シ將來時勢ノ進運ニ從ヒ漸チ逐テ改修ヲ加フヘシ居留民團ハ元來外國ニ住居スル帝國臣民ノ設立スル團體ニシテ朝鮮カ帝國ノ版圖ニ歸シタル以上ハ自然地方行政機關ニ編入セラルヘキモノナリト雖今俄ニ之ヲ廢止スルニ便ナラサル事情アルニ依リ暫ク其ノ存在ヲ認メ將來之ニ代ルヘキ地方制度ノ完成ヲ待テ其ノ整理ヲ爲サシムヘシ又韓國及外國間ノ諸條約ハ消滅ニ歸シ帝國及外國間ノ諸條約ハ事情ノ許ス限り朝鮮ニ適用セラレ該條約國ノ臣民及人民ハ帝國內地ニ於ケルト同様ノ權利及特典ヲ享有スルト共ニ總テ帝國ノ法權ニ服從スルコトトナリ隨テ朝鮮ニ在留ス

ル外國人ニ係ル訴訟事件ハ之ヲ帝國裁判所ニ於テ管轄スルコト恰モ他ノ一般人民ニ關スル場合ト同一ナルヘシ關稅ニ至テハ之ト稍其ノ事情ヲ異ニシ今直ニ帝國ノ關稅法又ハ協定稅率ヲ適用スルトキハ實ニ外國貿易ニ劇變ヲ與フルノミナラス內國ノ經濟關係ニ對シ重大ナル影響ヲ及スヘキカ故ニ帝國政府ハ當分ノ內總テ從來ノ慣例ヲ繼續スルコトニ決シ條約上ノ規定ニ拘ラス朝鮮ノ輸出入貨物ニ對シテハ從來ト同率ノ關稅ヲ課シ又帝國內地ト朝鮮トノ間ニ出入スル貨物ニ付テモ從來ト同率ノ移出入稅ヲ課スルコトト爲セリ

元來併合ノ趣旨タルヤ兩國相合シテ一體ト爲リ彼我ノ差別ヲ撤去シ相互全般ノ安寧幸福ヲ増進セムトスルニ外ナラス然ルニ之ヲ以テ強弱兩國ノ成敗ト爲シ驕慢自ラ持シ輕浮ノ言行ニ出ツルカ如キコトアラム是レ實ニ其ノ本旨ヲ沒却スルモノト謂フヘシ從來本邦ノ居留民ハ多クハ異郷ニ僑居スルノ想ヲ爲シ動モスレハ自ラ高クシテ他ヲ蔑視スルノ弊アリ若今日ノ改革ニ際シ一層倨傲ノ心ヲ增長シ新附ノ人民ニ凌辱ヲ加フルカ如キコトアラハ却テ彼等ノ惡感隔意ヲ招キ事毎ニ杆格ヲ生シ將來永ク相融和スル機ナクシテ遂ニ不測ノ禍ヲ釀スニ至ルヘシ今幸ニ此ノ更始一新ノ時ニ會ス

宜シク其舊想前態チ一變シ新附ノ領民ハ卽我方同胞タルコトヲ念ヒ之ニ接スルニ同情ヲ以テシ之ヲ待ツニ友誼ヲ以テシ相提携シテ處世ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ隆昌ニ貢獻スルコトニ努ムルヲ要ス貴官ハ以上ノ趣旨ニ基キテ管下一般ノ居住民ヲ指導シ將來施政ノ效果ヲ擧クルニ於テ遺漏ナキコトヲ期セララルヘシ

明治四十三年八月二十九日

統 監 子爵 寺 内 正 毅

又總督は朝鮮上下の民衆に諭告し施政の綱領を示して曰く

勅聖文武 天皇陛下ノ大命ヲ奉シ本官今ヤ朝鮮統轄ノ任ニ膺ルニ際シ茲ニ施政ノ綱領ヲ示シテ朝鮮上下ノ民衆ニ諭告ス

夫レ疆域相接シ休戚相倚リ民情亦昆弟ノ誼アルモノ相合シテ一體ヲ成スハ自然ノ理必至ノ勢ナリ是ヲ以テ大日本國 天皇陛下ハ朝鮮ノ安寧ヲ確實ニ保障シ東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持スルノ緊切ナルヲ念ヒ前韓國元首ノ希望ニ應シ其ノ統治權ノ讓與ヲ受諾シ給ヒタリ自今前韓國ノ皇帝陛下ハ昌德宮李王殿下ト稱セラレ皇太子ハ王世子トナリテ後嗣長ヘニ相繼承シ萬世無窮タルヘク太皇帝陛下

下ハ德壽宮李太王殿下ト稱セラレ竝ニ皇族ノ禮遇ヲ賜ハリ其ノ秩俸ノ豐厚ナル皇位ニ在スノ時ト異ル所ナカルヘシ朝鮮民衆ハ盡ク帝國ノ臣民ト爲リ 天皇陛下撫育ノ化ヲ被ムリ長ヘニ深仁厚徳ノ惠澤ニ浴スヘシ殊ニ忠順ニ新政ヲ翼賛スル賢良ハ其ノ效勞ニ準シ榮爵ヲ授ケラレ恩金ヲ賜ハリ又其ノ材能ニ應ジ帝國ノ官吏トシテ或ハ中樞院議官ノ班ニ列セラレ或ハ申中央若ハ地方官廳ノ職員ニ登用セララルヘシ

又班族儒生ノ耆老ニシテ恭謙能ク庶民ノ師表タル者ニハ尙齒ノ恩典ヲ與ヘラレ孝子節婦鄉黨ノ模範タル者ニハ褒賞ヲ賜リ以テ其ノ德行ヲ表彰セラルヘシ疑ニ地方官吏ノ職ニ在リ國稅欠通ノ行爲アリタル者ハ其ノ責任ヲ解除シ特ニ其ノ未勘金ノ完納ヲ免セラルヘシ又従前法律ニ違反シタル者ニシテ其ノ犯罪ノ性質特ニ愍諒スヘキ者ニ對シテハ一律ニ大赦ノ特典ヲ與ヘラルヘシ

如今地方ノ民衆積弊ノ餘孽ヲ受ケ或ハ業ヲ失ヒ産ヲ傾ケ又甚シキハ流離饑餓ニ瀕スル者アリ依テ先ツ民力ノ休養ヲ圖ルノ急務ナルヲ認メ隆熙二年度以前ノ地稅ニシテ今尙未納ニ係ルモノハ之ヲ免除シ隆熙三年以前ノ貸付ニ係ル社穀ハ其ノ還納ヲ特免セシメ且本年秋季ニ徵收スヘキ地稅ハ特

ニ其ノ五分ノ一ヲ輕減シ更ニ國帑約一千七百萬圓ヲ支出シ之ヲ十三道三百二十有餘ノ府郡ニ配與シ以テ士民ノ授産、教育ノ補助竝凶歉ノ救濟ニ充テシムヘシ是皆斯ノ更始一新ノ時ニ方リ惠撫慈養ノ聖旨ヲ昭ニスル所以ナリ然リト雖國政ノ利澤ヲ蒙ル者其ノ分ニ應シテ國費ヲ負擔スルハ天下ノ通則ニシテ古今東西皆然ラサルハ莫シ故ニ克ク這般救恤ノ本旨ヲ體シ或ハ恩ニ狃レテ奉公ノ心ヲ失ハサランコトヲ期スヘシ

凡ソ政ノ要ハ生命財産ノ安固ヲ圖ルヨリ急ナルハ莫シ蓋シ殖産ノ方興業ノ途之ニ次テ振作スルヲ得ヘケレハナリ從來不逞ノ徒頑迷ノ輩遐邇ニ出沒シ或ハ人ヲ殺シ財ヲ掠メ或ハ非謀ヲ企テ騷擾ヲ爲ス者アリ是ヲ以テ帝國ノ軍隊ハ各道ノ要所ニ駐屯シテ時變ニ備ヘ憲兵警官ハ普ク都鄙ニ互リテ專ラ治安ノ事ニ從ヒ又各地ニ法廷ヲ開キテ公平無私ノ審判ヲ下スニ努ム是固ヨリ奸兇ヲ懲罰シ邪曲ヲ芟除セムカ爲ナリト雖畢竟國內全般ノ安寧秩序ヲ維持シ各人ヲシテ其ノ堵ニ安シテ業ヲ營ミ産ヲ治メシメムトスルニ外ナラス

今朝鮮ノ地勢ヲ通觀スルニ其ノ南土ハ肥沃ニシテ農桑ニ適シ其ノ北地ハ概ネ礦物ニ富ミ内河外海

亦魚介多シ遺利餘澤ノ獲收スヘキモノ鮮少ナリトセス其ノ開發ノ方法宜シキヲ得ハ産業ノ振作期シテ待ツヘシ而シテ産業ノ發達ハ主トシテ運輸機關ノ完成ニ俟タサルヘカラス是事ヲ創メ業ヲ起スノ階梯ナレハナリ今通路ヲ十三道ノ各地ニ開キ鐵道ヲ京城元山間及三南地方ニ新設シ漸チ以テ全土ニ及サムトス斯ノ如クニシテ大成ヲ將來ニ期スルト共ニ其ノ開墾敷設ノ工程ニ於テ衆民ニ生業ヲ興ヘ其ノ窮乏ヲ拯フノ一助タルヘキヲ疑ハス朝鮮古來ノ流弊ハ好惡乖逆唯利ヲ以テ相爭フニ在リ是ヲ以テ一黨勢ヲ得レハ忽チ他派ヲ戕ハムトシ一派力ヲ占ムレハ輒チ他黨ヲ仆サムトシ頑頑排濟其ノ窮極スル所ヲ知ラス終ニ産ヲ破リ家ヲ亡ホス者渺シトセス是尺害アリテ寸益ナシ爾後黨ヲ樹テ社ヲ結ヒ徒ニ輕舉妄動ヲ事トスルカ如キコトアルヘカラス但シ政令洽ク下ニ及ハス民意動モスレハ上ニ達セスシテ上壓下怨ノ弊ヲ醸スハ古今其ノ例ニ乏シカラス依テ中樞院ノ規模ヲ擴張シ老成ノ賢良ヲ網羅シテ其ノ議官ニ列シ重要ナル政務ノ諮詢ニ應セシメ又各道及各府郡ニハ參與官又ハ參事ノ職ヲ設ケ能士俊材ヲ登用シテ之ニ充テ其ノ言議ヲ徵シ其ノ獻策ニ聽キ以テ政令ト民情ト相抵牾スル所ナカラシムコトヲ期ス

凡ソ人生ノ憂患ハ疾病ヨリ酷シキハ莫シ從來朝鮮ノ醫術ハ未タ幼稚ノ域ヲ脱セスシテ以テ病苦ヲ救ヒ天壽ヲ全ウセシムルニ足ラス是最モ痛嘆スヘキ所ナリ曩ニ京城ニ中央醫院ヲ開キ又全州清州及咸興ニ慈惠醫院ヲ設ケテ以來衆庶ノ其ノ恩波ヲ蒙ル者極メテ多シト雖未タ全土ニ普及セサルヲ遺憾トシ既ニ令ヲ發シテ更ニ各道ニ慈惠醫院ヲ増設セシメ名醫ヲ置キ良藥ヲ備ヘ汎ク起死回生ノ仁術ヲ施サシメムトス

願フニ人文ノ發達ハ後進ノ教育ニ俟タサルヘカラス而シテ教育ノ要ハ智ヲ進メ德ヲ磨キ以テ修身齊家ニ資スルニ在リ然ルニ諸生動モスレハ勞ヲ厭ヒ逸ニ就キ徒ニ空理ヲ談シテ放漫ニ流レ終ニ無爲徒食ノ遊民タル者往往ニシテ之レ有り自今宜シク其ノ弊ヲ矯メ華ヲ去リ實ニ就キ懶惰ノ陋習ヲ一洗シテ勤儉ノ美風ヲ涵養スルコトニ努ムヘシ

信教ノ自由ハ文明列國ノ均シク認ムル所ナリ各人其ノ崇拜スル教旨ニ倚リ以テ安心立命ノ地ヲ求メムトスルハ固ヨリ其ノ所ナリト雖宗派ノ異同ヲ以テ漫ニ紛爭ヲ試ミ又ハ名ヲ信教ニ藉リテ明ニ政事ヲ議シ若ハ異圖ヲ企テムトスルカ如キハ即チ良俗ヲ荼毒シ安寧ヲ妨害スルモノナルヲ以テ當

ニ法ヲ案シテ處斷セサルハカラス然レトモ儒佛諸教ト基督教トヲ問ハス其ノ本旨ハ畢竟人生世態ノ改善ニ在ル方故ニ固ヨリ施政ノ目的ト背馳セサルノミナラス却テ之ヲ裨補スヘキモノタルヲ疑ハス之ヲ以テ各種ノ宗教ヲ待ツニ毫モ親疎ノ念ヲ挾マサルハ勿論其ノ布教傳道ニ對シテハ適當ナル保護便宜ヲ與フルニ吝ナラサルヘシ

本官今 聖旨ヲ持シテ此ノ地ニ花ムヤ一ニ治下生民ノ安寧幸福ヲ増進セムト欲スルノ外他念アルナシ是レ茲ニ諄諄トシテ其ノ適從スヘキ所ヲ諭示スル所以ナリ尙漫ニ妄想ヲ逞ウシ敢テ施設ヲ妨碍スル者アラハ斷シテ假借スル所ナカルヘシ若シ夫レ忠誠身ヲ持シ謹慎法ヲ守ルノ良士順民ニ至ツテハ必ス皇化ノ惠澤ニ霑ヒ其ノ子孫亦永ク恩波ニ浴スヘシ爾等恪テ新政ノ宏謨ヲ奉體シテ苟モ違フ所アル勿レ

明治四十三年八月二十九日

統 監 子爵 寺 内 正 毅

斯くて併合の事成るや同日優詔を下し給ひて舊韓國の皇帝及皇族は帝國皇族の禮を以て之を待ち子孫をして其の榮錫を世襲し永く寵光を享けしむること爲れり即ち舊韓國皇帝を冊して王を爲し昌

德宮李王と稱し舊皇太子及將來の世嗣を王世子と爲し舊太皇帝を太王と爲し德壽宮李太王と稱し又李王の懿親李嫺及李燾を以て公と爲し孰れも其の儷匹を王妃、王世子妃、太王妃、公妃と爲し殿下の敬稱を用ゐしめられ殊に李王家の歳費は在位の時と異なる所なく年年一百五十萬圓を給與せられ日常の供御も従前に比し毫も差異なく其の祭祀典禮の如きも亦削減を加へずして祖宗崇敬の道を盡すに遺憾なからしめられたり又勳功ある朝鮮人に對しては朝鮮貴族令を定め榮爵を授けられ之に依り同年十月貴族に列せられたる者七十六名即ち侯爵六人伯爵三人子爵二十二人男爵四十五人あり而も聖恩の優渥なる更に赤子を體卹するの意を昭示し給ひ舊刑諸般の罪囚中情狀の憫諒すへき者に對しては特に大赦を行ひ且積年の遺租及當年の租税は之を減免し給へり囚人にして此の惠澤に浴したる者一千七百十七人に及へり又特に臨時恩賜公債三千萬圓を朝鮮に下賜せられたり貴族及功勞者並其の遺族勅任奏任判任の官吏にして此の惠恤に與りたる者三千六百三十八人此の金額八百二十四萬六千八百圓班族儒生の耆老にして恭謙能く庶民の師表たる者に對し尙齒の恩典を興へられたる者一萬二千百五十人此の金額三十萬圓孝子節婦鄉黨の模範たる者に對し褒賞を賜りたる者三千二百九人

寡孤獨の憐愍すべき者に對し悲恤せられたる者七萬九百二人此の金額合計二十三萬五千九百圓以上は一時の恩賜にして斯の惠澤に浴したる者上下舉て感泣せざる者なしと雖未だ以て一般の民衆をして永遠無窮の天恩に均霑せしむること能はざるを以て更に臨時恩賜金の中一千七百三十九萬八千圓を全道の府郡に分與し之を基金として永久に保存し其の利子を以て士民の授産教育及凶歉救済の資に充てしめられたり又同五十萬圓を以て孤兒の教養盲啞者の教育及精神病者の救済基金に充て二百八十五萬五千八百圓を以て一般貧民の救済基金とし尙二十五萬圓を以て經學院基金と爲し文廟の祭祀經學の講究を繼續せしめ風教の維持に努め更に同二十一萬三千五百圓を以て行路病者救済基金に充てられたり

第二節 併合後の施設

一 朝鮮總督府の設置

明治四十三年八月二十九日併合條約の公布と同時に朝鮮總督府を設置し當分の間統監をして朝鮮總

督の職務を行はしめらる是より前キ舊韓國政府は明治二十七八年改革の際日本の制度を模倣し中央に内閣、中樞院、及外部、内部、度支部、軍部、法部、學部、農商工部の七部を設けたりと雖宮中の勢力常に府中を壓し内閣の更迭頻繁にして殆ど朝令暮改の狀ありしか其の後明治三十八年十一月日韓協約の結果帝國が韓國の外交事務を監理するや同年十二月統監府の開設と同時に外部を廢止し尋て明治四十年六月内閣官制を改正し總理大臣の權限を明かにし内閣會議を經へき事項を改定し同年七月日本人を各部次官以下要路に任用し且各部官制並地方官官制を改正して行政機關の統一を企圖し同年七月帝國が司法事務の委任を受くるや同年十月法部を廢し其の事務を統監府司法廳に引繼きたり斯の如くにして併合當時に於ける舊韓國の統治機關は中央に内閣以下内部、度支部、農商工部、學部、中樞院地方に道、府、郡廳、財務監督局、財務署等ありしか帝國政府は別に舊韓國政府の委託に係る政務を執行し且在留帝國臣民を管轄する爲統監府以下理事廳、司法廳、裁判所、警察官署、鐵道管理局、通信官署、特許局等を有したりしなり

二 總督府官制の施行

明治四十三年十月一日朝鮮總督府及所屬官署官制を施行し人員一千四百有餘人經費七十六萬五千圓を節約するこゝを得たり總督府は總督官房（武官、祕書課、參事官）總務部（文書課、外事局、人事局、會計局）內務部（庶務課、地方局、學務局）度支部（庶務課、稅關工事課、司稅局、司計局）農商工部（庶務課、殖産局、商工局）司法部（庶務課、民事課、刑事課）の一官房及五部より成り所屬官署は中樞院、取調局、地方廳、警務總監部、裁判所、監獄、鐵道局、通信局、臨時土地調査局、稅關、專賣局、印刷局、營林廠、醫院及附屬醫學講習所、平壤鑛業所、勲業模範場、工業傳習所、土木會議及各官立學校を總督は陸海軍大將を以て之に充て委任の範圍内に於て陸海軍を統率し一切の政務を統轄すべく總督の下に政務總監を置き總督を補佐し各部局に長官局長を置き府務を統轄せしむ此の月三日寺內總督は新官制發布の趣旨を本府及府屬官署の長に訓示して曰く

一昨一日ヲ以テ官制改正ノ公布アリ之ト同時ニ不肖竝山縣ニ對シ夫夫總督、政務總監ノ御親任アリタリ之ト同時ニ本日會合ノ諸君ニ對シテモ夫夫任命ノ發表アリタルコトト信ス又同日ヲ以テ韓國併合後ニ實施スヘキ朝鮮統治ノ政務機關ヲ御決定仰出サレタルヲ以テ同日直ニ諸官ヲ會シ俱ニ

聖意ヲ拜セムコトヲ傳ヘムトセシモ時恰モ山縣總監歸任ノ途ニ在リ一方ニハ百般ノ要務輻湊ノ際ナリシ爲心ナラスモ遷延シ本日ヲ以テ茲ニ會合スルコトヲ得タル次第ナリ

不肖今次總督ノ大命ヲ拜スルニ儕リ此ノ暗黒ナル當地ヲシテ漸次文明ニ開導シ鮮民ヲシテ満足ヲ得セシムルコトハ實ニ至難ノ業ナリト考フ然シナカラ今日迄已ニ倂合以後其ノ任ヲ辱フセルカ故ニ今後モ引續キ微力ノ限ヲ竭シテ 聖恩ニ答フル所アラントス然リ而シテ其ノ職責ヲ完フセムニハ各其ノ政務ヲ分擔スル所ノ諸君ノ協力ト補助ニ待タサルヘカラサルハ勿論ナルヲ以テ本日茲ニ諸君ヲ會シ親シク將來ノ施政ニ關シ一言訓示スル所アラムトス

今回朝鮮總督府及所屬官署官制公布セラレ次テ職員ノ任命アリ新政ノ機關ハ茲ニ一先ツ完備セリト謂フヘシ

抑モ朝鮮ノ今日アルハ一朝一夕ノ故ニ非ス帝國政府カ其ノ提擡ノ任ニ儕リテヨリ以來殆ト五年ノ歲月ヲ閱シ其ノ間效果ノ觀ルヘキモノ尠カラサリシト雖保護制度ニ依リテハ到底施政ノ改善ヲ全フスル能ハサルヲ以テ遂ニ倂合ノ實行ヲ見ルニ至レリ此ノ事タルヤ素ヨリ一ノ手段ニ屬シ終局ノ

目的ニ非ス是ニ依リテ複雑ナル舊制ヲ改メテ統一ノ組織ト爲シ以テ治績ヲ舉ケムトスル 觀慮ニ出テタルニ外ナラス

惟フニ目下ノ急務ハ新領土ノ秩序ヲ維持シ富源ヲ開發シ新附ノ人民ヲ扶掖シテ治平ノ恩澤ニ浴セシムルニ在リ然レトモ急劇ノ變革ハ確實ナル成功ヲ望ムノ途ニ非サルノミナラス却テ人心ノ動搖ヲ來スノ虞ナシトセス殊ニ弊習ノ矯正スヘキモノアルト同時ニ良俗ノ助長スヘキモノ亦尠カラサルコトヲ忘ルヘカラス且夫レ如何ニ善美ノ施設タリトモ實際ノ事情ニ適應スルニ非サレハ以テ其ノ效ヲ收ムルニ由ナカルヘシ故ニ常ニ世態人情ヲ審ニシ本末ヲ稽ヘ緩急ヲ量リ漸チ追フテ改善ノ事業ヲ進捗スルコトニ努ムルヲ要ス

今ヤ帝國ノ版圖ハ海ヲ越エテ東亞ノ大陸ニ及ヒ新ニ千有餘萬ノ人口ヲ加ヘタリ朝鮮ノ改善ヲ圖ルハ即チ帝國全般ノ安寧ト東洋ノ平和トヲ庶幾スル所以ニシテ其ノ施政ノ成敗ハ延テ國威ノ消長ニ影響スル所アラムトス然ルニ若シ舊態依然一新ノ實ヲ舉ケル能ハスムハ終ニ併合ノ本旨ヲ空フスルニ至リ内ハ國民ノ輿望ニ背キ外ハ列國ノ誹議ヲ招カム非常ノ時運ニ際會スル者ハ亦非常ノ覺悟

ナカルヘカラス本官ハ此ノ機ニ臨ミ當局職員ノ奮勵ヲ望ムコト殊ニ切ナラサルヲ得ス

凡ソ官吏ハ國家ノ選良ニシテ宜シク衆民ノ儀表タルヘシ其ノ地位ニ上下ノ差アリ其ノ職守亦相同シカラサルモノアリト雖忠誠國事ニ盡瘁スルノ義務ヲ負フニ至テハ即チ一ナリ而シテ施政機關ノ運用ハ上官下僚ノ一致ト各部機關ノ協同トニ俟タサルヘカラス各員宜シク規律ヲ重シテ放縱ヲ戒メ簡捷ヲ主トシテ繁文ヲ省キ秋毫ノ支吾凝滯ナキコトヲ勉ムルト共ニ清廉ノ操節ヲ持シ高潔ノ品位ヲ保チ勵精其ノ任務ノ遂行ニ竭シ以テ更始ノ緒業ヲ翼賛シテ 聖明ノ宏謨ニ副ヒ奉ラムコトヲ期スヘシ

翌四十四年五月本府官制を改正して視學官、編修官、視學及編修書記を置き又十一月新に官公立諸學校の官制を制定施行し更に其の翌四十五年四月官制の一部に改正整理を行ひ事務の統一と簡捷とを圖れり即ち本府に於て總務部を官房總務局に改め各部の庶務課を廢して其の事務を總務局總務課に移屬統一し官房に土木局を新設して從來本府諸部に分屬せし築港道路、治水、營繕等に關する土木行政事務を統一し所屬官署に在りては取調局、專賣局及印刷局を廢して其の事務を本府諸部に移

屬せしめ從來内務部の主管たりし衛生事務並度支部の主管たりし海港檢疫及移出牛檢疫、密漁取締及港則執行の事務を警務總監部に移屬し又所屬官署に在りては新に中央試験所を設置して從來度支部の主管たりし福造試験及農商工部の主管たりし工業に關する試験分析並鑑定事務を之に移し同時に工業傳習所を之に附置し鐵道局に於ては從來の入課を六課とし同時に同局及警務總監部所屬の印刷工場を廢止して其の事務を官房總務局印刷所に統合し臨時土地調査局に於ては總裁及副總裁を廢して局長を置き事業の進行に伴ふて所要の人員を増置し通信局を遞信局と改稱し其の所管たりし觀測事務を内務部學務局に移し度支部の所管たりし海事に關する事務を同局に移屬せしめたり

司法制度は四級制度を改めて地方法院、覆審法院及高等法院の三級制度と爲し裁判所令を改正し之と同時に民事及刑事に關する實體法及手續法を整理統一し朝鮮民事令、朝鮮刑事令その他關係法規を制定せり

敘上整理の結果職員一百八十七人、經費四十七萬八千圓を節約することを得其の後大正四年四月に至り既往三年間の經驗に徴し三たび官制を改正し本府に在りては從來の九局中總務、土木及學務の

三局を存して外事、地方、司税、司計、農林、殖産の六局を廢し從來參事官室の取扱ひたる舊慣及制度調査事務を中樞院に移せり所屬官署に在りては新たに濟州島及鬱陵島に島廳を設け島司を置き其の事務を管掌せしめたり此の結果本年度に於て俸給十萬餘圓廳費三萬餘圓を節減し其の他諸般の經費に於て總額一百十五萬圓を節約するこゝを得たり

大正五年四月一日専門學校官制を公布し京城專修學校、醫學專門學校、工業專門學校の三校を設置し別に總督府令を以て教育の綱領其の他必要なる事項を規定し外に教授上注意すべき事項を訓令せり

大正七年五月二十七日總督官房總務局に統計課を新設し從來各主務課に於て調査し來りたる統計を統一處理せしむ又同年五月十四日臨時國勢調査課を新設し大正九年十月一日を期し朝鮮に國勢調査を施行する爲其の準備事務を執らしむ又同年六月二十二日別に朝鮮國勢調査評議會を設置し會長一名評議員若干名を置きたり而して之に要する經費は百二萬九千七十五圓にして本年より同十一年に至る繼續事業なり

大正六年七月三十一日從來朝鮮に於ける國有鐵道の業務を南滿洲鐵道株式會社に委託し新に總督官房に鐵道局を設け鐵道の一般計畫及委託鐵道並私設の輕便鐵道、軌道の監督事務を處理せしむることとせり

三 職員の任用

舊韓國政府時代に在りては官吏任用の方法は科擧の制ありしも年所を經過するに隨ひ有名無實と爲り之に應ずる者は僅に名門の出に止まるのみならず苞直行はれ其の厚薄に由り採否を決定するか如き弊風を馴致するに至れり然るに併合後新に官吏任用規定を制定し試験制度を設け何人と雖其の實力を有する者は之に應じし登庸せらることを得べく雇員の如きも採用規定を設け年齢を制限し一定の試験に合格したる者より採用することと爲せり蓋し併合以前に在りては任用令に依るの外別に何等の規定なく内地人に在りては考試の方法及養成の機關なく朝鮮人に在りては舊韓國政府時代に於ける官吏を襲用するのみにして新に銓衡の道なかりしか茲に至り原則としては内地人朝鮮人の區別なく委任官は試補判任官は見習より採用の制を定め殊に判任官に在りては毎年四月及十月に於て見

習試験を行ひ判任文官たるの資格を有する者に就き内地人に在りては朝鮮語、朝鮮人に在りては國語を必須科目として相當學力の試験を行ひ其の合格者を見習に採用して各官廳に配屬し行政事務を練習せしむること一年以上を経過し初めて之を本官に任用することに定めたり

郡守は併合以後に於ても依然舊職員を存置し且其の選任に付ても一般の任用令に依らず舊韓國政府高等官の職に在りて相當の技能を有し且國語を解する者の中より採用することに定め一方に於ては判任官中よりも採用することとし特に學識經驗ある者を登庸することとせり大正七年一月九日勅令第五號を以て地方廳職員特別任用令の一部を改正し府尹は五年以上本府又は道府郡島若は警察官署の事務に従事し在職者判任官二級俸以上の者、府事務官、郡守、島司は同四級俸以上の者より任用することとなれり

四 行政區劃の整理

明治三十九年統監府設置當時に在りては韓國地方制度は全國を分ちて漢城府及十三道とし更に各道を通し一牧三府及三百四十一郡に分ち道に觀察使、牧に牧使、府に府尹、郡に郡守を置き別に開港

地に監理を置きたりしか明治四十二年始めて地方費法及民籍法を制定し行政区劃も亦隨時多少の改正を加へ併合當時に於ては十三道十二府三百七十七郡なりしか大正三年三月一日を以て府郡の廢置分合を行ひ同年四月一日を以て面の廢置分合を行ひ二百二十郡とし大正四年四月濟州鬱陵の二郡を廢して二島廳を置き二百十八郡とせり面も亦數次の廢合を行ひ現在に於ては二千五百十二面と爲せり

五 財政の整理

併合前に於ける舊韓國の財政は紊亂其の極に達し毎年歲計の豫算なきにあらざりしも唯其の名のみにして各官廳は任意に支拂命令を發して其の支出を要求し又收入に付て之を見るも税制は複雑して統一を缺き地稅の如きも其の賦課の基本たるべき結數は李朝の宣祖及仁祖の代に於て調査に係るものを踏襲し而かも其の當時は一百四十五萬餘結なりしも其の後政綱の弛廢に伴ひ地方に於て恣に結數を加減したる結果所謂隱結と稱するものを生し官民相率ゐて結數を欺隱するの弊風行はれ爲に表面上の課稅地は一百萬結を下るに至れり況んや復暴官汚吏誅求を恣にし剝へ弊政亦紊亂し私鑄偽造盛に行はれ市場物價の高低常なきの狀況なりしか明治三十七年十月財政顧問の設置に依り之を整理

の端を啓き會計法の勵行徵稅機關の統一貨幣の整理金融機關の設備等銳意刷新を圖り著著整理の歩武を進めしも其の的確の計數を得るに至りたるは實に統監府設置以後なりとす而して明治四十年に於ては日韓協約の結果行政各部の擴張、裁判所の構成、産業上の施設、土木營繕等各種事業の發展に伴ひ明治三十九年度の歳出總額（七百九十六萬七千三百八十八圓）の倍額以上に膨脹し漸次増加の傾向ありて到底其の支出を辨し難きを以て帝國政府は明治四十年以降同四十五年度に至る六箇年度内に總計一千九百六十八萬二千六百二十三圓を無利子無期限にて舊韓國政府に立替へむことを約定し明治四十年度に一百七十六萬九千五百三圓、同四十一年度に五百二十五萬九千五百八十圓、同四十二年度に四百六十五萬三千五百四十圓、同四十三年度に一千四百二十八萬二千六百二十三圓を立替へ來りしか併合當時に於ては經常の歳入にては豫期の施設經營を實行すること能はざるに依り明治四十四年以降中央政府の一般會計より一千二百三十五萬圓の補充を仰き應急の策を盡せしか爾後諸般の事業を整理し經費を節約し大正二年度に於て該補充金中より二百三十五萬圓を減し尙大正三年度以降五箇年を期し全然補充金の供給を止め朝鮮に於ける收入を以て其の支出に應ずべき計畫

を樹て已に同年度及四年度に於て各一百万圓を遞減せり而して朝鮮特別會計の獨立計畫を實行せむ
か爲には一方に於て諸般制度の整理を行ひ行政費を節約し他方に於ては産業獎勵の必要に逼まれる
を以て確實なる財源を求むるの要あり依て地稅の増徴並市街地稅及煙草消費稅の新設を企劃し大正
三年より之を實施せり茲の歲三月十六日寺内總督は各道長官に對し新稅令に付左の如く訓示せり其
の後大正五年七月酒稅令を發布し同年九月一日より實施せり

併合以來茲ニ三年此ノ間本府ハ専ラ力ヲ殖産興業ノ振作ニ效シテ民力ノ涵養ニ勉メ施設經營スル
所尠カラス或ハ鐵道ヲ敷設シ道路ヲ改修シテ以テ交通ヲ便ニシ或ハ農耕ヲ改善シ諸種ノ實業ヲ獎
勵シテ以テ生産ノ増殖ヲ圖リ之カ爲ニハ歲歲巨額ノ國費ヲ投シタルノミナラス又一面官制ノ整理
ヲ遂ク冗員ノ淘汰ヲ爲シ事務ノ簡捷ヲ計リ諸般行政費ノ節約ヲ行ヒ其ノ節約シ得タルモノハ舉ケ
テ之ヲ民福ノ増進ニ資スヘキ經費ニ充用セリ人民亦克ク本府ノ意ノ在ル所ヲ諒トシテ協戮ノ實ヲ
示シ幸ニ諸般ノ施設著著其ノ效果ヲ顯ハシ併合後日尙淺キニ拘ラス産業ノ發達大ニ見ルヘキモノ
アリ現ニ大正二年ニ於ケル貿易額ハ一億二百餘萬圓ニ達シ米穀ノ輸移出額ノミチ以テスルモ千四

百餘萬圓ヲ算スルニ至リシ如キ亦以テ諸般事業發達ノ一端ヲ窺フニ足ルヘシ

本府ハ又負擔ノ公平ヲ期セムカ爲地稅其ノ他租稅ノ整理ヲ行ヒタリ而シテ租稅徵收ノ成績ハ年ヲ逐テ良好ニ趨キ漸次國庫收入額ヲ増加シツツアリ然ルニ朝鮮經營ニ要スル費額ハ實ニ五千餘萬圓ニ達シ到底從來ノ歲入ヲ以テ之ヲ支辨スルコト能ハサルニ依リ從來一般會計ヨリ補充ヲ受クルコト千二百三十五萬圓ナリシカ是レ單ニ普通行政費ノ補充ニ過キス此ノ外中央政府ハ朝鮮ニ於ケル國防ノ施設其ノ他ニ對シ巨額ノ經費ヲ負擔セリ而シテ本府ハ中央政府ノ財政方針ニ基キ經費ノ節約ヲ圖リタル結果既ニ大正二年度ニ於テ補充金二百三十五萬圓ヲ減シ更ニ大正三年度ニ於テ百萬圓ヲ削減セリ今後遞次減少シテ五箇年ノ後ニ於テハ全ク之カ廢止ヲ見ルニ至ルヘシ

抑朝鮮經營ニ要スル費用ニ對シ一般會計ノ補充ヲ仰クハ洵ニ已ムヲ得サル所ニシテ目下未タ俄カニ之ヲ全廢スルノ機運ニ到達セスト雖產業ノ發達殊ニ農產物ノ増殖及其ノ價額ノ騰貴ニ伴ヒ經濟狀態益優良ニ赴キ人民負擔力ノ増進セルコト併合當時ト全然其ノ面目ヲ異ニスルノ今日ニ於テ徐ニ一般會計ノ補充金ヲ遞減スルノ方法ヲ策シ漸ク逐リテ財政ノ基礎ヲ鞏固ニスルハ固ヨリ適當

ノ措置ニ屬ス依テ本府ハ今回財政上ノ需要ト人民ノ負擔力トヲ考覈シ急激ナラサル程度ニ於テ地稅ノ增徴竝市街地稅及煙草消費稅ノ新設ヲ企畫シタリ

地稅ハ明治三十五年舊韓國政府ニ於テ稅率ヲ改正セシ以來現今ニ至ル迄全然增率ヲ爲ササリシノミナラス統監府設置後明治四十一年ニ於テハ貨幣整理ノ爲平安黃海京畿及江原ノ一部分ヲ除キ其ノ他ノ各道ニ對シテハ一般ニ三分一ノ減率ヲ行ヒ以テ負擔ノ均衡ヲ圖レリ又現行地稅ハ之ヲ土地ノ收益ニ比較スルニ極メテ輕微ノ負擔ニ過キス特ニ近年地方經濟ノ發達ニ加フルニ一昨年來朝鮮輸移出稅竝内地ニ於ケル朝鮮產米及紬稅入稅ノ廢止ハ著シク穀價ヲ騰貴セシメ延テ土地ノ價格ヲ昂進シ土地所有者ノ利益ヲ增加シタルコトハ顯著ナル事實ニシテ現行地稅ニ對シ四割程度ノ增率ヲ行フモ克ク其ノ負擔ニ耐フヘキハ疑ハサルナリ

從來ノ地稅結價ハ十三級ノ多キニ區分セラレ一見公平ヲ期スルカ如キモ中級以下ノ結價ハ固ト往時ノ經濟狀態ニ基キ査定シタルモノニシテ軌近交通ノ發達、經濟ノ昂進ニ伴ヒ大ニ負擔ノ公平ヲ失スルニ至レリ是レ今回此等中級以下ノ結價ニ對シ稍其ノ增率歩合ヲ高メ以テ負擔ノ均衡ヲ圖ル

所以ナリ又從來地稅ニ關スル事項ハ多ク慣例ニ依リタルモ此ノ際之ヲ明文ニ規定シ以テ取扱ノ明確ヲ期スルト共ニ新ニ荒地及開墾地ニ對スル免稅年期ノ制ヲ定メ荒地ノ還起又ハ開墾ヲ容易ニシ以テ土地ノ利用ヲ促進セシメ且災害地免稅ノ特典ヲ設ケ以テ負擔過重ノ患ヲ除カムコトヲ期セリ舊韓國時代ニ於テハ諸種ノ名義ヲ以テ地稅ニ附加シタルモノ頗ル苛重ナリシカ併合後ニ於テハ漸次之ヲ輕減シ昨年度ニ至リ面費附加ノ最高限度ヲ定メ以テ明リニ經費ヲ膨脹シ負擔ヲ増加スルヲ許ササルコトトシ本年ニ於テハ面ノ廢合ヲ行ヒ猶一層面費ノ節約ヲ圖リ之カ爲更ニ面費附加ノ限度ヲ低減シ地稅ノ増加アルモ一面附加稅ノ輕減ニ依リ結局著シキ負擔ノ増加ヲ來ササルコトヲ圖レリ

市街地稅ハ市況殷賑ナル市街地ヲ選定シ其ノ區域内ノ土地ニ對シ課稅スルモノトス此等ノ市街地ハ從來概ネ地稅ヲ負擔セサリシカ近年交通機關ノ發達並諸般ノ施設ニ伴ヒ此等市街地ノ發達顯著ニシテ土地ノ收益ヲ増加シタル狀況ナルヲ以テ之ニ對シ適當ノ課稅ヲ爲シ一般地稅ト共ニ負擔ノ公平ヲ圖ラムトスル趣旨ニ外ナラス又煙草消費稅ノ賦課ハ納稅者ニ苦痛ヲ與フルコト比較的少ク

シテ容易ニ收入ヲ得ルノミナラス近年製造煙草ノ需要増加ニ伴ヒ朝鮮内ニ於ケル製造業遽ニ勃興シタルヲ以テ之ニ對シ相當ノ賦課ヲ爲スヲ以テ適宜ノ措置ト認メタリ

以上ハ今回増稅ヲ計畫シタル理由ノ大要ニ過キスト雖租稅ノ増加ハ人民ノ利害休戚ニ關スルコト重且大ナルヲ以テ各道長官ハ能ク其ノ趣旨ノ存スル所ヲ諒得シ人民モ亦國運ノ發展ニ伴ヒ應分ノ負擔ヲ分ツハ其ノ國家ニ對スル一大義務ナルコトヲ思ヒ克ク政府ノ方針ニ獎勵スヘキ旨ヲ管下一般ニ誦諭シ以テ施行ノ圓滿ヲ期スヘシ

六 物産共進會の開設

併合以後五載の星霜を經過し朝鮮統治の基礎漸く就りて諸般の施設經營愈進捗し産業の發達制度文物の改善共に成績の見るべきものあり仍りて大正四年九月十一日より十月末日迄五十日の間に於て朝鮮物産共進會を京城に開催せり共進會の趣旨は一は以て始政五週年を記念し一は以て朝鮮將來の發展を期圖せむとし普く朝鮮物産を蒐集陳列し産業改良進歩の實績を明示して一般鮮人の奮發心を喚起し出陳生産品並生産事業の優劣得失を審査攻歿して當業者を鼓舞作興するに止まらず併せて行

政、教育、交通、經濟等諸般施設の狀況を展示し加之朝鮮舊來の文物中特に參考に資すべきものを以てし新舊施政の比較對照を明にして朝鮮民衆に新政の惠澤を自覺せしめ更に他面に於ては内地物産中特に朝鮮に關係あるものの出陳を促し以て朝鮮に於ける産業貿易の發達に資すると共に進歩改善の標的を範示して朝鮮人の苟安を警醒せしめ朝鮮人をして深く自ら反省啓發して奢侈遊惰の陋習を戒め勤儉力行の美風を助長し拮据勉勵以て益産業の改良發達と國富の増進とを圖らざるべからざる所以の理を覺らしめむとするに在り本共進會が其の施設經營上成るべく浮華を避けて質實を旨とし一意其の實を擧げむことを期したるは畢竟此の趣旨に外ならざりき此の好機會を利用し渡鮮觀光の内地人に對しては遊覽の傍ら成るべく廣く朝鮮各地の現狀を視察研究せしめむが爲各地に協贊會を設け中央地方相呼應して旅行者をして便宜を得せしめむことを期したり

會場は舊景福宮内を以て之に充て陳列館は第一號館、第二號館、審勢館、美術館、機械館、博愛館、農業分館、水産分館、參考館に分ち別に參考美術館、印刷寫眞館、鐵道局館、營林廠特設館、觀測館、東洋拓殖株式會社特設館、牛舎、鶏舎、羊豚舎等に分てり

出品點數は朝鮮内出品三萬二千六百五點朝鮮外參考品八千六十點總計四萬六百六十五點なりき
經費は主として國費に仰き本府豫算より支出したるもの五十萬圓にして各地方廳に於ける地方費支
出額並民間の寄附金に依りて成立せる各地協贊會の費用を合すれば其の總額七十萬圓に達せり
受賞者は名譽金牌受領者二十人金牌受領者百七十三人銀牌受領者六百九十九人銅牌受領者千七百三
人褒狀受領者四千三百七十人なりき

觀覽者は内地人二十一萬九千七百三人にして朝鮮人四十四萬三千八百十一人支那人三千九百五十四
人其の他外國人二千六百三十七人なり

茲に特記すべきことは本會の開會に方て 天皇陛下に於かせられては御名代として御懿親たる閑院
宮殿下を御差遣あらせられたる一事是なり殿下は妃殿下御同道にて大正四年九月二十三日東京御發
途神戸より軍艦常磐に御乘艦あらせられ海上三晝夜の後同月二十八日仁川港に著御あらせられ即日
京城に御入御一、二日を経て十月一日兩殿下は共進會開會式に臨御あらせられ令旨を下し給へり斯
くて數日御滯京の後十月五日御歸東遊されたり

七 新政施行の治績と諭告

敍上列記の外通信、農商工業、貿易、拓殖、鑛業、水産業、林業、宗教、教育、裁判、監獄、警察、衛生等施政の治績は以下章を逐て記述すへきも大正五年一月六日發布せられたる寺内總督の諭告に其の大綱を盡くせり仍て左に之を掲ぐ

新政朝鮮ニ施カレテ以還既ニ五星霜山河面目ヲ改メ窮民蘇息シ昭代ノ治化將ニ全土ニ洽カラムトス本總督ハ茲ニ願ミテ既往五年間ニ於ケル實績ヲ略敍シ尙其ノ成績ニ鑑ミ將來ニ對スル要望ヲ披陳シ管下一般ニ諭示スル所アラムトス

嚮ニ 明治天皇神略英斷半島ノ統治權ヲ收メ給フニ方リ本總督ハ至仁ノ 皇猷ヲ體シ特ニ諭告ヲ發シテ施政ノ大綱ヲ宣明シタリ然レトモ荒廢ノ邦土ヲ振興シ窮困ノ生民ヲ拯濟スルハ寔ニ容易ノ業ニ非ス歲月空シク逝キ易ク或ハ實行ノ言約ニ違ハムコトヲ恐レ爾來夙夜忡忡トシテ寢食ヲ安ンセス唯思ウテ到ラサル所アラムカ將々行ウテ及ハサル所アラムカ憂ヒタリ幸ニシテ百般ノ經營逐次其ノ歩ヲ進メ概ネ豫期ノ籌畫ト支吾スル所ナク殊ニ昨秋開催セル始政五年記念朝鮮物産共進

會ニ依リ全般ノ實績ヲ總覽シ有形無形ノ施設ヲ通シテ改善進步ノ迹頗ル顯著ナルモノアルヲ認メ
タリ是レ職トシテ官民一致克ク施政ノ方針ニ順應シ機宜ノ措置ヲ愆ラサルニ由ラスムハアラス畏
クモ 今上陛下深ク朝鮮ノ休戚ヲ軫念シ給ヒ該物産共進會ノ開催ニ方リ特ニ陸軍大將大勳位載仁
親王殿下ヲ差遣シ給フ殿下親シク會場ニ臨ミ特ニ令旨ヲ賜ウテ曰ク全土方ニ劃一ノ法ヲ奉シ群氓
漸ク同仁ノ澤ヲ懷ヒ居民堵ニ安ンシ統治緒ニ就ケリ物産ノ改良事業ノ發達亦以テ實驗ヲ既往ニ徵
シ進步ヲ將來ニ資スルニ足ルト懇諭剴切誰カ感荷セサラムヤ然リト雖今日ノ進境ハ唯纔ニ朝鮮經
營ノ基礎ヲ作りタルニ過キスシテ固ヨリ日進月歩ノ世運ニ副フニ足ラス何ヲ以テカ逸豫ヲ懷フニ
暇アラムヤ凡ソ創業過渡ノ時期ニ在リテハ銳意奮勵彌メテ息マサルモ漸ク守成ノ域ニ移ルニ及ヘ
ハ則チ往往ニシテ倦怠ノ心ヲ生スルハ人ノ常情ナリ是レ官民ノ孰レチ間ハス齊シク箴戒ヲ要スル
所タリ本總督カ毎ニ勤勉力行ノ氣風ヲ鼓吹シテ止マサルハ決シテ一時ノ奮勵ヲ促カスノ意ニ非ス
各自其ノ本來ノ任務職業ニ盡瘁シ終始一貫須臾モ渝サラムコトヲ望ムカ故ナリ若シ夫レ刻下ノ進
度ニ満足シテ心驕リ氣緩ムカ如キコトアラムカ既成ノ效果ヲ空リスルハ勿論遂ニ將來ノ大成ヲ期

スルニ由ナカラムトス豈戒メサルヘケムヤ

惟フニ朝鮮統治ノ宏謨ハ洵ニ高遠ニシテ全土ノ安寧ヲ保チ群黎ノ福利ヲ進メ帝國ノ丕基ヲ鞏固ニシ東洋ノ平和ヲ維持スルニ在リ或ハ中央地方ノ行政制度ヲ釐革シテ綱紀ノ振肅ヲ圖リ或ハ司直治安ノ機關ヲ整備シテ生命財産ノ安固ヲ保障シ或ハ産業ヲ勸メテ富源ノ開發ヲ促カシ或ハ教化ヲ施キテ人文ノ普及ニ資スル等是レ皆赤子撫育ノ聖旨ヲ顯揚セムカ爲ニ外ナラス又當面ノ急要ニ應セムカ爲臨時恩賜金一千七百三十餘萬圓ヲ各府郡ニ分與シ以テ授産、教育、救災ノ資ニ充テシメ尙恩賜財團濟生會ノ分配金並 明治天皇 昭憲皇太后兩陛下崩御ノ際朝鮮ニ下賜セラレタル多額ノ賑恤金ハ悉ク之ヲ治病救貧ノ資ニ供シ其ノ效果ノ既ニ顯著ナルモノアルハ世間周知ノ事實ニ屬ス朝鮮ニ於ケル施設ノ急務一ニシテ足ラスト雖農耕ノ改善ヨリ先ナルハ莫シ蓋シ人口一千五百萬ノ中其八割ハ農作ヲ以テ生業ト爲ス者ナレハナリ是ヲ以テ一面ニ於テ模範場、傳習所、學校等ヲ増設シテ農業智識ノ普及ヲ圖リ他方ニ於テハ實地ニ就テ耕種、灌溉、養畜ノ方法ヲ指授シタル結果作物畜牛ノ改良増殖及耕地ノ擴張並養蠶、養鵝、養豚、製紙、機織、果樹栽培ノ如キ副業ノ發

達等相俟ツテ其ノ生産物ノ總價額ハ既往五年間ニ於テ殆ト倍加スルニ至リ今ヤ億ニ三億圓ヲ超エ
米穀ノ如キハ内ニ用キテ尙餘アリ内地及外國ニ搬出シタルモノ最近一年間ニ於ケル總價額約二千
四百萬圓ニ上レリ又時蓄糧副業等ノ數全土ヲ通シテ六千六百餘其ノ貯金額八十餘萬圓ニ達シ尙
朝鮮人ノ郵便貯金ハ總額百六十餘萬圓ヲ超ユ亦以テ一般富力ノ増進ヲトスルニ足ルヘシ然レトモ
是レ畢竟多年ノ積勢ヲ挽回シテ纔ニ進歩ノ道程ニ登リタルニ過キヌ朝鮮ノ全土極北磽确ノ地方ヲ
除クノ外概ホ地味肥沃ナルニ拘ラス現今ノ耕地面積ハ二百八十餘萬町歩ニ止マリ之ヲ全面積ニ比
スレハ尙僅ニ百分ノ十二ニ過キヌ而カモ其ノ利用未タ完カラサルモノ尠シトセス之ニ加フルニ山
麓又ハ干潟ニ散在スル未墾地一百萬町歩ヲ以テス農作ノ餘地斯ノ如ク廣潤ニシテ農家ノ勞力亦頗
ル餘アリ若シ此ノ餘力ヲ擧ケテ農耕ノ改善擴張ニ盡シ尙進ンテ副業ノ發展ニ勉メハ將來農業ノ隆
興蓋シ思ヒ半ニ過クルモノアラム又旱魃洪水ノ災害ヲ防カムカ爲ニハ灌漑及水利ノ施設ヲ急務ト
シ而シテ其ノ完全ナル實績ヲ擧ケムトセハ殖林事業ニ俟ツ所多シ蓋シ樹林ノ效用タルヤ廣汎ニシ
テ或ハ土壤ノ潰崩ヲ防止シ或ハ水源ヲ涵養シ或ハ風致ニ資シ又ハ築材薪炭ノ料タルヘシ本總督ノ

殖樹造林ヲ獎勵スル所以ノモノハ獨リ旱災水害ニ備ヘムカ爲ノミニ止マラサルナリ

農業ノ外富源ノ開發ニ資スヘキモノハ鑛業及漁業ナリトス舊時ニ於テハ兩者共ニ幼稚ノ域ヲ脱セ
ス鑛産額ノ如キハ五年以前ニ於テ一年間六百萬圓ヲ出テサリシカ政府ノ施設ト相俟チ斬新ノ方法
ニ依リ採鑛ニ從事スル者頓ニ増加シタル爲今ヤ約一千萬圓ヲ算スルニ至レリ將來各種鑛物ノ發見
及事業ノ進展ニ伴ヒ益鑛産額ノ劇増ヲ見ムトス又漁業ニ至テハ一面ニ於テ水産物ノ濫獲酷漁ヲ禁
シテ漁利ヲ永遠ニ維持セムコトヲ期シ他方ニ於テ漁場ノ開拓及漁法ノ改良等ヲ獎勵シタル結果漁
獲物次第ニ増加シ其ノ總價額舊時ニ於テ七百萬圓内外ナリシモノ今ヤ一千二百萬圓ニ上レリ尙一
般ノ商工業モ一層長足ノ進步ヲ爲シ工業製產品ハ既往五年間ノ首尾ヲ對照スルニ年額一千五百五
十萬圓ヨリ二千九百五十萬圓ニ進ミ又商事會社ノ投資額ハ八千五百萬圓ヨリ一億四千萬圓ニ増加
セリ以上ノ概況ニ依リテ察スルモ各種ノ事業皆均シク順調ノ發展ヲ遂ケタルコトヲ類推スルニ難
カラサルヘシ

凡ソ産業ノ振作ハ一朝一夕ノ能クスル所ニ非ス直接獎勵ノ必要ナルト共ニ交通運輸機關ノ設備如

何ニ俟ツ所多シトス然ルニ舊時ニ在リテハ全土ノ道路殆ト壞廢ニ歸シ總督府設置以前ニ於テ改修ヲ加ヘタルハ僅ニ二十二線二百五里ニ過キス是ヲ以テ爾來一定ノ改修計畫ニ依リテ全長約五千五百里ノ道路網ヲ確定シ緩急ヲ計リテ銳意其ノ工程ヲ進メ既往五年間ニ於テ三千五百餘里ノ改修ヲ終リ稍人馬ノ往來ニ便スルヲ得タリ鐵道ハ既設ニ係ル釜山新義州間縱斷線並其ノ支線ノ外湖南、京元線ノ新設ヲ實行シ其ノ當初ノ十一年計畫ヲ改メ五年間ニ於テ其ノ全部ノ營業ヲ開始スルニ至リ尙成鏡線ノ敷設ニ著手シ既ニ其ノ一部ヲ開通シ今ヤ鐵道ノ全延長一千六哩ニ達シ重要ナル港灣ノ修築ト相俟ツテ國內運輸ノ便ヲ完ウスルト同時ニ歐亞交通ノ要路トシテ遺憾ナキニ至レリ又通信機關ハ都鄙ニ互リテ六百餘ノ多ニ上リ此等機關ノ所在地ニハ毎日一回以上遞送郵便物ノ到著セサルハナク平均一日ノ集配延里程ハ實ニ一萬五千里ヲ超エ之ヲ五年以前ノ實況ニ對照スレハ三倍ノ劇増ヲ見ル尙最近一年間ノ郵便物引受數ハ七千八百五十餘萬箇、郵便爲替金額ハ二千七百二十餘萬圓、電報發信數ハ二百二十五萬餘通ニ上リ孰レモ既往五年間ニ於テ殆ト従前ニ倍加スルノ盛況ヲ呈セリ亦以テ通信機關ノ擴張ニ伴ヒ其ノ利用者ノ頗ル劇増セル事實ヲトスヘシ

歐洲ノ戰亂ハ益其ノ範圍ヲ擴大シ慘禍ノ波及スル所眞ニ測リ知ルヘカラサルニ拘ラス我帝國ハ依然トシテ昇平ノ慶ヲ失フコトナク外國品ノ輸入ニ幾分ノ減少ヲ來シタル外何等ノ影響ヲ蒙ルニ至ラス殊ニ朝鮮ニ於テハ貿易上却ツテ良好ナル傾向ヲ呈シ最近ノ貿易年額ハ出入總計一億八百六十餘萬圓ニ達シ之ヲ五年以前ニ比スレハ殆ト倍加スルノ盛況ニ在リ就中輸移出額ハ從前ノ一千六百萬圓ニ對シ今ヤ四千九百四十餘萬圓ヲ算シ宛モ三倍ノ増加ヲ見タルハ亦以テ朝鮮ノ生産物カ此ノ短期間ニ於テ如何ニ長足ノ進歩ヲ爲シタルカヲ推知スルニ足ル殊ニ往時ニ於ケル輸移入超過ノ割合ハ輸移出ニ對シ十割強ヲ示シタルニ今ヤ僅ニ二割弱ニ減シタルハ歡フヘキ現象ナリ然レトモ出入ノ均衡未タ全ク回復スルニ至ラス輸移入超過額尙一千萬圓ニ達セムトシ輸移入品中機械類ノ如キ必要品ノ外奢侈品四百二十餘萬圓、飲食物五百二十餘萬圓、合計九百五十萬圓ニ達セムトスルハ遺憾ニ堪ヘサル所ナリ按スルニ有無相通シ彼我互ニ益スルハ國際貿易ノ原則ナリト雖國內ニ於テ生産シ又ハ製造シ得ヘキ物品ヲモ海外ニ仰キ爲ニ出入ノ均衡ヲ失スルカ如キハ健全ナル經濟ノ發展ヲ企圖スル所以ニ非ス是レ一般官民ノ戒心留意ヲ要スル所ナリトス

子弟ノ教育ハ本總督ノ夙ニ顧慮シテ措カサル所ナリ依テ先ツ初等教育ヲ施スヘキ公立普通學校ノ擴張ニ努メ既往五年間ニ於テ從前ノ一百校ニ加ヘテ更ニ三百數十校ヲ増設シ尙時勢ノ進運ニ隨ヒ高等普通教育ハ勿論農商工業、醫術、法律、經濟等ニ關スル教育機關ノ改善擴張ヲ圖ルノ目的ヲ以テ既ニ必要ノ措置ヲ執リタルニ依リ今日ニ於テハ朝鮮人ノ學生ヲシテ其ノ處世上必須ノ學術、技藝及實習ヲ修得セシムルニ於テ略遺憾ナシト謂フヘシ然レトモ凡ソ人材ノ養成ハ獨リ學校ノ教育ニノミ依ルヘキニ非ス家庭ノ好尙及社會ノ風潮モ亦子弟ノ感化ニ多大ノ影響ヲ與フルモノトス父兄タル者ハ常ニ心ヲ學生ノ訓誡ニ致シ或ハ智ニ傾イテ却ツテ奸猾ニ流レ又ハ德ニ偏シテ情弱ニ陥ルコトナク忠順勤勉必ス其ノ學修セル所ヲ實地ノ業務ニ應用セシムルヲ主眼トシ徒ラニ理論ニ走り空想ニ耽リテ一生ヲ誤ルカ如キコトナカラシムヘシ

人生ノ痛恨ハ疾病ノ災ニ遭ウテ醫療ノ途ヲ得サルヨリ甚シキハ莫シ是レ本總督カ施政ノ初ニ當リカテ醫療機關ノ擴張ニ效シ臨時恩賜金ヲ基本トシテ疾ク慈惠醫院ヲ各道ニ開設シ貧民ノ救療ニ充テタル所以ナリ今ヤ其ノ恩澤ニ浴スル者一年間ノ延人員六百五十萬人ノ多ニ上ル又濟生院ヲ設ケ

孤兒及盲啞ノ教養ニ充テ之ニ加フルニ公醫ノ配置、醫師ノ養成、衛生ノ設備ヲ以テス細民ノ疾苦ヲ輕減スルニ於テ頗ル實效アルヘキヲ疑ハス然レトモ病者貧民ハ由來限ナシ專ラ政府ノ恩惠ニノミ依頼スヘキニ非ス疾病ノ豫防ハ多ク各人ノ自衛ニ俟ツヘク窮民ノ救助ハ鄰保相扶クルノ情誼ニ由ラサルヘカラス自ラ衛リ人ヲ助クルハ郷黨ノ美風ナリ宜シク之ヲ助長スヘシ

今ヤ政務ノ機關既ニ整備シ利用厚生ノ施設モ亦殆ト遺漏ナキニ至レリ之カ運用ノ局ニ當ル者固ヨリ誠意ヲ盡シテ其ノ任務ニ執掌スヘキハ言ヲ俟タスト雖若シ一般人民ニシテ自覺奮勵之ニ對應シテ其ノ歸嚮チ一ニスルニ非サレハ如何ナル制度モ遂ニ其ノ實效ヲ發揮スルニ由ナカラムトス既往五年間ニ於テハ幸ニシテ官民一致ノ協心戮力ニ依リ百般ノ事項ニ涉リ頗ル迅速ノ進歩ヲ遂ケ之ヲ民業ノ發達ニ徴スルモ殆ト其ノ富力ヲ倍加スルノ盛況ヲ呈セルモ朝鮮開發ノ大業ヨリ見レハ是レ唯初期ノ小成ニ過キササルノミ然ルニ流離窮乏ノ舊態ヲ脱シテ家給シ人足ルノ時運ニ及ヘハ漸ク進取ノ元氣ヲ消失シ其ノ弊ノ赴ク所放逸驕慢ニ流レスンハ輕佻浮華ニ陷ラムトス是レ最戒ムヘキ所ナリトス今日ノ朝鮮人ニ於テ殊ニ此ノ弊ヲ見ル近時奢侈品及飲食物ノ輸入年額九百五十萬圓ニ

上ラムトスルハ寒心スヘキ現象ナリトス是レ實ニ本總督カ終始勉力行ト儉約貯蓄トヲ勸奨スルノ旨趣ニ違ハリ各人若シ衣食ノ費妻子ノ俸共ニ適度モ旨トシ毎ニ浪費ヲ省キテ不時ノ支出ニ備ヘ進ンテ生業ノ發展ニ資セハ自ラ富ミ兼テ國益ニモ裨補スル所アルヘシ若シ夫レ國內ノ富源餘アルニ拘ラス好ンテ生計ノ料ヲ海外ニ仰クニ至テハ國民ノ恥辱ト謂ハサルヘカラス戰禍泰西ニ瀰蔓シテ以來我國民ハ歐洲ノ製品產物ニ依頼スルノ便ヲ失ハムトス是レ寧ロ自作自給ノ機運ヲ促進スヘキ好機會ナリ今ヤ苛斂誅求ノ弊ナク火賊横行ノ患ナク而シテ交通運輸ハ勿論金融ノ諸機關モ亦略具ハリ當ニ各人日常ノ便宜ニ資スルノミナラス企業者ノ活動ヲ迎ヘツツアリ各自宜シク拮据屢勉日新ノ進歩ニ後ルレコトナク國產ヲ興シ富力ヲ進ムルコトニ最ムヘシ

凡ソ國民ノ進歩ヲ完ウセムトセハ單ニ物質的ノ發達ヲ以テ足レリトセス又當サニ忠實ナル意思ト穩健ナル氣風トノ向上ニ俟タサルヘカラス若シ夫レ利慾ニ急ニシテ理義ヲ没却シ法網ノ及ハサルヲ蔑俸シテ奸計詐略ヲ廻ラシ或ハ無用ノ事端ヲ開キテ健訟ノ弊ヲ馴致シ又ハ詭言ヲ弄シテ良民ヲ誑惑スルカ如キハ當ニ自ラ其ノ身ヲ誤ルノミナラス流毒ヲ他人ニ及ホシ遂ニ民福ヲ進メ國利ニ資

スルノ目的ヲ阻礙スルニ至ラムトス豈猛省セサルヘケムヤ

夫レ國家ノ益ハ個人ノ利ナリ個人ノ福ハ國家ノ慶ナリ其ノ揆一ニシテ固ヨリ二途アルニ非ス何人モ自己ノ私利ノ外國家ノ公益アルコトヲ忘ルヘカラス 今上陛下即位ノ際下シ給ヘル大詔ニ曰ク義ハ即チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトシト萬世一系列聖相承ケテ群黎チ子愛シ給ヒ臣民亦純忠至誠ヲ以テ 主上ニ事ヘ奉ルハ是レ我帝國ノ精華ニシテ萬邦ニ冠絶スル所以ナリ今ヤ朝鮮ハ帝國ノ疆域ニシテ其ノ屬邦ニ非ス朝鮮人ハ帝國ノ臣民ニシテ其ノ隸庶ニ非ス建國以來易姓革命窮ナキ小邦ノ屬民ヨリ一躍シテ帝國臣民タルニ至リタル者宜シク其ノ地位ノ高クシテ其ノ境遇ノ幸ナルヲ會得シ 聖世ノ良民トシテ報效ノ誠ヲ竭スノ覺悟ナカルヘカラス又從來内地人ニシテ朝鮮ニ投資シ又ハ來住シテ各種ノ職業ニ従事スル有力者及企業家歎シトセス此等ノ内地人ハ學術、技能又ハ經歷ニ於テ能ク他ノ儀表タルヘキヲ以テ後進ノ朝鮮人ヲ指導シ又ハ之ト提携スルニ於テハ全土ノ開發ヲ促進シ内鮮人ノ融合同化ヲ圓滑ナラシムルニ與ツテ力アルヘキハ本總督ノ信シテ疑ハサル所ナリ

新政施行以後五年間ニ於ケル朝鮮ノ發達ハ縱令之ヲ舊時ニ比シ霄壤ノ差アリトスルモ要スルニ唯
豫期ノ成績ヲ收メ得テ大過ナシト謂フニ過キス宜シク既往ノ實驗ニ徴シテ將來ノ進歩ニ資シ官民
協贊一層ノ勵精努力ヲ以テ殖産興業ノ發展ニ盡瘁シ今後適當ノ時期ニ於テ再ヒ進歩ノ狀況ヲ測定
スルノ機會ニ至ラハ更ニ今日ニ倍蓰スルノ實績ヲ示シ以テ拓地撫民ノ 報慮ニ應ヘ奉ラムコトヲ
期スヘシ

八 總督の更迭と施政の方針

大正五年十月九日寺内總督の内閣總理大臣兼大藏大臣に轉任せらるるや同月十六日元帥陸軍大將伯
爵長谷川好道新に總督の印綬を帯び同年十二月十日著任し翌十一日本府職員及在府所屬官署の職員
を總督府に召集し一場の訓示を試み就任の挨拶を兼ねて施政の方針を示せり其の梗概に曰く新政の
惠澤漸く全土に洽からむとするも積年の痼弊未だ猝に蟬脱せず今尙創始の時期に處し全く守成の域
に達せず畢竟生産未だ一般の利用厚生に資するに足らざるの結果に外ならず故に今後専ら力を殖産
興業の開拓に效ささるへからず徒らに當面の便に驅られ施設制度の變更を事とするか如きは豈啻に

民衆をして疑惑を介抱せしむるのみならず多年勤勞の效を徒勞に歸せしむるの虞肆からす仍て此の趣旨を體し民衆を指導啓發し以て醇厚忠良の風に化せしめ國利民福を増進せしむへし云云



朝鮮舊來のりよ豐年踊り

第二章 風俗習慣

朝鮮に於ては開國五百三年改革の時に至る迄王族たる宗親の外士族庶民及賤民の區別を認めたり士族は之を兩班と稱し文武兩列の意にして文武官に任したる者の一族を稱し文武官の任用は科擧及蔭叙の制に依りしものなり兩班は社界の上位に立ちて諸種の特權を有し文班を東班と稱し武班を西班と稱す又地方に於ける豪族を土班と稱したり庶民は常民と稱し農商工之に屬し別に中人なる者あり醫、譯官、胥吏の輩之に屬し賤民は之を公賤、私賤に分ち公賤は官奴婢、官妓、驛卒、獄卒等にして娼婦、巫覡、僧尼、私奴婢の類は私賤に屬したり而して朝鮮人は皆性を稱せしも奴婢は之を稱せず唯名のみを用ゐたり又兩班が土地家屋等を賣買するに當りては特に奴婢の名を用ゐず隨て土地囊蜆たる量案には所有者として奴婢の名を用うるを例せしたり然れども是等の制度風習は改革の時より漸次廢滅し併合後に於ては王族及遺族の外族稱上の區別を認めず又賤民中に白丁なる者あり十三道中各所に部落を成して散在し一種の穢人として待遇せられ皮革、獸肉、履物等の製造販賣を生業させ

しか今は其の區別を認めざるに至れり

往古朝鮮には支那文物の輸入と共に夙に儒教の傳播を見しか、後佛教高句麗を経て新羅及百濟に傳はり高麗に及びて最も其の隆昌を極め殊に新羅、高麗に在りては王家の尊信特に深く宮闕を以て寺院を爲し王、王妃等の薙髮して僧尼となる者あるに至れり然れども儒教は此の間修身齊家の學として士大夫より庶人に至るまで一般に之を講究し又一面に於ては老莊より出てたる道教は風水地相の説と共に新羅の時より傳來し隱然勢力を有したり而して高麗の末朱熹の學說朝鮮に入り李氏朝鮮に於ては儒學を以て國教と爲し文廟の制を擴張して到る處郷校の設置を見ざるなきに至れり又佛教を疎外し寺刹の創建を禁せしか朱子學の弊は遂に老成派と少壯派の論争を生し國を擧げて唯性理の學に沈溺せしめたり而して佛教は萎微として振はさりしと雖歴代の王家は陰に之を信仰し陵園墓には大抵願寺を置けり殊に併合後に於ては佛教再興の氣運に向へり此の他耶蘇教は李氏朝鮮の中葉より入傳し殊に近來に及び廣く傳播するに至れり又別に巫覡あり往古より一部の社界に其の勢力を有し今日に於ては儒教、佛教、耶蘇教の外諸種の神道亦入傳し殊に朝鮮人間には檀君教、侍天教、天道教等

の名を以て一種の教義を傳播しつつあり

家屋には從來瓦屋、草屋、石葺、木皮葺等の數種あり大抵溫突と稱し石を以て床下に火坑を築造し土を以て床を塗り朝夕燃火して暖を取る組織となれり家屋の構造は土石を混して築きたる牆壁を繞らし内外二重の門を設け婦人の居室たる内房、男子の客室たる舍廡、厨房、下人房、別室たる越房其の他に分ち又別に祖先の神主を安置せる祠堂を設くるものあり宮室、官衙、廟、壇、祠、院、寺刹等は其の建築極めて宏壯なるも民家は富豪の外大抵矮少なる草屋に過ぎず而して従前に於ては二層建の家屋を建つることなかりし

衣は大抵綾紗、袖、苧麻及木綿を用ぬ男子は筒袖の上衣及袴を着け又襯衣を上衣の下に着け周衣を重ね漆笠を被り腰に巾着を着け鞋を穿ち四時襪を解かず又吐手を穿ち扇を携ふる風あり古來白衣を禁せしか好て白衣を用ぬ又従前に在りては官吏の禮服あり革帶を結び冠を戴き靴を穿ちしか今尙一般婚儀に之を用う又小兒は式祭日に幘巾を戴く習あり雨日には多く傘を用ぬす油紙を將て笠を傘のみ然れども木履を用うることは往時よりの習なり女子は上衣を着け袴を重ね更に裙を纏ふ鞋を穿

つも周衣は多く用ぬす指環を箆し襟に飾環及び刀子を結ふ又吐手を穿ち襪を用うるこゝ男子に異らす外出には轎に乗り又は長衣を被り平安、成鏡の地方にては竹笠を被り或は手巾を頭に纏ふ又平安兩道地方には未婚婦か耳に環を附する風あり

食は米飯を常食とし獸肉、魚肉、蔬菜の類を調理して副食物となし脚床を用う器皿には主として鍬器を用ひ又陶器を用ひ喫飯には鍬匙を用ひ副食物には箸を用ひ又米飯に水を注ぎて食し麴汁を嗜む好て蕃椒及蒜を用ひ調理漬物總て之を省くこゝなく又最も沈菜漬物を愛用す山間に在りては粟、稗、黍の類を食し寺刹にては山菜、木芽、草根を食す酒は火酒、藥酒、濁酒を嗜好す男女共喫煙し從來大抵朝夕二食なりしか今は往往三食を爲す者あり

朝鮮に於ては男子は必ず冠禮を行ふこゝこゝなれり冠禮は童幼成人の域に入るの禮にして一に元服ともいひ本來は齡十五を過ぎて之を行ふべきものなるも風俗早冠を競ひ十一二歳にして之を行ふ者さへあり又婚約成ると同時に之を行ふ例なるを以て娶妻の資なき者は壯年を過ぎて尙冠禮を行はざる者あり而して冠禮を行ふ前に在りては皆髮を編みて後に垂れ之を總角と稱す然るに冠禮を行ひたる

後は髻を結び漆笠を戴き十五歳以下の者は特に草笠を用う又冠禮を行ふと同時に幼名を改めて本名を定め之を冠名ともいふ但近年大抵幼名を以て本名と爲すに至れり冠名は五行相生即ち木生火、火生土、土生金、金生水、水生木の次に依り父、火行の文字を用うれば子は必ず土行の文字を擇ふ文字の五行は偏、旁、頭、尾、副、義等を標準とし根字は本偏なるを以て木行とし烈字は火尾なるを以て火行とするか如し今は斬髪を行ふ者漸く多く髻を結び笠を戴く者漸次減少せりと雖冠禮を行ふの習は革まらず

女子には葬禮あり男子の冠禮に相當す未嫁の女は髪を編みて後に垂るること男子に異らす然るに婚禮の日に至れば其の且を以て髪を結び簪を挿む之を笄禮といふ而して既婚の女は常に髪を結び以て未婚の女と區別す

婚姻は女が男の家に入るを本則とし例外として男が女の家同居することあり之を招婿又は贅婿と稱す而して朝鮮には婿養子、入夫等の習なし近親間及男系の血族間に於ける通婚を避くることは嚴格に行はれ男系の血族は幾世を経るも断して婚姻を爲さず男系の血族なること否とは姓及本に據りて

之を別つ即ち人の姓は父の姓に因りて定まり身分及戸籍に移動あるも變更せず故に父子は常に同姓にして男系の血族は皆同姓なり然れども男系の血族に非ずして同姓の者あるを以て別に本を稱す本は族祖の出てたる地名にして血族に非ざる同姓は必ず本を異にするより本及姓の同じき者は皆男系の血族なり而して本及姓は之を戸籍に登録し日常對話の間にも亦之を用う

一夫一婦は儒教に於ける婚姻の本義にして婚姻は必ず一男一女の間に成立するものなるも婚姻の目的は後繼子を得て祖先の祭祀を絶たざるに在りし此の趣意に於て子なき者は妾を娶ることを許しかば遂は滔滔として風を成し一人にして數妾を蓄へ寧ろ之を誇とするに至れり但近年漸く之を改むるの氣運に向へり

婚姻を爲すには父祖又は長上を主婚者と爲し其の合意を普通婚姻成立の要件と爲せしか現今は當事者の意思を尊重するの傾向を示し父祖長上の同意を得て婚姻を爲すを認むるに至れり又婚約前に於ける會見の習なきを以て男女は行禮の目に至り始めて相見のみ婚姻の儀式は女家に於て行ひ其の夕新夫は新婦を伴ひ歸りて父母に見えしめ更に女家に至り留ること三日にして歸家するを例とす

婚姻の年齢は舊制男十五歳女十四歳以上なりしか早冠を競ひ冠禮は婚約成りて後之を行ふより遂に男子早婚の風を馴致し女子は十五六歳を通例とするも男子は十一二歳にして婚姻を爲す者あるに至り唯現今實際の取扱としては男滿十七歳以下女滿十五歳以下の婚姻届を受理せず慣習に従ひ有效に婚姻を爲したる者の間に生れたる子と雖父母が此の年齢に達するまでは庶子として戸籍に登録するこゝとせり

離婚には所謂妻七去の制あり又所謂三不去の法ありしも現今は行れず

寡女の再嫁は之を禁し世人亦之を卑みしより寡女は己むこゝとを得ずして妾となることあり又寡女を強奪して同棲する者ありしか甲午改革の時より其の禁を解けり

儒教に依れる朝鮮の葬式は親戚知音のみにて行ひ神官、僧侶の之に干與することなし又火葬は最も忌む所にして皆土葬を爲し夫妻は大抵合葬す棺は横棺を用ゐ大抵先山に葬るも又別に地區を選ぶことあり風水地相の説古より傳り李朝に至りて最も甚しく之がために種種の弊害を生し山訟絶ゆることなかりしか墓地規則の制定後原則としては共葬地の制を執り其の弊を杜絶せんとせり又従前には

界限の制あり身分品階等に依り方百歩より十歩の差あり界限内は所有の如何を問はず他人の入葬を許さざりしか是亦近年之を廢せり

喪は五服の制を守り三年より三月に至る五服とは斬衰、齊衰、大功、小功及總麻にして斬衰は粗麻を用ぬ下邊を緝縫せず期間は三年にして父の喪に子此の服を著く齊衰は粗麻を用ぬ下邊を緝縫す期間は三年、一年、五月、三月等にして齊衰三年は子母のために著く大功は粗練の麻布を用ぬて製し期間は九月にして妻夫の祖父母のために著く小功は稍細練の麻布を用ぬ期間は五月にして長孫婦の爲めに著く總麻は熟布にして期間は三月なり衆孫婦の爲に著く此の服制に各階級を通して行はれ到る所喪服の人を見ざるなし

祖先祭祀は儒教の最も重する所にして久しく儒教の感化を受けたる朝鮮人は亦最も之に重を置けり而して朝鮮人は特別の信仰を有する者の外神を祭らず又佛を拜せず祖先は自己より遡りて四代までの神主を祠堂に於て祀り五代以上は神主を墓所に埋安す祠堂は住家の後部に別に建つべきものなるも多くは住家の一室を之に充つ而して未婚者は祀らず妻婦は其の夫に耐祀す祭祀を行ふ者は男系の

子孫たる男子に限り之なき時は伯叔父兄弟等攝祀を行ひ又妻婦權祀を行ふ祭祀は祠堂及墓所に於てし忌日の外正朝、寒食、端午、秋夕、冬至、大臘等を祭祀の日とす

朝鮮に於ける相續は祭祀の承繼を主たる目的とし家系の承繼は同時に祭祀者たる地位の承繼なり而して之を承繼する者は男系の長男子にして之なきときは長孫承重を爲し又長男子孫未婚の儘なる時は次子孫之を承繼す又男子孫なき時は養子を爲し之を承繼者とす養子と爲すことを得る者は義父となる者の子の列に當る者に限り之を昭穆の序と辨す男子孫なく又養子を爲すことを得ざる時は茲に家系の斷絶を生し一家の絶滅を來すものとす

여 백

第三章 地誌

第一節 地形及地勢

朝鮮は亞細亞の東南に斗出せる一大半島にして地形南北に長く東西に短し南北最長の處は二百十里に達し東西最廣の處は雖九十里を越えず東經百三十四度五十六分二十三秒より百三十四度十一分に至り北緯三十三度六分四十秒より四十三度三十六秒に互り面積一萬四千三百十二方里餘を有す東は日本海に面し西は黃海に臨み北は長白山脈鴨綠江及豆滿江の一部を以て滿洲及露領沿海州に連り南は朝鮮海に瀕す日本海と朝鮮海との間に對馬島あり以て對馬及朝鮮の二海峡をなす對馬海峡は一に東水道と稱し朝鮮海峡は一に西水道と稱す

朝鮮の海岸は東方と南方及西方とを比較するに著しき差違あり東海岸は出入極めて少なく岬灣島嶼甚だ稀にして從て良港に乏しく僅に元山、城津、清津等あるに過ぎず然るに南及西の海岸は長汀曲浦相連り恰も鋸の齒の如く大小の島嶼星羅棋布して幾多の内海浦灣を形成するを以て釜山、木浦、

群山、仁川、鎮南浦等の港灣を始めとし、錨地頗る多し

嚮て朝鮮の地勢を見るに北境には長白山脈蜿蜒として東方より西南に沿ひ一枝南に延ひ平安、咸鏡兩道の境を劃して江原道に入り東海岸線に沿ひ南方に駛走し以て半島の脊梁骨をなす此の如く大山脈東方に偏在するを以て山脈以東の地は斜面急峻にして殆んま平野と稱すへきものなく従つて江河の大なるものなし之に反し山脈以西は比較的緩なる斜面をなし平野處處に少なからず鴨綠江、大同江、漢江、錦江、洛東江等其の間に縈流して舟楫の便漕漑の利あり地味概して豊饒なり

第二節 氣候

氣温 平均氣温は南部は攝氏(以下同し)十三四度にして漸次北方に遞減し京仁地方より元山地方に至れば十度餘又龍岩浦附近より城津附近は八度内外にして北鮮内陸に入れば三乃至四度なり之を本土に比較すれば南岸は福井地方に中部は信濃地方に比すべく又北鮮の沿海地方は函館地方に内陸高原は恰も北海道内陸と相似たり而して年中最暖なるは八月最寒なるは一月にして其の差南部は二十三四度中部は二十七八度北部は三十二度内外にして就中國境地方は四十度を越ゆること稀ならず之

を彼の本土の中部沿岸地方は此の差概ね二十一二度内陸は二十四五度北海道内陸の三十度弱なるに比すれば寒暑の差稍大なるを見る今各地に於て從來觀測せる氣温の高低極を掲ぐれば左の如し

地名		氣温 高低極		
高	極	低	極	
木浦	三五・一	大正六年八月二十日	(-) 一四・二	大正四年一月十三日
釜山	三三・六	明治三十九年七月二十七日	(-) 一四・〇	同
大邱	三九・〇	大正四年八月五日	(-) 一八・六	同
仁川	三五・〇	同	(-) 二〇・九	同
京城	三六・七	同	(-) 二一・五	明治四十四年一月十三日
江陵	三七・三	同	(-) 二〇・二	大正四年一月十三日
平壤	三六・一	同	(-) 二八・五	同
元山	三九・六	同	(-) 二一・九	同
龍岩	三四・三	大正六年六月十六日	(-) 二六・七	同
城津	三五・五	明治四十二年七月二十五日	(-) 二四・六	同

地名	高	極	低	極
中江鎮	三五・五 ^度	大正五年八月十五日	四〇・八 ^度	大正四年一月三十日
雄基	三二・一	同 三年七月二十九日	(一)二四・三	同 四年一月十二日

本表中(一)印を附せるは氷點以下の温度を示す以下氣温に關する諸表皆同し

即ち高極は西岸及南岸は三十四度内外其他に在りては三十五乃至三十九度に達す斯の如き暑氣は本土に於ては到る所に遭遇する所なるも寒氣に於ては零下十五度に達する事あるは美濃地方乃至福島、山形地方にして同二十度以下に降るは北海道の各地に在り更に零下二十五度以下に降るは北海道内陸の十勝上川地方に間間起ることあるのみ故に寒氣に於ては本土の各地に比し甚だ酷烈なるを見る氣温晝夜の差も亦稍著しく沿岸は八度内外にして内陸は十度餘北部の内陸高原に於ては十五度に達する地方あり

風 全半島を通して季節風の勢力卓越するを以て主風の方向は季節に因り略一定せり即ち十月より四月迄は北乃至北西風にして六月より八月までは一般に南風なり兩季節風の交替期なる五月及九月前後は風向區區にして一定せず又西岸及南岸は冬季の北西風を受くるか故に此の季節に於て風力殊に強く之に反し東岸は朝鮮山脈に遮らるるに因り概して弱し而して冬季大陸に發生したる低氣壓の滿洲又は朝鮮北部を過ぎて日本海方面に通過したる後大陸方面に高氣壓發達するときは強烈なる北乃至北西風を起すと共に氣溫頓に降り甚しきときは前日との差十度以上に達する事あり而して大陸の高氣壓衰退して低氣壓の顯はれむとするや風力減衰し寒氣亦退くを以て冬季に於ては寒暖の日交錯するを常とす俚俗に三寒四溫の語あるは蓋し之を謂ふなり

雨雪 雨雪の年量は半島の大部分は八百乃至千耗なるも南岸及中部東岸は之よりも多く釜山及元山地方は千四百耗以上に達す是れ半島に於ける最多雨の地方なり而して北部内陸高原地方に於ては六百耗内外に過ぎず之を本土の各地方に比するに南岸地方は略瀬戸内地方に比すべく元山地方を除く中部以南は信濃及兩毛地方と相似たり已に氣溫に就きても亦前記兩地方の相似たるを述べたるか之

を以て見るも近年釧路の半島に適するを稱道せらるる所以の偶然にあらざるを知るに足る而して北部寡雨の地方は本土に於ては之に比すへき地方なし然れども半島に於ては降雨の季節畧一定し十月より翌年三月に至る乾燥季に際しては其の量極めて少く此の六箇月間の雨雪量は降雨季一箇月の量にも充たす之に反し六月より九月に至る降雨季節中に年量の大部分を降下するを常とす故に北部地方は雖降雨季の雨量を以て比較するときは北海道地方と敢て譲らざるを見る斯く冬季に於ける量は寡少なるを以て北部に於ても積雪は甚た少し雨天日數は概して百十日内外にして木浦及元山地方は百三十日内外又中江鎮地方は百五十日に達す而して降雨季に於ては月中三分の一以上の雨天日數を算することあるも概して降雨の時間短く本土に於けるか如く霖雨數日に迷るか如きは殆ど見ざる所なり

蒸發 斯の如く雨量少く空氣乾燥にして且日照多きを以て蒸發量は甚た多し其の一箇年間の合量は北部は千百崙内外西岸は千三百崙餘南岸の釜山地方は千五百崙に達し本土に於て蒸發量の多き瀬戸内地方は雖半島中蒸發寡少なる地方と相匹敵するのみ西岸地方に於て天日製鹽業の著著效を收めつ

つある洶に以なきにあらす而して東岸の西岸に比して蒸發の少きは前述の如く同地方の風力弱きも其の一原因ならん

霧 朝鮮近海の濃霧は日露戰役以來世人の注目する所となれり濃霧は半島の東西沿岸を流るる所の暖流方面に於て三月より八月に至る間に屢起り殊に七月に於て最頻繁なり同月仁川沖合方面に於ては全月殆ど濃霧を見ざるこゝなき程なり濃霧の一度襲來するときは冥濛として眞に咫尺を辨せず其の甚たしきは三晝夜に渉るこゝあり之が爲に船舶の航行を妨げらるる事尠なからず

叙上半島風土の大要を明にするを得へし從來朝鮮全土を以て寒暑共に酷烈なりとなし又は雨量寡少にして農耕に適せずとすなすか如き説をなす者往往あり然れども從來の實測は全く其の然らざるを示すのみならず却て本土の或地方に比すれば居住に適順にして且農桑にも佳良なるは近來の實績に徴するも明なり況んや暴風雨の如き本土に比し極めて尠なく稍強烈なるものは年に一二回に過ぎず又本土に於て時々多大の損害を齎す彼の地震の如きも極めて少なり

氣溫及雨量

天氣日數

地名	氣溫 (攝氏)			雨量 (降)	
	平均	最高	最低	平均年總量	最多日量
木釜山	一三・〇	一七・三	九・七	一〇二五・五	二〇〇・一
大邱	一三・五	一七・三	九・八	一四五六・二	二五〇・九
仁川	一二・六	一八・四	七・四	九八九・八	一三一・五
京城	一〇・五	一四・七	七・一	九五・四	二二九・九
江陵	一〇・七	一六・二	五・九	一一二九・四	二五四・七
平壤	一二・二	一七・〇	七・九	一一一一・二	二一〇・二
元山	九・〇	一四・四	四・三	八九一・〇	一六七・四
龍津	一〇・一	一五・三	五・九	一四一一・二	二四三・〇
城岩	八・〇	一二・七	三・九	八八四・九	一九八・六
中津	七・八	一二・七	三・七	六九二・七	一八七・二
江鎮	三・三	一〇・三	三・〇	八三一・八	九一・九
雄基	五・八	九・九	二・〇	六七五・九	二〇八・五

地名	雨天	電雷	霧	霜	快晴曇	天暴	風
木釜山浦	二二八	一九八	一五	五一	五一	一三二	一七八
大邱山	一〇七	九	四	一九	九五	一〇四	二二八
仁川	九七	一〇	四	九一	七七	一一二	三〇
京城	一〇四	一二	三九	六四	八一	一〇四	一七三
江陵	一一二	一三	一三	九六	六九	一〇五	二〇
平壤	一〇六	六	二	四八	八六	一二四	九六
元山	一一三	九	二〇	一一七	九一	九六	一九
龍津	一〇一	一五	八	七四	一〇一	一一一	四一
城嶺	一一〇	六	一七	九七	一〇四	八八	一三七
中江	一五〇	一九	五	一六七	四九	一三四	三〇
雄基	一一四	七	四二	五二	七一	一二七	一九七

本表中雨天は一日の降水量十分の一以上、快晴は曇量十分の二以下、曇天は同十分の八以上、暴風は風速度一秒間十米以上ありたる日とす

霜雪の季節

地名	初霜		終霜		霜		初雪		終雪	
	平年月日	最早年月日	平年月日	最晚年月日	平年月日	最早年月日	平年月日	最早年月日	平年月日	最遅年月日
木浦	月日	年 月 日	月 日	年 月 日	月 日	年 月 日	月 日	年 月 日	月 日	年 月 日
釜山	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
大邱	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
仁川	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
京城	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
江陵	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
平壤	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
元山	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
龍岩浦	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
城津	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
中江鎮	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一
雄基	一〇・二六	大正 元・一〇・一〇	四・一三	同 三・四・二九	一・二二	大正 六・一・一六	三・二一	同 三・二一	三・二一	同 三・二一

本表は各測候所創立以來大正七年初に至る統計なり

江河結解氷の季節

名	稱	結		氷		解		氷	
		平	最	平	最	平	最	平	最
		年	年	年	年	年	年	年	年
		月	月	月	月	月	月	月	月
		日	日	日	日	日	日	日	日
鴨	綠江	一一・六	大正 元・一・二四	三・一六	大正 四・三・三一	一一・二	大正 四・三・三一	一一・二	大正 四・三・三一
大	同江	一一・二三	明治 四二・二・二三	三・六	大正 二・三・一九	一一・二	大正 二・三・一九	一一・二	大正 二・三・一九
漢	同江	一一・二七	明治 四三・二・二三	三・三	大正 二・三・一九	一一・二	大正 二・三・一九	一一・二	大正 二・三・一九
豆	滿江	一一・一	大正 元・一一・二一	四・一一	大正 二・四・二二	一一・二	大正 二・四・二二	一一・二	大正 二・四・二二

本表中鴨綠江は明治三十七年以降、大同江は同四十年以降、漢江は同四十年以降、豆滿江は同四十三年以降各大正七年初に至る統計なり

測候所創立年月日及統計年數

測候所	創立年月日	統計に用ひたる年数	測候所	創立年月日	統計に用ひたる年数
木浦測候所	明治三三・三・二五	一三	平壤測候所	明治四〇・一・一	一一
釜山測候所	同 三七・四・四	一三	元山測候所	同 三七・四・二〇	一三
大邱測候所	同 四〇・一・七	一〇	龍岩浦測候所	同 三七・五・一	一三
觀測所(仁川)	同 三七・四・一〇	一三	城津測候所	同 三八・五・二三	一一
京城測候所	同 四〇・一・一	一〇	中江鎮測候所	大正 三・五・一	四
江陵測候所	同 四四・一〇・一	六	雄基測候所	同 三・五・一	四

第三節 戸口

大正六年十二月末日の調査に據れば現住内地人戸數は九萬三千三百五十七戸人口三十三萬二千四百五十六人、朝鮮人戸數三百十萬七千二百十九戸人口一千六百六十一萬七千四百三十一人、外國人戸數五千百九十一戸人口一萬九千百十人なり

左に戸口に關する各種の統計を掲ぐ

現住戸口累年比較

年	戸				合計	人			
	内地	朝鮮人	支那	其の他		内地	朝鮮人	支那	其の他
明治四十三年末	五〇、九三三	二七、四九、九五六	二七、〇〇〇	三六五	二八〇、四一〇三	一七一、五四三	一三、二八、七八〇	二一、八一八	八七六
同 四十四年末	六二、六三三	二八、一三、九二五	二八、八九九	四二二	二八七、九、八七〇	二二〇、六八九	一三、八三、三七六	二一、八三七	九六七
大正元年末	七〇、六八八	二八、八五、四〇四	三、四二七	四四九	二九五、九、九六八	二四三、七二九	一四、五六、七八三	二五、五二七	一〇七二
同 二年末	七七、二二九	二八、六四、一二三	三、八七五	四六九	三〇〇、五、五八六	二二七、五九一	一五、一六、九二二	二六、三三三	一一二七
同 三年末	八三、四〇六	三〇、三三、八二六	四、〇七六	四七三	三二二、二、七八一	二九二、二二七	一五、六三、〇七三	二六、八八四	一一四一
同 四年末	八六、二〇九	三〇、〇七、四六三	三、八二一	四六九	三二一、七、九六一	三〇三、六五九	一五、九五、七六三	二五、九六八	一一三三
同 五年末	九〇、三五〇	三〇、〇七、〇三二	四、四八八	四七二	三二一、七、三六一	三二一、八九八	一六、三〇、九一七	二六、九〇四	一一〇八
同 六年末	九三、三五七	三〇、〇七、二一九	四、三三三	四六九	三二〇、五、七六七	三二二、四五六	一六、六一、七四三	二七、九六七	一一四二

本表内地人戸口は在朝鮮軍隊員を包含せず以下内地人に關する諸表皆同し

現住戸口道別

大正六年十二月末日

道	面積	戸數				合計	人口					
		内地人	朝鮮人	支那人	其他外國人		内地人	朝鮮人	支那人	其他外國人		
京畿道	八,三〇八 <small>方里</small>	二四七五二	一三,四二四	九六五	一六三	三,五〇二	九一,七二七	一六,七二五	三,九八七	三,〇〇〇	一七,七二七	二一,三二六
忠清北道	四八二〇	二二,二二二	一四,三九〇	二二三	九	一四六,二六四	七三,六六七	七三,八六六	四〇七	一八	七四,六六八	一五五,一七
忠清南道	五,五九六	四八,三三三	二〇,八九三	五〇三	二二	二二四,二八六	一七,九三六	一〇,九六九	一七,〇〇〇	四〇	一,一六五	三,三三三
全羅北道	五,五三一	五九,四三三	二二,七五三	二五三	二五	三三三,七三二	二二,二二三	一〇,九六五	七,八四四	六二	一,一八五	二,〇二七
全羅南道	九,〇〇四	七〇,二六六	三三,三七三	二五三	二〇	三六〇,九一一	二五,四一七	一八,五一四	四,五三二	八二	一,八七三	二,〇八〇
慶尙北道	一,三三二	八〇,六〇〇	三三,七三四	一三三	二四	三八五,五五五	二八,〇六八	二〇,二六一	四,〇〇四	五三	二,〇四四	一,六六一〇
慶尙南道	七,七七八	一六,〇一一	三三,三三五	一一八	二二	三三九,三七七	六二,二五九	一七,〇〇七	四,五九	四六	一七六,三四五	二二,三三三
黃海道	一〇,八四八	三五,一三三	二五,三〇八	三三三	四九	二五六,九三三	一〇,六一三	一一,七八八	一,三四四	八六	一一,〇八九	一一,八九八
平安南道	九,六七七	六四,八八〇	二〇,三九六	三五〇	三〇	二二〇,八二二	二二,七三三	一四,〇九三	一,三五〇	九七	一,一三三	一,一七〇
平安北道	一,八四四	三三,四三三	二〇,九四七	一〇,〇八	七三	二二九,九九九	一〇,四三六	一一,二二七	四,七〇七	一六八	一一,三〇七	六,六〇〇
江原道	一,七〇二	二二,九一一	二〇,九七三	二五二	一一	二二一,六二六	六,三九一	一一,二四三	三,〇三三	二八	一,一三二	六,六四二
咸鏡南道	二,〇七三	四九,四八八	二〇,一六八	四一〇	二二	二〇七,〇五九	一六,三七七	一一,〇一八	一,二七五	五二	一一,二九四	五,八八三
咸鏡北道	一,三九二	三八,五五五	八,一〇七	二二五	七	八五,〇九四	二二,一八五	五,二四三	七,九四	三三	五,二七五	四,〇〇〇
總計	一四三,二二〇	九三,三五七	一〇七,七一九	七,三三三	四六九	一,〇七五,七六七	三三三,四五六	一六六,一七四	一七,九六七	一,一四五	一,六九六,八九七	二,一八五

平均人口

現住人口諸比例

年	人口百に付		男百に付		女		平均一方里に付	
	内地人	朝鮮人 外国人	内地人	朝鮮人 外国人	内地人	朝鮮人 外国人	内地人	朝鮮人 外国人
明治四十三年末	一・二九	九八・六二	八四・九	八八・八	一二・九	一一・〇	九一・七・三	〇・九
同 四十四年末	一・五〇	九八・四一	八三・六	九〇・二	九・三	一四・七	九六・六・五	〇・九
大正元年末	一・六四	九八・二四	八五・三	九二・〇	九・〇	一七・〇	一〇一・七・八	一・二
同 二年末	一・七六	九八・一三	八五・七	九二・七	九・二	一九・〇	一〇五・九・九	一・二
同 三年末	一・八三	九八・〇六	八六・五	九三・二	一〇・二	二〇・三	一〇九・一・四	一・三
同 四年末	一・八七	九八・〇三	八六・三	九四・八	一一・七	二一・二	一一一・五・〇	一・二
同 五年末	一・九二	九七・九七	八六・九	九四・四	一一・八	二二・四	一一三・九・五	一・三
同 六年末	一・九六	九七・九三	八七・一	九四・三	一二・二	二三・二	一一六・一・一	一・三

現住戸口職業別

(一) 戸數

年	内地人			朝鮮人			外国人		
	大正元年末	二年末	三年末	同	同	同	同	同	同
農業、牧畜、林業、漁業等	七三、九六	九、二四	一一、四八〇	一一、五八	一一、二二七	一一、二二七	二、六六六	五、九二	五、八七
工業	一〇、八五八	一〇、二〇五	一〇、一五九	九、四三三	一〇、五二二	一〇、五二二	六、四三三	三、二二	三、五八
交通業及 商業	三三、一一八	三三、七六九	三三、五五〇	三三、三六〇	三三、九二九	三三、九二九	一八、四一三	二、〇二	二、〇二
公務及 自由業	一六、四八一	一八、二二七	二一、八六三	二四、七三三	二九、九三三	二九、九三三	四、八二〇	五、八〇	五、三三
其の他の 有業者	一一、三三〇	一一、五〇三	一一、六六〇	一一、三三三	九、二八七	九、二八七	八、二八〇	五、二六	五、七三
無職業者 を申告せ ざる者	二六、八八	二八、一一	一、六六〇	四、二二	三、五五九	三、五五九	四、四五〇	八、八	九、五
合計	七〇、六八八	七三、三三〇	八三、五〇六	八六、二〇〇	九〇、三三〇	九〇、三三〇	三、八八五	三、八七六	三、八七六

(二) 人口

年	内地人		朝鮮人		国外		合計
	同	同	同	同	同	同	
大正元年末	二七、四五〇	三五、九七七	二〇、八二五	二〇、八二五	二一、六四四	七、七六一	二四、三七一
二年末	三六、一〇八	三五、五五五	二二、八九七	二二、八九七	一八、五八九	一〇、一八九	二七、五九一
三年末	四三、四一三	三五、五三九	二六、〇〇六	二六、〇〇六	一八、五七九	四、二二七	二九、八〇六
四年末	四三、六四九	三〇、三九八	二六、〇〇六	二六、〇〇六	一八、五七九	四、一八七	二九、一八七
五年末	四六、五四九	三八、九九三	二四、〇七二	二四、〇七二	一八、五七九	四、一八七	三〇、三六五
六年末	四八、八九八	四四、三二八	二四、〇七二	二四、〇七二	一八、五七九	四、一八七	三二、〇九三
大正元年末	二〇、八二五	二〇、八二五	九、九〇三	九、九〇三	七、四六四	一、七三三	二四、九二五
二年末	二二、八九七	二二、八九七	九、七七八	九、七七八	八、二七三	一、五七九	二六、七三九
三年末	二六、〇〇六	二二、三九〇	八、七九二	八、七九二	八、四三三	一、五七九	二八、四一四
四年末	二六、〇〇六	一九、一七〇	八、四七四	八、四七四	八、四三三	一、五七九	二八、〇一〇
五年末	二四、〇七二	一六、四〇三	九、一四三	九、一四三	八、四三三	一、五七九	二七、一四五
六年末	二四、〇七二	一五、七五〇	九、七五九	九、七五九	八、四三三	一、五七九	二七、一〇一
大正元年末	一、七三三	一、七三三	八、四九	八、四九	四、一〇一	二、七七一	一六、五八九
二年末	一、五七九	一、五七九	八、二七三	八、二七三	四、二二七	五、八五	一七、三四九
三年末	一、五七九	一、五七九	八、四三三	八、四三三	四、一八七	二、一八	一八、〇四五
四年末	一、五七九	一、五七九	八、四三三	八、四三三	四、一八七	二、一八	一八、〇四五
五年末	一、五七九	一、五七九	八、四三三	八、四三三	四、一八七	二、一八	一八、〇四五
六年末	一、五七九	一、五七九	八、四三三	八、四三三	四、一八七	二、一八	一八、〇四五

年	農業、牧畜、林業、漁業等		工業		商業及交通業		公務及自由業者		其他の有業者		無職業及職業者	合計
	人	同	人	同	人	同	人	同	人	同		
同五年末	二六六一	二六〇三	八八八	一四三六	一一五	二二四八	三四六	三〇一	一八〇三			
同六年末	二七三四	二六〇三	九七五	一四三六	一一五	二二四八	三四六	三〇一	一九一〇			

現住内地人戸口累年比較

年	戸數	人口		戸指數	人口
		男	女		
明治三十九年末	二二、一三九	四八、〇二八	三五、二八七	一〇〇	一〇〇
同四十年末	二八、二七二	五五、六六九	四二、三三二	一二七	一一七
同四十一年末	三七、一一一	七〇、一四五	五六、〇二三	一六七	一五一
同四十二年末	四三、四〇五	七九、九四七	六六、二〇〇	一九六	一七五
同四十三年末	五〇、九九二	九二、七五一	七八、七九二	二一〇	二〇六
同四十四年末	六二、六三三	一一四、七五九	九五、九三〇	二二〇	二二二
大正元年末	七〇、六八八	一三一、五一八	一一二、二一一	二四三	二九二
同二年末	七七、一二九	一四六、二一五	一二五、三七六	二七一	三二五

同	三年末	八三、四〇六	一五六、一四九	一三五、〇六八	二九一、二一七	三七六	三五三
同	四年末	八六、二〇九	一六三、〇二二	一四〇、六四七	三〇三、六五九	三八九	三六〇
同	五年末	九〇、三五〇	一七一、七二三	一四九、二二五	三二〇、九三八	四〇八	三八五
同	六年末	九三、三五七	一七七、六四六	一五四、八一〇	三三二、四五六	四二二	三九九

現住内地人月口本籍別

大正六年十二月末日

府	縣	戶數	人		計	府	縣	戶數	人		計
			男	女					男	女	
(一)山口縣		八、九七五	一七、五二〇	一六、五二八	三四、〇三八	(九)愛媛縣		二、八三三	五、六三六	四、八六一	一〇、四九七
(二)福岡縣		七、〇二九	一三、九四六	一二、五三三	二六、四七八	(一〇)東京府		二、六六九	五、〇〇四	四、五二〇	九、五二四
(三)長崎縣		五、九八四	一一、一七三	一〇、八五三	二二、〇二五	(一一)鹿兒島縣		二、九〇三	五、一九四	四、一五二	九、三四六
(四)廣島縣		五、八〇五	一一、一三七	一〇、二六六	二一、四〇三	(一二)島根縣		二、六三三	四、八一七	四、二四五	九、〇六一
(五)熊本縣		四、五四三	八、七八七	七、九八一	一六、七六八	(一三)大阪府		二、四八六	四、四七七	四、〇二四	八、五〇一
(六)大分縣		四、二九〇	八、一五八	七、〇五三	一五、二一一	(一四)香川縣		二、二九六	四、五四五	四、〇八四	八、三三九
(七)佐賀縣		三、八三四	七、二〇九	六、五〇一	一三、七一〇	(一五)愛知縣		二、三三三	四、四七六	三、六八一	八、一五七
(八)岡山縣		三、七二五	七、一六三	六、〇一七	一三、一八〇	(一六)兵庫縣		二、二九七	四、二六九	三、七七九	八、〇四八

府 縣	戶 數	人 口 計		府 縣	戶 數	人 口 計	
		男	女			男	女
(一七)德島縣	一,五三五	三,〇九四	二,五七九	(三三)茨城縣	八八四	一,五六八	一,二四四
(一八)三重縣	一,四四三	二,九四三	二,三三〇	(三四)山形縣	七六二	一,四〇九	一,一三一
(一九)高知縣	一,三一〇	二,六四二	二,一八八	(三五)千葉縣	八四二	一,四二四	一,〇九八
(二〇)京都府	一,三六三	二,五八八	二,二二五	(三六)神奈川縣	七三三	一,二五六	一,一三五
(二一)福井縣	一,二八五	二,五二八	二,一〇八	(三七)奈良縣	七二二	一,三三四	一,〇三三
(二二)和歌山縣	一,二五〇	二,五七三	二,一〇〇	(三八)北海道	六三九	一,三二六	一,〇〇三
(二三)新潟縣	一,三三三	二,五五一	二,〇二七	(三九)山梨縣	五八八	一,〇九八	八七六
(二四)靜岡縣	一,三〇〇	二,四九一	二,〇二八	(四〇)栃木縣	六〇三	一,〇九五	八九九
(二五)石川縣	一,二五八	二,四一九	一,九八三	(四一)群馬縣	五六一	一,〇二二	八二五
(二六)岐阜縣	一,二四三	二,三四二	一,八八四	(四二)宮崎縣	五四九	九八六	八二二
(二七)滋賀縣	一,二六〇	二,二八一	一,八一	(四三)秋田縣	五四一	九八七	八二二
(二八)福島縣	一,二八五	二,二七九	一,七八七	(四四)埼玉縣	五四〇	九三五	七五三
(二九)長野縣	一,二八八	二,二五一	一,六九五	(四五)埼玉縣	四四五	七七四	五七六
(三〇)鳥取縣	一,〇七八	二,〇四〇	一,七一〇	(四六)青森縣	四〇一	六五二	五二七
(三一)宮城縣	一,〇九〇	二,九四五	一,六九五	(四七)沖繩縣	五〇	八〇	五六
(三二)富山縣	八六六	一,六八三	一,四一〇	總計	九三,三五七	一,七七,六四六	一,五四,八一〇

本表府縣の順序は現住人口の多寡に依り之を排列せり

現住外國人口國籍別累年比較

年	支那	北米	英吉	佛蘭	獨逸	露西	濠太	諸威	希臘	其の他	合計
明治三十九年末	四、七九四	二九五	一三八	一〇三	五四	一三	六	一一	六	二二	五、四三二
同 四十年末	七、九〇二	二九七	八六	五二	三五	一〇	六	五	三	二二	八、四一八
同 四十一年末	九、九七八	三九七	一七八	九〇	三九	一八	六	七	四	一〇	一〇、七二七
同 四十二年末	九、五六八	四九三	一七〇	九六	四五	一八	六	九	二	一〇	一〇、四二七
同 四十三年末	一一、八一八	五一三	一六〇	八八	四九	二一	六	八	八	二二	一二、六九四
同 四十四年末	一一、八三七	五六八	一八三	一〇〇	四九	二六	六	二	四	一九	一二、八〇四
大正元年末	一一、五一七	六三〇	二二二	一〇三	五五	二四	五	一四	四	二五	一六、五八九
同 二年末	一六、二二二	六六一	二一五	一〇六	六七	二三	九	一〇	三	二三	一七、三四九
同 三年末	一六、八八四	六八七	二三〇	九七	五三	一九		一一	一七	二七	一八、〇二五
同 四年末	一五、九六八	五六二	三七五	七一	五五	二一		一〇	一六	二二	一七、一〇〇
同 五年末	一六、九〇四	七〇〇	二三九	六八	四八	二二		八	一一	二三	一八、〇二二

年	支那	北米	英吉	佛蘭	獨逸	露西	太利	諾威	希臘	其 他	合 計
大正六年末	一七、九六七	七〇九	二三八	八一	五一	一七	—	二	九	二七	一九、二〇

第四節 重要市街地

京城 は曾て漢城又は漢陽と稱す李朝五百年の都府なりしか今は全く昔時の面目を一變し道路の改修、家屋の改築等殆ど内地の大都會と選ふ所なきに至れり人口二十五萬三千有餘、内、内地人六萬六千五百餘人、外國人約二千百人あり四方山嶽を繞らし東方は駭駝山、西方に仁王山、北方に白岳山、東南に南山峙ち西南の一隅開通し漢江其の東南を流る内鮮人相混して商業取引を爲すも内地人の多くは南山山麓より南大門附近に密集す朝鮮總督府廳舎は南山の中腹に在り李王の昌德宮、李太王の德壽宮、京畿道廳、京城府廳、高等法院、覆審法院、地方法院、警務總監部、憲兵隊司令部、遞信局、工業專門學校、醫學專門學校、京城專修學校、中學校、高等女學校、總督府醫院、測候所、朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行、第一銀行、十八銀行、百三十銀行、京城銀行、漢城銀行、朝鮮商業銀行、

韓一銀行、東洋拓殖株式會社京城支店、朝鮮郵船株式會社、東亞煙草株式會社、京城電氣株式會社等あり遊覽地としては南山公園、漢陽公園、バゴダ公園、獎忠壇、關帝廟、總督府博物館、李王職の經營に係る博物館、植物園及動物園、總督府商品陳列館等あり鍾路の巨鍾、バゴダ公園内の舍利塔は五百年前の工藝を語るへし一たび郊外に散策すれば清涼里に閔妃及嚴妃の陵あり孔德里に大院君の陵あり北門外には石坡亭あり牛耳洞の櫻林、蘇島の農園、月谷里の農園皆一瞥の値あり

電車は東大門外清涼里より鍾路及西大門を經、麻浦に達し又鍾路より南大門を經、龍山の新舊市街に達す又黃金町通より光熙門を經て往十里に到る、年年市區改正を行ひ道路八達四通平坦砥の如し交通機關の整備と同時に電信、電話、電燈、瓦斯、水道等の設備完備して市街の光景全く舊觀を一新し文明的都市の壯觀を呈す

神社は京城神社、菅原神社共に南山に在り寺院は東西本願寺別院、日蓮宗、淨土宗、曹洞宗、眞言宗等各派の寺院あり布教に従事す基督教は日本基督教會、日本組合基督教會、日本メソヂスト教會、聖公會、佛蘭西教會(天主公會)朝鮮耶蘇教長老會、救世軍、露國正教會等あり

今京城總督府を起點とし各道廳に到る距離を示せば左の如し

京城より各道廳所在地に到る距離

道	道廳所在地	鐵道	陸路	水路	道	道廳所在地	鐵道	陸路	水路
京畿道	京城	—	〇・二六	—	黃海道	海州	二四・一	一・二八	七五・〇
忠清北道	清州	八〇・八	四・三〇	—	平安南道	平壤	一六四・七	—	—
忠清南道	公州	八〇・八	六・二〇	—	平安北道	義州	三一・三	四・三四	—
全羅北道	全州	一七四・五	—	—	江原道	春川	—	二・三〇三	—
全羅南道	光州	二二一・七	三・一七	—	咸鏡南道	咸興	一五〇・四	—	四四・五
慶尙北道	大邱	二〇三・〇	—	—	咸鏡北道	鏡城	一五〇・四	四・二八	二〇五・五
慶尙南道	晉州	二七四・八	一八・〇三	—					

龍山 は京城の一部にして漢江に臨める形勝の地なり京龍の間は電車汽車の往來頻繁なり從來龍

山浦と稱し漢江の舟楫の便あり物貨輻湊す總督官邸、駐劄軍司令部、第十九師團司令部、滿鐵京城管理局、總督府印刷所等の在る所なり、京釜京義兩鐵道線の分岐點にして又京元線の基點たり

近時内地人續續移住し日に殷賑に向ひつつあり小學校あり一千餘の兒童を收容す金融機關としては百三十及十八銀行の出張所あり

漢江橋は漢江の本流に架設し長さ一千四百四十九呎漢江小橋は其の支流に架設し長さ六百二十一呎共に大正五年三月起工し同六年十月竣工せり

永登浦 漢江の沿岸に在る一小驛に過ぎず雖始興郡廳の所在地にして且京釜、京仁線の分岐點たるを以て漸次發展の途に在り警察署、郵便局、監獄分監、尋常小學校、朝鮮皮革株式會社あり附近より農産物、煉瓦等を産出す

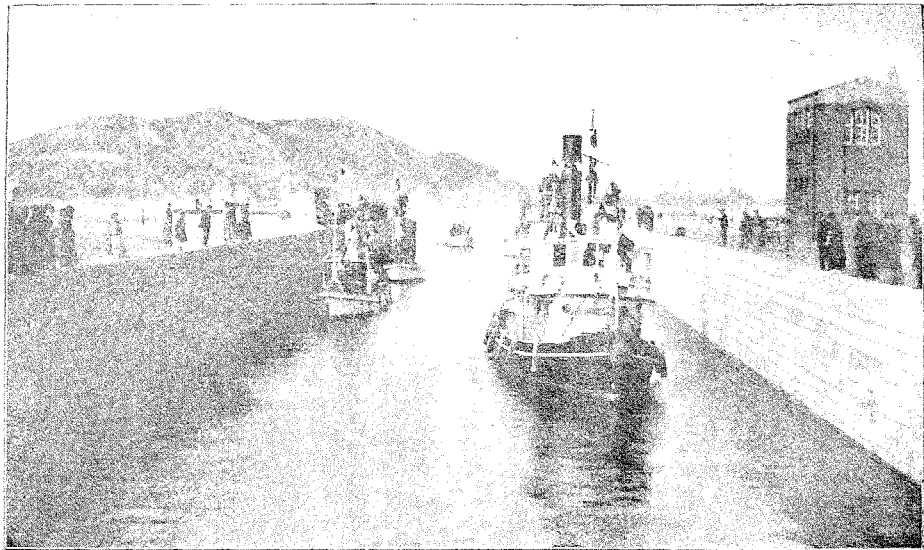
仁川 京畿道の西端に突出せる小半島にして月尾島、小月尾島、沙島等前面に横はりて内港を圍み八尾島遙に外廓を畫きて外港を爲す内港は水淺くして巨船を入るを得ず殊に潮水の干満甚しくして大潮時には其の差三十二尺に及ふ而も平安、黄海、京畿、忠清各道の貨物を吞吐し内地諸港及滿洲諸港との定期航海あるを以て貿易は朝鮮に於ける第二位を占め其の額三千百十六萬二千餘圓に達す人口約三萬二千三百人、内、内地人一萬二千人を占む府廳、地方法院支廳、觀測所、税關、郵

便局、小學校、高等女學校、病院等、設備あり電燈、電話、水道等の設備亦完備せり

築港は開闢渠式にして明治四十四年四月起工し大正七年十月竣工せり渠内面積三萬坪を有し北方の繫船壁には四千五百噸級の汽船三隻を繫留荷役せしむるを得へく其の他の岸壁は小形船舶又は舢舨の貨物積卸に便し以て本港從來の不便を排除することを得たり

水原 京城を距る南二十六哩に在り京釜線に乗り一時間にして到るへし往時正宗大王の居城にして今は廢址に歸せしも華虹門、訪花隨柳亭、龍頭閣、華寧殿、杭眉亭等の遺蹟尙存せり西湖は其の眺望甚た宜し勸業模範場あり種苗家畜を培養し各道農事の模範を垂る地方法院支廳、慈惠醫院、警察署、農林學校、樹苗圃、守備隊等あり内地人の住居する者約一千四百人あり

開城 京城を北に距る四十八哩餘に在り京義線中有數の驛なり高麗朝四百七十年間の首都にして一に松都と稱す高麗時代の舊跡は滿月臺、善竹橋、崧陽書院、壽昌宮址、敬德宮址、太平館、成均館、大興山城、七重石塔、朴淵瀑布、杜門洞、華藏寺、觀音寺、穆清殿、顯陵、關王廟、彩霞洞等にして善竹橋は郎夢周が李成桂の爲に殺されたる處にして橋上の血痕尙消へずと傳ふ近時滿月臺



川島港開通式小汽船集合の状況

の城址を發掘せしに當年の礎石井然として具はれるを見る朝鮮紅蔘は此の地の名産にして近時三萬斤以上を産す其の價額約二百餘萬圓に達す人蔘畑は一瞥の價値あり彼の高麗燒は人蔘と共に此の地の名産にして青磁白磁の兩種あり桃も亦此の地の名産にして單に其の花の天天たるのみならず其の果實も亦太く美味醜賞すへし内地人の居住する者約一千二百人、地方法院支廳、警察署、專賣課出張所、銀行、郵便局等あり

平澤、成歡 共に京釜線に沿ひたる一小驛に過ぎざるも將來農業發展の地として矚目せらる平澤附近は平野にして米、大豆の産出多し雁、鴨、山七面鳥、鶴、雉子等鳥類に富み獵客の遊ぶもの多し成歡は日清戦争の古戰場にして平澤と共に農産地として將來有望の地なり同地には小學校、憲兵分遣所あり

清州 忠清北道廳の所在地にして地方法院支廳、監獄分監、道警務部、警察署、憲兵隊、同分隊、慈惠醫院、郵便局、銀行等あり人口約六千人、内、内地人一千七百餘人あり邑内の石橋及鐵幢は古來有名なり京釜線島致院より陸路四里三十町、忠州へは陸路十七里三十二町にして達すへし何れも

自働車の傾あり

公州

忠清南道廳の所在地にして鳥致院驛より陸路六里二十町自働車の傾あり美江驛より舟に乗り錦江を下れば四時間にして達すべし邑内の雙樹亭雄心閣は古來著名なり地方法院、道警務部、警察署、監獄、憲兵隊、守備隊、慈惠醫院、地方金融組合、銀行等あり人口約七千人、内、内地人一千四百餘人あり

鳥致院

忠清南北兩道及全羅北道に通する要地にして古來有名なる市場あり附近の農産物輻輳し近時頗る發展せり内地人の居住する者八百餘人、憲兵分遣所、郡廳、地方金融組合等あり

大田

湖南線の分岐點にして京釜線中大邱に亞く貨物の集散地なり郡廳、地方法院支廳、警察署、憲兵分隊、歩兵第七十九聯隊本部、郵便局、專賣課出張所、産業傳習所、殖産銀行支店、金融組合、中學校等あり内地人五千餘人あり此の地を西に距る三里許の所に備城の温泉あり自働車にて往復すへし此の外忠清南道には溫陽の温泉あり京釜線天安驛より約三里自働車の傾あり

論山

湖南線の要驛にして内地人約九百人あり論山郡廳の所在地にして殖産銀行支店、精米所等

あり本驛を距る東南一里許の所に石造の大彌勒佛あり所謂恩津の彌勒にして盤石山灌燭寺境内に安置す高麗光宗十九年僧慧明の建立にして鮮人の歸依頗る厚し石佛の身長八十八尺八寸あり

江景 湖南線の要驛にして群山と呼應し錦江を利用し舟楫の便あり水陸の便あるよりして貨物集散し朝鮮三大市場の一に數へらる内地人一千七百餘人あり警察署、郵便局、地方法院支廳、殖産銀行支店等あり

全州 湖南第一の都會にして全羅北道應の在る所なり北方茫茫たる所謂全州の平野を控へ米穀豐富なり此の地方に於て内地人の農業經營を爲す者多く彼の細川農場、東山農場、大橋農場の如きは其の規模の大なるものにして農事改良の如きも著著其の歩を進め貯水灌漑の如き水利は他道に於て多く其の比を見す即ち沃漕西部水利組合、臨益水利組合、全益水利組合、臨益南部水利組合、臨沃水利組合の如き是なり人口一萬四千三百人、内、内地人三千百餘人あり地方法院支廳、監獄分監、道警務部、警察署、守備隊、慈惠醫院、殖産銀行支店、地方金融組合、農業學校等あり邑内に慶基殿あり城南に多佳山あり山上に大神宮遙拜所を設く山の上下を通して全州公園と稱す湖南線裡驛

より陸路六里餘、人車、自動車の便あり又輕便鐵道を敷設し(十五里五分)交通機關完備せり

群山 開港の前後と位置の關係上木浦と兄弟の感あり(木浦は明治三十年、群山は同三十二年開

港す)共に南鮮に於ける貿易港にして其の額九百二十六萬八千餘圓、仁川、木浦及内地と定期航路あり此の地に到るには海路の外江景、公州より錦江乗船の便あり又裡里驛より鐵道の便あり内地人約五千七百人、府廳、地方法院支廳、警察署、監獄分監、税關支署、金融組合等あり

光州 全羅南道廳の所在地にして湖南線松汀里驛を距る三里十七町の地に在りて自動車の便あり人口約一萬九百人、内、内地人二千六百八十餘人あり地方法院、警察署、慈惠醫院、監獄、守備隊、道警務部、郵便局、殖産銀行支店、金融組合、東洋拓殖會社派出所等あり産物の主なるものは米、麥、棉花等なり棉花は一般に對し紡績の原料に好適なる米國陸地棉の栽培を獎勵せしに其の成績概して良好なるも殊に此の地方は其の主産地にして品質も亦佳良なり

木浦 湖南線の終點にして其の海運上の地位群山と相呼應す市街は諭達山を背面に負ひ前面島嶼を以て抱擁す貿易の主なるものは米穀、棉花、海産物にして最近の貿易額七百七十三萬九千餘圓な

り内地諸要港及沿海各地との間に定期航路ありて商業繁盛を極む内地人五千七百人、府廳、地方法院支廳、警察署、監獄分監、郵便局、税關支署、測候所、金融組合、水産、棉業會社、殖産銀行支店、十八銀行の支店等あり松島公園は東南の小丘に在り園内に松島神社及金比羅神社を祠れり

大邱

慶尙北道廳の所在地にして京釜線中大驛の一なり人口三萬八千七百餘人、内、内地人凡そ一萬一千人を占む西方十餘町の丘上に達城公園あり山頂平坦眺望詩に入る中央に大神宮を祠れり此の地附近一帶平野にして土壤肥沃農業に適す穀類、果樹、棉花、煙草等を産す古來有名の市あり東門市は陰曆毎月七、九の日に西門市は二、七の日開催す最近の貿易額は四百八十八萬三千餘圓なり

覆審法院、地方法院、府廳、道警務部、警察署、歩兵第四十旅團司令部、歩兵第八十聯隊本部、慈惠醫院、專賣課出張所、測候所、郵便局、殖産銀行支店、金融組合等あり

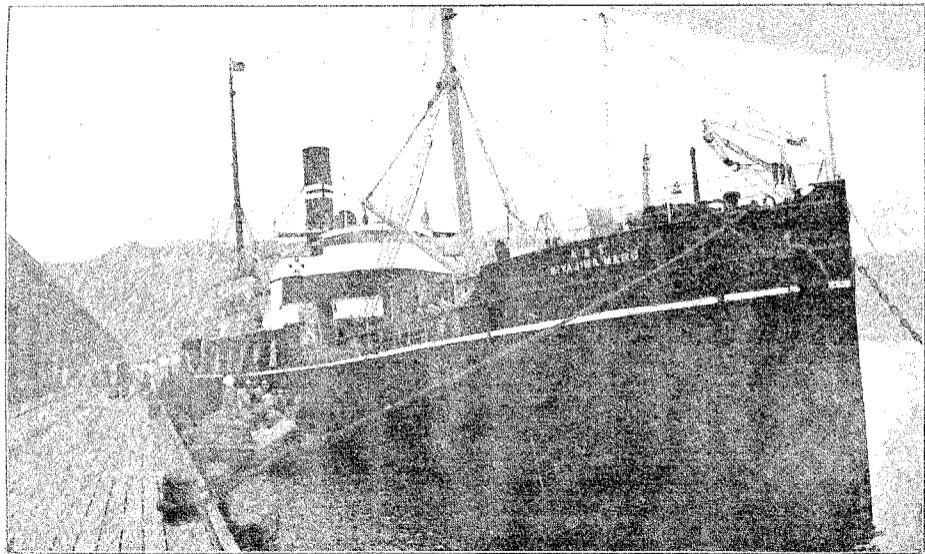
慶州

大邱の東方十七里許の所に在り自動車にて往復すへし新羅九百餘年間の王都にして瞻星臺、石氷庫、臨海殿址、雁鴨池、鷄林、鮑石亭、春陽橋趾、半月城、滿月城、明活城、南山城、六村陸臺、五蔭、武烈王陵、金庚信墓、芬墓寺九層塔、柏栗寺、四面石佛等、城墟、古墳、靈刹、金

石佛、巨鐘等考古の資料となるべきもの多し郡廳、地方金融組合等あり内地人五百七十人あり此の地を距る四里の所に佛國寺あり境内に多寶塔、釋迦塔あり寺後の吐舍山上に石窟庵あり圓形の石造にして穹窿狀の天井を爲し其の上部を土にて覆ひ入口の左右に四天王、仁王の像、内部の圍壁に十一面觀音、十六弟子、梵天帝釋の像を彫刻し中央の蓮臺に釋迦如來の座像を安置す新羅朝遺品中白眉を推すへし

密陽、三浪津 密陽は慶尙南道に在る小都會にして三方に山を負ひ南方の一面遠く平野に連り凝川溶溶として其の間を縫ひ榆川より密陽に至る沿岸の地風光明媚の所少なからず凝川の清流又鮎を産す近時農産地として漸次發展せり三浪津は密陽の南洛東江の東北に在り馬山鐵道線の岐るる所にして穀物、果實、野菜の産地として知らる

晋州 馬山を距る十八里餘の所に在り自働車の便あり又釜山より海路三千浦に上陸し泗川を經八里三十餘町を自働車にて到るへし文祿の役日本軍の再度苦戦したる所なり慶尙南道廳の在る所にして人口約一萬一千人、内、内地人千八百餘人あり、地方法院支廳、監獄分監、憲兵隊、守備隊、道



釜山第二棧橋汽船宮島丸留繫の状況

警務部、警察署、慈惠醫院、郵便局、殖産銀行支店、金融組合等あり名所舊蹟としては轟石樓の眺望義谷寺の幽邃あり轟石樓は其の結構宏大にして樓下斷崖數十丈南江崖下を流る涉川里の沃野を遠望し眼界開豁轉た雄懷に勝へず義谷寺は鳳谷山の山間に在り滿山紅葉霜林の景詩家を惱す

馬山

馬山府廳の所在地にして内地人約四千五百人京釜線三浪津驛より鐵路一時間餘にして達す

へし東に丘陵を負ひ巨濟島を外廓として鎮海灣其の前方に横ばる又海路三十九浬にして釜山港に到るへし地方法院支廳、警察署、税關支署、病院、銀行、地方金融組合等あり最近貿易額は鎮海と合して百八十五萬二千餘圓なり

鎮海

鎮海灣は馬山半島と固城半島との間に在りて巨濟島其の南に横ばり灣内水深くして優に幾

多の巨艦を碇泊せしむるに足る新市街は昌原郡鎮海面に在りて山を負ひ水に臨み頗る形勝の地たり内地人四千六百餘人、陸軍要塞司令部、陸軍重砲兵大隊、海軍鎮海要港、海軍建築部支部等あり

釜山

關釜連絡の咽喉にして海陸接續唇齒輔車の關係を爲す築港棧橋工事既に竣工し海陸運輸連

絡の設備完成せり府廳、地方法院、警察署、守備隊、陸軍運輸支部、郵便局、税關、測候所、中學

校、高等女學校、朝鮮銀行、殖産銀行、其の他各種銀行支店出張所等あり穀物、青物、水産物市場あり就中魚類は半島第一位を占む貿易額も亦首位にして其の最近額は五千七百七十七萬六千餘圓を算す輸出品の主なるものは米、大豆、海草、魚類、生牛、牛皮、繰綿、繭等にして輸入品の主なるものは綿布類、麥粉、石油、食鹽、酒、煙草、醬油、燐寸、紡績絲、砂糖其の他雜貨類なり其の輸移出先は内地、支那、浦鹽斯德、新嘉坡等にして其の輸移入地は内地、支那、米、英、露、佛等なりとす其の繁榮今や旭日昇天の勢あり人口六萬一千有餘、内、内地人約二萬八千人にして尙年年移住者増加の傾向あり遊覽地としては金比羅山即ち龍頭山の公園、龍尾山神社、天馬山、峨嶺山、伏兵山等何れも風光頗る明媚にして一たび岳上より市街を瞰下すれば幾年所を逐ふて如何に内地人が此の地の開發に努力せしか苦心の跡歴歷として四指するを得へし釜山の北三里許の所に東萊の温泉あり電車にて直行すへし東萊の東二里許の海岸に海雲臺の温泉あり釜山東萊間電車線南門停留場より自働車にて直行すへし松島半島は釜山を距る一里許に在りて海水浴場たり

海州　は京義線沙里院驛を距る十八里二十三町自働車の便あり黃海道廳の所在地にして人口一萬

四千七百人を有し、内、内地人二千五百餘人にして、地方法院、監獄、憲兵隊、道警務部、警察署、慈惠醫院、郵便局、殖産銀行支店、金融組合等あり此の地の古蹟には濯熱亭、百世清風碑、梵字石塔あり

新幕、沙里院

共に黄海道に在り京義線の完成に伴ひ發展したる新開地なり新幕は薪炭、米穀、大豆等を産出し新溪地方の産出茲に集り内地商人の入り込む者少なからず學校、警察署、郵便局等あり、沙里院附近一帶の地は廣漠たる沃野にして米穀、大豆等の産出頗る多し鳳山郡廳、殖産銀行支店、學校、郵便局等あり内地人の居住するもの七百人あり沙里院の西南に曠野あり土地豐沃にして農業に適す東洋拓殖會社、朝鮮興業會社等各出張所を置き盛に農事經營に従事す

黃州、兼二浦

黃州は京義線に沿ふ一驛に過ぎずと雖多數の朝鮮人軒簷を列へ市場頗る盛なり穀物鐵礦の産出ありて近時邦人の移住する者多く郡廳、學校、警察署、郵便局、興業會社等あり此の地より鐵路分岐し半時にして兼二浦に達するを得、兼二浦は鎮南浦の東に在る一河港にして日露戰役當時其の名頼に顯はれ爾後漸く振はさりしか大正二年三菱製鐵株式會社に於て大規模の製鐵工

場を此の地に建設し大正七年六月以來既に第一第二の熔鑛爐を開始せる狀況にて目下人口五千二百、内、内地人千七百餘に達し殷盛に趨きつつあり

平壤

京城を距る百六十四哩餘、京義線中の大驛にして高句麗の舊都なり東南大同江に臨み北方大城山を負ひ頗る要害の地たり北鮮に於ける物貨輻輳の中心にして附近一帯に茫漠たる平野連亘し土壤肥沃にして諸穀の産出多く平壤米は品質良好にして其の名高し最近貿易額は五百三十二萬八千餘圓なり道廳、府廳、歩兵第三十九旅團司令部、歩兵第七十七聯隊本部、覆審法院、地方法院、道警務部、警察署、慈惠醫院、監獄、税關、郵便局、平壤中學校、農業學校、簡易商業學校、測候所、高等女學校、高等普通學校、女子高等普通學校、朝鮮、殖産、漢城、百三十銀行各支店、電燈會社等あり人口五萬七千九百人、内、内地人一萬一千六百餘人あり、此の地新舊戰場にして文祿の役には小西行長此の地に據り日清の戦には皇軍清兵を並に攻め今猶牡丹臺、乙密臺、七星門、玄武門、大同門、船橋里等の戦蹟あり又練光亭、浮碧樓、綾羅島の眺望は悉く畫圖に入り市街も亦電燈、電話、水道、旅館等の設備充分にして其の殷賑なること京城に亞けり

鎮南浦

平南線の終點にして平壤を西に距る約三十四哩餘の所に在り大同江口の貿易港にして最近の額は一千九百六萬三千餘圓なり仁川、下關を経て阪神に至るものと仁川、群山、木浦、釜山を経て達するものと二航路あり又支那安東及大連等に到る航路あり今や築港完成し大艦巨舶を泊せしめ冬季流水の爲め航路杜絶の虞なし飛渡島は港の東方に在り老松鬱蒼として雅致掬すへし此の地日清戦争前は一漁村に過ぎざりしか日清、日露兩役後内地人の移住者多く忽ちにして一要港と爲り内地人六千四百人あり府廳、地方法院支廳、警察署、税關、監獄分監、郵便局、朝鮮銀行、殖産銀行各支店等あり築港は明治四十四年四月起工し大正四年三月竣工せり久原精煉所は其の規模大なり本驛を距る五里許の處に廣梁灣鹽田あり一箇年約五千萬斤を製造す

義州

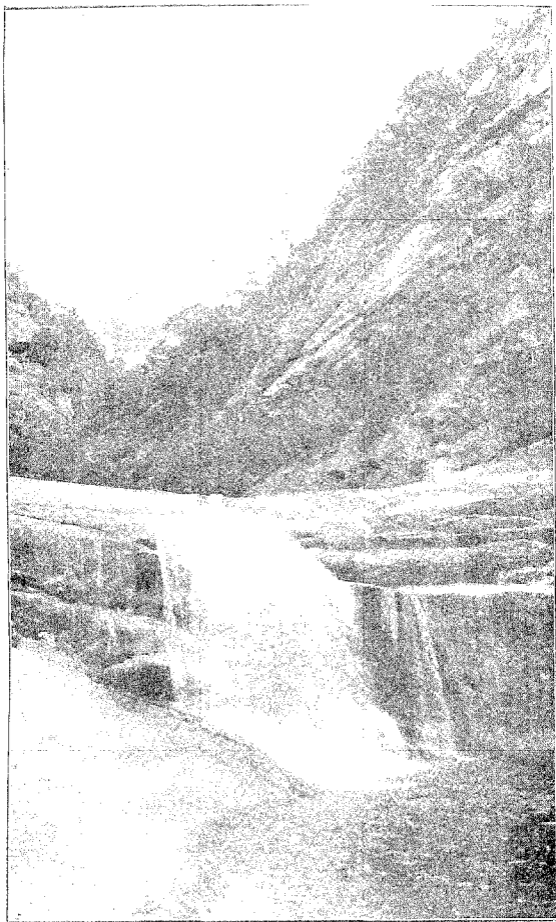
平安北道廳の所在地にして新義州を距る東北四里三十町の所に在り自働車の便あり鴨綠江を隔てて遙に支那九連城に對す日清、日露の兩役には皇軍の渡河點たり人口約四千四百人、内、内地人八百餘人あり憲兵隊、守備隊、道警務部、地方法院出張所、慈惠醫院、郵便局、殖産銀行支店、金融組合、産業傳習所等あり邑内西北の邱上に統軍亭あり之に上れば古色蒼然懷古の情に勝へず日

清、日露の役には我軍砲兵陣地たりき

新義州 京義線の終點にして鴨綠江を界して支那安東に接す鴨綠江は源を白頭山附近に發し長流

二百有餘里其の舟楫の便を有するこゝ八十餘里なり新義州と安東縣とを連結するの鐵橋は明治四十四年十月の竣功に係り延長三千九十八呎にして中央三百呎の橋桁を開閉式とし船舶の航行に便ならしめ又橋梁の兩側に幅八呎宛の歩行道を設け通行の便に供す此の橋梁に由り滿鮮を連絡し安奉線に由りて哈爾濱に達す更に西比利亞線に由りて歐洲に到るへし此の地に於ける貿易額は下流龍岩浦を合し九百二十三萬九千餘圓を算す府廳、警察署、守備隊、地方法院支廳、税關支署、監獄分監、郵便局、營林廠、朝鮮銀行出張所、殖産銀行支店、電氣會社等あり内地人三千二百餘人あり

春川 京城を距る東北二十三里餘の所に在り江原道廳の所在地にして京城より自動車の便あり僅に四時間にて到達することを得人口約三千五百人、内、内地人一千百人、地方法院支廳、監獄分監、憲兵隊、大隊本部、道警務部、警察署、郵便局、蠶業傳習所、機業所、殖産銀行支店、金融組合等あり邑内北方の清平山に城址あり是れ鎊國の地にして二千年前の古蹟たり又韃鞨塚あり素蓋鳴尊の



金剛山大龍潭

占領地と傳ふるものも亦此の地なり

鐵原

鐵原は江原道の西北部にして京城を距ること六十二哩餘、京元線の中間驛にして其の繁榮昔日に倍蓰し百貨集散主要驛の一に算するに至れり往時弓裔の占據せし地なりと傳ふ

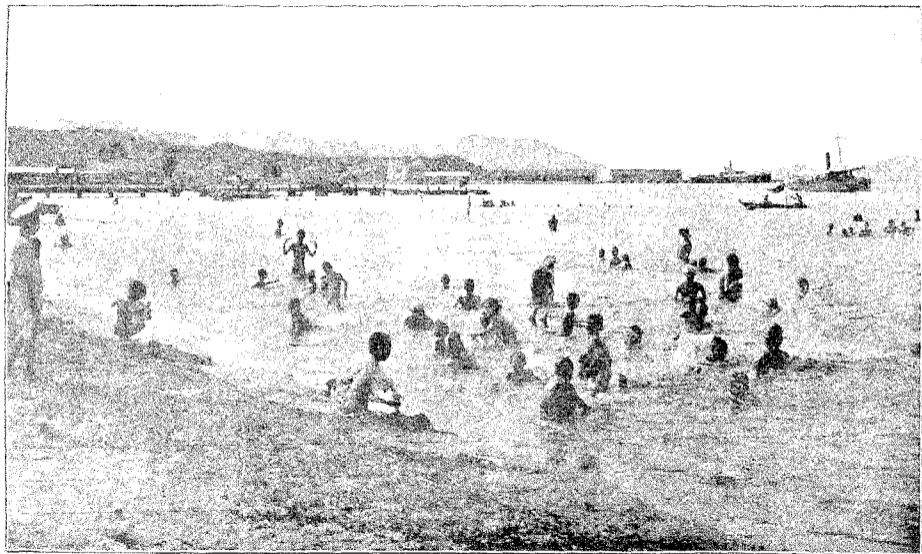
金剛山

金剛山の奇勝は其の名近來殊に天下に播けり全山廣袤海陸を併せ十數里に亙り一萬二千の巒峯重疊相倚り相擁し數百丈の巒巖簇立し或は萬物相の雄と爲り或は海金剛の勝と爲る鬱林之を繞り蒼苔雲根を埋め萬水飛潑し懸りては九龍淵の瀑と爲り碎けては十二瀑の玉と爲る幽竈法を説き清潭佛を語る山寺の鐘聲は圓寂の常樂を告ぐ足を一たび此の仙境に容れば杳として太古の想あり山中衆峯の最も高きものを擧ぐれば白馬峯にして毘盧峯、水精峯之に亞く日出嶽、月出嶽、獅子峯、香爐峯、青鶴峯、雁門嶺、白雲臺、望軍臺、遮日峯、彌勒峯、釋迦峯、長慶峯、地藏峯、觀音峯等の奇嶂群峙せり其の規模の壯にして且大なる日光、耶馬溪と雖同日の談にあらず、今旅客の此の勝を探らむとするには海陸の二途あり乃ち先づ内金剛を觀むとする者は陸路を採り京城南大門驛より京元線に依り平康驛に下車し金化、金城、新安末輝里に至る三十三里七町の間は人力車及自働車

の便あり末輝里より長安寺に至る二里三十三町の間は人力車通す是より行行内金剛の探勝を爲すへし末輝里より温井嶺を経て温井里に至る七里二十八町の内末輝里細洞間四里は人力の便あり

又摩訶行より榆站寺を経て温井里に至る間十一里二十八町は徒歩し温井里より長箭に至る二里十六町及高城附近の各所に至るには自働車の便あり又外金剛各所の勝景を探らむとするには温井里より萬物相に至る二里十町は徒歩にして温井里より神溪寺に至る一里二十町は人力車の便あり神溪寺より九龍淵に至る一里三十町の間徒歩すへし又外金剛を觀むとする者は海路を採り元山より乗船し長箭に著し二里餘にして温井里に到着し夫れより前記の道を辿るへし

元山 元山府廳の在る所にして北鮮第一の貿易港なり灣内潮流緩漫にして水深く大船を泊すへし市街は望徳山の麓に在り地形上日本海沿岸に於ける貨物及露領よりする貨物は茲に輻輳す京元線の開通と同時に釜山、仁川を經すして直に京城及朝鮮内地に輸入せらる最近貿易額は一千一萬九千餘圓なり地方法院支廳、警察署、守備隊、監獄分監、税關、測候所、郵便局、病院、銀行、金融組合等あり内地人約七千四百人あり



元山海水浴場の状況

元山より各處に通ずる道路は頗る不完全なりしか、平壤元山間の道路（五十五里）の改修竣功し他の道路も亦殆ど完成せり又元山近海は魚類に富むも販路頗る不便なりし爲漁業に従事する者少かりしか、京元鐵道の完成と共に其の増加を見るに至れり

咸興 咸鏡南道廳の所在地にして北は盤龍山を負ひ西北に城川江を控へ西南は廣漠たる平野に望み邑内六箇の樓臺あり人口一萬七千百人、内、内地人二千六百餘人、地方法院、監獄、歩兵第七十四聯隊本部、憲兵分隊、道警務部、警察署、郵便局、殖産銀行支店、金融組合等あり名所舊蹟として邑内西門に樂民樓あり城川江に臨み四季の眺望絶佳なり附近の和樂亭より市街を瞰下し西湖津方面の山陵を遠望すへし樓下に萬歲橋あり東南一里許に本宮あり東北里餘に慶興殿あり共に李朝太祖の舊邸なり此の外歸州寺、定和陵等あり此の地に至るには元山より乗船し半日にして西湖津に上陸し輕便鐵道にて直行即日到着すへし

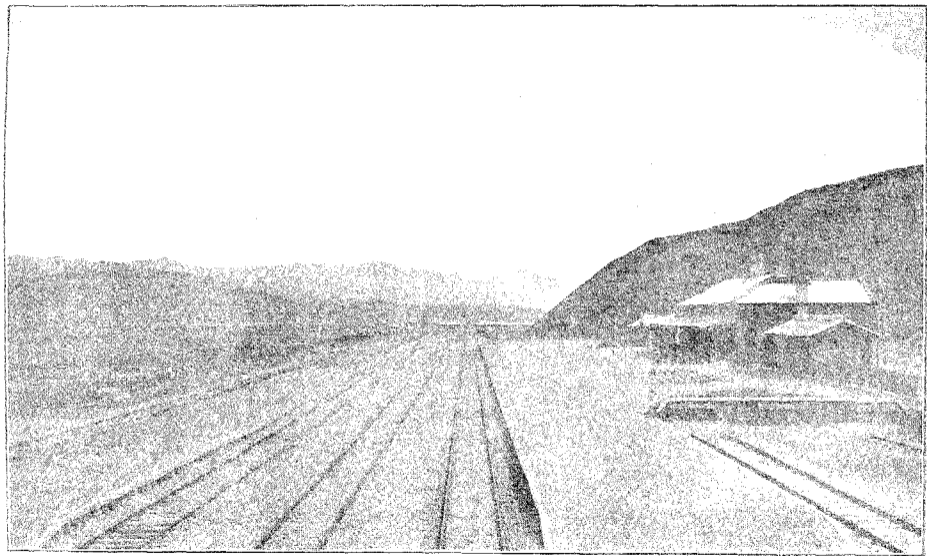
鏡城 咸鏡北道廳の所在地にして南に鏡城川を控へ北に勝巖山を負ひ地形西に逼り東に開き三角形を爲す人口五千人、内、内地人約六百人、地方法院支廳、憲兵隊本部、道警務部、警察署、郵便

局、殖産銀行支店、金融組合等あり、邑内西北に巖山あり登れば市街を瞰下し鏡城灣を望み眺望願る佳なり元帥臺は城南里餘に在りて鏡城川の河口に臨めり觀海寺は西方一里餘、山の中腹に在り春秋共に散策に佳なるも霜葉の時節を最となす此の地に至るには元山より乗船し清津に上陸し手押式軌道に由り羅南を経て到着すへし

清津 北鮮の要港にして露領浦鹽斯德は海上百三十哩の所に在り北鮮一帯の貨物農産物の集散地たり清會線の基點にして間島、會寧、鏡城、羅南に出入する咽喉に當れるか故に市街繁盛を極む内地人三千九百人、府廳、地方法院支廳、警察署、郵便局、税關支署、憲兵分遣所、露國領事館等あり最近貿易額三百九十二萬六千餘圓を算す

城津 元山の北方百二十四哩餘の所に在り咸北一帯の貨物並に輻湊す輸移出品の主なるものは大豆、黒鉛、銅等にして輸移入品は金巾、木綿、紡績等なり最近貿易額は五百九萬三千餘圓を算す内地人九百人あり

羅南 鏡城の北方二里餘の所に在り東西南の三面は丘陵に圍まれ東北二隅は平野にして清會線輸



咸鏡北道會寧停車場

城驛より岐れて此の地に入る郵便局、小學校、憲兵分隊、歩兵第三十七旅團司令部、歩兵第七十三聯隊、騎兵第二十七聯隊、野砲兵第二十五聯隊あり内地人三千人あり

會寧 豆滿江の右岸に在る一小都邑にして江を渡れば直に間島に入るへし龍井村は西北十三里許の所に在り江水一たび氷結すれば人馬自由に氷上を往來すへし上流に茂山あり下流に鍾城あり清津より五十八哩即ち清會線の終點たり此の地間島貿易の要衝にして市街電話を有し商業盛なり最近貿易額六十六萬四千餘圓を算す郡廳、郵便局、公立普通學校、憲兵分隊、守備隊、工兵第十九大隊、朝鮮銀行出張所、金融組合等あり内地人一千五百人あり

여 백

第四章 交通

第一節 關釜連絡概況

關釜連絡船は壹岐丸（一、六〇〇噸）、對馬丸（一、六〇二噸）、高麗丸（三、〇二八噸）、新羅丸（三、〇三二噸）、博愛丸（二、六三三噸）の五隻にして關釜間を晝夜二回往復す東京大阪方面よりの旅客は下の關にて下車し長崎鹿兒島方面よりの旅客は門司に於て下車し孰れも船上の客を爲り海上百二十二浬を十一時間半にして釜山棧橋に著しそれより鐵道にて朝鮮の要所に至るへし若し鮮滿直通列車（一週一回運轉）に乗車すれば京城、新義州を經、鴨綠江の架橋を渡り滿洲より西比利亞鐵道に由り歐洲大陸に直行すへし今假りに東京驛を一日の午前に發車するさせば二日午前下の關著、直ちに乗船すれば其の夕釜山著、卽夜釜山驛より乗車し三日の朝京城に著すへし左に大正二年度以降關釜間連絡の概況を表示すへし

關釜連絡概況

年	度	航海			客計	荷物		郵便物		
		度數	一等	二、三、四等		貨物	手荷物小荷物			
內地行	大正二年度	七四〇	二三五七	二二三八二	七八、二八二	九、〇、〇、〇	四、一、三、九	六四、五、七〇	二五、五、三八	五、一、八、三〇
	同 三年度	七三三	二六〇二	二五、三四六	八〇、五、五二	九、六、四、九九	六、七、三、七九	六五、九、二二	三八、三、〇八	七、三、五、八二
	同 四年度	七〇九	二、九〇五	一四、〇、七六	八三、三、九二	一〇〇、三、七三	九、九、八、九三	六四、七、四五	五、二、七、七六	六、九、〇、二二
	同 五年度	七七三	三、五、六三	一六、一、八二	九一、九、三七	一一、六、八二	一九九、〇、三九	五八、八、二六	八、二、一、九一	七、六、九、三九
	同 六年度	七三二	五、一、一〇	二、三、六、六三	一一、六、六八	一四、五、四、五三	二、七、九、七、二六	六、五、一、七五	一一、八、一、八一	九、〇、二、九三
	大正二年度	七四〇	三、二、八七	一、五、〇、一五	九一、六、五三	一〇、九、九、五五	八、一、三、七二	八〇、五、五八	一一、六、七、六一	一、三、三、五九〇
朝鮮行	同 三年度	七二二	二、七、二七	一、四、一、七九	八二、八、六八	九、九、七、六四	八、六、七、六五	七、九、一、一六	一、三、八、九、七五	一、四、八、三、四三
	同 四年度	七二二	三、〇、五九	一、四、二、〇、七	八六、四、九四	一〇、三、七、五五	一〇、三、二、一四	八〇、三、〇、一	一、七、四、四、五五	一、四、六、〇、四五
	同 五年度	七八〇	三、五、〇六	一、五、四、六三	八三、八、八八	一〇、二、八、五七	一一、九、一、二二	八〇、六、九、七	一、〇、七、六、六〇	一、六、〇、九、四八
	同 六年度	七二〇	四、二、三、七	二、三、三、一九	九、五、八、三九	一一、三、三、九五	一、四、三、五、八一	七、四、二、五九	二、三、三、三、六六	一、八、三、三、〇八

第二節 道路

朝鮮の道路は從來京城を基點として義州街道、慶興街道、平海街道、釜山街道、仁川街道、鎮南浦街道、羅州街道、保寧街道、江華街道の九街道に分ちしも幅員狹隘にして而かも凸凹起伏甚しく運輸は人肩馬背に倚るの狀態に在りしか統監府設置以來中央地方共に道路の修築に努め加ふるに京釜、京義、湖南及京元鐵道の全通並咸鏡線の開通するに及て曾て不便を感せし交通も頓に昔時の面目を一新せり總督府の設置せらるるや朝鮮全道に互り道路網を規畫制定せり則ち一等道路を十七線總延長七百八十八里九分二等道路を七十九線總延長二千三百三十二里二分合計九十六線總延長三千二百一十一里一分なりとす此の中緩急を計り最も急施を要するものを第一期に於て改修を施すことと別表に示せる一、二等道路計三十四線延長六百八十五里を總工費一千萬圓を以て明治四十四年度以降七箇年の繼續事業と爲し改修に著手し大正七年三月竣功を告げたり然れども急速なる地方の發展は到底國の施設のみに缺つこと能はざるの事情あるを以て地方に於ても地方費又は夫役を以て道路の改修に努め國庫より補助金を交付して之を助成し以て地方の開發を

促したり今明治四十三年度以降大正六年度末迄に於て國庫補助に依り改修したる治道の成績を示せば一等道路八十四里二分、二等道路三百里四分、三等道路百十二里九分市街其の他の道路十四里五分餘總計五百十二里餘此の總工費二百八十三萬一千七百六十六圓にして内國庫補助百七十八萬九千五百三十六圓なり

第一期(國費經營)七箇年繼續治道工事

大正七年三月末日

路	線	等級	幅員	豫定總距離	竣功距離	摘	要
				里町	里町		
清津	會寧線	一	四	二二・一八	二二・二二		
平壤	元山線	一	四	五五・〇〇	五六・二七		
京城	元山線	一	四	五七・〇〇	五七・〇〇		部分改修
海州	載寧線	二	三	一五・一八	一三・三〇		
安州	滿浦鎮線	二	三	六一・二九	六一・二二		江界滿浦鎮間を
清州	陰城線	二	三	一一・〇〇	一〇・三三		

河東院田線	北青城津線	行營穩城線	會寧行營線	忠州陰城線	公州論山線	京城利川線	雄基慶興線	新浦惠山鎮線	城津甲山線	利川江陵線	利川長湖院線	順天全州線	晉州尙州線
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	-------

二	一	一	一	二	一	二	一	二	二	二	一	二	二
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

三	四	四	四	三	四	三	四	三	三	三	四	三	三
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

七〇〇	一四〇七	一一一八	六一八	六一八	一〇〇〇	一一一八	九〇〇	五四〇〇	一七〇〇	四八一八	七一八	三二〇〇	四四〇〇
-----	------	------	-----	-----	------	------	-----	------	------	------	-----	------	------

七二五	一五二二	一四二八	五三〇	七一	八一五	一五二四	九二七	五四〇〇	一七〇三	五二二九	七〇七	三三三〇	四七〇九
-----	------	------	-----	----	-----	------	-----	------	------	------	-----	------	------

部分改修
 直轄施行距離は三二里一九町
 他は夫役施行

端川居山間を除く

路	線	等級	幅員	豫定總距離	竣功距離	摘	要
公州—鳥致院線	二	三	里町 六・一八	里町 六・一八	部分改修		
輸城—茂山線	二	三	二三・〇〇	一四・〇〇	部分改修		
忠州—尙州線	一	四	二二・一八	一七・一五	部分改修		
京城—春川線	二	三	二二・〇〇	二二・〇〇	部分改修		
順天—麗水線	二	三	八・〇〇	八・〇〇	同		
忠州—長湖院線	一	四	九・〇〇	八・〇二	同		
城津—吉州線	一	四	一〇・〇〇	一〇・〇〇	同		
元山—長箭線	二	三	二七・〇〇	二七・〇〇	同		
孟中里—雲山線	二	三	六・〇〇	六・〇五	部分改修		
行營—慶興線	二	三	六・一八	七・〇四	部分改修		
大邱—尙州線	一	四	一八・〇〇	一八・〇〇	直轄施工は構造物のみ		
天安—洪州線	二	三	一六・〇〇	一五・三四	直轄施工は構造物及一部改修		

水原—小井里線	—	四	三・一一	三・〇三	直轄施行は構造物のみ
論山—全州線	—	四	二・〇七	二・〇七	同
京城市街	—	—	—	〇・二八	太平町外三線
京城—仁川線	—	—	三・五〇〇〇 漢江架橋長	三・五〇〇	
總計			六八五・〇〇 里町 三五〇・〇〇	六八五・〇〇 三五〇	京城市街線の距離は算入せず

改修道路

大正七年三月末日

路線	所在廳名	幅員	總距離	工費	竣功年月	摘要
水原—利川間	京畿道	三間	一・二・二八 里町	一七八、二一三 円	明治四十三年十月	
利川—長湖院間	同	四	七・〇七	一一五、二五五	大正二年八月	
京城—利川間	同	四	一五・二四	二一七、五〇〇	同 三年十一月	

路	線	所在廳名	幅員	總距離	工費	竣功年月	摘要
仁川市街	京城市街	同	三	〇・〇五 里町	二六、五八三 四	明治四十三年六月	
京城市街	同	同	三	一・二八	一、一六四、七六七	大正二年十月	
京城—春川間	京城—原張	京城—原張	三	二二・〇〇	九〇、〇〇〇	同 四年三月	部分改修
利川—江陵間	京城—原張	京城—原張	三	五二・二九	六四二、八六〇	同 七年三月	
京城—元山間	京城—原張	京城—原張	四	五七・〇〇	二七、五〇〇	同 三年十月	部分改修
元山—長筈間	京城—原張	京城—原張	三	二七・〇〇	二四、五〇〇	同 四年十月	同
清州—鳥致院間	忠清北道	忠清北道	三	四・三二	三六、〇〇〇	明治四十五年三月	
清州—陰城間	同	同	三	一〇・三二	一三九、四六三	大正二年五月	
陰城—忠州間	同	同	三	七・一一	六八、六五二	同 年十二月	
忠州—長湖院間	同	同	四	八・〇二	五〇、〇〇〇	同 五年三月	部分改修
公州—小井里間	忠清南道	忠清南道	三	八・二九	一、二四、三三〇	明治四十三年七月	
天安—溫泉里間	同	同	三	三・二八	二四、〇〇〇	同 四十四年二月	
公州—論山間	同	同	四	八・一五	八一、八一六	大正二年十二月	

天安	公州	平壤	鎮南浦	新安州	平壤	安州	新義州	孟中里	永興	咸興	北青	新浦	城津	清津	蒼坪
州間	州間	鎮南浦間	廣梁浦間	寧邊間	元山間	滿浦鎮間	麻田洞間	雲山間	柳島間	西湖津間	城津間	惠山鎮間	甲山間	鏡城間	全巨離間
同	同	平安南道	同	平安南道	平安南道	平安南道	平安北道	同	咸鏡南道	同	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡北道	咸鏡北道	同
三	三	三九	三	二八	四	三	二八	三	二五	三	四	三	三	二八	二八
一五、三四	六一、八	一三〇、四	三、二〇	七、三五	五六、二七	六一、二一	〇、一三	六〇、五	五〇、八	三、二五	四〇、〇	一五、二二	五四、〇〇	一七、〇三	五、一五
三〇、〇〇	四三、〇〇〇	四八五、三七〇	二八、三三三	一〇六、八一四	一、〇一二、〇〇〇	八九五、四七一	四、二八四	四四、四〇〇	四八、〇〇〇	五二、六一一	五二、六九三	二八三、〇六八	五〇九、三四六	一五四、一二九	六二、五〇〇
同	同	明治四十四年十一月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五年三月	三年十二月	明治四十四年十一月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五年三月	三年十二月	明治四十四年十一月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

第四章 交通

(長山嶺附近)

部分改修

江界滿浦線同
を除く

海川居山間を
除く
直轄履行距離は
三二里一九町他
は夫役履行
部分改修

路	線	所在廳名	幅員	總距離	工費	竣功年月	摘要
清津會	寧間	咸鏡北道	四	二二・三三	四一〇、七四九	大正二年十月	
雄基慶	興間	同	四	九・二七	一三五、八三一	同	
會寧行	營間	同	四	五・三〇	八五、八四一	同	
行營穩	城間	同	四	一四・二八	一六五、六〇〇	同	
群山全	州間	全羅北道	三・九	一一・三〇	二六九、一七五	明治四十四年二月	
全州順	天間	全羅北道	三	三三・三〇	三五一、二五四	大正二年九月	
筏橋海	倉間	全羅南道	二・二	〇・三二	二、四〇三	明治四十三年九月	
順天麗	水間	同	三	八・〇〇	三六、〇〇〇	大正四年一月	
海南河	東間	慶尙南道	二・二	四一・二八	一七六、五九七	明治四十四年二月	
大邱市	街	慶尙北道	六	〇・二四	一九、九四九	同	
大邱慶	州間	同	三・三	一七・一〇	三三七、七四五	同	
慶州浦	項間	同	二・二	七・二三	六〇、〇〇〇	同	
大邱漆	谷間	同	四	一・〇四	一一、一一〇	同	
大邱尚	州間	同	四	一八・〇〇	五三、〇〇〇	大正六年三月	
尙州忠	州間	慶尙北道	四	一七・一五	三〇八、九一六	同	

部分改修

直轄施行は構
悉ぬのみ

第四章 交通

本表路線の總里數は八百九十二里六町にして全部竣功せり

尚州—晋州間	慶尙北道	三	四七〇・九	五二四、九五九	同	二年十二月	
晋州—馬山間	慶尙南道	二・八	一七二・五	三四一、四五七	明治四十四年三月		
河東—院田間	同	三	七二・五	八二、六四二	大正三年三月		
木浦—光州間	全羅南道	三・三	二二〇・五	四三七、三一四	明治四十三年十二月		
海州—龍塘浦間	黃海道	二・八	一〇二・七	二七、九一九	同	四十一年十一月	
黃州—同停車場間	同	二・八	〇二・九	一〇、七三八	同	四十二年六月	
沙里院—載寧間	同	三	四二・九	四八、〇〇〇	大正元年十二月		
海州—載寧間	同	三	二一三・〇	一九四、八七五	同	二年三月	
輸城—茂山間	咸鏡北道	三	一四〇・〇	一八二、四〇〇	同	四年八月	
行營—慶興間	同	三	七〇・四	一〇七、三一〇	同	五年九月	部分收修
城津—吉州間	同	四	一〇〇・〇	三〇、〇〇〇	同	三年十一月	同
論山—全州間	全羅北道	四	二〇・七	一一、〇〇〇	同	五年六月	同
水原—小井里間	忠清南道	四	三〇・三	一六、五〇〇	同	五年十一月	同
全州—光州附線の内	忠清南道	四	二一・八	三六、〇四九	明治四十四年十二月		竣功
全州—附線の内	全羅北道	四	二一・八	三六、〇四九	同		
漢江—仁梁川	京畿道	橋長	三五〇	八六四、〇〇〇	大正七年三月		竣功

國庫補助工事道路改修

大正七年三月末日

道	改修			里	合	計	工	
	一 等	二 等	三 等其 他				總 額	一 内 國 庫 補 助 額
京畿道	二八〇三	三〇〇六	一九三三	里野	五〇三二	三四四、五八三	二五八、〇九四	
忠清北道	六〇五	七一九	一一二八	里野	二〇七一	一一二、六四八	七七、五〇〇	
忠清南道	一九三〇	一六〇〇	一一一八	里野	二二、三三三	一九八、七一六	一三三、八〇〇	
全羅北道	一三三	五二一	二〇三一	里野	四六、一〇〇	一七六、五六〇	一〇九、五四六	
全羅南道	二〇〇〇	二六〇七	三、二四	里野	二二、二四	二二三、六二四	一三二、一九八	
慶尙北道	二一〇	三、四二八	四、一七	里野	三三、二一	三八五、七四四	一八四、〇四三	
慶尙南道	二一〇	三、四二八	二四、一八	里野	六一、二〇	三六一、七一五	二一〇、〇五〇	
黃海道	〇、一四	五六、二五	一、二七	里野	五六、二五	二二五、八〇二	一四三、八〇〇	
平安南道	八、〇四	四九、一〇	七、三四	里野	五九、三五	二四二、二四〇	一四四、八七五	
平安北道	一〇、一〇	一八、二〇	〇、三五	里野	二七、〇八	一九二、五二六	一三四、〇〇〇	
江原道	一〇、一〇	一八、二〇	〇、三五	里野	二七、〇八	一二五、六九一	九五、〇〇〇	
咸鏡南道	七、〇七	四、一九	一、一〇	里野	一一、二〇	一六九、五四八	一〇五、五八三	
咸鏡北道	七、〇七	四、一九	一、三〇	里野	二五、一〇	七二三、六六九	六一、〇四七	

第三節 港 灣

朝鮮に於ける各開港場の港灣設備は從來人工を加へたるもの極めて少く僅に天然の地形を利用せるもののみなりしか此くては今日文明發展の趨勢に應し難きを以て海陸聯絡設備計畫を立て明治三十九年以來工事に著手し併合の際に於て更に必要に應し設備擴張を計畫せるものあり即ち明治四十四年度以降大正七年度に至る八箇年繼續事業に屬する海關工事費は八百二十七萬千八百二十九圓にして釜山、仁川、鎮南浦、平壤の四港に對する海陸聯絡設備なりとす更に大正三年度に於て鎮南浦に對し陸上諸設備費十二萬圓仁川港に對し航路岩石除却費四十三萬一千六十一圓を増加し大正四年度に於て元山港海陸聯絡設備を計畫し工事費を百五十六萬圓とし大正四年度以降大正八年度に至る五箇年繼續事業として起工し尙大正六年度に於て仁川港に對し二期築港工事を計畫し工事費百七十五萬圓を大正九年度に互る事業として追加したるを以て海關工事費の總額は一千二百十三萬二千八百

九十圓となれり今其の工事の工程を掲ぐれば左の如し

海關工事豫算及工程

種別	豫算總額	工程	摘要
釜山港工事	三、八二四、〇六〇	大正七年七月竣功	
仁川港工事	五、六六四、四五五	八步二厘	大正九年度全部竣功豫定 (船渠工事に大正十一年十月竣功)
元山港工事	一、五六〇、〇〇〇	六步一厘	大正八年度竣功豫定
鎮南浦港工事	九五五、〇〇〇	大正四年三月竣功	
平壤港工事	一一九、三七五	大正三年三月竣功	
合計	一一、一三二、八九〇		

第四節 鐵道

(一) 國有鐵道

明治三十四年始て京釜鐵道起工せられ同三十九年京義線竣成す此の二大線は合して一幹線と成り半

島を縦貫し南端釜山より起り北端新義州に到り鴨綠江を渡り支那安東に達す全延長五百九十二哩一分あり湖南線は京釜線大田より起り木浦に達する幹線と裡里より分岐して群山に到るの支線より成り其の延長百七十六哩京元線は京釜線龍山より分岐して元山に達する延長百三十八哩四分又咸鏡線は京元線元山に起り會寧に至るものにして已に開業せるもの元山水興間延長三十三哩九分及清津會寧間五十八哩一分あり其の他支線中永登浦より仁川に至るものを京仁線、三浪津より馬山に達するものを馬山線、平壤より鎮南浦に至るものを平南線、平壤より勝湖里に向ふものを平壤炭礦線、黃州より兼二浦に達するものを兼二浦線とす如斯にして今や全線延長實に一千百二哩一分を算するに至れり

軌條の幅員は本支線共何れも四呎八吋半の標準軌間にして車輛は「ボギー」式を用ゐる客車は廣濶壯麗貨車亦長大にして一輛克く二十六噸を搭載し得べく主要列車には食堂車、寢臺車を連結し旅客の待遇設備遺憾なく備はれり而して南は釜山に於て關釜連絡船に依り一日二回内地との連絡を保ち北は國境鴨綠江の架橋に依り南滿鐵道に直通し釜山奉天間二回の直通旅客列車を運轉し内地鮮滿間の交

通至便なり

附記 明治四十五年六月以來歐亞直通連絡の爲釜山長春間に一週三回（時局の爲中途より一週一回に減せり）の鮮滿直通旅客列車を運轉したるも時局の爲西比利亞線の運行不確實となりたるを以て大正七年五月より其の運轉を休止せり

大正二年五月より東清及烏蘇里鐵道主要驛と旅客手荷物の聯絡運輸を開始し次で同年十月より日支旅客手荷物聯絡を大正三年一月より日滿貨物聯絡を同年十一月より日滿露旅客及手荷物聯絡運輸を實施し更に大正七年七月より日支聯絡小荷物の取扱をも開始せり

一般旅客の旅行に便する爲大正二年より釜山新義州停車場樓上に洋式の旅館を設け京城にも亦朝鮮ホテルを建設し大正三年十月より營業を開始せり尙金剛山探勝客の便を圖り溫井里及長安寺に洋式旅館を設け毎年夏期より秋期に互り營業を爲すこととし前者は大正四年より後者は大正七年より之を實施せり

附記 鴨綠江の架橋は總延長三千九十八呎にして朝鮮側より二百呎六連三百呎六連の鋼桁を架し

支那側に達するものにして明治四十二年八月起工し四十四年五月橋臺橋脚を竣成し同年十月に橋桁工事の建設を終へたり該橋梁は朝鮮側より第九連の梁を開閉式と爲し船舶の航行に便ならしめ又橋梁の兩側に幅八呎宛の歩行道を設け通行の用に供せしむ尙各桁の最下端は平時滿潮水面上二十五呎干潮水面上三十八呎なるを以て普通の船舶は優に橋梁の下を通過するを得へし橋脚は河中に潜水函を沈下し以て基礎工事を施したるものなり

朝鮮國有鐵道並附帶業務は從來總督府の經營する所なりしか大正六年七月三十一日より之を南滿洲鐵道株式會社に委託せり

今左に其の狀況を表示すへし

鐵道線路		大正七年十月一日現在
線路區間	哩程	摘要
京釜線 本線 仁線 馬山線	西大門(京城)―釜山 永登浦―仁川 三浪津―馬山	二八一・二 一八・四 二四・八

線	路	區	間	哩	程	摘	要
京義線	兼二浦線	龍山	安東	三一〇・九	分		
平壤炭鐵線	平壤	平壤	兼二浦	八・二			
平壤炭鐵線	平壤	平壤	兼二浦	三四・三			
新義州荷扱所線	新義州	新義州	兼二浦	一六・八			
京元線	龍山	龍山	兼二浦	一・一		貨物のみを取扱ふ	
湖南線	大田	大田	兼二浦	一三八・四			
本群山線	大田	大田	兼二浦	一六一・七			
咸鏡線	元山	元山	兼二浦	一四・三			
咸鏡線	元山	元山	兼二浦	三三・九			
咸鏡線	元山	元山	兼二浦	五八・一			
總計				一一〇二・一			

鐵道營業成績(一)

大正六年度

線路名

旅客人員

哩旅客延人

斤小手荷物數

貨物噸數

哩貨物延噸

運輸收入

京釜線

京義線

京元線

湖南線

咸鏡線

總計

三六七〇四

二二三〇六七

五五八〇一

九五〇九四

一四二七九

七〇六四九

一三三二六

八七八四七

一九四五〇

二二六五二

二四二〇三

二二〇九六

三三六五七

九五八〇五

一九六四〇

二七六五五

三三六七三

一五七〇七

一四三〇九

二二九一七

二四三〇五

三三三三三

四五六〇三

二四七四一

二七一四七

一八六七三

二二五〇八

一五、三三七

九〇七、三三

二四七四七

五六八三九

四三九五八

八三三三七

八九〇一七

七五四九六

一四八〇八

本表各線の計數を積算して尙總計に於て不足を見るは二線以上に互りて輸送せしものは之を各線に計上せしも總計に於ては其の輸送せし實數を掲上し各線に於て重複せし數を控除したるに由る

鐵道營業成績 (二)

自至大正六年度

年 度	一 日 平 均				一 哩 平 均					
	旅 客 人 員	小 手 荷 物 斤 數	貨 物 噸 數	運 輸 收 入	旅 客 人 員	貨 物 噸 數	運 輸 收 入	旅 客 人 員	貨 物 噸 數	運 輸 收 入
大 正 元 年 度	二,三五四	三,四一八	三,一五〇	一六六,〇〇四	二,〇五五	二,五七六	七二,四七	五,六三	三,五五	一,九八六
同 二 年 度	一,四七七	三,九八五	四,〇五二	一八五,三三	九,〇九七	一,三五七	六九,六九	五,三	三,七一	一,九〇九
同 三 年 度	一,三二八	四,〇一七	三,八二九	一七七,三三	六,九三三	一,四一七	六五,〇七	四,六四	三,八八	一,七八三
同 四 年 度	一,三二八	四,四九七	四,五四五	二〇〇,七六	一,八七五	一,七九五	七三,〇一	五,一〇	四,九一	一,九〇九
同 五 年 度	一,四九三	五,一六〇	五,三六三	二四,五三	一,八二〇	二,七三〇	八四,〇三	五,一八	七,五〇	二二,〇三
同 六 年 度	一,九六五	六,六三九	六,八七三	三三,四一一	二,五二九	三,六九九	一一,一六	六,六八	一〇,一三	三〇,六〇

(二) 輕便鐵道及軌道

輕便鐵道及軌道は地方の開發並鐵道幹線の培養上夙に民間の企業を獎勵し一般運輸を目的とする輕便鐵道に對しては一定の標準に基き總督府より補助金を交付す

大正六年度末に於ける輕便鐵道及軌道の總延長は開業線百七哩八分未開業線二百五十九哩六分専用の輕便鐵道及軌道既設線七十二哩八分あり此の外朝鮮軍經理部所管の手押軌道十八哩二分ありて軍

用の傍一般運輸の取扱を爲す

今左に營業線の狀況を表示すへし

開業線		區	間	哩	程	軌	間	原動力
		全州	裡里間	一五・五	哩分	二・六	汽	蒸
		咸興	西湖津間	二〇・〇		二・六	同	同
		新安州	价川間	一八・四		二・六	同	同
		大邱	河陽間	一四・四		二・六	同	同
		京城	府内	一六・三		三・六	電	電
		釜山府内及東萊溫泉場間		一〇・七		二・六	電氣、蒸汽(併用)	汽
		鏡城	羅南間	四・三		二・〇	手	押
		金堤驛	金堤邑内間	一・三		二・〇	同	同
		咸興	長豐里間	一五・六		二・〇	同	同
		倭館驛	洛東江岸間	〇・七		二・〇	同	同

未開業線

河陽州 慶州 慶州 蔚山 鳥致院 鳥致院 平澤院 長湖院	東浦 東浦 東浦 東浦 東浦 東浦	項州 項州 項州 項州 項州 項州	慶州 慶州 慶州 慶州 慶州 慶州	蔚山 蔚山 蔚山 蔚山 蔚山 蔚山	鳥致院 鳥致院 鳥致院 鳥致院 鳥致院 鳥致院	平澤院 平澤院 平澤院 平澤院 平澤院 平澤院	長湖院 長湖院 長湖院 長湖院 長湖院 長湖院
哩	哩	哩	哩	哩	哩	哩	哩
程	程	程	程	程	程	程	程
軌	軌	軌	軌	軌	軌	軌	軌
間	間	間	間	間	間	間	間
原動力	原動力	原動力	原動力	原動力	原動力	原動力	原動力

區	區
間	間
哩	哩
程	程
軌	軌
間	間
原動力	原動力

釜山計	川泉洞内	四・六	二・六	同	氣
		二・二	二・六		
		二五九・六			

第五節 海事

(イ) 船舶

船舶の朝鮮置籍が内地又は關東州に置籍するよりも有利なるよりして船舶業者の大型汽船を朝鮮に置籍する者多かりしか歐洲戦亂の影響を受けたる爲か此一二年間に於て著しき増加を見ざるのみならず反て外國に賣却又は行衛不明に歸したるものあり爲に多少の減少を示せり今最近に於ける船舶數を表示すれば左の如し

船舶現在數

大正七年十月一日

種別	汽船		帆船		合計	
	數	總噸數	數	總噸數	數	總噸數
朝鮮に船籍港を有するもの	七九	三三、二二八	三二九	一〇、八五〇	四〇五	四四、〇七八
〔登簿船〕	七四	七五二	五、三九八	五四、〇八〇	五、四七二	五四、八三二
〔不登簿船〕	一九	三、四一九	八	二八四	二七	三、七〇三
内地に船籍港を有し初 期登録のみを航行する もの	一〇	一三三	〇	—	—	—
〔登簿船〕	—	—	—	—	—	—
〔不登簿船〕	—	—	—	—	—	—
總計	一八二	三七、五三三	五、七三五	六五、二一四	五、九〇四	一〇三、五一一

朝鮮に船籍港を有する不登簿帆船數は大正五年十二月末日現在なり

(ロ) 船燈、信號器、救命具、船燈は従來朝鮮内に其の製造業者なく悉く内地製品に仰ぐの結果高價に苦しみしか大正四年十二月免許せられたる仁川に於ける碇舶燈及乙種兩色燈の製造者は其の製品を比較的廉價に市場に供給して相當の成績を挙げつつあるは航海業者にさりても亦至倅さ爲すへし

今朝鮮に於ける船燈、信號器、救命具の製造免許及請賣認可を得たる種別及人員を掲ぐれば左の

(三) 船舶職員

一、海技免狀受有者の現在数を示せば左の如し

種別	朝鮮にて登録のもの		内地にて登録のもの		合計
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	
甲板部	四一四	六五	四七九	一一一	七〇一
機關部	一一三	二〇	一四三	三	三〇〇
總計	五三七	八五	六二二	四	一、〇〇一

海技免狀受有者

大正七年十月一日

二、船舶職員試験 大正六年十月一日より同七年九月三十日に至る間に於て朝鮮船舶職員定期試験を釜山に於て二回、仁川二回、同臨時試験木浦一回、元山二回、鎮南浦一回、新義州一回、

清津一回合計十回執行し受験者總數二百六十二人中百七十七人の合格者を出せり

(ホ)水先人 大正四年十月朝鮮水先令施行以來同令附則第二項に依り水先人名簿に登録を経て水先人として従業せる者を掲ぐれば左の如し

水先免狀受有者

大正七年十月一日

水先區	人員	水先區	人員
釜山水先區	一	鴨綠江水先區	三
仁山水先區	一	計	七
群山水先區	三		

仁川水先區の分は釜山水先區水先人にして其の免狀を併有せるものなり

(一)海員審判

海員審判所取扱件數及人員

自大正六年十月一日
至同 七年九月三十日

種別	裁										計	審判不開始	未決	
	衝突	乘揚	沈没	接觸	底觸	浸水	難破	汽罐損傷	義務違反	職務怠慢				不繼續決定
件數	一	一	一	二	一	二	一	一	三	一	一三	四	三	一四

決

種別	裁						決							
	衝突	乗揚	沈没	接觸	底觸	浸水	難破	汽罐損傷	義務違反	職務怠慢	計	審判不開始	未決	
人員	二	一	一	二	一	二	一	一	二	一	一四	四	三	一四

本表の外理事官に於て審判不要として處理したるもの四十六件四十六人あり

- (ト)定期航路 大正七年九月末現在航路は(一)朝鮮内に限るもの (二)内地を起點として朝鮮に往來するもの (三)内地を起點として朝鮮を經由し外國に到るもの (四)朝鮮を起點として内地又は外國に到るもの (五)外國を起點として朝鮮に來るものの五種にして朝鮮總督府命令に依るものは(一)種又は(四)種の内に屬す別に鐵道院の經營及福岡縣命令に依る(二)種陸軍省特種命令に依る(三)種遞信省命令に依る(三)種及關東都督府命令に依る(五)種の航路あり又補助命令に依らず自營を以て定期航海を爲すもの等あり今之等の航路に配在せる船舶の大勢を示せば
- (一)に屬するもの 一九七艘 五、三九八噸 (四)に屬するもの 一〇艘 八、〇八五噸

(二)に屬するもの 一二艘 一九、七二六噸 (五)に屬するもの 四艘 三、七二三噸
 (三)に屬するもの 三艘 五、三五一噸 總計 二二六艘 四二、二八三噸

にして更に政府の補助命令に依るものと自營に依るものとを區別すれば左の如し

命令航路使用船(官營を含む) 一八三艘 三八、二六八噸

自營航路使用船 三六艘 四、〇一五噸 八七噸(命令船併用の分)

前記各航路の主なる經營者は朝鮮郵船株式會社、鎮南浦汽船合資會社、鴨綠江運輸株式會社、大
 阪商船株式會社、日本郵船株式會社、尼崎汽船部、大連汽船株式會社及鐵道院等とす

朝鮮近海及沿岸定期船一覽 大正七年九月末現在

一 沿岸のみを航行するもの

命	一七	三、三六一噸	朝鮮郵船株式會社
令	三	八七	鎮南浦汽船合資會社
	一三九	一、〇三九	鴨綠江運輸株式會社
	一	二五	藤森利兵衛

竹内熊吉

計

一六一

四、五二七

朝鮮郵船株式會社

計

一

三六三

田中作二

計

二九

八七一

(命令使用船併用)

合計

一九〇

五、三九八

二 近海及沿岸を航行するもの

七

七、二六八

三

五、三五一

二

三、一三三

二

二、二九一

朝鮮郵船株式會社

命令



日本郵船株式會社

大阪商船株式會社

大連汽船株式會社

總計	合計	官營	自營					計				
			計	一	一	一	三	一	一七	一	一	
二一九	二九	五	七	一	一	一	三	一	一七	一	一	一
四二、二八三	三六、八八五	一一、八九四	三、一四四	四〇	五五	五一	二、二七六	七二二	二一、八四七	五二四	一、三八一	一、八九九
		鐵道院		澤山兄弟商會	山本寬次郎	順記公司	尼崎汽船部	朝鮮郵船株式會社		對馬運輸株式會社	阿波國共同汽船株式會社	株式會社互光商會

朝鮮近海及沿岸定期航路一覽

大正七年九月末現在

一 朝鮮沿岸(河川を含む)のみを航行するもの

命令別 自營	線路	寄航港	航海 度數	使用船舶 船名總噸數	經營者
朝鮮總督 府命令	元山雄基線	西湖津、前津、新浦、新昌、遮湖、城川、城津、泗浦、大良化、漁大津、獨津、清津、梨津、西水羅、退潮、執三里、陸臺、厚湖、乾自浦、群仙、沙飛津、日新、梁浦、德葛、麻浦、明川、郡浦、項黃津、五常津、接干津、集三、連津、龍清、榆津に臨時寄港、庫底、長箭へ臨時延長	月 同	七 鏡 城 城 丸 丸 三 七 三 七 二	朝鮮郵船株式會社
自營 同	同	隨時途中寄港	三 三 浦 丸	三 三 三 同	同

第四章 交通

同	自營	同	朝鮮總督府命令	同	同	同
釜山牧島線	釜山金海線	釜山浦項線	釜山鬱陵島(道洞)線	同	釜山元山線(休航中)	元山清津線
		蔚山、方魚津、甘浦、九龍浦、海雲臺、大邊に臨時寄港	浦項、盈德、丑山浦、寧海、平海、竹邊、鬱陵島、靑霞洞(月一回寄港)甘浦、九龍浦に臨時寄港	浦項、盈德、竹邊、三陟、江陵、襄陽、杆城、長箭、庫底		西湖津、新浦、新員、遮湖、端川、城津、明川、大良化、獨津
一時間	一五	日發		二		三
四 富士江丸	南海丸	襄陽丸	四 盈德丸	補助機附帆船 草梁丸		補助機附帆船 草梁丸
八田中若太郎	一〇竹内貞三	二二七 同 一八六	二四〇 朝鮮郵船株式會社	六二 李泳均		六二 合資會社 田口回漕店

命令別	線路	寄航港	航海度數	使用船舶名 總噸數	經營者
自營	釜山牧島線		一 四	第一島丸 第二玉成丸 第三玉成丸 富士江丸	田中若太郎 外五名
同	同	行巖、縣洞、舊馬山、新馬山、統營、三千浦、船津、辰橋、露梁津、下浦	同	第二木下丸	庄島榮造
朝鮮總督府命令	釜山麗水線	河島に臨時寄港 木浦に臨時延長此の場合 羅老島、上浦、興陽、長興、青山島に臨時寄港	日發	海州丸 統營丸 巨濟丸	朝鮮郵船株式會社
同	釜山濟州島線	長承浦(巨濟島)、麗水、巨文島、城山浦、金寧、朝天、山地、翰林、狹才里、慕瑟浦、西歸浦、表善里、彌助島、涯月里に臨時寄港		五昌丸 平丸	三二同

第四章 交通

自營	朝鮮總督府命令	莞島郡命	同	同	同	自營
同	木浦麗水線	莞島 北木里線	馬山鎮海線	洛東江內 龜浦仙岩線	同	釜山統營線
(休航中)	右水營、莞島、長興、興陽、羅古島、青山島、小島島、臨時寄港	松谷里、德洞里、道濟里、樺子里	飛鳳里		同	馬山
			同	日		
1	10 順天丸	10 發動機船 10 清海丸	6 第一鎮海丸 6 第二鎮海丸	3 春風丸 3 春風丸	9 慶南丸	9 慶昌丸
1	10 五朝鮮郵船株式會社	15 竹內熊吉	10 澤山喜多路	6 八田兼次郎	5 山本寬次郎 外三名	3 八須之內常太郎
同						

命令別	線路	寄航港	航海船名	使用船舶噸數	經營者
自營	木浦海南線 (貢稅浦)線	所安島、山地、朝天、金寧、城山浦、表善里、西歸浦、琴瑟浦、狹才里、翰林、楸子島、鳥島(以上西線) 港門島(東廻)、摩羅島(西廻) 右の内港門島、摩羅島は月二回寄港 巨次島、涯月里に臨時寄港	日發第一海南丸	二四	海南運輸株式會社
朝鮮總督府命令	木浦濟州島 東廻線 西廻線	八公慶州丸	一九九 一八九	朝鮮郵船株式會社	
同	木浦多島海 (黑山島)線	箕佐島、牛耳島、大黑山島、梅加島、苔島、都草島、飛禽島、小中關島に臨時寄港	三公慶州丸	一九九 一八九	同
自營	木浦靈巖線		日發正福丸	一六	海倉里靈巖共運社同漕部
同	木浦西倉線		同喜久丸	二	玉置喜一郎

同	木浦珍島線 箕佐島	一五 第七 子丸	二六二 木市藏
務安郡 命令	木浦佳子島線 神海島、望雲蟬島、智島	一〇 湖南丸	二五 藤森利兵衛
同	木浦安昌島線 箕佐島、慈恩島、飛禽島、長山島	一〇 同	二五 同
朝鮮總督 府命令	仁川木浦線 舊島、安興、熬川、群山、於青島、末島、古群山島、蝟島、苗浦、法聖浦、鞍馬島、佳子島、右の内末島は隔航往復のみ寄港古群山島、於青島、蝟島、鞍馬島、佳子島は隔航往航又は復航寄港 智島、安眠島、大旺燈島に臨時寄港	六 全慶 寶州丸	九二 一七七 朝鮮郵船株式會社
同	仁川海州龍塘浦線 江華島、喬桐島、延平島に臨時寄港	日發 三十一 錦南 江陽丸	八五 六一 同

命令別	線路	寄航港	航海度數	使用船名	總噸數	經營者
自營	仁川鎮南浦線	海州、龍湖島、瓮津、小青島、(月)航海寄港、潮浦、九味浦、德洞、夢金浦、白翎島に臨時寄港	四	晉州丸	一六四	朝鮮郵船株式會社
自營	仁川仙掌線	漢津、富里浦	日發	安城丸、乙姬丸、薩摩丸	三九、二八、二五	田中作二
同	仁川舊島線		六	乙姬丸	二八	同
同	仁川甲串線	草芝	二八	第二臨津丸	七	瀧尾良平
同	(仁川海州)龍塘浦線		八	吉辰丸	二八	野口文一
同	群山龍塘線		日三	盛航丸、錦江丸	一〇、五	橋本央
同	平壤兼二浦線		日發	花咲丸	一八	平壤水陸運輸組
同	鎮南浦今卜線	營串津ニ臨時寄航	日三	第一大同丸	八	鎮南浦汽船會社

同	同	朝鮮總督 府命令	同
鎮南浦新換 浦線	鎮南浦兼二 浦線	鎮南浦 津江浦線	新義州中江 鎮江界線
石浦 外岩浦外六箇所に臨時寄 港	載寧線 外岩浦、東倉河口、石海、 岳踰、壽昌浦、海昌（九洞 村、進礮に臨時寄港） 津江浦線 猪島、今下、席島、金山浦、 椒島、月五回以上寄港、西 海里、廣梁灣に臨時寄港	北下洞、義州、清城鎮、九雲 浦、安哥浦、甲岩里、昌城、私 倉里、大吉里、碧峯、忠滿江 口、楚山（新島嶼）、東川里、 直洞、渭原、舊邑、江界江口 （以上兩線）	高山鎮、伐登鎮、滿浦鎮、文 岳里、舊城洞、慈城江口、 （以上兩線）
日發	日發	各線	新義州より 高瀨川（一箇月） 楚山迄 高山鎮迄 中江鎮迄 江界迄
發第二大同丸	櫻 工盤 保丸	櫻 工盤 保丸	子（三箇月） 私倉里迄
八	二五 二四	二五 二四	高瀨川 三九 三九
同	同	同	鴨綠江運輸株式會社

命令別	線路	寄航港	航海度數	使用船舶名	總噸數	經營者
自營		土城里(以上中江鎮線) 支那側 安東縣、長甸河口、蒲石河口、外察溝、(以上兩線)通溝、帽子山(以上中江鎮線)	碧童 三 楚山 九 渭原 五 滿浦 四 慈城 一 中江鎮 一	楚山 迄 渭原 迄 滿浦 迄 慈城 迄 中江鎮 迄	九 一〇〇 一〇〇	

二 朝鮮を起點として内地又は外國に到るもの、内地又は外國を起點として朝鮮に來るもの及朝鮮を經由して外國に到るもの

命令別	線路	寄航港	航海度數	使用船舶名	總噸數	經營者
自營		朝鮮側一其の他 清津、獨津、漁大津、泗浦、城津、崙川、遮湖、新昌、新浦、前津、西湖津、元山、長箭、杆城、襄陽、江陵、三陟、竹邊、浦項、釜山 西水羅、榆津、梨津、龍渚、連津、集三、接王津、五常	月四	甲線 京畿 山陽	丸丸 九九四 九七〇	

官 營 關釜連絡線	自 營	同	同	朝鮮總督 府命令
	仁川芝罘線	元山浦鹽斯 德線	清津敦賀線	雄基門司 乙線
		城津、清津 釜山に延長 西湖津に臨 時寄港	城津、元山 獨津に臨時 寄港	津、大夏化、黃津、明川郡 浦項、葛麻浦、梁浦、日 新、沙飛津、群仙、乾自浦、 厚湖、陸臺、執三里、庫底、 高城、五里津、東津、水山 津、南涯津、安木、金津、墨 湖津、盈德、丑山浦、蔚山 に臨時寄港
	青島、大連 以上往航	長 門司、神戸を 經て大阪に延		
R				
博愛丸 壹岐丸 對馬丸 高麗丸 新羅丸	三江丸	平壤丸 後丸	二五平丸 安丸	六 (以上元山、 釜山に置處) 乙線 威鏡丸 雄基丸
丸 二、六三二	丸 七三三	丸 二、一四六	丸 一、五八〇	丸 七五〇 丸 七〇一
鐵道院	同	同	同	朝鮮郵船株式會社

命令別	線路	寄航	航港	航海	使用船舶	經營者
自營	線路	朝鮮側	航港	度數	船名	總噸數
自營	釜山下關線		他	五大源丸	五	山本寛次郎
同	同			五 三 榮丸	四〇	澤山兄弟商會
福岡縣 命令	博多釜山線	鎮海(八月二回) 寄港	殿原、佐須奈	六天眞丸	五二四	對馬運輸株式會社
自營	大阪仁川線	木浦、群山	神戸、門司	六 大 君 丸	九七三 六五二 六五一	尼崎汽船部
陸軍省持 殊命令	大阪清津線	釜山、元山、西 湖津、新浦、 湖津右の内、西 湖津、新浦、城 津は往航又は 復航に寄港	神戸、宇品、門	一、五 安 宮 島 丸	一、六〇四 一、五二九	大阪商船株式會社
同	同	同	同	平 一 八 第三 琴平丸	一、八九九	株式會社互光商會
關市都督 命令	大流芝罘仁 川線			五 共 同 丸	二、三八一	阿波國 共同汽船株式會社

同	大連安東縣 天津線		五 濟	潮 丸	一、二六一 、〇三〇	大連汽船株式會社
自營	大連安東縣 線	大孤山	九 保	安 號	五	順記公司
遞信省 命令	橫濱牛莊線	往航 仁川	神戶、門司、大 連往航	酒田丸 三	一、八四五 、八三三	日本郵船株式會社
			四日市、大 沽又は天津	高砂丸 三	一、六七三	

備考

大連安東縣天津線及大連安東縣線は純然たる朝鮮航路とは認め難きも事實朝鮮側にも關係を有するを以て便宜掲記せり

(チ)朝鮮總督府命令航路 大正六年度に於ける朝鮮近海及沿岸命令航路の業務成績を掲ぐれば左の如し

朝鮮總督府命令航路業務成績 大正六年度

第六節 江 運

漢江、洛東江、大同江、豆滿江、鴨綠江は朝鮮の五大江と稱し何れも多少舟楫の便を有せざるなく其の仙錦江、臨津江亦交通の便を有す然れども朝鮮人は從來造船の術に拙劣にして構造粗笨加ふるに鐵釘を用ぬざるを以て頗る脆弱を免れず殊に操縦遲鈍にして水運を利するの技に拙なりし爲に天與の江河も空しく抛棄して有益に利用すること難く漸く小舟筏に據りて運輸に資するに過ぎざりき左に主要なる江河運輸の概況を述ふへし

(イ)漢江 黃海に注ぐ一大河なり源を江原、咸鏡兩道の境なる鐵嶺に發する北漢江及江原、忠北兩道の境上小白山脈に發する南漢江は河口を距る三十里なる高安附近に於て相合し一大江流を成し河口に到りて又臨津江、禮成江と相合す流勢概ね緩漫にして水深く且清し流域各地に形勝の地多く又都邑少からず河口より龍山に到る十七里の間克く小蒸汽船を航行すへし龍山より上流南江の沿岸北倉に至る三十八里の間五六十石の河舟を通すべく北倉より上流永春に到る十六里の間及南北兩江の合流點より北江の上流春川に到る間は尙小舟を溯航せしむへし沿岸の都邑華川、春川、

高安(以上北漢江)、永春、丹陽、北倉、彈琴臺、驪州、楊平(以上南漢江)、靈島、龍山、麻浦、楊花津等は貨物の運搬頻繁なり殊に龍山は古來雜林八道貢米の集積地として知られ漢江上流の木材の舟筏に據りて陸揚せらるるもの毎年十數萬圓に及へり冬時結氷期に際しては江流梗塞して舟筏を遣るに由なく河水凍結氷上人馬の往來するを見る

(口)臨津江 河口に於て漢江と合して黃海に注ぐ江流大ならざるが故に水運の利少なきも潮汐を利川せば克く十四五里を溯航し得へし沿岸都邑の主なるものを汶山浦(河口より八里の上流に在り)、高浪津、砂浪里、朔寧、伊川等とす就中汶山浦は京畿道北部に於ける著名の貨物集産地にして高浪津は大豆の産出を以て名あり

(ハ)錦江 亦黃海に注ぐ大河にして源を全羅、慶尙兩道の境なる六十嶺の西麓に發し流路延長百里に及ぶ河口群山浦附近は幅員十二町餘を有し約二千噸の汽船を碇泊せしむへし沿岸都邑の主なるものを英江、公州、龜岩、江景、群山等と爲す殊に江流の兩岸は沃野相連り米、大豆、麥、棉花等農作物に富むを以て舟楫の往來頻繁なり

(二)洛東江 半島の南岸朝鮮海峽に注く大江にして源を太白山脈に發し有直嶺、蔚時嶺等より發する諸水を集め安東郡に出て大邱の西を走り三浪津を経て河口數脈に岐れ釜山に近く多太浦の西に注く流路延長百二十六里江口より洛東津に到る六十里の間は舟楫の便ありて數十石の帆船を通すへく目下釜山龜浦、龜浦仙岩、釜山金海間には各小汽艇を以て定期航路を開けるあり水多きときは上流安東に到る迄小舟を溯航せしむへし本江は所謂大邱の平原を貫流し灌漑の便あるに加へて江岸各所に貨物の集散に適せる都邑多きを以て釜山よりする物貨の吞吐頗繁なり沿岸都邑の主なるものを安東、醴泉、尙州、倭館、密陽、洛東、三浪津、龜浦、金海、下端等とす

(ホ)大同江 西海岸の黃海に注く大江にして源を平安、咸鏡の境なる狼林山脈に發し所謂妙香山脈の南麓を西南に流れ沸流江、南江の二流を合せ平壤、兼二浦等を経て鐵島に到り更に載寧江と合して一大流域を成し幅員著しく濶大を爲り約半里に互る是より西流して鎮南浦に沿ひ漁隱洞に到りて河幅一里餘の大江を爲る鐵島附近に在りては水深約十數尋に達し優に數千噸の汽船を碇泊せしむへく鐵島の上流平壤を下る、こ約二里半萬景岱附近に到る間は水深四尋乃至六尋に及び亦數百

噸の汽船を航行せしむへし萬景岱、平壤間には三箇所の淺瀬あるを以て高潮の時さ雖吃水五尺以上の船舶は航行し難く荷客は之を小艇に移して平壤に送るへし而して其の河口鎮南浦附近は幅員水深共に増加し渺茫として海洋を望むか如く數千噸の船舶は築港岸壁に碇泊し海陸の連絡を爲す大同江下流に於ける潮流干満の差は二十一呎にして平壤に到りては約五尺に減すさ雖潮流の速力は常に四箇半の勢を以て干満に應し上下するを以て帆船の如きも其の風位に拘はらず潮流を利用して滿湖に上り干湖に下る故に舟楫の便甚た可なり殊に本江は半島有數の農産地たる平壤及載寧の大沃野に連なり沿岸には平壤、兼二浦、鐵島、鎮南浦、漁隱洞の如き商業地あるを以て運輸交通に資する所大なり又載寧、安岳等の鐵鑽石、黃州、載寧、平壤各平野の農産物等の移輸出頗る多きを以て去大正元年度より鎮南浦汽船合資會社は總督府の命令に依り鎮南浦を起點とし載寧及津江浦間に至る二航路に定期船を運航し以て貨客の運輸交通に便せり又鎮南浦より北倉、新換浦間及兼二浦間には各小汽艇の定期航路あり上流一帶の地より筏に依り伐材の平壤に下るもの數からず然れども本江上流は冬期約四箇月（十二月、一月、二月、三月）の間結氷し鐵島より下流なる

三角江は幸に結氷せざるも流水の爲舟楫杜絶するに至る

(一)鴨綠江 朝鮮五大江中の最大江にして鮮支の國境を劃す源を白頭山の西麓に發し威鏡南道惠山鎮に於て南方より來る虛川江を合せ長白山脈の諸谿谷より發する數多の小流を集めて西北に流れ楚山に到りて滿洲より南下する渾河と合し更に義州の上流に於て滿洲の豐河を容れ河流は九里島、於赤島、黔同島、中江壑等の砂洲に由りて三分し下りて沙河鎮に至り三江再び合して一江と成り更に威化島を堆成して濶大なる三角江を爲し黃海に入る其の流路百四十里に及ぶ雖河床の傾斜急にして岩礁多く激流奔湍の箇所少からざるを以て航運河としては其の價値少なし河口龍岩浦より溯ること十五湮なる安東縣迄は高潮時に於て約二千噸の船舶航行し得べく其の間水路狹隘にして曲折多く航行困難なれさも免許水先人を要招するの便あり戎克船は辛ふして帽兒山附近に航行し得べく大正三年四月より在新義州高羽秀吉は命令に依り新義州を起點とし高瀨舟及縶子を以て中江鎮及江界に至る間各定期航路を開始したり沿岸一帯の地には貨物の集散地少からず雖商港として數ふるに足るもの唯安東縣及龍岩浦あるのみ然れども江の上流には有名なる鴨綠江の

大森林ありて巨樹大木鬱生し其の富源無盡藏と稱せられ近年其の伐材の筏に據り流下せらるるもの年數百萬に及ぶ支那人が鴨綠江流域の富源に著目したるは僅に三十餘年以前のこゝにして其の富源開發と共に新に勃興したるもの安東縣及大東溝等とす其の沿岸には戎克船輻湊し舟筏連亘す

(ト)豆滿江 東岸日本海に注く大河なり源を白頭山の東南麓に發し白頭、江南、妙香の諸山脈より發する諸流を合せ茂山郡に到りて稍大流と成り會寧、鍾城の諸郡を経穩城の北に到り間島より南下せる布爾哈圖河と合し更に慶源に於て琿春河と會し水量益増大し其の間右曲左折し谿谷の間を流下す下流は露領と境界を爲し遼山灣と露領ポーシエツト灣との間なる西水羅の東方に到り日本海に注く流域全長九十里降雨に際しては河水氾濫し濁流沿岸を嚼み舟楫の危険少からず加ふるに河口には土砂の堆積して洲を爲す所多きを以て航行の便宜しからず

第五章 通信

第一節 通信事業

朝鮮に於ける帝國の通信事業の開始は明治三十八年四月韓國通信機關委託に關する取極書締結の結果、果同年七月舊韓國政府の郵政を擧て遞信省の管理に屬せしめたるを以て嚆矢とす其の後統監府の設置せらるるや其の事務を繼承し日韓併合と共に朝鮮總督府に繼屬し以て今日に至れり今や通信機關の配置都鄙を通して六百有餘の多きに達し併合當時に比し實に百有餘を増加せり通信機關の整備と相俟て其の主要機能たる郵便遞送及郵便集配の敏活正確を期せむか爲幾多の改良を加へたる結果此等機關の所在地に於ては交通至難の島嶼を除くの外毎日少くとも一回以上郵便物の發着なきはなく郵便局所所在地外に於ても咸鏡南北道及平安北道中極めて僻陋なる地方を除きては少くとも隔日集配を爲さざる地なきに至れり又年年主要なる地點には電信及電話を開始し尙電信利用の増進を期せむか爲明治四十三年十一月電報料金の大輕減を行ふと同時に電信回線の整理及通信の敏速疏通を圖

りたる等施設上大に舊來の面目を一新したるに伴ひ諸般通信業務の取扱數は以下各項に掲ぐるか如く累年増進の趨勢を呈し従前に比し既往十年間に於て約三倍餘既往五年間に於て殆んど倍蕪するの盛況を現し特に電信電話は最近時局の影響を受け經濟界の活躍と西比利亞方面出兵の關係に依り其の増加著しきものあり隨て其の收支狀況の如きも亦年年順調に向へり

郵便局所數

年 度	郵便局	同分室	郵便所	電 信 電話所	鐵道電信 取扱所	合 計	郵便切手 賣捌所
大正二年度末	一七九	四	三一七	—	八三	五八三	二、二三八
同 三年度末	一八〇	四	三三一	—	八四	五九九	二、五二八
同 四年度末	一七九	四	三三三	—	八六	六〇三	三、一四一
同 五年度末	一八〇	四	三四二	—	九一	六一八	三、五八〇
同 六年度末	一八〇	四	三四二	—	九三	六二〇	三、六八九

郵便局所に於ては左の事務を取扱ふものとす

郵便局 郵便、爲替、貯金、電信、電話、歲入歲出金受拂、年金恩給交付

郵便所 同

電信電話所 電信、電話

電信取扱所 電信

郵便線路

年 度	通 常 道 路		鐵 道		水 路	
	單 哩 程	平均一日延哩程	單 哩 程	平均一日延哩程	單 哩 程	平均一日延哩程
大正二年 度末	二、五三九	五、二六八	九八四	五、二四七	一〇、八六八	四、二六三
同 三 年 度末	二、七六五	五、七七二	一、〇二四	五、三四三	一〇、八三五	三、八三八
同 四 年 度末	二、八五七	五、九五三	一、〇四六	五、四三一	九、八〇八	三、五六五
同 五 年 度末	二、八七九	五、九七四	一、一二五	五、八四五	八、六四六	三、二〇五
同 六 年 度末	二、九二九	六、〇九〇	一、一六六	六、〇一一	八、七九一	三、二一八
同 七 年 九 月 末	三、〇三九	六、一四五	一、一九三	五、七八六	九、七五五	三、二九四

電信及電話線路

年 度	電信線路		市內電話線路		市外電話線路	
	互 長	延 長	互 長	延 長	互 長	延 長
大正二年度末	一、六八四	四、五三九	一七〇	五、〇二五	八八〇	二、五五九
同 三年度末	一、七四八	四、七三四	一七五	五、五二六	九二〇	二、六〇三
同 四年度末	一、九五六	五、四九五	一八一	五、八九二	九六九	二、六八八
同 五年度末	一、九九四	五、七九六	一八七	六、〇二三	一、〇〇二	二、七七二
同 六年度末	一、九九八	六、〇六七	一九六	六、一六二	一、〇二四	二、八〇四

郵便物取扱數

年 度	通常郵便物		小包郵便物		年 度	通常郵便物		小包郵便物	
	引受	配達	引受	配達		引受	配達	引受	配達
大正二年度	七、〇七四	八、三三四	一、〇九九	一、三六七	大正五年度	八、九七三	九、三三四	一、三三七	一、五九三
同 三年度	七、四三〇	八、五、五三	一、〇九九	一、三三五	同 六年度	九、〇七五	九、〇二一	一、四三三	一、七七五
同 四年度	八、四八五	九、二九三	一、一〇四	一、四七四					

從來朝鮮に於ては郵便爲替及貯金の制なく只少數の日本在外郵便局に於て其の取扱を爲したるに過ぎざりしか明治三十八年七月日韓郵便事業合同以來漸時一般に擴張し其の事務の範圍も居宅拂、交換拂、便宜拂、局待拂等を實行せり

郵便爲替金の受拂額は逐年増進の狀況なりしも大正三年度に於て著しく減少したるは注目し値すへし其の原因は振替貯金制度の普及に従ひ郵便爲替の利用を減したるに併合後社會上の秩序整頓し居住内地人の家族を呼寄せたる結果内地に送金するの必要を減したること其の他一般財界の不振等に因るものなりしか大正四年度以來歐洲戰亂の影響を受け鑛業の勃興輸移出の激増戰時用品の製造及其の他一般産業界の好況に伴ひ其の取扱高も亦再び増進を見るに至れり尙大正五年八月より郵便取立金は郵便爲替として處理することとなり之の計數は總て從來の郵便爲替に合算せしを以て更に其の數を増加するに至れり左に其の取扱高を表示すへし

郵便爲替

年 度	内國爲替		外國爲替		振 出		計	
	振 出	拂 渡	振 出	拂 渡	口 數	金 額	口 數	金 額
大正二年度	三、四、二、一〇、三三三 円	二、七、〇、三六、六〇〇 円	九、一、五、七、七 円	一、三、三、四、四、六 円	一、八、七、〇、四、三三 円	三、四、二、二、三、九、九 円	一、一、八、九、〇、〇、一七 円	二、六、九、〇、〇、六、六 円
同 三年度	三、二、七、四、五、七、一六	二、五、六、三、六、八、一	一、三、四、〇、六、四	一、七、二、二、八、〇	一、八、八、七、四、七、七	三、二、八、七、九、七、〇	一、二、一、四、五、六、七	三、五、八、〇、八、七、六
同 四年度	三、七、五、三、一、七、一	三、〇、一、八、五、四、四、九	六、二、七、〇、五	一、三、七、〇、六、〇	一、八、九、二、五、二、四	三、七、六、一、五、八、六	一、二、五、三、二、八、三、〇	三、三、三、五、〇、九
同 五年度	四、四、〇、四、〇、〇、七、六	三、七、三、四、五、四、八、四	六、九、七、七、七	一、八、五、一、七、一	二、〇、一、六、六、五、四、四	四、四、一、〇、九、八、三、三	一、三、八、九、九、七、一	三、七、五、三、〇、〇、五、五
同 六年度	五、六、九、六、七、八、五、一	四、九、〇、五、五、九、一、七	九、〇、八、四、〇、六	一、八、七、二、〇、一	二、一、七、七、五、六、二	五、六、六、五、八、二、五、七	一、五、六、五、八、四、〇	四、九、二、四、一、二、一、八

朝鮮に於ける郵便貯金は利率の引上、局待拂の開始、即時拂戻金額制限の撤廢、預入手續の簡便を圖りたる等取扱の改善を施したる結果年年良好なる成績を示せり而して内地人貯金は殆ど一定の増加歩合を以て徐徐として増進し朝鮮人貯金は實に驚くべき高率の増加を示し倍々發展向上しつつあり大正三年度に於ては歐洲戰亂の餘波を受け金融界に變調を來し一般企業振はさるゝ故に勞銀の散布熱く又米價下落の結果農民の收入豐かならずりし爲めか豫期の成績を擧げ得ざりしか大正四年度以來各地鐵業の勃興海外輸出品の製造等に因り企業界活氣を呈したるさ米價の騰貴等に因り勞働者及

農民の收入潤澤なりし結果著しく預入額の増加を見るに至れり其の取扱高は左の如し

年 度	預 入		拂 戻		平均一度の金額
	度 數	金 額	度 數	金 額	
大正二年度	二〇五九八二五	二二〇八四一七三	四六九二七四	二一五九八二四六	四
同 三年度	一八七三三五六	一三〇〇五、四六九	五四四、五九〇	二二二、七六、七七七	四
同 四年度	二二四六三、〇六四	一六八八八、五四八	六三三、六六五	一、五三、一七、一四一	四
同 五年度	二八五九六〇六	二〇、四三三、三三三	七二七、七六八	一八、五四、七三九三	四
同 六年度	三〇、〇八四	二五、六三三、三八〇	七九、二九五	二四、〇一八、七九二	四
					預入一拂戻
					五八七
					二四七三
					六、九、九
					三三、七、三
					二、四、一〇
					二五、四、九
					三〇、二、八

内鮮人郵便貯金比較

年 度	内 地 人		朝 鮮 人	
	人 員	金 額	人 員	金 額
大正二年度末	一六〇、三七五四、六七四、三五五	二九、一五	四八〇、七九八一、〇一七、七〇三	二、一、二
同 三年度末	一七二、〇七七五、二二七、九三六	三〇、三八	五四八、〇九〇、一三一、六八四	二、〇、七
		一人平均額		一人平均額
		四		四

年 度	内地人貯金		朝鮮人貯金	
	人員	金額	人員	金額
大正四年度末	二二一、二三六、五七四、五八二	二九、七二二	六四九、五二八	二、三二六
同 五年度末	二四二、〇九七、八、二九四、六一五	三三、四二六	八二七、二一五	二、二一九
同 六年度末	二五五、四五八、九、八二七、一一二	三八、四七	九九八、〇四三、二、一七六、一三三	二、一八

近年郵便振替貯金を利用する者特に増進の趨勢を呈し明治四十三年三月末口座加入者現在數二百七十九人なりしか今日に於ては已に五千四十八人の多きを算するに至り經濟界活躍の餘勢を以て取扱金額亦近時左の如き増率を見つつあり尙大正七年七月よりは府又は府の區域を包含する學校組合公金受拂の爲にする振替貯金特別取扱の制度を開始せり

郵便振替貯金

年 度	拂 込		拂 出	
	度	金額	度	金額
大正二年度	三、七二、六二一	一八、八六六、七〇〇	一、三一、二六一	一四、三三四、一一八
同 三年度	四、五二、八六七	二二、六七二、四九一	一、四三、七三〇	一四、三九四、九四四

同 四年度
同 五年度
同 六年度

五八二、六六三
七〇六、一七七
八九〇、七二二

三〇、七六五、九七五
四六、九四九、六三二
五八、六五三、四九〇

一五三、九七一
一八七、五六〇
二一三、二六一

一八、四一五、二九七
二四、二六一、七三九
三四、四〇七、八八四

郵便振替貯金口座受拂

年度	受		入		拂		出		人員金額
	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	
大正二年度	一九八、八四六	二五、八一〇、三六八、五七七	一七、六二七	四、四〇五、五三一	二四、六三三	三、九三九、九八八	二七、六九五	九、七七三、〇三七	二、九六二、八六六
同 三年度	二五〇、七五〇	二八、九〇九、七五五、六三三	二五、〇七三	六、八三六、四八〇	二五、一八五	三、九九四、二五九	三七、八八八	三、六七六、九一〇	三、七一、四九二
同 四年度	三二一、二七三	三六、九七五、七〇四	三三、七〇一	二、七五七、七六五	二六、〇〇二	四、四四一、七五五	四九、八二〇	二、九二六、九六四	五、六二、四九六
同 五年度	三六四、六四八	二九、九九三、二四〇	四四、四五四	一六、九七五、二八六	二〇、〇〇七	一、九三七三、九五〇	六六、三六二	二、七三三、八〇一	七、七二、八二二
同 六年度	四九二、一八七	三六、三二六、一一九	五八、五三〇	二四、五〇九、〇三三	三三、四九二	二六、六九七、七五六	八二、五六四	四、〇六六、一四四	一、〇八三、八四〇

電報取扱數

年 度	發 信			著 信			中繼信
	和文	諺文	歐文	和文	諺文	歐文	
大正二年度	一九八九三	三三九六三	三三三五五	一九三六八	三三九〇四	三〇〇三四	三四〇八一
同 三年度	二〇〇五八	三四三三三	二七九六一	一八六九九	三三九七〇	三四七八八	三四二六八
同 四年度	二〇五九九	三四四四五	四〇一四三	二〇三〇二	三四三〇九	三四四九三	三四三六七
同 五年度	二二七六二	三三七〇八	四〇三〇〇	二二二九六	三四七五八	三四四九五	三四一九〇
同 六年度	三〇〇七四	五八五八一	三九五九三	三〇三六八	五二七五五	四一五〇一	三四八八八
							五、九四一七

電 話 取 扱 數

年 度	市 内			市 外			合 計	呼 出	呼 求
	通話	通話	通話	通話	通話	通話			
大正二年度	九四六九	三三五六一	二〇九一	三八六五二	一八三	二〇〇三	三九九七	二六三八	三九五六五
同 三年度	九五〇八	三七三九六	二二二六	三八五三三	三二一	一〇五五	三九九七	二六三八	三九五六五
同 四年度	九六五九	三七三九六	二二二六	三八五三三	三二一	一〇五五	三九九七	二六三八	三九五六五
同 五年度	九六五九	三七三九六	二二二六	三八五三三	三二一	一〇五五	三九九七	二六三八	三九五六五
同 六年度	一〇二〇	三八一三七	二二〇八	三九三四五	二四六	一七七八	四一八〇	二二三三	四三九三六

本表 *印を附したるは長距離加入者の再掲なり

第二節 電氣事業

大正七年十月一日現在に於ける電氣事業經營數は營業用二十三、官廳用九、自家用三十二合計六十四なり

今其の概況を示せば左の如し

營業用電氣事業

大正六年三月末日

事業者	目的	資本金	拂込 資本金	原動力	發動力	代表者	種別
朝鮮瓦斯電氣株式會社 釜山支店	電氣供給、電	三〇〇〇 <small>圓</small>	一、三五〇 <small>圓</small>	瓦斯力	六〇 <small>K.w.</small>	香椎 源太郎	開業
京城電氣株式會社 京城支店	電氣供給、電			汽力	三、五〇〇	大橋 新太郎	同
同 仁川支店	電氣供給	九〇〇〇	六、七五〇	同	五〇〇	同	同
同 馬山支店	同			同	一二五	同	同
同 鎮海支店	同			馬山より送電		同	同

事業者	目的	資本金	拼込	原動力	發動力	代表者	種別
元山水電氣株式會社	電氣供給	一五〇	一五〇	瓦斯	二五〇	葭濱 忠太郎	開業
鎮南浦電氣株式會社	同	一五〇	一五〇	瓦斯	六〇	中村 辰五郎	同
大田電氣株式會社	同	一〇〇	一〇〇	同	二四八	山口 太兵衛	同
平壤電氣株式會社	同	三〇〇	一八〇	汽	二〇〇	宮川五郎三郎	同
木浦電燈株式會社	同	二〇〇	八八	汽	七五	青木 十三郎	同
群山電氣株式會社	同	一六〇	六四	瓦斯	六〇	樋口 虎三	同
朝鮮電氣株式會社	同	五〇〇	三三五	同	二〇〇	杉村 正太郎	同
大倉喜八郎	同	一〇〇〇	工務費 八七五	汽	三〇〇〇	大倉 喜八郎	同
清州電氣株式會社	同	五〇	三四	瓦斯	四〇	青柳 八百造	同
水原電氣株式會社	同	六〇	四五	同	四〇	香山 弘	同
新義州電氣株式會社	同	六〇	二七	汽	七五	田中 健士	同
全州電氣株式會社	同	一〇〇	二五	瓦斯	六〇	吉木 陽	同
大興電氣株式會社	同	一四五	一四五	同	二五〇	小倉 武之助	同
大興電氣株式會社	同	一四五	一四五	同	四七〇	同	同

光州電氣株式會社
 開城電氣株式會社
 晉州電氣株式會社
 統營電氣株式會社

同 同 同 同

五〇 五〇 一〇〇 五〇

— 二 五〇 二五
 同 同 同 同

四七〃 小倉 武之助 同
 五〇〃 金 正 浩 同
 三〇〃 K.W. 清水 佐太郎 未開
晉起人總代
 四〇〃 上原 龜太郎 同

여 백

第六章 地方行政

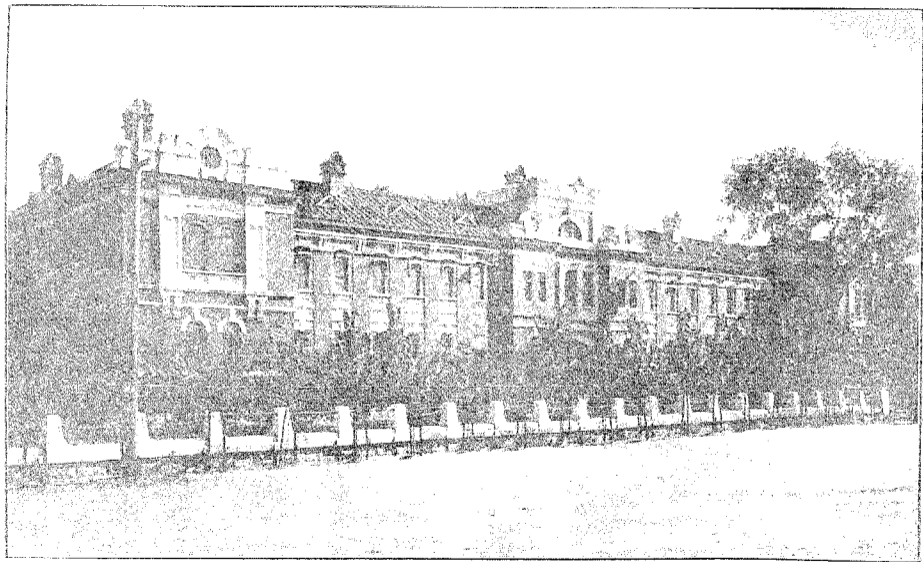
第一節 道府郡島

朝鮮に於ける地方行政機關は第一章第二節第四に記述したる如く舊韓國政府時代より幾多の變遷を經以て今日の制度に至れり即ち京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黃海道、平安南道、平安北道、江原道、咸鏡南道、咸鏡北道の十三道、京城、仁川、群山、木浦、大邱、釜山、馬山、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津の十二府及二百十八郡二島二千五百八面を爲す道、郡島は内地の府縣郡に、府は市に相當し面は町村に匹敵す而して府及面は國の行政區劃たるを共に公共團體の地域を爲せり

道、府郡島面に道長官、府尹、郡守、島司、面長を置く就中府尹、面長は官廳事務を行ふと共に公共團體の事務を統轄す道には道長官の外其の補助機關として參與官、事務官、通譯官、技師、書記、技手、通譯生を置き之を長官官房、第一部、第二部に配し第一部長及第二部長は道事務官を以て之に

充つ而して長官官房に於ては機密、人事、褒賞に關する事務を第一部に於ては地方行政、學務、勸業、土木、會計等の事務を第二部に於ては稅務、理財の事務を各分掌す又府郡島に於ては府尹、郡守、島司の外補助機關として書記、技手、通譯生を置き尙府には場合に依り府事務官を置くことを得へし郡島に在りては庶務、財務の二係に府に在りては右の外府尹の定むる所に依り會計、內務、土木、衛生、民籍等の諸係に分屬せしむ尙此の外道、府郡島に諸機關として道に三名府郡島に二名の參事を置けり

叙上地方行政廳の職務權限は大體内地の地方行政廳に酷似すれども朝鮮に於ける警察事務に付ては各道に警務部長を特設し警務總長の監督に屬せしめ一般行政事務と處管を異にするも道長官は地方の警察及衛生事務に關して警務部長をして必要なる命令を發し又は必要なる處分を爲さしめ尙警務部長の發する法規命令は豫め道長官の承認を受け其の他道行政の執行に關しては道長官は管内の警察官を使用し得る權限を有し兩者の連絡統一を計り相互に支拂扞格なきを得せしむ又國稅徵收に關する事務は内地に於ては稅務官署を特設せるも朝鮮に於ては道長官之を管掌し道第二部稅務係及府



京 畿 道 廳

郡島財務係に於て處理しつゝあり其の他民事裁判の結果裁判所の囑託に依る強制執行事務（内地の執達吏の事務）を取扱ふこと等は内地の地方行政廳に比し著しく相異せり

第二節 公共團體

一 地方費

地方費は隆熙三年（明治四十二年）發布の地方費法に基くものにして其の財源は賦課金及國庫補助金を主とし土木、勸業、教育、衛生等に關する公共事業を經營す併合以前に在りては其の歲計豫算額全道を通し百萬圓に満たず且制度實施後僅に一年有半に過ぎざりしか故に其の施設未だ見るべきものなかりしか併合以來地方の發展に伴ひ賦課金收入漸次確實を加へ逐年增收を算するのみならず國庫補助金亦年年其の額を増加し殊に從來國費を以て經營せし林業苗圃、種苗場竝仁川及釜山商業學校を明治四十四年度より地方費經營に移され殊に從來別途經濟を以て經理し來りたる臨時恩賜金は

經理の便宜上大正六年度より地方費豫算に編入し今や歳計豫算額全道を通し五百八十九萬餘圓に達し内臨時恩賜金に屬する分九十餘萬圓を控除するも尙四百九十九萬圓を算し従て各般の事業著しく擴張を示し其の經營亦著著歩を進むるに至れり今地方費歳入歳出豫算及地方費賦課金課目課率を掲ぐれば左の如し

地方費豫算

大正七年度

(一) 歳入

道	課 金							計
	地稅附加稅	市街地稅附加稅	戶別稅	市場稅	屠場稅	屠畜稅	賦	
京畿道	三六、六六三	九、九〇五	五八、一一七	四〇、八〇〇	六、六〇三	九四、六三九		二四六、七二七
忠清北道	二六、三五七	五五	二六、七八五	一一、八八〇	一一、〇〇〇	一一、〇〇〇		八八、〇七七
忠清南道	五二、八六〇	三七三	三九、〇〇〇	二四、〇八六	四、五二七	四二、〇〇〇		一六二、八四六
全羅北道	五八、四二一	四九五	四二、〇〇〇	一八、六三二	一〇、九五五	一八、三四四		一四八、八四七
全羅南道	七五、三六七	八二三	七〇、三九四	一六、五七六	三四、九二八	四、六二〇		二〇二、七〇八

道	臨時恩賜金受入		前年度繰越金	國庫補助金	其の他	合計
	大正六年度	大正五年度				
慶尙北道	六二、五三二	一、〇四七	六九、八八〇	五一、九七七	三八、三七四	二二九、七五一
慶尙南道	五七、三三八	二、四二二	六七、五八〇	二九、〇〇〇	七、〇五五	一八八、六三〇
黃海道	四四、五三二	一五二	五〇、二四三	二三、九一七	一七、五二〇	一五七、九六五
平安南道	四〇、一三一	一、二六八	四〇、五三四	二三、六三五	四〇、二七七	一五七、五二三
平安北道	二六、一一〇	一〇六	四〇、三一九	二二、四二一	三一、〇〇〇	一三四、九五六
江原道	一一、九三〇	—	四〇、一三二	一五、〇五四	一一、三〇〇	九二、三五二
咸鏡南道	三三、一〇八	五七二	三八、〇〇〇	一八、五〇〇	八、九四〇	一一九、三二〇
咸鏡北道	一二、六四二	九五	一六、七四〇	—	一四、四〇〇	四六、五一七
總計	五三七、九九二	一七、三一三	五九九、七二四	二九七、四七八	二二六、八七九	一、九七六、二一九
大正六年度	五三七、六八六	一六、八九七	—	二二六、七〇七	五六七、三五五	一、四二五、三七四
同五年度	五三七、四二〇	一六、九七一	—	二〇三、五四八	四八七、一〇四	一、二八〇、二六八
同四年度	五三四、九〇一	一七、四三〇	—	一九六、四九二	四〇二、六七八	一、一七五、八六三
京畿道	一三七、三八一	四	四二、三三四	一八九、八一〇	二六七、四二二	八八三、六七四

道	臨時恩賜 金受入	前年度繰越金	國庫補助金	其の他	合計
忠清北道	四一、〇四一	一三、三六八	七〇、二五四	二九、七六〇	二四二、五〇〇
忠清南道	七五、七四五	一三、二八六	二八、六七三	三一、四三四	四一一、九八四
全羅北道	六七、四九一	一三、七七六	一三六、〇五〇	三三、九九六	四〇〇、一六〇
全羅南道	八八、〇三三	五三、〇五二	一七五、〇二一	一四、五二九	五三三、三三三
慶尙北道	一〇五、六四三	四六、七九三	一七二、六七三	五二、九六五	六〇七、八二五
慶尙南道	八一、〇八四	一九、一三四	一三五、〇〇五	七六、八四三	五〇〇、六九六
黃海道	五七、一四三	三三、九六七	八七、三八八	一九、四九三	三五五、九五六
平安南道	五四、八三八	二八、九五八	一四三、四五一	一六八、五二五	五五三、二九五
平安北道	六五、八九二	三三、〇〇〇	一五六、四一四	三二、二八九	四二二、五五一
江原道	五九、三〇五	三六、一〇九	一一〇、〇三八	四一、三六〇	三三九、一六四
咸鏡南道	四五、七〇七	一五、五〇〇	一四〇、六〇八	七、八〇〇	三二八、九三五
咸鏡北道	二八、五九三	一六、四四七	一四八、四八九	七四、二八三	三一四、三二九
總計	九〇七、八八六	三六五、七二四	一、七九三、八七四	八五〇、六九九	五、八九四、四〇二

大正六年度	一,二三八、一六六	二五六、〇一六	一,二七八、一〇八	三八五、二二三	四、五八二、八七七
同 五年度	—	二九四、四三一	一,三一九、一九二	一、二八、二九一	三、〇二二、一八二
同 四年度	—	一八四、八一四	一、二五六、九六四	五〇、一二三	二、六六七、七六四

(二) 歳出

道	土木費	衛生及 病院費	救恤及 慈善費	勸業費	授産費	教育費	恩賜金 授産金	臨時 手當	其の他	豫備 費	合計
京畿道	一四七、八三四	六、六一〇	一、六二〇	一〇〇、四〇五	三、三三三	二、二七九	三、五八六	二〇、三六一	一、六五九	三、三三五	八八三、六七四
忠清北道	七二、〇六八	四、三三三	四、七九八	五、六七二	二、七、三七一	五、六〇六	三、九四四	六、四五六	四、七五二	七、〇〇〇	二四、二、五〇〇
忠清南道	一〇四、七七一	四、九七〇	七、九二九	一〇一、四四三	四、五、九六六	一、一〇一	五、八八七	一、四、一〇三	七、七〇三	五、三、八〇	四一、一九八
全羅北道	一一四、七六四	四、五七八	七、一六九	九三、九二二	四、四、〇九九	一、〇二六	五、一七六	一、三、四九六	七、八八〇	六、四、三三	四〇、〇、一六〇
全羅南道	一五四、五三三	六、七、四八〇	六、七、四八九	一〇六、一〇九	四、五、七九九	八、〇、一五四	八、六、九四	一、三、九九六	四、六、六三	三、三、〇七七	五三三、三三三
慶尙北道	二二〇、一一八	九、九三三	一、〇、八二九	二九、七、四二一	七、五、三六五	一、九、六八七	一〇〇、四三	一、八、五、四四	一〇、九〇六	一、四、七七六	六〇七、八二五

道	土木費	衛生及病院費	救恤及慈善費	勸業費	授産費	教育費	恩賜金 授戻金	臨時 手當	其の他	豫備 費	合計
慶尚南道	一三三、八〇六 円	一一八、六〇〇 円	九三、三八八 円	一一五、四四四 円	九二、七九二 円	一〇二、八七三 円	七、二〇九 円	一五、六六七 円	九、四八一 円	四、二七〇 円	五〇〇、六九六 円
黄海道	一〇七、二二五	五、五二二	六三、四四四	七、二六九七	四、四一三、七	九、一六八	五、六八三	九、七〇〇	六、三三八	九、六三三	三、五五九、九六六
平安南道	九六、五二八	六、一〇四	七、〇五五	六四、九七一	四、三九六、四	一六、一八一	五、三八六、三三八七	一四、七七八〇	七、三二五	五、五三三、二九五	
平安北道	一一、四七五	八、九三七	六、九〇八	七、五〇三、三	四、五〇三、七	一、五八四、九	五、九二七	一一、四七三	六、四三九	四、六七五	四、三三、五五一
江原道	八八、七二八	二、五七四	六、四五三	四八、〇四七	六、六三三、五八	一〇、九四五	五、八七四	九、八二六	四、八二四	四、五九五	三、三九、一六四
咸鏡南道	七、四三三	六、一四三、七	五、三五一	五、二八二、七	二、九四三、三	八、一〇、四	四、四九七	八、八二〇	五、六〇八	二、五三五	三、二八、九百五
咸鏡北道	一一九、七五一	二、三〇九	三、七五七	三、三、九二九	一、九九九、一	二、一八〇、四〇	二、八三七	六、三三一	三、五九九	四、八八五	三、二四、三三九
總計	一、五三六、九二二	一、九六五、一五	一、〇三三、七三三	一、〇五〇、七一九	八、九四八、八五六	一、四九三、四六五	八、四、七四一	一、二六、二〇七	二、四九、四四一	二、二五、八四八	五、八、九四、四〇二
大正六年度	九四三、三三〇	一、四九、五三四	一〇、八六七	九〇、一三三	九、三三、六九	一、三、四〇三	七、一三〇	一	八、八、三〇〇	一、八一、一九〇	四、五、八、二、八七七
同 五年度	九九〇、六六〇	一、三三、六〇〇	一三、一一三	七、七、六一	一	九、五、九、八一	一	一	八、四、九、二七	七、五、一一八	三、〇、三、一、八三
同 四年度	七六一、二七八	九三、七、六〇	二、三、四八	八、一、一、五二四	一	七、七、三、七二	一	一	七、九、一、一九	七、一、〇、三二	二、六、六、七、六四

表中×印は思賜金受入に依る支出額を示すものとす
 表中其の他とあるは徴兵旅費繰替金、寄附金、財産管理費、雜支出等なり
 豫算中補助及獎勵費は常該事業費に分割積算せり
 水道費は衛生費に算入せり

地方費賦課金課率

道名	課目	地稅		戶別稅	市場稅	屠場稅	屠畜稅
		附加稅	市街地稅附加稅				
京畿道	京城府			平均			
	其他の府郡	本百分の五		一月に付二十錢			
忠清北道		同		同		豚 二十錢 牛 二十圓	豚 二十錢 牛 二十圓
忠清南道		同		同		同	同
全羅北道		同		同		同	同

一月に付百圓乃至二十圓月額二圓

放賣價格百分の一

道名	課目	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	黃海道	江原道	平安南道	平安北道
附加稅	附加稅	本百分の五	同	同	同	同	同	同
市街地稅	市街地稅	本百分の五	同	同	同	同	同	同
戶別稅	戶別稅	平均に二錢	同	同	同	同	同	同
市場稅	市場稅	市場規則第一條第三號該當市場收入金額百分の五 右以外の市場放賣價格百分の一	同	同	放賣價格百分の一	同	同	市場規則第一條第三號該當市場收入金額百分の五 右以外の市場
屠場稅	屠場稅	牛二十圓 豚二十錢	同	同	同	同	同	同
屠畜稅	屠畜稅	牛二十圓 豚二十錢	同	同	同	同	同	同

咸鏡南道	百分の十	一	放賣價格百分の一
咸鏡北道	同	同	同
	同	同	同
	同	同	同

二府

朝鮮に於ける地方的團體は初め内地人に於て日本人會又は居留民會等を組織し必要なる公共事務を處理し來りしか明治三十八年居留民團法の施行せらるるや京城、仁川、群山、木浦、大邱、釜山、馬山、平壤、鎮南浦、新義州、元山各地の内地人は居留民團を組織し教育、衛生、土木、救助の事務を處理せり又仁川、群山、木浦、馬山、鎮南浦、城津の在留各國人は各國居留地會を組織し仁川、釜山、元山の内地人又は支那人間には專管居留地あり京城には内鮮人を以て組織せる漢城衛生會ありしか此等の諸機關は何れも其の機能充分ならず而も京城、大邱、平壤、元山其の他の市街地に於ては朝鮮人は内地人に比し或は四倍の人口を有するに拘らず地方公共事務を處理すへき何等の機關をも有せず特に居留民團、各國居留地會、專管居留地及漢城衛生會の如きは外國の領土なることを前提と

して組織せるものなれば日韓の併合と共に當然其の存在を裏ふへかりしものなりしも俄に之を廢止するに傾ならざる事情ありしを以て一時權宜の措置として暫く其の存續を認め大正二年十月制令第七號を以て府制を發布し翌三年四月一日より施行す内地人、朝鮮人、外國人に共通せる制度にして此の施行と共に從來の居留民團、各國居留地會、專管居留地及漢城衛生會は之を廢止し居留民團の事務中教育に關するものは之を學校組合に承繼せしめ其の他の事務並各國居留地會、專管居留地、漢城衛生會の事務は共に之を府に承繼せしめたり尤も城津各國居留地會の事務は城津郡守をして之を處理せしめたり

(イ)府の區域　法人たる府の區域は行政區劃たる府の區域に依れり其の所在地は京城、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津是なり

(ロ)府の事務、府住民の權利義務　府は官の監督を承け一般公共事務及法令に依り府に屬する事務を處理し府内に住所を有する者を以て住民とす府住民は府制の規定に依り府の營造物を共用する權利を有し府の負擔を分擔するの義務を負ふものとす

(一) 府税、使用料及手数料 府税は國税たる市街地稅、家屋稅の附加稅及特別稅とし府内に住所を有する者、三月以上府内に滞在する者、府内に於て土地家屋の物件を所有し使用し若は占有し、府内に營業所を設けて營業を爲し又は府内に於て特定の行爲を爲す者は其の土地家屋物件營業若は其の收入に對し又は其の行爲に對して之を賦課す尤も國又は公共團體に於て公用に供する土地家屋物件及營造物、恩賜金事業の用に供する土地家屋物件並神社寺院祠宇佛堂の用に供する建物及其の境内地教會所、説教所の用に供する建物及其の構内地、墓地、外國政府の所有に屬する領事館及其の敷地等には府税を課せざるものとす

府は營造物の使用に付使用料を徵收し又特に一個人の爲にする事務に付手数料を徵收することを得るものとす

(二) 府の機關及權限 國の官吏たる府尹は府を統轄し及代表す必要あるときは府費を以て府吏員を置くことを得府吏員は府尹之を任免し懲戒するの權限を有す

府に協議會を置き府尹を以て議長とす協議會員は府住民中より名望識見ある者を選択し朝鮮總督

の認可を受け道長官之を命ず協議會員は名譽職とし其の任期は之を二年とす而して協議會員の定員及協議會に諮問すへき事項は左の如し

協議會員定員

京城府	一六 ^人	大邱府	一〇 ^人	鎮南浦府	八 ^人
仁川府	一〇	釜山府	一二	新義州府	六
群山府	六	馬山府	八	元山府	一〇
木浦府	八	平壤府	一二	清津府	六

諮問すへき事項

- 一、府條例を設け又は改廢する事
- 二、歳入出豫算を定むる事
- 三、府債に關する事
- 四、歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の抛棄を爲す事

五、基本財産、特別基本財産及積立金穀等の設置又は處分に關する事

六、府の廢置又は境界變更の場合に於ける財産の處分に關する事

七、前各號の外府尹に於て必要と認むる事

府に出納吏を置き府の官吏又は府吏員の中に就き府尹之を命し出納事務を掌らしむ故に府尹は府出納吏に對し收支の命令を爲すことを得れども自ら現金の出納を爲すことは得ざるものとす又府には現金の出納及保管の爲府金庫を置くことを認めらる而して其の府金庫は府出納吏の通知あるに非されば現金の出納を爲すことを得ざるものとす

(ホ)豫算 今府の歳入歳出豫算を掲ぐれば左の如し

		府 歳 入		府 歳 出	
		經常部	臨時部	經常部	臨時部
		計	計	計	計
京	府	三九九、五八〇	一三五、五六三	三三〇、四七六	二〇四、六六七
城	府				
府	府				
		合 計	合 計	合 計	合 計
		五三五、一四三	五三五、一四三	五三五、一四三	五三五、一四三

府歳入歳出豫算

大正七年度

府	歲		入	歲		出
	經常部	臨時部		經常部	臨時部	
仁川府	七一、八三二	九、六四五	八一、四七七	四七、六八八	三三、七八九	八一、四七七
群山府	四七、五八〇	四、八六三	五二、四四三	三二、三九五	二〇、〇四八	五二、四四三
木浦府	五〇、二九八	五、七四〇	五六、〇三八	三二、七一九	二三、三一九	五六、〇三八
大邱府	九七、七三九	二七、七九二	一二五、五三一	六四、五四七	六〇、九八四	一二五、五三一
釜山府	二三四、一一三	九三、四二八	三二七、五四一	一五二、八一三	一七四、七二八	三二七、五四一
馬山府	一五、六五一	九、〇四〇	二四、六九一	一三、八七二	一〇、八一九	二四、六九一
平壤府	一〇八、三二五	一五九、〇〇五	二六七、三三〇	六九、〇六一	一九八、二六九	二六七、三三〇
鎮南浦府	四六、一〇六	六、〇五四	五二、一六〇	三九、七三九	一一、四二一	五二、一六〇
新義州府	一八、三〇三	一〇七、九二三	一二六、二二六	九、四六六	一一六、七六〇	一二六、二二六
元山府	七四、三四九	二二、九七九	九七、三二八	五〇、九四二	四六、三八六	九七、三二八
清津府	一八、八一二	一八一、一六六	一九九、九七八	一五、九六〇	一八四、〇一八	一九九、九七八
總計	一一、八二、六八八	七六三、一九八一	九四五、八八六	八五九、六七八	一〇八六、二〇八	一、九四五、八八六
大正六年年度	一、〇一四、〇五六	九一一、六八二	九二五、七三八	七七九、五五七	一四六、一八一	一、九二五、七三八
同五年年度	九四四、八〇〇	八九四、六六九	八三九、四六九	七五二、三〇三	一〇八七、一六六	一、八三九、四六九
同四年年度	九三六、〇一四	一、〇二二、五八五	一九五七、五九九	七五七、〇七八	一、二〇〇、五二一	一、九五七、五九九
同三年年度	八一四、六九五	一、三四〇、一三六二	一五四、八三一	七九三、三八〇	一、三六一、四五一	二、一五四、八三一

三 面

面制は大正六年六月公布せられ同年十月一日より府を除きたる地に施行せられたり面は面制に依り事業を經營し財産權の主體と爲り府と等しく朝鮮に於ける最下級の地方公共團體たる實質を備ふるものなり面制施行前に在りても國の事務處理に要する面長手當及面事務執行に要する費用は面の負擔とし面賦課金を賦課するの途ありしも法令上事業經營の能力なく從て費用徵收の途を缺きたりし爲め協議費の名の下に其の費用を醸集し以て契組合等を設け地方必要の公益事務を處理し來れり然れども是等は法令上何等の根據なく其の組織任意なるか爲延て地方事務の統一を缺き或は負擔徒に増加せむとする傾向を呈したるを以て是等の事務を面に整理統一するか爲め面制を布き地方制度を確立するに至れり

(イ)面の事務 面は法令に依り面に屬せしめたる事務を處理するものなるも民度未だ低く負擔力も亦乏しき故に無制限に其の事務の範圍を放任せば事の緩急機宜を愆り延て面民の負擔を過重ならしむる虞なきに非らず仍て左の如く其の事務の範圍を限定せり

一 道路橋梁渡船、河川堤防、灌漑排水

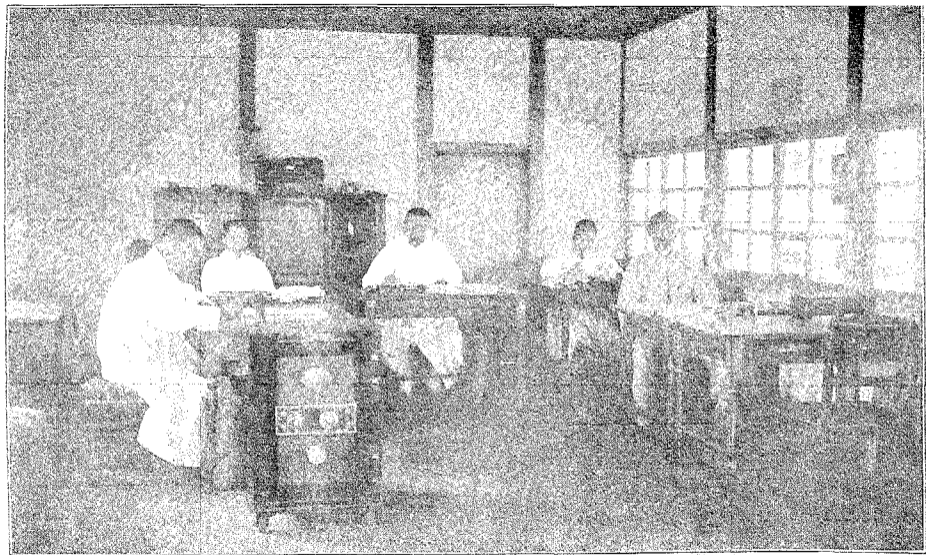
二 市場、造林、農事養蠶畜産其の他の産業の改良普及、害鳥蟲驅除

三 墓地、火葬場、屠場、上水、下水、傳染病豫防、汚物の處置

四 消防、水防

以上列記の外面の狀況に由りては其の事業の必要を生したるときは朝鮮總督の認可を受け之を處理し得ることとなれり尙面制以外の法令に於て面の事務を規定したるもの例へは國稅の徵收、地方費賦課金の徵收等の如き處理事務あり

(ロ)面の職員 面には國政機關たる面長の外面書記、區長を置き又朝鮮總督の指定したる面には相談役を置く面書記は有給面吏員にして面長の命を受け庶務に従事し特に會計員を命ぜられたる者は出納其の他の會計事務を掌る區長は無給にして町洞里(内地の市町村の區又は大字に類す)内に於ける面の事務にして洞里内に告知を要するもの又は面の經營する事業にして洞里内に關係あるものに就き之を補助執行するものにして面書記、會計員、區長は共に郡守、島司之を命免す相談



京畿道高陽郡靈島事務所執務狀況

役は内鮮人多數集團し且其の經營事業資力等の關係に於て普通の面と趣を異にせるものに就き面内有力者の意見を聽取する爲面長の諮問機關として設置せらるるものにして道長官之を任命す面制施行の際朝鮮總督の指定したる面左の如し

京畿道（水原郡水原面、開城郡松都面、始興郡永登浦面

忠清北道（清州郡清州面

忠清南道（公州郡公州面、大田郡大田面、論山郡江景面、燕岐郡鳥致院面

全羅北道（全州郡全州面、益山郡益山面

全羅南道（光州郡光州面

慶尙北道（金泉郡金泉面、迎日郡浦項面

慶尙南道（晉州郡晉州面、昌原郡鎮海面、統營郡統營面

黃海道（海州郡海州面

平安北道（義州郡義州面

江原道（春川郡春川面）

咸鏡南道（咸興郡咸興面）

咸鏡北道（鏡城郡羅南面、城津郡城津面、會寧郡會寧面）

- (ハ)面の財務 面は其の財産より生ずる収入、使用料、手数料其の他面に屬する収入及賦課金を以て其の必要なる費用及法令に依り面の負擔に屬する費用を支辨するものにして賦課金として賦課し得べきは地稅割、市街地稅割、戸別割及特別賦課金とす而して是等の賦課金は面内に住所を有する者、三月以上面内に滞在する者、面内に於て土地家屋物件を所有し使用し若は占有し、面内に營業所を設けて營業を爲し又は面内に於て特定の行爲を爲す者に對し之を賦課するものとす
- (ニ)面組合 面に於て處理すべき事務は概ね其の面のみの關係に止まり他面との利害直接相關聯すべきものは稀なりと雖其の事務の種類に依りては隣接面と共同して之を經營を爲すに非ざれば十分に其の目的を達し難き場合あるを以て是等の場合に於ては朝鮮總督の認可を受け關係各面の組合を設け共同して其の事務を處理し得るものとす

四 學校組合

從來朝鮮に於ける内地人の教育は日本人會又は居留民團に於て經營せしか明治四十二年十二月統監府令の發布と共に此等の事務は學校組合に於て處理することとなりたれども土地の狀況に因りては附帶事業として衛生事務を處理することを認めたり併合後内地人の渡鮮する者逐年増殖し從來の日本人會は漸次其の組織を學校組合に變更するに至れり其の後大正三年四月府制の施行と同時に學校組合令を改正し舊居留民團所在地たる府の區域に於ても亦内地人教育に關する學校組合を組織せしめ全土を通して其の制を統一せり現行學校組合令に於ては教育事業の經營を主とせしも從來屠場、水道、火葬場、墓地等を經營し來りたる組合に對しては當分之を繼續せしめたり

(イ)學校組合の人格及目的 學校組合は法人にして官の監督を承け法令の範圍内に於て主として内地人の教育に關する事務を處理するを以て其の存立の目的とす

(ロ)學校組合の設置と組合規約及組合員の權利義務 學校組合を設置せむには發起人區域を定め其の區域内に住所を有し獨立の生計を營む内地人三分の二以上の同意を得て組合規約を作り朝鮮總

督の許可を受けざるべからず而して組合員は營造物を共用する權利を有すると同時に組合の負擔を分任するの義務を有す

(八) 學校組合會と議決事項 學校組合には組合會を置き組合會議員は之を選擧す組合會議員は名譽職とす議員の被選資格は組合規約を以て之を定む組合會の議決事項は左の如し

- 一 組合規約を變更する事
- 二 歳入出豫算を定むる事
- 三 決算報告を認定する事
- 四 基本財産、特別基本財産及積立金穀等の設置管理及處分に關する事
- 五 不動産の管理及處分に關する事
- 六 財産及營造物の管理方法を定むる事但し法令に規定あるものは此の限に在らず
- 七 法令に定むるものを除くの外使用料組合費及夫役現品並其の賦課徴收に關する事
- 八 組合債に關する事

九 歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲す事

十 組合に係る訴訟及和解に關する事

(三) 學校組合管理者と組合吏員 學校組合に管理者を置く管理者は組合員中より道長官之を命ず其の任期は三年とす但し府の區域を包含する學校組合に在りては府尹其の管理者の職務を行ふ管理者は名譽職たることを原則とすれども必要に依り有給と爲すことを得

學校組合には管理者の外に有給又は無給の吏員を置くことを得其の任免懲戒處分及譴責等は管理者之行ふ有給の管理者及吏員に對しては組合規約の定むる所に依り退職料、退職給與金、死亡給與金又は遺族扶助料を給することを得名譽職たる管理者及吏員に對しては職務の爲要したる費用を辨償するの外勤務に相當する報酬を給することを得

(ホ) 學校組合の經費と徴收及寄附又は補助 組合は營造物の使用に付使用料を徴收するの外組合財産より生ずる收入其の他組合に屬する收入を以て其の經費を支出し仍不足を生ずるときは組合費及夫役現品を賦課徴收することを得組合は費用の徴收を爲すのみを以て能事と爲さず進て内地人

の教育に關し必要なる場合に於ては寄附又は補助を爲すことを得

(ハ)組合の監督 學校組合の監督は第一次を郡守島司、第二次を道長官、第三次を朝鮮總督とす但し府尹管理者の職務を行ふ場合に於ては第一次を道長官とし第二次を朝鮮總督とす組合規約の變更、組合の起債及其の方法、利息の定率、償還の方法及其の變更には朝鮮總督の許可を要す而して道長官は組合管理者に對し懲戒を行ふことを得左記事項に付ては許否の權を有す

一 基本財産の管理及處分に關する事

二 特別基本財産及積立金穀等の設置管理及處分に關する事但し積立金穀等を其の目的の爲使用する場合は此の限に在らず

三 不動産の處分に關する事

四 寄附又は補助を爲す事

五 使用料、組合費及夫役現品の賦課徴收に關する事

六 一時の借入金を爲す事

七 繼續費を定め又は變更する事

八 歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し及權利の拋棄を爲す事
 左に最近の組合數、戸口及豫算の狀況を表示す

學校組合歳入歳出豫算

大正七年四月一日

道	歳入			歳出			平均一月當課金
	經常	臨時	合計	經常	臨時	合計	
京畿道	55,333.00	13,140.00	68,473.00	34,807.00	17,267.00	52,074.00	105.56
忠清北道	26,833.00	10,666.00	37,499.00	33,333.00	3,167.00	36,500.00	87.77
忠清南道	67,178.00	46,159.00	113,337.00	83,162.00	30,175.00	113,337.00	100.80
全羅北道	66,470.00	46,133.00	112,603.00	86,363.00	26,240.00	112,603.00	103.36
全羅南道	81,906.00	64,945.00	146,851.00	106,694.00	40,157.00	146,851.00	98.15
慶尙北道	78,928.00	68,972.00	147,900.00	107,381.00	40,519.00	147,900.00	83.69
慶尙南道	115,100.00	113,338.00	228,438.00	154,216.00	74,222.00	228,438.00	90.89
黃海道	55,798.00	26,573.00	82,371.00	51,377.00	30,994.00	82,371.00	66.20
平安南道	77,288.00	47,907.00	125,195.00	104,194.00	21,001.00	125,195.00	89.13
平安北道	36,640.00	33,233.00	69,873.00	64,268.00	5,605.00	69,873.00	76.48
江原道	16,965.00	16,179.00	33,144.00	25,240.00	7,904.00	33,144.00	96.27

道	歲		入	歲		出	平均一戶 常課金
	經常	臨時		經常	臨時		
咸鏡南道	五七,三九七	七〇,三〇二	二七,六九九	六九,五四七	五八,一五二	二七,六九九	九三〇
咸鏡北道	四三八七五	一八〇六一	六二,九三六	四六,六六二	一五,三四四	六一,九三六	九七三
總計	一,二四七,六九四	七三三,八八六	一八六,一五〇	一,一三七,九六八	四八一,一九二	一八六,一五〇	九四九
大正六年度	一〇,四九二,二五	五,五九七,〇八	一,六〇四,八三	一,二五三,八六八	三,五〇九,九五	一,六〇四,八三	八,四八二
同五年度	九,三八八,九八	四,六八四,八	一,三五五,七四六	一,二八七,七三	三,七〇三,四	一,三五五,七四六	八,〇九七
同四年度	八,八七二,四	四,三〇八,六	一,三二八,九二〇	一,〇七二,七四五	二,四六二,九五	一,三二八,九二〇	八,三二七

學校組合數及組合戶口

大正七年四月一日

道	組合數		戶數	人口	道	組合數		戶數	人口
	組合數	戶數				組合數	戶數		
京畿道	三四	二,三,七〇九	八八,七六四	平安北道	二〇	二,八二三	八,三五二		
忠清北道	一一	一,五二八	五,五四一	江原道	一五	一,三八四	三,八六九		
忠清南道	三〇	三,八一	一四,五〇八	咸鏡南道	一六	四,五〇七	一三,七五三		
全羅北道	二九	五,〇〇六	二〇,〇六四	咸鏡北道	七	三,〇六八	一〇,〇九六		

全羅南道	四二	五、七二五	二一八九〇	總計	三四八	八三、〇六五	三〇五、二四五
慶尙北道	四三	六、九〇六	二五、三六四		三二九	七八、六七五	二九三、八七六
慶尙南道	六二	一五〇〇七	五九、〇七八	同五年四月一日	三〇一	七五、一八一	二七五、六一二
黃海道	二〇	三、五一四	一〇、三四九	同四年四月一日	二九六	七一、三〇一	二六二、一〇五
平安南道	一八	六、〇七七	二二、六一七				

五 水利組合

朝鮮水利組合令は大正六年七月公布せられ同年十月一日より施行せられたり舊水利組合條例は韓國政府時代の制定に係り時勢の進運に適應せざるを以て之を改正し組合制度を確立し以て近時發達せる農事思想に合致せしめむとするものなり

(イ) 水利組合の人格及目的 水利組合は法人にして官の監督を承け耕地の改良を行ひ農産物の増殖を得むか爲灌漑排水、水害豫防を以て其の存立の目的とす

(ロ) 水利組合の區域及組合員 水利組合は組合事業の爲利益を受くる土地を以て其の區域と爲す而して灌漑排水を目的とする組合に在りては番と爲さむとする畑若は未墾地等の土地所有者を以て組合員とす水害豫防を目的とする組合に在りては田番等の所有者及事業の爲利益を受くる家屋工

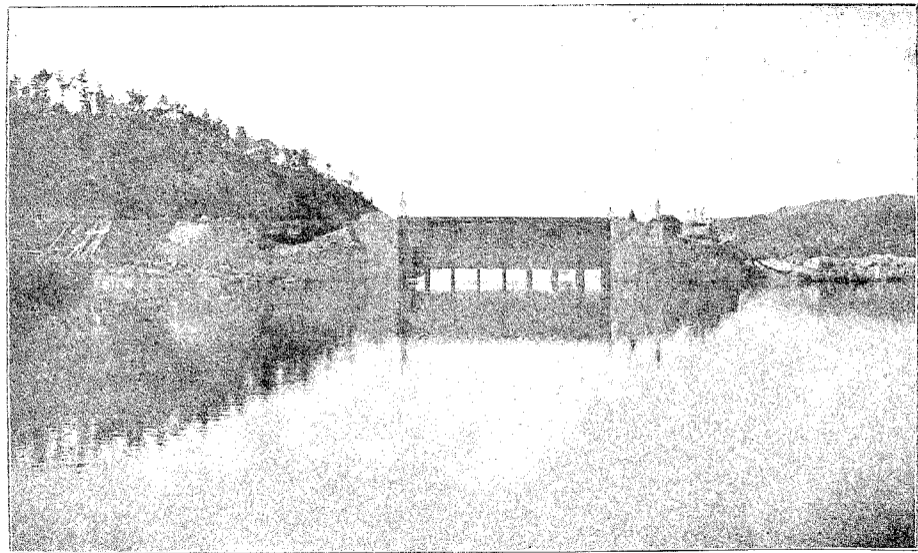
作物の所有者を以て組合員とす例外として未墾地の利用者を土地所有者と看做し組合員と爲す

(ハ) 水利組合の設置合併分割又は廢止 水利組合の設置は組合員たるべきもの五人以上創立者と爲り組合規約を作り組合員たるべき者の二分の一以上にして組合の區域と爲るべき地の總面積の三分の二以上に當る土地所有者の同意を得て朝鮮總督の認可を受くるを要す而して其の合併分割又は廢止を爲さんとするときは組合員の同意を得朝鮮總督の認可を受けざるべからず但し廢止の場合に於て負債を有するときは債務を完了したる後に非されば之を廢止することを得ず

(ニ) 水利組合の機關

一 組合長及組合吏員 組合を代表し其の事務を管理する爲組合長を置き書記及技士をして其の事務を補助せしむ必要な場合には組合規約に依り副組合長、理事、出納役、技士長又は委員を置くことを得

而して組合長副組合長は共に道長官之を任命し孰れも任期を四年とし無給を本則とすれども組合規約を以て有給と爲すことを得又必要な場合に於ては朝鮮總督は府尹郡守又は島司をして組



大正水利組合取水門

合長の職務を行はしむることを得理事、出納役、技士長、書記及技士は有給とす出納役は組合規約を以て無給と爲すことを得此等の吏員は組合長之を任免し理事、出納役及技士長の任免は評議會に諮問し道長官の認可を受くるを要す

二 評議會 評議會は組合長又評議員を以て組織し組合の豫算組合費夫役現品使用料加入金の賦課徴收起償其の他重要事項の諮問機關にして評議員は組合員中より互選し道長官の認可を得て就職す其の任期を四年とす

(ホ)水利組合の經費 水利組合は事業經營の爲毎年豫算を編成し經費を支辨す之れが爲組合員に對し組合費を賦課す即ち灌漑排水を目的とする組合に在りては土地に對し水害豫防を目的とする組合に在りては土地の外家屋及工作物に對し組合費を賦課す場合に依りては夫役現品を以て之を代へ又組合員以外の者と雖組合區域内に居住し其の利益を享くる者に對しては夫役を賦課す組合區域の擴張したる場合には新に編入せられたる土地の所有者より加入金を徴收す其の他營造物に對し使用料を徴收し或は積立金を爲し起債等を爲すことを得

(へ) 水利組合聯合會 組合區域の近接せる間に在りては用水引用の施設其の他に關し他の組合と共同行爲を必要とする場合には水利組合聯合會を設け水利組合に準し法人として其の事務を處理するを得

(ト) 水利組合の監督 水利組合の監督は第一次を府尹郡守島司、第二次を道長官、第三次を朝鮮總督とす但し府尹郡守又は島司組合長の職務を行ふ場合又は組合の區域數府郡に跨るときは第一次を道長官、第二次を朝鮮總督とす又組合の區域二以上の道に亙るときは第一次を朝鮮總督の指定したる道長官、第二次を朝鮮總督とす

道長官の認可事項は(一)不動産の管理方法及處分に關すること(二)積立金品の設置、管理方法及其の處分に關すること但し積立の目的に従ひ處分する場合は此の限りに在らず(三)寄附又は補助(四)一時の借入金(五)豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲すこと等とす朝鮮總督の認可事項は(一)組合規約の變更(二)組合の起債方法、利率償還方法及其の變更(三)組合事業の計畫變更等とす

水利組合概況

大正七年十月一日

組 合	事 務 所 所 在 地	組 合 區 域	事 業 費	設 置 認 可
			年 月 日	年 月 日
沃溝西部水利組合	全羅北道沃溝郡米面龍里	町 四六〇	夫役 九三二人 町 七〇〇	明治 四一—二一八
臨益水利組合	全羅北道益山郡黃登面黃登里	三五九〇	五一三、九〇三	四二—二—一
密陽水利組合	慶尙南道密陽郡府內面駕谷洞	七四三	一一七、五〇〇	四二—二—五
馬九坪水利組合	忠清南道論山郡夫赤面馬九坪里	三二二	五七、五〇〇	四二—三—一
臨益南部水利組合	全羅北道益山郡益山面裡里	三、六〇七	四四〇、〇〇〇	四二—二—四
全益水利組合	全羅北道益山郡春浦面大場村里	一、四四五	一五、〇〇〇	四三—一—二四
臨沃水利組合	全羅北道群山府榮町	三、五四四	一三二、〇〇〇	四四—四—二〇
金海水利組合	慶尙南道金海郡金海面東上洞	一、九九七	二七五、七〇〇	大正元 一—一—九
大正水利組合	平安北道龍川郡府內面龍岩洞	六、八六一	一、四六三、〇〇〇	三一—〇—三一
迎日水利組合	慶尙北道迎日郡浦項面浦項洞	一、四〇〇	二〇〇、〇〇〇	五一—二—二
古阜水利組合	全羅北道井邑郡古阜面古阜里	三、三八九	五七三、〇〇〇	五一—五—二
上南水利組合	慶尙南道密陽郡上南面禮林里	二六一	三三、五〇〇	五一—九—九

組 合	事 務 所 所 在 地	組 合 區 域	事 業 費	設 置 認 可 年 月 日
大渚水利組合 三橋川水利組合	慶尙南道金海郡大渚面出斗里 平安北道龍川郡楊下面立岩洞	一、八四四 <small>町</small> 五〇〇	二九三、〇〇〇 <small>円</small> 四五、〇〇〇	大正 五、一、一、一四 六、一、五、一八

第三節 府郡島臨時恩賜金事業

臨時恩賜金に關しては既に第一章第一節に於て其の由來を記述したるを以て、茲には府郡に於ける臨時恩賜金事業の概況を記すへし之を記するに先ち明治四十三年十月八日寺内總督が道長官及府尹郡守に對し之か趣旨、管理、配與、事業等に付訓示せるものあり左に之を掲ぐ

今ヤ曩日ノ諭告ニ基キ茲ニ臨時恩賜金一千七百三十九萬八千圓ヲ朝鮮各道十二府三百十七郡ニ配與セムトス直接之レカ管理ノ任ニ膺ルヘキ道長官及府郡有司ハ克ク其ノ趣旨ノ在ル所ヲ顧念シ之レカ活用ノ良法ヲ講シ以テ民力休養ノ實績ヲ舉クルコトヲ期スヘシ

抑モ我帝國政府カ斯ノ如キ巨額ノ國帑ヲ朝鮮各道府郡ニ配與スル所以ノモノハ固ヨリ其ノ金額ヲ

直チニ府郡士民ニ配分シ此ノ恩典ヲシテ僅カニ一時ノ急ヲ救フニ止マラシメムカ爲メニアラス蓋シ政府ハ府郡士民カ多年積弊ノ餘孽ヲ受ケ多ク流離困頓ノ窮境ニ在ルヲ憫ミ資金ヲ府郡ニ配與シ道長官ヲシテ管理セシメ之ヲ基本トシテ士民ニ産業ヲ授ケ其ノ教育ノ發展ヲ補助シ凶歉アルニ際シチハ之カ救濟ノ資ニ供セシメ府郡士民ヲシテ水ク其ノ惠澤ニ浴セシメムトスルニ外ナラス宜シク此ノ意ヲ體シ基金ヨリ生スル利子金額ハ凡ソ其ノ五分ノ三八授産ニ五分ノ一五ハ教育ニ五分ノ〇五ハ之ヲ凶歉救濟ノ資ニ充ツルノ方針ヲ以テ事業ヲ計畫シ若ハ適切ナル事業ニ對シテ補助チ與ヘ洽ク士民ヲ救濟シ以テ惠撫慈養ノ本義ニ副フヲ要ス素ヨリ之カ管理使用ノ如何ハ偏ニ管理者ノ經營ニ待タサルヘカラスト雖大體左記各項ニ遵由シ努メテ其ノ事業ノ性質經過ヲ覈査シ其ノ效力最モ的確ニシテ其ノ經營最モ實情ニ適切ナルモノヲ選ミ特ニ凶歉ノ救濟ニ關シテハ最モ其ノ方法ノ採擇ヲ慎重ニシ罹災者ヲシテ賑恤ノ實ヲ得セシムヘク苟モ其ノ給與ヲ濫リニシ爲メニ士民ヲシテ恩ニ狃レ勤勞ヲ厭フノ弊風ヲ生セシメ惠撫慈養ノ本義ニ悖ルカ如キコトナカラシムルヲ要ス

授産 授産ハ先ツ兩班儒生ノ如キ恆産ナキ者ニ對シ産業ヲ授クルノ主旨ナルニ由リ是等ノ者ヲ惠恤スルヲ以テ第一ノ目的トナスヘシ而シテ其ノ經營又ハ補助スヘキ事業ハ地方既ニ素地アリ既ニ國內ニ多少存在スル澆紙及養蠶等ノ如キ經營最モ容易ニシテ奏功確實假令輕微ナルモ依テ以テ糊口ノ資トナスニ足ルヘキモノヲ選擇スルヲ要ス

教育 教育ニ在リテハカメテ資金ヲ基トシ郷校財産其ノ他ノ收入ヲ加ヘ普通學校ヲ設立スヘシ然レトモ學校ヲ設立スルニ當リテハ教師其ノ人ヲ得基礎確實ニシテ永續ノ見込アルモノナラサルヘカラス若シ俄カニ如此學校ヲ設立シ雖キ場合若クハ既設ノ學校アリテ新ニ設立ヲ必要トセサル場合ニ在リテハ他ニ存スル私立學校ヲ補助シ漸次ニ普通學校ト同一ノ程度ニ進マシムルノ注意ヲ要ス

凶歉ノ救濟 凶歉ノ救濟ハ萬己ムヲ得サル場合ニ之ヲ行ヒ濫施スヘカラサルハ勿論其ノ之ヲ行フニ當リテモカメテ生業扶助又ハ現物給與等時宜ニ適應セル工夫ニ出シテ要ス

授産事業に在りては兩班儒生其の他恆産なき者に生業を授くるを以て本旨とし且成るべく普遍的に之を施設し其の惠澤の均霑せむことを期したるを以て其の事業は府郡毎に其の状況を參酌して之を

選定せしむ從て事業の種類は甚だ多様に渉れるも大體に於て之を總括すれば養蠶、機業、農事、製絲、製炭、製紙、製麻及水産等に關する傳習事業は最主要なる事項に屬し其の他巡回教師の設置、農蠶、林業、畜産、水産及各種工業等に關する種苗、種畜、器具其の他材料の配付亦概ね各地方に於て施設せる事項たり而して右傳習事業中比較的長期の養成を目的とする傳習所の數は明治四十四年度に於て百八十六箇所生徒數二千五百十二人、大正元年度に於て百三十八箇所生徒數二千六百七十一人、大正二年度に於て百三十六箇所生徒數二千七百五十六人、大正三年度に於て百三十六箇所生徒數二千二百七十九人、大正四年度に於て百十二箇所生徒數二千五十人、大正五年度に於て百〇七箇所生徒數千七百九十六人、大正六年度に於て七十六箇所生徒數千八百四十一人大正七年度に於て六〇箇所生徒數千三百七十七人にして事業開始以來の通計一萬五千三百八十一人に達し此の外蠶具、蓆、繩、籾、稻、拔、製麻、漁撈等に關する短期簡易の傳習は到る所に行はれ其の傳習を受くる者亦毎年數千人を算しつつあり

教育事業に在りては主として公立普通學校經費を補助し又地方に依り私立學校等にも補助す現に補助を受くる公立普通學校四百六十七校にして此の補助を基礎とし新に公立普通學校を設くるに至りしもの明治四十四年度に於て百三十四校、大正元年度に於て百七校、大正二年度に於て二十四校、大

正三年度に於て十六校、大正四年度に於て十八校、大正五年度に於て二十二校、大正六年度に於て二十一校大正七年度二十六校合計三百六十八校に達せり

凶歉救濟事業としては種穀、農具、食糧を主とし其の他必要に依り醫藥、家屋料、被服等を給與するの方法を設けたるも實施以來未だ甚しき凶歉に際會せず二三の道に於て水災又は旱害に因り種穀及食糧給與を行ひたるに過ぎざるは寧ろ幸と調ふへし

今臨時恩賜金配與額を示せば左の如し

道	臨時恩賜金配與額			
	臨時恩賜金配與額	一年度分利子額	事業費	別
京畿道	二、六四四、五〇〇 円	一三三、二二五 円	七九、三三五 円	三九、六六七 円
忠清北道	七九四、〇〇〇	三九、七〇〇	二二、八二〇	一一、九一〇
忠清南道	一、四五七、七〇〇	七二、八八五	四三、七三一	二一、八六五
全羅北道	一、三一四、八〇〇	六五、七四〇	三九、四四四	一九、七二二
				凶歉救濟費
				一三、三三二 円
				三、九七〇
				七、二八八
				六、五七四

全羅南道	一、六九四、〇〇〇	八四、七〇〇	五〇、八二〇	二五、四一〇	八、四七〇
慶尙北道	二、〇四一、三〇〇	一〇二、〇六五	六一、二三九	三〇、六一九	一〇、二〇六
慶尙南道	一、五七七、七〇〇	七八、八八五	四七、三三一	二三、六六五	七、八八八
黃海道	一、〇九四、〇〇〇	五四、七〇〇	三二、八二〇	一六、四一〇	五、四七〇
平安南道	一、〇四六、〇〇〇	五二、三〇〇	三一、三八〇	一五、六九〇	五、二三〇
平安北道	一、一四九、〇〇〇	五七、四五〇	三四、四七〇	一七、二三五	五、七四五
江原道	一、一四六、〇〇〇	五七、三〇〇	三四、三八〇	一七、一九〇	五、七三〇
咸鏡南道	八八三、〇〇〇	四四、一五〇	二六、四九〇	一三、二四五	四、四一五
咸鏡北道	五五六、〇〇〇	二七、八〇〇	一六、六八〇	八、三四〇	二、七八〇
總計	一七、三九八、〇〇〇	八六九、九〇〇	五二一、九四〇	二六〇、九七〇	八六、九九〇

第四節 濟生院

設立の由來 朝鮮に於ては併合以前孤兒養育、不具者救濟等に關する施設は僅に外國人が布教の傍經營せるもの二三を數ふるの外朝鮮人の事業としては唯一の京城孤兒院在りたるのみ該院は朝鮮人李蔭和なる者の創始せる所にして當時九十餘名の孤兒を收容しつつありたりと雖基礎薄弱にして經

營極めて困難に、加ふるに實際教養の状況亂雜にして單に衣食を給して漢文の素讀を課するの外何等薰陶教化の術を施さず放縱恣情に任せ居たりしか明治四十四年六月府令第七十七號を以て濟生院を設立し孤兒の教養、盲啞者の教育及精神病者治療の事業を行ふこととなるや京城孤兒院の請願を容れ孤兒全部を濟生院に收容し京城西大門外獨立門通に於て同年九月一日より其の教養事務を開始し養育部と稱せり當時濟生院の基本財産は臨時恩賜金五十萬圓及別に國債報價金の殘餘十一萬三千百五十九圓とを併せて之に充當し事業に要する經費は該基金より生ずる收入、國庫補助金及寄附金を以てせり次で同年八月更に朝鮮に於ける貧民治療資金として恩賜金二百八十五萬五千八百圓の下附ありたるを以て濟生院に於て有する資金は合計三百四十六萬八千九百五十九圓に達せり明治四十五年二月濟生院は當初の事業目的の一たる精神病者治療事業を總督府醫院構内に開始し醫療部と名けたり同年四月朝鮮總督府濟生院官制發布せられ同時に總督府醫院、道慈惠醫院並總督府濟生院を以て組織せる一の特別會計法の發布を見たり仍て前に府令に依り設立せる從來の濟生院は單に資金を有するに止め其の資金より生ずる利子收入は舉て之を右の特別會計に寄附し一部は貧民治療の

資に一部は總督府濟生院事業の經費に充つることとし其の養育部及醫療部の事業全部は其の儘官廳たる總督府濟生院にて繼承せしか同年十二月に至り總督府濟生院は其の養育部を西大門外より北部新橋洞元宣禧宮に移すと共に舊養育部建物に大修繕を加へ盲啞生教育事務の開始を爲し翌年四月より新學期の授業を開始せり大正二年四月に至り同一目的を有する二箇の機關即資金を擁するのみにして事業を督まざる從來の濟生院と是より寄附を受けて事業を督む總督府濟生院とを併存せしむるの必要なきを認め明治四十四年府令第七十七號に依り設立せる濟生院は其の有する資金全部の用途を指定し前記特別會計に寄附して解散せり之と同時に總督府濟生院が從來の濟生院より引繼經營し來れる醫療部の事業は更に之を總督府醫院に附屬せしめたるを以て總督府濟生院は専ら孤兒及盲啞者の救養のみを掌ることとし以て現時に至れり

(イ)養育部 當初京城西大門外獨立門通元崇義廟に在りしか家屋狹隘にして豫定の孤兒を收容すること能はざるに因り北部新橋洞所在元宣禧宮の建物を以て之に充當し必要なる改築、修繕並一部建物の新營を行ひ大正元年十二月同處に移轉せり構内は廣濶にして北方に綠樹繁茂せる丘陵を貫

ふて南面せる高燥の地域を占め敷地一萬五百十四坪五一を有す而して構内の建坪は六百坪に近く事務室、教室、作業室、倉庫、炊事場、浴室、衛生室及院兒宿舍並職員官舎等に分れたり而して院兒宿舍は全部在來の溫突舎にして一號より七號に至る七宿舍を有し乳兒及男女別に由り之を區分收容せり

部内施設の學校は普通學校の教科程に準し實科教育を重するの方針を執り之が修業年限は三箇年と定め學齡に達せる者に對し教育を施せり又就學年齡未滿の者には別に幼稚園教育を爲しつつあり左に就學者を示すへし

幼稚園教育を受くる者	二八	男	五	女	三三	計	第三學年在學者	一〇	男	一	女	一〇	計
第一學年在學者	一三		一		一四								
第二學年在學者	八		二		一〇		總計	五九		八		六七	

作業は主として簡易なるものを選定し藁仕事、園藝、袋張乃至家事の手傳、特に掃除、炊事補助、被服類の洗濯等を爲さしめ努めて自助の精神並勤勞の習慣に導かむことを期せり

宿舍は一名乃至二名の保姆を配屬し直接院兒と起居を共にせしめ以て薄侍なる彼等兒童をして寂寞の境地より救ひ家庭的情味中に保育薰陶を加へつつあり

現在院兒の區分及之が教養に直接關係ある職員左の如し

院 兒

養育部内現在の者	六九 ^人	被傭中の者	一〇 ^人
里預け中の者	五五	部外入學中の者	一
農場收容中の者	二五	總計	一六〇

又院兒の精神的訓育の效果をして一層切實ならしむる必要より部内に天照皇大神を奉祀し早天神前に參集禮拜を行はしむるのみならず時時訓話を爲し以て化育の本旨に副はしめむとせり

院兒中幼少なる者は成るべく人乳哺育に據るを便とし幼弱者の全部五十五名は目下里預けと爲せり院兒の體質健康は一般兒童に比し稍劣るを免れず特に新に收容する院兒の多數は最も不良の状態に在るを常とすされば之が改善に關しては十分の注意を爲せるは勿論初て之が收容を爲す者の

如きは假に隔離室に入れ異常なきに及て混同收容するを例とし以て其の健康の恢復を圖りつつあり而して部内には衛生室を設け患者ありたるときは之に移し囑託醫並看護に従事すへき専任保姆を置きて之が治療を擔任せしむ
左に收容院兒に關する概況を示すへし

年 度	院 兒 收 容			院 兒 退			院 兒 逃 走 死 亡			院 兒 計 數	
	收容 數	新收容 數	計	引退 數	自退 數	逃走 數	死亡 數	計	各年度末 現在 數	計	
大正元年	七七	三三	一〇九	一五	七	一〇	七	三九	七〇	七〇	
同 二 年	七〇	三八	一〇八	一	〇	九	〇	三〇	七八	七八	
同 三 年	七八	五二	一三〇	二	二	四	三	二一	一〇九	一〇九	
同 四 年	一〇九	四八	一五七	六	一	三	〇	二九	一〇九	一〇九	
同 五 年	一二八	五二	一八〇	二	三	四	二	三一	一二八	一二八	
同 六 年	一四九	五七	二〇六	一八	一	二	五	四六	一六〇	一六〇	
同 七 年 (自四月至九月)	一六〇	一	一六一	三	一	一	〇	一五	一六〇	一六〇	

院兒年齡並收容原因別

大正七年九月末日

年 齡	孤 兒 收 容			迷 兒 原 因			父 母 收 監	合 計
	孤 兒	棄 兒	迷 兒	貧 兒	因 兒	父 母 收 監		
三 歲 未 滿	—	—	—	—	—	—	—	三
五 歲 未 滿	—	—	—	—	—	—	—	三
八 歲 未 滿	三	—	—	六	—	—	—	〇
十 歲 未 滿	六	—	—	四	—	—	—	三
十 二 歲 未 滿	二	—	—	九	—	—	—	五
十 五 歲 未 滿	—	—	—	七	—	—	—	五
十 八 歲 未 滿	四	—	—	—	—	—	—	〇
二 十 歲 未 滿	四	—	—	一	—	—	—	六
二 十 歲 以 上	六	—	—	—	—	—	—	二
總 計	三 七	五 八	二 七	二 三	—	—	—	一 四 六

(口)農場 京城を距ること約三里京畿道楊州郡蘆海面に在り大正二年十一月の開始に屬す附屬用地
 としては國有未墾地及同林野地の交附引繼を受けたるものにして面積總計百七十餘町歩あり大正

二年及同三年に於て其の内未墾地の一部に開墾工事を加へ必要なる溝渠、堤防等の築造を爲し必要に應じ墾田を得るの施設を爲せり

農場建物は大正二年中の新營にして四戸建百七十五坪を有す各戸には宿舍の外農家として必要なる各般の建物及施設を加へたり而して其の宿舍は院兒居室に接して直接院兒の農業指導者たる農夫の室を設けたり

院兒の職業は朝鮮の現状より之を觀て主として農民たらしむるを彼等將來生計上の便宜と認め妨に農場を設置し養育部の學科修了者中身體健康にして勞働に適する者は全部農作に従事せしめつ

つあり大正六年九月末日現在の農場收容兒數は左の如し

十五歳以下	一七 ^人	十九歳以下	五 ^人
十七歳以下	三	二十歳以上	五
		總計	三〇 ^人

農場に於ける從業院兒には作業の獎勵及將來彼等か自營資金の一部を蓄積せしむるの趣旨を以て彼等か勞作に依り生産したる收入を限度とし從業給與金を支給することとし大正三年度より之を

實施し同七年三月迄に給與せし總額は千七百三十一圓七十九錢にして其の人別最高額は三十一圓四錢最低者は一圓三十四錢にして受給人員は三十二名なりとす左に院兒の貯金額を表示すへし

院兒貯金現在高

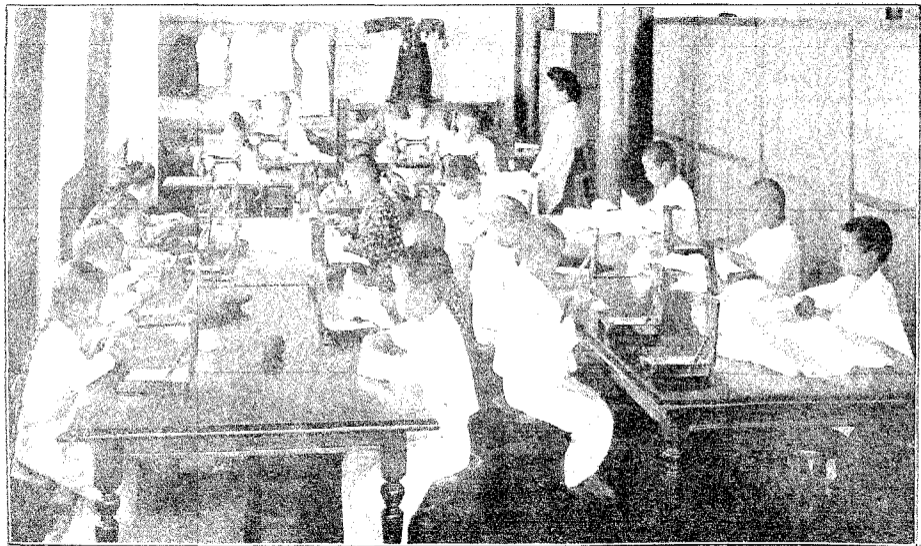
大正七年三月末日

種別	人員	金額	種別	人員	金額
五圓 未滿	一 人	二二・二〇五 円	五十圓以上七十圓未滿	九 人	五六一・〇四〇 円
五圓以上十圓未滿	一	六・六六〇	七十圓以上九十圓未滿	五	三八〇・四六〇
十圓以上二十圓未滿	五	七二・三六五	九十圓以上	二	二三七・八九〇
二十圓以上五十圓未滿	一四	五四二・四七五	總計	五〇	一、八二四・〇九五

(ハ)盲啞部 京城西部天然洞に在り元養育部に於て使用したる建物を以て之に充てたり位置聊か偏在するの嫌あるも市井の雜沓を避け寧ろ盲啞者の養育に利益多き地點を擇へり由來朝鮮に於ては盲啞者に對する特種教育の如き殆んど其の施設を見ず僅に平壤に於て外國人が布教の傍經營せるもの一あるに過ぎずして鮮人は一般に盲啞教育の必要を認めざるか如く盲者にして衣食足るの徒

は終生徒食し然らざる者は卜筮を業とし乞丐の如く各戸に就きて施與を受け僅に生活を營むを例
とす稀に鍼治の技を習ふ者ありと雖到底自活の資を得ること能はず終に乞丐の群に投するを免れ
ざりしか如し次に啞者は盲者に比し廣き職業の範圍を有したるも是亦云ふに足らず斯の如く是等
不具者救済に對する特種教育は全然等閑に附せられ之か施設として見るべきもの絶てなかりしか
大正二年本院は當初の事業目的たる盲啞教育の事務を開始し之か準備を了る共ニ生徒の募集を
爲し同二年四月一日より新學期の教授を始めたり

盲啞教育事業か前記の如く未だ朝鮮人間に重要視せられざりしのみならず全然等閑に附せられた
る現状より之を見るときは本院に於ける此の特種教育開始に際し應募生徒數は極めて僅少なるへ
きを豫想したりしも第一回(大正二年三月)に於て三十四名、第二回(大正三年三月)に於て二十三
名、第三回(大正四年三月)に於て二十一名、第四回(大正五年三月)に於て二十三名、第五回
(大正六年三月)に於て三十名第六回(大正七年三月)に於て二十九名の應募者を見たるのみならず
各回とも相當の自費志願者を數へ更に女子の志望者を算したるか如きは寧ろ意外とする所なり今



濟生院盲啞部啞生縫裁狀況

盲啞生徒の状況を掲ぐれば左の如し

盲啞生徒

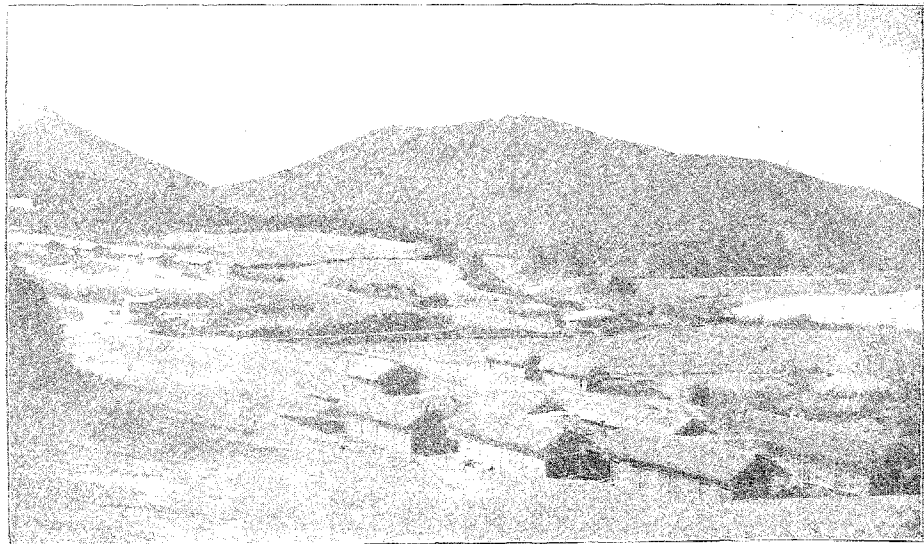
大正七年六月末日

科別	學年	給費		自費		合計	
		男	女	男	女	男	女
盲	一	一四	二	一三	一	一七	三
	計	一四	二	一三	一	一七	三
啞	一	一	一	一	一	二	二
	計	一	一	一	一	二	二
總計	一	一五	三	一四	二	一九	五
	計	一五	三	一四	二	一九	五
盲	一	一四	二	一三	一	一七	三
	計	一四	二	一三	一	一七	三
啞	一	一	一	一	一	二	二
	計	一	一	一	一	二	二
總計	一	一五	三	一四	二	一九	五
	計	一五	三	一四	二	一九	五

給費生は男女共全部寄宿舎に入らしめ食事、被服及學用品等一切を官給し卒業後に於ける何等の制限又は義務を附することなく全然救恤の方針の下に之を收容せり生徒の教育に就ては最も深き注意を拂ひ専ら實用的方面に重きを置き各科の修了者は他の補助なくして善く自活し得らるるの技術を教習せしめむさし盲生には鍼治及按摩を啞生には製縫を課せり而して之が實蹟を見るに大正三年三月及大正四年三月の兩度に於て盲速成科を卒業したる者及大正五年三月盲本科を卒業せる生徒の狀況は極めて良好なるものあり右卒業生は合計三十一名にして内八名は總督府醫院又は道慈惠醫院に於ける「マツサージ」技工として雇傭せられ其の他は各出身地又は其の他の都市に於て開業を爲し各相當の収入を得つつあり又啞生は大正七年三月初めて第一回卒業生六名を出したるか彼等は家庭に歸りて在學中修得せる裁縫の技藝を利用し夫々相當の収入を擧げ生計の幫助を爲しつつあり

第五節 救療機關

併合後帝國が新に朝鮮全道に施したる德澤は固より二三にして止らずと雖就中慈惠救療の機關を設



院病癩院醫惠慈島鹿小郡興高道南羅全

けて其の疾患を治し天壽保全の計を興へたるの一事は亦民心を新政に歸せしめたる所以ならずとせむや而して之か施設としては總督府醫院一、道慈惠醫院二十計二十一院を算せり

朝鮮總督府醫院は元大韓醫院と稱せり現在敷地總坪數五萬六千六百八十四坪餘建坪三千九百八十九坪餘を算し患者約四百人を收容することを得へし建物宏壯にして綠樹蒼鬱たる城東の丘上に位し市井の塵寰を隔たり

道慈惠醫院は各道廳(京畿道を除く)所在地及水原、安東、濟州、小鹿島、楚山、江陵、會寧、間島の各地に一院宛を設置し計二十九院を算す是等各院は開設當時多くは舊式建物を利用し急須の増築改造に依り當面の所要に應せしめつつありしか爾來逐次新營又は改築を行ひ舊時の面目を改めたるもの尠しとせず又國境對岸地方に於ける治療の普及を計る爲東間島の鮮人に對し行ひつつある間島治療病院の經營を改め新に龍井村に慈惠醫院を増設し局子街、頭道溝及百草溝等には信用ある開業醫に治療の委託を行ふの外僻陬地在住鮮人及鴨綠江對岸地方に於ける鮮人に對しては慈惠醫院巡回診療日數を増加し以て治療の普及を圖り更に琿春地方に於ける者に對しても同地の信用ある開業醫に

救療を委託し以て鮮人綴撫の途を講せり

而して是等各院の患者總收容力は約千四百人にして其の敷地總坪數二十六萬五千百六十五坪餘建坪八千七百三十四坪餘を算す

(イ)診療の成績 日韓併合以來大正七年九月末日迄各醫院に於て取扱ひたる總患者實數は五百四十七萬六千五百八十二人にして其の延人員は實に二千三十八萬二千八百九十三人の多きに達せり今最近五箇年間に於ける統計を掲ぐれば左の如し

朝鮮總督府醫院
及道慈惠醫院患者累年比較

年	患者數		一箇月平均	千分比例		千分比例	
	總數	延人員		普通	施療	内地人	朝鮮人
大正二年	四一五、一六七	二、六四六	三、四三二	二八四・一	七一五・九	二、三四・七	七六四・二
同三年	四四三、八六八	二、七七〇	三、六三六	二九二・四	七〇七・五	二、三八・一	七六〇・七
同四年	四九五、八八八	三、一四四	三、四一四	二八〇・八	七一九・一	二、二六・八	七七一・六
同五年	一九二、五九六	二、七九二	一、〇八九	三二五・七	六七四・二	二、六八・六	七二六・三

外國人

四・九

同 六年一、三二〇、八七四二、八四〇、八四一、一〇、七三三、三三六、七三七、三三一、八五六、六八、一五 二六八、九 七二五、一 六〇〇

本表中大正五年以降に於て患者總數の激増を見るは從來患者數は毎年の實數を計上したるも五年よりは日診療人員を積算したるに由る

種別	朝鮮總督府醫院		道慈惠醫院		合計	同上延人員	一日平均患者數
	内地人	朝鮮人	外國人	合計			
普通	一三七、五五六	三九、九〇六	七二四	一七八、一八六	二四七、二三〇	六七七、三四	
	八、六三〇	六二、一八六	一	七〇、八一七	一〇六、四四八	二九一、六四	
計	一四六、一八六	一〇二、〇九二	七二五	二四九、〇〇三	三五三、六七八	九六八、九八	
普通	三二五、九三五	七七、〇九三	一、〇八七	四〇四、一一五	六九五、四九一	一、九〇五、四五	
	五、六一九	六五九、三九四	二、七四三	六六七、七五六	一、七九一、六七二	四、九〇八、六九	
計	三三一、五五四	七三六、四八七	三、八三〇	一、〇七一、八七一	二、四八七、一六三	六、八一四、一四	

種別	患者數			同上延人員	一日平均患者數	
	内地人	朝鮮人	外國人			
普通	四六三、四九一	一一六、九九九	一、八一	五八二、三〇一	九四二、七二一	二、五八二・八〇
治療	一四、二四九	七二一、五八〇	二、七四四	七三八、五七三	一、八九八、一二〇	五、二〇〇・三三
總計	四七七、七四〇	八三八、五七九	四、五五五	一、三二〇、八七四	二、八四〇、八四一	七、七八三・一三

(ロ)巡回診療 巡回診療は大正元年度中より之が實施を爲し各道慈惠醫院をして専ら之が實行に當らしめつつありたるも更に大正四年度より濟州、楚山、會寧の三院を加へ尙大正七年度より間島慈惠醫院をも加へ之を施行せしめつつあり本診療は初め出張診療なる名稱の下に地方往診の途次又は隨時出張の際便宜診療に従事せしめ爲に何れも著大の効果を收めたれども未だ普く各地に之が實施を爲す能はざるを遺憾としたりしか幸に鮮人救療費として巨額なる臨時恩賜金の下附ありたるを以て従來施行せる隨時的の出張診療を廢止し組織的巡回の方法を講し醫員及補助員各一名を以て常時各郡を廻歴せしむることせしに施行以來の成績極て良好にして民衆の歡喜云ふへか

らざるものあるか如し今開始以來大正六年迄の取扱数を掲ぐれば左の如し

道慈惠醫院巡回診療取扱患者

年	患者				合計	同上延人員	一日平均患者數
	内地人	朝鮮人	外國人	合計			
大正元年	普通	五〇六	三三六	—	八四二	四、三六八	?
	施療	七二	二四、三五六	—	二四、四二八	一二六、六五六	
同 二年	普通	五七八	二四、六九二	—	二五、二七〇	一三一、〇二四	四・五〇
	施療	一、八六六	三四五	三	二、二一四	一一、七一三	
同 三年	普通	三一一	一一八、七二一	二	一二〇、〇三四	六三八、二五七	二四九・〇一
	施療	二、一七七	一一九、〇六六	五	一二一、二四八	六四九、九六九	
同 四年	普通	一、四一九	二七〇	二	一、六九一	八、八二一	三・二九
	施療	一、二二七	一〇九、九四四	—	一一〇、〇七一	六一四、七四三	
同 五年	普通	一、五四六	一一〇、二一四	二	一一一、七六二	六二三、五六四	二二九・三八
	施療	一、四一三	三三八	—	一、七五一	六二二、五八二	
同 六年	普通	一、四九四	一二六、八二六	二〇一	一二八、五二一	六八八、三四二	二六九・六二
	施療	八一	一二六、四八八	—	一二六、七七〇	六八八、三四二	
同 七年	普通	—	—	—	—	—	二七三・〇一
	施療	—	—	—	—	—	

年	患者數				同上延人員	一日平均患者數
	内地人	朝鮮人	外國人	合計		
同 五年 普通 治療 計	一、六四九	一、〇二〇	—	二、六六九	八、六七八	三、六六
	三三三	一三六、八一九	二、四七三	一三九、三二五	六〇三、五二六	二五四・六五
同 六年 普通 治療 計	一、四七八	一三七、八三九	二、四七三	一四一、九九四	六二二、二〇四	二五八・三一
	五八	五六一	二	二、〇四一	六、六四三	三・二九
同 六年 計	一、五三六	一一七、七四〇	二、二二八	一二〇、〇二六	五五五、七〇一	二七四・九六
	—	一一八、三〇一	二、二三〇	一二五、〇六七	五六二、三四四	二七八・二五

(ハ)教育事業 朝鮮總督府醫院に於ては朝鮮人醫師及内鮮人助産婦、看護婦の養成を掌り開始以來

卒業生徒數は未だ多しと云ふ能はさるも合計八十八名を出せり卒業生の大多數は官私醫院又は慈惠醫院等に奉職し孰れも相當の信頼を受けつつあり目下兩科を通し現在生徒二十三名を算す

助産婦及看護婦の養成は前記の外各道廳所在地の慈惠醫院に於ても之を取扱ひつつあり内地人朝鮮人併せ收容するの組織なるも之か希望者極めて僅少なり然れども助産婦普及の要は志望者の漸増

を俟つ能はざるものあるを認め大正二年度より速成助産婦科を設置し短期養成の方法を講し之か生徒には主として憲兵（下士以下）又は巡査の家族中より志望者を收容することとし給費制度を開き之を收容教育せるに其の成績は極めて良好にして既に卒業者を出すに至れり生徒數左の如し

總督府醫院大邱慈惠醫院及平壤慈惠醫院に在りては大正六年度より日本赤十字社朝鮮本部の委託に係る救護看護婦の養成に従事し目下三十名の生徒を收容せり

助産婦及看護婦養成

大正七年三月末日

種別	助産婦科			看護婦科			速成助産婦			合計		
	給費生	自費生	總計	給費生	自費生	總計	給費生	自費生	總計	給費生	自費生	總計
	一	一	二	一五	一一	二六	一三	六	一九	二九	一八	四七

朝鮮總督府醫院及道慈惠醫院に關する經費は朝鮮總督府濟生院の經費と共に朝鮮總督府醫院及濟生

院特別會計の支辨に屬す而して該特別會計は若干の政府支出金、資金利子、院收入並寄附金其の他の收入を以て之が歳出に充當せり而して本特別會計に於て有する現在資金中有價證券並現金は左の如く總計四百七萬六千六十二圓の多きに上れり此の巨額の資金中大部分は恩賜金に屬するものなり

維持資金及特別資金		種別	公債(額面)	現金	合計
濟生院には特別資金なし	總督府醫院		一七九、一〇〇 円	二、一九七	一八一、二九七 円
	道 惠 醫院		三、四九五、一〇〇	三八、五五二	三、五三三、六五二
	濟 生 醫院		三五九、九五〇	一、一六三	三六一、一一三
	總計		四、〇三四、一五〇	四一、九一二	四、〇七六、〇六二 円

第七章 教育

第一節 内地人の教育

朝鮮に於ける内地人の教育事業は明治十年釜山に共立學校なる小學程度の學校を設けたるを以て嚆矢と爲す次で元山仁川及京城に小學校を設置し更に日清戰役後に於て漸次居留民の増加に由り隨處の内地人集團地に小學校を設置せりと雖未だ微微として振はさりしか明治三十九年二月統監府の開設と共に居留民の激増を來せると新に國庫補助金を給し其の施設を容易ならしめたるに由り年々多數の小學校を設置し朝鮮總督府設置當時に於ては百二十校を數ふるに至れり爾來内地人の發展に伴ひ益教育施設の普及を見大正七年九月には三百七十餘校の多きを算するに至れり而して中等教育の施設も亦明治三十九年釜山に高等女學校及商業學校を設置せるを始とし爾來必要の地點に中學校高等女學校及商業專修學校を設置せり

内地人の教育制度は明治四十二年初めて統監府令を以て小學校規則を發布し其の設置廢止は理事官

の認可を要するに過ぎず又職員の進退は學校管理者の申請に依り理事官之を任免し以て其の監督權を明にしたるも設立者の資格には何等の制限なく從て其の設立は居留民團立、日本人會立、學校組合立等區區に涉れり次で四十三年三月統監府中學校官制及中學校規則を發布せり、雖高等女學校實業學校等に付ては何等の規程なく唯内地の相當學校に準據して取扱ひ來れり而して總督府設置後は元理事官に屬せし職權を道長官及府尹に移屬せしめたるのみにて教育制度に付ては何等の變革を加へず姑く従前の儘に措き其の教育の方針學校の組織統一並職員の身分等基礎規定を定むる上に於て深く調査研究を重ね明治四十五年三月を以て朝鮮公立小學校同高等女學校同實業專修學校及簡易實業專修學校官制並是等諸學校規則を發布し茲に始て内地人教育制度の確立を見るに至れり

内地人の教育方針は素より内地に於けるに何等の差異なく教育の本旨修業年限教科編制等大體同一にして内地の相當學校と彼此轉入學の關係に就ても互に聯絡を保てり、雖朝鮮の實狀に鑑み生徒教養上自ら特別の規定を必要とするものあり此等は特に規則に明示せり而して公立學校の設置廢止は朝鮮總督の認可事項にして又其の設立者は學校組合に限るに過ぎせり

内地人教育機關は分ちて小學校、中學校、高等女學校、實業專修學校及簡易實業專修學校の五種とし中學校を除くの外は悉く學校組合立なり小學校は近時内地人の發展と共に著しく進歩普及し大正七年九月には三百七十餘校四萬餘の兒童を有するに至り尙年年増設の機運を示せり。雖僻陬地にして未だ小學校の設けなく就學の便を得ざる者の爲に京城、木浦、群山、平壤、義州、會寧、元山等其の他二三の教育會若は學校組合に補助金を給し兒童學寮を設備せしめ此等の兒童を收容し所在小學校に通學の便を開けり中學校は官立にして京城に二校、平壤、釜山、大田に各一校あり京城中學校には臨時小學校教員養成所を附設し中學校卒業者又は之と同等以上の學力を有する者を選抜入學せしめ一箇年間教育を施し以て朝鮮に於ける小學校教員の養成機關とし明治四十五年以來七回二百零八人の卒業者を出せり又女子中等教育機關として京城釜山仁川平壤大邱鎮南浦に公立高等女學校、元山馬山群山木浦に公立實科高等女學校を設置し實業教育には釜山及仁川に公立商業專修學校、平壤、鎮南浦、京城、仁川、群山に公立簡易商業專修學校及鎮海に公立簡易工業專修學校あり京城工業專門學校附屬工業傳習所ありて内地人の入學を許す私立學校は其の數甚た少なく僅に數校を數

ふるに過ぎずと雖専門教育を授くるものに東洋協會京城専門學校あり實業教育を授くるものに財團法人善隣商業學校あり共に相當の成績を挙げ居れり尙専門教育として京城醫學専門學校、京城工業専門學校及水原農林専門學校に内地人の入學を許す其詳細は次節を參照すへし
公立學校に對しては年年國庫補助金を給し其の施設を資け私立學校に在りても成績良好なる者に對しては特に國庫補助金を給し之を保護獎勵せり左に各種の統計を掲ぐ

小學校一覽

大正七年五月末日

道	學校數	學級數	教員數		生徒數	
			男	女	男	女
中學校附屬小學校	一	一	一	一	一	一
京畿道	四一	二二六	二〇五	七四	二八	一八
忠清北道	一一	二四	一九	一一	五、八六一	五、四七三
忠清南道	三〇	六九	五五	二三	四〇九	三五二
全羅北道	二九	七五	六二	三五	一、一三〇	一、〇八六
全羅南道	四二	九三	七六	三七	一、四〇八	一、二三八
尙北道	四六	八九	七七	四一	一、六七七	一、五二〇
計			一一八	四一	一、七八〇	一、五二二
						三、三〇二

中學校 一覽

大正七年五月末日

本表教員中には兼務者を包含す以下教育に關する諸表皆同し

同 四年五月末日	同 五年五月末日	大正六年五月末日	總計	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	黃海道	慶尙南道
二九二	三二七	三四二	三六五	七	一六	一五	二〇	一九	二〇	六七
七六八	八四八	九四一	一、〇一三	二七	四六	二二	三六	六四	四三	一九八
六九三	七二八	八二六	八八四	二六	四三	二〇	三五	四九	三四	一八二
二九三	三二九	三五九	三八五	六	一六	一四	一四	二五	一七	七〇
九八五	一、〇五七	一一、一八五	一一、二六九	三二	五九	三四	四九	七四	五一	二五二
一六、七一二	一八、五八五	一九、九五六	二〇、九三二	五九五	九八三	二六〇	五四七	一、二五四	一、六三二	四、三六八
一四、八一	一六、五七六	一七、九五五	一九、三〇七	五四六	九〇八	二四四	五一三	一、二三五	六四三	四、〇〇九
三一、五二三	三五、一六一	三七、九一一	四〇、二三九	一、一四一	一、八九一	五〇四	一、〇六〇	二、四八九	一、二七五	八、三七七

學校	設立年月	學級數		職員數		生徒數					
		數	級	數	員	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	計
京城中小學校	明治四十三年四月	一六	一	二七	三	一四六	一五〇	一四三	一二五	九八	六六六
同附屬臨時小學校	同 四十四年四月	一	一	一八	二	一〇三	八七	八六	六四	五六	三九五
釜山中學校	大正二年四月	一〇	一	一五	二	一〇三	九四	九三	七七	五六	三九六
平壤中學校	同 五年四月	八	一	九	一	一〇三	四四	九三	七七	五六	三六七
龍山中學校	同 七年四月	四	一	五	一	一五一	四二	四二	四二	四二	一九五
大田中學校	同 七年四月	二	一	五	一	五二	四二	四二	四二	四二	九四
總計		四一	五	七四	九	八八	五九〇	四一七	三三二	二六六	一、七五三

高等女學校一覽

大正七年五月末日

學校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數	管理者
京城公立高等女學校	京城	明治四十一年四月	一四	二六	六二五	京城學校組合
仁川公立高等女學校	仁川	大正二年四月	四	一一	一四六	仁川學校組合
大邱公立高等女學校	大邱	同 五年四月	四	一一	一九八	大邱學校組合

釜山公立高等女學校	釜山	明治三十九年四月	九	一六	三五七	釜山學校組合
平壤公立高等女學校	平壤	大正二年四月	四	七	一七七	平壤學校組合
鎮南浦公立高等女學校	鎮南浦	六年四月	四	九	八〇	鎮南浦學校組合
群山公立實科高等女學校	群山	五年四月	二	五	三一	群山學校組合
木浦公立實科高等女學校	木浦	六年五月	二	五	三三	木浦學校組合
馬山公立實科高等女學校	馬山	四年四月	一	三	三八	馬山學校組合
元山公立實科高等女學校	元山	二年十二月	二	四	三三	元山學校組合
總計			四六	九七	一七七八	

商業專修學校一覽

大正七年五月末日

學 校	所在地	設立年月	學級數		職員數		生徒數		管 理 者
			數	數	本科	豫科	計		
仁川公立商業專修學校	仁川	明治四十五年四月	五	二	一一九	七一	一九〇	仁川學校組合	
釜山公立商業專修學校	釜山	同前	七	一七	一一四	二〇四	三二八	釜山學校組合	
私立善隣商業學校第一部	京城	大正二年四月	五	二〇	一五〇	一二六	二七六	財團法人善隣商業學校	
合 計			一七	四九	三九三	四〇一	七九四		

學 校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數		管 理 者
					本科	豫科	
京城公立簡易商業專修學校	京城	大正五年五月	七	九	二八四	—	京城學校組合
仁川公立簡易商業專修學校	仁川	同	二	〇	五四	—	仁川學校組合
群山公立簡易商業專修學校	群山	同	二	一	一八	—	群山學校組合
鎮海公立簡易工業專修學校	鎮海	同	二	六	三三	—	鎮海學校組合
平壤公立簡易商業專修學校	平壤	同	二	五	二七	—	平壤學校組合
鎮南浦公立簡易商業專修學校	鎮南浦	同	一	三	一一	—	鎮南浦學校組合
合 計			一六	三八	四二八	四二八	

專 門 學 校

大正七年五月末日

學 校	所在地	設立年月	學級數	職員數	生徒數	管 理 者
私立東洋協會京城專門學校	京城	明治四十年十月	二	二三	六四	東洋協會

各種認可學校一覽

大正七年五月末日

學 校	所在地	設立年月	職員數	生徒數	管 理 者
私立善隣商業學校夜學部	京 城	明治四十一年四月	一四	一六一	財團法人善隣商業學校
私立京城女子技藝學校	同	同 四十三年四月	一〇	一九五	吉 田 榮 次
私立京城中等夜學校	同	同	四	六三	井 上 要 二
私立釜山實習女學校	釜 山	大正四年十二月	三	八九	三 島 チ カ エ
總 計			三一	五〇八	

第二節 朝鮮人の教育

從來朝鮮に於ける教育機關は京城に成均館及東、西、南、中の四學あり各府郡に郷校あり各面洞に書堂あり書堂より郷校四學に進み更に成均館に入りて最高の學問を修むるを順序とせり此等の諸機關は唯儒學を授くるに止り他に日用の知識を授けず明治二十七年(開國五百三年)の交科擧の制廢止せらるると共に四學自ら止み郷校亦文廟の享祀に舊態を存するのみにして子弟の教育を行はず明治

二十八年當時の韓國政府は庶政の改善を行ふと共に教育の制度を立て小學校、師範學校、中學校、外國語學校其の他の學校を設立したりと雖悉く日本の制度を模倣したるものにして當時の時勢民度に適せず又其の運用宜しきを得ざる等の理由に因り效果の著しきものなかりき然るに明治三十七年日韓協約の結果所謂顧問政治の開始せらるるや當時の學部亦内地人參與官を置き亞て統監府設置せられ其の指導の下に更に教育の刷新に従事し法令の改廢を行ひ普通學校、高等學校、外國語學校、高等女學校及實業學校等を設置し内地人教員を配置し教科書を編纂し大に舊態を改めたり而して明治四十三年韓國併合に際し諸般官制の改革ありたりと雖獨り教育の制度は事根本の問題に屬するを以て暫らく舊制を存續し先づ時世の變遷に伴ふ當然の改廢を加へ新政に戻る所なからしめ爾來併合後に於ける時世の趨向、民度の實際に鑑み周到なる調査と研究とを重ねて新制度を樹て明治四十四年八月朝鮮教育令を發布し同十月各學校官制及諸規則を發布し十一月之を實施したり

朝鮮教育令は朝鮮人教育に關する主義綱領を明にしたり即ち朝鮮人の教育は教育に關する勸諭の御趣旨に基き忠良なる國民を育成するを本義とし時勢民度に適する教育を施し以て徳性の涵養と國語

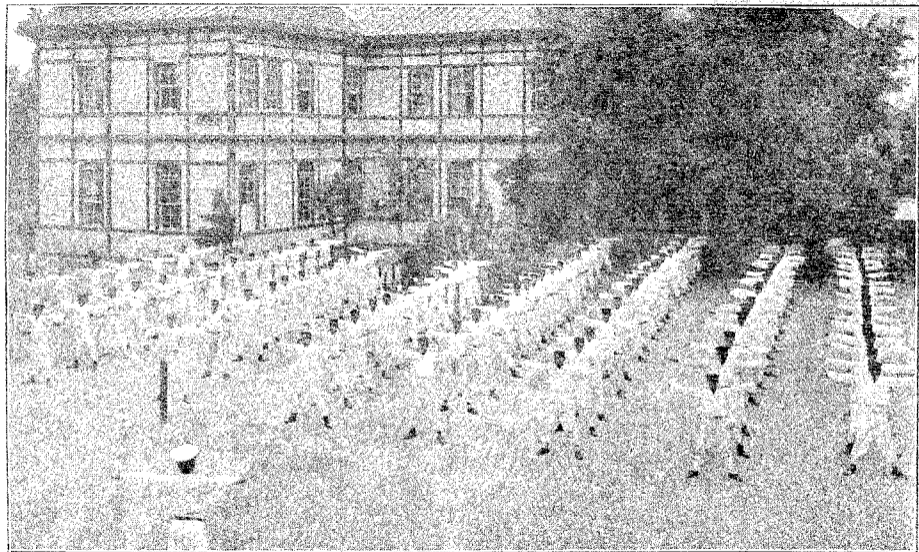
の普及に力を致し日常生活に必須なる知識技能を授け學校の系統及程度を簡約にして時務に遠ざからしめざることに力めたり

普通教育の機關としては普通學校、高等普通學校及女子高等普通學校を置き實業教育の機關としては農業學校、商業學校、工業學校及簡易實業學校を又専門教育の機關としては専門學校を設くることを爲せり而して普通學校教員養成の機關に至りては師範學校を特設せず官立高等普通學校に師範科を設くることをせり

新制實施後に於て普通教育機關は著しく普及するに至り公立普通學校の如き併合當時一百校に過ぎざりしもの今や四百六十餘校約八萬七千の生徒を有するに至れり而して之が維持に關しては併合の際下賜せられたる臨時恩賜金利子を基礎とし國庫及地方費の補助、郷校財産收入、基本財産收入、授業料等を合して之に充て尙必要あるときは設立區域内の朝鮮人に負擔金を賦課することを得しむ官立高等普通學校は京城、平壤、大邱、咸興に各一校同女子高等普通學校は京城及平壤に各一校あり大邱、咸興の兩高等普通學校及平壤女子高等普通學校を除くの外は何れも修業年限一箇年の師範

科を置けり又京城高等普通學校には臨時教員養成所を附設し從來朝鮮人教員を養成し來りしも大正二年度より之を廢し同年四月より内地人にして普通學校教員たるべきものを養成することとし中學校卒業者又は之と同等以上の學力を有するものを入學せしめ一箇年間教育を施すこととせるか大正三年以來五回百五十三名の卒業生を出せり

實業教育機關は大正七年十月現在に於て公立農業學校十七校、同商業學校二校、同商工學校一校にして地方費の經營に屬し年年國庫より補助金を下付せり又簡易卑近の實業教育を授くる爲簡易農業學校五十校、同水産學校二校、同商業學校七校、同工業學校十一校を有し多くは公立普通學校に附設せり專門教育機關は近來普通教育の普及と同時に高等專門學校の必要を感じて大正五年四月舊來の京城專修學校、朝鮮總督府醫院附屬醫學講習所、朝鮮總督府中央試験所附設工業傳習所の組織を變更し新に京城專修學校、京城醫學專門學校、京城工業專門學校を設置し京城專修學校を除くの外は内鮮人共同教育を施し入學資格は朝鮮人に在りては高等普通學校卒業又は之と同等以上、内地人に在りては中學校卒業又は之と同等以上の學力を有する者とせり京城專修學校は修業年限三年にして主と

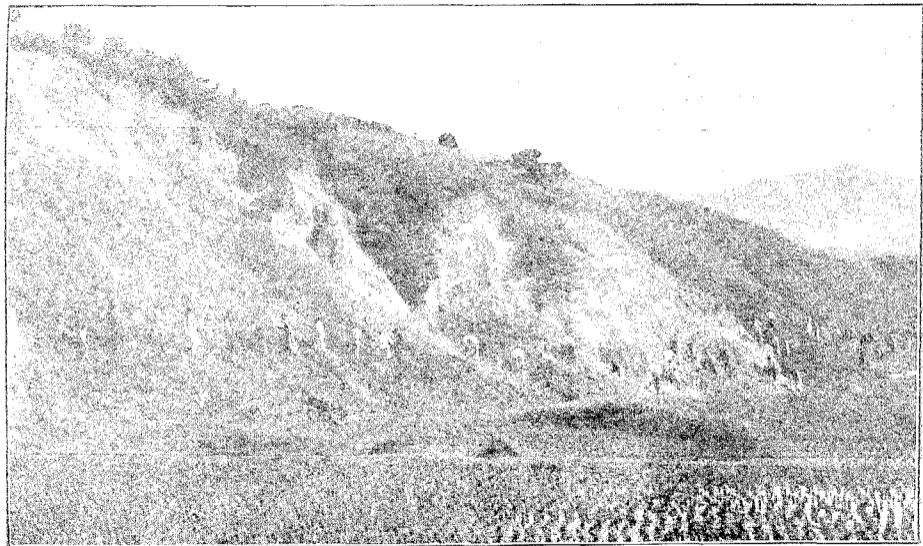


京 城 專 修 學 校 體 操 教 授 的 狀 況

して法律經濟の學科を授け現在生徒百四十名を有し京城醫學專門學校は修業年限四年にして朝鮮人内地人を收容したりしか大正七年八月内地人の爲めに專門學校令に依り特別醫學科を設け現在本科二百二名(内三名内地人)、特別醫學科六十八名(内一名朝鮮人)を有す京城工業專門學校は修業年限三年にして窯業科、染織科、土木科、應用化學科、建築科、鑛山科の六學科とし現在生徒朝鮮人七十三名内地人六十名あり尙本校には附屬工業傳習所を置き修業年限三年にして木工科、金工科、織物科、化學製品科、陶器科の五科とし主として徒弟の養成を目的とし現在生徒朝鮮人六十五名、内地人六十五名を收容せり

右の外大正六年四月より朝鮮總督府農林學校に専門科を設け朝鮮人の外幾分の内地人も收容するこゝとし修業年限三年にして入學資格は朝鮮人に在りては高等普通學校卒業者又は之と同等以上内地人に在りては中學校卒業者又は之と同等以上の學方を有する者を收容したりしか大正七年四月組織を變更して水原農林專門學校を設置し現在朝鮮人二十七名内地人十二名を收容せり本校は明治三十九年四月の創立に係り修業年限三年の本科の外に速成科(修業年限一年當分募集せず)を置き農林

業に必要な知識技能を授けると共に徳性の涵養に努め來りしか大正七年四月専門學校設置と同時に從來の農林學校は大正八年三月三十一日迄本校に附置することになり現に生徒二十五人を有す私立學校は全道に亙り大正七年六月末現在八百九校を數へ内三百二十三校は外國宣教師の管理に係り學科中に宗教の一科を課す私立學校は一時濫設の爲併合當時に在りては二千餘校を數へたりしも漸次整理の結果著しく其の數を減し且之が指導監督に力めたるに由り其の教科課程を公立學校に準するもの多く一時の状態に比し頗る面目を改めたりと雖尙一層之が改善整理の實を擧げしめむか爲大正四年三月私立學校規則を改正し私立學校にして普通教育、實業教育又は専門教育を施さむとするものは當該學校に關する規定に準據して各其の教科課程を定めしむること爲したる結果教科目中宗教を課し又は之が儀式を行ふことを得さらしめ且教員の資格をも定めたり然れども現在私立學校中には遽に改正規則に準據し難きものあるべきを以て相當の期間之が適用を猶豫せり之が實施後は此の種の學校も進んで改正規則に準據して宗教科目を廢し教科課程を整理改善するは勿論尙進んで其の組織を變更して普通學校、高等普通學校等と爲さむとするの傾向を示せり



況 状 の 事 工 防 砂 林 校 學 業 農 川 春

公立普通學校一覽

大正七年五月末日

道	學校數	學級數	教員數		計	生徒數		
			內地人	朝鮮人		男	女	
京畿道	六二	二六四	九八	二三三	三三一	一〇,九五六	一,六一三	一二,五六九
忠清北道	二一	七二	二六	六八	九四	三,〇〇五	三四〇	三,三四五
忠清南道	四四	一五八	六〇	一四一	二〇一	六,四六四	六七三	七,一三七
全羅北道	三八	一四〇	六〇	一二三	一八三	六,〇一六	六七七	六,六九三
全羅南道	三七	一五二	五五	一三四	一八九	五,九二七	六五二	六,五七九
慶尙北道	四九	一五〇	六三	一三一	一九四	五,八三三	六〇八	六,四四一
慶尙南道	三七	一四四	五七	一二七	一八四	六,一五六	一,三三四	七,四九〇
黃海道	二四	八六	三四	七八	一一二	三,四五五	四八九	三,九四四
平安南道	四一	二〇二	六一	一八一	二四二	八,八三一	一,三九九	一〇,二三〇
平安北道	三六	一六七	六三	一四二	二〇五	七,七八二	八二二	八,六〇四
江原道	三〇	一二四	四四	一〇九	一五三	五,〇九六	七五二	五,八四八
咸鏡南道	二三	九七	三七	八五	一二二	三,八七九	三三〇	四,二〇九
咸鏡北道	二〇	七七	三六	六八	一〇四	三,四九八	七九二	四,二九〇

道	學校數	學級數	教員數		學生數			
			內地人	朝鮮人	男	女		
總計	四六二	一、八三三	六九四	一、六二〇	二、三一四	七六、八九八	一〇、四八一	八七、三七九
大正六年五月末日	四四一	一、七〇八	六三四	一、五三八	二、一七二	七二、七六八	九、〇七七	八一、八四五
同 五年五月末日	四二一	一、五六〇	五九六	一、四二五	二、〇二一	六四、六八六	七、一六八	七一、八五四
同 四年五月末日	三九七	一、三九九	五四二	一、三一四	一、八五六	五五、九一七	五、八一六	六一、七三三
同 三年五月末日	三八一	一、三三三	四八七	一、二八〇	一、七六七	五一、九五七	四、九六八	五六、九二五

京城高等普通學校及
京城女子高等普通學校
附屬普通學校

大正七年五月末日

學 校	學校數	學級數	教 員		生 徒			
			內地人	朝鮮人	男	女		
附屬普通學校	二	一三	一〇	五	一五	三三九	一七二	五一一

高等普通學校及女子高等普通學校一覽

大正七年五月末日

學 校		所在地	開校年月	學級數	職員數	計數	男 生	女 徒	計數
官	本 科	京 城	明治三十九年九月	一八	三一	六	七六七		七六七
官	師 範 科	京 城	大正二年四月	一六			七〇七		七〇七
官	附設臨時教員養成所	京 城	大正二年四月	一			二八		二八
官	師 範 科	京 城	大正二年四月	一			二八		二八
官	本 科	平 壤	明治四十二年四月	一〇	一七	五	四二七		四二七
官	師 範 科	平 壤	明治四十二年四月	九			四〇四		四〇四
官	本 科	大 邱	大正三年三月	一			二二三		二二三
官	師 範 科	大 邱	同 五年五月	六	一三	三	二七九		二七九
官	本 科	咸 興	同 七年四月	五	八	一	二四一		二四一
官	師 範 科	咸 興	同 七年四月	七	二	五	二四一		二四一
官	本 科	京 城	明治四十一年四月	三			一四〇	二一八	二一八
官	師 範 科	京 城	明治四十一年四月	三			一四〇	二一八	二一八
官	技 藝 科	京 城	大正三年三月	三			三六	一四〇	一四〇
官	師 範 科	京 城	大正三年三月	一			四二	四二	四二

第七章 教育

二四五

學 校		所在地	開校年月	學級數		職員數		男 生	女 徒	計 數	
私 立	私立養正高等普通學校	京 城	大正二年十月	四	八	二	一	一九三	—	一九三	
	私立培材高等普通學校	同	同 五年四月	六	三	一	—	三九〇	—	三九〇	
	私立普成高等普通學校	同	同 六年七月	六	三	一	—	四三一	—	四三一	
	私立徽文高等普通學校	同	同 七年四月	六	三	一	—	三七〇	—	三七〇	
	私立松都高等普通學校	開 城	同 六年四月	四	二	一	—	一一八	—	一一八	
	私立東萊高等普通學校	東 萊	同 五年十月	四	二	一	—	七九	—	七九	
	私立光成高等普通學校	平 壤	同 七年四月	六	三	一	—	二〇二	—	二〇二	
	私立淑明女子學校	京 城	明治三十九年四月	四	九	三	—	—	五二	—	五二
	高等普通學科	本	—	三	—	—	—	—	四二	—	四二
	官 立	平壤女子高等普通學校	平 壤	大正三年六月	六	二	三	—	—	一七四	一七四
技 藝 科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
合 計	—	—	—	五二	九二	二二	一四	一、七一四	三九二	二、一〇六	

立公	學	實業學校一覽				大正七年五月末日
京城公立農業學校	校	所在地	開校年月	學級數	職員	生徒數
京畿道 高陽郡					內地人 朝鮮人	
大正七年五月					計數	
一						
三						
一						
四						
四五						

總計	立							
	合	技 本 藝	私 立 好 壽 藝	高 等 普 通 學	技 本 藝	私 立 進 明 學	高 等 普 通 學	技 本 藝
	科	科	校	子	科	校	子	科
			開城			京城		
			大正七年四月			明治四十五年四月		
計	一〇四	五三	三	三	六	一	三	四
	一三八	四六			五			八
	外人 九八	外人 七六			外人 二八			六
	外人 三三六	外人 一一二			一五			一四
	三、四九七	一、七八三						
	六三二	二四〇			一一二			七六
	四、一二九	二、〇三三			七九			六一
		三三三			一一二			七六
		三三三			七九			六一
					一一二			七六
					一一二			一一〇

學 校		所 在 地	開 校 年 月	學 級 數	職 員	計 數	生 徒 數
清州	公立農業學校	清州	明治四十四年六月	二	四	五	八一
公州	公立農業學校	公州	同 四十三年七月	二	四	五	三七
全州	公立農業學校	全州	同 四十三年五月	二	四	六	一三
群山	公立農業學校	全群北道	同 四十三年五月	二	四	六	一三
光州	公立農業學校	沃清郡	同 四十三年六月	二	四	五	六七
大邱	公立農業學校	光州	同 四十三年六月	三	三	六	八〇
晉州	公立農業學校	慶尚北道 達城郡	同 四十三年三月	三	七	七	八〇
海州	公立農業學校	晉州	同 四十三年六月	二	四	四	八九
平壤	公立農業學校	海州	同 四十四年四月	二	七	八	九三
安州	公立農業學校	大同郡	同 四十四年四月	二	四	五	八九
義州	公立農業學校	安州	大正三年四月	二	四	五	八〇
寧邊	公立農業學校	義州	同 四十五年五月	二	四	五	一〇〇
春川	公立農業學校	寧邊	同 四十五年五月	二	三	四	九〇
咸興	公立農業學校	春川	同 四十三年四月	二	三	四	八三
北青	公立農業學校	咸興	同 四十四年十一月	二	三	四	一〇二
北青	公立農業學校	北青	同 四十四年十一月	二	三	四	九六

學

校

所 在 地

開 校 年 月

學 級 數

內 地 人 職 員

計 數

生 徒 數

簡易實業學校一覽

大正七年五月末日

立 公	道	科 別	學校數	學級數	職 員		計 數	生徒數
					內地人	朝鮮人		
立 公	京 畿 道	農 業	一〇	一一	一八	一四	三三	二四〇
		工 商 業	二	五	一〇	三	一三	一九一
立 私	合 計	善隣商業學校(第二部)	—	—	—	—	—	—
		京 城	—	三	一八	二	二〇	一六四
立	合 計	鏡城公立農業學校	—	—	二	—	三	五三
		仁川公立商業學校	—	—	五	二	七	一四六
立	合 計	釜山公立商業學校	—	—	六	—	七	一六九
		鎮南浦公立商工學校	—	—	八	二	一〇	四〇五
立	合 計	釜山公立商業學校	—	—	六	—	七	一六九
		鎮南浦公立商工學校	—	—	八	二	一〇	四〇五

立			公				道	科別	學校數	學級數	內地人	職員	朝鮮人	數	生徒數
黃海	慶尙南道	慶尙北道	全羅南道	全羅北道	忠清南道	忠清北道									
工	農	農	工	農	水	商	農	工	水	農	工	農	農		
業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業		
一	二	三	一	三	一	一	五	一	一	八	一	六	一		
三	二	三	一	四	一	二	六	三	二	九	一	六	一		
三	三	六	二	六	二	二	一〇	四	三	一六	三	九	二		
三	二	三	一	三	一	一	七	一	一	四	一	七	二		
六	五	九	三	九	三	三	一七	五	四	三〇	三	一六	四		
二七	五二	七九	一五	五四	二五	八五	一五一	二二	三〇	一九九	三	一一	二一		

立私	立				公		
平安北道	合	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	
	計						
工業	工商業	水産業	農業	農商業	工業	商業	農業
一	六七	九七	二四	九四	一三	一三	二一
二	八一	一五〇	三三	五三	一三	一三	三二
二	一三九	二二三	二〇五	九一	二六	二六	五六
一	八四	一三六	二二	六三	一三	一三	一一
三	二二三	三六	二六	七	一五	四	二
一	一、八二八	二〇四	三五八	五五	一、二一一	一五六	三九

專門學校一覽

大正七年五月末日

立 校	所在地	開校年月	學級數	職員		計數	生徒數
				內地人	朝鮮人		
<p>立 官</p> <p>京城專修學校 京城醫學專門學校 京城工業專門學校 本 附屬工業傳習所 水原農林專門學校 本 農林學校 計</p>	<p>京 城 同 同 同 水 原</p>	<p>大正五年四月 同 五年四月 同 五年四月 同 五年四月 大正七年四月 明治三十九年四月</p>	<p>三 四 二七 一七 一〇 三 二 一 三七</p>	<p>一三 四五 五二 — — — — —</p>	<p>— — — — — — — —</p>	<p>一四 四五 五七 — — — — —</p>	<p>一四五 二〇八 一三五 七〇 六六 六六 五三 二五 二〇七</p>
<p>立 私</p> <p>私立延禧專門學校 私立セブランス聯合醫學專門學校 計</p>	<p>京 城 同</p>	<p>大正六年四月 同 六年五月</p>	<p>一四 四 一八</p>	<p>四 四 八</p>	<p>八 — —</p>	<p>一六 二二 三八</p>	<p>九一 六〇 一五一</p>

書堂は朝鮮全道を通し其の數約二萬五千學童數約二十五萬あり一洞若くは個人又は教師自ら之を設
置し子弟を集めて初等の漢文習字等を教授す固より不完全の機關たるを免れずと雖其の沿革甚た古
く其の數亦夥しきを以て俄に之を廢止すへからざる事情あるを以て弊害のなき限り之を放置し來り
たるか近時普通教育の普及に伴ひ往往漢文の外普通學科を加ふるものあるを生し取締上相當意を用
ふべきの時期に達せるを以て大正六年書堂規則を發布し當事者をして書堂の名稱位置學童數維持方
法教授用圖書等を届出てしめ以て之か監督取締を爲すこととせり

第三節 留學生

從來官費内地留學生は試験の上其の合格者を派遣したりしも明治四十四年六月舊留學生規程を改正
し新に朝鮮總督府留學生規程を發布し官費留學生は特に必要なる學術技藝を履修せしむる爲朝鮮總
督の指定する官立若は公立の學校、傳習所又は講習所の卒業者にして校長若は所長の推薦に係る優
秀者を抜き總督之を命ずることと爲せり官費留學を命せられたる者は大正元年に二十一名同二年に
十三名同三年に十九名同四年に四名同五年に十三名同六年に十名大正七年十二名にして現に留學せ

るもの三十六名あり私費留學生は其の數五百餘名を數へ東京を主とし各地に散在す此の規程に依れば私費を以て留學せむとするものは地方長官を経由して總督に届出つることとなれり而して留學生に對しては特に留學生監督を東京に置き寄宿舎を設置し彼等をして専念學事に勉勵せしむることな期せり今現在留學生の學科別を表示すれば左の如し

		官費留學生學科別						大正七年九月末日	
種別		工業	商業	農業	教育	醫學	其他	合計	
從來在學者		三	三	四	四	七	三	二四	
大正七年留學者		二	一	二	三	二	二	一二	
總計		五	四	六	七	九	五	三六	

第四節 經學院

經學院は明治四十四年九月舊成均館の組織を變更したるものにして朝鮮總督監督の下に經學の講究

を爲し風教徳化を裨補するを目的とする機關なり曩に下賜せられたる臨時恩賜金貳拾五萬圓を基金とし其の利子年額壹萬貳千餘圓を以て之を維持費に充當せり

本院には大提學、副提學、祭酒、司成等の職員を置き院務を處理せしめ又各道より碩學高徳の書宿を選ひて講士に擧げ本院に列せしむ

本院は毎年春秋二回文廟の釋奠を嚴修する外事業として月次講筵を開き或は職員を地方に派遣して臨時講演を催し且毎年數回經學院雜誌を發刊し汎く之を頒布す又各道に於ける講士は時時道内各地を巡講する等常に施政の方針に獎順し整倫の扶持人心の啓發に努め専ら本院の目的を貫徹せむことを期せり而して開院以來茲に八年朝鮮社會教育の方面に貢獻せしこと尠ならず

第五節 教科用圖書

本府に於て編纂する朝鮮人學校教科用圖書は明治四十四年朝鮮教育令發布に依り同令及附屬法規に依準して其の編纂に着手し先づ普通學校教科用圖書を完成し漸次其の他の學校用教科書に及ぼす方針とせざるも高等普通教育、實業教育、專門教育の機關漸次普及するに伴ひ夫等教育に適切なる教科書

の急を要するもの少からざるを以て及ふ限り同時に是等教科書の編纂に従事し併合以來普通學校、高等普通學校、實業學校等の教科書五十三種百二冊外に教授用掛圖十七種を編纂出版し普通學校教科書は主要學科に關するもの一通編纂を了せるか其の他の學校用教科書は急を要するものより漸次之が編纂出版を爲さむとす又既に出版せる教科書に在りては逐次精細なる審査をなし須要に應じ改訂出版をなしつつあり

又學校教育以外に社會教化の一助として皇室國體に關する事項、内地の地理歴史風俗習慣等に關する事項、日本國民たるの觀念養成に關する事項、内鮮人融和を目的としたる事項、朝鮮舊來の良風、美俗、童話、傳説、童謡等を記述したる通俗讀物の編纂に著手し大正七年三月其の第一次の出版として普通學校未入學者を程度とする「小兒畫篇」第一卷を刊行し普く之を各地に頒布するに至れり本讀物の編纂は之を普通學校未入學者を程度とするもの、普通學校を卒業したる者を程度とするもの、純諺文の一般家庭に適するもの及特種的のもの等の區別に依りて遠からず順次に之れが出版を爲さむとす

小學校用教科書は内地と等しく文部省編纂の國定教科書を使用せしむと雖朝鮮は内地と事情を異にするものあるを以て其の教材に就き別に補充教授を爲すの必要を認め目下該教科書編纂中なり又朝鮮に於ては並に尋常小學校に於て農業科を課することに定めたるを以て大正六年三月尋常小學農業書全二冊を出版し同年四月より之を使用せしめ大正七年三月又更に高等小學農業書全二冊を出版し大正七年四月より之を使用せしめたり

本府編纂の教科用圖書は朝鮮人教育機關の發展と私立學校に於ける使用増加の傾向に因り一般の需要年年増大し且普通學校に於ける教科書自辨の生徒漸次増加するに従ひ教科書發賣人亦次第に多きを加へ現在に於ては其の員數四百三名となれり大正六年度に於ける本府編纂教科用圖書の印刷部數は八十六萬九千冊にして其の頒布高左表の如し

教科用圖書及教員參考書頒布高

	發 賣 冊 數	支 給 冊 數	交 付 冊 數
普通學校用圖書	六三七、九一〇	八三、三五六	二八、七九四

	發賣冊數	支給冊數	交付冊數
高等普通學校用圖書	五八、二〇九	一、四一八	四、四三八
實業學校用圖書	三〇、一五七	五七二	二、五六四
專門學校用圖書	一、五六〇	一五二	一、〇九二
小學校用圖書	二、八六五	一四六	二、一八三
雜	二九、一三八	二五八	六〇八
合計	七五九、九一一	八五、九〇二	三九、六〇七

備考 本表中支給は官公立普通學校に給與したるもの、交付は私立學校等に無償配付したるものなり

第八章 財政及經濟

第一節 財政

一 歲計

舊韓國政府時代に於ては豫算の編成なきにあらざりしも唯形式のみにして確的なる歲計を知ることはざりしか統監府設置後明治四十年に至り初めて之れを整理の緒に就くを得次て明治四十三年併合の事あるや其の十月一日より朝鮮總督府特別會計を設定せられたり然るに當時未だ朝鮮に於ける歲入のみを以て獨立經營を爲す能はざりしを以て一部は一般會計よりの補充金を仰き之を支辨することとなれり

右の狀況なりしを以て新政施行後は専ら諸般の制度を改善し、民力の充實、財源の涵養等に昃め其の後三箇年を経過したる大正三年度に至り特別會計設定の主旨に従ひ一般會計よりの補充金は同年

度以降五箇年内に於て漸次之を遞減し大正八年度以降は全く之を辭し獨立自營の實を擧ぐるの計畫を樹て現に之が實行中にあり

今明治四十年以降の歳入歳出を表示すれば左の如し

舊韓國政府歳入歳出

年	歳入			歳出		
	經常	臨時	合計	經常	臨時	合計
明治四十年	九九一六三三三 円	六五四二四三八 円	一六四五六七六〇 円	一〇一九三二七八 円	七二八、六三五 円	一七、七五、九五二 円
豫算同 四十一年	一三、四一〇、三三七	九八六、八八九	一三、二七三、二二六	一四、七一四、九三四	八六、七、九三三	一三、三三二、八五七
同 四十二年	一五、二七六、九〇三	一四〇、四九一〇八	一六、六七八、〇一一	一八、二六三、八五三	一〇、九三三、六九七	一六、三三七、五四九
決算同 四十三年	八八七、四九七	四、五三三、一四九	一三、四〇七、〇九六	八、五九三、二八〇	四、八七五、三五三	一三、四六八、六三三

本表明治四十三年は八月二十八日迄の歳計なり

朝鮮總督府特別會計歳入歳出

年度

經常歲入
臨時歲入
合計
經常歲出
臨時歲出
合計

明治四十三年度
特別會計
豫算

同 四十四年度

同 大正元年度

同 二年年度

同 三年年度

同 四年年度

同 五年年度

同 六年年度

同 七年年度

本表明治四十三年度は同年十月一日朝鮮總督府特別會計設置以後にして平壤鑛業所特別會計歳入歳出を併算せり、豫算豫算は八月二十九日より九月三十日迄の歳入歳出なり

一、九五三、三三三	一〇、三六八、四四五	三、三三三、七四七	九九一、六九九	八、三〇〇、三九〇	一、八三五、七三三
七七八、四三三	二、三三三、一九五	二、九〇一、六一九	一、五四三、五四一	一、三〇一、二三	二、八六三、六五四
二、五五六、一七六	二、六七〇、二八八	五、二八四、四六四	二、五五六、一〇五	二、〇六一、七五七	四、六一七、三三〇
二、八七六、七四〇	三、三六二、一五四	六、二二六、八九四	二、八〇〇、二七八	三、七八〇、九四六	五、一七八、一三三
三、一四七、五三三	三、一七五、九四四	六、三〇九、三八七	三、一六九、〇三〇	三、七四四、二六四	五、三三三、四八四
三、五、六九二、三三八	二、六三五、五三三	六、二〇七、六六〇	三、二七七、七四九	三、八三三、〇八五	五、五〇九、九八三
三、八、八九三、三三〇	三、三八九、一六五	六、二七三、四九五	三、四七二、四八三	三、一四三、〇九四	五、六八六、九四七
四、四、七六四、五五九	三、四三七、五四八	六、八二〇、二〇七	三、六八八、六一九	三、一四三、〇九四	五、七五六、二七〇
四、四、五七八、三四六	一、八〇七、九六三	六、二六四、三〇九	三、九〇〇、二六五	三、三六四、〇三五	六、二六四、二八九
四、二、六六八、三三〇	二、二三四、二八三	六、四五一、五〇三	三、六三四、五二五	二、八二一、九八八	六、四五一、五〇三

朝鮮總督府特別會計歳入歳出豫算科目別

(一) 歳入

科		目		大正七年度	大正六年度	比	較
經		租				增	減
朝	地	地	地	四二、六六八、二二〇	四四、五七八、三四六	〇	一、九一〇、一二六
鮮	戶	戶	戶	二一、七一三、五六一	一八、〇八八、七九〇	三、六二四、七七一	〇
歲	家	家	家	一一、五〇一、六一六	九、九一六、〇一一	一、五八五、六〇五	〇
	所	所	所	八〇三、九四六	七九二、二六八	一一、六七八	〇
	酒	酒	酒	二三七、八五九	二三〇、六八〇	七、一七九	〇
	煙	煙	煙	二八六、〇九二	一六二、六七〇	一二三、四二二	〇
	草	草	草	一、二五六、七九四	一、一三五、七六三	一一一、〇三一	〇
	關	關	關	一、七六二、一四五	九四二、二五五	八一九、八九〇	〇
	噸	噸	噸	六二六、九一四	四二七、八八八	一九九、〇二六	〇
	紙	紙	紙	五、〇五五、一〇八	四、三七一、九九〇	六八三、一一八	〇
	紙	紙	紙	七〇、六六一	八二、〇七七	〇	一一、四一六
	紙	紙	紙	一一二、四二六	二七、一八八	八五、二三八	〇
	紙	紙	紙	二、九二三、四七五	二、四六六、七八〇	四五六、六九五	〇
	紙	紙	紙	一、四二五、五二三	一、四六五、五一六	〇	三九、九九三
入	入	入	入				

科	目	大正七年度		大正六年度		比較
		増	減	増	減	
臨	官有物拂下代	二〇〇,〇〇〇	〇	二〇〇,〇〇〇	〇	〇
	一般会計より受入	六五〇,〇〇〇	〇	六五〇,〇〇〇	〇	〇
時	公債募集金受入	一三,二三五,八八八	〇	一三,〇七〇,九六三	一六四,九二五	〇
	補充金	三,〇〇〇,〇〇〇	〇	五,〇〇〇,〇〇〇	〇	二,〇〇〇,〇〇〇
部	前年度繰入金	四,七四八,三九五	〇	四,七四八,三九五	〇	〇
	合計	二一,八三四,二八三	〇	一八,〇七〇,九六三	三,七六三,三二〇	〇
歳入	總計	六四,五〇二,五〇三	〇	六二,六四九,三〇九	一,八五三,一九四	〇

備考 本表六年度中には七年度との比較對照上組替掲記したるものあり

科	目	(二) 歳出		比較
		増	減	
	大正七年度			
	大正六年度			

歳出總計	部								
	地稅名寄帳整理費	釜山鑿平地買收費	軍用地買收費	地方金融組合	聯合會貸付金	國勢調查費	臨時手當費	勸業費	平壤鑛業所探鑛費
六四、五〇二、五〇三	七八、六六〇	三四八、五〇八	二〇〇、〇〇〇	六五〇、〇〇〇	三九、八三一	二、三三二、五七六	〇	〇	二八、一五六、九八八
六二、六四二、八九九	四六、九九一	三六一、〇〇〇	〇	〇	〇	〇	五一、〇〇〇	二六、四八一	二三、五七七、二八九
一、八五九、六〇四	三一、六六九	〇	二〇〇、〇〇〇	六五〇、〇〇〇	三九、八三一	二、三三二、五七六	〇	〇	四、五七九、六九九
〇	〇	二二、四九二	〇	〇	〇	〇	五一、〇〇〇	二六、四八一	〇

備考 本表六年度中には七年度との比較對照上組替掲記したるものあり

朝鮮鐵道用品資金及朝鮮森林の兩特別會計は明治四十四年度より施行せられたりと雖概ね各従前の韓國鐵道用品資金及韓國森林特別會計を繼承したるものなり左に其の他の特別會計をも併記掲出すへし但し朝鮮森林特別會計は大正四年度限朝鮮鐵道用品資金會計は大正六年度限廢止せられたり

各特別會計歲入歲出

年	度	入 歲		出 歲	
		明 治 四 十 四 年 度	大 正 元 年 度	明 治 四 十 四 年 度	大 正 元 年 度
朝鮮鐵道	用品資金	三、八六〇、〇一九	四、一〇六、〇二〇	四、三二二、六六四	四、三九五、一二二
	資本勘定	九六一、三〇一	九五〇、六九五	九三一、六二一	八七八、〇八八
朝鮮森林	收益勘定	一、一〇七、九一八	一、三三三、六四四	一、二七九、六三七	八九〇、三七六
	及濟生醫院	九二二、〇二三	九三七、五四七	九〇九、六七七	一、〇〇二、六七二
同資金部		三二四、八六五	四八、三〇四	七一、四九五	五五、二一五
		一二、〇五〇	七、六〇三	一二、〇五〇	七、六〇三
朝鮮鐵道	用品資金	三、七七九、二七七	四、一〇四、三八九	四、二三三、六〇三	四、四三三、三〇二
	資本勘定	一〇、五一九	一九、五三五	五三、五三三	六七、二二八
朝鮮森林	收益勘定	一、〇七七、二九四	一、二四九、八七九	九二五、九〇六	九八四、二九〇
	及濟生醫院	七二〇、四六九	八六五、六七四	八〇〇、八三二	九二〇、五九五
同資金部		二〇六、三四九	一一四、〇五五	六三、八〇〇	七三、二七六
		五三、四七五	四九、七五五	五三、四七五	四九、七五五

本表大正五年度迄は決算額にして同六年度以降は豫算額なり

二 繼續費

繼續費に屬する費目の總額及其の年割額左の如し

繼續費總額及年割額（其の一）

費目	總額		年割額			
	總額	大正六年度以前支出額	大正七年度	大正八年度	大正九年度	
朝鮮神社造營費	500,000 円	—	600,000 円	1,500,000 円	1,500,000 円	
總督府廳舍新營費	3,000,000 円	600,000 円	800,000 円	800,000 円	800,000 円	
成鏡北道廳舍新營費	1,878,335 円	—	1,000,335 円	875,100 円	—	
道路修築費	1,870,000 円	1,187,000 円	1,500,000 円	1,500,000 円	1,500,000 円	
海關工事費	2,222,895 円	1,030,895 円	910,000 円	810,000 円	800,000 円	
釜山港陸上設備費	600,000 円	310,000 円	180,000 円	—	—	
羅南門水路修築費	1,498,000 円	—	1,760,000 円	60,000 円	817,100 円	
鐵道建設及改良費	1,681,683 円	870,621 円	1,000,000 円	10,000,000 円	10,000,000 円	

費目	總額	大正六年度以前支出額	大正七年度	大正八年度	大正九年度
平壤鑛業所擴張費	二九〇,〇〇〇 円	一三五,九六三 円	一二五,八八八 円	四六,一四九 円	
國勢調査費	一〇一,九七〇		三九,八三二	二〇,九九三	七,八二七 円
鎮南浦水道工事費	五二〇,〇〇〇	五二〇,〇〇〇			
赤田川改修費	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇			
京城郵便局新營費	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇			
新義州江岸及市街整理費	二四〇,〇〇〇	二四〇,〇〇〇			
仁川港碎岩費	四三,〇〇〇	四三,〇〇〇			
總計	二,〇九〇,三三五 九	一,二二八,九九七 七	一,四三五,八六四 四	一,三三九,一六五 三	一,三三三,〇一四 九

(其の二)

費目	大正十年度	大正十一年度	大正十二年度	大正十三年度	大正十四年度

朝鮮神社造營費	1,571,000					1,571,000
總督府廳舍新營費	800,000	800,000	800,000			800,000
咸鏡北道廳舍新營費						
道路修築費	1,700,000	820,000				1,700,000
海爾工事費						
釜山港陸上設備費						
羅南門水路修築費						
鐵道建設及改良費	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000		11,133,700
平壤礦業所擴張費						
國勢調查費	729,690	729,690				729,690
鎮南浦水道工事費						
赤田川改修費						
京城郵便局新營費						
新義州江岸及街整理費						
仁川港碎岩費						
總計	33,126,690	11,308,130	10,800,000	10,000,000		11,133,700

三 帝國一般會計より支出の朝鮮經營費

最近數年間に帝國政府の朝鮮經營の爲に支出したる經費は左の如し

朝鮮經營費

所管	決算		現計		豫算	
	大正二年度	大正三年度	大正四年度	大正五年度	大正六年度	大正六年度
經濟部	三、七三九、七二三	三、六一二、一四五	三、三八一、五八八	六、三七七、六五八	六、五一七、七四二	六、五一七、七四二
海軍部	一二九、〇六五	一一四、八五八	二〇二、二三〇	二六〇、一三〇	二九二、八五七	二九二、八五七
陸軍部	三、八六八、七八八	三、七二七、〇〇三	三、五八三、八一八	六、六三七、七八八	六、八一〇、五九九	六、八一〇、五九九
臨時部 一般會計補充金	一〇、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇
陸軍部	三、五四三、九五二	二、九一一、九七〇	二、八二八、五四二	一、七一〇、七八〇	二、六九〇、二七七	二、六九〇、二七七
海軍部	八二〇、八六〇	四三〇、六九九	五五八、七三七	三八九、〇三〇	四二七、八八二	四二七、八八二
合計	一四、三六四、八一二	一二、三四二、六六九	一一、三八七、二七九	九、〇九九、八一〇	八、一一八、一五九	八、一一八、一五九
總計	一八、二三三、六〇〇	一六、〇六九、六七二	一四、九七一、〇九七	一五、七三七、五九八	一四、九二八、七五八	一四、九二八、七五八

本表の外大正六年度に於て朝鮮兵器製造所豫算額臨時部二、〇〇〇、〇〇〇圓あり

前表を軍事費及行政費に區分すれば左の如し

朝鮮經營費

所管	決算		現計		豫算	
	大正三年度	四年度	五年度	六年度	七年度	
經濟部 陸軍	三、六一二、一四五	三、三八一、五八八	六、三七七、六五八	六、九五一、五六六	六、六七三、〇八六	
	一一四、八五八	二〇二、二三〇	二六〇、一三〇	三三五、七四〇	三二七、〇九六	
常務部 海軍	三、七二七、〇〇三	三、五八三、八一八	六、六三七、七八八	七、二八七、三〇六	七、〇〇〇、一八二	
	九、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	
臨時部 陸軍	二、九一一、九七〇	二、八二八、五四二	一、七一〇、七七九	二、八〇〇、九九八	三、七七七、四七八	
	四三〇、六九九	五五八、七三七	三八九、〇三〇	四四八、四七七	四一一、五六二	
臨時部 海軍	一一、三四二、六六九	一一、三八七、二七九	九、〇九九、八〇九	八、二四九、四七五	七、一八九、〇四〇	
	一六、〇六九、六七二	一四、九七一、〇九七	一五、七三七、五九七	一五、五三六、七八一	一四、一八九、二二二	
總計						

本表の外大正六年度に於て朝鮮兵器製造所豫算額臨時部二、〇〇〇、〇〇〇圓あり

前表を軍事費及行政費に區分すれば左の如し

所管	決算		現計		豫算	
	大正三年度	同四年度	同五年度	同六年度	同七年度	同七年度
軍陸	六、五二四、一五〇	六、二一〇、一三〇	八、〇八八、四三七	九、七五二、五六四	一〇、四五〇、五六四	
軍海	五四五、五五七	七六〇、九六七	六四九、一六〇	七八四、二一七	七三八、六五八	
軍費合計	七、〇六九、六七二	六、九七一、〇九七	八、七三七、五九七	一〇、五三六、七八一	一一、一八九、二二二	
行政費	九、〇〇〇、〇〇〇	八、〇〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	

四 朝鮮總督府特別會計所屬國債

大正七年十月一日現在の國債額は九千六百六十八萬七千七百八十圓にして内起業資金公債及第一回四分利公債千四百一萬六千五百七十圓は舊韓國政府の起債に係り道路修築、海關工事、水道工事、金融及官業の資金、土地調査、教育及衛生設備等に使用し其の他の國庫債券及借入金七千七百六十七萬一千二百十圓は朝鮮總督府特別會計設定後朝鮮事業公債法に依り起債したるものにして鐵道の建設及改良、道路の修築、海關工事等の諸事業費に使用せしものなり

國債現在額

大正七年十月一日

種別	発行及借入年月	発行及借入額	利子歩合	据置年限	償還年限
起業資金債	明治四十一年十二月	一、二、九六三、九二〇 円	六分五厘七毛一	十箇年	十五箇年
第一回四分利公債	同 四十三年二月	一、〇五二、六五〇	四分	同	五十箇年
朝鮮事業費國庫債券	大正六年十二月	四五、〇〇〇、〇〇〇	五分		大正十一年 十月二日 月内
事業費借入金	同 自四年至七年	二七、一七一、二一〇	五分五厘		借入より三年以 内に随時償還
同		五、五〇〇、〇〇〇	六分一厘		同
總計		九一、六八七、七八〇			

國債及借入金の過去五年間に於ける各年度末現在を對照すれば左の如し

種別	大正二年度	同 三年度	同 四年度	同 五年度	同 六年度
第一起業資金債	五、〇〇〇、〇〇〇 円	三、五〇〇、〇〇〇 円	— 円	— 円	— 円
第二起業資金債	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇	一、二、九六三、九二〇
第一回四分利公債	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇	一、〇五二、六五〇

種 別	大正二年度	同 三年度	同 四年度	同 五年度	同 六年度
朝鮮事業費國庫債券 特別會計一時借入金	三〇、〇〇〇、〇〇〇 円	三〇、〇〇〇、〇〇〇 円	三〇、〇〇〇、〇〇〇 円	二九、九九九、五〇〇 円	四五、〇〇〇、〇〇〇 円
事業費借入金	七、五〇〇、〇〇〇	一五、一四〇、八七一	二五、〇八六、二一〇	三四、六七一、二一〇	三四、六七一、二一〇
總 計	五六、五一六、五七〇	六二、六五七、四四一	六九、一〇二、七八〇	七八、六八七、二八〇	九三、六八七、七八〇

五 租 税

(イ)地稅 地稅は朝鮮現行内國稅の首位を占め大正七年度に於ける收入豫算額千百十五萬七千八百八十八圓を算し内國稅收入豫算總額千六百五十八萬七千七百七十二圓の六割七分に該れり

地稅は大正三年制令第一號地稅令に依り田(畑)、畚(田)、堡(宅地)、池沼、雜種地及有料借地たる社寺地に之を賦課し土地調査令に依る調査施行地域は土地臺帳、調査不施行地域たる山間部又は離島等は地稅臺帳(土地臺帳)に該るに登錄したる土地の所有者、質權者、典當權者(質權者)に該る)又は地上權者より徵收す

地稅の課稅標準は從來結（結とは一定量の收穫を擧ぐへき地積の稱呼にして一等より六等に分ち地味肥沃なる土地は三千二十五坪、地味瘠惡なる土地は一萬二千百坪等の別あり）を用ゐたりと雖大正七年土地調査專業完了の結果土地臺帳には土地調査施行地域内所在の各土地の收益を基礎として調査したる地價を登録せり土地調査不施行地域内所在の土地に付ても亦其の收益、從來の地稅賦課額等を基礎として調査したる地價を地稅臺帳に登録せり故に大正七年制令第九號を以て地稅令を改正し從來の課稅標準たる結を廢し同年以降は土地臺帳又は地稅臺帳登録の地價を課稅標準と爲せり

地稅の稅率は土地臺帳又は地稅臺帳登録の地價の千分の十三とす

地稅の納期は第一期は十二月一日より同月二十八日限、第二期は翌年二月一日より同月末日限とす但し一面（面は町村に該る）に於ける同一納稅義務者の地稅納額一圓未満なるときは第一期に於て其の全額を徵收す

今道別に課稅地段別、地價及地稅額を表示すれば左の如し

道別課税地段別地價及地稅額

大正七年一月一日

道名	段			其他	合計	地價		納税人員
	川(畑)	番(田)	一(宅地)			円	円	
京畿道	一七九、五七〇	一九一、四六七	八三	四三三	三八八、〇九二	九一、三四九、三七五	一、二八七、四八九	二、三七、四九九
忠清北道	八八、四〇八	六八、四四三	五七、四八	五九	一六二、六九九	四六、〇三〇、八三〇	五九八、四〇〇	一、五〇、一七〇
忠清南道	八、一八五三	一五七、三五一	九、九〇九	三、三三九	二五二、四八五	九七、二九八、六五三	一、二六四、八八一	二、三三、六四六
全羅北道	六七、五二九	一六三、一七四	八、八六七	四、六四三	二四四、二二四	八七、七八九、三六〇	一、一四一、三六一	二、三三、〇三六
全羅南道	一九〇、九五六	一九八、三八六	一五、一九六	五〇、三五五	四〇九、五七四	一一四、五二九、〇六七	一、四九一、四七七	四、九〇、九〇七
慶尙北道	二〇〇、八八八	一八五、八五一	一三三、九五	一、三五三	四〇一、三八八	一三一、五五八、八〇六	一、七二〇、三六四	四、七六、三五〇
慶尙南道	一一五、〇九九	一五七、三三三	一〇、四四三	一〇、一一三	二九二、八六八	一一九、四四八、六九八	一、五五二、八三三	三、八五、五二〇
黃海道	三九六、〇九八	一一五、六三二	一一、一八九	七、九七三	五四〇、八九一	七四、三八二、八八五	九六六、九六九	二、六七、八六四
平安北道	三三九、一六三	五九二、八八	七、八六二	四、五二五	三九六、八四〇	三三、〇五二、七七四	四四二、六八六	二、〇六、三〇一
平安南道	三三、五六七	六九五、二二	七、四七六	二、九二五	三五三、五八一	二七、七三〇、五三五	三六〇、四九六	一、九〇、七九三
江原道	三四九、一六五	七五、九六六	七、八六七	四三三	三三九、〇三三	三〇、六七二、三三〇	三九八、七二五	二、三四、六九四
咸鏡南道	三三〇、一八三	三九七、三三六	六、七一九	二、七五八	三五九、三九八	一七、八二九、九九三	二、三二、七八九	二、二五、四七八
咸鏡北道	一九六、四六七	六九九、二	二、七二八	九六九	二〇六、二七四	八、三三三、八四八	一〇六、八九七	八、五九、三三
總計	二、七二一、〇五〇	一、四八九、六五七	三三〇、三三五	四七、三五八	四、七三七、二九一	八八、一〇九、〇四四	一、一四九、一六八	三、三六八、三〇〇

備考 段別の町位未滿は之を切捨てたるに付地目別集計段別と合計段別とは符合せず

(ロ)市街地稅 市街地稅は大正三年制令第二號市街地稅令に依り左記二十六市街地に在る田(畑)、
番(田)、宅(宅地)、池沼、雜種地又は有料借地の社寺地に之を課し土地臺帳に登録したる土地の所
有者、質權者、典當權者(質權者に該る)又は地上權者より徵收し其の第一期は四月一日より同月
三十日限、第二期は十月一日より同月三十一日限とす市街地稅は土地の時價を標準として決定し
たる地價を課稅標準とし其の千分の七を課す而して地價は十年毎に一般に之を改正す

市街地稅施行市街地

道 市 街 地 名

京	畿	道	京城府、仁川府、水原郡水原面、開城郡松都面
忠	清	北 道	清州郡清州面
忠	清	南 道	公州郡公州面、大田郡大田面、論山郡江景面
全	羅	北 道	群山府、全州郡全州面
全	羅	南 道	木浦府、羅州郡羅州面、光州郡光州面

忠清南道	三三六四四	一八六六五九	三八三七三	—	三二五五五	九九六	八三二六二六	一〇七九、九九七	七五五七	一五四四
全羅北道	三二七、一九六	七三、〇四三	四四八七四	六五三	三七、三九	—	七六八四四	一、〇三〇、〇三九	一〇、〇一〇	三三九三
全羅南道	二六九、八二五	三三、〇七九	六二九六七九	—	九三、三九〇	—	一一三九九七三	二、三二七、四七四	一六六〇七	二八三三
慶尙北道	九三、二三八	九六、三六七	四五七七二	二、七五三	一五〇、二八	—	二、三九九、九九七	二、九八二、四六九	二〇、八七七	四八二二
慶尙南道	一六三、一九三	一三〇、五七七	八九一七〇九	四、四三二	四〇六、一八	—	三七六、七四九	六、九三七、八八七	四八、四九五	七、二四〇
黃海道	四六七、三八三	三六、九四九	二五二、七四八	—	三、一六七	—	七六〇、三四七	四三、六九六	三〇、五八	二、三二五
平安北道	五二八、八六〇	八五、五四四	七四八、五三七	—	三五、八七三	—	一、三九八、九一四	三、五〇五、二八六	二四、五三七	四、六七五
平安南道	九八七、〇〇〇	四〇、〇八三	二二六、二四三	—	三五、三九二	—	二六四、四一八	二、五四六、二二	一、七八二	一、一九〇
咸鏡南道	五四〇、〇二〇	五〇、九六六	五〇七、四九九	—	一一、八四九	—	一、三三〇、三三四	一、六五三、三八〇	一一、五六五	三、三四四
咸鏡北道	九八八、九九三	—	三三七、七三一	—	—	—	—	—	一、九三九	四、五二
總計	八、三二〇、九七〇	三、一七三、八二七	七、九六二、五九〇	七、九一一	五、四三、八五七	—	九、九六三、三〇四	二、一五〇、三六、七九九	三、五二、三三三	六、二一、六二二

(ハ) 戸税 戸税は自己の家屋に居住するを否を問はず一戸を構へ獨立の生計を爲す者に對し一戸に付一箇年金三十錢を賦課す

戸税の納期は二期にして其の年四月十分の五及其の年九月十分の五を納付せしむ

戸税は家屋税法を施行する市街地以外の地域に居住する者に賦課す

大正七年度に於ける戸税の歳入豫算額は八〇三、九四六圓なり

(ニ)家屋税 家屋税は隆熙三年法律第二號家屋税法に依り指定したる市街地に在る家屋所有者に對し毎年四月の現在家屋に依り一構毎に左の等級、課税標準及税率に依り五月及十一月の二期に分ち之を賦課す

家屋税課税標準及税率

等級	課税標準	税	率	等級	課税標準	税	率
一等	三十間以上	甲種 金八 乙種 金五	圓圓	三等	四間以上	甲種 金八 乙種 金五	十十
二等	十間以上	甲種 金二 乙種 金一圓三十錢	圓	四等	四間未滿	甲種 金四 乙種 金三	十十錢錢

甲種とは石造、煉瓦造又は瓦葺の家屋を謂ひ乙種とは甲種に屬せざる家屋を謂ふ間を以て計算し難き構造の家屋は方六尺を一間として計算す

家屋税法を施行する市街地は大正元年十月朝鮮總督府令第二十三號を以て指定せらる

大正七年度に於ける家屋税の歳入豫算額は二三七、八五九圓なり

(ホ)酒税 酒税は大正五年七月制令第二號酒税令に依り之を賦課す

酒税令に於て酒類と稱するは酒精及酒精を含有する飲料を謂ひ之を左の三類に分つ

一、釀造酒 清酒、濁酒、藥酒、麥酒の類にして醪其の他の醱酵液より製成したるもの

二、蒸餾酒 燒酎、高粱酒、酒精の類にして醪其の他の醱酵液、酒類、酒粕其の他の物より蒸餾

して製成したるもの

三、再製酒 白酒、味淋 松露酒、甘紅露、梨薑酒の類にして釀造酒又は蒸餾酒の一種と他の

酒類又は其の他の物とを混和して製成したるもの

酒類を製造せむとする者は製造場一箇所毎に免許申請書を所轄府郡島に提出して免許を受くるも
のぞす

酒類を製造する者又は酒類を保稅地域より引取る者に對しては其の造石數又は引取石數に應し左
の割合に依り酒税を課す

一、釀造酒

朝鮮酒たる濁酒 一石に付 七十錢

朝鮮酒たる藥酒 一石に付 一圓五十錢

麥酒 一石に付 二圓

前記以外の醸造酒 一石に付 五圓

二、酒精以外の蒸餾酒

原容量百分中純酒精の容量三十以下のもの

一石に付 二圓

原容量百分中純酒精の容量四十五以下のもの

一石に付 五圓

原容量百分中純酒精の容量四十五を越ゆるもの

一石に付 原容量百分中純酒精の
容量一箇毎に二十錢

一石に付 原容量百分中純酒精の
容量一箇毎に二十錢

三、酒 精

四、再製酒

一石に付

原容量百分中純酒精の容量一箇毎に二十錢
但し一石に付六圓に満たざるときは六圓とす

今大正五酒造年度に於ける酒類の種類別石数及税額を表示すれば左の如し

酒類の種類	造		醸		計	
	清酒	朝鮮酒に非ざる濁酒	麥酒	葡萄酒其の他	朝鮮酒たる濁酒	朝鮮酒たる藥酒
場内	一八九	六二	二	二	三、三三三	一一三
石数	三、四、二六〇	一、三二二	一六	八〇	二八、八二六	一一九
税額	一七一、三〇一	六、五六〇	八〇	二六〇	四三、二三八	五九五
輸移入	二六、七九九	一〇、三七八	二〇、七五六	一、三〇二	—	五七
石数	一三三、五四八	—	—	—	—	—
石数	六二、〇五九	一〇、三七八	一〇、三七八	二七六	二八、八二六	一七六
税額	三〇四、八四九	六、五六二	二〇、七五六	一、三八二	四三、二三八	八八四
計	九三、六八四	五五〇、八四八	五六二、一六七	三七、四九四	一五五、八九七	五八八、三四二
計	七一九	三〇四、八四九	六、五六二	二〇、七五六	四三、二三八	八八四

酒類の種類	場		内製		輸移入		計	
	数	石	数	石	数	石	数	石
蒸酒	51	2,884	27,442	1,907	49,069	2,594	49,069	49,069
朝鮮に非ざる焼酎	—	—	—	—	—	—	—	—
朝鮮酒たる焼酎	28,404	87,527	226,650	—	—	87,527	226,650	226,650
其他	—	—	3	375	2,198	375	375	2,201
計	28,455	90,411	244,095	375	2,198	87,527	312,477	312,477
再製白味淋酒	1	41	248	40	245	81	493	493
甘味葡萄酒	12	282	1,699	400	2,403	682	4,102	4,102
其他	23	277	1,805	363	2,179	529	3,179	3,179
計	41	766	4,752	853	5,149	1,619	9,901	9,901
總計	123,180	642,025	811,014	43,223	229,428	685,248	1,040,442	1,040,442

(ハ)煙草税 煙草税は大正三年三月制令第五號煙草税令に依り之を賦課す

煙草を耕作せむとする者は免許申請書を耕作地の所在を管轄する府郡島に提出して免許を受くるものことす

煙草を製造し又は煙草を販賣せむとする者は製造場又は店舗一箇所毎に免許申請書を製造場又は店舗の所在を管轄する府郡島に提出して免許を受くるものことす

煙草税を分ちて製造税、販賣税、消費税及自家用煙草耕作税の四種とす

製造税は製造場一箇所毎に毎年一月一日現在工場の坪數に依り左の區別に従ひ煙草製造者より之を徴收す

工場の坪數三十坪未滿	三十圓	工場の坪數三十坪以上	五十圓
工場の坪數五十坪以上		工場の坪數五十坪未滿	
工場の坪數百坪未滿	百圓		

工場の坪數百坪以上は百坪迄を増す毎に五十圓を加ふ

販賣税は店舗一箇所毎に左の區別に従ひ煙草販賣者より毎年之を徴收す

煙草卸賣者

第一種	賣上金見込年額五千圓未滿	十圓
第二種	賣上金見込年額五千圓以上	二十圓

第一種	賣上金見込年額三百圓未滿	一圓
第二種	賣上金見込年額三百圓以上	二圓

煙草小賣者

煙草製造者又は販賣者が七月一日以後新に免許を受けたるときは其の年分の税金は半額を徴收す
消費税は左の割合を以て製造煙草を葉煙草貯藏場、製造場又は保稅地域より引取るとき其の引取
人より之を徴收す

製造煙草 小賣定價百分の二十五

葉煙草 價格百分の二十五

自家用煙草耕作税は自家用煙草耕作の免許を受けたる者より毎年八十錢を徴收す

葉煙草の價格は輸移入の葉煙草に在りては關稅の課稅價格に關稅を加へたるものとす其の他の葉
煙草に在りては品位を鑑定して定む

前項の鑑定に不服あるときは再鑑定に求むることを得

朝鮮外に煙草を輸移出せむるとき又は葉煙草を製造煙草の原料に使用せむるときは消費
税を免除す

今大正六年中に於ける煙草税額等を表示すれば左の如し

		(一) 耕作税、製造税及販賣税額			
耕作税	製造税	販賣税	耕作人員税	製造場數	製造人員税
額	額	額	額	一税	額
六四九、五四〇	三九四、四八四	四、三六〇	四六、七三六	三六	六七、七七四
	円	円	円		円

		(二) 消費税額			
製造煙草の種類	數量	小賣定價	税額	輸移入	數量
付	千本	円	円	千本	千本
1,013,333	1,892,556	1,892,556	3,333	333	1,013,333
	円	円	円	円	千本
					1,892,556
					1,892,556
					円
					1,892,556
					円

製造煙草 の種類	鮮内製		輸移入		計	
	數量	小賣定價	數量	小賣定價	數量	小賣定價
稅額	稅額	稅額	稅額	稅額	稅額	稅額
兩切	千本 二七五四九四	円 四六一二五三	千本 四八二三	円 七九〇三三	千本 二七四九八七	円 四六九一三五
葉卷	千本 三三三三三	円 五八七五	千本 八六〇	円 五五四一七	千本 三三三三三	円 六二二九二
刻	千本 三三三三三	円 一九三七六二	千本 五五四七	円 四七六九	千本 三三三三三	円 一九八五三
計	千本 三三三三三	円 六七〇四三五六	千本 八六〇	円 一四一三三〇	千本 三三三三三	円 六八四五六六

備考

一 耕作稅及消費稅は大正六年分を又製造稅及販賣稅は大正七年分を計上せり

(ト)關稅 關稅は輸移入貨物又は輸移出貨物の價格に従ひ之を課す

關稅を大別して輸移入稅及輸移出稅の二とす輸移入稅の稅率は貨物の種類に依り最高二割以下一割五分、一割、八分、七分五厘及五分の區別あり輸移出稅の稅率は總て五分とす

(チ)噸稅 噸稅は外國貿易の爲外國に往來する船舶開港に入港したるさき之を課す其の稅率は登簿噸數一噸又は積量十石に付二十五錢とす但し噸稅納付の日より四箇月間は何れの開港に於ても之

を納付するを要せず

(リ) 鹽稅 鹽稅は光武十年(明治三十九年)十一月勅令第六九號鹽稅規程に依り之を賦課す

鹽の製造を爲さむとする者は免許申請書を所轄府郡島を經由して朝鮮總督に提出し其の免許を受くるものとす

鹽稅は鹽製造者に對し製造斤數百斤に付金六錢の稅率を以て賦課す但し百斤未滿の端數は百斤として計算す

大正七年度に於ける鹽稅の歲入豫算額は一〇六、二五四圓なり

(ヌ) 鑛稅 鑛稅は大正四年十二月制令第八號鑛業令に依り鑛業權者に之を賦課す而して鑛稅とは鑛產稅及鑛區稅の二者を總稱したるものなり

鑛產稅は鑛產物の價格百分の一の割合を以て之を課す

鑛區稅は鑛區千坪又は河床延長一町毎に一箇年金六十錢を課す但し千坪又は一町未滿の端數は之を千坪又は一町として計算す

大正七年度に於ける釐税の歳入豫算額は六二六、九一四圓なり

(ル) 法人の所得税 法人の所得税に關し大正五年七月勅令第百八十三號に依り明治三十二年法律第十七號所得稅法中法人の所得税に關する規定を朝鮮に施行せられたるか内地と同一なれば茲に贅せず

大正七年度に於ける所得税の歳入豫算額は二八六、〇九二圓なり

(チ) 漁業税 漁業税は明治四十五年二月制令第一號漁業稅令に依り之を賦課す

漁業税は漁業者に對し漁業の種類に従ひ左の課税標準及稅率に依り之を賦課す

一、一定の水面を區劃して魚類の養殖を爲す漁業

區劃水面千坪迄毎に

年額 一圓

二、免許に依る漁業にして前號に該當せざるもの

其の漁場に於ける一年の採捕物見積價格千圓以上のものに在りては百圓迄毎に

年額 二圓

同上五百圓以上千圓未満のものに在りては百圓迄毎に

年額一圓五十錢

同上五百圓未満のものに在りては百圓迄毎に

年額一圓

三、捕鯨業

捕獲の鯨一頭毎に

四十圓

四、「トロール」漁業

螺旋推進器を備ふる漁船（補助機關として備ふるものを除く）一隻毎に

年額五百圓

補助機關として螺旋推進器を備ふる漁船一隻毎に

年額二百圓

其の他の漁船一隻毎に

年額百圓

五、潜水器を使用する漁業

潜水器一臺毎に

年額二十圓

六、鯨族以外の海獸獵業

銃器一挺毎に

年額十圓

七、風力、潮流又は螺旋推進器に依り漁船を運航せしめ護網を引曳して爲す漁業（「トロール」漁業を除く）

螺旋推進器を備ふる漁船（補助機關として備ふるものを除く）一隻毎に

年額六十圓

補助機關として螺旋推進器を備ふる漁船一隻毎に

年額四十圓

其の他の漁船にして肩幅十尺以上のもの一隻毎に

年額三十圓

其の他の漁船にして肩幅七尺以上十尺未満のもの一隻毎に

年額十圓

同上肩幅七尺未満のもの一隻毎に

年額五圓

八、海濱に於て場所を一定せず漁網を曳揚げ若は曳寄せて爲す漁業又は河湖に於て漁網を曳揚げ若は曳寄せて爲す漁業

浮子繩の長百五十尋以上の曳網類を用ゐるものに在りては網一統毎に

年額十二圓

浮子繩の長百五十尋未満の曳網類を用ゐるものに在りては網一統毎に

年額 四圓

鯛地漕網を用ゐるものに在りては網一統毎に

年額 十圓

九、漁船を以て囊網を張置し又は繰寄せて爲す漁業

肩幅四尺以上の漁船一隻毎に

年額 五圓

肩幅四尺未満の漁船一隻毎に

年額 二圓

十、捲網類を用ゐて爲す漁業網一統毎に

年額 十五圓

十一、漁網を張下し又は流下し網目に魚類を刺さしめ又は纏はしめて爲す漁業

螺旋推進器を備ふる漁船一隻毎に

年額 百圓

其の他の漁船にして總噸數二十噸以上のもの一隻毎に

年額 三十圓

其の他の漁船一隻毎に

年額 六圓

十二、前各號に該當せざる漁業

一 漁船に三人以上乗組み漁網を用ゐて爲す漁業は漁船一隻毎に 年 額 四 圓

一 漁船に三人以上乗組み延繩其の他釣鈎具を用ゐて爲す漁業は漁船一隻毎に

年 額 三 圓

其の他漁船を用ゐる漁業は漁船一隻毎に

年 額 一 圓

漁船を用ゐざる漁業は漁業者一人毎に

年 額 五十錢

免許漁業者は未だ何人も漁業を爲したることなき漁場に於て漁業を爲すときは朝鮮總督に申請して三年以内の期間を限り税額の減免を受くることを得

漁業税は所定の納付書に收入印紙を貼用して所轄府郡島に納付するものとす但し漁業者に於て便宜とするときは現金を以て納付することを得

漁業税は左の時期に之を徴收す

一、前記漁業税(チ)第二項第五號乃至第十二號の漁業は許可狀又は鑑札の有効期間全部の税額を

許可を與ふるとき又は鑑札を交付するとき

二、同第二項第一號、第二號及第四號の漁業は初年度分の税額を免許又は許可を與ふるとき

三、前號の漁業の二年以後に於ける漁業税は其の年度の四月

四、同第二項第三號の漁業の漁業税は毎年二月

大正七年度に於ける漁業税の歳入豫算額は約九〇、〇〇〇圓なり

(ア)船税 船税は大正三年四月制令第一三號船税令に依り之を賦課す

船税は朝鮮船舶令第一條の日本船舶所有者及朝鮮各港の間に於て運送を爲す船舶法第一條の日本船舶所有者より左の區別に従ひ毎年之を徴收す

一、總噸數十噸又は積石數百石未滿の船舶

四十錢

二、總噸數十噸又は積石數百石以上の船舶 一噸又は十石迄毎に

四 錢

漁業専用船、倉庫船、船橋組成の爲定繋する船舶其の他航行の用に供せざる船舶、端舟其の他櫓櫓のみを以て運轉し又は主として櫓櫓を以て運轉する舟、總噸數五噸又は積石數五十石未滿の帆船等に對しては船税を賦課せず

大正七年度に於ける船税の歳入豫算額は四、三七八圓なり

(カ)人蔘税 人蔘税は隆熙二年七月法律第一五號人蔘税法に依り之を賦課す

人蔘税法は紅蔘專賣法に指定せる人蔘特別耕作區域(京畿道開城、長湍の二郡、黃海道金川、瑞興、平山、鳳山、黃州、遂安の六郡及平安南道中和郡)を除きたる以外の地方に於て人蔘を耕作する者に施行す

人蔘税は人蔘耕作業者より毎年收穫すへき蔘圃一間に對し金十錢の割合を以て徵收し其の納期は毎年十一月末日とす

大正七年度に於ける人蔘税の歳入豫算額は一、七九四圓なり

(キ)登録税 登録税は明治四十五年制令第十六號朝鮮登録税令に依り之を徵收す不動産に關する登記又は證明を受くるときは左記の區別に従ひ登録税を納むるものとす

- 一、相續に因る所有權の取得は不動産價格の千分の七
- 二、贈與、遺贈其の他無償名義に因る所有權の取得は不動産價格の千分の五十
- 三、賣買其の他有償名義に因る所有權の取得は不動産價格の千分の三十五
- 四、所有權の保存は不動産價格の千分の五
- 五、共有物の分割は分割に因りて受くる不動産の價格千分の五

六、永代の地上権の取得は不動産價格の千分の二十五

七、地上権、永小作權の取得は存續期間十年未滿は不動産價格の千分の二、二十年未滿は千分の三、三十年未滿は千分の四、三十年以上は千分の五、存續期間の定めなきものは千分の五

八、賃借權の取得は存續期間十年未滿は不動産價格の千分の一、十年以上は千分の二存續期間の定なきものは千分の一

九、地役權の取得は要役地價格の千分の一

十、先取特權の保存又は取得は債權金額又は不動産工事費用豫算金額の千分の六

十一、質權、抵當權の取得は債權金額の千分の六

十二、競賣、強制管理の申立の債權金額は千分の六

十三、假差押、假處分の債權金額は千分の四

十四、抵當ある債權の差押は債權金額の千分の六

十五、相續財産の分離は所有權に付ては不動産價格の千分の六、所有權以外の權利に付ては不動産價格の千分の一

十六、請求又は申立に因り抹消せられたる登記の回復は不動産每一箇二十錢

十七、假登記は不動産每一箇二十錢

十八、附記登記又は附記證明は不動産每一箇十錢

十九、登記又は證明の更正、變更又は抹消は不動産每一箇十錢

(タ)戦時利得税 戦時利得税は大正七年制令第六號に依り朝鮮に住所又は一年以上居所を有する者の利得に付之を賦課するものとす朝鮮に住所又は一年以上居所を有せざる者朝鮮に資産又は營業を有するるとき其の利得に付亦同し

戦時利得税は左の利得に付之を賦課す但し戦時利得税法に依り戦時利得税を課せらるる利得に付ては此の限に在らず

一、所得税法に依り所得税を課すべき法人の利得

二、船舶又は鑛業に關する權利若は設備の賣却に因る個人の利得

戦時利得税の税率は左の如し

一、法人の利得 利得金額百分の二十

二、個人の利得 利得金額百分の十五

法人戦時利得税は各事業年度毎に之を徴收し個人の戦時利得税は年額を二分し左の納期に於て之

を徴收す

第一期

其の年六月一日より三十日限

第二期

其の年十二月一日より三十一日限

個人にして戦時利得税の納税義務ある者は毎年四月中に其の利得の種類、金額及計算の内譯額を詳記し府尹部守島司に申告すべきものとす

大正七年度に於ける歳入は約四十萬圓の見込なり

以上の外船舶登記に關する登録税は(一)相續に因る所有權の取得(二)贈與、遺贈其の他無償名義に因る所有權の取得(三)一、二以外の原因に因る所有權の取得(三の二)委付(四)所有權の保存、(五)賃借權の取得(六)抵當權の取得、(七)競賣の申立(八)假差押、假處分(九)抵當ある債權の差押(十)請求又は申立に因り抹消せられたる登記の回復(十一)假登記(十二)附記登記(十三)登記の更正、變更又は抹消とす

船籍の登録税は(一)新規登録(二)轉籍(三)除籍(四)登録の變更の四とす

海員の登録税は(一)新規登録(二)登録事項の變更の二とす

財團法人又は營利を目的とせざる社團法人の登録税は(一)法人の設立、設立後の事務所設置又は事

務所の移轉(二)登記事項の變更消滅若は廢止、登記の更正若は抹消法人の解散、清算人の選任解任若は變更又は清算の結了とす

商社會社其の他營利を目的とする法人の登録税は(一)合名會社、合資會社の設立(二)合名會社、合資會社の出資増加(三)株式會社、株式合資會社の設立(四)株式會社株式合資會社の資本増加(五)株式會社、株式合資會社の第二回以後の株金拂込(六)合併又は組織變更に因る會社の設立(七)合併に因る會社資本の増加(八)社債(九)第二回以後の社債拂込(十)支店設置(十一)本店又は支店の移轉(十二)支配人の選任又は代理權の消滅(十三)登記事項の變更、消滅又は廢止(十四)登記の更正又は抹消(十五)合名會社、合資會社設立の取消(十六)解散(十七)清算人の選任、解任又は變更(十八)清算の結了とす

礦業權に關する登録税は(一)礦業權の設定(二)礦業權の變更(三)同上移轉(四)抵當權の設定(五)順位の變更に因る抵當權の變更(六)抵當權の移轉(七)共同礦業權者の脫退(八)滯納處分以外の原因に因る礦業權又は抵當權の處分の制限(九)廢業に因る礦業權の消滅(十)登録の更正、變更又は抹消とす右の外(一)商號の設定又は取得(二)支那人の選任又は代理權の消滅(三)商法第五條又は第七條の規定に依る登記(四)民法第七百九十四條、第七百九十五條又は第七百九十七條の規定に依る登記(五)

前各號の登記事項の變更、消滅若し廢止又は登記の更正若し抹消(六)船舶管理人の選任又は代理權の消滅(七)法人の合併に因る權利の取得に付不動産又は船舶に關する登録稅あり
大正七年度に於ける登録稅の歲入豫算額は二、二〇〇、〇〇〇圓なり

第二節 通貨

朝鮮の幣制は從來幾多の變遷を重ねたりしが明治三十八年に至り貨幣の根本的整理に著手し先づ幣制を改正し其の品位量目を帝國貨幣と同一となし新貨幣を發行して其の流通普及に努め舊白銅貨及葉錢の回收に努めたり而して舊白銅貨は明治四十二年十二月限り全く其の通用を禁止し葉錢は漸次引上の結果其の流通額大に減少するに至れり明治四十三年八月併合以來朝鮮の通貨は帝國貨幣を以て統一するの方針を採り舊韓國貨幣は一切鑄造を停止し明治四十四年三月より從來發行したる分は漸次帝國貨幣と交換して引上げつつあるが大正七年四月貨幣法を施行すると同時に舊韓國貨幣の處分に關する法律を公布し舊韓國貨幣條例に依り發行し又は通用を認めたる貨幣は大正九年十二月末日限り通用を停止し其後五年間は政府に於て之を引換ふることをなすなり貨幣統一の前途茲に確立するに至れり而して現今朝鮮に流通せる通貨は朝鮮銀行券を主とし各種帝國貨幣日本銀行券並舊韓國貨幣にして其の最近數年間に於ける流通高を示せば左の如し

通貨流通見込高

年 別	金 貨	補助貨及 小額紙幣	舊韓 幣	日 本 銀 行 券	朝 鮮 銀 行 券	合 計	指 數
大正二年末	千四 四	千四 四、三三三	千四 三、〇二〇	千四 一一一	千四 二五、六九三	千四 三三、一五一	九七
同 三年末	五	四、八四四	二、三一八	一〇六	二一、八五〇	二九、一三四	八五
同 四年末	六	五、三六一	二、〇二八	八八	三四、三八七	四一、八七三	一二三
同 五年末	五	五、三五二	一、九一三	一三二	四六、六二七	五四、〇三〇	一五九
同 六年末	三	五、八四八	一、九〇五	三六六	六〇、九一〇	六九、〇三四	二〇三
同七年十月一日	三	七、三九八	一、九〇四	二二九	六五、八五一	七五、三八八	二二一

備考 内容の合計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

而して朝鮮銀行券は朝鮮銀行法に依り發行する兌換券にして朝鮮に於ける主要の通貨として經濟の發達に伴ひ近年著しく發行高を増加せるが更に大正六年十二月以降關東州及南滿洲鐵道附屬地に於ても無制限通用を認められ同時に從來橫濱正金銀行の發行し來れる金券の引繼を受けたるを以て發行高益益増加するに至れり而して其の保證準備發行制限額は從來三千萬圓なりしか大正七年四月朝

朝鮮銀行法の改正に依り五千萬圓に擴張せられたり今最近數年間に於ける種類別發行高を示せば左の如し

朝鮮銀行券發行高

年	百圓券	拾圓券	五圓券	壹圓券	錢五	錢貳	錢拾	拾錢券	合計	指數
大正元年末	千四	千四	千四	千四	千四	千四	千四	千四	千四	一〇〇
二年末	一七五〇	一〇六七〇	三九一八	一一〇九三	三	三	三	五	二五、六九三	一〇一
三年末	二五五〇	八、二八八	二、七三七	九〇七三	二	二	二	五	二一、八五〇	八五
四年末	二、五五〇	一、八三三	四、八一七	一、五七四	二	二	二	五	三、四、三六七	一三四
五年末	二、五三六	一、六、四〇五	七、五五四	二、〇、三三	二	二	二	五	四、六、六三七	一八八
六年末	五、五〇九	二、四、四三三	一、一〇、六九	七、六、三三〇	二	二	二	五	六、七、三六四	二六三
同七年九月末	六、三二二	三、三、七八	一、六、一八五	二、四、〇六六	二	二	二	五	八、〇、二、九四	三二四

内容の合計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

第三節 金融

一 金融機關

朝鮮に於ける金融機關の濫觴は明治十一年第一銀行釜山支店設置に始まり次て十八、百三十銀行等各地に支店を設け之を前後して朝鮮人に依り大韓天一(朝鮮商業)、漢城の諸銀行設立せられたり超へて同三十九年農工銀行、同四十年より地方金融組合、同四十一年東洋拓殖會社の各設立を見韓國銀行は中央銀行として同四十二年設立せられ後朝鮮銀行を改稱したり其後東洋拓殖會社は大正六年十月本店を内地に移したるも依然朝鮮に於ける主要の金融機關として活動を續け又大正七年十月一日朝鮮殖産銀行設立せられて從來の六農工銀行を統一合併せり而して現今朝鮮に於ける金融機關は中央金融機關として朝鮮銀行あり、不動産金融機關として朝鮮殖産銀行及東洋拓殖會社あり、商業金融機關として普通銀行の朝鮮に本店を有するもの十四、内地に本店を有するもの三の外朝鮮銀行及朝鮮殖産銀行亦各其の特殊銀行業務の傍ら普通銀行業務を兼營するあり、下層金融機關として金融組合二百六十を有す

各種銀行一覽

大正七年十月一日

銀行	支店元金	開業年月日	銀行	支店元金	開業年月日
支店及 支店所	資本金及 支店元金		支店及 支店所	資本金及 支店元金	

朝鮮銀行	三	10000	明治四十二年十一月二十四日	韓一銀行	四	500	明治三十九年八月八日
朝鮮殖産銀行	四	10000	大正七年十月一日	湖西銀行	一	300	大正二年七月四日
第一銀行支店	二	800	明治十一年五月四日	三和銀行	一	300	同
十八銀行支店	八	1500	同二十三年一月一日	大邱銀行	二	500	同
百子銀行支店	四	500	同二十五年七月二十日	鮮南銀行	一	300	同
密陽銀行	一	500	同四十年三月一日	慶南銀行	二	500	同
七星銀行	一	435	大正元年八月一日	釜山商業銀行	三	500	同
京城銀行	一	1000	同二年九月五日	新義州銀行	一	500	同
漢城銀行	八	3000	明治三十六年二月七日	東萊銀行	一	500	同
朝鮮商業銀行	七	1000	同三十二年三月七日	總計	一〇	3895	同

本表中*印を附したるは内地に本店を有する銀行の支店元金なり
 本表の外朝鮮銀行の朝鮮外支店、出張所二十一あり

各金融機關總況

(イ) 運轉資金の内譯

種別	大正七年 十月一日	同六年末	同五年末	同四年末	同三年末	同二年末	同元年末
政府貸下金	千四 二、九七七	千四 二、九七七	千四 二、九七九	千四 三、〇〇九	千四 三、〇七七	千四 三、〇五五	千四 三、三三三
拂込資本金	四四、五六七	三四、五六七	三六、二一三	二六、五五七	二五、八三九	二二、〇四四	二〇、九〇一
積立金及繰越金	五、〇六六	四、〇〇三	二、四四三	三、二四四	二、〇〇九	一、五七九	一、一〇三
銀行券發行高	X 八〇、二九四	X 六七、五八四	X 四六、九七七	三三、三六七	二二、八五〇	二五、六五三	二五、五五〇
債券發行高	X 一〇、三三三	X 八三、三三三	X 一〇、六〇六	三、三一九	二、九一〇	二、九九〇	一、七六〇
諸預り金	七六、九三七	五四、五五五	四四、二二四	三五、九〇三	三三、二五一	三三、三三七	二八、七三二
借入金及爲替尻	一、〇九三	一、四四六	七、九九五	八、〇五四	一〇、一三三	七、六六〇	七、六四五
外國爲替賣	四一九	一六四	—	—	—	—	—
雜勘定	五、一〇九	三、三三一	二、九七九	三、五九六	四、三三〇	四、三三三	四、一四一
總計	三三〇、四八八	二二二、三三〇	一三三、二八四	一六、四〇〇	一〇一、三三一	一〇一、三三三	九七、四〇九

本表中×印を附したるは小額仕拂手形發行高なり

(口)資金運轉の狀況

種別	大正七年							
	十月一日	同六年末	同五年末	同四年末	同三年末	同二年末	同元年末	
政府貸上金	五、五〇〇	七、五〇〇	七、五〇〇	七、五〇〇	七、五〇〇	七、五〇〇	一〇、〇九〇	
農工及拓殖資金貸付	三三、三九二	一七、八四〇	二二、一八	三三、一七	二二、七四八	八、六七	四、八三〇	
別途貸付金	八、五九四	八、六五六	五、八〇〇	五、七三三	六、三三二	六、五三三	六、九二四	
銀行券發行	三三、〇六四	二九、〇六五	二七、二六一	一一、六〇〇	七、四三三	八、九三三	八、七六六	
正貨準備	七、八五二	七、三六八	五、二六三	四、〇〇二	四、三六八	四、五三二	四、一六〇	
諸貸出金	二六、一一八	二六、三〇一	一九、一六八	一六、七五二	一五、四二四	一四、八三三	一三、九七七	
所有物 <small>土地、建物、什物、有價證券、地金銀</small>	二、四九七	四、六三七	三、四八三	三、五八八	一、六二六	一、五三三	三、六〇七	
預け金及爲替尻	四、四四二	四、一三三	一、四、五八九	三、六四七	六、八七七	五、三三四	五、三三	
外國爲替買	四、四四二	四、一三三	一、四、五八九	三、六四七	六、八七七	五、三三四	五、三三	
雜勘定	四、〇三三	三、八四七	二、七三三	二、三〇八	二、三〇〇	二、三〇〇	一、五七五	
手許在高	三、〇、四六八	二、三三三〇	一、五、七六四	一、六、四〇〇	一、〇、七三三	一、〇、七三三	九、二、〇〇〇	
總計	三、〇、四六八	二、三三三〇	一、五、七六四	一、六、四〇〇	一、〇、七三三	一、〇、七三三	九、二、〇〇〇	

朝鮮銀行鮮外支店出張所の分は本表中に算入せず
 内容の總計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

二 金利

従來朝鮮に於ける金利は非常に高率に失し爲に産業の發達上尠からざる障害ありしを以て農工銀行地方金融組合を各地に設置して之を低下に勸めたる結果漸次低落を示し來りたるが尙一般金利に制限を附し準據すべき規矩を示すの必要を認め明治四十四年十一月朝鮮利息制限令を發布せり其の利率左の如し

- | | |
|--------------|---------|
| 一 元金百圓未滿 | 年三割以下 |
| 一 元金百圓以上千圓未滿 | 年二割五分以下 |
| 一 元金四千圓以上 | 年二割以下 |

但質屋營業者の貸借元金五十圓未滿及市場に於ける貸借元金三十圓未滿の利息には適用せず

三 朝鮮銀行

朝鮮に於ける國庫金の出納、銀行券の發行、其の他中央銀行の業務は従來株式會社第一銀行京城總支店をして之を取扱はしめたるが財政の膨脹經濟の發展に伴ひ別に金融の中樞たる中央銀行設置の必

要を認め明治四十二年十月韓國銀行を設立し第一銀行より中央銀行としての業務を繼承し同年十一月より業務を開始せるが併合後四十四年三月朝鮮銀行法の發布と共に同行は朝鮮銀行と改稱せり
現在資本金は二千萬圓にして中央銀行として國庫金の出納、銀行券の發行を爲すの外左の業務を營む

(一)爲替手形其の他商業手形の割引、(二)平常取引する諸會社銀行又は商人の爲手形代金の取立、(三)爲替及荷爲替、(四)確實なる擔保ある貸付、(五)諸預り金及當座貸越勘定、(六)金銀貨、貴金屬及諸證券の保護預り、(七)地金銀の賣買及貨幣の交換、(八)信託の業務、(九)尙政府の認可を受くるときは公共團體に對し無擔保貸付を爲すことを得、營業の都合に由りては國債證券、地方債券其の他確實なる有價證券を買入るることを得るものとす

朝鮮銀行は本店を京城に置き朝鮮内樞要地に支店出張所を設け尙ほ爲替の調節及貿易助長の爲め内地に在りては東京、大阪、神戸、滿洲に在りては安東縣、大連、奉天、長春、哈爾濱、四平街、開原、營口、吉林、龍井村、遼陽、鐵嶺、旅順、鄭家屯、支那に在りては青島、上海、天津又露領浦鹽に松田銀行部の名

稱の下に支店出張所を設置せり而して滿洲に在りては金本位制の補助貨缺乏の爲め商取引に困難を感するを以て小額仕拂手形を發行するにききなり大正五年六月十二日より五十錢、二十錢、十錢券の三種を發行しつゝあるか大正七年十月一日に於ける發行高は百二萬三千六百十圓に達したり

朝鮮銀行總況

年	公稱 資本金	稱拂 本金	込 積立金	政 貸下金	府 借入金	預 金貸出	金 貸出	發 行高	行 券
大正元年末	10,000	7,500	5,000	1,700	3,000	3,710	3,093	25,550	
同二年末	10,000	7,900	1,300	1,100	3,000	1,865	3,136	25,693	
同三年末	10,000	10,000	1,100	1,100	4,957	1,605	3,174	22,850	
同四年末	10,000	10,000	3,780	1,100	3,000	1,578	3,031	3,373	
同五年末	10,000	10,000	5,180	1,100	3,000	1,728	3,563	4,627	
同六年末	10,000	5,000	1,683	1,100	3,000	2,093	4,408	6,736	
同七年十月一日	10,000	10,000	2,330	1,100	3,000	2,974	4,996	8,093	

本表中×印を附したるは滿洲にのみ流通する小額仕拂手形にして外書とす。本表預金及貸出金には朝鮮外支店の分を包含せず

朝鮮銀行利率

大正七年十月一日

預金利率		貸出利率	
常座預金	日歩 最高 最低 普通	割引手形	日歩 最高 最低 普通
特別常座預金	日歩	諸貸出金	日歩
定期預金	年利 一箇年以上 六箇月以上	常座貸越	日歩 最高 最低 普通
諸預金	最高 最低 普通		
	五厘 五厘 五厘		二錢八厘 二錢八厘 一錢六厘
	一錢		二錢四厘
	五分 五分		二錢六厘
	九厘 七厘 一錢一厘		二錢七厘 二錢八厘 一錢八厘 二錢五厘

四 朝鮮殖産銀行

舊韓國財政整理の當時地方金融の梗塞を緩和し併せて殖産興業の振作に資せむが爲明治三十九年三

月農工銀行條例を發布し政府は或は其の株式を引受け或は無利子貸下金を爲す等農工銀行の設立、發展を助長するに最めたる結果大正六年末に於て本店六、支店四十一を有するに至り地方産業の開發に貢獻したる所尠からざりしか其の擁する資本金は六行を合せ僅かに二百六十萬圓に過ぎずして到底時代の要求に適應するに能はざるに至りしを以て茲に農工銀行の組織に革新を加へ其の分立の制を改め之を統一して一大銀行となし以て朝鮮將來の經濟に貢獻せしむべき目的を以て大正七年六月朝鮮殖産銀行令を發布し十月一日其の設立を見たり而して朝鮮殖産銀行の資本金は一千萬圓にして本店を京城に置き朝鮮内樞要の地に支店四十六を有し左の業務を營む

(一)三十年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依り不動産又は不動産上の權利を擔保とする貸付(二)五年以内の定期償還の方法に依り漁業權を擔保とする貸付(三)法令の規定に依り設定したる財團を擔保とする第一號の方法に依る貸付(四)農業者又は工業者二十人以上連帶して債務を負ふ者に對する五年以内の定期償還の方法に依る無擔保貸付(五)公共團體に對する第一號の方法に依る無擔保貸付(六)金融組合、漁業組合其他營利を目的とせざる産業に關する法人

に對する第一號の方法に依る無擔保貸付(七)朝鮮の產物又は朝鮮の產業上必要なる貨物を質とする貸付(八)國債證券又は朝鮮總督の認可したる有價證券を質とする貸付(九)爲替及荷爲替(十)公共團體の債券又は朝鮮に於て殖産事業を營むことを目的とする會社の社債券の應募又は引受(十一)信託の業務(十二)尙ほ預り金又は地金銀、有價證券の保護預りを爲し、朝鮮總督の認可を受け他の銀行又は東洋拓殖會社の業務を代理し、公共團體の爲に其の金錢出納の取扱を爲すことを得るのみならず當分の内朝鮮總督の指定する普通銀行業務を營むことを得

朝鮮殖産銀行は其の營業資金を得る爲め拂込資本金額の十倍を限り債券を發行することを得

朝鮮殖産銀行一覽

大正七年十月一日

年	公稱資本	拂込資本	積立金	預金	貸出金	債券發行高	政府貸下金
大正七年十月一日	一〇,〇〇〇 <small>千円</small>	四,一九七 <small>千円</small>	六〇六 <small>千円</small>	一三,一三〇 <small>千円</small>	一八,七五五 <small>千円</small>	三,〇〇〇 <small>千円</small>	一,四五九 <small>千円</small>

參考として農工銀行一覽表を掲ぐれば左の如し

年	公稱 資本金	拂込 資本金	積立金	預金	貸出金	債券 發行高	政下 貸金
大正六年末	二、六〇〇	一、四六九	五五二	九、七三四	一七、六八六	三、〇〇〇	一、四五九
同 五年末	二、六〇〇	一、四六九	四四〇	八、〇一七	一二、七二三	一、七三九	一、四五九
同 四年末	二、六〇〇	一、四六九	四八七	六、四五六	一一、四六二	二、三一九	一、四五九
同 三年末	二、六〇〇	一、四六九	四八六	四、七一八	一一、五五四	二、九一〇	一、四五九
同 二年末	二、六〇〇	一、四六七	四七九	四、五九九	一一、五八三	二、九九〇	一、四六九
同 元年末	二、四〇〇	一、三四八	三八六	四、四六九	一〇、四五六	一、七八〇	一、四七九

五 普通銀行

朝鮮に於ける普通銀行は明治十一年第一銀行の釜山に支店を設置したるを嚆矢とし次て十八銀行は二十三年、百三十銀行（當時五十八銀行）は二十五年孰れも仁川に支店を置き漸次各地に店舗を擴張せり一方朝鮮人側に於ては明治二十七年以降漸く銀行の設立を見るに至りしか當時經濟界未だ幼稚にして設立後幾何ならずして孰れも閉店し保護政治以前に設立せられたるものにして現今存續せ

るは三十二年設立の朝鮮商業銀行（當時の大韓天一銀行）及三十六年設立の漢城銀行あるに過ぎず
 其の後經濟の發達に伴ひ漸次銀行の設立増加せるのみならず内鮮人間經濟關係密接なるに隨ひ合
 同經營のもの出現するに至りしを以て適用法規の統一を計る爲め大正元年十月現行銀行令を發布せ
 り現今普通銀行は朝鮮に本店を有するもの十四にして其の支店出張所二十八、内地に本店を有する
 銀行の支店出張所十四にして詳細左の如し

普通銀行一覽

大正七年十月一日

銀行	公稱 資本金	拂込資本金	積立金	政下 貸金	預金	貸出金
	千円	千円	千円	千円	千円	千円
第一銀行支店		＊ 八〇〇			七、七六八	七、一〇七
十八銀行支店		＊ 一、六五〇			六、三三三	六、七三三
百三十銀行支店		＊ 六五〇			四、八〇一	三、一三〇
密陽銀行	五〇	五〇	一三		七八	一二四
七星銀行	四三	四三			三八	八八
京城銀行	一、〇〇〇	四〇〇	八六		五七五	八一

銀行		公稱	拂込	積立	政下	預金	貸出
		資本	資本	金	府	金	金
漢城銀行	三、〇〇〇	二、二五〇	一〇〇	三〇	五、三三一	六、二四〇	
朝鮮商業銀行	一、〇〇〇	八九三	三三五	三三七	四、七一一	四、九五二	
韓一銀行	五〇〇	三七五	二一〇	一、一八三	一、九三五	一、九三五	
湖西銀行	三〇〇	二二五	一六	一三〇	二七二	二七二	
大邱銀行	五〇〇	三二五	三二	二二三	二八七	六八七	
鮮南銀行	三〇〇	七五	一九	二七六	二九〇	二九〇	
慶南銀行	五〇〇	二五〇	二一	三九一	六七一	六七一	
釜山商業銀行	五〇〇	二〇〇	一六	六七一	一、三〇五	一、三〇五	
三和銀行	三〇〇	七五	一一	二三八	三三八	三三八	
新義州銀行	五〇〇	一一五	一一	一三六	一三六	五七二	
東萊銀行	五〇〇	一二五	一一	一三六	二七	九六	
總計	八、九九三	三、一〇〇	八五四	二六七	三三、八三一	三五、三四九	
大正六年末	八、四九三	四、〇五六	七二七	二七七	二三、二五四	二九、〇九三	
同五年末	七、五七六	三、七〇六	六〇二	三三一	一九、四二七	二一、二八九	

本表中*印を附したるは内地に本店を有する銀行の支店元金なり
 内容の總計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

同	同	同	同
四年末	三年末	二年末	元年末
七、二九〇	七、二九〇	七、二九〇	四、九九〇
*	*	*	*
三、三〇五	三、三〇五	三、三〇五	三、三〇五
三、七〇一	三、六〇一	三、六〇一	三、六〇一
五、六〇〇	四、八五〇	四、一九〇	二、六一〇
三、四九〇	三、六七〇	三、八五〇	五、四一〇
一、三、三八八	一、一、五四六	一、一、八八六	一、〇、一二三
一、八、八八一	一、七、八三〇	一、八、五四五	一、六、六八一

六 手形交換所

輓近朝鮮財界發展の結果商業取引漸次類繁を加へ手形殊に小切手の授受盛なるに伴ひ銀行間に於て手形交換及不渡手形に對する制裁の必要を感ずること切なるに至りたるを以て京城に於て明治四十三年七月一日手形交換所を設立し京城各銀行を其の組合銀行とし組合銀行間の手形小切手の交換を開始せるが次で仁川に於ては明治四十四年一月四日、釜山に於ては同年四月一日平壤に於ては大正七年一月一日何れも手形交換所を設立して交換事務を開始したり今各交換所に於ける交換高を表示

すれば左の如し

手形交換所手形交換高

其の一

種別	大正		二年		大正		三年		大正		四年	
	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額
京城手形交換所	二六〇、二二二	六四、五三三	二八四、三九六	五七、三三一	三〇七、〇六一	五七、九一一	一一一、八〇一	一五、一二六	一〇九、六七六	一九、七六二	一一八、一〇〇	二四、九六三
釜山手形交換所	三三、四一三	二一、六二〇	四〇、一二六	一三、七四〇	四二、八四九	一五、八七三	四〇七、四二六	一〇一、二八〇	四三四、一九八	九〇、八三三	四六八、〇一〇	九八、七四八
仁川手形交換所												
平壤手形交換所												
總計												

其の二

種別	大正		五年		大正		六年		大正		七年九月末迄	
	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額	枚	交換金額
京城手形交換所	三九二、〇九八	八一、九四六	四九〇、七八八	一二五、九五九	四六七、七九〇	一五八、四四一						

所 換	大正	二 年	大正	三 年	大正	四 年
釜山手形交換所	一三三、三二三	二九、八九八	一五一、〇九五	四四、六七一	一二六、六三三	五八、一六〇
仁川手形交換所	四三、六一三	二一、〇八二	四九、〇五四	三二、二七四	四〇、二三七	三一、八一五
平壤手形交換所					五六、一四七	一九、二七六
總 計	五六九、〇三四	一三一、九二七	六九〇、九三七	二〇二、九〇五	六九〇、八〇六	二六七、六九三

其の三

交 換 種 別	種 別		種 別		種 別	
	大正	二 年	大正	三 年	大正	四 年
小 切 手	二五九、四五五	六九、六九七	二六四、四五四	五八、六一五	二七七、三〇三	六四、八五六
送金爲替手形	二五、四九四	八、七九三	二六、〇七八	八、一九二	二八、三五一	八、七一
約 束 手 形	三、四八八	一、九九一	五、二七四	二、三九八	五、〇三四	二、二四七
任辨命令及旧給命令	二四、五四一	一〇、三三三	二六、二六五	一〇、〇五二	三〇、〇六二	九、九七六
郵便爲替證書	六七、二四二	五、一四二	七四、八一九	五、四二一	八八、八八八	六、四一〇
公債債券同利札	二三、一一一	九七	二八、二六七	八三	三三、五四〇	八三
雜 證 票	四、〇八五	五、二三三	九、〇四一	六、〇七〇	五、八三三	六、四六二
總 計	四〇七、四二六	一〇一、二八〇	四三四、一九八	九〇、八三三	四六八、〇一〇	九八、七四八

其の四

種別	大正五年		大正六年		大正七年九月末迄	
	枚數	交換金額 千円	枚數	交換金額 千円	枚數	交換金額 千円
小切手	三四四、九〇二	八八、九一四	四三八、〇九〇	一四四、二〇五	四五二、〇四八	一九〇、七九四
送金爲替手形	三〇、六六九	一〇、七〇七	三六、六七六	一五、〇七八	三〇、五一二	一七、一五〇
約束手形	五、九五三	二、八七三	二二、五五八	六、五九一	一〇、四五二	九、八八七
仕掛命令及出給命令	三〇、四三〇	一一、六八一	三三、二二二	一四、五七六	二七、六六二	一七、三六六
郵便爲替證書	一一三、七五八	八、二八九	一一〇、九六五	一〇、七二三	一三六、三八七	一三、八〇七
公債債券同利札	三六、七四二	八二	三二、九八七	五四	二五、八八八	七五
雜證票	六、五八〇	九、三七八	七、四三九	一一、六七五	七、八五八	一八、六三〇
總計	五六九、〇三四	一三二、九二七	六九〇、九三七	二〇二、九〇五	六九〇、八〇六	二六七、六九三

内容の總計に符合せざるは千圓未滿切捨の關係に因る

七 金融組合

金融組合は組合員の金融を緩和し其し經濟の發達を企圖するの趣旨に依り明治四十年以來各地に設

立せられたるものにして毎年二三十箇所の増設を爲し業務の發展亦見るべきものありしと雖其の準據法たる地方金融組合令は大正三年の制定に係り時勢の進運に伴ひ之が改正を必要とするに至りたるを以て大正七年六月之を改正し同年十月一日より之を施行せり改正令に於ては組合員の資格を擴張し殊に小商工業者を主とする都市金融組合の設立を認め組合業務の範圍を擴張したるを以て之を運用に依り組合團體の機能を遺憾なく發揮するを得るに至れり今組合經營の要項を略記すれば左の如し

(イ)金融組合の組合員は其の區域内に於て住所を有するものに限る殊に組合設立の趣旨に鑑み主として中流以下の階級に屬するものを加入せしめつつあり、(ロ)組合員には出資一口以上(一口金十圓以上五十圓以下)を負擔せしめ之に對し少許の利益配當を爲す又組合員の責任は其の出資額を限度とす、(ハ)組合には組合長一人、理事一人、監事二人以上及評議員七人以上を置く此等役員は組合員中より選任するを原則とするも朝鮮總督の指定したる組合に限り其の理事は朝鮮總督之を任免し内地人を以て之に充つ而して組合長及理事は共に組合の業務を執行す、(ニ)組合の資

金は出資金、預り金及借入金の外毎事業年度の剩餘金中より積立つる缺損補填準備金及特別準備金等より成るを普通とし村落の組合に在りては右の外政府の下付に係る基本金（一組合一萬圓以内）あり組合は之を運用して左に掲ぐる事業を營む

一、組合員に其の經濟の發達に必要な資金を貸付する事

二、組合員の爲に預り金を爲す事

三、組合員の爲に産業上必要なる材料の貸付若は共同購入を爲し又は組合員の委託に依り其の生産物を販賣する事但し府又は朝鮮總督の指定する市街地方組合の區域に屬する金融組合に在りては朝鮮總督の認可を要す

四、組合員の爲に其の生産物を倉庫に保管し又は之に對し倉荷證券を發行する事但し同上

五、朝鮮總督の認可を受け組合員に非ざる者の預り金を爲す事

六、朝鮮總督の認可を受け銀行の業務を代理し又は之か媒介を爲す事

七、朝鮮總督の命令ありたるときは地方金融の調節に關する業務を營む事

尙府又は朝鮮總督の指定する市街地方組合の區域に屬する金融組合は右第一號の資金の爲手形の割引を爲すことを得

地方金融組合事業概況

大正七年十月一日

道	組合 數	組合 員數	拂込濟 出資金	政府 下附金	積立金	預り金	借入金及 預入金	貸付金	共同購入立 券及委託 販賣前濟金	代理及媒 介貸付金
京畿道	二四	一一三九六	三三,九三三	二四,八七〇	七,三六三	八八,七八六	七,一九一〇	三,六五五八五	三〇八	六六,〇七九
忠清北道	一三	五,五二四	三三,五三〇	一三,四〇〇	五,一八六	五九,三九九	五,三五二〇	二,四六七三	三,七九九	四九,三九一
忠清南道	三〇	八,一九三	五二,一九三	二〇,七一〇	五三,三三〇	九六,五五八	四,八五九九	三,八九七六	一,二五三	一一,三五五
全羅北道	三二	七,九五九	三六,三九五	二二,六〇〇	八,二七九	七七,五五六	七,一三三九	三,九一六六	九,六四六	一一,四七六〇
全羅南道	二四	三三,三七七	四〇,四九九	二五,〇一〇	一一,一九三	九六,一一九	九,六九〇〇	四,五一一九	一,八九七	一八,六四七
慶尙北道	二六	一七,〇五九	六三,四一四	二七,〇三〇	九,一七六	一三,七一六	一六,六七三	五,六九七八〇	二,五一一	二〇,七四一六
慶尙南道	三三	三三,四〇四	七三,六四八	三三,七〇〇	七,三二八	五八,一一一	五,四二四〇	三,六八〇六	四,二六一	三九,八五七
黃海道	三〇	一〇,五五九	三三,一三一	二〇,五〇〇	六,四八七	四九,九五五	一〇,三二八六	三,四八八九	七〇〇	五,六八三八
平安南道	二七	六,八〇五	三八,二〇七	一七,六五〇	三,二七〇	三三,四八三	三,八七三八	三,三三二八	—	一八,三三〇
平安北道	二二	二二,八五九	五二,九八三	二〇,九六〇	五,九四八	一一,三三六	五,九〇五〇	三,三三五六	四二二	七,三二八

道	組合		拂込濟 出資金	政 府 下 附 金	積 立 金	預 り 金	借入金及 入金	貸 付 金	共同購入 等及委託 販賣前渡	代理及 介符付金
	員數	組合 數								
江 原 道	三三	一二六〇一	四七、九三三	三三、五〇〇	五七、〇六五	九四、五六三	五二、〇〇〇	三五、六八七	二二五	七五、七〇〇
咸 鏡 南 道	二七	八〇六一	三〇、六六一	一七、四七〇	四二、四一九	六一、三三〇	四〇、〇九五	二六、一〇三	—	四、五六八
咸 鏡 北 道	三三	六〇九九	一八、七四九	三、四五〇	二八、三〇八	二二、三三九	二五、八八〇	一七、六四五	三、四七七	二、四〇〇
總 計	二六〇	一三〇、六六六	五五、六三三	二六、八〇二	八二、〇九三	一〇〇、一四四	八八、四〇八	四、四六一	二五、八二六	一、四八、一九〇
大 正 六 年 度 末	二六〇	一二〇、四五二	四九、四八八	二六、七九六	六八、二〇五	七三、六九八	五四、七七三	三、七六一	—	四、三、一〇、三、四、〇、六、九
同 五 年 度 末	二五〇	九四、六六八	三〇、九八三	二五、七〇二	五八、三六四	四五、八三〇	四七、〇〇一	二八、一八二	—	四、四、四、四、〇
同 四 年 度 末	二四〇	六五、七四三	一七、七九七	二四、六七二	五二、九六八	二九、四三三	四七、六三九	二二、二七六	—	二、三、九、五、六、五
同 三 年 度 末	三三七	六〇、三三三	七、三三三	二、三三四	四九、二八九	一〇、八三二	四六、五二七	二二、四七二	—	三、四、〇、三、七、五
同 二 年 度 末	三〇八	八〇、一九三	—	三、三三九	三九、六三三	—	四四、一四六	二、一〇、七、一、六、〇	—	三、三、一、〇、七、三



春川蠶業傳習所附桑園圖

第九章 農業

第一節 土地

朝鮮半島の地は農業に適し殊に南部地方は氣候溫暖にして農作物の發育最も佳良なり冬季は稍寒氣強しと雖麥類の如き冬作物の枯死する虞なく且四月以降は氣温上るか故に生育に宜しく空氣は乾燥せるを以て收穫物の品質良好なり夏作物中水稻の如きは氣候の關係よりせば其の生育良好なるへきも用水の完備せざるを以て插秧意の如くならず或は旱害を被ることあり故に灌漑の設備に留意すれば好果を收むること必せり今最近統計に依る耕地面積を掲ぐれば左の如し

耕地面積

大正六年十二月末日

道	畝(田)		計	田(畑)	合計	内	
	一毛作	二毛作				自作	小作
京畿道	一九九三三・一町	七〇三町	一九九、〇三六	一六六、四五六	三八八、二八二町	二〇、五〇〇	二七、七七八町
忠清北道	五〇八、一六町	二〇〇、六三町	七〇八、八〇五	八九、四四七	一六〇、三七八	六九、七三三	九〇、五五五

道	番(田)		計	田(畑)	合計	内	
	一毛作	二毛作				自作	小作
忠清南道	町 一四四,五〇〇	町 一六,一三九	町 一六〇,六四〇	町 八二,六八〇	町 二四三,三二〇	町 八八,三三六	町 一五四,九八四
全羅北道	一三〇,五七〇	二二,三七五	二五,四三九	三八,九四〇	一六四,三七〇	四三,三四四	一二〇,〇二六
全羅南道	一〇九,三六七	二八,三七四	一三七,七四一	一〇五,四〇九	二四三,一五〇	二二七,五〇八	一五九,〇〇三
慶尙北道	一一三,三三三	七五,三三六	一八七,五七七	二〇一,九五八	三八九,五〇五	二八八,三三〇	二〇一,一七三
慶尙南道	一〇四,五七三	五七,三三三	一六一,六九五	一七五,七五一	二七九,二七〇	二二二,五〇二	一六六,七七八
黃海道	一一三,八二〇	一一〇,四〇八	一二六,〇二七	三五,一八四	四六七,八五五	一九六,九三九	二七〇,九一六
平安南道	六二,五〇二	—	六二,五〇二	三二,七三二	三七八,二〇〇	一八一,一六八	一九八,〇三六
平安北道	五三,〇二六	—	五三,〇二六	二八,七〇六	三〇〇,〇二七	一六〇,九六九	一七九,二六八
江原道	七二,七五〇	六九,七一	七二,七五〇	三五,〇五五	三三八,五三三	一九四,一五〇	一三四,三六三
咸鏡南道	三四,二六三	三三,一〇	三三,二四八	二二,六六〇	二五〇,八五三	一七九,四八一	七二,三六八
咸鏡北道	六七,九六五	—	六七,九六五	一六,二七六	一六九,五六〇	一四七,一八一	二二,三七八
總計	一,一八二,九七二	二二三,〇三四	一,三九四,三三六	二二四,〇六二	三,八〇四,九五〇	一,八〇〇,五九二	二,〇〇四,三六二
大正五年末	一,一三四,六八〇	二一〇,五六四	一,三四〇,三三〇	二二四,九一七	三,五八九,五〇三	一,六七四,九五四	一,九一四,五四八
同四年末	一,〇二六,五三一	一六〇,九九五	一,一七五,五〇九	一九九,三〇七	三,二七六,一〇七	一,五〇九,二六一	一,六六二,三四八
同三年末	九五〇,六三三	一三八,六八七	一〇八,九三〇	一八六,九二八	二,九一九,二五八	一,四二二,一〇八	一,五五八,〇五七

朝鮮に於ける未墾地は一般産業の開発と共に之か利用の有利なるを覺る者多く到る處新起田畝の開墾を見るに至れり今最近の調査に係る未墾地面積を掲ぐれば左の如し

		未墾地面積					
道	國有	民有	合計	道	國有	民有	合計
京畿道	三、九一〇 <small>町</small>	一、三四〇 <small>町</small>	五、二五〇 <small>町</small>	黃海道	七一七 <small>町</small>	三、三〇〇 <small>町</small>	四、〇一七 <small>町</small>
忠清北道	四二〇	四五八	八七八	平安南道	二、三三〇	二、五九七	四、九二七
忠清南道	二、七二三	二、四七七	五、二〇〇	平安北道	一、三二一	三〇六	一、六二七
全羅北道	一、一五〇	二、二四七	三、三九七	江原道	七、八七三	一、九四六	九、八一九
全羅南道	二、〇五八	一、二〇八	三、二六六	咸鏡南道	二、二四七	一、七三八	三、九八五
慶尙北道	一、七六六	一、五二〇	三、二八六	咸鏡北道	一〇、八七一	二、六七八	一三、五四九
慶尙南道	三、一四六	一一、五〇二	一四、六四八	總計	四〇、五三二	三三、三一七	七三、八四九

本表には山林原野の内山麓緩傾斜地の大部分及干潟地を包含せず

前記の外山麓緩傾斜地の大部分竝干潟は全く未墾に屬し其の面積の如き一箇所にして數百町歩に互るものあり是等未墾地の中干潟の利用に對しては築堤水門等の設備に多少の費用を要す雖田、畚に成功後は地味概れ肥沃にして收益亦尠少ならざるか故に之を利用を出願する者漸次増加し著實なる事業家の投資を爲す者多きを加ふるに至れり左に國有未墾地の貸付したるもの竝事業成功に由り付與(拂下をも含む)したるものを掲ぐ

國有未墾地貸付地目別

大正六年十二月末日

道	原野		荒蕪地		草生地		沼澤地		干潟		合計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京畿道	二二	一六六	四六	一三二	三七	三、三〇三	一六	二〇	五二	四、九二六	九七	八、五四七
忠清北道	—	—	一八	四二	一四	四一八	—	—	—	—	一六〇	四六〇
忠清南道	一五	二五八	一二	一七四	一四	八九六	四	六	一九	四、四二四	三七	五、七五八
全羅北道	一一	二五	六	二〇	二一	一、〇六六	—	—	二	八七六	二五	一、九八七
全羅南道	二〇	一〇四	二一	一六	二五	一、二二九	三	二	一一	五、七七三	四一	七、一二四
慶尙北道	八	八六	四八	一八九	一〇	六四六	五	二五	—	—	一六	九四六

事業成功に由り付與(拂下を含む)したるもの 大正六年十二月末日

慶尚南道	一七一五六	七二	五四七	一一三	一、三三九	六	四三七	三八	一、六四一	二四六	四、一二〇
黄海道	一五五九	六三	二三七	一八三	一、三三六	八	二九	一四三	五、七一七	四二二	七、三七八
平安南道	二二〇	六	七	六〇	七三〇	二	一	六〇	二、四九三	一一八	三、二三一
平安北道	一四七三	五	二七	一一二	一八一	一	一	一一三	五、八四七	二二三	六、〇七六
江原道	三三	四	七〇	三五	五五八	五	五七	三	四	一三四	七六二
咸鏡南道	五一〇	一四	一六八	二四	一、四九九	一	五七	七	七	六〇	六一二
咸鏡北道	一三二九九	一一	一三	二四	三、五四〇	六	六三五	三	八	四三	一、五三〇
總計	一〇八九〇〇	二九〇	一、五六八一	一、五六四	一、二、一七六	四七	五九二	九〇四	二八、五四六	九一三	四三、七八二
大正五年末	八六八四五	二五六	一、五一六	一一、二八五	一一、一一二	四〇	五八三	七三八	二六、三七三	四〇五	四〇、四三八
同 四年末	六〇六〇二	二〇三	一、四一四	八二四	九、六二六	三五	四二〇	五九一	二四、四六七	一、七二三	三六、五二九
同 三年末	三八五三三	一一五	一、三一六	四〇八	六、六八五	一五	二六三	三二六	一六、九三三	九二二	二五、七三〇
同 二年末	二一四五三	四六	九七三	二三〇	四、八九四	一一	二二六	一五〇	一一、六九一	四五八	一八、二三七
同 元年末											

道	畚		田		植樹		其の他		合計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京畿道	八九	八四七町	六八	四一九町	三	二〇一町	九	三三町	一六九	一、五〇〇町
忠清北道	一一	五	二五	二一	四	五	一	一	四一	三三
忠清南道	一五	三八	一八	三三	三	一三〇	二	四	三八	二〇五
全羅北道	四五	二八	二七	三〇	二	二	六	一〇	八〇	七〇
全羅南道	二一	七〇	一六	二〇	一	一	一四	六	五二	一一三
慶尙北道	一一	一一	三六	三四七	二	三	八	三	五八	三六八
慶尙南道	二一	一〇三	二八	一六四	一	一	一七	四	六七	三一
黃海道	五二	二三二	八二	一九一	一	二	一一	二	一四六	四三六
平安南道	一一	二四八	一六	六三	一	一	一	二	二八	三三五
平安北道	九一	二二八	一五	一七	一	一	一	一	一〇六	二四五
江原道	一三	一三	一一	一四	二	三	二	一	二八	三一
咸鏡南道	五	一	七	七七	一	一	一	一	一一	七八
咸鏡北道	二	一三	四	七	一	一	四	一	一〇	二一
總計	三八八	一、八三八町	三五三	一、四〇三町	一九	三四八町	七五	一六六町	八三五	三、七五五町

大正五年末	二六四	一、六〇八	二四四	一、一三九	一五	三〇六	五五	一三〇	五七八	三一八三
同 四年末	一七〇	五三一	一三五	七九七	九	二八六	四四	一三〇	三五八	一、七四四
同 三年末	九四	四四二	六三	五六一	二	四一	三〇	六四	一八九	一、一〇八
同 二年末	一九	二六〇	三一	三六九	二	四一	二〇	六〇	七二	七三〇
同 元年末	四	六九	一七	一九五	一	三	一六	二一	三八	二八八

本表中其の他とあるは果樹園、漁業用地、鹽田、共同墓地、建物敷地、蓮栽培等なり

國有未墾地利用法は未墾地の利用を獎勵するの趣旨を以て明治四十年發布せられ大正三年に至り之
か一部の改正を行へり其の概要左の如し

未墾地の貸付を受けむとする者は願書を土地所在地の道長官を経由して朝鮮總督に提出し許可を受
くへし貸付期間は十箇年にして公共の利益となるべき事業に供するもの又は農民若し漁民の宅地に
供するものは事業成功後付與せらるへし開墾牧畜植樹の事業に供するものは特別の事由ある場合を
除くの外同しく付與せらるへし其の他の利用に付ては拂下を受くるものとす貸付料は一町歩年額五
十錢とし特別の事由ある場合は之を減免す

第二節 農業者

朝鮮に於ける耕地の大部分は概して大地主の所有に係れり而して朝鮮人の多くは農を業とし他人の田畑を耕作し一生小作に甘むる者比比として然り而して大地主の多くは都會に住居し悠悠自適田邑には其の代理人を置いて小作地を管理し小作料を徴收するもの普通なり小作の方法は概ね左の如し

(一)秋收期検見を行ひ生産額の二分の一乃至三分の一を標準とし小作料を定むるもの(二)收穫に際し其の糶を折半し其の一を小作料と爲すもの(三)年の豊凶に拘らず一定の小作料を定め置くもの三種とす而して小作は多くは成文の契約あるにあらず年限の定あるにあらず唯口約を以て之を定むるのみ又小作人は地主に對して忘納を爲すこと稀なり常に朝鮮人地主に對してのみならず内地人地主に對しても從來嘗て約に違ひし事なく寧ろ安んして長く小作人たらんことを希ふものの如し故に内地人の農業經營者は意外に便利を感じつつあり

農業者 戸口

大正六年十二月末日

道	戸口				合計	人				合計
	内地人	朝鮮人	支那人	其の他の外国人		内地人	朝鮮人	支那人	其の他の外国人	
京畿道	一六八六	二四三、三八一	一八九	一	二四三、三九七	七、一〇六	一、二五八、六九五	六四五	三	一、二六六、四九九
忠清北道	一三九	一三二、一三九	七		一三二、二八五	五四三	六五、五九一	一四		六五六、一四八
忠清南道	七四一	一七八、二八〇	四五		一七九、〇六六	二、八〇〇	九一、五四八	九九		九一八、三八七
全羅北道	一六一	一九五、五六六	五〇		一九七、二四七	五、八三四	九七、四六一七	一〇七		九八〇、五四八
全羅南道	一五五〇	三二八、六六〇	一〇		三三〇、三三〇	六、一三三	一、六三五、二七三	一九		一、六四一、四〇四
慶尙北道	一〇一五	三二四、四一九	一六		三二五、四五四	四、〇九八	一、六六〇、七五〇	四五		一、六六四、八九三
慶尙南道	一九九六	二二五、八六四	一一		二二七、七八七	七、七七六	一、三九七、三〇七	二六		一、四〇五、一〇九
黄海道	五二〇	三三三、六五一	六八		三三三、四三九	一、七三四	一、一六九、七九〇	一〇五		一、一七八、八九八
平安南道	二三四	一六五、五三三	三三		一六五、八八〇	九三三	八七九、一六九	四七		八八〇、五二八
平安北道	八三	一八〇、五六二	七五	三	一八〇、七三三	二六九	九八三、一一八	二八九	八	九八三、六八四
江原道	六五	一八四、七八〇	一一		一八四、八五六	一〇三	九六七、〇六八	二五		九六七、二九六
咸鏡南道	八九	一六二、二五六	七二	一	一六二、三三七	二九三	九七四、七七五	三三三	一	九七五、二九〇
咸鏡北道	八二	六七、四五九	四三		六七、五八四	二〇四	四二八、八三三	一四六		四三〇、一八三

道	戸				合計	人									
	内地人	朝鮮人	支那人	其の他の 外国人		内地人	朝鮮人	支那人	其の他の 外国人						
總計	九八二	二六三二	四四九	七三九	五	二六四一	六九九	三七八八	一三八七	六四三	二二六八	二二	一三八八七	八〇六	
大正五年末	九七七七	二六三〇	六七六	六九四	七	二六四一	一五四	三七三〇	三六九	一一三	二一九二	二〇	一三七八	五三三	
同 四年末	九五七三	二六一八	八二八	六一五	五	二六二九	〇二	三五四五	三〇七	五九二	一七六九	一三	一三四四	八二六	
同 三年末	八六三三	二五八一	一三五	四五七	一三	二五九〇	一四七	三一四九	二七五	五三六	一三〇七	三一	一二七	三六五	
同 二年末	七六二三	二五六四	九七七	四三四	二〇	二五七五	〇四四	二五六四	二二三	三七一八	一四三六	五二	一二三	五〇八	三九
同 元年末	四三六三	二四二八	八三四	三八七	五	二四三三	六〇九	一四五〇	五二	一五九八	五五七	二二八〇	一一	一六二四	三三三

農業者種類別戸數

大正六年十二月末日

道	専業兼業合計		地内		自作		小作
	専業	兼業	地主	自作	自作兼小作		
京畿道	二二四七〇八	三〇一五四九	二四五二五七	九三八四	二四四三九	九五七四三	一六一九二
忠清北道	一一〇一〇三	二二一八三	一三三二八五	二二五七	一七六九四	五八九六一	五二〇三三
忠清南道	一四七七六六	三二、三〇〇	一七九〇六六	三八二七	一五五三〇	六七一六二	九二、五四七
全羅北道	一五九一六一	三八、〇八六	一九七二四七	二二一七	一三三〇九	六六八八三	一四、九三八

譯

全羅南道	二五〇六三五	六九五八五	三三〇三三〇	五七、三八三	一五、一七三八	一〇、五九四三
慶尙北道	二六六六八八	四八七九二	三二五四〇〇	七四九五	四三、九九八	一〇、六六四四
慶尙南道	三二六六〇七	五二二六四	二六七八七一	五五五九	三〇、九七三	一〇、六〇九〇
黃海道	一九五〇八〇	二九一六九	三三、四三三九	八四一六	四〇、四〇九	九、三三〇七
平安南道	一四二二六三	三三五一七	一六五八八〇	七、三三二	四〇、〇五二	四、六七九四
平安北道	一五七五三三	三三、三二〇	一八〇七三三	三、〇五二	四七、八六二	六、二六六三
江原道	一五九三三九	三五六六七	一八四八五六	四、六八三	五八、四三四	六、一六三三
咸鏡南道	一四二二〇六	二〇、〇〇一	一六、二三二七	二、七二四	八三、九一三	一、五八一六
咸鏡北道	五九、四四四	八、一四〇	六、七五八四	二、〇四五	四二、二七三	七、七三三
總計	二、三三三、七三三	四、一〇、七三三	二、六四、一九九四	七、三、一九八	五、一七、九九六	一、〇六、一四三八

第三節 農産物

(イ)米 朝鮮農産物中最重要品にして輸移出する高亦甚多し其の産出は慶尙南北道、全羅南北道最も多く忠清南北道、京畿道、黄海道等之に次ぎ咸鏡南北道は最も振はず朝鮮内に於て消費せらるる高少なからざるも尙大正六年に於ける輸移出高は百七十五萬三十三石にして其の價額二千七百四十一萬六千五百八圓に及へり

(口)大豆 各道到る所其の栽培を見ざるなく大正六年に於ける輸移出高百八萬五千六百九十石其の價額九百三十七萬九百圓にして主として内地に仕向けられ米と共に輸移出品中の重要なものなり

(○)麥 大麥、小麥を主とし稈麥は甚た少し大麥には春蒔、秋蒔ありて京城以北は春蒔多く以南は秋蒔多し小麥は秋蒔に屬す

主要農作物作付段別及收穫高

大正六年

道	作付		收穫		一段歩收穫高	
	水稲	陸稻	水稲	陸稻	水稲	陸稻
京畿道	一八〇〇〇〇 <small>町</small>	二二、九〇八 <small>町</small>	五八、一五三八 <small>町</small>	一、五六六、一五二 <small>石</small>	一、四五九、九八 <small>石</small>	三、七六五、〇〇 <small>石</small>
忠清北道	五一、四八五、〇	一、二二六	一、五六〇、四六	六〇〇、一六八	一、四六四	一、四九二、六四
忠清南道	二四、二八六、四四	九、七七九	四、一八三、六九	一、四九五、二四三	九、〇六一	二、二二七、〇〇
全羅北道	二二、三八三、八	三〇、六一	一、八二四、三三	一、四四六、九四三	二、九二二	一、〇四七
全羅南道	二、三六七、六三八	二、九〇六七	一、七四九、三五	一、五六七、五八六	一、三、九九四	九、四九、九五
慶尙北道	二二〇、六二〇、七	四、四九七	四、五六三、三〇	一、四九〇、六四二	三、八三七	三、三八、四八三

道	作付		段別		收穫		高		一段步收穫	
	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥	大麥	小麥
慶尙南道	一八、四三七二	二七、九九九	三九、一八三、四	一六、五〇、一三八	二八、二五〇	一九、三〇八、九	一三、九五三	一〇、五三	一〇、七四八	〇、七四八
黃海道	八六、四三三、七	四四、九四	四九、一四五、七	五八、四、〇五	二、一〇四	二九、八五九、五	〇、六七六	〇、六〇八	〇、六〇八	〇、六〇八
平安南道	五〇、六四三、四	四、四三八三	三七、四三五、一	四、五〇八、〇七	三、一九九九	三、七三、八五	〇、八九〇	〇、七四四	〇、六〇七	〇、六〇七
平安北道	五、二四一、四三	七、六四一	四、五、七五九、六	五、〇一、三〇〇	四、四六一	二、六八、六二八	〇、九五六	〇、五八四	〇、五八四	〇、五八四
江原道	五、二四八、二四	三、三七	三九、七九〇、七	四、二九、九九一	三、二〇	三、三、〇五三	〇、八一九	〇、六三三	〇、五八三	〇、五八三
咸鏡南道	三、九六〇、八	八、四三	四、五、二〇四、五	二、九八、一五八	四、八九	三、三〇、四三	〇、九〇五	〇、五八〇	〇、四八八	〇、四八八
咸鏡北道	四、七三二、六	—	三、七、〇八、三	三、一、三七九	—	一、四〇、三三八	〇、六六四	—	〇、三七二	〇、三七二
總計	一、二五三、六六一	一、五、四九、二五	四、九一、一九、四	一、一、三、三、六三〇	一、二、四、三七九	二、九、三、八、四三五	一、〇、五〇	〇、七、三八	〇、七、三八	〇、七、三八
大正五年	一、二四三、八九五、八	一、四、四四、三	四、六八、九九〇、一	一、二、四、三〇、二八四	一、〇〇、七三五	二、九、五、七、三三六	一、〇、八七	〇、六、九七	〇、六、三二	〇、六、三二
同四年	一、二一三、六二六、九	一、四、四一、六一	四、六〇、七二一、〇	一、二、二、七、九、五三三	九、四、四三三	二、七、七八、五六一	一、〇、一三	〇、六、九五	〇、六、〇三	〇、六、〇三
同三年	一、〇六五、七三五	一、三、五二、一三	四、五、四、五五、〇	一、二、〇、五、七、四三四	一〇、一、六、五〇	二、四、六、四、六三三	一、一、三三	〇、七、五九	〇、五、八〇	〇、五、八〇
京畿道	六、六八三、三七	三、三、八三三、〇	一、二、七、九、三	四、五、六、三、七四	一、四、一、六〇三	七、三、九、七	〇、六、八三	〇、二、二〇	〇、五、七八	〇、五、七八
忠清北道	三、五、三五三、〇	九、八三六、八	三、五、五、五	三、六〇、七八四	六、六、五六七	二、一、九一	一、〇、一一	〇、六、七七	〇、六、一六	〇、六、一六
忠清南道	四、九〇三、六〇	一、三、二、二、五二	一、八、九、四、八	四、〇、一〇、九六	六、八、七、五〇	三、一、三、三〇	〇、八一八	〇、五、二〇	〇、六、四〇	〇、六、四〇

第九章 農業

道	作付段別			收穫			一段步收穫高		
	大麥	小麥	稞麥	大麥	小麥	稞麥	大麥	小麥	稞麥
全羅北道	二四〇五二七	七九六八二	四五一五四	二六七三七	五五五〇五	三七二五三	一一二一	〇六九七	〇八二三
全羅南道	七四一六六六	一四七四一〇	一〇〇一四七	九四〇八三三	九九七九六	九一六三四	一一六八	〇六七七	〇九二五
慶尙北道	九五、四〇、四五	二五、一四八二	九、二四七一	一〇、三〇五〇五	一八三八二二	六五、二九五	一〇八〇	〇七三一	〇七〇六
慶尙南道	七九、九七〇、九	一三、三三九〇	五、〇四一七	九八〇、四四三	一〇八、七〇一	四七、六二六	一、三二六	〇八三三	〇九四五
黃海道	一〇、九五七、八	七、四四六三、九	二七八〇	七、四四三三	三一九九一〇	一〇、九四	〇、六五二	〇、四三〇	〇、三九四
平安南道	一五、三三、一	三三、二六二八	一、三九七七	一、三、一五三	一〇六、六六三	一三〇三八	〇、七四三	〇、四七九	〇、五二四
平安北道	八、一五〇、七	一、四三九一	—	五、六、七四九	四、七三三	—	〇、六九六	〇、三三〇	—
江原道	二、一五四七、〇	一八、三六九〇	四、五三、四	一、六七、四三、四	九、四一、七五	二、七五九	〇、七七七	〇、五二二	〇、六〇九
咸鏡南道	二、七三七三、五	四、七五五、五	一、三九	一、九、九二六	二、六〇〇三	六八	〇、四三八	〇、五四七	〇、四八九
咸鏡北道	三、一四〇二、五	四、五四五	一、一	一、一〇、九九三	一、四三八	六	〇、三三三	〇、三一四	〇、五四五
總計	五三、九四八、五	三三八、六九六、〇	三五、三九二、六	五、〇七六、九二六	一二、七七六、五五	二、七九三、九	〇、九四一	〇、五九九	〇、七八九
大正五年	五〇三、二五七、五	二二、三三〇、七	三三、二一九〇	四、八〇、一三〇	一、一四七、六三五	二、一〇、二五二	〇、九五二	〇、五八八	〇、六三三
同四年	四八、二四一、〇	二〇、三七四、五	三三、二〇六、三	五、一八、一〇〇	一、三〇〇、五七五	二、五二、四〇四	一、〇七四	〇、五八七	〇、七八一
同三年	四五一、五九九、九	一九三、三八九、三	三一、〇六七、九	四、六三、三九五	一、一四二、五〇六	二、一九、六四三	一、〇二六	〇、五六三	〇、七〇七

道

作付段別

大豆 收穫

粟 高

一段步收穫高

道	大豆	小豆	粟	大豆	小豆	粟	大豆	小豆	粟
京畿道	五八、一五八 ^町	一一、八四八 ^町	一九六八二〇 ^町	三七六五九〇 ^石	五九、一四五 ^石	一四九五九六 ^石	〇六四八 ^石	〇五二九 ^石	〇七六〇 ^石
忠清北道	一五、六〇四六	四、四五九二	七八九八六	一四九二六四	三〇、三八	六二、五七八	〇九五七	〇六八〇	〇七九二
忠清南道	四一、八三六九	七、三三一	一四、〇〇一	二二、七〇四	三六、六二	一一、五六七	〇五〇八	〇四九三	〇八二六
全羅北道	一八、二四三三	三、四〇三三	一、一〇〇六	九四九六五	一五、七九	八、一四七	〇五三二	〇四六一	〇七四〇
全羅南道	一七、四九三五	三、四〇八六	三、三五一	九五九三九	一四、一〇八	二〇、二六八	〇五四八	〇四一四	〇九〇〇
慶尙北道	四、五六三三〇	三、〇八七八	三、四三八八六	三三八四八三	一六、一三九	二九〇、五九四	〇七四二	〇五二六	〇八四五
慶尙南道	三九、一八三四	三、八三三六	一、九九八二	二九三、〇八九	二〇、五五一	二〇〇、八一	〇七四八	〇五三六	一、〇〇五
黃海道	四九、一四七七	四、二〇八一	一、六七三九八	二九八五九五	一九〇、九八一	九六五三三五	〇六〇八	〇四五四	〇八二七
平安南道	三七、四三五・一	三、九五五二・三	九、五三二・三七	二二、七三八五	一八六、八五一	六六四、六八三	〇六〇七	〇四七二	〇六九八
平安北道	四、五七五九・六	二、八八一五・〇	八、八三九・一	二、五八六二八	一〇九、四九六	六〇七、二八六	〇五五五	〇三八〇	〇六八八
江原道	三九、七九〇・七	二、〇五四七・〇	五、〇七〇・九	三、三三〇・五三	七、一六六二	三、二八五九	〇五九三	〇三五三	〇六二五
咸鏡南道	四、五二〇四・五	一、六九八四・七	五、六三三・四三	二、三〇四・三	六、〇一一〇	四、一九八四三	〇四八八	〇三五四	〇七四五
咸鏡北道	三七、七〇八・三	二、三〇三・一	四、七六六・五八	一、四〇三・八	六、八六六	二、八四一・一六	〇三七三	〇二九八	〇五九九
總計	四九、一、一九一・四	一、八六九二・七三	五、四三三、三三・八	二、九三八四・三五	八、八九二〇八	三、九九九三・五八	〇、五九八	〇、四三八	〇、七三六
大正五年	四六、八九九〇・一	一、八二、三三七	五、〇、一〇一・四	二、九七七、三三六	八、〇三三・三	三、七六三、八六一	〇、六三一	〇、四四一	〇、七五〇

道	作付		別	收		高	一段步收		高
	大豆	小豆		大豆	小豆		大豆	小豆	
大正四年	四六〇、七二〇 <small>町</small>	一、二七、六九四 <small>町</small>	四九二、〇八八 <small>町</small>	二七、八五六 <small>石</small>	七三三、九一三 <small>石</small>	三、四八、一〇七 <small>石</small>	〇、六〇三 <small>石</small>	〇、四二三 <small>石</small>	〇、七〇七 <small>石</small>
同三年	四三三、四三〇	一、七六、四六八	四七三、〇八一	二、四六、四六三	七、六四、五五七	三、三二、二四六	〇、九九〇	〇、四二八	〇、六七九

輸移入穀物五年對照

品名	大正七年(九月迄)		同六年	同五年	同四年	同三年
	米	粟				
米	五九、〇五五 <small>石</small>	一、一六七、一二二 <small>石</small>	六五、三八五	一八、二五四	三一、〇九三	二六六、三六六
粟	一八八、二〇九 <small>石</small>	二、七五四、四四九 <small>石</small>	一二三、九〇三	一〇、〇〇九	一〇二、六二九	一二六、五〇〇
落花	三、八七 <small>百斤</small>	四、四〇八 <small>百斤</small>	一、三二四、一四一	九三、一八四	七六六、〇五四	一、一四七、六二〇
花生	四、四〇八 <small>百斤</small>	二、七五四、四四九 <small>百斤</small>	二四、四七八	二七、一九〇	二五、七七八	一三、〇三六

第九章 農業

三四三

品名	大正七年(迄)九月	同 六年	同 五年	同 四年	同 三年
米	一、五七五、六六八石 三七、二四二、一四二石	一、七五〇、〇三三 二七、四一六、五〇八石	一、七〇六、九〇〇 一九、三五六、七七八石	二、五五九、二六二 二四、五一六、六二二石	一、三六七、四四九 一七、〇九八、五八三石
大麥	一八、一四四石 一八一、九七八石	三七、二九八 一八四、七二六石	二、七四三 一一、三三二石	四、三三二 一五、〇九一石	五九六 二、一七六石
小麥	七五二、八二〇石 八一、六六五石	一、四〇八、二四六 一六二、七〇四石	四一七、三四四 六八、四七二石	一三〇、八四七 二二、三二二石	二〇二、七九二 三六、八五七石

輸移出穀物五年對照

品名	大正七年(迄)九月	同 六年	同 五年	同 四年	同 三年
小豆	一五、〇五八石 一八三、七六七石	九、二四三 一〇一、九三八石	二六、四〇二 一九四、八一五石	四、九七〇 五一、四一六石	六、七〇〇 七五、〇〇八石
其他の豆	四、〇三五石 五六、九四五石	一四二、三六五 二、五二二、七〇三石	四七、九三六 五九八、四八七石	一〇九、一七四 一、二六八、九二九石	六七、四四一 四、〇二六、四六三石
其他の穀物及種子	三三一、〇二九 四、四九七、七二〇石	二、五二二、七〇三	五九八、四八七	一、二六八、九二九	四、〇二六、四六三
合計	四、四九七、七二〇	二、五二二、七〇三	五九八、四八七	一、二六八、九二九	四、〇二六、四六三

品名	大正七年(九月迄)	同 六年	同 五年	同 四年	同 三年
大豆	六八三、二七一石	一、〇八五、六九〇	九三三、四五三	一、〇一〇、三七五	五三六、七三七
小豆	六、三一九、九二〇石	九、三七〇、九〇〇	六、〇一一、六九六	五、二〇〇、四五六	三、八一九、二八〇
菜豆	二、一三七石	二二、九四一	一六、五五七	一六、八一六	三三、二〇二
其他の豆	二〇、四七九石	一八三、三四八	一二九、一八四	一一四、六四〇	三三一、七四三
黍	八、二八九石	二五、三三四	一〇、五五七	一、七九三	一、六二二
其他の穀物	二二四、〇〇二石	六四八、五九四	二一五、九五七	一二、九六三	一〇、一一七
玉蜀黍	九、七二五石	四、九一〇	一、三一八	一、五八三	一、五一五
其他の穀物	一五〇、六五六石	二八、六三九	七、一五四	七、〇八五	七、四二七
合計	四、七五〇石	六二、六一三	一一、五八〇	二四、〇八一	二八、八四一
其他の穀物	一九九、七九二石	三、五二二、八四六	七三、三六九	一一六、六九五	一三九、三九五
合計	二八、六五五	二、八〇七	六、八六九	一一、〇三一	四、四六六
其他の穀物	四、五、一二九、一九四	三九、五九六、六一四	二六、二二九、六七三	三〇、一二五、四三〇	二一、六一五、九七九

(三)棉花 棉は江原道の東海岸及咸鏡南北道を除くの外各地殆ど之を栽培せざるなきも就中全羅南北道及慶尙南北道は其の主産地にして忠清南北兩道之に亞く棉質纖維長くして彈力に富み各種の用途に適せり從來朝鮮人は衣料に供すへき木棉を製するは自ら棉種を蒔き自ら紡績し自ら製織して需用に供する慣習なりしも内地より精練なる紡績絲の移入するや棉花の紡績漸く減少せしも一方に於て朝鮮産棉花を内地に移出するの途開け販路擴張し漸次好況を示すに至れり然れども在來種は其の品質優良ならざるを以て明治三十九年以來政府保護の下に收量繰綿歩合共に多く纖維の細長にして紡績原料に好適する米國種陸地棉の栽培を奨勵せしに成績良好にして年年其の栽培反別を増加するに至れり明治四十三年に於ては陸地棉作付反別千百二十三町歩其の栽培者僅に三百餘名なりしに大正六年に至り六萬三千八百五町歩其の栽培者實に四十六萬六千六百七十五人の多きに及び更に大正七年に至りては作付反別八萬九千二百八十一町歩其の栽培者五十四萬九千九百餘人の多きに達せり勸業模範場木浦棉作支場に於ける既往九箇年間の陸地棉及在來棉の比較試験

成績に依るときは朝鮮在來棉一反歩收穫高は百七十二斤にして陸地棉は二百六十六斤なり此の數字は共に陸地棉在來棉の優良なるものに付きての比較なるを以て優に兩棉優劣の如何を窺ふに足るへし最近の作付反別收穫高及輸移出額は左表の如し

棉作付段別收穫高及輸移出額

年	作付段別		收穫		輸移出額
	在來棉	陸地棉	在來棉	陸地棉	
大正二年	町 四三九二・〇	町 一三九六・七三	斤 五七八七・九三	斤 三三〇九・九三	町 九二四・九四五
同三年	町 四〇四七・七三	町 二一五〇〇・九	斤 六一九五八・二	斤 一八六五三・〇七八	町 一〇一七・九五三
同四年	町 三四九七・七五	町 三〇三三・九	斤 六五三〇・四	斤 一六三三八・一五〇	町 一、一五七・六六四
同五年	町 二九二六・〇七	町 四七九七・七五	斤 七、七二〇・八七	斤 一四〇〇四・九一	町 一、七四九・七四三
同六年	町 二八五九・一八	町 六三、八〇五・五	斤 九、一三九・七三	斤 一五、一七〇、四三八	町 四、四四六・七八六

(ホ)煙草 朝鮮に於ける特殊農産物中重要なるものの一にして之が栽培は古來全道到る處に行はれたり就中京畿道龍仁、廣州、長湍、平安南道成川、陽德、孟山、江原道寧越、金化、旌善、平昌、

忠清北道清州、忠州、槐山、報恩、全羅北道錦山、全州、任實、鎭安、茂朱、慶尙北道大邱、達城、永川、慶山、清道、慶尙南道河東、密陽、居昌、黃海道谷山、新溪の各府郡は何れも主産地に屬し殊に龍仁、廣州、成川、寧越の生産品は古來銘葉を以て稱せらる煙草に關する本府の施設は常時一般的調査を行ふと共に専ら煙草産業の發展に力めたり即ち一面に於ては各主産地に技術官吏を派遣し朝鮮在來種に對しては品質の上進と收量の増加とを目的とし内地種に對しては品質の改善を主眼として耕作指導を行はしめ一面に於ては大邱、大田及忠州に度支部專賣課出張所を設け各種煙草の試作並乾燥、調理等の試験を行ひ決定事項は直に民間耕作に應用せしむることとせり尙此等出張所の事業は單に叙上の範圍に止まらず朝鮮内各地の地質氣象等に稽へ新規に適種の耕作を創始することも深く留意せる處にして且下忠州附近に耕作せる黃色煙草の如きは其の一例に屬せり上記の如く煙草産業に對する助長策は漸次一般耕作者の熱心を喚起し年と共に其の面目を新ならしむるの趨勢に在りしか最近歐洲諸國の戰亂は同地方に於ける煙草産地を荒廢せしめ

之が影響は著しく朝鮮産葉煙草の海外流出を促すに至り爲に耕作業を刺撃する一層大なるを覺へり殊に大正六年下半年期以降の煙草界は輸出業者の買熾り盛に行はれ各種煙草を通して現品價格の暴騰を來せるは勿論將來數年に亙る生産供給の契約を見る等空前の活況を呈するに至りたり現下朝鮮に於て耕作する煙草の種類は朝鮮在來種、内地種、米國種黄色煙草、同白草煙草及土耳其種の五種類にして黄色煙草は忠清北道忠州附近數郡に亙りて之が耕作行はれ大正元年創始以來年次旺盛となり大正七年に在りては耕作反別七百餘町步産額約二十八萬貫を算すべき見込なり内地種の主産地は大邱府を中心とせる慶尙北道及慶尙南道の一部にして耕作反別一千町步産額三十五萬貫に上るべき見込ます土耳其種煙草の生産に付ては從來調査研究に努めつつありしか時局の影響は遂に朝鮮に於て本種の耕作を開始するの機運に際會し本年度に於て忠清南道大田及論山郡、慶尙北道慶州郡に十二町步の耕作を開始するに至れり

以上數種煙草耕作地以外の地域は全部朝鮮在來種の産地にして耕地産額共に煙草全體の九割を占

めたり左に大正六年度に於ける各種煙草を總括したる各道別耕作人員段別收穫高を掲記す因に本府は大正七年八月以降改正煙草稅令を施行し煙草主産地所在の道府郡に煙草技手を配置したるか故に將來煙草耕作指導は地域を擴張し此等技手をして擔當せしむることに改め本府は廣く指導の監督及幫助を行ふこととしたり

煙草耕作人員、段別及收穫高

大正六年十二月

道	耕作人員	耕作段別	收穫高	一段步當收穫高
京畿道	四七、六八一	一、六九三九	四九九五〇四	二九四八八
忠清北道	二八、一五五	一、五六九六	四〇、一八三	二六、七七〇
忠清南道	二七、二一九	四、五三三	二、六、一一	二七、八二〇
全羅北道	二二、三三六	八、七七七	一、四、七九五	一、六、四九七
全羅南道	二六、三三三	四、八二二	一、四、三五四	二九、三三四
慶尙北道	七、四一八	一、四、五三五	三、一、九七二	二二、四六三
慶尙南道	六、三三三	一、四、三三九	三、七、一〇五	二六、〇六二
黃海道	六、九六三	九、六九一	三、三、二六〇	二、三、〇三七
道				
平安南道	四一、五六〇	九、〇四三	二、四、三、三六	二、七、九〇八
平安北道	七三、八九九	一、三、二八六	三、一、九、九二	二、三、四八二
江原道	六七、三六五	二、四、五一一	六、一、六、七〇三	二、五、一五八
咸鏡南道	五三、八九八	九、七四〇	二、七、九、七四二	二、八、七二〇
咸鏡北道	二二、五八一	三、〇六〇	六、九、八、八八	二、三、八三五
總計	六、一六、三三八	一、四、八、八七四	三、七、五、九、九三四	二、五、二、五五
大正五年	五九、一、八五九	一、三、二、三三	三、四、八、九、三九〇	二、六、六、五七
同四年	五五、五、三三七	一、三、五、七、〇二	三、六、七、五、一一八	二、七、〇、七〇
同三年	五一、九、四七七	一、〇、九、九、〇九	二、六、三、二、九九九	二、三、九、三八

(ハ)人蔘 人蔘は朝鮮到る所多少産せざるなしと雖古來高麗蔘と稱し世に珍重せらるるは京畿道開城附近に産する物に限れり故に此の地方は古來人蔘の栽培盛に行はれ従て耕作法も亦大に進歩せり往時其の栽培の最も盛なりしは明治三十五年の頃にして官私蔘を併せ十萬斤以上の收穫を得てこそあり然るに十數年前より人蔘に赤病と稱する病毒蔓延し漸く蔘業衰頽の徴を顯はせしより明治四十一年蔘政事務を度支部所管に移し尋て紅蔘專賣法を施行して以來蔘政の改善を圖ると與に極力蔘病の防遏に努め一面諸種の獎勵法、資金融通の道を講ずる等萎靡せる蔘業の興復を圖りし結果努力遂に其の功を奏し近來俄に斯業の勃興を見るに至れり然れども人蔘は一般作物と異り播種より六七年の星霜を経るに非されば收穫するを得ず今大正七年度に於ける人蔘生産高及價額の豫測は收穫間數十二萬間收納高六萬九千、紅蔘製造高一萬九千七百斤、此の價額百二萬二千七百圓を算するを得たり

人 蔘 收 穫

年	掘採間數	收納水蔘	紅蔘製造高	年	掘採間數	收納水蔘	紅蔘製造高
明治四十四年	一四、三四五 ^間	七、七一九 ^斤	二、二九九 ^斤	大正三年	一九二、三九〇 ^間	六四、四七七 ^斤	一七、七〇〇 ^斤
大正元年	五六、四六四	一八、八〇五	五、八八六	同四年	二四五、九七九	九九、九五三	三五、七二〇
同二年	一二〇、九四一	五三、一〇〇	一七、二二三	同五年	三四六、八二三	一六三、三七三	六一、二三六
				同六年	三一、六二七	一三一、八九二	五〇、一八〇

本表間と稱するは蔘圃地積の單位にして長約六尺、幅約三尺通路を併せて約一坪の地積なり

以上人蔘特別耕作區域即ち政府の專賣に係る紅蔘原料產地以外に於ても相當の人蔘産額あり大正六年に於ける蔘圃間數十九萬五千間收穫水蔘二萬五千六百斤にして同年中に取引せられたる白蔘六萬二千八百三十斤此價格三十萬八千九百五十圓に及へり

右は何れも政府の免許を受け人蔘税を納付せるものにして十道四千三十五箇所に涉り耕作人員千五百七十人を算す

人蔘は其の製法に依り紅蔘、白蔘の二種に區別す紅蔘は水蔘(生蔘)を蒸して日光及火熱に依り乾

燥せしめて製し白蔘は水蔘を單に日光に乾かして製す前者は價貴く後者は廉にして兩者共に形體の大なるを尙ふ而して紅蔘は専ら支那に輸出するものにして同國に於ては古來上下共に人蔘を愛用し萬能の靈藥として用ゐるの外贈答用として富豪大官の間に尊重せらる内地、米國等亦人蔘を産すれども朝鮮蔘は品質形體共に他に比類なしと激賞せらる試みに支那に於て消費する各國産人蔘の數量價格の概要を擧ぐれば左の如し

米國	花旗蔘	數量	平均一斤 小賣價格	產地	通稱	數量	平均一斤 小賣價格
日本	東洋蔘	八〇,〇〇〇斤 一四〇,〇〇〇	二〇円 五	朝鮮	高麗蔘	三〇,〇〇〇斤 一六〇,〇〇〇	一五〇円 八

(ト)家畜

(一)牛 農耕運搬用を兼ね又肉用として需用多く到る處農家之を飼養す體格偉大體質強健にして而かも性質溫順なるを以て十歳の兒童も能く之を牧御し得へし其の生産饒多に價額廉なるを以

て内地露領亞細亞及支那に移輸出せらるるもの多し大正六年に於ける生牛及牛皮の輸移出額は三百三十九萬餘圓に上れり成牛一頭の價近時著しく昂騰せるも七十圓内外なり

(二)馬 體軀矮小なれども比較的力強く險路峻阪を行くこと巧にして専ら乘駄兩用に供し耕耘には使用せず性質亦順良にして御し易し普通一頭の價約四五十圓なり

(三)驢騾 乘駄兩用に供せらるるも其の數少なく驢は一頭の價約二三十圓騾は概ね馬に同じ

(四)豚 普く農家に飼養せられ其の數牛に次ぐ在來種は體軀矮小晩熟にして品質優良ならず多くは冬時の食用に供す鮮人は剥皮することなく熱湯を注ぎ毛を去りて食す一頭の價約四、五圓なり近年改良種の飼養を見るに至れり

(五)山羊 黑色小軀にして其の數甚少し皮は防寒に用ぬ肉は食用に供す乳汁を搾取するもの稀なり一頭の價三圓乃至四圓なり

(六)家禽 雞多數を占め鶯及鶯は其の數甚少し、雞は農家にして之を飼養せざるなく在來種は内地の地雞に酷似す雞稍小形にして一層野生的なり卵小にして豐産ならず一羽四、五十錢にし

て卵十箇十二、三錢より二十錢なり近年改良雞の飼育漸次多きを加へつつあり

(七)犬 數の多きこと遙に内地に超え其の體軀日本在來種に酷似すれども氣勢なし朝鮮人は主として食用の爲飼養し夏期に於て膳に上す一頭の價一圓五十錢内外なり

家畜及家禽

大正六年十二月末日

道	牛		計	馬	驢	騾	豚	山羊	緬羊	雞
	牝	牝								
京畿道	四九一六四	五八〇五四	一〇七二一八	一三九二	三九四	七〇	六八三三三	二三〇	九	三九二四九三
忠清北道	一五六三九	三九二〇七	五四八四六	四九九	一八三	三三	一四九六三	一三四六	—	一六五五四七
忠清南道	八八五六	三五六四四	四四五〇〇	六一三	一三九	七〇	一七二六七	七五六	—	一七四四八一
全羅北道	一五七〇八	二六〇八一	四一七八九	六六〇	九二	四一	四三二七一	八三八	—	二四四〇〇六
全羅南道	三六六三〇	六七五〇六	一〇四一三六	一五六七	一〇四	一三	九二五九三	一四九八	—	四七三二四六
慶尙北道	五九四二三	九六七一七	一五六一四〇	四四三六	三二四	八四	一七七七五	四八五七	—	四八八〇九
慶尙南道	二七三三三	一〇八七四〇	一三六〇七三	二九六八	一七一	三九	四〇七八三	五二四六	—	二九九八八五
黃海道	三五〇九五	七〇八〇四	一〇五八九九	四二〇八	一七四〇	四四	八六七七六	三元	六	四八五二六六
平安南道	二四三九一	五九五五六	八〇、九五七	三六三四	一三〇〇	五五八	六三二五六	二〇	一	三五八二三六

平安北道	四〇、三四一	一三、七六三	一五、四、二四	四、八〇八	三、三〇一	三、四〇〇	二七、三三八	三九	一八	六〇六、五四三
江原道	四一、〇一〇	一〇、一四九	一、四、一五九	八〇一	一〇、一四	九六	五五、三六	二九七	三五三	三九、四一〇
咸鏡南道	五五、五五一	一〇、五、〇二七	一六、〇五七八	八、八四三	四、五	四五	二四、五二五	一〇	一一	三四九、七九二
咸鏡北道	三七、〇五六	五、六、一三五	九三、一九一	六、八四八	一、八四八	二七	九〇、四一四	四〇	七四	一六七、六二六
總計	四四六、一九六	九三、八、四一三	一三、八、四六九	五五、三、八〇	一一、二、四	一、八五八	八三、二、八〇	一五、一、二六	五七二	四、五、六、六、五九
大正五年	四一、二、四〇	九四、八、六八	一三、五、三、〇八	五三、〇、四四	一〇、六、一〇	一、四、三、四	七八、〇、〇七七	一三、九、七五	二八九	四、四、〇、〇、三五二
同 四年	四〇、七、九一一	九四、五、六二〇	一三、五、三、五三	五四、六、三九	一三、三、一八	一、〇、一、六	七六、六、五四〇	一四、三、三、四	三三〇	四、二、七、八、二、五九
同 三年	三九、八、九三七	九三、九、四六四	一三、三、八、四〇一	五二、五、四、五	一三、七、四、七	一、〇、六、九	七五、七、八、〇三	一一、六、一〇	一四一	四、一、〇、一、三、三四

(チ)繭 家蠶繭は特殊農産物中最重要なるものにして今や全道到る處其の生産を見ざるはなく就中

慶北、平南、平北、京畿及江原の五道を其の主産地とす從來の蠶種は雜駁劣等なる三眠蠶にして桑樹は畦畔宅地等に散植し培養を加へざりしか故に葉質粗悪なりしも明治三十九年以來特に品種の改良に努めたる結果市平、替桑の如き優良桑樹の栽培に努めたると同時に又昔、新屋、白龍の如き優良蠶種の飼育は年々共に普及し加ふるに近時繭價は未曾有の高價を唱へ爲に蠶業の機運大

に熟し産繭の品質は育蠶技術の進歩と相俟て顯著なる向上を見るに至れり而して更に大正六年十月新獎勵品種として純粹種朝歐一號、朝歐二號、交雜種朝黃一號、朝黃二號、朝白一號、朝白二號の四種合計六種を追加し將來益之が品種の改善を圖らむとす今最近の家蠶統計を表示すれば左の如し

道	桑畑		蠶種		繭		額		製絲		生絲	
	段別	戸數	立枚數	春蠶	夏蠶	秋蠶	計	戸數	産額	戸數	産額	
京畿道	一、八五四・一	二五、三九六	四三、五三五	八、四三五	六、九四	一、七五〇	一〇、八七九	四〇、三四	四、七二三			
忠清北道	九、八一〇	一一、二一九	一、五六七五	二、六三三	—	四、二二	三、〇三五	二、八四〇	五、九四			
忠清南道	二、四六二・四	一、六四二七	二、一八八四	三、四六七	一〇、六	六、三六	四、二〇九	六、六二二	八、八三			
全羅北道	九、三二四	一〇、七七三	一、五七七八	一、八〇三	—	七、五五	二、五七七	五、六二二	六、四八			
全羅南道	一、一五九・五	一、五七五九	一、九八五九	三、六七二	八	九、七五	四、六四五	八、六五〇	一、八〇四			
慶尙北道	二、三〇七・三	五、三、五九八	七、六、三三三	一、五、六八七	四、九	二、七、三九	一、八、四、五五	一、七、七〇六	五、八、四四			
慶尙南道	一、二、八、三・一	一、六、六、三二	二、五、五、五五	二、九、五八	二、三〇	一、四、七、三	四、五、五、一	八、八、八七	二、二、三、三			

家蠶

大正六年

黄 海 道	一、二二五三	一三、八八三	二七、七三九	五、一四一	三六一	四〇九	五、九一一	五、一三八	八七七
平 安 南 道	一、六八二八	二八、一五四	六六、〇五七	一、一五六六	一、六七六	二、〇九三	一五、二五五	六、四七〇	二、一八一
平 安 北 道	二、二〇〇一	二六、三六四	五五、六五〇	九四九八	二、六五	二、四一三	二、二七五	一、二七八	二、二三元
江 原 道	一、三六九九	三三、五九三	五〇、九一五	八、八四三	五八一	六九六	一、〇二九	六、一六三	二、四四九
咸 鏡 南 道	一、一四四四	一七、四六四	二二、一六	四、一六三	五四七	一、四四	四、八五四	七、三	八五
咸 鏡 北 道	三、〇〇一	二、一一〇	二、七五五	三六八	二、二	—	六四〇	二、二三五	三、五七
總 計	一八、七三七四	二七、一六〇	四四、四七三〇	七八〇三	四、六七九	一四、四九四	九七、一八五	八六、八四四	二五、〇九七
大 正 五 年	一五、四七八五	二二、七、三三九	三、四七八二〇	六、一、四六八	二、八四〇	七、六三三	七、一九二二	一〇、三、四六三	二、三、七〇七
同 四 年	二、八三三三	一〇、九六三	二、八三三六七	五、二、六〇	三、一七五	三、七二二	五、九一五六	一〇、二、四〇四	二、三、四九八
同 三 年	一〇、四、四六二	一七、七、三三〇	二、三八〇四一	三、九、五九一	三、四八〇	三、三三三	四、六、一九四	一〇、〇、五三三	二、一、四、五七
同 二 年	七、四、六一五	一六、三、三三三	一、〇、三、七一一	三、三、一〇七	一、九八三	二、六八一	三、六、八七二	一〇、八、六六七	二、〇、八、九三

本表蠶種は二十八蛾付を一枚とし養蠶戸數は春蠶飼育戸數を掲記せり

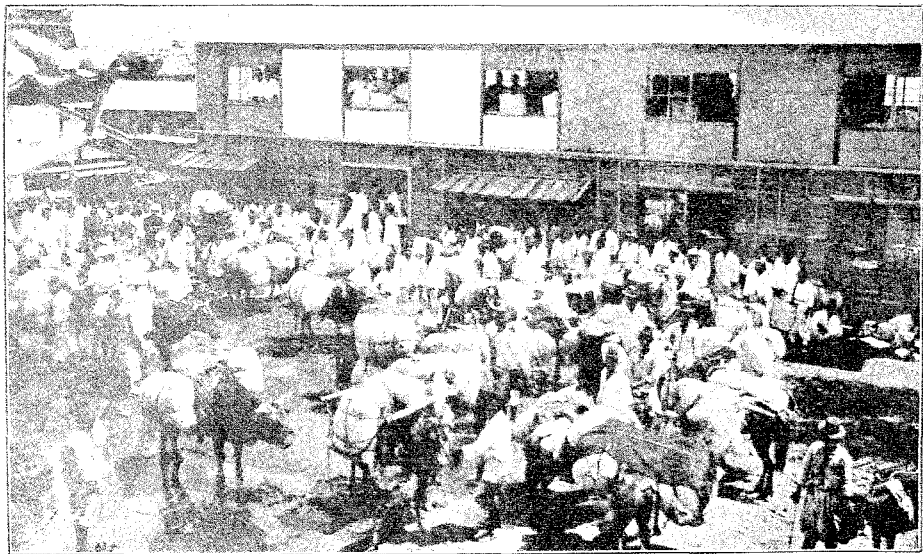
柞蠶繭は平安北道の特産物にして當業者の育蠶技術未だ幼稚なるのみならず山野の樹木に蠶兒を飼育結繭せしむるものなるか故に天然の障害を調節又は防禦するの手段なく從て其の豐凶常なら

さる感あり今最近數箇年の統計を示せば左の如し

年次	飼育林段別	飼育戸數	放養蛾數	繭產額	製絲額
大正六年	七、三三〇 <small>町</small>	二七六	四、二三六 <small>千疋</small>	八六、〇六七 <small>千兩</small>	四三五 <small>兩</small>
同五年	三、二八五	二一五	二、七〇八	三一、五二〇	一、二四八
同四年	二、六四四	一八二	三、〇八〇	三八、四五四	二、二五五
同三年	四、一六六	二四〇	二、四二一	四八、五六五	一、九四三
同二年	三、六八六	二二三	一、八一八	三八、四三七	一、四三四
同元年	三、八六三	四九〇	三、六四三	四九、八六四	四一二

(リ)養蜂 朝鮮人は古來蜂蜜を食用及藥用に供するを以て蜜蜂を飼養する者尠からず江原道、平安
 南北道、咸鏡南道、慶尙北道最盛にして農家の副業さなすに適し將來發展の望あり

(ヌ)野生鳥獸 野生獸には虎、豹、野猫、熊、ヒクマ 狼、ヤマイヌ 豺、猪、鹿、ノロ 犛、カモシカ 羚羊、狐、狸、アナグマ 獾、
 水獺、鼠、貂、鼬、兔、栗鼠、ハリテジミ 蝟等あり朝鮮人は良、陷筭等を以て獸類を捕獲す從て其の毛皮の産



況状の出搬礦競るけ於に所賣販同共礦合組業蔵郡東安道北尙夏

三、柿 概ね澁柿にして鹽湯にて澁を抜き或は臥に投して熟柿とし或は剥皮して乾果と爲す各地より京城、仁川に移出するもの少からず全羅北道、慶尙北道等産出多し

四、桃 毛桃は水蜜桃に類し味稍佳なれども毛無桃は從來の内地桃に類し品質劣れり京城南大門外芝坊、西大門外弘濟院等は桃林相連り陽春滿開の期に際しては春色都門を賑はすものあり近來京城、開城、三溟津等に於て改良種の良果を産出す

五、苹果 在來林檎は産額少く小形にして品質劣等なり洋種苹果は結果極めて良好にして漸次産出額増加しつつあり

六、梨 在來梨は咸興梨の如き稍良品なきに非ざるも一般に味佳良と云ふへからず内地種は能く良果を結び栽培日に増加せり又洋種の結果は内地に比し著しく優れり

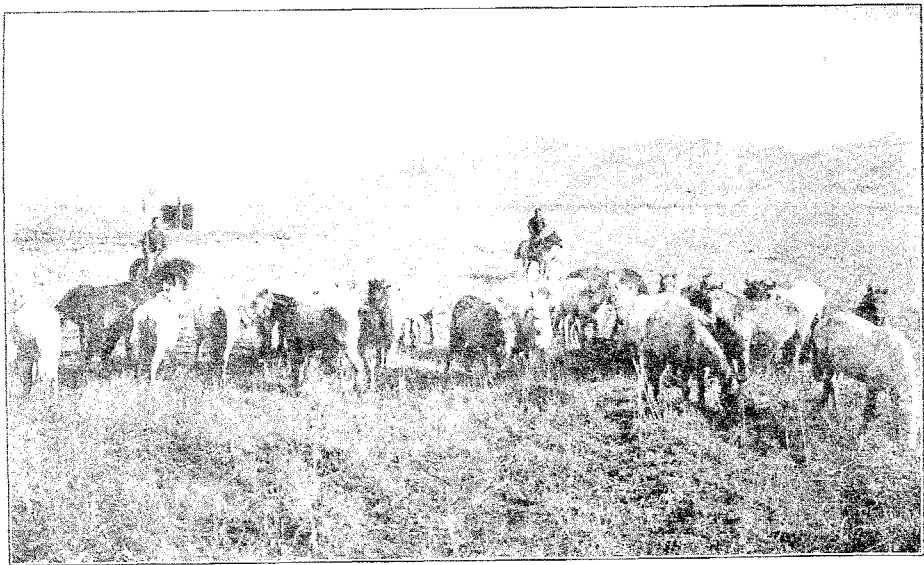
七、葡萄 風土能く洋種葡萄に適し内地に於て栽培困難なる良種も容易に結果す

今最近五箇年間に於ける主なる果樹優良品種栽培樹數及收穫高を掲ぐれば左の如し

其指導の途を講ずる爲勸農機關を設くること左の如し

(イ) 勸業模範場

一、本場は明治三十九年日本政府之を京畿道水原に設置し産業の改良發達上に資する調査、試験、農事の模範、實地指導、講習、講話、種苗、蠶種、種禽、種豚の配付等を主要の目的とし其の出張所を大邱、平壤、木浦に設け明治四十年三月之を舊韓國政府に譲り爾來年一年に其の實を擧ぐるに至りしか日韓併合の結果總督府の管轄に歸し水原を本場とし大邱、平壤、龍山、木浦及蘆島に支場を設け又大正元年に於て元山に出張所を設けたり然るに大正三年四月大邱、平壤、龍山の三支場を廢止し前二者は其の業務を各所在道廳に於て種苗場として繼承せしめ後者は更に原蠶種製造所及女子蠶業傳習所として水原に於て其の業務を行ひ又元山出張所を德源支場と改稱し江原道洗浦に出張所を設け更に大正五年江原道蘭谷面に牧馬事業を開始せしか事業緒に就くに及び大正六年同面に牧馬支場を設置すると同時に洗浦出張所を洗浦牧羊支場と改め又從來の木浦支場を木浦棉作支場に蘆島支場を蘆島園藝支場に德源支場を德源園藝支場に原蠶種製



勸業模範場江原道淮陽郡蘭谷牧馬支場に於ける蒙古牝馬放牧の状況

造所を蠶業試験所と改正せり

二、蠶業試験所 水原に在り原蠶種の製造配付及蠶業に關する試験調査を行ふ所とす從來是等の事業は主として龍山支場に於て行ひ來りしと大正三年四月龍山支場を廢すると同時に本所に於て専ら之を行へり

三、女子蠶業講習所 水原に在り本所は明治三十八年七月創設の舊大韓婦人會養蠶講習所に胚胎し同四十三年四月官立となり四十四年二月勸業模範場龍山支場附屬となし大正三年四月同場を廢止すると同時に水原に移すこととし同年十一月移轉せり講習期間は十箇月にして蠶業に關する學理及實地を講習す大正七年の卒業生は二十四名にして之に従前の卒業生を加ふるときは其の總數二百九名に及へり

四、勸業模範場木浦棉作支場 全羅南道木浦に在り明治三十八年朝野の有志相謀りて棉花の栽培協會を設立し紡績原料に適せる陸地棉を朝鮮南部一帶に普及せしめむことを企畫し之を經營の實行に就き當時の日韓兩國政府に請願する所あり當局其の請を容れ當時の勸業模範場木浦出張

所をして陸地棉の試験を行ひ傍其の普及に努力せしむるに同時に繰綿工場を建設して種子の蒐集に勉めしむる等幾多施設を爲し期待せる成績を擧げ得たるに由り明治四十一年之か栽培の獎勵機關として臨時棉花栽培所を置き益陸地棉の普及を圖り來りしか四十三年十月之を勸業模範場の所轄に移せり大正元年度には棉採種圃の數を三十箇所となし獎勵の便宜を圖らむか爲何れも之を其の所在地各道廳の所管に移し同場にては棉作に就ては試験調査の外主として米國より新規輸入の種子馴化に勉めしむることと爲せしか其の栽培區域の擴張に伴ひ棉採種圃制度を以て之か指導監督を爲すは不便なるを以て大正二年度よりは從來の棉採種圃を全廢し陸地棉栽培地の各府郡には其の所管道廳をして棉作に經驗ある技術員を駐在せしめ府郡の職員と協力して栽培指導を爲さしむることとなせり

五、勸業模範場露島園藝支場 京城府外露島に在り園藝模範場と稱し明治三十九年八月の創立に係りしか明治四十三年十月移して勸業模範場支場と爲せり園藝に關する試験及模範的栽培を爲し廣く公衆の觀覽に供せり

六、勸業模範場德源園藝支場 咸鏡南道德源に在り大正元年の創設に係り北鮮地方に於ける園藝の試験及模範的栽培に努めつつあり

七、勸業模範場洗浦牧羊支場 江原道平康郡洗浦に在り綿羊の蕃殖、配付を爲すを主なる目的とす大正二年度より其の業務に著手し同三年度に於て設備整ひたるを以て之を勸業模範場出張所と爲し更に大正六年三月に至り勸業模範場支場と爲せり

八、勸業模範場蘭谷牧馬支場 江原道淮陽郡蘭谷面に在り馬匹の飼養及蕃殖試験を行ひ朝鮮に適する馬種を産出し之を普及を圖るを目的とし大正五年四月より其の設備に著手し大正六年三月勸業模範場支場と爲せり

(口) 種苗場

種苗場は京城、清州、公州、全州、光州(濟州島に支場を設く)、大邱、晋州、海州、平壤、義州、春川、咸興、鏡城(城津、會寧、穩城に分場を設く)の十三箇所に設く各其の所在道廳の所屬にして農産の改良増殖に關する試験及調査、種苗、種卵、種禽及種豚の配付又は種畜の種付、農事に

關する模範、農用器具器械の貸與、農事に關する講習、講話、傳習及實地指導を爲す事等を以て其の主なる業務となす

朝鮮農會 明治三十九年の創立に係り朝鮮に於ける農林業の改良發達を圖るを以て目的とし本會を水原に置き開城、清州、公州、全州、群山、光州、大邱、晉州、黃州、平壤、鎮南浦、義州の十二箇所に支會を設け其の事業として毎月一回日鮮文會報を發刊し其の他圖書の編輯出版質問應答農事の講習、講話、傳習會、品評會の開催、牛畜鷄種の改良、模範果樹園、蠶業傳習所の設置種苗の育成配付又は其の供給の仲介をなす等官民の間に介立して直接間接に指導勸奨に努めつつあり

第十章 商業

第一節 朝鮮人の商業

近來常設店舗を設けて商業に従事する者漸次増加す。雖由來朝鮮人の取引の大部分は市場に於て行はるるを各地一般の慣例とす而して此等の市場は毎月五回若は六回定期開市せられ其の出市者は附近の住民は勿論遠く八九里の地より到る者尠しとせず朝鮮に於ける市場の數は大正五年末に於て一千二百十箇所にして一箇年の賣買高五千萬圓以上を算す市場は朝鮮に於ける重要な商業機關にして其の設置變更は地方經濟に影響する所尠からざるを以て大正三年九月市場規則を發布し其の組織及監督に付詳細の規定を設けたり尙朝鮮人商業の機關として重要なもの四あり曰く客主、曰く居間、曰く監考、曰く典當是なり

(イ)客主 本來の業務は委託を受けて取引を爲し又は手形の引受、割引、資金及貨幣の交換等を爲

し併せて華客を宿泊せしむるものにして其の商行爲とする所恰も内地に於ける間屋業に類す客主か委託販賣をなす貨物は大概穀物、煙草、牛皮等にして客主は絶えず市場の相場を通報し委託者は機を見て其の所有貨物を客主に送り指定價格を表示して之か販賣を委託す之と同時に客主は委託者に對し預り證書を交付し而して客主か委託者の指定價格を以て販賣したるときは所定の口錢其の他諸經費を控除し残額を委託者に交付す

(口)居間 賣買業者の中間に介在し諸般の周旋を爲し一定の口錢を受くることを本業とする者にして恰も内地の仲立人に似たり居間は常に客主の店舗に出入し其の依頼を受け賣買者を探索紹介し賣買成立の曉に於て報酬として口錢を得るものなり普通居間に二種ありて一は一定の出入客主を有し其の使用人となりて周旋の勞に當るものを云ひ一は一定の客主を有せず苟も事件あれば孰れの客主に對しても周旋の勞を取るものを云ふ而して其の行動稍客主業と相似たるものありと雖兩者の間には自ら劃然たる區別の存する在りて客主は委託者の爲に賣買を紹介すると同時に表面自ら取引の當業者となり權義の主體たるに反し居間は單に賣買業を紹介するに止まり取引に關し何

等關與する處なし

(ハ)監考 地方に依り其の取扱ふ商品一定せされども市場取引の米穀は必ず監考之を升量し其の手數料として一升到充たざる端數の米穀を收受するの慣習あり

(ニ)典當業者(質屋業) 多くは金貸業者が兼業として之を營む者にして純然たる典當業は殆んど皆無と稱して可なり而も金貸業者の全部が當然典當業を兼ねる者に非ざるか故に金貸業者の數の多きに比し典當業者は其の數少なし而して典當業者の取扱ふ典物は金銀細工、衣冠竝家具、什器等多く貸金の比準は借主の信用に由り異なるが雖評價の三割乃至五割を以て普通とす而して期限は一定せざるも普通の典物に在りては三箇月を以て一期とし金銀の如き價格移動の少きものに在りては稍長く細民に融通する場合に在りては時期の頗る短きものあり然れども何れも利息支拂に由り延期し得ること及流質となりたる場合に典當權者當然に典物を賣却處分し得ることは内地質屋業と異なるなし

其の他商業機關として市場取引、契等に關し慣行なきに非ざるも行政の刷新と共に次第に其の面

目を改むるに至れり

現時朝鮮人の商店は概ね内地人商店と其の名稱を同うするに至りたるも尙舊來の名稱を踏襲するものあり其の主なるものを擧ぐれば左の如し

毛物 麁 毛皮及毛皮製品並主なる朝鮮雜貨を賣る店

鞋 麁 鞋を賣る店

布 木 麁 織物類を賣る店

笠子 宥巾 網巾 麁 笠子、宥巾、網巾を賣る店

鍬 器 麁 銅器及眞鍮製食器家具等を賣る店

槓 麁 箆筒、衣盒等を賣る店

瓮 器 麁 素焼物を賣る店

砂 器 麁 陶磁器を賣る店

册 肆 本屋

銀 房 銀細工屋

玉 房 玉細工屋

飯饌假家 日用食料品(主として乾物)を賣る店

乾劑藥局 漢藥を賣る店

貝 物 廬 玉製裝身具を賣る店

裹頭都家 裹具を貸貸する家にして裹具に限り都家といふ

賣 物 廬 主として冠婚葬祭の儀式に用ふる衣裝器具を貸貸する店

福 德 房 土地家屋の賣買、貸家の仲介等を業とす

典 當 局 内地の質屋

其の他商廬の名稱種種あれども是等は概ね其の名稱に依りて判別し得べきものなるが故に之を省略す

第二節 内地人の商業

舊時朝鮮に於ける内地人商業の範圍を見るに京城、仁川、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、元山、清津、平壤、鎮南浦、新義州等内地人の集團地を中心とし概ね其の附近に限られたる状態なりしも併合以來警備、交通機關の完備すると共に今や都鄙の別なく全土到る處内地人の商賈を見るに至り朝鮮商業に關しては常に優越なる地歩を占むるに至れり

内地人の商業は貿易商を主とし各種商品の卸賣並小賣商にして貿易商は穀物、海産物、牛皮等朝鮮物産の輸移出を爲すもの或は各種雜貨、綿絲布類、酒醬油、砂糖、燐寸等の商品を内地より移入するもの類是なり而して日用雜貨を始め米穀、吳服、煙草、酒醬油、文房具、菓子、荒物、青物類の商品は概して京城、仁川、釜山等の卸商より各地の小賣商に供給せらるる狀況なり

第三節 商業地

各道に於ける主なる商業地を掲ぐれば左の如し

道 一 主要商業地



木浦に於ける棉花買賣狀況

京畿道 京城、水原、開城、永登浦、仁川、平澤、安城、漣川

忠清北道 清州、堤川、忠州、永同、英江

忠清南道 大田、江景、公州、烏致院、洪州、禮山、天安、論山、成歡

全羅北道 群山、全州、萬浦、南原、金堤、裡里、井邑

全羅南道 水浦、羅州、榮山浦、南平、光州、麗水、順天、濟州

慶尙北道 大邱、金泉、慶州、安東、浦項、尙州、倭館、慶山

慶尙南道 釜山、東萊、龜浦、金海、密陽、蔚山、馬山、鎮海、統營、晉州、河東、居昌

黃海道 載寧、黃州、兼二浦、沙里院、新幕、海州

平安南道 平壤、安州、鎮南浦、廣梁灣、成川

平安北道 新義州、義州、龍岩浦、車輦館、宣川、定州、江界

江原道 春川、江陵、鐵原、原州、平康

咸鏡南道 咸興、元山、北青、西湖津、永興

咸鏡北道 清津、鏡城、羅南、會寧、城津、雄基

第四節 會社

朝鮮に於ける會社の設立は之を自由に放任せず明治四十四年一月發布の會社令に依り總督の許可を受けしめ來りたるが爾來産業の發達に伴ひ會社事業は年々共に増加し漸次大規模の企業の勃興を見るに至り殊に近來各種工業を目的とする大會社の設立せらるるもの多からんとする氣運に向へり左に會社に關する諸種の統計を掲ぐ

朝鮮に本店を有する會社

大正六年十二月末日

種別	會社數	資本金	拂込資本金	種別	會社數	資本金	拂込資本金	
内地設立	合名會社	二三	一八八四〇〇〇 <small>円</small>	株式會社	二六	一〇八四三〇〇〇 <small>円</small>	五四三七六八七 <small>円</small>	
	合資會社	六〇	二四八三二〇〇		計	三七	二一五八一四〇	五八七二三四三
朝鮮設立	合名會社	三	三五四五〇〇	株式會社	一	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	
	合資會社	八	三二〇六四〇		計	三	五九七六〇〇〇	一八七二〇〇〇
計		一七	五九一九二〇〇	計		三三	五九九六〇〇〇	一八八二〇〇〇

種別	株式會社	合名會社	合資會社	株式會社	總計
日米人合同設立	1	26	69	133	329
資本金	11000000	2338500	2183800	7336400	16862300
拂込資本金	2000000	1966100	2262655	4525299	8754254
種別	大正五年末	同	同	同	同
株式會社	33	26	31	19	111
資本金	33330500	55126700	55972100	52848870	150126500
拂込資本金	43910153	39248866	38514381	35746011	156698511
種別	大正六年十二月末日				
株式會社	33	26	31	19	111
資本金	33330500	55126700	55972100	52848870	150126500
拂込資本金	43910153	39248866	38514381	35746011	156698511

朝鮮に支店を有する内地又は外國會社 大正六年十二月末日

種別	合名會社	合資會社	株式會社	株式合資會社	總計
内地會社	3	0	1	9	13
資本金	11010000	67373	1105301500	5000000	111796273
拂込資本金	11010000	67373	117140666	5000000	134842449
外國會社	5	3	1	4	14
資本金	11010000	67373	11610	11610	11610
拂込資本金	11010000	67373	3547370	3558990	11610
種別 <td>合名會社</td> <td>合資會社</td> <td>株式會社</td> <td>株式合資會社</td> <td>總計</td>	合名會社	合資會社	株式會社	株式合資會社	總計
株式會社	5	3	1	4	14
資本金	11010000	67373	11610	11610	11610
拂込資本金	11010000	67373	3547370	3558990	11610
種別 <td>大正五年末</td> <td>同</td> <td>同</td> <td>同</td> <td>同</td>	大正五年末	同	同	同	同
株式會社	5	3	1	4	14
資本金	11010000	67373	11610	11610	11610
拂込資本金	11010000	67373	3547370	3558990	11610
種別 <td>大正四年末</td> <td>同</td> <td>同</td> <td>同</td> <td>同</td>	大正四年末	同	同	同	同
株式會社	5	3	1	4	14
資本金	11010000	67373	11610	11610	11610
拂込資本金	11010000	67373	3547370	3558990	11610

種別	會社數		種別	會社數	
	資本金	拂込		資本金	拂込
大正三年末	四八	二八五六〇〇〇 <small>円</small>	大正元年末	四三	九五〇三六二〇〇 <small>円</small>
同二年末	五一	二八五〇〇〇〇 <small>円</small>	明治四十四年末	四三	七四四四四九五〇 <small>円</small>
		八九九三七六四 <small>円</small>			八八八八九七〇〇
		八三三七一三〇			六八〇二五、五〇〇

朝鮮に本店を有する會社營業別

年	農業及林業		商業工業		水産業		銀行業及金融業		運輸業		瓦斯電氣業		其他		合計
	資本金	拂込	資本金	拂込	資本金	拂込	資本金	拂込	資本金	拂込	資本金	拂込	資本金	拂込	
大正二年末	一六	八三	三七	一	三	二二	一九	二	二	一	一	一	一	一九四	
同三年末	二一	八八	三三	二	三	二二	二一	二	二	一	二	一	二	二二一	
同四年末	二四	八六	三三	二	三	二二	二二	二	二	一	二	一	二	二二六	
同五年末	二三	八五	二九	二	三	二四	二二	二	二	一	一	一	一	二二二	
同六年末	二三	八一	四七	二	三	二五	二五	二	二	一	一	一	一	二二八	

朝鮮に支店を有する内地又は外國會社營業別

年	種別		林業	農業及	商業	工業	水產業	鐵業	銀行業	運輸業	瓦斯 氣業	合計
	外國會社	內地會社										
大正二年末	計		三	三	二	二	四	二	四	二	二	四
	外國會社	內地會社	三	三	二	二	四	二	四	二	二	四
同三年末	計		〇	〇	三	六	二	二	四	二	二	四
	外國會社	內地會社	〇	〇	三	六	二	二	四	二	二	四
同四年末	計		三	三	四	四	二	二	四	二	二	四
	外國會社	內地會社	三	三	四	四	二	二	四	二	二	四
同五年末	計		三	三	四	五	二	二	四	二	二	四
	外國會社	內地會社	三	三	四	五	二	二	四	二	二	四
同六年末	計		三	三	三	七	四	六	三	二	二	五
	外國會社	內地會社	三	三	三	七	四	六	三	二	二	五

第五節 商業會議所

商業會議所は商業に關する公益團體として重要な機關たるに拘はらず從來何等據るべき法規なく其の事業上又監督上遺憾少からざりしを以て大正四年七月朝鮮商業會議所令を發布し同十月より之を實施し以て有效に其の機能を發揮せしむることとせり抑も朝鮮に於ける商業會議所は内地人の設立せるもの十一、朝鮮人の設立せるもの十四を算し多くは府制施行地に於て内鮮人各別に之を設立し其他朝鮮人の設立せるものにして殆ど商業會議所存立の意義を有せざるもの亦尠からざりしか新令施行に伴ひ之を整理し内鮮人共同して商工業の進歩發達を圖らしむる爲一地區一商業會議所たらしめ其の組織權限及監督に關しては一律に之を規定し以て會議所自體の地位資格を明にし所期の目的を成就せしむるに便し併せて適當の監督を加へ目的外に逸脱して諸種の弊害を誘起するか如きことなからしめたり現時新令に基き商業會議所を設立せるもの京城、仁川、群山、木浦、釜山、大邱、平壤、鎮南浦、元山の九箇所なり

第六節 穀物検査

米は朝鮮物産の大宗にして又輸移出品の首班たるを以て其の改良に付ては夙に種種の施設を加へ大正四年二月米穀検査規則を發布し輸移出米の検査を施行し漸次良好なる成績を挙げ來れるも既往の經驗に鑑み規定改正の必要を認め大正六年九月改正規定を發布し同年十月一日より之を實施せり検査は主として支米に付道長官之を行ひ必要に應し中白米及白米の検査をも行ふこととし品質乾燥の程度夾雜物包裝及容量に付一定の標準を定めて特等以下三等及不合格の五階級に分ち不合格米は其の輸移出は勿論他の道に搬出することをも禁止し又特に蝦米を混入するものは絶対に之れが搬出を禁止せり次に容量に關しては之を四斗に限定せり又大豆は米に亞くの重要農産品にして其の改良は最も緊要なるものあるを以て米穀検査規則の改正と共に大體同令に準し大豆検査規則を發布し各道に於て普く輸移出及道外搬出大豆の検査を施行せしむることとせり今改正規則實施以來十二月迄の検査成績を擧ぐれば左の如し

米穀及大豆検査成績

種目	合			格			不合格數	歩合
	検査總數	特等	一等	二等	三等			
玄米	一、三六、一二〇	九三三	一二、八七八	一六七、五〇九	八二九、〇六四	一二五、七三六	八八	
中白米	四五、五三〇	—	三	二、六五八	三九、九一六	二、九五三	九三	
白米	一一、二八七	三、四六三	二、〇八七	一、三六五	四、二六〇	一一二	九九	
計	一、一九二、九三七	四、三九六	一四、九六八	一七一、五三二	八七三、二四〇	一二八、八〇一	八九	
大豆	一、一三九、八九六	五三六	五二、六二六	二六四、五六六	七九八、五九三	二二、五七五	九七	
總計	二、三三二、八三三	四、九三二	六七、五九四	四三六、〇九八	一、六七一、八三三	一五二、三七六	—	

第七節 商品陳列館

商品陳列館は京城府永樂町に在り大正元年十一月三日の創設にして本府の經營に係る敷地約一千四百坪、本館は煉瓦造二階建にして階上階下を通して四百餘坪又棟を別にして附屬賣店あり三百餘坪の庭園は玄關前噴水を中心として全館を圍繞す

(イ)施設 本館は廣く朝鮮産物を網羅して朝鮮の産業狀況を明にし以て朝鮮産物利用の途を圖るに共に一面多額の輸移入ある内地及外國商品を蒐集陳列し營業者をして産業の改善、商品の選擇及販路の擴張に資せしめむとす

(口)陳列品 陳列品は當業者より陳列並販賣の希望を以て委託せられたる物、同じく陳列の希望を以て寄贈せられたる物及本府に於て參考上必要と認め購入又は製作加工したる物の三種とす最近の調査に依る陳列品の類別及點數は左の如し

陳列品點數

大正六年九月末日

種別	陳列品點數			合計	種別	陳列品點數			合計
	朝鮮產	内地產	外國產			朝鮮產	内地產	外國產	
農業	一、六一六	二、一三二	二、三三三	二、八五一	化學製品及藥劑	一、三三三	二、六八八	一	四、〇二二
林業	二八二	四〇	二	三二四	携帶品及裝身具	一、七六六	三、八九九	二	五、六六七
礦業	一、五三三	三四	二二	二、〇九九	文房具及玩具	七七七	一、四七七	—	二、二五四
水産業	三、三四四	七三	八	四、〇五五	飲食品及釀造品	一、七九九	三、三六六	六	五、一一一
織物及其の製品	六、九八八	九、四六六	七、九	一、七、二三三	機械及器具	七八八	九、九九九	三	一、八〇〇
窯業製品	二、八六六	七、二三三	一、〇八八	一、一、一七七	雜工品	二、〇二二	一、六七七	—	三、六九九
金屬及玉石製品	二、九八八	六、七六六	一、四	九、八八八	參考資料	一、二二二	七、二二二	—	一、九五五
漆器及木竹製品	一、七二二	八、五八八	—	一、〇、三〇〇	總計	四、九四八	五、一、二八二	—	一、〇、七四〇
紙及其の製品	一、五一一	四、八一	一、三	六、四四五					

(ハ) 出品及寄贈 本館に出品又は寄贈を爲さむとする者は所定の申込書用紙(申出に依り本府より交付す)に其の品名、數量、賣價其の他參考となるべき事項を記載し口頭又は書面を以て申込むものとす本府は之に對し即時其の諾否を通知す

出品物の荷造及運搬費は出品人の負擔とし返送に要するものは本府に於て支辨す
寄贈品の荷造及運搬費は本府に於て支辨す

(ニ) 委託販賣 販賣を委託せられたる出品物は出品人の希望に依り廣く之を紹介する爲附屬賣店を設け本府指定の確實なる商人をして販賣せしむ但し販賣手数料は販賣價額の一割とす
賣上代金は當月分(五圓未滿は五圓に達したるとき)を翌月七日迄に送付せしむ
關稅は便宜賣上金の内より納付の手續を爲すものとす

(ホ) 來觀人員 開館以來の來觀者は左の如し

觀覽人員

年	觀覽			開館日數	一日平均觀覽人員	
	内地人	朝鮮人	外國人			
大正三年	二四、〇五一	九三、二四七	五一九	一一七、八一七	二九七	三九七
同四年	二九、八三九	九五、六一八	二九六	一二五、七五三	二九六	四二五
同五年	二八、八七四	五五、五一二	三七二	八四、七五八	二九八	二八四
同六年	二九、一〇〇	七一、〇七八	七七六	一〇〇、九五四	二九七	三四〇
同七年(九月迄)	一九、五一三	五二、四九六	三九三	七二、四〇二	二二五	三二二

第八節 度量衡

朝鮮の度量衡は從來一定の標準なく亂雜を極めたりしか明治四十二年九月(隆熙三年)現行度量衡法に改正し爾來地域を定め順次之を施行し明治四十五年六月全土に施行の完了を見るに至れり

度量衡の名稱、命位は内地度量衡法と同一にして度量衡器は政府の專賣と爲し資産信用確實なる者に委託販賣を爲さしめ醫療用測量用並學術用等特殊の度量衡器は内地官廳の檢定を経たるもの限り政府の特許を受け之か移入販賣を爲さしむ改正法實施以來年年多數の法定度量衡器を普及し來り

人民に在りても取引上正確なる法定器物を使用するの便利なるを識り商工業者は勿論一般農民亦之が使用に習熟し從來取引上不統一なりし悪慣習も漸次改善せらるるに至れり最近一箇年間に於ける普及高及委託販賣者特許移入販賣者分布數を示せば左の如し

最近一箇年度量衡器普及高表

(大正六年度)

道名	器		器		器		合		計
	箇數	金額	箇數	金額	箇數	金額	箇數	金額	
京畿道	六四、一三二	五、三七二	四六、六九五	二〇、二四七	五、四八〇	一五、八五六	一一六、三〇七	四一、四七五	
忠清北道	九、〇五九	六二一	五、〇一九	三、〇三六	一、一九〇	三、〇九三	一五、二六八	六、七五〇	
忠清南道	三二、二六四	一、三二六	一九、二五三	九、三七〇	二、二四九	四、八二一	五三、七六六	一五、五一七	
全羅北道	一七、九九三	一、〇八五	一四、八〇五	七、九〇七	二、二四一	五、五六九	三五、〇三九	一四、五六一	
全羅南道	四七、七〇二	二、五四四	三二、一一七	一三、九一八	四、三七九	一〇、九一四	八四、一九八	二七、三七六	
慶尙北道	一三、〇四二	二、二三六	一一、四六八	五、七九三	二、七八一	六、八二七	二七、二九一	一四、八五六	
慶尙南道	五三、六三二	三、八九九	二五、五五九	一三、二二三	三、四二七	八、七九〇	八二、六一八	二五、九一二	
黄海道	二七、六五五	一、四九八	一二、九九五	八、五二七	二、五四二	五、三〇〇	四三、一九二	一五、三二五	
平安南道	一六、〇七三	一、七一三	一四、五〇七	七、三三九	三、九六五	九、三一二	三四、五四五	一八、三六四	

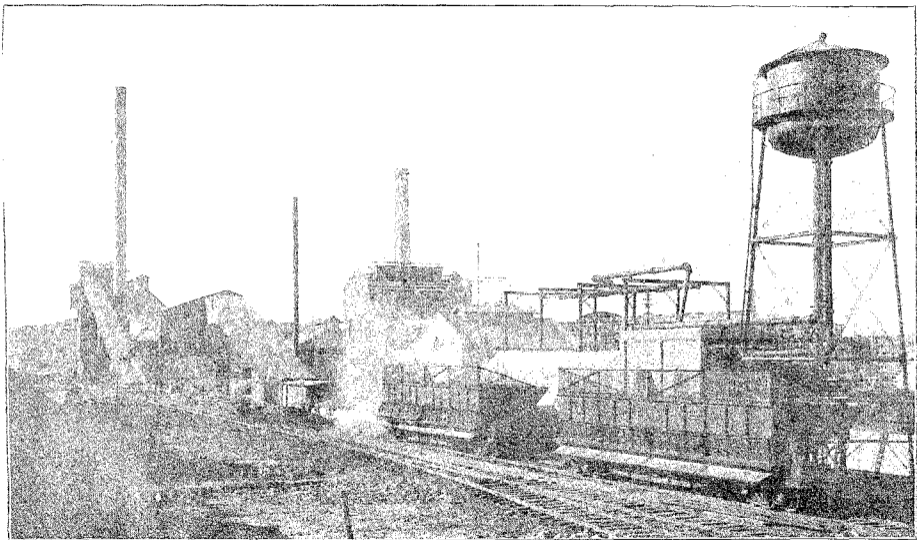
平安北道	七、一七四	一、一三八	七、六四五	六、〇三四	二、二六三	五、五四九	一七、〇八二	一、二、七二一
江原道	一四、七九四	一、〇〇六	一〇、六二六	五、二四六	一、二四三	二、〇五五	二六、六六三	八、三〇七
咸鏡南道	一三、八七〇	一、六四八	一五、六五三	八、三〇〇	一、八六一	四、二一一	三一、三八四	一四、一五九
咸鏡北道	一一、五八九	一、一二九	三、三三六	二、〇六一	九四五	三、〇一三	一五、八七〇	六、二〇三
總計	三二八、九九九	二五、二一四	二一九、六七八	一一一、〇〇一	三四、五六六	八五、三〇九	五八三、二二三	二二一、五二四

度量衡器販賣者及修理者

大正七年六月末日現在

道名	委託		販賣者		特許移入販賣者		特許修理者	
	內地人	朝鮮人	計	販賣所數	內地人	朝鮮人	計	內地人
京畿道	二四	七	三一	三三	一〇	—	一一	三
忠清北道	一一	三	一四	一四	—	—	—	—
忠清南道	二〇	二	二二	二二	—	—	—	—
全羅北道	二一	二	二三	二三	—	—	—	—
全羅南道	二九	—	三〇	三一	四	—	四	—
慶尙北道	二九	五	三四	三五	二	—	二	—
慶尙南道	二五	二	二七	二八	三	—	三	—

道名	委託販賣者			特許移入販賣者			特許修理者		
	內地人	朝鮮人	計	內地人	朝鮮人	計	內地人	修理所數	計
黃海道	二〇	三	二三	二五	—	二五	—	—	—
平安南道	二一	三	二四	二六	—	二六	—	—	—
平安北道	二一	五	二六	—	—	—	—	—	—
江原道	一八	七	二五	二五	—	二五	—	—	—
咸鏡南道	一九	三	二二	二二	—	二二	—	—	—
咸鏡北道	一一	四	一六	一六	—	一六	—	—	—
總計	二七〇	四七	三一七	三二五	—	三二五	—	—	—



兼二浦三菱製鐵所に於ける鑪爐

第十一章 工業

第一節 朝鮮人の工業

朝鮮の工業は高麗朝時代に在りて一時高度の發達を遂げたることは之を當時の建築に見高麗燒に徴するも其の一斑を窺ふに足るへし然れども爾來國力と共に次第に衰微し織に機業、窯業、製紙、醸造、金屬品業等小規模の工業として僅かに其の片影を留むるのみ而も技術幼稚器具亦不完全にして其の製品見るに足るものなし日常生活の必需品も大部分は之を輸入に俟つの状態なりしを以て本府に於ても夙に之を獎勵に努めたる結果機械器具の改善技術の進歩産額の増加等漸く復活の機運に向ふに至り就中近時織物を始め鑄物、指物類は著しく其の面目を改め其の他新工業品の製造に向て指を染めむとする者漸次多からむとするに至れり

(イ)機業 機業は朝鮮に於ける最重要なる工業なるを以て其の改良發達を圖る爲主要産地の道に於

ては機業教師を置き實地指導の任に當らしめつつあり

一 木綿織物 綿布は各地到る所産出せざるなく就中慶尙南北道、平安南北道、黃海道及京畿道産出最も多く朝鮮全土の大正六年に於ける産額は三百四十萬反に達す多くは農家婦女子の副業的産物にして棉花を手紡し居織機にて製織する平織白木綿の粗なるものなり近來紡績綿絲を用ゐ「ハツタン」織機又は足踏織機を以て製織するもの漸次増加し尙小規模の工場を經營するもの各地に散見するに至れり

二 絹織物 江原、平安南北及慶尙北道に産出し多くは明紬と稱する平絹の類にして平安道成川、泰川、寧邊、熙川、徳川の紬、江原道鐵原の紬、咸鏡南道永興の紬最名あり是等は皆織り上げの後灰汁を以て精練し且染色し男女の衣料に供す一箇年の産額約二十一萬反なり

三 麻織物 忠清南道、慶尙南北道、咸鏡南北道、江原道、全羅南道等最も産出多く重要な産物の一なり何れも白無地のものにして之を製織するには豫め麻を清水に浸し日光に晒して自然漂白をなし纖維を割きて細絲として居織機に依りて製織し夏の衣料、裏服、帆、袋及雜用に用



忠清南道に於ける布疋品評會の状況

ふ全道産出額苧布、麻布を合せて約二百六十萬反に達す

(ロ)窯業 高麗時代に於て隆盛を極めし窯業も其の後時勢の變遷と共に衰微し殆んど見るべきもなく唯各地に於て極めて粗造なる日用品の製造を見るのみなりしか近時漸く窯業復興の曙光を見るに至り現に朝鮮人にして大規模を以て改良式窯法に依り工場を設くる者あり平壤磁器製造株式會社の如き其の一例なり

朝鮮には陶磁器の原料頗る豊富なり即ち慶南の河東、山淸、固城の各郡及黃海道海州郡に高嶺土又平南の大同郡、黃海道の遂安郡、江原道の楊口郡、慶北の青松、慶山二郡に磁石又咸北の會寧、鏡城、明川、城津の各郡に耐火粘土を産するか如きは斯業界の天與と爲す處なり此の外長石、珪石の産地亦乏しからず

(ハ)製紙業 製紙は朝鮮工業中有望なるものの一なり慶尙北道慶州、慶尙南道三嘉、陝川、全羅北道全州には製紙業に従事する者多く産額亦多し各所に於ける製紙原料は總て楮を以てす朝鮮人製紙の方法は頗る簡易にして張板を用ゐず晴天を選ひ河岸に於て漉洒抄製し河原又は溫突にて乾燥

す一箇年の産出額約百五十萬圓にして高麗紙と稱し窓紙用及衣服中入用として支那に輸出せらるるもの毎年十萬餘圓あり尙近來朝鮮に於ける和紙洋紙の需要増加するに従ひ朝鮮人にして其の製造に従事する者漸次増加するに至れり

(二)金屬品 朝鮮人は古來眞鍮製の器具を多く使用する習慣あり食器、金盃、火鉢、便器等の眞鍮製品各處に産出す鐵器類は鍋釜及農具を主要なるものとし就中釜は堅牢を以て名あり其の他婦人の裝飾品たる指輪、筭、簪等の銀又は眞鍮製品各所に製作せらるるも加工彫刻の見るべきもの少し

(水)雜工品

一 華筵 京畿道江華島、全羅南道寶城の特産物として知らる又慶尙北道金泉は産を以て名あり無地織なるものあり雲鶴模様又は福壽等の文字を織出せるものあり近來内地人に於ても大邱に製筵合資會社を設立し朝鮮産莞草を用ぬ高麗筵及疊表を製造し又岡山縣に於て多年花筵の製造に従事し斯業に經驗ある早島物産商會なる者京城東大門外に工場を建設し輸出向工藝品を製造

しつあり

二 木竹細工 簾、扇子、煙管竹等の竹細工品は巧妙にして全羅南道潭陽の竹器及羅州の簾は其の名高し木工品は櫃、箆、漆器等僅に存すれども見るに足るものなし唯漆器中慶尙南道統營地方に産する螺鈿細工は産出多からざるも雅致ある工藝品として推賞する價値あり

(ハ)醸造業 朝鮮人の飲用する酒類は藥酒、濁酒、白酒、燒酎、過夏酒、梨蓐酒、甘紅露、松筍酒、合酒等種類多し。雖藥酒、白酒、濁酒、燒酎及過夏酒は其の主要なるものにして需要者多く従て醸造高は各酒を通して百萬石に上るへし

一 藥酒 小麥麴、糯米、粳米等を混合し醸造したるものにして他酒に比し品質稍や良好なり黃海道以南殊に京城附近に於て汎く飲用せられ酒中の珍きとして宴會祭日等に於て必須のものさせらる其の優良のものは果實酒に類する味を有し酒精分一〇乃至三〇%を有し帶黃赤色を呈す耐久性なく貯藏し難きを以て多くは冬期自家用として醸造せらる

二 濁酒 小麥粉及粗麴を蒸し又は煮たる糯米、粳米及水を加へて醸造したるものを揉潰して濾

過せる白濁液にして一般下層社會の嗜飲物たるか故に需要頗る多し腐敗し易きを以て四季を通じて隨意醸造す

三 燒酎 小麥、粗麴、粳米、糯米及黍等を以て醸造したるものにして各地に於て飲用せらる酒精度比較的低く三十度内外を普通とし北方に到るに従ひ其の度を増し五十度に到るものあり京城以南に在りては夏季のみ之を飲用するか故に製造高僅少なれども北鮮地方に於ては四時常に飲用し醸造高從て多大なり

四 白酒 藥酒と濁酒の混成物にして水を以て稀薄となしたるものなり寧ろ濁酒に近し

五 過夏酒 小麥麴、麥芽、糯、燒酎を加味し醸造したるものにして恰も我が味淋に似たり其の酒精分は一〇乃至一八%にして他酒に比し飲用量多からず

六 其他紅酒、甘紅露、梨薑酒等の諸酒は孰も燒酎を基とし之に糖蜜類を加味したる混成酒に過ぎず

第二節 内地人の工業

内地人經營の工業は未だ大成の域に達せざるも漸次堅實なる發達を遂げつつある狀況にして精米、鐵工、煙草、煉瓦、瓦製造、醸造、電氣、製材、製革業等其の主なるものにして近來内地人の投資を促進し製粉、製糖、パルプ製紙、紡績、セメント、陶磁器、燐寸等の製造業に付大規模の組織を以て事業を計畫する者續出するに至れり

(イ)精米業 朝鮮人の收穫米は粃の儘にて賣買せらるるもの多く朝鮮人の食用として白米の賣買せらるるものなきに非ざるも粃より直に精白したる一種の中白米に過きず然るに粃は輸移出に不便多く中白米は内地人の口に適せざるのみならず滿洲方面に對しては精米を以て輸出するを利益とするを以て主要地に於ては内地人にして稍大規模に粃摺業を兼ねたる精米業を營む者尠からず

(ロ)鐵工業 は從來鍛冶職の傍ら小道具の製造諸機械の修繕を營むに過ぎずして機械を應用し大規模の工場を經營せる者甚だ少なりしか農業、鑛山業の勃興に伴ひ農具、鑛山用機械の需用を喚起し延いて斯業の發展を促し加ふるに朝鮮人の勞銀は低廉なるを以て鐵工業の前途極めて有望なり

(ハ)煙草製造業 朝鮮内に於て消費せらるる煙草は年年五六百萬圓の多額を算す爲に京城、釜山、

大邱等に於ては内地人の煙草製造業に従事せる者少からず就中京城に於ける東亞煙草株式會社の如きは其の規模宏大にして平壤、全州に分工場の設けあり従前朝鮮に於て消費せらるる卷煙草は大部分内地、上海等より輸移入せられたるも本業の發達と共に漸次市場より驅逐せられ今や葉巻煙草、金日煙草等高價品の若干輸入せらるるの外殆ど凡て朝鮮産品を以て其の需要を充たすに至れるのみならず原料葉煙草の生産亦自給の域に達せん

(二) 窯業 朝鮮人は食器及便器に金屬器を使用する慣習ありしか漸次之を陶磁器に代ふるの傾向を生し且前述する如く朝鮮は優良なる陶土に富むを以て内地人茲に著目し窯業の各所に勃興しつつあるを見る又古雅なる高麗焼を復興して内地人の嗜好に充てむとするもの亦尠からず鎮南浦の宮田儀作、京城海市商會の製出する擬高麗焼磁器の如き是なり又全羅南道黃海道海岸並其の附近島嶼は硅砂の存在豊富なるを以て之を原料とし硝子製造業に従事するものあり又釜山牧の島に朝鮮硬質陶器株式會社を設立し資本金百萬圓を以て海外輸出向硬質陶器の製造を目的とし目下工場建築準備中なり

(ホ)煉瓦及瓦製造 全土到る處原料に富み麻浦、永登浦等に於ては監獄作業として煉瓦土管製造の經營せらるるものの外内地人及支那人の經營せるもの多し唯燃料に乏しき爲陶器業と同しく其の發展を阻害せらるる虞なき能はずと雖建築業の進歩と共に有望なる一事業たり

(ハ)醸造業 内地人の移住と共に清酒の需要激増したるを以て近時内地人の各地に於て清酒醸造に従事する者頗る多く京城、仁川、釜山及馬山等主なる醸造地に於ては既に大規模の設計に出づるものすら無きに非ず殊に半島内は原料安價なるに加ふるに職工の勞銀低廉にして且腐敗の虞なきを以て收益少からず加ふるに販路廣く實捌容易なるを以て研究改良を加へなば酒造業の前途頗る有望なり

内地人酒類醸造高

年 度	製造場數	醸 造					合 計
		清酒	燒酎	濁酒	味淋	混成酒	
大正二年度	二二二	二四、二〇五石	一、七五五石	六六一石	二〇五石	七四九石	八二七、五八三石
						共の他の酒	

年 度	製造場數		釀 造					合 計
	清酒	燒酎	濁酒	味淋	混成酒	其の他の酒		
大正三年度	三二二	二七、六五二	九八〇	一、一四二	七八	—	二一、八九三	
同 四年度	三一五	二七、九七〇	四一一	九八二	八八	—	二五、四七六	
同 五年度	五三六	二七、八四二	一、五七三	二、三〇〇	一三三	一一七	三三、〇三六	
同 六年度	七五五	三五、七五七	一、七四六	一、二一一	三三二	三八〇	一四一、三九五七	

備考 二種以上の酒類を製造せむとする者は一種毎に一箇所として製造場數を計算せり

(ト)醬油味噌製造業 近時漸く隆盛を致し漸次内地移入品を防遏するの兆を示せり殊に味噌の醸造は頗る盛にして朝鮮内の供給に對しては最早移入を仰ぐの必要なく醬油も近來京城、仁川、釜山、平壤、大田等に於て内地品に劣らざる精良のもの醸出せらるるに至りしかは從來内地人の移入に係りし醬油は痛撃を加へられたるの觀あり朝鮮内製醸の原料豊富にして而も低廉なるを以て該業の前途は有望なり今最近數年間に於ける内地人の醬油醸造者及石數を掲ぐれば左の如し

内地人醬油釀造人員及石數

年	釀造人員	釀造高	年	釀造人員	釀造高
大正二年	一八六	三九、九九五 _石	大正五年	三六八	三七、五七八 _石
同三年	一九九	四四、〇九三	同六年	三七一	四七、七九九
同四年	三一〇	三九、〇三七			

(チ)電氣事業 從來米國人コールプランの經營に屬せし韓美電氣會社は京龍間の電車、電燈事業を營みつつありしか龍山に日韓瓦斯會社(資本金七十萬圓)設立せられ京龍間の瓦斯事業を經營するに至り四十二年八月韓美電氣會社の電氣事業を買收し電氣及瓦斯事業は該會社獨占に移れり是れ現今の京城電氣株式會社とす近時主なる都市は概ね電燈の設備を有するに至り會社組織を以て電氣事業を開始するもの漸く増加し既に當該官廳の許可を得たるもの二十三にして内現に開業せる者左の如し

電氣事業を營む會社

大正六年九月末日

會社	所在地	支店	事業の目的	供給區域	資本金
朝鮮瓦斯電氣株式會社	東京	釜山	電燈、電力、電鐵	京城、山川、海山	三、〇〇〇 千円
京城電氣株式會社	同	仁川、馬山、鎮海	電燈、電力	京城、山川、海山	九、〇〇〇
鎮南浦電氣株式會社	鎮南浦		同	鎮南浦	一五〇
大田電氣株式會社	大田		同	大田	一二〇
大邱電氣株式會社	大邱		同	大邱	一〇〇
平壤電氣株式會社	平壤		同	平壤	三〇〇
元山水力電氣株式會社	元山		同	元山	一五〇
朝鮮電氣株式會社	清津		同	清津、羅南	五〇〇
群山電氣株式會社	群山		同	群山	一六〇
木浦電燈株式會社	木浦		同	木浦	二〇〇
清州電氣株式會社	清州		同	清州	五〇

新義州電氣株式會社	新義州	同	新義州	六〇
水原電氣株式會社	水原	同	水原	六〇
光州電氣株式會社	光州	同	光州	五〇
咸興電氣株式會社	咸興	同	咸興	四五

(リ)製材業 近時交通機關の整備に伴ひ各地著しく建築事業旺盛となり一面造船業の發達は益用材の需要を喚起し製材業の勃興を促せり從來朝鮮に於ける需要の大半は内地材、北海材の占むる所なりしに材質優良にして價格低廉なる鴨綠江材に壓倒せらるるに至りしより益斯業の隆盛を致し加ふるに將來鴨綠江材が大渠港に使用せらるるに至るへきを以て斯業の前途亦有望なり

(ヌ)製革業 從來朝鮮に於ては大規模の製革業を營む者なかりしか内地に於て皮革の需要増加せると朝鮮に於て原料牛皮の豊富なるは斯業の興起を促かし明治四十四年九月永登浦に於て朝鮮皮革株式會社設立せられ百萬圓の資本を以て百五十馬力の機關を具へ一箇年に數萬枚の牛皮を使用し軍靴皮革、クローム用革皮靴底革の製造販賣を主とし尙靴革具、布具類の製造販賣を營みつつ

あり殊に同社は歐洲戰亂勃發以來數次露國より靴、彈藥盒等軍需品の注文を引受け一時其の製産力を緊張せしめたり 又忠清南道大田に大田皮革株式會社あり設備未だ大規模ならざるも年年健實なる發展を遂げ前途頗る有望なり

(ル)石鹼製造業 從來石鹼の多くは殆ど輸移入品にして其の使用亦内地人を始め一部朝鮮人に限られたるか如きも爾來漸次需要を増加し其の範圍を擴大せむとし加ふるに朝鮮は一面豊富なる原料を抱擁するを以て茲に斯業の勃興を促し既に京城、釜山、平壤等に於ては工場を設け事業に従事せる者あるに至れり

(チ)纜綿業 全羅南道を主とし南鮮五道に於て陸地棉の栽培獎勵せらるると共に原棉の産出額増加したる爲規模大なる纜綿工場の外各地に於て企畫せらるるもの頗る多く特に木浦府は斯業の中心地として殷盛を極め米の群山に對し棉の木浦の名あり又朝鮮製綿株式會社(京城)か露國行脱脂綿の製造を試みたるか如き戦亂に伴ふ一時の現象なりとするも又斯業發展の一證左として見るへし今内地人の經營に係る工場統計を表示すれば左の如し

內地人經營工場

大正六年十二月末日

種別	工場數	資本金	職工數			生產品價格
			內地人	朝鮮人	外國人	
染織業	一五	九九、七五〇	一三三	一、九五四	二、〇八七	一一七、五三九
製綿業	一九	六、七五二、二三九	一一四	二、一三三	二、二四七	六、〇七三、〇七五
製紙業	三	一五、〇〇〇	一四	五一	六五	一四、五一六
製革及皮革製品業	八	一、九九一、〇三六	七三	五八一	六五四	三、五三一、六六三
窯業	六七	五〇六、五〇〇	三六八	一、六八七	二七〇	六三一、九四四
石鹼製造業	一〇	一一七、七〇〇	二四	四六	七〇	一六九、一七八
蠟燭製造業	四	二九、五〇〇	一六	五四	七〇	三〇一、〇〇〇
染料製造業	一	四〇、〇〇〇	七	一五	二二	九八、四三七
製絲業	二	四三、〇〇〇	八	一二七	一四二	四〇、一二五
肥料製造業	四	二八〇、〇〇〇	一四	四七	六一	一六五、〇一二
金屬工業	五七	二七九、二七〇	五七二	一、〇九六	一四	一、九九〇、七二九
木工業	一四	八一、五一〇	八三	五七	三〇	一〇二、六三六
製材業	一六	三九六、〇〇〇	五一	一三三	一四二	一、一三〇、一九五
船舶製造業	八	五四、五〇〇	一〇八	六	一四二	九〇、七七九

第十一章 工業

四〇一

種別	工場數	資本金	内地人	朝鮮人	外國人	數計	生産品價格
精穀業	一四三	三、五四九、七六六	四八六	七、三三八	四〇	七、八六四	四一、五一七、八六一
製粉業	九	一三三、一四〇	三〇	五二		八二	一六八、〇六二
製麵業	七	八七、五〇〇	二二	二〇		四一	五九、八七八
菓子製造業	二九	八二、七五〇	一〇一	四九	四	一五四	二九一、〇九六
煙草製造業	二一	二、二一四、四一三	三〇三	四、三五七		四、六六〇	六、〇一六、三三二
貝細工業	五	一一、〇〇〇	四	四九		五三	二一、二九六
釀造業	一〇八	一、九六八、四八五	四九六	二九八	一四	八〇八	一、八三五、三一八
製冰業	一	一〇、〇〇〇	七	七		一四	三〇、〇〇〇
清涼飲料製造業	六	三四、五〇〇	二六	四二		六八	六七、六三五
製鹽業	一五	三九八、一五〇	一八	二四〇		二五八	六七六、七七三
罐詰製造業	二三	三〇一、六三一	二一五	四九九		七一四	四五〇、五四三
印刷業	五九	六一七、九六五	四三二	一、〇五五	二	一、四八九	一、四〇〇、〇一四
バルブ製造業	一	?	五六	三五九		四一五	一二九、六〇〇
燐寸製造業	一	七、〇〇〇	三	四三		四六	三〇、〇〇〇
寒天製造業	二	四二、〇〇〇	一四	二一		三五	九七、〇〇〇

種別	工場數	資本金	職工數			生産品價格
			内地人	朝鮮人	外國人	
裁縫業	一二	九一、〇五〇	一〇八	八〇	一八八	三四一、九五〇
精煉業	二六	八、八三二、五五五	七六五	三、三五六	四四〇	四、五六一
瓦斯電氣業	一七	四、四〇二、五四八	一五五	一七八	四	三三七
其他	二三	一八八、九〇〇	九二	四八九	—	五八一
總計	七三六	三三、六六〇、三五八	四、九一七	二六、五九一	九六七	三二、四〇三
						八四、四〇一、五八五

本表は内地人經營に係る工場中職工五人以上を使用するもの又は職工五人以下なるも原動力を使用するもの若は一箇年の生産品價額五千圓以上のもののみを掲上せり

第三節 官營工業

官營工業としては龍山印刷所に於ける印刷業、平壤鑛業所に於ける煉炭製造業、新義州營林廠に於ける製材業是なり左に其の梗概を記すへし

(イ)印刷業 龍山印刷所は併合前明治四十年(隆熙元年)以來事業の擴張を計り工場の新築機械の増

置技術者の傭聘等に努め銀行券其の他精巧なる印刷物を出版せり今最近五箇年間に於ける事業の概況を表示すれば左の如し

印刷所事業概況

年 度	石炭		職工及雜役		給料		總額		平均一日 就業時間	生產品 格
	消費高	役人員	人員	延人員	員	職工及雜役	職工及雜役 一日平均一 人の給料			
大正二年度	二、一八八	八九	四六五	一六九、七二五	五九、四五三	八七、五八三	〇・五一六	九・二〇	三一四、七八三	
同 三年度	一、七一四	八四	四五八	一六七、一七〇	五八、〇〇二	八〇、三〇四	〇・四八〇	九・二〇	三三二、六三二	
同 四年度	一、五四三	七七	四〇四	一四七、八六四	五一、七二六	六八、六四二	〇・四六四	九・二五	三一、三七〇	
同 五年度	一、六六五	七六	四三〇	一五六、九五〇	五〇、四一三	七一、六八〇	〇・四五七	九・三〇	四〇〇、八〇四	
同 六年度	一、六八九	七七	五一四	一八七、六一〇	五〇、九〇九	八四、九八八	〇・四五三	九・三〇	五四九、七七五	

ロ)煉炭業 平壤鑛業所に於て製造せる煉炭は逐年需要増加の傾向ありて其の種類(第一種煉炭ピ
 ッチ入小型、第二種煉炭粘土入小型)に關せず賣行頗る良好なり大正五年度に於て第一種煉炭五
 千噸第二種煉炭六千噸を製造し大正六年度に於て兩者合せて一萬五千九百七十噸を製造し大正七

年度に於ては兩者合せて二萬噸製造の豫定なり

(ハ)製材業　營林廠に於ては原木を販賣すると共に一面に於ては直營の製材事業を行ひ以て需要者の便益に供しつゝあり而して其の製材の種類は從來は建築材の普通製材種類三十七種にして之を品質及樹種別に區別すれば一千五百二十種の多きに上りしを以て大正五年二月より其の種類を九百九十種に減殺せり

第四節　中央試験所

中央試験所は明治四十五年の創設に係り其の業務は之を分ちて分析試験、應用化學試験、窯業試験、染織試験、醸造試験、衛生試験の六部と爲し各其の専門に屬する工業及衛生試験に關する試験分析及鑑定に従事す本所は他より依頼に係る是等事項の試験に従事すると共に朝鮮に産する各種の原料に就て之か利用の道を講究し以て一般の參考に資するに努めつつあり從來試験事項の成績を發表したる主なるものは青化「アルカリ」の製造、合成石炭酸、朝鮮産植物染料として槐花の色素、紫根、「シ」ンナム「葉」の利用、咸鏡北道産粘土の研究調査、粃殻を原料とせる醋酸製造法、硬化油、岩泉「ラ」

漁具製造業	諸細工業	總計
—	—	—
—	—	—
—	—	—
—	三	五
—	—	二
—	二	三
—	—	二
—	—	—
—	—	二
—	—	—
—	五	二八

第六節 工業所有權の保護

從來朝鮮には工業所有權保護の制度存せざりしを以て帝國政府は明治四十一年八月米國と條約を締結し米國は其の本國に於て朝鮮人に對しても工業所有權の保護を與ふると同時に發明、意匠、商標の保護に關しては朝鮮に於ける治外法權を撤退し日本國は内地に行はるると同様の法令を朝鮮に施行し以て米國人の發明、意匠、商標を朝鮮内に於て保護すべきことを約せり仍て帝國政府は同年八月十六日を以て韓國特許令、同意匠令、同商標令を施行し四十二年十一月一日より韓國實用新案令を施行し統監府特許局に於て之を管理し此等に關する一切の事務を處理せしめたりしか併合と同時に

に韓國特許令外三令並統監府特許局を廢止し新に特許法、意匠法、商標法、實用新案法を朝鮮に施行し工業所有權保護に關する事務一切は特許局に屬すること爲れり而して従前の四令に依りて既得せられたる權利は特許法外三法に依りて設定せられたるものと同一に看做され其の權利の效力は我領土全部に及ぶと共に本國に於て既得せられたる權利は當然に朝鮮に於ても其の效力を保有するものと爲せり統監府特許局設置以來其の廢止に至るまで（自明治四十一年八月至同四十三年八月）に取扱ひたる事件數は特許四百六十八、意匠百二十三、商標千百十四、實用新案五十九合計一千七百六十四件なり

第七節 工業獎勵

篤志者にして工業傳習事業を企畫する者又は有益なる工業を經營するも事業創始の際收支償ふ能はざる者に對しては總督府又は地方廳は金品を補助し以て工業の發達に勗めつつあり又曩に韓國併合の際朝鮮人授産の爲下賜せられたる恩賜金の利子の一部を以て從來一般に副業として行はるる機業、製紙業等の改良を計り或は從來全く存せざるも將來有望なる副業たるへき繩臥製

造等の技術を傳習せしむる爲三箇月乃至六箇月の短期を以て習業し得べき工業の傳習所を各地に起し或は實地指導を爲す爲巡回教師を置く等各種の方法を講して手工業の改良發達を圖りつつあり

第八節 勞 銀

朝鮮に於ける内地人の勞銀は内地に於ける内地人の勞銀が昂騰せるに反し年年低落の現象を示せしは蓋し過渡時代に於ける一時的の變態にして新政の普及と共に各種の施設經營其の歩武を進むるに従ひ漸次需要供給調節し其の常態を出現するに至れり殊に近年歐洲戰亂の餘響を受け諸工業の勃興に伴ひ需要の増加と諸物價の騰貴とに因り内鮮人共其の勞銀著しく昂騰し就中朝鮮人の勞銀内地人に比し高率を示せるは注目に値すべき現象なり蓋し實業教育の普及に依り技術進歩し勞働卑下の弊風を打破して勤儉力行の美風を助長せしめたる結果に因らすんばあらず左に主要地に於ける勞銀を表示すへし

木		石		左		大		職業名	種別	京城	公州	群山	木浦	釜山	平壤				
挽		工		官		工		種別											
支那人	朝鮮人	內地人	支那人	朝鮮人	內地人	支那人	朝鮮人	內地人	支那人	朝鮮人	內地人	支那人	朝鮮人	內地人	支那人	朝鮮人	內地人		
●八三	●一四〇	●一〇	●九九	●一八〇	●八三	●八三	●一五四	●九〇	●一〇一	●一六九	●四	●一五〇	●一五〇	●一五八	●一五八	●一三七	●一三二	●一六二	
●五〇	●一五〇	●七〇	●一七〇	●八〇	●一五〇	●一五〇	●一五〇	●八〇	●九三	●九三	●九三	●一五八	●一五八	●一五八	●一五八	●一五〇	●一四〇	●一九六	
●九三	●一五八	●一〇五	●一八五	●九三	●一五八	●一五八	●一五八	●九三	●九三	●九三	●九三	●一五八	●一五八	●一五八	●一五八	●一五〇	●一四〇	●一九六	
●七五	●一五五	●一〇五	●一七五	●六五	●一五〇	●一五〇	●一五〇	●九〇	●九〇	●九〇	●九〇	●一三七	●一三七	●一三七	●一三七	●一三七	●一三七	●一三七	●一三七
●九一	●一五〇	●九〇	●一九〇	●六一	●一四〇	●一四〇	●一四〇	●七五	●七五	●七五	●七五	●一三二	●一三二	●一三二	●一三二	●一三二	●一三二	●一三二	●一三二
●九七	●一九五	●一三五	●一二〇	●二二七	●一九六	●一九六	●一九六	●八一	●八一	●八一	●八一	●一六二	●一六二	●一六二	●一六二	●一六二	●一六二	●一六二	●一六二

勞
(其の二) 金

大正六年

×印ハ 月給
*印ハ 月給
△印ハ 月給
(月給 月給 月給)
月給 月給 月給

鍛冶		車製造職		疊刺		滄ハ ンキ 職		煉瓦積		家根葺	
支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人
・八四	・一四〇	・八八	・一三四	・一三三	・一〇四	・九四	・一六四	・一六	・一三	・八四	・九四
・六〇	・一二〇			・一二〇			・一〇〇			・一三〇	・七〇
・八〇	・一二〇		・一五〇	・一六〇		・八〇	・一五〇	・八〇	・一六〇	・一〇〇	
・八七	・一六五			・一三七		・八五	・一三七				・七五
・五九	・一四〇		・一三〇	・一三〇		・八七	・一三〇		・一九〇		・一三〇
・六〇	・一二〇	・七二	・一五七	・一七〇		・八五	・一六七	・一五五	・一〇〇	・一九二	・七二

漁夫		農作夫 (日給)		男		軍擔 (背負)		人力車夫		平人足	
支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人
●七〇	●一〇〇	●一八	●三一	●三三	●三四	●七四	●四七	●八七	●六五	●四四	●七一
				●三五	●五〇	●五〇		●一五〇	●一五〇	●三五	●七九
△	△										
●七〇〇	●一〇〇〇						●四〇	●一五〇	●二〇〇	●四〇	●八〇
							●四五			●四五	
●三〇	●六〇						●三五	●一五〇	●一五〇	●五五	●六九
				●四三	●四〇		●四一	●一六〇	●一七〇	●四五	●六五

(其の二)

職業名		種別	新義州	元山	清津	平均	大正五年平均	大正五年	大正六年
左	大								
官 工									
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・〇五	円 一・九〇	円 一・〇五	円 一・八九	円 一・七五	円 一・〇〇	円 一・一九
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・〇〇	円 一・七五	円 二・〇三	円 一・八二	円 一・七二	円 一・〇〇	円 一・一四
支那人	朝鮮人	内地人	円 二・〇五	円 一・一五	円 一・〇三	円 一・六七	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・一〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 九・三	円 一・一五	円 一・〇三	円 九・〇	円 七・五	円 一・〇〇	円 二・二〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 八・三	円 一・一五	円 一・〇三	円 八・八	円 七・八	円 一・〇〇	円 一・一三
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・六五	円 一・六〇	円 一・八三	円 一・五八	円 一・四二	円 一・〇〇	円 一・一一

職業名	種別	京城	公州	群山	木浦	釜山	平壤
仲仕							
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 四・〇	円 一・五〇	円 一・七〇	円 一・六〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 九・七	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 五・五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇
支那人	朝鮮人	内地人	円 一・五五	円 一・〇〇	円 一・〇〇	円 一・一七	円 一・〇〇

	疊		塗ハ ン		煉		家		木		石					
	刺	職キ	瓦	積	葺	挽	工	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人			
	一・五〇		二・一〇	一・二五	二・一〇	一・五〇	七・七五	一・五〇	九・九五	九・九五	一・〇五	二・一五				
	一・〇三	一・六五	九・九〇	一・五五	二・一三	九・九九		一・二三	一・七八	八・八九	一・八三					
	一・五八		九・九〇	二・〇五	一・八〇	二・〇五	一・八五	八・八三	一・八〇	九・九五	二・一〇					
	一・〇三	一・五〇	八・八六	九・九三	一・五九	一・二〇	一・〇三	一・八七	七・七六	一・六一	八・八五	一・九二				
四一五	八・八三	一・四一	六・八八	八・八一	一・五〇	九・九〇	八・八一	一・六五	六・六三	一・四一	六・六〇	七・七四	一・四八	一・二二	八・八一	一・六九
	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	二・二七	一・〇六	二・三二	一・一五	一・〇六	二・三三	二・二七	一・一三	二・二一	二・一四	一・四二	一・一九	一・〇九	一・〇一	二・一九	二・一四

*

職業名		種別		新義州		元山		清津		平均		大正五年平均		大正五年大正六年															
車製造職	内地人	朝鮮人	支那人																										
																鍛冶	内地人	朝鮮人	支那人										
洗濯職	内地人	朝鮮人	支那人																										
															活版植字	内地人	朝鮮人	支那人											

第十一章 工業

農 作 夫	軍擔 (背負 人夫)		人力 車夫		平 人 足		薦 人 足		理 髮 職				
支那人	朝鮮人	內地人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	支那人	朝鮮人	內地人		
			●四五	●四五		●四五	●四五	●九〇	●三五		●〇〇		
	●四五	●〇〇	●五五		●一〇	●一七〇	●四五	●七五	●〇〇	●一五〇	●〇〇		
	●六四	●九五	●八四				●七四	●一五	●二一〇	●五八	●八八		
●五一	●四一	●七二	●四八	●九三	●二四	●一五八	●四五	●四六	●八四	●七九	●一三四	●五七	●九〇
●四五	●三六	●六五	●四三	●〇〇	●九五	●三四	●四四	●四一	●七四	●六三	●一二	●五七	●九七
●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇	●〇〇
●二三	●二三	●一一	●一一	●九三	●三〇	●一七	●〇二	●二二	●二四	●二五	●二〇	●〇〇	●八四

備考 本表は各地に於ける大正六年三月、六月、九月及十二月の見通平均勞銀なり

職業名	漁 仲								
	仕			夫			女 (日給)		
種別	支那人	朝鮮人	内地人	支那人	朝鮮人	内地人	支那人	朝鮮人	内地人
新義州			一・七〇						円
元山			一・二三		・三三	* 五三			円
清津		・九三	一・六三		・七五	一・一八			円
平均		・六四	一・一六		・六三	一・一九	一・一九	・二四	円
大正五年平均		・五九	一・〇九		・五八	一・一六		・二九	円
大正五年 大正六年	指								
		一〇〇	一〇〇		一〇〇	一〇〇		一〇〇	一〇〇
數		一〇七	一〇六		一〇七	一〇三		一二六	一二三

第十二章 貿易

第一節 總說

朝鮮の貿易は經濟の發達に伴ひ漸次増進の趨勢を示し殊に併合後は政府の産業上に於ける諸般の施設と民間企業の興隆とに因り著しき發展を告ぐるに至れり最近五年間の貿易額は左の如し

輸移出入品價額

年	貨物		金銀地金		合計		輸移出 入超過	
	輸移出	輸移入	輸移出	輸移入	輸移出	輸移入		
大正三年	千円 三五,〇三五	千円 六三,六九五	千円 九八,七五〇	千円 一〇,八三五	千円 三三三	千円 四五,八六〇	千円 六四,〇〇七	(-) 一八,一四七
同四年	千円 五〇,三三〇	千円 五九,六九五	千円 一〇九,九一五	千円 一一,七六四	千円 八三三	千円 六二,九八四	千円 六〇,五二八	(+) 三,四五六
同五年	千円 五七,八一九	千円 七五,一三四	千円 一三三,九五三	千円 一六,二二二	千円 一,六七二	千円 七三,九四〇	千円 七六,八〇五	(-) 二,八三五
同六年	千円 八四,九六三	千円 一〇四,〇九二	千円 一八九,〇五五	千円 九,六六五	千円 四六七	千円 九四,六二八	千円 一〇四,五九九	(-) 一〇,八七二
同七年九月迄	千円 九七,九七八	千円 一〇五,四三〇	千円 二〇三,三九八	千円 四,七六四	千円 三三三	千円 一〇一,七四三	千円 一〇五,七四三	(-) 四,〇〇〇

大正三年及同四年に於て輸移入貨物一時減退を示せるは時局の影響、一般財界の不況、土木及建築工事の不振、米價下落に伴ふ鮮人購買力の減退並外國米、滿洲粟、小麥粉等の如き鮮米代用品の入減等に基き又大正六年以降金銀地金の出入不況を呈せるは採礦上必要なる藥品其他の材料及勞銀の騰貴に由る小規模鑛業者の事業休止に基因せるものにして金鑛物の出増亦一因をなせり

備考 本表中には陸接國境貿易額を併算す

第二節 國別貿易

朝鮮貿易の對手國は廣く世界の各方面に渉り其の數少からさるも就中内地との關係最密接にして之を大正六年の貨物貿易額に就て觀察するに輸移出貿易の七割七分及輸移入貿易の七割は内地朝鮮間の貿易に屬し外國貿易は輸出二割三分、輸入三割に過ぎず而して諸外國中主要なるものは輸出に在りては支那及露領亞細亞にして輸入に在りては、支那、北米合衆國、英吉利、暹羅、英領印度、佛領印度、蘭領印度等とす主要通商國に對する最近五年間の貨物貿易額（陸接國境貿易を含ます）は左の如し

貿易價額國別

(一) 輸移出

年	內地	支那	露領其他	亞細亞諸國	通計	年	內地	支那	露領其他	亞細亞諸國	通計
大正三年	千円 二八五八七	千円 四五一八	千円 一一〇九	千円 一五五	千円 三四三六九	大正六年	千円 六四七五九	千円 二一九五四	千円 三三〇四九	千円 三六四六	千円 八三七七五
同四年	千円 四〇九〇一	千円 五五九九九	千円 二九〇四	千円 八八	千円 四九四九一	同七年九月迄	千円 八五二八八	千円 一〇五五五	千円 八〇三	千円 二二九	千円 九六八五四
同五年	千円 四二九六四	千円 八〇六二	千円 四七一五	千円 一〇六一	千円 五六八〇三						

(二) 輸移入

年	內地	支那	英領印度	蘭領印度	佛領印度	露領亞細亞	暹羅	英吉利	獨逸	白耳義	北米	其他	通計
大正三年	千円 三九〇四七	千円 七七一	千円 五〇七	千円 三六	千円 四〇三	千円 一〇三	千円 一八三七	千円 五四三	千円 九一八	千円 一八八	千円 六二七	千円 五七九	千円 六三三二
同四年	千円 四一五三五	千円 八〇三	千円 九九	千円 三三四	千円 四三	千円 一〇七	千円 三二	千円 四二八〇	千円 一九三	千円 六三	千円 三九三	千円 四八一	千円 五九一九九
同五年	千円 五二四九九	千円 九五六五	千円 二三〇	千円 一八七	千円 一一	千円 一七一	千円 三二	千円 四九九三	千円 二二	千円 一	千円 六五五	千円 五三六	千円 七四四七
同六年	千円 七二六九六	千円 二二六六九	千円 三三九	千円 一四二	千円 三三	千円 一六四	千円 四〇	千円 四〇五七	千円 三三	千円 二	千円 一一六〇	千円 五六三	千円 一〇二八八七

年	内地	支那	英領 印度	蘭領 印度	佛領 印度	露領 亞細亞	暹羅	英吉 利	獨逸	白耳 義	北米 含俄國	其の他 諸國	通計
大正七年九月迄	千円 七四、六六一	千円 一六、五五四	千円 一五、五	千円 四、五	千円 八、三三	千円 四〇、八	千円 三、五八	千円 二、七六八	千円 三	千円 一	千円 六八、八三	千円 八、五	千円 一〇三、九七二

大正四年以來露領亞細亞に對する輸出激増したるは時局の影響として皮革製品及米の出荷巨額に上りたる爲、大正三年に於て英領印度、佛領印度及暹羅よりの輸入激増を示せるは外國米の輸入巨額に上りしに因り又大正五年以降米國よりの輸入激増せるは時局のため歐洲交戰國產品の輸入杜絶又は澁滞より之を補充として米國產品に對する需要一般に増加せし結果なり

金銀地金の輸移出入に在りては殆んど内地との關係に屬し外國との間に出入する者は極めて僅少にして唯だ大正四、五兩年に於て北滿洲方面より金地金の輸入稍や見るべきものあるに過ぎず

第三節 港別貿易

朝鮮に於ける開港は仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、木浦、清津、城津、新義州、龍巖浦の十港なるも馬山及鎮海は内地朝鮮間貿易船の出入を許し又京城、大邱、平壤には税關出張所を置き開港

より保税運送に依る貨物の輸移出入を取扱ふ而して以上諸港の中釜山港は貿易額第一位を占め仁川港之に亞く此の兩港は實に朝鮮の二大關門にして釜山港は内地朝鮮間貿易を以て顯はれ仁川港は支那其の他歐米諸外國に對する外國貿易を以て聞ゆ其の他貿易額の大なるものは輸移出に在りては鎮南浦、群山、元山、木浦、新義州等にして輸移入に在りては京城、元山、鎮南浦、平壤、新義州等なりとす今各地に於ける最近五年間の貨物貿易額は左の如し

貿易額 港別

港	輸 出					輸 入				
	大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年九月迄	大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年九月迄
仁川	五五五六	八二二三	七二五九	九八六九	一〇五九三	一四二二七	二八三四	一七三九四	二二二九四	一八九一三
釜山	一一七九四	一七八九九	二二〇六九	三三二五〇	四二七〇三	一六九一〇	一四三五六	一六八三三	二四五二六	二五四八六
元山	一一四二二	三三三三九	四三七四	四七六一	二七六五	四二〇一	三三〇八	四二四四	五七三八	四八〇六
鎮南浦	三九六〇	四九八七	八二三三	一〇四八八	二二八八	二三五九	二五五五	三、八四四	八五七五	一、三二九
京城	六三三	一、〇九〇	二、一四五	二、二四四	一、五四三	一、一三六	一、一四四	一、四七六	一九〇六	一九九七
群山	六二七七	七二八九	五、三六〇	六、七六三	八、〇一七	二、七三四	三、三三三	二、二九二	一、五〇五	一、三〇九

港	輸 出				輸 入			
	大正三年	同四年	同五年	同六年	大正三年	同四年	同五年	同六年
木浦	千四 二四三九	千四 二六六八	千四 三、〇九三	千四 五、四四五	千四 一、八七八	千四 一、五八八	千四 一、八〇八	千四 二、三四四
大邱	二四八	三九二	三六	四〇二	一、四三九	一、六五一	二、五三六	四、四八三
馬山及鎮海	一六〇	二二七	二七六	六九六	九六九	九一七	九六六	一、一五七
清津	二七一	一八一	五九一	一、一三六	一、四七七	二、〇五七	二、四七四	二、八〇〇
城津	三七三	五〇三	八七	三、七三三	七六二	五六八	九二	一、三六〇
新義州及鏡南	一七六	二、〇〇六	二、九六八	四、九二〇	三、六二七	三、一三三	三、二四六	四、三一九
平壤	二八五	四二〇	四五一	五〇七	二、八五一	二、五五四	三、二三三	四、八二二
總計	三、四三八九	四、九四九二	五、六、八〇二	八、三、七五五	九、六、八五四	六、三、三三三	五、九、一九九	七、四、四七七
								一、〇、二、八八七
								一、〇、三、九七一

鎮南浦港の輸移出大正五年以來急増せるは久原製鍊所の設置に依り合金銀粗鋼の移出多額に上り殊に本年に入り兼二浦製鐵所製産の銑鐵移出開始せられたる爲、清津港の輸移出大正五年以來激増せるは時局の影響に因り隱元豆及豌豆の移出せられたるに主因し、城津港の輸移出大正六年に入り急増せるは久原甲山銅山の經營に伴ひ銅塊の移出巨額に上りし爲

又群山港の輸移出大正五年に於て不振を示せるは同年米穀移出不振なりしに因るものなり
 鎮南浦港の輸移入大正五年以來著しく増加せるは主として兼二浦製鐵所設備材料の輸移入
 せられたるに因るものとす

第四節 輸移出重要品

朝鮮の輸移出品は農産物及礦産物を主とし就申米、金及大豆は實に三大貿易品たり其の他金銀粗
 銅、銅塊、牛皮、棉花、魚類、紅蔘、繭、金礦、鐵礦、石炭、生牛、肥料、海蘿、鯨肉等は何れも
 重要な輸移出品なりとす今是等主要貨物に付き最近五年間の輸移出額は左の如し

輸移出重要品價額

品名	輸移出重要品價額					品名	輸移出重要品價額				
	大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年 九月迄		大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年 九月迄
米	千円 一七〇九九	千円 二四四、五七	千円 一九三、五七	千円 二七、四一七	千円 三、七二四、三三	鮮、乾鹽魚	千円 八八三	千円 八九七	千円 一、三、四九	千円 二、四、七	千円 三、六、七
大豆	千円 三、八一九	千円 五、一〇〇	千円 六、〇三三	千円 九、三七一	千円 六、三三〇	鯨肉	千円 三三二	千円 三、一六	千円 二、三、五	千円 三、七、四	千円 五、〇、一

品名	大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年 九月迄
人蔘	4,494	12,323	12,818	19,266	17,866
棉花	1,108	12,568	17,550	43,437	59,933
蘭	335	735	1,470	31,554	42,233
金	9,664	11,367	15,624	9,631	47,644
金鑛及砂鑛	570	930	1,044	785	1,330
鐵鑛	418	503	569	415	738
重石鑛	1	1	1,638	2,086	1,634
石炭	458	639	469	433	374
黑鉛	193	203	577	1,516	954
含金銀粗銅	1	1	1	1	1
銅(塊及錠)	1	3	3	3	3
牛皮	1,598	3,559	3,574	2,010	2,100
皮革製品	66	2,093	3,119	1,388	1,644
煙草	391	349	622	910	1,596
生牛	466	338	436	1,033	2,586
海藻類	346	396	433	708	994
肥料	955	917	1,063	1,447	1,390
陸接國境輸出品	647	78	1,017	1,188	1,134

本表の外本年に入り兼二浦製鐵所の事業開始に依り新に銑鐵の輸移出額(九月迄)五百七十五萬六千圓を算せり
 陸接國境地方輸出品の主なるものは生牛を第一とし其他、大豆、魚類、石油、綿織物、紙卷煙草及牛皮等なり

第五節 輸移入重要品

朝鮮の産業は農業を主とし工業は古來極めて幼稚なるを以て輸移入品は多く工業製造品に屬し就中綿織物は實に輸移入貿易品の大宗たり其の他小麥粉、砂糖、酒、石油、藥材、綿絲、麻織物、絹織物、紙、鐵、鐵道材料、機械、石炭、木材及板等は何れも重要なるものにして軌近企業の増進に伴ひ各種原料品の輸移入増進の趨勢あり今最近五年間に於ける主要品の輸移入額を示せば左の如し

輸移入重要品價額

品名	大正三年		同四年		同五年		同六年		同七年	
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	
米	二七三三	三二七	二七三三	三二七	二七三三	三二七	二七三三	三二七	二七三三	
粟	一一四八	七六六	一一四八	七六六	一一四八	七六六	一一四八	七六六	一一四八	
小麥	一一三七	六八四	一一三七	六八四	一一三七	六八四	一一三七	六八四	一一三七	
麥粉	五五五	八五三	五五五	八五三	五五五	八五三	五五五	八五三	五五五	
食鹽	一五二二	一五四一	一五二二	一五四一	一五二二	一五四一	一五二二	一五四一	一五二二	
砂糖	一五七四	一五二七	一五七四	一五二七	一五七四	一五二七	一五七四	一五二七	一五七四	
酒類	一四八六	八六九	一四八六	八六九	一四八六	八六九	一四八六	八六九	一四八六	
藥材	一一三三	一一三三	一一三三	一一三三	一一三三	一一三三	一一三三	一一三三	一一三三	
化學藥	二七五四	二七五四	二七五四	二七五四	二七五四	二七五四	二七五四	二七五四	二七五四	
石油	一一六七	一一六七	一一六七	一一六七	一一六七	一一六七	一一六七	一一六七	一一六七	
繩	五三七	六五五	五三七	六五五	五三七	六五五	五三七	六五五	五三七	
綿及打綿	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	一一〇七〇	
綿織物	一一三九七	一一三九七	一一三九七	一一三九七	一一三九七	一一三九七	一一三九七	一一三九七	一一三九七	
麻織物	一一六二七	一一六二七	一一六二七	一一六二七	一一六二七	一一六二七	一一六二七	一一六二七	一一六二七	

品名	大正					品名	大正				
	三年	四年	五年	六年	同七年 九月迄		三年	四年	五年	六年	同七年 九月迄
毛織物	千円 七八九	千円 五七六	千円 五七六	千円 六二二	千円 四四三	諸機械類	千円 一四八一	千円 一三三三	千円 三〇〇六	千円 四六六二	千円 七二六八
絹織物	九二六	九七三	二〇〇八	八四二	一八七	石炭	一七三三	一七六三	一八四〇	三五九六	五七五五
紙類	一三〇〇	一五〇〇	一九七一	二五七五	三〇四	木材及板	一六九四	一四三七	一三三八	一八〇五	三二四九
鐵及鋼條	一八三五	一四四〇	三一九九	三九〇六	四三三	セメント	四九二	六四五	七九〇	一六八五	一四四四
軌梁材料	五五三	七三三	五四八	一七九〇	一五九八	吠繩及筵	一〇八二	一、一〇二	七九〇	九八二	五二八
橋梁材料	五五三	七三三	五四八	一七九〇	一五九八	陸接國境輸入品	四六三	四九五	六七七	一、一〇六	一、四四八
車輛及船舶	一八二四	九九四	一〇三三	一七八二	三四六						

陸接國境地方輸入品の重要なるものは粟、其他穀物、木材、支那燒酎、人蔘、大豆油、生馬等なり

第六節 通過貿易

現今朝鮮に於ける通過貿易は内地、滿洲間に出入する貨物にして釜山、新義州間朝鮮鐵道を經由する

もの、内地と間島琿春間出入貨物にして清津港を経由するもの二者を主なるものとす而して大正六年に於ける通過貿易額は總計六千二百三十八萬四千圓にして之を前記經路別に掲記せば前者に在りては滿洲向四千九百六十萬七千圓、内地向一千三十七萬七千圓後者に在りては間島及琿春向百四十八萬三千圓、内地向九十一萬五千圓なり而して本年に於ては右の外、日本海橫斷航路の開始（四月）以來滿洲產貨物の京義、京元の二線を経て同航路を利用し内地に仕向けらるるもの三十九萬三千圓を算するに至れり

第七節 貿易船舶

朝鮮開港に於ける貿易船舶の出入港は輸移出入貨物並通過貨物の増加に伴ひ大勢増進の趨勢に在りしか近年船腹不足の關係上一時的現象として幾分減退を示せり而して此等貿易船舶は大部分日本船にして且内地朝鮮間の貿易船に屬し外國船は極めて僅少なるのみならず其の大部分は支那戎克とす今最近五年間に於ける入港船舶を示せば左の如し

貿易船舶入港

年	隻		合計	噸		合計
	汽船	帆船		汽船	帆船	
大正三年	四、一九三 <small>隻</small>	四、八八六 <small>隻</small>	九、〇七九 <small>隻</small>	三、九一〇 <small>千噸</small>	一、二六 <small>千噸</small>	四、〇三六 <small>千噸</small>
同四年	四、三九七	五、九四五	一〇、三四二	三、八四四	一、二八	三、九七二
同五年	三、八八四	七、六九四	一一、五七八	三、〇〇八	一、三九	三、一四七
同六年	三、〇九五	八、五二〇	一一、六一五	二、三八六	一、三九	二、五二五
同七年九月迄	二、三九七	九、三八四	一一、七八一	一、五九〇	一、五二	一、七四二

第八節 税關

朝鮮に於ける開港は明治九年十月釜山の開港を以て嚆矢とす次て同十三年五月元山同十六年一月仁川を開港す而して明治十六年釜山、元山及仁川の三港に税關を設置し更に同三十年鎮南浦及木浦の二港、同三十二年群山、馬山及城津の三港を開港し同時に税關を増設す其の後我が保護政治時代に移るや其の施設の一端として同三十九年京義鐵道開通後に於ける鮮滿貿易の爲税關支署を新義州に

設置し京城、平壤及大邱に税關出張所若は保稅貨物取扱所を設けて鐵道聯絡貨物其の他保稅回送貨物に對する通關事務の取扱を開始し又鴨綠江口なる龍巖浦は三十七八年戰役後事實に於て開港を爲りたるを以て同港に新義州税關支署の出張所を設置し次て四十一年北鮮地方に於ける交通貿易の發展に資せむか爲新に清津港を開港として税關支署を設置したり

併合後從來の開港の外更に新義州を開港を爲し從來の開港中馬山浦は四十四年一月以後之を閉鎖せるも之と同時に内地、臺灣及樺太と朝鮮との間に通航する船舶は税關の特許を受け馬山浦及行巖灣に出入するを得ることとなれるを以て馬山税關支署は依然之を存置し鎮海には翌四十五年一月新に税關支署を設置せり即ち現在の開港は仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、木浦、城津、清津、新義州及龍巖浦の十港にして開港貿易貨物の通關事務を執行する爲仁川、釜山、元山及鎮南浦の四箇所には税關、群山、木浦、馬山、鎮海、城津、清津及新義州の七箇所には税關支署、京城、大邱、平壤及龍巖浦の四箇所には税關出張所を設置せり其の他陸接國境貿易の爲指定せる各交通地點には税關出張所を設置し其の數咸鏡北道に十四箇所、咸鏡南道に四箇所、平安北道に十四箇所あり又鮮滿

國境列車直通に關する日支協約の成立に伴ひ四十四年十一月以後南滿洲鐵道安東停車場には稅關官吏を派出して鐵道聯絡貨物に對する通關事務の取扱を爲すことなれり尙關稅取締の爲全沿岸を通過して十七箇所の稅關監視署を設置し仁川及釜山の兩稅關には各百噸級、鎮南浦稅關には八十噸級の監視汽船を配置し龍巖浦稅關出張所及要地に在る稅關監視署五箇所には各五噸乃至七噸の發動機巡邏艇を配置しあり

		收 稅 額		大 正 六 年	
港		輸 移 出 稅	輸 移 入 稅	稅 關 雜 收 入	合 計
仁 川	四九、七二九	一、三一八、四二〇	一四、九三一	三、二九〇	一、三八六、三七〇
釜 山	四八二、八三八	一、六三八、九三〇	二六、五六三	三八、三七二	二、一八六、七〇三
元 山	五五、七三九	三、七九、一四七	一、九〇八	一、四三五	四三八、二二九
鎮 南	九八、五八二	二、八八、四九一	一三、一八八	二、〇七六	四〇二、三三七
京 城	四六、五七二	一、二一三、六一七	—	一、三七五	一、二七一、五六四
		円	円	円	円

總	陸	龍	新	平	城	清	鎮	馬	木	大	群
接	接	巖	義								
國	國										
計	境	浦	州	壤	津	津	海	山	浦	邱	山

八五二、八四二	—	一二九	三一、一三一	一九、七四二	二〇、九一六	九、五五八	九	一、一八三	一五、九六二	一四、〇〇八	六、七四四
---------	---	-----	--------	--------	--------	-------	---	-------	--------	--------	-------

六、四四二、二一八	八一、〇三七	九、〇九五	二五七、五六七	三一五、六六三	六一、一一〇	一九七、一〇三	一四、〇七五	五〇、六〇二	一四四、八〇三	三一、八一四	一六〇、七四四
-----------	--------	-------	---------	---------	--------	---------	--------	--------	---------	--------	---------

六八、〇八八	—	七四八	二、七一六	—	八七六	一、六三八	一、二五五	五三五	一、二七九	—	二、四五一
--------	---	-----	-------	---	-----	-------	-------	-----	-------	---	-------

七〇、八五〇	三、四三二	六一〇	三、二〇九	二、三五二	一四〇	二、一八〇	一、二八二	三七九	一四七	四三一	一四〇
--------	-------	-----	-------	-------	-----	-------	-------	-----	-----	-----	-----

七、四三三、九九八	八四、四六九	一〇、五八二	二九四、六二三	三三七、七五七	八三、〇四二	二一〇、四七九	一六、六二一	五二、六九九	一六二、一九一	三二六、二五三	一七〇、〇七九
-----------	--------	--------	---------	---------	--------	---------	--------	--------	---------	---------	---------

여 백

第十三章 林業

第一節 森林

朝鮮に於ける林野の總面積は約一千六百萬町歩を算し全土の七割三分を占め世界に稀なる山國なるに拘らず古來林政不備にして特殊の保護林たる封山の如きものを除く外は所謂公山と稱し一般人民の自由樵採に委して顧みさりしか李朝の末に至り此の保護林制度も廢たれ到る處濫伐を肆にし或は火田を起し或は急斜地を開墾して毫も植栽を志す者なく爲に林野の大部分は荒廢を極め僅に陵園墓附屬の森林及鴨綠、豆滿兩江の流域等に於て見るに足るの林相を保つに過ぎずして禿山曠野起伏し滿目荒涼を極め延て産業の發達を妨げ國土の保安を害し其の災禍擧て算ふへからず之か復舊改善の策を講ずるは洵に焦眉の急務を告げり茲に於て舊韓國政府は隆熙二年(明治四十一年)一月森林法を發布し一般山野の保護、整理、増殖を圖り盛に殖林を奨励したりしか半島の民情に適せざる點少から

さるものあるを以て明治四十四年六月朝鮮總督府に於て新に森林令を布き從來の森林法を廢して國土の保安、危害の防止、水源の涵養、公衆の衛生、魚附又は風致の爲必要ありと認むるものは之を保安林に編入し伐採、開墾若は放牧を爲すことを得ざらしめ又永年禁養林讓與の途を開き以て愛林の美風を助長するに努め或は造林貸付の特典を設け造林事業促進の策を講ずる等刻下の急務に努めつつあり今最近に於ける林野の概算面積を掲ぐれば左の如し

森林面積

道	成林地			無立木			合計	全面積に對する林野の割合			
	千町	千町	千町	千町	千町	千町					
京畿道	二二二	四一二	八一	七一五	五・八	黃海道	一一一	七三七	一五七	一、〇〇五	六・三
忠清北道	七一	三〇八	一五四	五三三	七・〇	平安南道	二二六	六三三	一三〇	九九九	六・五
忠清南道	九二	一八八	一八九	四六九	五・五	平安北道	八七九	一〇八五	四三一	二、三九五	八・〇
全羅北道	二四三	二四七	四一	五三一	六・三	江原道	六六七	九六〇	二七八	一、九〇五	七・〇
全羅南道	二三三	五九〇	一四八	九七一	七・七	咸鏡南道	一、四八一	五九二	四七一	二、五四四	八・一

慶尙北道	一八四	七六五	三六八二、三二七	六・九	咸鏡北道	八八一	二一四	五二三	一、六一八	八・二
慶尙南道	一八四	四八七	二一〇	八八一	七・〇	總計	五、四八四七、二一八三、一八一	一五、八八三	七・三	

即ち全面積大凡一千六百萬町歩の内成林地（疎生又は散生地を含む）は約三分の一に止まり残地の内約三分の二は天然生稚樹の生育地にして三分の一は草生又は禿裸地に屬せり

半島の氣候は南北に於て差等あり隨て北寒帶より南暖帶に到る迄各種の樹木を生し其の分布亦地方に由り同しからす北部鴨綠江及豆滿江の兩流域上流地方其他の高山に於てはタウヒ、テウセンカラマツ、テウセンハリモミ、タウシラベ、テウセンマツ、シラカバ等を主として鬱蒼たる樹林を形成し中部より南部に互り到る處テウセンアカマツ多く又クロマツ、ナラ、クヌギ、ケヤキ、エノキ、ハンノキ、クリ等を生し最南部に至ればカシ、シヒ等の常綠樹及竹林の存生するを見る概して森林樹木の種類に富み其の數七百種の多きに達せり從て造林樹種は比較的容易に之を撰擇し得へし

第二節 森林保護

國有林野の保護に就ては舊韓國政府に於て京城府内の森林に四保護區を特設し之を取締に努め明治四十五年五月に至り總督府令を以て國有森林山野保護規則を制定し地方長官をして國有森林山野保護の責任者たらしむるに共に特に保護の急要を感じたる京畿外八道の重要林野十六箇所に保護區を増設し各保護區に山林監守山林監守補を配置し次て大正二年九月に至り保護の要ある十二箇所の森林に對し山林監守所を新設し且濟州島に四箇所の巡查出張所を特設し専ら國有林野の保護取締に當らしめつつありしか又大正六年度に於て尙四箇所同七年度に於て一箇所を増設し都合二十五箇所の森林保護區を見るに至れり

尙其の他の國有林野に對しては從來の如く一般警察官憲をして保護取締の任に當らしめつつあり而して森林令に於ては地元住民に對し其の連帶の責任を以て國有林野の保護を命し報酬として之に林産物の一部を讓與することを得るの制を設け國有林野の保護を圖るに同時に地元住民に便益を與ふることとし大正三年一月實施以降大正七年九月迄の箇所數三百九十六其の區域面積百三十七萬九百九十一町歩に上れり

又私有林野に在りても單に私人の保護に委するに於ては動もすれば濫伐に流れ林野の荒廢を招くの虞あるを以て道長官は森林令に基き道令を發して之が保育並伐採を制限し以て其の取締を厲行しつゝあり此くの如く今日に於ては保護の施設略備り其の成績漸次良好に向ひ林相年を逐ふて改善せられつつあり

第三節 殖林事業

明治四十年以降國費を以て京城附近其の他に造林を行ふと同時に一般に種苗の無償下付を爲し又地方費及恩賜金經營に屬する苗圃に於ても苗木の下付を行ひ且各道に於て地方費模範造林を實行し又一面に於て國有林野の内存置を要せざる部分は民間に造林貸付を爲し事業成功の後無償にて付與し得ることとし大に造林の獎勵を行ひつつあり故に民間に於ける殖林事業は輒近異數の發達を遂げ各地に大小の企業家簇出して空前の盛況を呈せり就中東洋拓殖株式會社、釜山府並釜山學校組合、三井合名會社、株式會社中村組、朝鮮貴族林業組合普植園、川崎農場、住友吉左衛門等に於て既に大規

模の造林を行ひ又内鮮人富豪の造林計畫を立つるもの少なからず

上述の如く殖林事業逐年勃興の結果大正六年に於ける官民の植樹總本數は九千九百四十七萬餘本に達し之を明治四十三年の倂合當年の二百八十二萬餘本に比すれば約三十五倍の激増を示せり惟ふに朝鮮の林野は一般に甚だ荒廢に屬すき雖概ね其の地質造林に適し樹木生育狀態の如きも内地と殆ど異なる所なきと造林用樹種の多種なること即ち北部寒帶より南部暖帶に跨り生する七百種の樹木中喬木に屬するもの針葉樹十九種闊葉樹百三十六種外竹類三種ありて造林樹種の選定に苦しむか如きことなく人夫賃比較的低廉にして且殆ど地拵費を要せざる爲多く造林費を要せず且貸付を受け得へき林野は各地に散在するを以て希望する造林地を各道に求め得へく朝鮮各地共木材の高價なると同時に木材の大消費國たる支那に近接し居る等の得點あるを以て朝鮮の殖林事業は將來頗る有望なり借地造林に關する手續等に就ては本府に於て刊行せる「借地造林手引」あり造林樹種の選定養苗及造林方法等殖林上の注意に關しては「殖林手引」の記述あるを以て企業者は先づ之等に依り一般的概念を得るに足る

朝鮮の林野副産物は多種にして其の用途も極めて廣し其の中主要なるものは樹實類に於てはクリ、クルミ、テウセンマツ、イテウ 等にして就中クリは毎年約十萬石の生産あり近來内地に移出せらるる樹皮類に於てはハギ、シナノキ、ナラ、カシハ、アベマキ 等あり殊にナラ、カシハは鞣皮原料として毎年三十萬貫内外を消費す其の他漆樹は其の本數八十萬本を超え殆ど全土に渉り其の生育に適し漆液の品質も内地上等品と伯仲の間に在り採漆容易なるを勞銀比較的低廉なるを爲漆業亦漸く勃興の機運に向ひつつあり又椎茸、五倍子、藥料楓葉等も相當の生産額を見る

上述の如く朝鮮の殖林事業は概して有望なるを以て努めて民間に於ける養苗を奨励し以て斯業發展の基礎を養ひつつあり其の状況次の如し

(イ)官營苗圃事業 官營苗圃は明治四十年に於て國費苗圃三箇所を設置したるを嚆矢とし爾來歳々共に之を増設せしも其の後一箇所を除く外總て之を道の經營に移せり地方費及恩賜金に於ても各所に苗圃を開設し大正六年度末には其の數實に百箇所此の面積二百十八町步餘に達せり其の箇所數及面積を掲ぐれば左の如し

官營苗圃一覽

年 度	國費經營		地方費經營		恩賜金經營		合 計	
	箇所	面積	箇所	面積	箇所	面積	箇所	面積
大正 二年度末	一	一七・五	七六	一五九・六	四二	四一・二	一一九	二一八・四
同 三年度末	一	一七・五	八〇	一六四・〇	四一	四〇・五	一二二	二二二・一
同 四年度末	五	三三・八	八八	一九三・六	四〇	四七・二	一三三	二七四・六
同 五年度末	五	三二・六	七八	一九八・四	四三	四〇・〇	一二六	二七〇・九
同 六年度末	五	三七・〇	六八	一六六・三	二七	一四・八	一〇〇	二一八・一

備 考

- 一、大正二年度以降地方費經營苗圃の減少せるは整理の結果京畿道の郡、面及學校等の補助苗圃を私營に移屬したるに由る
- 一、大正四年度に至り國費苗圃の増加せるは林業試験苗圃及營林廠の苗圃を算入せしに由る
- 一、大正六年度に於て地方費苗圃の減少せしは私營苗圃の啓發に力を注きたりしと尙從來の苗圃に廢合整理を爲したるに由る

此等苗圃の一部分は未だ創設時代に屬するものあれども大正七年春の生産成苗數は千七百四十八萬本餘の多きに達し其の内山植苗として大正七年春季に無償下付を行ひたるもの百十四萬本國費及地方費の造林に用ゐたるもの百五十四萬本なり今國費、地方費、恩賜金に分ち苗圃の概況を記述すれば左の如し

一、國費經營苗圃 國費經營苗圃は明治四十年水原、平壤及大邱の三箇所に同四十二年京城、木浦及鏡城の三箇所に又同四十四年清州、晋州、全州、海州、義州、咸興、公州及春川の八箇所に新設し以て各道に一箇所（京畿道は二箇所）つつ計十四箇所を置き其の合計面積百二町歩に達せしも明治四十五年春季及大正二年春季の二回に涉り京城苗圃のみを國費に残存して他の十三箇所は地方費の經營に移し其の事業費を補助するこゝこせり而して京城苗圃は約二十六町歩餘の面積を有し専ら京城附近荒廢地に對する國費造林用の苗木を養成するに止めたり其の養苗樹種はアカマツ、クロマツ、ニセアカシヤ、クヌギ、ヤマハンノキ、カラマツ等にして大正七年秋季に於ける生産成苗數二百六十一萬七千餘本に上れり

二、地方費經營苗圃 地方費經營に屬する苗圃は明治四十三年忠清南道に於て之を開設し爾來全羅北道及黃海道を除くの外各道共に之を設置し漸次其の數を増加したるのみならず國費苗圃十三箇所此の面積八十七町歩を地方費に移屬したる結果大正六年度末には六十八箇所百六十六町歩餘に達せり而して地方費苗圃に於ける養苗樹種はアカマツ、カラマツ、ニセアカシヤ、白楊類、クマギ、クリ等を主なるものとす今各道に於ける狀況を表示すれば左の如し

地方費經營樹苗圃一覽

大正七年三月末日

道	苗圃數	面積	播種	插條	床替	据置	成苗數
京畿道	二	八・四町	七九	千本	一、九二七	千本	七四九
忠清北道	一一	二二・二	九一	二四	三、七〇三	二八	二、三五八
忠清南道	七	二二・〇	二四	三	一、九六〇	一	二、三一八
全羅北道	四	一一・四	三九	一二七	二、八三九	一	八二一
全羅南道	二二	一・九・一	七三	二二	六〇九	一	二、〇八八
慶尙北道	六	二一・七	五八	六	二、二六六	一	一、六三五
慶尙南道	二	四・六	九	九	一、〇五九	二五	二、二二七

黃海道	一	七・六	一八五	九	一、一五四	—	三一九
平安南道	四	一八・七	四五	二三	一、四五二	—	八一九
平安北道	三	七・〇	三	七三	九八〇	四	三五九
江原道	一	七・五	三四	九九	四七〇	—	四〇七
咸鏡南道	一	七・〇	一六	—	一五一	—	五二〇
咸鏡北道	四	八・〇	五	二三	一、四〇六	—	八二〇
總計	六八	一六六・二	七五九	四〇九	一九、九七五	六一	一六、四四〇

三、恩賜金經營苗圃 恩賜金を以て經營する苗圃は明治四十四年全羅北道外五道に於て開設し同年年度末に於て四十四箇所に上り更に大正元年度に於て四箇所を増設せる爲一時四十八箇所此の面積四十四町歩に達せしも整理の結果大正六年度末には二十七箇所面積十四町八反歩餘に減せり今其の狀況を掲ぐれば左の如し

恩賜金經營樹苗圃一覽

大正七年三月末日

道	苗圃數	面積	播種			挿條			業替			成苗數
			石	千本	千本	千本	千本	千本	千本			
黃海	八	一〇〇町						千本	千本	千本	千本	九〇
平安北道	二	一〇										一五三
咸鏡北道	八	三〇										一八〇
總計	二七	一五二	三	三	三	三	四四	四四	四四	四四	四二四	

(ロ)私營苗圃事業 前項に述べたる如く官營苗圃の養苗數漸次増加せりと雖駁駁たる殖林事業の發展は其の産苗數の下付のみを以て之を充すこと能はず遂に各所に私營苗圃の開設を見るに至れり而して其の養苗數は明治四十一年には三百二十一萬餘本に過ぎざりしか大正六年度末には七千三百八十四萬本に上り過去十年間に於て約二十三倍の盛況を呈せり尙既往に於ける私營養苗は概ね個人の經營に屬し小規模のもの多かりしも近年は殖林組合林業契等の組合苗圃殖林企業者造林用の大苗圃又は販賣を目的とする苗木商の大苗圃等續續設置するの氣運に向へり今大正六年に於

ける生産苗の概数を掲ぐれば左の如し

私營苗圃生産苗概數

大正六年

道	成苗數	幼苗數	合計	道	成苗數	幼苗數	合計
京畿道	七、五五〇 <small>千本</small>	九、四四五 <small>千本</small>	一六、九九四 <small>千本</small>	黃海道	一、〇六八 <small>千本</small>	一、三九二 <small>千本</small>	二、四六〇 <small>千本</small>
忠清北道	一四、〇七一	一二、三三六	二六、四〇七	平安南道	三、四六三	一、五三〇	四、九九三
忠清南道	九、六六〇	一七、七三四	二七、三九三	平安北道	三、七八六	二、七九三	六、五七八
全羅北道	一、五二〇	一、二二四	二、七四五	江原道	一、〇五三	二、七七〇	三、八二三
全羅南道	二、四五四	三、七七三	六、二二八	咸鏡南道	二、八三三	一、四八五	四、三一九
慶尙北道	五、一二九	八、三六七	一三、四九六	咸鏡北道	一〇、三七〇	二、七四〇	一三、一一一
慶尙南道	一〇、八八四	二二、九六七	三四、八五〇	總計	七三、八四二	八九、五五五	一六三、三九七

(ハ)官營殖林事業 殖林事業の官營に屬するものは國費及地方費の經營にして前者は明治四十年以

降後者は明治四十四年以降毎年引續き實行しつつ在り今最近五箇年間に於ける成績を掲ぐれば左

の如し

官營殖林事業

年	國		地方		合		計
	植栽面積	植栽本數	植栽面積	植栽本數	植栽面積	植栽本數	
大正三年	町 一三四・七	千本 一、三七八	町 二四九・一	千本 一、一六二	町 三八三・八	千本 二、五三九	石
同四年	町 一八三・二	千本 一、四六〇	町 二五〇・五	千本 一、三〇五	町 四三三・七	千本 二、七六四	石
同五年	町 二二六・六	千本 一、八一	町 二八四・三	千本 一、二三六	町 五一〇・九	千本 三、〇四七	石
同六年	町 二五七・〇	千本 一、四四五	町 四六二・〇	千本 一、六六五	町 七一九・〇	千本 三、一〇〇	石
同七年	町 一三〇・八	千本 九二七	町 三四六・七	千本 一、一三九	町 四七七・五	千本 二、〇六六	石
							一・五

一、國費經營事業 造林の模範を示し風致の増加を圖り且植栽に關する試験を行ふを目的とし明

治四十年京城白雲洞及平壤牡丹臺の二箇所に殖林を開始し爾後水原、大邱、開城地方にも造林を行ひたりしか近年に至り京城附近に於ける荒廢山野の造林に主力を注ぐこととし砂防植栽及普通植栽を行ひつつあり植栽樹種はアカマツ、クロマツ及ニセアカシヤを主としヤマハンノキ

クヌギ、白楊類之に次ぎ外に試植せる種類少なからず明治四十年以降大正七年に至る十二箇年間に於ける植栽面積は二千七百六十三町歩にして植栽苗數千三百萬五千本に達し播種高三十石餘に上れり

二、地方費經營事業 明治四十四年江原道に於て施行し大正元年には忠北、全南、慶北及江原の四道に同二年には更に京畿、忠南、全北、黃海、平南及平北の六道を加へ同三年には慶南及咸南を除きたる各道に於て同四年には各道に於て同五年には平北を除く他の十二道に於て同六年には各道に於て同七年には全南を除く他の十二道に於て植栽を實行せり明治四十年以降大正七年に至る八箇年間に於ける植栽面積千九百十八町歩餘、植栽苗數八百五萬二千本に達せり而して其の樹種はアカマツ、クロマツ、クヌギ、ニセアカシヤ、クリ及白楊類を主とせり大正七年に於ては二千五百四十町歩に達せり

右の外大正二年以來天然雜樹發生地に補植を行ひ之を保育禁養せる面積大正七年に於て二千五百四十二町歩餘に達せり

天然稚樹發生地保育成育

年	國		地		合	
	保育面積 町	補植本數 千本	保育面積 町	補植本數 千本	保育面積 町	補植本數 千本
大正三年	一〇・〇	六〇	二六・二	三八	二六・二	三八
同四年			四六五・六	二四	四七五・六	八四
同五年			五八二・九	八	五八二・九	八
同六年			一、二一四・八	一八	一、二一四・八	一八
同七年			二、五四一・九	一一	二、五四一・九	一一
累計	一〇・〇	六〇	四、八三一・四	一三〇	四、八四一・四	一五九

(三)私營殖林事業 民間に於ける殖林事業は近年長足の進歩を爲し造林企畫者各地に簇出せり就中

釜山府竝釜山學校組合の殖林事業は既に相當の林相を呈し斯業上參考に資すべきもの尠なからず

又東洋拓殖株式會社及三井合資會社株式會社中村組及住友吉左衛門等を始め各所に大規模の企畫者を續出し又一面地方住民中にも殖林の實行者勃興し新に植栽を行ふのみならず天然生の稚樹發

生地を保育禁養し極めて尠なる經費に依り比較的廣大なる殖林の實を擧げつつあるを以て私營殖林事業の前途は頗る多望にして大正六年に於ける植栽反別は二萬九千六十四町歩に上り植栽樹數九千六百三十五萬餘本に達せり

(ホ)記念植樹 愛林思想を涵養し殖林の事業を獎勵せむか爲明治四十四年四月三日併合後第一回の神武天皇祭日を期し朝鮮全道を擧げて記念植樹を實行せしに豫想外の好結果を收め總本數四百六十五萬本に達せり爾後回を重ねるに従ひ益好況を呈し大正七年に於ける第八回の記念植樹の如きは總本數二十四十萬二千本を植栽し之を第一回舉行の際に於ける植付本數に比すれば一千五百七せり而して從來の記念植樹に於ける植栽用苗木は國費、地方費及恩賜金經營苗圃の生産苗の無償下付せるものを充てたりしも下付苗木不足の爲天然苗の移植を行へるもの多かりしか故其の植栽後の成績に於て遺憾の點多かりしも殖林思想の普及に伴ひ漸次其の不利益なるを知得し豫め團體又は地方富豪、篤農者等に於て苗木を購入し置きて植栽に供するもの多きに至れるは最も欣ぶべき現象にして其の成績頗る良好なり

記念植樹は前述の如く回を重ねる毎に常に本数を増加せるのみならず廣く殖林の方法及森林愛護の必要等を直接間接に一般人民に周知せしめたる効果頗る大なり又記念植樹は將來繼續施行すべきを以て關係當局に於ては倍倍其の方法に考慮を加へて其の成績を擧ぐるに努むるは勿論一面殖林の範を示し指導獎勵方法として之を利用するに於て遺憾なからむことを期せむとす

植栽地は官公衛學校等の構内、道路の兩側、壇地又は部落附近等人見を惹き易き場所を主とせしも面模範林、御大禮記念林等各方面に設置せられて以來郡面の記念植樹は殆ど此の種の山野に行はるるに至れり都邑、村落附近の國有又は公有地に互り都鄙を論せず普く記念植樹を施行し之れを植付を爲すには官公衛の職員、學校職員生徒、守備隊、憲兵、面里洞長、金融組合員、農林業篤志者等は勿論一般人民老幼男女の別なく多數來會して之に従事するを常とす今植付本数を道別に擧ぐれば左の如し

記念植樹

道

第一回	(明治四十四年)	第二回	(大正元年)	第三回	(大正二年)	第四回	(大正三年)	第五回	(大正四年)	第六回	(大正五年)	第七回	(大正六年)	第八回	(大正七年)
-----	----------	-----	--------	-----	--------	-----	--------	-----	--------	-----	--------	-----	--------	-----	--------

京畿道	三一四	千本	五三九	千本	五一二	千本	六六三	千本	一、〇四七	千本	一、三九六	千本	一、五二三	千本	一、四四四	千本
忠清北道	三五二	千本	四三六	千本	三四〇	千本	九九六	千本	七五四	千本	六〇七	千本	七三四	千本	六一八	千本
忠清南道	三〇五	千本	三、五二九	千本	二、八二六	千本	二、五三六	千本	二、一四〇	千本	一、七一	千本	三、五五九	千本	二、七四五	千本
全羅北道	二五二	千本	八二四	千本	三〇〇	千本	三七一	千本	五六〇	千本	六二七	千本	七二二	千本	八八五	千本
全羅南道	二九一	千本	三四〇	千本	三八七	千本	四四三	千本	八二六	千本	一六一八	千本	一、〇五一	千本	七四二	千本
慶尙北道	六〇八	千本	七四〇	千本	八八七	千本	一、六八九	千本	七四四	千本	一、七三四	千本	一、七〇一	千本	二、二五二	千本
慶尙南道	四二七	千本	八七八	千本	八五二	千本	一、一七一	千本	一、二四〇	千本	一、五九九	千本	一、〇六〇	千本	九五八	千本
黃海道	一三九	千本	一五八	千本	五六九	千本	三二七	千本	七三一	千本	一、一五九	千本	一、〇三四	千本	七二七	千本
平安南道	四一八	千本	七六七	千本	五二四	千本	五二〇	千本	三五一	千本	二、二一五	千本	三、二〇二	千本	二、六二八	千本
平安北道	二九九	千本	二九五	千本	一九七九	千本	一、八六九	千本	二三八二	千本	二、二七四	千本	三、三六七	千本	三、四五八	千本
江原道	四七	千本	一六一	千本	一四二	千本	八二六	千本	一、四九五	千本	二、八七五	千本	一、一二七	千本	一、四七三	千本
咸鏡南道	一、〇二二	千本	一、一〇三	千本	二、四三七	千本	一、六一三	千本	二、三一六	千本	一、九四〇	千本	一、八九一	千本	一、六七三	千本
咸鏡北道	一八〇	千本	三九七	千本	六七七	千本	五四三	千本	七九九	千本	七二〇	千本	八五三	千本	八一〇	千本
總計	四、六五三	千本	一〇、一六五	千本	一一、四三一	千本	一一、五六七	千本	一五、三八四	千本	二〇、四七五	千本	二一、八二四	千本	二〇、四〇二	千本

(ハ)御大典記念殖林事業 大正四年秋季に於て舉行あらせられたる 御即位の大典を記念せむか爲
殖林事業を計畫實行したるもの少からざるも就中道、面又は學校組合等の公共團體の經營に屬す

るものに付ては一面造林の模範を示すへき趣旨に依り一定の制限面積内に於て國有林野を譲與するにせり而して其の譲與したる件數及面積を掲ぐれば左の如し

國有林野譲與件數及面積

大正七年六月末日現在

道 名	地方費模範林		面模範林		學 校		計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京 畿 道	一	一一六町	六四	八二四町	四	三九町	六九	九七九
忠 清 北 道	四	四	七	八	五	五	一六	一七
忠 清 南 道			二五	三四二			二五	三四二
全 羅 北 道			三〇	三〇〇	二	二六	三三	三二六
全 羅 南 道			一一一	八二六	四	六四	一一五	八九〇
慶 尙 北 道			一九五	一、八六六	二五	二〇三	二二〇	二、〇六九
慶 尙 南 道			九六	三五二	三	一七	九九	三六九
黃 海 道	一	五〇七	一六八	一、七九九	七	六七	一七六	二、三三三
平 安 南 道			一一〇	一、〇二九	一	一〇一	一一一	一、一三〇
平 安 北 道			七九	九三八	一	一	八〇	九三九

江原道								
成鏡南道			一五四	七四六		一九	一六〇	七六五
成鏡北道		四〇	四四一		六		四〇	四四一
總計	六	六二七	一、二二八	一〇、一九七	七〇	五五二	一、二〇四	一、一三七六

(ト)種苗下付 明治四十二年以降民間殖林獎勵の爲國費、地方費及恩賜金經營苗圃にて養成せる苗木及購入種苗の無償下付を行ひ其の數大正七年春迄に種子千六百五十一石餘、苗木約一億二千六百九十七萬本に達し逐年増加しつつあるも未だ民願を充たすに足らざるの狀況なり而して下付種苗の主なる樹種はアカマツ、ニセアカシヤ、クヌギ、白楊類及クリ等なり

(チ)林業試験事業 朝鮮の風土は内地に比し著しく相違せる爲森林山野の狀態も自ら特異の點あり其の荒廢の程度、治水及農牧等の關係並適良森林樹木等は内地と趣を異にするもの多く從て殖林事業上試験及調査を要する事項尠からざるを以て從來地方廳をして要求の事項に就き小規模の試験を行はしめしも地方廳は業務多端にして試験事業の如き細密なる業務を行ふに適せず良好の結果を得難きを以て大正二年度に於て京城城外及京畿道抱川郡蘇屹面光陵の二箇所に林業試験地を

設置し本府に於て必要適切な試験及調査を行ふことせり而して京城試験地に於ては主として荒廢山野に對する殖林及内外樹種の適否並生育に關する試験を行ひ光陵試験地に於ては主として天然林の更新、樹林下に於ける養苗と人工下種及普通荒廢山野の殖林に關する試験を行ひ既に成績を擧げたるもの四十餘頁あり

次に試験事業の一部として大正二年度より野生植物の調査を開始せり即ち本府職員及各實業學校職員等をして採集せしめたる標本に付囑託専門家をして鑑定を爲さしめ以て森林樹木、食用及救荒植物、工業植物、有毒及藥用植物並飼料植物の各植物籍を編纂し各種産業の開發に資することせり而して大正七年十月迄には既に濟州島、莞島、智異山、鷲峯、白頭山、金剛山及鬱陵島の各植物調査書、藥料植物調査書及森林植物編中槭樹科、殼斗科、樺木科、蕭線菊科、櫻桃科、梨科、薔薇科、躑躅科木犀科の編纂を了へたり

(リ)水源涵養造林 朝鮮の山野は到る處荒廢し就中水源地山野の禿蕪たるは各種産業開發上最遺憾とする所なるを以て大正七年度より錦江支流美湖川流域水源涵養造林の爲十一箇年繼續事業として忠清南北二道に年額五萬圓を補助することせり

第四節 造林貸付

國有林野に於ける造林事業の經營に關しては舊森林法に於ては單に部分林又は貸付の制を設けたるに過ぎざりしも現行の森林令に於ては朝鮮の現状に鑑み此等の方法を廢し新に造林貸付に關する特典を設け努めて造林を獎勵し急速に荒廢山野の救済を圖らむとする趣旨に出たり即ち造林の目的の下に貸付したる國有林野は事業成功の曉には貸付期間の満了と否とに拘らず之を無償にて貸付者に付與するの特典あるを以て此の制度に基き出願するもの比年激増するに至れり今最近數年間に於ける貸付件數及其の面積を掲ぐれば左の如し

年 度		造 林 貸 付			
年 度	貸付件數	面 積	年 度	貸付件數	面 積
大正二年度	八、〇七〇	六九、九三四 <small>町</small>	大正五年度	六、五七八	六〇、七八二 <small>町</small>
同三年度	七、四二五	九七、三二〇	同六年度	二、七八三	七四、五五三
同四年度	九、〇二二	四八、〇六〇	同七年六月迄	二九三	二二、四〇三

第五節 林野調査

朝鮮に於ける森林山野は明治四十三年中林籍調査を行ひたる結果其の分布の概況及面積の概要を知ることを得たりと雖尙國有私有の區分不明にして不便を感ずること甚しき故に速に其の區分を立て且國有林野の要存、不要存の區分を調査するの必要あり仍て明治四十四年度より之を調査に着手しつつあり今其の概況を示せば次の如し

(イ)從來の方針 營林廠所屬要存豫定林野約二百萬町歩は大正二年度より大正十一年度に至る十年間に同廠の事業として調査し其の他の要存豫定林野約三百萬町歩と第一種不要存林野約三百萬町歩計六百萬町歩は本府の事業として明治四十四年度より開始し主として權利關係の複雑なる地域荒廢甚しくして民間造林の急施を要する地域及河川水源地にして保護上重要なる地域より著手し
つつあり

(ロ)實施の方法 要存豫定林野に對しては境界を定め標識を設け五萬分一見取圖及調書を作製し其の複本を關係道、府、郡保護區又は警察官署に送付し又第一種不要存林野に對しては查了後直に

造林貸付等の處分を要するを以て各箇所毎に境界を査定し標識を設けたる上簡易なる實測を行ひ六千分一圖及調書を作製し其の複本を關係道、府、郡に送付す

(ハ)實施の成績 明治四十四年度に於ては最困難なる京畿道京城府及高陽郡内の調査に着手して二千百餘町歩を査了し大正元年度に於ては高陽郡内の調査續行及新に一府十郡二萬九千二百餘町歩を査了し大正二年度に在りては一府、四十三郡、二十一萬八千六百餘町歩、大正三年度に於ては三府、九十五郡、七十四萬七千七百餘町歩、大正四年度に於ては二府、八十二郡、一島、八十一萬三千餘町歩、大正五年度に於ては二府、八十一郡、一島、六十七萬七千七百餘町歩、大正六年度に於ては五十九郡、六十六萬七千四百餘町歩、大正七年度に於ては九月迄に十郡、二十四萬三千九百餘町歩を査了し累計三百三十二萬九千九百餘町歩を査了するに至れり

左に大正二年以降の調査成績を表示すへし

林 野 調 査

年 度	新 規 繼 續		調 査 組 數	延 組 數	延 日 數	調 査 面 積
	新 規	繼 續				
大正二年度	三七	七	七	三一	一、〇六三	二一八、六三九
同 三年度	七九	一九	一五	六一	二、五三四	七四七、七三六
同 四年度	三七	四八	一五	四〇	二、五七〇	八一三、〇七九
同 五年度	一八	六六	一五	三八	二、二二六	六〇七、七四二
同 六年度	二四	三五	一五	二五	一、六八五	六六七、四七四
同 七年九月迄	四	六	一五	六	三五六	二四三、九〇五
累 計	一九九	一八一	八二	二〇一	一〇、四三四	三、三九八、五七五

尙前記區分調査の外造林貸付、讓與及賣却の民願に基き特に處分上必要なる調査を行ひたるもの
及帝國大學演習林としての貸付地を調査し従て國有林の區域判明したるもの左の如し

年 度	種 別	調 査 箇 所 數	調 査 延 組 數	調 査 日 數	調 査 面 積
大正二年度	造林貸付及林野賣却 大學演習林貸付	一六九	一〇	三五七	四八、一四七
		一	一	一四	二五、八八二

同	三年度	造林貸付、林野賣却及讓與	九四四	一四	七二二	三四、三八五
同	四年度	造林貸付及牧草採取地貸付	一九	三	六	五、〇四八
同	五年度	造林貸付及林野賣却	四五	一〇	一六九	一八、八九三
同	六年度	造林野賣付及造林野賣却	二七	一一	一九〇	一七、三六九
同	七年九月迄	造林野賣及造林貸付、林野賣却及讓與	六	二	五六	一一、六九三
累	計	造林貸付、林野賣却及讓與、大學演習林貸付	一、二六八	五〇	一、四九〇	一三五、五三五
			四	一	一四	二五、八八二

第六節 林野整理調査

朝鮮に於ける林野の所有權又は占有に基く權利關係は古來曖昧混沌にして卒かに列明し難し若し現狀の儘推移せむか如何に植樹造林を奨勵するも其の目的を達すること容易ならざるを以て此等の權利關係を明かにする爲大正六年度より林野の整理調査を開始し其の權利關係を明確にし一面別途施

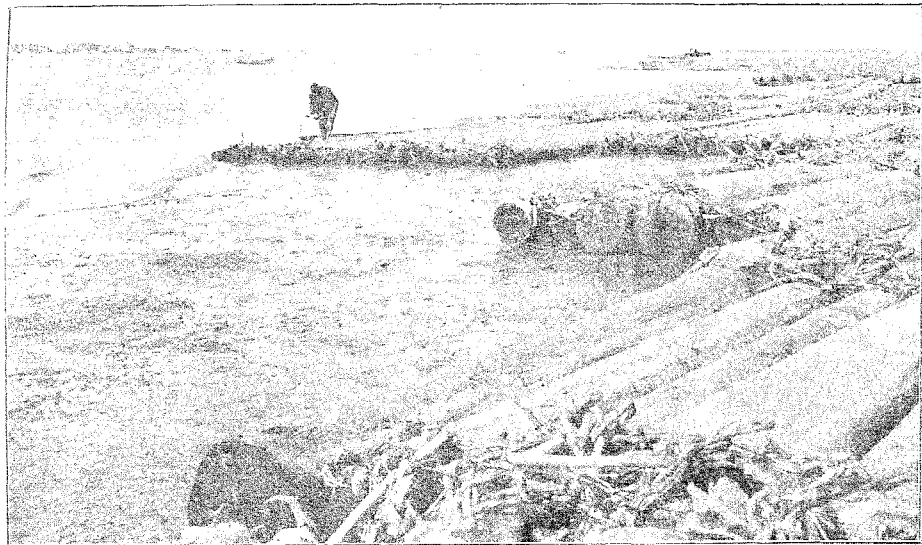
行しつゝある林野の區分調査と共に相俟つて國有林野管理上の根本政策を確立すると共に一般林業の開發を期せむが爲大正六年度より林野に對する權利思想の發達顯著なる地方京畿、忠北、忠南、全南、慶北、慶南、平南の七道の調査に著手し同七年度には其の他の道に於ても同様の調査を開始し大正七年九月末日迄に七百八十府面九十一萬三千五百六十三筆の調査を完了せり

第七節 營林廠

營林廠は鴨綠江、豆滿江兩流域に在る東洋有數の大森林を置營せん爲明治四十年四月統監府時代の創設にして本廠を平安北道新義州府に置き鴨綠江流域に於ては支廠を咸鏡南道惠山鎮及平安北道中江鎮の二箇所に、出張所を平安北道高山鎮に設け豆滿江流域に於ては出張所を咸鏡北道延岩及會寧に置き以て國有林野を管理經營しつゝあり

(イ) 所管面積、樹種及材積

本廠の所管林野は咸鏡南北道及平安北道の三道に跨り其の區域面積は約二百二十萬町に達し恰も内地國有林野全面積の半に上り其の成林地は凡そ九割三分即ち二百四萬町步にして主として寒帶



營林廠貯木所江岸の著筏狀況

の樹種を以て蔽はれ全面積に對して針葉樹約七割闊葉樹約三割を占む目下廠材として利用しつつある主なる樹種は針葉樹にては紅松、杉松及落葉松の三種、闊葉樹にてはテウセンヤマナラシ、シナノキ類ドロノキ類等とす今最近の見込に係る主要樹種の占領面積及材積を表示せば次の如し

成林地面積及材積

種別	鴨綠江流域		豆滿江流域		合計	
	面積 万町歩	材積 万尺メ	面積 万町歩	材積 万尺メ	面積 万町歩	材積 万尺メ
紅松	二二	二二、九四九	一〇	一〇、六〇五	二二	二四、〇九六
杉松	六五	四二、五七〇	二〇	一九、三四七	七五	五三、一七五
落葉松	二九	二二、一七三	二〇	一九、三四七	四九	四一、五二〇
計	一一六	八八、六九二	三二	三〇、〇九九	一四七	一一八、七九一
闊葉樹	四七	一一、五二八	一〇	四、七一九	五七	一七、二四七
總計	一六三	一〇〇、二二〇	四一	三四、八一八	二〇四	一三六、〇三八

右主要樹種の大要を擧ぐれば左の如し

(一) 紅松 ホンソウ

テウセンマツ即ち朝鮮五葉松の俗稱にして直徑三尺以上の大材からす其の材質は内地産扁柏材ヒノキと赤松材との中間に位し木理通直色澤佳良にして反張伸縮すること比較的少なし加ふるに工作を施し易きを以て各種建築用材家具用材枕木用材等として近來其の需要激増せり

(二) 杉松 サアス

タウヒ、タウシラバ及テウセンハリモミを併せたる俗稱にして略北海道のエゾマツ、トドマツに類似す材質は紅松に比し稍劣るも價格低廉工作容易なるが故に廣く建築用材、函材、木板其他製紙原料、燐寸軸木及包裝用經木原料として賞用せらる

(三) 落葉松 テウセンカラマツの俗稱にして樺太のシマタンマツに類似す樺太産は細丸太を主として大材斲きも廠材には直徑二尺内外の大材稀ならず年輪緻密材質強硬にして且耐久力に富むを以て建築、橋梁、船艦、枕木、電柱等に好適す

(四) 赤柏松 イチキ又アララギの俗稱なり蓄積多からざるも材質の優美なるは古來針葉樹中の王と稱せられ上等の茶棚、机、箱類、火鉢、茶器、杖、箸、櫛等の小細工に賞用せられ又良材は天井板、床柱等に用ゐて雅致を極む

(五) 檀木、チノナレカンバの俗稱にして材質樞材よりも堅く從來車輛材として賞用せられ近來は床柱、杖、盆、度量衡器、櫛等各種の新用途を開きつつあり

(六) 其の他の樹種、潤葉樹中マンシウクルミ、エンジユ、ハリギリ、キハダ、ヤチダモ、ニレ、マンシウシナノキ、カバ類、ナラ類、テウセンヤマナラシ、ドロノキ類等種種あるもドロノキ類、マンシウシナノキ及テウセンヤマナラシを燐寸軸木材として伐採するの外未だ盛に利用せらるるの時機に達せず

(ロ) 伐木運材及著筏

鴨綠江流域に於ては咸鏡南道甲山、三水、長津の各郡及平安北道厚昌、慈城、江界郡内、豆滿江流域にありては茂山郡内の森林より主としてテウセンカラマツ、テウセンマツ、タウヒ、タウシラマ、テウセンハリモミ等の丸材、角材、電柱、丸太、小丸太及鴨綠江流域よりテウセンヤマナラシ、ドロノキ類、シナノキ類を伐採しつつあり伐採は秋冬兩期に於てし運材は一部は輕鐵に依り大部は冬季地上の積雪及結氷を利用して牛曳、木馬、修羅等に依り江岸なる編筏土場まで搬出し

初夏解氷を俟つて編筏流下す流筏は通例五月より開始するも六月より九月に至る四箇月間最も盛にして十月下旬に至り終了す而して流筏事業は水流急にして比較的作業困難なる上流に於ては内地人筏夫を使用し流勢緩にして比較的容易なる下流に於ては主として朝鮮人筏夫を使役し少數の内地人筏夫をして之を指導監督せしめつつあるも近來内地人筏夫の缺乏に依り多少急流の區域に於ても鮮人筏夫を使用するの必要を生じ之が養成を圖りつつあり今最近五箇年間に於ける伐木、運材及著筏の材積を示せば左の如し

伐木、運材及著筏

年	度	伐	木	運	材	著	筏
大正	二	一〇六、〇四八	尺メ	一二四、四七九	尺メ	九三、二九八	尺メ
同	三	二四五、九〇二		一九九、六八九		八九、一九八	
同	四	一七八、五一八		一九一、二四七		二七一、九三二	
同	五	三四四、九四七		三二五、二九七		二五二、九五三	

同 六 年 度

三九〇、七一

五一九、九七六

二九八、〇七五

(ハ) 漂流木整理

明治四十二年三月鴨綠江採木公司と漂流木整理方法に關し協定を遂げ朝鮮側に漂著せしものは營林廠にて支那側に漂著せしものは採木公司に於て整理することとし更に大正三年中委員を設け整理上同一歩調を取ることに協定整理し來たりしか大正七年六月朝鮮水難救護令及附屬法令を改正し鴨綠江及豆滿江の漂流木に關しては營林廠長其の職務を行ふこととなれり今既往五箇年間に於ける漂流木の整理狀況を表示すれば左の如し

漂流木整理表

年 度	繰越數	拾得數	拾得漂流木流失數	返還數	廠受入數	殘 數
大正二年 度	五、五二九 <small>尺×</small>	二、〇九六 <small>尺×</small>	— <small>尺×</small>	七、四八八 <small>尺×</small>	— <small>尺×</small>	一三七 <small>尺×</small>
同 三年 度	一三七	一五四、五三七	四四、四六二	五〇、四八二	五五、二七七	四、四五三

年 度	繰越數	拾得數	拾得漂流 木流失數	返還數	廠受入數	殘 數
大正四年度	四、四五三 <small>八メ</small>	九、八三二 <small>八メ</small>	四八五 <small>八メ</small>	一一、八七一 <small>八メ</small>	—	一、九二九 <small>八メ</small>
同 五年度	一、九二九	五、四五〇	四九三	三、六五六	二、六八五	五四一
同 六年度	五四一	二七、六九〇	一九七	二二、五四六	二、五八一	二、九〇七

(三)製材

製材は第一、第二の二工場に於て各種建築用材、函材等を製作しつつあり大正六年度に於て製材法に一大改善を加へし以來著しく製材歩留及製材能力を増進し一日の製材力約四百五十尺縮まなれり今最近五箇年間に於ける製材と其の資材及歩留を示せば左の如し

年 度	製材及資材		
	製材	資材に要	歩留
大正二年度	一〇八、五三六 <small>八メ</small>	一八〇、七二八 <small>八メ</small>	〇・六〇

同	同	同	同
三	四	五	六
年	年	年	年
度	度	度	度
八四、一九八	一三三、四〇四	一五六、四四一	一三六、九二六
一三三、〇七六	二三七、八六八	三〇五、六六四	二四一、四九〇
〇・六三	〇・五六	〇・五一	〇・五七

備考

大正三年度に於ける製材量の著しく減少せるは同年度に於ては第二、第三工場の移轉工事を開始し八月以後は該兩工場を休止せしに由る又歩留の四年度以後減少せるは以前は資材は主として角材なりしを四年度より丸材に改めたるに由るものにして五年度に於て更に減少せるは主として軍用材の製材急を要せしを以て夜間作業をなせし爲なり

(木)販賣

近時一般財界の好況は諸事業の勃興と共に建築界未曾有の活況を呈し加ふるに朝鮮二箇師團増設用材及土木局用材の大部分は廠材を使用し加之銀貨の暴騰、船腹の不足、運賃の昂騰の爲價格著

しく高上したるに拘らず建築界旺盛の結果枕木、板類其の他木材の需要益増加し今や廠材の生産力を以て之か需要を満足せしむること能はさるの狀況なり

(一)立木拂下

現今に於ける拂下出願の趨勢及之か拂下許可の概要を述へんに近時一般に木材の需要著しく増加し従て立木の拂下を出願する者亦頗る増加せり然るに一面廠直營事業、林力、輸送力、勞力等の關係上拂下出願の全部を許可し難き事情あるを以て鮮外は勿論鮮内に於ける需要に對する出願と雖も特別の事由あり必要避くべからざるもの外は可成許可せざる方針の下に慎重調査の上之か拂下許可を爲しつつあり

第十四章 鑛業

從來朝鮮の鑛業行政は何等方針なく中央地方の官憲は孰れも任意に鑛業の許可を與へ頗る統一を缺きしか統監府設置後伊藤統監は舊韓國政府に勸告して明治三十九年七月新に鑛業法及砂鑛採取法を公布せしめ同年九月十五日より之を施行し且内地人官吏を招聘し其の局に常らしめ大に鑛業を奨勵し舊弊を一掃せり爾來内外資本家の朝鮮鑛業に注目する者頓に増加し操業の方法漸次改善せられ堅實なる發達を爲し朝鮮鑛業に一新紀元を劃したり而して右法令は併合後も依然其の效力を認め來りしか時勢の進運は舊套の墨守を允さず遂に大正四年十二月二十四日朝鮮鑛業令を制定し續て朝鮮鑛業令施行規則及朝鮮鑛業登録規則を發布し大正五年四月より之を施行せり同令は外國人が新に鑛業權を取得するを禁し舊法に規定なき新發見の重要鑛物を鑛業令の支配に屬せしめ鑛業權を物權とし不動産に關する規定を準用し鑛業上必要なる土地の使用及收用に付土地收用令中の規定を準用して一層鑛業權を保護せり左に大正二年以降に於ける鑛業出願及許可件數を掲ぐ

鑛業出願及許可件數

年	出願件數			許可件數			
	内地人	朝鮮人	外國人	内地人	朝鮮人	外國人	
大正二年	三八五	二一五	一〇	二〇七	一三五	一〇	
同三年	三五八	一七九	五	二一四	九三	一	
同四年	三八一	四〇三	三〇	二〇五	一五七	一八	
同五年	一九三二	一、〇八一	七二	四二二	三〇八	七四	
同六年	四、〇九一	二、〇九八	六、一八九	七六三	四六一	一、二二四	
		合計		合計		合計	
		一、〇	六、一〇	二、〇七	一、三五	一、〇	三、五二
		五	五、四二	二、一四	九三	一	三、〇八
		三〇	八、一四	二、〇五	一五七	一八	三、八〇
		七二	三、〇八五	四二二	三〇八	七四	八、〇四
		二、〇九八	六、一八九	七六三	四六一	一、二二四	一、二二四

大正六年末に於ける許可鑛區數は二千七百九十七にして前年末に比し九百七十六を増加せり左に之
 の鑛種別鑛區及坪數を掲ぐ

許可鑛區及坪數鑛種別

大正六年十二月末日

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
金銀鑛	九九九	四三六、〇五〇、一三六坪	銅鑛	六四	二四、九五三、六八二坪

鉛	安質母尼	水銀	亞鉛	鐵	タンクステン	水鉛	タンクステン	水鉛	鉛	燐	黒鉛
鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛	鑛
四	四	二	二	二二二	九三	二四	二一	三五六	二	二	四七五
一、四四七、六一六	一、三三〇、三五六	四一八、六八三	五、二一九、六八五	一〇五、〇九三、四一七	三三、三三三、五八一	九、〇五八、五〇六	八、七五〇、九七六	一四六、九九四、五二七	四四、三六四	八七、九三一、九〇二	
石炭	石油	雲母	石綿	高嶺土	矽砂	砂金	砂鐵	砂鐵	一切鑛物	總計	大正五年末
八三	一	八	一一	一五	二一	三六四	三	四	二、七九七	一、八二一	
三九、七六八、七三二	二五五、一六二	一、六一五、九五五	三、〇二八、四七六	三五八、八三六	一、六八三、一〇六	四一、五九四、六八一	一五四、一九一、一七一	八八六、八五四	一九三、三五七、四四一	一四三、一六六、六七四	一五六、一一、四二
						八一、二、一一、六九七	一三五、三五、一一				

本表には本府所屬金鑛區三件、石炭鑛區一件及雲山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを掲上せり×印は河床の延長に依り許可したるものにして單位を里・町・間とす次表亦同じ

大正六年末現在鑛區二千七百九十七に就き稼行數を見るに同年中多少に係らず鑛産物を産出せるも

の五百六十三にして前年に比し八十五を増加せり而して總鑛區に對する稼行鑛區割合は百分中二十強に相當す左に之を表示す

稼行鑛區及坪數鑛種別

大正六年十二月末日

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
金銀鑛	二〇六	一一七、九六〇、八六五	黑鉛	一三〇	二二、三〇七、〇四七
銅鑛	一〇	六、一一〇、三二九	石炭	一四	四、六三八、九七一
鉛鑛	一	九六四、〇八三	雲母	一	六二、七三八
安質母尼鑛	一	九〇七、一三七	高嶺土	六	一四三、七八八
亞鉛鑛	一	七五二、七五八	硅砂	一七	一九八、四二九
鐵鑛	二二	一一、九八九、三四〇	砂金	六七	一一、八二九、九〇六
タンクステン鑛	一九	七、四六〇、〇九二	砂錫	一	三七、二五、四〇〇
水鉛鑛	五	一、七一二、九二四	總計	一〇	一、二八、二五
タンクスレン鑛	五	一、七七一、五一四	大正五年末	四	一九三、三五七、四四一
水銀鑛	五	二五、九一三、三一〇	大正五年末計	四七	四〇九、〇九〇、六七二
鉛鑛	三			三八	三九、一八、〇五
				七八	三八三、七四四、八三二
					五七、一六、一三

大正六年中に於ける鑛産價額は千七百五萬八千二百圓にして前年に比し二百九十七萬九千九百十四圓を増加せり

種別		鑛産額		大正六年十二月末日	
種別	數量	價格	種別	數量	價格
金	一、三六二、一八九 <small>匁</small>	六、三五四、九二九 <small>円</small>	鐵鑛	一四〇、六五三 <small>噸</small>	四〇一、〇八一 <small>円</small>
砂金	九八、九三八 <small>匁</small>	三九二、六三五	銑鐵	三、七〇〇 <small>匁</small>	二三〇
金銀	七、三一三、二九八 <small>匁</small>	八九〇、一九一	鐵鑛	八六、七五四 <small>匁</small>	四二七、六二〇
汰銀	二、三五四、六七二 <small>匁</small>	二、九七六、七六二	タンクステン	一五、七八五 <small>匁</small>	三八、〇六七
銀	二一九、五五二 <small>匁</small>	四五、七一三	水鉛鑛	一四、七二八、八八〇 <small>匁</small>	一、〇〇一、二九九
銅鑛	八〇、六五三 <small>匁</small>	七七、五八四	黑鉛	一九五、一四〇 <small>匁</small>	一、一四九、五三二
粗銅	三、七三四、一七〇 <small>匁</small>	二、六〇三、八七九	石炭	二一〇、四〇〇 <small>匁</small>	三、八三九
鉛鑛	一八七、六五六 <small>匁</small>	四二、五九九	高嶺土	三三、五二三、三〇五 <small>匁</small>	一九、五三九
鉛	一、一七四、九七五 <small>匁</small>	二九六、三二八	硅砂	一、四九一、七三四 <small>匁</small>	三三六、〇一五
亞鉛鑛	六四、六〇〇 <small>匁</small>	一〇、二六〇	其他鑛物	—	一七、〇五八、一〇二
總計					

(イ) 鑛床調査 鑛床の一般調査は明治四十四年度以降毎年施行し來りたるが其の目的は從來不明瞭なりし朝鮮に於ける鑛床の性狀を概査し以て其の鑛業的價値を窺知すると共に一面鑛業行政の參考に資し他面企業家の調査に便するに在り即ち事業開始の初年度には平安北道の北部、平安南道の西半部、黃海道の西部及咸鏡南道の南部を大正元年度には平安北道の南部及西部、平安南道の東半部及咸鏡南道の中部を大正二年度には平安北道の殘部、黃海道の東部、咸鏡南道の北部及咸鏡北道一圓を大正三年度には京畿道及江原道一圓を大正四年度は忠清北道の大部及慶尙北道一圓を大正五年度は忠清北道の殘部、慶尙南道及全羅南北道一圓の調査を爲し以て朝鮮全道の概査を終了し大正六年度は以上の調査後新に發見せられたる重要鑛床に就き補足調査を行ふと共に既往調査の結果を記載すへき鑛床調査報告書及鑛床調査要報を作成し現在刊行しつつあり大正七年度に於ては鑛床調査の組織を變更して地質調査所を設置し地質鑛床の調査を開始せり

(ロ) 特許鑛山 明治二十七八年戰役後諸外國人にして朝鮮半島の利權に注目する者頓に増加し互に相競ふの狀況なりしが明治二十九年四月十七日米國人「セームス・アール・モールズ」に雲山郡一圓

に於ける一切礦物を採掘するの權利を特許したり是れ實に外國人に礦山を特許したる嚆矢にして在留諸外國使臣をして最惠國條款を名とし時の政府に對し續續其の要求を提起せしむるの備を作られたるものにして即ち同年咸鏡北道慶源、鍾城礦山を露國人に、三十年江原道金城礦山を獨逸人に、三十一年平安南道殷山礦山を英國人に、三十三年稷山礦山を日本人に、三十四年昌城礦山を佛國人に、三十八年厚昌礦山を伊太利人に、同年遂安礦山を英國人に各特許したり而して慶源鍾城礦山は事業著手の機に至らずして日露戰役に遭遇し明治三十七年五月韓國政府は露韓兩國間の條約並露國人民若は會社に對する特許合同等は總て之を廢罷する旨勅令を發布したる爲本特許は消滅に歸し金城及殷山礦山は礦況不其の爲之を拋棄し稷山礦山は其の後日本人より内外人共同組織の稷山礦業株式會社に讓渡し同會社は更に礦業令に依り礦業權を取得すると同時に特許權を拋棄し現時存續するものは雲山、遂安、昌城、厚昌の四礦區なりとす

一 雲山礦山 明治二十九年四月十七日朝鮮王室と米國人「セームス・アール・モールズ」と共同して一會社を組織し雲山郡一圓に於ける一切の礦物を契約の日より二十五箇年間採掘するの特許

を與へ會社は資本を百株に分ち王室は其の二十五株を所有し鑛山所屬の財産及生産物の課税を免し外國より輸入する材料及生産物輸出の關税を免除すること等協定の下に成立したるものなりしが明治三十二年三月二十七日前協約を更訂し王室の持株二十五株は全部之を鑛山會社に下附すると同時に會社は二十五萬圓を進獻し以來毎年二萬五千圓を上納することと爲し鑛山は全然米國人の手中に歸せり而して前記「モールス」の組織したる會社は該鑛山に關する一切の權利義務を舉て東洋合同鑛業會社に讓渡し今日に及へり

同鑛山は現時五坑の採鑛所三箇の搗鑛混汞場及二箇の青化製鍊場を有し鑛夫雜夫約二千人を役し大規模の操業に従事し最近一箇年の産額は三百十七萬四百圓にして事業開始以來の産額累計五千四百六十五萬六千八百二十六圓に達す

二 途安鑛山 明治三十八年十月四日英國人「アーサー・レウエレンヒヤース」特許を受け翌年八月十五日「コレアン・シンダクト」の所屬に歸し現時「セウル・マイニング・コムパニー」之が經營に當れり明治四十二年事業著手以來漸次規模を擴張し現時笏洞及楠亭の二箇所に採鑛場及製

鍊場を設け大規模の操業に従事せり最近一箇年の鑛産額は三百三十五萬七千七百七十七圓に達し雲山鑛山を凌駕するに至れり

三 昌城鑛山 本鑛山は明治三十四年六月七日佛國人「サルタレル」と舊韓國政府との間に締結したる探鑛特許合同に因り取得したるものなり

探鑛場及製鍊場は東倉面大楡洞及東沙洞に在り最近一箇年の鑛山収入は八十四萬三千六百五十六圓にして操業に要せし經費六十一萬千七百七十二圓を控除し二十三萬一千八百八十四圓の純益ありしと云ふ

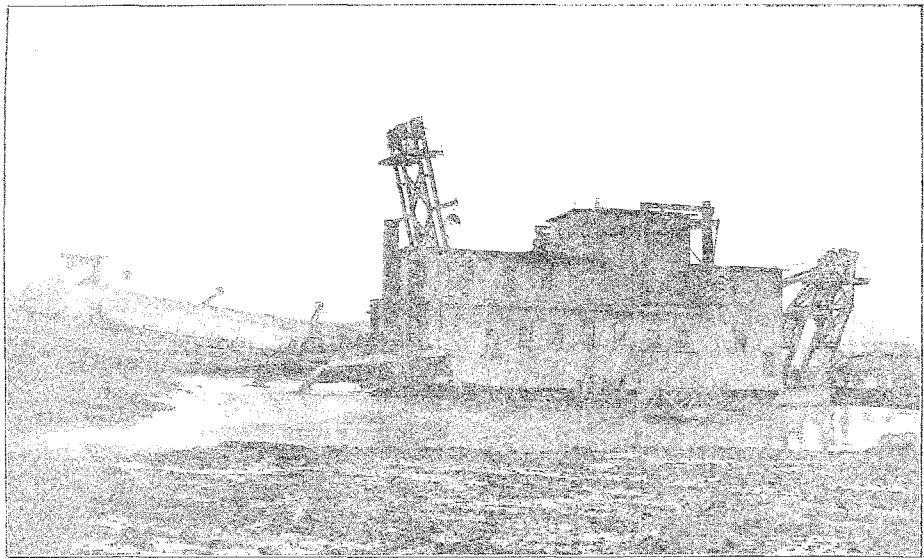
四 厚昌鑛山 本鑛山は明治四十二年「ソシエタ・イタリアナ・ミニエーレ・コレア」鑛業權の特許を得伊國人「チリオロ」商會主に於て探鑛の傍小規模の探鑛及製鍊に従事しつつありしか大正六年十一月厚昌鑛業株式會社の經營に移れり

(ハ)金 金は朝鮮鑛産物の主位を占む其の鑛山の著名なるものは東洋合同鑛業會社(米國會社)に屬する平安北道雲山金山及漢城鑛業會社(米國會社)の經營に係る黃海道遂安鑛山なり此の兩鑛山の

産額は朝鮮産金額の主要部分を占む稷山鑛山（米國會社屬）昌城佛國人金鑛山（佛國人所屬）龜城古河金山、小林樂山金山亦相當の規模を有する鑛山たり順安及稷山は主要なる砂金地にして共に機械操業の準備として試錐調査中の處稷山は既に調査を終了し大正六年末機械操業を開始し相當の成績を挙げつつあり其の他永同、統營、登津、泰川、熙川、定州及洪州等に於ける諸鑛山は將來何れも有望なり又大正三年度より本府に於て試掘に著手せる尙州、義州及新興の三金鑛地は何れも相當の鑛量あるを確めたり

金鑛製鍊の方法は混汞青化の二法夙に行はれ而かも完備せる設備を施行せる者は寥寥たりしか大正三年に至り久原鑛業株式會社は鎮南浦に熔融製鍊所を創立し同年十月より買鑛製鍊を開始せり該製鍊法は朝鮮金鑛に通有なる混汞青化の難物たる硫化鑛の處理に最も適するか故に今後朝鮮金鑛山の開發を促進する尠少に非ざるへし

（三）鐵鑛 朝鮮は鐵鑛に富み殊に褐鐵鑛の産出最多し黃州及黑橋驛附近より西兼二浦に到る間及平安南道价川郡に見出さるる者は褐鐵鑛にして載寧、殷栗の鑛山も亦此の類なり而して褐鐵鑛に亞



機 械 取 採 金 砂 鑛 山 稷

き産出の多きは赤鐵鑛にして安岳鐵山は即ち是なり磁鐵鑛も亦各所に見出されざるに非らずと雖採鑛未だ盛ならず鐵鑛中最産出の多きものを載寧、殷栗の二鑛山とす共に黃海道に在り從來舊韓國政府の經營に係り明治四十一年より採掘を開始したりしか四十三年一月農商務省の所管に移れり麻生鑛業合資會社所屬安岳鐵山、北海道製鐵株式會社所屬价川鐵山及利原鐵山株式會社所屬利原鐵山等亦相當の産額あり三菱製鐵株式會社所屬載寧及黃州の鐵山も採鑛愈進歩し大正六年以降採掘搬出を見るに至れり其の他端山、端川、三陟、江陵、茂山地方に鐵鑛床の發見せられたるあり現時専ら採鑛中に屬す供給の現況は八幡製鐵所の需用額約二十萬噸を載寧、殷栗及安岳の三鑛山より供給し室蘭製鐵所の四萬餘噸を价川鑛山及利原鐵山より供給するにあれとも内地製鐵事業の發展及兼二浦製鐵所の製鐵能力の増進に伴ひ産額漸次増加すへし

(ホ)石炭 無煙炭は朝鮮に於ける主要にして且特有なる鑛産物の一に屬す平壤無煙炭田は明治四十年以降官營と爲り平壤鑛業所を設置し採炭事業に従事せり採炭場は目下十坑あり鑛量頗る豐饒にして品質優良なり其の百分中に於ける主成分は揮發分七乃至二〇、該炭七〇乃至九〇、灰分四乃

至一五にして硫黄を含むこと甚た少し最近數年間に於ける産額及販賣高は左の如し

平壤鐵業所採炭額

平壤鐵業所採炭額				平壤鐵業所採炭額			
年	採掘高	販賣高	同上價額	年	採掘高	販賣高	同上價額
大正二年度	113,017 <small>噸</small>	9,459.9 <small>噸</small>	8,583.0 <small>円</small>	大正五年度	18,922 <small>噸</small>	13,808.3 <small>噸</small>	13,046.7 <small>円</small>
同三年度	152,549 <small>噸</small>	13,299.9 <small>噸</small>	12,564.7 <small>円</small>	同六年度	15,434 <small>噸</small>	11,000.1 <small>噸</small>	11,747.6 <small>円</small>
同四年度	325,697 <small>噸</small>	16,703 <small>噸</small>	15,866.1 <small>円</small>				

採出炭は平南線に由り鎮南浦より内地に積出し其の大部分は山口縣徳山海軍煉炭製造所に供給す從來知られたる無煙炭賦存地は前記平壤鐵業所採炭區域たる平壤無煙炭田のみなりしと雖鐵床調査の結果單に之に止まらず平安南道价川、順川、徳川、孟山及江原道三陟の諸郡に布衍せるを確め其の品質常に平壤無煙炭に劣らざるのみならず尙堅硬なる塊炭を存するに至れり

褐炭は其實優良ならざるも分布甚た廣し其の主要なるものは平安南道安州炭田、慶尙北道長鬐炭田、咸鏡南道咸興炭田及咸鏡北道鏡城炭田、會寧炭田等にして其の他東海岸及豆滿江沿岸に沿ひ

炭田の散在するもの尠からず

種別	揮發物	固形炭素	灰分	硫黄
長 安 鏡 鑿 州 城 炭 炭 炭	二六・八〇 四一・一〇 四三・七七 五六・九四	二四・一四 三八・二〇 四〇・一三 三二・二四	三六・九三 八・一八 三〇・三 九・三二	三・二二 〇・一九 — 〇・五八

(へ) 黒鉛 鱗狀、纖維狀、葉理狀、土狀等の種類あり鱗狀、纖維狀の良質のものは主成分百分中九〇以上の炭素を含有し多く成鏡北道、平安北道に産し葉理狀及土狀の品位の稍劣れるものは南朝鮮に産出す平安北道龜城、楚山、昌城並朔州附近より産出するものは鱗狀を爲して品質優良なり主として内地鑛業家に依り採掘せられ鱗狀黒鉛は大部分内地の需要に供し土狀黒鉛は海外に輸出す而して歐洲戰爭勃發後船腹の不足保険料の昂騰等の爲輸出向土狀黒鉛の産出減少したれども結晶黒鉛は内地製鋼事業の勃興と其の主産地たる錫蘭島黒鉛の輸出禁止に依り米國市場に販路を得

たるに依り大正六年中黒鉛鑛業は未曾有の盛況を呈したるか近時米國に於て黒鉛の輸入を制限したる爲海外輸出の途絶へ内地の需要亦供給に伴はず一時勃興したる黒鉛山は續續休山するの悲況に陥りたり

(ト)銅 銅鑛の既知のものを擧ぐれば威鏡南道の甲山及慶尙南道の昌原及平安北道の厚昌に於ける銅山等なりとす甲山銅山は初米國人の所有に係り明治四十三年以降引續き探鑛中なりしか大正五年五月久原鑛業株式會社の經營に移り大規模の設備に依り採鑛製鍊に著手せり

(チ)亞鉛 亞鉛鑛床は銀鉛と共生するを常とするを以て従來銀、鉛鑛と認められ従ひて其の發見は實に近年の事に屬するに拘らず今や有望なるもの少なからざるに至れり其の主要なるものを平安北道寧邊郡蘇民洞及威鏡南道端川郡檢徳に於けるものと共以往古銀鉛山として稼行し共生せる多量の亞鉛鑛を遺棄せるものなり而して前者は現時藤田鑛業株式會社に由り採掘せらる後者は未だ採掘に著手するに至らず

(リ)タンクステン 近時一般工業の發展と軍事上の必要に促され原料鑛物の需要増加したるを以て

之か發見採掘に従事するもの多し既知鑛床の内江原道金剛山附近及忠清南道青陽郡に存するものは望を囑すべく其の他諸所に發見せられたるもの尠からず

(×)金銀銅鉛亞鉛の混合鑛 此の種の鑛床も亦昔時銀鉛として稼行せるものなり現時稼行せるもの未だ多からず雖朝鮮内各地方殊に南鮮地方に多く賦存するか故に乾式製鍊の發達と共に之か開發を見るに至るへし

左に大正元年以降鑛産物の輸移出價額を掲ぐ

鑛産物輸移出額

種別	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年
金	九、九六一、五一五 円	九、六六四、二六七 円	一一、三六六、五八七 円	一五、六二三、七九七 円	九、六三〇、八二四 円
銀	二四、八九九	一〇、九四八	四、六七七	三一、一三六	一四、八九〇
金鑛及汰鑛	三九二、四〇〇	五六九、七一三	九二九、六一九	一、〇四四、四四〇	七八五、一八六
含金銀粗鑛			二五九、七九二	三、八八〇、二〇〇	五、一六〇、九一三
粗銅					三、〇六八、四〇二

種別	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年
鐵鑛	三四八、五九二 <small>円</small>	四一八、四四四 <small>円</small>	五〇一、九五〇 <small>円</small>	五六八、六一七 <small>円</small>	四一五、一〇九 <small>円</small>
亞鉛鑛	—	—	二四一、五六一	七、三二九	三三、九三七
重石鑛	—	—	九〇、四七八	一、六三八、四二六	二、〇八六、一一五
黒鉛	二四八、八五八	一九二、一八七	二〇二、六九一	五七六、七九二	一、五二六、一三三
石炭	三五七、七九七	四五八、一八四	六二九、一七五	四六八、八八八	四七三、〇三二
その他の鑛物	一〇八、一九一	一二八、七六二	二八九、一一八	一〇七、五五九	五一五、六六八
總計	一、四四二、二五二	一、四四二、五〇五	一四、五一五、五九八	二、三、九四七、一八四	二、三、七二〇、二〇九

大正三年以前の亞鉛鑛及重石鑛輸移出額は其他の鑛物中に含む

今各道に於ける鑛産物の種類を掲ぐれば左の如し

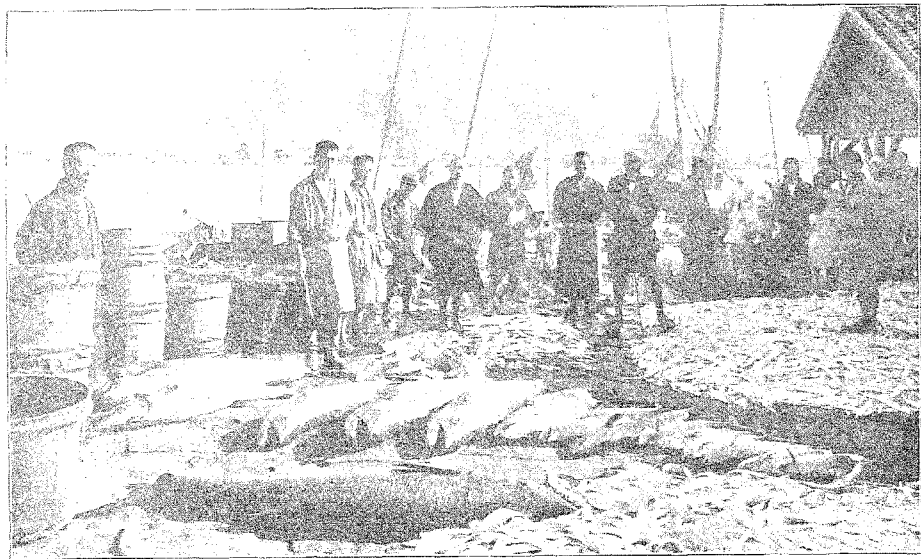
鑛産物一覽

產地	礦產物
京畿道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、硫化鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、石炭、石綿、高嶺土、砂金
忠清北道	金、銀、銅、鉛、錫、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、砂金、砂錫、砂鐵
忠清南道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、石炭、石油、雲母、石綿、砂金
全羅北道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、水鉛、黑鉛、石綿、砂金、
全羅南道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、水鉛、黑鉛、石炭、硅砂
慶尙北道	金、銀、銅、鉛、蒼鉛、亞鉛、鐵、硫化鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、石炭、石綿、高嶺土、硅砂、砂金
慶尙南道	金、銀、銅、鉛、蒼鉛、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、石炭、高嶺土、硅砂、砂金
黃海道	金、銀、銅、鉛、水銀、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、石炭、雲母、石綿、硅砂、砂金
平安南道	金、銀、銅、鉛、安質母尼、水銀、亞鉛、鐵、滿俺、黑鉛、石炭、雲母、砂金

產地	礦産物
平安北道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、燐、黑鉛、砂金
江原道	金、銀、銅、鉛、安質母尼、亞鉛、鐵、タングステン、水鉛、黑鉛、石綿、砂金、砂錫、砂鐵
咸鏡南道	金、銀、銅、鉛、亞鉛、鐵、タングステン、黑鉛、石炭、雲母、砂金
咸鏡北道	金、銀、銅、鉛、錫、安質母尼、亞鉛、鐵、水鉛、黑鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金

備考

本表礦産物の種類は大正六年末現在許可礦區の礦種名に依る



釜山魚市場太刀魚及沖鱈水揚狀況

第十五章 水産業

第一節 水産業の保護獎勵

(イ) 水産業の概況 朝鮮は海岸線の延長八千餘裡に達し地勢、氣候及潮流等の關係上水産物頗る豐富にして鱈、石首魚いさな、明太魚、鯖さば、鱈にしん、鰺いし、太刀魚の如き回遊性のもの鯛たい、鱈はちま、鱈かめ、目張魚、鮭、鮎、鱈、烏賊、章魚の如き魚族及蝦、蟹の如き甲殻類、鮑たいらぎ、玉珧貝いしがひ、貽貝、牡蠣、鯉蛤の如き介類 石花菜てんごさ、海藻ふのり、和布わかめ、海苔の如き海藻類より鯨の如き海獸類に至る迄其の數二百餘種に及ぶ然れども從來朝鮮人漁業は頗る幼稚にして漁獲少なりしか近時漁業の改良進歩と漁業者の増加とに因り年年著しく漁獲高を増進し明治四十二年に於て朝鮮人の漁獲高三百六十九萬餘圓、内地人の漁獲高三百五十五萬餘圓合計七百二十四萬餘圓なりしもの大正六年に至り朝鮮人の漁獲高九百七十六萬餘圓、内地人の漁獲高一千百十五萬餘圓合計二千九十一萬餘圓に達せり漁業に對する施設は總督府及各道に於て、漁業の秩序を維持し生業の安固を得せしむるは勿論水産

に關する試験調査を行ひて遺利の開發に努め尙地方費及臨時恩賜金の事業として水産業の指導獎勵に懈らざる等種種の方法に依り其の發展を企圖しつつあり

(ロ)漁業の手續 現行漁業令は明治四十四年の制定に係り漁業を分ちて免許漁業、許可漁業、届出漁業の三種とす此等の願届出は皆府郡廳を經由せざるべからず、免許漁業は一定の水面に漁具を建設又は敷設し一定の漁期間之を定置するもの、一定の水面を區劃して養殖を爲すもの、海濱一定の場所に於て一定の漁期間繰り返し漁網を曳寄せて爲すもの、一定の水面に於て一定の漁期間繰返し漁網を建設又は敷設して爲すもの、一定の水面に漁類を集合せしむる設備を爲し經營するもの、此の外水面を専用して爲すものの六種とす免許を受けたる者は漁場及保護區域を定め他人を排斥して漁業を營むことを得許可漁業は捕鯨業、トロール漁業、潜水器漁業、鯨族以外の海獸漁業其の他合計十一種の漁業にして漁業の種類に従ひ或は朝鮮總督に於て或は道長官に於て之を許す否す固より免許漁業と異り漁業權を發生せず従つて排他的效力を有せず其の許可の目的は水産動植物の蕃殖保護及漁業取締に在るのみ届出漁業は前二種の漁業に屬せざる凡ての漁業にして單に

届出をなし鑑札の下附を受くれば足れり漁業の出願其の他の手續を爲す者は府令の規定に依り一定の手数料を納付し且漁業者は漁業税を賦課せらる

(ハ)水産物の保護 水産物保護の方法は一定の漁業の許可を受けしむる事、一定の網目以上の細目網を禁ずる事、一定の漁業に對し區域を制限する事、魚介藻の採捕期又は其の形態を制限する事、有毒物爆發物使用の禁止等とす而して之に關する法規は一般的东西限地的ものとあり限地的のものとは各道に委任して之を取締を履行せり

(ニ)漁業に關する組合 漁業に關する組合に二種あり即ち水産組合及漁業組合是なり水産組合は漁業者又は水産物の製造若くは販賣を業とする者か水産業の改良發達水産動植物の蕃殖保護其の他水産業に關し共同の利益を圖る爲朝鮮總督の許可を受けて設立するものにして現在に於ては全朝鮮を其の區域とせる朝鮮水産組合あり漁業組合は一定の地區内に住居する漁業者か漁業權を取得し又は其の貸付を受け組合員の漁業に關する共同の施設を爲すを目的とし朝鮮總督の許可を受け設立するものなり大正六年末に於ける漁業組合の數は五十九箇所なり

(ホ)漁業の指導獎勵及保護 漁業者に對する直接の指導獎勵は主として地方廳をして之れに當らしむ地方廳に於ては地方費又は臨時恩賜金を以て其の方法を講しつゝあり今各道に於て實行せる主なるものは漁撈製造、養殖の試験及傳習、漁具、漁船の配付、貸付又は其の購入費の補助、製造養殖業の指導補助、水産講話等とし總督府に於ては此等の地方費事業を獎勵するの目的を以て毎年若干の金額を地方費に補助せり大正七年度に於ける各道の當該事業費の總額は地方費豫算額(授産費を合せ)九萬一千八十圓とす

(ヘ)漁船避難港修築補助 朝鮮の沿岸には漁船の避難に充つべき港灣にして往往岩礁寄洲等の爲避難港として不適當なるものあり總督府は年年若干の金額を補助して之を修築を企てつつあり既に完成せるものを忠清南道於青島及慶尙北道江口港、慶尙南道彌勒島、江原道汀羅津、全羅南道別刀港及楸子島とし外に大正七年度中に著手のもの一箇所あり

(ト)朝鮮水産組合の補助 上述の朝鮮水産組合は其の初め外國領海水産組合法に依り設立せる舊韓國沿海に出漁する内地人の組合なりしか併合と共に内鮮人を網羅し漁業令に依る水産組合となし

本部を釜山に支部を各道に又出張所を各樞要の漁村に設け専ら漁民の保護及指導獎勵に任し或は法令に依る出願の代辨をなし又は水難救済、醫療施藥を行ひ通信貯金の便を計る等内鮮漁民共同の利益を圖り一方本府及各道と相呼應して行政上の補助機關たる作用を爲し重要なる公共的團體なるを認め韓國政府時代より引續き年額四萬圓の補助を與へつつありしも大正五年度より三萬圓に減少せり朝鮮水産組合本部及支部所在地左の如し

朝鮮水産組合本部 慶尙南道釜山

朝鮮水産組合京畿道支部 京畿道仁川

同 忠清南道支部 忠清南道鰲川

同 全羅北道支部 全羅北道群山

同 全羅南道支部 全羅南道木浦

同 慶尙北道支部 慶尙北道浦項

同 黃海道支部 黃海道龍湖島

朝鮮水産組合平安南道支部

平安南道 鎮南浦

同 平安北道支部

平安北道 龍岩浦

同 江原道支部

江原道 注文津

同 咸鏡南道支部

咸鏡南道 元山

同 咸鏡北道支部

咸鏡北道 清津

(チ)水産製品検査

朝鮮に於ける水産製造品の産額増加するに伴ひ輸移出額亦累計其の數量を増し

大正六年度に在りては産額約千三百萬圓輸移出額約六百萬圓に達するに至れり然とも製品の改良及統一に關しては未だ遺憾の點少からず殊に近來製品量目の増加を圖らむか爲故意に不正の手段を講ずるの弊を生し又朝鮮に於ける水産製造業は多くは其の規模小にして製品區區に涉り其の統一を缺き大口の取引に適せず現に外國に輸出せらるるものと雖多くは一旦内地に移出せられ更に内地人商人の手に依りて輸出せらるるを常とす故に之等の弊害を矯正し製品の統一を期せむか爲大正七年五月總督府令(第五四號)を以て水産製品検査規則を發布し同年七月一日より之を實施せ

り

上述する如く水産製品の外國に輸出するものの多くは一旦内地に移出せらるるを常とするが故に内地に於ける製品の取締及検査と同一方針の下に製品の検査を行ひ朝鮮に於て検査に合格したるものは内地に於て再検査を行はしめざることをなすは最緊要の事なるを以て本規則は検査品目及検査標準等に付努めて内地と同一の歩調に出づることとし且本規則發布前農商務省と之が協定を遂げ本則の實行に力めたり又検査は各税關をして之を行はしむることとせりと雖其の設置なき地に在りても製品の輸出盛なる箇所に対しては検査所を設置し又周年輸出なき地に在りても一定期間に限り臨時検査所を開設することとせり今や其の總數十六箇所の上れり検査實施後の成績は日尙淺くして未之を明にするを得ずと雖概して良好の結果を齎らしつつあり漸次製品及包装の改良と共に其の價格の騰貴を見るに至り検査開始の目的たる製品の改良統一を期する蓋し遠きに非ざるへし

(リ)水産調査及試験 水産に關する調査試験は各道に於ける小規模のものを除くの外本府に於て朝鮮海に於ける水棲物の種類分布の狀態及習性等を調査し有望なる水族に對する漁法、漁獲の處理

及人工生産増殖の方法を研究し遺利の開發と斯業の發達に資する目的を以て大正元年度以降豫算に水産試験費を置き水産調査及各種試験を行へり水産調査中沿岸の觀測は沿海十二道に於ける朝鮮水産組合支部水産技術員及燈臺に囑託し其の所在地近海に於ける一定の場所に於て之を行ひ海洋の觀測は大正六年二月より始め主要なる海流を探險し暖寒流の分布區域及分派の狀況を闡明にし此等兩流に特有なる水産物の狀況を考究しつつあり

水産試験は之を漁撈、製造及養殖の三部に別て施行す

漁撈試験は重要な水産物に付其の分布去來又は生殖の狀態又は回游の季節漁法の適否漁業經濟等を調査するものにして從來施行し且現に施行しつつあるものは蝦、大鰻、秋刀魚、柔魚、蟹、鱒、鯖及鮪、沖鱒、旗魚、鱈等の大回游魚類とす又海底に於ける重要水棲物に就き其の分布並棲息の多寡を調査し以て遺利の開發に努むると共に貝藻類の蕃殖保護上相當の措置を講ずる爲潜水器を使用し全沿岸に互り淺海探檢を試験しつつあり

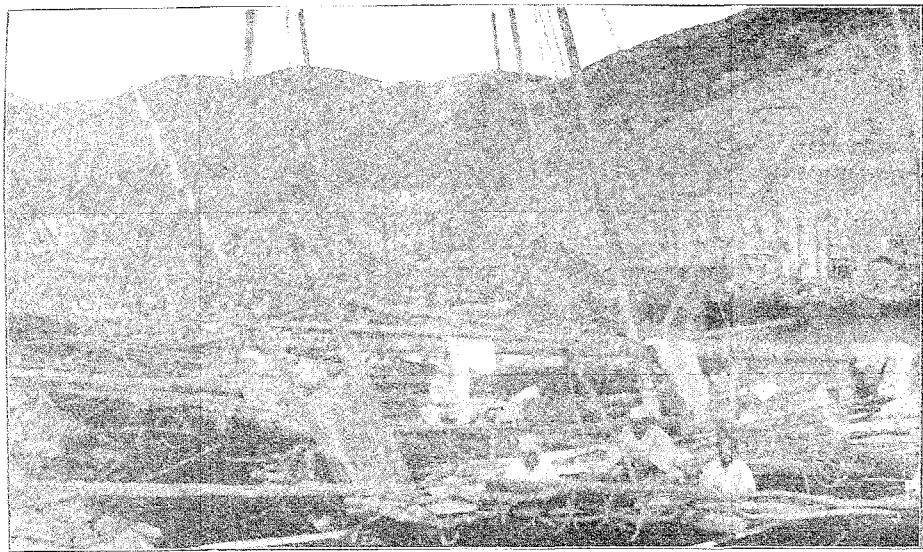
製造試験は主として外國向鹽魚、鹽乾魚の製造並試賣にして客年以來實施せるものは米國向鹽鱈

支那向鹽石首魚、鹽鱒、鹽乾鱈、鹽乾明太魚、鹽鱈、鹽鮭、鹽太刀魚とす試賣の結果は未だ明かならざるものありと雖支那試賣は大正六年度試賣數量は稍少量に失し且試賣地區廣汎に過ぎ其の目的を達すること能はざりし虞ありしを以て大正七年度は各種類の數量を七千斤乃至一萬斤とし試賣地は最有望なりと認めたる香港、上海、廣東、廈門、汕頭、福州の六箇所に限定し嗜好の狀況、取引關係等を調査し汎く販路を開拓せんとす又本府は夏季低廉なる魚類を醃藏し冬季魚類缺乏の時に當り之を朝鮮、内地及支那に輸送して魚價の調節を圖ると同時に輸入鹽魚の防遏に資する爲大正五六の兩年に互り仁川群山元山の三箇所に魚窖を建設し鹽魚の貯藏試験を行ひ頗る良好の成績を擧げつつあり尙既往の試験中成績の最も顯著なるものは寒天製造試験にして從來朝鮮には寒天の原料石花菜の饒産するに拘らず全部原料の儘内地に移出し寒天に製造したるものなし仍て本府は大正二年慶尙北道大邱及全羅南道長城の二箇所に於て之を製造を試みたるに内地製品に比し甚しき遜色なきを認め朝鮮に於ける寒天製造業の有望なるを一般に認知せられ以て民間起業を促すに至れり

養殖試験は大正元年度より引續き成鏡南道高原上山面に於て鮭の人工孵化試験を行ひ毎年其の生育稚兒數百萬尾を放流しつつあり又大正四年度より更に慶尙南道密陽郡穿火山外面に養殖試験場を増設し池沼河川又は稻田利用の目的を以て鱒、鯉等の淡水魚族の孵化養殖試験を行ひ斯業獎勵の爲其の養殖稚魚は當業者の希望に由り之を配付せり尙大正七年度より鹹水養殖場を設置し鱈玉、玳貝の養殖試験を實施する爲全羅南道康津郡康津灣内に位置を定め目下之が計畫中なり

第二節 水産業發展の狀況

(イ)日本海方面 豆滿江口より釜山港に至る日本海方面沿岸は東朝鮮灣を中心としてく字形に突入し沙濱懸崖相連りて好箇の海岸漁場を形成せり潮汐の干滿は微少なれども水深く各種水族の滯溜に適し而もリマン海流は北よりして寒帶性水族を輸送し對馬海流は南よりして溫帶性魚族を齎らして共に水産の分布を濃厚ならしめ捕魚の利無盡藏と稱せらる就中朝鮮人の經營に係る成鏡道の明太魚、鱈、鮭、江原道の鱒、慶尙道の鰈^{モシ}魚業等の如き又内地人の經營に係る鯨、鯖、鰻、鱈、鱈、鱈等の漁業は此の地方屈指の大漁業として推奨するに足る



浦津に於ける鯨買出船集の状況

(ロ)多島海方面 釜山港より木浦附近に至る沿海は大小の島嶼密布散點し多島海の稱あり此の沿岸は犬牙錯綜して半島岬灣相交り廣漠たる海域を占め水深概ね八十尋内外にして漁具の使用に便なるのみならず寒暖兩海流の影響を受け水産の分布豊かにして而も廣大なる平野に接し市場、大河、港灣に富み九州中國方面の連絡容易なるか故に漁獲物の集散便にして内鮮人の漁業共に進歩し釜山馬山近海に於ける鱈、鯖漁業の如き鎮海灣附近の鱈漁業の如き羅老、青山、巨文の各島及安島近海の鯛、鯖、鱈、鯉漁業の如き濟州島沖に於ける鯖、鮑、石花菜、鱈漁業汝自灣に於ける鰈漁業及麗水灣に於ける玉珧貝漁業等の如きは其の最著名なるものとす

(ハ)黃海方面 木浦附近より鴨綠江口に至る黃海方面の沿岸は西朝鮮灣及仁川近海群山近海等に由りてろ字狀に屈曲し河口、溼灣、瀉洲、礁脈、淺灘及孤島群嶼相食みて海岸線の錯綜名狀すへからず海底は遠淺を爲して黃海の中心に至るも水深五十尋を超えざるを以て寒冷の候暖帶性水族の滯溜に適せずと雖暖潮の影響を受け潮汐の進退強度なるを以て春季八十八夜前後約五十日間に至れば石首魚、鯛、鯖、鮫、鰻等産卵の爲に二十尋以内の淺所に群集し内鮮漁船の輻湊實に壯觀を

極む就中全羅道の七山灘、忠清道の煙島近海、黃海道の延平灘及平安道の魚泳島近海に於ける石首魚漁業の如きは咸南の明太魚、慶南の鱈漁業と共に朝鮮海三大漁業の一と稱せらる尙此の方面に於ては蛤蜊等の介類多く棲息し且各種魚介類の養殖に適當の場所多きも内鮮漁民未だ普く之を利用するに至らず

上述の如く朝鮮沿岸は其の海勢千態萬狀にして其の漁業も亦各地良否の別ありと雖概して將來有望の漁場として進歩發展の餘地あるを見る今各道沿岸漁場に於ける内鮮人の漁獲及製造高を掲ぐれば左の如し

道		内鮮人漁獲及製造高		大正六年	
		漁獲物價額	製造品價額	合計	主要生産物
京畿道	忠清北道	三六〇、二五六 円	二二八、一二三 円	五七八、三八〇 円	蝦、石首魚、鯛、鮓、鹽蝦、鹽石首魚
		一、七〇三	—	一、七〇三	鰻、鯉、目張魚

忠清南道	七七六、六四〇	四八四、七二六	一、二六一、三六六	鱸、石首魚、鯉、鯛、大刀魚
全羅北道	五三二、七三五	一六九、七一二	七〇二、四六一	鯛、石首魚、鱈、鹽石首魚、鯛
全羅南道	三、三一七、九三三	二、二二三、九八七	五、五四一、九一九	鱈、石首魚、鯉、蝦、大刀魚、海蘿、和布、榨粕
慶尙北道	二、〇五二、六九二	六九五、二三九	二、七四七、九三一	鱈、鯖、鱈、鱈、鰻、和布、鮑
慶尙南道	七、五一七、八二二	五、五五九、三〇一	一、三〇七七、一二三	鯉、鯛、鯛、大刀魚、鱈、鮑、海參
黃海道	一、〇八二、五六二	四一三、二五三	一、四九五、八一五	石首魚、鮫、鯛、鱈、鹽石首魚
平安南道	五〇八、五九三	三五九、六〇四	八六八、一九七	鯛、鱈、蝦、鹽石首魚
平安北道	六四六、五七三	二四三、九三九	八九〇、五二二	石首魚、火魚、鱈、鯛、鮫、鹽
江原道	八二三、二七六	五一四、〇四〇	一、三三七、三一六	鯉、和布、鱈、明太魚、干鯉、鮑、鱈
咸鏡南道	一、九六四、七五六	一、四三三、〇二八	三、三九七、七八四	明太魚、鯖、鱈、鮑、乾明太魚、鹽明太魚卵
咸鏡北道	一、三三二、七五一	一、一三三、一二六	二、四五四、八七七	明太魚、和布、鮭、鱈、乾明太魚
總計	二〇、九一三、二九二	一三、二四七、〇七八	三、四一六、〇三七〇	魚

年	漁獲物價額	製造品價額	合計	主要生産物
大正五年	一五、九五五、九二二	九、七八一、八五三、二五、七三七、七七五		
同四年	一三、二三四、九四一	七、七九五、二四六、二一、〇三一、一八七		
同三年	一二、〇六四、六八五	六、九一一、八九六、一八、九七六、五八一		
同二年	一一、五一一、九一五	五、四三〇、四四四、一六、九四二、三五九		

第三節 水産業改良の奨励

水産業改良の方法は漁船漁具及漁法の改良、漁業者の知識技能の養成、水産に關する調査試験の施行、水産物の處理、販賣方法の改善及關係機關の普及發達並販路の擴張、水産物の人工増殖の奨励、需給の調節及産額の増進、内地人漁業者の移住及内鮮人漁業者間の統一融和、水産組合又は漁業組合の設立、漁業者の副業及勤儉貯蓄の奨励是なり改良漁法、漁具、漁船の普及に就ては本府及沿海各道に於て漁業改良奨励の結果鮮人漁業者の内地式漁具漁法に依るもの近年著しく増加し就中一本釣延繩等の釣漁業最も發達し地曳網流網鮫鱈網等の網漁業之に次ぎ其の漁獲成績の如き内地人漁業

者に比し甚しき遜色を見ず又大敷網巾著網揚操網罟網等の大規模漁業を經營する者も漸次其數を増加するに至れり

漁船の改良は漁法の改良に比し素より遅遅たるを免れさるも朝鮮人の使用する改良漁船の數は明治四十四年に於て八百八十二隻に過ぎざりしか大正六年末に至り四千百八十五隻を算し之を大正五年末に比すれば七百六十隻の増加をす

(イ)内鮮人の漁業 大正六年中に於ける内鮮人漁獲高は内地人一千百十五萬二千七百圓朝鮮人九百七十六萬五百九十二圓合計二千九十一萬三千二百九十二圓にして之を大正五年の漁獲高に比すれば内地人に於て三百十五萬七千七百六十圓朝鮮人に於て百七十九萬九千六百十圓合計四百九十五萬七千三百七十圓の増加なりとす今最近五年間に於ける内鮮人漁業發展の概況を示せば左の如し

朝鮮沿海漁業概況

年	出漁船數		出漁人員		漁獲概算高			平均漁獲高										
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	計	内地人	朝鮮人	計								
大正二年	六〇二	一三三五	一九三六	一四五四〇	一八七一五三	二二二七三	五九三圓六五四	四	六二八七五三八	一三、三三、一、九	四	四	四	九〇〇圓六五三	四	四	四	四

年	出漁船數			出漁人員			漁獲概算高			平均漁獲高	
	内地人	朝鮮人	計	内地人	朝鮮人	計	内地人	朝鮮人	計	一人に付	一人に付
大正三年	六、二〇〇	一五、一五二	二一、三五二	二七、九四八	三三、〇〇一	六〇、九四九	五、六五〇	四、四九二	一〇、一四二	四、四九二	四、四九二
同 四年	六、五七五	一六、三七七	二三、九一六	二九、〇六三	三三、一五七	六二、二二〇	六、八六九	五、二七三	一二、一四二	四、四九二	四、四九二
同 五年	一〇、六三二	三四、六七七	四五、三〇九	六三、一八六	二二、六二五	八五、八一一	七、九六〇	九、九八二	一七、九四二	四、四九二	四、四九二
同 六年	一一、八九七	四五、八二七	五七、七二四	七〇、一八四	二四、七三九	九四、九二三	九、七六〇	五、九三三	一五、六九三	四、四九二	四、四九二

(口)内鮮人養殖業 漁業の奨励と同時に水産物濫獲の取締を爲し其の蕃殖を保護し更に進て人工増

殖と需給の調節を圖る目的を以て養殖業を奨励し本府に於ては鮭、鱒及鯉の人工孵化養殖を試験し各道に於ては海苔、^{おけまさき}鱧、牡蠣、蛸、鯉、^{ほら}鰻等の養殖試験を行ひ範を實地に示すと共に適地を調

査して適種魚介藻類の養殖を奨励したる結果著しく斯業に對する觀念を普及せしも未だ以て之か盛況を見るに至らず現在民間事業として最も發達せるは全羅南道及慶尙南道管内に於ける海苔養殖とし之に次くは咸鏡南道永興灣咸鏡北道造山灣全羅南道高興郡の牡蠣養殖にして京畿道忠清南

道管内の鯨、全羅南道の灰貝、鯨及慶尙南道、京畿道管内に於ける鯨鬚の養殖は規模大ならず
 雖成績較や見るべきものあり

(ハ)捕鯨業 現在捕鯨業を許可せるものは東洋捕鯨株式會社及日韓捕鯨合資會社にして其の根據地
 は五箇所にして捕鯨船數は十隻に限定す大正六年に於ける捕獲高は頭數二百二十五頭に於ける此の
 價額五十四萬七千八百六十八圓なり左に最近五箇年に於ける概況を表示すへし

捕鯨狀況				
年	捕鯨頭數	同上價額	捕鯨隻平均頭數	一頭平均價格
大正二年	二九九 <small>頭</small>	四〇四、二六一 <small>圓</small>	一六・六 <small>頭</small>	一、三五二 <small>圓</small>
同三年	二八五	二四二、七五五	一五・八	八五二
同四年	三〇五	二六五、七五〇	二一・八	八七一
同五年	二一六	二一一、九六六	二一・六	九八一
同六年	二二五	五四七、八六八	二二・五	二、四三五

(三)内鮮人水産物製造業 朝鮮人間に於ける水産物の加工は鹽藏又は乾製等頗る簡單且拙劣なりしも之が指導奨励の結果逐年製法の改善と利用の發達を見るに至り一面内地人製造業の發達に伴ひ著しく生産額を増加せり大正六年に於ける内鮮人水産物製造高は内地人六百七十一萬九百六十五圓朝鮮人六百五十三萬六千百十三圓合計一千三百二十四萬七千〇七十八圓にして之を大正五年の製造高に比較するに内地人に於て二百四十七萬九千六百八十三圓朝鮮人に於て九十八萬五千五百四十二圓合計三百四十六萬五千二百二十五圓を増加せり即ち左表の如し

水産物製造高			
年	内地人	朝鮮人	合計
大正二年	一、九九九、二五三	三、四四一、一九二	五、四四〇、四四四
同 三 年	二、九五三、八五四	三、九一〇、三四二	六、八六四、一九六
同 四 年	三、四二一、六二五	四、四六三、六二一	七、八八五、二四六
同 五 年	四、二三一、二八二	五、五五〇、五七一	九、七八一、八五三

(ホ)内地漁民通流 内地漁民の通流は併合後著しく發展し其の漁場區域は朝鮮全沿海に互り南及東海岸に於ては縛網、巾著網流網西海岸に於ては鮫鯨網等大中漁業の發達殊に顯著にして且通漁者は出漁地方に依り各團體を組織し漁獲物の處理運搬及物資の供給其他共同の作業に任し其の組織的働作頗る整然たるものあり此の如く秩序ある發達は主として朝鮮に於ける一般水産業の獎勵開發、行政機關の整備及交通の發達並内鮮人の融和に基因せずんばあらず

朝鮮海出漁團體

大正六年十二月末日

名 稱	位 置	團體員	基 金	體 立 金	府 縣 補 助 金	事 務 所 費	漁業根據地	設立年月
長崎縣遠洋漁業團	長崎縣廳内	11100 人	80 円	1 円	11100 円	3700 円	全羅南道青島	明治四十三年三月

名 稱	位 置	團 員 數	基 金 總 額	積 立 金 總 額	專 用 補 助 金	事 務 所 費	漁 業 根 據 地	設 立 年 月
佐賀縣鮮海 出漁組合	佐賀縣廳內	410	10,000	—	4,380	2,700	全羅南道木 浦羅老島	明治四十年 一月
香川縣出漁團	香川縣廳內	210	—	—	800	2,600	同 高興郡 蓬萊面	同 四十二年 三月
岡山縣出漁團	岡山縣廳內	180	—	—	600	2,200	同	同 四十年五月
香川縣朝鮮 海出漁團	香川縣高松市	2,332	5,000	800	2,200	3,479	慶尙北道迎 日郡九龍浦	大正元年九月
長崎縣出漁團	長崎縣廳內	200	—	—	5,000	11,000	同	同
林 兼 組	慶尙北道迎 日郡九龍浦	10	50,000	—	—	12,000	同	明治四十四年 十月
日 生 組	岡山縣日生村	100	—	—	—	—	同	不詳
愛媛縣朝鮮 海出漁組合	慶尙南道釜 山府南濱町	19	—	—	—	—	牧ノ島	同 四十二年 四月

鹿兒島朝鮮海出漁組合聯合會	鹿兒島市	七九〇	六二六三	九	同	釜山府同	四十三年
三重縣遠洋漁業團	山下町	五七四	二二九	五八〇	同	釜山府	三
長崎縣遠洋漁業團	長崎縣廳內	三〇九	二五〇〇	四〇五九	慶尙南道釜山府統營郡巨濟島	明治四十一年	月
香川縣朝鮮海出漁團	香川縣廳內	二二八〇	二〇〇〇	四二六三	同	蔚山郡	同
同	慶尙南道蔚山郡方魚津	一九二	二〇〇〇	三八〇〇	同	方魚津	大正元年八月
岡山縣和氣郡同生町朝鮮海出漁團	同	一六四	一四七六	二九七〇	同	同	明治四十三年
岡山縣日比朝鮮海出漁團	岡山縣日比町	三一	—	三〇	同	同	大正四年八月
床波出漁團	山口縣吉敷郡西岐波村	四〇	一三三	二五〇	同	同	同
同	廣島縣鞆町	一八	—	—	同	同	同

總計	名 稱								位 置	團 體 員 數	基 金	體 團 積 立 金	體 府 廳 郡 支 補 助 金	經 營 費	漁業根據地	設 立 年 月		
	同	同	同	同	同	同	同	同									廣島縣朝鮮海 網業組合	廣島縣廣島市
六七五	九	五	四	二	三	九	五	四	六									
六五二九																		
七三九九						三五〇												
三三二八						100												
五一〇五九						九二												
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	東部面	河清面	昆德面	山陽面	二運面	巨濟島	閑山面	沙等面	慶尙南道統 營郡統營面	廣島縣廣島市								

(ハ)内地漁民の移住及漁村經營 内地漁民の移住は通漁の發展に伴ひ南鮮地方より漸次北鮮地方に普及するに至り今や邊陲の地と雖單獨移住を爲す者少からす其の移住村落を爲すものは五十三にして經營狀況は良好の成績を呈せり

年	内地人水産業者戸口						合	計
	漁業	養殖業	水産物製造業	水産物販賣業	戸數	人口		
大正二年	戸數 二、一〇九	人口 七、八六二	戸數 二一	人口 七二	戸數 四五五	人口 一、九七二	戸數 九〇五	人口 二、三二六
同三年	戸數 二、二一五	人口 七、四四六	戸數 一九	人口 五四	戸數 三二八	人口 一、一〇一	戸數 八一三	人口 二、四二七
同四年	戸數 二、三一六	人口 八、五一三	戸數 三五	人口 一二三	戸數 三〇四	人口 一、〇七五	戸數 八七四	人口 二、七九二
同五年	戸數 二、五七九	人口 九、〇七五	戸數 二〇	人口 六一	戸數 三八五	人口 一、一八二	戸數 一、〇〇二	人口 二、七三五
同六年	戸數 二、八二四	人口 一〇、一七七	戸數 一九	人口 六四	戸數 五〇八	人口 一、七二五	戸數 一、〇六五	人口 三、一四八
							戸數 四一六	人口 一、一四

(ト)水産業獎勵に關する中央地方配置技術員人員及指導狀況 水産業獎勵の爲中央及地方配置技術

員の總人員は大正七年度に於て國費に依る者五十七人地方費及臨時恩賜金に依る者四十八人合計

百五人にして本府及道在勤技術員は必要の時期に沿海各地に出張せしめ地方費及恩賜金に依る技術員又は實習教師を重要な地點に配置し孰れも水産の調査試験又は傳習若くは講習等に依り實際に就き常業者指導の任に當らしむ

(チ)地方水産傳習及講習 大正六年度に於ける各道地方水産の實習概況を表示すれば左の如し

地方水産實習

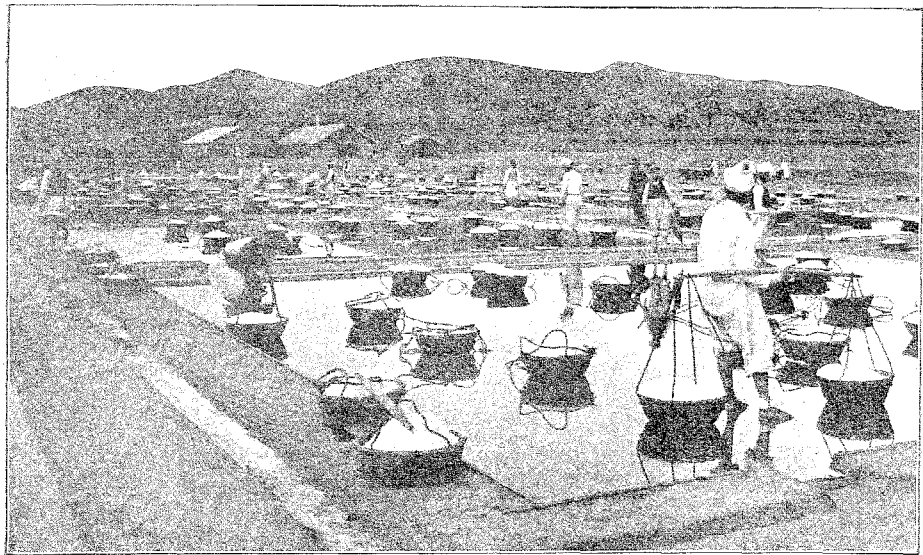
大正六年度

道名	實習事項	回数	日數	修了人員	備考
京畿道	造船講習 漁業傳習	一 三	二〇〇 五二六	五 二四	内地型漁船建造法、鮫鱈網船一隻、 延繩船一隻 鮫鱈網組法、延繩、一本釣、掛繩
忠清南道	漁業傳習 編網傳習	二 一	一四〇 四〇	二〇 一五	鮫鱈網漁法、延繩漁法 鮫鱈網編製方法
全羅北道	漁業傳習 漁具製造講習	一 一	一八〇 四〇	三〇 一〇	鮫鱈網、延繩傳習 編網及漁具製作傳習
	漁業傳習	六	一、一九四	六〇	延繩、一本釣、鮫鱈網、磯刺網、曳繩 漁船操縦

第四節 製鹽業

總計	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安南道	黃海道	慶尙南道	慶尙北道	全羅南道
漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習	漁業傳習
特別傳習	特別傳習	特別傳習	特別傳習	特別傳習	特別傳習	特別傳習	特別傳習	特別傳習
製造傳習	製造傳習	製造傳習	製造傳習	製造傳習	製造傳習	製造傳習	製造傳習	製造傳習
漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習	漁具製造傳習
四四	五	一一	一一	一一	五	四	二	一一
四、五九二	二〇〇	三〇〇	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一八〇	九〇	三六〇
四六七	三〇	八	一四	二四	二五	二	五〇	二四
錫、煮乾鹽、鹽乾魚	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
繒絲調製機械編網	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
延繩	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
榨粕魚油、鹽乾魚、肝油	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
鱈製網、延繩作製	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
鱈製品、煮乾、開乾製造	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
流網、延繩、抄網、漁具修理、漁船運用	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
鹽乾品、榨粕肥料、素乾品、燻製	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
流網、釣鉤、延繩、製作	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
鹽、鹽乾、素乾、肝油製造	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
流網と抄網との比較試驗、編網傳習	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業
延繩、一本釣、同漁具製作、漁船運用方法、漁獲物の處理、製造	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業	延繩、榨網、流網、釣漁業

朝鮮に於ける製鹽は總て煮熬法に依り海水を直に煎熬し若は海水を鹽田に導き撒砂に依りて濃厚なる鹹水を探り之を煎熬して製鹽するものなりと雖其の方法頗る粗雑幼稚にして生産費高く爲に輸入の壓迫を受け漸次衰頹の傾向あり而して朝鮮に於ける鹽の總需要量は推定約三億斤乃至四億斤にして内一億五千萬斤は朝鮮の鹽田より生産供給せられ其の他には官鹽及輸移入鹽に依りて供給せらる然るに朝鮮鹽は勞力と燃料とを費すこと多く隨て其の生産費百斤當り平均一圓以上なるに比し支那天日鹽は仁川に於て特に高價の時に於しすら百斤七八十錢にして甚しく低落の場合には三十錢内外を以て供給せらるるか故に年年其の輸入を増し漸次朝鮮鹽を壓倒せむとするの趨勢を示せり茲に於てか舊韓國政府は明治四十年地を京畿道仁川府朱安面に卜し面積一町歩の天日製鹽試驗場を設け試験の結果朝鮮に於て天日製鹽は確實に成立すべく其の産額は豐饒にして而も其の品質は支那鹽に比し遙に優越し臺灣鹽に匹敵し一等鹽の如きは煎熬鹽に比し毫も遜色を見ず其の化學的成分に至りては前記各種鹽に比し優越し純食鹽分は九〇%を越え日本内地の一等鹽に相當するものを得るに至れり此の結果に由り天日製鹽を官營とすることとし先づ第一期事業として面積一千町歩の天日製鹽田



朱安鹽田採鹽狀況

を築造することに決し明治四十二年度より著手し大正元年に竣成したり其の面積は朱安鹽田九十八町一反七畝十三歩廣梁灣鹽田九百三十三町一反八畝十六歩合計一千三十一町三反五畝二十九歩にして工事進行中一部分竣成したる鹽田より其の製造を開始し大正二年度よりは全鹽田に互り生産するに至れり

今最近六箇年間に於ける輸移入高及前記鹽田の面積並産出高を左に掲ぐ

鹽輸移入高及價額

年	輸 移 入					合 計	價 額
	内地鹽	臺灣鹽	關東州鹽	支那鹽	其他		
大正二年	九、二二七 千斤	—	—	一〇四、一二七 千斤	八六七 千斤	一五一、七八四 千斤	七五五、五七一 円
同 三年	一、二四五	—	二九〇五三	九三、四九八	二	一二三、七九八	五五五、〇六八
同 四年	三二	—	五三、五八九	一三六、六三五	一	一九〇、二五七	八五二、二〇九
同 五年	二、三九	一五〇	六六、七一八	一七五、九五四	二	二四三、〇六三	一、〇九六、七四六
同 六年	八九	—	四一、六五二	一七九、二五四	一	二二〇、九九六	一、〇〇三、〇一七

鹽田面積及製鹽高

年 度	廣 梁 灣		朱		安		合 計		
	面積	製造高	面積	製造高	面積	製造高			
大正二年度	九三三・一町	六六三・八・五三	八九四	五二・七四三・一	八七三・六三〇	九七六	六一四七・九四二	二〇三〇・八	四二四八・六六三
同 三年度	九三三・一	四〇九・四三三・二〇	八九四	六八二・三・七〇	九六一・二〇八	九七六	七七八四・八七八	二〇三〇・八	四八七二・八二九八
同 四年度	九三三・一	四六一・五二二・九五〇	八九四	四八三・三・六四〇	八五八・八七九	九七六	五六九二・五一九	二〇三〇・八	五一八四・五四六九
同 五年度	九三三・一	六八四・一八六・八〇	八九・四	二四九・〇・六〇〇	四六五・四七三	九七六	二九五六・〇九三	二〇三〇・八	七二三七・四七七三
同 六年度	九三三・一	七九五三・一六九三	九八・一	九〇五・五・一五五	—	九八・一	九〇五・五・一五五	二〇三三・一	八八五八・六八四八

第十六章 拓殖事業

朝鮮に於ける拓殖は獨り東洋拓殖株式會社のみならず他に幾多の經營者ありと雖其の規模較や小なるを以て本章には特に該會社の拓殖事業に關する最近の概況を掲げて其の一斑を示さむとす同會社の經營する事業の種類は(一)拓殖上必要なる資金の供給(二)同農業、水利事業及土地の取得、經營、處分(三)同移住民の募集及分配(四)移住民の爲必要なる建築物の築造、賣買及貸借(五)移住民及農業者に拓殖上必要なる物品の供給及其の生産したる物品の分配(六)委託に因る土地の經營及管理(七)其他拓殖の爲必要なる事業の經營等にして本店を東京に支店を朝鮮京城、滿洲奉天、關東州大連の三箇所に置き別に一般業務處理の爲め朝鮮に十箇所、移民の募集分配事務の處理並業務案内の爲め下關に一箇所の出張所を設けて事業を行ひつつあり

會社の資本金は從來一千萬圓なりしか大正七年五月増資を爲し現在二千萬圓(總株數四十萬株、一株額面五十圓内二十萬株は全額拂込濟二十萬株は四分の一拂込にして外に社債總額三千六百三十五

(内)一千九百三十五萬圓は外債五千萬法の邦貨換算額)を發行せり
 今最近五箇年間に於ける營業概況を示せば左の如し

東洋拓殖株式會社營業概況

年 度	資本		拂込政府		準備		損益		勘定		配當金	職員數
	金	千円	資本金	出資金	金	千円	總益	總損	利益	千円		
大正二年度	10,000	千円	10,000	千円	3,000	千円	5,600	3,600	1,900	千円	六九〇〇〇〇 (年七分強)	二八八
同 三年度	10,000	千円	10,000	千円	3,100	千円	3,300	2,300	1,000	千円	六五〇〇〇〇 (年六分五厘)	二二九
同 四年度	10,000	千円	10,000	千円	3,000	千円	3,300	2,300	1,000	千円	六五〇〇〇〇 (年六分五厘)	二四二
同 五年度	10,000	千円	10,000	千円	3,000	千円	3,500	2,100	1,400	千円	六五〇〇〇〇 (年六分五厘)	二二九
同 六年度	10,000	千円	10,000	千円	3,000	千円	4,600	3,100	1,500	千円	五三〇〇〇〇 (年七分五厘)	二九七

本表大正三年度乃至大正五年度に於て益金の減少を見るは主として米價暴落の結果に依る
 又大正六年度に於て配當金額を減少せるは會社法改正の結果政府持株に對し利益配當を要
 せざりしに依る

一 土地の經營 會社の經營せる土地は二種類より成る即ち出資地及買收地是なり出資地は舊韓國
 政府が引受株式六萬株に對し拂込に代へて提供せる土地を謂ひ買收地は會社自ら之を買收せるも

のにして併合の年即ち明治四十三年度末に於ける總面積は一萬千三十五町步餘に過ぎざりしか今や左表の如く七萬四千七百町步餘の多きに達せり之等の土地は移住民割當地並果樹園、造林地、林業苗圃地の如き直營地外の耕地は從來の慣例に依り朝鮮人をして小作せしめ一面堤防用水路溜池等の修理改善を行ひ土地の改良生産の増加に努めつつあり

東洋拓殖株式會社經營土地

大正七年十月一日

道	田	畑	宅地	林野	雜種地	合計
京畿道	四、八五八・〇町	三、八三四・七町	五九・六町	四六・九町	二一九・八町	九、〇二〇・〇町
忠清北道	七一九・八	四九一・五	三八・七	〇・二	一四・〇	一、二六四・二
忠清南道	四、六三八・一	七六九・二	三九・二	六・〇	八六・六	五、五三九・一
全羅北道	八、七三〇・一	七六七・二	四一・三	一七三・二	一〇〇・五	九、八一二・三
全羅南道	九、八八二・三	二、四〇三・七	六三・〇	九〇七・〇	二五五・三	一三、五一一・三
慶尙北道	三、九七五・九	一、六二九・五	二四・六	二二五・九	一六九・八	六、〇二五・七
慶尙南道	四、九二一・二	一、八八五・七	一一・四	三一五・五	三〇八・〇	七、四四一・八

道	田	畑	宅地	林野	雜種地	合計
黃海道	九、九三四・六	三、七三九・〇	三九・一	五二一・一	九四七・四	一五、一八一・二
平安南道	六七四・四	一、三四四・〇	六・四	一一三	一一七・二	二、一四三・三
平安北道	六四二・九	四二八・〇	九・四	九二・二	二〇二・六	一、三七五・一
江原道	一九九・八	一、〇四一・四	六・三	—	八・九	一、二五六・四
咸鏡南道	八九七・〇	一、一〇七・九	一一三・三	—	一二九・四	二、一四七・六
總計	五〇、〇七五・一	一九、四四一・八	三五二・三	二、二八九・三	二、五五九・五	七四、七一八・〇
大正五年度末	四九、〇二二・七	一九、六四八・五	—	二、二七二・六	二、四三八・六	七三、三八二・四
同 四年度末	四九、〇八〇・四	一九、五九四・四	—	二、二四四・三	二、四四四・八	七三、三六三・九
同 三年度末	四六、六四二・一	一八、七五三・七	—	二、二六五・八	二、四八二・四	七〇、一四四・〇
同 二年度末	四三、〇五七・三	一七、四七一・七	—	一、九六八・六	二、三六四・八	六四、八六二・四

本表大正七年に於て宅地を増加したるは地目整理の結果に依る

二 農事改良 内鮮農民に對し稻作の改良獎勵の爲明治四十三年以來毎年各地に採種小作田を設け優良種子の生産並普及に努め苗代の設置施肥、插秧、除草、害蟲驅除豫防、調製法等の實地指導

を試み又一面種籾耕牛肥料の貸付を爲しつつありしか大正七年には改良種普及地二萬八千町歩に達し一應社有田中適地全部に普及せるを以て更に栽培不適地に對しても其の地質品種に關し第二期調査を爲し改良の目的を速成せんとする計畫なり又從來栽培の改良種は地方的影響を受け漸次惡變するを以て種子の更新を圖るの必要あり大正七年より原種田を設置することとなり七町九段步餘を施設せり尙ほ耕牛貸付は一萬二千餘頭に達せしか大正七年十月同社の娘會社たる東洋畜産興業株式會社創立に付右事業は擧げて同社に委することせり

三 果樹園經營 京城東大門外藏島果樹園は明治四十二年の創設に係り現在面積二十二町四反步にして苹果三千百餘本、梨千五百餘本、葡萄二千五百餘本を栽培す生産物中苹果は逐年供給過多の傾向あるに鑑み其の販路を大正二年來露領滿洲方面に開拓し相當の効果を收めつつあり

四 殖林經營 明治四十三年以來年年經營の歩武を進め大正七年十月迄に國有山野の貸付を受けたるもの黃海道に於て一萬五千四百四十九町步、咸鏡南道に於て一萬四千九百六十二町步、江原道に於て二百七十町步、合計三萬六千八百八十一町步にして目下貸付出願中のものを合せ近く三萬三千

町歩の面積を得薪炭採取林及用材林の經營を爲すに至るへし此の外黃海道に於て一千二百二十三町歩の民有林を買收し大正二年以來カシハ、ナラ、マツ等の天然生稚樹を保育中なれば今後三、四年を経過すれば薪炭材を供給することを得へし又造林用苗木養成の爲明治四十四年以來苗圃を設置しクマギ、ニセアカシヤ、クリ、カラマツ等の苗を養成し社有造林地に山出を爲し又一般需業者に供給したるもの數からさるか現在苗圃經營面積は京畿道畿島十町二段餘歩咸鏡南道德源四町九反餘歩なり

五 竹林經營 朝鮮の南部は竹林經營の適地なるも從來多くは天然に委し濫伐を極め年年荒廢するの狀態なりしを以て明治四十五年以來慶尙南道及全羅南道に於て民有竹林九十五町歩餘を買收し之を改良して模範林の經營に著手し一面には竹林新植の模範を示す爲國有未墾地の貸付を受け或は民有未墾地を買收し大正二年及同三年の兩年間に於て八十町歩餘に苗竹林の新植を爲したるに其の生育頗る佳良なり此くの如く朝鮮に於ける竹林新植の嚆矢は本會社にして其の成績良好なり

六 水利開墾

(イ) 平安北道泰川水利工事 大正二年五月平安北道龜城郡五峯面泰川郡西面及南面の三面に跨る川坊江(大寧江の支流)流域畑地の改耕に着手し大正四年十二月竣功したるも更に工事の完全な期し大正五年三月以來改良工事を起し同年十一月完成せり其の灌漑區域は田約一千九百町歩にして用水は川坊江に井堰を設けて引水するものなるか主要なる竣功工事は水路幹支線延長五萬九千三百餘間隧道三箇所長七百餘間井堰一箇所伏越十箇所流込二百十六箇所分水樋九十五箇所橋梁三百四十二箇所堤防延長一千六百間等にして其の工費は四十八萬五千六百餘圓を算せり

(ロ) 宮三面機力用水工事 全羅南道羅州郡良谷面及旺谷面は榮山江の左岸に在りて土地肥沃なるも河水は耕地面より十數尺低く流るる爲嘗て灌漑の用に供したることなく從て毎年用水缺乏し收穫意の如くならざりしを以て會社は揚水機械を据付け灌漑施設を爲すべく大正五年六月工事に着手し同年十二月之を竣工し現に大正六年度に於ける蒙利地域水田二百五十餘町歩は施工前

五箇年の平均に比し小作料增收千五百四十一石餘を得たり而して主要なる竣功工事は揚水機械（吸入瓦斯機十四吋セントリフューガル唧筒）一臺機械及其の他附屬建物四棟、水路延長三千二百三十八間、暗渠及土管九箇所掛樋一箇所土橋十一箇所等にして其の工事費は金二萬六千六百餘圓なり

(ハ)長安坪開墾工事 本工事は京畿道高陽郡蘆島面長安坪所在國有草生地五百餘町歩を開墾し漢江の氾濫を防止し移住民の收容を目的とするものにして大正元年九月起工し同四年七月竣工を告げ開墾整理地面積四百二十八町歩餘を得て目下鮮人に貸付し試作中に屬す竣功工事の主なるものは堤防延長九千五百八十四間、閘門四箇所、用排水路二萬一千九百二十一間、道路二萬九千七百四十九間、橋梁三十箇所等にして竣功後更に之が完全を期する爲め改良増築工事を施し其の工事費は通計金三十三萬四千餘圓に及へり

(ニ)羅岩里開墾工事 本工事は全羅北道益山郡望城面羅岩里所在國有未墾地百四十餘町歩の開墾

を目的として錦江の氾濫を防止し灌漑排水の途を講せんとするものにして大正五年四月起工し同九月竣功し水田百三十四町一反餘歩の新開墾地を得たり昨年の收穫は反當平均粃三石強にして工事の主なるものは堤防二千五百餘間、用悪水路七千四百餘間、道路四千八百四十餘間、樋間四箇所等にして其の工費は金三萬三千六百餘圓なり

(水)梁山郡上西面改良工事 慶尙南道梁山郡上西面曾山里所在の社有地約八十町歩は從來堤防脆弱にして年年洛東江の水害を被り爲に大正二年度には僅かに粃百石同三年度には五十石を收穫したるに過ぎず爾後は全然荒廢に歸し收穫皆無の状態に在りしを以て防水工事を施すと同時に用悪水路を疏通せるものにして大正六年三月起工し同六月竣功せり竣功工事は堤防二千二十六間取水樋管一箇所、排水管一箇所等にして其の工費は金一萬四千九百九十二圓八十二錢を要したり而して昨年より直ちに約五十町歩の作付を爲し小作料粃五百石を收穫せり

(〜)方丑池埋立工事 本工事は全羅南道羅州郡旺谷面方丑里所在舊溜池面積十三町八反一畝二十

一步を埋立て之を水田に墾成利用の目的を以て大正六年六月起工し同年八月五日竣工耕地整理を行ひ良田十二町八反一畝十四歩を墾成せり用水は池塘に新設せる調節門に依り宮三面機力用水を利導すると共に雨水を貯へて之を補給に充て同時に排水を良好ならしめたり而して工事の主なるものは土工二千八百間、調節水門一箇所、階段工一箇所、橋梁六箇所、幹線水路百七十間、排水土管三箇所、その他附帯工事等にして其の工費は二千五百二十七圓九十五錢を要せし大正六年度の小作料粗二百六十七石餘を得たり

(ト)崇仁面開墾工事 本工事は京畿道高陽郡崇仁面地内國有未墾地十町三畝二十五歩を畑に開墾するものにして最近完成したるを以て目下付與申請の準備中なり亦本事業に關聯する舊河敷地十町一畝二十歩は同所中浪津河身改修を了したる爲本年四月總督府より讓與を受けたり

七 移民事業 會社は明治四十三年以來拓殖事業の經驗に鑑み大正六年二月移住規則を改正し土地讓渡、移住費貸付等に對して便法を講し純農業者以外に農業兼營者移住の途を開き拓殖事業經營

者の爲めに土地の讓渡若は移住費を貸付する事とし又第二種移住民の一時拂込金並利率を低減し而して移住民の農業上の指導副業の獎勵は勿論組合を組織して其の共同販賣並購買を斡旋し且移住地の選定に一層周到なる注意を拂ふと共に移住民募集の方法を改正し大正七年四月より下關市に出張所を設け堅實なる移住民の招致を圖れり且教育、宗教、衛生、交通其の他の施設に關しては從來に比し其の保護を厚うせむことを期せり又移住民選獎手續なるものを定め優良移住民に對しては特別の保護を與ふる外褒狀及賞品を授け永く之を旌彰するの途を開けり今既往八回の移住民成績を擧ぐれば左表の如し

東洋拓殖株式會社移民事業

大正七年十月一日

回	期	應募戸數	承認戸數	現在		割當地積	移住費貸付高
				戸數	人口		
第一回(明治四十三年)		一、二三五	一六〇	一一八	五三一	二二五	一四、三九九
第二回(同 四十四年)		一、七七一	七二〇	三四〇	一五三〇	六一六	三七、二二八
第三回(大正元年)		二、〇八六	一、一六七	六四八	二九一六	一、二六一	六七、二六一
第四回(同 二年)		三、四七二	一、三三〇	五七七	二、五九七	一、一一五	四四、八九三

回	期	應募戸數	承認戸數	現在戸口		割當地積	移住費貸付高
				戸數	人口		
第五回(大正三年)	三年	一、九六四 ^戸	一、一〇六 ^戸	四三五 ^戸	一、九五八 ^人	八三六 ^町	二一、七二六 ^円
第六回(同四年)	四年	一、二八四	七七四	二九八	一、三四一	六一五	一三、九二〇
第七回(同五年)	五年	一、一〇一	五四二	二五八	一、一六一	四九五	一四、三八〇
第八回(同六年)	六年	一、〇五〇	六五〇	三四七	一、五六二	一、一〇一	一四、〇七〇
累計		一三、九〇六	六、四四九	三、〇二一	一三、五九六	六、二六四	二二七、七七七

本表割當地面積及移住費貸付高は現在戸數に對する分のみを掲上せり
次に各道に於ける移住民分布の狀況を示せば即ち左の如し

東洋拓殖株式會社移住民分布

大正七年十月一日

道	第一種	第二種	合計
京畿道	四六三 ^戸	六 ^戸	四六九 ^戸
忠清北道	九		九
忠清南道	二三四	三	二三七
全羅北道	三九四	九	四〇三

全羅南道 慶尙北道 慶尙南道 黃海道 平安北道 平安南道 咸鏡南道 總計

四九六 三七一 五八四 四〇七 一四六 一四八 二、九九六

三 | | | 四 | 六 | 七

五〇三 三七一 五九〇 四一一 一四六 一四八 三〇二一

又移住民戸數の府縣別を表示すれば左の如し

東洋拓殖株式會社移住民府縣別

大正七年十月一日

府	縣	戶數	府	縣	戶數	府	縣	戶數
佐賀縣	三四七	福岡縣	三二五	山口縣	三二二	高知縣	二八五	

岡山縣	二〇七	岐阜縣	六九	京都府	一五
熊本縣	一六九	愛知縣	六五	長野縣	一五
香川縣	一四五	和歌山縣	六四	山梨縣	一五
廣島縣	一四四	三重縣	五九	靜岡縣	一三
大分縣	九四	新潟縣	五八	奈良縣	一一
長崎縣	八八	福井縣	五六	千葉縣	一〇
愛媛縣	七五	鹿兒島縣	四四	其の他	五五
德島縣	七二	福島縣	三七	總計	三〇二
府	府	府	府	府	府
縣	縣	縣	縣	縣	縣
戶數	戶數	戶數	戶數	戶數	戶數

會社の移住民は之を分ちて二種とす第一種移住民は一月に付田畑二町歩以内の割當を受け其の土地代金に年六分の利子を附し五箇年据置二十五箇年以内に年賦拂込みたる後該土地を所有するものにして全部自作することを要す第二種移住民は割當地田畑十町歩以内にして土地引渡の際土地代金の四分の一以上を一時に拂込み残額は年七分の利子を附し二十五箇年以内の年賦拂込みに依

り土地所有權を讓渡せられ割當地の一部を自作すれば他は小作せしむることを得るなり移住後の成績良好なる第一種移住民は前記拂込の方法に依り三町歩以内の土地の讓渡を受け又第一種及第二種共移住後五年を経過したる後土地代金及移住費貸付金の二分の一以上を拂込むときは其の土地の所有權を取得することを得而して半農移住民として本業の傍ら農業を営み永住土著の根據を作らむとする者に對しては適當の耕地を割當て第一種移住民と同様の條件に依り土地を讓渡し移住費を貸付け保護を與へて第一種移住民たることを承認することあり以上の外鑛山業その他拓殖事業經營者の業務に従事する傍ら農業を営まむとする者に對して其の經營者連帶保證の下に第一種移住民として承認せる特種移住民及五戸以上申合せ社有地以外の土地の買入を會社に要求し會社が該土地を買入れ之を割當てて第一種移住民たる事を承認せる買入讓渡移住民あり其の他移住民に薪炭供給の目的を以て移住地附近に適當なる造林用地あるときは可成之を貸付し又住家納屋の建築費又は購入費、種苗、肥料、農具及耕牛の購入費の補助として第一種移住民に對し一月に

付移住費二百圓以内の貸付を爲す外住家建築材料の一部又は購入費の一部を受くることを得せしむ而して移住民に對し船車賃割引券を交付し邊陲地方の移住民に對しては特に土地代金拂込方法及移住費貸付に關し特殊の方法を設け又は其の他の特殊の保護を與ふることあり

移住申込の手續は毎年二月頃會社か其の年募集すべき移住民の戸數並移住地を宣報及主要なる新聞に公告するを以て同社移住民たらむとする者は同社移住規則に依り移住申込書を作成の上市區町村長の證明を得て内地在住者は下關出張所に朝鮮在住者は京城支店に申出つべく申込書には最近の戸籍謄本又は民籍謄本を添附することを要し毎年九月末日迄に提出すべきものとす

八 資金貸付 會社は拓殖上必要な資金を貸付す其の方法左の如し

- 一 定期償還貸付 (イ) 移住民に對し五年以内の移住費貸付(ロ) 生産者に對し其生産を擔保とする一年以内の貸付(ハ) 不動産、鐵道、鑛業權其の他不動産上の權利を擔保とする五年内の貸付
- (ニ) 公共團體又は特別の法令に依り組織したる産業組合に對し五年以内の無擔保貸付(ホ) 農業

者二十人以上連帯して債務を負ふ者に對し五年以内の無擔保貸付（へ）財團其の他確實なる物件を擔保とする五年以内の貸付（ト）移住民取扱業其の他拓殖事業を營むことを目的とする會社の株券又は債券を質とする五年以内の貸付

二 年賦償還貸付（イ）移住民に對し二十五年以内の移住費貸付（ロ）不動産、鐵道、鑛業權其の他不動産上の權利を擔保とする三十年以内の貸付（ハ）公共團體又は特別の法令に依り組織したる産業組合に對し三十年以内の無擔保貸付（ニ）財團其の他確實なる物件を擔保とする三十年以内の貸付

三 移住民取扱業其の他拓殖事業を營むことを目的とする會社の株券又は債券の應募引受
拓殖資金の需要は逐年遞加の趨勢を示す今朝鮮に於ける貸付高を示せば左表の如く併合の年なる四十三年度末の貸付總額は百三十二口、五十八萬七千五百三十圓に過ぎざりしか大正七年十月には二千五百七十三口、一千四百六十二萬三千五百三十六圓となり差引二千四百四十一口、一千四百三萬六千六圓の増加を呈し尙將來益増加するの傾向を有す而して之が使途は株券及債券引受高三百五十萬餘圓の外土地開墾及改良、水利、築堤、農事經營、藝圃經營、殖林、果樹栽培、公共事業等各種の拓殖方面に互り就中近來水利事業の放資多きを占むるは産業開發上好現象なりと云ふへし

東洋拓殖株式會社貸付金

種別	明治四十三年度末		大正七年十月一日		
	口數	金額	口數	金額	
定期償還貸付金	內地人	三八	二五四、二五〇	一一一	九一九、〇二八
	朝鮮人	八八	一七五、四八〇	五三三	一、〇八二、四三八
	內鮮人連帶			三	六、六八二
	公共團體			一五	八一、九七五
	計	一二六	四二九、七三〇	六六二	二、〇九〇、一三三
年賦償還貸付金	內地人	五	二〇、四五〇	二三六	一、三八七、九七七
	朝鮮人			一、五六〇	三、六二一、五三〇
	內鮮人連帶			一	三九五
	公共團體	一	一三七、三五〇	一〇〇	四、〇二一、〇一一
株券及債券引受高	計	六	一五七、八〇〇	一、八九七	九、〇三〇、九一三
	總計	一三二	五八七、五三〇	二、五七三	三、五〇二、五〇〇
					一四、六二三、五三六

移住費貸付高は別表移民事業の部に表示せしを以て本表中之を省く
貸付金の利率は定期貸年一割、年賦貸年九分五厘とし又水利事業に要する資金に限りては
特に年八分迄引下くることとせり

여 백

第十七章 土地調査

明治四十三年度以降繼續事業として九箇年の歲月と二千四十餘萬圓の經費を要したる土地調査事業は豫期の如く大正七年十月を以て終了せり左に其の經過の大綱を掲ぐへし

一 計畫 土地調査事業は明治四十三年三月韓國政府に於て之が施行を企畫し併合と同時に一旦之を中止せしも帝國政府は之が急施の必要を認め同年十月朝鮮總督府臨時土地調査局官制を公布し本事業の完成を計畫せり

初め韓國政府に於ては本事業の計畫は總經費千四百十二萬九千七百七圓を以て七年八箇月の期間内に之を完了するの豫定なりしも朝鮮總督府に於ては大に事業計畫を充實擴張し豫算を千五百九十八萬六千二百二圓に増額し只管事業の進捗に努めたるも調査すべき土地面積の増加頗る多大にして爲に事業期間の延長及經費の劇増を來し財政計畫上に於ても甚しき支障を惹起するの虞ありしを以て大正四年三月第三次の事業計畫を決定し豫算を二千四十萬六千四百八十九圓と爲し事業

期間を八年十箇月と定めたり

二 調査の方法 地籍調査の方法は三角測量を基礎とする平板式測量を採用し土地所有權の調査、土地價格の調査及土地形貌の調査を施行せり第一土地所有權の調査は土地の所在地籍及所有權等を調査して地籍圖に依り其の位置及形狀を表劃し土地の所有權及其の疆界を査定し地籍を明瞭にし以て多年紛糾を極めたる土地係争を解決し併せて土地登記制度の設定を期し第二地價調査は市街地に於ては地目に係らず凡て時價に依りて地價を評定し各地を通して百十五級を爲し市街地外に於ては宅地は賃貸價格を基礎として地價を附し五十三級に分ち田、畓、池沼及雜種地は其の收益に基きて地價を定め百三十二級に分てり元來地價評定の當否は忽ち地稅負擔の輕重を來たし其の影響する所甚だ重大なるを以て其の調査に付ては十分慎重を加へ穀價及金利の關係を考察し且朝鮮全土を通し統一的に之を調査を行ひ以て其の地位及等級を詮定し常に均衡を計り地稅制度を確立する基礎たらしむるに於て遺憾なきを期し第三土地形貌の調査は所謂地形測量にして地上に於ける天爲人爲の地物を描劃し其の高低脈絡分布の關係を表示し之を地圖上に明瞭ならしめたり

三 調査の結果 土地所有權の査定を爲したる所有權者は百八十七萬千六百三十六人にして土地の面積四百八十七萬千七十一町步なり右の内耕地の面積は四百三十三萬七千四百四町步にして朝鮮全土の總面積に對する耕地の割合は一割九分四厘又山林總面積に對する耕地の割合は二割七分に相當し又畚の田に對する割合は五割五分三厘にして之を内地に於ける田畑の割合に比するときは畚の歩合極めて少數なるを知るへし

地價の査定を爲したるものは千八百五萬九千四百四十筆にして其の地積總額實に九億三千九百二十萬三千四百五十圓に達したり

又地形測量の結果は朝鮮の地形及面積等に著しき異動を生し總面積一萬四千三百二十二方里にして從來の想定面積に比し百八十九方里を増加し且經緯度の相違に依り地圖上の差違を生したる箇所亦尠からず

四 從業職員 本事業に従事せる職員は高等官九十三人(内鮮人三人)判任官以下七千二十人(内鮮人五千六百六十六人)にして職員養成の爲特に事務員及技術員養成所を設け廣く從事員を養成し

尙是等職員の奮勵を促さむ爲別に切程給與、獎勵賞與等の制度を設け以て能率の増進を計り斯く
て本事業を遂行せり

五 地形圖調製 本調査に依りて成れる地籍圖の成果を利用し測板上に一般の地貌及地物を測圖し
且行政區劃を明示せる地形圖を調製せり而して府及重要なる地區は一萬分一、府及重要なる地區
の周圍は二萬五千分一の縮尺を用ゐて之を測圖し尙五萬分一の縮尺を以て朝鮮全土を通し地形圖
を調製せる外名勝舊蹟地の案内に便せむ爲開城、扶餘、慶州、金剛山等を各一葉に收めたる地圖
をも發行したり

六 附帶業務 土地調査の成果を確實ならしめ以て調査の趣旨を貫徹せしむる必要上附帶業務とし
て地籍略圖の調製、府郡島地籍事務の調査、驛屯土の分筆調査及地誌資料の編纂等を爲せり就中
地誌資料編纂は由來朝鮮に於ける地誌に關しては憑るべき資料に乏しかりしか土地調査の成果は
嚴密精確なる根柢を有し地理學上の基礎的資料として最適當にして百般の施設經營上極めて緊要
なる事項なり

左に土地調査成果一覽表を掲ぐ

土地調查成果一覽表

道	府郡島	面數	洞里數	地積	筆數
京畿道	二〇二	二五〇	二、七二四	一、三一五、三六五、五〇七 四	一、六一四、七五八
忠清北道	一〇	一一四	一、五〇九	五二九、四九七、一六五	八五八、五三二
忠清南道	一四	一七五	二、二四八	八三〇、四八九、六三四	一、二三六、八〇三
全羅北道	一四一	一八八	一、七七〇	八一九、一四五、一七七	一、三七二、六九〇
全羅南道	二二一	二六八	三、〇五七	一、四三一、五八四、四七九	二、七五〇、〇二八
慶尙北道	二二三	二七二	三、二二七	一、三二一、九九二、六九一 六	二、六九五、六七七

道	府郡島	面數	洞里數	地積	筆數
慶尙南道	一九二	二五九	二、六〇三	九八二、八八四、九九〇	二、三三七、二七六
黃海道	一七	二二六	二、〇五三	一、八四二、八五七、四三一	一、四九九、一四九
平安南道	一四二	一六八	一、九三一	一、三二五、四〇〇、六八九	一、〇六〇、八九三
平安北道	一九一	一九四	一、四七五	一、二九二、〇二五、一八一	九五〇、九〇三
江原道	二二	一七八	一、九七二	一、〇八六、三五六、五八四	一、二五五、九四七
咸鏡南道	一六	一四二	二、九三一	一、一六五、〇六七、七五八	一、〇一〇、二一一
咸鏡北道	一一	八一	七〇九	六八〇、五四六、七四一	四六四、六五三
計	三三〇	二、五一五	二八、二〇九	一四、六一三、二二四、〇二八	一九、一〇七、五二〇

第十八章 宗教及享祀

第一節 宗教

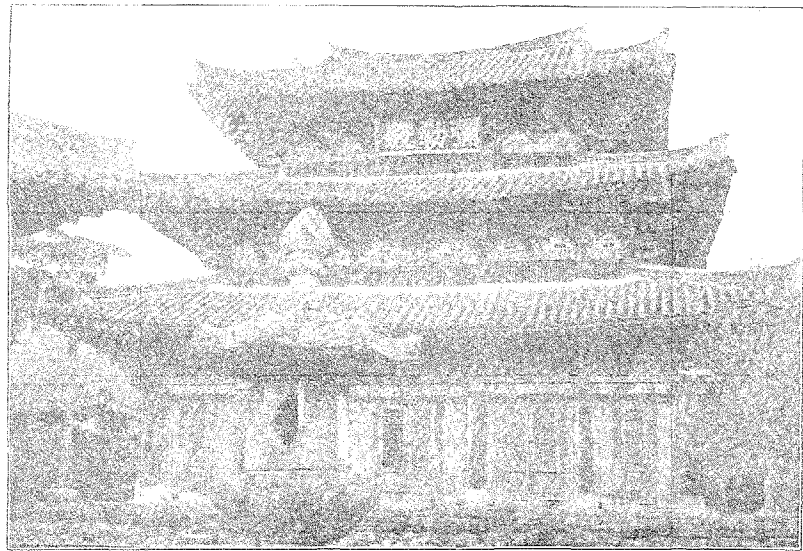
朝鮮に於ける宗教の地方的分布は各地を通して基督教最も優勢の地位を占め佛教之に亞き本邦固有の神道は布教者の數に於ても亦信徒の員數に於ても比較的少數にして教勢亦振はざるの觀あり今三教を區分的に狀況を叙ふれば左の如し

(イ)神道 は日本特有の宗教にして其の團體を爲し特立せるもの十三派ありと雖併合前より今日に至るまで各地に教師を派遣し相應の設備を爲して布教に従事するは天理教、金光教、神理教、大社教の四派にして最近數年間に於ける各派の布教狀況は概して平穩順調の趨勢を保てるも其の信徒の大部分は内地人にして著しき發展の成績を見ず其の概要を表示すれば左の如し

神道布教狀況

年	布教所數	布教者	信徒		合計
			内地人	朝鮮人	
大正二年末	五二	六四	七、七九九	四、七九五	一二、五九四
同三年末	六七	七四	九、四〇三	四、〇五一	一三、四五四
同四年末	五二	九一	二五、三六五	一〇、五八五	三五、九五〇
同五年末	六五	一〇三	二七、八〇一	八、五五三	三六、三五四
同六年末	七〇	一一〇	三〇、八三七	八、四一一	三九、二四九

(口)佛教 朝鮮に於ける佛教は其の傳來甚だ古く高句麗の時(仁德天皇壬辰二十年)支那東晉より初めて佛經を傳來し其の後四十年を経過し復た同國より佛像を傳致し百濟、新羅を經高麗の末期に至る迄寛大なる格護の下に隆昌を極めしも李朝に至り寺刹の新創を停め或は度僧を制限し特に近古二百有餘年來良民の僧尼を爲るを禁する等政府の抑壓劇甚なりし爲僧侶は一般人民より輕侮せられ社會の上層に立ちて世人を感化するか如きは夢想たにも及ばず屏息以て無爲に歲月を送りし



全羅北道金堤郡金山寺彌勒殿

合併後明治四十四年九月寺刹令實施後は從來羈束せし種種の制限を解除し寺刹の體用を完ふし併せて布教を爲すことを許可せられしより僧侶は殆ど蘇生の思を爲して布教興學共に丹精を凝らし向上の血路を啓くことを得徒弟の教育は勿論財力智力を費して四恩報謝の本分を完ふせむことを覺悟するに至れり今最近數年間に於ける寺刹及僧尼の數を表示すれば左の如し

朝鮮人設立寺刹及僧尼數

年	寺刹數	僧尼		合計數
		僧	尼	
同 二年末	一、三三七	六、七六九	一、〇六六	七、八三五
同 三年末	一、三八五	六、九七二	一、一九八	八、一七〇
同 四年末	一、四〇一	六、九六三	一、二八四	八、二四七
同 五年末	一、四一一	六、九二〇	一、四二〇	八、三四〇
同 六年末	一、三八一	六、七七六	一、三五〇	八、二二六

本表寺刹數前年末現在に比し廢止合併等の原因なくして増減あるは前年誤調ありたるに因る

然り而して内地に於ける佛教各宗派の内朝鮮の布教に最も早く著手せしは眞宗大谷派本願寺にして同派の僧侶が初めて朝鮮に渡航し釜山に上陸せしは文政年間に在り故に維新後明治九年修好條約成立して釜山の一地域が開港場となるや在留内地人僧侶は布教の外に日鮮人の間に介在して意思の疏通を圖り貿易上に貢獻したる事功も亦尠なからず而して釜山に亞き元山、仁川其の他開港場の増加に伴ひて淨土宗曹洞宗眞宗本派本願寺等より逐次教師を派遣して布教を開始し併合後は布教者派遣の數頓に増加し信徒の結集寺院教會所等の設備も年と共に増加するに至れり其の概要を表示すれば左の如し

年	佛教布教狀況		信徒		計
	布教所數	布教者	内地人	朝鮮人	
大正二年末	二〇八	二〇九	六四、七〇一	九、九九七	七四、六九八
同 三年末	二二二	二三四	六九、〇一〇	七、八三二	七六、八四二
同 四年末	二二一	二〇五	八六、〇二〇	七、八五四	九三、八七四

同	五年末	二〇九	二八二	一〇四、一六九	八〇、一三九	一八四、三〇八
同	六年末	二三四	三一九	一一一、三四九	九六、八四八	二〇八、一九七

各宗派及其の所屬教師に於て自動的に施設するものの外内地よりの移住者にして佛敎に歸依する者相協力して寺院を設け各祖先來奉する宗旨を標榜せる道場に於て葬祭追福を營まむとするもの年と共に加はり其の狀勢内地と異ならざるに依り統制ある規律の下に立しむるを必要と認め大正四年八月府令第八十二號を以て寺院に關し必要なる規則を定め十月一日より之を施行し内地に於ける社寺取扱方と略其の規矩を同ふるに至れり今最近に於ける寺院創立許可の數を掲ぐれば左の如し

創立許可寺院數

大正七年十月一日現在

宗派	寺院數	宗派	寺院數	宗派	寺院數
眞宗本願寺派	一三	日蓮宗	五	眞言宗醍醐派	一
同大谷派	二	法華宗	一	總計	六〇
淨土宗	一三	眞義眞言宗智山派	二		
曹洞宗	一八	眞言宗高野派	五		

(ハ)基督教 朝鮮に傳來後年を経ること久しと雖公然信教の自由を許されたるは開國五百五年即明治二十九年以後のことなりき爾來朝鮮人は進て外國人居留地に到り宣教師に就て教を聽き道を求むる者日に月に増加し且在來の佛教は布教止息の境遇に在りたるを以て弘教に最も便宜なる地位を占め何時となく居留地外に出てて教線を張り到る處に教會堂講義所集會所の類を設け朝鮮唯一の宗教たる觀を呈するに至り内地人も亦教會等を設け之か傳道に従事する者あり今や山村僻陬の地に至るまで教會堂或は講義所又は集會所を鋪設せざるはなし且外國人宣教師は學校病院等の附設事業を經營して慈善救濟の事に當り偽に教勢年と共伸張せり今最近數年間の布教狀況を表示すへし

基督教布教狀況

年	布教所數	布教者	信徒			合計
			内地人	朝鮮人	外國人	
大正二年末	二、一三六	二、八四七	六七八	一七一、九八〇	一五二	一七二、八一〇
同 三年末	二、三〇四	三、一三一	七一六	一八八、六七四	一七九	一八九、五六九
同 四年末	二、九五四	一、九五二	二、九一九	二六四、二八四	五二六	二六七、七二九

同	五年末	三、一六四	二、三〇五	二、九七六	二七九、五八六	四六〇	二八三、〇二二
同	六年末	三、二五二	二、四四一	三、四〇三	二七〇、六九八	四三二	二、七四三、四

第二節 享 祀

(イ)八殿三陵の享祀 新羅、百濟、高句麗、任那及び高麗等歷朝始祖の祭殿に參奉を置き常時の奉仕並祭祀の行事を擔任せしめ而して毎年の例祭には殿陵所在地道長官祭詞を捧げ香幣を供進するを例とす事皆多く先格に則り敢て更めず但し參奉には享祀者の後裔中より拔擢して補命するを例とせり

(ロ)陵墓守護 歴代王陵に守護人を置き尊尙地に人民の侵略濫行を制止し特に放牧、侵墾、採樵等の弊害なからしむる爲め明治四十五年度より陵の大小と所在地の距離等を斟酌して八十五人の守護人を置き監守を爲さしむ即ち京畿道に於ては開城、長湍、江華及高陽の四郡に五十人慶尙北道慶州郡に三十人慶尙南道金海郡駕洛國(國史に任那と書するもの)王陵に二人平安南道平壤府に箕子陵、中和郡に高句麗王の陵あるを以て之に三人を配置し各陵墓に深縁ある後裔者を擧げて監守

の任に膺らしむることせり

(ハ)神社 神祇を崇敬するは日本國民特有の風習にして凡そ内地人の移住して農商工業を營む集團の地には多くは神社を設け以て表敬の齋場と爲さざるなし故に一方に於ては國風移殖の要求を充たさしむる爲又一方に於ては統制ある規律の下に立しむるの必要を認め大正四年八月府令第八十三號を以て神社に關し必要な規則を定め同年十月一日より之を施行し内地に於ける神社取扱方と略其の規矩を同ふるに至り今大正七年十月一日に於ける創立許可の神社數を擧ぐれば左の如し

創立許可神社數

大正七年十月一日

道	神社數	道	神社數	道	神社數
京畿道	四	慶尙北道	一	咸鏡南道	三
忠清南道	二	慶尙南道	六	咸鏡北道	二
全羅北道	五	平安南道	二	總計	三二
全羅南道	三	平安北道	三		

(二) 神祠 内地人居住者少なくして神社を創立し之を維持するに其の力乏しき地方人民に敬神思想を發現せしむるは朝鮮現下の状勢に鑑みて最も必要なるを認め大正六年三月府令第二十一號を以て神祠に關する規定を設け同月二十二日より之を施行し以て國風移殖の地歩を進め敬神思想の普及上に遺憾なからしむることを期せり大正七年十月一日現在の神祠數を道別に表示すれば左の如し

		神祠數	
道	神祠數	道	神祠數
京畿道	六	慶尙北道	三
忠清北道	二	慶尙南道	二
忠清南道	三	黃海道	一
全羅北道	二	平安南道	一
		平安北道	三
		江原道	二
		咸鏡北道	一
		計	二三

여 백

第十九章 古蹟及遺物

(イ)古蹟調査 本府に於ては明治四十二年以來韓國政府に於て著手したる古建築物並古蹟の調査を繼續し大正二年一旦其の終結を告げ既に「韓紅葉」「朝鮮藝術の研究」「同續編」「古蹟調査略報告」等を發行し別に「朝鮮古蹟圖譜」と題する圖録を公にせしか朝鮮に於ける古來の遺蹟及遺物は其の數極めて多く從來の調査は其の一斑を闡明したるに過ぎざるのみならず比年交通機關の發達並産業の勃興に隨ひ遺蹟及遺物は散逸又は湮滅に歸するの虞あるを以て速に之を調査を遂げ且之を保存の方法を講ずる必要を認め大正五年四月計畫を更新し略五箇年を期して一應の調査を遂ぐることをし調査事項を先史遺蹟(貝塚、遺物包古層、遺物散布地、豎穴)古墳(高麗以前に屬する墳墓の中期以前に屬する主要)史蹟(都城、宮殿、城柵、關門、交通路、驛院、烽燧、官府、祠宇、壇廟、なる墳墓の形狀の調査)寺刹、陶窯等の遺址、戰跡其の他主要なる史實に關係ある遺蹟の調査並遺物(古建築物(歴史上又は工藝上參考となるべき宮殿、城門、樓臺、祠宇、壇廟、客館、校舍、寺刹、橋梁等の調査)金石其の他考古物(佛像、燈、碑、石刻、幢竿、石獸、石人、石槽、鐘、香爐、鏡、祭器、樂器、繪畫、冊板、懸額、陶磁器、漆器其の他歴史上又は工藝上の參考となるべき金石製作物、木製品等の調査並蒐集)

古文書（歴史其の他考事の資料と）等に分ち調査地域を第一年度は漢置郡及高句麗の遺蹟並有るべき古文書の調査並蒐集

史前の遺蹟に付黃海道、平安南道、平安北道、京畿道、忠清北道、第二年度は三韓、伽倻、百濟及有史前の遺蹟に付京畿道、忠清南道、忠清北道、慶尙南道、慶尙北道、全羅南道、全羅北道、第三年度は新羅並有史前の遺蹟に付慶尙南道、慶尙北道、全羅南道、全羅北道、第四年度は獮貊、沃沮、渤海、女真等の遺蹟並有史前の遺蹟に付江原道、咸鏡南道、咸鏡北道、平安南道、平安北道、第五年度は高麗並有史前の遺蹟に付京畿道と定め朝鮮期に屬する調査は各年度に於ける地域の區分に依り便宜之を行ふこととし各時代の遺蹟にして豫定の地域外に屬するものは其の地方の調査を爲す際便宜之を行ひ臨時急速を要する事情あるとき及博物館陳列品として急速蒐集の必要あるものは豫定地域外と雖特に調査を爲すこととし大正五年九月より調査に着手し七年十二月末迄に第三年度に屬する一部の調査を剩し他は之を終了せり而して毎年の調査は報告書を印刷して公にすることとし七年中第一年度の調査報告書を印刷し更に同年度に屬する平安南道に於ける漢置郡及高句麗の遺蹟に關する詳細なる報告書及第二年度の報告書を發行する豫定にて目下印刷中

なり、又古蹟調査の計畫並實行の方法、順序等を審議し及古蹟の保存、遺物の蒐集、古蹟、遺物、名勝地等に影響を及ぼすべき施設に關する事項並古文書の調査蒐集に關する事項を審議し及實地の調査に當らしむる爲古蹟調査委員を置き委員長及幹事を任命して隨時委員會を開くこととせり、五年七月古蹟遺物及遺物保存規則を制定し貝塚、石器、骨角器類を包有する土地及堅穴等の先史遺蹟、古墳並都城、宮殿、城柵、關門、交道路、驛院、烽燧、官府、祠宇、壇廟、寺刹、陶窯等の遺址及戰跡其の他の史實に關係ある遺蹟年代を經たる塔、碑、鐘、金石佛、幢竿、石燈等にして歴史、工藝其の他考古の資料となるべきものの中保存の價値あるものに付名稱、種類、形狀大小、所在地、所有者又は管理者の住所氏名若は名稱、現狀、由來傳説、管理保存の方法等を臺帳に登録し此等の古蹟又は遺物を發見したる者は三日内に届出てしめ臺帳に登録したる物件に付現狀を變更し移轉、修繕、處分等を爲すには總督の許可を受けしむることとし七年末までに百九十二點の登録を了し同時に主要なる古墳、建物、石塔、石碑等に付順次保存工事を施行せり

(口)博物館 大正四年五月新に博物館係を置き同年十一月施政五年記念物産共進會の終了と同時に

其の會場たりし景福宮の一郭を博物館の區域とし直に開館の準備に著手し十二月一日より一般の觀覽を許し同時に觀覽人心得を告示し觀覽時間は本府の出勤時間に準し日曜及祝祭日の翌日を休館日とし覽觀料を金五錢と定めて觀覽券を發賣し同伴の小兒は無料とせり又二種の特別觀覽券(無料)を發行し一種は使用を一回限とし一種は使用期間を一年とせり

開館當時に在りては共進會の際新に建築せし美術館を以て本館とし寺内伯爵の寄附に係る朝鮮古來の書畫、佛像、佛具、食器、服飾品、婦人用具、陶磁器、漆器の外本府に於て購入せし物品並古蹟調査に依り蒐集したる物品及遺失物法に依り國に歸屬したる埋藏物等を陳列し又共進會の陳列館たりし審勢館(各道の産業、教育等の進歩の狀況を示すへき現品圖表統計を陳列す)及鐵道館(鐵道に關する模型、寫眞、地圖、繪畫其の他の參考品を陳列す)を存置し鐵道館には土木及通信その他交通に關する參考品を併せて陳列し名を交通館と改め思政殿及勤政殿廻廊に石碑、鐵製及石造の佛像、石棺及兵器類を陳列し庭園には石塔、石碑の類を配置し案内圖を發行せしか翌五年五月久原房之助氏の寄附に係る西域蒐集品(大谷光瑞師が前後四年に互り支那新疆省及甘肅省地

方にて蒐集したるもの)を修政殿に陳列し年末に至り其の後購入したる物品、蒐集したる物品並發見埋藏物、寄附品、寄託品を加へ陳列替を爲し七月審勢館を閉鎖し六年末に至り康寧、慶成、秋成の三殿を修理して陳列室を増設し蒐集したる古墳壁畫、同摹寫金石文、並之に關係ある蒐集品、古墳出土品、先住民の遺物對照及地圖、繪畫、寫眞等を陳列し七年末に至り之を勤政、思政、萬春、千秋の四殿に移し陳列品中優秀なるものを選びて寫眞版を爲し發賣せり開館以來の觀覽人一日平均百數十名にして晴雨寒暑に拘らず一日として觀覽者を見ざる、ことなし

本府博物館は朝鮮に於ける唯一の官設博物館たる地位に在るを以て其の陳列品は朝鮮を主とし支那、印度等の參考品を併せて陳列する方針にて陳列品の種類を概ね制度、風俗、文藝、宗教、美術、工藝其の他歴史の徵憑及參考となるべき物品並先住民に關する遺物とし専ら之を充實完備に力を效せり

여 백

第二十章 衛生

往時朝鮮は一般に衛生思想乏しく一旦疾病に罹るも醫療に頼らず大抵先つ巫女、賣卜者の言を徴するの風習あり隨て學識技能を有する醫師の如きは實に寥寥晨星を數ふるの狀況なりき又社會的衛生施設甚だ不備なる爲飲料水の如きも極めて不良にして常に消化器系傳染病流行の原因を爲し肺「チ」ストマ」の如き亦各地に蔓延して殆ど底止する所なかりき是を以て新政施行に際しては深く此の點に留意し總督府醫院の外各道に慈惠醫院を設置し又警察醫を各地に配置して傍ら一般患者の診療に従事せしめ大正三年四月よりは新に各地に公醫を配置し警察醫と相待て一般に醫藥の便を與へ飲料水改良方法としては有數の市街地に水道を敷設し又は敷設せしめ一匝國費を各道に補助して共同井戸の掘鑿を獎勵し傳染病及獸疫の豫防或は除穢事業の如き亦常に厲行を怠らざりき左に其の梗概を記すへし

第一節 醫療機關

舊韓國政府は光武四年(明治三十三年)醫師に關し醫師規則を發布したりしと雖民間に遵由せられたるの實跡なく隨て朝鮮人たる醫師は全く自由開業の狀態にして唯元韓國官立學校及大韓醫院附屬醫學科等を卒業したる者又は私立醫學校に於て修業し如上の出身者も同等以上の學力ありと認めたる者に對し其の開業を認許したりと雖此の認許は單に其の學識の保證に過ぎず而して業務上の取締に關しては舊韓國政府及帝國領事館又は理事廳に於て發布したるもの共に具體的の規定を缺き僅に醫察官憲に於て臨機之が取締を爲したるに過ぎざりき此の故に醫師は其の業務上自然放縱疎漫に流れ其の弊害に堪へざるの狀況なりしを以て大正二年十一月醫師規則、齒科醫師規則、醫生規則を發布し何れも大正三年一月より施行せり爲に從來の積弊を一洗するに至れり

醫 療 機 關

大正六年十二月末日

道	醫 院		醫 生		限 地		齒 科		藥 劑		產 婆		看 護	
	官立	(病) 私立	計	內地人	朝鮮人	外國人	計	計	計	計	計	計	計	計
京畿道	二	一一四	一一六	一三二	七二	一〇	二二四	六七五	七	二四	三四	二〇〇	二〇九	

大正五年末	同 四年末	同 三年末	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	黃海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	總計
二〇	一九	一九	一	一	一	三	二	一	一	一	二	二	一	二	二〇
二六二	二七〇	一四五	五	五	二〇	五	一二	四〇	一一	三七	一〇	二	一一	三八	三〇六
二八二	二八九	一六四	二	六	二一	八	一四	四一	一二	三八	一一	四	一二	四〇	三二六
五四〇	六二七	六四九	二九	二九	三五	三七	四一	八三	二九	三五	二六	二二	二二	二二	五三七
二〇二	二〇九	一四四	四	六	五	八	六	一二	二六	四四	三〇	八	一五	八	二四四
三三二	三三六	三三	二	一	二	二	二	三	三	三	二	二	三	一	三六
七七四	八七二	八二六	三六	三六	四二	四七	四九	五八	八二	八二	五八	三二	五〇	三〇	八一七
五、六二六	五、八〇四	五、八二七	二二六	二二六	二七五	二九八	五八一	七〇三	四八八	四八八	五七一	二二六	八三〇	三三二	五、六五九
八三	八一	九一	二	二	二	一	一	一五	七	五	四	一	四	六	七五
三五	四〇	二〇	一	一	一	一	二	九	三	三	三	三	三	三	四六
五六	六三	五三	四	四	三	三	三	一〇	四	六	一	一	二	四	七三
五四〇	五一七	三九七	三一	三一	三〇	四三	三七	六七	二七	三七	二三	二五	二八	二二	五六〇
四六五	二一五	一八六	七	七	三	三	一〇	六一	三	一九	五	一四	一五	一一	三五一

道	醫(病)院		醫		師		醫生		限地		齒科		藥劑		產婆		看護婦	
	官立	公私立	計	内地人	朝鮮人	外國人	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
大正二年末	一九	二一五	二三四	三九五	一八三	三八	六二六	一、四六二	二九	二一	五四	三三八	四四五					
同元年末	一九	二二六	一四五	三五三	七二	三二	四五七	一、六五三	四二	一五	四一	二七八	四四二					

醫師、齒科醫、藥劑師、產婆及看護婦にして官衙奉職の者は本表中之を掲記せず

傳染病院及隔離病舎

年	傳染病院		隔離病舎		合計	
	官立	公立	官立	公立	官立	公立
大正二年末	—	—	—	—	—	—
同三年末	—	—	—	—	—	—
同四年末	—	—	—	—	—	—
同五年末	七	七	八	八	一四	一四
同六年末	七	七	八	八	一四	一四
合計	七	七	八	八	一四	一四

(イ)醫師 朝鮮の村落僻地には今尙醫師の分布稀薄にして到る處醫藥の不便を訴へ地方開發上影響する處尠からず仍て大正三年七月醫師試験規則を發布し以て優良なる醫師の増加を計畫せり然るに本試験規則に於ては全部の科目に就き同時に一定の成績を得るに非されは合格せざるものにして制度嚴し過ぎ朝鮮の現時に副はざるものあるを以て大正六年十月該規則の一部を改正し試験科目を三部に分ち而して各部の合格は一定期間其の效力を留保することとし大正七年一月より實施せり今第一次以降の醫師試験受験者及合格者を表示すれば左の如くにして該試験の回を逐ふに隨ひ總督府醫學專門學校卒業者と相俟て漸次醫師の普及を見るに至るへし

醫師試験受験者及合格者

種 別	受 験 者		合 格 者	
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
第一次(大正三年)	八	二〇	二八	五
第二次(同 四年)	二七	一一	三八	一〇
第三次(同 五年)	二四	二五	二九	七
第四次(同 五年)	一四	一一	二五	五
				計
				七
				一七
				一三

種別	受驗者		合格者	
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
第五次(大正五年)	一四	四	一八	二
第六次(同六年)	一七	二二	二九	八
第七次(同七年)	一五	五	二〇	二
第八次(同七年)	二九	一二	四一	七
累計	一四八	八〇	二二八	三九
			四〇	七九

上述の如く醫師未だ邊陲に普れからざる今日に於ては資格醫師のみの分布を期待すへきに非ざるを以て邊境又は孤島の如きには醫術及齒科醫術の經歷を有する者に地域及期間を限り醫業又は入齒營業を免許しつつあり

公醫 都市に於ては内地人移住の増加に伴ひ漸次醫療機關の充實を見つつあるも前述の如く僻地に於ては殆ど其の形影を認むるなく僅に慈惠醫院の巡回診療及囑託警察醫の配置等に依りて一小部位に於ける患者を診療し得るに過ぎざりしか此くては一般の希望に副ひ難きに由り新に公醫制

道	公醫	囑託警察醫	合計	道	公醫	囑託警察醫	合計
全羅南道	一八	—	一八	平安北道	一七	—	一七
慶尙北道	二二	—	二二	江原道	二三	—	二三
慶尙南道	一九	—	一九	咸鏡南道	一七	—	一七
黃海道	一八	—	一八	咸鏡北道	二二	—	二二
平安南道	一五	—	一五	總計	二二〇	七	二三七

本表の外囑託檢疫醫十四人あり

(口)醫生 は大正二年十一月發布の醫生規則に依り朝鮮人にして本規則發布前二年以上醫業を爲したる者及醫生に就き三年以上醫業を修習したる者に五年以内の期限を附し免許せられたる者にして朝鮮全土に分布せられ朝鮮人は主として之に依り醫療を加ふるものなれば醫療機關の一たるを失はず故に醫生に對しては或程度迄醫術教養の必要を認め教育規程を發布し又教養上各地の統一を期する爲大正七年中醫方綱要なる教科書を編纂し之を各地の醫生及公醫警察官醫等に配付し公

醫之が教師と爲り目下教養獎勵中に在り

(ハ)産婆 從來朝鮮人にして産婆に就業する者なきのみならず一般人は分娩に際し他人の介補するを嫌忌せしか近時産婆の效用を認め稍歡迎するに至れり而して内地人たる産婆は内地人の増殖に伴ひ漸次其の數を加へつつあれども其の多くは都會の地に開業し偏鄙の地に至つては殆ど其の影を見ず爲に産婦の出産期に際し不傾軋からさりしを以て大正二年冬期より各慈惠醫院に於ては助産婦及速成功産婦の養成を肇め又大正三年七月産婆試験規則を發布して各道に於て産婆試験を行ふことと爲し以て産婆の増加を圖れり

(ニ)看護婦 醫師病院の増加に伴ひ看護婦の需要亦漸次増加し來り各地に於て看護婦の業務に衣食する者尠からず然るに從來看護婦の資格及其の業務範圍等に關する規定缺如せしを以て中には看護に關する學術技能に習熟せざる者ありて衛生上危害を醸すの虞あり故に規定を設けて資格を限定し且業務上の取締を爲すの必要を認め大正三年十月府令を以て看護婦規則を發布し同年十一月より施行し看護婦は總て免許を受けしむることとし尙試験の制を設け各道に於て試験を舉行する

こととし其の免許は道警務部長に於て之を行へり

(ホ)種痘認許員 種痘普及の爲醫師の缺乏を補はむか爲明治三十二年各道に種痘認許員を設置し其の素養ある朝鮮人男女共に之を認許せり内地人に對しては特に婦人にのみ之を許せるは是れ朝鮮婦人は男子に近接するを忌むの風習あるか爲なり

種痘認許員

年		種痘認許員			年		種痘認許員		
		内地人	朝鮮人	合計			内地人	朝鮮人	合計
大正二年末	同	六八	一一一七	一二八五	大正五年末	五一	八九七	九四八	
同三年末	同	七一	一一七七	一二四八	同六年末	四九	八三四	八八三	
同四年末	同	四八	九六六	一〇一四	同七年六月末	四九	八〇六	八五五	

第二節 藥品取締

(イ)藥品 藥品に關しては從來何等の取締方法なく單に阿片煙の輸入、製造販賣に關して刑法及刑
法大全の規定に依り之を取締を爲せるのみなりしか明治四十五年三月制令を以て藥品及藥品營業

取締令を發布し尙朝鮮總督府令を以て之を施行規則を設け藥劑師、製藥者、藥種商、賣藥業者等の各業務範圍を限定し毒藥、劇藥の販賣、授與に嚴重なる制限を設け賣藥検査の法を定め且大正二年七月朝鮮總督府令を以て藥品巡視規則を發布し之に依り藥品巡視を施行し漸次藥品及賣藥の精良を期し併せて一般藥業者に對する取締を厲行しつつあり

(ロ)藥劑師 内地に於ける有資格者及前記制令の規定に依り朝鮮總督府の免許を受けたる者は其の届出に依り開業を許せり尙大正五年四月府令を以て藥劑師試験規則を發布し同年十月第一次大正六年第二次の試験を行ひ内鮮人受験者の中内地人九名合格せり

第三節 飲食物取締

飲食物に關する取締は從來極めて不完全にして衛生上の危害甚からざるに依り併合後益其の必要を認め牛乳營業取締規則、衛生上有害飲食物及有害物品取締規則、清涼飲料水及氷雪營業取締規則、メチールアルコホル(木精)取締規則等を發布して取締を厲行し尙飲食物及飲食用器具並藥品等にして化學的試験を要するものは從來各道より警務總監部衛生課衛生試験室に送付せしか遠隔の地に

於ては處理上敏活を缺き且衛生試験を要すへき營業願届等の處分に多大の不便あるを以て大正二年以降慶尙北道、全羅南道、平安南道、咸鏡南道、慶尙南道、咸鏡北道、江原道、黃海道、忠清南道の各警務部に衛生試験室を附置し藥劑師たる技術員を配屬し該道及最寄各警務部管内に於ける試験を施行しつつあり而して未設四道の内京畿道は警務總監部衛生試験室に於て試験を施行し平安北道は新義州海港檢疫所内細菌試験室内に設備し實施しつつあり尙忠清北道及全羅北道に對しては漸次設置の計畫なり

第四節 痘苗製造

痘苗製造は舊韓國政府の創業に係り幾多の沿革を経て大正六年度迄は警務總監部衛生課の所管なりしか同七年度より新に朝鮮總督府獸疫血清製造所の設あるに至り痘苗の製造も同所に移屬したり價格は一具(五人分)五錢を以て定價とす尤も朝鮮總督府醫院、慈惠醫院及警察官署に於て施行する種痘用のものは無料とし藥劑師、藥種商の請求に依り賣下くるものは二割減とす間島は地域相接し同地に於ける種痘の疎密は直に朝鮮に影響すへきを以て同地公種痘に對しては特に無料配布を爲しつ

つあり

大正元年に於ける痘苗配布具数は七十二萬三千七百三具にして逐年種痘の普及に因り痘瘡患者の減退に伴ひ其の需用亦漸次減少し大正六年に於ては三十四萬八千九百八十一具に低下せり

第五節 屠場及屠肉

屠場の取締に關しては曩に舊韓國政府の發布に係る屠獸規則及各理事廳の發布に係る規定に依り尙各道警務部に於ては適宜其の施行細則を制定施行しつつあり現今京城に於ける二箇所の公設屠場は共に府の管理に屬し其の構造設備等稍模範的なりと雖他の各道に於ては小規模のもの多し尤も近時一般に公設屠場を獎勵し從來個人の經營に係りしものも衛生組合、學校組合等の經營に移さしめしか面制の施行と共に總て面の經營に移しつつあり屠畜検査獸醫は經費の關係上未だ周密配屬の域に達せずと雖漸を以て歩武を進めつつあり

朝鮮人は獸肉を嗜食し殊に慶弔時に於て缺くべからざる必要物たるを以て屠畜は各地方共に甚だ織なり今最近五箇年間に於ける屠畜頭數を表示すれば左の如し

年	屠場數	屠畜數				
		牛	馬	豚	羊	犬
大正二年	一、六八九	二三〇、七一三	三五八	三三五、二七四	二、二〇〇	九九、八八六
同三年	一、八二九	二七一、一七八	三三五	三六六、六九九	二、一一一	一一一、八五〇
同四年	一、九三六	四〇〇、六六〇	二二七	三四一、六〇四	二、三三二	一〇八、七七八
同五年	一、八六四	三〇九、四六七	三八八	三七一、二五三	二、五七六	一四九、八五四
同六年	一、五二六	二一七、二七九	六二二	四四五、六七二	三、八五五	二一三、三三三

本表屠場は公設及私設の總數にして各年末現在なり

第六節 牛乳搾取所及牛乳取締

朝鮮人は從來牛乳を用うるこゝ少く唯内地人又は外國人間に於て需用せらるるのみなりしを以て朝鮮人に對しては之に關し何等法規の存するものなかりしか世態の變遷に伴ひ漸次營業者の増加を來すと同時に營業上種種弊害の依て生ずるものあり乃ち明治四十四年當該規則を發布して之を取締を

爲すことせり

乳牛は主として外國種又は雜種なれども朝鮮種も亦少からず朝鮮種は乳量に於て他に劣れり雖結核に對しては殆ど免疫の素質を有せるものの如し之に反し外國種又は雜種には結核に罹れるもの甚た多く而かも是等の畜牛は主として内地より移入せらるるもの多し之が豫防上大正二年八月以來釜山に於て輸移入乳牛の検査を行ひつつあり

牛乳搾取高

年	搾乳場數		搾乳牛數		搾乳高	
	場數	乳牛數	數量	價額	數量	價額
大正二年	六三	四〇八三、二三六	一五四、九六〇	四、九六〇	六三	三、八九七
同三年	六八	四五六三、一八一	一五八、四八六	四、八八六	六三	三、八九七
同四年	六九	四六八三、〇三六	一七三、八三七	五、〇三六	六〇	三、二一九
大正五年	六三	三、八九七	二、九三五	一、七九〇、三五	六三	三、八九七
同六年	六〇	三、八九七	三、二一九	二、〇〇、二四六	六〇	三、八九七

本表搾乳場數及乳牛數は各年末現在數なり

第七節 檢 査

由來朝鮮に於ては蝸甫と稱する公娼至る處に散在するも曾て之に對して檢査を行ひたることなく唯京城其他の大都市に於て新政施行以來漸く之が施行を見たるのみなりしか一面に於て内地人の増殖に伴ひ内地人賣笑婦の數も歳々共に増加し之に對しても取締の必要あるを以て大正五年三月警務總監部令を以て藝妓酌婦藝妓置屋營業取締規則及貸座敷娼妓取締規則を發布して内鮮人及外國人共各其の業體に依り區別を確立し娼妓に對しては土地の狀況に應し定期健康診断を行ひ藝妓酌婦に對しては實際の必要に應し健康書の提出を命ずることとし一般的の統一を爲し以て花柳病の豫防を期しつつあり

健康診断所は京城府内に於て内地人娼妓に對しては五日毎に又朝鮮人娼妓に對しては一週一回之を施行すき雖地方に於ける健康診断期日は一週一回又は旬日一回等一樣ならず其の診断場所は特設のものもあれども多くは慈惠醫院又は公醫警察醫の自宅等に於て之を行ふ其の特設箇所四十九特設なき場所二百四十七箇所にして治療場所の特設に係るもの京城府に於て三箇所あり其の他に十八箇所

あり

大正六年十二月末に於ける検査受検査笑婦は全道を通し内地人三千四百九十六人、朝鮮人一千五百八十三人、外國人三人計五千八十二人なり

密賣淫犯罪者及密賣淫の常習者に對する強制治療は從來之を行ひたることなかりしか大正三年七月行政執行令發布の結果之を厲行しつつあり

第八節 汚物掃除

京城府内に於ける各戸塵芥除去、屎尿の汲取、公共便所の設置、道路の掃除、撤水及除雪、溝渠及下水の浚渫等除穢事業は京城府の經營に屬し警察官靈援助の下に之を實行しつつあり

各都邑に於ても近時官憲の指導と人民の自覺とに依り春秋二季の清潔方法の如きも習慣的に行はるに至れり

第九節 海港検査

海港検査は警察官署の管掌に屬し朝鮮外より來る船舶に對して検査を行ふ現に常時検査を行ふ場所

は仁川、釜山、群山、木浦、馬山、元山、城津、清津、鎮南浦及新義州の十港なり然るに大正五年中朝鮮に流行せし虎列刺は其の原因沿岸各地に蝟集する内地漁船に在りしを以て之に對し相當措置の必要を認め大正六年十月府令を以て警務總長は必要に應じ内地より來る漁船の寄港地を指定し同地に於て檢疫を経たるものの外は他港に進航又は出漁することを許さざることせり

第十節 墓地、火葬場

朝鮮人は古來墓地に對する迷信熾にして之を選擇する爲には家産を蕩盡するも意させざる者多し例へは墓地の適否は一家の浮沈子孫の禍福に繫るこし地師一たび指せば他人の土地と雖之を侵すは勿論甚しきは他人の墳墓を發掘して自家の墳墓を築くか如き非行を致てし爭鬪常に絶へず之か爲に犯罪者を出すこと少からず此の如きは單に衛生を害し風教を亂ること夥たしきのみならず土地經濟に於て更に憂ふべき現状なるを以て明治四十五年六月總督府令を以て墓地、火葬場、埋葬及火葬取締規則を發布し同年九月京城府内に施行したるを始めとし大正四年三月忠清南道に施行したるを終りとして之を全道に實施したり本令の内容は集葬制にして特別の場合を除く外共同墓地以外には絶對

に埋葬改葬することを許さざりしものなるを以て從來各所に散在する墳墓は尙依然として存在し之を整理の途なかりし爲め官民共に不便を感じたるより大正七年一月規則の一部を改正し各所に散在する墳墓を集葬する爲には特に私設墓地を許可することとせり大正六年末に於ける全道の共同墓地は二萬五千百四箇所にして其の面積四千二百九十一萬一千六百九十三坪にして何れも面に於て之を經營管理す其の多くは官有山野の無償交付を受けたるものなりとす

由來朝鮮の墓地には何等の施設を爲したるものなく隨所亂葬の有様なりしを以て墓地の尊嚴を保持する爲之に相當の設備を施すの必要を認め先づ京城の墓地に之を設備して模範を示し他は各地の實況に應じ漸次施設を普及するの計畫を立て既に京城府模範墓地は二箇所選定の上之を施設を完成せり尙朝鮮には火葬を忌み傳染病の死體と雖悉く土葬するの風習あるを以て漸次火葬の習慣を馴致し舊弊の一掃を期せむとす大正六年末に於ける火葬場數は全道を通じ内地人經營のもの五十三箇所朝鮮人經營のもの二十九箇所合計七十三箇所にして其の火葬數は内地人六千四十六人朝鮮人三千二百二十五人外國人二人合計九千二百七十三人を算す

第十一節 飲料水

(イ)水道 朝鮮は一般に飲料水不潔にして之が改良は忽諸に附すへからざる一大要務なり故に併合以來毎年國費及地方費補助の下に地方をして水道の敷設及模範的公共井戸の掘鑿を行はしめつつあり現今水道の設備あるは京城、仁川、釜山、平壤、木浦、鎮南浦、群山、羅南、會寧、元山、義州、鎮海、大邱、海州の十四箇所にして此外光州、清津、咸興、新義州は目下工事中なり其の他の各地は何れも井水、河水、泉水等を使用せり而して市街地若は集團地に於ける井水は一般に不潔にして飲用に適せざるもの多し蓋朝鮮人は習俗として住家に便所を設けず隨所に放尿し下水の如き自然の流下に委して施設を加へざりし有様なれば積年の穢陋深く地層に浸潤し爲に水質をして汚悪ならしめたるに歸因す従て消化器系傳染病比年各地に流行し彼の「ジストマ」の如き諸處に傳播し病毒極めて濃厚を呈せり故に水質の改良は當面の急務なるを以て各地に簡易の水道施設、鑿井の開掘を見るに至れり今各地既設及工事施行中の水道の現況を掲ぐれば左の如し

水道	管理者	鐵管 延長	總工 額	人口	豫定給水量 一人一日 水量	給水栓數	消火 栓數	船舶 給水	設計 方法	給水開始 年
京城水道	京畿道	六四二九八	三二八四一六六	三三三三〇	四五五〇三	一八三三	六三三	一	唧筒式	明治四十一年八月
仁川水道	同	四一〇〇三	二二八九五〇	七〇〇〇〇	四一三六〇	三八一	三三〇	二	同	同 四十三年十二月
平壤水道	平安南道	三三、五〇三	一、四一〇、三三	六〇、〇〇〇	四一九九八	五三五	三三三	一	同	同 年七月
釜山水道	釜山府	三三、二七二	一、〇九七、七九	五五、〇〇〇	三一、一九〇	四七七	二二二	三	貯水式	同 三十五年五月
木浦水道	木浦府	一七、一〇一	四、一〇、四六	一八、〇〇〇	三	三四九	六二	二	同	同 四十三年五月
群山水道	群山府	九、六三三	二、八、九〇	一〇、〇〇〇	二	二五四	七四	三	同	大正四年五月
元山水道	元山府	三三、三三五	三五、八、五三三	二〇、〇〇〇	三五	二九五	一〇一	四	自然流 入式	同 五年一月
鎮南浦水道	平安南道	三三、三三八	四、一六、五〇九	三三、〇〇〇	三	四〇八	七三	一	貯水式	同 三年十月
羅南水道	咸鏡北道	一、二一〇	二、一六、五六	三、〇〇〇	六、四	一	九	一	自然流 入式	同 四年一月
會寧水道	會寧學 校組合	七、五〇	八、七、七六	五、〇〇〇	一	一八	五	一	同	同 二年十二月
大邱水道	大邱府	一、五、〇八四	四、二二、〇〇八	三〇、〇〇〇	三五	二五八	一七	一	同	同 七年一月
鎮海水道	總督府	六、〇、三	五、〇、三三三	五、〇〇〇	三五	一	三三	一	貯水池 式	同 四年四月

水道	管理者	鐵管		工費	人口	豫定給水量 日一人一 日水量	給水栓數	消火栓數	船舶給水栓	設計方法	給水開始 年月
		延長	額								
義州水道	平安北道	1,000	29,401	3,000	1,212	4	9	5	1	唧筒式	大正五年十月
海州水道	黃海道	1,868	37,990	3,800	6	1	8	5	1	自然流入式	同 六年九月
×光州水道	全羅南道	2,001	21,451	10,000	20	1	25	15	1	同	同 八年三月
×清津水道	清津府	3,140	29,475	10,000	13	1	5	5	1	唧筒式	同
×咸興水道	咸鏡南道	2,600	20,143	17,800	8	1	3	2	1	同	同 十年三月
×新義州水道	新義州府	6,131	29,875	10,000	13	1	0	5	1	貯水地式	同

本表中×印を附したるは工事施行中に係る水道なり

(口)公共井戸 公共井戸の改良に就ては明治四十三年以降國庫補助に依り掘鑿又は改修せしむるの方針を執り同年度に於て五十八、大正四年度に於ては掘鑿百十九、改修十四、大正五年度に於て掘鑿百八十二、改修十四、大正六年度に於て掘鑿百三、改修五箇所にして年を逐ふて漸次普及せ

しめつつあり

十二節 傳染病

(イ) 虎列刺 最近朝鮮に於ける虎列刺病の流行は大正元年九月長崎、福岡、山口等各地流行の餘波を受け黃海道、全羅南道、慶尙南道の各地に流行し總數百五十人の患者を出たせしより爾來絶て流行なかりしか大正五年七月二十七日香港を發しマニラ、長崎、神戸、四日市、清水港を経て横濱に入港したる大阪商船會社汽船布哇丸船客の病系を承け内地流行の餘響を被り同年八月二十日同病釜山港に發生し亞て方魚津、三千浦等の各港及其の他の沿岸各地に散發し殊に仁川及其の附近の如きは頗る慘狀を極め京城其他に蔓延し十二月末日迄全道の患者總數實に二千六十六死者一千二百五十三名の多きに達し同月末漸く終熄を告げ爾來今日に至る迄絶て其の流行を見さりき

(ロ) 痘瘡 痘瘡は朝鮮に於ては殆ど地方病の觀を呈し古來より四季を通じ各地に發生し年年多少の流行を見ざるはなし由來衛生思想の幼稚なる朝鮮人間に於ては痘瘡は人生必ず經過せざるべから

さるものにして到底人力を以て濟ふへからざる災厄なりと之に對して毫も豫防の方法を講せざるのみならず同病に罹るを以て寧ろ自然の命數なりと思惟する者多かりき従て種痘の效力を解せし者の如きは極めて鮮少にして官より種痘施行の命を受るや徒に疑懼の念を抱きて之を忌避し其の甚しきは往往故らに隱遁奔竄を企つる如き狀況なりしか故に種痘の施行に際しては各警察官憲兵に於て努めて其の迷信を誠諭し種痘は痘瘡豫防の最善なる唯一の良法なるを示し之が普及に努力したる結果近時漸く種痘忌避の弊風廢たれ種痘の施行年と共に嚴密なるに至りたる爲痘瘡の流行次第に減退して近時年年の發生實に數ふに足らざるの狀況に在り今最近五箇年間に於ける種痘人員を掲ぐれば左の如し

年	内地		人計	朝鮮		人計	合計
	男	女		男	女		
大正二年	二七,四九九	一八,八三三	五六,〇〇〇	一三,八七七	九,八五三	二三,七三〇	二二四,三九九

同	三	年	二七九四	三二八二八	五七七四三	一〇〇八、一〇九	七九一、三三九	一七九四、四八八	一、八五二、一八〇
同	四	年	二五九四七	二四三三八	五〇、七四五	七九、二七五	六三九、九七五	一、四三三、一五〇	一、四八六、〇三三
同	五	年	三三、〇三三	三三、〇七八	四一、三三三	三二、一八七	五七六、〇九五	一、二八八、八五二	一、三三〇、九七四
同	六	年	二五、五六一	二五、五〇二	五〇、〇三三	七九、七九三	六五三、八八五	一、四五一、一〇八	一、五〇一、七七一

(ハ)赤痢 赤痢病は年年各地に發生しつつあるを以て患者發見に就ては常に周密なる檢病的戸口調査を履行しつつありと雖朝鮮人部落に於ては土地、飲料水等概して不衛生的にして傳染病流行の因を爲すに依り容易に之が終熄を期する能はざるは頗る遺憾なりとす仍りて之が豫防の根本策として清潔方法を履行し上水下水の改良を圖り一面豫防液の注射を行ひ専ら其の防遏に努めつつあり

(ニ)腸窒扶斯 腸窒扶斯も年年各地に發生し之が豫防に就ては特に注意し居るも發生數未だ減少するに至らず而して本病は他の熱性病と混同し易く且之が診定には或程度の期間を要するか爲既に本病として發見せらるる迄には病毒他に蔓延し居るの疑なきにあらざる故に其の防遏上一層の困難を感ず

(ホ)爾餘の傳染病中「パラチアス」は年年各地に流行し殊に大正七年夏季に於ては京城市中に於て稍蔓延の兆ありしを以て清潔法の施行飲食物の取締及醫師其の他市民の患者届出を厲行し一面檢病的戸口調査を厲行して患者の早期發見且豫防注射及細菌検査の施行等極力防疫に努めたる結果大なる慘狀を見ずして終熄を告げたり猩紅熱、實布埜里亞は各地に散發するも其の數甚た少く更に發疹チアス等に至りては其の發生極めて僅少なり今最近五箇年間に於ける傳染病患者を掲ぐれば左の如し

年	傳染病患者								
	虎列刺	赤痢	腸痧	痘瘡	發疹チアス	猩紅熱	實布埜里亞	パラチアス	合計
大正二年	—	一、三四二	一、八六二	二二九	一五	六二	一八二	二五三	三、九四五
同三年	—	一、四〇九	一、九九五	一三〇	一一	三四二	一八三	四六一	四、五三二
同四年	—	一、三四四	二、五九六	四八	二四	六一四	三三六	三八〇	五、三四三
同五年	二、〇六六	一、一八九	二、三六四	四八	三六	二二三	三一〇	三七〇	六、六〇六
同六年	—	二、〇九七	二、四〇三	四九	九八	二二二	三六六	三七二	五、六一七

法定の傳染病即ち急性の傳染病に就ては叙上の如くなるが慢性の傳染病たる肺結核患者は氣候風土の關係上其の數少からず仍て之が豫防の必要を認め大正七年一月府令を以て其の豫防に關する規則を發布し多數集會する場所即ち學校、病院、製造所、船舶發着所、停車場、劇場、寄席、宿屋、料理屋、飲食店、貸座敷、理髮店等に唾壺を備付せしめ其の啖唾は之を消毒せしむることとし又鑛泉場、海水浴場、轉地療養所に於ける宿屋の貸浴衣及寢具に附屬せる敷布類の洗濯又は患者の使用したる居室、物品等は消毒の後にあらされば他人に使用せしめざることをせり

第十三節 細菌検査

細菌検査に就ては韓國政府時代に於て明治四十一年初めて内部に細菌検査室を設けたりと雖當時極めて小規模にして痘苗製造の傍ら専ら狂犬病豫防接種苗の製造に止まりしか明治四十三年併合以來漸く其の規模を擴張し同四十四年細菌検査事務の警務總監部に移りたる以來は法定傳染病病原の検査は勿論其の外の傳染病病原の検査及諸種の豫防血清材料を製造せり

第十四節 地方病

朝鮮に於て地方病の主なるものは「肺ダストマ」にして大正六年末の調査に依れば全道を通して患者總數三萬六千五百九十八人就中病毒の最も濃厚なるは平安南道中和郡にして其の數七千四百七十三人次に咸鏡南道永興、高原、文川、德源、定平の各郡にして合して約二千二百人の患者あり韓國時代に在りては之が豫防に付何等の施設を爲さず病毒は恣に散漫して多大の人生を傷ひたるものなるが併合以來之が調査研究に努め各地共に中間宿主たる河貝子の採取河水使用の制限其他の方法を以て之が豫防に努めつつあり

癩患者も亦各地に散在する員數少からず之に付ては全羅南道高興郡小鹿島に官設の慈惠醫院ありて一定の人員を收容治療す又釜山、大邱及光州に外國人經營の療養所ありて各若干の患者を收容せり

今大正六年に於ける「肺ダストマ」及癩患者を地方別に比較すれば左表の如し

地方病患者數

大正六年末調

道別	患肺者數	同上死亡者數	患癩者數	同上死亡者數
京畿道	二、二六四	六三	二三	二
忠清北道	一六一	一七	二〇	二
忠清南道	六五三	六一	三八	六
全羅北道	五七七	二三	九六	一一
全羅南道	二、三二七	五二	六四四	六二
慶尙北道	七、七四四	一七三	九九〇	一一二
慶尙南道	三一	四	六一九	七三
黃海道	九、五〇七	三三六	二六	二
平安南道	八、六七七	一三三	二六	三
平安北道	二八二	七	八	
江原道	一、八〇九	八三	一〇八	一一
咸鏡南道	二、二七〇	七三	五六	一四
咸鏡北道	一六	二	一九	五
計	三六、五九八	一、〇二七	二、六七三	三〇三

第十五節 獸疫

獸疫は豫防施設の改善と共に年を逐ふて減退の傾向を呈せり然れども支那國境地方に於ては對岸に牛疫常時流行し動もすれば病毒の侵入を免れず故に國境沿線各地に於ては畜牛其の他病毒傳播の虞ある物件は勿論人の交通に對しても嚴密なる注意を拂ひ一旦襲來の厄に遭遇せば嚴重なる消毒法を行ひ之が豫防に努力せる結果未だ沿線地境以外には深く病毒の侵入を見ざりき今最近牛疫及其の他の獸を疫發生數示せば左の如し

獸疫發生數

年	牛疫	炭疽	氣腫疽	鼻疽及皮膚疽	流行性驚口瘡	豕刺	豕羅	狂犬病
大正四年	一七三	牛一、四一三 馬一、二五三	四五三	一七	九、二四〇	八一	二二	二四二
同五年	一九九	牛一、四〇七 馬一、二二一	一、〇六四	二二	一、三九〇	一	一一九	四五一
同六年	九	馬一、四二二 牛一、三〇〇	一、六〇〇	六一	八七四	八四	二〇	五一九

備考 牛疫大正四年は咸鏡北道に一七一頭平安北道に一頭江原道に一頭大正五年は全部咸鏡北道

第十六節 移出牛檢疫

朝鮮に於ける移出牛の檢疫は明治四十二年法律(韓國)第二十一號を以て輸出牛檢疫法を發布し釜山に檢疫所を設置したるに始まり當時の檢疫は韓國より日本に輸出せむとする畜牛は食用牛を除くの外必ず此の檢疫所に於て九日間畜牛を繋留し檢疫を受くべき規定なりしか其の後大正四年七月府令を以て移出牛檢疫規則を發布し釜山及馬山港より生牛を移出するもの限り二十日間の檢疫を行ふこととせり蓋し此改正に依り從來朝鮮にて九日間、内地にて九日間所謂二重検査の手數と經費を省きたるものなり其の後大正五年十月更に同規則を改正し從來生牛の移入を許さざりし敦賀港へも元山及城津にて健康診断を行ひ移入し得ることとせり左に最近釜山に於ける移出牛の檢疫數を掲記すへし

移出牛檢疫數						
年	前年繰越	檢疫入所頭數	解放頭數	斃死頭數	撲殺頭數	檢疫撤回頭數
大正二年	一七三	八、五一四	八、五二三	四		

大正三年	同四年	同五年	同六年	同七年十一月迄
前年繰越	一六〇	三〇五	七九八	一、一五〇
頭檢疫入所數	一一、二九九	一〇、三五六	一四、八二一	二四、四五六
解放頭數	一一、一四六	九、八二三	一四、四二二	二三、六七〇
斃死頭數	八	二六	二九	二八
撲殺頭數	一三	六	三	六
頭檢疫撤回數	二	二	二	二九

第二十一章 警察

(イ) 警務機關の配置 曾て暴徒の戡定と秩序の恢復に全力を傾注せし警察も新政の普及と共に諸般の産業振興し民心頗る靜謐に歸せしを以て警備の方法も亦自ら一變せざるへからず仍て從來執り來りし警察力集中の方鍼を變更し分散的警務機關を配置し其の管轄區域は平均一郡弱に對し凡そ一警察署又は警察事務を取扱ふ憲兵分隊若は分遣所を設置せり即ち左の如し

警 務 機 關

大正七年九月末日

名 稱	府郡島數	警察署	警察官 派出所	警察官 駐在所	警察事務を取扱ふ憲兵隊 <small>憲兵分隊 憲兵分遣所 憲兵駐在所 憲兵派出所</small>	合 計
京畿道警務部	二三	一一	五八	四三	八	二二〇
忠清北道警務部	一〇	六	一一	三五	三四	八四
忠清南道警務部	一四	八	一	四六	三	一〇八
全羅北道警務部	一五	七	四	四六	六	一一三

名 稱	府郡島數	警察署	警察官 派出所	警察官 駐在所	警察事務 取扱不憲兵隊	合 計
全羅南道警務部	二三	一〇	三	六〇	五	一三四
慶尙北道警務部	二四	一三	六	六九	六	一七六
慶尙南道警務部	二一	一二	一五	四三	四	一二〇
黃海道警務部	一七	五	—	四〇	七	一四四
平安南道警務部	一六	五	—	三三	八	一三六
平安北道警務部	二〇	七	—	三九	七	一四三
江原道警務部	二一	六	—	二八	一〇	一四五
咸鏡南道警務部	一七	四	—	二二	一	一四五
咸鏡北道警務部	一一	五	三	二九	七	一二八
總 計	二三三	九九	一〇六	五三三	七八	一、七九六
大正六年末	二三三	九九	一〇四	五二九	七八	一、七八四
同 五年末	二三三	九九	一〇二	五二二	七八	一、七五八
同 四年末	二三二	九九	一〇二	五一二	七七	一、七五四
同 三年末	二三二	一〇一	一一二	五〇八	七八	一、七二六
同 二年末	三二九	一〇〇	一一三	四九八	七八	一、六六六

(ロ)水上警備 警備船は其の設置の當初は専ら海賊及暴徒の掃蕩に供用せしも匪賊戡定後は漁業の振興海運の發展に従ひ船舶を要する警察事務漸く多きを加へ而も其の用務は沿海全岸に亙り必要なるを以て明治四十四年一月以來數次に陸軍所管船の借入揮發油發動機船の購入税關鐵道局及海軍省所屬船の管理換及新造に依り漸次船舶を増加し目下沿岸二十箇所に配置の警備船は汽船七隻、發動機船十八隻合計二十五隻を有す

(ハ)警察官の養成 警察官養成の機關として警官練習所を京城に設置せり同所は從來警務總監部警務課の分掌に過ぎざりしか大正六年三月警務課より分離して警務總監部の一課となし各道缺員補充の爲新に採用したる巡查及京畿道に配置すへき巡查補に約四箇月間初級警察官として必須なる學術及實務を教授し尙別に現職の警部を召集して補充教育を施しつつありて將來尙擴張の計畫なり京畿道以外に在勤せしむへき巡查補の教養は各道に於て警官練習所に準し之を養成しつつあり(ニ)富籤類似其の他取締 懸賞又は富籤類似其の他の射倖の方法を用ゐむこゝを提供し又は投票を募集せむとするもの漸く増加し動もすれば弊害の之に伴ふものあるを以て明治四十四年四月朝鮮

總督府令を發し是等の所爲を爲さむとする者は警務部長の許可を受くべきこと爲し而して事項の學術技藝に關するものに就き懸賞の方法を用ゐむとするものに在りては之を除外せり

(ホ)引火質物貯藏所取締 石油、揮發油、酒精、燃寸、煙火の貯藏所を建設するもの漸次増加し危險の虞あるに由り明治四十四年六月朝鮮總督府令を以て引火質物貯藏所取締規則を發布し是等物件の貯藏所は建設地管轄警務部長の許可を受くるに非されは建設することを得ざらしむ

(ヘ)信用告知業取締 他人の商取引、資産其の他信用に關する事項を依頼者に告知するの業を爲すもの少からず之が取締を加ふるの必要を認め明治四十四年七月朝鮮總督府令を發し信用告知業取締規則を定め其の業務を爲さむとする者は所轄警務部長の許可を受けざるべからず

(ト)狩獵取締 從來朝鮮に於ては狩獵に關する法規なく其の保護鳥獸たるを否かを問はず之が捕獲は各自の自由たりしか時世の進運に伴ひ漸く之が取締の必要を感じ遂に明治四十四年四月狩獵規則を發布し之が取締を爲せり(大正元年九月及同四年九月其の一部を改正せり)本規定の要旨は野生鳥獸の捕獲、野生鳥類の巢又は卵及雛の採取狩獵の場所、狩獵の方法(銃器、張網、鷹)及時季、學術

研究又は有害鳥獸驅除の爲其の他特別の事由に因る保護鳥及狩獵期間外の特別捕獲狩獵免狀、免狀の有効期間免許手数料、剥製品若は羽毛の輸出營業等に關する事項にして狩獵期間は毎年十月一日より翌年四月三十日の七箇月間なるも咸鏡南北道、平安南北道及黃海道の五道は毎年九月十五日より翌年四月三十日迄とす而して免許手数料は甲乙特別の三種にして甲種は(張網若は鷹)三圓、乙種は(銃器)七圓、特別は(藥用材料の爲銃器にて鹿熊其の他一定の野生獸類を捕獲せむとする者に一年間の免許有効期間を付するもの)五十圓又免狀の再下付は一圓の手數料を要するこゝと爲せり

(チ)銃砲火藥取締 從來朝鮮に於ては銃砲火藥類の取締に關し内地人に對しては各領事館令理事廳令を以て規定を設けありしも不備の點多く且其の規定事項も區區に互りたるか爲執行上の寬嚴其の軌を一にする能はざるの嫌あり又朝鮮人に對しては隆熙元年九月法律第五號銃砲及火藥類團束法の適用ありしと雖銃砲火藥類の如き危險物の取締に付ては製造、販賣、貯藏及運搬等は最も嚴重の方針に依ること緊要なるのみならず其の他に伴ふ詳細の規定を要すべき故に叙上諸種の

事由に依り内鮮人を同一法規の下に取締るの必要を認め大正元年八月銃砲火藥類取締令同十月同施行規則及同施行細則を發布し何れも同年十二月より之を施行せり

(リ)古物商取締 古物商取締に關しては舊韓國政府時代は何等法規の制定せられしものなく古物の賣買讓與は自由に放任せられたるか爲朝鮮人古物商に就ては全く取締の途なく又内地人に就ては領事廳令又は理事廳令を以て規定せられたるものありたるも其の規定區區に互り且不備の點多く殊に近年開港地は勿論其の他朝鮮内地人に内地人の移住する者漸次増加し従て内鮮人古物商の數亦多きを加へ從來の如き不備の法規にては到底之が取締の目的を達する能はざるのみならず朝鮮人に在りては其の生活狀態は併合以來著しく變遷を來し物價の騰貴と内地人増加に伴ふ就職の困難は延て彼等の生計に影響を及ぼしたること甚からず此等の原因は即ち生活上の困難を爲り強竊盜、詐欺、横領等犯人の増加を見且他方には不正の物品を賣買、交換する者増加したるを以て明治四十五年三月之が取締令を發布し同年四月より之を施行せり

(メ)質屋取締 質屋の取締に關し朝鮮人に適用すべき法規としては光武二年十一月法律第一號典當

舖規則及農商工部令第三十一號典當舖細則ありしか爲取締上甚しき不便なりしも内地人に就ては領事館令又は理事廳令を以て取締法規の定めありしのみ其の規定事項甚しく區區に互り從て取締上の緩嚴其の宜しきを得ざるのみならず尙取締法規なき地方に於て支障尠からず殊に併合以來内地人の朝鮮内に移住する者逐年増加し來り開港地は勿論其の他の地方にも内地人の質屋業を爲す者益多きを加へ全朝鮮内に施行すへき共通法規の必要を感するに至りたるのみならず内地人との朝鮮人との取締上の權衡亦甚しき差違あり不都合尠からざるを以て明治四十五年三月制令を以て質屋取締法に依らしめ内鮮人を同一法規の下に取締まることを爲せり但し朝鮮にては經濟上の狀態その業務上の舊慣とは内地と同一に律すへからざるものあり仍て利子制限、流質期限、質物處分及質物の滅失又は毀損の場合に於ける損害の負擔に關しては別段の規定を設くることを得べき特例を認め制令施行規則を發布し其の條項中に利子の割合、流質期限、質物の滅失又は毀損の場合に於ける損害負擔の方法は認可を要くへき旨を定め舊慣あるものにして弊害なき以上は可成認可するの方針を採り且經濟上の關係より利子の割分は取締法の制限に依らざることを得る旨の

例外規定を認めたり

(ル)遺失物取締 遺失物に關しては從來何等特別の法規なく朝鮮人に對しては拾得の場合に於ける届出又は隠匿に就き刑法大全の規定あるのみにて内地人に對しては内地の遺失物法に準じ之を取扱ひ來りしも斯くては之が統一を闕くのみならず其の不便尠からざるを以て明治四十五年五月遺失物其の他の物件に關する規定を發布し犯罪者の置去りたるものと認むる物件誤て占有したる物件他人の置去りたる物件逸走の家畜又は埋藏物に關しては遺失物法に依ることとし同時に之が施行規則を發布し同年六月より實施せり

(ナ)寄附金品募集取締 從來朝鮮人に對しては舊韓國の寄附金品募集取締規則に依り朝鮮總督之を許可し内地人及外國人に對しては明治三十九年四月發布の統監府令保安規則に依り京城に於ては警務總長其の他の地方に於ては警務部長に於て認可し來たりしか該規則は取締官廳と許可官廳とを異にし不便尠からざるを以て明治四十四年十一月朝鮮總督府令を以て寄附金品募集取締規則を發布し内外人たるを朝鮮人たるを問はず之を取締ることと爲せり

(マ)市街地建築取締 從來朝鮮に於ける建築取締に付ては各地區區に互り内地人の多數居住する市街地に限り領事館令又は理事廳令を以て之を取締規則を設けたる地方あり又併合後は警務部令を以て内鮮人共通の取締規則を設けたる地方あり又は未だ全く此等規則の設けなき所ありしを以て大正二年二月市街地建築取締規則を發布し總督の指定したる市街地に對し施行することとし京城市街地に於ては大正二年七月より之を施行せり

(カ)道路取締及荷車取締 從來道路取締及荷車取締に付ては各道區區に互り内地人に對しては理事廳令を適用し朝鮮人に對しては舊韓國政府時代の道令を適用するあり又併合後は警務部令を以て内鮮人に適用する等不統一の嫌ありしを以て大正二年五月共に取締規則を制定發布し何れも同年七月より實施せり

(キ)行政執行 朝鮮に於ては從來行政執行に關する根本法規なく其の必要に應じ適宜處理し來りしか動もすれば法令上何等の根據なくして人民の權利を侵害するやの批難を免かれざりしを以て大正三年七月行政執行令を同年八月同令施行規則を發布し共に同年九月より施行せり本令は内地と

概ね其の内容を同ふせるも朝鮮は其の事情自ら異なるを以て彼の檢束の如きも其の期間を延長し内地に於ては翌日日後に至るを得ずと爲せしも交通不便なる朝鮮に於ては三日を超越することを得ずと爲し又密淫賣者入院治療費の如きも内地に於ては無資力者は地方費の負擔せざるも朝鮮に於ては國庫の支辨と爲したるか如き差異なきにあらず

(★)湯屋營業取締 湯屋營業取締令は大正三年七月警務總監部令を以て之を規定せり其の要旨は火災豫防に關しては燃料置場、火焚場、火消場及煙突の構造、衛生に關しては汚水の排除、浴槽、洗場、湯氣拔等の構造、風俗に關しては出入口、脱衣場、浴槽等の構造設備に關する事項を制限したり本令は内鮮人營業者を通し全道統一的に施行せらるるも雖鮮人部落に於ては構造設備等を完成するの點に於て困難なるを以て土地の狀況に因り特別の事情あるものは警察署長の許可を受け所定の制限に依らざることを得ることとせり

(レ)宿屋營業取締 宿屋營業取締法規は從來各道に於て制定發布せしも其の規定の内容區區に涉り不統一なるに因り大正五年三月警務總監部令を以て之を取締規則を發布し同年五月より之を施行

せり規定の要旨は營業用建物の構造、設備に關する事項、出願若は届出の事項、營業者の遵守すべき事項等にして宿泊人の安靜又は衛生を保ち火災若は盜難の豫防又は風俗の維持に關し必要なる制限を定めたり

(ソ)料理屋飲食店藝妓酌婦藝妓置屋貸座敷娼妓取締 上記諸業の如き風俗上に關する營業取締法規は從來各道各別に制定し施行上不統一に付大正五年三月警務總監部令を以て料理屋飲食店營業取締規則、藝妓酌婦藝妓置屋營業取締規則、貸座敷娼妓取締規則を發布し同年五月より全道を通し施行したり規定の要旨は特に風俗上取締を要する貸座敷及娼妓業を爲す者は指定地域内に限局するを原則とす料理屋は藝妓の招聘、酌婦の寄寓を許し飲食店は飲食を爲さしむる外遊興を許さず藝妓置屋は藝妓を寄寓せしむるの外客を受くることを得ず其の他藝妓、酌婦、娼妓の業に關する事項を定め尙營業用建物の構造、設備に關する事項、願届の事項、營業者の一般に遵守すべき事項等なり

(ツ)人力車、馬車、自動車取締 輓近道路機關の發達に伴ひ居住内地人の増加、事業の勃興等は各

地方に於ける旅客の激増を爲り従て人力車、馬車、自働車等の營業者續出し逐年著しく其の數を増加せるを以て全道統一的に之を取締を爲すの必要を感じ従來自働車に付ては何等取締規則なく人力車、馬車に付ては全然取締規則なきに非ざるも區區に涉り取締上不便尠からざるを以て人力車に關しては大正三年七月馬車に關しては同年八月自働車に關しては大正四年七月警務總監部令を以て各其の取締規則を制定發布し車體及附屬品の構造設備、車夫、馬匹、驅者、馬丁、運轉手等の資格並從業中に於ける遵守事項特に自働車に付ては運轉路線及速度其の他取締上必要なる事項を制限し人力車、馬車の取締規則は大正三年九月、自働車の取締規則は大正四年八月より自働車取締規則は大正七年一月より各之を施行するこゝとなれり

(ネ)消防 消防組に關する法規は各道共舊理事廳令を以て定めたるものありき雖朝鮮人に適用なく又規定事項區區に涉り不便尠なからざるを以て之が統一の必要を認め大正四年六月總督府令を以て消防組規則を發布し同年八月より施行したり規定の要旨は消防組の組織、設置、地域、設備、費用の負擔、出動方法及消防組の指揮監督並之が設置に關する權限等の條項を設け本令施行前既

に設置したるものは本令に依り設置したるものと看做すこととせり然れども此等既設の消防組をして速に規定の設備に依らしめ難き事情あるものは地方の實狀に應じ漸次改善すべき方法に依りたるに付施行上支障なく完全に行はれつつあり

(ナ)代書業取締 輓近朝鮮人の権利思想發達し訴訟其の他願届等の書類作成劇増し其の間弊害甚かりさるものあるを以て従來の規定を改正し大正四年七月警務總監部令を以て代書業取締規則を發布施行したり規定の要旨は代書業者の資格、人員の制限、業務の範圍、出願及禁止事項及代書業者の責任、義務其の他取締上必要な條項を設けたり

(ウ)開港取締 朝鮮に於ける開港取締に關する従來の法令は舊韓國政府發布の仁川港口停泊船隻暫行章程あり釜山港及元山港にも同一法規ありたるも其の規定頗る簡に失し取締の目的に副はず其の他七箇所の開港には據るべき法令の存せざるを以て大正四年七月總督府令を以て開港取締規則を發布し同年八月より之を施行したり其の開港は仁川、群山、木浦、釜山、鎮南浦、新義州、龍岩浦、元山、清津、城津の十港にして規定の要旨は船舶の出入信號及願届事項、港界内に於ける禁

止事項又は許可を受くべき事項、危険物積載船舶の遵守事項、變災の場合に於ける措置及信號方法、航方速力若は碇泊に關する制限其の他港務保安上必要なる事項なり

(△)汽罐汽機發動機取締 汽罐汽機發動機の取締は各道共舊理事廳令を以て諸營業取締中に規定ありしも近來營業以外に汽罐汽機發動機を使用するものを生し且理事廳令は朝鮮人に適用されず執行上不便なるに付大正四年八月總督府令を以て汽罐汽機發動機取締規則を發布し九月より施行したり規定の要旨は汽罐汽機發動機据付の出願及使用認可申請の手續、定期又は特別検査の標準及其の時期又は汽罐汽機發動機に異狀を生し若は危険の虞ある場合の届出方並適當の設備を命し使用を停止し、取扱主任者の變更を命する等其の他取締上必要なる詳細の條項を規定せり

(ウ)勞働者募集取締 輒近内地事業界の勃興に伴ひ朝鮮人勞働者使用の趨向を馴致し特に時局發生以來は頓に募集者を増加し自然應募者の爭奪、雇傭契約の不履行其の他鮮地に於て事業に従事する者を雇主の承諾を得ずして奪取する等弊害漸く繁多ならむとす此等取締に關しては從來より機宜の手段を講しつとありと雖尙ほ募集と甘言を用ゐて其の渡航を勧誘し又は内地渡航後雇主に於

て契約を履行せず爲に應募者なしして不利を蒙らしめ其の他失職疾病等に因り窮困に陥る者尠からず仍て取締法規制定の緊要なるを認め大正七年一月朝鮮總督府令第六號を以て勞働者募集取締規則を制定發布し募集者の行爲及契約に關する事項等を規定し以て叙上弊害の消除に最め一面鮮人勞働者の保護上遺憾なきを期せり

(キ)犯罪狀況 大正七年上半期に於ける犯罪件數は四萬五千二十一件、檢擧件數三萬七千八百六十六件にして之を大正六年の同期に比すれば犯罪件數に於て五千二十四件、檢擧件數に於て四千三十四件の増加を見る而して犯罪發生件數中増加せしは竊盜、詐欺、横領、恐喝等の如き所謂智能的犯罪にして之等犯罪の逐年増加の傾向あるは社會狀態の複雜を來せると同時に一般民智の昂上に伴ひ狡獪の徒増加せるに基因す此等の徒に對しては警務機關に於て平素其の動靜を查察警戒すると共に一面生業を奨勵し専ら之か豫防檢擧に努めつつあり

(ク)犯罪即決 大正七年上半期に於ける犯罪即決件數は、三萬八千五百八件にして之か虛斷人員別は有罪五萬三千八百八十四人、無罪二十二二人、其の他百七十五人合計五萬三千三百八十一人なり之

を大正六年の同期に比すれば件數に於て六千四十二件を増加せり斯の如く逐年増加の傾向ある原因は畢竟時勢の進化するに伴ひ各般の行政法規頒布され又警務機關は漸次周到するに至り諸般の取締普及するの結果行政法規違反及警察犯處罰規則違反等の増加するに外ならず然るに一般人民は即決處分に對し處斷敏速にして且公正なりと稱し其の感想良好にして従て正式裁判を請求するか如き者極めて尠し

(オ)民事争訟調停 大正七年上半年に於ける調停受理件數は三千八百七十七件にして其の内既済三千七百九十三件、未済八十四件なり之を大正六年の同期に比すれば受理件數百二件を減せり之の原因の重なる點は本調停は強制力を伴はざるか爲調停の効果少なしこの念を抱くに至りたるか故なるへし

(ク)警察官吏の取扱に係る執達吏事務取扱 從來專務執達吏取扱の設けありしは釜山、晋州、馬山、統營、大邱、鎮南浦、新義州の七箇所のみなりしか後更に京城、仁川、江景、全州、群山、南原、光州、木浦、順天、平壤、定州、寧邊、元山、永興、咸興の十五箇所を増設し專務執達吏事務を

取扱しめ其の他の地方に於ては警察官吏及憲兵に於て之が取扱を爲しつつあり

여 백

第二十二章 司法

第一節 裁判制度

朝鮮に於ける民刑事の裁判及非訟事件に關する事務は朝鮮總督府裁判所之を掌る而して裁判所は三審制度に則り分つて高等法院、覆審法院及地方法院の三種とす地方法院の事務の一部又は全部を取扱はしむる爲地方法院支廳を設置し又登記及公證の事務を取扱はしむる爲地方法院出張所を設置せり

地方法院は民事及刑事に付第一審裁判を行ひ且非訟事件に關する事務を取扱ふ覆審法院は地方法院の裁判に對する控訴及抗告、高等法院は覆審法院の裁判に對する上告及抗告に付裁判を行ひ且高等法院は裁判所構成法に定めたる大審院の特別權限に屬する職務を執行す

地方法院は刑事單獨にて裁判を爲すと雖訴訟物の價額千圓を超過する民事事件、人事訴訟事件、破産事件、刑法第七十四條及第七十六條の犯罪事件、本刑死刑無期又は短期一年以上の懲役若は禁錮

に該る犯罪事件（裁判所構成法に定めたる大審院の特別権限に屬する事件を除く）並此等の刑事事件の共犯事件にして本事件と同時に審判する場合は三人の判事、覆審法院は三人の判事、高等法院は五人の判事を以て組織したる部に於て合議裁判し且各裁判所に檢事局を併置し檢察事務を掌らしむ而して朝鮮人にして判事又は檢事たる者は民事に在りては原告、被告とも朝鮮人たる場合、刑事に在りては被告人が朝鮮人たる場合に限り其の職務を行ふものとす

裁判所一覽

大正七年十月一日

高等法院		覆審法院	地方法院	地方法院 支廳	地方法院 出張所
京城	京城	京城	京城	廣州、議政府、漣川、抱川、加	廣州、議政府、漣川、抱川、加
公州	京城	鐵原	鐵原	平、楊平、利川、金良場、安城、	平、楊平、利川、金良場、安城、
×大田	×開城	×驪州	×水原	平澤、永登浦、金浦、江華、汶	平澤、永登浦、金浦、江華、汶
×清州	鐵原	原州	×仁川	山、長湍、麟蹄、楊口、淮陽、	山、長湍、麟蹄、楊口、淮陽、
忠州	×春川			旌善、平昌、寧越、橫城、洪川、	旌善、平昌、寧越、橫城、洪川、
洪城				華川、金化、平康、伊川、	華川、金化、平康、伊川、
瑞山				報恩、沃川、永同、鎮川、地山、	報恩、沃川、永同、鎮川、地山、
天安				陰城、堤川、丹陽、鳥致院、扶	陰城、堤川、丹陽、鳥致院、扶
				餘、舒川、大川、青陽、禮山、	餘、舒川、大川、青陽、禮山、

京城

	平壤			
大邱	海州 ×瑞興	平壤	咸興	
盈德 蔚珍	載寧 松禾	安州 德川 ×鎮南浦 江界 楚山 *新義州	北青 ×元山 會寧 永興 慶興 江陵 ×清津	
義城 ×慶州				唐津、溫陽
善山、開慶、醴泉、榮州、乃城、 鬱陵島、三陟	院、遂安、谷山	慈城、厚昌、浦、朔州、昌城、碧潼、渭原、 熙川、博川、宣川、鐵山、龍岩、 江東、中和、江西、永柔、价川、 黃州、順川、孟山、陽德、成川、 寧遠、義州、龜城、泰川、雲山、	鏡城、明川、吉州、富寧、茂山、 鍾城、穩城、慶源	通川、杆城、襄陽、定平、高原、 文川、安邊、洪原、利原、端川、 新興、長津、豐山、三水、甲山、

高等法院	覆審法院	地方法院	地方法院支廳	地方法院出張所
大 邸		釜 山	蔚山 居昌 ×馬山 密陽 ×統營 ×晉州	宜寧、咸安、昌寧、梁山、金海、固城、泗川、南海、河東、山清、咸陽、陝川
光 州	×順天 錦山 ×木浦 南原 ×長興 井邑 ×濟州 ×全州	鎮安、茂朱、長水、任實、淳昌、高敞、扶安、金堤、裡里、潭陽、谷城、求禮、光陽、麗水、高興、寶城、和順、康津、海南、靈巖、羅州、咸平、靈光、長城、莞島、珍島		
<p>本表中×印を附したるは合議部の制ある地方法院支廳にして×印は豫審を取扱ふ地方法院支廳なり</p>				

第二節 適用法規

適用法規は明治四十五年四月より施行の民事令、刑事令に依り内地の法規を適用せり。雖民事に付

ては民法中並力、親族及相続に關する規定は之を朝鮮人に適用せずして從來の慣習に依ることと爲し又不動産に關する物權の種類及效力に付ては民法に定めたる物權を除くの外尙慣習に依ることとせり

刑事に付ては刑事令施行の際當分の内殺人罪、強盜罪に限り朝鮮人に對し舊韓國刑法大全の效力を有せしむることとせしか大正六年十二月刑事令を改正し此の規定を削除し以て從來内鮮人間に残存せし唯一の實體法上の區別を撤去し全然同一法規に依ることとせり而して朝鮮固有の刑たる笞刑は従前の制度に改正を加へ朝鮮笞刑令を制定して明治四十五年四月より施行し朝鮮人に對してのみ適用することとせり

民事、刑事、豫審及檢事捜査事件新受件數	
種別	種別
第一審事件	大正二年
	同 三年
	同 四年
	同 五年
	同 六年

三五、三三七

三三、四三三

三四、三七五

三二、四〇三

三二、六〇二

種別	大正二年	同三年	同四年	同五年	同六年
民事訴訟	二、八五二 三六〇	二、六九一 五五六	二、一九九 三一	二、〇九三 三二九	二、〇八七 三四〇
控訴事件	三六〇	五五六	三一	三二九	三四〇
上告事件	三六〇	五五六	三一	三二九	三四〇
計	三六〇	五五六	三一	三二九	三四〇
刑事訴訟	一五、四七一 一、三一九 一三七	一六、三五四 一、三三二 一四三	一八、四〇五 一、四九五 一四八	二二、九二五 一、七九二 一六七	二六、八四一 二、一三一 一七〇
第一審事件	一五、四七一	一六、三五四	一八、四〇五	二二、九二五	二六、八四一
控訴事件	一、三一九	一、三三二	一、四九五	一、七九二	二、一三一
上告事件	一三七	一四三	一四八	一六七	一七〇
計	一六、九二七	一七、八一九	二〇、〇四八	二三、八八四	二九、一四二
豫審事件	五二八	五八五	五八〇	五九二	六五五
檢察搜查事件	三一、二八二	三四、八三四	三八、八五六	四六、六〇七	五七、三七五
民事第一審	五八、一一二	一一三、〇九〇	二四四、一八七	三七八、一三九	六八四、〇三二
控訴審	三四	三一	二七	三二	二八
上告審	一	六	五	五	一〇
計	五八、一四六	一二三、一二七	二四四、二一九	三七八、一七六	六八四、〇七〇

刑事 第一審
 控訴審
 上告審
 雜事
 計
 檢事局共助事件
 總計

四四六	五〇七	四八〇	四六五	六三七
二〇	三〇	四二	三八	三四
七	一〇	四	二	七
四七三	五四七	五二六	五〇五	六七八
一、六二七	二、一七八	二、四三七	二、五四八	二、四三九
一四七、五二二	二二四、七七〇	三三三、四七一	四八七、一三七	八〇九、三八八

本表には故障及再審事件を包含す

民事及刑事雜事件欄に掲記したる事件の種類左の如し

- 民事 抗告、和解、督促、假差押、假差分、強制執行、不動産競買、破産、禁治産準禁
 治産及失踪の宣告、各種登記、非訟事件手續法に依る非訟事件、公證、確定日附、
 共助及其の他の申請事件
 刑事 抗告、附帯私訴及共助事件

第三節 不動産登記制度

不動産の登記に關しては明治四十五年制令を以て朝鮮不動産登記令を發布し原則として内地の不動産登記法に依ることを定めたり抑朝鮮に於ける不動産所有權の得喪に關しては古來文記又は文券と稱する私署證書の引渡に由り之を行ふに過ぎざりしを以て併合前韓國政府時代既に土地建物證明規則並土地建物所有權證明規則を發布し賣買、贈與、交換、典當の各事項の外所有權の保存に付府尹又は郡守をして之に證明を與へしめ其の權利の確保を期する方法を講じたりしか爾來時勢の推移に伴ひ複雑なる權利關係を生し之を確保する上に於て缺如する所尠からず仍りて明治四十五年改めて不動産證明令を發布し府尹郡守を以て證明官吏と爲し證明すべき權利を所有權、典當權の二種に限りたること舊規則に異ならずと雖民事令施行の結果證明を以て第三者に對抗するの要件となし權利確保上舊規則の缺點を補へり元來不動産證明令の施行は土地臺帳の設備に至る迄一時權宜の處置たるに過ぎざるを以て土地調査の進行に伴ひ土地臺帳を設備したる地域に對しては不動産登記令を施行し同時に證明事務を廢止するの順序なりしか大正三年五月初めて京城外十一府十七市街地に施

行し爾來前後十數回に互り順次各郡に之を及ほし大正七年七月を以て朝鮮全土十二府二百十八郡二島に之か施行を了せり而して是等の府郡は地方法院及其の支廳の所在地又は之に接續したる郡は當該地方法院又は支廳をして之を取扱はしめ其の他の郡は土地臺帳所管廳たる郡廳所在地に地方法院出張所を設置して其の事務を取扱はしむ

第四節 民籍事務

朝鮮に於ける民籍は李朝成宗の朝に式年の制を定め每三年(子、卯、午、酉)に一回戸口の數を調査せしめたるに始まり爾來四百有餘年此の遺制を襲踏し來りしか明治二十八年に至り之を改めて戸口調査の規程を設け府尹郡守等管掌の下に面長、洞里長等をして戸口を調査せしめ一方人民に申告義務を負擔せしむることとしたれども、民籍は依然其の實を擧ぐるに至らざりしか、其の後明治四十一年民籍事務を警務機關の管掌に移し尋て明治四十二年民籍法を制定發布し人民の申告を督勵し且警察官をして戸口の實查を爲さしめ翌四十三年五月に至り民籍の形式茲に漸く成れり其の後地方行政機關漸次備はり府面の事務亦其の面目を一新するに至りしかは大正四年四月民籍法及宿泊居住規

則を改正し此の事務を府尹面長の管掌に移し道長官郡守をして之を監督せしむることとし之が主管を警務總監部より司法部に移屬せしめ一般の取扱例を定め事務の統一を圖り専ら民籍の完全を期したり而して近時人民亦權利思想の發達に伴ひ漸次民籍の重要にして苟且に附し難きを自覺し自ら進んで申告を爲すの傾向を呈し昔日の面目を一新するに至れり民籍法は固より朝鮮人に限り適用せらるるものにして一般居住の内地人は其の身分に付ては勿論内地の戶籍法の適用を受くも雖其の居住關係に付ては朝鮮人及外國人と等しく宿泊及居住規則に依り居住又は轉居の届出を爲すべきものとす而して内鮮人關係の民籍取扱方に付婚姻に關しては女が内地人たる場合には夫たる朝鮮人の家に妻として入籍せしめ女が朝鮮人たる場合には民籍より之を除き以て當事者をして當然夫妻たることを得しめ其の間に生したる子は嫡出子の取扱を爲し又養子に關しては朝鮮人の男子が養子又は婿養子縁組に因り内地人の家に入りたるときは其の民籍を除かず女子が養子縁組に因り内地人の家に入りたる場合は之を除くべき取扱を爲す定めにして朝鮮人が内地人を養子とすることは朝鮮に於ける慣習の認めざる所なるを以て之が取扱を爲さず。

第五節 公證事務

大正二年五月初めて朝鮮公證令を施行し公證人の職務は専ら地方法院同支廳及出張所をして之を取扱はしめ來れるも京城の如き都會に在りては專務の公證人設置の必要を認め大正四年三月府令を以て公證令施行規則及公證手数料規則に所要の改正を加へ同四月一日京城地方法院所屬の專務公證人一人を任命し裁判所外に於て其の事務を取扱はしめ同院(支廳及出張所を除く)に限り該事務の取扱を廢したり

第六節 執達吏事務

執達吏に屬する職務は朝鮮の現狀に適應せしむる爲内地に於けるか如く純然たる專務の執達吏の職制を設けず從來主として警察官吏(警察事務を取扱ふ憲兵を含む)をして之を取扱はしめつつあるも輒近に至り其の事務漸く増加し本務の繁劇なる警察官吏をして之を兼掌せしむるは時勢の趨向に適應し難きを以て先づ地方法院及主要なる地方法院支廳に漸次非官吏にして能く關係法規に通曉し又は該事務に經驗を有する者を指命し専ら執達吏の職務を取扱はしむることとせり現に非官吏なる執

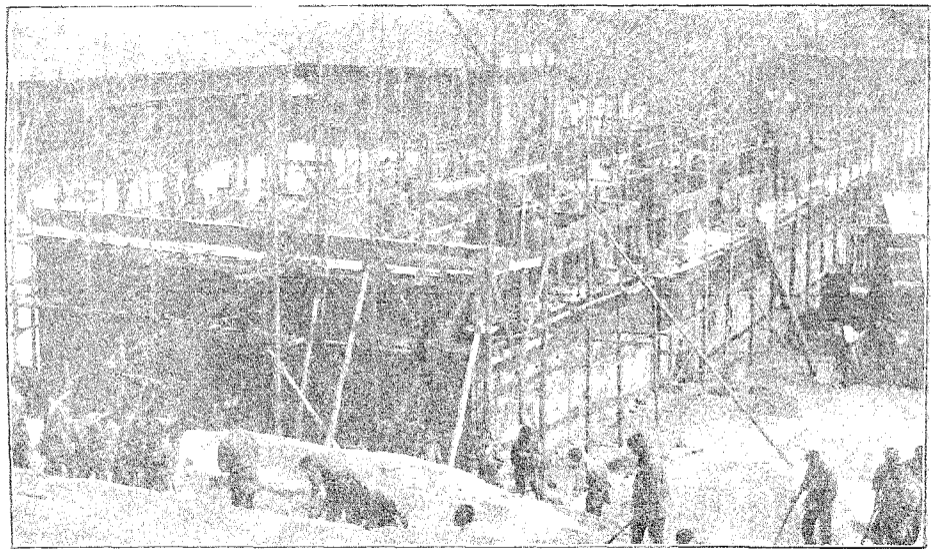
達吏職務取扱者を設置したる箇所は左の如くにして其の他の地域に於ては仍は警察官吏に於て其の事務を取扱へり

非官吏執達吏職務取扱者設置地

京城 仁川 江景 永興 元山 平壤 新義州 大邱 釜山 統營 馬山 光州 木浦 全州
 群山 順天 南原 井邑 (以上執達吏事務全般を取扱ふ)
 安州 定州 寧邊 (以上送達事務に限り取扱ふ)

第七節 監獄

監獄は從來警察の一部として舊韓國内部の管轄に屬し其の事務は警察官の兼掌する所なりしか明治四十年十二月監獄官制を公布し法部の所管に屬せしめ典獄以下の職員を置き明治四十一年一月京城監獄の事務を開始し次て七箇の監獄及十二箇の分監を開設し明治四十二年十一月統監府監獄を開設舊韓國監獄及内地人囚徒を收容したる理事廳監獄の事務一切を承繼し明治四十三年十一月朝鮮總督府監獄を開設し統監府監獄の事務一切を承繼し以て現時に至れり目下朝鮮に於ける監獄は京城、西



本府直營の下に徒囚を役使し大西門監獄房建築の状況

파오손면

파오손면

監獄の収入は前掲の通逐年増加せり而して其の三分の一以上は京城監獄の所管に屬する煉瓦及土管製作の収入にして左表の如く大正三年及同四年度に於ては煉瓦の販賣數著しく減少せり此は經濟界不振の影響なるも一面土管の賣行は幸に良好なりしと一般作業の發展に困りて全作業收入に大なる減收を見ず然るに大正五年度に入りて漸く其の頽勢を挽回し同六年度に至りては愈煉瓦の需要を激増し一般作業亦益活氣を呈するに至れり今最近五箇年に於ける煉瓦及土管の製造並賣却高を掲ぐれば左の如し

煉瓦及土管製造賣却高

年 度	煉 瓦		土 管	
	製造數	賣却數	製造數	賣却數
大正二年度	六、二七八、〇九〇	五、一七三、五二〇	三六、二四一	三八、八一九
同 三年度	五、五九〇、八八五	三、三七〇、六〇二	五四、二四一	六〇、〇〇二
同 四年度	五、二七三、三〇八	二、六六七、〇四〇	五四、七九一	六二、九〇八
同 五年度	二、四一五、〇八四	四、〇七九、一八三	六五、一三七	一〇五、一〇八
同 六年度	四、六八三、二〇三	二、五六九、六〇六	六一、四七二	七五、四四三
			同上價額	同上價額
			同上價額	同上價額

(一)指紋 朝鮮監獄に於ける指紋の徴取は明治四十三年八月韓國併合に因る恩赦に基き多數の出獄者ありたる際に始まる爾來幾多の研究改良を加へ逐年良好の成績を見るに至れり今其の状況を表すすれば左の如し

指紋徴取及前科發見數

年	徴取指紋		發見數		年	徴取指紋		發見數	
	原紙數	同上前科發見數	警察官署其の他對照指紋原紙數	同上前科發見數		原紙數	同上前科發見數	警察官署其の他對照指紋原紙數	同上前科發見數
大正二年	一一、五九六	三八四	四八	二〇	大正五年	一八、七八一	五六〇	一九三	八四
同三年	一一、七一九	四五八	一一二	五一	同六年	二一、二七一	七五六	三〇五	一五〇
同四年	一五、七二二	四四一	一九三	七一	同七年六月迄	一一、〇一七	三九七	一九六	八四

大正七年六月末に於ける保管指紋原紙數は十萬四千百五十三枚なり

(二)免囚保護 從來朝鮮に於ける出獄人保護機關は徴微たりしか故に十分なる効果を擧ぐるを得ず而かも一面出獄人は比年其の數を増加するを以て本機關の完備を圖るは頗る緊要なりと大正二

年五月免因保護事業補助金下付手續を制定し同年度より毎年金五千圓を交付し其の發達を促進せしめたり其の結果總督始政の當時に在りては僅に一保護團體の設立ありたるのみなりしか爾來官民有志の協力に依り各地相踵て設立せられ大正五年末に於ては其數二十を算し各本分監悉く保護團體との聯絡を保つを得事業成績亦漸く面目を一新するに至れり今其の狀況を掲ぐれば左の如し

出獄人保護機關

大正六年末

保護團體	所在地	收容保護		一時的保護人員		收支		資産
		人員	保	人員	保	入	出	
京城救護會	京城	八六		一五二		三、三一四	二、二六六	七、五四二
仁川救護院	仁川	一〇		二六		七〇〇	五七八	九三九
春川保護會	春川	一五		九		二四七	六八	三三六
公州慣業院	公州	二七		八四		三、一一五	三、一二九	一、五二四
忠北有隣會	清州	五		九五		五七〇	四四一	一、一四〇

咸興保護會	元山保護會	清津保護會	平壤保護會	鎮南浦獎善院	平北保護會	海州保護會	大邱常成會	釜山保護園	馬山保護會	晉州扶掖館	光州保護會	木浦保護會	全州保護會
咸興	元山	清津	平壤	鎮南浦	新義州	海州	大邱	釜山	馬山	晉州	光州	木浦	全州

一〇	九	八	一五	一八	五	三三	一四	六	三	一三	一		
七〇	二九〇	四三四	一九	一七	九	一四八	二九	三九	一〇	六八	一七	一七	五六
四八五	六一七	一、三二一	二一四	二四六	五八二	二、二九〇	一、〇七五	三七七	一、四一五	五五一	八四一	四四二	六六〇
九三	三〇三	七八三	一一一	一九三	一一二	一、四一五	六六三	一五六	七〇五	四六八	六六三	一六一	四一四
一、九一九	二、八四三	二、六五一	一、四三五	二、一一六	三、六五一	五、七四七	二、五四四	二、一九四	一、六七七	三、七九八	一、二八六	一、二九六	一、六一六

總計	群山保護會	群山	收容保護人員		一時的保護人員		收支		資產
			護人員	保	護人員	收	入	支	
二八八	二	二			七九		六八五	一、〇三四	九六四
一、六六八							一九、七四七	一三、七六六	四七、二一八

大正八年
最近朝鮮事情要覽終

大正七年十二月二十八日印刷

大正八年一月一日發行

朝鮮總督官房總務局印刷所印刷

朝鮮總督府

正 誤

四七頁七行 「歩兵第四十旅團司令部」を削る

六四頁表の一行 「興湖咸津西」は「咸興西湖津」

二二〇頁八行 「中樞たる」の次に「中央銀行設立の必要を

認め明治四十二年十月韓國銀行を設立し第一銀行より中央銀行としての業務」を加ふ

朝鮮總督府編纂

耳近朝鮮事情要覽



大正十一年
最近朝鮮事情要覽

凡例

本書は最近朝鮮に於ける施設經營の一斑及内鮮人生活の状態其他朝鮮の事情を記述し兼て統計表を附し概括的觀察の便に供せむことを期せるものなり

大正十一年一月

朝鮮總督府

大正十一年 最近朝鮮事情要覽

目次

第一章 緒論	一
第一節 併合顛末	一
第二節 朝鮮總督府の設置	八
第三節 官制の改革	一〇
第二章 風俗習慣	二一
第三章 地誌	二七
第一節 地形及地勢	二七
第二節 氣候	二八
第三節 戸口	三五

第四節 重要市街地及名勝地……………四〇

第四章 交通……………五七

第一節 鐵道……………五七

一 國有鐵道……………五七

二 關釜連絡概況……………六二

三 私設鐵道及軌道……………六三

第二節 道路……………六七

第三節 港灣……………七〇

第四節 海事……………七五

第五節 江運……………七七

第五章 通信……………八一

第一節 通信事業……………八一

第二節 電氣瓦斯事業……………八八

第六章 地方行政……………九三

第一節 道府郡島……………九三

第二節 公共團體……………九四

一 道地方費……………九四

二 府……………一〇四

三 面……………一〇九

四 學校費……………一一六

五 學校組合……………一一八

六 水利組合……………一二四

第三節 府郡島臨時恩賜金……………一二九

第四節 學校財產……………一三二

第七章 救恤……………一三七

第一節 濟生院……………一三七

第二節 救療機關	一四二
第八章 教育	一四九
第一節 内地人の教育	一四九
第二節 朝鮮人の教育	一五八
第三節 在内地朝鮮學生	一七六
第四節 經學院	一七八
第五節 教科用圖書	一七九
第九章 財政及經濟	一八一
第一節 財政	一八一
一 歲計	一八一
二 朝鮮總督府特別會計所屬國債	一九二
三 租稅	一九三
四 驛屯賭收入	二一三

第二節	通貨	二一四
第三節	金融	二一六
一	金融機關	二一六
二	金利	二一九
三	朝鮮銀行	二二〇
四	朝鮮殖產銀行	二二三
五	普通銀行	二二五
六	手形交換所	二二八
七	金融組合	二三〇
八	金融組合聯合會	二三四
第十章	專賣	二三七
第一節	煙草	二三七
第二節	人蔘	二四六
第三節	鹽	二四八

第十一章 農業……………二五三

第一節 土地……………二五三

第二節 農業者……………二六三

第三節 農産物……………二六九

第四節 穀物検査……………二八五

第五節 勸農機關……………二八七

第十二章 商業……………二九三

第一節 朝鮮人の商業……………二九三

第二節 内地人の商業……………二九七

第三節 商業地……………二九七

第四節 會社……………二九九

第五節 商業會議所……………三〇四

第六節 商品陳列館……………三〇四

第七節	度量衡	三〇七
第十三章 工業		
第一節	朝鮮人の工業	三〇九
第二節	内地人の工業	三一三
第三節	官督工業	三二二
第四節	中央試験所	三二四
第五節	地方工業傳習所	三二五
第六節	工業所有權の保護	三二六
第七節	工業獎勵	三二七
第八節	勞銀	三二七
第十四章 貿易		
第一節	總說	三三三
第二節	國別貿易	三三四

第三節	港別貿易	三三六
第四節	輸移出重要品	三三九
第五節	輸移入重要品	三四〇
第六節	通過貿易	三四二
第七節	貿易船舶	三四二
第八節	稅關	三四三
第十五章 林業		
第一節	林政の沿革並林況	三四九
第二節	森林保護	三五一
第三節	殖林事業	三五三
第四節	不要存國有林の讓與豫約付造林貸付	三六三
第五節	國有林野區分調査	三六四
第六節	林野整理調査	三六六
第七節	國有林經營	三六七

	(一)	總督府直轄	三六七
	(二)	營林廠	三六八
		第八節 林業試驗	三七六
		第十六章 鑛業	三七九
		第一節 鑛業出願及許可	三七九
		第二節 鑛床調査と特許鑛山	三八三
		第三節 鑛物	三八五
		第十七章 水産業	三九三
		第一節 水産業の概況	三九三
		第二節 漁業處分	三九五
		第三節 水産業の保護奨勵	三九六
		第四節 水産試験及調査	四〇〇
		第五節 水産業發展の狀況	四〇二

第六節	水産業の改良及水産業の狀況	四〇七
第十八章	拓殖事業	四一七
第十九章	祭祀及宗教	四三七
第二十章	警察	四四七
第二十一章	衛生	四五九
第一節	醫療機關	四五九
第二節	藥品取締	四六五
第三節	飲食物及其他物品の取締	四六六
第四節	痘苗製造	四六七
第五節	屠場及屠肉	四六七
第六節	牛乳搾取所及牛乳取締	四六八
第七節	汚物掃除	四六九
第八節	海港檢疫	四七〇

第九節	飲料水	四七一
第十節	傳染病	四七四
第十一節	地方病	四七七
第十二節	獸疫	四七九
第十三節	移出牛檢疫	四七九
第二十二章 司法		
第一節	裁判制度	四八一
第二節	適用法規	四八五
第三節	不動產登記制度	四八八
第四節	民籍事務	四八九
第五節	公證事務	四九〇
第六節	執達吏事務	四九〇
第七節	監獄	四九一
第八節	免囚保護事業	四九五

第二十三章	古蹟及遺物	四九九
第二十四章	在外朝鮮人に對する施設	五二三
第二十五章	軍事	五一七
第一節	陸軍	五一七
第二節	海軍	五二一

大正十一年 最近朝鮮事情要覽

第一章 緒論

第一節 併合顛末

東洋永遠の平和を維持し日韓兩國相互の福利を増進する目的を以て明治三十七年二月在京城の帝國代表者は韓國政府と重要なる協商を遂げ同月二十三日兩國代表者に於て左記議定書を作れり

一 韓國政府カ帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シ其ノ忠告ヲ容ルルコト

二 韓國皇室ノ安全康寧ノ保證

三 韓國ノ獨立及領土保全ノ保證

四 第三國ノ侵害若ハ内亂ニ依リ韓國皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ニハ帝國政府ハ臨機必要ノ措置ヲ取り韓國政府ハ此ノ行動ヲ容易ナラシムル爲十分ノ便益ヲ與フルコト並帝國政府ハ如上ノ目的ヲ成就スル爲軍事上必要ノ地點ヲ收用シ得ルコト

五 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ本協約ノ趣意ニ違反スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スル

ヲ得サルコト

六 帝國代表者ト韓國外部大臣トノ間ニ本協定ニ關聯スル未悉ノ細條ヲ臨機協定スルコト

尋て八月二十二日に至り日韓兩國政府代表者は更に一の協商を遂げ財政外交兩顧問の備聘並韓國政府と諸外國との條約締結其の他外國人に對する特權讓與若は契約等の處理に關しては豫め帝國政府と商議すへきことを協定せり

翌三十八年九月日露兩國間に於ては彼のポーツマス條約に於て露國政府は帝國が韓國に於て政治上軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有することを承認し帝國が韓國に於て必要と認むる指導保護及監理の措置を執るに方り之を阻害し又は之に干渉せざるへきことを約せり此の秋に方り日英兩國間に於ても彼の日英同盟約款に依り之と同一の權利を承認せり茲に於て帝國政府は此の新關係に基き韓國に對する保護政治の目的を徹底せむが爲日韓新協約を締結し更に勅令を發し統監府及理事廳官制を發布し同時に在韓國の帝國公使館及領事館を撤廢し侯爵伊藤博文を統監に任し三十九年二月一日名其の事務を開始せり

統監府既に設置せられ韓國の外交は舉げて帝國政府の監理に歸し施政の改善漸く其の歩を進めむとするや偶明治四十年夏海牙密使事件の起るありて人心動搖の兆あるを以て伊藤統監は日韓兩國の關

係を一層密通せしむるの必要を認め同年七月更に韓國政府の代表者との協約を訂立せり即ち韓國政府は施政改善に關し統監の指導を受くること、法令制定及重要なる行政上の處分に付豫め統監の承認を受くべきこと、司法事務と普通行政事務との區別を爲すこと、高等官吏の任免は統監の同意を要すること、統監の推薦に依り日本人を韓國官吏に任命すること、統監の同意なくして外國人を備聘せざること、財政顧問の廢止是なり

斯の如く韓國に對する我が保護權行使の範圍を擴張し一轉内地人官吏をして從來間接指導の地位に在りしを直接施政の衝に當らしめ政務機關全般に互る官制改革を斷行し宮中府中を燦然區別し司法制度の獨立を企圖し中央地方各般行政の刷新に努めたりしも當時韓國財政の狀態は司法制度を整備するの財力を有せざるのみならず法典の整備と司法官の養成とは一朝にして之を行ひ難きを以て明治四十二年七月(此の時會彌副統監伊藤統監に代り統監たり)韓國の司法及監獄事務を擧げて我が政府に委託せしむるの件を協定し同年十一月より之を實施し著者保護政治の實績を擧げむせしか偶同年十月二十六日哈爾濱に於て前伊藤統監の暗殺せらるるあり又同年十二月二十二日首相李完用の兇害を見るに到り國內の形勢日に不穩にして到底韓國を併合するに非されば彼我の康寧を確保し有終の美果を收むること能はざるの狀勢瞭然たるものあり茲に於てか併合の議漸く動きしも未だ遂行

の機運に至らざりしか、明治四十三年五月三十日統監子爵曾彌荒助病を以て職を辭し陸軍大臣子爵寺内正毅統監に兼任せらるるや六月二十四日韓國の警察事務を繼承して統監府警察官署官制を公布し同年七月一日より之を實施するに至れり。尋て同年七月二十三日寺内統監の韓國に赴任するや當時の狀勢併合の一日も忽諾に付すべからざるものあるを察知し韓國政府の當局者と折衝し兩國將來永遠の福利を増進せむ。爲韓國皇帝は統治權を我が天皇陛下に讓渡するの時宜に適切なることを提議せしに兩國政府の意見一致したるを以て八月二十二日寺内統監は韓國總理大臣李完用と日韓併合條約を締結し同月二十九日之を公布施行し同時に韓國と條約を有し又は最惠國條款を有する獨逸、亞米利加合衆國、埃太利、洪牙利、白耳義、支那、丁抹、佛蘭西、大不列顛、伊太利、露西亞の各國に此の旨を宣言せり此の日左記詔書を煥發せられたり。

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ願ミ義ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ

安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可カラサル
コト瞭然タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ
己ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトシセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立
チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ
平和ハ之ニ依リテ愈々其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有
司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシム
ルコトヲ期セヨ

同日舊韓國皇帝ハ舊韓國國民に對シ左の勅諭を發せられたり

朕否德ニシテ艱大ナル業ヲ承ケ臨御以後今日ニ至ル迄維新政令ニ關シ亟圖シ備試シ用力未タ嘗テ
至ラスト雖由來積弱痛ナ爲シ疲弊極處ニ到ル時日間ニ挽回ノ施措望ナシ晝夜憂慮善後ノ策茫然々
リ此ニ任シ支離益甚シケレハ終局拾收シ得サルニ底ラム寧ロ大任ヲ人ニ託シ完全ナル方法ト革新

ナル功效ヲ奏セシムルニ如カス故ニ朕是ニ於テ巽然内ニ省ミ廓然自ラ斷シ茲ニ韓國ノ統治權ヲ從前ヨリ親信依仰シタル隣國大日本皇帝陛下ニ讓與シ外東洋ノ平和ヲ鞏固ナラシメ内八域ノ民生ヲ保全ナラシメトス惟爾大小臣民ハ國勢ト時宜ヲ深察シ煩擾スル勿ク各其ノ業ニ安シ日本帝國ノ文明ノ新政ニ服從シ幸福ヲ共受セヨ朕カ今日ノ此ノ舉ハ爾有衆ヲ忘レタルニアラス宜ニ爾有衆ヲ救活セムトスル至意ニ出ツ爾臣民等ハ克ク朕ノ此ノ意ヲ體セヨ

斯くて併合の事成るや同日優詔を下し給ひて舊韓國皇帝を冊して王と爲し昌德宮李王と稱し舊皇太子及將來の世嗣を王世子とし舊太皇帝を太王と爲し德壽宮李太王と稱し各其の儼匹を王妃太王妃又は王世子妃とし竝に待つに皇族の禮を以てし特に殿下の敬稱を用ひしめらる又李王の懿親李嬭及李黨を公と爲し孰れも其の配匹を公妃とし竝に待つに皇族の禮を以てし殿下の敬稱を用ゐしめられ李家の歳費として年々百五十萬圓を給與せられ日常の供御も從前に比し毫も差異なく其の祭祀典禮の如きも亦削減を加へらるることなくして祖宗崇敬の道を盡すに遺憾なからしめられたり又勳功ある朝鮮人に對しては朝鮮貴族令を定め榮爵を授けられ之に依り同年十月貴族に列せられたる者七十六名即ち侯爵六人伯爵三人子爵二十二人男爵四十五人あり而も聖恩の優渥なる更に赤子を體卹するの意を昭示し給ひ舊刑諸般の罪囚中情狀の憫諒すへき者に對しては特に大赦を行はせられ囚人にし

て此の惠澤に浴したる者一千七百十七人に及へり又積年の逋租及當年の租税は之を減免し給ひ又特に臨時恩賜公債三千萬圓を朝鮮に下賜せられたり貴族及功勞者並其の遺族及官吏にして此の惠恤に與りたる者三千六百二十八人此の金額八百二十四萬六千八百圓班族儒生の耆老にして恭謙能く庶民の師表たる者に對し尙齒の恩典を與へられたる者一萬二千五百五人此の金額三十萬圓孝子、節婦、鄉黨の模範たる者に對し褒賞を賜りたる者三千二百九人鰥寡孤獨の憐愍すへき者に對し惠恤せられたる者七萬九百二人此の金額合計二十三萬五千九百圓、以上は一時の恩賜にして斯の惠澤に浴したる者上下舉て感泣せざる者なしと雖未だ以て一般の民衆をして永遠無窮の天恩に均霑せしむること能はざるを以て更に臨時恩賜金の中一千七百三十九萬八千圓を全道の府郡に分與し之を基金として永久に保存し其の利子を以て士民の授産教育及凶歉救濟の資金に充てしめられたり又同五十萬圓を以て孤兒の教養、盲啞者の教育及精神病者の救療基金に充て二百八十五萬五千八百圓を以て一般貧民の救療基金とし尙二十五萬圓を以て經學院基金と爲し文廟の祭祀經學の講究を繼續せしめ風教の維持に努め更に同二十一萬三千五百圓を以て行路病者救療基金に充てられたり

輒近李王家の御昌榮益々加はるのみならず世運益々進展せるを以て愈々其の寵光を致くして李家優遇の聖旨を顯彰せられむか爲御思召に依り其歳費を大正十年度より百八十萬圓に増額せられたり又

大正九年四月二十八日東京李王世子邸に於て王世子垠殿下と梨本宮方子女王殿下御成婚の儀ありて内鮮融合の最尊き範を垂れさせ給ひ超へて同十年八月十八日芽出度第一王子を擧げさせられ晉と御命ありて王家の慶福愈祥榮を尙へたり同日御生誕の王子に對し左の優詔を降し給へり

朕惟フニ王世子李垠ハ李家ノ元儲ニシテ令問日ニ升リ積徳月ニ高ク洵ニ内外ノ瞻望タリ我カ

皇考子愛最渥ク久ク寵光ヲ承ク故ニ朕ノ王世子ニ對スル情誼殊ニ篤ク親眷濔ルコトナシ今次李家慶アリ朕ノ生誕スル所ノ男子ハ世家率循ノ系嗣ニシテ宜ク方ニ休祉ヲ享ケシムヘシ乃チ待ツニ皇族ノ禮ヲ以テシ特ニ殿下ノ敬稱ヲ用井シム茲ニ

皇考ノ

聖慮ヲ體シテ殊遇ノ意ヲ昭ニス

第二節 朝鮮總督府の設置

明治四十三年八月二十九日併合條約の公布と同時に朝鮮總督府を設置し次て十月一日日本府及所屬官署官制を施行せり即ち總督府は總督官房（武官、祕書課、參事官）、總務部（文書課、外事局、人事局、會計局）内務部（庶務課、地方局、學務局）度支部（庶務課、稅關工事課、司稅局、司計局）農



(城京) 況賞視奉朝歸御下殿子太皇

商工部(庶務課、殖産局、商工局)司法部(庶務課 民事課、刑事課)の一官房及五部より成り所屬官署は中樞院、取調局、各道府郡、警務總監部、裁判所、監獄、鐵道局、通信局、臨時土地調査局、税關、專賣局 印刷局、營林廠、醫院、平壤鑛業所、勸業模範場、工業傳習所、土木會議及各官立學校等とす總督は陸海軍大將を以て之に充て委任の範圍内に於て陸海軍を統率し諸般の政務を統轄す、總督の下に政務總監を置き總督を補佐し各部局に長官局長を置き府務を分掌せしむ

四十五年四月官制の一部を改正し總務部を官房總務局に改め各部の庶務課を廢して其の事務を總務局總務課に移屬し官房に土木局を新設して從來本府諸部に分屬せし築港、道路、治水、營繕等に關する土木行政事務を統一せり所屬官署に在りては取調局、專賣局及印刷局を廢して其の事務を本府諸部局に移屬せしめ從來内務部の主管たりし衛生事務並度支部の主管たりし海港檢疫及移出牛檢疫、密漁取締及港則執行の事務を警務總監部に移し新に中央試驗所を設け工業に關する試験分析並鑑定の事務を掌らしめ臨時土地調査局に於ては總裁及副總裁を廢して局長を置き通信局を遞信局と改稱し其の所管たりし觀測事務を内務部學務局に移し度支部所管たりし海事に關する事務を遞信局に移屬せしめたり、司法制度は四審制を改めて地方法院、覆審法院及高等法院の三審制と爲し裁判所令を改正し同時に民事及刑事に關する實體法及手續法を整理統一し朝鮮民事令、朝鮮刑事令其の

他關係法規を制定せり其の後大正四年四月に至り既往三年間の經驗に徴し三たび官制を改正し本府に在りては從來の九局中總務、土木及學務の三局を存して外事、地方、司稅、司計、農林、殖産の六局を廢し從來參事官室の事務たりし舊慣及制度調査を中樞院に移せり所屬官署に在りては濟州廳及鬱陵島に於ける郡廳を島廳に改めて島司を置き其の事務を管掌せしめたり

大正五年四月一日専門學校官制を公布し京城專修學校、京城醫學專門學校、京城工業專門學校の三校を設置せり同年十月元帥陸軍大將伯爵長谷川好道寺内總督に代り總督を爲るや翌六年七月三十一日從來朝鮮に於ける國有鐵道の業務經營を南滿洲鐵道株式會社に委託し新に總督官房に鐵道局を設け鐵道の一般計畫及委託鐵道並私設の輕便鐵道軌道の監督事務を處理せしむることせり

第三節 官制の改革

朕夙ニ朝鮮ノ康寧ヲ以テ念ト爲シ其ノ民衆ヲ愛撫スルコト一視同仁朕カ臣民トシテ秋毫ノ差異アルコトナク各其ノ所ヲ得其ノ生ニ聊シ齊シク休明ノ澤ヲ享ケシメムコトヲ期セリ

今ヤ世局ノ進運ニ從ヒ總督府官制改革ノ必要ヲ認メ此ニ之ヲ施行ス是レ從來ノ廟謨ニ基キ時ニ應ジ宜ヲ制シ以テ施政ノ便ニ資シ治化ノ普及ヲ圖ルニ外ナラス方今歐洲ノ戰亂新ニ熄ミ世態ノ變遷

殊ニ劇シ朕深ク此ニ鑑ミル所アリ益民力ノ發達ニ務メ其ノ福利ヲ増進セシムムコトヲ念フ百官有司克ク朕方意ヲ體シテ事ニ當リ德化ヲ宣布シ民衆ヲシテ各職ヲ勵ミ業ヲ樂ミ永ク昇平ノ惠澤ニ浴シ共ニ邦家ノ隆運ヲ扶翊セシムムコトヲ勗メヨ

大正八年八月十九日右官制改革の詔書下るや翌二十日朝鮮總督府官制を改正せられ總督の任用は文武官執よりも任用し得ることとなり又從來の部を改めて局と爲し内務、財務、殖産、法務、學務、醫務の六局を置き官房總務局を庶務部に土木局を土木部に鐵道局を鐵道部に改め又地方官官制を改め道長官を道知事と爲し道に第三部を新設して警察衛生の事務を執行せしむることなれり八月十二日海軍大將男爵齋藤實新に總督の印綬を帶ひ法學博士水野鍊太郎政務總監の職を襲ひ相携へて任に京城に莅むや齋藤總督は九月三日を以て部下職員に對し左記の訓示を發し施政の方針を示せり

國家重大ノ時局ニ際シ朝鮮總督ノ大命ヲ拜受シ恐懼措ク所ヲ知ラス短才微力能ク此ノ大任ヲ完ウシ得ルヤ否ヤ衷心安キヲ得サルモノ多シト雖各位ノ協翼ニ依リ日夜精勵以テ大命ニ奉答センコトヲ期ス

朝鮮統治ノ大方針ハ明治四十三年日韓併合ノ際下シ賜ヘル

明治天皇ノ詔書ニ昭ニシテ從來ノ總督府官制竝其ノ下ニ行ハレタル各般ノ行政施設ハ皆此ノ聖

旨ノ實現ヲ企圖シタルモノニ外ナラス而シテ各先任者ノ努力ト國民ノ奮勵トニ依リ克ク平和ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進シ教育、産業、交通、衛生、社會救濟其ノ他各方面ニ互リ頗ル其ノ面目ヲ一新シタルモノアルハ中外ノ均シク認ムル所ナリ然リト雖今ヤ併合行ハンテヨリ既ニ約十星霜ヲ經過シ其ノ當時ニ於テ適切有效ナリシ制度並施設ニシテ往往時勢ノ進運ト朝鮮ノ實情トニ適合セサルモノナキニ非ス於是乎政府ハ今回新ニ官制ヲ改正シ客月二十日其ノ公布ヲ見ルニ至リタリ官制改正ノ趣旨ハ 今上陛下ノ優詔ニ示ス如ク日韓併合ノ本旨ニ基キ一視同仁各其ノ所ヲ得其ノ生ニ聊ンシ休明ノ澤ヲ享ケシメムカ爲時ニ應シ宜ヲ制シ施政ノ便ニ資セシメラルルニ在リ即チ總督ハ文武官ノ何レヨリモ任用シ得ルノ途ヲ啓キ更ニ憲兵ニ依ル警察制度ニ代フルニ普通警察官ニ依ル警察制度ヲ以テシ尙服制ニ改正ヲ爲シ一般官吏教員等ノ制服帶劔ヲ廢止シ朝鮮人ノ任用待遇等ニ考慮ヲ加ヘントス要之文化的制度ノ革新ニ依リ朝鮮人ヲ誘導提擧シ以テ其ノ幸福利益ノ増進ヲ計リ將來文化ノ發達ト民力ノ充實トニ應シ政治上、社會上ノ待遇ニ於テモ内地人ト同一ノ取扱ヲ爲スヘキ究極ノ目的ヲ達センコトヲ庶幾スルモノニ外ナラス 聖恩宏大誰カ感孚セサランヤ不肖官制改正ト相前後シテ新ニ大命ヲ拜ス只如上ノ 大詔ヲ奉戴シ制度改正ノ趣旨ニ則リ誠心誠意獻身の努力ヲ爲シ 聖旨ノ普及ヲ計ラントスルノ外他意ナシ赴任日尙淺ク未タ朝鮮ノ實情ヲ審

ニセス施政ノ具體的方針ニ至リテハ更ニ查覈ヲ加ヘ各位ノ啓沃ニ待チテ徐ニ決定スル所アルヘシト雖茲ニ二三ノ根本方針ニ就キ留意ヲ乞フ所アラントス

官吏ハ一心同體ヲ旨トシ上下四方協同戮力シ公明正大ナル政治ヲ爲スヘシ總督府内ノ各局課及總督府ト地方廳トノ間ニ於テ努メテ意思ノ疏通ヲ圖リ各一貫シタル意氣ヲ以テ互ニ連絡ヲ取リ最善ノ努力ヲ爲スヘキハ勿論身ヲ持スル謹嚴、正直、不黨不偏、各種ノ情弊ヲ交際シ專ラ正理公道ニ就キ民衆ヲシテ施政ニ信頼セシメンコトヲ期スヘシ

時代ノ進運ト民心ノ歸嚮トニ鑑ミ行政、司法事務ノ各般ニ互リ左ノ改善ヲ加ヘンコトヲ期ス

- 一 形式的政治ノ弊ヲ打破シ法令ハ成ルヘク簡約ニ從ヒ誠意國民ヲ誘掖シテ其ノ精神ノ徹底ヲ圖リ行政處分ハ事應民情ニ顧ミテ適切ナル措置ヲ執リ努メテ被處分者ノ諒解ヲ得シムヘシ
- 一 事務ノ整理簡捷ニ努メ民衆ノ便益ヲ計リ官廳ノ威信ヲ保持スヘシ

- 一 言論、集會、出版等ニ對シテハ秩序及公安ノ維持ニ妨ケナキ限リ相當考慮ヲ加ヘ民意ノ暢達ヲ計ルヘシ

- 一 教育、産業、交通、警察、衛生、社會救濟其ノ他各般ノ行政ニ刷新ヲ加ヘ國民生活ノ安定ヲ圖リ一般ノ福利ヲ増進スルニ於テ新ニ一生面ヲ開カンコトヲ期ス殊ニ地方ニ於ケル民風ノ

涵養並民力ノ作興ハ地方團體ノ力ニ待ツコトヲ便トスヘキカ故ニ將來時機ヲ見地方自治制度ヲ施行スルノ目的ヲ以テ速ニ之ヲ調査研究ニ著手セントス

如上ノ改善刷新ハ只徒ニ新奇ヲ術ヒ時流ヲ追ハントスルモノニ非ス成ルヘク朝鮮ノ文化ト舊慣トヲ尊重シテ其ノ善ヲ長シ其ノ弊ヲ除キ以テ時勢ノ進運ニ順應センコトヲ期スルニ在リ換言スレハ民生民風ヲ啓發シ以テ文明的政治ノ基礎ヲ確立セントスルノ趣旨ニ外ナラス

制度改正ト共ニ人心ノ一新ヲ要スルハ固ヨリ言ヲ俟タサル所ナリ各位ハ須ク 聖旨ヲ奉シテ率先躬行其ノ範ヲ示サンコトヲ期シ内鮮人ヲシテ常ニ一家ノ親、同胞ノ愛ヲ以テ相接シ共同輯睦ノ實ヲ舉ケシムヘク殊ニ朝鮮人ヲシテ心身ヲ研磨シ其ノ文化ト民力トヲ向上シテ愈 聖代ノ德澤ニ浴センコトヲ期セシメラルヘシ各位希クハ此機會ニ於テ協力一致益朝鮮統治ノ刷新ヲ圖リ 聖明ノ宏謨ニ副ヒ奉ランコトヲ

又九月十日を以て一般民衆に對し左の諭告を發し新政施行の趣旨を諭示せり

不肖茲ニ朝鮮統治ノ任ニ就クニ方リ朝鮮總督府ノ官制亦改正セラル乃チ一言以テ民衆ニ告ク

朝鮮統治ノ方針タル一視同仁ノ大義ニ遵ヒ民衆ノ福利ヲ増進シ東洋ノ平和ヲ確保スルニ在ルハ宏謨ノ夙ニ定マル所ニシテ累代統治ノ任ニ膺レル者克ク此ノ意ヲ體シテ斯土ノ開發ニ從ヒ國民亦拮

据其ノ業ニ勵ミ以テ今日ノ發達ヲ致シタルハ中外ノ齊シク認ムル所ナリ然レトモ百般ノ施設ハ之ヲ民慶ニ徵シ時世ニ致ヘ以テ其ノ宜ヲ制シ人心ノ適躋ヲ愆ラシメサルヘキハ固ヨリ言ヲ俟タス今ヤ時運ノ推移文物ノ進歩亦曩日ノ比ニ非ス加フルニ歐洲ノ戰亂新ニ熄ミ世態人心ノ變遷特ニ著シキモノアリ是ニ於テカ政府ハ官制ヲ改革シテ總督任用ノ範圍ヲ擴張シ警察制度ヲ改正シ以テ時代ノ進運ニ順應シテ施政ノ簡捷ト治化ノ普及トヲ圖レリ不肖大命ヲ奉シ任ニ就クニ當リ亦偏ニ宏謀ヲ紹述シ併合ノ精神ヲ發揚セムコトヲ期シ自今部下ヲ督勵シテ益公明正大ノ政治ヲ施シ形式ニ拘泥スルコトナク輿衆ノ便益ト民意ノ暢達トヲ圖リ朝鮮人ノ任用待遇等ニ關シ亦考慮ヲ加ヘテ其ノ所ヲ得シメ又朝鮮ノ文化及舊慣ニシテ苟モ採ルヘキモノアレハ之レヲ採リテ統治ノ資ニ供シ更ニ各般ノ行政ニ刷新ヲ加ヘ且將來機ヲ見テ地方自治制度ヲ實施シ以テ國民ノ生活ヲ安定シ一般ノ福利ヲ増進セムコトヲ期ス冀クハ官民互ニ胸襟ヲ披キテ協力一致朝鮮ノ文化ヲ向上セシメ文明的政治ノ基礎ヲ確立シ以テ聖明ニ奉答セムコトヲ若濫ニ不逞ノ言動ヲ爲シ人心ヲ惑亂シ公安ヲ阻害スルカ如キ者アラムカ將ニ法ニ照シテ寸毫ノ假借スル所ナカラムトス一般民衆其レ之レヲ諒セヨ爾來新施設の方針に基き著者各種の施設を實行し來れるか今此等の施設中主要なる項目を示さば左の如し而して之か詳細に付ては「朝鮮に於ける新施政」に記述せり

第一 一視同仁

一 内鮮人差別待遇撤廢

朝鮮人文官待遇改善、朝鮮人官吏彼位彼勤資格擴張、朝鮮人訓導の公立普通學校長任用、朝鮮人判檢事權限擴張、管刑廢止

二 恩 赦

三 内鮮融和の狀況

朝鮮人郡守及中樞院贊議等の内地視察、内地視察獎勵、内地事情、朝鮮事情の相互紹介、情報委員會設置、會議、講習等に對する内地との相互列席、朝鮮視察者に對する便宜供與、内鮮融和の會合

第二 形式主義の刷新

一 服制廢止

二 事務簡捷に關する施設

第三 民意暢達

一 地方有志招集及改革の趣旨徹底

二 民情視察員の派遣及民情視察事務官の設置

三 朝鮮諺文新聞の發行認可

四 中樞院の會議

五 道參與官招集

第四 教育の刷新

一 公立普通學校既定増設年限の短縮

二 學制改革

三 高等普通學校、女子高等普通學校及私立學校規則の改正

四 臨時教育調査委員會及教科書調査委員會の設置

第五 地方行政

一 地方制度の改正

二 地方行政の監察

三 道理事官の設置

四 文關維持の確立及郷校財産經理方針の改正

- 五 道路夫役賦課及道路用地寄附の廢止
- 第六 産業の開發
 - 一 朝鮮産米増殖計畫
 - 二 會社令の撤廢及市場規則改正
 - 三 水産試驗場及林産試驗場の新設
 - 四 産業諸機關の擴張
 - 五 産業調査委員會の設置
- 第七 救 恤
 - 一 臨時恩賜金に依る社會救濟事業の經營
 - 二 早害救濟
- 第八 交 通
- 第九 衛 生
 - 一 總督府醫院及道慈惠醫院の擴張
 - 二 道衛生技術員、公醫及海港檢疫員の増員

三 屠場規則の改正

四 中央衛生會並傳染病及地方病調査委員の設置

第一〇 警察制度の改革

第一一 財 務

一 大正十年度豫算概要

二 驛屯土の整理

三 關稅改正

四 漁業稅、船稅、鹽稅及人蔘稅の廢止

五 煙草專賣制度の實施

第一二 宗 教

一 布教規則の改正

二 宗教の宣布を目的とする財團法人の許可

第一三 慣習及文化の尊重

一 墓地、火葬場、埋葬及火葬取締規則の改正

- 二 朝鮮語の獎勵
- 三 慣習調査の擴充
- 四 民事令及民籍法の改正並内鮮人婚姻に關する手續法の制定

第二章 風俗習慣

朝鮮に於ては開國五百三年改革の時に至るまで兩班、常民、賤人の區別を認めたり。兩班は即ち文班及武班にして、嘗て文武の官に任したる者の一族を稱し、宗親、儀賓をも此の中に加へ、又中人と稱する細別を生じ、内醫院、觀象監、典醫監、司譯院、圖書署、惠民署の官員及戶曹の算學官、刑曹の律學官、承文院の寫字官等之に屬し。更に兩班の後裔にして長く地方に住し官職に就かざる者を土班と稱したり。而して官衙の書吏、營吏、郷吏、假吏、書員及農、工、商を常民と稱したり。賤民は公賤、私賤に分ち官奴婢、官妓、皂隸、羅將、日守軍、漕水軍、烽軍、驛卒、獄卒を公賤とし、婢僕、白丁、巫覡、俳優、娼女等を私賤としたり。然れども改革の際其の區別を廢し、今日に於ては王族、貴族のみの身分を認め其の他は一般人民として何等の名稱を附せず。

往古朝鮮には支那文物の輸入と共に儒佛二教の傳播を見しか、儒教は修身齊家治國平天下の學として士大夫より庶人に至るまで一般に之を講究し、又老莊より出てたる道教あり、風水地相の説と共に新羅の時より傳來し、隱然勢力を有したり。高麗の末朱熹の學説入傳し、朝鮮代に迨ひては儒教を以て國教と爲し、文廟の制を擴張して到る處郷校の設置を見ざるなきに至りしも、佛教は之を疎外

し、寺刹の創設を禁し、僧尼は常民として待遇せざりしか、今は其の區別を認めざるに至れり。

家屋には從來瓦家、草屋、石葺、木皮葺等の數種あり、大抵温突と稱し、石を以て床下に火坑を築造し土を以て床を塗り、朝夕燃火して暖を取れり。家屋の構造は土石を混したる牆壁を以て築き通例二重の門を設け、婦人の居室たる内房、男子の客室たる舍廊及越房、厨房、庫間、下人房等に分ち、又別に祖先の神主を安置する祠堂を設くるものあり。

衣服の地質は大抵綾紗、紬、苧、麻及木綿を用ぬ、男子は筒袖の上衣及袴を著く。又襯衣を上衣の下に著け、周衣を重ね、漆笠を被り、腰に巾褌、草匣を著け、鞋を履き、四時襪を解かず吐手を箝め、扇を携ふる風あり。古昔は白衣を禁せしことありしか、今尙ほ好みて之を用ふ。又従前に在りては官員の禮服あり。角帯を纏ひ、紗帽を戴き、靴を穿ちしも、今は一般婚儀の禮服として之を用ふるのみ。雨日には油衫を着け油鞋又は木履を穿ち笠帽を掩ひしか、近來靴を穿ち傘を用ふるに至れり。女子は上衣を著け、袴を重ね、更に裙を纏ひ。鞋を穿つも、周衣は多く用ぬす。好みて指環を箝め、又吐手を穿ち襪を用ふるこそ男子に異らす。而して外出には轎に乗り又は長衣を被りしか、近年之を用ふる者減少せり。又平安、咸鏡四道の地方に於ては竹笠を被り、或は手巾を頭に纏ひ、平安南北道地方には年少の婦女、耳に環を附するの風ありしか、近來は殆ど廢せり。

食は米飯を常食とし、獸肉、魚肉、蔬菜等の類を調理して副食物と爲し、膳は脚床を用ふ。器皿には鍮器、銅器、陶器の種類あり、鍮器は多く冬季に用ぬ、陶器は春、夏、秋の季節に用ふ。喫飯には銀、銅、鍮の匙を用ぬ、副食物には大抵箸を用ふ。又飯には熱（冷飯を炊きたる釜に湯を入れて作る）を注ぎて食する習あり。汁を嗜み食物には蕃椒、蒜等を和し、調理したる大根又は白菜の沈菜を最も愛用す。山間に在りては多く粟、稗、黍等の類を食し、寺刹にては山菜、木芽、草根等をも食す。酒は在來のものに火酒、藥酒、濁酒等あり。漸く清酒、洋酒の類を用ふるに至れり。又男女共に好みて喫煙を爲す。

従前に於ては男子は必ず冠禮を行ふ習あり。冠禮は童幼成人と爲るの禮にして本來は齡十五を過ぎて之を行ふ制なりしも、風俗早冠を競ひ十一二歳にして之を行ふ者あり。又冠禮は婚約成ると同時に之を行ふ例なるを以て娶妻の資なき者は壯年を過ぎて尙ほ冠禮を行はざる者あり。而して冠禮を行ふ前に在りては皆髪を編みて後に垂れ、之を總角と稱す。而して冠禮を行ひたる後は髻を結び、額に網巾を纏ひ笠子を戴けり、然れども今は斬髪を爲す者多く冠禮は唯た一片の儀式として之を行ふに過ぎず。

女子には笄禮あり、男子の冠禮に相當す。未嫁の女は髪を編みて後に垂るること男子に異らず。然

るに婚禮の日に至れば其の且を以て髪を結び、簪を挿む、之を笄禮と云ふ。而して既婚の女は常に髪を結ぶを以て自ら未婚の女と區別し得へし。

婚姻は女が男の家に入るを本則とし、例外として男が女の家同居することあり、之を招婚又は贅婚と稱す。而して朝鮮には婚養子、入夫等の習なし。近親間及男系の血族間に於ける道婚を避くることは嚴格に行はれ、男系の血族は幾世を経るも斷して婚姻を爲さず。男系の血族なるを否とば姓及本に據りて之を別つ。即ち人の姓は父の姓に因りて定まり、身分及戸籍に移動あるも變更せず、故に父子は常に同姓にして男系の血族は皆同姓なり、然れども男系の血族にあらずして同姓の者あるを以て別に本を稱す、本は族祖の出でたる地名にして血族に非ざる同姓は大抵本を異にするより、本及姓の同じき者は皆男系の血族なり。而して本及姓は之を戸籍に登録し、初対面の挨拶にも互に之を問ふを常とす。

一夫一妻は儒教に於ける婚姻の本義にして、婚姻は必ず一男一女の間に成立するものなるも、婚姻の目的は後繼子を得て祖先の祭祀を絶たざるに在りし此の趣意に於て子なき者は妾を娶ることを許ししか近年漸く之を改むるの氣運に向へり。

婚姻を爲すには父祖又は長上を主婚者と爲し、其の合意を婚姻成立の要件と爲ししか、近時漸く當事

者の意思を尊重する傾向を生したり。又婚約前に於ける會見の習なきを以て男女は行禮の日に至り始めて相見るとのみ。婚姻の儀式は女家に於て行ひ、其の日新夫は新婦を伴ひ歸りて父母に見せしめ更に女家に至り留宿すること三日にして歸家するを通例とす。

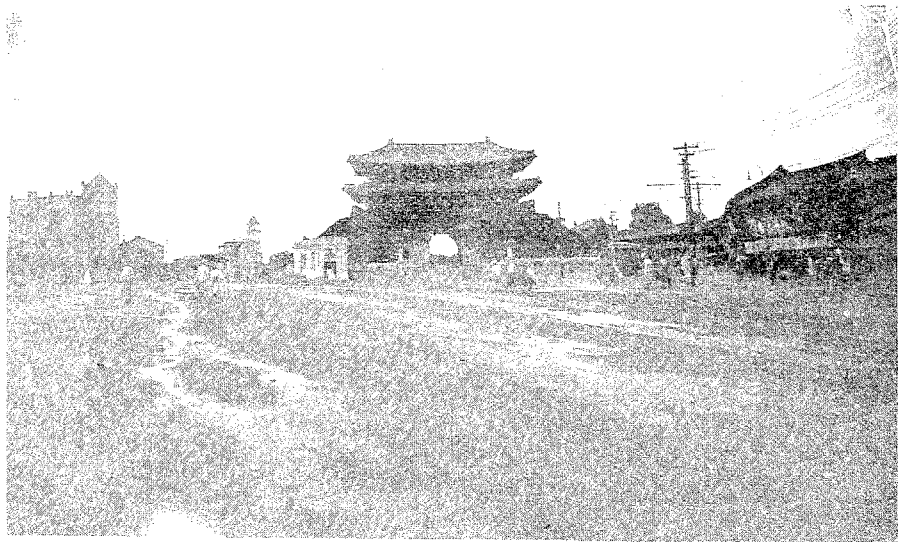
婚姻の年齢は舊制男子十五歳女十四歳以上なりしか、早冠を競ひ冠禮は婚約成りて後之を行ふより、遂に男子早婚の風を馴致し、女子は十五六歳以上を通例とするも男子は十四五歳以下にして婚姻を爲す者稀なりとせず。唯だ現今實際の取扱としては男滿十七歳以下女滿十五歳以下の婚姻届を受理せず。舊習に従ひ婚姻を爲したる者の間に生れたる子と雖父母は此の年齢に達するまでは庶子として戸籍に登録することとせり。離婚には妻七去の制あり又三不去の法ありしも現今は行はれず。寡女の再嫁は嘗て之を禁し世人亦之を卑みしか、開國五百三年其の禁を解けり。

儒教に依れる朝鮮の葬式は、親戚知音のみにて行ひ、神官僧侶等の之に干與することなし。又火葬は最も忌む所にして僧侶の外皆土葬を爲し、夫妻は大抵合葬す。棺は横棺を用ひ大抵祖先の墓所に葬るも、又別に地區を選ふことあり、風水地相の説古より傳はり、朝鮮代に至りては最も之を重しとするに至りしか今尙ほ其の習全く改まらず。又従前には身分階等に依り墓地の界限に方十歩より百歩まで差を設けしか、現今に於ては共同墓地を定め、同時に各戸三千坪以内の特設墓地を許せり。喪は五服の制を守り、三年より三月に至る。五服は斬衰、齊衰、大功、小功及緦麻にして斬衰は粗

麻を用ひ下邊を緝縫せず期間は三年にして父の喪に子此の服を著く。齊衰は粗麻を用ひ下邊を緝縫す、期間は三年、一年、五月、三月にして、齊衰三年は子、母の爲めに之を著け、齊衰一年は父に先ちたる母の爲めに子之を著け、齊衰五月は曾祖父母、三月は高祖父母の爲めに之を著く。大功は粗練の麻布を用ひ期間は九月にして從兄弟、從姊妹、衆孫、孫女、衆子婦、妻、夫の祖父母の爲めに之を著く。小功は稍や細練の麻布を用ひ、期間は五月にして從祖父母、大姑、從孫、從姪、從伯叔父母、從姑、外祖父母、長孫婦等の爲めに之を著く。緦麻は熟布を用ひ期間は三月にして再從祖、再從大姑、從曾孫、再從孫、曾孫、玄孫、外孫、三從兄弟姊妹、衆孫婦等の爲めに之を著く。

祖先の祭祀は儒教の最も重しとする所にして、久しく儒教の感化を受けたる朝鮮に於ては亦最も之を尊重せり。而して通例四代までの神主を祠堂に於て祀り、五代以上は之を墓所に埋安し、秋季の丁日又は亥日に墓祭を行ふ。

朝鮮に於ける相續は祭祀の承繼を主たる目的とし、家系の承繼は同時に祭祀者たる地位の承繼となるなり。而して之を承繼するものは男系の長男子にして、之れなきときは長孫承重を爲し、長系の男子孫未婚の儘死亡する時は次系の男子孫之を承繼す。又男子孫なきときは同族より養子を爲し之を承繼者とす。而して養子は養父となる者の子の列に當る者に限り、女子の養子を認めず。男子孫なく又養子を爲すことを得ざるときは茲に家系の斷絶を生し、一家の絶滅を來すものとす。



京 城 南 城 大 門 通

第三章 地誌

第一節 地形及地勢

朝鮮は亞細亞の東南に斗出せる一大半島にして地勢南北に長く東西に短し南北最長の處は二百十里に達し東西は最廣の處は離九十里を越むす東經百三十度五十六分二十三秒より百二十四度十一分に至り北緯三十三度六分四十秒より四十三度三十六秒に互り面積一萬四千三百十二方里を有す東は日本海に面し西は黃海に臨み北は鴨綠江及豆滿江を界として滿洲及露領に連り南は朝鮮海峽に瀕す朝鮮の海岸は東方と南方及西方とを比較するに著しき差違あり即ち東海岸は岬灣島嶼甚だ稀にして從て良港に乏しく僅に元山、城津、清津、雄基等あるに過ぎず然るに南及西の海岸は長汀曲浦相連り恰も鋸の齒の如く大小の島嶼星羅棋布して幾多の内海浦灣を形成するを以て釜山、木浦、蔚山、仁川、鎮南浦等の港灣を始めとし諸地頗る多し

繼て朝鮮の地勢を見るに北境には長白山脈蜿蜒として東方より西南に沿ひ一枝南に延び平安、咸鏡兩道の境を劃して江原道に入り東海岸線に沿ひ南方に駛走し以て半島の脊梁骨をなす此の如く大山脈東方に偏在するを以て山脈以東の地は斜面急峻にして殆んど平野と稱すへきものなく從つて江河

の大なるものなし之に反し山脈以西は比較的緩なる斜面をなし平野處處に少なからず鴨綠江、洛東江、大同江、漢江、錦江、臨津江、蟾津江等其の間に縈流して舟楫の便灌溉の利あり地味概して豊饒なり

第二節 氣候

氣溫 年平均氣溫は南岸は攝氏（以下之に同し）十三度餘にして北進するに従ひ次第に遞減す。中央部京仁地方は十度内外にして國境内陸に入れば四度乃至三度を爲る之を本土に比較するに南部は福井地方に中部は信州地方に北鮮沿海地方は函館地方に又内陸高原地方は北海道内陸地方を匹敵せり而して東岸地方は西岸地方に比すれば氣候溫和にして夏季を除きては約二度内外高温なるを常とす是れ西岸は冬季北西季節風に曝露するも東岸は春梁山脈の爲風勢微弱と爲り且海水溫度は西岸に比し高温なるに因る又酷寒たる一月に於ける日日の最低氣溫の平均を見るに國境内陸地方は零下二十九度に下降すれども南岸は同一度余にして此の間約三十度の差あり尙盛暑たる八月に於ける日日の最高氣溫の平均は大邱の三十一度最高く雄基の二十五度最低く此の間六度の差あるに過ぎず即ち寒氣に於ては南北に於て非常の差あるも暑氣に於ては其の差少なし

△各地に於て從來觀測せる氣溫の高低極を擧ぐれば左の如し

地名		氣溫 高低極	
木浦	釜山	極 三六・一	同上起年月 大正八年八月
大邱	全州	極 三五・〇	同上起年月 九年八月
仁川	京城	極 三五・三	同上起年月 八年八月
江陵	平壤	極 三九・〇	同上起年月 四年八月
元山	龍岩	極 三六・一	同上起年月 八年八月
龍岩	龍岩	極 三七・五	同上起年月 八年八月
龍岩	龍岩	極 三六・四	同上起年月 三年七月
龍岩	龍岩	極 三九・六	同上起年月 八年八月
龍岩	龍岩	極 三五・〇	同上起年月 大正八年八月
龍岩	龍岩	極 三七・五	同上起年月 八年七月
龍岩	龍岩	極 三七・六	同上起年月 八年七月
楚山	楚山	極 (一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)(一)	同上起年月 大正四年一月
楚山	楚山	極 一四・二	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 一四・〇	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 一四・六	同上起年月 四年二月
楚山	楚山	極 一八・六	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 二〇・九	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 二二・三	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 二〇・三	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 二八・五	同上起年月 六年一月
楚山	楚山	極 二一・九	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 二六・七	同上起年月 四年一月
楚山	楚山	極 二四・六	同上起年月 八年一月
楚山	楚山	極 三三・八	同上起年月 八年一月

第三章 地誌

地名	高	極	同上起年月	低	極	同上起年月
中江鎮		三六・七	大正八年七月	(一)(一)	四一・二	大正八年一月
雄基		三六・四	同 八年七月		二四・三	同 四年一月

本表中(一)印を附せるは氷點以下の温度を示す

即ち高極は南岸及西岸は三十五、六度其の他は概ね三十六度乃至三十八度にして南部内陸及咸南南部海岸の三十九度内外を最高とし半島南東沿岸並に鳴瀬江口地方の三十五度を最低とす又低極氣温は南岸は約零下十四度内外なるも北部高原地方は同三十度乃至四十二度其の他は概ね二十度乃至三十度の間に在り南北に於て約三十度の差あり要するに朝鮮の氣温は内地に比較すれば大陸性を帯ひ概して寒暑共に酷烈にして春秋の期間短く就中冬季最も長く又氣温晝夜の較差大にして時に二十五度に達することあり是れ半島は大陸の影響を蒙り氣候自ら峻烈なるに反し日本諸島は日本海支那海等を控ゆる爲大陸の影響は大に緩和せられ却て大洋の影響を受くること多ければなり故に半島に於ても寒氣の酷烈なるは中部以北の内陸にして南部は著しからす而して其の緩嚴は一に亞細亞大陸内

岸の状況に支配せらるるものにして、年年多少の異動あるも、偶々冬季間に於て大陸方面に高氣壓發達し、日本海方面に低氣壓通過するときは、強烈なる北西風を惹起し、寒威酷烈を極め、數日の後高氣壓衰退し、風力も亦減殺し、寒氣も亦緩和するを常とす。斯く數日を隔てて、寒暖の日相交錯するを、俚俗之を呼んで三寒四温と稱す。

風 亞細亞大陸東部は一般に季節風の勢力卓越するを以て、朝鮮に於ても主風の方向は季節に因り略一定せり。即ち冬季大陸方面より來る風は朝鮮附近に於て北西風と爲る。是れ冬季季節風にして、多く晚秋より初春の交に起れり。又夏季は一般に南偏の季節風と爲り、雨季節風の交代季たる春秋の候は風向區區にして一定せず。又兩季節風は單に風向相反するのみならず、冬期は空氣一般に乾燥にして晴天の日多く、又氣壓傾斜概して急峻にして、風力強きも夏季は濕潤にして曇天、雨天の日多く、且氣壓の勾配緩慢なるを以て、風勢甚だ弱し、而して前者は後者に比し期間永くして、且其の特長甚だ顯著なり。半島の西岸地方は冬季北西風を受くるを以て、此の季節に於て風力強きも東岸地方は之に反し、脊梁山脈に遮らるるに因り、概して風勢弱し、尙全體を通して沿岸地方に風勢強く、内陸に弱きは自然の勢なり。

雨雪 雨雪の年量は概して寡小にして、半島の大半は八百乃至千耗にして、南東岸に最も多く、北部並に北西方に向ひ遞減す。即ち釜山より元山に亘る沿岸地方は年量千五百耗に達し、半島中最多雨地方なり。

又中部は約五粒西岸は九百乃至千粒を測るも北部内陸地方は遙に減少して七百粒内外なり就中咸鏡
南北道の高原地方は最寡雨地方にして年量五百粒に充たざる所あり之を本土に比すれば一般に甚た
寡小なり内地に於ける一箇年間の雨量は朝鮮に比し遙かに多量なるも朝鮮の南岸及元山以南の東岸
地方は瀬戸内海地方又朝鮮の中央以南は本邦に於ても寡雨地方たる信濃兩毛及北海道地方と略匹敵
し北部の寡雨地方は本土に於て之に比すへき地方なし然るに雨に於て朝鮮と内地と著しく相異なる
點は季節に因る降雨の差甚しき事是なり即ち十月より三月に至る間は乾燥期にして其の雨量極めて
少く之に反し六月より八月に至る三箇月間は朝鮮の主たる降雨季にして北部寡雨地方と雖降雨期の
量を以てすれば北海道地方と較て遜色なきなり又南部地方に於ては降雨の最盛期は七月なるも東岸
地方の北部は八月より時として九月に渉る斯の如く地方に依りて多少の相違あるも雨季と乾燥期と
截然たる區別あるは一般を通ずる特色なり斯く夏季に降雨の多量なるは此の季節に於て楊子江流域
に發生する低氣壓の半島附近を通過するもの多きと一方南偏の季節風流行し空氣濕潤なるか爲なり
之に反し冬季は北西季節風卓越し空氣一般に乾燥なるを以て偶半島を通過する低氣壓あるも甚たし
き降雨雪を催すに至らざるに因る

蒸發 朝鮮は本土に比し上に述べし如く雨量尠くして且空氣乾燥し加ふるに日照時數多きを以て蒸

發旺盛にして元山以南の東岸を除ける外一般に降水量を凌駕す年量は南岸の釜山地方最多く千五百耗弱に達し漸次北進するに従ひ減少するも京畿黃海の沿岸並に雄基地方に至り稍増加して千三四百耗を算し最寡少なる江原道以北の東岸及北部内陸地方にても千乃至千二百耗の間に在りて本土中蒸發の最も多き瀬戸内海地方に匹敵せり西岸地方に於て天日製鹽業の著著效を收めつつあるも故ありと云ふへし而して東岸の西岸に比して蒸發の少きは同地方の風力弱きもの其の一原因ならん

霧 朝鮮近海の濃霧は日露戰役以來世人の注意する所と爲り其の發生の盛なること北海道の東岸地方と共に著名なり濃霧の發生する區域は全沿岸に亘り就中最多なるは多島海附近にして濃霧日數は年内七十日内外に達し西岸近海北東沿岸地方之に次ぎ五十日内外を算するも其の他は二十日乃至五十日の間に在り而して元山以南の東岸地方は最も少し又濃霧は沿岸に近くに從ひて減少し内陸に入りては殆んど皆無なり次に濃霧の發生は季節に因り大に消長あり即ち冬季は殆んど之を見ざるも初春より漸次發生し晩春初夏の候最盛期に達し盛夏季に於て減退す此く初夏の候其の發生旺盛なるは半島の沿岸を流るる暖流と偏南季節風の影響に因るものなり即ち此の季節に於て楊子江流域に於て低氣壓の發生頻繁にして其の黃海を東走するに方り北太平洋方面の高氣壓に因りて誘起する溼潤高濕なる南風は冷海上の空氣と混淆し或は高温なる海上の空氣が徐徐に低濕なる海上に來りて冷却す

る等濃霧發生の時季に會すればなり

季節 降雪の初終日は直接天氣の推移と關連するを以て年年大に遲速あるも平年初雪は北部高原地方に最早く十月下旬他は概ね十一月に見る南東岸は最も遅れ十二月下旬にして時に年内に雪を見ざるこゝあり終雪は北部國境地方最も遅く四月末にして釜山地方最早く三月上旬其の他は三月中旬乃至四月中旬の間に在り而して最早は十月半最晩は五月初旬なるも稀に北部山岳地方に於ては七月降雪せしこゝあり尙上述の如く冬季は一般に雨雪量尠なきを以て積雪又少く一二尺に及ふは北部の山地にあらざれば見ざる所にして中部以南の平原に於ては五寸を越ゆるこゝ甚だ稀なり斯の如く積雪少きを以て北越地方の如く交通を沮害せらるることなく却て河川地表の凍結と相俟つて交通上便利を與ふるこゝ少からず

初霜は北部地方に在りては九月上旬に見るも概ね十月下旬より十一月中旬の間に在り又終霜は釜山地方の三月下旬を最早とし他は概ね四月中に起れども北部地方に在りては五月に入りて終るを常とす南部にても五月半晩霜を觀ること稀ならず内地養蠶地方に於て晩霜の年年損害を蒙るは甚く人の知る所なるか朝鮮に於ても將來農蠶業の普及上大に注意すべきことなりとす



京 城 獎 忠 壇 公 園

第三節 戶口

大正九年十二月三十一日現在戶口調査に依れば總戶數三百二十九萬二千九百七十九戶內地人九萬四千五百十四戶朝鮮人三百十九萬一千五百五十三戶外國人七千三百三十二戶人口總數一千七百二十八萬八千九百八十九人內地人三十四萬七千八百五十人朝鮮人一千六百九十一萬六千七十八人外國人二萬五千六十一人なり

現住戶口累年比較

年	戶		數		人		口	
	內地人	朝鮮人	外國人	合計	內地人	朝鮮人	外國人	合計
明治四十三年末	五〇、九九三	七、四四九	九、五五三	六八、〇〇五	一七、一	五、四三三	一、五	二二、一〇九
大正七年末	九三、六二六	一、三九	五、一九五	九五、〇六〇	五三、六	八、七三二	六、九七	六三、三六五
同八年末	九七、六四三	一、五二	五、六七九	一〇四、八七四	五四、六	六、九二六	七、八五	六九、四〇七
同九年十月一日	九三、四八三	一、九六	七、〇八五	一〇二、五三三	五四、六	四、九六一	二、八八九	六二、四六五
同九年十二月末	九四、五一三	一、九一	七、三二五	一〇三、七四九	五四、七	四、五〇	二、六九一	六三、八八八

各道面積と現住戸口

大正九年十二月三十一日

道	面積	戸			合計	人			平均一方里人口
		内地人	朝鮮人	外國人		内地人	朝鮮人	外國人	
京畿道	八三〇・八	三三、八〇八	三三三、五〇九	一、二六三	三三〇、七九七	一、六八九、三三三	五、四九三	二、一四八・八	
忠清北道	四八一・〇	一、七八九	一四三、九二五	一九三	一四五、九〇六	五、八八三	六三三	一、六二六・一	
忠清南道	五二五・六	四、五九五	二一〇、八二二	五六一	二五、九六八	一六、八一四	一、九七二	二、一六六・七	
全羅北道	五五三・一	五、七八七	三三三、三七〇	三五三	三三九、五一〇	二二、二五四	一、六四二	三、三〇六・五	
全羅南道	九〇〇・四	六、九〇一	三七五、九四八	二二〇	三八三、〇六九	二六、六五九	七七〇	二、一七一・七	
慶尙北道	一、三三一・二	七、八七七	三九一、〇一四	二九三	三八九、一八三	二八、七四四	八六三	一、七二六・〇	
慶尙南道	七九七・八	一六、五五五	三三九、二六九	一九三	三四三、九八七	六六、四六七	七九六	三、三五一・〇	
黃海道	一、〇八四・八	四、五四三	二五七、二六六	五八六	二六三、三九四	一四、二五五	一、五八三	一、一八〇・五	
平安南道	九六七・七	七、九四八	三〇一、七三八	五六四	三〇〇、二五〇	二七、六四六	二、二一五	一、一八・五	
平安北道	一、八四四・三	四、〇八九	二二四、一〇三	一九三	三三〇、一一一	一三、〇四〇	一、八七三	六五三・三	
江原道	一、七〇二・八	二、二〇七	二二四、七三四	一七五	二二七、二二六	六、四五九	四七五	六九四・一	
咸鏡南道	二、〇七三・四	四、六三一	二〇四、三八四	四五三	二〇九、四六七	一五、八二八	一、五三五	五九三・〇	
咸鏡北道	一、三一九・二	四、七二五	八一、〇八二	五四三	八六、三三九	一四、九三一	五〇六	五九七・二	
總計	一四、三二二・〇	九四、五一三	一、九一一、一五三	七、三二三	二、九二二、九七九	三、四七、八五〇	二、六九一、〇七八	一、二〇八・〇	

現住戸口職業別

(一) 戸數

年	農、林、牧、畜、漁業等			工業			商業及交通業			公務及自由業			其の他の業者			無職業及廣告者			合計	
	大正元年末	同七年末	同八年末	同九年末	同九年十月一日	同八年末	同七年末	同九年末	同九年十月一日	同八年末	同七年末	同九年末	同九年十月一日	同八年末	同七年末	同九年末	同九年十月一日	同八年末		同七年末
大正元年末	七、三九六	一〇、八八八	二二、一六六	一六、四四一	二八、〇五七	一一、三三九	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	二、六三八	七〇、六八八
同七年末	一三、九九八	一一、五九五	二五、〇九五	二八、〇五七	二九、五一九	二二、八一五	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	三、〇六八	九三、六二六
同八年末	一三、六四八	一〇、五一五	二七、五四四	二九、五一九	三三、五〇三	二二、七七三	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	二、九一六	九七、六四四
同九年末	一一、八六八	一七、八七四	二七、八四三	三一、六七七	三一、六七七	二、七七三	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	一、四五五	九五、四八八
同九年十月一日	一一、四七六	一六、三九一	三九、三二〇	三一、五一二	三一、五一二	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	三、三九一	九四、五一四
大正元年末	二、四四〇、三二一	四〇、〇〇一	一九四、九三三	三三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	一三、一六四	二、八八五、四〇〇
同七年末	二、六七五、九九六	六五、八五六	二〇〇、四三七	五二、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	一〇、四六四	三、一三九、一五〇
同八年末	二、六七六、五七五	六七、九三三	二〇四、一六五	五七、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	一〇、四〇四	三、一五三、二二八
同九年末	二、七七四、八九七	六三、八六三	二〇八、〇四八	六一、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	一〇、五三〇	三、一九六、五五一
同九年十月一日	二、七五六、八七五	六七、三二二	二〇七、五四七	六一、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	一〇、一六四	三、一九一、一五三
大正元年末	五九九	三三二	二、〇三四	三〇八	五二六	五二六	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	八八	三、八七六
同七年末	七九七	六三三	二、八八一	四七一	三五四	三五四	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	五、一九五
同八年末	八〇三	四〇八	三、四三八	四九五	四八一	四八一	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五四	五、六七九
同九年末	九五一	八〇三	三、九〇三	五一九	一、〇八四	一、〇八四	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	七、〇八七
同九年十月一日	八六五	八〇九	四、〇五八	五五五	一、一八三	一、一八三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	七、三二二

現住内地人戸日本籍別

大正九年十二月末日

府 縣	戸 數	人		計	府 縣	戸 數	人		計
		男	女				男	女	
(一)山口縣	八、五四七	一七、〇九四	一五、九六五	三三、〇八七	(二四)大阪府	二、三六一	四、六九五	四、〇八八	八、七八三
(二)福岡縣	六、七八六	一三、六七八	一二、九一八	二六、五五八	(二五)鳥根縣	二、四五四	四、六三八	三、九五八	八、五八六
(三)廣島縣	五、六八一	一一、二〇七	一〇、三三四	二一、五三一	(二六)兵庫縣	二、三九三	四、三五六	三、八九九	八、二五五
(四)長崎縣	五、四九〇	一〇、九〇〇	一〇、四四七	二一、三四七	(二七)高知縣	一、六四一	三、二八四	二、七〇五	五、九八九
(五)熊本縣	四、七〇七	八、九一七	八、一三三	一七、〇五〇	(二八)徳島縣	一、五六七	三、〇五〇	二、八〇七	五、八五七
(六)大分縣	四、三三六	八、一〇五	七、二六四	一五、三六九	(二九)三重縣	一、四七四	三、〇四九	二、四七一	五、五二〇
(七)佐賀縣	三、七四七	七、五三九	六、八六四	一四、四〇三	(三〇)京都府	一、四八五	二、九一七	二、五三五	五、四四三
(八)岡山縣	三、七四七	七、四四七	六、三六五	一三、七九二	(三一)岐阜縣	一、三九〇	二、八八六	二、三六五	五、一五一
(九)愛媛縣	二、六九七	五、五三二	四、九四九	一〇、四八一	(三二)福井縣	一、二九九	二、六四〇	二、三三一	四、九三〇
(一〇)鹿兒島縣	三、〇四九	五、六七八	四、六三三	一〇、三一一	(三三)静岡縣	一、三六五	二、七二五	二、三三一	四、九四六
(一一)東京府	二、七五三	五、四三三	四、七三三	一〇、一四七	(三四)新潟縣	一、三六六	二、六七八	二、三四三	四、九一〇
(一二)愛知縣	二、三九八	四、八七六	四、〇七七	八、九五三	(三五)和歌山縣	一、二六九	二、六三三	二、三〇一	四、八三〇
(一三)香川縣	二、三二五	四、七三三	四、〇六五	八、七九〇	(三六)石川縣	一、三八〇	二、五九九	二、一七一	四、七七〇

府	縣	戶數	人		口計	府	縣	戶數	人		口計
			男	女					男	女	
府	(三〇) 福島縣	一、三三〇	二、五六三	二、一四三	四、七〇六	府	(三八) 奈良縣	七二六	一、三六〇	二、〇七九	
	(三六) 滋賀縣	一、一九八	二、四〇八	一、八七七	四、三三五		(三九) 山梨縣	六七〇	一、三五八	一、〇五三	
	(元) 長野縣	一、二五一	二、四三八	一、八七六	四、五〇四		(四〇) 北海道	五九六	一、二四七	一、〇三一	
	(三二) 宮城縣	一、二三七	二、二六九	一、七七五	四、〇四四		(四一) 群馬縣	六三三	一、二二六	九〇七	
	(三一) 鳥取縣	一、〇七六	二、〇四一	一、七五八	三、七九九		(四二) 栃木縣	六三三	一、一三一	九〇五	
	(三三) 富山縣	九五七	一、八四九	一、五六四	三、四一三		(四三) 埼玉縣	九六六	一、一五三	九三五	
	(三三) 茨城縣	一、二二九	一、八四三	一、四三三	三、二九五		(四四) 秋田縣	六四五	一、一三一	九四五	
	(三四) 山形縣	九〇一	一、七四九	一、三六九	三、一一八		(四五) 岩手縣	五三八	九三二	七三一	
	(三五) 千葉縣	二、〇〇一	一、五五四	一、二七五	二、八二九		(四六) 青森縣	四四一	七五七	六二六	
	(三六) 神奈川縣	七九〇	一、四六一	一、三五六	二、八二七		(四七) 沖繩縣	七五	一四一	一、一三	
(三七) 宮崎縣	八〇六	一、五七七	一、二七八	二、七五五	總計	九四、五二四	一八五、九六	一六三、六五四	三四九、八五〇		

第四節 重要市街地及名勝地

京城 は曾て漢城又は漢陽と稱し李朝五百年の都府なりしか併合後市街の整理に依りて全く舊態

を一變し殆ど内地の大都會と匹敵す人口二十五萬〇二百八人、内地人六萬五千六百十七八、朝鮮人十八萬一千八百二十九人、外國人二千七百六十二人、四方山嶽を繞らし東方は駱駝山、西方に仁王山、北方に白岳山、東南に南山峙ち西南の一隅開通し漢江其の東南西を流る内鮮人相混して商業取引を爲すも内地人の多くは南山山麓より南大門附近に密集す朝鮮總督府廳舎は南山の中腹に在り李王の昌德宮、京畿道廳、京城府廳、高陽郡廳、高等法院、覆審法院、地方法院、憲兵隊司令部、憲兵隊、憲兵分隊、中樞院、遞信局、專賣局、同支局、工業專門學校、醫學專門學校、專修學校、高等普通學校、女子高等普通學校、師範學校、中學校、高等女學校、私立女子技藝學校、其の他私立各種學校、總督府醫院、濟生院、監獄、中央試驗所、警察官講習所、測候所、朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行、第一銀行、十八銀行、百三十銀行の各支店、朝鮮實業銀行、漢城銀行、朝鮮商業銀行、韓一銀行、東洋拓殖株式會社京城支店、三井物産株式會社京城支店、朝鮮郵船株式會社、京城電氣株式會社等あり遊覽地としては南山公園、漢陽公園、パゴダ公園、獎忠壇、關帝廟、總督府博物館、李王職の經營に係る昌慶苑及美術品製作所、總督府商品陳列館、鍾路の巨鍾、パゴダ公園内の舍利塔、清涼里等あり北門外には石坡亭あり牛耳洞の櫻林、嶺島の勸業模範場支場の果樹園等あり、市内及郊外電車の便ありて道路四通八達す此等交通機關の整備と同時に

に電信、電話、電燈、瓦斯、水道等の施設完備せり神社は京城神社、菅原神社共に南山に在り工事中の朝鮮神社あり寺院は東西本願寺別院、日蓮宗、淨土宗、曹洞宗、眞言宗等各派の寺院あり基督教は日本基督教會、日本組合基督教會、日本メソヂスト教會、聖公會、天主教教會、朝鮮耶蘇教長老會、救世軍、露國正教會等あり

龍山 は京城の一部にして漢江に臨める形勝の地なり京龍間は電車汽車の便あり總督官邸、朝鮮軍司令部、第二十師團司令部、歩兵第七十八聯隊及同第七十九聯隊、騎兵第二十八聯隊、野砲兵第二十六聯隊、工兵第二十大隊、滿鐵京城管理局、總督府印刷所、中學校、郵便局、私立善隣商業學校あり

漢江橋は漢江の本流に架設し長さ一千四百四十九呎、漢江小橋は其の支流に架設し長さ六百二十一呎あり

永登浦 漢江の沿岸に在る一小驛なるも京釜、京仁線の分岐點にして漸次發展の途に在り始興郡廳、警察署、郵便局、學校、監獄、朝鮮皮革株式會社等あり

仁川 京畿道の西端にある貿易港にして月尾島、小月尾島、沙島等前面に横はりて内港を圍み入尾島遙に外廓を劃きて外港を爲す潮水の干満甚しく大潮時には其の差三十二尺に及ぶ築港は開船

渠式にして渠内面積三萬坪を有し北方の繋船壁には四千五百噸級の汽船三隻を繋留せしむるを得へく平安、黄海、京畿、忠清各道の貨物を吞吐し内地及滿洲諸港との定期航海あり、人口三萬六千四百九十人内、内地人一萬千二百八十一人、朝鮮人二萬三千八百五十五人、外國人千三百五十四人を占む、府廳、地方法院支廳、觀測所、稅關、郵便局、高等女學校、商業學校、同專修學校、病院等あり電燈、電話、水道等の施設亦完備せり

水原

京城を距る南二十六哩の地に在り南大門驛より一時間にして到るへし往時正宗大王の居城にして今は廢址に歸せしも華虹門、訪花隨柳亭、龍頭閣、華寧殿、杭眉亭等の遺蹟尙存せり西湖は其の眺望甚た宜し勸業模範場、地方法院支廳、慈惠醫院、警察署、郡廳、農林專門學校、郵便局、樹苗圃等あり人口九千九百八十八人内、内地人一千三百九十六人、朝鮮人八千四百七十七人あり

開城

京城を北に距る四十八哩餘に在り高麗朝四百七十年間の首都にして一に松都と稱す高麗時代の舊跡は滿月臺、善竹橋、崧陽書院、壽昌宮址、敬德宮址、太平館、成均館、大興山城、七重石塔、朴淵瀑布、杜門洞、華藏寺、觀音寺、穆清殿、顯陵、關王廟、彩霞洞等あり朝鮮人夢は高麗燒と共に此の地の名産なり桃も亦此の地の名産にして時來れば其の花を賞する者多く果實亦たく美味旣賞すへし人口三萬六千七百六十三人内、内地人一千二百十二人、朝鮮人三萬五千四百二

十六人、地方法院 廳、警察署、郡廳、監獄分監、專賣局出張所、學校、銀行、郵便局等あり

清州

忠清北道廳の所在地にして地方法院支廳、監獄分監、警察署、郡廳、憲兵隊、慈惠醫院、學校、郵便局、銀行等あり人口五千二百七十九人内、内地人一千六百六十二人朝鮮人三千五百二十二人あり邑内の石橋及鐵幢は古來有名なり京釜線鳥致院より陸路四里三十丁自働車を通ず近く中央鐵道會社の鐵道十四哩一分開通せば更に便を加ふへし

公州

忠清南道廳の所在地にして鳥致院驛より陸路六里二十町自働車の便あり英江驛より舟に乗り錦江を下れば四時間にして達すへし邑内の雙樹亭雄心閣は古來著名なり地方法院、警察署、郡廳、郵便局、監獄、慈惠醫院、學校、銀行等あり人口七千四百三十八人内、内地人一千五百四十八人あり

鳥致院

忠清南北兩道及全羅北道に通ずる要地にして古來有名なる市場あり附近の農産物輻輳す人口四千五百十八人内、内地人一千一百四十五人、朝鮮人三千二百七十六人、燕岐郡廳、警察署、郵便局、學校、金融組合等あり

大田

湖南線の分岐點にして京釜線中大邱に亞く貨物の集散地なり郡廳、地方法院支廳、警察署、監獄、歩兵第八十聯隊第三大隊、郵便局、專賣局出張所、銀行、金融組合、中學校、高等女學校

等あり人口六千二百十八人内、内地人四千百六十四人、朝鮮人一千九百六十三人あり此の地を西に距る三里許の所に儒城の温泉あり自働車にて往復すへし

論山

湖南線の要驛にして人口三千二百四十三人内、内地人四百九十六人、朝鮮人二千六百八十八人あり論山郡廳の所在地にして殖産銀行支店、郵便局、學校等あり驛を距る東南一里許の所に石造の大彌勒佛あり所謂恩津の彌勒にして盤若山灌燭寺境内に安置す高麗光宗十九年僧慧明の建立にして鮮人の歸依頗る厚し

江景

湖南線の要驛にして群山と呼應し錦江を利用し舟楫の便あり水陸の便あるよりして貨物集散し朝鮮大市場の一に數へらる人口七千四百七十七人内、内地人一千三百十人、朝鮮人五千六百四十四人あり警察署、郵便局、地方法院支廳、學校、殖産銀行支店等あり

全州

湖南第一の都會にして全羅北道廳の所在地なり北方茫茫たる所謂全州の平野を控へ米産地として名あり此の地方に於て内地人の農事經營を爲す者多く彼の細川農場、東川農場、大橋農場の如きは其の規模の大なるものにして水利施設完備せり即ち沃溝西部水利組合、臨益水利組合、全益水利組合、臨益南部水利組合、臨沃水利組合の如きは是なり人口約一萬五千九百三十九人内、内地人二千八百四人、朝鮮人一萬三千三十六人あり郡廳、地方法院支廳、專賣支局、監獄、警察

署、慈惠醫院、殖産銀行支店、金融組合、學校等あり邑内に慶基殿あり城南に多佳山あり山上に大神宮遙拜所を設く湖南線裡里驛より陸路六里餘、鐵道の便あり

群山

開港の前後と位置の關係上木浦と姉妹の感あり(木浦は明治三十年、群山は同三十二年開港す) 南洋有数の貿易港にして米穀の輸移出は全鮮に冠たり仁川、木浦及内地と定期航路あり此の地に到るには海路の外江景、公州よりの水路又裡里驛より鐵道の便あり人口一萬四千百三十八人内、内地人五千六百五十九人、朝鮮人八千二百四十三人、府廳、沃溝郡廳、郵便局、地方法院支廳、警察署、監獄分監、税關支署、學校、金融組合等あり

光州

全羅南道廳の所在地にして湖南線松汀里驛を距る三里十七町自働車の便あり人口一萬五千五百七人内、内地人二千八百二十五人、朝鮮人一萬二千六百二人あり地方法院、警察署、郡廳、慈惠醫院、監獄、郵便局、學校、殖産銀行支店、金融組合、東洋拓殖會社支店等あり産物の主なるものは米、麥、棉花等なり

木浦

湖南線の終點にして其の海運上の地位群山と相呼應す市街は諺達山を背面に負ひ前面島嶼を繞らす、貿易の主なるものは米穀、棉花、海産物にして内地諸港及沿海各地との間に定期航路あり人口一萬六千七百一人内、内地人五千二百七十三人、朝鮮人一萬一千二百七十八人、府廳、務

安郡廳、地方法院支廳、警察署、監獄、郵便局、稅關支署、測候所、高等女學校、金融組合、殖産銀行支店、十八銀行支店等あり松島公園内に松島神社及金比羅神社を祀れり

大邱

慶尙北道廳の所在地にして京釜線中の大驛なり人口四萬四千七百七人内、内地人一萬一千九百四十二人、朝鮮人三萬二千四百五十一人を占む西方十餘町の丘上に達城公園あり山頂平坦眺望佳にして中央に大神宮を祀れり此の地附近一帶平野にして土壌肥沃農業に適す穀類、果樹、棉花、煙草等を産す古來有名の市あり覆審法院、地方法院、府廳、中學校、高等女學校、憲兵隊、歩兵第四十旅團司令部、歩兵第八十聯隊、慈惠醫院、專賣支局、測候所、郵便局、監獄、殖産銀行支店、金融組合等あり

慶州

大邱の東方十七里許の所に在り自働車及鐵道に依り往復し得へし新羅九百餘年間の王都にして瞻星臺、石氷庫、臨海殿址、雁鴨池、鷄林、鮑石亭、春陽橋趾、半月城、滿月城、明活城、南山城、六村陵墓、五陵、武烈王陵、金瘦信墓、芬臺寺九層塔、柏栗寺、四面石佛等、城墟、古墳、靈刹金石佛、巨鍾等考古の資料となるべきもの多し郡廳、警察署、金融組合等あり人口六千三百八十六人内、内地人五百三十九人、朝鮮人五千四百三十三人あり、此の地を距る四里の所に佛國寺あり境内に多寶塔、釋迦塔あり寺背の吐含山に石窟庵あり圓形の石造にして穹窿狀の天井を爲

し其の上部を土にて覆ひ入口の左右に四天王、仁王の像、内部の圍壁に十一面觀音、十六弟子、梵天帝釋の像を彫刻し中央の蓮臺に釋迦如來の座像を安置す

晉州

馬山を距る十八里餘自働車の便あり慶尙南道廳の所在地にして人口一萬二千六百五十四人
内、内地人二千二十三人あり、郡廳、地方法院支廳、監獄分監、警察署、慈惠醫院、郵便局、學校、殖産銀行支店、金融組合等あり

馬山

馬山府廳の所在地にして人口一萬六千六百六十五人内、内地人四千七百七十二人、朝鮮人一萬一千九百二十三人を占む、京釜線三浪津驛より鐵路一時間餘にして達す東に丘陵を負ひ巨濟島を外廓として鎮海灣其の前方に横はる又海路三十九哩にして釜山港に到るへし昌原郡廳、地方法院支廳、警察署、郵便局、學校、税關支署、重砲兵大隊、病院、銀行、金融組合等あり

鎮海

鎮海灣は馬山半島と固城半島との間に在りて巨濟島其の南に横はり灣内水深くして優に幾多の巨艦を碇泊せしむるに足る新市街は昌原郡鎮海面に在りて山を負ひ水に臨み頗る形勝の地たり人口五千六百十人内、内地人四百人、朝鮮人五千八百八十四人、學校、鎮海灣要塞司令部、鎮海要港部、海軍建築部支部等あり

釜山

關釜連絡の咽喉にして棧橋工事既に竣工し海陸運輸連絡の設備完成せり府廳、地方法院、

監獄、警察署、陸軍運輸支部、郵便局、税關、測候所、中學校、商業學校、高等女學校、朝鮮銀行、殖産銀行其の他各種銀行支店出張所等あり穀物、青物、水産物市場あり就中魚類は半島第一位を占む、輸出品の主なるものは米、大豆、海藻、魚類、生牛、牛皮、綿綿、繭等にして輸入品の主なるものは綿布類、麥粉、石油、食鹽、酒、煙草、醬油、燐寸、紡績絲、砂糖其の他雜貨類なり人口七萬三千八百五十五人内、内地人三萬三千八十五人、朝鮮人四萬五百三十二人、金比羅山即ち龍頭山公園、龍頭山神社、龍尾山神社、天馬山、峨帽山、伏兵山等は何れも遊覽地にして風光明媚なり釜山の北三里許の所に東萊の温泉あり電車、自働車の便あり東萊の東二里許の海岸に海雲臺の温泉あり

海州

日京義線沙里院驛を距る十八里二十三町自働車の便あり、黄海道廳の所在地にして人口一

萬四千四百三十七人内、内地人一千四百七十七人、朝鮮人一萬二千八百六十八人にして郡廳、地方法院、監獄、警察署、慈善醫院、郵便局、學校、殖産銀行支店、金融組合等あり此の地の古蹟には濯熱亭、百世清風碑、梵宇石塔等あり

沙里院

附近一帯の地は廣漠たる沃野にして米穀、大豆等の産出頗る多し人口六千六百四十二人

内、内地人五百九十三人、朝鮮人五千九百九十三人、郡廳、殖産銀行支店、東洋拓殖會社支店等

あり

兼二浦 兼二浦は鎮南浦の東に在る一河港にして日露戦役當時其の名頗に顯はれ爾後漸く振はさりしか、大正二年三菱製鐵株式會社に於て大規模の製鐵工場を此の地に建設以來股盛なる市街地となり人口一萬四千八十人内、内地人四千七百四十人、朝鮮人九千八十人に達せり

平壤 平安南道廳の所在地にして京城を距る百六十一哩餘、北鮮に於ける物貨輻輳の中心にして附近一帯に茫漠たる平野連亘し土壤豐沃にして產物多く平壤米は品質良好にして其の名高し府廳大同郡廳、歩兵第三十九旅團司令部、歩兵第七十七聯隊本部、覆審法院、地方法院、警察署、憲兵隊、慈惠醫院、監獄、税關出張所、專賣支局、郵便局、中學校、農業學校、簡易商業學校、測候所、高等女學校、高等普通學校、女子高等普通學校、朝鮮、殖産、漢城、百三十銀行各支店、電燈會社等あり人口七萬一千七百三人内、内地人一萬六千二百八十九人、朝鮮人五萬四千九百四十三人あり牡丹臺、乙密臺、七星門、玄武門、大同門、船橋里等の戰蹟あり又練光亭、浮碧樓、綾羅島等の景勝あり市街亦電燈、電話、水道等の設備あり其の股賑なること京城に並き大同江人道鐵橋は目下工事中に屬す

鎮南浦 平壤より分岐して西三十四哩餘の所に在り大同江口の貿易港にして仁川、下關を経て阪



平 壤 市 街

神に至るものと仁川、群山、木浦、釜山を経て達するものと二航路あり又支那安東及大連等に
至る航路あり此の地日清戦争前は一漁村に過ぎざりし日清、日露兩役後内地人の移住者多く忽
ちにして一商港を爲し大正四年築港の完成に伴ひ貿易盛なり人口二萬一千四百九十一人内、内地
人四千七百九十三人、朝鮮人一萬六千七百七十九人あり府廳、地方法院支廳、警察署、税關、監獄
分監、郵便局、高等女學校、朝鮮銀行、殖産銀行各支店等あり當地を距る五里に廣梁灣鹽田あり
一箇年八千萬斤を産出す

義州

平安北道廳の所在地にして新義州を距る東北四里三十町自働車の便あり鴨綠江を隔てて遼
に支那九連城に對す人口八千九百七十一人内、内地人千十二人、朝鮮人七千五百四十二人あり
兵隊、郡廳、地方法院出張所、慈惠醫院、郵便局、殖産銀行支店、金融組合、産業傳習所等あり
邑内西北の邱上に統軍亭あり

新義州

京義線の終點にして鴨綠江を界して支那安東に接す鴨綠江は源を白頭山附近に發し長流
二百有餘里其の舟楫の便を有するこゝ八十餘里なり新義州と安東縣とを連結する鐵橋は明治四十
四年十月の竣功に係り延長三千九十八呎中央に鐵道を通し兩側に幅八呎宛の步道を設け通行の便
に供す又中央三百呎の橋桁を開閉式とし船舶の通行に便ならしむ府廳、警察署、地方法院支廳、税

關文署、監獄、郵便局、高等普通學校、營林廠、朝鮮銀行支店、電氣會社等あり人口一萬三千七百九十八人内、内地人三千八百二十五人、朝鮮人七千五百十八人あり

春川

京城を距る東北二十三里餘江原道廳所在地にして自働車の便あり人口三千五百八十四人内

内地人一千三十六人、朝鮮人二千五百十三人、郡廳、地方法院支廳、監獄分監、警察署、郵便局、學校、蠶桑傳習所、機業所、殖産銀行支店、金融組合等あり邑内北方の清平山に城址あり是れ韓國の地にして二千年前の古蹟たり又韃靼塚あり素盞鳴尊の占領地と傳ふるものも亦此の地なり

鐵原

鐵原郡廳の所在地にして江原道の西北部に在り京城を距ること六十二哩餘、京元線の間關にして其の繁榮昔日に倍徙せり人口五千三百十七人内、内地人四百二人、朝鮮人四千八百七十人にして往時弓裔の占據せり地なりと傳ふ

金剛山

剛山の奇勝は其の名夙に天下に揚かれり金山廣袤海陸を併せ十數里に互り一萬二千の

巒峰重疊相倚り相擁し數百丈の巖巖簇立し或は萬物相の奇と爲り或は海金剛の勝と爲る鬱林之を繞り蒼蒼雲根を埋め萬水飛濺し懸りては九龍淵の瀑と爲り碎けては十二瀑の玉と爲る幽禽法を説き清潭佛を語る山寺の鐘聲は圓寂の常樂を告ぐ足一たひ此の仙鏡を踏めは恍として桃源の想あり山中衆峯の最も高きものを擧ぐれば白馬峯にして昆盧峯、水精峯之に亞く日出嶽、月出嶽、獅子峯、

香爐峰、青鶴峰、雁門嶺、白雲臺、望軍臺、遮日峯、彌勒峰、釋迦峰、長慶峰、地藏峰、觀音峰等の奇嶂群峙せり其の規模の壯にして且大なる日光、耶馬溪と同日の談にあらず、今旅客の此の勝を探らむと欲し内金剛を觀むとする者は京城南大門驛より京元線に依り平康驛に下車し金化、金城、新安、末輝里を經て長安寺に至るへし此の間三十五里自働車の便あり是より行行内金剛の勝地を探れば靈源庵、望軍臺頭、白華庵、三佛巖、表訓寺、正陽寺、萬瀑洞、其溪山美、摩訶衍、萬灰庵、白雲臺、毘盧峰、妙吉祥、内霧在嶺の奇勝あり又外金剛各所の勝景を探らむとするには元山の前驛たる葛麻驛より庫底、通川を經て溫井里に至るへし此の間二十五里自働車の便あり其の勝地を舉ぐれば寒霞溪、萬物相、神溪寺、玉流溪、九龍瀑、九流淵、海金剛、萬景洞、彌勒、楡岾寺、松林寺是なり

因に記す金剛山は四季其の名を異にす即ち春は金剛、夏は蓬萊、秋は楓嶽、冬は皆骨と稱す

元山 元山府廳の所在地にして北鮮第一の貿易港なり濶内潮流緩漫にして水深く築港は専ら工事

中に屬す市街は望徳山の麓に在り地形上日本海沿岸に於ける貨物及露領よりする貨物は茲に輻輳し京元線に依り釜山、仁川を經すして直に京城及朝鮮内地に輸入せらる、地方法院支廳、警察署、監獄分監、税關、測候所、郵便局、中學校、病院、銀行、金融組合等あり人口二萬七千五百八十

五人内、内地人七千三百三十四人、朝鮮人一萬九千八百四十人あり

咸興 咸鏡南道廳の所在地にして京城を距る二百十七哩餘、北は盤龍山を負ひ西北に城川江を控

へ西南は廣漠たる平野を望み邑内六個の樓臺あり人口一萬八千四百二十五人内、内地人三千九十七人、朝鮮人一萬五千二百六十八人、地方法院、監獄、歩兵第三十七旅團司令部、歩兵第七十四聯隊、憲兵隊、警察署、慈惠醫院、郵便局、高等普通學校、殖産銀行支店、金融組合等あり邑内西門に樂民樓あり城川江に臨み眺望絶佳なり附近に和樂亭あり樓下に萬歲橋あり東南一里許に本宮あり東北里餘に慶興殿あり共に李朝太祖の舊邸なり此の外歸州寺、定和陵等あり

鏡城 南に鏡城川を控へ北に務巖山を負ひ地形西に逼り東に開き三角形を爲す人口四千二百六十

人内、内地人百三十五人、朝鮮人四千九十八人、郡廳、地方法院支廳、警察署、郵便局、殖産銀行支店、金融組合等あり、邑内西北に巖山あり登れば市街を瞰下し鏡城灣を望み眺望頗る佳なり元帥臺は城南里餘に在りて鏡城川の河口に臨めり觀海寺は西方一里餘、山の中腹に在り春秋共に散策に住なるも霜葉の時節を最とす

清津 北鮮の要港にして露領浦鹽斯德は海上百三十哩の所に在り北鮮一帯の貨物農産物の集散地

たり清會線の基點にして間島、會寧、鏡城、羅南に出入する咽喉に當れるが故に市街繁盛を極む

人口一萬一千二百十四人内、内地人四千百十四人、朝鮮人六千八百五十八人、府廳、地方法院支廳、監獄、警察署、郵便局、税關支署、學校等あり

城津

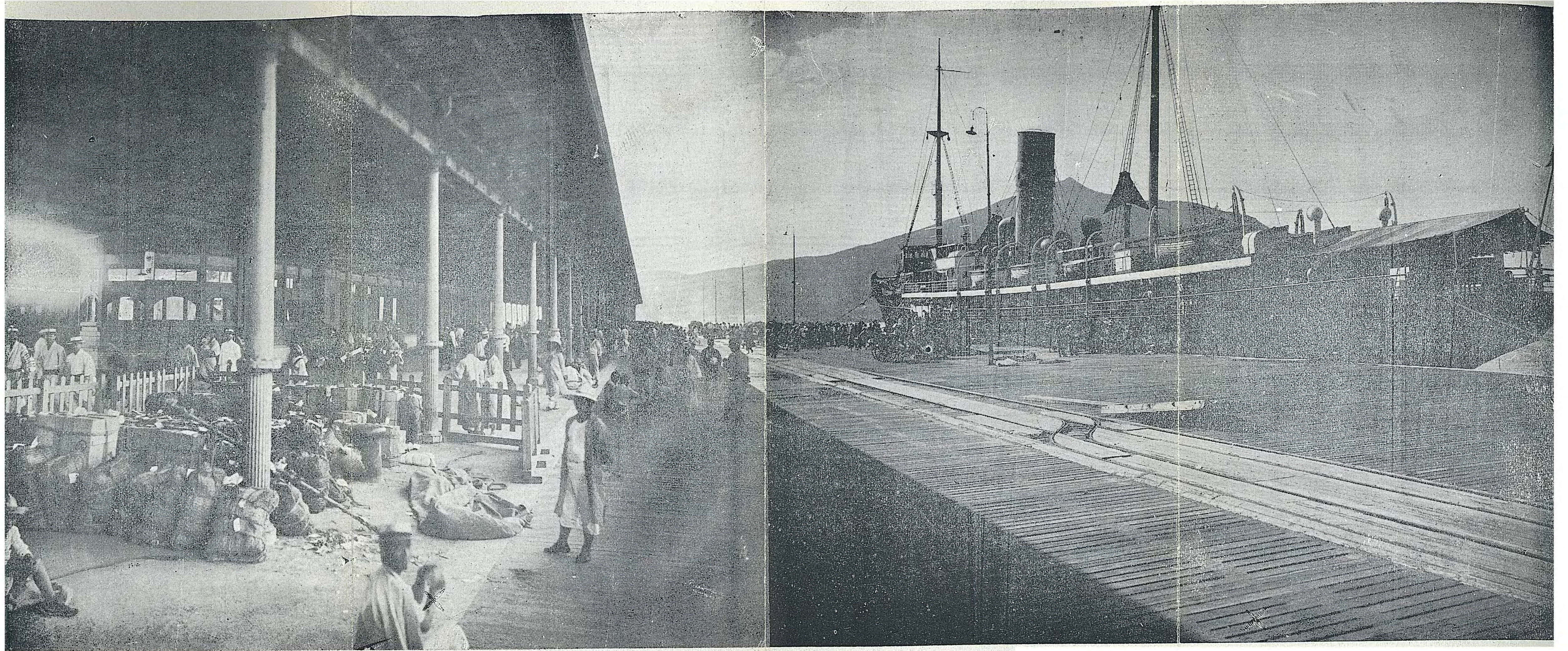
元山の北方百二十四湮餘の所に在り郡廳、警察署、郵便局、税關支署、學校等あり威北一帶の貨物茲に輻輳す輸移出品の主なるものは大豆、黒鉛、銅等にして輸移入品は金巾、木綿、紡績等なり人口五千五百三十二人内、内地人一千二十人、朝鮮人四千三百六十一人あり

羅南

威鏡北道廳の所在地にして鏡城の北方一里餘の所に在り東西南の三面は丘陵に圍まれ東北二隅は平野にして清會線輸城驛より岐れて此の地に入る警察署、郵便局、慈惠醫院、高等女學校、憲兵隊、歩兵第三十八旅團司令部、歩兵第七十五、六の兩聯隊、騎兵第二十七聯隊、野砲兵第二十五聯隊あり人口七千三百二十八人内、内地人三千七百九十八人あり

會寧

豆滿江沿岸に在る一都邑にして江を渡れば直に間島に入るへし龍井村は西北十三里許の所に在り江水一たひ氷結すれば人馬自由に氷上か往來すへし清津より五十八哩即ち清會線の終點たり此の地間島貿易の要衝にして商業盛なり郡廳、警察署、郵便局、慈惠醫院、學校、工兵第十九大隊、朝鮮銀行出張所、金融組合等あり人口九千四百四十四人内、内地人千九百八十五人、朝鮮人七千二百九十八人あり



釜山に於ける船車聯絡實況

第四章 交通

第一節 鐵道

(一) 國有鐵道

朝鮮に於ける鐵道は明治三十三年七月京仁線の開通に始り同三十八年京釜線竣功し次て翌三十九年京義線竣工するや此の二大線は合して一幹線と成り南端釜山より起り半島を縦貫して北端新義州に到り鴨綠江を渡り支那安東に達す其の延長五百九十哩八分なり本縦貫幹線の敷設に次て湖南、京元、咸鏡等の幹線の敷設あり湖南線は京釜線大田より起り木浦に達する幹線と裡里より分岐して群山に到るの支線より成り其の延長百七十六哩一分にして京元線は京釜線龍山より分岐して元山に達する延長百三十八哩四分なり又咸鏡線は元山に起り國境會寧に至るものにして其の内元山咸興間延長七十七哩、清津會寧間五十八哩一分、輸城鏡城間十四哩四分は已に開通し殘區間は目下建設工事中なり其の他支線中永登浦より分れて仁川に至るものを京仁線、三浪津より馬山に達するものを馬山線、平壤より鎮南浦に至るものを平南線、平壤より勝湖里に向ふものを平壤炭鐵線、黃州より兼二浦に達するものを兼二浦線となす如斯にして今や全線の延長一千百五十七哩四分を算するに至れり

軌間は本支線共何れも四呎八吋二分の一の標準軌間にして車輛は「ホギー」式を用ゐる客車は廣濶壯麗貨車亦長大にして一輛克く二十六噸を搭載し得べく主要列車には食堂車、寢臺車を連結し旅客の待遇設備遺憾なく備はれり而して南は釜山に於て關釜連絡線に依り一日二回内地との連絡を保ち北は國境鴨綠江橋梁を経て南滿洲鐵道に直通し釜山奉天間二回の直通旅客列車を運轉し尙釜山京城間に一往復の急行旅客列車あり内地鮮滿間の交通至便なり

國際聯絡運輸に付ては大正二年より東清及烏蘇里鐵道主要驛と旅客手荷物の聯絡運輸を開始し次て同年日支旅客手荷物聯絡を、同三年より日滿貨物聯絡を、同七年より日支聯絡小荷物の取扱をも開始せり

一般旅客の旅行に便する爲大正二年より釜山、新義州停車場樓上に洋式の旅館を設け京城に朝鮮ホテルを建設し大正三年より營業を開始せり尙金剛山探勝客の便を圖り外金剛溫井里及内金剛長安寺に洋式旅館を設け毎年夏期より秋期に互り營業を爲すこととせり

朝鮮鐵道工事施設中最著名なるものを鴨綠江の橋梁とす同橋梁は總延長三千九十八呎に上り朝鮮側より二百呎六連三百呎六連の鋼桁を架し支那側に達するものにして明治四十二年起工し四十四年竣成せり該橋梁は朝鮮側より第九連の梁を開閉式と爲し船舶の航行に便ならしめ又橋梁の兩側に幅八

呎宛の歩行道を設け公衆通行の用に供せしむ各桁の最下端は平時滿潮水面上二十五呎、干潮水面上
 三十八呎なるを以て普通の船舶は優に橋梁の下を通過するを得へし
 朝鮮國有鐵道の業務は從來總督府の經營する所なりしか大正六年七月より之を南滿洲鐵道株式會社
 に委託し目下同社に於て之を經營す但し國有鐵道の建設及改良は尙國費を以て支辨せられ其の計畫
 は總督府に於て管掌す

鐵道線路		區間		哩程	
京釜線	本 京 仁 山 線	南大門(京城)―釜 永登浦―仁 三浪津―馬 南大門―安 黃州―兼二浦	兼二浦 兼二浦 兼二浦 兼二浦 兼二浦	二八〇・六 一八・四 二四・八 三一〇・二 八・一	哩分
京義線	本 兼二浦 南 平壤炭鐵線	南大門―安 黃州―兼二浦 平壤―兼二浦 平壤―兼二浦	兼二浦 兼二浦 兼二浦 兼二浦	三四・三 一五・九	哩分

大正十年十月一日現在

年 度	一日一哩平均		一日一哩平均	
	旅客人員	貨物噸數	旅客人員	貨物噸數
同 八年度	三、四三六	一、四七〇	六、一〇四	一、五九〇
同 九年度	三、四〇八	一、三六六	六、一〇四	一、五九〇

(二) 關釜連絡概況

關釜連絡船は現在壹岐丸(一、六〇〇噸)、對馬丸(一、六〇二噸)、高麗丸(三、〇二八噸)、新羅丸(三、〇三二噸)、博愛丸(二、六三二噸)の五隻を交替運航し關釜間を晝夜二回往復す關釜間の距離百二十二哩にして其の所要時間十一時間半なり

關釜連絡概況

年 度	航 海		旅 客			貨 物		
	度數	噸	一等	二等	三等	貨物	手荷物	小荷物
大正七年度	八〇三	五、九二二	三〇、八九七	一五八、五五五	一九五、三六四	二四四、二七八	一一四、八三三	一三六、二四五
同 八年度	七八九	八、六七五	四二、五〇二	一六七、五八一	二二八、七五五	二七四、五三五	一二六、一九五	一三一、八三六
同 九年度	六四七	八、六六三	四三、五八八	一七〇、二七九	二二三、五三〇	一六〇、五六六	一三八、一六六	一三三、〇四五

朝鮮行	同		同		同		同		同		同	
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
同	七年度	八年度	九年度	八〇三	五、六七四	三八、七七三	一四五、一七二	一七九、五六三	三六、九〇〇	四七、三〇〇	三六、六〇〇	一八九、六七三
同	八年度	七七八	八、一〇一	四一、六八五	一七一、三三七	三三二、一三三	一五六、七八九	一四三、三四九	九六一	二二、二七〇	二二、二七〇	二二、二七〇
同	九年度	六四七	八、四一四	四三、〇九一	一七三、五四九	三三三、〇五五	一〇〇、〇五一	一九七、四五四	三五三、六六〇	二七、〇七二	二七、〇七二	二七、〇七二

(三) 私設鐵道及軌道

鐵道の普及は朝鮮開發上最急務なるを以て總督府は財政の許す限り年々國費を以て其の敷設に努めつつあるも猶地方的の線路に對しては民間の企業に依る鐵道を獎勵し現に一般運輸を目的とする私設鐵道に對しては朝鮮私設鐵道補助法に依り補助金を交付す

大正十年九月現在に於ける私設鐵道及軌道の總延長は開業線二百二十三哩九分未開業線千六百五十七哩六分、專用鐵道既設線三十八哩三分あり

開業線

大正十年十月一日

經 營 者	區 間	哩 程	軌 間	原 動 力	敷 設 許 可 年 月	營 業 開 始 年 月	資 本 及 建 設 費
全北輕便鐵道株式會社	全 州	一五・五	四二呎	蒸汽	大正二年一月	大正三年十一月	六〇〇、〇〇〇

經營者	區間	哩程	軌間	原動	敷設許可年月	營業開始年月	資本及建設費
成興炭礦鐵道株式會社	津湖西	二〇・〇 <small>哩</small>	六二吋	蒸汽	大正二年九月	大正四年十二月	六〇〇,〇〇〇 <small>円</small>
价川輕便鐵道	新价川	八・〇 <small>哩</small>	同	同	五年五月	五年五月	同
同	价川	四・六 <small>哩</small>	同	同	六年十二月	七年十二月	同
朝鮮中央鐵道株式會社	大浦項	三・九 <small>哩</small>	同	同	五年二月	同	同
同	浦項	一・三 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	鶴山	一・三 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	西岳	八・三 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	佛國寺	八・三 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	內土	九・四 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	上里	九・四 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	沙里院	三・〇 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	載寧	三・〇 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
同	上三峰	三・八 <small>哩</small>	同	同	同	同	同
圖們鐵道株式會社	會寧	三・八 <small>哩</small>	同	同	同	同	同

朝鮮瓦斯電氣株式會社	釜山府	五・八	同	蒸汽	明治四十三年六月	明治四十五年十二月	五,000,000
釜山府	釜山府	四・九	同	電氣	四十三年五月	大正四年十一月	九,000,000
京城府	京城府	二・七・八	三	時	同	三十二年二月	韓政府時代
京城電氣株式會社	京城府	一・三・二	二	呎	同	大正八年九月	大正八年九月
奧村竹三郎	邑內驛	〇・七	同	呎	同	九年十二月	九年十二月
山形定右衛門	洛東江	一・五・六	同	同	同	五年九月	同
咸興炭鐵道株式會社	咸興	四・七	同	同	同	七年五月	同
咸鏡北道廳	鏡城	二・〇	同	同	同	同	同
松本勝太郎	清津府	〇・六	同	同	同	六年七月	同
片村庄次郎	江景驛	一・〇	同	同	同	八年十一月	同
合計	邑內驛	二・三・九	九	同	同	十年五月	同

私設鐵道及軌道營業成績

年 度	輸 送		貨 物		運 輸		合 計
	旅客人員	小手荷斤數	貨物噸數	客車收入	貨車收入	入	
大正七年度	二五、九〇七、九〇四	一、〇〇六、〇七一	二〇二、五七三	八九四、七八一	一五三、四三六	一、〇四八、二〇七	
同 八年度	二八、九五六、三七八	一、六四三、五九八	三三六、九二八	一、四〇〇、八三五	三七九、五七一	一、七八〇、四〇六	
同 九年度	二六、六九九、八五四	一、四三三、〇八七	三三八、一七六	一、九五二、一〇一	五六六、一四八	一、五一七、二四九	

以上の外未開業線に南朝鮮鐵道株式會社の松江里馬山間及院村全州間、朝鮮中央鐵道株式會社の佛國寺東萊間、蔚山長生浦間及公州忠州間、朝鮮森林鐵道株式會社の咸興原州古包間、長津滿浦鎮間及五老里漢 釜 里間、咸興炭鐵道株式會社の咸興五老里間、兩江拓林鐵道株式會社の古茂山合水間及吉州惠山鎮間、金剛山電氣鐵道株式會社の鐵原化川間、朝鮮京南鐵道株式會社の安城群山對岸間、西鮮殖産鐵道株式會社の載寧猪島間、石灘海州間、信川龍塘浦間及梨木、長淵間、朝鮮産業鐵道株式會社の金泉安東間、中和遂安間、鎮南浦溫井里間及孟中里江界間、北鮮鐵道株式會社の羅津訓戎間、北鮮興業鐵道株式會社の會寧金洞間、朝鮮京東鐵道株式會社の水原驪州間、圖們鐵道株式



清州美江間改修道路

會社の上三峰澗關鑛間、京春電氣鐵道株式會社の清涼里春川間等あり

第二節 道路

朝鮮の道路は舊韓國政府時代明治四十年より併合に至る四箇年間に於て工費三百九十萬餘圓を投して二百餘里を修築したるも此等の工事は各地方に散在せる一部小區間の道路に對して斷片的に施行したるに過ぎず從て朝鮮全道より之を見る時は殆ど道路と稱すへきものなく依然として旅客は田畦を通行し貨物は人肩馬背に依て運搬せらるゝの狀況にして到底人文の普及、經濟の發展を期すること能はざるを以て總督府設置當初先以て道路の根本制度を樹立すると共に全道に渉る道路網を確定せり

此の道路網に依れば原則として國費を以て築造すへき一等道路十七線延長七百八十九里餘、二等道路七十九線延長二千三百五十二里餘に達し之を以て全道主要路線を形成し別に地方費を以て築造すへき三等道路四百十九線此の延長二千八百三十九里餘を以て地方的脈路を完ふするものとす而して政府に於ては道路修築の第一期事業として一、二等道路中最重要なる路線三十四線六百八十五里を、選ひ明治四十四年度より大正六年度に至る七箇年の事業とし工費一千萬圓を投して之を修築をなし

併せて漢江鐵橋を架設せり

第一期事業に引續き第二期計畫として一、二等道路線中交通並經濟上最適切なる路線二十六線延長四百七十八里と主要なる河川の橋梁九箇所を架設を企て大正六年度より同十一年度に至る六箇年の繼續事業として總工費七百五十萬圓を以て目下施行中に屬するも物價騰貴の影響を受け豫定の改修を爲すこと能はざると最近の事情に鑑み新なる路線を加ふる必要より更に豫算を増額して之を完成せしめんとす

以上は政府に於て直接施行に係るものなるが此の外地方廳に年額十萬圓乃至三十萬圓の國庫補助をなして三等道路の改修並地方交通上の必要に依り政府の改修を待つこと能はざると一、二等道路の改修を行はしめ其の今日までに改修を終へたるもの一、二等道路九百餘里、三等道路千八百餘里に達し之に要したる經費三百餘萬圓なりとす既成道路の延長は最近の調査に依れば左の如し

既成延長

種別	明治四十四年	大正九年度末
一 二等道路	二〇〇里	一、六六四里

三 等 道 路

二〇七 七

一、一三四
二、七九八

海關工事費豫算及工程

大正十年三月末日

種 別	豫算總額	工 程	摘 要
釜山港第一期工事	三、九四四、〇六〇	大正七年七月竣功	水路浚渫の一部を除く 陸上設備を除く
同 第二期工事	九、一七二、〇〇〇	一 步 四 厘	
仁川港第一期工事	三、九一四、四五五	大正七年十月竣功	
同 第二期工事	三、一四〇、五〇〇	八 步	
元 山 港 工 事	二、六四三、〇〇〇	九 步 四 厘	
鎮南浦港工事	九五五、〇〇〇	大正四年三月竣功	
平壤港工事	一二九、三七五	同 三年三月竣功	
合 計	二三、八九八、三九〇		

第三節 港灣

港灣に關しては統監府時代總額四百餘萬圓を以て釜山、仁川、鎮南浦、平壤、元山、新義州、群山、木浦、清津、城津、馬山の十一箇所に對し夫々應急の施設を爲したるも何れも工事半にして併合となりたるを以て總督府に於ては其の殘工事を施行するに共に更に設備の擴張計畫を立て明治四十四年度以降の繼續事業として元山の修築に著手せり狀況左の如し

港灣 狀況

大正九年十二月

工	第一期 工事		第二期 工事	
	港灣名	工費	工費	工費
釜山	竣工年月日	規	竣工年月日	規
山	大正八年三月	第一棧橋鐵造 長一五二間幅一二間 七分	大正十三年度	第一棧橋擴張 棧橋沿突堤を擴張し 繫船棧橋長二一五間 幅五〇尺を新設し埠 頭の總幅員を在來と 併せて五六間五分と 第二棧橋擴張
釜山	九、〇〇〇、〇〇〇 円	第二棧橋鐵造 長二〇〇間幅二二間 理立(倉庫及荷揚場) 一六、三二〇坪	九、一五〇、〇〇〇 円	
		港口及棧橋附近浚渫		

事 中 の

第四章 交通

<p>仁川</p>	
<p>三、九二、四五五 月</p>	
<p>大正七年十月</p>	
<p>關船渠 關渠長四二六尺五寸 幅六〇尺 關船渠長二五〇間 幅一二〇間 面積三〇〇〇〇坪 水深二七尺—三〇尺 繫船壁二五〇間 繫船數四千五百噸の汽船三隻 航路淺濶幅三〇間 水深一四尺 馴導棧橋</p>	<p>水深二四尺—三六尺 繫船數 三千噸乃至四千噸 汽船二隻(第一棧橋) 七千噸乃至二萬噸 汽船四隻(第二棧橋)</p>
<p>二、六四、五〇〇 月</p>	
<p>大正十二年</p>	
<p>仁川市街之月尾島の間 突堤長五七三間 波除堤長一四五間 上屋鐵道等の陸上設備 (上屋五棟) 漁船及舢舨の避難場の設備 航船幅員三〇間を六〇間に擴張</p>	<p>現在幅員二一間なるを六一間に擴張す 港口防波堤三八〇間南堤五四三間 港内波濤 面積二二二、六〇〇坪 水深二四尺—二七尺 外に北濱船入場に繫船設備を施す</p>

工 事 完 成 の 概 況

第四章 交通

平 壤	續南浦
一三〇、〇〇〇 円	九五五、〇〇〇 円
大 正 元 年 度	
大同江梁筋開設 取幅二〇間 水深四尺五寸 埋立三、九〇〇坪 物揚場 長三〇〇間 鐵道一哩餘	開渠式船渠 面積二一、〇〇〇坪 繫船壁(直立) 長一四〇間 繫船墩 三千噸級以下二隻 航船淺瀬 面積四、八〇〇坪 水深一八尺 船渠の周圍埋立 三二、〇〇〇坪 干潟地埋立 二二、〇〇〇坪 其の他陸上設備を施す

漁港	修築	築	補助	調査
總數	箇所數	工費	庫補助	箇所數
三〇〇餘箇所	八	一〇四、五四七 <small>円</small>	六七、五〇〇 <small>円</small>	三一

第四節 海事

(イ) 船舶 客年來財界不振の爲朝鮮に於ける海運業も之が影響を受け一時繫船の已なきに至りしものなきにあらざりしも近來稍回復し其の結果朝鮮置籍船は客年末に比し幾分の増加を示せり爰に最近に於ける船舶數を表示すれば左の如し

船舶現在數

大正十年九月

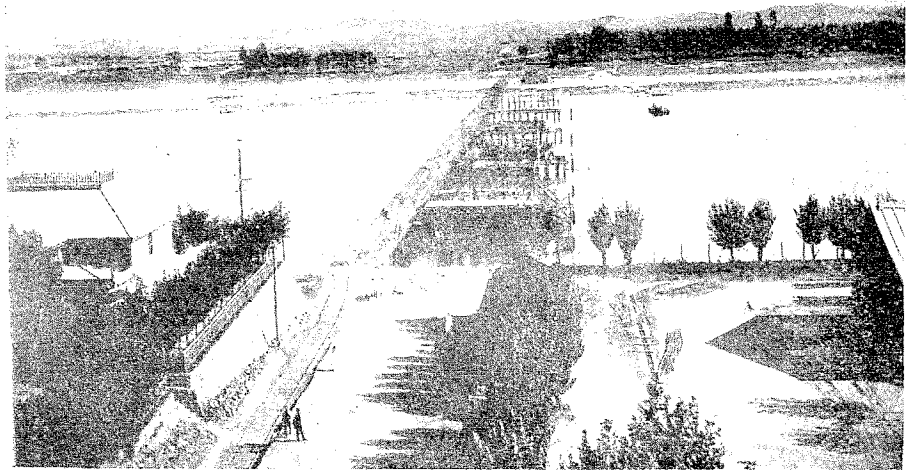
種別	汽船		帆船		合計	
	數	總噸數	數	總噸數	數	總噸數
朝鮮に船籍港を有するもの	九八	三九、四九六	四九八	一六、四〇九	五九六	五五、九〇五
登簿船	八三	九一九	六、四〇四	六九、六八三	六、四八七	七〇、六〇二
不登簿船	二四	一、八一八	二五	一、六〇〇	四九	三、四一八
内地に船籍港を有し朝鮮沿岸のみを航行するもの	八	一〇九	?	?	八	一〇九
登簿船						
不登簿船						

種別	汽船		帆船		合計	
	船數	總噸數	船數	總噸數	船數	總噸數
總計	二二三	四二、三四二	六、九二七	八七、六九三	七、一四〇	一三〇、〇三四

朝鮮に船籍港を有する不登簿帆船數は大正九年十二月末日現在なり

(一)定期航路 大正十年九月三十日現在航路は(一)朝鮮内に限るもの(二)内地を起點として朝鮮に往來するもの(三)内地を起點として朝鮮を經由し外國に至るもの(四)朝鮮を起點として内地又は外國に至るもの(五)外國を起點として朝鮮に來るもの五種にして朝鮮總督府命令に依るもの及朝鮮總督府地方官廳の命令に依るものは(一)種又は(四)種の内に屬す別に鐵道省の經營、福岡市長崎縣命令、陸軍省特殊命令に依る(二)種逕信省命令に依る(三)、(三)種及關東廳命令に依る(五)種の航路あり又補助命令に依らず自營を以て定期航海を爲すもの等あり今之等の航路に配在せる船舶の大勢を示せば

(一)に屬するもの	二三一艘	八、四三一噸	(四)に屬するもの	一〇艘	一二、四五三噸
(二)に屬するもの	一五艘	二、三四一噸	(五)に屬するもの	五艘	四、一四六噸
(三)に屬するもの	三艘	五、一〇一噸	總計	二六四艘	五三、六四四噸



大 同 江 梁 橋 工 事 狀 況

にして更に政府の補助命令に依るものと自營に依るものとを區別すれば左の如し

命令航路使用船(官營を含む)

二二六艘

四二、六五七噸

自營航路使用船

三八艘

一〇、九八七噸

内命令船併用の分一艘三八噸

前記各航路の主なる經營者は朝鮮郵船株式會社、鎮南浦汽船合資會社、鴨綠江運輸株式會社、大阪商船株式會社、日本郵船株式會社、大連汽船株式會社及鐵道省等とす

第五節 江運

朝鮮に於ける河川の主要なるものを洛東江、漢江、大同江、錦江、臨津江、蟾津江等とす又國際河川に鴨綠江、豆滿江あり

(イ洛東江は流域面積千五百二十六方里流路延長百二十六里を有し其の流域は慶尙北道及慶尙南道の大部を占め至る處に平野存在し一般に地味肥沃にして灌溉の便多し

本江は水面勾配緩にして河口より八十七里上流なる安東まで溯航し得べく水運上重要なる河川とす

(口) 漢江は江原道三陟郡鷹岬山の北溪に其の源を發し旌善、寧越、丹陽及忠州附近を流下し廣州郡牛川附近に於て北漢江を合し京城府龍山附近を過ぎて金浦郡の北端に於て臨津江と合し江華島附近にて黃海に注ぐ

本江に於ける水運は頗る重要なるものにして流路延長百十九里餘内七十六里餘航行の便あり

(ハ) 大同江は平安南道、咸鏡南道及平安北道の三道々界に聳ゆる狼林山に其の源を發し寧遠、徳川、順川及平壤附近を流下し氣二浦の下流にて載寧江と合し鎮南浦附近に於て黃海に注ぐ流路延長百一里餘航路延長六十三里餘を有し江運上重要なるものとす

(ニ) 錦江は流域面積六百三十一方に達し流路延長百里に及ぶ流域は主として忠清南北道、全羅北道の三道に跨り河口には貿易港群山ありて潮汐の影響は遠く扶餘附近に及び英江まで自由に航行し得へし

(ホ) 臨津江は其の源を咸鏡南道德源郡馬息嶺の南溪に發し南流して江原道に入り稍其の方向を西に轉して古味呑川を合し再び南下し伊川安峽を過ぎて京畿道に入り麻田の東南約一里にて本江第一の支川漢灘江を合して河幅を増大し更に西南に流下して高浪浦、長湍及汶山浦附近を過ぎ坡州郡炭懸面に至りて漢江の流末に合し江華灣に注ぐ流路延長六十五里餘にして河口より上流

十里餘舟楫の便あり

(へ) 鴨綠江は流域三百四方里流路延長五十四里ありて本江の水運は經濟上有效なる交通路を爲す然れども航路に障害多く求禮上流は航行頗る困難なり

(ト) 鴨綠江は鮮支の國境を劃し源を白頭山の西麓に發し咸鏡南道惠山鎮に於て南方より來る盧川江を合せ長白山脈の諸谿谷より發する數多の小流を集めて西北に流れ楚山に到りて滿洲より南下する渾河と合し更に義州の上流に於て滿州の驛河を容れ河流は九里島、於赤島、黔同島、中江臺等の砂洲に由りて三分し下りて沙河鎮に至り三江再ひ合して一江と成り更に威化島を堆成して濶大なる三角洲を爲し黃海に入る其の流路百四十里に及ぶと雖河岸傾斜急にして岩礁多く激流奔湍の箇所少からず河口龍岩浦より溯るこゝ十五里なる安東縣迄は高潮時に於て約十呎の水深を保ち僅に一千噸の船舶航行し得べく其の間水路狹隘にして曲折多く航行困難なれども免許水先人を要招するの便あり、或克船は辛ふして帽兒山附近に航行し得べく目下新義州、中江鎮間に於て淺吃水汽船航行の計畫あり江の上流には有名なる鴨綠江の大森林ありて巨樹大木鬱生し其の富源無盡藏と稱せられ其の伐材は筏として流下せらるもの多し

(チ) 豆滿江は東岸日本海に注ぐ大河なり源を白頭山の東南麓に發し白頭、江南、妙香の諸山脈より

り發する諸流を合せ茂山郡に到りて稍大流と成り會寧、鍾城の諸郡を経稔城の北に至り間島より南下せる布爾哈圖河と合し更に慶源に於て琿春河と會し水量益増大し其の間右曲左折し谿谷の間を流下す下流は露領と境界を爲し造山灣と露領ポーシエツト灣との間なる西水羅の東方に到り日本海に注ぐ流路延長百三十二里降雨に際しては河水氾濫し濁流沿岸を嚼み舟楫の危険少からず加ふるに河口には土砂の堆積して洲を爲す所多きを以て航行の便宜しからず

第五章 通信

第一節 通信事業

朝鮮に於ける通信事業の開始は明治三十八年四月韓國通信機關委託に關する取極書締結の結果同年七月舊韓國政府の郵政を擧て逓信省の管理に屬せしめたるを以て嚆矢とす其の後統監府の設置せらるるや其の事務を繼承し併合と共に朝鮮總督府に繼屬せり今や通信機關の配置都鄙を通して六百八十餘に達せり又主要なる地點には電信及電話を開始し尙電信利用の増進を期せむか爲明治四十三年十一月電報料金の大輕減を行ふと同時に電信回線の整理及通信の敏速疏通を圖りたる等施設上大に舊來の面目を一新したるに伴ひ諸般通信業務の取扱數は以下各項に掲ぐるか如く累年増進の趨勢を示せり而して大正九年度に於ては經濟界不振の影響を受け各種取扱數中前年度に比し幾分減退を示せるものありと雖單に一時的の現象に止り最近に於ては漸次増進の狀況を現し其の收支狀況の如きも亦年々順調に向へり

郵便局所數

年 度	郵便局	同分室	郵便所	電信電話所	鐵道電信取扱所	合計	郵便切手賣捌所
大正七年度末	一七九	四	三五九	一	九七	六四〇	三、八六五
同 八年度末	一八〇	三	三七九	三	一〇〇	六六五	三、九六一
同 九年度末	一六四	四	四〇九	三	一〇三	六八三	三、九一六

年 度	郵便物取扱數		小 包	郵便物
	引 受	配 達		
大正七年度	一一〇、五八八	一一七、八七四	一、七七八	二、一七九
同 八年度	一二九、九七三	一三七、六六三	一、八七二	二、三五九
同 九年度	一三四、八七九	一四五、一一五	一、六五五	二、二三一

年 度	電報取扱數		信 著	信	中繼信
	發	信			
和文	一	一	一	一	一
諺文	一	一	一	一	一
歐文	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一

年度	市內	市外	合計	呼出
大正七年度	三、七〇一、四六七	三、七五二、四三三	三、七〇一、四六七	三、七〇一、四六七
同八年度	四、四四五、四六一	三、八三三、六九七	四、四四五、四六一	四、四四五、四六一
同九年度	三、九九七、四四五	三、七三三、四〇〇	三、九九七、四四五	三、九九七、四四五

電話取扱數

年度	市內		市外		合計	呼出
	現在	加入者	現在	加入者		
大正七年度	二、一八八	二、二二五	四八、〇六六	五三三	二、五二二	四八一
同八年度	二、七七八	二、七七二	五五、七八九	三七七	二、九〇二	四四八
同九年度	三、一六五	三、四四二	五七、四六一	一四一	三、五一二	八七九

本表*印を附したるは長距離加入者の再掲なり

朝鮮に於ける郵便爲替貯金業務に關しては常に鮮人特殊の風俗習慣に留意し銳意新業の改良發達を圖りつゝあるか地方金融機關の先驅として各地の財界に貢獻する所尠からざるを以て郵便爲替貯金

朝鮮に於ける郵便貯金は、大正三年歐洲戰亂當初財界變調の影響を受け一時減退せしことありしも、此時を除きては概ね良好なる成績を持續し、大正四年以降民間企業界の隆興は通貨の膨脹と勞銀の暴騰を促し、工業關係者の所得を潤澤ならしめ、米價の騰貴は農民の收入を激増せしめ、著しく郵便貯金の預入額を増加せしめたりしが、最近に到り斯業類似の預入機關の發達、財界の不況等と相待つて郵便貯金増進歩合をして幾分逡巡せしめたるものあるが如し、最近に於ける郵便貯金狀況を示せば左の如し。

年 度	預 入		拂 戻		平均一度の金額			
	度 數	金 額	度 數	金 額	預 入	拂 戻		
大正七年度	三、八〇一、八五三	三、一、八二六、二五一	二、四三、一三〇	二、九、四四八、七八八	一、一四、一四三	一、一、三六	五六、六九	
同 八年度	三、三五九、四九八	三、八、一四七、四三二	一、六二、七八三	八、一四、三三三	三、七、一九九、三三八	一、五七、九〇〇	一六、八八	四六、〇五
同 九年度	一、九七四、一五八	四、七、五五四、九三〇	一、一八、〇四四	八、一三、三六〇	四、五、二七〇、五四三	一、五二、三三三	二、四、〇九	五四、〇六

内鮮人郵便貯金比較

年 度	内 地 人		朝 鮮 人	
	人 員	貯 金 額	人 員	貯 金 額
大正七年度末	二七、八〇七	一、九七九、九一五	一、一〇、五七一	二、五七〇、四三三
同 八年度末	二八七、三三二	一三、四二七、八九七	一、二一九、〇三八	二、四九八、〇九五
同 九年度末	五〇五、九二八	二四、六七七、四〇五	一、〇七七、一六〇	二、五三六、一六六
		円	円	円
		一人平均額	一人平均額	一人平均額
		円	円	円
		四三、五八	一、一〇、五七一	二、五七〇、四三三
		四三、二七	一、二一九、〇三八	二、四九八、〇九五
		四八、二七	一、〇七七、一六〇	二、五三六、一六六
				二、一六

郵便振替貯金に就ては大正七年府又は府の區域を包含する學校組合公金受拂の爲にする郵便振替貯金特別取扱を又同八年國債募集、賣出及元利金支拂郵便振替貯金特別取扱を開始せしか之を利用する者漸次多きを加へ郵便振替貯金制度開始當時即ち明治四十三年に於ては僅に二百七十九人の加入者を有するに過ぎざりしか大正十年九月末現在に於ては九千五百五十二人の多きを算するに至れり而して其の取扱高亦左の如き増率を示せり

郵便振替貯金

年 度	拂 入		拂 出	
	度 數	金 額	度 數	金 額
大正七年度	一、〇三三、五九二	九一、〇四七、七二一	二三六、九三八	五六、六四七、九九〇
同 八年度	一、〇七三、四四四	一〇四、七六六、三〇七	二三三、二七三	八〇、二九八、〇七〇
同 九年度	一、一二四、一〇八	八三、六七五、二六一	一五〇、〇三九	六四、〇一六、〇五二

郵便振替貯金口座受拂 (其の二)

年 度	受 入		入 替	
	新 規 人 員 口 數	金 額	口 座 振 替 金 額	金 額
大正七年度	一、三九五	六五五、四八三	六七、六四一、七九一	三七、六三四、二一〇
同 八年度	一、六一四	七四六、一三二	九五、一一九、七一九	六二、九三〇、三三七
同 九年度	一、二七八	七七二、九九七	七六、三二五、四〇三	六〇、七七六、九三三

郵便爲替貯金口座受拂 (其の二)

年 度	拂 拂		渡		出 振替		年 度 末 現 在	
	脱退人員	口 數	金 額	口 數	金 額	人 員	金 額	
大正七年度	二五八	二五九、八七九	四三、六八八、六二九	九七、〇〇七	六三、〇六八、四三三	六、一八五	一、五九三、七八九	
同 八年度	五九三	三三二、二九九	六九、八八七、七五三	一三三、二二六	八七、六七一、五〇三	七、五〇六	二、〇七五、五〇九	
同 九年度	五五七	一七三、六三〇	六〇、八二九、三三九	一一〇、五八七	七六、四三三、五一八	八、四四七	一、九〇三、〇五六	

第二節 電氣瓦斯事業

大正十年三月末日現在に於ける電氣事業經營數は營業用三十七(内開業二十八)官廳用十 自家用四十二合計八十九なり又瓦斯事業經營數二あり

今其の營業用電氣事業及瓦斯事業の概況を示せば左表の如し

營業用電氣事業		大正十年三月末日	
事 業 者	目 的	資本金	原動力
		資本金込	發動力

朝鮮瓦斯電氣株式會社	釜山支店	電氣供給、電鐵	三、〇〇〇	千円	汽力	二五〇
京城電氣株式會社	京城支店	電氣供給、電鐵	九、〇〇〇	千円	汽力	六〇〇 K.W.
同	仁川支店	電氣供給	八、〇八一	千円	同	三、五〇〇
同	馬山支店	同	同	千円	同	五〇〇
同	鎮海支店	同	同	千円	馬山より送電を受く	一二五
元山水力電氣株式會社	同	同	七五〇	千円	水力	三七二
嶺南浦電氣株式會社	同	同	一五〇	千円	瓦斯力	六〇
大田電氣株式會社	同	同	二〇〇	千円	同	二四八
同	清州支店	同	一五〇	千円	同	一〇〇
平壤電氣株式會社	同	同	一、〇〇〇	千円	汽力	三八
木浦電燈株式會社	同	同	二〇〇	千円	同	五〇〇
			一一〇	千円	同	七五

事業者	目的	資本金	資拂金込	原動力	發動力
群山電氣株式會社	電氣供給	一六〇	一三八	瓦斯力	一八五 K·W.
朝鮮電氣株式會社	同	五〇〇	四七九	同	二〇〇
水原電氣株式會社	同	六〇	四五	同	四〇
新義州電氣株式會社	同	二〇〇	九五	南滿洲鐵道株式會社より電力供給を受く	
中外電氣株式會社 全州支店	同	一、〇〇〇	八九七	瓦斯力	九五
大興電氣株式會社	同			同	二二五
大興電氣株式會社 咸興支店	同	五〇〇	三三三	同	一〇〇
同 金泉支店	同			同	五〇
光州電氣株式會社	同	五〇	二五	同	四〇
開城電氣株式會社	同	一〇〇	一〇〇	同	一八五

城津電氣株式會社	衆二浦面	江景帶氣株式會社	海州電氣株式會社	麗水電氣株式會社	道株式會社	金剛山電氣鐵	浦項電氣株式會社	業株式會社	朝鮮電氣會社	會寧電氣株式會社	統營電氣株式會社	晉州電氣株式會社
同	同	同	同	電氣供給	電鐵	同	同	同	同	同	同	電氣供給
五〇	四〇	二〇〇	一〇〇	一〇〇	(同)	五、〇〇〇	一〇〇	一〇、〇〇〇	六〇	二〇〇	五〇	五〇
未成立	(固定資本) 三三	二一九	三〇	二五	(同)	五〇〇	二五	(未開業) 三、〇〇〇	四五	五〇	四〇	四〇
瓦斯力	電力	同	同	瓦斯力	水	瓦斯力	瓦斯力	汽	瓦斯力	汽	瓦斯力	瓦斯力
三五	鐵所より送電を受く	三、菱兼二浦製	七五	七五	四、五〇〇	三〇	八、〇〇〇	五〇	三〇	三〇	三〇	三〇 K.W.

事業者	目的	資本金	拂込 資本金	原動力	發動力
講陵島水力 電氣工業所	電氣供給	三〇	未開業	水力	一五〇 K.W.
鴨綠江水力 電氣株式會社	同	一〇、〇〇〇	未成立	同	一三、七五二
公州電氣株式會社	同	一〇〇	同	瓦斯力	四〇
京春電氣株式會社	電氣供給、電鐵	六、〇〇〇	同	水力	一、三九五
新安州電氣株式會社	電氣供給	五〇	同	瓦斯力	二五

瓦斯事業一覽表

大正十年三月末日

事業者	事業の目的	資本金	拂込 資本金	已往一年間に於ける 瓦斯發生量	開業の別
朝鮮瓦斯電氣株式會社 釜山支店	瓦斯供給	三、〇〇〇 千円	二、六九九 千円	二一、五五一、五〇〇 立方呎	開業
京城電氣株式會社 京城支店	瓦斯供給	九、〇〇〇	八、〇八一	一一八、一三六、六〇〇	同

朝鮮瓦斯電氣株式會社及京城電氣株式會社は電氣事業と瓦斯事業とを兼營す

第六章 地方行政

第一節 道府郡島

朝鮮に於ける地方行政機關は舊韓國政府時代より幾多の變遷を經以て今日に至れり即ち京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黃海道、平安南道、平安北道、江原道、咸鏡南道、咸鏡北道の十三道、京城、仁川、群山、木浦、大邱、釜山、馬山、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津の十二府及二百十八郡二島二千五百七面を爲す道、郡島は内地の府縣郡島に、府は市に相當し面は町村に當れり而して道府及面は國の行政區劃たるを共に公共團體の地域を爲せり道府郡島面に道知事、府尹、郡守、島司、面長を置く就中道知事、府尹、面長は官廳事務を行ふと共に公共團體の事務を行ふ道は之を知事官房、内務部、財務部、警察部に配し之等各部長は道事務官を以て之に充つ而して知事官房に於ては機密、人事、褒賞に關する事務を内務部に於ては地方行政、學務、勸業、土木、會計等の事務を財務部に於ては稅務、理財の事務警察部に於ては警察衛生の事務を各分掌す

地方行政廳の職務權限は内地の地方行政廳に略ほ似たれども島に於ては島司を以て警察署長を兼ねしめ普通行政及警察事務を兼攝せしむる點を異にす而して又國稅徵收に關する事務は内地に於ては徵稅機關を特設せるも朝鮮に於ては道知事之を管掌し其の他府郡島に於ける民籍事務の監督民事裁判の結果裁判所の囑託に依る強制執行事務（内地の執達吏の事務）の取扱等は内地の地方行政廳に比し著しく相異せるものとす

第二節 公共團體

一 道地方費

大正九年七月新に道地方費令を公布し同年十月一日より之を施行せり道地方費には道評議會と稱する諮問機關を置き歳入出豫算、地方稅、使用料、手数料又は夫役現品の賦課徵收、起債其の他重要事項に關し道知事の諮問に應ぜしむ、道評議會會員の定員は十八人乃至三十七人とし定員の三分の二は府郡島に配當し府又は面協議會員の選舉したる候補者に就き之を任命し他の三分の一は道知事之を任命す

道地方費を以て支辨し得る費目は（一）土木費（二）勸業費（三）教育費（四）衛生費（五）救濟費（六）補助費（七）道評議會費（八）道地方費取扱費にして之が財源は地方稅及國庫補助金を主たるものとす地方



道評會議の實況(實南道)

税の課目は地稅附加稅、市街地稅附加稅及特別稅たる戶稅、家屋稅、屠場稅、屠畜稅、市場稅、車輛稅等とす

道地方費の歲計は併合以前に在りては全道を通し百萬圓に満たざりしも爾來各稅に於て年年多額の自然增收を見るの外道地方費に對する國庫補助金整理の爲國稅中より戶稅及家屋稅を移し且大正六年度より從來別に經理し來りし臨時恩賜金の收支を道地方費豫算に編入せし等の爲逐年増加を來し大正八年度に於ては七百五十萬圓となり更に大正九年度に於ては再次の國庫補助金整理、道路事業に對する夫役賦課及敷地寄附の廢止並一般物價騰貴に因る經費増加の財源として地方稅率を引上げたると且公立普通學校増設及修學年限延長計劃に對し國庫補助を増額せられたる等の爲著しく膨張し遽に千四百餘萬圓を算し更に大正十年度に在りては漁業稅、船稅、車輛稅の新規課徴並地稅及市街地稅其の他各稅稅率の引上等に依り千六百拾六萬餘圓に達し自然之に伴ふ各般の事業亦大に擴張進展を見るに至れり今道地方費歲入出及地方稅課目課率を掲ぐれば左の如し

道 地 方 費 豫 算

大正十年度

歲 入

其の 一

道名	地稅		市街地稅		戶稅	家屋稅	市場稅	屠畜(場)稅		漁業稅	船稅	車輛稅
	附加稅	稅	附加稅	稅								
京畿道	三四九、八八五	六〇、八三五	三五八、一六	一六三、二七三	五〇、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	一、四三三	—	一、五九〇	—	五七、三六七	
忠清北道	一七五、三二二	三九〇	二二八、二五〇	二、五六八	二五、五八二	二七、五〇〇	—	—	—	—	八、三五三	
忠清南道	三七一、四六五	二、二四五	二八八、〇〇〇	一〇、八九九	五七、四六六	五〇、〇〇〇	七六九	—	—	—	—	
全羅北道	三三〇、七〇六	三、〇六九	二九九、六〇〇	一五、五〇六	一九、八六四	二七、二二三	一、五二〇	—	—	—	—	
全羅南道	四四一、八五二	四、九六二	四八四、〇二八	一四、〇五五	二八、四六四	三三、八六二	三、〇七六	—	—	—	—	
慶尙北道	四八四、四四三	六、二九四	五三三、三三三	二〇、七八八	八、四三〇	八〇、〇〇〇	二七、一三二	—	—	—	—	
慶尙南道	四四〇、四〇〇	一五、〇〇〇	四四四、六〇〇	五、一三〇三	三八、〇〇〇	三六、〇〇〇	三三、二六三	—	—	—	—	
黃海道	二八六、七三三	九〇七	三八二、二四〇	七、四四九	五六、三二七	四一、四九三	一三、二四四	—	—	—	—	
平安南道	一五一、八三三	七、一七一	二六七、九五二	四、五三三	四七、一三六	四七、七九三	一、一三八	—	—	—	—	
平安北道	一〇五、二二〇	六三六	三〇七、三五〇	七、六七三	四九、〇三〇	三六、九〇七	三、二六一	—	—	—	—	
江原道	一三〇、一七七	—	三〇三、八三九	一、九三三	三七、六三九	三三、五〇〇	一、七〇一〇	—	—	—	—	
咸鏡南道	六五、六〇八	五、四五〇	二八五、〇〇〇	二、一六八	二、〇〇〇	二二、〇〇〇	一五、二七三	—	—	—	—	
咸鏡北道	三三、四三三	六三三	一三四、〇〇〇	一五、三九四	—	一七、五〇〇	一三、一六九	—	—	—	—	
合計	五、三三三、九〇六	一〇五、五三一	四、二九五、二八四	三七〇、一三八	四八九、七二八	五八一、七六六	一、五〇、〇八六	四、四七〇	五三、七、四四七	—	—	

明治四十三年年度	六〇五、四二七	一六、四〇六	—	—	一五七、五五五	三〇一、三四七	—	—
大正九年度	五、一六三、六三二	一〇一、一五五、八〇七、七三九	—	五五〇、一五二	五二六、八七三	五八八、二〇三	—	—

歳入

其の一

大正十年年度

道名	臨時恩賜	前年度	國庫補助	其他	計
京畿道	三三、七六一	二二〇、〇〇〇	三三九、三九四	三六五、五四一	一、一五〇、九二六
忠清北道	四一、六八四	一五、五九四	九四、四〇〇	一三三、一七七	七三九、五七〇
忠清南道	七三、三二二	一四、五一四	八六、三六六	六一、三二六	一、〇一一、五五六
全羅北道	六四、九二八	五三、四八四	一六五、五九五	五六、九六五	一、〇二八、三二五
全羅南道	八九、二七〇	九三、七五四	三五四、三二一	七六、四三三	一、五三三、四二七
慶尙北道	一〇六、五七七	四六、四六五	一五三、六三六	六九、四六九	一、六三一、四一三
慶尙南道	八〇、〇〇五	四〇、五五七	三二五、四〇九	一一三、五七七	一、五四五、三三八
黄海道	五八、三七九	九四、八四四	三二五、八六一	二三八、四四四	一、四二九、三五四
平安南道	五五、五七六	七三、〇九五	四〇〇、一九六	五一、六三四	一、一五七、五五〇

第六章 地方行政

第六章 地方行政

期治四十三年度	合 計	京 畿 道	忠 清 北 道	忠 清 南 道	全 羅 北 道	全 羅 南 道	慶 尙 北 道	慶 尙 南 道	黃 海 道	平 安 南 道	平 安 北 道	江 原 道	咸 鏡 南 道	咸 鏡 北 道
三〇三、四六四	四、〇九九、六二七	五三、八四三	二六二、七九〇	二四一、〇四七	二四八、六九五	四八四、七三一	三三八、六〇三	四三三、七二五	五二五、三三八	三三八、八四七	三三〇、四五一	三三〇、八四〇	二〇九、八四〇	一三六、八七九
三五、二八三	一七三、八八八	三二、四七〇	九、四八〇	九、五六〇	一五、六五一	二二、一〇三	四二、九〇一	一四、〇二〇	七、〇九四	一四、二六四	一、三五五	六、四七〇	四、九二〇	二、八五〇
一〇四、四五八	六八八、二四五	三三九、五九六	一八六、六四七	三〇七、七二〇	三三〇、七五七	四一、六八八	四八六、三〇一	一四、九三六	二四七、五二八	二五三、七八四	一四八、三九七	二五一、〇〇五	一六三、七七九	一五一、七二七
—	一、三三七、〇三二	三三八、六九一	五八、〇八三	八四、九九九	六五、一九一	八一、六五三	一三五、三三四	七四、五七七	八七、九四六	五三、六八九	八一、二〇〇	七七、〇〇七	四六、九〇八	四一、八三三
一六四、三三八	四八〇、五二二	七四八、五九六	一三五、〇八四	二七七、九六四	二六九、九六三	三六五、〇三五	四二二、〇一三	四九一、四一九	四七八、〇三六	五三三、七六六	五七八、二二七	五八八、四〇九	三八〇、四三七	四三三、三九四
—	二五三、七九二	五六、〇九六	三〇、二七五	一五、六九〇	一三、四九一	一八、〇〇九	四三、六三七	一五、八一	七、一五〇	三五、一九五	一〇、九八〇	一四、六三六	—	一三、八三三
—	九五、九四〇	一三、七七六	五、一六九	七、六七五	六、七九三	八、八六七	一〇、六五六	三、〇五五	五、八三八	五、五五九	六、〇八五	五、九九三	四、五九九	二、九二五
五、六〇〇	三三、六八三	五、六九六	八〇〇	一、七七三	一、二八五	一、五二二	一、一三八	二、三二四	一、七四六	一、八三三	一、一〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	五三〇

道名	土木費	衛生費	勸業費	授産費	教育費	社會救濟事業費
	良地方改費	凶獄救濟費	救恤費			
大正九年度	四、〇九六、七七九	一五三、五七二	二、八三四、四六五	二、四九一、二九四	四、三六八、二五七	七四、八三〇
						一、三三、三三八

歳出

其の二

大正十年度

道名	道評議費	地方費取扱費	臨時恩賜金繰戻金	其他	豫備費	計
京畿道	九、〇八四	四六、〇七四	—	八、三三〇	五八、七九四	一一、一五〇、九二六
忠清北道	五、七二六	二四、一五〇	二、一四九	一一、三八〇	八、六四七	七三九、三七〇
忠清南道	五、五〇〇	三三、三六四	七、五八一	四、〇六〇	一八、八三四	一、〇一、五五六
全羅北道	三、八五一	三三、〇三三	一〇	三、〇八三	五七、五三五	一、〇三八、三一五
全羅南道	七、七九九	五八、一一三	七、九二七	二五、三三〇	四一、七九一	一、五三三、四三七
慶尙北道	三、三四七	五三、三六九	二四〇	七、八五八	四八、一三六	一、六五一、四一三
慶尙南道	八、五一八	三〇、六一七	七、八五七	一、二三四	一三、九〇五	一、五四五、五三八

黃海道	三、八〇〇	三六、一〇五	五、四九八	八、二七一	一五、五五〇	一、四二九、三五〇
平安南道	四、二一一	二四、九六〇	二、六二五	八〇四	三九、一〇〇	一、一五七、五五〇
平安北道	六、三〇〇	三三、四〇〇	六、〇五五	五、七五二	五、〇六六	一、一四五、七八七
江原道	六、四一七	二一、〇六〇	二、五〇七	二、七六七	一〇、四三九	一、〇〇八、三五二
咸鏡南道	六、二〇〇	一六、六五〇	四、五一六	一、四七七	五〇、九九四	八九一、五〇〇
咸鏡北道	三、〇〇〇	一三、一八二	二、八九〇	一一、九〇〇	一三、六〇四	九〇四、九二六
合計	九七、七三三	三九五、九七五	四九、八二五	一九三、四二六	五七九、一五五	一六、一六六、六一二
明治四十三年度	—	—	—	—	—	—
大正九年度	—	三〇〇、四七七	五五、〇八五	一〇一、二二一	四三三、五五三	一四、〇一三、七六八

地方税賦課率表

其の一

道名	附加税	市街地稅	屠畜稅	市場稅	戶稅	家屋稅	船稅	漁業稅
京畿道	—	—	—	—	—	—	—	—

〔京畿道第一等月四百円乃至二十等月二円其の地稅割當格百分の二〕

道名	附加稅	市街地稅附加稅	屠畜稅	市場稅	戶稅	家屋稅	船稅	漁業稅
忠清北道	本稅百分の三〇	同上	屠牛一頭に付、五〇	放賣價格百分の一	平均一戸に付、一、五〇	等級課率は府之面を定む	省略	省略
忠清南道								
全羅北道	同上	同上	同上	市場規則第一條第三號該當の市場收入金額百分の五	同上	同上	同上	同上
全羅南道								
慶尙北道	同上	同上	同上	放賣價格百分の一	同上	同上	同上	同上
慶尙南道								
黃海道	同上	同上	同上	放賣價格百分の一	同上	同上	同上	同上
平安南道								
平安北道	同上	同上	同上	放賣價格百分の一	同上	同上	同上	同上
江原道								
咸鏡南道	同上	同上	同上	放賣價格百分の一	同上	同上	同上	同上
咸鏡北道								



（人鮮朝）屋長營府町菜蓬城京

權利を有し府の負擔を分擔するの義務を負ふものとす

(ハ)府税、使用料及手数料、府税は國税たる市街地稅、地方税たる家屋稅の附加税及特別税として府内に住所を有する者、三月以上府内に滞在する者、府内に於て土地家屋物件を所有し使用し若し占有し、府内に營業所を設けて營業を爲し又は府内に於て特定の行爲を爲す者は其の土地家屋物件營業若し其の收入に對し又は其の行爲に對して之を賦課す尤も國又は公共團體に於て公用に供する土地家屋物件及營造物、恩賜金事業の用に供する土地家屋物件並神社寺院祠宇佛堂の用に供する建物及其の境内地、教會所、説教所の用に供する建物及其の構内地、墓地、外國政府の所有に屬する領事館及其の敷地等には府税を課せざるものとす

府は營造物の使用に付使用料を徴收し又特に一個人の爲にする事務に付手数料を徴收することを
得るものとす

(ニ)府の機關及權限、國の官吏たる府尹は府を統轄し及代表す必要あるときは府費を以て府吏員を置くことを得府吏員は府尹之を任免し懲戒するの權限を有す

府尹の諮問に應せしむる爲府に協議會を置く協議會は府尹及協議會員を以て之を組織し府尹を以て議長たらしむ協議會員は府住民中より名望識見ある者を選擧し朝鮮總督の認可を受け道知事之を命

するの制なりしも大正九年之を改め帝國臣民にして獨立の生計を營む年齢二十五年以上の男子一年以來府住民を爲り其の府に於て朝鮮總督の指定したる府税年額五圓以上を納むる者をして之を選擧せしむることとせり協議會員は名譽職にして其の任期を三年とす協議會員の定員は人口に依り之を定む現在の定員左の如し

京城府	三十人	大邱府	十六人	嶺南浦府	十四人
仁川府	十六人	釜山府	二十人	新義州府	十二人
蔚山府	十二人	馬山府	十二人	元山府	十四人
水浦府	十二人	平壤府	二十人	清津府	十二人

協議會に諮問すへき事項左の如し但し急施を要し協議會に諮問する暇なしと認むるときは此の限に在らず

一、府條例を設け又は改廢する事

二、歳入出豫算を定むる事

三、府債に關する事

四、歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲す事

五、基本財産、特別基本財産及積立金穀の設置又は處分に關する事

六、府の廢置又は境界變更の場合に於ける財産の處分に關する事

以上の外府尹は必要と認むるときは前各項に掲ぐる事件の外府に關する事件を諮問することを得るものとす

(ホ)豫算、今府の歳入歳出豫算を掲ぐれば左の如し

府歳入歳出豫算前年度比較表

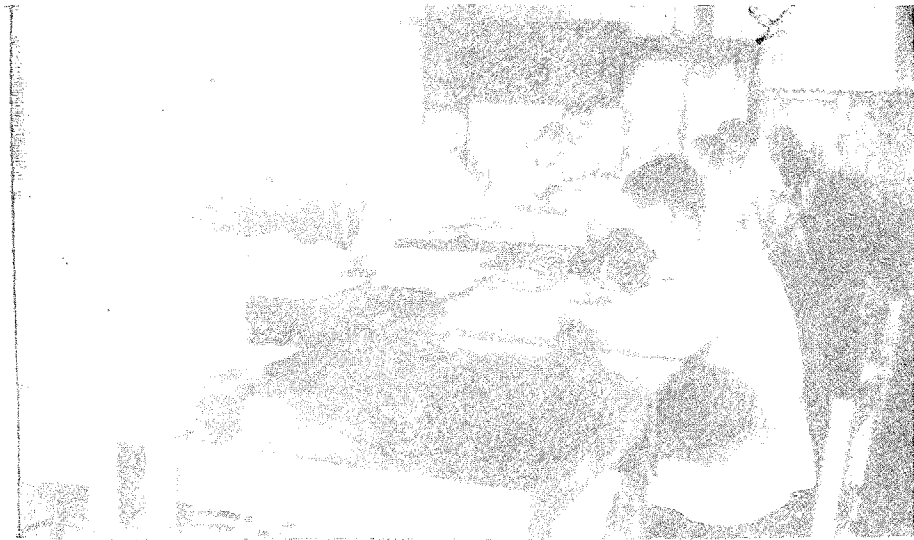
歳入の部

區別	經常部		臨時部		合計	
	十年年度	九年度	十年年度	九年度	十年年度	九年度
京城府	九七二、六五七	九三九、一〇〇	六一七、一七三	三三六、九二四	一、五八九、八三〇	一、二七六、〇二四
仁川府	一九五、二八三	一五五、二〇八	五九、二九四	七六、四四二	二五四、五七七	二三一、六五〇
群山府	一〇二、四六八	九九、九一七	二〇、四四八	八、九八六	一二二、九一六	一〇八、九〇三
木浦府	九一、六〇四	九一、四二八	一五、五五〇	三一、一六〇	一〇七、一五四	一二二、五八八
大邱府	二一七、七六六	一八五、三四一	一四〇、二一五	五六、九五〇	三五七、九八一	二四二、二九一

區別	經常部		臨時部		合計	
	十年度	九年度	十年度	九年度	十年度	九年度
釜山府	六四七、〇三九	五四七、五三二	二〇三、六三四	一八三、三九四	八五〇、六七三	七三〇、九二六
馬山府	三三、九二七	三二、〇九七	七、二八一	六、二五七	四一、二〇八	三八、三五四
平壤府	五二八、四八九	二三七、一五一	八八、六九二	一五〇、八五〇	三二七、一八一	三八八、〇〇一
嶺南府	九三、六五七	一〇二、六八四	四四、八〇七	五七、〇七六	一三八、四六四	一五九、七六〇
新義州府	八一、四四二	五五、八七四	八三、四七七	一五〇、〇九三	一六四、九一九	二〇五、九六七
元山府	一二八、六八二	一二三、五七八	二九、八〇七	三七、五一一	一五八、四八九	一六一、〇八九
清津府	九六、三〇九	六四、四七九	一四、八五二	一九、二〇六	一一一、一六一	八三、六八五
計	二、八八九、三三三	二、六三四、三八九	一、三三五、三三〇	一、一四八、八四九	四、二一四、五五三	三、七四九、二三八

歳出の部

區別	經常部		臨時部		合計	
	十年度	九年度	十年度	九年度	十年度	九年度
京城府	八二三、八九〇	七八九、〇〇五	七六五、九四〇	四八七、〇一九	一、五八九、八三〇	一、二七六、〇三四



京畿道高陽郡蘇島面事務所於此執行狀況

仁川府	群山府	木浦府	大邱府	釜山府	馬山府	平壤府	鎮南府	新義州府	元山府	清津府	計	
一一〇、九一四	一〇〇、八二五	七八、三二六	六八、六二〇	一七九、八三三	四〇九、三七七	三六、四四三	一九四、二〇二	八四、八二八	七七、四二三	一一一、六〇八	八三、八九六	二、二八五、六九六
一三三、六六三	三六、六二七	四〇、一六一	一七八、一四八	三六六、二六七	三一、九五四	一七九、六三二	九〇、二二五	三七、四一一	一〇七、〇六三	五四、三九五	二七、二六五	二、〇七七、七九二
一三三、六六三	三六、六二七	四〇、一六一	一七八、一四八	四四一、二九六	四、七六五	一一二、九七九	五三、六三六	八七、四九六	三六、八八一	二七、二六五	二七、二六五	九二八、八五七
一三〇、八二五	三〇、五七七	五三、九六八	八八、二二三	三四四、六五九	六、四〇〇	二〇八、三六九	六九、五三五	一六八、五五六	五四、〇二六	二九、二九〇	二九、二九〇	一、六七一、四四六
二五四、五七七	一一二、九一六	一〇七、一五四	三五七、九八一	八五〇、六七三	四一、二〇八	三二七、一八一	一三八、四六四	一六四、九一九	一五八、四八九	一一一、一六一	一一一、一六一	二、一四、五五三
二三一、六五〇	一〇八、九〇三	一一二、五八八	二四二、二九一	七三〇、九二六	三八、三五四	三八八、〇〇一	一五九、七六〇	二〇五、九六七	一六一、〇八九	八三、六八五	八三、六八五	三、七四九、二三八

三 面

面制は大正六年六月公布せられ同年十月一日より府を除きたる地に施行せられたり、面は府制に依り事業を經營し財産權の主體と爲れり、面制施行前に在りても國の事務處理に要する面長手當及面事務

執行に要する費用は面の負擔とし面賦課金を賦課するの途ありしも法令上事業經營の能力なかりし爲協議費の名の下に其の費用を醗集し以て契、組合等を設け地方の公共事務を處理し來れり然れども是等は法令上何等の根據なく其の組織任意なるが爲延て地方事務の統一を缺き或は負擔徒に増加せむとする傾向を呈したるを以て是等の事務を面に整理統一せんが爲面制を布き地方制度を確立するに至りしものとす而して内鮮人多數集團して市街地を形成し其の狀態府に近邇せる面は其の經營事業繁多にして他の面と事情を異にするを以て是等の面廿四箇所を指定し面長の諮問機關たる相談役を置き且起債能力を認めたるも右相談役は何れも政府の任命に係り且其の定員少數にして民意の反映に乏しきを以て大正九年十月面制を改正して各面に面協議會を置き面の財政其の他重要事項に關し面長の諮問機關たらしめ時勢の進運に策應して民意を暢達せしむるの途を啓けり即ち左の如し

(イ)面の事務 面は法令に依り面に屬する事務を處理するものなるも民度未だ低く負擔力も亦乏しきが故に無制限に其の事務の範圍を放任せば事の緩急機宜を愆け延て面民の負擔を過重ならしむる虞なきに非らず仍て左の如く其の事務の範圍を限定せり

一 道路橋梁渡船、河川堤防、灌溉排水

二 市場、造林、農事養蠶畜産其の他の産業の改良普及、害鳥蟲驅除

三 墓地、火葬場、屠場、上水、下水、傳染病豫防、汚物の處置

四 消防、水防

而の狀況に由りては朝鮮總督の認可を受け前各號以外の事務を處理することを得尙面制以外の法令に於て面に屬せしめたる事務例へは國稅の徵收、地方費賦課金の徵收、學校費賦課金の徵收等の如き處理事務あり

(ロ) 面協議會及協議會員

面協議會は面長及面協議會員を以て組織し面長を以て議長とす協議會員は名譽職にして其の任期を三年とし定員は人口に應じ八人乃至十四人を置けり之か選任方法は其の民度に於て從來經驗せざる選舉方法を一律に各面に採用し得ざる事情あるか故に總督の指定する面に限り住所、納稅、年齢等に付法定の資格を有する選舉人をして選舉せしめ其の他の面の協議會員は郡守島司に於て法定の資格を有する者の中に就き之を任命するものなるも是等に就ても實際の運用に當りてはなほ民意を參酌し衆望の歸する者を舉ぐるの趣旨に於て適宜の方法を講じて面民の意見を參酌して任命することとせり

前記指定面左の如し

- 京畿道 水原郡水原面、開城郡松都面、始興郡永登浦面
 忠清北道 清州郡清州面
 忠清南道 公州郡公州面、大田郡大田面 論山郡江景面、燕岐郡烏致院面
 全羅北道 全州郡全州面、益山郡益山面
 全羅南道 光州郡光州面
 慶尙北道 金泉郡金泉面、迎日郡浦項面
 慶尙南道 晉州郡晉州面、昌原郡鎮海面 統營郡統營面
 黃海道 海州郡海州面、黃州郡兼二浦面
 平安北道 義州郡義州面
 江原道 春川郡春川面
 咸鏡南道 咸興郡咸興面
 咸鏡北道 鏡城郡羅南面、城津郡城津面、會寧郡會寧面

(ハ)面の職員

面には面長の補助機關として書記、區長を置き前項に依る指定面には副長を置く又特に必要なる

面に在りては技手を置くことを副長、書記及技手は有給吏員とし副長は面長の事務を補佐す又町洞里に區長を置く區長は無給とし町洞里(内地市町村の區及大字に類す)内に於ける面の事務にして洞里内に告知を要するもの又は面の經營する事業にして洞里に關係あるものに付之を補助す

(二)面の財務 面は其の財産より生ずる收入、使用料、手数料其の他面に屬する收入を以て支出に充て仍不足あるときは賦課金及夫役現品を賦課徴收することを得而して其の必要なる費用及法令に依り面の負擔に屬する費用を支辨するものにして賦課金として賦課し得べきは地稅制、市街地稅制、戸別割及特別賦課金とす而して是等の賦課は面内に住所を有する者、三月以上面内に滞在する者 面内に於て土地家屋物件を所有し使用し若は占有し、面内に營業所を設けて營業を爲し又は面内に於て特定の行爲を爲す者に對し之を賦課するものとす

(水)面組合 面に於て處理すべき事務は概ね其の面のみ關係に止まり他面との利害直接相關聯すべきものは稀なりと雖其の事務の種類に依りては隣接面と共同して之を經營を爲すに非されは十分に其の目的を達し難き場合あるを以て是等の場合に於ては朝鮮總督の認可を受け關係各面の組合を設け共同して其の事務を處理し得るものとす

面歲入歳出豫算

歳入

大正十年度

道名	面數	賦課金	其他	計
京畿道	二四九	一、〇四七、九二三	三八二、〇九八	一、四三〇、〇二一
忠清北道	一一〇	五五七、一二七	二〇九、九六一	七六七、〇八八
忠清南道	一七五	九五九、九八一	二九三、五四四	一、二五三、五二五
全羅北道	一八八	九二八、六三九	三九九、五〇六	一、三二八、一四五
全羅南道	二六九	一、〇三六、九八九	三〇四、五八五	一、三四一、五七四
慶尙北道	二七二	一、三六〇、九九七	四〇九、八五九	一、七七〇、八五六
慶尙南道	二五七	一、二三一、四一〇	四〇三、七四六	一、六三五、一五六
黃海道	二二六	八八五、二四三	二六〇、八五七	一、一四六、一〇〇
平安南道	一六七	六三〇、一七〇	一六七、七〇八	七九七、八七八
平安北道	一九四	六三三、〇八八	一六八、五八一	八〇一、六六九
江原道	一七八	五九五、四二四	一七〇、九七一	七六六、三九五
咸鏡南道	一四一	四五九、一九七	一四三、七七五	六〇二、九七二

成鏡北道	八一	二二六、六六〇	一〇六、三一一	三四二、九七一
大正九年度	計 二、五〇七	一〇、五六二、八四八	三、四二一、五〇二	一三、九八四、三五〇
同八年度		九、五五二、五三五	二、三六四、〇五八	一一、九一六、五八三
同七年度		四、三一、五八五	一、七八二、二三一	六、〇九三、八一六
同元年度		三、〇九六、四七八	一、三六六、四七一	四、四六二、九四九
		二、三一六、五一九	二、三九、八一九	二、五五六、三三八

歲出

道名	給與及事務所費	土木費	勸業費	衛生費	其ノ他	計
京畿道	一、〇二五、九二六 円	四八、三二七 円	五七、二九三 円	八七、八九五 円	二一〇、五八〇 円	一、四三〇、〇二一 円
忠清北道	五三三、三二三	一一三、〇六二	八、三一〇	三九、〇一四	七三、三七九	七六七、〇八八
忠清南道	八一八、五四一	二七、四四二	九七、四一三	一四八、八三七	一六一、二九二	一、二五三、五二五
全羅北道	九一七、〇三八	九、四六三	一八、六一〇	二五五、七一六	一二七、三一八	一、三二八、一四五
全羅南道	九七五、二四七	六八、六九五	五一、七五〇	五七、四五六	一八八、四二六	一、三四一、五七四
慶尙北道	一、二九二、一三九	一三四、一七〇	四九、六九三	九〇、八六四	二〇三、九九〇	一、七七〇、八五六

第六章 地方行政

道名	給與及事務所費	土木費	勸業費	衛生費	其ノ他	計
慶尚南道	一、〇九五、九八五	八九、三六七	一一八、五五〇	一二七、〇四一	二〇四、二一三	一、六三五、一五六
黃海道	八七五、四四一	一九、一五七	二〇、二六九	七三、五一八	一五七、七一五	一、一四六、一〇〇
平安南道	六〇五、一七五	八、九〇三	一八、三八一	四六、九五〇	一一八、四六九	七九七、八七八
平安北道	七〇〇、二一一	一一、七六三	四、九六三	三四、九二八	四八、八一四	八〇一、六六九
江原道	六一七、八八二	二、八一〇	一八、〇九三	二八、二二五	九九、三九五	七六六、三九五
咸鏡南道	四六二、三五八	三、一一一	二五、〇六五	三四、八六二	七七、五八六	六〇二、九七二
咸鏡北道	二一四、四五五	二二、一五六	七、七一五	三〇、〇六七	六七、五七八	三九二、九七一
計	一〇、一五三、七一一	五六〇、四三六	四九六、一〇五	一、〇五五、三五三	一、五七八、七三五	一三、九八四、五五〇
大正九年	八、八八六、四二四	四二八、五〇〇	四一九、九七〇	六四九、六九三	一、五三一、九九六	一、九一六、五八三
同八年	四、四一三、七七〇	一七二、九〇五	二八一、六一三	四七七、七六六	七四七、七六二	六、〇九三、八一六
同七年	三、二五三、一〇九	八二、一五四	一九二、五三三	三五五、一一九	五八一、〇三四	四、四六二、九四九
同元年度	二、四四一、一九四	—	—	—	一一五、一四四	二、五五六、三三八

四 學校費

明治四十四年十一月朝鮮教育令發布當時朝鮮人教育の爲各府郡島に設けられたる公立普通學校に關

する經費は殆んど臨時恩賜金、利子、財産收入等に依り支辨し補足的に賦課金徴收の途を設けたるものなりしか普通學校増設並其の修學年限延長計畫に伴ひ其の根本法制を改むるの必要を生ずるに至り從來の公立普通學校費用令を廢して新に朝鮮學校費令を制定し大正九年十月一日より之を施行せり

(イ) 學校費

普通學校其の他朝鮮人教育に關する費用を支辨する爲府郡島に之を設け府尹、郡守、島司之を管理す
(ロ) 學校評議會及評議員

學校費に關し府尹、郡守、島司の諮問に應せしむる爲學校評議會を置く學校評議會は府尹、郡守、郡守、島司及學校評議會會員を以て組織し府尹、郡守、島司を以て議長とす學校評議會の定員は府に在りては六人乃至二十人とし郡島に在りては郡島内の面の數と同數とす學校評議會は諮問すべき事件は歳入出豫算、賦課金、使用料又は夫役現品の賦課徴收及起債に關する事項等なり
學校評議會會員は名譽職とし其の任期を三年とす其の選任方法は府に在りては之を選擧し郡島に在りては郡守、島司之を命ずるものとす

(ハ) 學校費の財務

學校費は賦課金、使用料、補助金、財産收入其の他の學校費に屬する收入を以て之を支辨す賦課金として賦課することを得べきものは地稅又は市街地稅の附加金、戶稅又は家屋稅の附加金、特別賦課金にして府郡島内に住所を有し又は土地家屋を所有する朝鮮人に之を賦課し尙必要ある場合は夫役又は現品を賦課することを得せしむ其の他營造物の使用に付ては使用料を徵收し、永久の利益となるべき事業、舊債償還又は天災事變の爲必要ある場合に限り起債を爲すことを得るものとす

五 學校組合

從來朝鮮に於ける内地人の教育は日本人會又は居留民團に於て經營せしか明治四十二年十二月統監府令を以て學校組合令の發布せらるるに共に此等の事務は學校組合に於て處理することとなり土地の狀況に因りては附帶事業として衛生事務を處理することを認めたり併合後内地人の渡鮮する者逐年増加し從來の日本人會は漸次其の組織を學校組合に變更するに至れり其の後大正三年四月府制の施行と同時に學校組合令を改正し舊居留民團所在地たる府の區域に於ても亦内地人教育に關する學校組合を組織せしめ全土を通して其の制を統一せり現行學校組合令に於ては教育事業の經營を主とするも從來居場、火葬場、墓地等を經營し來りたる組合に對しては當分之繼續を認め居れり

(イ) 學校組合の設置と組合規約及組合員の權利義務 學校組合を設置せむには發起人區域を定め其の區域内に住所を有し獨立の生計を營む内地人三分の二以上の同意を得て組合規約を作り朝鮮總督の許可を受けざるべからず而して組合員は營造物を共用する權利を有すると同時に組合の負擔を分任するの義務を負ふ

(ロ) 學校組合會と議決事項 學校組合に組合會を置く組合會議員は之を選擧す組合會議員は名譽職とし議員の選擧及被選資格は組合規約を以て之を定む組合會の議決事項は左の如し

- 一 組合規約を變更する事
- 二 歳入出豫算を定むる事
- 三 決算報告を認定する事
- 四 基本財産、特別基本財産及積立金穀等の設置管理及處分に關する事
- 五 不動産の管理及處分に關する事
- 六 財産及營造物の管理方法を定むる事但し法令に規定あるものは此の限に在らず
- 七 法令に定むるものを除くの外使用料組合費及夫役現品並其の賦課徴收に關する事
- 八 組合債に關する事

九 歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し又は權利の拋棄を爲す事

十 組合に係る訴訟及和解に關する事

(ハ) 學校組合管理者と組合吏員 學校組合に管理者を置く管理者は組合員中より道知事之を命し其の任期を三年とす但し府の區域を包含する學校組合に在りては府尹其の管理者の職務を行ふ管理者は名譽職たることを原則とすれども必要に依り有給を爲すことを得

學校組合には管理者の外に有給又は名譽職の吏員を置くことを得其の任免、懲戒處分等は管理者之を行ふ有給の管理者及吏員に對しては組合規約の定むる所に依り退職料、退職給與金、死亡給與金又は遺族扶助料を給することを得名譽職たる管理者及吏員に對しては職務の爲要したる費用を辨償するの外勤務に相當する報酬を給することを得

(ニ) 學校組合の經費と徴收及寄附又は補助 組合は營造物の使用に付使用料を徴收するの外組合財産より生ずる收入其の他組合に屬する收入を以て其の經費を支出し仍不足あるときは組合費及夫役現品を賦課徴收することを得又組合は内地人の教育に關し必要なる場合に於ては寄附又は補助を爲すことを得

(ホ) 組合の監督 學校組合の監督は第一次を郡守島司、第二次を道知事、第三次を朝鮮總督とす但

し府尹管理者の職務を行ふ場合に於ては第一次を道知事とし第二次を朝鮮總督とし組合規約の變更、組合の起債及其の方法、利息の定率、償還の方法を定め又は其の變更を爲すには朝鮮總督の許可を要す而して道知事は組合管理者に對し懲戒を行ふことを得

左記事項に付ては道知事の許可を受くるを要す

一 基本財産の管理及處分に關する事

二 特別基本財産及積立金數等の設置管理及處分に關する事但し積立金數等を其の目的の爲使用する場合は此の限に在らず

三 不動産の處分に關する事

四 寄附又は補助を爲す事

五 使用料、組合費及夫役現品の賦課徴收に關する事

六 一時の借入金を爲す事

七 繼續費を定め又は變更する事

八 歳入出豫算を以て定むるものを除くの外新に義務の負擔を爲し及權利の拋棄を爲す事

學校組合歳入出豫算

大正十年度

道名	歲入		歲出		賦課金 一戶當 平均額
	經常部	臨時部	經常部	臨時部	
京畿道	八〇三、三三八	四三三、二一〇	一、二二五、四五八	八五七、〇三一	二九、四五二
忠清北道	五二、八〇一	一〇四、五三〇	一五九、三三二	七四、三〇九	二二、三六九
忠清南道	一五三、二二二	一〇〇、五七四	二三四、七八六	一九七、四五九	二二、五三六
全羅北道	一四九、六六四	一四九、八一四	二九五、四七八	二三五、二一〇	二四、二〇五
全羅南道	一八五、〇八四	一五八、七四四	三四三、八二八	二九〇、〇三六	二二、七〇五
慶尙北道	一九三、六二二	一八九、五六八	三八三、一八九	三〇一、一五六	二〇、七三七
慶尙南道	四八九、三〇六	二四七、四五四	七三六、七六〇	六六一、一六六	二二、〇二二
黃海道	八九、四五六	五〇、八一三	一四〇、二六八	一三三、一一九	一八、四九八
平安南道	一八〇、八三六	一〇八、一七一	二八八、九九七	二四〇、九七六	二二、二六七
平安北道	一〇三、九三九	一一九、五五七	二二二、四八六	一五六、二六五	二一、七五二
江原道	三九、四一九	五八、六三〇	七八、〇四九	六四、三〇四	二一、一八六
咸鏡南道	一一九、一九四	四八、八一四	一六八、〇〇八	一五六、四二五	二五、一八七
咸鏡北道	一〇五、九三〇	四八、二〇二	一五四、一三二	一五一、一九三	二二、六九九
合計	二、六四三、七七〇	一、七七四、九七九	四、四一八、七四九	三、四九七、四二八	二四、三八四

年度	組合數	戶數	人口
大正三年度	九〇一、八二二	二九四、〇九六	一、一九五、九〇八
大正七年度	一、一四七、六九四	七五五、八八六	一、五七九、六〇八
大正八年度	一、五八九、三五二	一、〇〇一、八九四	二、三九一、二四五
大正九年度	二、三二三、五〇一	二、〇三〇、五六九	四、三五四、〇七〇

學校組合數及組合戶口

大正十年四月一日

道名	組合數	戶數	人口
京畿道	三七	二二、〇〇五	八九、五二四
忠清北道	一一	一、三八八	四、九一九
忠清南道	三二	四、〇六五	一五、五四三
全羅北道	三三	五、三〇二	二一、二〇八
全羅南道	五〇	六、〇五一	二二、六九六
慶尙北道	四八	七、〇六三	二六、六三五
慶尙南道	六九	一五、七四一	六五、八四五
黃海道	二一	三、八一	一三、三五三

道名	組合數	戸數	人口
平安南道	二二	五、七六九	二一、八四四
平安北道	二三	二、九八七	九、二八八
江原道	一八	一、六二二	四、五九四
咸鏡南道	一九	三、九六六	一三、四七四
咸鏡北道	一一	四、二八四	一三、五一四
合計	三九四	八四、〇五四	三二二、四三七
大正三年度	二五八	六六、九七〇	二〇四、六二〇
大正七年度	三四八	八三、〇六五	三〇五、二四五
大正八年度	三六三	八五、四一四	三一、二、八三七
大正九年度	三八四	八六、一三七	三二五、四八三

六 水利組合

朝鮮水利組合令は大正六年七月公布同年十月一日より施行せられたり

(イ)水利組合の目的 水利組合は官の監督を承け灌漑排水又は水害豫防を以て其の目的とす

(ロ) 水利組合の區域及組合員 水利組合は組合事業の爲利益を受くる土地を以て其の區域を爲す而して灌漑排水を目的とする組合に在りては畝さなむとする畑若は未墾地等の土地所有者を以て組合員とし水害豫防を目的とする組合に在りては田畝等の所有者及事業の爲利益を受くる家屋其の他の工作物の所有者を以て組合員とす又未墾地の利用者を土地所有者と看做し組合員と爲す

(ハ) 水利組合の設置合併分割又は廢止 水利組合の設置は組合員五人以上創立者と爲り組合規約を作り組合員たるべき者の二分の一以上にして組合の區域となるべき地の總面積の三分の二以上に當る土地所有者の同意を得て朝鮮總督の認可を受くるを要す而して其の合併分割又は廢止を爲さんとするときは組合員の同意を得朝鮮總督の認可を受けざるべからず

(ニ) 水利組合の機關

一 組合長及組合吏員 組合を代表し其の事業を處理する爲組合長を置き書記及技士をして其の事務を補助せしむ特別の事情ある組合に於ては組合規約に依り副組合長、理事、出納役、技士長又は委員を置くことを得

二 評議會 評議會は組合長及評議員を以て組織し組合規約の變更、組合の費用を以て支辨すべき事業、組合の豫算、組合費夫役現品使用料加入金の賦課徴收、起債其の他重要事項の諮問機

關せず評議員は組合員中より互選し道知事の認可を受くるを要し其の任期を四年とす

(ホ) 水利組合の經費 水利組合は事業經營の爲毎年豫算を編成し經費を支辨す之を爲組合員に對し組合費を賦課す即ち灌漑排水を目的とする組合に在りては土地に對し水害豫防を目的とする組合に在りては土地の外家屋及工作物に對し組合費を賦課す場合に依りては夫役現品を以て之に代へ又組合員以外の者と雖組合區域内に居住し其の利益を享くる者に對しては夫役を賦課す組合區域の擴張したる場合には新に編入せられたる土地の所有者より加入金を徵收す其の他營造物に對し使用料を徵收し或は積立金を爲し起債等を爲すことを得

(ヘ) 水利組合聯合會 組合區域の近接せる間に在りては用水引用の施設其の他に關し他の組合と共同行爲を必要とする場合には水利組合聯合會を設くることを得聯合會は法人とし其の事務及事業を處理に付ては水利組合に準ずるものとす

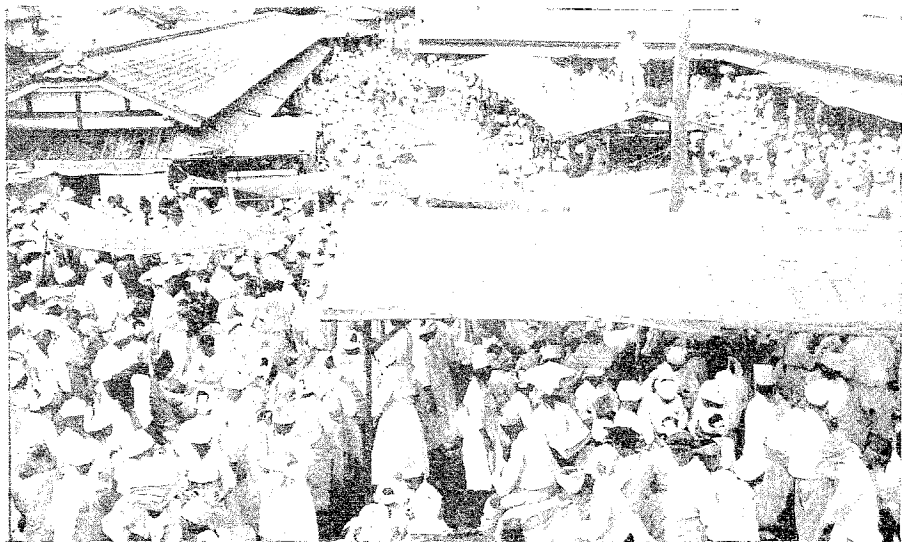
(ト) 水利組合の監督 水利組合の監督は第一次を府尹郡守島司、第二次を道知事、第三次を朝鮮總督とす但し府尹郡守又は島司組合長の職務を行ふ場合又は組合の區域數府郡に跨るときは第一次を道知事、第二次を朝鮮總督とす又組合の區域二以上の道に互るときは第一次を朝鮮總督の指定したる道知事、第二次を朝鮮總督とす

水利組合概況

大正十年九月

組合名	事務所所在地	組合區域	事業費	設置認可年月日
沃溝西部水利組合	全羅北道沃溝郡米面米龍里	四六〇	九〇〇	明治四一、一二、八
臨盆水利組合	全羅北道益山郡黃登面黃登里	三、五九〇	五二七、五〇三	四二、二、一
密陽水利組合	慶尙南道密陽郡府內面駕谷里	七四三	一一七、五〇〇	四二、二、五
馬九坪水利組合	忠清南道論山郡夫赤面馬九坪里	三一三	五七、五〇〇	四二、三、一
全益水利組合	全羅北道益山郡春浦面大場村里	一、四四五	一五、〇〇〇	四三、一、二四
金海水利組合	慶尙南道金海郡金海面東上里	一、九九七	二九八、七〇〇	大正元、一一、九
大正水利組合	平安北道龍川郡府內面龍岩洞	六、八六一	一、七五〇、〇〇〇	三一〇、三一
迎日水利組合	慶尙北道迎日郡浦項面浦項洞	一、四〇〇	二三〇、六〇〇	五、二、二
古阜水利組合	全羅北道井邑郡古阜面古阜里	四、一六	七六八、〇〇〇	五、五、二
上南水利組合	慶尙南道密陽郡上南面禮林里	二六一	三七、七〇〇	五、九、九
大渚水利組合	慶尙南道金海郡大渚面出斗里	一、八八三	三六八、〇〇〇	五、一一、一四
三橋川水利組合	平安北道龍川郡楊下面立岩洞	五四一	四五、〇〇〇	六、五、一八
麗華水利組合	京畿道水原郡水原面新豐里	二四五	三、六〇〇	八、五、二二

組合名	事務所所在地	組合區域	事業費	設置認可年月日
義林池水利組合	忠清北道堤川郡堤川面茅山里	二九〇	五、六〇〇	大正八、六、二
文幕水利組合	江原道原州郡建登面文幕里	五六七	三三三、〇〇〇	八、七、一八
深谷水利組合	京畿道抱川郡深北面深谷里	八〇	二四、〇〇〇	七、二、二五
下東水利組合	慶尙南道金海郡下東面月村里	六九九	二七九、〇〇〇	九、一、二三
益沃水利組合	全羅北道益山郡益山面裡里	九、六四一	五、六八六、八〇〇	九、二、五
都泉水利組合	慶尙南道昌寧郡都泉面松津里	一四七	三四、〇〇〇	九、三、一九
明岩堤水利組合	忠清北道清州郡清州面本町五丁目	一九七	九九、四〇〇	九、七、二九
長芝堤水利組合	京畿道水原郡城湖面烏山里	六四	一六、〇〇〇	九、七、一五
同仁水利組合	平安北道定州郡大田面雲田洞	四、一〇〇	二、九九四、〇〇〇	九、九、二二
大山水利組合	慶尙南道昌原郡大山面一洞里	一、四三五	八五三、〇〇〇	九、一、六
新灘津水利組合	忠清南道大田郡北面石峰里	一四〇	八六、〇〇〇	九、二、二五
於雲水利組合	江原道鐵原郡鐵原面官田里	五五〇	三一六、五〇〇	九、二、二七
石隅水利組合	平安北道博川郡青龍面鳳之洞	七一	一〇、一〇〇	一〇、三、三
咸安水利組合	慶尙南道咸安郡伽倻面未山里	一、二六六	一、二五六、三〇〇	一〇、三、七
普門水利組合	慶尙北道慶州郡慶州面	三八〇	四一、〇〇〇	一〇、四、二〇



平壤府營公設市場

北面水利組合	慶尙南道昌原郡北面新村里	三三七	三六一、四〇〇	一〇、五、二三
大同水利組合	平安南道大同郡南兄弟山面社堂里	三二〇	三三八、〇〇〇	一〇、八、二三
陽東水利組合	京畿道金浦郡陽東面木洞里	六五一	六四一、一〇〇	一〇、九、一五
計		三三一	四四、七九九	一七、四八五、二三五

第三節 府郡島臨時恩賜金

併合の際特に下賜せられたる臨時恩賜金三千萬圓の内一千七百三十九萬八千圓は之を府郡島に配與して永久に保存せしめ其の利子の凡五分の三は授産に、其の五分の一、五は教育に、其の五分の〇、五は凶歉救済の資に充つる方針を以て事業を計畫し若は適切なる事業に對して補助を與へ洽く憲撫慈養の本義に副はしむる事となし來りしか大正九年一月より更に事業の範圍を擴張し從來授産金に充て來りし資金の一部を割きて新に社會救済に關する事業を行ふこととし恩賜金事業をして世情の推移に順應せしめむことを期せり之に關し大正九年一月十三日齋藤總督の發したる諭告左の如し

曩ニ併合ノ行ハルルニ際シ 聖旨ニ依リテ特ニ國幣一千七百餘萬圓ヲ府郡島ニ配與シ專ラ士民ノ授産、教育、凶歉救済ノ資源ニ充テシメタリ、爾來殆ト十年之ニ依リテ救恤惠養ノ途ヲ開キシマ

ト尠少ニ非ス然ルニ近時歐洲大戰ノ後社會ノ情勢一變シテ中産以下ノ者生活ノ脅威ヲ受クルコト最モ甚タシク之方對策ヲ講スルハ洵ニ刻下ノ急務ニ屬ス、此ニ於テ今次從來恩賜金ヲ以テ經營セラル事業ノ範圍ヲ擴張シ産業補助ニ充當シタル授産費ノ一部ヲ分チ新ニ社會救濟ノ事業ヲ行ヒ以テ聖澤ノ露被チ期セシメムトス一般民衆其レ克ク此ノ意ヲ體シテ救恤ノ本旨ニ違フナク益々奉公ノ至誠ヲ竭シテ 聖旨ニ奉答スル所アルヘシ

授産事業に在りては兩班儒生其他恒産なき者に生業を授くるを本旨とし且成るべく普遍的に之を施設し其の惠澤に均霑せしむる事を期したるを以て其の事業は府郡島毎に其の状況を參酌して之を選定す從て事業の種類は甚だ多様に涉れるも大體に於て之を總括すれば養蠶、機業、製絲、製炭、製紙及水産等に關する傳習事業等其の主要なる事項に屬し其他實業巡回教師の設置、農蠶業、水産業及各種工業に關する種苗、器具其他材料等の配付亦概ね各地方に於て施設す而して右傳習事業中比較的長期の養成を目的とする傳習所の數は各道を通して毎年數十個所其の生徒の數千數百人乃至二千數百人を算し事業開始以來を通計すれば約二萬人に達す、此の外短期簡易の傳習隨時各所に行はれ之を傳習を受くるもの亦數千人に及ぶ、是等の傳習修了者は既に殆ど各方面に普及し巡回教師の、指導、種苗器具の配付等と相俟て地方産業の改良を促し又は新なる物産の産出に従事する等著

著効績を挙げつつあり

教育事業に在りては普通教育の普及を圖る爲主として公立普通學校經費を補助しつつあり

凶歉救濟事業に在りては水旱害其の他災害に際し食糧、種穀、農具、小屋掛材料給與等の方法に依

り救助を行ひ其の救助を要せざる年に在りては餘資を蓄積して他日の凶荒に備ふることをせり

社會救濟事業に在りては上記の如く大正九年より實施の端を開きたるを以て未だ充分なる成果を收

むるに至らざるも各道に於て計畫せる事項を舉ぐれば醫師の配置、貧民の救療及府面又は特志家の

事業たる公設市場、勞働者宿泊所、浮浪人收容所、公設浴場、人事相談所、職業紹介所、育児事業

住宅調節費等に對する補助等なり今臨時恩賜金配與額を示せば左の如し

臨時恩賜金配與額

道	臨時恩賜金配與額		事業費別	
	配與額	一年度分	授產及社會救濟費	教育費 凶歉救濟費
京畿道	二、六四四、五〇〇 円	一三二、二二五 円	七九、三三五 円	三九、六六七 円
忠清北道	七九四、〇〇〇 円	三九、七〇〇 円	二二、八二〇 円	一一、九一〇 円
				一三、二二二 円
				三、九七〇 円

道	臨時恩賜金額		一年度分		事業費		別	
	配與	額	利子	額	會投 救產 濟及 費社	教育費		凶敷救濟費
忠清南道	一、四五七、七〇〇	四	七二、八八五	四	四三、七三一	四	二一、八六五	七、二八八
全羅北道	一、三一四、八〇〇	四	六五、七四〇	四	三九、四四四	四	一九、七二二	六、五七四
全羅南道	一、六九四、〇〇〇	四	八四、七〇〇	四	五〇、八二〇	四	二五、四一〇	八、四七〇
慶尙北道	二、〇四一、三〇〇	四	一〇二、〇六五	四	六一、二三九	四	三〇、六一九	一〇、二〇六
慶尙南道	一、五七七、七〇〇	四	七八、八八五	四	四七、三三一	四	二二、六六五	七、八八八
黃海北道	一、〇九四、〇〇〇	四	五四、七〇〇	四	三二、八二〇	四	一六、四一〇	五、四七〇
平安南道	一、〇四六、〇〇〇	四	五二、三〇〇	四	三一、三八〇	四	一五、六九〇	五、二三〇
平安北道	一、一四九、〇〇〇	四	五七、四五〇	四	三四、四七〇	四	一七、二三五	五、七四五
江原道	一、一四六、〇〇〇	四	五七、三〇〇	四	三四、三八〇	四	一七、一九〇	五、七三〇
咸鏡南道	八八三、〇〇〇	四	四四、一五〇	四	二六、四九〇	四	一三、二四五	四、四一五
咸鏡北道	五五六、〇〇〇	四	二七、八〇〇	四	一六、六八〇	四	八、三四〇	二、七八〇
總計	一七、三九八、〇〇〇	四	八六九、九〇〇	四	五二一、九四〇	四	二六〇、九七〇	八六、九九〇

第四節 鄉校財產

郷校財産は地方文廟の祭祀及經學を講明する爲主として地方儒林よりの鳩財及政府より特に下附せられたるもの等より成れる公共的性質を有する財産にして殆ど大部分不動産に屬し高麗朝以來約六七百年の歴史を有す

併合以來府尹郡守島司をして之が管理に當らしめ其の收入は一部祭祀費に充つる外大部分公立普通學校の經費に充當し來りしか近年向學心勃興に伴ひ教育に對する一般の自覺著しきものあり次て學校費令の制定となり其の負擔力亦著しく擴大せられたるを以て大正九年六月該財産管理規程を改正して普通學校經費に充當することを止め専ら文廟の維持と社會教化事業の施設に之を投ずるの途を啓き府尹郡守島司をして管理せしむるは従前に異らずと雖之が使途に就ては儒林中より選出せる掌議の意見を聽きて之を定めしむることとし儒林をして自ら進んで儒道の本義を闡明し社會教化に努力するの氣運を養ひ以て民風作興の資に供せしめんことを期せり大正十年度に於ける歳入出豫算を示せば左の如し

鄉校財產歲入出豫算

大正十年度

道名	歲入			歲出						計			
	財產收入	其他	計	奉祀費	教化費	修繕費	雜給費	費用	管理費		其他	普通學費	豫備費
京畿道	三三、三五七	一三、五九三	五六、九五〇	三、五〇五	五、三三八	六、七四一	三、八五七	一、五五二	三、八八三	一一四	—	一一、三〇〇	五六、九五〇
忠清北道	八、八二三	四、六四五	一三、四六八	一一、八二二	一、四五六	—	一、七六三	一、三四〇	二、四九五	三、一八〇	—	二、一五二	一八、〇二〇
忠清南道	一六、八九三	四、四六三	二一、三五五	四、八九七	四、一三五	二〇〇	一、〇九〇	二、七〇三	七、二八〇	二五五	—	七九六	二一、三五五
全羅北道	二五、二〇五	九、六二七	三四、八三二	九、九〇四	七、一一四	二一五	—	六六五	三、五二八	七二二	—	二、六八五	三四、八三二
全羅南道	三六、二三三	一三、五九〇	四九、八二三	六、〇〇〇	九、六六五	八、五五七	—	一、八四三	六、三六二	六、七四五	—	七、四九七	四九、八二三
慶尙北道	三九、一五七	一〇、七五四	四九、八九一	六、六二八	一〇、〇二八	六、八七九	八、二二四	一、五八五	八、五四五	六、一〇〇	—	一、九〇四	四九、八九一
慶尙南道	三七、九六六	一七、〇〇三	五四、九六九	五、五一四	四、五三八	七、五六〇	六、〇五七	三、六六〇	九、九一〇	二、七二三	—	五、〇一八	五四、九六九
黃海道	一五、三六二	四、八三七	二〇、一九九	四、六〇四	二、八四五	—	二、〇五八	—	六、〇六八	一、〇一八	—	一、四一六	二〇、一九九
平安南道	九六、三六二	六、二四八	一〇二、六一〇	二、〇五九	七、一八一	二、四〇五	八、二二一	七、一六六	一、四二五	四、四五	—	八、四八	一〇二、六一〇
平安北道	二一、九九六	五、四〇七	二七、四〇三	四、一三四	五、四一五	五、一七	四、五八三	二、五八三	二、五六六	三、六九八	—	一、三〇九	二七、四〇三
江原道	一一、八七〇	八、〇〇五	二〇、八七五	三、三五二	三、八五八	六、九〇五	一、〇二二	一、四五一	二、五三五	—	—	一、七三二	二〇、八七五
咸鏡南道	五、五〇八	二、〇九八	七、六〇六	九六三	八一八	—	一、五五五	四二二	一、五八七	一、六一四	—	六四九	七、六〇六



授教羅裁生啞るけ於に院生濟

第七章 救恤

第一節 濟生院

明治四十四年六月府令を以て濟生院を設立し孤兒の救養、盲啞者の教育及精神病者救療の事業を行ふこととなるや京城孤兒院の請願を容れ孤兒全部を濟生院に收容し同年九月一日より其の救養事務を開始し養育部と稱せり翌四十五年二月精神病者救療事業を總督府醫院構内に開始し醫療部と名けしか同年四月新に朝鮮總督府濟生院官制發布せられ其の養育部及醫療部の事業全部は其の儘官廳たる朝鮮總督府濟生院にて繼承せり同年十二月に至り濟生院は盲啞生教育事務を開始し翌年四月より新學期の授業を開始せり大正二年四月に至り同一目的を有する二個の機關存置の必要なきを認め舊濟生院は其の有する資金全部を特別會計に寄附して解散し之と同時に總督府濟生院が舊濟生院より引繼經營し來れる醫療部の事業は更に之を總督府醫院に附屬せしめたるを以て總督府濟生院は専ら孤兒及盲啞者の救養のみを掌ることとし以て現時に至れり

大正十年四月一日の現在狀況左の如し

院 兒

養育部内現在の者

五〇人 被傭中の者

一人

里預け中の者

四五 部外入學中の者

九

農場收容中の者

二四 總計

一三九

(イ)養育部 の所在地は京城府北部新橋洞に在り元宣禧宮の建物を改造して之に當て北方に綠樹繁茂せる丘陵を負ふて南面せる高燥の地域を占め敷地一萬五百十四坪餘を有す其の建坪は六百坪餘にして事務室、教室、作業室、倉庫、炊事場、浴室、衛生室及院兒宿舍並職員官舎の外院兒宿舍は全部在來の溫突を以て之に充て乳兒及男女別に由り之を區分せり

部内施設の學校は普通學校の教科課程に準し實科教育を重するの方針を執り之が修業年限は六箇年と定め學齡に達せる者に對し教育を施せり又就學年齡未滿の者には幼稚園教育を爲し盲啞者は濟生院盲啞部に、内地人は府内公立小學校に入學せしむ

就 學 者

大正十年四月一日

第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
八人男	七	七人男	六
三人女	二	二人女	一
計 一一	計 九	計 九	計 六

盲啞部入學者 七 二 九 總 計 三六 九 四五

公立小學校入學者 一 一 一

作業は主として簡易なるものを選定し、藁仕事、園藝乃至家事の手傳、特に掃除、炊事補助、被服類の洗濯等を爲さしめ、努めて自助の精神並勤勞の習慣に導かむことを期せり

宿舍は一名乃至二名の保母を配屬し直接院兒と起居を共にせしめ以て薄倖なる彼等兒童をして寂寞の境地より救ひ家庭的情味中に保育薰陶を加へつつあり又院兒の精神的訓育の效果をして一層切實ならしむる必要より部内に天照皇太神を奉祀し早朝神前に參集禮拜を行はしむるのみならず時時訓話を爲して化育の趣旨に副はしむ

院兒中幼少なる者は成るべく人乳哺育に據るを便とし幼弱者の全部四十五名は目下里預けを爲せり院兒の體質健康は一般兒童に比し稍劣るを免れず特に新に收容する院兒の多數は最も不良の狀態に在るを常とすされば之を改善に關しては十分の注意を爲せるは勿論初て之を收容を爲す者の如きは假に隔離室に入れ異常なきに及て混合收容するを例とし以て其の健康の恢復を圖りつつあり而して部内には衛生室を設け患者ありたるときは之に移し囑託醫並看護に従事すべき専任保母を置きて之を治療を擔任せしむ大正十年四月一日の現在收容院兒は百三十九人なり

(日)農場 京城を距ること約三里京畿道楊州郡蘆海面に在り大正二年十一月の開始に屬す附屬用地
 としては國有未墾地及同林野地の交附引繼を受けたるものにして面積總計百七十餘町歩あり大正
 二年及同三年に於て其の内未墾地の一部に開墾工事を加へ必要なる溝渠、堤防等の築造を爲し必
 要に應じ墾田を得るの施設を爲せり

院兒の職業は朝鮮の現状より之を觀て主として農民たらしむるを彼等將來生計上の便宜と認め茲
 に農場を設置し養育部の學科修了者中身體健康にして勞働に適する者は全部農作に従事せしめつ
 つあり大正十年九月末日現在の農場收容兒數左の如し

十五歳以下	六 ^人	二十九歳以下	五 ^人
十七歳以下	一	二十歳以上	二
			計
			二四 ^人

農場に於ける從業院兒には作業の奨勵及將來彼等か自營資金の一部を蓄積せしむるの趣旨を以て
 勞作に依り生産したる收入を限度とし從業給與金を支給することとし大正三年度より之を實施し
 同九年三月迄に給與せし總額は三千六百七十四圓四十二錢にして其の各個人別最高額は七十一
 圓九十錢最低者は一圓六錢なりとす又貯金を有する院兒は七十四人にして總額二千百九圓餘な
 り

(六)盲啞部 盲啞者に對する特種教育は全然等閑に附せられしか大正二年本院は當初の事業目的たる盲啞教育事務の開始と共に生徒の募集を爲し同二年四月より新學期の教授を始めしか現在狀況左の如し

科別	學年	盲啞生徒		自費		合計	
		男	女	男	女	男	女
盲本 科 (修業年限 三年)	一 年	二〇	二	四	一	二四	三
	二 年	三	一	三	一	六	一
	三 年	二	一	四	一	六	一
	計	二五	二	一一	二	三六	四
啞本 科 (修業年限 五年)	一 年	四	一	七	二	九	六
	二 年	五	一	八	二	一〇	二
	三 年	一	一	五	二	三	二
	四 年	一	一	二	二	三	二
	五 年	二	一	三	一	四	二
計	一三	四	二二	七	二九	一三	
							四二
							八四

盲啞生徒

大正十年六月

科別	學年	給費		自費		合計				
		男	女	男	女	男	女			
	計	一三	一	一三	二五	一一	三六	三八	一一	四九
總計	計	三八	二	四〇	三六	一三	四九	七四	一五	八九

給費生は男女共全部寄宿舎に入れしめ食事、被服及學用品等一切を官給し卒業後に於ける何等の制限又は義務を附することなく全然救恤の方針の下に之を收容せり教育に就ては専ら實用的方面に重きを置き盲生には鍼治及按摩を啞生には裁縫を課せり而して之が實蹟を見るに初めより盲兒速成科及盲本科を卒業せる者合計五十七名にして又啞生の卒業生は初めより合計十五名にして各相當の職に従事せり

第二節 救療機關

慈惠救療の機關を設けて天壽保全の計を爲し之が施設として總督府醫院一、道慈惠醫院二十を設立せり



間島慈善醫院に於ける療患者

朝鮮總督府醫院は現在敷地總坪數五萬五千六百四十二坪餘、建坪四千三百二坪餘を算し患者約四百人を收容することをへし建物宏壯にして、納嶺嶽營たる城東の丘上に位し市井の塵寰を隔てたり

道憲惠醫院は各道廳（京畿道を除く）所在地及水原、安東、濟州、小鹿島、楚山、江陵、會寧、間島の各地に一院宛を設置し尙ほ増設中のものに群山、南原及順天等あり是等各院は開設當時多くは舊式建物を利用し急須の増築改造に依り當面の所要に應しつつありしか爾來逐次新營又は改築を行ひ舊時の面目を改めたるもの尠しとせず又國境對岸地方に於ける救療の普及を計る爲東間島の鮮人に對し行ひつつある在龍井村間島惠醫院の外局子街、頭道溝及百草溝等には信用ある開業醫に救療を委託し僻陬地在住鮮人及鴨綠江對岸地方に於ける鮮人に對しては惠醫院巡回診療日數を増加し以て救療の普及を圖り更に琿春地方に於ける者に對しても同地の信用ある開業醫に救療を委託し以て鮮人綏撫の途を講せり

而して是等各院の入院患者總數收容力は約千五百人にして其の敷地總坪數三十七萬七千餘坪建坪九千二百八十坪を算す

（イ）診療の成績 併合以來大正九年十二月末日迄各醫院に於て取扱ひたる總患者數は千百十五萬九

千六十人にして其の延人員は實に二千五百六十一萬一千三百三十一人の多きに達せり
 今最近の統計を掲ぐれば左の如し

種別	患者				合計	同上延人員	一日平均患者數
	内地人	朝鮮人	外國人	合計			
朝鮮總督府醫院	普通	一六一、一六六	四三、七四〇	四六七	二三五、三七三	三三六、五一〇	九二一・九四
	施療	四、九六八	三五、四八九	一	四〇、四五八	六一、九二六	一六九・六六
道慈惠醫院	普通	一六六、一三四	七九、二二九	四六八	二七五、八三一	三九八、四三六	一、〇九一・六一
	施療	三、〇〇八	一〇五、六九二	一、四二五	四七六、八〇八	八九七、七七一	二、四五九・六四
總計	普通	三七二、六九九	四九一、五六七	一、一三九	三九〇、〇二二	九七九、七九五	二、六八四・三七
	施療	五六〇、八五七	一四九、四三二	一、八九二	八六六、八三〇	一、八七七、五六六	五、一四四・〇二
總計	普通	七、九七六	四二一、三六四	一、一四〇	四三〇、四八〇	一、〇四一、七二一	三、三八一・五九
	施療	五六八、八三三	五七〇、七九六	三、〇三二	一一四二、六六一	二、二七六、〇〇二	六、二三五・六二

(口)巡回診療 巡回診療は大正元年度中より之を實施し各道慈惠醫院をして専ら實行に當らしめつ

大正九年朝鮮總督府醫院及道慈惠醫院 取扱患者

大正九年

一日平均患者數

つありたるも更に大正四年度より濟州、楚山、會寧の三院を加へ尙大正七年度より間島慈惠醫院をも加へ之を施行せしめつつあり本診療は始め出張診療なる名稱の下に地方往診の途次又は隨時出張の際便宜診療に従事せしめ何れも著大の効果を収めたれども未だ普く各地に之を實施を爲す能はざるを遺憾としたりしか幸に鮮人救療費として巨額なる臨時恩賜金の下附ありたるを以て従來施行せる隨時的の出張診療を廢止し組織的巡回の方法を講し醫員及補助員各一名を以て當時各郡を遍歴せしむることせしに施行以來の成績極めて良好にして民衆の歡喜云ふへからざるものあり開始以來大正九年迄の總患者數人員九十三萬二千七百六十八人、延人員四百十九萬八千九百二人にして大正九年の取扱數を掲ぐれば左の如し

大正九年道慈惠醫院巡回診療取扱患者

年	患者數				同上延人員	一日平均患者數
	内地人	朝鮮人	外國人	合計		
大正九年	二四五	六八	一	三一三	一、〇六六	三、八九
普通	二〇	一七、四一〇	一	一七、四三〇	七九、五五四	二、五三、八四
施療	二六五	一七、四七八	一	一七、七四三	八〇、六二〇	二、九四、二三
計						

備考 診療日數二七四日なり

(ハ)教育事業 朝鮮總督府醫院に於ては内鮮人助産婦、看護婦の養成を掌り開始以來卒業生徒百五十二名を出せり卒業生の大多數は官公立醫院等に就職し孰れも相當の信頼を受けつつあり目下兩科を通し現在生徒八十一名を算す

助産婦及看護婦の養成は前記の外從來各道廳所在地の慈惠醫院に於ても之を取扱つつあり養成開始以來卒業者四百四十名あり而して大正九年よりは光州、大邱、平壤、咸興慈惠醫院の四院に於て養成することに改正せり入學者の資格は小學校卒業程度の者にして内鮮人共收容し教育期間は一箇年六箇月其の期間中は毎月金二十圓の手當を支給す現在生徒數助産婦科一名看護婦科百四十九名計百五十名あり

總督府醫院大邱慈惠醫院及平壤慈惠醫院に在りては大正六年度より日本赤十字社朝鮮本部の委託に係る救護看護婦の養成に従事し卒業者十八名にして目下三十名の生徒を收容せり

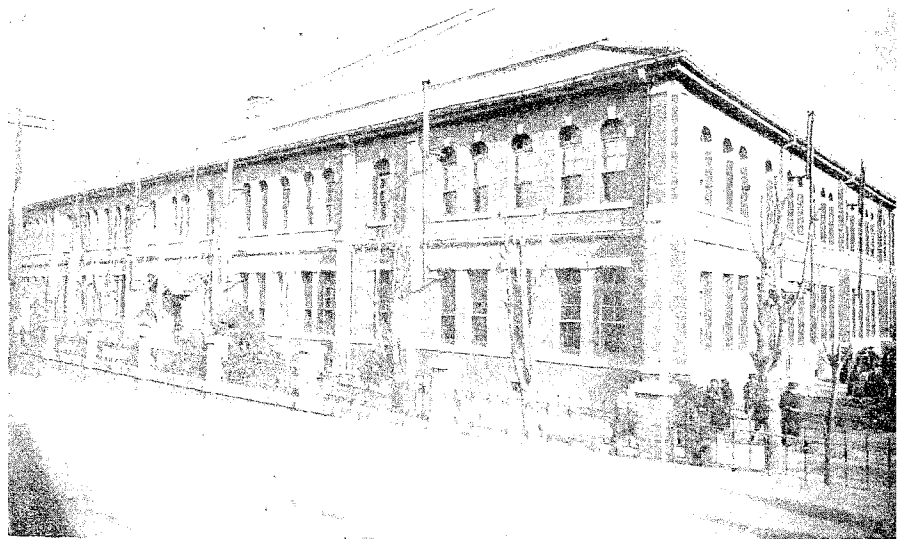
朝鮮總督府醫院及道慈惠醫院に關する經費は朝鮮總督府濟生院の經費と共に朝鮮醫院及濟生院特別會計の支辨に屬す而して該特別會計は政府支出金、資金利子、院收入並寄附金其の他の收入を以て之が歳出に充當せり而して本特別會計に於て有する現在資金中有價證券並現金は左の如く總計

四百三十三萬四千九百十一圓の多きに上れり此の巨額の資金中大部分は恩賜金に屬するものなり

維持資金及特別資金

種別	債(額面)		現	金	合	計
	公	債				
總督府醫院		一九七、八五〇		八、五〇七		二〇六、三五七
道慈惠醫院		三、六五四、五五〇		九九、四五六		三、七五四、〇〇六
濟生院		三六八、七〇〇		五、八四八		三七四、五四八
總計		四、二二一、一〇〇		一一三、八一		四、三三四、九一一

濟生院には特別資金なし



東京公城立の尋常小學校

第八章 教育

第一節 内地人教育

朝鮮に於ける内地人の教育事業は明治十年釜山に共立學校なる小學校程度の學校を設けたるを以て嚆矢と爲し明治四十三年朝鮮總督府設置當時に在りは百二十校を數ふるに過ぎざりしか大正十年五月には四百十二校を算するに至れり

内地人の教育制度は明治四十二年始て統監府令を以て小學校規則を發布し次て四十三年三月統監府中學校官制及中學校規則を發布せり其の後高等女學校實業學校等に付ては何等の規程なく唯内地の相當學校に準據して取扱ひ來りしか四十五年三月朝鮮公立小學校同高等女學校同實業專修學校及簡易實業專修學校官制並是等諸學校規則發布せられ茲に始めて内地人教育制度の確立を見るに至れり内地人の教育方針は素より内地に於けると何等の差異なく教育の本旨修業年限教科編制等大體同一にして内地の相當學校と彼此轉入學の關係に就ても互に聯絡を保てり而して公立學校の設立者は學校組合に限ることとせり

内地人教育機關は分ちて小學校、中學校、高等女學校、師範學校、實業專修學校及簡易實業專修學

校、専門學校の七種とす小學校は近時内地人の發展と共に著しく進歩普及し大正十年五月には四百十二校四萬八千五百四十三名の児童を有するに至れり又僻陬の地にして未だ小學校の設けなく就學の便を得ざる者の爲に京城、木浦、群山、平壤、義州、會寧、元山等其の他必要の地に教育會若は學校組合の事業として児童學寮を設置して此等の児童を收容し所在小學校に通學の便を開けり大正七年八月内地人の爲に京城醫學專門學校特別醫學科を設け内地の専門學校令に準據して専門教育を授け又京城工業專門學校、水原農林專門學校等に内地人の入學を許すことせり中學校は官立にして京城に二校、平壤、釜山、大田、大邱、元山に各一校あり又朝鮮に於ける小學校教員の養成機關として京城に師範學校あり又女子中等教育機關として京城、釜山、仁川、平壤、大邱、鎮南浦、羅南、木浦、大田、群山、馬山、元山に公立高等女學校を設置し實業教育には釜山、仁川、木浦及新義州に公立商業專修學校、平壤、京城、仁川、群山に公立簡易商業專修學校及鎮海に公立簡易工業專修學校あり京城に又京城工業專門學校附屬工業傳習所ありて内地人の入學を許す私立學校に京城高等商業學校、善隣商業專修學校、京城鐵道學校、朝鮮藥學校、京城女子技藝學校等あり公立學校に對しては年年國庫補助金を給し其の施設を委け私立學校に在りても成績良好なる者に對しては特に國庫補助金を給し之を保護獎勵せり

小學校一覽

大正十年五月末日

道別	學校數	學級數	教員數		計數	生徒數		計數
			男	女		男	女	
師範學校附屬小學校	一	一	二	一	三	三〇	一六	四六
京畿道	四三	二六三	二二〇	九六	三一六	六、八四〇	六、〇九八	一二、九三八
忠清北道	一一	二七	二三	一一	三四	三九四	三七一	七六五
忠清南道	三三	七九	六二	三五	九七	一、三二〇	一、二五九	二、五七九
全羅北道	三三	九二	七一	四〇	一一一	一、六九四	一、五〇〇	三、一九四
全羅南道	四九	一〇六	八四	四五	一二九	二、〇九六	一、九一三	四、〇〇九
慶尚北道	五〇	一一〇	九二	五〇	一四二	二、三二三	一、九七二	四、二九五
慶尚南道	七五	二三四	一九九	八四	二八三	五、一九五	四、七七八	九、九七三
黃海道	二一	六五	四〇	二三	六三	九八一	九七一	一、九五二
平安南道	二二	七九	六二	三二	九四	一、六四六	一、四六六	三、一一二
平安北道	二二	四六	四一	二三	六四	六九二	六五一	一、三四三
江原道	一八	二八	二四	一五	三九	三三一	三二七	六五八
咸鏡南道	二〇	五四	四八	二三	七一	一、〇六七	一、〇三七	二、一〇四

元山 中 學 校	同	十年四月						
計			六三	三	一三三	六	二、六三七	九八

師範學校一覽

學 校 名	所 在 地	設 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
京城師範學校	京 城	大正十年四月	三	一六	一一七
大正十年五月末日					

備考

本校は京城中學校附屬臨時小學校教員養成所の組織を改めたるものなり

高等女學校一覽

學 校 名	所 在 地	設 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數	設 立 者
京城公立高等女學校 仁川公立高等女學校	京 城 仁 川	明治四十一年四月 大正二年四月	二一 四	三五 九	一〇一四 一八二	京城學校組合 仁川學校組合
大正十年五月末日						

學 校 名	所在地	設 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數	設 立 者
大邱公立高等女學校	大邱	大正五年四月	七	一五	三四七	大邱學校組合
釜山公立高等女學校	釜山	明治三十九年四月	一〇	一八	四二七	釜山學校組合
平壤公立高等女學校	平壤	大正二年四月	五	一〇	二四三	平壤學校組合
鎮南浦公立高等女學校	鎮南浦	六年四月	五	一〇	一四二	鎮南浦學校組合
木浦公立高等女學校	木浦	九年四月	三	六	一六三	木浦學校組合
大田公立高等女學校	大田	八年四月	二	六	一〇三	大田學校組合
群山公立高等女學校	群山	五年四月	二	八	一〇一	群山學校組合
馬山公立高等女學校	馬山	四年四月	三	六	一四二	馬山學校組合
元山公立高等女學校	元山	二年十二月	四	一〇	一二五	元山學校組合
羅南公立高等女學校	羅南	九年六月	三	五	七七	羅南學校組合
計			六九	一三八三、〇六六		

備考

大田、群山、馬山、元山は、大正十年四月實科高等女學校より高等女學校に組織を變更す

實業專修學校一覽

大正十年五月底

學 校 名	所 在 地	設 立 年 月 日	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
木浦公立商業專修學校	木浦	大正九年六月	二	四	九四
仁川公立商業專修學校	仁川	明治四十五年四月	五	二二	一八八
釜山公立商業專修學校	釜山	同 三十九年四月	一〇	二三	四七七
新義州公立商業專修學校	新義州	大正十年四月	一	八	三七
私立善隣商業專修學校第一部	京城	同 二年五月	二七	二六	三六七
合 計			二五	八三	一、一六三
京城公立簡易商業專修學校	京城	大正五年五月	一〇	一〇	二〇七
仁川公立簡易商業專修學校	仁川	同 六年四月	二	九	六六
群山公立簡易商業專修學校	群山	同 七年四月	二	四	三二
鎮海公立簡易工業專修學校	鎮海	同 七年四月	二	六	四四
平壤公立簡易商業專修學校	平壤	同 元年八月	一	五	二三
合 計			一七	三三	三七二

專 門 學 校

大正十年五月末日

學 校 名	所在地	設 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
官立京城醫學專門學校特別醫學科	京 城	大正七年八月	四	四五	一一九
私立京城高等商業學校	京 城	明治四十年十月	三	二一	一六五
計			七	六六	二八四

私立各種學校

大正十年五月末日

學 校 名	所在地	設 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
京城鐵道學校	京 城	大正八年四月	一一	四一	四八八
朝鮮藥學學校	同	同 七年六月	二	六	一一六
京城女子技藝學校	同	明治四十三年四月	一〇	一八	四一〇
計			二四	六五	一、〇一四

右の外京城中等夜學校、京城裁縫女學校、釜山實習女學校、釜山商業夜學校等あり

幼稚園

大正十年五月末日

名	稱	所在地	創立年月	組數	職員數	幼兒數
庚子記念京城幼稚園	幼稚園	京城	明治三十三年十月	三	五	三三八
私立新龍山幼稚園	幼稚園	同	大正四年五月	二	四	八〇
私立龍山幼稚園	幼稚園	同	大正四年十二月	三	三	七一
仁川記念幼稚園	幼稚園	仁川	明治三十三年五月	二	七	七二
私立大田幼稚園	幼稚園	大田	大正二年十一月	二	三	八五
私立群山幼稚園	幼稚園	群山	大正七年三月	二	二	八三
大邱幼稚園	幼稚園	大邱	明治四十三年五月	二	三	一〇四
釜山幼稚園	幼稚園	釜山	大正四年四月	三	三	八八
私立鎮海幼稚園	幼稚園	鎮海	大正四年七月	三	三	五六
私立統營幼稚園	幼稚園	統營	大正五年六月	一	三	六〇
私立新義州幼稚園	幼稚園	新義州	明治四十五年四月	一	二	四〇
私立平壤幼稚園	幼稚園	平壤	大正二年九月	二	二	八二
鎮南浦學校組合立幼稚園	幼稚園	鎮南浦	明治四十一年四月	一	三	七八

名	稱	所在地	創立年月	組數	職員數	幼兒數
私立元山	幼稚園	元山	明治四十一年十二月	二	三	七八
私立咸興	幼稚園	咸興	大正八年十一月	一	二	三五
清津公立小學校附設幼稚園	幼稚園	清津	大正元年五月	一	一	四二
私立羅南	幼稚園	羅南	明治四十三年四月	二	二	四〇
計		二八		三三	五一	一、四三二

第二節 朝鮮人の教育

從來朝鮮に於ける教育機關は京城に成均館及東、西、南、中の四學あり各府郡に郷校あり各面洞に書堂あり書堂より郷校四學に進み更に成均館に入りて最高の學問を修むるを順序とせり此等の諸機關は唯儒學を授くるに止り他に日用の知識を授けず明治二十七年(開國五百三年)の文科擧の制度廢止せらるると共に四學自ら止み郷校亦文廟の享祀に舊態を存するのみにして子弟の教育を行はず明治二十八年當時の韓國政府は庶政の改善を行ふと共に教育の制度を立て小學校、師範學校、中學校、外國語學校其の他の學校を設立したりと雖悉く日本の制度を模倣したるものにして當時の時勢民度



（字習）況實授教るけ於に校學通善屬附校學通善等高城京

に適せず又其の運用宜しきを得ざる等の理由に因り效果の著しきものなかりき然るに明治三十七年日韓協約の結果所謂顧問政治の開始せらるるや當時の學部亦内地人參與官を置き而て統監府設置せられ其の指導の下に更に教育の刷新に従事し法令の改廢を行ひ普通學校、高等學校、外國語學校、高等女學校及實業學校等を設置し内地人教員を配置し教科書を編纂し大に舊態を改めたり而して明治四十三年韓國併合に際し諸般官制の改革ありたりと雖獨り教育の制度は事根本の問題に屬するを以て暫らく舊制を存續し時世の趨向、民度の實際に鑑み周到なる調査と研究を重ぬること約一年明治四十四年八月朝鮮教育令を發布し同十月各學校官制及諸規則を發布し十一月之を實施したり而して教育令發布以來既に十年、時勢の進運と教育の普及とは又本令の改正を要するものあるに至らしめたり迺ち大正九年十月九日勅令を以て本令の一部を改正し普通學校の修業年限は六年を本體とし高等普通學校に修業年限二年以内の補習科を置くことを得るに至れり然れ共朝鮮の教育制度は其の全般に亘り系統的に改正をなすの要あるを以て曩に開會せられたる教育調査會の決議に基き目下之の立法の手續に屬す

朝鮮教育令に朝鮮人教育に關する主義綱領を明にしたり即ち朝鮮人の教育は教育に關する勅語の御趣旨に基き忠良なる國民を養成するを本義とし時勢及民度に適する教育を施し以て徳性の涵養と

國語の普及に力を致し日常生活に必須なる知識技能を授けむ、ことに力めたり

普通教育の機關としては普通學校、高等普通學校及女子高等普通學校を置き實業教育の機關としては農業學校、商業學校、工業學校及簡易實業學校を又専門教育の機關として、は専門學校を設くることと爲せり而して普通學校教員養成の爲官立高等普通學校に師範科を設けたり

現今に於ては普通教育機關は著しく普及するに至り公立普通學校の如き併合當時一百校に過ぎざりしもの今や六百七十五校約十五萬餘の生徒を有するに至れり而して之を維持に關しては併合の際下賜せられたる臨時恩賜金利子を基礎とし國庫及地方費の補助、基本財産收入、授業料等を合して之に充て尙必要あるときは設立區域内の朝鮮人に負擔金を賦課することを得しめしか普通學校増設、修學年限延長計畫に伴ひ從來の公立普通學校費用令を廢し新に朝鮮學校費令を制定し大正九年十月より施行せり官立高等普通學校は京城に二校、平壤、大邱、咸興、全州、新義州に各一校同女子高等普通學校は京城及平壤に各一校あり又京城第一、平壤、大邱及咸興の各高等普通學校には何れも修學年限一箇年の師範科を置き京城第一高等普通學校には臨時教員養成所を附設し内地人にして普通學校教員たるべきものを養成し京城女子高等普通學校には臨時女子教員養成所を附設し内地人女子にして普通學校の教員たるべきものを養成し各一箇年間教育を施することとせり

實業教育機關は大正十年五月現在に於て公立農業學校十九校、同商業學校六校、同商工學校一校、水産學校一校、簡易卑近の實業教育を授くる爲簡易農業學校十五校、同商業學校五校、同工業學校七校、商工學校二校、水産學校一校あり

専門教育機關は近來普通教育の普及と同時に専門學校の必要を感じ大正五年四月舊來の京城專修學校、朝鮮總督府醫院附屬醫學講習所、朝鮮總督府中央試驗所附設工業傳習所の組織を變更し新に京城專修學校、京城醫學專門學校、京城工業專門學校を、大正七年四月朝鮮總督府農林學校の内容を改善して水原農林專門學校を設置し京城專修學校を除くの外は内鮮人生徒を收容し入學資格は朝鮮人に在りては高等普通學校卒業又は之と同等以上、内地人に在りては中學校卒業又は之と同等以上の學力を有する者とせり京城專修學校は修業年限三年にして主として法律經濟の學科を授け京城醫學專門學校は修業年限四年にして朝鮮人、内地人を收容し又大正七年八月主として内地人の爲に專門學校令に依り特別醫學科を設けたり、京城工業專門學校は修業年限三年にして窯業料、染織科、土木科、應用化學科、建築科、鑛山科の六學科とし尙本校には附屬工業傳習所を置き修業年限三年にして木工科、金工科、織物科、化學製品科、陶器科の五科とし主として徒弟の養成を目的とし、水原農林專門學校は修業年限三年にして入學資格は朝鮮人に在りては高等普通學校卒業又は之と同

官立高等普通學校一覽				大正十年五月末日			
學 校 名	所在地	創 立 年 月	學 級 數	職 員		生 徒 數	
				內地人	朝鮮人		
京城第一高等普通學校	京城	明治三十一年十一月	一八	二七	六	三三	六二五
本 科			一三				五〇七
合 計			三、五〇五	一三〇、九六〇	一九、〇九一	一、五〇、〇五一	
慶 尙 北 道			六八	二四九	九六	二〇七	三〇三
慶 尙 南 道			六二	一八四	九九	二二三	一一、一七七
黃 海 道			四四	一六四	五九	一三五	一三、四七〇
平 安 南 道			五一	二四七	六七	二一八	六、八六二
平 安 北 道			五〇	三三二	七六	二一七	九、七一六
江 原 道			四一	一七七	六六	一五四	一〇、一六二
咸 鏡 南 道			三四	一五三	五八	一四四	一〇、一六二
咸 鏡 北 道			二七	一一四	四二	一〇一	七、〇六五
合 計			六七五	二、八二三	一、〇二四	二、四八一	一、一六六
							六、三二七

京城第二高等普通學校	京城	大正十年五月	三	八	一	九	一四七
新義州高等普通學校	新義州	大正十年五月	二	六	一	七	一〇〇
合計	七		六一	一〇一	二六	一三七	二、二〇八

官立女子高等普通學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所 在 地	創 立 年 月	學 級 數	職 員		生 徒 數
				內 地 人	朝 鮮 人	
京城女子高等普通學校	京 城	明治四十一年四月	八	一四	七	三二四
本 師 範 科			一			二一六
臨時教員養成所			二			三四
平壤女子高等普通學校	平 壤	大正三年五月	七	一〇	一	七四
本 科			五			二〇八
技 藝 科			一			一七二
師 範 科			一			一五
合計	二		一五	二四	七	五三二

私立高等普通學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所 在 地	創 立 年 月	學 級 數	職 員 數		生 徒 數
				內 地 人	朝 鮮 人	
私立養正高等普通學校	京 城	大正二年四月	一〇五	三	一四	二四〇
私立培材高等普通學校	同	同	同	同	同	同
私立普成高等普通學校	同	同	同	同	同	同
私立徽文高等普通學校	同	同	同	同	同	同
私立中央高等普通學校	同	同	同	同	同	同
私立松都高等普通學校	開 城	同	同	同	同	同
私立香山高等普通學校	高 敞	同	同	同	同	同
私立光州高等普通學校	光 州	同	同	同	同	同
私立東萊高等普通學校	東 萊	同	同	同	同	同
私立光成高等普通學校	平 壤	同	同	同	同	同
合 計			六二	二八	一〇六	一三四

私立女子高等普通學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所在地	創 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
私立淑明女子高等普通學校	京 城	明治三十九年五月	三	九	一三三
私立進明女子高等普通學校	同	同 四十年四月	五	二	一三六
私立梨花女子高等普通學校	同	大正七年十一月	三	四	一四二
私立好壽敦女子高等普通學校	開 城	同 七年四月	五	六	一三三
私立正義女子高等普通學校	平 壤	同 九年五月	四	七	九三
合 計			二〇	二八	六〇七

官立專門學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所在地	創 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
京城專修學校	京 城	大正五年四月	三	一七	一三二
京城醫學專門學校	同	同 五年四月	四	二	一一〇
京城工業專門學校	同	同 五年四月	三	二	二一〇
本 校			一七	三	五九
				六六	五九
				內地人	五九

學 校 名	所在地	創 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
附屬工業傳習所	—	—	一五	—	內 地 人 八三
水原農林專門學校	水 原	大正七年四月	三	三	內 地 人 三五 外 地 人 三

私立專門學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所 在 地	創 立 年 月	學 級 數	職 員 數	生 徒 數
私立アランス聯合醫 學專門學校	京 城	大正六年五月	四	二五	六二
私立延禧專門學校	京 畿 道 高陽郡延禧面	同 六年五月	九	一九	一一三
合 計			一三	四四	一七四

公立農業學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所 在 地	創 立 年 月	學 級 數	職 員		計 數	生 徒 數
				內 地 人	朝 鮮 人		
京城公立農業學校	高 陽	大正七年五月	二	七	二	九	八六
清州公立農業學校	清 州	明治四十四年六月	二	四	一	五	七九
公州公立農業學校	公 州	同 四十二年七月	二	五	一	六	九一
全州公立農業學校	全 州	同 四十三年五月	二	六	一	七	一二三
群山公立農業學校	沃 溝	同 四十三年五月	二	四	一	五	一三三
光州公立農業學校	光 州	同 四十三年六月	三	四	三	七	七三
濟州公立農業學校	濟 州	大正九年十一月	二	二	一	三	二六
大邱公立農業學校	大 邱	明治四十三年三月	四	五	一	三	九三
尙州公立農蠶學校	尙 州	大正十年三月	一	一	二	七	一四四
晉州公立農業學校	晉 州	明治四十年四月	二	五	一	二	四〇
海州公立農業學校	海 州	同 四十四年四月	二	七	二	七	九二
平壤公立農業學校	大 同	同 四十三年四月	二	七	一	八	九二
安州公立農業學校	安 州	大正三年四月	二	四	一	八	八七
義州公立農業學校	義 州	明治四十四年七月	二	四	二	六	七五
寧邊公立農業學校	寧 邊	同 四十四年五月	二	四	一	五	六四
							一〇八

學 校 名	所在地	創 立 年 月	學 級 數	職 員	數	生 徒 數
春川公立農業學校	春川	同 四十三年三月	二	四	一〇	七七
威興公立農業學校	威興	同 四十四年十一月	三	九	一	一三六
北青公立農業學校	北青	同 四十四年十一月	二	五	一	九二
鏡城公立農業學校	鏡城	大正七年四月	三	四	六	八六
合 計	一 九		四 二	九 一	二 六	一 七 六 四

公立商業(商工)學校一覽

大正十年五月末日

學 校 名	所在地	創 立 年 月	學 級 數	職 員	數	生 徒 數
仁川公立商業學校	仁川	明治四十五年四月	三	五	二	一三一
開城公立商業學校	開城	大正八年四月	三	六	一	一一八
江景公立商業學校	論山	同 九年五月	二	三	二	八二
釜山公立商業學校	釜山	明治四十二年四月	四	八	一	一七五
威興公立商業學校	威興	大正九年四月	二	六	七	一〇六
合 計			一 四	二 六	一 一	五 五 六

會寧公立商業學校 鎮南浦公立商工學校 合計	會寧	同	九年六月	二	四	一	五	九五
	鎮南浦	同	五年四月	二	一	一	二〇	二五九
				二八	五一	九	六〇	九六六

私立商業學校一覽

大正十年五月末日

私立善隣商業學校第二部	京 城	明治四十年四月	三	二六	一四七
私立開城學堂商業學校	開 城	大正九年五月	三	七	六八
合計			六	三三	二一五

公立水產學校一覽

大正十年五月末日

麗水公立水產學校	麗 水	大正十年四月	二	一	三	四〇
----------	-----	--------	---	---	---	----

公立簡易實業學校

大正十年五月末日

種別		道	名	學校數	學級數	職員數		生徒數
業	商					內地人	朝鮮人	
京	忠	京	道	一	四	二	七	二〇
濟	海	忠	道	二	二	一	三	三
安	南	忠	道	一	二	一	三	三
平	原	江	道	一	三	一	一	六
江	鏡	江	道	一	三	一	一	二
咸	鏡	咸	道	一	三	一	一	七
咸	鏡	咸	道	一	三	一	一	七
計	計	計	道	一	五	二	九	一〇
京	畿	京	道	一	三	二	八	二
全	羅	全	道	一	一	二	二	七
咸	鏡	咸	道	一	一	二	二	五
計	計	計	道	一	五	二	九	二
計	計	計	道	五	九	二	九	二〇

書堂は一洞若は個人又は教師自ら之を設置し子弟を集めて初等の漢文習字等を教授す固より不完全

第八章 教育

合 計	産 水	工 商	業 工
	全 羅 北 道	平 忠 安 濟 南 道	平 黃 慶 全 京 安 尙 羅 畿 海 南 北 道 道 道 道
三〇	一	二 一 一	七 三 一 一 一
四八	三	三 一 二	一 四 四 三 一 四 二
七四	二	八 五 三	二 三 九 三 四 三 四
三八	一	二 一 二	一 三 四 四 一 一 三
一一一	三	一〇 五 五	三 五 一 三 七 四 四 七
一、二六八	二八	六三 一四 四九	一五三 六三 二〇 一五 二二 三三

の機關たるを免れず、雖其の沿革甚だ古く其の數亦夥しきを以て俄に之を廢止すべからざる事情あるを以て弊害のなき限り之を放置し來りたるが近時普通教育の普及に伴ひ往往漢文の外普通學科を加ふるものあるを生し更縮上相當意を用ふべきの時期に達せるを以て大正六年書堂規則を發布し當事者をして書堂の名稱位置學童數維持方法教授用圖書等を届出せしめ以て之を取縮を爲すこととせり

書堂數

大正十年三月末日

道	名	書堂數	教員數	生徒		計
				男	女	
京	清道	二、五五一	二、五八八	二七、五二八	二五四	二七、七八二
忠	清道	九九〇	九九五	六、九〇二	—	六、九〇二
全	清道	一、七四五	一、七五一	一三、八五五	七五	一三、九三〇
全	北道	一、五三七	一、五三七	一三、〇六五	三五	一三、一〇〇
全	南道	二、四八二	二、四九四	三四、五〇四	四八	三四、五五二
慶	北道	一、八六〇	一、八八一	一八、三三〇	七三	一八、四〇三

慶	黃	平	平	江	咸	咸	合
倚	安	安	安	原	鏡	鏡	
南	海	南	北	南	北	北	
道	道	道	道	道	道	道	計
一、八九八	二、九九二	二、〇四九	二、三三三	二、四〇五	一、九八七	六六三	二五、四八二
女	女	女	女	女	女	女	女
一、九〇七	三、〇〇六	二、〇五二	二、三三六	二、四三三	一、九八七	六七五	二五、六〇二
二二、三五九	三四、七九六	二六、〇一八	三七、三六二	二一、〇三二	二五、八九〇	九、三四二	二九〇、九八三
一、二八	六一一	五二	八五	一三八	一二五	一八	一、六四二
二二、四八七	三五、四〇七	二六、〇七〇	三七、四四七	二一、一七〇	二六、〇一五	九、三六〇	二九二、六二五

幼稚園

大正十年五月末日

慶	黃	平	平	江	咸	咸	合
倚	安	安	安	原	鏡	鏡	
南	海	南	北	南	北	北	
道	道	道	道	道	道	道	計
一、八九八	二、九九二	二、〇四九	二、三三三	二、四〇五	一、九八七	六六三	二五、四八二
女	女	女	女	女	女	女	女
一、九〇七	三、〇〇六	二、〇五二	二、三三六	二、四三三	一、九八七	六七五	二五、六〇二
二二、三五九	三四、七九六	二六、〇一八	三七、三六二	二一、〇三二	二五、八九〇	九、三四二	二九〇、九八三
一、二八	六一一	五二	八五	一三八	一二五	一八	一、六四二
二二、四八七	三五、四〇七	二六、〇七〇	三七、四四七	二一、一七〇	二六、〇一五	九、三六〇	二九二、六二五

第八章 教育

一七五

園名	所在地	創立年月	組數	職員數	幼 兒		計
					男	女	
私立好壽敦南幼稚園	開城	大正七年四月	二	二	三九	三六	七五
私立好壽敦東幼稚園	同	同 七年四月	二	二	二九	二七	五六
私立公州幼稚園	公州	同 八年九月	二	二	二五	三〇	五五
私立統營基督教幼稚園	統營	同 六年九月	三	五	四一	九〇	一三一
私立海州幼稚園	海州	同 八年六月	二	二	三八	三四	七二
私立義崇幼稚園	江陵	同 八年十一月	一	六	五〇	—	五〇
私立貞新幼稚園	原州	同 七年十二月	二	四	四五	三五	八〇
私立花城幼稚園	橫城	同 九年四月	一	一	八	四一	四九
合計	一一		二二	三三	四一五	三九四	八〇九

第三節 在内地朝鮮學生

内地に於て勉學する朝鮮學生は一千二百三十名(大正九年末現在)にして内三十五名は總督府に於て
 指命せる官費學生なり之を地方別にするときは東京在學者一千九十名地方在學者百四十名とす其の
 履修學科別人員左の如し

私費學生中最大數を占むるは上級學校入學の爲準備教育を受くる者にして其の數約五百名に達し之

第八章 教育

履修學科	官費生	私費生	計
法 制、 經 濟 等	8	35	43
商 業	3	36	39
工 業	2	8	10
農 林	7	29	36
醫 學	0	2	2
教 育	1	4	5
蠶 業	1	1	2
水 産	1	1	2
美 術	1	1	2
音 樂	1	8	9
普 通 學 (中、 女)	1	144	145
計	35	195	230

に亞くを私立大學専門部及其の他に於て法政經濟又は文學、哲學を修むる者にして其の數四百者に達す官費學生は朝鮮に於ける學校卒業者若は内地の學校に私費在學中の者にして成績優秀の者を選抜し官費を以て實業、醫學、教育、美術等を履修せしむる者とす學費の給與額は物價の昂騰に隨ひ年年増加し來り現在一人に對する給與額は一年六百五十圓以内なり學費の外旅費、治療費等をも給するは勿論なりとす

此等學生の保護監督に關しては從來東京に朝鮮留學生監督を置き之に當らしめたりしも大正九年度より右保護監督事業を舉げて東洋協會に委託することと爲せり同會に於ては朝鮮學生督學部を設けて之に當り一方寄宿舎を置き彼等の止宿に便せり尙從前の留學生規程は煩雜にして往往朝鮮學生の内地渡航を束縛するものなりとの批難あり旁右規程は大正九年十一月限之を廢止して彼等の内地遊學を全然自由ならしめ又留學生なる名稱を改めて在内地朝鮮學生と稱呼することと爲せり歸還學生の就職に關しては可及的便宜を與へ或は官公吏、教員等に採用し或は銀行會社等に斡旋就職せしむる等以て無爲徒食の者なからしめむことを期せり

第四節 經學院

經學院は明治四十四年九月舊成均館の組織を變更したるものにして朝鮮總督監督の下に經學の講究を爲し風教徳化を裨補するを目的とする機關なり曩に下賜せられたる臨時恩賜金二十五萬圓を基金とし其の利子年額一萬二千餘圓を以て之を維持費に充當せり

本院には大提學、副提學、祭酒、司成等の職員を置き院務を處理せしめ又各道より碩學高德の耆宿を選ひて講士に舉げ本院に列せしむ

本院は毎年春秋二回文廟の釋奠を嚴修する外事業として月次講筵を開き或は職員を地方に派遣して臨時講演を催し且毎年數回經學院雜誌を發刊し汎く之を頒布す又各道に於ける講士は時時道内各地を巡講する等常に施政の方針に獎順し蔡倫の扶持人心の啓發に努め専ら本院の目的を貫徹せむことを期せり

第五節 教科用圖書

本府に於て編纂する教科用圖書は朝鮮人教養の目的にして普通學校、高等普通學校、實業學校、專門學校等に使用する教科書を編纂し教育に關する勅語の旨趣に依り國民性格を養成し兼りて國語に習熟せしめ實用の知識技能を與ふることを目的とす尙朝鮮の事情に鑒み之に適應せしめむことを計り又學校教育以外社會教育の一助として大正六年度より通俗讀物を編纂して普く之を配付せり

普通學校教科書に於ては國語學習の便を計り第四學年用國語讀本の外總て表音的假名遣を用ひたり又朝鮮語科に對しては本府に於て普通學校及高等普通學校とも朝鮮語及漢文讀本を編纂して之を使用せしむるは勿論又別に普通學校修身書、同農業書、高等程度に在りては地理書に對し夫朝鮮譯文を作り之を使用せしめ居れり又右材料は修身書、國語讀本等に於ては内地人例話内地事物を取りて國民性の陶冶に資するも又務めて朝鮮に於ける模範的人物に關する例話を掲げ其の範を示せり且理科書、農業書等に於ては努めて朝鮮に關する事項を取り實用に便せむことを期せり

専ら内地人の教養を目的とする小學校用教科書は文部省編纂の國定教科書を使用せしむる雖朝鮮は内地と事情を異にするものあるを以て其の教材に就き別に補充教授を爲すの必要を認め目下該教科書編纂中にして同書は尋常小學校補充教本と題し大正九年度に於て已に其の第一二卷同十年度に於て第三卷を出版せり又尋常小學校に農業科を課することに定めたるを以て大正六年三月尋常小學校業書を出版し同年四月より之を使用せしめ翌七年三月又更に高等小學校農業書を出版し同年四月より之を使用せしめたり

又教科書の調査に就ては大正九年十一月教科書調査委員會を設け朝鮮總督の諮問に應ずることとし其の委員長は政務總監を以て之に充て委員には總督府及所屬官署の官吏及學識經驗ある者より選任することとせり

第九章 財政及經濟

第一節 財政

一 歲計

舊韓國政府時代に於ては財政紊亂し豫算の編成は唯形式のみにして其の收支の如きも各廳隨意に之を行ひ確的なる歲計を知ることは能はざりしか、明治三十七年十月財政顧問の設置に依り之を整理の端を啓き會計法の厲行徵稅機關の統一貨幣の整理金融機關の設備等銳意刷新を圖り著著整理の歩武を進めしも其の的確の計數を得るに至りたるは實に統監府設置以後なりき而して明治四十年に於ては日韓協約の結果行政各部の擴張、裁判所の構成、産業上の施設、土木營繕等各種事業の發展に伴ひ明治三十九年度の歳出總額(七百九十六萬七千三百八十八圓)の倍額以上に膨脹し漸次増加の傾向ありて到底其の支出を辨し難きを以て帝國政府は明治四十年度以降同四十五年度に至る六箇年度内に總計一千九百六十八萬二千六百二十三圓を無利子無期限にて舊韓國政府に立替へむことを約定し明治四十年度に一百七十六萬九千五百三圓、同四十一年度に五百二十五萬九千五百八十圓、同四十二年

度に四百六十五萬三千五百四十圓、同四十三年度に一千四百二十八萬二千六百二十三圓を立替へ來りしか併合當時に於て經常の歳入にては豫期の施設經營を實行するに能はざるに依り明治四十四年以降中央政府の一般會計より一千二百三十五萬圓の補充を仰き應急の策を畫せしか爾後諸般の事業を整理し經費を節約し大正二年度に於て該補充金中より二百三十五萬圓を減し尙大正三年度以降五箇年を期し全然補充金の供給を止め朝鮮に於ける收入を以て其の支出に應ずべき計畫を樹て已に同年度及四年度に於て各一百萬圓を遞減せり而して朝鮮特別會計の獨立計畫を實行せむが爲には一方に於て諸般制度の整理を行ひ行政費を節約し他方に於ては産業獎勵の必要に逼まれるを以て確實なる財源を求むるの要あり依て地稅の増徴並市街地稅及煙草消費稅の新設を企劃し大正三年より之を實施し大正八年度に於て全く其の補充を辭せしも警察制度の改革其の他諸般行政の刷新に伴ひ再び補充金を必要とするに至り大正九年度に於て一千萬圓同十年度に於て千五百萬圓の補充を仰くに至れり

年 度		朝鮮總督府特別會計歳入歳出	
年	度	歳 入	歳 出
經	常一臨	時一合	計
經	常一臨	時一合	計

決算	特別會計		豫算	豫算	大正十年度
	明治四十年度	大正八年度			
大正	一〇、九五五、二七三	七七八、四三〇	七五、九五二、七六三	六九、三三七、八三三	九六、二二一、〇二九
大正	一〇、五三六、四七五	二、一三三、一九五	五二、八五二、三五五	五五、四五〇、六四九	六一、二三五、六八八
大正	三、三三一、七四七	二、九〇一、六一九	三二、八三三、七九七	三三、七九八、四六九	三三、五五六、七二七
大正	九、九一六、九九三	一、五四三、五四一	三九、二四八、六九一	六七、二〇九、八一九	七一、四一五、六八三
大正	八、三四〇、三九〇	一、三二〇、一三三	五三、七七八、二二三	四七、一〇七、〇四一	五五、九三六、六〇六
大正	一八、二五七、三八三	二、八六五、六五四	九三、〇二六、八九三	一一四、三六六、八六〇	一五七、五四二、二八九

本表明治四十三年度は同年十月一日朝鮮總督府特別會計設置以後にして平壤鐵業所特別會計歳入歳出を併算せり、製用豫算は八月二十九日より九月三十日迄の歳入歳出なり

朝鮮總督府特別會計歳入歳出豫算科目別(大正九、十兩年度比較)

科	目	(一) 歳入	
		大正十年度	大正九年度
朝鮮	租	九六、一二一、〇二九	六九、三四七、八二〇
	税	三三、八七九、七〇〇	三二、一六五、九三〇

科		目	
地	所得稅	一、六七八、四七七	一、四八四、五八二
取	引所稅	四一九、三二〇	四三五、四一五
鐵	酒稅	九四九、七一七	九九五、〇二七
煙	草稅	八七一、九五六	三、六八八、〇六九
砂	糖消費稅	六、〇六二、五四四	五、〇四八、一八九
關	噸稅	一、九三四、二六五	九一四、五六四
出	噸稅	一、一八八、六一七	九一四、五六四
朝	鮮銀行券發行稅	九、三九八、六一三	八、九七六、六二七
印	紙收	二〇、六七三	六三、四五七
驛	屯賭收	五、六一八	五、六一八
官	業及官有財產收入	三五〇、〇〇〇	五六〇、〇〇〇
教	科書收入	八、五四八、九五八	六、七四六、〇〇一
		二、二一六、六一七	二、六五二、二三八
		五、七二四、四七七	二七、〇三六、五一〇
		八一、三六九	七六、八九九

大正十年度

大正九年度

円

円

部	常
印刷所收入	一、三六五、三八三
專賣收入	二三、〇八三、五一七
度量衡收入	四六一、二八八
林野收入	一、〇一一、二六七
囚徒工錢及製作收入	六一八、二六七
水道收入	七三五、四二五
平壤鑛業所收入	四、五四七、二〇〇
營林廠收入	四、三九〇、八八四
郵便電信電話收入	九、一一一、九三三
南滿洲鐵道株式會社	五、八四二、二六〇
納付金	三八四、七五〇
株式配當金	九〇、九三四
官有物貸下料	
蔘業收入	
鹽業收入	
阿片收入	
雜收收入	七五一、二七七

	一、二二五、七九七
	四一〇、五三〇
	六一九、二七三
	五一五、〇四八
	七三四、〇二一
	二、七七五、二七〇
	三、七七八、一二九
	七、三三八、四五六
	四、九二三、〇六〇
	二七〇、〇〇〇
	七四、八六〇
	二、七〇八、〇三八
	九五四、三八四
	六三二、七四五
	七四七、一四一

第九章 財政及經濟

歲入總計	臨時部						歲入總計
	合	戰時	補時	前年度剩餘	公債	官有物拂下代	
一五七、三五六、七一七	六一、二三五、六八八		一五、〇〇〇、〇〇〇	五、六三五、五七六	三五、五六九、一四四	四、六〇五、九六八	大正十年度
一二四、七九八、四六九	五五、四五〇、六四九	七、五〇〇、〇〇〇	一一、五七九	九、九〇〇、二五九	二二、二二二、八一	四、四〇〇、〇〇〇	大正九年度

科	(二) 歲出	
	目	目
李王家歲費	大正十年度	大正九年度
	一、八〇〇、〇〇〇 円	一、五〇〇、〇〇〇 円

部		常				經									
諸	修	遞	營	平	專	水	中	獸	勸	稅	警	諸	地	裁	總
整	支	信	林	填	賣	產	央	疫	業	業	察	學	方	判	督
理	出	信	業	業	試	試	試	血	模	模	官	講	講	及	督
基	金	費	廠	所	局	驗	驗	清	範	範	講	習	習	監	督
金	費	費	廠	所	局	場	所	製	造	造	所	校	校	獄	府
特	入	入	入	入	入	入	入	造	造	造	關	關	關	費	府
別	入	入	入	入	入	入	入	造	造	造	關	關	關	費	府
會	入	入	入	入	入	入	入	造	造	造	關	關	關	費	府
計	入	入	入	入	入	入	入	造	造	造	關	關	關	費	府
練	入	入	入	入	入	入	入	造	造	造	關	關	關	費	府
入	入	入	入	入	入	入	入	造	造	造	關	關	關	費	府

第九章 財政及經濟

六、七六一、五三五	七、一九七、四一五	三二、五七五、〇三七	一、九二五、一五八	三九六、〇六五	一、一七六、九四八	五九〇、四六八	一八六、八二〇	二五二、六〇八	一三〇、六三一	一六、七四四、九一一	四、〇五三、四〇九	三、二九七、四九五	九、八〇二、五七一	五六〇、八〇五	八四八、六七四	九、四八五、〇六五
-----------	-----------	------------	-----------	---------	-----------	---------	---------	---------	---------	------------	-----------	-----------	-----------	---------	---------	-----------

七、二〇二、二三四	六、一三四、九七五	八、九七八、五五二	一、二二八、〇七四	一、〇〇一、三六五	四四七、二〇八	一四一、七八九	二〇四、一二五	二、四六八、六九四	二、七〇七、〇六一	七、四〇〇、二八一	五〇一、八〇五	四九五、四三四	七、四四一、二八四
-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	---------	---------	---------	-----------	-----------	-----------	---------	---------	-----------

科 目		大 正 十 年 度	大 正 九 年 度
臨 時 外 國 行 諸 費	朝鮮醫院濟生院支出	一、一三〇、〇六八 円	九一二、四六八 円
	豫備金	二、五〇〇、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇
警 務 費	計	一〇一、四一五、六八三	一六、〇〇四、四七〇
	合 計		六七、二〇九、八一九
臨	朝鮮部隊費	二七四、一〇五 円	二〇二、八〇七 円
	高等土地調査委員會費	一一、一三七	一三、〇五〇
林 野 調 查 委 員 會 費	調查及試驗費	七二、一七一	—
	補助費	一、三二五、八四六	一、一八四、七五七
營 繕 助 費	助費	八、二二六、一三九	七、六一九、九二八
	繕費	五、〇四二、七九一	五、一八八、六四七
土 木 費	木費	五、三〇三、二九四	五、五七四、一七六
	鐵道建設及改良費	二〇、〇〇〇、〇〇〇	一五、三三〇、〇〇〇
鹽 田 擴 張 費	費	九六四、八九二	五〇三、五三三
	臨時外國行諸費	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇

時

軍用地買收費	二〇〇,〇〇〇
金融組合聯合會貸付金	三二五,〇〇〇
地籍整理及驛屯土處分費	二九八,八六三
臨時教育施設費	一、一〇五,五六六
臨時朝鮮語獎勵費	一五〇,〇〇〇
警察官署新營費	一、二八三,二六三
警備電話擴張費	一五〇,〇〇〇
監獄新營費	一、一五三,〇四六
耕地改良擴張調查費	二四〇,五五九
灌溉及開墾事業助成費	一、〇一四,〇二六
臨時特別手当當	四九八,七四四
面公金被書補填補助	一〇,〇〇〇
臨時警防費	八九,二五三
對在朝鮮人施設費	二八八,三六八
煙草專賣創業費	七、二四二,九四三
災害費	四二五,六〇〇
平和記念博覽會出品費	一八〇,〇〇〇

二〇〇,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇
三二五,〇〇〇	三二五,〇〇〇
二九八,八六三	一、四七五,一九三
一、一〇五,五六六	一〇〇,〇〇〇
一五〇,〇〇〇	一、三〇〇,〇〇〇
一、二八三,二六三	一、〇二二,二七八
一五〇,〇〇〇	八五〇,〇〇〇
一、一五三,〇四六	一八一,五九九
二四〇,五五九	四二二,〇七〇
一、〇一四,〇二六	三三二,四九六
四九八,七四四	一〇,〇〇〇
一〇,〇〇〇	五二,〇八〇
八九,二五三	
二八八,三六八	
七、二四二,九四三	
四二五,六〇〇	五六六,二〇六
一八〇,〇〇〇	

營總督府廳舍新營費	三, 九〇〇, 〇〇〇	二, 四〇〇, 〇〇〇	七〇〇, 〇〇〇	四〇〇, 〇〇〇	四〇〇, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇
平安北道廳舍新營費	六五〇, 〇〇〇	〇	一五〇, 〇〇〇	二五〇, 〇〇〇	二五〇, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇
緝醫院新營費	七, 〇九〇, 〇〇〇	一, 七五〇, 〇〇〇	一, 一五〇, 〇〇〇	一, 一五〇, 〇〇〇	一, 一五〇, 〇〇〇	〇	七五〇, 〇〇〇	〇	〇
元山郵便局新營費	三〇〇, 〇〇〇	一五〇, 〇〇〇	七〇, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
費京城電話擴張費	八八二, 四七三	一三五, 七七八	三五四, 五〇〇	三〇〇, 〇〇〇	三〇〇, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇
土道路修築費	一七, 五〇〇, 〇〇〇	一五, 一五〇, 〇〇〇	一, 五〇〇, 〇〇〇	八三〇, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇
木龍山防水堤築造工事費	三三, 九七五, 〇〇〇	一六, 〇〇六, 五〇九	三, 一七五, 〇〇〇	一, 九三二, 〇〇〇	一, 四三二, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇
費水	一, 一九六, 〇〇〇	〇	六四, 八〇〇	六四, 八〇〇	〇	〇	〇	〇	〇
費水	一, 一七八, 八五四	六八〇, 〇〇〇	三八〇, 〇〇〇	一八, 八五四	〇	〇	〇	〇	〇
鐵道建設及改良費	一八三, 五九〇, 六四六	一四〇, 〇三〇	二〇, 〇〇〇	一〇, 五〇〇, 〇〇〇	一〇, 五〇〇, 〇〇〇	一〇, 五〇〇, 〇〇〇	〇	〇	〇
警察官署新營費	二, 五八三, 二六三	一, 三三〇, 〇〇〇	一, 二八三, 〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
監獄新營費	二, 〇〇三, 〇四六	八五〇, 〇〇〇	一, 一五三, 〇四六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
鹽田擴張費	五, 七〇二, 九七四	五七三, 五三三	九六四, 八九二	九五六, 六三二	九四七, 九六六	九三二, 五一六	八八七, 七六六	五〇九, 六九九	〇
煙草專賣創業費	四, 七六三, 八一一	—	一, 六五八, 八八七	一, 五七五, 五四三	一, 五三一, 五八一	〇	〇	〇	〇

費目	總費額	支					額
		大正九年 度	大正十 年度	大正十 一年度	大正十 二年度	大正十 三年度	
合 計	二五四、四四〇 一、一九六	一五九、三〇〇 〇、八六六	三二、八八四 三、八八	一八、三三八 八、一九	一六、七四六 五、四三	一三、八四七 五、二六	一三、八三三 三、四六
		以 大正九年 度	年	一 年度	二 年度	三 年度	四 年度
		大正十 年度	大正十 一年度	大正十 二年度	大正十 三年度	大正十 四年度	大正十 五年度

備考 土木費、海關工事費に於て工事上の都合に依り大正九年度割額中繰延たる五十萬圓は假りに之を大正十一年度に加算し置けり

二 朝鮮總督府特別會計所屬國債

大正十年九月末日現在國債額は一億六千七百五十三萬八千餘圓にして內起業資金公債及第一回四分利公債千四百一萬六千餘圓は舊韓國政府の起債に係り道路修築、海關工事、水道工事、金融及官業の資金、土地調査、教育及衛生設備等に使用し旱害救濟費一時借入金五百萬圓を除く其の他の國庫債券及借入金一億四千八百五十二萬一千餘圓は朝鮮總督府特別會計設定後朝鮮事業公債法に依り起債したるものにして鐵道の建設及改良、道路の修築、海關工事等の諸費を支辨し大正九年度に於ては更に醫院新營、警察官署新營、警備電話擴張、監獄新營、鹽田擴張及平壤蠶業所擴張等の諸費に使用するものなり

國債現在額

大正十年九月末日

種別	發行及借入年月	發行及借入額	利子歩合	据置年限	償還年限
起業資金債	明治四十一年十二月	一、三、九六三、九二〇	六分五厘九毛八	十年	大正二十二年十二月
第一回四分利公債	大正二年三月	一、〇五三、六五〇	四分	同	大正二十二年十二月
朝鮮事業費國庫債券	大正六年十二月	四四、九九九、三〇〇	五分	同	大正二十二年十二月
事業費借入金	自大正七年至十年	二七、一七一、三二〇	五分	同	大正二十二年十二月
同	大正八年三月	五、五〇〇、〇〇〇	六厘	同	大正二十二年六月
ろ號五分利國庫債券	大正七年五月	一、三三五、八七五	五分	同	大正二十二年六月
に號五分利國庫債券	大正八年四月	一四、四三五、一五〇	五分	同	大正二十二年九月
ぬ號五分利國庫債券	大正九年九月	二三、二一二、八二五	五分	同	大正二十二年九月
そ號五分利國庫債券	大正十年四月	一九、九六七、三〇〇	五分	同	大正二十二年七月
早害救濟費一時借入金	大正十年三月	五、〇〇〇、〇〇〇	七分	同	大正二十二年三月
總計		一六七、五三八、一三〇			

三租稅

内國稅

(イ)地稅 地稅は朝鮮現行内國稅の首位を占め大正十年度收入豫算額千百三十二萬三千六百十二圓を算し内國稅收入豫算額二千三百四十六萬四百十四圓の約五割に當れり

地稅は大正三年制令第一號地稅令(大正七年制令第九號改正)に依り田(畑)畚(田)盛(宅地)池沼、雜種地及有料借地たる社寺地に之を課し土地調査令に依る土地調査施行地域には土地臺帳、山間部、離島等土地調査不施行地域には地稅臺帳(土地臺帳に當る)に登錄したる土地所有者、質權者、質の性質を有する典當權者(質權者に當る)又は地上權者より徵收す

地稅は土地の收益を標準としたる地價を課稅標準として其の千分の十三を課す

地稅の納期は第一期は十二月一日より同二十八日限、第二期は翌年二月一日より同月末日限とす但し一面(面は町村に當る)に於ける同一納稅義務者の地稅納額一圓未滿なるときは第一期に於て其の全額を徵收す

今道別に課稅地段別、地價及地稅額を表示すれば左の如し

道別課稅地段別、地價及地稅額

大正九年一月一日

道名	段					別	合計	地價	地稅	納稅人員
	田(畑)	田	宅地	池沼	雜種地					
京畿道	一七九、八八二	一九一、九六六	三、八四四	四九	四、〇〇三	町	三八八、七四四	九一、四四三、四四八	一、一八八、七六四	二五一、五九一
忠清北道	八七、七七五	六七、四三三	五、七四一	三二	三九	町	一六一、〇〇三	四五、四六六、六八四	五九一、〇六六	一五六、四九九
忠清南道	八一、四八九	一五五、六三三	九、八七一	三三	三二、六四	町	二五〇、二八三	九六、三九一、九三三	一、二五二、七九五	二二八、九二六
全羅北道	六七、二二三	一六三、〇三三	八、八四二	二七	四、二七〇	町	三四三、五四五	八七、六七三、八八〇	一、一三九、七四七	三五六、三四三
全羅南道	一九一、九七一	一九八、五一四	一五、三三一	九六	五、二二三	町	四一〇、九一六	一四、九〇七、九八四	一、四九五、八〇三	四六〇、九九七
慶尙北道	一九八、五八二	一八二、七六六	一三、三三一	七四	七七八	町	五九五、四九二	二二九、六九四、九六三	一、六八六、〇三三	五〇六、九三〇
慶尙南道	一四四、〇九〇	一五七、七〇八	一〇、三六四	四四	八八六〇	町	三九一、四六五	一四、四三三、一五九	一、四九四、四三三	五四八、九四二
黃海道	四〇三、九七三	一三五、九七八	一、三二五	七三	七、八九七	町	五四八、二三四	七四、七三六、三四七	九七一、四四一	三六一、八三三
平安南道	三五六、〇一八	五九九、四九四	七、九三六	一〇三	五、五八三	町	四〇九、一二六	三四、五八七、〇二七	一、四九四、六三一	二〇六、六〇五
平安北道	三二五、八五八	六九、七二六	七、四六四	〇	三、一六〇	町	三九三、二一〇	二七、八三〇、一九七	三六、七九二	一七一、二四一
江原道	二四八、八九二	七五、四三三	七、八六八	一八	三、三三	町	三三三、五九九	三〇、七三四、四三三	三九九、五四七	二二八、〇四六
咸鏡南道	三〇七、五〇五	三九、二五八	六、七三二	五	二、六九二	町	三五六、三三一	一七、七三七、三九九	三三〇、五八四	二〇四、四七二
咸鏡北道	二〇四、二七三	六七、九三三	二、七九三	五	四四六	町	二二四、三〇九	八、八八六、五二七	一一五、五三四	九一、五八八
總計	二、七三六、五二九	一、四七五、六三三	一、二二二、〇七三	一、一三三、五三四	四、五三五、四四	町	四、三九七、一六一	一、六七九、二九〇、七九	一、一四三、八、六七三	三、三九六、九〇七

第九章 財政及經濟

備考

- 一 地税は道別地價の合計額に依りて算出せり
- 二 段別は町位未滿、地價及地税は圓位未滿を切捨てたるに付總計に於て符合せず
- 三 ○は單位未滿のものさす

(口)市街地税 市街地税は大正二年制令第二號市街地税令(大正七年)に依り左記二十六市街地に在る田(畑)、畚(田)、塋(宅地)、池沼、雜種地又は有料借地の社寺地に之を課し土地臺帳に登録したる土地の所有者、質權者、質の性質を有する典當權者(質權者に當る)又は地上權者より徵收し其の第一期は四月一日より同月三十日限、第二期は十月一日より同月三十一日限とす市街地税は土地の時價を標準として決定したる地價を課税標準とし其の千分の七を課す而して地價は十年毎に一般に之を改正す

大正十年度收入豫算額三十五萬四千八百六十五圓なり

市街地税施行市街地

道

市

街

地

京	忠	忠	全	全	慶	慶	黃	平	平	咸	咸	咸
畿	清	清	羅	羅	尙	尙	海	安	安	鏡	鏡	鏡
道	北	南	北	南	北	南	道	南	北	北	南	北
道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道
	京城府、仁川府、水原郡水原面、開城郡松都面	清州郡清州面	公州郡公州面、大田郡大田面、論山郡江景面	群山府、全州郡全州面	木浦府、羅州郡羅州面、光州郡光州面	大邱府、金泉郡金泉面	釜山府、馬山府、晉州郡晉州面	海州郡海州面	平壤府、鎮南浦府	新義州府、義州郡義州面	元山府、咸興郡咸興面	清津府

今道別課稅地反別、地價及市街地稅額を表示すれば左の如し

第九章 財政及經濟

道別課稅地段別、地價及市街地稅額

大正十年一月一日

道名	段別					合計	地價		市街地稅	納稅人員
	田	(畑)	畜	水田	(埜)		宅地	池沼		
京畿道	九三七	九八	一、一〇三	〇	三九	二、一七八	二八、九六八、三一九	二〇三、七七八	三〇、二七三	
忠清北道	一〇	一三	二六	〇	〇	五〇	一六六、九〇一	一、一六八	五三七	
忠清南道	七五	六一	一三八	〇	一〇	二七五	一、〇七一、六九一	七、五〇一	一、六〇七	
全羅北道	六九	三三	一五四	〇	九	二五六	一、四六六、五二五	一〇、二六五	三、三二七	
全羅南道	八九	七九	二一〇	〇	三二	二二	一、三九一、五六四	一六、七四〇	二、九四六	
慶尙北道	三〇〇	三二八	一六〇	〇	四	七八四	三、〇〇一、二二〇	三三、〇〇八	四、七四五	
慶尙南道	八六六	五八三	三二五	〇	一七	一、七八〇	七、八九六、五〇四	五五、二七五	七、九五四	
黃海道	一五三	一五	八四	〇	一	二五〇	四三五、一四三	三、〇四六	三、〇五五	
平安南道	一七三	二八	三五六	〇	一〇	四六八	三、四八六、五二六	二四、四〇五	四、八五八	
平安北道	三二一	一	六四	〇	〇	二八七	三三三、九三	三、二六七	一、六四五	
咸鏡南道	一七〇	一六	一七六	〇	三五	三九八	一、六六七、四〇五	一一、六七一	五、四七七	
咸鏡北道	三三三	〇	四四	〇	〇	三七七	二九一、九〇一	五、〇四三	四、四四	

總計	五、九三二	一、三三三	五、七三二	二	一、七〇	一、七五二	五、一六七	五、一七五	六、七七七
----	-------	-------	-------	---	------	-------	-------	-------	-------

備考

一 市街地稅は道別地價の合計額に依りて算出せり

二 段別は町位未滿、地價及市街地稅は町位未滿を切捨てたるに付總計に於て符合せず

三 ○印は單位未滿のものぞす

- (ハ) 所得稅 所得稅は大正九年制令第十六號朝鮮所得稅令に依り (一) 朝鮮に本店又は主たる事務所を有する法人 (二) 所得稅法施行地、臺灣、關東州又は樺太以外に本店又は主たる事務所を有する法人が朝鮮内に資産又は營業を有するときは其の資産又は營業より生ずる所得に付其の法人に之を賦課す而して本稅の課稅標準、稅率、課稅方法等は内地に於ける法人所得稅と概ね同一なり大正十年度に於ける所得稅の收入豫算額は四十一萬九千二百二十圓なり
- (ニ) 取引所稅 取引所稅は大正十年制令第六號朝鮮取引所稅令に依り之を賦課し取引所に課する取引所稅と仲買人に課する取引稅とを總稱したるものなり而して取引所稅は賣買手数料收入金額の百分の十、取引稅は取引所に於ける定期取引に依る賣買各約定金高(轉賣、買戻に係る分を除く)

の萬分の五を賦課す

大正十年度に於ける取引所税(取引税を含む)の收入豫算額は九十四萬九千七百十七圓なり

(ホ)鑛税 鑛税は大正四年制令第八號朝鮮鑛業令に依り鑛業權者に之を賦課す而して鑛税とは鑛産税及鑛區税の二者を總稱したるものなり

鑛産税は鑛産物の價格百分の一の割合を以て之を課す但し金鑛、銀鑛、鉛鑛、鐵鑛、砂金及砂鑛に付ては鑛産税を課せざるものとす

鑛區税は鑛區千坪又は河床延長一町毎に一年六十錢を課す但し千坪又は一町未滿の端數は之を千坪又は一町として計算す

大正十年度に於ける鑛税の收入豫算額は八十七萬千九百五十六圓なり

(ハ)登録税 登録税は明治四十五年制令第十六號朝鮮登録税令(數回の改正あり)に依り之を賦課す就中不動産に關する登記を受くるときは左記の區別に従ひ登録税を賦課するものとす

- 一 相續に因る所有權の取得は不動産價格の千分の七
- 二 贈與、遺贈其の他無償名義に因る所有權の取得は不動産價格の千分の五十
- 三 賣買其の他有償名義に因る所有權の取得は不動産價格の千分の三十五

- 四 所有權保存は不動産價格の千分の五
- 五 共有物の分割は分割に因りて受くる不動産價格の千分の五
- 六 永代の地上權の取得は不動産價格の千分の二十五
- 七 地上權、永小作權の取得は存續期間十年未滿は不動産價格の千分の二、二十年未滿は千分の三、三十年未滿は千分の四、三十年以上は千分の五、存續期間の定めなきものは千分の五
- 八 賃借權の取得は存續期間十年未滿は不動産價格の千分の二、十年以上は千分の三、存續期間の定めなきものは千分の一
- 九 地役權の取得は要役地價格の千分の一
- 十 先取特權の保存又は取得は債權金額又は不動産工事費用豫算金額の千分の六
- 十一 質權、抵當權の取得は債權金額の千分の六
- 十二 競賣、強制管理の申立は債權金額の千分の六
- 十三 假差押、假處分は債權金額の千分の四
- 十四 抵當ある債權の差押は債權金額の千分の六
- 十五 相續財産の分離は所有權に付ては不動産價格の千分の六、所有權以外の權利に付ては不

動産價格の千分の一

十六 請求又は申立に因り抹消せられたる登記の回復は不動産每一箇二十錢

十七 假登記は不動産每一箇二十錢

十八 附記登記は不動産每一箇十錢

十九 登記の更正、變更又は抹消は不動産每一箇十錢

(ト)印紙稅 印紙稅は大正八年制令第六號印紙稅令に依り證書、帳簿を作成する者に之を賦課す而

して印紙稅法第三條乃至第五條の證書帳簿と類似の效用を有するものに付ては其の名稱に拘らず

同條の規定に依るものとす

(チ)酒稅 酒稅は大正五年制令第二號酒稅令(大正八年制令第五號)に依り之を賦課す、大正

十年度收入豫算額六百六萬二千五百四十四圓なり

酒稅令に於て酒類と稱するは酒精及酒精を含有する飲料を謂ひ之を左の三類に分つ

一 釀造酒 清酒、濁酒、藥酒、麥酒の類にして醱其の他の醱酵液より製成したるもの

二 蒸餾酒 燒酎、高粱酒、酒精の類にして醱其の他の醱酵液、酒類、酒粕其の他の物より蒸

餾して製成したるもの

三 再製酒

白酒、味淋、松露酒、甘紅露、梨露酒の類にして醸造酒又は蒸餾酒の一種と他の酒類を製造せむとする者は製造場一箇所毎に製造場の所在を管轄する府尹郡守島司の免許を受くるものとす

酒類を製造する者又は酒類を保稅地域より引取る者に對しては其の造石數又は引取石數に應し左の割合に依り酒稅を課す

一 釀造酒

朝鮮酒たる濁酒

一石に付

一圓五十錢

朝鮮酒たる藥酒

一石に付

六圓

麥酒

一石に付

八圓五十錢

前記以外の釀造酒

一石に付

二十圓

二 酒精以外の蒸餾酒

原容量百分中純酒精の容量二十以下のもの

一石に付

三圓

原容量百分中純酒精の容量三十五以下のもの

一石に付 八 圓

原容量百分中純酒精の容量四十五以下のもの

一石に付 二十 圓

原容量百分中純酒精の容量四十五を越ゆるもの

一石に付 原容量百分中純酒精の
容量一箇毎に八十五錢

三 酒 精

一石に付

原容量百分中純酒精の
容量一箇毎に八十五錢

四 再 製 酒

一石に付

原容量百分中純酒精の容量一箇毎に八十五錢
但し一石に付廿五圓五十錢に満たざるときは
廿五圓五十錢とす

自家用酒製造の免許を受けたる者に對しては毎酒造年度左の割合に依り酒税を課す

濁 酒 一石未満 一圓五十錢 一石以上二石以下三 圓

藥 酒 一石未満 六圓五十錢 一石以上二石以下十三圓

燒酎 五斗未滿 一圓五十錢 五斗以上一石以下三圓
 朝鮮酒 一種以上を製造するときは藥酒の例に依る

大正八酒造年度(自大正八年九月) 酒類の種類別石數及稅額表
 (至大正九年八月)

種類別	鮮内		製造		輸移入		計	
	場數	石數	稅額	石數	稅額	石數	稅額	
清酒	×	一六七	六二,五三三	一〇,五〇二	三四六,〇三五	八三,〇三三	九九六,三〇七	
朝鮮酒に非ざる濁酒	×	四二	八五〇	一〇,二〇九	—	八五〇	一〇,二〇九	
麥酒				一八,五六三	九三,八一五	一八,五六三	九三,八一五	
葡萄酒其他果實酒	×	三三	六	四八二	五,七九三	四八八	五,八七三	
其他		一三	一七七	三三	六三七	三三〇	二,七六三	
朝鮮酒たる濁酒	×	三三	八四六,六九六	一,〇一六,〇三四	—	八四六,六九六	一,〇一六,〇三四	
藥酒	×	二,〇八六	三六,〇四五	二九,七五五	—	三六,〇四三	二九,七五五	

種類別	鮮内製		輸移入		計	
	場數	石數	石數	稅額	石數	稅額
蒸酒	六六、二六〇	九四六、二九四	一、九〇八、四七七	三九五、二八〇	九八五、八九九	二、二五二、七五七
朝鮮酒に非	二八	七、七五九	五〇、六八三	一三〇、八三六	二、五五一	一〇〇、八三六
さる焼酎	一五四	五〇、四二一	五、八二四	八五、三八五	一三、五八三	一三六、〇六八
朝鮮酒たる	四、〇四六	一〇九、八〇九	—	—	一〇九、八〇九	五〇三、四一一
焼酎	—	—	—	—	—	—
高粱酒	三〇	五、〇七七	九三、〇七四	四八、五二二	四八、八二九	一四一、五九五
ウ井スキー	—	—	六〇三	六、七九八	六〇三	六、七九八
及ブランドー	—	—	一五六	一、七二二	一五六	一、七二二
酒其他	—	—	—	—	—	—
計	八、五三五	一三〇、六四五	六四七、一六八	二六三、二五四	一三一、四九三	九一〇、四三三
白酒	二〇〇	—	—	—	—	—
味淋酒	一一	二八	四三〇	二七七	四六	七〇七
甘味葡萄酒	一四	六八九	一〇、三四二	六、〇一一	一、〇八八	一六、三三三
計	—	—	—	—	—	—
再	—	—	—	—	—	—
計	—	—	—	—	—	—

製	酒		總計
	ウ井スキー	其の他	
ウ井スキー	×	×	×
其の他	×	×	×
計	七四、八一	二六、〇九	一〇〇、九〇
總計	九、六三	一、〇九	一〇、七二
	一、〇六八、八八一	一、九二七	二、〇六六、七九八
	二、五八六、二四五	三〇、五九四	二、六一六、八三九
	五二、〇〇六	一、五五七	五三、五六三
	六五二、九一四	二五、三七九	六七八、二九三
	一、一三〇、八八七	五、四九四	一、一三六、三八一
	三、二二八、一五九	五三、九七三	三、二八二、一三二
	四、七七六	七、五〇七	一二、二八三

備考 一 本表の外自家用酒税額五八三、五九九圓あり

二 一人にて二種以上の酒類を製造する者の場数は造石数の多き一方に掲げ他は×印を附し外書せり

三 石數及税額は單位未滿を切捨てたるに付計又は總計に於て符合せず

(リ) 煙草耕作税 煙草耕作税は大正十年制令第五號朝鮮煙草專賣令(大正十年制令第十一號改正)に

依り自家用煙草耕作者に之を賦課す

自家用煙草を耕作せんとする者は耕作地の所在を管轄する府尹郡守島司の許可を受くるものとす
 煙草耕作税は自家用煙草耕作の許可を受けたる者より毎年八十錢を徴收す

大正十年度に於ける自家用煙草耕作許可人員は約五十九萬人なり

(又)砂糖消費税 砂糖消費税は大正八年制令第四號砂糖消費税令に依り之を賦課す大正十年年度收入

豫算額百十八萬一千六百十七圓なり

砂糖、糖蜜又は糖水を製造せむとする者は製造場一箇所毎に製造場の所在を管轄する府尹、郡守

島司の免許を受くるものとす

砂糖消費税は砂糖、糖蜜又は糖水を製造場又は保税地域より引取るとき其の引取人より之を徴收

す

大正九年度砂糖消費税額表

區	名	數	量	税	額
第一種	計 丙 乙 甲		一八、五三一 斤		一八四 円
			一、二二〇		一五
			一七二、七四六		二、五九二
			一九二、四九七		二、七九二

備考	總計	糖		糖蜜		砂糖									
		合計	水	第二種		第一種		合計	第六種	第五種	第四種	第三種	第二種		
				計	乙	甲	計							乙	甲
稅額は關位未滿を切捨てたるに付計又は合計に於て符合せず	一四、〇四四、七七六	六、五三九	一〇一、七九〇	九二、七〇四	二〇	九二、六八四	九、〇八六	九、〇八六	一三、九三六、四四七	九、〇八六	一三、〇五一〇	一三、四九五、〇一三	九〇四、九二一	四四、一七二	一七九、三三四
	六一四、五七四	二五九	一〇六二	九二七	〇	九二六	一三五	一三五	六一三、二五一	一三五	六、〇二五	五六三、二一三	三六、一九五	一、五四五	四、四八一

(ル)朝鮮銀行券發行税、朝鮮銀行券發行税は明治四十四年法律第四十八號朝鮮銀行法に依り朝鮮銀行正貨準備發行高及五千萬圓を限度とする保證準備發行高の外更に市場の景況に依り朝鮮總督の認可を受け國債證券其の他確實なる證券又は商業手形を保證として銀行券を發行するときは其の發行高に對し一年百分の五を下らざる割合(割合は其の時時之を定む)を以て賦課す
大正十年度に於ける朝鮮銀行券發行税の豫算額は三十五萬圓なり

(オ)徵收

國稅の徵收は國稅徵收令の規定する所に依る徵稅機關は内地の如く特別機關を設けざるも府面(法人)をして徵收せしめ又は府尹、郡守、島司をして直接徵收せしむる等其の方法は内鮮略は同一なり而して府面(法人)をして徵收せしむる税日は國稅徵收令施行規則に定むるか如く地稅、市街地稅、酒稅(朝鮮酒以外の酒稅を除く)及煙草耕作稅にして其の他の國稅は總て府尹、郡守又は島司に於て納稅義務者より直接徵收す但し府面(法人)をして徵收せしむる國稅に付ても納稅義務者より直接納付せしむるを便利なりと認むるときは直接府郡島に於て徵收し得るものとす

關稅 併合の當時通商各國に對し其の經濟上の利害に急激の影響を與ふるを避けむか爲十年間

舊韓國關稅を據置ぐ旨を聲明し同時に帝國の他の地方に對し特別なる關稅制度を布けるか大正九年八月二十八日を以て右期間滿了せるを以て統一關稅主義に依り帝國共通の關稅制度を布くの方針を以て同月二十九日以後關稅法等を朝鮮に施行し唯朝鮮に於ける民庶產業等の實況に鑑み特殊の事情あるものに限り若干特例を設けたり而して内地に於ては之と同時に直に對朝鮮移入稅を撤廢せるも朝鮮に於ける對内地移入稅は財政上の都合に依り直に之を撤廢を斷行する能はざるも將來事情の許す限り速に之を撤廢する方針にして大正十年度は財政計畫上之を得ず之を存續することとせり大正十年度收入豫算額は輸入稅二百六十三萬九千三百六十七圓移入稅六百七十五萬九千二百四十六圓計九百三十九萬八千六百十三圓なり

噸稅 噸稅は外國貿易の爲外國に往來する船舶開港に入港したるとき之を課す從來の噸稅は關稅と同様併合當時の宣言に基き外國又は内地、臺灣、樺太より朝鮮開港に入る船舶に對し舊率に依り課稅せるも大正九年八月二十九日以後噸稅率等は凡て内地に於ける噸稅法の例に依ると同時に朝鮮と内地、臺灣又は樺太との間に通航する船舶の噸稅は之を廢止せり

出港稅 出港稅は内地に於ける對朝鮮移入稅の撤廢に伴ひ帝國内の他の地方に於て内國稅を課する物品及朝鮮に於て輸入稅の特例を設けたる物品に付朝鮮と帝國内の他の地方との間に於ける内

國稅及關稅の相違を調節する爲大正九年八月二十九日以後新に之を設定せるものにして當該貨物を内地臺灣又は樺太に移出するべき之を賦課す

出港稅課稅物件及稅率は左の如し

一 内地、臺灣又は樺太に於て内國稅を課する物品但し骨牌、賣藥及賣藥類似品並内地、臺灣又は樺太に輸入する場合に内國稅を課せざる物品にして朝鮮に輸入したるものを除く移出先に於ける内國稅の稅率と同一の稅率

二 大正九年法律第五十三號第一條の規定(朝鮮に於ける特別輸入稅率の規定)に依り關稅定率法の輸入稅率より低き稅率に依り輸入稅を課し又は無稅と爲したる物品及同法第四條の規定に依り朝鮮に於てのみ輸入稅を低減又は免除したる物品

無稅の物品又は輸入稅を免除したる物品に在りては關稅定率法に依る輸入稅率と同一の稅率、其の他の物品に在りては關稅定率法に依る輸入稅率と大正九年法律第五十三號第一條の規定(朝鮮に於ける特別輸入稅率の規定)に依る輸入稅率又は同法第四條の規定に依り低減したる輸入稅率との差に相當する稅率

三 帝國內に於て製造したる左記織物製品並朝鮮に於て製造したる菓子及糖果

衣服、帽子、帶、足袋、蚊厨、浴布、手巾、テーブルクロス、窓掛、蒲團及寢具、其の原料として使用したる織物の價格の百分の十

菓子及糖ハ

其の物品中に含有する甘蔗糖百斤に付五圓

四 驛屯賭收入

驛屯賭收入とは驛屯土の貸付料及使用料の謂にして驛屯土とは驛土及屯土の總稱なり驛土とは李朝以前に於て公文書の遞傳ニ公務に因り旅行する官吏との爲に各道に驛站を設け之に驛卒馬匹を配置し其の給養に充つる爲給付せられたる田沓(畑田)なり屯土とは往昔警備の爲戍卒を置き其の耕食に充てたる土地なり而して是等の制度は明治二十七年に至り廢止せられ爾來其の土地は或は國に於て或は宮中に於て處理したるも現今之を國有地として處理せり而して驛屯土の貸付及其の附屬の汎の使用に關する事項並貸付料及使用料の收納は府尹、郡守、島司に於て之を處理す貸付料は從來定額金納制にして大體に於て民間小作料に比し一割を低減せるものを標準と爲したるも民間小作料の如く物納に非ざるを以て年の豊凶と穀價の變動に因り地主たる國と小作人の間常に利害相反し且民間

小作料との間に於ても權衡を得ざる場合多き故に大正九年七月筈以外の土地は主作物を本位とせる現品の一定量を貸付料算出の基礎とし其の年の穀價に依りて之を金額に換算し京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黃海道及江原道は毎年十一月中に其の他の各道は毎年十二月中に收納することに改めたり而して收穫高に對する現品定量額の割合は民間に於ける小作慣例を參酌して三割五割以下の範圍に止めたるが故に急激なる負擔の増加を避け得たるのみならず民間小作料に比し尙一割以上低廉となりたり

從來小作期間は普通五年とし特別の事由あるものの外は滿期に至るも小作人を更改することなく貸付契約の更新に依りて可成永年に互り小作に従事せしむることとし以て土地愛護の念を養成するに努力せり、然るに大正九年府令第百十號を以て驛屯土は之を現在小作人に賣拂ふことと爲し賣拂代金は十年間に分割前納せしむるを以て賣拂契約締結の土地に付ては小作期間を十年に改むると同時に其の貸付料は第二年度以降は其の十分の一宛を遞減することと爲せり、大正十年度驛屯賭收人の收入豫算額は二百二十一萬六千六百十七圓なり

第二節 通貨

朝鮮の幣制は從來幾多の變遷を重ねたりしか明治三十八年に至り貨幣の根本的整理に著手し先づ幣制を改正し其の品位量目を帝國貨幣と同一となし新貨幣を發行して其の流通普及に努め舊白銅貨及葉錢の回収に努めたる結果舊白銅貨は明治四十二年十二月限り全く其の通用を禁止し葉錢は其の流通額大に減少するに至れり併合以來帝國貨幣統一の方針を採り舊韓國貨幣は一切之を鑄造を停止し其の結果流通額大に減少せるを以て大正七年四月貨幣法を施行すると同時に舊韓國貨幣の處分に關する法律を公布し舊韓國貨幣條例に依り發行し又は通用を認めたる貨幣は大正九年十二月末日限り通用を停止し其の後五年間は政府に於て之を引換へ葉錢のみ尙當分其の通用を認めたり

通貨流通見込高

年 別	金 貨	補助貨及 小額紙幣	舊韓 新貨幣	日 本 銀 行 券	朝 鮮 銀 行 券	合 計
大正八年末	千円	千円	千円	千円	千円	千円
同 九年末	1	10,604	1,905	112	121,475	134,098
同 十年九月末	1	10,373	1,904	14	86,196	98,488
		8,754		20	82,482	91,257

備考 内容の合計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

朝鮮銀行券中朝鮮以外に流通せるものは之を含まず

朝鮮銀行券は朝鮮銀行法に依り發行する兌換券にして朝鮮に於ける主要の通貨として經濟の發達に伴ひ漸次發行高を増加せるが更に大正六年十二月以降關東州及南滿洲鐵道附屬地に於ても無制限通用を認められ同時に從來橫濱正金銀行の發行し來れる金券の引繼を受けたるを以て發行高の増加一層顯著なるに至れり而して其の保證準備發行制限額は從來三千萬圓なりしか大正七年四月朝鮮銀行法の改正に依り五千萬圓に擴張せられたり

第三節 金融

一 金融機關

朝鮮に於ける金融機關は明治十一年第一銀行釜山支店設置に濼腸し次て十八、百三十銀行等各地に支店を設け之と前後して朝鮮人に依り大韓、天一(朝鮮商業)、漢城の諸銀行設立せられたり超へて同三十九年農工銀行、同四十年より地方金融組合(金融組合)同四十一年東洋拓殖會社の各設立を見

同四十二年中央銀行として韓國銀行設立せられ後朝鮮銀行と改稱したり其の後東洋殖産會社は大正六年十月本店を内地に移したるも依然朝鮮に於ける主要の金融機關として活動を續け又大正七年十月一日朝鮮殖産銀行設立せられて従来の六農工銀行を統一合併せり而して現今朝鮮に於ける金融機關は中央金融機關として朝鮮銀行あり、不動産金融機關として朝鮮殖産銀行及東洋殖産會社あり、商業金融機關として普通銀行の朝鮮に本店を有するもの二十一、内地に本店を有するもの三の外朝鮮銀行及朝鮮殖産銀行亦各其の特殊銀行業務の傍ら普通銀行業務を兼營するあり、下層金融機關として金融組合四百十七を有す

各種銀行一覽

大正十年九月末日

銀行	支店及資本金及開業年月日		銀行	支店及資本金及開業年月日	
	支店元金	開業年月日		支店元金	開業年月日
朝鮮銀行	一〇〇,〇〇〇	明治四十三年十一月二十四日	百三銀行支店	四〇〇	大正五年七月二十日
朝鮮殖産銀行	五〇,〇〇〇	大正七年十月一日	漢城銀行	一三〇	大正六年二月七日
第一銀行支店	三〇〇	明治十一年五月四日	韓一銀行	六〇〇	同三十九年八月八日
十八銀行支店	九〇	大正五年同二十三年一月一日	朝鮮商業銀行	七〇〇	同三十二年三月七日

銀行	支店及 出張所	資本金及 支店元金	開業年月日	銀行	支店及 出張所	資本金及 支店元金	開業年月日
朝鮮實業銀行	四	五〇〇〇大正	九年七月十五日	慶南銀行	三	一、〇〇〇大正	元年九月二十一日
海東銀行	一	一、〇〇〇同	九年七月十七日	東萊銀行	一	五〇〇同	七年九月十四日
湖西銀行	四	二、〇〇〇同	二年七月四日	密陽銀行	一	五〇〇同	明治四十年三月一日
湖南銀行	一	一、〇〇〇同	九年三月十八日	平壤銀行	一	一、〇〇〇大正	九年四月一日
大邱銀行	一	一、五〇〇同	九年九月二十二日	三和銀行	一	三〇〇同	五年十一月十日
鮮南銀行	一	二、〇〇〇同	二年七月七日	新義州銀行	一	五〇〇同	六年十一月二十四日
慶一銀行	一	三、〇〇〇同	元年九月二十一日	元山商業銀行	一	五〇〇同	八年四月一日
慶尙共立銀行	一	二、〇〇〇同	九年五月二十二日	北鮮商業銀行	一	五〇〇同	七年十一月九日
釜山商業銀行	四	一、五〇〇同	二年四月二十一日	總計	二二	一四七、四四五〇	

本表中 *印を附したるは内地に本店を有する銀行の支店元金なり
 本表の外朝鮮銀行の朝鮮外支店、出張所二十五及漢城銀行東京支店一あり

各種銀行及東拓預金並貸出金表

大正十年九月末日

名 稱	預 金				貸 出 金			
	公 金	同業者	民間	計	公 金	同業者	民間	計
朝鮮銀行	千円 八八六	千円 一九、一五四	千円 一七、九七八	千円 三八、〇一八	千円 一一、〇五八	千円 二六、二〇一	千円 四一、六七二	千円 七八、九二一
殖産銀行	六、八六元	一一、七八七	三二、四八一	五〇、一三三	八、四九七	一六、九〇七	八一、一一八	一〇六、五三三
普通銀行	五五三	四六六	六八、五七七	六九、五九八	二七	二五	七六、四五六	七六、五〇八
東拓會社	—	—	—	—	五、四六九	—	三三、四五三	三八、九二一
計	八、三〇二	三二、四〇八	一一八、〇三七	一五七、七四八	二五、〇八一	四三、一三三	三三二、六九七	三〇〇、〇六三
大正九年末	五、二五三	四〇、八四三	九三、六八〇	一三九、七五七	一六、〇三三	四三、七八四	三〇三、二四三	三六五、〇四九
同 八年末	四、五五三	三〇、四六九	九一、七三一	一二六、七五五	一一、二九七	四四、二五〇	三三三、一〇五	二九八、六五三
備考	内容の合計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る							

二 金 利

従来朝鮮に於ける金利は非常に高率に失し爲に産業の發達上碍からざる障害ありしを以て農工銀行及金融組合を各地に設置して之が低下に力めたる結果漸次低落を示し來りたるが尙一般金利に制限を附し準據すべき規矩を示すの必要を認め明治四十四年十一月利息制限令を發布せり其の利率左の

如し

- | | |
|--------------|---------|
| 一 元金百圓未滿 | 年三割以下 |
| 一 元金百圓以上千圓未滿 | 年二割五分以下 |
| 一 元金千圓以上 | 年二割以下 |
- 但し質屋營業者の貸借元金五十圓未滿及市場に於ける貸借元金三十圓未滿の利息には適用せず

三 朝鮮銀行

朝鮮に於ける國庫金の出納、銀行券の發行其の他中央銀行の業務は明治三十八年七月以來株式會社第一銀行韓國總支店をして之を取扱はしめたるカ財政の膨脹經濟の發展に伴ひ別に金融の中樞たるを繼承し同年十一月より業務を開始せるカ併合後四十四年三月初朝鮮銀行法の發布と共に同行は朝鮮銀行と改稱せり

現在資本金は八千萬圓にして中央銀行として國庫金の出納、國債事務取扱並銀行券の發行を爲すの外左の業務を營む

- (一) 爲替手形其の他商業手形の割引、(二) 平常取引する諸會社銀行又は商人の爲替手形代金の

取立、(三)爲替及荷爲替、(四)確實なる擔保ある貸付、(五)諸預り金及當座貸越勘定、(六)金銀貨、貴金屬及諸證券の保護預り、(七)地金銀の賣買及貨幣の交換、(八)信託の業務、(九)尙政府の認可を受くるときは公共團體に對し無擔保貸付を爲すことを得、營業の都合に由りては國債證券、地方債證券其の他確實なる有價證券を買入るることを得るものとす。

朝鮮銀行は本店を京城に置き朝鮮内樞要地に支店出張所を設け尙爲替の調節及貿易助長の爲内地に在りては東京、大阪、神戸、下關、滿洲に在りては安東縣、大連、奉天、長春、哈爾濱、四平街、開原、營口、吉林、龍井村、遼陽、鐵嶺、旅順、鄭家屯、支那に在りては青島、上海、天津、濟南又露領浦鹽樺太亞港及米國紐育に支店又は出張所を設置せり而して滿洲に在りては金本位制の補助貨缺乏の爲商取引に困難を感ずるを以て小額仕拂手形を發行することとなり大正五年六月十二日より五拾錢、貳拾錢、拾錢券の三種を發行し其の大正十年九月末に於ける發行高は百五十七萬餘圓なり

朝鮮銀行總況

年	公稱		拂込		積立金	政下府		借入金	預金	貸出金	銀行券
	資本金	千円	資本金	千円		貸下金	千円				
大正八年末	40,000	千円	39,950	千円	4,800	千円	3,400	千円	38,050	3,930	千円
同 九年末	40,000		50,000		7,650		3,690		46,850	77,330	
同 十年九月末	40,000		50,000		9,400		3,200		38,050	78,920	
											X
											X
											X
											1,630,600
											1,690,000
											2,110,300
											1,570,000
											1,570,000

本表中×印を附したるは満洲にのみ流通する小額仕拂手形にして外書とす
 本表預金及貸出金には朝鮮外支店の分を包含せず

朝鮮銀行利率

大正十年九月末日

預金		利率	貸出		利率
種別	日歩		種別	日歩	
當座預金	最高	六厘	割引手形	最高	三錢二厘
	最低	六厘		最低	二錢三厘
	普通	六厘		普通	二錢九厘
特別當座預金	日歩	一錢二厘	貸付	日歩	三錢一厘乃至三錢

定期預金	年利	一箇年以上	五分七厘
		六箇月以上	五分七厘
	當座貸越		
	日歩	最高	三錢三厘
		最低	二錢七厘
		普通	三錢二厘

四 朝鮮殖産銀行

舊韓國財政整理の當時地方金融の梗塞を緩和し併せて殖産興業の振作に資せんか爲明治三十九年三月農工銀行條例を發布し政府は或は其の株式を引受け或は無利子貸下金を爲す等農工銀行の設立發展を助長するに努めたる結果大正六年末に於て本店六支店四十一を有するに至り地方産業の開發に貢獻したる所尠からざりしか其の擁する資本金は六行を合せ僅に二百六十萬圓に過ぎずして到底時代の要求に應ずること能はざるに至りしを以て茲に農工銀行の組織に革新を加へ其の分立の制を改め之を統一して一大銀行となし以て朝鮮將來の經濟に貢獻せしむべき目的を以て大正七年六月朝鮮殖産銀行令を發布し十月一日其の設立を見たり而して朝鮮殖産銀行の資本金は三千萬圓にして本店を京城に置き朝鮮内樞要の地に支店五十二派出所五を有し左の業務を營む

(一)三十年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依り不動産又は不動産上の權利を擔保とする貸付

(二) 五年以内の定期償還の方法に依り漁業權を擔保とする貸付

(三) 法令の規定に依り設定したる財團を擔保とする第一號の方法に依る貸付

(四) 農業者又は工業者二十人以上連帶して債務を負ふ者に對する五年以内の定期償還の方法に依る無擔保貸付

(五) 公共團體に對する第一號の方法に依る無擔保貸付

(六) 金融組合漁業組合その他營利を目的とせざる産業に關する法人に對する第一號の方法に依る無擔保貸付

(七) 朝鮮の產物又は朝鮮の産業上必要なる貨物を質とする貸付

(八) 國債證券又は朝鮮總督の認可したる有價證券を質とする貸付

(九) 爲替及荷爲替

(十) 公共團體の債券又は朝鮮に於て殖産事業を營むことを目的とする會社の社債券の應募又は引受

(十一) 信託の業務

(十二) 尙預り金又は地金銀、有價證券の保護預りを爲し朝鮮總督の認可を受け他の銀行又は東洋

拓殖會社の業務を代理し公共團體の爲に其の金銭出納の取扱を爲すのみならず又朝鮮總督の指定に基き普通銀行の業務に屬する貸付及當座貸越並諸手形割引の業務を營む尙大正八年九月以降貯蓄預金の業務を開始せり

朝鮮殖産銀行は其の營業資金を得る爲拂込資本金額の十倍を限り債券を發行することを得

朝鮮殖産銀行一覽

年	公稱		積立金	債券		預金	貯蓄		貸出金	政府	
	資本金	拂込資本金		發行高	預金		預金	貸出金		貸下金	
大正七年末	1,000,000	4,197,000	606,000	3,000,000	15,345,000	—	29,839,000	—	459,000		
同八年末	1,000,000	8,058,000	635,000	17,570,000	24,883,000	395,000	71,055,000	—	459,000		
同九年末	3,000,000	15,000,000	945,000	33,450,000	37,278,000	735,000	85,949,000	—	459,000		
同十年九月末	5,000,000	15,000,000	1,708,000	46,600,000	48,740,000	1,391,000	106,533,000	—	459,000		

五 普通銀行

前述の如く朝鮮に於ける普通銀行は第一銀行の釜山に支店を設置したるを始とし經濟の發達に伴ひ

漸次銀行の設立増加せるのみならず内鮮人間經濟關係密接なるに隨ひ合同經營のもの出現するに至りしを以て適用法規の統一を計る爲大正元年十月銀行令を發布せり現今普通銀行は朝鮮に本店を有するもの二十一にして其の支店出張所四十七、内地に本店を有する銀行の支店出張所十五にして詳細左の如し

普通銀行一覽

大正十年九月末日

銀行	公稱		積立金	政府		預金	貸出金
	資本	金		貸下	金		
第一銀行支店	—	千円 八〇〇	—	—	千円 一〇、七五五	—	千円 一〇、七五五
十八銀行支店	—	千円 一、六五〇	—	—	千円 九、一七三	—	千円 七、九六一
百三十銀行支店	—	千円 六五〇	—	—	千円 一、三三二	—	千円 三、〇六三
漢城銀行	—	千円 六五〇	—	—	千円 一、〇四九	—	千円 一三、八四一
韓一銀行	—	千円 一、六二五	—	—	千円 三、八九〇	—	千円 五、八九一
朝鮮商業銀行	—	千円 一、五〇〇	—	—	千円 二、一三三	—	千円 一、二七九
朝鮮實業銀行	—	千円 一、二五〇	—	—	千円 四、五三九	—	千円 六、一四三
海東銀行	—	千円 二、〇〇〇	—	—	千円 八	—	千円 二九七

第九章 財政及經濟

湖 西 銀 行	三 南 銀 行	湖 南 銀 行	大 邱 銀 行	鮮 南 銀 行	慶 一 銀 行	慶 尚 共 立 銀 行	釜 山 商 業 銀 行	慶 南 銀 行	東 萊 銀 行	密 陽 銀 行	平 壤 銀 行	三 和 銀 行	新 義 州 銀 行	元 山 商 業 銀 行	北 鮮 商 業 銀 行	總 計
二,〇〇〇	一,〇〇〇	一,五〇〇	二,〇〇〇	三,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	一,五〇〇	一,〇〇〇	五〇〇	五〇	一,七〇〇	三〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	三四,三五〇
七二五	二五〇	三七五	八七五	三〇〇	五〇〇	五〇〇	七五〇	七五〇	二五〇	五〇	四二五	七五	三七五	一二五	二五〇	一八,三〇〇
六三	一一	四	一三一	五九	八	八五	八七	二一	二二	二二	五	五五	四四	九	七	一,八六二
																二二三
四六一	一二六	四七五	九〇三	三四五	一七五	一八七	一,二六	三四七	二〇四	一六一	一,四〇六	四〇五	二四五	五六四	二二八	六九,五八五
一,三〇四	三三八	一,〇一六	二,四八二	一,〇六六	七三七	六七一	二,三六四	一,三五六	三六八	二〇〇	二,三六〇	六三七	一,〇二八	九〇六	四一二	七六,四九六

銀行		公本	拂込資本金	積立金	政下	預金	貸出金
大正七年末	九、九九三	千四	* 三、五七六	千四	千四	千四	千四
同 八年末	一、四六五〇		* 三、八一九〇	八五四	二五九	三七、五七二	四四、九六八
同 九年末	三、三五〇		* 一、三九五〇	一、〇九六	二四九	五二、三二三	七八、三八五
			〇〇〇〇	一、四九〇	二三一	五四、四二二	六七、四七七

本表中*印を附したるは内地に本店を有する銀行の支店元金なり
 内容の總計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

六 手形交換所

朝鮮財界發展の結果商業取引漸次頻繁を加へ手形殊に小切手の授受盛なるに伴ひ銀行間に於て手形交換及不渡手形に對する制裁の必要を感ずること切なるに至りたるを以て京城に於て明治四十三年七月手形交換所を設立し京城各銀行を其の組合銀行とし組合銀行間の手形小切手の交換を開始せるが次で仁川に於ては明治四十四年一月、釜山に於ては同年四月、平壤に於ては大正七年一月、元山に於ては大正九年十一月、大邱に於ては大正十年七月何れも手形交換所を設立して交換事務を開始

せり今各交換所に於ける交換高を表示すれば左の如し

手形交換所手形交換高

種別	大正八年		同九年		同十年九月末	
	枚數	交換金額 千円	枚數	交換金額 千円	枚數	交換金額 千円
京城手形交換所	八六三、五七九	五七三、二三〇	九三〇、七二九	五四五、七六五	七八四、八〇〇	三八四、六五
釜山手形交換所	二七九、九三四	三二六、五六一	二五五、九六〇	一五一、九一六	一七七、一六一	六九、一四五
仁川手形交換所	七九、四三八	一〇八、〇一九	八五、四四三	八七、三三三	八一、七六九	六八、八八八
平壤手形交換所	一一〇、一九四	六五、五九五	一四一、一三〇	六〇、三二三	一二五、九八四	三七、一一八
元山手形交換所	—	—	六、九一七	四、〇七七	二九、一八一	一一、四七五
大邱手形交換所	—	—	—	—	一八、三五八	八、七三三
總計	一、三四二、一四五	九六三、四〇八	一、四一〇、一七五	八四九、二九六	三、二七二、五三三	五八〇、〇〇三
小切手	九二六、八二〇	六九四、五六九	九五五、八九〇	五三七、七三八	八六六、二一九	三八四、六七
送金爲替手形	五七、七二八	七四、三一一	六三、五八六	六七、三〇〇	五五、三七七	四四、六九七
約束手形	四六、九一一	六四、五二二	六一、三四六	七三、四八七	四四、六五三	二八、八〇三

種 別	大 正 八 年		同 九 年		同 十 年 九 月 末	
	枚 數	交 換 金 額 千 円	枚 數	交 換 金 額 千 円	枚 數	交 換 金 額 千 円
仕 拂 命 令 及 出 給 命 令	三九、四五三	三八、七二二	四二、五八四	五〇、八四一	三六、三九六	三六、一六五
郵 便 爲 替 證 書	二五三、六四九	三一、九三〇	二四九、九五六	四〇、四二三	一八一、七九三	二七、八四八
公 債 債 券 同 利 札	二、八四〇	一、三六	一、六一九	一、一四	一、三四五	九二
雜 證 票	一五、七五五	五八、二三五	三六、二九八	九〇、三九九	二九、四七一	五七、七八九
總 計	一、五四三、一四五	九六二、四〇八	一、四一〇、一七九	八四九、二九六	一、二二七、二五三	五八〇、〇〇三

内容の總計に符合せざるは千圓未満切捨の關係に因る

七 金融組合

金融組合は組合員の金融を緩和し經濟の發達を企圖するの趣旨に依り明治四十年以來各地に設立せられたるものにして之が準據法として舊韓國政府の制定に係る地方金融組合規則ありしも時勢の進運に伴はざるを以て大正三年五月地方金融組合令を制定し組合員の權利義務を明にし業務の範圍を擴張し次て大正七年六月一部の改正を加へ地方金融組合を金融組合と改め組合員は從來農民に限りたるも其の資格を擴張して商工業者の外一般人にも及ぼし殊に小商工業者を主とする市街地の金融

組合の設立を認めたるを以て之を運用に依り組合團體の機能を遺憾なく發揮するに至れり今組合經營の要項を略記すれば左の如し

(イ)金融組合の組合員は其の區域内に於て住所を有するものに限る殊に組合設立の趣旨に鑑み主として中流以下の階級に屬するものを加入せしめつつあり、(ロ)組合員には出資一口以上(一口金十圓以上五十圓以下)を負担せしめ之に對し少許の利益配當を爲す又組合員の責任は其の出資額を限度とす、(ハ)組合には組合長一人、理事一人、監事二人以上及評議員七人以上を置く此等役員は組合員中より選任するを原則とするも朝鮮總督の指定したる組合に限り其の理事は朝鮮總督之を任免す而して組合長及理事は之に組合の業務を執行す(ニ)組合の資金は出資金・預り金及借入金の外毎事業年度の剩餘金中より積立つる缺損補填準備金及特別準備金等より成るを普通とし村落の組合に在りては右の外政府の下付に係る基本金(一組合一萬圓以内)あり組合は之を運用して左に掲ぐる事業を營む

一 組合員に其の經濟の發達に必要な資金を貸付する事

二 組合員の爲に預り金を爲す事

三 組合員の爲に産業上必要な材料の貸付若は共同購入を爲し又は組合員の委託に依り其の生産物を販賣する事但し府又は朝鮮總督の指定する市街地は組合の區域に屬する金融組合に在り

ては朝鮮總督の認可を要す

四 組合員の爲に其の生産物を倉庫に保管し又は之に對し倉荷證券を發行する事但し府又は朝鮮

總督の指定する市街地ハ組合の區域に屬する金融組合に在りては朝鮮總督の認可を要す

五 朝鮮總督の認可を受け組合員に非ざる者の預り金を爲す事

六 朝鮮總督の認可を受け銀行の業務を代理し又は之ハ媒介を爲す事

七 朝鮮總督の命令ありたるときは地方金融の調節に關する業務を營む事

尙府又は朝鮮總督の指定する市街地ハ組合の區域に屬する金融組合は右第一號の資金の爲手形の割

引を爲すことを得

金融組合事業概況

大正十年九月末日

道名	組合員數		拂込濟出資金	政下附金	積立金	預り金	借入金	貸付金	代理及媒介	
	組數	員數							貸付金	預け金
京畿道	四三	二四、八六八	五八八、八六八	二七四、六〇〇	一三五、九四二	三三九、四八五	四七四、九三〇	一八六、七六八	七二四、一八一	四五五、九六〇
忠清北道	二〇	一一、九三九	一、〇〇、〇六八	一五〇、〇〇〇	七七、一八五	三五一、四九六	一、〇八六、〇三三	一、六一、五九五	三四三、三三三	一〇六、七四〇
忠清南道	三五	二〇、三六五	二七、七七一	三三〇、〇〇〇	一一、七三三	一、三九四、九六二	一、五三五、〇三七	三、九一八、〇四七	一〇九一、四四一	三九一、〇五〇

第九章 財政及經濟

全羅北道	三一	一五、六六三	一八三、三五五	二三五、七〇〇	一六五、八八七	九三、三二二	六七三、七六一	七七一、二一九	四九九、〇四八	三二〇、二七六
全羅南道	四二	二六、六五〇	一八五、〇八九	二八六、九〇〇	一六六、六八九	二五三、七四二	六七四、五五九	〇一八、三六六	七五六、三三〇	四三三、三六一
慶尙北道	四一	三〇、〇六二	二六四、八七八	三〇三、三〇〇	一四七、一七三	五三七、九六八	一八九三、一四三	四四三、一四五	八四四、八九二	五八九、四三八
慶尙南道	三七	二七、〇九九	四一六、六九九	二五五、七〇〇	一五五、九〇三	二二五、九三三	五一〇、〇八三	三三一、八三九	五三六、〇四三	九〇八、三〇九
黃海道	三三	二五、五六八	一三一、一一八	二三五、五〇〇	九九、八九〇	九八三、七四一	四五七、五六五	三七六、九二	九一〇、五二五	四一八、三一六
平安南道	三九	一八、五八三	二二二、六六七	二〇六、五〇〇	七六、五八三	六八三、七四六	八一九、六七九	七〇一、五六一	七九、四一七	三二〇、九四七
平安北道	三一	一七、二九四	一六八、八五五	二三八、五〇〇	一〇一、四八八	八〇七、〇三二	四二四、一三三	五一四、四五九	二〇八、九三八	一三三
江原道	三〇	二四、四四一	一三六、七九八	二四五、八五〇	七〇、八八九	九二七、三九三	四四六、一四〇	二五六、九四九	三〇三、五六三	四六二、七五九
咸鏡南道	二六	二〇、六〇八	一七一、〇四一	一九六、七〇〇	九八、七四五	八九〇、八九九	六二三、八九九	六三一、五六七	一三九、〇五五	二七六、七三三
咸鏡北道	二二	一一、八八九	一三二、九八五	一四二、五〇〇	三九、七五八	五九四、五五九	二〇五、一五一	八四一、五一五	三二、六三六	三二七、三五九
合計	四一七	二七二、八三六	二、九九〇、〇四八	三、〇〇一、三三〇	一、四一六、八六〇	一三、六八二	三九七、九三四	二〇、八二〇	五五、三四八	七、三四八
大正六年度末	二六〇	一三〇、四五二	四九四、八四八	六七九、六〇〇	六八三、〇五三	七三六、九八一	五四七、七六三	七六一、七一一	〇三八、〇六九	一〇、八一
同 七年度末	三三八	一四六、七七一	七八三、六三三	七八五、三〇〇	八〇〇、七三三	二二七、六七四	九五四、七四六	九三〇、八七九	一、八〇三、三三三	一、四二二
同 八年度末	三九三	二一九、〇一一	七五〇、六六九	八九〇、三五〇	八九六、五二六	六八四、七七八	一三、七三三	三三、〇〇九	四、七三二	九三二
同 九年度末	四〇〇	二四四、三三四	五五一、四六三	九〇七、三五〇	一〇、四九五	一〇、四九五	一九、四七四	三一、三八二	五、九三三	六六九

八 金融組合聯合會

金融組合は前述の如く相當の發展を爲しつつあり、雖各組合間資金の過不足を調節するの機關なきのみならず其の監督指導を擧て官廳のみに委するは組合の積極的活動を促進する上に於て遺憾尠からざるを以て大正七年六月金融組合令改正に當り金融組合聯合會の設立を認めたる結果同年十一月各道に之を設立を見るに至れり今金融組合聯合會經營の要項を略記すれば左の如し

(イ)金融組合聯合會は一道を區域とし其の會員は區域内に主たる事務所を有する金融組合に限る但し區域内に主たる事務所を有する産業に關する法人にて朝鮮總督の指定したるもの限り特に加入せしむることを得(ロ)會員には出資一口以上(一口金五百圓)を負擔せしめ之に對し少許の利益配當を爲す又會員の責任は其の出資額を限度とす(ハ)聯合會には理事長一人、理事一人、監事二人以上を置く理事長及理事は朝鮮總督之を任免し監事は會員たる組合及法人の役員中より選任す而して理事長は聯合會を代表して其の業務を執行し理事は理事長を補佐し理事長事故あるときは其の職務を代理す(ニ)聯合會の資金は出資金、預り金、政府貸下金及借入金の外毎事業年度の剩餘金より積立つる缺損補填準備金等より成り聯合會は之を運用して左に掲ぐる事業

を營む

- 一 會員に必要な資金を貸付する事
- 二 會員の預り金を爲す事
- 三 會員に對し業務上の指導を爲す事
- 四 會員相互の聯絡及業務上の便宜を圖る事

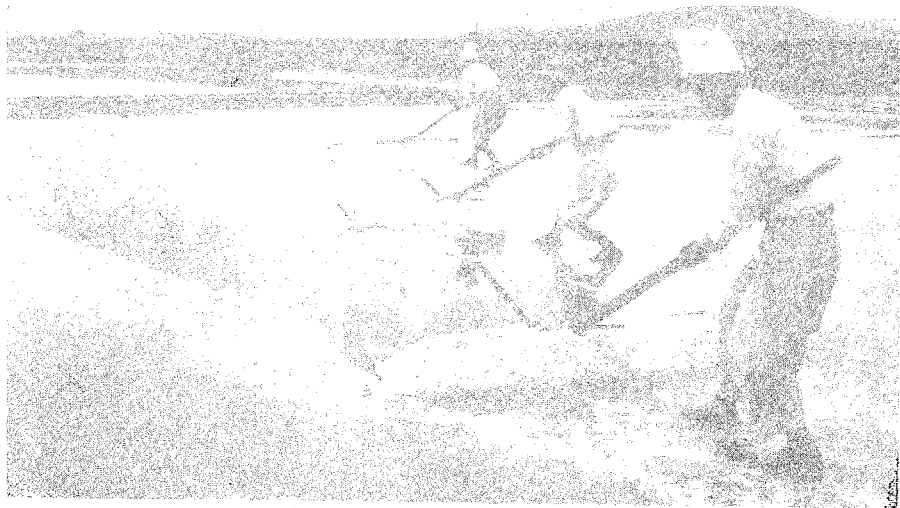
金融組合聯合會事業概況

大正十年九月末日

金融組合聯合會名	會員數	拂込濟出資金	積立金	預り金	政下府貸金	借入金	貸付金	現金及預け金
京畿道金融組合聯合會	四三	一六、三三九	一、七〇七	一四一、二九〇	一五〇、〇〇〇	一、九四一、九二三	三、三四八、六三七	六、一四五
忠清北道金融組合聯合會	二〇	七、四〇〇	五、三三三	五三、六九八	一五〇、〇〇〇	八六五、七三三	一、〇九八、三三三	四、四三五
忠清南道金融組合聯合會	三三	一一、七〇〇	七〇〇	二六、六四九	一五〇、〇〇〇	一、一四八、〇七九	一、五三四、〇七一	一五、二九六
全羅北道金融組合聯合會	三二	一三、三一一	四、七〇〇	一六六、三四五	一五〇、〇〇〇	一、三三三、二六六	一、六二六、六五四	一六、三一四
全羅南道金融組合聯合會	四二	一四、七〇〇	四、七九五	二二五、五六九	一五〇、〇〇〇	一、二八五、七七五	一、六四三、一二九	二六、五八七
慶尙北道金融組合聯合會	四一	一五、八六〇	四、〇〇〇	五三七、七八五	一五〇、〇〇〇	一、三八九、七五四	一、八六五、六〇三	一三、一四五
慶尙南道金融組合聯合會	三七	一四、六〇〇	七、六五五	二六〇、四五四	一五〇、〇〇〇	一、〇六三、五四三	一、四七九、八五七	六、四四四

第九章 財政及經濟

金融組合聯合會名	職員會	拂込濟 出資金	積立金	預り金	政下 貸金	借入金	貸付金	現金及 預け金
黃海道金融組合聯合會	三三	三二、八二三	七、五〇〇	一九五、五六〇	一五〇、〇〇〇	一、一三〇、〇九八	一、四三一、五七七	六六、五六八
平安南道金融組合聯合會	二九	一一、一六八	四、〇〇〇	八七、四六〇	一五〇、〇〇〇	一、四七一、一四四	一、七〇三、五三三	四一、五一一
平安北道金融組合聯合會	三二	三三、一二五	七、〇〇〇	五六、三三四	一五〇、〇〇〇	一、三〇三、二四六	一、三八三、九三九	三八、六三〇
江原道金融組合聯合會	三〇	一一、六三九	四、〇〇〇	二八四、五九六	一五〇、〇一〇	九三三、六五八	一、四三四、九四三	一、四六〇
咸鏡南道金融組合聯合會	二六	九、三〇〇	六、三五〇	一一四、五三七	一五〇、〇〇〇	一、三七八、三七四	一、六〇一、六九一	五、六八六
咸鏡北道金融組合聯合會	二二	七、七四五	八三三	八八、四〇一	一五〇、〇〇〇	九二八、六〇〇	一、一五八、六四三	一七、七四三
合計	四一七	一五六、六〇八	五八、五二三	二二〇七、六六六	九五〇、〇〇〇	一六、〇三四、一七九	二〇、一六六、四五六	二五九、九五三
大正七年度末	二七九	三八、〇〇〇	—	四三〇、四三三	六五〇、〇〇〇	五九七、〇七五	一、五一九、五三二	七七、七九九
同八年度末	三九五	六七、八〇〇	—	九〇九、四五四	一、三〇〇、〇〇〇	一〇、四七三、四八七	一、二七九、八三〇	一五七、七六二
同九年度末	四〇一	一一〇、六四九	二九、一六六	一、五六五、〇七三	一、六二五、〇〇〇	一五、六一七、九九五	一八、八二八、七八九	三〇七、六七一



況狀の鹽採田鹽灣梁廣道南安平

第十章 專賣

第一節 煙草

煙草は從來重要な財源たりしも課税の形式に依るときは之が負擔の公平並收入の確實を期するこゝさを得ざるに依り大正十年七月より從來の消費税を廢止し專賣制度を實施することとせり然れども朝鮮の民情其の他に鑑み當分の内荒刻煙草の民營を認めたる外自家用煙草の耕作を認許し又急激なる嗜好の變化を避くる爲特に全葉喫用として葉煙草の拂下を爲すこととせり然して支局及出張所に技術員を配置して煙草耕作の改善指導に任せしめ尙煙草耕作組合に對し一定の標準の下に政府より交付金を下付し組合に指導員を設置し政府の施設と相俟て煙草耕作の指導獎勵等に當らしめつゝあり今大正九年度に於ける自家用以外の煙草耕作人員、面積、收穫高を擧ぐれば左の如し

煙草耕作人員、面積及收穫高

大正九年度

道名	耕作人員	耕作面積	收穫高	一段步當收穫高
京畿道	一二、九八四	一、六五八・七	二五〇、二三七	一五、一
忠清北道	一〇、六三六	二、五〇三・〇	六七〇、八四三	二六、八
忠清南道	二、〇九九	一四五・三	四二、四九九	二九、二
全羅北道	九、〇三九	一、二二〇・七	一八七、六八八	一五、四
全羅南道	三、一〇一	三六三・三	五六、一二五	二一、四
慶尙北道	一二、五一四	一、六六六・三	三二五、三六一	一九、五
慶尙南道	九、五一八	一、〇六四・〇	二三七、九四四	二二、四
黃海道	一、六四三	一〇一・三	三三、三三七	三二、九
平安南道	六、一三一	六〇二・二	一三三、六七五	二〇、五
江原道	二九、九八〇	二、六〇三・六	五二九、〇四三	二〇、三
咸鏡南道	一、八五七	一三一・〇	五四、三一三	四一、四
計	一〇九、五〇二	一一、九五七・四	二、五一一、〇六五	二一、〇

專賣局に於ける煙草の製造は大正十年七月一日煙草專賣令の實施と同時に京城、全州、大邱及平壤

に於ける東亞煙草會社其の他主なる民間煙草製造工場並其の器具機械を徵收して之に充て製品は口付紙卷煙草敷島、朝日、松風、白露、兩切紙卷煙草カイダ、ビジョン、ピオニー、メロン、ムーアル、刻煙草サツキ、アヤメ、ハギの十二種とし就中敷島、朝日、サツキ、アヤメ、ハギの商標は内地專賣局の承諾を得て其の儘之を使用し其の原料葉煙草も亦大部分内地專賣局より之が供給を受け大正十年七月二日より各工場一齊に其の作業を開始せり然れども前記徵收又は買收したる工場は其の設備頗る不完全にして直に之を官營工場と爲すに適せず尙職工の待遇、風紀、衛生其の他工場管理上改むべきもの尠からず事業開始と同時に之が補足改善を斷行せり今其の主要を摘記すれば工場は補足、擴張と共に食堂、休憩室及洗面所等を新設し、工場内の危害豫防及保健上必要なる設備を完成し、醫務の制を定めて工場醫及看護手を常置し、賞罰を明にして善行精勤を獎勵し兪れて能率の増進を圖り或は保護、救済、教育及慰安の制度を特設する等凡そ職工の健康を企うし技能を進め、其の生を厚からしめ及風教を保つに於て遺憾なきを期せり

尙近く政府の特別なる保護團體として危険を同うする現業員相互救済を目的とする現業員共済組合の制度を設けて危険遭遇者の負擔を軽減し且退職者に對しては年功金を給與して生活の資を得せしめむとし目下之が設立手續中に在り今各工場の名稱、位置、坪數、職工數を示せば左の如し

大正十年九月末日現在

種類及名稱	數	包	裏	小賣定價	當	所管專賣支局	工場の名稱	位	置	工場坪數	職工數
						總計	仁義洞工場	京畿道京城府仁義洞	二、四八二	一、七六五	
京城專賣支局						義州通工場	京畿道京城府義州通	七一二	七八五		
						大平通工場	京畿道京城府大平通	三九三	二〇八		
						西大門工場	京畿道京城府西大門町	四八〇	八一		
						大和町印刷工場	京畿道京城府大和町	五九六	八一		
全州專賣支局						全州專賣支局工場	全羅北道全州郡全州面高砂町	四四〇	四五二		
大邱專賣支局						大邱專賣支局工場	慶尙北道大邱府東雲町	三四四	五四三		
平壤專賣支局						平壤專賣支局工場	平安南道平壤府慶上里	四五五	三五一		
總計								五、九〇二	四、二六七		

煙草專賣制度實施の結果政府に於て販賣する製造煙草の品名數量、小賣定價等を掲ぐれば左の如し

刻			兩切				口付				
ハ	ア	サ	メ	メ	ピ	ピ	カ	白	松	朝	敷
計	ヤ	ツ	計	一	ロ	ガ	シ	イ	計		
				ブ		ニ	ヨ				
ギ	メ	キ	ル	ン	一	ン	ダ	鱸	風	日	鳥
四〇	四〇	四〇	一五	二〇	一〇	一〇	一〇	二〇	二〇	二〇	二〇
匁入	匁入	匁入	本入	本入	本入	本入	本入	本入	本入	本入	本入
五	六	八	五	一	八	一	一	八	十	十	十
一	四	〇	〇	〇	〇	〇	五	錢	錢	錢	錢
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

尙刻煙草の上級品は之を内地より移入して内地同様の小賣定價にて供給し葉卷煙草及兩切煙草の上級品は夫夫原産地より之を輸入し供給することとせり而して右の製造煙草は煙草販賣官署、煙草元賣捌人、煙草小賣人等の機關を設け販賣することとしたり

一 煙草販賣官署

煙草販賣官署は煙草元賣捌人に對し煙草の賣渡を爲す官署にして左の如く之を設けたり

京城專賣支局、仁川出張所、清州出張所、元山出張所、清津出張所

全州專賣支局、大田出張所、光州出張所、木浦出張所

大邱專賣支局、金泉出張所、釜山出張所

平壤專賣支局、沙里院出張所、新安州出張所、新義州出張所

即ち支局四、出張所十二とす而して各支局は管内出張所の指揮監督を爲すと共に支局直轄の區域にある元賣捌人に對しては出張所と同様現品の賣渡を爲すものとす

二 煙草元賣捌人

煙草元賣捌人は政府之を指定し其の所在地を管轄する煙草販賣官署より煙草を買受け之を煙草小賣人に賣渡すものとす指定の結果は左表の通にして會社組織のもの十、組合組織のもの三十九、計四十九其の營業所總數二百七十九個所とす

煙草元賣捌所

京城煙草元賣捌株式會社、水原煙草元賣捌組合、開城煙草元賣捌組合、奉川煙草元賣捌組合、厘州煙草元賣捌組合、鐵原煙草元賣捌組合、仁川煙草元賣捌組合、海州煙草元賣捌組合、瑞山煙草元賣捌組合、清州煙草元賣捌組合、忠州煙草元賣捌組合、株式會社元山煙草元賣捌所、合養會社庫底煙草元賣捌所、株式會社咸興煙草元賣捌所、株式會社北青煙草元賣捌所、城津煙草元賣捌組合、清津煙草元賣捌組合、羅南煙草元賣捌組合、會寧煙草元賣捌組合、雄基煙草元賣捌組合、全州官煙元賣捌組合、群山煙草元賣捌組合、井邑煙草元賣捌組合、忠清煙草元賣捌株式會社、鳥致院煙草元賣捌組合、湖南煙草株式會社、韓山煙草元賣捌組合、光州煙草元賣捌組合、木浦煙草元賣捌組合、大邱煙草元賣捌株式會社、安東煙草元賣捌組合、密陽官煙組合、金泉煙草元賣捌組

合、榮州煙草元賣捌組合、釜山煙草元賣捌株式會社、馬山煙草元賣捌株式會社、統營煙草組合、晉州煙草組合、麗水官煙組合、江陵煙草元賣捌組合、平壤官煙元賣捌組合、鎮南浦煙草元賣捌組合、沙里院煙草元賣捌組合、新幕官煙元賣捌組合、黃州官煙元賣捌組合、平安官煙元賣捌組合、宣川煙草元賣捌組合、江界官煙元賣捌組合、新密州煙草元賣捌組合

三 煙草小賣人

煙草小賣人は元賣捌人と同じく政府之を指定し煙草元賣捌人より煙草を買受け之を需要者に賣渡すものとす。煙草小賣人は上記の如く直接需要者に對する供給機關にして之の配置の如何は直に需要者の便否に影響するを以て之を配置は人口、地勢等に鑑み疎密宜しきを制するの要あるも從來より煙草販賣を業としたる者に對し直に之を存廢整理を爲すことは當事者に及ぼす利害關係鮮少なからざるものあるべきを稽へ從來煙草小賣を業せし者は一齊に之を煙草小賣人に指定したるものと看做すこととし其の不足すと認むる地方に對してのみ新規指定を爲すことしたり。隨て現在市街地等に於ける煙草小賣人の分布は概して密に過くるものあり左に各販賣官署管下に於ける小

賣人の員數を掲ぐ但し左掲は從來の小賣者にして七月一日指定小賣人と看做したるものの員數とす

官 署 名	小 賣 人 員	官 署 名	小 賣 人 員
京城專賣支局直轄 仁川出張所 清州出張所 元山出張所 清津出張所 全州專賣支局直轄 大田出張所 光州出張所 木浦出張所	八、七八二 二、五〇一 一、一四四 四、二四八 一、七三四 三、二四七 二、八五一 一、三二六 二、二五六	大邱專賣支局直轄 金泉出張所 釜山出張所 平壤專賣支局直轄 沙里院出張所 新安州出張所 新義州出張所 計	四、九〇〇 一、七一五 五、七七九 三、〇六六 二、四五二 二、三七二 一、〇一六 四九、三八九

第二節 人蔘

人蔘は朝鮮到る所多少産せざるなしと雖古來高麗人蔘と稱し世に珍重せらるゝは京畿道開城附近に産するものに限れり故に此の地方は古來人蔘の栽培盛に行はれ従て耕作法も亦大に進歩せり往時其の栽培の最も盛なりしは明治三十五年の頃にして官私蔘を合せて十萬斤以上の收穫を得しことあり然るに十數年前より赤病と稱する病毒蔓延し漸く蔘葉衰頹の徴を顯はせしより明治四十一年蔘以事務を度支部所管に移し尋て紅蔘專賣法を施行して以來蔘政の改善を圖るに與に極力蔘病の防遏に努め一面諸種の獎勵、資金融通の途を講ずる等萎靡せる蔘業の回復を圖りし結果近來俄に斯業の勃興を見るに至り大正十年度に於ける人蔘生産高及價額の豫測は收穫坪數三十萬坪收納高十二萬斤、紅蔘製造高三萬斤を算するを得へし

人蔘收穫

年	掘採坪數	收納水蔘	紅蔘製造高
---	------	------	-------

大正七年
同 八年
同 九年

一二一、六四三
一九五、六二〇
三二三、七八二

六八、三三六
一〇三、七八五
一一六、五〇八

一九、一四四
二六、〇〇九
二九、六九四

政府の專賣に係る紅蔘原料產地以外に於ても相當の人蔘産額あり大正八年に於ける蔘圃坪數三十四萬六千坪收穫水蔘六萬四千斤にして同年中に取引せられたる白蔘九萬七千三百三十二斤此の價額六十四萬七千五百七十六圓に及へり

人蔘は一般作物と異り播種後五、六年を経るに非されば收穫することゝ爲す而して其の製法に依り紅蔘、白蔘の二種に區別す紅蔘は水蔘(生蔘)を蒸して日光及火熱に依り乾燥せしめて製し白蔘は水蔘を單に日光に乾かして製す前者は價貴く後者は廉にして兩者共形體の大なるを尙ふ而して紅蔘は専ら支那に輸出するものにして同國に於ては古來上下共に人蔘を愛用し萬能の靈藥として用ふるの外贈答用として富豪大官の間に尊重せらる内地、米國等亦人蔘を産すれども朝鮮人蔘は品質形體共に他に比類なしと激賞せらる試に支那に於て消費する各國産人蔘 數量價額の概要を擧ぐれば左の如し

產地	通稱	數	量	平均一斤 小賣價格
日本	米國 花旗參 東洋參		八〇、〇〇〇 斤 一四〇、〇〇〇	二〇 円 五
朝鮮	高麗參		三〇、〇〇〇 斤	一五〇 円
滿洲	關東參		一六〇、〇〇〇	八

第三節 鹽

鹽は專賣にあらざるも朝鮮に於ける天日製鹽は原則として專賣局に於て經營するを以て便宜之を本章に掲載することとせり

天日製鹽

古來朝鮮に於て消費する鹽は専ら朝鮮沿海各地にて製造する煎熬鹽を以て之に充當し來りたるも元來朝鮮在來煎熬鹽は其の製造方法甚た幼稚にして燃料勞力を要すること夥しく隨て生産費の高價なるを免れず故に明治三十五年より漸次安價なる支那天日鹽の輸入を誘致し逐年其の數量を増加するに至れり依て時の政府は明治四十年尙南道龍湖に於て在來鹽の改善を考究するに同時に京畿道朱安に於て天日製鹽の試験を行ひたるに其の結果一町歩の鹽田より十二萬斤の鹽を生産し品質頗る

良好にして内地鹽の一、二等品に匹敵し支那輸入鹽、在來煎熬鹽等に比し遙に優良にして生産費等に於ても優に對抗し得るに反し在來鹽の改善は生産費の節約困難にして到底天日鹽に拮抗し得ざるを確めたり茲に於て朝鮮に於ける正貨の流出を防止し政府の財源に資すると同時に國民生活上の必須品たる鹽の自作自給を圖るを以て急務となし政府に於ては第一期事業として平安南道廣梁灣に九百三十四町歩、京畿道朱安に九十九町歩の天日製鹽田を築造することとし明治四十二年起工、大正元年竣功せり而して大正六年更に第二期事業計畫を樹て朱安に百三十九町歩、平安南道德洞に二百二十七町歩を築造し尙前記鹽田の良好なる實蹟に鑑み第三期事業計畫として大正九年度以降七箇年繼續を以て二千六百町歩の鹽田擴張に着手し既に京畿道南村に百九十五町歩、平安南道龍岡に百四十九町歩を竣成し尙京畿道南村及平安北道南市に擴張中なり

此の第三期計畫完成の曉は既成鹽田を合して四千町歩となり其の生産額は在來煎熬鹽を併せ略朝鮮内食料鹽の需要を充ちを得へし今最近三箇年の鹽輸入高、官鹽生産高及大正十年十月上旬仁川に於ける鹽價を示せば左の如し

鹽 輸 移 入 高

年別	内地鹽	臺灣鹽	關東洲鹽	青島鹽	支那鹽	其他鹽	合計
大正七年	一三四、九六七 斤	五、三五〇 斤	三六、一九八、七八 斤	六四、七四六、四一四 斤	一八三、四九〇、三三 斤	一、七〇〇 斤	二八四、五六七、四〇三 斤
大正八年	三、五八四 斤	五六 斤	一六四、八七五 斤	三四九、六一七 斤	九八四、〇九九 斤	三三一 斤	一、五〇三、四六二 斤
大正九年	一、二八、〇五〇 斤	— 斤	七二、〇四、五九九 斤	一〇八、二九三、五八二 斤	三三二、八一〇、五五七 斤	三、七九六 斤	四〇一、二四〇、〇六二 斤
格價量數	八〇六、八〇〇 斤	— 斤	三二、〇五八、〇一五 斤	三〇、〇四九、六三五 斤	八六、八〇〇、八八九 斤	— 斤	一四八、七一五、三三九 斤
格價量數	八、〇一六 斤	— 斤	二五三、四四七 斤	二四八、一八五 斤	七五五、〇〇三 斤	— 斤	一、二四四、六五一 斤

官鹽生產高

年度	廣 梁 灣		朱 安		計
	面積	生產高	面積	生產高	
大正七年度	九三四町	六九、七四一、四〇〇斤	九九町	七、六六七、二三四斤	一、〇三三町
					七七、四〇八、六三二斤

同 八年度	九三四	七二、一四四、〇〇〇	二三八	一三、五〇四、一九〇	一、一七三	八四、六四八、一九〇
同 九年度	一、〇四〇	七七、七三三、〇〇〇	二三八	一三、八〇三、一八三	一、二七八	九一、五三五、一八三

仁川に於ける鹽價（百斤當）

種別 價格

官鹽二等鹽	、八五〇
支那鹽	一、〇七〇
在來煎熬鹽	二、〇〇〇
再製鹽	二、二〇〇

여 백

第十一章 農業

第一節 土地

朝鮮半島は各地の風土に従ひ到る處農業に適せざるはなく殊に南部地方は氣候溫暖にして農作物の發育最も佳良なり冬季は寒氣稍強しと雖麥類の如く冬作物の枯死する虞なく且四月以降は氣溫上るか故に生育に宜しく空氣は乾燥せるを以て收穫物の品質良好なり夏作物中水稻の如きは氣候の關係よりせば其の生育良好なるへきも用水の完備せざるを以て或は旱害を被ることなきにあらざるも灌溉設備年年發達するを以て漸次其の度を減しつつあり尙産米増殖の爲大正九年度より約十五箇年に互り土地改良事業を施行するの計畫あり其の實施の曉に於ては地目變換に依り十二萬町歩開墾干拓に依り九萬町歩の良畝を得へき豫定なり今最近統計に依る耕地面積を掲ぐれば左の如し

耕地面積

大正九年十二月

(×印は休耕地)

道名	畜		計	田	土地臺帳 未登錄の 耕地	合計
	一毛作	二毛作				
京畿道	一九七,九〇八・八 ^附	二,〇五八・九 ^附	一九九,九六七・七 ^附 六六六・七	一八七,九九二・一 ^附 八五四・三	三,二〇七・八 ^附	三九一,一六七・六 ^附 一,五五一・〇
忠清北道	五六〇,九六六・九	一三三,二二八・五	六九三,一九五・四 ^附 三三三・四	八八,四六一・三 三三五・四	一,〇四三・三	一,五八,〇〇九・八 ^附 六四七・八
忠清南道	二四一,四六一・六	一〇,三三三・九	一六〇,七〇五・五 ^附 六〇八・四	八二,六六二・七 一三一・六	一,四七九・六	二四四,八四七・八 ^附 七四〇・〇
全羅北道	一四四,四三六・五	二二,三六九・三	一六五,八〇五・八 ^附	六七,七三四・八	六四八・四	二三四,一八九・〇 ^附
全羅南道	一五三,八四三・三	四七,五三五・七	二〇一,三九七・〇 ^附 一〇四・三	二〇七,三三一・四 四一,七〇八・〇	一,四六四・九	四一〇,七四三・三 ^附 四一,八二二・三
慶尙北道	一一〇,六八一・七	七七,〇九二・八	一八七,七七四・五 ^附 二,五八八・九	二〇一,〇五八・三 一,〇八六・三	一,四一一・一	三九一,三〇五・八 ^附 三,六七五・二
慶尙南道	一〇二,四三〇・四	五八,二〇一・六	一六〇,六三二・〇 ^附 二六・九	一一七,一七三・八 一四・七	三三三・五	二七八,一六八・三 ^附 四一・六
黃海道	一三三,五八九・七	一,〇八二・二	一三三,六七一・九 ^附 七七・五	四〇九,八三四・八 四,二五六・三	九,六〇三・一	五三三,一〇九・八 ^附 五,〇五五・八
平安南道	六三,三六九・三	四	六三,三六九・六 ^附 一三・一	三二八,四八四・三	一四,七三四・五	四〇六,一七三・八 ^附 一三・一
平安北道	七三,七七九・九	一	七三,七七九・九 ^附 八九二・六	三二五,三七〇・〇 三九〇・三	四三,九六九・五	四四二,一八九・四 ^附 一,二八二・九

道名	自作		小作		田
	畝	町	畝	町	
江原道	七七、二六七・九		七九六、三		七八、〇六四・一
咸鏡南道	四一、八三一・七		三八、三		四一、八六九・九
咸鏡北道	七、三五七・六		一		七、三五七・六
總計	一、三〇二、〇七四・二		三五一、六二七・七		一、五四三、七〇一・九
明治四十三年末	—		—		—
大正七年末	一、五二〇、〇五五・三		三三四、三九五・一		一、五四四、四三〇・四
大正八年末	一、二九五、八三二・七		二四七、二五三・八		一、五四三、〇八九・五
京畿道	五三、三八四・一	町	六五、二七七・八	町	一四六、五八三・六
忠清北道	二六、九二〇・六		三七、四八四・八		四二、三八四・八
忠清南道	四八、九八五・四		四三、九三〇・一		一一一、七二〇・一
田					一二二、七一四・三
田					五〇、九七六・四
田					三八、七三二・六

道名	自作		小作	
	田	田	田	田
全羅北道	三三、四二三・三	二八、二二一・六	一三二、三八二・五	三九、五一三・三
全羅南道	八七、七七三・〇	一二六、六八九・九	一一四、六〇五・〇	八〇、五四一、五
慶尙北道	八一、七五七・三	一〇三、八二二・二	一〇六、〇一七・三	九八、二三六・〇
慶尙南道	五九、二五一・一	五六、七二五・一	一〇一、四〇〇・九	六〇、四四八・七
黃海道	四〇、四二八・九	一七八、一〇三・三	九三、二四三・〇	二三一、七三一・五
平安南道	二一、九四八・九	一八四、二八四・四	四一、四二〇・七	一四四、一九九・八
平安北道	二三、六二七・八	一五六、〇七三・三	四九、一五二・一	一六九、二九六・七
江原道	四二、〇六八・三	一七一、七〇四・五	三五、九九五・八	八〇、四〇八・三
咸鏡南道	二五、七三四・一	二四八、八四六・六	一六、一三五・八	六三、七四八・〇
咸鏡北道	五、五五〇・三	一七四、八七三・五	一、八〇七・三	二一、七四九・一
總計	五五〇、八五三・一	一、五七六、〇三七・一	九九二、八四八・八	一、二〇二、二九六・一
大正八年末	五四七、八六七・七	一、六〇三、六六三・三	九九五、二二一・八	一、一七七、九二六・三
同七年末	五四六、一四〇・七	一、六〇六、三六三・八	九九八、二八九・七	一、一九一、二九六・八

備考 土地臺帳未登錄の耕地は自作、小作の區分を缺く。

未墾地に産業の開発と共に之の利用の有利なるを覺る者多く田畠の開墾漸次増加しつゝあり。

未墾地面積

道名	國有	民有	合計	道名	國有	民有	合計
京畿道	三、九一〇 <small>町</small>	一、三四〇 <small>町</small>	五、二五〇 <small>町</small>	黃海道	七一七 <small>町</small>	三、三〇〇 <small>町</small>	四、〇一七 <small>町</small>
忠清北道	四二〇	四五八	八七八	平安南道	二、三三〇	二、五九七	四、九二七
忠清南道	二、七二三	二、四七七	五、二〇〇	平安北道	一、三二一	三〇六	一、六二七
全羅北道	一、一五〇	二、二四七	三、三九七	江原道	七、八七三	一、九四六	九、八一九
全羅南道	二、〇五八	一、二〇八	三、二六六	咸鏡南道	二、二四七	一、七三八	三、九八五
慶尙北道	一、七六六	一、五二〇	三、二八六	咸鏡北道	一〇、八七一	二、六七八	一三、五四九
慶尙南道	三、一四六	一、一、五〇三	一四、六四八	總計	四〇、五三三	三三、三一七	七三、八四九

本表に 山林原野の内山麓緩傾斜地の大部分及干潟地を包含せず

前記の外山麓緩傾斜地の大部分竝干潟は全く未墾に屬し其の面積の如き一箇所にして數百町歩に互れるものあり是等未墾地の中干潟の利用に對しては築堤水門等の設備に多少の費用を要す雖田、畚は成功後は地味概ね肥沃にして收益亦尠少なからざるが故に之ヲ利用を出願する者漸次増加し著實なる事業家の投資を爲す者多きを加ふるに至れり左に國有未墾地の貸付したるもの竝事業成功に由り付與(拂下をも含む)したるものを掲ぐ

國有未墾地貸付地目別

(大正九年十二月末日現在)

道名	原野		荒蕪地		草生地	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京畿道	二八	一七二、六〇二	四一六	七三九、〇六一	六四四	三、六一七、〇一五
忠清北道	一	、三三三	九二	七六、五九〇	三〇三	六二六、七七〇
忠清南道	三三	二八五、九四一	三九	一九六、八六二	二五六	一、一〇四、五五〇
全羅北道	五八	八四、二八〇	一二	二一、三三二	五六〇	一、四三四、一三〇
全羅南道	三九	一四六、三五二	二九	二五、六〇二	四二五	一、四一九、六二〇
慶尙北道	三九	一七七、九〇二	一三五	四一四、八九一	三二九	一、〇七〇、四四〇

道名	沼澤地		干潟地		計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積
京畿道	二八	二六、九三〇〇 <small>町</small>	八五三、二二、九七〇、八九二二 <small>町</small>	一九六八	一七、五二六、五一二二 <small>町</small>	

慶尙南道	二〇	一五八、三八一三	八六	五七五、三九〇二	一五三	一、九六四、二六一八
黃海道	三九	一三二、八九一八	八二	二七四、八三三二	五四二	四、一〇四、八一四
平安南道	三	四、七二一六	六	六、六九一五	七八	一、三四八、九七〇六
平安北道	四	二九、二二〇九	一〇	一三一、四三三九	一八二	八九〇、八八〇六
江原道	一六	七九、五七二二	二四	七一、九六一九	一四七	八二九、四六二一
咸鏡南道	五	五八、〇八二七	八	一九八、八六二〇	七一	四四二、一四三五
咸鏡北道	一二	三九、六九一九	五五	七〇、四四二五	一一四	三、〇八八、七〇三二
總計	二九七	一、三六九、八二二九	九九四	二、八〇四、〇〇一一	三、八〇四	二、一九四一、七九一二
大正七年	一七〇	一、〇九一	四五三	一、七四五	二、一八三	一四、三九七
同八年	二一六	一、二三五	五三六	二、〇三三	二、九三三	一六、六一五

道名	沼澤地		干涸地		計
	件數	面積	件數	面積	
忠清北道	1	1	1	1	396
忠清南道	9	一五、五五〇七	四四二	一四、八一、八三一五	七七九
全羅北道	6	三、五六二六	五四	六、一五九、七七二六	六九〇
全羅南道	8	六、七一二二	二九四	一一、七七〇、七四一五	七九五
慶尙北道	8	二六、〇三一六	1	1	五一
慶尙南道	11	五〇、六〇〇五	九七	一、八六二、九三二五	三三七
黃海道	15	三一、五二二〇	二一三	三、三七三、七一〇五	八九一
平安南道	3	一、一〇〇五	七九	二、七五二、八〇〇七	一六九
平安北道	2	〇、一七一四	一四七	七、五〇四、〇五〇〇	三四五
江原道	9	六、一四二一四	三	四、一五一六	一九九
咸鏡南道	17	一一八、六九一六	七	七、四八二九	一〇八
咸鏡北道	5	三〇、七二三三	四	八、五六〇八	一九〇
總計	121	三七三、〇五一七	二一九	二、二八二、二七六、九六一七	七四〇八
					一〇八、七一五、六四二六

大正七年	七二	六五二	一四七七	四〇、〇七四	四三五五	五七、九二八
同八年	八五	七八四	一八五七	六〇、六六三	五六一七	八一、三二九

事業成功に由り付與(拂下を含む)したるもの (大正九年十二月末日現在)

道名	畠		田		植樹		其他		計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積		
京畿道	三三三	町 一、一五、五三〇	一四六	町 六二七、七四、八	四	町 二七九、三九三	一三	町 五〇、五九二七	三八五	二、〇七六、一六一七
忠清北道	三三	一四、六八二	六三	二九九、〇〇六	一三	一三、七二七	三	一、一六二九	一〇〇	三三八、五九〇三
忠清南道	五三	八〇、九二八	六九	一三三、六三九	一〇	五六三、九二四	四	四、四二一	一三五	七六〇、八七一三
全羅北道	一〇四	三、四九、〇五四	五三	六四、九八一四	六	四、四〇一〇	七	二八、五五五	一六九	四四六、九七一四
全羅南道	五六	一三一、四九、〇九	五八	五、四、五九、〇五	七	九、〇七一	一〇	三五、〇七二九	一三〇	三三〇、二四一四
慶尙北道	三三	四三、一四七	四三	三五、五、四、一三五	一一	二五、三三〇三	一八	一八、七四二七	九三	四四四、六三三三
慶尙南道	五六	二一〇、四三、〇六	四八	二九八、四〇二八	六	八三、九八二〇	二五	四三、九八二五	一五五	六三六、四八〇九
黃海道	一八	五〇六、八三、五	一五五	三七六、三三〇一	六	五、七七二五	二五	一八、四三二〇	三〇三	八〇七、二八〇九
平安南道	三五	四〇九、四二四	三五	一一五、五六一四	一	九、〇〇一	一	三三、三三六	五〇	五五七、七七〇五

道名	畜		田		植樹		其ノ他		計	
	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積	件數	面積
平安北海道	二一七	町 五九二、七〇七	一九	町 三六、一〇八	—	—	一	町 三〇、六八七	一三七	町 四二一、五〇三
江原道	一七	一五、七三七	一四	二五、六六七	七	三、八二〇八	三	〇、三三二	四〇	四五、五六一
咸鏡南道	六	二、八〇九	八	七七、〇三二	—	—	—	—	四	七九、八三〇
咸鏡北道	五	一六、八六二九	六	六五、五九〇中	—	—	三	〇、三五〇二	二六	八三、八一〇七
總計	八二三	三、二八九、九二四	七二四	二、三九八、九七二五	七二	九九四、九三一一	一一九	三三七、九二八	一、七二六	六、九二一、七三三六
大正七年	五、四四	二、三五三	四三五	一、九三九	二六	四〇四	九〇	一八六	一、〇四五	四、八八二
同八年	六〇六	二、八九〇	五二〇	二、一三三	四九	九四四	九九	一九三	一、七二四	六、一五九

本表中其の他さあるは果樹園、漁業用地、鹽田、共同墓地、建物敷地、蓮栽培地等なり

國有未墾地利用法は未墾地の利用を獎勵する趣旨にして(明治四十年發布せられ大正三年一部改正)未墾地の貸付を受けむとする者は面積十町歩を越ゆるものにおいて願書を直接朝鮮總督に提出し

同時に其の副本を管轄地方長官に提出して許可を受くべく十町歩を越えざるものにおいて、願書を直接管轄地方長官に提出して許可を受くべし。貸付期間は最長十箇年にして公共の利益なるべき事業に供するもの又は農民若は漁民の宅地に供するものは事業成功後付與せらるべし。開墾、牧畜、植樹等の事業に供するものは特別の事由ある場合を除くの外付與せらるべし。其の他の漁場、鹽田の類利用に付ては拂下を受くるものとす。貸付料は一町歩年額五十錢とし特別の事由ある場合は之を減免す。

第二節 農業者

(朝鮮に於ける耕地の大部分は概して大地主の所有に係れり而して朝鮮人の多くは農を業とし他人の田畑を耕作し一生小作に甘むる者比比として然り而して大地主の多くは都會に住居し悠悠自適し田舎には其の代理人を置きて小作地を管理し小作料を徴收するもの普通なり小作の方法は概ね左の如し)

(一) 秋收期検見を行ひ生産額の二分の一乃至三分の一を標準とし小作料を定むるもの (二) 收穫に際し其の收穫物を折半し其の一を小作料と爲すもの (三) 年の豐凶に拘らず一定の小作料を定め置くもの (四) 三種とす而して小作は多くは成文の契約あるにあらず年限の定あるにあらず口約を以て之を定

わるもの多し

地方別農業者表

大正九年十二月

道名	内地人		朝鮮人		支那人	
	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口
京畿道	一、七一四	七、一七三	二四一、八八三	一、二八二、五三五	二二六	八二七
忠清北道	一五八	五三七	一三三、四六二	六五六、七六八	一一	二四
忠清南道	一、〇三七	三、七五六	一八五、九六四	九六八、〇五二	五三	一、二六
全羅北道	一、四七四	五、四九八	二〇五、四一三	一、〇四四、七〇五	五八	一、七七
全羅南道	一、六九九	六、九〇五	三三一、一一七	一、六八三、四六二	一〇	二九
慶尙北道	一、一三七	四、七八八	三三三、三〇〇	一、七七二、六八三	三五	一、三〇
慶尙南道	一、九三二	八、一四四	二七五、七四三	一、四五六、四三三	六	二四
黃海道	五五四	二、〇四九	三二六、六五五	一、一一〇、七四七	一一五	四四六
平安南道	二五九	一、〇一三	一六四、八三四	八七六、八八四	一八五	八一三
平安北道	三九	一四一	一八二、〇〇七	九九四、四五〇	八七	四〇〇
江原道	六七	二五七	一九四、一九三	一、〇六五、六七九	六	二五

道名	其の他の外国人		合計	
	戸数	人口	戸数	人口
京畿道	-	八	二四三八二四	一、二九〇、五四三
忠清北道	-	-	一三三、六三二	六五七、三二九
忠清南道	-	-	一八七、〇五三	九七一、九三四
全羅北道	-	-	二〇六、九四六	一、〇五〇、三八一
全羅南道	-	-	三三二、八二六	一、六九〇、三九六
慶尙北道	-	-	三三四、四七二	一、七七七、六〇一
慶尙南道	-	-	二七七、六八一	一、四六四、六〇一
黄海道	-	-	二二七、三二四	一、一三三、二四三
平安南道	-	-	一六五、二七八	八七八、七〇九
平安北道	-	-	一八二、一三三	九九四、九九一
總計	一〇、二一〇	四〇、八六八	二、七〇九、六三六	一、〇五二、三五〇
咸鏡北道	五三	一九二	四三三、七〇八	九六六
咸鏡南道	八七	一六八、〇六七	一、〇五二、三五〇	九二
總計		六六、九九八	四三三、七〇八	八二
		七〇九、六三六	一四、三六八、四五六	九六六
				三、六五四

道名	其の他の外國人		合計	
	戸數	人口	戸數	人口
江原道	五	五	一九四、二七一	一、〇六五、九六六
成鏡南道	一	一	一六八、二四六	一、〇三三、一二八
成鏡北道	一	一	六七、一三三	四三四、一七一
總計	七	一四	二、七二〇、八一九	一四、四一三、九九三

道名	農業者業態表		家戸數
	專業	兼業	
京畿道	三〇七、七七一	三六、〇五三	二四三、八二四
忠清北道	一一一、四九四	二二、一三八	一三三、六三二
忠清南道	一五〇、八七八	三六、一七五	一八七、〇五三
全羅北道	一六八、三七六	三八、四八〇	二〇六、八五六

全羅南道 慶尙北道 慶尙南道 黃海道 平安南道 平安北道 江原道 咸鏡南道 咸鏡北道 總計

二六三、三三三
二七〇、一七八
二一六、六〇六
一九四、七三三
一四一、一四六
一五八、八八六
一六八、六六四
一四四、三〇九
五八、二一〇
二、二五四、五八四

六九、四九三
六四、二九四
六一、〇七五
三二、五九一
二四、一三二
二三、二四七
二五、六〇七
二三、九三七
八、九二三
四六六、一四五

三三二、八二六
三三四、四七二
二七七、六八一
二二七、三二四
一六五、二七八
一八二、一三三
一九四、二七一
一六八、三四六
六七、一三三
二、七二〇、七二九

道名	地主、自作、小作、自作兼小作、別農家戶數				
	地主(甲) 戶	地主(乙) 戶	自作 戶	自作兼小作 戶	小作 戶
京畿道	三、八八八	八、〇七七	二〇、四一八	八四、七四七	一、二六六、六九四
忠清北道	五〇一	三、三二五	一五、九九〇	五七、二七八	五六、五三八
忠清南道	七四三	四、一八九	一四、六三二	七〇、六八七	九六、八〇二
計					

道名	地主、自作、小作、自作兼小作別農家戸數					
	地主(甲)	地主(乙)	自作	自作兼小作	小作	計
全羅北道	三二〇	二、二三五	一三、一六二	六三、六四六	一一八、四九三	二〇六、八五六
全羅南道	五三六	四、〇九九	五九、五七四	一五〇、七九六	一一七、八二一	三三二、八二六
慶尙北道	八五〇	七、四二〇	四九、五九五	一六五、三七七	一一一、二三〇	三三四、四七二
慶尙南道	六七五	五、九一三	三七、五〇八	九三、八四五	一三九、七四〇	二七七、六八一
黃海道	一、八三四	八、九二二	三八、七九九	七五、〇六五	一〇二、七〇四	二二七、三三四
平安南道	一、九三二	七、七一五	三八、八五八	六八、二三二	四八、五四一	一六五、二七八
平安北道	二、二三八	一、〇四一	四八、三六三	四八、七一九	七一、七七二	一八二、一三三
江原道	四八四	六、一九六	五九、〇三七	七六、四六六	五二、〇八八	一九四、二七一
咸鏡南道	一、〇一三	四、〇八一	八八、五九八	四七、七四三	二六、八一	一六八、二四六
咸鏡北道	五五一	二、一五二	四五、六四三	一五、一七九	三、六〇八	六七、一三三
總計	一五、五六五	七五、三六五	五二九、一七七	一、〇一七、七八〇	一〇八二、八四二	二、七二〇、七三九

備考 地主甲とは其の所有する耕地を悉く小作せしめ自ら耕作せざる者地主乙とは所有耕地の大部分を他に小作せしめ一部分を自ら耕作する者を謂ふ。

第三節 農産物

(イ)米 米は朝鮮の農業生産總額約十四億圓中五億五千萬圓の巨額に達し各種農作物中最も主要なるものなり

然るに行政當時に於ては畜の荒廢甚たしく反當收量少く且品質劣等なりしを以て以來之が改良増殖を圖りし結果今日に於ては收量品質共に面目を一新し大正九年に於ては産額一千四百十八萬二千三百五十二石を産し其の輸移出高二百九萬九千九百十三石價額七千七百萬八千四百五十六圓に達し殆ど全部内地に移出せらる

(ロ)大豆 朝鮮大豆は品質收量共に優良にして各道到る處に栽培せらる殊に西北鮮の産品中には優良品を産す朝鮮大豆は内地及滿洲種に比較せば蛋白質に富むを以て豆腐、味噌、醬油等の原料として貴はる從て其の輸移田も殆ど内地食用向にして大正九年に於て八十三萬五千九百四十八石其の價額一千七百二十九萬三千二百四十六圓に達し米と共に輸移出品中の重要なるものなり

(ハ)麥 大麥小麥を主とし裸麥を合し其の栽培面積は畑作物中最も廣きを占む、南鮮地方は氣候溫和なるを以て秋蒔に適し北部は冬季氣溫低きを以て春蒔となす小麥は近年生活程度の向上に因り鮮内消費額益増加するに至り米大豆に次く重要輸移出品なり

(三)粟 粟は西北鮮地方に於ける主要畑作物にして該地方の常食として重要なるものなり従て其の栽培も古來より盛に行はれ其の作付面積及收穫尚麥類に次ぐ然れども未だ鮮内の需要を充す能はず大正九年に於ては七十六萬五千五百四十六石其の價額壹千八百九萬三千八十七圓の輸移入を見たり

主要農作物作付段別及收穫高

大正九年十二月

道名	作付		計	收穫		計	一反步收穫高	
	水 稻	陸 稻		水 稻	陸 稻		水 稻	陸 稻
京畿道	一九九、五〇三・五	三、三四八・四	二〇一、五五〇・七	一、八二三、九三二	一六、二四三	一、八四〇、一六八	〇・九一六	〇・六九三
忠清北道	九九、〇一四・四	四〇九・八	六九、四八四・三	七〇一、四二九	二、四一九	七、三、八四九	一・〇一六	〇・〇・九
忠清南道	一五九、四九五・三	一、一五一・七	一六〇、六四七・〇	一、六七五、一七九	九、七一七	一、六八四、八九六	一・〇五	〇・八四四
全羅北道	一六六、四三四・二	六二二・六	一六七、〇四六・八	一、四一八、九九六	三、五二五	一、四三二、五一一	〇・八五三	〇・五七五
全羅南道	二〇一、八〇三・三	四、七六七・四	二〇六、五七〇・七	一、八四六、八三三	二六、五七九	一、八七三、三〇一	〇・九一五	〇・五五三
慶尙北道	一八六、八三三・六	四一、一、四	一八七、二五四・〇	三、二七九、七三三	二、八二三	三、二八二、五三九	一・二三三	〇・六八三
慶尙南道	一六三、一四七・三	三、三四八・九	一六六、四九六・二	一、六九〇、六八三	一四、二七九	一、七〇四、九六三	一・〇四五	〇・六〇八
黃海道	一三一、五五三・一	三三二・四	一三一、八九四・五	一、〇六六、一八九	二、〇六三	一、〇六八、三五二	〇・八一〇	〇・六四一

道名	作付反別			收穫			一段步收穫高		
	大麥	小麥	裸麥	大麥	小麥	裸麥	大麥	小麥	裸麥
平安南道	六二、九一・〇	四、五五〇・一	六七、四六一・一	五七一、四八	五三、七五三	六〇五、三一九	〇・九〇八	〇・五〇二	〇・五〇二
平安北道	七〇、一七四・六	七八五・六	七〇、九六〇・三	五〇五、三九一	五、五〇一	五五〇、八九四	〇・七七七	〇・七七〇	〇・七七〇
江原道	七八、〇六九・一	三〇、五	七八、〇八九・六	六九五、三八三	一三六	六九五、五八	〇・八九一	〇・六一四	〇・六一四
咸鏡南道	四一、九八四・五	六一・九	四二、〇四六・四	五八五、〇七七	三九、	五八五、四六七	〇・九一七	〇・六三〇	〇・六三〇
咸鏡北道	七、九〇四・四	一	七、九〇四・四	六四、八八八	—	六四、八八八	〇・八八四	—	—
合計	一、五三三、六一六・一	一七、七八九・七	一、五五五、四〇五・八	一四、七六五、一七三	一七、一七九	一四、八八二・三一	〇・九六〇	〇・六九〇	〇・六九〇
大正八年	一、五九九、八二四・三	一八、五七四・六	一、五三七、八九七・三	一五、一六六、四七四	五九、〇七九	一三、七七八、三〇八	〇・九九一	〇・三二八	〇・三二八
同七年	一、五九九、三三三・六	一八、五四五・五	一、五四八、一六九・七	一三、六四九、一三九	一三、六三五	一五、三九四、一〇九	〇・八三三	〇・六九六	〇・六九六

道名	作付反別			收穫			一段步收穫高		
	大麥	小麥	裸麥	大麥	小麥	裸麥	大麥	小麥	裸麥
京畿道	八六、七三三・〇	二七、三五七・〇	一、五七七・三	六六〇、八六九	一七〇、二九三	九、三八二	〇・七六一	〇・六〇三	〇・六二三
忠清北道	六二、七八七・〇	一七、三三三・三	三三・七	五三二、三七三	九六、五一一	一、五九九	〇・八七八	〇・五五七	〇・四九七
忠清南道	五六、八六三・六	一四、四五二・五	二、四八七・九	五三二、五〇三	九四、三〇六	二、二〇三六	〇・八九四	〇・六四三	〇・六八七

道名	作付		反	別	收穫		高	一段歩		收穫	高
	大麥	小麥			大麥	小麥		大麥	小麥		
全羅北道	三六、二三九・五	一〇、八一四・五	助	五七三・八	三六二、〇九三	石	三九、九九六	〇・九九九	〇・六九八	〇・八二九	石
全羅南道	二六、五一八・三	二二、二七七・二	助	一三、九八六・九	一、二七、四六五	石	九四、九九九	一、〇四七	〇・五九九	〇・六七九	石
慶尙北道	一六五、二三八・四	四七、八四五・八	助	一三、六二〇・二	四八三、二四七	石	六三、一七四	〇・九〇九	〇・六〇一	〇・五〇一	石
慶尙南道	一一、一九六・三	二〇、六三三・八	助	九、六五五・〇	一、三八五、二四三	石	一五〇、五一八	一、〇五六	〇・七三〇	〇・七三〇	石
黃海道	一九、一〇九・八	二五、〇六四・五	助	一、三六八・七	一、三、七九三	石	七六七、八四〇	〇・七〇六	〇・六一三	〇・六一三	石
平安南道	一九、六三四・八	二九、四一五・五	助	四、六三二・三	一九五、九六七	石	三、六七七	〇・七〇六	〇・六一三	〇・六一三	石
平安北道	一一、〇九八・八	一、七三四・〇	助	〇・三	七三、一九三	石	五、二七四	〇・九九八	〇・六一五	〇・六七九	石
江原道	三五、六八三・三	三、三三七・五	助	六五六・八	二七五、六一九	石	二七五、六一九	〇・六五九	〇・三六六	〇・五〇〇	石
咸鏡南道	四三、三八六・三	六、七四〇・四	助	五〇・七	二七九、六三九	石	一四四、六三三	〇・七三三	〇・四六五	〇・四七三	石
咸鏡北道	四五、八五一・一	四、四四四・五	助	—	二七九、六三九	石	—	〇・五五一	〇・五七一	〇・四五五	石
合計	八二七、〇九九・〇	三五六、三七九・二	助	五三、〇一一・五	七、三六六、八〇〇	石	二、一四五、六四一	〇・八九四	〇・六〇四	〇・六五七	石
大正八年	八〇三、五一八・〇	三四六、八九〇・二	助	五四、三七五・一	七、二七〇、二八〇	石	一、六七〇、八二〇	〇・九七七	〇・四八三	〇・六六五	石
同 七年	七九〇、八五〇・九	三四四、三八〇・一	助	五六、七四八・七	七、七三二、一一九	石	一、九三三、三二六	〇・九〇六	〇・五六一	〇・七四四	石

道名	作付反別			收穫高			一段步收穫高		
	大豆	小豆	粟	大豆	小豆	粟	大豆	小豆	粟
京畿道	八三、二〇九・五	一六、〇〇〇・七	三二、九九九・二	五四三、五八六	八三、二五八	一九〇、九五七	〇・六六〇	〇・五〇	〇・五九七
忠清北道	三四、二八九・二	八、五四三・八	一五、五八九・〇	二三四、九一三	四五、五三六	一〇〇、九四一	〇・六八三	〇・五三三	〇・六六
忠清南道	四七、四四五・九	八、〇一五・五	一、五八七・六	三三三、三九五	四一、三二七	二、三四六	〇・六六一	〇・五一六	〇・七一八
全羅北道	三三、五四五・五	七、〇四一・八	一、八四四・三	一七〇、三六五	二七、四六五	一一〇、五六	〇・五三三	〇・三九〇	〇・五九〇
全羅南道	三三、四三九・六	五、四二四・六	三、五七三・五	一八九、七七八	二二、四三三	三三三、一九〇	〇・五五八	〇・四一四	〇・九三三
慶尙北道	一〇八、一三六・七	五、一三六・一	四三、七七・五	七三三、八五〇	三五、五四〇	三二六、九五五	〇・六七九	〇・四九五	〇・七六
慶尙南道	五八、三五四・五	六、〇九二・六	三、三三八・六	三三二、三七八	二七、五五九	二八、六六七	〇・六〇四	〇・四五三	〇・六一三
黃海道	八六、一六四・六	六、九一七・三	一八〇、五三二・四	五五〇、六七四	三四五、九五二	四六一、七四三	〇・六四四	〇・五〇	〇・八〇九
平安北道	五〇、三五四・二	五、三二四・九	一七、一七・〇	三六二、五二八	二八、四二六	二五八、四〇七	〇・七二一	〇・五三〇	〇・九九〇
平安南道	六三、五〇四・〇	三、六五六・〇	一〇七、七八七・五	三五七、七六八	一四六、二〇四	八一〇、一一三	〇・五六三	〇・三九九	〇・七五一
江原道	六五、四六五・一	二、〇九三・七	八一、〇九五・八	三三〇、五三〇	八四、六四四	四四九、一二六	〇・五一一	〇・三五〇	〇・五五三
咸鏡南道	五六、七七三・五	一、六五五・〇	七六、八二五・〇	三三九、七八七	六五、九八八	五七一、五〇三	〇・六三三	〇・三九八	〇・七四四
咸鏡北道	五二、四八〇・七	二、五九〇・二	六七、五七五・一	二八五、六七五	一〇、六三〇	四〇、四五〇	〇・三四四	〇・三九一	〇・七一一
合計	七七二、〇五五・〇	二五九、六七三・六	七、七三三・四	七、九一、一九七一、二	二、五、四九六、〇	三、六、四三三、	〇・六二二	〇・四六七	〇・七八一

道名	作付反別			收穫			一段歩收穫高		
	大豆	小豆	粟	大豆	小豆	粟	大豆	小豆	粟
大正八年	七六、五五三、 七三、四六六、 九二、六七、 三三八、 三三三、 四四	三九九、 七四三、 七七八、 六三三、 五三三、 二八〇、 六三二	六六、 五五三、 七三、 四六六、 九二、 六七、 三三八、 三三三、 四四	四六、 三六八、 三八、 八六、 二七三	三三三、 一、 三三三、 五三〇、 五、 六六二、 九九五	〇、 四三三、 〇、 六六五	〇、 一七七	〇、 四九七	〇、 四八七
同七年	七三、 四六六、 九二、 六七、 三三八、 三三三、 四四	三九九、 七四三、 七七八、 六三三、 五三三、 二八〇、 六三二	六六、 五五三、 七三、 四六六、 九二、 六七、 三三八、 三三三、 四四	四六、 三六八、 三八、 八六、 二七三	三三三、 一、 三三三、 五三〇、 五、 六六二、 九九五	〇、 四三三、 〇、 六六五	〇、 一七七	〇、 四九七	〇、 四八七

輸移出穀物三年對照

品名	大正九年			同八年			同七年		
	米	大麥	小麥	米	大麥	小麥	米	大麥	小麥
米	二、〇九〇、九一三	七、七〇〇、八、四五六	六、九〇二、石	二、八八二、五八六	一、一〇〇、三〇、八七八	一、八、二一〇	二、三二八、五五〇	六、一、五四一、六三一	三、〇、五八七
大麥	五、六、八九六	四、六、四七九	四、六、四九六	二、二八、七八五	二、三、六七七	四〇〇、二、二五〇	三、二、一八五	九、六、四三〇	九、一、四、一八八
小麥	六、九〇二、石	四、六、四七九	四、六、四九六	二、三、六七七	四〇〇、二、二五〇		三、〇、五八七	九、六、四三〇	九、一、四、一八八

大豆	小豆	菜豆	其他の豆	黍	玉蜀黍	其他の穀物	合計
八三五、九四八石 一七、二九三、二四六石	一〇、五三四石 一九九、五〇六石	二一、四五三石 三四九、一九〇石	一、七〇六石 三二、七七一石	一、八〇五石 一九、四三三石	二二、四〇八石 一八三、五一四石	一〇五、七九九石 九五、八六六、三〇七石	
一、二八八、七三三 二〇、七一〇、三四二	二七、六一〇 五一六、二五四	八六、三四二 一、七七三、二五七	二、八〇八 五八、四四八	五九八 六、六六〇	五、八四四 六四、一五七	一三一、四四八 一三三、九二二、四七九	
九五七、六八三 九、五〇七、八八三	七、四四一 七八、七八七	八二、三〇九 一、九四七、三四六	一、四七八 二〇四、二三五	九九八 九、九六七	二一、七九五 二〇八、三六九	四〇、八〇八 七四、七七六、三九九	

備考 米其の他の輸移出額の大正八年に比し大正九年の減少せるは大正八年に於て旱魃の被害あり其の影響を受けたるに由る

		輸移入穀物三年對照		
品名	大正九年	同八年	同七年	
米	五六,九二一 二,一六一,二七一	四四,四四〇 一,三二二,八五三	七五,〇九五 一,五五一,〇三七	石
粟	七六五,五四六 一八,〇九三,〇八七	九一五,六六九 一五,四四〇,二〇〇	三二二,六七七 三,一〇〇,一三三	石
落花生	三,三八五 四六,〇二七	五,九九六 三六,三八〇	一,五八九 一六,四〇八	斤
小豆	二五,四三二 七六二,九一七	二七,〇三〇 六〇四,七三三	一五,六一七 一九一,二六三	石

其他の豆	二九、七一	三五、六七三	五、一九八
其他の穀	六〇九、二七二	七六七、九〇一	七八、九八八
其他の種子	三、〇九二、四二〇	四、〇五〇、二七六	四二七、一一一
合計	二二、七六四、九九四	二二、二二、三四三	五、三六四、九二九

(ホ) 甘藷 朝鮮地方に多く栽培せられ農家の補食用として嗜好せらる

(ヘ) 馬鈴薯 北鮮地方に産出多く品質優良なるものあり年年其の栽培増加し甘藷と共に農家食糧の補給に充てられつつあり

(ト) 果實 朝鮮の風土は極めて果樹の生育に適するを以て近時京城、仁川、素砂、大邱、大田、三浪津、金海、黄州、鎮南浦、平壤、羅南を始め其他各地に於て新に果樹栽培に従事する者年年増加するに至れり

(一) 栗 古くより各道栗を産せざるはなきも就中平安南道の威從栗は其の澁皮剝離易くして甘味に富むこと内地産に優れり京畿道、平安南道には栗林を成せる所尠ならず

(二) 柿 概ね澁柿にして湯にて澁を抜き或は吠に投して熟柿とし或は剥皮して乾柿を爲す忠清南北道、全羅北道、慶尙北道等産出多し

(三)桃 毛桃は水蜜桃に類し味稍佳なれども毛無桃は從來の内地桃に類し品質劣れり京城南大門外吉野町西大門外弘濟内外里等は桃林相連り陽春満開の期に際しては春色都門を賑はすものあり近來京城、開城、三浪津等に於て改良種の良果を産出す

(四)苹果 在來種(林檎)は産額少く小形にして品質劣等なり優良種(苹果)は各地に栽培せられ品質良好にして遙に内地産品を凌駕す故に内地、滿洲及西伯利に於ける需用多く常に好評を博しつつあり

(五)梨 在來梨は咸興梨の如き稍良品なきに非ざるも一般に味佳良と云ふへからず内地種は能く良果を結ひ栽培日に増加せり又洋種の結果は内地に比し著しく優れり

(六)葡萄 風土能く洋種葡萄に適し内地に於て栽培困難なる良種も容易に結果し甘味強く品質良好なり

(チ)蔬菜 從來白菜、蘿蔔、甜瓜、南瓜、水芹、蒜等の栽培多く行はれ開城白菜の如き其の尤なるものなり近來内地人の移住増加に伴ひ種種なる蔬菜類の栽培行はれ胡瓜、茄、牛蒡、胡蘿蔔、菠薐草、野蜀葵、菜豆、蒿苣、茼蒿、葱、甘藍、西洋甜瓜等の類漸次増加するに至れり

(リ)棉花 棉は江原道咸鏡南道の一部及咸鏡北道を除くの外各地殆ど之を栽培せざるなき 就中全

羅南北道及慶尙南北道は其の主産地にして忠清南北兩道之に亞く棉質纖維長くして彈力に富み各種の用途に適す從來朝鮮人は衣料に供すへき木綿を製するに自ら棉種を蒔き自ら紡績し自ら製織して需用に供する慣習なりしも内地より精練なる紡績絲の移入するや棉花の紡績漸く減少せしも一方に於て朝鮮産棉花を内地に移出するの途開け販路擴張し漸次好況を示すに至れり然れども在來種は其の品質優良ならざるを以て明治三十九年以來政府保護の下に收量繰縮歩合共に多く纖維の細長にして紡績原料に好適せる米國和陸地棉の栽培を奨勵せしに成績良好にして年年其の栽培反別を増加するに至れり明治四十三年に於ては陸地棉作付反別千二百六十八町步其の栽培戸數僅に二萬九百餘名なりしに大正九年に至りては作付反別十萬六千六百九十七町步其の栽培戸數五十六萬四千三百餘戸の多きに達せり尙大正八年より京畿、黃海、平安南北の四道及忠清北道、慶尙北道の一部に於て陸地棉に不適なる地方は在來棉を奨勵栽培せしむる事させり大正九年に於ては其の作付面積三萬九千七百九町其の栽培戸數二十三萬九千八百餘戸に及へり
今最近の作付反別收穫高及輸移出額を表示せば次の如し

棉作付段別收穫高及輸移出額

年	作付段別			收穫高			輸移出額
	在來棉	陸地棉	計	在來棉	陸地棉	計	
大正七年	三六、〇九七・六 <small>町</small>	九四、五二一・二 <small>町</small>	一三〇、六一八・八 <small>町</small>	一七、三三三、五 <small>斤</small>	一、〇六八、〇九三〇 <small>斤</small>	七、九〇四、五二六〇 <small>斤</small>	六、一四一、〇八八 <small>町</small>
同八年	三六、三〇〇・九	一〇九、一五六・三	一四五、四三三・一	一、三三四、五七五	一、〇六八、〇九三〇 <small>斤</small>	九、〇五八、九七七	八、一七三・七七
同九年	五九、七七一・〇	一〇六、〇九七・四	一四六、四四六・四	二六、三五六、二二一	一、〇六八、〇九三〇 <small>斤</small>	一、〇六八、〇九三〇 <small>斤</small>	六、〇〇六、三五二 <small>町</small>

(又)繭 家蠶繭は特殊農産物中最重要なるものにして今や全道到る處其の生産を見ざるはなく就中慶北 平南 平北、江原及忠南の五道を其の主産地とす從來の蠶種は雑駁劣等なる三匹蠶にして桑樹は畦畔宅地等に散植し培養を加へざりしか故に葉質概ね粗悪なりしも明治三十九年以來特に品種の改良に努めたる結果市平、魯桑の如き優良桑樹の栽培に努めたると同時に又昔、新屋、白龍の如き優良蠶種の飼育は年々共に普及し加ふるに近時蠶價は漸く其の高價を唱へ爲に蠶業の機運大に熟し産繭の品質は育蠶技術の進歩と相俟て顯著なる向上を見るに至れり而して更に大正六年新奨励品種として純粹種朝歐一號、朝歐二號の二種一代交雜「ジャロヘルージャ」と支那二十號特大との交雜、愛歐一號と支那二十號特大との交雜、赤熟と支那二十號特大との交雜「ブラン、ピ

ユール」を支那七號との交雜の四種合計六種を追加し而して大正八年四月朝鮮蠶業令及其の關係法規を發布し蠶種の製造蠶種桑苗の移入、桑苗の生産販賣苗の販賣、蠶病の豫防等に關する取締を爲し、更に大正十年國蠶日一號と國蠶支四號との交雜、國蠶支四號と國蠶歐三號との交雜、國蠶支七號と國蠶歐七號との交雜蠶種三種を追加し將來益之が品種の改善を圖らむとす今最近の家蠶統計を表示すれば左の如し

家 蠶

大正九年十二月

道 名	桑田		養蠶 戸數	蠶種掃 立枚數	產 額			製絲 戸數	生絲 産額
	段	別			春蠶	夏蠶	秋蠶		
京 畿 道	二、一九〇・九	町	二七、二九二	四〇、〇八〇	八、五三九	四一八	一、二九〇	一〇、一三七	三、〇二八
忠 清 北 道	一、九一九・五	町	(一七、五五〇)	三三、五八一	五、〇九〇	五	四七〇	五、五六九	八九
忠 清 南 道	三、九六六・六	町	二六、三二〇	四三、八四七	九、七六七	三九五	一、六五九	一一、八二二	八七六
全 羅 北 道	二、六七三・七	町	一三、六四六	三三、六九五	三、九一〇	—	八九三	八、八〇三	五、二六
全 羅 南 道	二、六五一・六	町	三三、六四九	四〇、〇四七	七、九三一	一三八	二、六三六	一、六九六	一一九
慶 尙 北 道	三、八一三・〇	町	五六、四三三	七〇、五八七	二〇、九一四	四九	一、四八五	三三、四四八	一、三二〇

道名	桑田 段別	養蠶 戸數	蠶種 立枚數	繭產額			製絲 戸數	生絲 産額	
				春蠶	夏蠶	秋蠶			
慶尚南道	一、五五〇・〇	一二、二〇五	二四、三七三	四、八八一	一一三	一、五九五	六、五八九	二一九五	九三〇
黄海道	一、六七八・二	一四、一四四	二五、〇五六	六、一七六	一六八	二七一	六、六一五	四、〇五六	一、〇〇〇
平安南道	五、〇一七・五	二九、〇九七	五六、五九五	一五、四四三	一、六六九	三九二	一七、五〇三	三、〇七四	一、五一五
平安北道	二、九八九・九	三〇、八三三	五〇、〇九八	一四、七九四	—	一三五七	一六、一五一	一五、八五七	五、八二八
江原道	二、四九八・〇	二七、二八四	五三、八五四	一一、二七三	八〇一	四六一	一一、五三三	—	一一五
咸鏡南道	二、一〇二・五	二五、二〇八	二八、四八〇	六、五六三	三三八	一五二	七、〇五三	一、二八三	三九三
咸鏡北道	五、七・六	四、二九一	五、八〇七	六九七	—	—	一、〇二八	二、八四三	五一一
總計	三二、六三四・八	三三五、八八三	四八五、一〇〇	一一五、八六七	四、〇九四	一一、九八五	一一三、九四六	三七、七四九	三三、六三六

(ル)家畜

(一)牛 農耕運搬用を兼ね又肉用として需用多く到る所農家之を飼養す體格偉大體質強健にして
 而も性質温順なるを以て十歳の兒童と雖も能く之を牧御し得へし其の生産饒多、價格廉なるを
 以て内地露領沿海州及支那等に移輸出せらるるもの多し大正九年に於ける生牛の移輸出額六萬

四千餘頭其の價額五百二十三萬二千餘圓に達し牛皮、牛骨、牛脂等の移輸出額三百四十二萬七千餘圓に上れり成牛一頭の價は財界の高潮時代よりは稍下落せしも牝牛百二十三十圓、牝牛八十圓内外なり、乳川牛には主としてホルスタイン種エーアシャー種飼養せられ大正九年の搾乳牛は七百七十餘頭其の搾乳高三百八十餘萬石なり

(二)馬 帶軀矮小なれども比較的力強く險路峻坂を行くこと巧にして専ら乗駄兩用に供し耕耘には使用せず性質亦順良にして御し易し普通一頭の價格約八九十圓なり近時内地産の馬を移入する者著しく増加し咸鏡北道に於ては雄基に種馬所を設けて内地産馬の種付を獎勵し李王職には華山牧場を設けて外國種の蕃殖普及を圖り又民間にも成愾牧場の開設を見るに至れり

(三)驢、騾 乗駄兩用に供せらるるも其の數少なく驢は一頭の價約五六十圓騾は七八十圓内外なり

(四)綿羊 大正八年より咸鏡南、北、平安北、道、黃海道、全羅南道の五道に蒙古種羊を配付し之を民間に於て試験的飼育を爲す傍洗浦牧羊支場に於ては蒙古種メリノ種及シロップシア種との雜種蕃殖及純粹蕃殖の試験中なり

(五)豚 普く農家に飼養せられ其の數牛に次ぐ在來種は體軀矮小晚熟にして肥大性を缺き品質劣

等なれども其の生産頗る多し一頭の價十圓内外なり近年改良種としてパークシア種の飼養漸次増加し大正九年末には十萬餘頭に及び總頭數に對する改良種の歩合は一〇%に達せり

(六)家禽 鶏多數を占め鷺及鷺、七面鳥等は其の數甚た少し鶏は農家にして之を飼養せざるなく在來種は内地の地鶏に酷似し稍小形にして性質頗る敏捷なり産卵少く卵形亦小にして一箇年の産卵六七十顆に過ぎす一羽の價一圓内外なり近年改良種として白色レグホン、プリマスロツク名古屋コーチン種の飼養漸次増加し大正九年末には總羽數に對する改良種の歩合は一一%に達せり

(七)養蜂 朝鮮人は古來蜂蜜を食用及藥用に供するを以て蜜蜂を飼養する者尠からず江原道平安北道咸鏡南道最盛にして大正九年の生産額は蜂蜜蜜蠟約八十萬圓に達し農家の副業となすに適し將來發展の望あり近時改良種としてイタリア種カーニオラン種を飼養する者あるも其の數甚た尠し

野生鳥獸 野生獸には虎、豹、山猫、大山猫、熊、ヒグマ、狼、ヤマイヌ、豺、メクテ、猪鹿、ノロ、カモシカ、羊、チ、狐、狸、アナグマ、水獺、鼠、貂、鼬、兔、栗鼠、ハリネズミ、蝟等あり朝鮮人は罝陷阱等を以て獸類を捕獲す從て其の毛皮の産額少からず野生鳥は其の種類分明ならざるも内地と大差なきか如し但し黃鳥、ワウラウ

於て善く輸移出入及道外搬出大豆の検査を施行せしむることせり今玄米及大豆の検査成績を擧ぐれば左の如し

(小麥は黃海道に於ては大正七年四月より平安南道に於ては大正十年八月より榮豆豌豆に就ては咸鏡北道に於て大正九年六月より何れも道令を以て之の規定を設け同様検査を施行せり)

玄米検査成績表 (噸)

年次	検査總數	合 格				計	不合格數	合格割合
		特等	一等	二等	三等			
自大正七年十一月至同八年十一月	五、五五五、〇六九	四、四四一	三九、四六八	四四一、五五〇	二六三、七一四	七四八、一七三	七八六、八六六	〇・八六
自大正八年十一月至同九年十一月	三、八一四、〇四〇	九、二〇七	二八、六三六	三五〇、四九一	三、一三七、二四三	五五、五四九	三、八四九一	〇・九三
自大正九年十一月至同十年六月	四、六三四、六八六	八、九九六	六一、〇一五	五〇〇、四四一	一、四四一、〇一六	二、〇三三、四六一	三、五三三、三三三	〇・九三

大豆検査成績表 (噸)

年次	検査總數	合 格					不合格數	合格歩合
		特等	一等	二等	三等	計		
自大正七年十一月至同八年十一月	三、二八〇、五五〇	二、四七二	六六、六九〇	五五、五四五	五七五、四三三	一七六、一三八	一〇四、四二二	〇・九七
自大正八年十一月至同九年十一月	一、四三三、三八〇	五、〇六三	三三、三二二	一一五、三九五	一二〇、九一三	四〇九、六九二	二六、六八九	〇・九八
自大正九年十一月至同十年六月	三、三三二、二二二	一六、一八六	一七五、八五八	三五一、二四五	二七四、三〇五	二八六、三三四	六五、八八八	〇・九八

第五節 勸農機關

農業は朝鮮の産業中最重要な位置を占め國民の經濟は一に繫りて其の振否如何に在るを以て之が改良指導の途を講ずる爲勸農機關を設くること左の如し

(イ) 勸業模範場

- 一 本場 明治三十九年京畿道水原に設置し産業の改良發達上に資する調査、試験、農事の模範、實地指導、講習、講話、種苗、蠶種、種禽、種豚の配付等を主要の目的とす

二 西鮮支場 黃海道沙里院に在り大正九年三月の創設にして専ら朝鮮に於ける田畑作物の調査試験を行ふを目的とす

三 露島園藝支場 京城府外露島に在り園藝模範場と稱し明治三十九年八月の創立に係りしか明治四十三年十月移して支場と爲せり園藝に關する試験及模範的栽培を爲し廣く公衆の觀覽に供せり

四 德源園藝支場 咸鏡南道德源に在り大正元年の創設に係り北鮮地方に於ける園藝の試験及模範的栽培に努む

五 木浦棉作支場 全羅南道木浦に在り明治三十八年朝野の有志相謀りて棉花の栽培協會を設立し紡績原料に適せる陸地棉を朝鮮南部一帯に普及せしめむことを企畫し之を經營の實行に就きた當時の日韓兩國政府に請願する所あり當局其の請を容れ當時の勸業模範場木浦出張所を設けたるを濫觴とし爾來幾多の變遷を經今日に於ては棉花に關する試験、調査、種子の馴化、栽培等か爲しつつあり

六 洗浦牧羊支場 江原道平康郡洗浦に在り緬羊の蕃殖、配付を主なる目的とし蒙古羊を輸入し

て「メリブー」種との雜種試験を行ふ、大正二年度より業務準備に著手し同三年度に於て設備整ひたるを以て之を勸業模範場出張所と爲し更に大正六年三月に至り勸業模範場支場に改む

七 龍岡鳩作出張所 平安南道龍岡郡龍岡に在り大正九年三月の創設にして主として朝鮮在來棉花の試作、試験を行ふを目的とす

八 蘭谷牧馬支場 江原道淮陽郡蘭谷面に在り蒙古牝馬を基礎とし飼養及蕃殖試験を行ひ朝鮮に適する馬種を産出し之を普及を圖るを目的とす大正五年四月より其の設備に著手し大正六年三月勸業模範場支場と爲せり

九 蠶業試験所 水原に在り原蠶種の製造配付及蠶業に關する試験、調査を行ふ所とす從來是等の事業は主として龍山支場に於て行ひ來りしか大正三年四月龍山支場を廢すると同時に専ら本所に於て之を行ふこととせり

十 女子蠶業講習所 水原に在り本所は明治三十八年七月創設の舊大韓婦人會養蠶講習所に胚胎し同四十三年四月官立となり四十四年二月勸業模範場龍山支場附屬となし大正三年四月同場を廢止すると同時に水原に移すこととし同年十一月移轉より講習期間は十箇月にして蠶業に關す

る學理及實地を講習す大正九年の卒業生は二十二名にして之に從前の卒業生を加ふるときは其の總數二百五十一名に及へり

(ロ)道種苗場

種苗場は京城、清州、公州、全州、光州(濟州島に支場を設く)、大邱、晉州、海州、平壤、義州、春川、咸興、鏡城(城津、會寧、穩城に分場を設く)の十三箇所に設く各其の所在道廳の所屬にして農産の改良増殖に關する試験及調査、種苗、種卵、種禽及種豚の配付又は種畜の種付、農事に關する模範、農用器具器械の貸與、農事に關する講習、講話、傳習及實地指導を爲す事等を以て其の主なる業務となす

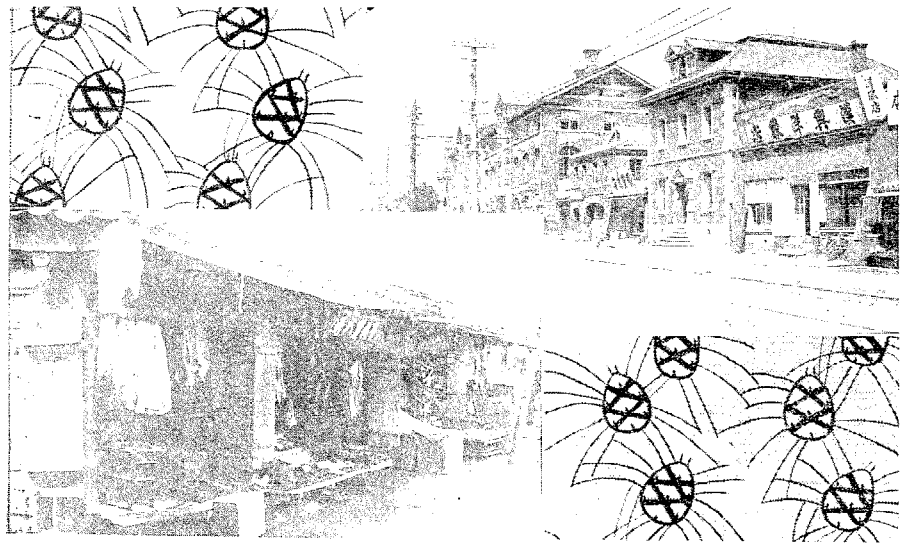
(ハ)道原蠶種製造所 各道に一箇所宛を設置す原蠶種の製造を爲すと共に蠶業に關する調査試験を行ひつつあり

(ニ)道蠶業取締所 朝鮮蠶業令の實施に依り之を執行機關の一として大正八年五月各道に一箇所宛之を設置し蠶病の豫防及蠶種、桑苗の生産販賣に關する取締を爲すを目的とす

(ホ)道種馬所 種馬所は咸鏡北道雄基に設けられ種馬はサラブレッド種、ハクニ種、雜種及蒙古

種を飼育し附近の地方馬に種付して改良を圖りつゝあり

朝鮮農會 明治三十九年の創立に係り朝鮮に於ける農林業の改良發達を圖るを以て目的とし本會を水原に置き開城、清州、公州、全州、群山、光州、大邱、晋州、黃州、平壤、鎮南浦、義州の十二箇所に支會を設け其の事業として毎月一回内鮮文會報を發刊し農事の講習、講話、傳習會、品評會の開催、牛畜鶏種の改良、模範果樹園、蠶業傳習所の設置、種苗の育成配付又は其の供給の仲介をなす等官民の間に介立して直接間接に指導勸奨に努めつゝありしか大正十年九月本會を京城に移すと共に會規等に改革を加へ之を革新を圖ることとなれり



（路鍾城京）舖店人鮮朝

第十一章 商業

第一節 朝鮮人の商業

近時常設店舗を設けて商業に従事する者漸次増加す。雖由來朝鮮人の取引の大部分は市場に於て行はるるを各地一般の慣例とす。而して此等の市場は毎月五回若は六回定期開市せられ其の出市者は附近の住民は勿論遠く八九里の地より到る者尠しとせば朝鮮に於ける市場の數は大正九年末に於て一千二百十四箇所にして一箇年の賣買高一億三百五十二萬圓以上を算す市場は朝鮮に於ける重要な商業機關にして其の設置變更は地方經濟に影響する所尠からざるを以て大正三年九月市場規則を發布し其の組織及監督に付詳細の規定を設けたり。朝鮮人商業の機關として重要なるもの四あり曰く客主、曰く居間、曰く監考、曰く典當是なり。

(イ)客主 本來の業は委託を受けて取引を爲し又は手形の引受、割引、貸金及貨幣の交換等を爲し併せて華客を宿泊せしむるものにして其の商行爲とする所恰も内地に於ける問屋業に類す客主が委託販賣をなす貨物は大概穀物、煙草、牛皮等にして客主は絶えず市場の相場を通報し委託者

は機を見て其の所有貨物を客主に送り指定價格を表示して之が販賣を委託す之と同時に客主は委託者に對し預り證書を交付し而して客主が委託者の指定價格を以て販賣したるときは所定の口錢其の他諸經費を控除し殘額を委託者に交付す

(ロ) 居間 賣買業者の中間に介在し諸般の周旋を爲し一定の口錢を受くることを本業とする者にして恰も内地の仲立人に似たり居間は常に客主の店舗に出入し其の依頼を受け賣買者を探索紹介し賣買成立の曉に於て報酬として口錢を得るものなり普通居間に二種ありて一は一定の出入客主を有し其の使用人となりて周旋の勞に當るものにして一は一定の客主を有せず苟も事件あれば孰れの客主に對しても周旋の勞を取るものたり而して其の行動稍客主業と相似たるものありと雖兩者の間には自ら劃然たる區別の存する在りて客主は委託者の爲に賣買を紹介すると同時に自ら取引の當業者となり權義の主體たるに反し居間は單に賣買業を紹介するに止まり取引に關し何等關與する處なし

(ハ) 監考 地方に依り其の取扱ふ商品一定せされとも市場取引の米穀は賣買者自ら之を升量せず必ず監考之を升量し其の手數料として一升到たる端數の米穀を收受するの慣習ありたるも市場規則の發布と共に殆ど其の跡を絶つに至らむとする狀況に在り

(二)典當業者(質屋業) 多くは金貸業者が兼業として之を営む者にして純然たる典當業は殆ど皆無と稱して可なり而も金貸業者の全部が當然典當業を兼ねる者に非ざるが故に金貸業者の数の多きに比し典當業者は其の數少なし而して典當業者の取扱ふ典物は金銀細工、衣冠竝家具、什器等多く貸金の比準は借主の信用に由り異なるが雖評價の三割乃至五割を以て普通とす而して期限は一定せざるも普通の典物に在りては三箇月を以て一期とし金銀の如き價格異動の少きものに在りては稍長く細民に融通する場合に在りては時期の頗る短きものあり然れども何れも利息支拂に由り延期し得ること及流質となりたる場合に典當權者當然に典物を賣却處分し得ることは内地質屋業と異なるなし

其の他商業機關として市場取引、契等に關し慣行なきに非ざるも行政の刷新と共に次第に其の面目を改むるに至りれり

現時朝鮮人の商店は概ね内地人商店と其の名稱を同するに至りたるも尙舊來の名稱を踏襲するものあり其の主なるものを擧ぐれば左の如し

毛物店 毛皮及毛皮製品並主なる朝鮮雜貨を賣る店
塵鞋を賣る店

布木塵 織物類を賣る店

笠子宕巾網 笠子(平常用うる帽子)宕巾(馬毛にて編みたる官員の冠、笠子の下に著く)網巾(馬

鼠にて製したる巾、頭髮の亂れさるやう額に纏ふもの)を賣る店

鍮器塵 銅器及眞鍮製食器家具等を賣る店

磁塵 磁筒、火盆等を賣る店

瓮器塵 素焼物を賣る店

砂器塵 陶磁器を賣る店

冊 肆 本屋

銀房 銀細工屋

玉房 玉細工屋

飯饌假家 日用食料品(主として乾物)を賣る店

乾劑藥局 漢藥を賣る店

貝物塵 玉製装具を賣る店

喪頭都家 喪具を貸貸する家にして喪具に限り之を都家といふ

賈物塵 主として冠婚葬祭の儀式に用ゐる衣裝器具を賃貸する店
福徳房 土地家屋の賣買、商家の仲介等を業とす
典當局 内地の質屋

第二節 内地人の商業

往時朝鮮に於ける内地人商業の範圍を見るに京城、仁川、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、元山、清津、平壤、鎮南浦、新義州等内地人の集團地を中心とし概ね其の附近に限られたる状態なりしも併合以來諸般施設の發展と共に今や都鄙の別なく到る處之を見るに至れり

内地人の商業は貿易商を主とし各種商品の卸賣或小賣商にして貿易商は穀物、海産物、牛皮等朝鮮物産の輸移出を爲すもの或は各種雜貨、綿絲布類、酒醬油、砂糖、燐寸等の商品を内地より移入するもの類是なり而して日用雜貨を始め米穀、呉服、煙草、酒醬油、文房具、菓子、荒物、青物類の商品は概して京城、仁川、釜山等 卸商より各地の小賣りに供給せらるる状況なり

第三節 商業地

各道に於ける主なる商業地を掲ぐれば左の如し

道

主要商業地

京畿道

京城、水原、開城、永登浦、仁川、平澤、安城、利川、漣川

忠清北道

清州、堤川、忠州、永同、英江

忠清南道

大田、江景、公州、烏致院、洪州、禮山、天安、論山、成歡

全羅北道

群山、全州、留浦、南原、金堤、裡里、井邑

全羅南道

木浦、羅州、榮山浦、咸平、光州、麗水、順天、濟州

慶尙北道

大邱、金泉、慶州、安東、浦項、尙州、倭館、慶山

慶尙南道

釜山、東萊、龜浦、金海、密陽、蔚山、馬山、鎮海、統營、晉州、河東、居昌

黃海道

載寧、黃州、兪二浦、沙里院、新幕、海州

平安南道

平壤、安州、鎮南浦、廣梁灣、成川

平安北道

新義州、義州、龍岩浦、車輦館、宣川、定州、江界

江原道

春川、江陵、鐵原、原州、平康

咸鏡南道

咸興、元山、北青、西湖津、永興

咸鏡北道 一 潘津、鏡城、羅南、會寧、城津、雄基

第四節 會社

朝鮮に於ける會社の設立に對しては明治四十四年一月施行の會社令に依り許可主義を採用し來りたるが近時朝鮮人經濟力の發展著しく知識の程度も一般に向上し會社に關する理解も亦相當進歩し且朝鮮に於ける内地人の企業も漸次其の面目を改むるに至りしを以て此の上會社の設立に關し監督上の制限を加ふるが如き最早時代の進進に策應する所以に非ざるを認め大正九年四月一日を以て該令を廢止せり但取引所、保險業、無盡業、有價證券の賣買若は其の仲立業を目的とする會社は事業の性質上一般の自由に放任するときは種種の弊害あるべきを以て之を取締に關する特別法令の發布を見るに至る迄當分従前の會社令を適用することとせり

會社設立の狀況は産業の發達に伴ひ漸次増加し大規模の企業の勃興を見るに至り殊に近來各種工業を目的とする大會社の設立せらるるもの漸く多きを加ふる傾向を見る

朝鮮に本店を有する會社

大正九年十二月末日

種別	會社數	資本金	拂込資本金
內地設立	合名會社	四、五二〇、五〇〇	四、四三九、五〇〇
	合資會社	五、八一、四五〇	四、四九一、〇七四
計	二七六	三二〇、四三一、〇〇〇	一四二、九六二、七二七
	四一四	三三〇、七六二、九五〇	一五一、八九三、三〇一
朝鮮設立	合名會社	八二二、〇〇〇	五八七、一五九
	合資會社	一、三〇五、二〇〇	六七一、一〇〇
計	一〇	四三、一四九、〇〇〇	一七、九四五、五〇〇
	八六	四五、二七六、三〇〇	一九、二〇三、七五九
內鮮人合同經營	合名會社	一	一
	合資會社	一	一
計	二八	四一、三九五、〇〇〇	九、五三三、三五〇
	二九	四一、四四五、〇〇〇	九、五八三、三五〇
日米人合同經營	株式會社	二	二、一五〇、〇〇〇
	合名會社	四一	五、三四二、五〇〇
			五、〇二六、六五九

總計		合資會社		株式會社	
大正七年末	二六六	一	三九二	五四四	七、一六六、六五〇
大正八年末	三六六	一	四〇七、一二五、〇〇〇	四一九、六三四、一五〇	五、二一二、一七四
大正九年末	二六六	一	二〇〇、五〇〇、二〇〇	一八二、八三〇、四一〇	一七二、五九一、五七七
			一二五、六二二、七〇〇	一〇七、七六一、五七七	一八二、八三〇、四一〇
				六九、八六九、五九五	

朝鮮に支店を有する内地又は外國會社

大正九年十二月末日

種別	會社數	資本金	拂込資本金
内地會社	五	五〇、九〇四、〇〇〇	五〇、九〇三、〇〇〇
合名會社	七	一、六八七、〇〇〇	一、六八〇、〇〇〇
合資會社	七九	五四四、一六〇、〇〇〇	三九九、八七四、六四八
株式會社	九一	五九六、七五一、〇〇〇	四五三、四五七、六四八
合名會社	一		

第五節 商業會議所

商業會議所は商業に關する重要なる機關たるに拘らず從來何等據るべき法規なく、其の事業は又監督上遺憾少からざりしを以て大正四年七月朝鮮商業會議所令を發布し同十月より之を實施し以て有效に其の機能を發揮せしむることせり。抑朝鮮に於ける商業會議所は内地人の設立せるもの十一、朝鮮人の設立せるもの十四を算し多くは府制施行地に於て内鮮人各別に之を設立し其の他朝鮮人の設立せるものにして殆ど商業會議所存立の意義を有せざるもの本抄からざりしか新令施行に伴ひ之を整理し内鮮人共同して商工業の進歩發達を圖らしむる爲一地區一商業會議所たらしめ其の組織權限及監督に關しては一律に之を規定し以て會議所自體の地位資格を明にし所期の目的を成就せしむるに便し併せて適當の監督を加へ目的外に逸脱して諸種の弊害を誘起するか如きことなからしめたり現時新令に基き商業會議所を設立せるもの京城 仁川、群山、木浦、釜山、大邱 平壤、鎮南浦、元山の九箇所なり。

第六節 商品陳列館

商品陳列館は京城府永樂町に在り大正元年十一月三日の創設にして本府の經營に係る敷地約一千四



平 平 商 業 會 議 所
平 壤 公 會 堂

百坪、本館は煉瓦造二階建にして階上階下を通して四百餘坪外に平家建四十五坪あり三百餘坪の庭園は玄關前噴水を中心として全館が圍繞す

(イ)施設 本館は廣く朝鮮産物を網羅して朝鮮の産業狀況を明にし以て朝鮮産物利用の途を圖るに共に一面多額の輸移入ある内地及外國商品を蒐集陳列し當業者をして産業の改善、商品の選擇及販路の擴張に資せしめつつあり又大正九年十月より大阪市立市民博物館の一部を借受け朝鮮生産品を系統的に陳列し且統計圖表及説明等を掲げ一般の觀覽に供しつつあり

(ロ)陳列品 陳列品は當業者より陳列並販賣の希望を以て委託せられたる物、同じく陳列の希望を以て寄贈せられたる物及本府に於て參考上必要と認め購入又は製作加工したる物の三種とす最近の調査に依る陳列品の類別及點數は左の如し

陳列品點數

大正十年十月末日

種別	朝鮮産		内地産		外國産		合計	
	品	點	品	點	品	點	品	點
農産品	九五七	一一八	一〇	一、〇九七	二二五	二八	二二	五〇
林産品	一七一	三〇	二〇	二二五	三二六	九五	三	四二四
水産品	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—	—	—

種 別	朝鮮産			内地産			外國産			合 計	種 別	朝鮮産			内地産			外國産			合 計
	朝鮮産	内地産	外國産	朝鮮産	内地産	外國産	朝鮮産	内地産	外國産			朝鮮産	内地産	外國産	朝鮮産	内地産	外國産	朝鮮産	内地産	外國産	
織物及其の製品	八一〇	六八九	一三九	一、六三八	文房具及玩具	一四三	一九二	—	三三五												
窯業製品	三三六	四三三	二四	七九三	醸造品其の	一九二	二〇六	一六	四一四												
金屬及玉石製品	一六五	四〇四	二一	五九〇	他飲食品	一五	一〇一	二	一一八												
漆器及木竹製品	一九九	三一八	一八	五三五	雜機械器具	一七一	一〇二	—	二七三												
紙及其の製品	一三九	三五三	一四	五〇六	雜工品	一二〇	二九八	—	四三五												
化學製品及藥劑	六八	二八七	三四	三八九	參考資料	—	—	一七	—												
携帶品及裝身具	二五九	三五〇	三	六一二	總計	四、〇九九	四、〇一二	三三三	八、四三四												

(ハ) 出品及寄贈 本館に出品又は寄贈を爲さむとする者は所定の申込書用紙(申出に依り本府より交付す)に其の品名、數量、賣價其の他參考となるべき事項を記載し口頭又は書面を以て申込むものとす本府は之に對し即時其の諾否を通知す

出品物の荷造及運搬費は出品人の負擔とし返送に要するものは本府に於て支辨し寄贈品の荷造及運搬費は本府に於て支辨す

(ニ) 委託販賣 販賣を委託せられたる出品物は出品人の希望に依り廣く之を紹介する爲附屬賣店を

設け本府指定の確實なる商人をして販賣せしむ但し販賣手数料は販賣價格の一割にして賣上代金は當分(五圓未満は五圓に達したるとき)を翌月七日迄に送付せしむ又關稅は便宜賣上金の内より納付の手續を爲すものとす

第七節 度量衡

鮮在來の度量衡は一定の標準なく非常に亂雜を極め取引上の弊害不便尠からざりしか明治四十二年(隆熙三年)九月現行度量衡法を制定し

- (イ)度量衡の名稱、命位は内地度量衡法と同一とし
- (ロ)度量衡器の製作、販賣及修理は之を政府の專業とし
- (ハ)樞要の地方に於て相當の資産を有し信用確實なる者を指定して委託販賣を爲さしめ
- (ニ)醫藥用、測量用及學術用等の特殊の用途に供するものは内地官廳の檢定を経たるものに限りに之を移入販賣を特許し
- (ホ)樞要の地方に於て相當の技術を有する者に度量衡器の修理を特許し
- (ヘ)各道及各府に檢定官吏を置きて度量衡の事務に従事せしめ

(ト)時時度量衡器の檢定及計量上の取締を行ふ

の制を採り爾來地域を定めて順次に之を施行し明治四十五年六月を以て全土に之を施行を完了せり
實施以來年多數の度量衡器が普及し民間に於ても正確なる器物を使用するの便利を認め商工業者
は勿論一般農民に於ても亦之を使用に習熟し檢定及取締を相待て從來亂雜なりし計量上の弊習も漸
次改善せらるるに至れり

第十三章 工業

第一節 朝鮮人の工業

朝鮮の工業は高麗時代に在りて一時高度の發達を遂げたることは之を當時の建築に見高麗燒に徴するも其の一斑を窺ふに足るへし然れども爾來國力と共に次第に衰微し織に機業、窯業、製紙、醸造、金屬品業等小規模の工業として僅に其の片影を留むるのみ而も技術幼稚器具亦不完全にして其の製品見るに足るものなく日常生活の必需品も大部分は之を輸入に俟つの状態なりしを以て本府に於ても夙に之が獎勵に努めたる結果機械器具の改善技術の進歩産額の増加等漸く復活の機運に向ふに至り就中近時織物を始め鑄物、指物類は著しく其の面目を改め其の他新工業品の製造に向いて指を染めむとする者漸次多きを加ふるに至れり

(イ)機業 機業は朝鮮に於ける最重要なる工業なるを以て其の改良發達を圖る爲主要産地の道に於ては機業教師を置き實地指導の任に當らしめつつあり

一 木綿織物 綿布は各地到る所産出せざるなく就中慶尙南北道、平安南北道、黃海道及京畿道産出最も多く朝鮮全土の大正九年に於ける産額は四百十萬反に達す多くは農家婦女子の副業的

産物にして棉花を手紡し居織機にて製織する平織白木綿の粗なるものなり近來紡績綿絲を用ひバツタン織機又は足踏織機を以て製織するもの漸次増加し尙小規模の工場を經營するもの各地に散見するに至れり

- 二 絹織物 江原、平安南北及慶尙北道に産出し多くは明紬と稱する平絹の類にして平安南道成川、徳川、平安北道泰川、寧邊、熙川の紬、江原道鐵原の紬、咸鏡南道水興の紬最も名あり皆織り上げの後灰汁を以て精練し且染色し男女の衣料に供す一箇年の産額約五十二萬反に及へり
- 三 麻織物 忠清南道、慶尙南北道、咸鏡南北道、江原道、全羅南道等最も産出多く重要な産物の一なり何れも白無地のものにして之を製織するには隙め麻を清水に浸し日光に晒して自然漂白をなし織維を割きて細絲として居織機に依りて製織し夏の衣料、喪服、帆、袋及雜用に用ふ全道産出額苧布、麻布を合せて約二百六十二萬反に達す

ロ 窯業 高麗時代に於て隆盛を極めし窯業も其の後時勢の變遷と共に衰微し殆んど見るべきものなく唯各地に於て極めて粗造なる日用品の製造を見るのみなりしか近時漸く窯業復興の曙光を見るに至れり

朝鮮には陶磁器の原料頗る豊富なり即ち慶南の河東、山淸、固城の各郡及黃海道海州郡に高嶺土

又平安南道の大同郡、黃海道の遂安郡、江原道の楊口郡、慶尙北道の青松、慶山二郡に磁石又咸鏡北道の會寧、鏡城、明川、城津の各郡に耐火粘土を産する。如きは斯業界の天與と爲す處なり。此の外長石、珪石の産地亦乏しからず。

(ハ)製紙業 製紙は朝鮮工業中有望なるもの一なり。慶尙北道慶州、慶尙南道三嘉、陝川、全羅北道全州には製紙業に従事する者多く産額亦多し各所に於ける製紙原料は總て楮を以てす。朝鮮人製紙の方法は頗る簡易にして張板を用ゐず晴天を選ひ河岸に於て漉洒抄製し河原又は温泉にて乾燥す一箇年の産出額約二百二十萬圓にして高麗紙と稱し其の大部分は朝鮮に於て消費せらるるも密紙用衣服中入用包装用其の他雨傘、團扇、合羽用として支那に輸出せらるるもの毎年二十萬圓内外あり尙近來朝鮮に於ける和紙洋紙の需要増加するに従ひ朝鮮人にして其の製造に従事する者漸次増加するに至れり。

(ニ)金屬品 朝鮮人は古來眞鍮製の器具を多く使用する習慣あり食器、金盃、火鉢、便器等の眞鍮製品各處に産出す鐵器類は鍋釜及農具を主要なるものとす。就中釜は堅牢を以て名あり其の他婦人の裝飾品たる指輪、笄、簪等の銀又は眞鍮製品各所に製作せらるるも加工彫刻の見るべきもの少し。

(ホ)雜工品

一 華筵 京畿道江華島、全羅南道靈城の特産物として知らる。又慶尙北道金泉は蔴を以て名あり。無地織なるものあり。雲鶴模様又は福、壽等の文字を織出せるものあり。近來内地人に於ても大邸に製筵合資會社を設立し朝鮮産莞草を用ひ高麗筵及疊表を製造し朝鮮産業貿易株式會社は京城に工場を建設し主として輸出向莞草織物編物の製造を爲しつつあり。

二 木竹細工 簾、扇子、煙管竹等の竹細工品は巧妙にして全羅南道潭陽の竹器及羅州の簾は其の名高し木工品は櫃、篋箱、漆器等僅に存すれども見るに足るものなし。唯漆器中慶尙南道統營地方に産する螺鈿細工は産出多からざるも雅致ある工藝品として推賞する價値あり。

(一) 醸造業 朝鮮人の飲用する酒類は藥酒、濁酒、白酒、燒酎、過夏酒、梨靈酒、甘紅露、松筍酒等種類多し。と雖藥酒、白酒、濁酒、燒酎及過夏酒は其の主要なるものにして需要者多く従て醸造高も各酒を通して百二十萬石に上るへし。

一 藥酒 小麥麴、糯米、粳米等を混合して醸造したるものにして他酒に比し品質良好なり。黃海道以南殊に京城附近に於て汎く飲用せられ酒中の珍として宴會祭日等に於て必須のものせらる。其の優良のものは果實酒に類する味を有し酒精分一〇乃至二〇%を有し帶黃赤色を呈す耐久。性なく貯藏し難きを以て多くは冬期用酒として醸造せらる。

二 濁酒 小麥粉及粗麴を蒸し又は煮たる糯米、粳米及水を加へて醸造したるものを揉潰して濾過せる白濁液にして一般下層社會の嗜好物たるが故に需要頗る多し腐敗し易きを以て四季を通じて醸造す

三 燒酎 小麥、粗麴、粳米、糯米及黍等を以て醸造したるものにして各地に於て飲用せらる酒精度比較的低く三十度内外を普通とし北方に到るに従ひ其の度を増し五十度に到るものあり京城以南に在りては夏季のみ之れを飲用するか故に製造高値少なれども北野地方に於ては四時常に飲用し醸造高從つて多く最近會社組織により本品の製造を爲すものあるに至れり

四 白酒 藥酒と濁酒の混成物にして水を以て稀薄となしたるものなり寧ろ濁酒に近し

五 過夏酒 小麥麴、麥芽、糯、燒酎を加味し醸造したるものにして恰も我か味淋に似たり其の酒精分は一〇乃至一八%にして他酒に比し飲用量多からず

六 其の他紅酒 甘紅露、梨薑酒等の諸酒は孰も燒酎を基とし之に糖蜜類を加味したる混成酒に過ぎず

第二節 内地人の工業

内地人經營の工業は未だ大成の域に達せざるも漸次堅實なる發達を遂げつつある狀況にして精米、鐵工、煉瓦、瓦製造、醸造、電氣、製材、製革業等其の主なるものにして近來内地人の投資を促進し製粉、製糖、パルプ製紙、紡績、セメント、陶磁器、燐寸、製鐵業等に付大規模の組織を以て經營する者あるに至れり

(イ)精米業 朝鮮人の收穫米は粃の儘にて賣買せらるるもの多く朝鮮人の食用として白米の賣買せらるるものなきに非ざるも粃より直に精白したる一種の中白米に過ぎず然るに粃は輸出に不便多く中白米は内地人の口に適せざるのみならず滿洲方面に對しては精米を以て輸出するを利益とするを以て京城、仁川、木浦、群山、釜山、平壤等の主要地に於ては内地人にして粃搗業或は同業を兼れたる精米業を營む者尠からず

(ロ)鐵工業 は從來鍛冶職の傍ら小道具の製造諸機械の修繕を營むに過ぎずして機械を應用し大規模の工場を經營せる者甚た少かりしか農業、鑛山業の勃興に伴ひ農具、鑛山用機械の需用を喚起し延いて斯業の發展を促し加ふるに朝鮮人の勞銀は低廉なるを以て鐵工業の前途極めて有望なり

(ハ)窯業 朝鮮人は食器及便器に金屬器を使用する慣習ありしか漸次之を陶磁器に代ふるの傾向を

生し且前述する如く朝鮮は優良なる陶土に富むを以て内地人茲に著目し各所に窯業の勃興を見るに至りたるが釜山牧の島に設置せられたる朝鮮硬質陶器株式會社は其の尤なるものにして海外輸出向品の製造を目的とせり右の外古雅なる高麗甌を復興して内地人の嗜好に充てむとするものあり鎮南浦の富田儀作京城海市商會の製出する擬高麗燒磁器の如き是なり又全羅南道、黃海道海岸並其の附近島嶼は珪砂の存在豊富なるが之等は内地に移出せられ硝子製造材料に供せらる

(ニ)煉瓦及瓦製造 全土到る處原料に富み麻浦、永登浦等に於ては監獄作業として煉瓦土管製造の經營せらるるものの外内地人及支那人の經營せるもの多し唯燃料に乏しき爲陶器業と同しく其の發展を阻害せらるる虞なき能はず雖建築業の進歩と共に有望なる一事業なり

(ホ)セメント業 朝鮮に於ける「セメント」の需用は逐年増加せるも之れが供給は内地及滿洲に仰きて未だ鮮内生産に著手するものなかりしと小野田セメント株式會社は平安南道江東郡勝湖里附近に石灰石の粘土を豊富に包藏するに着眼し工場設置の計畫を立て大正六年起工同八年竣工せり工場動力は蒸汽「タービン」千八百馬力にして一箇年生産「セメント」三十萬樽に達すへしと云ふ本工場は今や製品の試験時代を過ぎて營業時代に入り且下鮮内需要に應ずるの外支那方面に輸出するに至れり

(一)醸造業 内地人の移住と共に清酒の需要激増したるを以て近時内地人の各地に於て清酒醸造に従事する者頗る多く殊に京城、仁川、釜山、釜山、釜山等主なる醸造地に於ては大規模の設備によりて經營する者尠からず由來朝鮮は原料安價なるに加ふるに職工の勞銀低廉にして且腐敗の虞少なきを以て収益多く且つ販路廣汎賣捌容易なるを以て研究改良を加へなば酒造業の前途頗る有望なり

内地人酒類醸造高

年 度	製造場數						石 數
	清 酒	燒 酎	濁 酒	味 淋	混成酒	其他酒	
大 正 七 年 度	四三五	四六、五六九	二、五六一	一、〇九五	三八七	五六八	五九六
同 八 年 度	五〇二	五四、七一九	四、六〇八	一、七五〇	六八三	一、二三五	一〇三
同 九 年 度	四九一	五四、八五七	一七、〇四九	六、五〇二	一、〇五四	一、三一九	一、四二八
							合計
							五、七七六
							六二、九九七
							八二、二〇九

備考 二種以上の酒類を製造する者は一種毎に一箇所として製造場數を計算せり

(ト)醬油味噌製造業 近時漸く隆盛を致し漸次内地移入品を防遏するに至れり殊に味噌の醸造は曠る盛にして朝鮮内の供給に對しては最早移入を仰ぐの必要なく醬油も近來京城、仁川、釜山、平壤、大田等に於て内地品に劣らざる精良のもの醸造せらるるに至りしかば從來内地人の移入に係

りし醬油は痛撃を加へられたるの觀あり原料は豊富にして而も低廉なるを以て該業の前途は有望なり

(チ)製糖業 朝鮮には從來砂糖の生産なかりしも勸業獎勵場其の他に於て試験の結果平安南道、黄海道が甜菜栽培の適地なるを認めたるより製糖業の計畫せらるること久かりしか歐戰勃發により世界砂糖需給に一大變革を來たし糖價暴騰するや爰に朝鮮製糖株式會社の成立を見次て大日本製糖株式會社に合併して大正九年平壤に於て製糖工場の設立せらるるに至れり工場動力は蒸汽「タービン」六七〇馬力一日消化甜菜六百噸生産砂糖七十二噸なるが本製造は毎年十一月より二月の間に行はるるを以て其の他の時期に於ては臺灣、瓜哇より粗糖を輸入し精糖を製造すべく其の一日消化粗糖八十噸生産精糖七十六噸四分なれば兩者生産を合し年額約三萬一千噸に達すへしと云ふ

(リ)電氣事業 從來米國人「コイフルラン」の經營に屬せし韓美電氣會社は京龍間の電車、電燈事業を營みつつありしか龍山に日韓瓦斯會社(資本金七十萬圓)設立せられ京龍間の瓦斯事業を經營するに至り四十二年八月韓美電氣會社の電氣事業を買收し電氣及瓦斯事業は該會社獨占に移れり是れ現今の京城電氣株式會社とす近時主なる都市は概れ電燈の設備を有するに至り會社組織を以て

電氣事業を開始するもの漸く増加し既に當該官廳の許可を得たるもの營業用三十六（未開始十三を含む）自家用及官廳用五十二（未開始九〇を含む）合計八十八に及へり

(×)製材業 近時交通機關の整備に伴ひ各地著しく建築事業旺盛となり一面造船業の發達は益用材の需要を喚起し製材業の勃興を促せり

従來朝鮮に於ける需要の大半は内地材、北海道材の占むる所なりしか材質優良にして價格低廉なる鴨綠江材に壓倒せらるるに至りしより益斯業の隆盛を來し前途最も有望なり

(ル)パルプ業 朝鮮に於てパルプ製造業を經營するものは朝鮮製紙會社、朝鮮纖維工業所の二者なりとす

朝鮮製紙會社は平安北道新義州にあり鴨綠江上流の木材を原料として「サルファイドパルプ」を製造し工場動力一、三〇〇馬力年産パルプ一萬五千噸なり

朝鮮纖維工業所は慶尙南道龜浦にあり洛東江沿岸及黃海道方面の芦草を原料として製造す工場動力二百五十馬力年産パルプ三千五百噸なり

朝鮮生産パルプは總て内地に移入せられ製紙原料に用ひらるるものなり

(チ)製革業 従來朝鮮に於ては大規模の製革業を營む者なかりしか内地に於て皮革の需要増加せる

と朝鮮に於て原料牛皮の豊富なることは斯業の興起を促かし明治四十四年九月永登浦に於て朝鮮皮革株式會社設立せられ百萬圓の資本を以て百五十馬力の機關を具へ一箇年に數萬枚の牛皮を使用し軍需皮革、クローム革靴底革の製造販賣を主とし尙靴及諸革具、調帶類の製造販賣を營みつつあり又忠清南道大田に大田皮革株式會社あり設備未だ大規模ならざるも年年健實なる發展を遂げ前途頗る有望なり

(ウ)石鹼製造業 從來石鹼の多くは殆ど輸入品にして其の使用亦内地人を始め一部朝鮮人に限られたるが如きも爾來漸次需要を増加し其の範圍を擴大せむとし加ふるに朝鮮は一面豊富なる原料を抱擁するを以て茲に斯業の勃興を促し既に京城、釜山、平壤等に於ては工場を設け事業に従事する者あるに至れり

(カ)纒綿業 全羅南道を主とし南鮮五道に於て陸地棉の栽培獎勵せらるるを共に原棉の産出額増加したる爲規模大なる纒綿工場の各地に於て企畫せらるるもの頗る多く特に木浦府は斯業の中心地として殷盛を極め米の群山に對し棉に木浦の名あり今内地人の經營に係る各種工場統計を表示すれば左の如し

內地人經營工場

大正九年十二月末日

種別	工場數	資本金	職			計	生産品價格
			內地人	朝鮮人	外國人		
染織業	五	三二,〇八八	二一	一六七	—	八〇,二一六	
製絲業	三	二,六〇〇,〇〇〇	一八三	一,五一三	—	二,〇三〇,七六〇	
製綿業	一四	六,一〇六,〇〇〇	四三	九四九	八	五,二八五,三八九	
パルプ製造業	二	六,一〇〇,〇〇〇	一四七	二三五	三五	二,九七六,九三三	
製紙業	三	六,五〇〇	六	二八	—	一四,五〇〇	
皮革及皮革製品業	二一	一,三一四,八〇〇	八一	六七八	—	一,〇六九,二三一	
窯業	一〇七	一〇,〇四一,六〇〇	五〇二	三,三八七	三七九	四,八五〇,五〇八	
蠟燭製造業	四	四九,〇〇〇	一一	三〇	—	六二五,〇〇〇	
石鹼製造業	八	四八四,〇〇〇	一四	七七	—	三七〇,三五七	
燐寸製造業	四	一,一一二,〇〇〇	四九	六一〇	二〇	五〇四,〇八七	
染料製造業	四	一,一四〇,〇〇〇	五	一〇二	二	六七三,〇〇〇	
製油業	四	五六九,〇〇〇	一二	五五	—	二一六,九六五	
金工業業	一〇五	三,一九七九,九一〇	一九〇五	三,三二一	二四三	三三,四一四,〇三	

第十三章

工業

木 工 業	製 材 業	肥 料 製 造 業	車 輛 製 造 業	船 舶 製 造 業	貝 細 工 業	精 穀 業	製 粉 業	菓 子 製 造 業	寒 天 製 造 業	製 麵 業	煙 草 製 造 業	釀 造 業	清 涼 飲 料 製 造 業	製 冰 業	製 鹽 業	罐 詰 製 造 業
二六	三二	七	九	一三	六	二〇八	七	四四	三	一〇	一六	一七二	六	二	二一	一九
一九六、三〇〇	五、二九六、〇〇〇	三一七、〇〇〇	二、六七六、九二一	六〇一、五〇〇	二九、二二六	一三、七六〇、八九一	一、〇四四、五〇〇	三、四二、三〇〇	五三、〇〇〇	三四、一〇〇	一一、四九五、〇〇〇	八、四七〇、〇七〇	六二、五〇〇	三五〇、〇〇〇	一、〇五四、〇〇〇	三九九、〇〇〇
一〇九	一〇五	一一	四九四	一二一	九	五六一	一五	一三〇	四	一九	一五〇	五八四	一八	四	一七	二三五
八〇	二九〇	六九	一、六二六	四〇	一〇七	七、五二五	七三	二二五	二八	四二	四、三六〇	六九九	六三	一八	二五七	七〇四
九	五四三					二四	七				四三					
一九八	九三八	八〇	三、二二〇	一六一	一六	八、一一〇	八八	三六二	三三	六一	四、五一〇	一三二六	八一	二二	二七四	九三九
五一〇、二五七	三、六八一、五四二	九八〇、一二〇	四、七九一、九五七	二八七、七三一	六五、二〇三	五三、九一一、七七七	九〇八、四二八	九六一、四八〇	三九、五〇〇	一四〇、六二七	二一、四九九、九〇四	六、一七〇、八五八	一八三、三一一	一一一、一〇〇	八〇三、二八一	四七六、九八八

種別	工場數	資本金	職			計	生産品價格
			内地人	朝鮮人	外國人		
裁縫業	一三	七五一、二〇〇	二一四	一、二六〇	二	一、四七六	
精鍊業	一二	二五二七、二二一	三四八	一、三六四	八	一、七二〇	
印刷業	六八	一、八三八、一〇〇	二八八	一、五五一	一	一、八三九	
編組物業	亦	二七、七六七	三七	三四〇	一	三七七	
瓦斯及電氣業	一九	一八、七二五、六五六	一七八	二九九	三	四八〇	
製糖業	一	二、〇五〇、〇〇〇	八一	二八三	一	三六四	
其他	一二三	六、六九二、六九〇	二五一	二、二二五	一八	二、三九四	
合計	一、二五二	一四〇、二二九、八四〇	六、九六二	三三、四六六	一、三四四	四一、七七二	
						一五四、一〇〇、六六八	

本表は内地人經營に係る工場中職工五人以上を使用するもの又は職工五人以下なるも原動力を使用するもの若は一箇年の生産價額五千圓以上のもののみを掲上せり

第三節 官營工業

官營工業としては龍山印刷所に於ける印刷業、平壤鑛業所に於ける煉炭製造業、新義州營林廠に於

ける製材業及專賣局に於ける煙草製造業等なり左に其の梗概を記す（し）

(イ)印刷 總督府印刷所は明治四十年(隆熙元年)以來事業の擴張を計り工場の新築機械の増置技術者の僱聘等に努め銀行券其の他精巧なる印刷物を出版せり今最近三箇年間に於ける事業の概況を
表示すれば左の如し

印刷所事業概況

年 度	石炭消費高		職工及雜役人員		給料總額		職工及雜役一日平均一人の給料		生産品價格
	噸	人	延人員	人	円	円	円	時分	
大正八年度	一、九三三	九二六三四	二三一、四一〇	五九、〇六〇	一一、五八八	〇・四八二	九、三〇	八五八、六四五	
大正九年度	一、五二七	二二五、五九一	二二五、七二五	一〇四、八九八	一八四、六〇一	〇・八五六	九、〇〇	一、〇六四、七三八	
大正十年度 <small>自四月至九月</small>	五三四	一一三、五五二	一〇一、〇一六	五九、六九四	一〇四、三〇七	一・〇三三	九、〇〇	四九九、八一九	

(ロ)煉炭 平壤鐵業所に於て製造せる煉炭は逐年需要増加の傾向ありて其の種類(第一種煉炭ピツチ入小型、第二種煉炭粘土入小型)に關せず賣行頗る良好なり大正五年度に於て第一種煉炭五千噸、第二種煉炭六千噸を製造し大正七年度に於て兩者合せて二萬四十四噸を製造し大正九年度に

於て二萬五千五百四十噸を製造せり

(一) 製材 營林廠に於ては鴨綠江及豆滿江流域に於ける林業を經營する一而製材業を行ひつつあり別項林業の項に於て詳述せり

(二) 煙草製造 朝鮮内に於て消費せらるる煙草は年々多額に上り從來京城、釜山、大邱、平壤等に於ては内鮮人の斯事に従事する者尠からざりしか大正十年七月より煙草專賣制度實施せられたり別項財務の項に於て詳述せり

第四節 中央試験所

中央試験所は明治四十五年の創設に係り其の業務を分析、應用化學、染織、蠶業、醸造及衛生の六部に分ち朝鮮の工業及衛生の進歩發達に必要な諸般の調査、試験に従事し併て一般の依頼に係る此等事項の試験、分析、鑑定を施行しつつあり此の外地方廳又は富業者の請求に應じ各地に職員を派遣し以て産業の指導啓發に努む從來公にしたる試験及調査成績の主なるものは朝鮮油脂試験、油脂乾燥劑試験、製紙試験、漆汁採取試験、朝鮮産石炭試験、榲殼よりする醋酸製造法、新羅織、柞蠶織及柞蠶交織、朝鮮絹糸よりする三八紬製造、染料として「シンナム」楓葉の利用、朝鮮産棉花の

色素、朝鮮に於ける陶磁器原料調査、咸北道粘土調査、硝子原料調査、清酒醸造、山葡萄及唇葡萄
 火酒製造、杏實酒及山櫻酒製造、葡萄酒製造、各種罐詰類製造、岩泉ラジウムエマナチオン測定、
 朝鮮金剛山中の薬用植物調査、「チモール」製造、長白山附近の薬用植物調査等なり

第五節 地方工業傳習所

機業、製紙、繩叭製造其の他副業として最も適當なる簡易工業を朝鮮人に普及する爲恩賜授産事業
 又は地方費事業として或は個人又は組合か政府の補助を得此の種工業の簡易なる傳習事業を經營す
 る者尠からす今各道に於ける傳習所數を種類別に掲ぐれば左の如し

地方工業傳習所數

大正九年十二月

種別	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尙北道	慶尙南道	平安南道	江原道	咸鏡南道	合計
機業及染色製糸業										七
製紙業		一								一
竹工、布帛加工業	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
總計	一	二	一	一	一	一	一	一	一	二

第六節 工業所有權の保護

從來朝鮮には工業所有權保護の制度存せざりしを以て帝國政府は明治四十一年八月米國と條約を締結し米國は其の本國に於て朝鮮人に對しても工業所有權の保護を與ふると同時に發明、意匠、商標の保護に關しては朝鮮に於ける治外法權を撤退し日本國は内地に行はると同様の法令を朝鮮に施行し以て米國人の發明、意匠、商標を朝鮮内に於て保護すへきことを約せり仍て帝國政府は同年八月十六日を以て韓國特許令、同意匠令、同商標令を施行し四十二年十一月一日より韓國實用新案を施行し統監府特許局に於て之を管理し此等に關する一切の事務を處理せしめたりしか併合と同時に韓國特許令外三令並統監府特許局を廢止し新に特許法、意匠法、商標法、實用新案法を朝鮮に施行し工業所有權保護に關する事務一切は特許局に屬することと爲れり而して従前の四令に依りて既得せられたる權利は特許法外三法に依りて設定せられたるものと同一に看做され其の權利の効力は我領土全部に及ぶと共に本國に於て既得せられたる權利は當然に朝鮮に於ても其の効力を保有するものと爲せり統監府特許局設置以來其の廢止に至るまで(自明治四十一年八月至同四十三年八月)に取扱ひたる事件數は特許四百六十八、意匠百二十三、商標千百十四、實用新案五十九合計一千七百

六十四件なり

第七節 工業獎勵

篤志者にして工業傳習事業を企畫する者又は有益なる工業を經營するも事業創始の際收支償ふ能はざる者に對しては總督府又は地方廳は金品を補助し以て工業の發達に努めつつあり又曩に併合の際朝鮮人授産の爲下賜せられたる恩賜金の利子の一部を以て從來一般に副業として行はるる機業、製紙業等の改良を計り或は從來全く存せざるも將來有望なる副業たるへき繩臥製造等の技術を傳習せしむる爲三箇月乃至六箇月の短期を以て習業し得へき工業の傳習所を各地に起し或は實地指導を爲す爲巡回教師を置く等各種の方法を講じて手工業の改良發達を圖りつつあり

第八節 勞 銀

頃者内鮮人共其の勞銀著しく昂騰し殊に朝鮮人に於て其の顯著なるを見るに至れり蓋し朝鮮人は從來生活程度の低きと能力の貧弱なりし爲其の勞銀低廉なりしが近來諸工業の勃興に伴ひ内鮮兩地を通し鮮人勞働者の需要劇増するも同時に時勢の刺激に因り勞働を卓むの謬想を打破するの趨勢を示

すに至れり今左に朝鮮主要地に於ける勞銀を揭示すべし本表は大正八年同九年及同十年六月に於ける平均額と太正九年を一〇〇と假定したる大正八年及同十年六月の指數にして大正九年の總平均指數一〇〇に對し大正十年は八六即ち一割四分の低落を示せり更に之を内地人別にすれば内地人八五朝鮮人九〇にして前者は一割五分後者は一割の低落を示せり

職業名		種別	勞銀		
			*左傍は指數 *印は賄付賃限を示す		
大	工(家作)	内地人	大正八年平均	大正九年平均	大正十年平均
			一・二・六・六 六・四・五・八・七	一・二・一・三 〇・五・〇・九・三	二・三・八・五 八・七・六・九・二
左	官	内地人	一・二・六・六 六・一・四・八・七	一・二・一・四 〇・六・〇・〇・八	二・三・八 九・四・九・八・三
石	工	内地人	一・三・六・〇 五・六・六・九・五	一・二・一・四 〇・九・〇・四・三	二・四・八 八・五・九・〇・一
		朝鮮人			

靴	朝鮮服裁縫	洋服裁縫	和服裁縫	洗濯職	鍛冶職	表具師	壘刺	家根葺
朝鮮地人	朝鮮地人	朝鮮地人	朝鮮地人	朝鮮地人	朝鮮地人	內地人	內地人	朝鮮地人

六三六九 一〇三七	五九五 六四二	二二二 六四二	七四二 六九七	七七一 四九一〇	六五五 六六八五	二二二 七三一	二二二 六四五〇	一〇六 七四六六 〇七八三
--------------	------------	------------	------------	-------------	-------------	------------	-------------	---------------------

一二一三 〇一〇一 〇三〇二	一一一三 〇六〇 〇〇七	一一一三 〇四〇 〇〇七	〇九 〇七	一一一三 〇五〇四 〇五〇〇	一二一三 〇三〇七 〇五〇六	一一一三 〇二〇四	一一一三 〇六〇八	一一一三 〇〇〇八 〇九〇八
----------------------	--------------------	--------------------	----------	----------------------	----------------------	--------------	--------------	----------------------

一八九八 九〇八五	二二二 六一九〇	二二二 八九四一	一七五 九六	一一一三 二八八一 一八八一	二二二 八〇八三 七五八二	二二二 九九二七	二二二 八一六六	一一一三 七九九六 六五四三
--------------	-------------	-------------	-----------	----------------------	---------------------	-------------	-------------	----------------------

職業名		種別	六 大 月 正 平 八 均 年	六 大 月 正 平 九 均 年	六 大 月 正 平 十 均 年
活版植字	朝鮮人	朝鮮人	一〇六六 六八四七三	〇五〇四 〇二〇四	一〇九二 九四二五
理髮職	朝鮮人	朝鮮人	一六六 六三九三	〇五〇三 〇〇〇六	一〇三七 〇三〇七
杜師(月給)	內地人	內地人	四一 七九〇	五九 〇二〇〇	五〇 八四〇
醬油製造職(月給)	內地人	內地人	二九 六五二	四四 〇六七	三五 七八〇
平人足	朝鮮人	朝鮮人	一〇八七 一一九四	〇三〇九 〇五〇五	一〇九八 六五三二
土方	朝鮮人	朝鮮人	一七九 六三二〇	〇六〇六 〇四〇三	一〇八三 〇二八一
人力車夫	朝鮮人	朝鮮人	一七二 七六一七	〇一〇一 〇三〇六	二〇八七 九八一七

下 女(月給)	下 男(月給)	仲 仕	農 作 人		擔 軍(背負人夫)
			女	男	
朝鮮人	內地人	朝鮮人	朝鮮人	內地人	朝鮮人
* * * *					
四 六三	八 七六	六 六八	三 七三	一 六二	二 六一
一 八六	八 六八	一 三〇	三 〇三	〇 八九	一 〇八
* * * *					
一 〇一	一 〇三	一 〇九	一 〇〇	一 〇九	一 〇七
〇 八〇	〇 八二	〇 七〇	〇 七三	〇 六〇	〇 八〇
* * * *					
六 八〇	〇 九七	一 〇三	一 〇八	一 〇九	一 〇七
四 五五	九 五九	一 三六	二 三六	二 三三	二 三〇
* * * *					
六 八〇	〇 九七	一 〇三	一 〇八	一 〇九	一 〇七
四 五五	九 五九	一 三六	二 三六	二 三三	二 三〇

여백

第十四章 貿易

第一節 總說

朝鮮の貿易は併合後政府の産業上に於ける諸般の施設と民間企業の隆興とに因り漸次増進の趨勢を示し殊に歐洲戰亂以來一般財界の活躍に伴ひ著しき發展を告ぐるに至れり最近の貿易額左の如し

輸移出入品價額

	貨物		金銀地金		合計		輸移出入超過
	輸移出	輸移入	輸移出	輸移入	輸移出	輸移入	
大正八年	千円 三二、九四七	千円 二八三、七五五	千円 四、四一五	千円 一、六五五	千円 六、〇五一	千円 二二六、三六三	千円 二八四、七一五
同 九年	千円 一九七、〇二〇	千円 二四九、二八六	千円 三三、八四三	千円 一九、二六八	千円 四六、一三一	千円 二三〇、八六二	千円 二六八、五七五
同 十年九月迄	千円 一三八、六六五	千円 一六〇、七三七	千円 五、五四一	千円 三、四一〇	千円 七、九五三	千円 一四四、二〇七	千円 一六三、一四八
						千円 三〇七、三五六	千円 一八、九四一

然るに大正九年に於ては戰後財界の動搖に因り一頓挫を來したるのみならず前年に於ける早魃の影響を蒙り出入甚著しく不況に陥りたり而して本年に入つては容秋の豊穰に依り穀類の出荷盛況を呈

し一面財界の小康を持續するに連れ綿絲布類並建築材料品の入荷増進を告げしを以て下半期以來各月増進の趨勢を現すに至れり、次に近年鮮内鑛業界の不振なるに拘らず大正九年に於て金銀地金の出入特に多額を算せるは北滿洲地方より金地金の一旦鮮内に輸入せられ更に内地へ移出せらるるも増加せしに因る

第二節 國別貿易

朝鮮貿易の對手國は廣く世界の各方面に涉り其の數少からざるも就中内地との關係最密接にして之を大正九年の貨物貿易額に就て觀察するに輸移出貿易の八割五分及輸移入貿易の五割八分は内地朝鮮間の貿易に屬し外國貿易は輸出一割五分、輸入四割二分に過ぎず而して諸外國中主要なるものは輸出に在りては支那及露領亞細亞にして輸入に在りては、支那、北米合衆國、英吉利、英領印度、蘭領印度、露領亞細亞、暹羅、佛領印度等とす主要通商國に對する最近の貨物貿易額は左の如し

貿易價額國別

(一) 輸移出

年	内地	支那	露亞細亞	其の他	通計
大正八年	千円 一九九、八四八	千円 一九、〇〇一	千円 二、六二一	千円 四七五	千円 二二一、九四七
同 九年	千円 一六九、三八〇	千円 二四、二三七	千円 二、三二六	千円 一、〇七五	千円 一九七、〇二〇
同 十年九月迄	千円 一二四、〇四六	千円 一三、三五三	千円 八一七	千円 四五〇	千円 一三八、六六五

(二) 輸 移 入

年	内地	支那	英領印度	蘭領印度	佛領印度	露亞細亞	暹羅	英吉利	獨逸	北米其の他	通計
大正八年	千円 一八四、九五九	千円 六三、七三七	千円 二八一	千円 二、三〇三	千円 三三八	千円 七九一	千円 四〇六	千円 五、五七七	千円 七	千円 二四、二〇二	千円 一、四七四
同 九年	千円 一四三、一一七	千円 七、六六六	千円 三二〇	千円 一、五二五	千円 一六	千円 四四二	千円 一四四	千円 四、九四〇	千円 一七四	千円 一九、七二三	千円 一、四〇三
同 十年九月迄	千円 一〇四、三三二	千円 七、九五五	千円 二二八	千円 一、一四九	千円 四	千円 三二九	千円 二二	千円 五、七一一	千円 一三七	千円 一〇、〇七三	千円 八二〇

大正九十對支那輸出の増進せるは輸出制限の緩和と北支那方面大饑饉との爲米及雜穀の出荷盛なりしに因り、近年露領亞細亞に對する輸出の減退せるは皮革製品、食鹽等の不況なるに基き大正八、

九兩年支那より輸入多額に上りたるは粟、黍、麻布、石炭等の活況を告ぐたるに因り又大正九年關領印度及米國より輸入減少せるは前者に在ては砂糖石油、後者に於ては鐵類及諸器械等の入荷不減なりし結果なり

第三節 港別貿易

朝鮮に於ける開港は仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、木浦、清津、雄基、城津、新義州、龜巖浦の十一港なるも馬山及鎮海は内地朝鮮間貿易船の出入を許し又京城、大邱、平壤には税關出張所を置き開港より保税運送に依る貨物の輸移出入を取扱ひ其の他陸接國境地方に於て指定せる四十六箇所の交通地點に税關出張所を設置せり(後節税關の項參照)而して以上の中釜山港は貿易額第一位を占め仁川港之に亞く此の兩港は實に朝鮮の二大關門にして釜山港は内地朝鮮間貿易を以て顯はれ仁川港は支那其の他歐米諸外國に對する外國貿易を以て聞ゆ其の他貿易額の大なるものは輸移出に在りては鎮南浦、群山、元山、木浦、新義州等にして輸移入に在りては京城、新義州、元山、鎮南浦、平壤等なりとす各地に於ける最近の貨物貿易額左の如し



仁川築港

港	輸移			輸移		
	出	入	入			
新義州及鎮南浦	大正八年	同九年	同十年	大正八年	同九年	同十年
	千円 八、七五二	千円 一三、七四五	千円 一四、五六五	千円 一六、八一四	千円 一七、六七〇	千円 六、七三三
平壤	六、八〇〇	二、〇三九	五七四	一、五三三	一、三三九	六、〇七二
陸接國境	二、三八一	一、九七一	六、四七八	二、三九〇	二、五四三	一九、七四三
總計	三三、九四七	一九七、〇一〇	二三八、六六三	三八三、〇七六	三四九、二八六	一六〇、七三七

備考

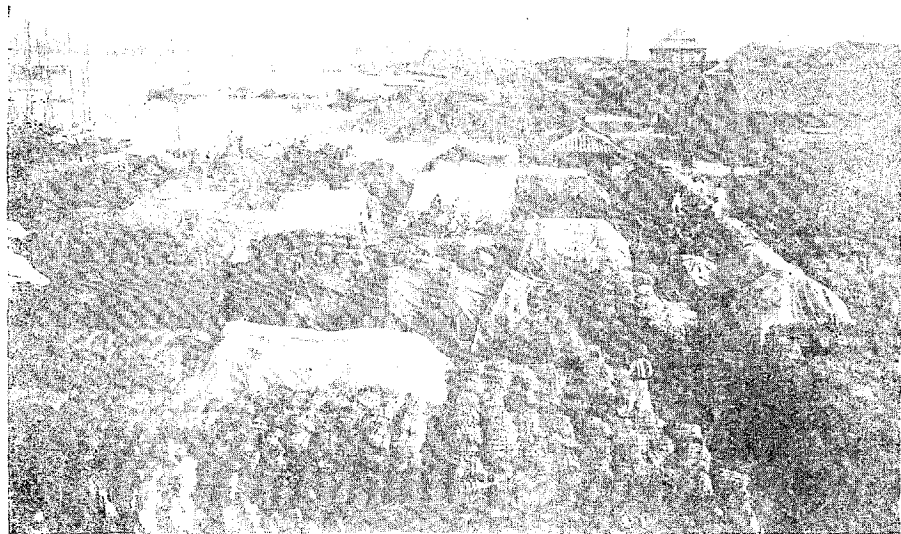
本表大正十年分に於て滿洲へ出入の陸路貿易に屬する貨物(其の大部分は新義州貿易に屬す)は制度改正の結果總て陸接國境の部に計上せり

最近に於て釜山、鎮南浦及群山三港の輸移出不振を示せるは大正八年凶作の爲米穀の出荷不況なりしと九年下半年期以降米價の低落せしこと主因にして尙鎮南浦に於ては一時盛況を極めし合金銀粗銅の戦後不況に陥りたること亦一因をなせり又新義州の輸移出激增せるはバルブ及木材の輸移出旺盛なりしに因り輸移入に於て各港共概して不振の状態にあるは客春財界の變動以來一般貨物の入荷減退せるに基き而して大正九年新義州の著増を示せるは石炭及内地に仕向らるべき豆糟、柞蠶絲等の

品名	大正八年			同九年			同十年迄		
	千円	百円	十円	千円	百円	十円	千円	百円	十円
重石	三八三			三					
石炭	六四〇			一、三三二			八五三		
黒鉛	五五〇			九七一			二九五		
合金銀粗銅	三、二七五			二、三三七			一五九		
銅(塊及錠)	一、八七〇			一、三三九			一四八		
鐵及軟銅	一、一五			一、五〇三			四、九九九		
備考	大正九年前の各品目中には陸接國境出張所扱に係る輸出貨物の計數を包含せず								
品名	大正八年			同九年			同十年迄		
牛皮革製品	千円	百円	十円	千円	百円	十円	千円	百円	十円
皮革製品	五、二五四			三、三〇七			一、九五九		
煙草	二九三			八九			一四九		
生牛類	三、八九九			三、六三〇			九〇八		
海藻類	二、四七九			四、九五九			二、六五九		
肥料	一、八五九			七五七			一、四五三		
	三、一二五			三、一七九			五、九〇七		

第五節 輸移入重要品

朝鮮の産業は農業を主とし工業は古來極めて幼稚なるを以て輸移入品は多く工業製造品に屬し就中綿織物は實に輸移入貿易品の大宗たり其の他小麦粉、砂糖、酒、石油、藥材、綿絲布、麻織物、絹織物、紙、鐵、鐵道材料、機械、石炭、木材及板等は何れも重要なるものにして晩近企業の發達に



群山港に於ける米移出の實況

伴ひ各種原料品の輸移入漸次増進の趨勢あり今最近に於ける主要品の輸移入額を示せば左の如し

輸移入重要品價額

品名	大正八年			同 九年			同 十年		
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	
米	一、三三三	二、一八三	三、一六	一、三三三	二、一八三	三、一六	一、三三三	二、一八三	
粟	一五、四四〇	一八、二九三	五、一七	一五、四四〇	一八、二九三	五、一七	一五、四四〇	一八、二九三	
小麦粉	三、五八九	四、一三七	一、四四三	三、五八九	四、一三七	一、四四三	三、五八九	四、一三七	
食盐	三、二六八	一、三六三	九六三	三、二六八	一、三六三	九六三	三、二六八	一、三六三	
砂糖	四、〇八三	四、三六七	五、五四四	四、〇八三	四、三六七	五、五四四	四、〇八三	四、三六七	
酒精類	三、四九一	四、三三四	三、一一一	三、四九一	四、三三四	三、一一一	三、四九一	四、三三四	
藥材化學類	三、一一一	五、四七一	二、二〇五	三、一一一	五、四七一	二、二〇五	三、一一一	五、四七一	
石油	八、一五〇	七、九五七	三、二五五	八、一五〇	七、九五七	三、二五五	八、一五〇	七、九五七	
纜綿及打綿	三、九〇六	一、三四三	一、六一	三、九〇六	一、三四三	一、六一	三、九〇六	一、三四三	
綿織物	五、一五一	三、三四七	三、五七二	五、一五一	三、三四七	三、五七二	五、一五一	三、三四七	
綿織物	六九、四三六	五〇、七五一	二七、二七五	六九、四三六	五〇、七五一	二七、二七五	六九、四三六	五〇、七五一	
麻織物	七、〇七九	八、一二六	五、四三三	七、〇七九	八、一二六	五、四三三	七、〇七九	八、一二六	
毛織物	一、二四八	一、九一〇	一、一七三	一、二四八	一、九一〇	一、一七三	一、二四八	一、九一〇	
絹織物	一、〇一七	九〇六	九〇六	一、〇一七	九〇六	九〇六	一、〇一七	九〇六	
紙類	四、四五一	四、五八八	四、五八八	四、四五一	四、五八八	四、五八八	四、四五一	四、五八八	
鐵及鋼	八〇六九	四、五三八	四、五三八	八〇六九	四、五三八	四、五三八	八〇六九	四、五三八	
軌條	三六三一	二、〇九七	二、〇九七	三六三一	二、〇九七	二、〇九七	三六三一	二、〇九七	
橋梁材料	一	三、一〇三	三、一〇三	一	三、一〇三	三、一〇三	一	三、一〇三	
車輛及船舶	九、四〇七	六、九九七	六、九九七	九、四〇七	六、九九七	六、九九七	九、四〇七	六、九九七	
諸機械類	一、一八三	七、一〇〇	七、一〇〇	一、一八三	七、一〇〇	七、一〇〇	一、一八三	七、一〇〇	
石炭	一四、三九四	一、九四六	一、九四六	一四、三九四	一、九四六	一、九四六	一四、三九四	一、九四六	
木材及板	五、二七六	三、九五五	三、九五五	五、二七六	三、九五五	三、九五五	五、二七六	三、九五五	
セメント	一、六〇六	一、六九九	一、六九九	一、六〇六	一、六九九	一、六九九	一、六〇六	一、六九九	
吹繩及筵	一、九一一	一、五三二	五、五八	一、九一一	一、五三二	五、五八	一、九一一	一、五三二	

備考 大正九年前の各品目中には陸接國境出張所扱に係る輸入貨物の計數を包含せず

第六節 通過貿易

現今朝鮮に於ける通過貿易は内地、滿洲間に入出する貨物にして釜山、新義州間朝鮮鐵道を經由するもの、内地と間島輝春間出入貨物にして清津港を經由するもの二者を主なるものとす而して大正九年に於ける通過貿易額は總計八千五百十九萬一千圓にして之を前記經路別に掲記せば前者に在りては滿洲向六千二百三十七萬六千圓、内地向一千七百四十五萬七千圓後者に在りては間島及輝春向三百四十五萬一千圓、内地向百八十二萬五千圓なり右の外、日本海横斷航路を利用し滿洲産貨物の京義、京元の二線を經て内地に仕向けたるもの二萬圓を算し其の他芝罘方面より京仁、京元線を利用し浦鹽へ仕向けたるもの六萬圓を計上せり

第七節 貿易船舶

朝鮮開港に於ける貿易船舶の出入港は歐洲戰亂中船腹不足の爲幾分減退を示せしか、休戰後漸次恢復し來れり而して此等貿易船舶は大部分日本船にして且内地朝鮮間の貿易船に屬し外國船は極めて僅少なるのみならず其の大部分は支那戎克さす今最近に於ける入港船舶を示せば左の如し

年	貿易船舶入港		噸數		噸數	
	汽船	帆船	汽船	帆船	汽船	帆船
大正八年	四、一三一	一四、五四四	二、六六九	二六一	二、九三〇	三、一〇二
同 九年	四、一三四	一三、四三七	二、九二一	一八一	三、一〇二	三、一〇二
同 十年九月迄	三、四九八	九、二八四	二、五五八	一五七	二、七二五	二、七二五

第八節 稅關

朝鮮に於ける開港は明治十九年十月釜山の開港を以て嚆矢とす次て同十三年五月元山同十六年一月仁川を開港す而して明治十六年釜山、元山及仁川の三港に稅關を設置し更に同三十年嶺南浦及木浦の

二港、同三十二年群山、馬山及城津の三港を開港し同時に税關を増設す其の後我が保護政治時代に移るや其の施設の一端として同三十九年京義鐵道開通後に於ける鮮滿貿易の爲税關支署を新義州に設置し京城、平壤及大邱に税關出張所若は保稅貨物取扱所を設けて鐵道連絡貨物其の他保稅回送貨物に對する通關事務の取扱を開始し又鴨綠江口なる龍巖浦は三十七八年戰役後事實に於て開港と爲りたるを以て同港に新義州税關支署の出張所を設置し次て四十一年北鮮地方に於ける交通貿易の發展に資せむを爲新に清津港を開港として税關支署を設置したり

併合後從來の開港の外更に新義州を開港とし從來の開港中馬山浦は明治四十四年一月以後之を閉鎖せるも之と同時に内地、臺灣及樺太と朝鮮との間に通航する船舶は税關の特許を受け馬山浦及行巖灣に出入し得ることとし馬山税關支署は依然之を存置し鎮海には翌四十五年一月税關支署を設置せり其後大正十年六月更に雄基を開港として税關支署を設置し同時に龍巖浦に於ては從來の税關出張所を税關支署に改めたり又前記内地、臺灣及樺太と朝鮮との間に通航する船舶の馬山浦及行巖灣出入に關する税關の特許は時勢の進展に伴ひ大正十年九月二十八日以後之を要せざることとせり即ち現在の開港は仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、木浦、城津、清津、雄基、新義州及龍巖浦の十一港

にして開港貿易貨物の通關事務を執行する爲仁川、釜山、元山及鎮南浦の四箇所には税關、群山、木浦、馬山、鎮海、城津、雄基、新義州及龍巖浦の九箇所には税關支署、京城、大邱、平壤の三箇所には税關出張所を設置せり其の他陸接國境貿易の爲指定せる各交通地點には税關出張所を設置し、其の數平安北道に二十三箇所、咸鏡南道に四箇所、咸鏡北道に十九箇所あり又鮮滿國境列車直道に關する日支協約の成立に伴ひ明治四十四年十一月以後南滿洲鐵道安東停車場には税關官吏を派出して鐵道聯絡貨物に對する通關事務の取扱を爲すことせり尙關稅取締の爲全沿岸を通して十五箇所の税關監視署を設置し仁川及釜山の兩税關には各百噸級、鎮南浦税關には八十噸級の監視汽船を配置し龍巖浦税關支署及要地に在る税關監視署五箇所には各五噸乃至七噸の發動機巡邏艇を配置しあり

收 稅 額		(印紙納付の分を含む)		大 正 九 年 度	
仁 川	輸 移 入 稅	噸	稅	出 港 稅	稅 關 雜 收 入
	二、七四八、九五五 円		九、六〇一 円	一、二、八五〇 円	五三、九五二 円
					二、八二五、三五八 円
					合 計

陸
接
國
境
計

一三三、四三一
一一、二六五、二九四

六一、三四四

七三、七九三

二、五〇〇
三〇七、二一九

一三五、九六六
一一、七〇七、六五〇

여 백

第十五章 林業

第一節 林政の沿革並林況

朝鮮に於ける林野の總面積は約一千六百萬町歩を算し全土の約七割三分を占め世界に稀なる山國なるに拘らず古來林政不備にして特殊の保護林たる封山の如きものを除く外は所謂公山と稱し一般人の自由樵採に委して顧みざりしか李朝の末に至り此の保護林制度も廢たれ到る處濫伐を肆にし或は火田を起し或は急斜地を開墾し林野の大部分は荒廢を極め僅に陵園墓附屬の森林及鴨綠、豆滿兩江の流域等に於て見るに足るの林相を保つに過ぎずして秃山曠野起伏し瀟目荒涼を極め延て産業の發達を妨げ國土の保安を害し其の災禍舉て算ふべからず茲に於て舊韓國政府は隆熙二年（明治四十一年）一月森林法を發布し一般山野の保護、整理、増殖を圖り盛に殖林を奨勵したりしか半島の民情に適せざる點少からざるものを以て明治四十四年六月朝鮮總督府に於て新に森林令を布き從來の森林法を廢して國土の保安、危害の防止、水源の涵養、公衆の衛生、魚附又は風致の爲必要ありと認むるものは之を保安林に編入し伐採、開墾若は放牧を爲すことを得ざらしめ又永年禁養林讓

與の途を開き以て愛林の美風を助長するに努め或は造林貸付の特典を設け造林事業促進の策を講せり

森 林 面 積

大正十年三月末日

道	成林地		雑樹		無立木地	合計	全面積に對する割合	道	成林地		雑樹		無立木地	合計	全面積に對する割合									
	千町	町	千町	町					千町	町	千町	町				千町	町							
京畿道	二二七	四二五	六三	七一五	五・八	黃海道	一二八	七八四	九三	一、〇〇五	六・三	忠清北道	九九	二九六	一三八	五三三	七・〇	平安南道	二四三	六六一	九五	九九九	六・五	
忠清南道	九二	一八八	一八九	四六九	五・五	平安北道	八七九	一、〇八五	四三一	二、三九五	八・〇	全羅北道	二六七	二一四	五〇	四六一	六・三	江原道	六六七	九六〇	二七八	一、九〇五	七・〇	
全羅南道	二三三	五九〇	一四八	九七一	六・七	咸鏡南道	一、四五八	五二一	五六五	二、五四四	八・一	慶尙北道	一八四	七六五	三六八	一、三一七	六・九	咸鏡北道	八八〇	三三〇	四〇八	一、六一八	八・二	
慶尙北道	一八四	七六五	三六八	一、三一七	六・九	總計	五、四八二	二、八五三	一、六一八	八、八八三	七・三	慶尙南道	一二五	四六六	二九〇	八八一	七・〇							

即ち全面積大凡一千六百萬町歩の内成林地（疎生又は散生地を含む）は約三分の一に止まり残地の内約三分の二は天然生雜樹の生育地にして三分の一は草生又は禿裸地に屬せり

半島の氣候は南北に於て差等あり隨て北寒帯より南暖帯に到る迄各種の樹木を生し其の分布亦地方に由り同しからず北部鴨綠江及豆滿江の兩流域上流地方其他の高山に於てはタウヒ、テウセンカラマツ、テウセンハリモミ、タウシラベ、テウセンマツ、シラカハ等を主として鬱蒼たる樹林を形成し中部より南部に互り到る處テウセンアカマツ多く又クロマツ、ナラ、クヌギ、ケヤキ、エノキ、ハンノキ、クリ等を生し最南部に至ればカシ、シヒ等の常綠樹及竹林の存生するを見る概して森林樹木の種類に富み其の數七百種の多きに達せり從て造林樹種は比較的容易に之を選擇し得へし

第二節 森林保護

國有林野の保護に就ては舊韓國政府に於て京城府内の森林に四保護區を特設し之を取締に任し明治四十五年五月に至り總督府府令を以て國有森林山野保護規則を制定し地方長官をして國有森林山野保護の責任者たらしむるを共に特に保護の急要を感じたる京畿外八道の重要林野十六箇所に保護區を増設し各保護區に山林監守山林監守補を配置し次て大正二年九月に至り保護の要ある十二箇所の森林に對し山林監視所を新設し専ら國有林野の保護取締に當らしめつつありしか又大正六年度に於て尙四箇所同七年度に於て一箇所大正八年度に於て二十七箇所を増設し都合五十二箇所の森林保護

區を見るに至れり尙大正八年度に於ては保護制度に改正を加へ從來の山林監守、山林監守補に替ふるに道森林主事及森林監守を以てし同時に森林主事に對しては刑事令に依り司法警察權を付與せられたり然るに森林監守は元來司法警察權を具有せざる爲保護取締上遺憾尠からざりしを以て大正十年八月府令を以て該制度に刷新を加へ從來の森林監守制を廢し擧げて之を森林主事に改め以て保護の實を擧ぐるに努めつつあり

尙其の他の國有林野に對しては從來の如く一般警察官憲をして保護取締の任に當らしめつつあり而して森林令に於ては地元住民に對し其の連帶の責任を以て國有林野の保護を命し報酬として之に林産物の一部を讓與することを得るの制を設け國有林野の保護を圖ると同時に地元住民に便益を與ふることとし大正三年一月實施以降大正十年九月末日迄の箇所數三百八十五其の區域面積百三十六萬四千四百九十九町歩に上れり

又私有林野に在りても單に私人の保護に委するに於ては動もすれば濫伐に流れ林野の荒廢を招くの虞あるを以て道知事は森林令に基き道令を發して之を保育並伐採を制限し以て其の取締を厲行しつつあり此くの如く今日に於ては其の成績漸次良好に向ひ林相年を逐ふて改善せらるるものあるに至れり



北京清雲洞官行造林地實況

第三節 殖林事業

明治四十年以降國費を以て京城附近其の他に造林を行ふと同時に一般に種苗の無償下付を爲し又地方費及恩賜金經營に屬する苗圃に於ても苗木の下付を行ひ且各道に於て地方費模範造林を實行し又一面に於て國有林野の内存置を要せざる部分は民間に造林貸付を爲し事業成功の後無償にて付與し得ることとし大に造林の奨勵を行ひつつあり故に民間に於ける殖林事業は晩近異數の發達を遂げ各地に大小の企業家簇出して空前の盛況を呈せり就中東洋拓殖株式會社、釜山府並釜山學校組合、三井合名會社、株式會社中村組、朝鮮貴族林業組合普植園、川崎農場、住友吉左衛門、半田善四郎、多木久米次郎、西鮮造林合資會社、片倉組、大寶農林部、小泉新兵衛、田中友吉等に於て既に大規模の造林を行ひ又内鮮人富豪の造林計畫を樹つるもの尠からず

上述の如く殖林事業逐年勃興の結果大正九年度に於ける官民の植栽面積は五萬一千餘町歩に達し之を併合當年明治四十三年度の四千餘町歩に比すれば約十五倍の激増を示せり惟ふに朝鮮の林野は一般に荒廢すこ雖概れ其の地質造林に適し樹木生育状態の如きも内地と殆ど異なる所なきと造林用樹種の多種なること即ち北部寒帶より南部暖帶に跨り生する七百種の樹木中喬木に屬するもの針葉樹

十九種闊葉樹百三十餘種の外竹類三種ありて造林樹種の選定に苦しむが如きことなく人夫賃比較的低廉にして且殆ど地務費を要せざる爲多くの造林費を要せず且貸付を受け得べき林野は各地に散在するを以て希望する造林地を各道に求め得へし朝鮮各地其木材の高價なると同時に木材の消費費國たる支那に近接し居る等朝鮮の殖林事業は將來頗る有望なり借地造林に關する手續等に就ては本府に於て刊行せる「借地造林手引」あり造林樹種の選定養苗及造林方法等殖林上の注意に關しては「殖林手引」「樹苗養成指針」等の冊子あるを以て企業者は先づ是に就て一般的概念を得るを便とすへし

朝鮮の林野副産物は多種にして其の用途も極めて廣し其の中主要なるものは樹實類に於ては栗、胡桃、松の實、銀杏等樹皮類に於てはハキ、シナノキ、ナラ、カシハ、アベマキ等にして相當の生産額あり其の他漆樹は殆ど全土に涉り其の生育に適し漆液の品質も内地上等品と伯仲の間に在り採漆容易なると勞銀比較的低廉なるとの爲漆業亦漸く勃興の機運に向ひつつあり又椎茸、五倍子、藥料楓葉等も相當の生産額あり上述の如く朝鮮の殖林事業は概して有望なるを以て努めて民間に於ける養苗を奨励し以て斯業發展の基礎を養ひつつあり其の狀況次の如し

(イ)官公營苗圃事業 官公營苗圃は明治四十三年度に於ては十一箇所面積六十二町歩を設置したる

し、過ぎさりしも爾來歳々共に之を増設せし結果大正九年度末には其の數七十八箇所此の面積二百三十九町歩に達せり其の箇所數及面積を掲ぐれば左の如し

官公營苗圃一覽

年 度	國費經營		地方費經營		恩賜金經營		合 計	
	箇所	面積 <small>町</small>	箇所	面積 <small>町</small>	箇所	面積 <small>町</small>	箇所	面積 <small>町</small>
大正七年度末	五	三五・四	五一	一八九・〇	一	〇・三	五七	二二四・六
同 八年度末	二一	五五・五	四八	一八三・九	一	一	六九	二三九・四
同 九年度末	三四	五九・七	四四	一七九・八	一	一	七八	二三九・五

此等苗圃の一部分は未だ創設時代に屬するものあれども大正九年春の生産成苗數千四百二十七萬本餘の多きに達せり

地方費經營樹苗圃一覽

大正十年春季

道名	苗圃數	面積	播種		條床	替据		成苗數
			種	插		据	置	
京畿道	四	二三·三	五	一	二、〇八八	一	一、四八五	
忠清北道	九	一六·六	一九二	一	一、五〇五	一	二、九三二	
忠清南道	四	二二·〇	一〇五	一	一、七六二	一	八〇五	
全羅北道	三	一一·三	五六	五	一、三九七	一	一、二〇五	
全羅南道	二	一八·一	五六	五	二、〇四八	一	一、二七九	
慶尙北道	四	一六·一	三一	六	九二一	一	一、六一三	
慶尙南道	二	三·八	五	九	八二一	一	一、〇八〇	
黃海道	三	一五·一	七三	一	一、二一六	二	八六一	
平安南道	四	二一·七	二〇	四	一、三八二	一	四一四	
平安北道	二	七·〇	三	三	四四〇	一	一六一	
江原道	一	七·五	三	四	一、五一七	一	三九一	
咸鏡南道	二	八·九	一六	六	九二二	一	三九〇	
咸鏡北道	四	七·四	二	一	二、一五五	一	八九二	
總計	四四	一七九·八	六一三	二三	一八、〇七四	二	一三、五〇八	

施

業

町

町

千本

千本

千本

千本

(口)私營苗圃事業 前項に述べたるが如く官公營苗圃の養苗數漸次増加せりと雖賤々たる殖林事業の發展は其の産苗數の配付のみを以て之を充すこと能はず故に各所に私營苗圃の開設を見るに至れり而して其の生産成苗數は明治四十二年には三百二十一萬餘本に過ぎざりしか大正十年春には一億二千五百三十七萬本に上り過去十一年間に於て約三十九倍の盛況を呈せり尙既往に於ける私營養苗は概れ個人の經營に屬し小規模のもの多かりしも近年は殖林組合、林業契等の組合苗圃、殖林企業者造林用の大苗圃又は販賣を目的とする苗木商の大苗圃等續續設置の氣運に向へり今大正九年に於ける生産苗の概數を掲ぐれば左の如し

私營苗圃生産苗概數

道		成苗數	幼苗數	合計	道		成苗數	幼苗數	合計
		千本	千本	千本			千本	千本	千本
京畿道		七、二四六	一、一八七	一九、四三三	全羅北道		七、七七九	八、二八三	一六、〇六二
忠清北道		一七、七二六	一七、〇八七	三四、八一三	全羅南道		一五、七六四	一五、九四七	三一、七一
忠道南道		一五、九三八	一〇、〇二三	二五、九六一	慶尙北道		一六、五〇〇	三九、七六一	五六、二六一

道	成苗數	幼苗數	合計	道	成苗數	幼苗數	合計
慶尙南道	二八、二五三	三九、三二六	六七、五七八	江原道	一、七六八	四、九〇九	六、六七七
黃海道	一、四一五	五、一四八	六、五六三	咸鏡南道	四、八五三	一三、七四九	一八、六〇二
平安南道	一、六九五	三八九	二、〇八四	咸鏡北道	五、六九六	二九、九五二	三五、六四八
平安北道	七四一	六四四	一、三八五	總計	一二五、三七三	一九七、四〇五	三二二、七七八

(ハ)官公營殖林事業 殖林事業の官公營に屬するものは國費及地方費の經營にして前者は明治四十年以降後者は明治四十四年以降毎年引續き實行しつゝあり今最近三箇年間に於ける成績を掲ぐれば左の如し(大正八年度より山林課出張所を設けて國有林の經營を開始したれども未だ養苗中にして造林の域に達せず)

官公營殖林事業

年	國費			地方費			合計		
	植栽面積	植栽本數	播種量	植栽面積	植栽本數	播種量	植栽面積	植栽本數	播種量
大正八年	町 四一四・〇	千本 五〇四	石 一・五	町 二二一・九	千本 一、〇五一	石 —	町 六三五・九	千本 一、五五五	石 一・五
同 九年	一三三・八	六二	一・五	二〇二・五	七二九	一・五	二一六・三	七九一	三・〇
同 十年	九二・〇	一、七一二	四・五	二九八・九	一、六〇九	—	三九〇・九	三、三二一	四・五

一 國費經營事業 造林の模範を示し風致の増加を圖り且植栽に關する試験を行ふを目的とし明治四十年京城白雲洞及平壤牡丹臺の二箇所に殖林を開始し爾來水原、大邱、開城地方にも造林を行ひたりしか近年に至り京城附近に於ける荒廢山野の造林に主力を注ぐこととし砂防植栽及普通植栽を行ひつつあり植栽植種はアカマツ、クロマツ及ニセアカシヤを主としヤマハンノキ、クヌギ、白楊類之に次ぎ外に試植せる種類少なからず明治四十年以降大正十年春に至る十五箇年間に於ける植栽面積は三千九百町歩にして植栽苗數千五百二十八萬本に達し播種高三十八石に上れり

二 地方費經營事業 明治四十四年江原道に於て施行し大正元年には忠北、全南、慶北及江原の

四道に同二年には更に京畿、忠南、全北、黄海、平南及平北の六道を加へ同三年には慶南及咸南を除きたる各道に於て同四年以降は各道に於て實行しつつあり明治四十四年以降大正十年に至る十一箇年に於ける植栽面積二千六百三十四町歩餘、植栽苗數一千百三十二萬本に達せり而して其の種樹はアカマツ、クロマツ、クヌギ、ニセアカシヤ、クリ及白楊類を主とせり
右の外大正二年以來天然稚樹發生地に補植を行ひ之を保育禁養せる面積大正十年に於て二千四百十三町歩餘に達せり

天然稚樹發生地保育成績

年	國		地方		合計	
	保育面積	補植本數	保育面積	補植本數	保育面積	補植本數
大正七年	町	千本	町	千本	町	千本
同八年			二、二八七・八	一	二、二八七・八	一
同九年			二、五〇五・一	一七	二、五〇五・一	一七
同十年			二、四一三・三	七	二、四一三・三	七

(二)私營殖林事業 民間に於ける殖林事業は近年長足の進歩を爲し上述の如く造林企畫者各地に簇出し釜山府並釜山學校組合其の他私營殖林事業にして既に相當の林相を呈し斯業上參考に資すべきもの尠からず又地方住民中にも殖林の實行者勃興し新に植栽を行ふのみならず天然生の稚樹發生地を保育禁養し極めて僅少なる經費に依り比較的廣大なる殖林の實を擧げつつあるを以て私營殖林事業の前途は頗る多望にして大正十年に於ける植栽面積は五萬六百十三町に上り其の本數一億四千二百三萬餘本に達せり

(ホ)記念植樹 愛林思想を涵養し殖林の事業を獎勵せむが爲明治四十四年四月三日併合後第一回の神武天皇祭日を期し朝鮮全道を擧げて記念植樹を實行せしに豫想外の好結果を收め總本數四百六十五萬本に達せり爾來回を重ねるに従ひ益好況を呈し大正十年に於ける第十一回の記念植樹の如きは總本數千六百七十九萬本を植栽し之を第一回擧行の際に於ける植付本數に比すれば約一千二百十三萬八千本を増加し約三倍に及び其の第一回より第十一回に至る植付本數は一億七千四百四十三萬本の多きに達せり而して從來の記念植樹に於ける植栽用苗木は國費、地方費及恩賜金經營苗圃の生産苗の無償下付せるものを充てたりしも下付苗木不足の爲天然苗の移植を行へるもの多かりし爲其の植栽後の成績に於て遺憾の點多かりしも殖林思想の普及に伴ひ漸次其の不利益なる

を知得し豫め園體又は地方富豪、篤農者等に於て苗木を購入し置きて植栽に供するもの多きに至れるは最も欣ぶべき現象にして其の成績頗る良好なり

(ハ)御大典記念殖林事業 大正四年秋季に於て舉行あらせられたる 御即位の大典を記念せむか爲殖林事業を計畫實行したるもの抄からさるも就中道、面又は學校組合等の公共園體の經營に屬するものに付ては一面造林の模範を示すへき趣旨に依り一定の制限面積内に於て國有林野を讓與するべきとせり

(ト)種苗配付 明治四十二年以降民間殖林獎勵の爲國費、地方費及恩賜金經營苗圃にて養成せる苗木及購入種苗の配付を行ひ其の數大正十年春は種子三十石、苗木約一千四百九十七萬本に達し逐年増加しつつあるも未だ民意を充すに足らざるの狀況なり而して配付種苗の主なる樹種はアカマツ、ニセアカシヤ、クヌギ、白楊類及クリ等なり

(チ)水源涵養造林 水源地山野の荒廢秃禿は各種産業開發上最遺憾とする所なるを以て大正七年度より錦江支流美湖川流域の荒廢山野に對し十一箇年繼續事業として忠清南北兩道に年額五萬圓を補助して水源涵養造林を開始し翌八年度よりは更に洛東江及蟾津江流域に水源涵養造林の爲四十箇年繼續事業として慶尙北道及全羅北道に年額十萬圓を補助するべきとし尙全鮮に於ける治山

治水の根本策を樹つる爲大正八年度より向四箇年の豫定にて先づ主要河川流域の荒廢山野に對し普通造林砂防造林及溪留工事に關する調査を爲すことせり

第四節 不要存國有林の讓與豫約付造林貸付

國有林野に於ける造林事業の經營に關しては舊森林法に於ては單に部分林又は貸付の制を設けたるに過ぎざりしも現行の森林令に於ては朝鮮の現狀に鑑み此等の方法を廢し新に造林貸付に關する特典を設け努めて造林を奨勵し急速に荒廢山野の救済を圖らむとする趣旨に出てたり即ち造林の目的の下に貸付したる國有林野は事業成功の曉には貸付期間の滿了と否とに拘らず之を無償にて借受人に付與するの特典あるを以て此の制度に基き出願するもの激増するに至れり今最近三年間に於ける貸付件數及其の面積を掲ぐれば左の如し

年 度		造 林 貸 付			
年 度	貸付件數	面 積	年 度	貸付件數	面 積
大正八年度	八八〇	八七、〇七八 <small>町</small>	同十年九月迄	四七二	一七、六八二 <small>町</small>
同九年度	一、〇三三	六六、九四六			

第五節 國有林野區分調査

朝鮮に於ける森林山野は明治四十三年中林籍調査を行ひたる結果其の分布の概況及面積の概要を知ることを得たりと雖尙國有私有の區分不明にして不便を感ずること甚しき故に速に其の區分を立て且國有林野の要存、不要存の區分を調査するの必要あり仍て明治四十四年度より之を調査に著手しつあり今其の概況を示せば次の如し

(イ)從來の方針 營林廠所屬要存豫定林野約二百二十萬町歩は大正二年度より大正十一年度に至る十年間に同廠の事業として調査し其の他の要存豫定林野約三百五十萬町歩を第一種不要存林野約二百萬町歩計五百五十萬町歩は本府の事業として明治四十四年度より開始し主として權利關係の複雑なる地域、荒廢甚しくして民間造林の急施を要する地域及河川水源地にして保護上重要な地域より著手し大正十一年度を以て完了する計畫なりしも尙一兩年の延期を免れざるへし

(ロ)實地の方法 要存豫定林野に對しては境界を定め標識を設け五萬分一見取圖及調書を作製し其の副本を關係道、府、郡保護區又は警察官署に送付し又第一種不要存林野に對しては查了後直に造林貸付等の處分を要するを以て各箇所毎に境界を査定し標識を設けたる上簡易なる實測を行ひ

六千分一圖及調書を作製し其の副本を關係道、府、郡に送付す

(ハ)實施の成績 明治四十四年度以降查了したる面積は本府調査區域三百八十三萬二千二百餘町歩
營林廠區域百八十一萬五千七百餘町歩合計五百六十四萬七千九百餘町歩に達せり

年 度		調 査 府 郡 島 數		延 調 組 數 査	延 調 日 數 査	調 査 面 積
		新 規	繼 續			
大 正 七 年 度		五	一	一三	七九五	三五二、五八二町
同 八 年 度		五	二	一三	七一七	一三八、七〇三
同 九 年 度		六	一	一一	八一九	二〇五、二八七
同 十 年 度 九 月 迄		一	二	三	一一六	三一、七三六

尙前記區分調査の外造林貸付、讓與及賣却の民願に基き特に處分上必要なる調査を行ひたるもの
左の如し

林業		種別	調査箇所數	調査面積
大正七年度	造林貸付林野賣却及讓與	四七	五二、九七八	
同八年度	造林貸付及林野賣却	七六	二四、七三七	
同九年度	造林貸付及林野賣却	三二	九、三八八	
同十年度九月迄	造林貸付及林野賣却	一	九〇二	

第六節 林野整理調査

朝鮮に於ける林野の所有權又は占有に基く權利關係は古來曖昧混沌として卒かに判明し難く若し現状の儘推移せむか如何に植樹造林を奨励するも其の目的を達すること容易ならざるを以て此等の權利關係を明かにする爲大正六年度より林野の整理調査を開始し其の權利關係を確定し一面別途施行しつつある林野の區分調査と相俟つて國有林野管理上の根本政策を確立すると共に一般林業の開發を期せむとす而して先づ林野に對する權利思想の發達顯著なる地方たる京畿、忠北、忠南、全南、

慶北、慶南、平南の七道の調査に着手し漸次他道に及ぼし現在に在りては全道に涉り調査施行中に屬し其の査定公示を行ひたる地域にして不服申立期限を経過し既に権利の確定せるもの六百十五府面に達せり事業開始以來の成績を示せば左の如し

年 度	林 野 調 査 成 績			
	實 地 調 査	査 定	公 示	備 考
	府 面 數	筆 數	府 面 數	筆 數
大正八年度迄	一、四四一	一、七六八、四二八	一一五	一〇五、三九六
同 九 年 度	二七八	三三八、四五九	三九一	四三四、一三九
同十年度九月迄	一三九	一八六、九四二	二一八	二六一、五二四
累 計	一、八五八	二、三四三、八二九	七二四	八〇一、〇五九

第七節 國有林經營

(一) 總督府直轄

國有林野（要存豫定林野）中要存豫定林野は約五百三十萬町歩（大學演習林として貸付）に達する見込
（不要存林野）にして其の内鴨綠、豆滿兩江流域に屬する約二百十八萬町歩の林野に對しては營林廠をして之が管

理經營の任に當らしめつつあるも「(二)營林廠參照」一方營林廠所管外の林野三百十二萬町歩の區域に對しては從來地方長官をして之が保管の責に任せしめ之が機關として森林保護區並山林監視所等を設け専ら保護取締を爲さしむるの外何等積極的施設を爲したることなかりしか偶々大戰勃發以來經濟界の異常なる發達に伴ひ木材の需要頓に増加し林産物の拂下を出願するもの日に相踵くの狀態を呈し來りたるのみならず公用又は公益事業に必要な用材の供給不足を告ぐる狀況に立至りたるを以て老齡林は之を伐採搬出して一般の需要に應ずるに共に未立木地及伐採地に對しては漸次造林を行ふの必要切實なるを認め之等に對する應急施設として右要存豫定林野約三百十二萬町歩中差當り緊急を要する林野約百二萬町歩に對し大正八年度に於て十箇所、大正九年度に於て九箇所、大正十年度に於て七箇所の山林課出張所を特設し以て之が經營機關たらしめ植伐實行の任に當らしめつつあり

(二) 營林廠

營林廠は前記の如く鴨綠、豆滿兩江流域に屬する二百十八萬餘町歩の林野を管理經營する特別官廳



營林廠製材所(新義州)

にして明治四十年四月統監府時代の創設に係り本廠を新義州府に置き伐木、造林、運材、製材、販賣、林産物處分並國有林調査等森林經營に關する一切の業務を掌理せしむ而して事業地は何れも遠隔の地に在りて直接事業の實行に當ること困難なるに依り之を機關として鴨綠江流域に於ては惠山鎮、中江鎮の二箇所に支廠を、新惣坡鎮、高山鎮の二箇所に出張所を、豆滿江流域に於ては茂山、會寧の二箇所に出張所を設け又別に京城龍山に出張所を設置し夫々森林經營の實行に當らしめつつあり然るに其の所管區域の廣大なるに比し經營機關の充實せざりし爲其の施業に關する調査周密を缺き又伐木運材等の直營事業も止むなき請負に耐し而も監督の充分なるを得ざる等森林の保續的經營に支障を來すの虞なれとせざりき依て大正九年度に於て事業の刷新を期する爲一大革新を加へ職員を増員を行ふと共に新惣坡鎮、高山鎮、茂山の三出張所を支廠に改め以て機關を充實すること共に各實相伴ふ直營事業を行はむことを期せり

(イ)所管面積、樹種及材積

本廠の所管林野は咸鏡南北道及平安北道の三道に跨り其の區域面積は約二百十八萬町に達し恰も内地國有林野全面積の半に上り其の成林地は凡そ九割三分即ち二百二萬町步にして主として寒帯て樹種を以て蔽はれ全面積に對して針葉樹約七割闊葉樹約三割を占む且下廠材として利用しつ

ある主なる樹種は針葉樹にしてホンスンサアスン紅松、杉松及落葉松の三種、濶葉樹にてはテウセンヤマナラシ、シナノキ類ドロノキ類等とす今最近の見込に係る主要樹種の占領面積及材積を表示せば次の如し

成林地面積及材積

種別	鴨綠江流域		豆滿江流域		合計	
	面積	材積	面積	材積	面積	材積
針葉樹	萬町歩	萬尺綫	萬町歩	萬尺綫	萬町歩	萬尺綫
	紅松	二二	一〇、二六五	一	八三	二三
杉松	六四	一八、一九六	一〇	六、二五六	七四	二四、四五二
落葉松	二九	九、四九五	二〇	一一、四一七	四九	二〇、九一二
計	一一五	三七、九五六	三一	一七、七五六	一四六	五五、七一二
濶葉樹	四六	二六、四八六	一〇	四、四二四	五六	三〇、九一〇
總計	一六一	六四、四四二	四一	二二、一八〇	二〇二	八六、六二二

右主要樹種の大要を擧ぐれば左の如し

(一)紅松ホンスン テウセンマツ即ち朝鮮五葉松の俗稱にして直徑三尺以上の大材尠からす其の材質は内

地産扁柏材ヒノキと青松材との中間に位し木理通直色澤佳良にして反張伸縮するこゝ比較的少なし加

ふるに工作を施し易きを以て各種建築用材家具用材枕木用材等として近來其の需要激増せり

(二) 杉松サアス タツヒ、タウシラバ及テウセンハリモミを併せたる俗稱にして略北海道のエゾマツ、

トトマツに類似す材質は紅松に比し稍劣るも價格低廉工作容易なるか故に廣く建築用材、函材、木板其の他製紙原料、燐寸軸木及包装用經木原料として賞用せらる

(三) 落葉松 テウセンカラマツの俗稱にして樺太のシコタンマツに類似す樺太産は細丸太を主と

し大材渺きも廠材には直徑二尺内外の大材稀ならず年輪緻密材質強硬にして且耐久力に富むを以て建築、橋梁、船艦、枕木、電柱等に好適す

(四) 赤柏松 イチ井又アララギの俗稱なり著積多からざるも材質の優美なるは古來針葉樹中の王と稱せられ上等の茶棚、机、箱類、火鉢、茶器、杖、箒、櫛等の小細工に賞用せられ又良材は天井板、床柱等に用ゐて雅致を極む

(五) 檜木 ナノチレカンバの俗稱にして材質檜材よりも堅く從來車輛材として賞用せられ近來は床柱、杖、盆、度量衡器、櫛等各種の新用途を開きつつあり

(六) 其の他の樹種 潤葉樹中マンシウグルミ、エンツユ、ハリギリ、キハダ、ヤチダモ、ニレ、

マンシウシナノキ、カバ類、ナラ類、テウセンヤマナラシ、ドロノキ類等種種あるもドロノキ類マンシウシナノキ及テウセンヤマナラシを燐寸軸木材として伐採するの外未だ盛に利用せらるるの時機に達せず

(ロ) 伐木運材及著筏

鴨綠江流域に於ては咸鏡南道甲山、三水、長津の各郡及平安北道厚昌、慈城、江界郡内、豆滿江流域にありては茂山郡内の森林より主としてテウセンカラマツ、テウセンマツ、タウヒ、タウシラベ、テウセンハリモミ等の丸材、角材、電柱、丸太、小丸太及鴨綠江流域よりテウセンヤマナラシ、ドロノキ類、シナノキ類を伐採しつつあり伐採は秋冬兩期に於てし運材は一部に輕鐵に依り大部は冬季地上の積雪及結氷を利用して牛曳、木馬、修羅等に依り江岸なる編筏工場まで搬出し初夏解氷を俟つて編筏流下す流筏は通例五月より開始するも六月より九月に至る四箇月間最も盛にして十月下旬に至り終了す而して流筏事業は水流急にして比較的作業困難なる上流に於ては内地人筏夫を使用し流勢緩にして比較的容易なる下流に於ては主として朝鮮人筏夫を使役し少數の内地人筏夫をして之を指導監督せしめつつあるも近來内地人筏夫の缺乏に依り多少急流の區域に於ても鮮人筏夫を使用するの必要を生じ之を養成を圖りつつあり今最近三箇年間に於ける伐木、

選材及箸筏の材積を示せば左の如し

伐木、選材及箸筏

年 度	伐 木	選 材	箸 筏
大 正 七 年 度	二八三、八五三	三四〇、七一八	三三〇、四三一
同 八 年 度	三一四、〇〇五	三四三、二六七	二八九、七一一
同 九 年 度	二三三、八八七	二四二、八〇九	二七三、九五二

(六) 漂流木整理

明治四十二年三月鴨綠江採木公司と漂流木整理方法に關し協定を遂げ朝鮮側に漂著せしものは營林廠にて支那側に漂著せしものは採木公司に於て整理することとし更に大正三年中委員を設け整理上同一歩調を取ることに協定を遂げ次て大正七年二月豆滿江の漂流木整理に就き間島延吉道尹と商議を爲し之れ亦同一歩調に依ることに協定し爾來以上の方法に基き整理し來たりしか大正七年六月朝鮮水難救護令及附屬法令を改正し鴨綠江豆滿江の漂流木に關しては營林廠長其の職務を

行ふことなれり今既往三箇年間に於ける漂流木の整理状況を表示すれば左の如し

漂流木整理表

年 度	繰越數	拾得數	拾得漂流 木流失數	返還數	廠受入數	殘 數
大正七年度	一、八九八 <small>尺餘</small>	七三、一五八 <small>尺餘</small>	五四〇 <small>尺餘</small>	一五、四六六 <small>尺餘</small>	六、七八八 <small>尺餘</small>	五二、二六二 <small>尺餘</small>
同 八年度	五二、二六二	七八、〇六七	九、九七四	七七、七四二	三二、五四四	一〇、〇六九
同 九年度	一〇、〇五四	一二、三六四	一	四、〇六四	八、三七五	九、九七七

二) 製材

製材は第一、第二の二工場に於て各種建築用材、函材等を製作しつつあり大正六年度に於て製材法に一大改善を加へし以來著しく製材歩留及製材能力を増進し一日の製材力約四百五十尺縮まなれり今最近三箇年間に於ける製材と其の資材及歩留を示せば左の如し

製材 及 資材

年 度	製 材	製 材	資 材	歩 留
大 正 七 年 度	一五六、六七六	二五三、三一九	〇・六〇	
同 八 年 度	一四七、三六三	二四一、八〇九	〇・六一	
同 九 年 度	一四二、三一五	二二八、四三三	〇・六二	

(ホ)販 賣

時局以來一般財界の好況は諸事業の勃興と共に建築界未曾有の活況を呈し加ふるに朝鮮二箇師團増設用材及土木部用材の大部分は廠材を使用せる結果枕木、板類其の他木材の需要益増加し廠材の生産力を以て之の需要を満足せしむるに能はざるの状況なりしか近時財界不況の影響を設け稍悲觀的現象を呈するなきにあらざるも早晚之の回復を見るに至るへしと信せらる

(ハ)立木拂下

現今に於ける拂下出願の趨勢及之の拂下許可の概要を述へんに時局以來一般に木材の需要著しく増加し従て立木の拂下を出願する者亦頗る増加せり然るに一面廠直營事業、林力、輸送方、勞力等の關係上拂下出願の全部を許可し難き事情あるを以て鮮外は勿論鮮内に於ける需要に對する出

願ミ雖憤重調査の上之ハ拂下許可を爲しつつありしか近時財界不況の影響を受け是等の出願は減少せり

(ト) 森林保護

從來派出所員をして本務の傍森林保護に従事せしめ居たるも其の成績充分ならざるを以て大正九年十月六十箇所の森林保護區を設け營林廠森林主事を配置すると共に司法警察權を附與し専ら森林保護の成績を擧ぐるに努めつつあり

第八節 林業試験

朝鮮は大陸の氣候に支配せられ山野荒廢の進廢、森林植物の種類及分布、林相の行進等に於て内地と著しく其の趣を異にし従て殖林上に試験及調査を要する事項尠からざるを以て本府は大正二年より京城及抱川郡光陵に苗圃を設け専ら朝鮮産主要樹種の養苗に關する研究を行ひ併せて森林植物の調査を爲し來りたるも林業の全般に涉る研究に觸るること能はざりしを以て大正九年より完備せる試験場の設立に着手し本場を京城府外清涼里に置き抱川郡光陵其の他五箇所に試験林を置き六箇年計畫の下に着々完成の歩を進めつつあり

而して既に樹苗養成指針第一、第二冊を發刊し朝鮮に於ける主要樹種の養苗術に一步を進め、森林植物編第一輯乃至第十輯、金剛山外十數箇所之植物誌を發表して朝鮮之森林植物帶並地方植物を明にし其の他朝鮮巨樹名木誌、漢方藥用植物誌等を公にして學術並産業上に貢獻し來れり

여 백

大正九年末現在の許可鑛區は二千五百十五にして前年末に比し三百四十三を減少せり

許可鑛區數及坪數鑛種

大正九年十二月末日

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
金銀鑛	六一八	三三三、一八八、六二四	金銀銅鉛亞鉛鑛	四二〇	一四三、八四〇、三五〇
銅鑛	五八	一六、九三五、九〇二	磷鑛	三	四四、三六四
鉛鑛	四	一、五三五、四四五	黑鉛	三六四	五四、三九八、七〇八
安質母尼鑛	一	一六四、三〇〇	石炭	三三八	二二三、九六四、一〇六
水銀鑛	四	五九二、五六三	雲母	一五	二、五一四、八四四
亞鉛鑛	一三	一、六八七、七一七	石棉	九	二、一九九、六三一
鐵鑛	三〇八	一三三、三四五、六〇五	高嶺土	二八	三、〇三二、二九〇
硫化鐵鑛	一	三七、〇〇〇	砂	二一	二、九八二、一六八
滿化鐵鑛	四	一、七二二、二八六	砂金	二二〇	三五、三七五、三四五
タンクステン鑛	五三	一五、四九六、七一	砂鐵	三	九八、一〇、五五
水鉛鑛	一四	二、七九三、七一七	一切鑛物	四	×四、一六、五五
タンクステン鑛	一五	四、一八九、七二七	合計	二、五一五	×、一六〇、九八二、五三〇

備考 本表には本府所屬金銀銅鉛亜鉛鐵三件石炭鑛區一件及雲山特許鑛區の一切鑛物一件は鑛區數のみを掲上せり×印は河床の延長に依り許可したるものにして單位を里丁間とす次表亦同し

大正九年末現在許可鑛區二千五百十五の内同年中多少に拘らず鑛産物を産出せるものを計上すれば内地人百五十、朝鮮人二十三、外國人五、合計百七十八にして前年に比し百九(三割七分九厘)を減少せり而して總鑛區に對する稼行鑛區の割合は百分中七強に相當す

稼行鑛區坪數鑛種別

大正九年十二月末日

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
金銀鑛	五〇	二二、三〇八、一五〇	亞鉛鑛	一	一一、五〇一、一三九
銅鑛	五	三、九一四、〇九〇	鐵鑛	三三	
鉛鑛	一		硫化鐵鑛	一	
安質母尼鑛	一		滿侖鑛	一	
水銀鑛	一		タンクステン鑛	一	

種別	鑛區數	坪數	種別	鑛區數	坪數
水鉛鑛	1		高嶺土	23	1,403,492
タンクスチン鑛	1		砂	20	1,074,060
水銀鑛	1		砂	2	5,833,618
鉛鑛	24	13,260,188	錫	2	10,268
亞鉛鑛	1		鐵	1	
鑛	1		物	3	160,820,330
黒鉛	16	4,979,187	砂	1	
石炭	24	14,430,866	一切鑛物	3	160,820,330
雲母	1		合計	178	240,525,070
石綿	1			1	10,268

大正九年に於ける鑛産價額は二千四百二十萬四千六百八十八圓にして前年に比し百二十萬九千八百二十二圓(四分七厘強)を減少せり而して右鑛産額の國人別割合を見るに内地人七割九分九厘朝鮮人四厘外國人一割九分七厘なり

鑛産額

大正九年十二月末日

種別	數量	價額	種別	數量	價額
金砂	七五四、八五五 <small>匁</small>	三、五八三、四六五	鐵鑛	四四七、二四九 <small>噸</small>	四、一八九、八四八
金	一、二四、一三九 <small>匁</small>	五〇三、〇四七	銑鐵	八五、一六八 <small>噸</small>	八、二六六、八二三
汰銀	五、七二、七五〇 <small>匁</small>	七七〇、四四五	水鉛	五五〇 <small>匁</small>	二、六二九
粗銀	一、八四八、二二〇 <small>匁</small>	一、五一二、九八九	金銀銅鉛亞鉛鑛	四六五、九七七 <small>匁</small>	一七八、七三四
粗鉛	六、四五 <small>匁</small>	九八六	黑鉛	一八、六八六、一四一 <small>噸</small>	三〇〇、〇四七
鉛鑛	一、四三一、五一九 <small>匁</small>	五一六、九三五	石炭	二八九、〇三六 <small>噸</small>	三、九一七、一五三
粗鉛	二〇〇、八七九 <small>匁</small>	一一五、一二一	高嶺土	一、六六二 <small>噸</small>	三八、七〇八
亞鉛	九七四、四八三 <small>匁</small>	一八五、一〇四	合計	四八〇、三三、三一七 <small>斤</small>	四二、八八六
亞鉛	九二八、八二九 <small>匁</small>	七九、七六八			二四、二〇四、六八八

第二節 鑛床調査と特許鑛山

鑛床調査

鑛床調査は明治四十四年度以降毎年施行し來りたるが、其の目的は從來不明瞭なりし朝鮮に於ける鑛床の性状を概査し以て其の鑛業的價値を窺知すると共に一面鑛業行政の參考に資し他面企業家の調

査に便するに在り即ち事業開始の初年度には平安北道の北部、平安南道の西半部、黄海道の西部及咸鏡南道の南部を大正元年度には平安北道の南部及西部、平安南道の東半部及咸鏡南道の中部大正二年度には平安北道の殘部、黄海道の東部、咸鏡南道の北部及咸鏡北道一圓を大正三年度には京畿道及江原道一圓を大正四年度は忠清北道の大部及慶尙北道一圓を大正五年度は忠清北道の殘部慶尙南道及全羅南北道一圓の調査を爲し以て朝鮮全道の概査を終了し大正六年度は以上の調査後新に發見せられたる重要鑛床に就き補足調査を行ふと共に既往調査の結果を記載すべき鑛床調査報告書及鑛床調査要報を作成刊行し大正七年度に於ては鑛床調査の組織を變更して地質調査所を設置し事業準備に着手すると共に地質鑛床の精査を開始し大正八年度に於て畧其の設備を完了し着々各地の鑛床調査を施行し其の地質圖及報告を調製しつつあり。

鑛床調査の結果有望と認め本府に保留し在る金鑛及無煙炭地方の内慶尙北道尙州、平安北道壽州、咸鏡南道咸興及新興郡に於ける金鑛床の良否多寡を調査し其の經營方法を定めんが爲大正三年度に於て前記三箇所に本府鑛務課出張所を設けて探鑛を開始せり而して義州區域は大正八年度迄に大體の作業を終了したるを以て大正九年一月限り閉鑛し尙州及新興の二箇所は引續き探鑛中に屬す

特許鑛山

明治二十七八年戰役後諸外國人にして朝鮮半島の利權に注目する者頗に増加し互に相競ふの狀況なりしに明治二十九年四月十七日米國人「ゼームス・アール・モールズ」に雲山郡一圓に於ける一切の鑛物を採掘するの權利を特許したり是れ實に外國人に鑛山を特許したる嚆矢にして在留諸外國使臣をして最惠國條款を名とし時の政府に對し續々其の要求を提起せしむるの俑を作りたるものにして即ち同年咸鏡北道慶源、鱧城鑛山を露國人に、三十年江原道金城鑛山を獨逸人に、三十一年平安南道殷山鑛山を英國人に、三十三年稷山鑛山を日本人に、三十四年昌城鑛山を佛國人に、三十八年厚昌鑛山を伊太利人に、同年遂安鑛山を英國人に明治四十一年甲山鑛山を米國人に各特許したり而して慶源鑛城の兩鑛山は事業者手の機に至らずして消滅に歸し金城及殷山鑛山は鑛況不良の爲之を拋棄し稷山鑛山は後日本人より外國人共同組織の稷山鑛業株式會社に讓渡し同會社は更に鑛業令に依り鑛業權を取得すると同時に特許權を拋棄し現時存續するものは雲山、遂安、昌城、厚昌の四鑛山なりとす

第三節 鑛物

朝鮮に於ける主要鑛物は金、鐵、黑鉛、石炭にして銅、亞鉛、マンガステン等之に亞く

(イ)金 金は朝鮮鑛産物の主位を占む其の鑛山の著名なるものは東洋合同鑛業會社(米國會社)に屬する平安北道雲山金山及漢城鑛業會社(米國會社)の經綫に係る黃海道遂安鑛山なり此の兩鑛山の産額は朝鮮産金額の主要部分を占む稷山鑛山、昌城佛國人金鑛山(佛國人所屬)小林樂山鑛山、久原統營金山、谷口栗浦金山等亦相當の規模を有する主要鑛山たり順安及稷山は主要なる砂金地にして共に機械操業の準備として試錐調査を終了し稷山鑛山は入正六年末砂金浚漕機操業を開始し成績頗る良好なり其の他林川、結城、高靈、秀岱、新府面、郭山、宜川、朔州、瑞鶴等有望の鑛山尠からず然れども時局以來物價勞銀の昂騰に依り著しく生産費の増加を來したる爲小鑛山の休止せらるもの多く前記各鑛山に在りても亦齊しく經營上打撃を蒙り事業を縮少せるもの尠からず

(ロ)鐵鑛 朝鮮は鐵鑛に富み殊に褐鐵鑛の産出最多し黃州及黑橋驛附近より西兪二浦に到る間及平安南道价川郡に見出さるる者は褐鐵にして載寧、殷栗の鐵山も亦此の類なり而して褐鐵鑛に亞き産出の多きは赤鐵鑛にして安岳鐵山は即ち是なり磁鐵鑛も亦各所に見出されざるに非ずと雖採鑛未だ盛ならず鐵鑛山中最産出の多きものを載寧殷栗の二鑛となす共に黃海道に在り從來舊韓國政府の經營に係り明治四十一年より採掘を開始したりしか同四十三年一月農商務省の所屬に移れり朝鮮鐵山株式會社所屬安岳鐵山株式會社、日本製鋼所所屬价川鐵山及利原鐵山株式會社所屬利原

鐵山三菱製鐵株式會社所屬戰平及黃州の諸鐵山等亦相當の産額あり其の他瑞山、三陟、江陵、端川、茂山地方に鐵鑛床の發見せられたるあり現時専ら探鑛中に屬す

鐵鑛供給の現況は八幡製鐵所に戰平、殷栗、安岳及利原の四鐵山より、本溪湖煤鐵公司及輪西製鐵所に价川及利原鐵山より、兼二浦製鐵所に同所所屬鐵山及安岳の兩鐵山等より供給し日本製鐵、東洋製鐵其の他内地諸製鐵所に利原鐵山及爾餘の諸鐵山より供給す

(○)石炭 無煙炭は朝鮮に於ける特有なる鑛産物の一に屬す平壤無煙炭田は明治四十年以降官營となり平壤鑛業所を設置し採炭事業に従事せり採炭場は目下十坑あり鑛量頗る豊饒にして品質優良なり其の百分中に於ける主成分は揮發分七乃至二〇、固定炭素七〇乃至九〇、灰分四乃至一五にして硫黃を含むこと甚た少し

平壤鑛業所採炭額

年	採掘高	販賣高	同上價額
大正七年度	一四〇、七七三	一三九、七二五	二、〇七四、四七一
同八年度	一三八、二七四	七八、〇四二	一、三三五、三七三
同九年度	一四〇、二五一	七八、九五六	一、三〇五、一二七

採出炭は平南線に由り鎮南浦より内地に積出し其の大部分は山口縣徳山海軍煉炭製造所に供給す
 本所従來の採炭力は一箇年十萬噸内外に過ぎざりしも海軍に於ける石炭需要の増加及民間に於ける
 煉炭の需要とに鑑み一箇年三十萬噸出炭の計畫を以て大正六年度より三箇年繼續費を以て擴張
 工事に着手完成せり而して從來知られたる無煙炭賦存地は前記平壤鑛業所採炭區域たる平壤無煙
 炭田のみなりしと雖鑛床調査の結果單に之に止まらず平安南道价川、順川、徳川、孟山及江原道
 三陟の諸郡に布符せるを確め其の品質當に平壤無煙炭に劣らざるのみならず尙堅硬なる塊炭の存
 するを知るに至れり

褐炭は其質優良ならさるも分布甚だ廣し其の主要なるものは平安南道安州炭田、慶尙北道長鬚炭
 田、咸鏡南道咸興炭田及咸鏡北道鏡城炭田、會寧炭田等にして其の他東海岸及豆滿江沿岸に沿ひ
 炭田の散在するもの尠からず

種 別	揮 發 物	固 形 炭 素	灰	分 硫	黃
長 鬚 炭	二六・八〇	二四・一四	三六・九三	三・二二	
安 州 炭	四一・一〇	三八・二〇	八・一八	〇・一九	
咸 興 炭	四三・七七	四〇・一三	三・〇三	—	

鐵 城 炭
會 寧 炭

五六一・九四
二九・六四

三二・二四
五〇・八八

九・三二
四・〇五

〇・五八
三・六四

(二) 黑鉛 鱗狀、纖維狀、葉理狀、土狀等の種類あり鱗狀、纖維狀の良質のものは主成分百分中九〇以上の炭素を含有し多く咸鏡北道、平安北道に産し葉理狀及土狀の品位の稍劣れるものは南朝鮮に産出す平安北道龜城、楚山、昌城及朔州附近より産出するものは鱗狀を爲して品質優良なり主として内地鑛業家に依り採掘せられ鱗狀黑鉛は大部分内地の需要に供し土狀黑鉛は主として海外に輸出す而して歐洲戰爭勃發後船腹の不足保險料の昂騰等の爲輸出向土狀黑鉛の産出減少したれども結晶黑鉛は内地製鋼事業の發展に伴ひ需要著く増加したるを主要原料として加工せる製鋼用坩堝製品の米國市場に於ける販路擴張に依り價格昂騰し大正六年中未曾有の盛況を呈したるが爾後一時此の好況に伴ふ生産過剩、生産品の粗製不統一及米國の輸入禁止に依り市價暴落し休山廢鑛相踵き今や本鑛業は沈衰の極に達したり

(ホ) 銅 銅鑛の既知のものを擧ぐれば咸鏡南道の甲山及慶尙南道の昌原及平安北道の厚昌に於ける銅山等になりとす甲山銅山は米國人の所有に係り明治四十三年以降引續き探鑛中なりしが大正五

年五月久原鐵業株式會社の經營に移れり

(八) 亞鉛 亞鉛鑛床は銀鉛と共生するを常とするを以て從來銀鉛鑛と認められ従て其の發見は實に近年の事に屬す其の主要なるものを平安北道寧邊郡蘇民洞咸鏡南道端川郡檢德に於けるものと共以往古銀鉛山として稼行し共生せる多量の亞鉛鑛を遺棄せるものなり而して前者は一時藤田鐵業株式會社に由り探掘せられ後者は尙探掘中なりしか現時二鑛山共に休鑛せり右の外黃海道載寧郡龍山蒼川里及瑞興郡内德面勺詩里に於けるもの等有望なるもの少なからず

(ト) タングステン鑛 歐洲戰爭勃發後軍事上の必要に促されタングステンの需要増加したるを以て之の發見探掘に従事するもの多く一時盛況を極めたるも大正七年下半年以降市價低落し加ふるに需要著しく減少したる爲既製品の消化に苦むの状態なりしを以て一般に事業を緊縮し次て休山廢鑛するもの續出し大正八年末に於ては既に朝鮮内の「タングステン」鑛山は全部休止するの己むなきに至れり而して既知鑛床の内江原道金剛山附近忠清北道忠州郡及忠清南道青陽郡に存するものは其の主要なるものにして其の他諸所に發見せられたるもの尠からず

(チ) 金銀銅鉛亞鉛の混合鑛 此の種鑛床も亦昔時銀鉛として稼行せるものにして朝鮮内各地方殊に南朝鮮地方に多く賦存し鍾南浦製鍊所の開設せらるるに及び漸次之が開鑛を見るに至りしか近時

一般鑛業の不振と共に此の種鑛物の採掘せらるるもの稀なるに至れり

鑛産物一覽

産地	鑛産物
京畿道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、硫化鐵、マンガステン、水鉛、黑鉛、石炭、石綿、高嶺土、砂金
忠清北道	金、銀、銅、鉛、錫、亜鉛、鐵、マンガステン、水鉛、砒、黑鉛、砂金、砂錫
忠清南道	金、銀、銅、鉛、錫、亜鉛、鐵、滿俺、マンガステン、水鉛、黑鉛、石炭、雲母、石綿、砒砂、砂金
全羅北道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、水鉛、黑鉛、砂金
全羅南道	金、銀、銅、鉛、亜鉛、鐵、滿俺、水鉛、黑鉛、石炭、砒砂、砂金
慶尙北道	金、銀、銅、鉛、砒、亜鉛、鐵、硫化鐵、マンガステン、水鉛、砒、黑鉛、石炭、雲母、石綿、高嶺土、砒砂、砂金、砂鐵
慶尙南道	金、銀、銅、鉛、砒、岩鉛、亜鉛、鐵、硫化鐵、滿俺、マンガステン、水鉛、黑鉛、石炭、高嶺土、砒砂、砂金、砂鐵

産地	産物
黄 海 道	金、銀、銅、鉛、水銀、亞鉛、鐵、マンガステン、水鉛、黒鉛、石炭、雲母、石棉、砒砂、砂金
平 安 南 道	金、銀、銅、鉛、安質母尼、水銀、亞鉛、鐵、滿俺、黒鉛、石炭、雲母、砂金
平 安 北 道	金、銀、銅、鉛、安質母尼、亞鉛、鐵、マンガステン、水鉛、磷、黒鉛、石炭、雲母、砂金
江 原 道	金、銀、銅、鉛、安質母尼、亞鉛、鐵、硫化鐵、滿俺、マンガステン、水鉛、黒鉛、石炭、石棉、高嶺土、砂金、砂錫、砂鐵
咸 鏡 南 道	金、銀、銅、鉛、蒼鉛、安質母尼、亞鉛、鐵、マンガステン、黒鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金
咸 鏡 北 道	金、銀、銅、鉛、錫、安質母尼、亞鉛、鐵、水鉛、黒鉛、石炭、雲母、高嶺土、砂金

備考 本表鑛産物の種類は大正九年不現在許可鑛區の鑛種名に依る

第十七章 水産業

第一節 水産業の概況

朝鮮は本土及島嶼を合せ海岸線の延長は一萬七百三十二哩餘に達し地勢、氣候及潮流等の關係上水産物頗る豊饒にして有利の漁場に乏しからず雖古來漁政に關する基礎極めて薄弱にして營業の安固充分ならざりしのみならず漁業の改善に關する諸般の獎勵善からず漁民も亦舊株を墨守し進て漁具漁法の改良を企てざりしを以て進歩の跡見るべきもの少かりしか併合以來斯業の發達を促進し漁業の保護取締を周密にし殊に水産業の助長獎勵に對しては年年相當の經費を投して水産業に關する各種の調査及試験を行ひ之の結果を公表して事業の改善普及を圖り又水産に關する傳習及講習を爲し優良なる漁民の養成及指導に努め且有望なる事業に對しては金品の補助貸與等を行ひ其の發達を助長し其の他漁港及避難港の修築を促す爲年年工費の一部を補助し又水産組合、漁業組合の發達を圖り製品の改良漁村の振興を期し又輸移出水産製品に對しては之を検査を施行し其の品質の改良統一を圖り取引の改善に努めたり斯の如く各種の方面に於ける施設の結果水産業は一般に漸次發達の

域に進み明治四十四年に於ける水産業者戸數七萬二千三十戸人口二十二萬八千二百八人其の漁獲高六百八十六萬三千餘圓製造高二百六十五萬四千圓に過ぎざりしもの大正九年には戸數十三萬八百二十九戸人口五十四萬三千九百二人漁獲高三千九百二十六萬四千餘圓製造高二千百四十萬二千圓に激増し戸數に於て二倍人口に於て三倍漁獲高に於て六倍製造高に於て八倍に達せり今漁獲高の順序に従ひ百萬圓以上の産額を有するものを擧ぐれば鯖五百四萬圓鱒四百七十一萬圓明太魚三百八十七萬圓石首魚二百六十七萬圓、鰈二百四十六萬圓鱒百五十七萬圓鱒百四十九萬圓鯛百四十四萬圓鰈百十九萬圓太刀魚百十七萬圓にして百萬圓未滿五十萬圓以上の産額を有するものは蝦、鯨、和布、海苔、鱈、鰻、鱺、海蘆の八種なり是等重要水族の分布は種類に因り其の習性を異にし洄游の状態亦一ならずと雖大體より之を觀察すれば鯖及鰈は慶尙南北の沿岸を主産地とし全羅南道、江原道、咸鏡南北道之に亞き明太魚は咸鏡南北道及江原道石首魚は西海岸一圓之を産し鱒は全沿岸到る處産せざるなしと雖主要なる産地は慶尙南北道及咸鏡南北道なりとす鰈は慶尙北道迎日灣を主要漁場とし江原道、咸鏡南北道之に亞く鯖及鯛は全沿岸に之を産すと雖主産地は南海岸とし其の外鯖は東海岸鯛は西海岸に漁獲せらる太刀魚鱺は西南海岸に多産し海蘆は南海岸鰈及海鼠は慶尙南北道及咸鏡南道鱈は南海岸及西海岸、鯨は全南、慶南、黃海、江原の各道に於て漁獲せらる又和布及鱒は東海岸

及南海岸、鱈は全沿岸到る處産せざるなし

水産製造物中五十萬圓以上の産額を有するものは素乾明太魚、素乾鱈、鹽乾石首魚、煮乾鱈、海蔘、鹽藏鯖、鹽藏石首魚、鹽藏太刀魚、鹽藏鱈、和布、海蔘なりとす以上製造業の盛衰は主として各地に於ける漁獲の狀況と相伴ひ又輸移出向製品中に在りては仕向地の需給狀況に因り製品の種類に多少の變化を生ずることなきに非すと雖大體より之を觀れば主要生産地及製造の狀態前年度に比し著すき異動なきを認めらる

第二節 漁業處分

現行漁業令は明治四十四年の制定に係り漁業を分ちて免許漁業、許可漁業、届出漁業の三種と爲す免許漁業は一定の水面に漁具を建設又は敷設し一定の漁期間之を定置するもの、一定の水面を區劃して養殖を爲すもの、海濱一定の場所に於て一定の漁期間繰り返し漁網を曳寄せて爲すもの、一定の水面に於て一定の漁期間繰返し漁網を建設又は敷設して爲すもの、一定の水面に魚類を集合せしむる設備を爲し經營するもの、此の外水面を専用して爲すものの六種とす免許を受けたる者は漁場及保護區域内に於て他人を排斥して漁業を營むことを得許可漁業は捕鯨業「トロール」漁業、潜水器漁業

鯨族以外の海獸漁業其の他合計十一種の漁業にして漁業の種類に従ひ或は朝鮮總督に於て或は道知事に於て之を許否す固より免許漁業と異り漁業權を發生せず従つて排他的效力を有せず其の許可の目的は水産動植物の蕃殖保護及漁業取締に在るのみ届出漁業は前二種の漁業に屬せざる凡ての漁業にして單に届出をなし鑑札の下附を受くれは足れり漁業の出願其の他の手續を爲す者は府令の規定に依り一定の手數料の納付を要し且漁業者は漁業税を賦課せらる

大正九年末に於ける處分件數は免許五百十二件、許可七千七百七十四件、届出九千九百十八件なりとす

第三節 水産業の保護獎勵

(イ)水産物の保護 水産物保護の方法としては一定の漁業に對する許可は勿論漁具漁法を制限し濫獲酷漁を嚴禁し又漁場漁期並採捕物の體長に一定の制限を加へ捕鯨業の如きは其の船數並漁期を潜水器業の如きは使用の區域並其の稟數を制限し有毒物爆發物の使用は絶対に之を禁止せり而して之に關する限地的の者は各道特殊の漁業取締規則を設け其の周到を期し永遠に漁利の確保を期せり

(ロ) 漁業に關する組合 漁業に關する組合に二種あり即ち水産組合及漁業組合是なり水産組合中の主なるものは朝鮮水産組合にして本組合は初め外國領海水産組合法に依り設立せる舊韓國沿海に出漁する内地人の組合なりしか併合と共に内鮮人を網羅し漁業令に依る水産組合とし全朝鮮を一區域とし内鮮漁業者を以て組織し水産業の改良發達水産動物の蕃殖保護其の他水産業に關し其の利益を圖るを目的とす而して本部を釜山に支部を各道に置き尙樞要の漁村に出張所を配置し諸般の業務を施行し水難救濟醫療施藥通信貯金等漁民共同の利益を圖り成績大に見るべきものありのみならず一面本府及各道と相呼應して行政上の補助機關を爲し重要なる公共團體たるを認め本府より年年三萬圓の補助を爲せり此の外水産組合として許可を與へたるもの五組合あり何れも海藻又は海苔組合にして海藻販賣者又は海苔養殖業者を以て組織し海藻の蕃殖保護製品の検査海苔の養殖並製造の改良指導を行ひ著實成績を收めつつあり

漁業組合は一定の地區内に住居する漁業者が漁業權を取得し又は其の貸付を受け組合員の漁業に關する共同の施設を爲すを目的とし現に許可を與へたるもの大正九年度末に於て八十六組合あり何れも穩健なる發達を遂げ各道に於ては組合の經濟狀況に依り地方費の補助を爲し以て之が指導監督に努め居れり

- (ハ) 漁業の指導獎勵 漁業者に對する直接の指導獎勵は主として地方廳をして之れに當らしむ地方廳は地方費又は臨時恩賜金を以て漁撈、製造、養殖に關する各種試験及傳習、漁具、漁船の配付、貸付又は其の購入費の補助、漁業資金貸付、製造養殖業の指導補助、水産講話等の施設をなし傍ら漁業者の副業又は勤儉貯蓄を獎勵し一面内地人漁業者の移住を獎勵する等銳意斯業の發展を期せり大正九年度に於ける各道事業費の總額は地方費豫算額(授産費を合せ)十六萬五千九百圓を算す
- (ニ) 漁船避難港修築補助 朝鮮の沿岸には大小の港灣三百有餘箇所あり漁民は常に漁港として使用しつゝあるも多くは天然の形勢に放任し何等人工を加へて風浪を遮屏すへき防波堤等の設備を爲したるものなきを以て一朝天候險惡と偽り風波の激動を生ずる時は出漁者は寄港の便宜を失ひ空しく海上に漂流するの悲境に陥り年年之が災害を被るもの尠しとせず故に總督府は漸次港灣の調査を遂げ年年若干の金額を補助して之を修築を企てつつあり大正九年迄に完成せるものは忠清南道於青島外八箇所にして其の總工費二十三萬九千圓内國庫補助額十三萬五千圓なり
- (ホ) 水産製品検査 朝鮮に於ける水産製造品の産額増加するに伴ひ輸移出額亦累年其の數量を増加し大正九年に在りては産額二千百八十萬圓に對し輸移出額約九百萬圓に達するに至れり然れども製品の改良及統一に關しては未だ遺憾の點尠からず殊に近來製品量目の増加を圖らむが爲不正の

手段を爲すの弊を生し又朝鮮に於ける水産製造業は多くは其の規模小にして製品區區に涉り其の統一を缺き大口の取引に適せず現に外國に輸出するものと雖多くは一旦内地に移出し更に内地商人の手に依りて輸出せらるるを以て是等の弊害を矯正し製品の統一を期せむか爲大正七年五月總督府令第五十四號を以て水産製品検査規則を發布し同年七月一日より之を實施せり然れども輸出品は前述の如く多くは一旦内地に移出せらるるを常とするか故に其の取締及検査は内地と同一方針を採り朝鮮に於て検査に合格したるものは内地に於て再検査を行はざることをなし其の検査品目及検査標準等に付努めて内地と同一の步調に出づることとし農商務省と之が協定を遂げ以て本規則の實行に力めたり又検査は輸出取締の關係上各税關をして之を行はしめ税關の設置なき地に在りても製品の輸移出盛なる箇所に対しては検査所を設置し又必要に應じ一定の期間臨時検査所を開設することとせり現在検査所は仁川、元山、釜山、鎮南浦、清津、新義州、木浦、甘浦、麗水、統營、濟州、注文津の十二箇所、常設検査所は鬱陵島、長箭、城津、雄基の四箇所、臨時検査所にして検査員は検査の傍ら地方製造地に出張し製品の改良指導に従事せり検査成績は施行後日尙淺きに拘らず頗る良好の結果を奏し漸次製品の向上取引の改善と共に價格の昂騰を見るに至れり

第四節 水産試験及調査

水棲物の種類分布の狀態及習性等を調査し有望なる水族に對する漁法漁獲物の處理及蕃殖保護の方法を研究し遺利の開發と斯業の發達に資する目的を以て大正元年度以降同九年度迄豫算に水産試験費を置き水産調査及各種試験を行へり

水産試験は之を漁獲、製造及養殖の三部に分ち同時に海洋觀測を爲せり概況左の如し

(イ)漁撈試験 重要水産物に付其の分布夫來又は生殖の狀態又は回游の季節漁法の適否、漁業經濟等を調査するものにして從來施行せしものは鰻、石首魚、太刀魚、大鰻、秋刀魚、柔魚、蟹、鱒、鯖、沖鰯、旗魚、鰻及冬季漁撈試験なりとす又海底に於ける重要水棲物に就き其の分布並棲息の多寡を調査し以て遺利の開發に努むるを共に貝藻類の蕃殖保護上相當の措置を講ずる爲潜水器を使用し全沿岸に亘り淺海探檢を爲せり

(ロ)製造試験 寒天製造、玉珧貝の煮乾、乾蝦、鰯、魚膠製造、鱒、石首魚、鯖の鹽藏にして最近數年間に實施せるものは米國向鹽鯖、支那向鹽石首魚、鹽鱒、鹽鰻、鹽乾鱒、鹽乾明太魚、鹽鱈、鹽鱒、鹽太刀魚とす試賣の結果は未だ明かならざるものありと雖大體に於て頗る多望なるを認めたるを以て大

正七年度中支那各地に調査員を出張せしめ支那へ嗜好の状況取引關係及販路等の調査を爲さしめ以て之が販路の開拓に努めたり又本府は夏季低廉なる魚類を貯藏し冬季魚類缺乏の時に當り之を朝鮮内地及支那に輸送して魚價の調節を圖ると同時に輸入鹽魚の防遏に資する爲仁川郡山元山の三箇所に魚窖を建設し鹽魚の貯藏試験を行ひ頗る良好の成績を挙げたり尙既往の試験中成績の最も顯著なるものは寒天製造試験にして從來朝鮮には寒天の原料石花茶の産額多きに拘らず全部原料の儘内地に移出し寒天に製造したるものなきを以て本府は大正二年度慶尙北道大邱及全羅南道長城の二箇所に於て之を製造を試みたるに内地製品に比し甚しき遜色なきを認め獎勵したる結果全羅南道慶尙南道及慶尙北道に斯業を起す者を生し將來益る有望の事業たるに至れり

(ハ) 養殖試験 大正元年度より引續き威鏡南道高旗郡上山面に於て鮭の人工孵化試験を行ひ毎年其の生育稚兒三百萬尾を放流し成績大に見るべきものあるを以て大正八年度よりは五百萬尾孵化放流の計畫を立てたり又大正四年度より慶尙南道密陽郡山外面に養殖試験場を設置し池沼河川又は稻田利用の目的を以て鯉の孵化養殖試験を行ひ斯業獎勵の爲其の養殖稚魚は當業者の希望に由り之を配付し尙大正七年度より全羅南道康津郡康津灣内道岱面に鹹水試験場を増設し牡蠣養殖試験を開始せり日尙淺きも目下蠣苗の附著良好なるを以て大に今後の成績を期待しつつあり

(ニ)海洋観測 海洋の状態及水族の去來洄游を學術的に調査研究し漁獲豊凶の原因を探究せむが爲沿海観測、横斷観測の二種に分ち之を施行せり沿海観測は各道沿海に在る朝鮮水産組合支部十二箇所及主要燈臺十箇所を選び之に囑託して定期又は毎日観測を爲し横斷観測は試験船鷗丸をして之を爲さしめ大正七年八月農商務省に開會の全國海洋調査協議會に於て打合せたる所に基き近接内地各縣と連絡施行せり

(ホ)水産試験場の設立 以上の水産試験及調査は從來本府に僅少の臨時職員を置き之を行ひたるものにして其の事項の多くは内地の模倣に留まり姑息的方法たりしを免れず今後進んで學術的基礎の上に立ち一層徹底せる試験調査を行ひ以て斯業の發展を期するには勢ひ獨立せる試験機關を設立するの必要あり依て大正十年度より新に釜山牧の島に水産試験場を設立し從來本府に於て施行しつゝある試験調査事業は勿論漁撈、製造、養殖の各方面に涉り組織的に之れを試験調査を行はしむることとせり又右の外各道中地方費を以て設置せる水産試験場は江原道、咸鏡南道に各一箇所あり何れも最近の設置に係るものにして今後國費の水産試験場と相俟て斯業に貢獻する品物からさるへし

第五節 水産業發展の狀況

(イ)日本海方面 豆満江口より釜山港に至る日本海に接したる東海岸は海岸線の延長約一千哩にして東朝鮮灣を中心としてくの字形を爲し沙濱懸崖相連り好箇の沿岸漁場を形成せり潮汐の干満は微少なれども水深く各種水族の滯留に適し而も「リマン」海流は北より寒帶性水族を輸送し對馬海流は南より溫帶性魚族を齊らし來り共に水産の分布を濃厚ならしめ漁業の利殆ど無盡藏と稱せらる此の沿岸に於ける漁業發展の狀態は併合以來頗る顯著にして從來朝鮮人の經營に係る咸 南道の明太魚、江原道の鰯、鮑及慶尙北道の鰈の外觀るべきものなかりしか内地人の移住増加と共に舊來の漁具漁法を改善し大數網、八角網、角網等の定置漁業、巾着網、權現網等の運用漁業等比較的大規模漁業の普及發達を來し舊來の漁獲を一層増大せるのみならず、從來振はざりし鱈、鯖、鱈漁業も急速の發達を爲し大正元年度に比すれば五倍乃至十倍に上り價格も十倍以上に増加せり而して其の製法も亦改善せられて殊に近年新に勃興せる乾鱈製造の如きは其の産額八十萬圓に上り鱈漁業の一大發展を促せり其の他素乾明太魚、乾牡蠣、鹽鯖及鰯、鰻肥料等も著しく製法を改良し其の面目を一新するに至れり

(ロ)多島海方面 釜山港より木浦附近に至る南海岸は大小の島嶼碁布散點し爲に多島海の稱あり此の沿岸は犬牙錯綜して半島岬灣相交り廣漠たる海域を占め水深概ね八十尋内外にして漁具の使用

に便なるのみならず寒暖兩海流の影響を受け水族の分布豊かにして然も廣大なる平野に接し市場大河、港灣に富み九州中國方面の連絡容易なるが故に漁獲物の集散便にして内鮮人の漁業共に進歩し釜山、馬山近海に於ける鱈、鯖漁業の如き鎮海灣附近の鱈漁業、羅老、青山、巨文の各島及所安島近海の鯛、鯖、鱈漁業の如き濟州島沖に於ける鱈、鮑、石花菜及鱈漁業の如き其の他汝自灣に於ける鰈及麗水灣に於ける王妃貝漁業等の如きは最著名なり又製造品も頗る豊富にして統營麗水地方の煮乾鱈、巨濟島の乾鱈、濟州島の乾鮑及鮑罐詰、麗水灣の乾鰈、貝柱、木浦の海藻類は其の主なるものさす就中慶尙南道の鱈は其の産額四百萬圓を超へ之が製品たる煮乾鱈は三百九十萬圓に達し鱈は九十萬圓同製品百萬圓全羅南道に於ては海蘿、和布、海苔、天草等の海藻百四十萬圓を最とし南海岸に於ける水産物の大宗なり

(ハ)黃海方面 木浦附近より鴨綠江口に至る黃海方面に接したる西沿岸は西朝鮮灣及仁川近海群山近海等に依りてゝる字形に灣曲し河口、湍灣、潟州、礁脈、淺灘及群嶼相食みて海岸線の錯綜名状すへからず海底は遠淺を爲して黃海の中心に至るも水深五十尋を超む爲に潮汐の干満大にして三十尺に達する處あり冬季暖帶性水族の滯留に適せざるも春季八十八夜前後に至れば石首魚、鯛、鱈、鰈、鱒等産卵の爲二十尋以内の淺所に群來するを以て年年豐漁あり就中全羅道の七山灘、忠

清道の煙島近海、黃海道の延平灘及平安道の魚泳島近海に於ける石首魚漁業は東海岸の明太魚、鯖と相匹敵し朝鮮海三大漁業の一と稱せらる尙此の方面に於ては蛤蜊等の貝類多く棲息し且各種魚介類の繁殖に適當の場所多く近年資本家の本事業に奪目するもの漸次増加するに至りたるを以て將來干潟地利用繁殖業は括目に償すへし殊に西海坪の漁業が近來長足の發達を遂げたるは本府及各道の奨勵と内地通漁者に依る鯨鰯網漁業の普及發達にして石首魚の盛漁期に於ては全羅北道於青島附近より黃海道延平島に至る間七八百隻の漁船輻輳し一大壯觀を呈せり上述の如く朝鮮沿岸は其の海勢千態萬狀にして其の漁業狀態も地方により各其の趣を異にすと雖概して有望の漁場にして將來猶進歩發展の餘地あるを見る

内鮮人漁獲及製造高

大正九年十二月末日

道名	漁獲物價額	製造品價額	合計	主要生産物
哀畿道	四七三、四三九	四五〇、六九四	九二四、一三三	鯪、石首魚、鯛、鮫、鹽鯪、鹽石鼎首
忠清北道	三、一〇〇	—	三、一〇〇	鯪、鯉、目張鹽

道名	漁獲物價額	製造品價額	合計	主要生產物
忠清南道	一、四五一、五九八	五二七、八一〇	一、九七九、四〇八	鱧、石首魚、鱧、鯛、大刀魚
全羅北道	一、〇七四、八八三	三三一、八五二	一、四〇六、七三五	鱧、石首魚、鱧、鹽石首魚、鯛
全羅南道	六、五六四、三一四	二、九五八、八〇三	九、五二三、一一七	石首魚、鱧、蝦、大刀魚、海羅、和布、梓粕
慶尙北道	四、四八三、五九七	九四〇、六四一	五、四二四、二三八	鱧、鯖、鱈、鱧、鰻、和布、鮑
慶尙南道	一、三八五、九三二	九、一二一、四三四	一一、〇〇七、三六六	鱧、鱈、海蔘、大刀鱈、鱈、煮干
黃海道	一、六七四、二七三	九一一、四二四	二、五八五、六九七	石首魚、鱧、鯛、鱧、鹽石首魚
平安南道	七六四、〇三四	二七四、一六九	一、〇三八、二〇三	鱧、蝦、鹽石首魚
平安北道	八三九、五七〇	三〇三、二二一	一、一四二、六九一	石首魚、火魚、鱧、鯛、鱧、火魚
江原道	一、五四一、八一五	一、〇〇三、四六二	二、六四四、二七七	鱧、和布、鱈、明太魚、干鱧、鮑
咸鏡南道	四、六一六、二二〇	二、八八六、九六三	七、五〇三、一八三	明太魚、鱈、鱧、鱧、乾明太魚、鹽明太魚卵

威 鏡 北 道	一、九二一、七七〇	一、五九三、〇八七	三、五一三、八五七	明太魚、和布、鮭、鯨、乾明太魚
總 計	三九、二六四、六四五二一、四〇二、四六〇	六〇、六六七、一〇五		

第六節 水産業の改良及水産業の狀況

水産業改良の方法は漁船漁具及漁法の改良、漁業者の知識技能の養成、水産に關する調査試験の施行、水産物の處理、販賣方法の改善及關係機關の普及發達並販路の擴張、水産物の人工増殖の奨励需給の調節及産額の増進、内地人漁業者の移住及内鮮人漁業者間の統一融和、水産組合又は漁業組合の設立、漁業者の副業及勤儉貯蓄の奨励等はなり改良漁船漁具及漁法の普及に就ては極力奨励の結果鮮人漁業者の内地式漁具漁法に依るもの近年著しく増加し就中一本釣延繩等の釣漁業最も發達し地曳網流網鮫鯨網等の網漁業之に次ぎ其の漁獲成績の如きも内地人漁業者に比し甚しき遜色を見ず又大敷網巾著網揚操網臺網等の大規模漁業を経營する者漸次其の數を増加するに至れり漁船の改良は漁具漁法の改良に比し遅遅たるの憾あるを免れざるも朝鮮人の使用する改良漁船の數は明治四十四年に於て僅に入百八十二隻に過ぎざりしもの大正九年末に於ては六千二百四十五隻を

算し之を大正八年末に比すれば七百六十五隻を増加せり

(イ)内鮮人の漁業 大正九年中に於ける内鮮人漁獲高は内地人一千九百五萬七千六百六十三圓朝鮮人二千〇二十萬七千四百八十二圓合計三千九百二十六萬四千六百四十五圓にして既往三箇年間に於ける漁業概況を示せば左の如し

朝鮮沿海漁業概況

年	出漁船數		出漁人員		漁獲概算高		平均漁獲高		
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人			
大正七年	一四、一九三九	〇〇、五二	二、九七四	三、四九三	三、四一四	六、八八七	四〇三	九三、七二一	五九
同八年	一九、八六三	四〇、三六〇	三、五八七	三、四九五	三、九三〇	五、九三三	八、四四一	一、七五七	七〇
同九年	二二、六六八	四〇、三六〇	三、三六五	三、三六五	三、三三一	四、八二九	〇、五七七	一、六三三	七五

(ロ)内鮮人養殖業 漁業の獎勵と同時に水産物濫獲の取締を爲し其の蕃殖を保護し更に進て人工増殖と需給の調節を圖る目的を以て養殖業を奨励し本府に於ては鮭、鱒及鯉の人工孵化及貝類養殖

試験を爲し各道に於ては海苔、あけまき、まら、牡蠣、刺、鯉、鰯等の養殖試験を行ひ、實地に示すと共に適地を調査して適種魚介藻類の養殖を奨励したる結果著しく斯業に對する觀念を普及せしめ未だ以て之が盛況を見るに至らず現在民間事業として最も發達せるは全羅南道及慶尙南道管内に於ける海苔養殖とし之に次くは咸鏡南道永興灣咸鏡北道造山海全羅南道高興郡の牡蠣養殖にして京畿道忠清南道管内の蠔、全羅南道の灰貝、鰯及慶尙南道、京畿道管内に於ける鯉、鰻の養殖は規模大ならずとも雖成績稍見るべきものあり大正九年末に於ける養殖面積は一千四百萬坪收穫高四十四萬圓なりとす

(ハ) 捕鯨業 現在捕鯨業を許可せるは東洋捕鯨株式會社にして捕鯨船數は十隻に限定す大正九年に於ける捕獲高は頭數二百二十三頭に於て此の價額七十九萬五千四百六十一圓なり左に最近三箇年に於ける概況を表示すへし

捕 鯨 狀 況			
年	捕 鯨 頭 數	同 上 價 額	一 隻 平 均 頭 數
大 正 七 年	234 <small>頭</small>	631,130 <small>圓</small>	23 <small>頭</small>
			一 頭 平 均 價 格
			2,697 <small>圓</small>

年	捕鯨頭數	同上價額	捕鯨頭平均數	一頭平均價格
同 八年	一九六 <small>頭</small>	七八八、八七八 <small>円</small>	一九・六 <small>頭</small>	四、〇二四 <small>円</small>
同 九年	二二三	七九五、四六一	二二・三	三、五六七

(二)水産物製造業 朝鮮人間に於ける水産物の加工は漁獲物の保存上單に之を鹽藏とし又は乾製と爲すに過ぎず其の方法頗る簡單且拙劣にして只鮮内の需要に應ずるに過ぎざりしも之が改良指導の結果逐年製造方法の改善と利用の發達を見るに至り一面内地人製造業の發展に伴ひ著しく生産額を増加せり大正九年に於ける製造高は内地人九百五十二萬一千百九十八圓、朝鮮人一千百八十八萬一千二百六十二圓合計二千百四十萬二千四百六十圓に達せり左に最近三年間の概況を表示す

水産物製造高	
年	内地人 朝鮮人 合計
大正七年	八、六七五、九八四 <small>円</small> 一〇、四三九、九三七 <small>円</small> 一九、一一五、九二一 <small>円</small>

同	同	一三、七八三、五九八	一五、三二六、四九八	二八、一一〇、〇九六
九	八	九、五二一、一九八	一一、八八一、二六二	二一、四〇二、四六〇
年	年			

(ホ)内地漁民通漁 内地漁民の通漁は併合後著しく發展し其の漁場區域は朝鮮全沿海に亙り毎年春季より秋季に至る間は通漁者最盛なり南及東海岸に於ては縛網、巾著網、流網西海岸に於ては鰯罾等大中漁業の發達殊に顯著にして且通漁者は出漁地方に依り各團體を組織し漁獲物の處理運搬及物資の供給その他共同の作業に任し其の組織的動作頗る整然たるものあり此の如きは一般水産業の獎勵開發、行政機關の整備及交通の發達並内鮮人の融和に基因せざんばあらず

朝鮮海出漁團體表

名稱	位置	團體員	團體基金	團體積立金	團體補助金	事務經費	漁業根據地	設立年月
香川縣 朝鮮海出漁團	香川縣高松市	二八八	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	瓦文島 青島 濟州島	明治四十五年二月

大正九年

名 稱	位 置	團 員 員	基 金 體	積 立 金 體	補 助 金 體	事 務 所 費	漁 業 根 據 地	設 立 年 月
岡山縣出漁團	佐賀市	一三三	ナシ	ナシ	三〇〇	二、九四七	羅蘭島	明治四十四年八月
佐賀縣出漁組合	赤松町三五	七五六	一〇,〇〇〇 円	ナシ	ナシ	二、八五五	浦島	同四十年
長崎縣南高來郡出漁組合	南高來郡役所	一四七	ナシ	ナシ	郡費 二二〇	蛸島	同四十二年	
香川縣出漁團	香川縣廳內	二、一八〇	ナシ	ナシ	ナシ	三、一七九	津山	同四十五年
岡山縣知氣郡出漁團	岡山縣日生町	八〇	ナシ	ナシ	ナシ	同	同四十二年	
朝鮮海出漁團	廣島縣沼隈郡鞆町	三三	ナシ	ナシ	ナシ	大邊	同四十二年	
鹿兒島縣朝鮮海出漁組合聯合會	鹿兒島市山下町	四三	五、五〇〇 円	ナシ	ナシ	同	同四十二年	
三重縣漁業團	三重縣廳內	五七三	ナシ	三〇〇	ナシ	釜釜	同四十二年	
遠洋漁業團	三重縣廳內	五七三	ナシ	三〇〇	ナシ	釜釜	同四十二年	

長崎縣	長崎縣廳内	二四三六	一	三〇〇	九、三〇〇	釜承	山浦	明治四十一年三月
遠洋漁業團	兵庫縣廳内	一九三	一	一	統承	營浦	同四十二年	
兵庫縣	兵庫縣廳内	一	一	一	細竹	浦	同四十三年	
海外出漁團							九	
總計		八、四四〇	一五、五〇四	五〇〇	二、五〇〇	三三、〇六一	月	

(へ)内地漁民の移住及漁村經營 内地漁民の移住は關係内地府縣の獎勵と通漁の發展とに伴ひ南鮮地方より漸次北鮮地方に普及し今や邊陲の地と雖團體移住又は單獨移住を爲す者少からず此等移住民に對しては漁村の經營上諸般の便宜を與へ或は補助金を交付する等努めて定著移住を獎勵し著實實蹟を擧げつつあり

内地人水産業者戸口

年	漁業		養殖業		水産物製造業		水産物販賣業		合計	
	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口
大正七年	三、三〇七	一三、一六一	一七	六三	七四七	二、九七〇	一、一六〇	三、四五七	五、三三二	一八、七五〇
同八年	二、六六七	一〇、二八八	二	七〇	七一九	三、九三三	一、三三三	四、六五九	四、七四八	一七、六八九
同九年	三、〇六八	一三、五二二	三	一〇三	五三九	二、〇〇〇	一、三四〇	三、八五九	四、八七一	一八、四八九

(ト)水産業の指導獎勵に關する技術員配置

韓國時代に於ては水産業の指導獎勵に關しては何等制度の備はれるものなく其の事務の如きも農工商部農務局に於て管掌し統監府時代に於ても中央部に技師、技手を併せ僅に十一名を配屬せるに過ぎざりしか併合と共に直接當業者の指導に當らしむべき各道技術員の配置を必要と認め本府技術員を減し新に各道に一名乃至二名の技術員を配置し爾來本府及地方廳とも漸次多少の増員を爲し大正九年末現在に於ては國費に依る技術員は本府十人地方廳二十三人計三十三人地方費及恩賜金に依る技術員四十一人(内七人試験場及傳習所勤務)にして水産に關する各種の調査試験及指導獎勵に當れり

(チ)水産傳習及講習

各道に於ける傳習講習に道に依り各其の方法を異にす雖之を大別すれば常設的傳習所を設置せるものと一定期間傳習地を定め又は巡迴的に傳習を行ふものとに區別するを得へし大正九年度迄に於ける傳習生總數は二千三百九十一人同修了者三千三百〇三人にして一道平均修了者二百七十五人の多きに達したり而して傳習修了生に對しては成るべく共同して漁業を經營せしむる爲修了後傳習用の漁具及漁船を給與し又は漁船漁具の購入補助金を交付し以て講習中習熟したる技能を

發揚せしむるに便ならしめ以て地方漁業の中堅たらしむることを期せり傳習事業開始以來の成績は道に依り 長一短ありと雖概して良好の成績を擧げ地方に於ける模範漁民として漁村の開發上 效驗する處尠からず

여 백

第十八章 拓殖事業

朝鮮に於ける拓殖は獨り東洋拓殖株式會社のみならず他に幾多の經營者ありと雖其の規模較や小なるを以て本章には特に該會社の拓殖事業に關する最近の概況を掲げて其の一斑を示さむとす同會社の經營する事業の種類は(一)拓殖上必要なる資金の供給(二)同農業、水利事業及土地の取得、經營處分(三)同移住民の募集及分配(四)移住民の爲必要なる建築物の築造、賣買及貸借(五)住移民及農業者に對し拓殖上必要なる物品の供給及其の生産したる物品の分配(六)委託に因る土地の經營及管理(七)其他拓殖の爲必要なる事業の經營(八)定期預り金等にして本店を東京に支店を朝鮮京城、大田、大邱、馬山、木浦、裡里、沙里院、平壤、元山、滿洲奉天、哈爾濱、關東州大連、支那山東省、青島の十三箇所に置き別に支那吉林省間島に京城支店の出張所を設け天津、濟南、安東其他重要地に駐在所を置き事業を行ひつつあり

會社の資本金は當初一千萬圓なりしが大正七年五月増資して二千萬圓と爲し大正八年九月再増資して現在五千萬圓(總株數百萬株、一株額面五十圓、内四十萬株は金額拂込濟六十萬株は四分の一拂込)にして外に社債未償還總額壹億四百六十三萬五千二百九十五圓(内千七百六十萬二千六百九十五

圖は外債未償還額) なり

東洋拓殖株式會社營業概況

年 度	資 本					損 益 勘 定		配 當 金	職 員 數		
	資本金	拂込 資本金	政 府 出資金	準 備 金	政 府 補給金	總 益	總 損			利 益	
大正七年度	千円 2,000	千円 11,500	千円 3,000	千円 1,407	千円 —	千円 7,678	千円 9,186	千円 7,401	千円 1,780	六九三,000 (年八分)	八
同 八年度	千円 5,000	千円 27,500	千円 5,000	千円 4,329	千円 —	千円 3,685	千円 2,187	千円 9,859	千円 2,336	一,518,000 (年九分)	四五四
同 九年度	千円 5,000	千円 27,500	千円 5,000	千円 4,573	千円 —	千円 9,263	千円 3,705	千円 9,928	千円 5,776	二,750,000 (年一割)	五七〇

(イ)土地の經營 會社の經營せる土地は二種類より成る即ち出資地及買收地是なり出資地は舊韓國政府が引受株式六萬株に對し拂込に代へて提供せる土地を謂ひ買收地は會社自ら之を買收せるものにして併合の年即ち明治四十三年度末に於ける總面積は一萬千三十五町歩餘に過ぎざりしか今や左表の如く多きに達せり之等の土地に移住民割當地、造林地、林業苗圃地の如き直營地外の耕地は從來の慣例に依り朝鮮人をして小作せしめ一面堤防用水路溜池等の修理改善を行ひ土地の改良生産の増加に努めつつあり

東洋殖産株式會社經營土地

大正十年九月末日

道別	町	町	町	町	町	町
道別	番	田	畑	山林	雜種地	合計
京畿道	五、一〇〇・八五三五	三、八四六・四三三七	一三七・二四〇六	一四七・七八三六	一六五・八五三二	九、三九八・一七一四
忠清北道	七三三・四九一〇	五三九・一七三三	三九・三三三三	三、一五二一	九・一五二一	一、三二五・三〇三七
忠清南道	四、七六五・五五三三	八四〇・一五三三	四七・九〇〇七	一五、五四二〇	八四・七八二五	五、七五三・六三〇六
全羅北道	八、八〇四・一四三三	八三三・九七一五	四七・四〇一五	一八〇・五二二三	七二・六八二三	九、九三三・七三二七
全羅南道	一〇、〇〇三・一三三三	三、五七七・一四三八	八四・〇七〇三	一、〇九三・五四〇五	七九・五〇一〇	一三、八三六・一九〇三
慶尙北道	四、〇三九・一四三三	一、六二六・三九一三	一三四・八四一七	三三七・二五〇五	七五・三〇一九	六、一〇三・〇〇〇六
慶尙南道	五、一九三・一三三六	一、七六三・〇五〇六	一七五・二五二七	六九八・八八一二	二二一・九七一	八、〇三〇・二七一一
黃海道	一〇、一〇八・三〇三三	四、一七七・〇〇一九	六八・六六〇〇	一、六九七・八七三二	一七九・二九三四	一六、一七一・一四一七
江原道	三三、〇二三	二、〇一〇・九二三	五・五〇三八	五六一五	八七三・七五一五	一、五〇〇・七五〇五
平安北道	六七九・五七一七	四三〇・二七〇七	六・五五〇九	七五・一二二〇	一四四・六三三三	一、三三六・一七三六
平安南道	七二一・三六〇六	一、四三九・一三三三	一六・二六二六	六一・二九一六	一一七・三三〇六	三、三三三・五二〇六
咸鏡北道	八六九・三三〇六	一、一七四・九二一八	一〇・四七七七	六一・七七三〇	一三七・九二二六	二、三三三・三六〇六
咸鏡南道	—	—	—	六、七七三・〇九〇九	一五七・八六〇〇	六、九三〇・九五〇〇

道 別	畝	田	岱	山 林	雜種地	合 計
總 計	五二、三三〇・七四三三 町	一九、三六八・四五〇五 町	七六・四八〇一 町	一一、〇一五・三三三三 町	二、二九八・〇八二三 町	八四、六七〇、〇〇〇 町

(口)農事の改良 社有小作地に於ける内鮮農民に對し稻作の改良獎勵の爲明治四十三年以來毎年各地に原採種小作田を設け改良種の栽培普及を圖ると共に苗代の設置施肥、挿秧除草、害虫驅除豫防、調製法等の實地指導を試み又一面種籾、農具、肥料等の貸付をなす等専ら農事の改良に努たる結果著著として好成绩を挙げ大正九年度に於ては社有小作畝中二萬九千六百六十町歩餘に改良種の普及を見略一段落を告げたるもこれら幼稚なる鮮農に一任し置くときは逐年混種の量を増加して品質の劣變を來すこと明なるを以て、これを防止し尙一層改良種の普及及赤米の除去異品種の混淆を防除し以て産米の品質改善を期するため本年度に於ては原種田九町三反歩餘採種田三百七十九町二反餘を設置し今後四箇年計畫を以て全部に互り更新をなし改善の實を擧げんことに努力しつつあり

(ハ)金肥配給 鮮米の増收及農産物の増殖を圖らむ爲堆肥、綠肥の普及獎勵は勿論従事移住民並

小作人にのみ限り貸付せし金肥は大正八年の初頭より鮮内一般農民に對しても之の配給の必要を認め同年より水旱害の虞少なき地に對し效果確實にして安全なる大豆粕油粕等を低利を以て配給したるか其の成績良好なるを認め大正九年度には施用面積約三萬二千町歩金額三百萬圓に達せしか大正十年度に及びては前年度の米安と金融梗塞とにより施用面積數量共に約五割に減少せしも之は一時的の現象にして金肥使用の必要は廣く鮮農に知らるるに至れり

(二)種子及農具供給 同社は農事改良及副業獎勵の目的を以て移住民並小作人に對し種苗農具の貸付を爲し種苗に於ては改良種粳、大豆、紫雲英を主として農具は揚水車、製糶器、製筵器、唐箕、稻扱器及蠶具等とす

(ホ)煙草事業 同社は葉煙草の改良發達を期する爲め外國輸出を企畫し、土耳其種及在來種の栽培に著手し實地の指導は勿論耕作組合の組織並補助、耕作資金の貸與等諸種の獎勵を加へ大正七年に於ては在來種十三萬貫、土耳其種一千八百貫大正八年に於ては在來種約二十萬貫、土耳其種二萬貫を生産し大正九年度に於ては在來種二十四萬貫土耳其種約一萬三千貫を生産し大正十年度に於ては在來種約廿五萬貫を生産し土耳其種は七月一日專賣令の實施に伴ひ事業一切を政府に引繼を了

したり

(へ)殖林經營 明治四十三年以來年年經營の歩武を進め大正八年度末に於て咸鏡南道、江原道、黃海道に亙り其の面積合計三萬三千二百町歩に達したり用材林に於ける主なる樹種はカラマツ、アカマツ、ケヤキ、クリ、クルミ、ニセアカシヤ等にして又薪炭林に在りてはグメギ、カシハ、ナラ等を植樹及天然生稚樹保育に依り造林を行ひつつあり苗圃は京畿道蘆島咸鏡南道德源及咸鏡北道獨津に之を設け其の面積十五町歩を經營せり

(ト)竹林經營 朝鮮の南部は竹林經營の適地なるも從來多くは天然に委し濫伐を極め年年荒廢するの狀態なりしを以て明治四十五年以來慶尙南道及全羅南道に於て民有竹林八十町歩餘を収し之を改良して模範林の經營に著手し一面には竹林新植の模範を示す爲國有未墾地の貸付を受け或は民有未墾地を買収し大正二年及同三年の兩年間に於て八十町歩餘に苗竹の新植を爲したるに其の生育頗る佳良なり此くの如く朝鮮に於ける竹林新植の嚆矢は同會社にして其の成績良好なり

(チ)水利開墾

一 平安北道泰川水利工事 同會社は大正二年五月平安北道龜城郡五峰面泰川郡西面及南面の三

面に跨る川坊江（大寧江の支流）流域畑地の改耕に著手し大正四年十二月竣功したるも更に工事の完全を期し大正五年三月以來改良工事を起し同年十一月完成せり其の灌漑區域は田約一千九百町歩にして用水は川坊江に井堰を設けて引水するものなるか主要なる工事は路幹支線延長五萬九千三百餘間隧道三箇所長七百餘間井堰一箇所伏樋十箇所流込二百十六箇所分水樋九十五箇所橋梁三百四十二箇所堤防延長一千六百間等にして其の工費は四十八萬五千六百餘圓を算せり

二 宮三面機力用水工事 全羅南道羅州郡良谷面及旺谷面一帯の同會社所有地は榮山江の左岸に在りて土地肥沃なるも河水は耕地面より十數尺低きを以て灌漑の用を爲さず用水不足の爲收穫意の如くならず仍て會社は揚水機械を据付け灌漑施設を爲すべく大正五年六月工事に著手し同年十二月之を竣工し蒙利水田二百五十餘町歩は施工前五箇年の平均に比し小作料增收毎年九白石内外を得而して主要なる工事は揚水機械（吸入瓦斯機十四吋セントリフエーガル唧筒）一臺機械及其の他附屬建物四棟水路延長三千二百三十八間、暗渠及土管九箇所掛樋一箇所土橋十一箇所等にして其の工事費は金二萬六千六百餘圓なり

三 長安坪開墾工事 本工事は同會社が京畿道高陽郡露島面長安坪所在國有草生地五百餘町歩を

開墾し漢江の汎濫を防止し移住民の收容を目的とするものにして大正元年九月起工し同四年七月竣功を告げ開墾整理地面積四百二十八町歩餘を得大正六年三月を以て官より之が無償附與を受けて目下鮮人に貸付し成績良好なり工事の主なるものは堤防延長九千五百八十四間、閘門四箇所、用排水路二萬一千九百二十一間、道路二萬九千七百四十九間、橋梁三十箇所等にして竣功後更に之が完全を期する爲改良増築工事を施し其の工事費は通計金三十三萬四千餘圓に及へり

四 羅岩里開墾工事 本工事は同會社が全羅北道益山郡望城面羅岩里所在國有未墾地百四十餘町歩の開墾を目的として錦江の汎濫を防止し灌溉排水の途を講せんとするものにして大正五年四月起工同九月竣功し水田百三十四町一反餘歩の新開墾地を得たり工事の主なるものは堤防二千五百餘間、用惡水路七千四百餘間、道路四千八百四十餘間、總管四箇所等にして其の工費は金三萬三千六百餘圓なり而して毎年租約二千石の小作料を收榷す

五 方丑池埋立工事 本工事は同會社が全羅南道羅州郡旺谷面方丑里所在舊溜池面積十三町八反一畝二十一歩を埋立て之を水田に墾成利用の目的を以て大正六年六月起工し同年八月五日竣功

耕地整理を行ひ良田十二町八反一畝十四歩を墾成せり用水は池塘に新設せる調節門に依り宮三面機力用水を利導すると共に雨水を貯へて之を補給に充て同時に排水を良好ならしめたり而して工事の主なるものは土工二千八百間、調節水門一箇所階段工一箇所橋梁六箇所幹線水路百七十二間、排水土管三箇所其の他附帯工事等にして其の工費は金二千五百二十七圓九十五錢を要し毎年小作料二百石を擧げつつあり

六 崇仁面開墾工事 本工事は同會社が京畿道高陽郡崇仁面地内國有未墾地十町三畝二十五歩を開墾したるものにして畑六反五畝歩を得大正九年四月無償付與せられ鮮人に貸付小作せしめたり亦本事業に關聯する舊河敷地十町一畝二十歩は同所中浪津河身改修を了したる爲同年四月總督府より會社に付與せり

七 細技面土地改良工事 全羅南道羅州郡細技面所在の同會社所有田は凡て灌漑の設備不完全なる爲連年旱害を蒙り收穫不定なるを以て同會社は該地方一帯の水利普及を企て工費金三萬七千餘圓を投し大正七年八月起工同八年八月竣功し大正九年度の如きは附近一般耕地移植挿秧に困難せしも獨り本貯水池蒙利地は其の貯水に因り其の後の收穫頗る良好なり

八 古阜水利工事 全羅北道古阜平野は耕地約四千町歩の沃野なるも古來水旱害の爲作付不能地
跡からざるを以て灌漑排水工事を企劃し關係地主の賛同を得て大正五年水利組合を組織し大正
八年四月工事の大部を完了し同年度の増収は粗四萬石なり而して本工事費は七十萬餘圓なりと
す

九 大池里土地改良工事 全羅南道羅州郡洞江面大池里同會社所有地面積六十一町歩は地味肥沃
なるも水旱害の爲收穫貧弱なるを以て之を改良工事を圖り其の第一期工事として貯水溝を新設
するに金五千一圓を投し大正八年七月豫定の工事を終了せり

十 自防浦開墾工事 全羅南道務安郡一老面所在干潟地二百六十六町歩を開墾し新に水田二百五
町を得んとするものにして大正七年八月同會社が工事費金十一萬二千五百圓の豫算を以て起工
し貯水池工事を除く外大正九年五月竣功せり貯水池工事は本年實施の筈なりしも同敷地拂下決
定せず之れを延期する事となれり

十一 龍岡開墾工事 平安南道龍岡郡端和面草生地百二十四町歩は同會社が大正八年十月開墾に
著手し尙貯水池敷地に當る國有地十萬六千餘坪は同年十二月拂下を受けたるを以て直に工事に
著手九年五月竣功し大正十年全部開墾を了したり

十二 於之屯水利工事 本區域は所謂載寧平野の一部にして從來水路を有するも其の施設不完全にして殊に用水採入堰堤は假土堤なるを以て屢決潰の厄に遭遇し灌漑不能に終るか如き慘害を蒙る狀況なり之が爲其の改良案を立て九年十二月實測をなし十年六月氏の設計を完了し八月地主に交付し九月地主會を開催し成規の手續を以て組合設立申請をなす事となれり其の蒙利面積四千六百五十一町歩(内社有地千參百六十町歩)工事費は豫算六十一萬圓なり

十三 此の外大正十一年に於て實施準備中のもの千潟地二件千百五十六町歩其の他許可出願地及水利組合事業調査地等大小二十二箇所總面積約六萬五千町歩を算す

(四) 移民事業 會社は明治四十三年移住規則を制定し拓地移民の計畫を樹立し主として内地人移民の募集分配を爲し何來移民を收容すること十一年其の戸數約四千戸人口約二萬人讓渡面積八千餘町歩江原道咸鏡北道の二道を除く外朝鮮全土に誇り地方開發農事の改良に貢獻する所鮮少なからず同社は拓殖事業の經驗に鑑み大正四年及同六年兩度移住規則を改正し土地讓渡、移住費貸付等に對し便法を講せる外純農業者以外に農業兼營者に移住の途を開き第二種移住民の一時拂込金並利率を低減し且つ移住民農業上の指導副業獎勵は勿論組合を組織して共同販賣及購買を斡旋し移住地の選定に一層周到なる注意を拂ふと共に教育、宗教、衛生、交通其の他移住民に關する諸種の

施設に關しては從來に比し其の保護を厚うせんことを期せり
 又移住民表彰手續を定め優良移住民に對しては特別の保護を與ふる外褒狀及賞品を授與し永く之
 を旌彰するの途を開けり、既往十一回の移住民募集狀況を示せば即ち左の如し

東洋拓殖株式會社移民事業

大正十年九月末日

回	期	應募戸數	承認戸數	現在		面積	移住費
				戸數	人口		
第一回(明治四十三年)		一、二三五	一六〇	一六	五五〇	二三九	一二、二九五
第二回(明治四十四年)		一、七一四	七二〇	三三四	一、六一五	五六六	二八、四四〇
第三回(大正元年)		二、〇八六	一、一六七	六二五	三、〇二七	一、一九三	五五、三四二
第四回(同)	二年	三、四七二	一、三三〇	五四四	二、五五九	一、〇七九	三七、三七四
第五回(同)	三年	一、九六四	一、一〇六	四一三	二、九三二	八〇六	二〇、〇一五
第六回(同)	四年	一、二八四	七七〇	二七四	一、二三四	五三九	一三、一五〇
第七回(同)	五年	一、一〇一	五四二	二二二	九七五	四二四	一三、四七八
第八回(同)	六年	一、五五二	六五〇	三二一	一、三九三	七四一	二一、二二三

第九回(同 七年)	一、五二九	五九八	三五四	一、四五六	八六八	二八、九〇五
第十回(同 八年)	三、一一一	九六七	四八八	一、八九六	一、二三二	四四、五六五
第十一回(同 九年)	一、四四二	五〇〇	一九六	七二四	三八〇	三、六五〇

本表に於て應募戸數に比し承認戸數の少なるは素質を精選せる結果と承認後申込者の都合に依り承認を取消したるもの等あるが爲めにして承認後病氣其他の事故に基き移住を中止し又は解約を爲せるもの等に依り現在戸數は承認戸數より自然減少せるを免れず
次に各道に於ける移住民分布狀況は左表の如し

道 名	戸 種		計 數
	第一種	第二種	
京 畿 道	五九三	一七	六一〇
忠 清 北 道	一六	一	一七
忠 清 南 道	二九五	一三	三〇八
全 羅 北 道	五四二	二四	五六六

道名	戸數	
	第一種	第二種
全羅南道	七〇〇	二六
慶尙北道	四五二	一三
慶尙南道	六七七	一七
黃海道	四四九	一九
平安南道	四	
平安北道	六	
咸鏡南道	一二	一
計	三、七四六	一三二
		三八七七

又移住民を出身府縣別に依り示せば即ち左の如し

高知	府縣	戸數	四六四
徳島	府縣	戸數	九七
宮城	府縣	戸數	二四
滋賀	府縣	戸數	八

佐福山岡熊香巖岐長愛愛

賀岡出口本川島阜崎知媛

四二六
三五八
三三八
二七三
二二九
一八六
一七一
一一八
一一四
一一一
九七

大和福新三鹿山鳥福宮石

歌 兒

分山井湯重島形取鳥崎川

九五
八〇
七〇
六九
六三
五三
四二
三六
三九
三九
二七

北海道 北都 京 靜 奈 兵 島 山 長 富 千 茨

道 都 岡 良 庫 根 梨 野 山 葉 城

三三
三三
三二
二一
二〇
二〇
一九
一八
一五
一三
一〇

栃 東 大 青 群 神 秋 岩 琦

計

奈

木 京 阪 森 馬 川 田 手 玉

一〇
八
七
五
五
三
四
三
二
三、八七七

會社の移住民は之を分ちて二種とす即ち第一種移住民及第二種移住民なりとす、第一種移住民は一戸に付田畑二町歩以内の土地の割當を受け其の土地代金に年六分の利子を付し五箇年据置き二十五箇年以内の年賦拂込を爲したる後該當地の所有權を取得するものにして全部自作することを要し第二種移住民は割當地十町歩以内の土地の割當を受け土地引渡の際土地代金の四分の一以上を一時に

拂込み残額は年七分の利子を付し二十五箇年以内の年賦拂込に依り土地を譲渡せらるるものにして一部を自作せば他は小作せしむることを得然れども大正十年四月移住せる第十一回移住民より第二種移住民の割當地は五町歩以内と定めたり、尙同會社は第十二回以後募集の方法を改正し當分第一種を募集せず第二種五町歩移住民のみを募集することとし小作地の調節及集約的に成る可く農事の良成績を擧げんことを期せり

前記第二種移住民は資力十分にして農事に經驗あり内鮮人を指導し得るに足るべき地方の中心人物を招致する方針なり第一種及第二種共移住後五箇年を経過し土地代金等二分の一以上を拂込むときは割當地の譲渡を受け又第一種移住民は土地の狀況其の他の事情に依り割當地の變更又は増加を受ける外土地購入の爲資金の貸付を受く以上の外鑛山業其の他拓殖事業經營者の業務に従事する傍ら農業を營まむとする者に對して其の經營者連帶保證の下に第一種移住民として承認せる特種移住民及五戸以上申合せ社有地以外の土地の買入を會社に要求し會社が該土地を買入れ之を割當てて第一種移住民たる事を承認せる買入譲渡移住民あり其の他移住民に薪炭供給の目的を以て移住地附近に適當なる造林用地あるときは可成之を貸付し又住家納屋の建築費又は購入費、種苗、肥料、農具及耕牛の購入費の補助として第一種移住民に限り一戸に付移住費二百圓以内の貸付の外住家築建材料の

一部又は購入費補給を受く其の他會社移住民は渡航の際汽車汽船の割引を受け又邊陲地方の移住民に對しては特に土地代金拂込方法及移住費貸付に關し特殊の方法を設け又は其の他の特殊の保護を與ふるこゝあり

移住申込の手續は毎年二三月頃會社が其の年募集すへき移住民の戸數並移住地を官報及主要なる新聞に公告するを以て同社移住民たらむとする者は同社移住規則に依り移住申込書を作成の上市區町村長又は府尹郡守島司の證明を得て京城支店に申出つへく申込書には最近の戸籍謄本又は民籍謄本を添附することを要し毎年九月末日迄に提出すへきものとす

(ル)資金貸付 會社は拓殖上必要なる資金を貸付す其の方法左の如し

- 一 定期償還貸付 (一) 移住民に對し五年以内の移住費貸付 (二) 生産者に對し其の生産を擔保とする一年以内の貸付 (三) 不動産、鐵道、鑛業權其の他不動産上の權利を擔保とする五年内の貸付 (四) 公共團體又は特例の法令に依り組織したる産業組合に對し五年以内の無擔保貸付 (五) 農業者二十人以上連帶して債務を負ふ者に對し五年以内の無擔保貸付 (六) 財團其の他確實なる物件を擔保とする五年以内の貸付 (七) 移住民取扱業其の他拓殖事業を營むことを目的とする會社の株券又は債券を質とする五年以内の貸付

二 年賦償還貸付 (一) 移住民に對し二十五年以内の移住費貸付 (二) 不動産、鐵道、鑛業權其の他不動産上の權利を擔保とする三十年以内の貸付 (三) 公共團體又は特別の法令に依り組織したる産業組合に對し三十年以内の無擔保貸付 (四) 財團其の他確實なる物件を擔保とする三十年以内の貸付

三 移住民取扱業其の他拓殖事業を營むことを目的とする會社の株券又は債券の應募引受
 拓殖資金の需要は逐年遞増の趨勢を示す今朝鮮に於ける貸付高を示せば左表の如く併合の年なる四
 十三年度末の貸付總額は百三十二口、五十八萬七千五百三十圓に過ぎざりしか大正十年九月末七千
 百八十口四千萬千二百九十五圓五十二錢となり實に六十八倍強將來益開展の傾向を有す而して之が
 使途は株券及債券引受の外土地開墾及改良、水利、築堤、農事經營、墾圃經營、殖林、果樹栽培、
 公共事業等各種の拓殖方面に互り就中近來水利事業の放資多きを占むるは産業開發上好現象なりと
 云ふべし

東洋拓殖株式會社貸付金

種 別	明治四十三年度末		大正九年度末	
	口	數 金 額	口	數 金 額

여 백

第十九章 祭祀及宗教

第一 朝鮮從來の祭祀

祭祀は政教の基つく所にして神祇を尊敬し祖先を崇拜するの風儀は古今を一貫して渝ることなし併合後は内地古來の風習儀制に基く神社崇敬の儀と朝鮮從來の規格を存續して祭祀を行ふ儀と兩者並行はる今先づ從來の規格を存して行ふ所の祭祀に就て其の概要を記せむに

(イ)八殿、三陵の享祀 高麗朝以前に於ける歷代始祖の魂殿と陵墓中享祀の先格あるものの祭祀を繼受して之を行ふものにて其の場所は京畿道管内に二殿一陵あり又慶尙北道管内に三殿慶尙南道管内に一殿平安南道管内に二殿二陵あり通して八殿三陵なりとす其の祭法は、毎年春秋兩度祝幣祝香を捧げ道知事臨て祝詞を讀み供饌其の他渾て舊格式法を存して之を革めず、而して殿陵守護の常時奉仕者は之を參奉と稱し殿陵の保存に要する經費は之を國庫より支辨することとし又參奉たる者の候補者は成るべく享祀の主神たる者の後裔中より簡ひて任用する慣例を尊重することとせり

(ロ)歴代王陵の守護 歴代王陵に守護人を置き尊尙地に人民の侵略濫行を制止し特に放牧、侵墾、採樵等の弊害なからしむる爲明治四丁五年度より陵の大小を所在地の距離等を斟酌して八十五人の守護人を置き監守を爲さしむ即ち京畿道に於ては開城、長湍、江華及高陽の四郡に五十人慶尙北道慶州郡に三十人慶尙南道金海那駕洛國(國史に任那と書するもの)の王陵に二人平安南道平壤府に箕子陵、中和郡に高句麗王の陵あるを以て之に三人を配置し各陵墓に深縁ある後裔者を擧げて監守の任に膺らしむるものとせり

第二 神 社

神祇を崇敬するは日本國民特有の風習にして凡そ内地人の移住して農商工業を營む果園の地には多くは神社を設け以て表敬の齋場と爲さざるなし故に一方に於て國風移殖の要求を充たさしむる爲又一方に於ては統制ある規律の下に立しむるの必要を認め大正四年八月府令を以て神社に關し必要なる規則を定め同年十月一日より之を施行し内地に於ける神社取扱方と略其の規矩を同ふせり但し府縣社以下神社の社格に關する規定は方今證議中にて未だ實行するの機會に到達せず從て幣帛供進に關する制度も亦實施せらるるに至らず然れども各地神社の現狀は年を逐ふて國風移殖の上に有益な

る印象を住民に與へつつあり今大正四年八月神社に關する規則發布以來此の規則に照して創立を許可せられたる神社の統計を擧ぐれば各道を通して左の如し

大正六年度 三一 同 八年度 三六 同 十年九月現在 三七

同 七年度 三四 同 九年度 三七

朝鮮神社の造營は大正八年七月内閣告示第十二號を以て神社の位置を京城府南山に定められ

天照大神 明治天皇二柱の神を祭神とし社格を官幣大社に列せられたるにより先づ豫定の地區に就て大正九年五月二十七日地鎮祭を行ひ爾來土功の歩を進め又用材の蒐集に努め大正九年十一月二十七日山口祭と柚聚の儀とを兼て神殿用材撿割始の儀式を行ひ大正十年六月十日造營工事の初歩たる新形式を執行し工程渾て豫期の如く進みつつあり

第三 宗教

(イ)朝鮮に於ける宗教の概要

朝鮮に於ける宗教の地方的分布を見るに各地を通して基督教最も優勢の地位を占め佛教之に亞き神道は布教者の數に於ても亦信徒の員數に於ても比較的少數なり即ち朝鮮固有の佛教は其の傳來甚古く三國鼎立の時代に於て先づ高句麗の首都に佛寺の創立せられたるを發端とし尋て百濟新羅

の領土に漸次流傳し高麗の末期に至るまで寛大なる保護の下に隆昌を極めしも李朝に至り寺刹の新創を停め或は度僧を制限し特に近古二百有餘年來良民の僧尼を爲るを禁する等政治上の抑壓甚しく爲に僧侶は一般人民より輕侮せられ屏息以て無爲に歲月を送り來りしか併合後明治四十四年寺刹令實施後は從來羈束せし種種の制限を解除し寺刹の體用を完ふし併せて布教を爲すことを許可せられてより僧侶は殆ど蘇生の思を爲して布教興學に力を致せるも因襲の久しき未だ社會上僧侶の地位を充分認むるに至らず現在に於ては寺刹千二百六十二僧尼數七千五百七十六人を算す内地佛教各宗派の内朝鮮の布教に最も早く著手せしは眞宗大谷派にして同派の僧侶が始めて朝鮮に渡航し釜山に上陸せしは文政年間に在り爾來元山、仁川、其の他開港場の増加に伴ひ淨土宗、曹洞宗眞宗本願寺派等より逐次教師を派遣して布教を開始し併合後は布教者派遣の數も増加し信徒の結集寺院教會所等の設備も年々共に増加するに至り寺院六十七箇寺布教所二百三十六箇所信徒十四萬八千二百二十二人を算するも鮮人信徒は内一萬千五十四人に過ぎず神道中併合後より今日まで各地に教師を派遣し相應の設備をなして布教に従事するは天理教、金光教、神理教、大社教の四派なるも就中大社教の如きは殆ど布教止息の姿にして又扶桑教は大正九年七月布教を開始せしも未だ其の實績として記述すべきものなし基督教は朝鮮に傳來後年を経ること久しからず雖公然

信教の自由を許されたるは二十六年前のことにして爾來朝鮮人は進て外國人居留地に至り宣教師に就て教を求むる者次第に増加し且在來の佛教は布教止息の境遇に在りたるを以て弘教に最も便宜なる地位を占め到る處に教會堂講義所集會所の類を設け傍ら學校病院等の附設事業を經營して現代の要求に應ずる智能を向上せしむるに努め且つ疾苦を除くに注意せるを以て弘教上の流傳力益益加はり現に布教所三千二百七十五箇所と信徒三十二萬三千五百七十四人を算するに至れり

(ロ) 宗教課の新設

朝鮮に於ける宗教の狀況は前叙の如くなるを以て統治上宗教行政の重要なる關係あるに鑑み又從來往往にして外國宣教師等と意思の疏通を缺きために總督政治の徹底に遺憾の點ありしを以て大正八年九月官制改正と共に特に學務局に宗教課を新設し差當り事務官一名囑託一名屬以下數名を置きて宗教行政に關する事務を處理し且つ諸報の調査に従事せしめ囑託は主として外國人方面との連絡機關としての意思の疏通を圖り統治方針の徹底を期することに努め居れり尙囑託及屬以下の事務員も漸次必要なる増員を爲たり

(ハ) 布教規則の改正

宗教に關する從來の規則中宗教の宣布に従事する者をして徒に取締の煩瑣を訴ふるの口實を與ふ

るの據ありたる箇條を除き必ず履行せしむべき最少限度の手續を定めて之を嚴に勵行し以て法令の權威を認めしめ爾餘の末節に至ては可成手續を簡易にして一面布教者の便宜を斟酌せんことを大體の方針とし先づ布教規則の改正を行ひたるか其の要點は教會布教所の設立等從來許可を要せし事項の届出を以て足ることに改め且届出事項も之を必要なる最少限度に止むることとなし他面に於ては名を宗教の宣布に藉りて安寧秩序を紊すものに對する監督權を保有するため新に教會堂説教所又は講義所の類に於て安寧秩序を紊すの虞ある所爲ありと認むるときは其の設立者又は管理者に對し之の使用を停止又は禁止することあるへしこの一條項を追加したり

(二) 宗教類似團體

朝鮮には宗教類似團體として天道教、侍天教等の團體あり天夫地方に多數の團員を擁し社會上相當の勢力を有す此等の各團體は目下の處宗教團體として取扱はず専ら警察取締の下に置かれあり

(ホ) 宗教團體の社會事業

宗教團體の社會事業は主として外國宣教師の手に依て經營せられ學校、病院等各種社會的施設の見るべきもの尠からず彼等が先づ社會的事業を以て日常生活上の實際的要求を滿たさしめ徐徐に民心に根底ある基礎を築きて宗教の宣布に著手する熱心と努力とは偉とすべきものあり之に反し

内地人宗教家の社會的施設は只龍山に佛教各派が行路病者收容所を設け一竹年七千圓餘の經費を投して二十名内外の患者を收容し開城に淨土宗の經營に係る商業學校ある外一二孤兒院を有するに過ぎず今後内鮮宗教家の努力を要すへきは主として此の點に在るなり。本府に於ては相當の援助を與ふへき旨を示して宗教團體に對し其の奮起を促し最近淨土宗に於て簡易夜學校及人事相談所等を設置し又大谷派本願寺等に於ても青年會館を建設して各種の社會事業を經營せんとする計畫を進めつつあると共に内地に於ける佛教各宗派聯合の下に椎尾辨匡博士理事長として佛教朝鮮協會を設け大正九年五月東京に於て第一回講習會を開催して多大の効果を擧げ朝鮮社會教化事業を企圖せんとする等近く此の方面に一新境地を開拓するの氣運を熟成せり

(一) 布教狀況

大正九年十二月末日

教派別	布教所	布教者	信徒		
			内地人	朝鮮人	外國人
日本基督教會	一三	一四	八一四	—	—
日本基督教會	一四	四	一、三二八	—	—
					八一六
					一、三二八
					計

教派所	布教所	布教者	信徒			
			内地人	朝鮮人	外國人	計
日本聯合基督教會	五四	八九	六九八	一四、二五四	—	一四、九五二
東洋宣教會	—	—	二二	—	—	二二
ホーリネス教會	八二	一〇六	二、七六二	一四、二五四	二	一七、〇一八
計	一、九三七	一、一六六	—	一五五、二六二	一三八	一五五、四〇〇
聖公會	六三	六五	四〇八	三、八八二	一八	四、三〇八
救世軍	一〇〇	一一六	二八五	四、八五二	二六	五、一六三
天主教	二四一	七三	七六〇	八八、四三七	一三六	八九、三三三
南監理教會	二四一	一八八	—	一二、五六〇	一八	一二、五七八
美監理教會	五四〇	五二五	—	三六、六〇一	七二	三六、六七三
露國正教派	六	五	—	五五八	四	五六二
第七日安息日	四七	四一	—	一、〇一八	—	一、〇三九
耶教	一八	七五	—	一、五〇〇	二一	一、五〇〇
東洋宣教會	三、一九三	二、二五四	一、四三三	三〇四、六七〇	四三三	三〇六、五五六
計	三、二七五	二、三六〇	四、二一五	三一八、九二四	四三五	三二三、五七四
合計						

(二) 布教狀況

大正九年十二月末日

教宗派別	信徒	
	内地人	朝鮮人
天理教	一七、一三五	六、一四一
神理教	一〇、五〇六	五三
金光教	一八、四〇〇	六一五
大光教	三、六三六	一〇
實行教	一三〇	—
計	四九、八〇七	六八一
眞宗本願寺派	五四、〇一二	二二六九
同大谷派	二九、九〇七	一、五四二
同山元派	一、六九九	—
同佛光寺派	一、三一	—
淨土宗	一七、九四一	五、九〇一
眞言宗各派聯合	一一、二四八	—
布教所	—	—
布教者	—	—
計	—	—

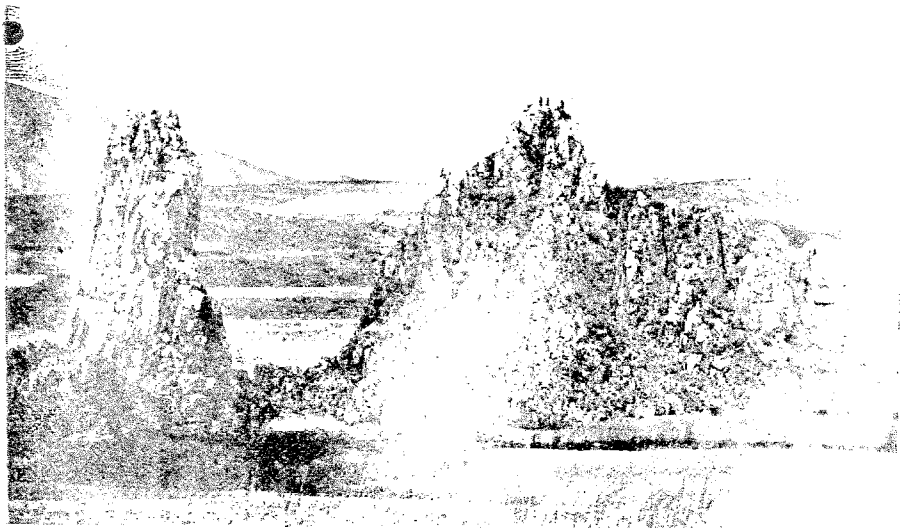
教宗派別	信徒			
	內地人	朝鮮人	外國人	計
同醜齋派 惠印部	六二二	—	—	六二二
新設法音宗 智山派	三、一四七	—	—	三、二九一
同豐山派	二、一五四	—	—	二、一五四
曹洞宗	六、六三三	五四八	—	七、一八二
臨濟宗 妙心寺派	二、三三〇	五五	—	二、三八五
東福寺派	二四〇	—	—	二四〇
日蓮宗	三、〇一九	九七	—	三、一六
法華宗	八三〇	—	—	八三〇
本門法華宗	一、六七〇	四九〇	—	二、一六〇
黃檗宗	三〇〇	九	—	三〇九
計	一三七、〇六三	一一、〇五四	—	一四八、一三二
朝鮮佛教	—	一四九、七一四	—	一四九、七一四
合計	一八六、八七〇	一六七、五八七	—	三五四、四六九
○布寺院所	—	—	—	—
布教者	—	—	—	—
○一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	—	—	—	—

第二十章 警察

(イ) 警務機關の配置 明治四十三年六月舊韓國政府より日本政府へ警察權を委任するや從來警察憲兵の兩立せしものを統一して各道に警務部長を置き憲兵隊長たる憲兵佐官を以て之に充て管内に於ける警察署憲兵分隊同分遣所を監督し又京城には警務總監部を置き總長には憲兵隊司令官たる陸軍將官を以て之に充て全道の警察事務を統轄せしめ以て秩序の維持と新政の普及とに努めたりしか爾來星霜を閱すること十年に及び社會の變遷と時代の推移とは警備の方法も亦之を一變せざるべからざるに至れり茲に於て大正八年八月勅令を以て朝鮮總督府官制を改正し總督府に警務局を置き同時に地方官官制を改正して警察及衛生の事務を道知事の權限に屬せしめ各府郡局に一警察署を配置し茲に憲兵の普通警察事務取扱を廢し以て純然たる警察組織の變更を見るに至れり以上の如く警察制度の根本的改革を行ひたるも警察事務は益々繁劇を加へ亦昔日の比にあらず更に警察署派出所駐在所を増設するの要ありたるを以て大正九年三月京城に二箇署平壤に一箇署咸鏡北道に一箇署釜山に一箇署の五警察署を増し其の他全道を通して八百三十九箇所の警察官駐在所十四箇所の派出所を増設し又重要な駐在所に警部補を配置せり而して其の後各道に於て必要に應じ隨時

道別	區分		府郡島數	警察署	警察官 派出所	警察官 駐在所	合計	巡査	
	道	別						内地人	朝鮮人
忠清南道	道	道	一四	一四	一	一五七	一七二	五五九	四六五
全羅北道	道	道	一五	一四	八	一七七	一九九	六〇八	五〇一
全羅南道	道	道	二三	二二	五	二三九	二六六	九一一	六九七
慶尙北道	道	道	二四	二三	八	二五三	二八四	九二六	七六八
慶尙南道	道	道	二二	二三	一七	二二七	二六七	九二四	六五八
黃海道	道	道	一七	一八	四	二〇八	二三〇	七四〇	六四二
平安南道	道	道	一六	一六	一八	一五八	一九二	六八六	五三八
平安北道	道	道	二〇	二四	四	一八六	二一四	一、二五九	六九一
江原道	道	道	二一	二二	一	一六四	一八六	六七八	六二八
咸鏡南道	道	道	一七	二〇	六	一六一	一八七	七一四	五六八
咸鏡北道	道	道	一二	一九	五	一一二	一三六	七一一	五一四
計			二三三	二五一	一五四	二、三六六	二、七七一	一〇、四二八	八、一六〇

(口)水上警備 水上警備として現在沿岸二十箇所に配置しある警備船は汽船七隻發動機船十八隻合



國 境 警 備 の 實 況

計二十五隻なり、是等の警備船は其の設置の當時に在りては主として海賊及暴徒の掃蕩に使用したるものなりしか、爾後海運の發達漁業の振興等に困り海上に於ける警察事故激増し其の出動を要するに頻頻たるに至りしを以て或は陸軍省所管船の借入をなし又は税關、鐵道、海軍省所屬船の管理換及揮發油發動船の新造等に依り其の隻數並噸數を増大し以て沿岸主要港灣に配置したるものなるか出動上遺憾の點尠からず尙在外不逞鮮人に對する警戒等にも至大の注意を拂はざるべからざる狀勢に在るを以て大正六年度より十二箇年繼續に年年新造の計費を樹て既に大正六年に十六噸の發動機船三隻を新造し大正七年に十六噸の發動機船三隻大正八年に二十噸の發動機船二隻、大正九年度に於て五十噸級の汽船二隻を新造し以て初期の希望を達せむとす

(ハ)警察官の養成　警察官養成の機關として京城に警察官講習所あり警察官吏若くは警察官吏たるべき者に對して警察に關する學術及實務を教授す

本所は大正八年八月警察制度の改正と共に從來警務總監部の一課たりし警官練習所を廢止し新に朝鮮總督の管理に屬する警察官吏教養機關として獨立せるものにして教授助教等各數名の專任者を配置し講習科及教習科を置き講習科を更に本科及別科に分つ講習科本科に在りては現に監督

者たり又は將來監督者たらむとする者に對し德操を練磨し所要の學科實科を習得せしむるを以て目的とし其の修業期間は一箇年とし講習科別科は現に特種勤務に従事し又は將來特種勤務に従事せむとする者に對し其の德操を練磨し所要の學科實科を習得せしむるを以て目的とし其の修業期間に其の都度定むることせり講習科は朝鮮全道に配置すへき初任巡査に對し警察官に必要なる訓育教養を施すを以て目的とし其の修業期間は四箇月とす

本講習所の設置は時恰も警察制度改正時にして一時に多數警察官の増員を見新募巡査又數千に上り更に千數百名の増員あり而も之か教養充實は焦眉の急務たりしを以て朝鮮人巡査教養のみ行ひし各道巡査教習所にも臨時配置し之を共同聯携して克く其の要求を充したる外一面講習科本科生の教養をも實施し既に其の第一期生を出し目下第二期生の教養中なり尙講習科別科生の教養をも隨時實施せり、前述の如く本所の任務は頗る擴大せられたりし雖當時諸般設備之に伴はず實施上多大の不便を感じたりしか今や講堂及寄宿舎其の他諸設備殆ど完成し教習科生のみにては儼に五百名を收容し得るに至り、一方各道巡査教習所を聯携を保ちて其の教授科目の内容等に互りて洗鍊を加へ實質的に時代の趨勢に適應すへき警察官吏の育成を期し以て治安維持機關に缺陷なからしめむとしつあり

(ニ)富籤類似其の他取締 懸賞又は富籤類似其の他射雉の方法を用ゐむことを提供し又は投票の募集に付ては動もすれば弊害の之に伴ふものあるを以て明治四十四年四月朝鮮總督府令を發し是等の所爲を爲さむとする者は道知事の許可を受くべきこと爲し其の學術技藝に關するものに就き懸賞の方法を用ゐむとするものに在りては之を除外せり

(ホ)引火質物貯藏所取締 明治四十四年六月朝鮮總督府令第六十四號引火質物貯藏所取締規則は多少の不備缺點ありたるを以て大正八年二月該規則の一部を改正し引火質物を石油酒精及揮發油の三種とし此等物品の貯藏は建設地管轄地方長官の許可を受くるを要し尙貯藏數量の制限等に關する規定を追加せり

(ハ)信用告知業取締 他人の商取引・資産其の他信用に關する事項を依頼者に告知するの業を爲す者に對しては相當取締を加ふるの必要を認め明治四十四年七月朝鮮總督府令を以て信用告知業取締規則を定め其の業務を爲さむとする者は所轄道知事の許可を受けしめつつあり

(ト)狩獵取締 明治四十四年四月狩獵規則を發布し野生鳥獸の捕獲、野生鳥類の巢又は卵及雛の採取、狩獵の場所、狩獵の方法(銃器、張網、鷹)及時季、學術研究又は有害鳥獸驅除の爲其の他特別の事由に因る保護鳥及狩獵期間外の特別捕獲狩獵免狀の有効期間免許手数料、剝製品若は羽毛の輸出

營業に關する事項を規定し狩獵期間は毎年十月一日より翌年四月三十日の七箇月間なるも威鏡南
北道、平安南北及黃海道の五道は毎年九月十五日より翌年四月三十日迄とす

(子)銃砲火藥取締 大正元年八月銃砲火藥類取締令同十月同施行規則及同施行細則を發布し銃砲火
藥類の製造販賣、輸移出入、讓受渡、貯藏、運搬及取扱等に關する事項を規定し何れも同年十二
月より之を施行せり

(リ)古物商取締 古物商取締に關しては明治四十五年三月制令第二號を以て古物商取締法に依る旨
發布し同年四月より之を施行せり

(ヌ)質屋取締 質屋の取締に關しては明治四十五年三月制令第三號を以て質屋取締法に依る旨發布
し同年四月より之を施行せり但し朝鮮に於ては經濟上の狀態と其の業務上の舊慣とは内地と同一
に律すべからざるものあり仍て利子制限、流質期限、質物處分及質物の滅失又は毀損の場合に於
ける損害の負擔に關しては別段の規定を設くることを得べき特例を認め制令施行規則を發布し其
の條項中に利子の割合、流質期限、質物の滅失又は毀損の場合に於ける損害負擔の方法は認可を
受くべき旨を定め舊慣あるものにして弊害なき以上は可成認可するの方針を採り且經濟上の關係
より利子の割合は取締法の制限に依らざることを得る旨の例外規定を設けたり

(ル)遺失物取締 遺失物に關しては明治四十五年五月遺失物其の他の物件に關する規定を發布し犯罪者の置去りたるものと認むる物件誤て占有したる物件他人の置去りたる物件逸走の家畜又は埋藏物に關しては遺失物法に依ることとし同時に之を施行規則を發布し同年六月より實施せり

(チ)寄附金品募集取締 明治四十四年十一月朝鮮總督府令を以て寄附金品募集取締規則を發布し其の募集區域一道内に係るときは道知事二道以上に互るとききは朝鮮總督の許可を受くることとし之を施行せり

(ツ)市街地建築取締 建築取締に付ては各地區區に互り統一取締の必要ありしを以て大正二年二月市街地建築取締規則を發布し總督の指定したる市街地に對し施行することとし京城市街に於ては大正二年七月より之を施行せり

(カ)道路取締及荷車取締 道路取締及荷車取締に付ては大正二年五月共に取締規則を制定發布し何れも同年七月より實施せり尙道路取締規則中道路に於ける歩行者の右側通行は大正十年十二月一日より之を左側通行に改めたり

(コ)行政執行 大正三年七月行政執行令を同年八月同令施行規則を發布し共に同年九月より施行せり本令は内地を概れ其の内容を同ふせるも檢束、期間、密差賣者入院治療費は國庫の支辨を爲し

たるか如き差異なきにあらず

(タ)湯屋營業取締 大正三年七月警務總監部令を以て湯屋營業取締規則を發布施行せり

(レ)宿屋營業取締 大正五年三月警務總監部令を以て之を取締規則を發布し同年五月より之を施行せり

(ソ)料理屋飲食店藝妓酌婦藝妓置屋貸座敷娼妓取締 大正五年三月警務總監部令を以て料理屋飲食店營業取締規則、藝妓酌婦藝妓置屋營業取締規則、貸座敷娼妓取締規則を發布し同年五月より之を施行せり

(ツ)人力車、馬車、自轉車、自働車取締 人力車に關しては大正三年七月馬車に付ては同年八月自働車に關しては大正十年七月總督府令を以て同取締規則を改正し自轉車に付ては大正六年十月警務總監部令を以て取締規則を發布し大正十年七月總督府令を以て之を改正を行へり

(チ)消防 大正四年六月總督府令を以て消防組規則を發布し同年八月より施行したり規定の要旨は消防組の組織、設置、地域、設備、費用の負擔、出勤方法及消防組の指揮監督並之を設置に關する權限等の條項を設けたり

(ナ)代營業取締 大正四年七月警務總監部令を以て代營業取締規則を發布施行したり規定の要旨は

代書業者の資格、人員の制限、業務の範圍、出願及禁止事項及代書業者の責任、義務其の他の取
締上必要なる條項を設けたり

(ラ)開港取締 大正四年七月總督府令を以て開港取締規則を發布し同年八月より之を施行したり現
時の開港は仁川、群山、木浦、釜山、鎮南浦、新義州、龍岩浦、元山、清津、城津、雄基の十一
港にして規定の要旨は船舶の出入信號及顛舛事項、港界内に於ける禁止事項又は許可を受くべき
事項、危險物積載船舶の遵守事項、變災の場合に於ける措置及信號方法、航方速力若は碇泊に關
する制限其の他港務保安上必要なる事項なり

(ム)汽罐汽機發動機取締 大正四年八月總督府令を以て汽罐汽機發動機取締規則を發布し九月より
施行したり規定の要旨は汽罐汽機發動機据付の出願及使用認可申請の手續、定期又は特別検査の
標準及其の時期又は汽罐汽機發動機に異狀を生じ若は危險の虞ある場合の届出方並適當の設備を
命し使用を停止し、取扱主任者の變更を命する等其の他取締上必要なる條項を規定せり

(ウ)勞働者募集取締 大正七年一月朝鮮總督府令を以て勞働者募集取締規則を制定發布し朝鮮外に
於ける事業に従事する勞働者を募集せんとする募集者の行爲及契約に關する事項等を規定し以て
募集に關する弊害の去除に努め一面鮮人勞働者の保護上遺憾なきを期せり

(キ)犯罪状況 大正九年に於ける犯罪件數七萬四千七十二件、檢舉件數五萬九千五百十四件にして之を大正八年に比すれば犯罪件數に於て百九十八件檢舉件數に於て三千一件の減少を見る而して犯罪發生件數中減少せしは竊盜、詐欺、横領、恐喝等の如き所謂智能的犯罪なるも強盜は全く反對の趨向を呈し大に其の數を増加したり之の主たる原因は鴉盜其の他に付ては農産物及勞働賃金の激騰其の他事業界の好況に伴ひ小農其の他一般勞働者の生活を潤澤ならしめたるに因り強盜に付ては時局に關し獨立資金の徵發又は之を標榜する草賊の跋扈を餘儀なくせしめたるに基因するものとす

(ノ)犯罪即決 大正九年に於ける犯罪即決件數は四萬七千四百十六件にして之は處斷人員別は有罪五萬八千七百六十九人、無罪三十七人、合計五萬八千八百六十六人なり

(オ)民事争訟調停 大正九年に於ける調停受理件數は四千五百十六件にして其の内既濟四千四百四十四件未濟六十八件なり

第二十一章 衛生

往時朝鮮は一般に衛生思想乏しく一旦疾病に罹るも醫療に頼らず大抵先づ巫女、賣卜者の言を徴するの風習あり隨て學識技能を有する醫師の如きは實に寥寥晨星を數ふるの狀況なりき又社會的衛生施設も甚だ不備なる爲飲料水の如きも極めて不良にして常に消化器系傳染病流行の原因を爲し肺「ヂストマ」の如き各地に蔓延して殆ど底止する所なかりき是を以て新政施行に際しては深く此の點に留意し總督府醫院の外各道に慈惠醫院を設置し又警察醫を各地に配置して傍ら一般患者の診療に従事せしめ大正三年四月よりは新に各地に公醫を配置し警察醫と相待て一般に醫藥の便を與へ飲料水改良方法としては有數の市街地に水道を敷設し又は敷設せしめ一面國費を各道に補助して共同井戸の掘鑿を奨勵し傳染病及獸疫の豫防或は除穢事業の如き亦常に厲行を怠らす左に其の梗概を記すへし

第一節 醫療機關

舊韓國政府は光武四年(明治三十三年)醫師に關し醫師規程を發布したりしと雖民間に違由せられた

その實跡なく隨て朝鮮人たる醫師は全く自由開業の狀態にして唯元韓國官立學校及大韓醫院附屬醫學科等を卒業したる者又は私立醫學學校に於て修業し如上の出身者と同等以上の學力ありと認めたる者に對し其の開業を認許したりと雖此の認許は單に其の學識の保證に過ぎず而して業務上の取締に關しては舊韓國政府及帝國領事館又は理事廳に於て發布したるもの共に具體的の規定を缺き僅に警察官憲に於て臨機之を取締を爲したるに過ぎざりき此の故に醫師は其の業務上自然放縱疎漫に流れ其の弊害に堪へざるの狀況なりしを以て大正二年十一月醫師規則、齒科醫師規則、醫生規則を發布何れも大正三年一月より施行し從來の積弊を一洗するに至れり

醫療機關

大正九年十二月

道別	醫院		醫師		醫生	限地醫業		齒科醫師	藥劑師	產婆	看護婦	
	官立	公私立	内地人	朝鮮人		外國人	醫業					醫
京畿道	二	三四	一五八	九五	一一	二六四	六一五	四	二四	四五	一八八	二六一
忠清北道	一	一	一八	八	一	二七	一八五	五	一	二	一四	七
忠清南道	一	三	三三	一五	一	四八	二三二	二	五	五	四一	一三
全羅北道	一	四	四〇	一七	二	五九	二七七	三	三	六	三八	九

全羅南道	三	五	八	五六	一四	三	七三	二八六	一一	四	三	五四	六八
慶尙北道	二	四	六	六六	一三	二	八一	五二八	一〇	七	四	四七	三三
慶尙南道	一	〇	一	一四〇	一七	四	一六一	六六八	一六	一九	一	七五	八四
黃海道	一	四	五	六二	四六	四	一一二	二六四	六	三	三	五二	八
平安南道	一	五	六	五五	七一	四	一三〇	四三八	七	七	六	五三	三七
平安北道	二	七	九	三一	五二	二	八五	四五	二	三	一	四〇	一五
江原道	二	三	五	二六	一一	一	三八	二六四	四	一	一	一三	一二
咸鏡南道	一	五	六	四〇	四一	三	八四	八五九	四	三	四	二六	一九
咸鏡北道	二	二	四	三一	一四	一	四六	三二二	四	六	四	二八	一〇
計	二〇	八七	一〇七	七五六	四一四	三八一、二〇八	五、三八九	七八四	八六	九六	六六九	五二六	

傳染病院及隔離病舍

年	傳染病院		隔離病舍		合計
	官立	公立	官立	公立	
大正七年末	一	一	二七	二九	一五二
同八年末	三	四	二八	九三	一六六
合計	四	五	五五	一二二	三一八

年	傳染病院			隔離病舎			合計
	官立	公立	計	官立	公立	私立	
同 九年末	—	四	四	二五	一七五	二八	二三八
							二三三

(イ) 醫師 朝鮮の村落僻地には今尙醫師の分布稀薄にして醫藥の不便を訴へ地方開發上影響する處
 尠からず仍て大正三年七月醫師試驗規則を發布して優良なる醫師の増加を計畫せり

齒科醫師の分布は稀薄にして全道を通し僅に七十名(大正九年十二月末現在)に過ぎず其外に百
 六十六名(大正九年十二月末現在)の入齒營業者あるも専ら技工に従事するものにして齒科醫師
 の要求盛んなる現狀に副はざるものあるを以て大正十年六月齒科醫師試驗規則を發布し優良なる
 齒科醫師の増加を計畫せり

上述の如く醫師未だ邊陲に普れからざる今日に於ては資格醫師のみの分布を期待すへきに非ざる
 を以て邊境又は孤島の如きには醫術及齒科醫術の經歷を有する者に地域及期間を限り醫業又は入
 齒營業を免許しつつあり

公醫 都市に於ては内地人移住の増加に伴ひ漸次醫療機關に充實を見つつあるも僻地に於ては僅
 に慈善醫院の巡廻診療等に依りて一小部位に於ける患者を診療し得るに過ぎざりしに由り新に公

醫制度を布き公醫を配置し以て民間診療を王とし兼て各官廳共通的に衛生事務に従事せしむることとし大正三年四月より之を實施せり公醫及囑託警察醫の定數左の如し

公醫及囑託警察醫

大正九年十二月

道	公醫	囑託警察醫	合計	道	公醫	囑託警察醫	合計
京畿道	一九	五	二四	黃海道	一七	一	一七
忠清北道	一一	一	一二	平安南道	一三	一	一三
忠清南道	一四	一	一四	平安北道	一九	一	一九
全羅北道	一六	一	一六	江原道	二一	一	二一
全羅南道	二〇	一	二〇	咸鏡南道	一七	一	一七
慶尙北道	二三	一	二四	咸鏡北道	一〇	一	一〇
慶尙南道	一七	一	一七	總計	二一七	五	二二二

(口) 醫生は大正二年十一月發布の醫生規則に依り朝鮮人にして本規則發布前二年以上醫業を爲したる者には永久又醫生に就き三年以上醫業を修習したる者には五年以内の期限を附し免許せられ

たる者にして朝鮮全土に分布せらる朝鮮人は主として之に依り醫療を受くるものなれば醫療機關の一たるを失はず故に醫生に對しては或程度迄醫術教養の必要を認め教育規程を發布し又教養上各地の統一を期する爲大正七年中醫方綱要なる教科書を編纂し之を各地の醫生及公醫警察官署等に配付し公醫之が教師と爲り教養しつつあり

(バ)産婆 従來朝鮮人にして産婆に就業するものなきのみならず一般人に分娩に際し他人の介補するを嫌忌せしか近時産婆の效用を認むるに至れり、内地人たる産婆は内地人の増殖に伴ひ漸次其の數を加へつつあれども其の多くは都會の地に開業し偏鄙の地に至つては殆ど其の影を見ず不便尠からざりしを以て大正二年冬期より各慈惠醫院に於ては助産婦及び速成助産婦の養成を始め又大正三年七月産婆 驗規則を發布して各道に於て産婆試験を行ふことと爲し以て産婆の増加を圖れり

(ニ)看護婦 醫師病院の増加に伴ひ看護婦の需要も漸次増加し來り各地に於て看護婦の業務に衣食する者尠からず然るに従來看護婦の資格及其の業務範圍等に關する規定缺如せしを以て中には看護に關する學術技能に習熟せざる者ありて衛生上危害を醸すの虞あり故に規定を設けて資格を限定し且業務上の取締を爲すの必要を認め大正三年十月府令を以て看護婦規則を發布し同年十一月

より施行し看護婦は總て免許を受けしむることとし尙試験の制を設け各道に於て試験を舉行することせり

(ホ)種痘認許員 種痘普及の爲明治三十二年各道に種痘認許員を設置し其の素養ある朝鮮人男女共に之を認許せり内地人に對しては特に婦人にのみ之を許せるは是れ朝鮮婦人は男子に近接するを忌むの風習あるが爲なり大正九年末に於ける種痘認許員は内地人四十六人朝鮮人八百十四人なり

第二節 藥品取締

(イ)藥品 藥品に關しては從來何等取締上の規定なかりしか明治四十五年三月制令を以て藥品及藥品營業取締令を發布し尙朝鮮總督府令を以て之が施行規則を設け藥劑師、製藥者、藥種商、賣藥業者等の各業務範圍を限定し毒藥劇藥の販賣授與に嚴重なる制限を加へつつあり殊に阿片煙の輸入製造販賣に關しては朝鮮刑事令の規定に依り之が取締を爲せるのみなりしか歐洲戰亂勃發後印度及埃及等より阿片の輸入杜絶せるを以て朝鮮内殊に平安北道及咸鏡北道等に於て阿片製造の爲罌粟の密栽培を爲すもの續出し上記刑法の規定のみを以ては取締上困難尠からず故に大正八年六月制令を以て朝鮮阿片取締令を發布し阿片製造に要する罌粟の栽培を制限し同時に醫藥用阿片及製

藥用阿片は政府の專賣として賣下又は交付規定を設け其の販賣授與に就ても嚴重なる取締を加ふるに至れり尙「モルヒネ」「コカイン」の輸出入に就ても大正九年十二月朝鮮總督府令を以て「モルヒネ」「コカイン」及其の鹽類の取締に關する件を發布し爾來之の輸出入を制限し且つ朝鮮内に於ける該藥品の製造販賣に就ても嚴重取締を加へつつあり其の他賣藥検査の法を定め又大正二年七月朝鮮總督府令を以て藥品巡視規則を發布し之に依り藥品巡視を施行し漸次藥品及賣藥の精良を期し以て一般藥業者に對する取締を厲行しつつあり

(ロ)藥劑師 内地に於ける有資格者及前記制令の規定に依り朝鮮總督の免許を受けたる者は其の届出に依り開業を許せり尙大正五年四月府令を以て藥劑師試験規則を發布せり

第三節 飲食物及其の他物品の取締

飲食物其の他物品に關する取締は從來極めて不完全にして衛生上の危害尠からざるに依り併合後深く其の取締の必要を認め牛乳營業取締規則、衛生上有害飲食物及有害物品取締規則、清涼飲料水及氷雪營業取締規則、「メチールアルコホル」(木精)取締規則等を發布して之の取締を厲行し尙飲食物及飲食用器具並藥品等にして化學的試験を要するものは從來各道より總督府衛生課衛生試驗室に送

付せしが遠隔の地に於ては處理上彼活を缺き且つ衛生試験を要すへき營業願届等の處分に多大の不
便あるを以て大正二年以降慶尙北道、全羅南道、平安南道、咸鏡南道、慶尙南道、咸鏡北道、江原道、
黃海道、忠清南道、全羅北道、平安北道、忠清北道、京畿道に衛生試験室を設置し藥劑師たる技術
員を配屬し大正十年度を以て之を普及完成し衛生試験の向上は取締の厲行と相俟て不良飲食物取締
上著しく効果を挙げつつあり

第四節 痘苗製造

痘苗製造は朝鮮總督府獸疫血清製造所に於てす朝鮮總督府醫院、道慈惠醫院及警察官署に於て施行
する種痘用のものは無料とし藥劑師、藥種商の請求に依り賣下くるものは二割減とす間島は地域相
接し同地に於る種痘の疎密は直に朝鮮に影響すへきを以て同地公種痘に對しては特に無料配布を爲
しつつあり

第五節 屠場及屠肉

屠場の取締に關しては曩に韓國政府の發布に係る屠獸規則及各理事廳發布の規定に依り尙各道に於
ては適宜其の施行規則を制定施行しつつありしも大正八年十一月屠場規則の發布に依り茲に全く統

一を見るに至れり

朝鮮人は日常獸肉を嗜好し殊に慶弔時に於ては缺くべからざる必須の食料品たるを以て屠畜は各地方共に盛なり今最近三箇年の統計を掲ぐれば左の如し

屠場及屠畜數			
年	屠場數	屠畜數	
		牛	馬
大正七年	一、四八二	一五三、三六七	七四五
同八年	一、四一四	二四二、五一三	一、四六〇
同九年	一、三五六	二六四、一三〇	三八八
本表屠場は公設及私設の總數にして各年末現在さす大正九年豚の屠畜數減少は屠場規則改正の結果なり			

第六節 牛乳搾取所及牛乳取締

朝鮮人は從來牛乳を用うるこま少く唯内地人又は外國人間に於て需要せらるるのみなりしを以て朝

鮮人に對しては之に關し何等法規の存するものなかりしか時勢の進進に伴ひ鮮人の需要漸次増進するも共に營業者の數も増加し之れと同時に營業上種種弊害の生ずるものあり依て明治四十四年當該規則を發布して之を取締を爲すことせり

第七節 汚物掃除

汚物掃除に關しては從來府面に於て之に當り一面春秋二季の清潔方法の如きは數年來警察官署に於て地方民を指導して之が厲行の慣習を馴致し來れる結果都鄙共に進んで之に當るの風を爲し便所、井戸、下水の改修も此の機會に於て着着として行はれ各地の衛生狀態は逐日面目を改めつつあるの狀に在り、今各府に於ける經費負擔の狀況を擧ぐれば左の如し

區別		汚物掃除費負擔額調		大正九年度	
經	常	汚物掃除より生ずる收入	差引府負擔額	一戸一月當	
費	費	收入	府負擔額		
京城府	三二四、七〇四 円	七八、二〇五 円	二四六、四九九 円		・三六〇 円
仁川府	一五、九二六 円	一	一五、九二六 円		・一六一 円

區別	經常費	汚物掃除より 生ずる收入	差引府額	一戸一月當
群山府	一二、一七	一、五二六	一〇、五九一	二五四
木浦府	一一、二五五	二、〇〇〇	九、二五五	二一六
大邱府	三三、〇四三	一三、七六六	一九、二七七	一五五
釜山府	五四、一九二	二〇、六〇〇	三三、五九二	一六三
馬山府	四、二八五	—	四、二八五	〇九九
平壤府	五五、八〇三	三八、四五〇	一七、三五三	〇九〇
鎮南府	一〇、八三二	—	一〇、八三二	一一一
新義州府	九、〇一四	五、〇〇〇	四、〇一四	二五九
元山府	一八、〇四九	—	一八、〇四九	二四〇
清津府	一二、六七一	三〇〇	一二、三七一	四〇一
計	五六一、八九一	一五九、八四七	四〇二、〇四四	二四一

第八節 海港檢疫

海港檢疫は警察官署の管掌に屬し朝鮮外より來る船舶に對して檢疫を行ふ現に常時檢疫を行ふ場所

は仁川、釜山、群山、木浦、馬山、元山、城津、清津、鎮南浦、新義州及雄基の十一港なり

第九節 飲料水

(イ)水道 朝鮮は一般に飲料水不良にして之が改良は忽諸に附すべからざる一大急務たり故に併合以來毎年國費及地方費補助の下に地方をして水道の敷設及模範的公共井戸の掘鑿を行はしめつつあり現今水道の設備あるは京城、仁川、光州、清津、咸興、新義州、晋州、釜山、平壤、木浦、鎮南浦、群山、羅南、會寧、元山、義州、鎮海、大邱、海州の十九箇所にして此の外公州、清州、全州は目下工事中にして釜山及鎮南浦兩水道は擴張工事施行中に屬す今各地既設水道の現況を掲ぐれば左の如し

水道名		水源	方式	給水能力	管定一日一人 供給水量立方尺	經營者
京	城	漢江	露島	一三三、二五〇人	四・〇	總督府 (管理京畿道)
仁	川	同	覽梁津	七〇、〇〇〇	四・〇	同

水道一覽

大正十年九月

水道名	水源	方式	給水能力	經營者
平壤	大同江	唧筒式	六〇、〇〇〇人	總督府(管 理京畿道)
鎮南浦	龍岡郡大代面山 洞里	貯水式自然流下	二二、〇〇〇	同
釜山	寶水川高遠見在、 聖知谷	同	五五、〇〇〇	釜山府
群山	新豐里溪谷	同	極度 10,000 11,500	群山府
木浦	三鄉面群山洞	同	一八、〇〇〇	木浦府
元山	赤田川上流	自然流下	二〇、〇〇〇	元山府
大邱	新川上流	同	三〇、〇〇〇	大邱府
晉州	南江	唧筒式	一〇、〇〇〇	慶尙南道
鎭海	軍用水道分與	貯水式自然流下	五、〇〇〇	同鎭海面
海州	廣石川上流	同	一三、八〇〇	黃海道
義州	鴨綠江	唧筒式	三〇、〇〇〇	平安北道

鐵道一日一人
尺當給水量立方

羅南簡易	軍用水道分與	貯水式自然流下	三、〇〇〇	六四	咸鏡北道
會寧簡易	同	同	五、〇〇〇	一〇	咸鏡北道 會寧
光州	光州郡池漢面溪谷	同	一〇、〇〇〇	二〇	全羅南道
晉州擴張	南江	唧筒式	一、二、六四〇	〇・六	慶尙南道
新義州	溪流	貯水式自然流下	一〇、〇〇〇	一・三	平安北道
咸興	城川江	唧筒式	一七、八四〇	〇・八	咸鏡南道
清津	輪城川	同	一〇、〇〇〇	一・三	清津府

(四) 公共井戸 公共井戸の改良に就ては明治四十三年以降國庫補助に依り掘鑿又は改修せしむるの方針を執り同年度に於て五十八、大正四年度に於ては掘鑿百十九、改修十四、大正五年度に於て掘鑿百八十二、改修十四、大正六年度に於て掘鑿百三、改修五、大正七年度に於て掘鑿四百八十三、改修五百五十二、大正八年度に於て掘鑿三百七十五、改修六百五十九箇所にして年を逐ふて漸次普及せしめつつあり 然れども此の種事業は地方的施設とするを適當と認め同記の如く各地

の改修、掘鑿共に稍普及せるを機とし大正八年度より一定の財源を與へて之を地方費に移し國庫補助を廢せるも尙着着として其の改善を加へ各地水質検査と相俟つて漸次飲料水の供給を潤澤ならしむるに至れり

第十節 傳染病

(イ)「コレラ」 朝鮮に於けるコレラ病の流行は大正元年以來絶つてなかりしか大正五年七月二十七日香港より病系を承け、内地流行の餘響を蒙り、同年八月各地に散發し十二月末迄全道の患者總數二千六十六名死者一千二百五十三名の多きに達し同月末漸く終熄せり爾來其の流行を見ざりしか大正八年五月、六月頃南支那に發生せる本病は漸次北進し遂に營口大連等より滿洲各地に蔓延し乍ら同地を發せし汽車中の旅客より病毒各道に蔓延し患者總數一萬六千九百九十一人内死亡一萬一千八十四名を出すに至れり大正九年に於ては四月平安南道鎮南浦に發したるを初とし十二月八日慶尙北道を以て終熄し其の患者總數二萬四千二百二十九名内死者一萬三千五百七十名を算せり大正十年上海に於けるコレラは同年七月下旬初發以來益猖獗を極むるの状況なりしを以て上海を流行地と指定し同地よりの來航船舶旅客に對し停留檢疫を施行し朝鮮沿岸人民に對しては豫防

注射勵行、消毒的清潔法の施行、檢病的戸口調査の實施、衛生思想啓發の宣傳等を施行し極力病
毒侵入防止に努めたり

(口)痘瘡 由來衛生思想の幼稚なる朝鮮人間に於ては痘瘡は人生必ず經過せざるへからざるもの
にして到底人力を以て濟ふへからざる災厄なりとし之に對して毫も豫防の方法を講せざるのみなら
ず種痘施行の重を受くるや徒に疑懼の念を抱きて之を忌避するの狀況なりしか故に種痘の施行に
際しては各警察官に於て努めて其の迷信を誠諭し種痘は痘瘡豫防唯一の良法なるを示し之が普及
に努力したる結果近時漸く種痘忌避の弊風止み種痘の施行年と共に周密なるに至りたる爲痘瘡の
流行次第に減退するの狀況に在り今最近三箇年間に於ける種痘人員を掲ぐれば左の如し

種痘者數

年	内地		計	朝鮮		計	合計
	男	女		男	女		
大正七年	二二、四六三	二一、五一四	四三、九七六	八三一、七八一	六九五、三七三	一、五三二、一七三	一、五七六、一五〇
同八年	四二、一三五	四四、〇一四	八六、一三九	六九、三〇六	五九七、七八八	一、二九一、〇九四	一、三七七、二二三
同九年	五二、七一五	五〇、三九三	一〇三、一〇八	一、三五五、一三八	九四九、〇六五	二、二五〇、一七三	二、三五七、二八一

(六)赤痢 赤痢病の發見に付ては年年檢病的戸口調査を履行しつつありと雖朝鮮入部落に於ては土地、飲料水等概して不衛生的にして傳染病流行の因を爲すに依り容易に之が終熄を期する能はざるは頗る遺憾ありとて仍て之が豫防の根本策として清潔方法を履行し上水下水の改良を圖り一面豫防液の注射を行ひ専ら其の防遏に努めつつあり

(三)肺室扶斯 本病は他の熱性病と混同し易く且之が診定には或程度の期間を要するが爲病毒他に蔓延し居るの疑なきにあらず故に其の防遏上一層の困難を感ずる所にして之が豫防に付ては豫防接種を無料にて希望者に施行すると共に開業醫私立病院等に於ても之を施行し得ることしたり

(ホ)爾餘の傳染病に於ても年年清潔法の施行飲食物の取締及警備その他市民の患者届出を履行し一面檢病的戸口調査を履行して患者の早期發見且つ豫防注射及細菌検査の施行等極力防疫に努めつつあり今最近三年間傳染病發生數を掲ぐれば左の如し

傳染病患者

年	虎列刺	赤痢	腸炎	痘瘡	發疹	猩紅熱	實布栞	亞チ	合計
大正七年	1	1,127	3,750	330	108	125	333	1,143	6,916

同	八年	一六、九九一	一、五二二	三、二九九	二、一七九	八四一	一二五	二七六	六五〇	二五、八二二
同	九年	三四、二二九	九七四	二、一四〇	一、五三二	七八	三七一	二六四	二二〇	三九、八〇八

第十一節 地方病

韓國時代に在りては地方病豫防に付何等の施設を爲さず病毒は恣に散蔓して多大の人生を傷むたるものなるか併合以來之を調査研究に努め各地共に中間宿主たる河貝子の採取、河水使用の制限其の他の方法を以て之を豫防に努めつつあり

癩患者も亦各地に散在する員數少からざるを以て釜羅南道高興郡小鹿島に慈惠醫院を設けて一定の人員を收容治療す又釜山、大邱及光州に外國人經營の療養所ありて各若干の患者を收容せり今大正九年中地方病患者數を示せば左の如し

大正九年 地方病患者數

道別	前年		本年		前年		本年	
	總	在患者	總	在患者	總	在患者	總	在患者
京畿道	一、二五六	一、一〇二	一、四四五	一、一〇二	二、四	一、七	一、三	二、三
忠清北道	一〇九	八	八	一一二	八	三五	一八	二四
忠清南道	四八五	二五二	四六	六二七	五一	一八	一七	五一
全羅北道	七四八	二五二	一一四	九九二	五二	二五	六	六四
全羅南道	一、三二一	二五六	一〇〇	九三四	三三五	四八八	三二	七四二
慶尙北道	三、〇二〇	四一〇	二五三	二八六〇	八一五	二三〇	一四四	八三五
慶尙南道	一、二一〇	二五五	五一	二一三	八二九	一八七	五六	六八〇
黃海道	一、七八四	二、一八九	四〇三	二、五二八	二	二一	九	一四
平安南道	五五五	三八七	一四三	六〇七	二六	二四	一一	二七
平安北道	一三六	三七六	四八	二〇四	四	九	二	一〇
江原道	八〇二	四一八	五八	一、〇二九	八四	一七	五	八七
咸鏡南道	二、九九六	二七七	六四	三、〇六六	二二	一八	六	三六
咸鏡北道	一、三三二	七〇	一〇	一、三	一五	五	二	一一
計	一、三三二	五、九一〇	一、四四三	一、四、二九七	二、二六七	一、〇九四	三、三一一	二、六〇四

肺
ザ
ス
ト
マ
癩
病

第十二節 獸疫

獸疫中最怖るべきは牛疫にして毎に隣接地支那領土内に常在するか爲動もすれば其の侵害を被り豫防上忽諸に付す可きにあらす依て最も慘酷なる豫防制遏及血清注射を勵行せし結果近年著しく其の侵害を見ざるに至れり又流行性驚口瘡は年年増加の傾向を呈し牛疫と同様對岸支那に常存し殆ど牛疫流行時と相俟て病毒侵襲を受け爲に蒙むる損害亦尠しとせず依て之か豫防制遏に全力を盡しつつあり今最近三箇年間の發生頭數を擧ぐれば左の如し

獸疫發生數

年	牛疫	炭疽	氣腫疽	流行性驚口瘡	鼻疽及皮膚疽	豚刺	豚刺	瘋狗病
大正七年	一九	一、二六四	一、四四二	八七〇	六三七	八三	二五	四七一
同八年	一五	八二九	二、四一五	三六、二一一	六九	九六	二七	四〇七
同九年	一、一四四	五九五	二、二六二	三一七	一四	八八	二二	二四六

第十三節 移出牛檢疫

大正四年七月府令を以て移出牛検査規則を發布し釜山及馬山港より生牛を移出するものに限り二十日間の検査を行ふこととせり蓋し此の改正に依り従來朝鮮にて九日間、内地にて九日間所謂二重検査の手續と經費を省きたるものなり其の後大正五年十月更に同規則を改正し従來生牛の移入を許さざりし敦賀港に對しても元山及城津にて健康診断を行ひ移出し得ることとせり朝鮮より内地に移出する畜牛は累年増加し釜山に於ける停滯牛數少からざる狀況なるを以て農商務省と交渉の結果釜山に於ける繋留検査日數十八日以上なりしを短縮するの協議調ひ大正九年三月府令第三十號を以て移出牛検査規則を改正して繋留日數を十二日とせる爲近時移出牛の順調を得るに至れり

移出牛累年検査表

年	検査頭數			自由移出港		合計
	釜山	元山	城津	木浦	仁川及蔚山	
大正七年	三一、二一六	五七〇	二、三六一	四、一二一		三八、二六八
同八年	二六、四七五	一、二九二	二、五二九	一〇、六六六	一、七一四	四二、六七六
同九年	三五、八一三	一、五四五	一、七一八	六、一七三	一三、六一〇	五八、八五九
計	九三、五〇四	三、四〇七	六、六〇八	一〇三、五一九	一五、三三四	一三九、八〇三

第二十二章 司法

第一節 裁判制度

朝鮮に於ける民刑事の裁判及非訟事件に關する事務は朝鮮總督府裁判所之を掌る而して裁判所は三審制度に則り分ちて高等法院、覆審法院及地方法院の三とす地方法院の事務の一部又は全部を取扱はしむる爲地方法院支廳を設置し又登記及公證の事務を取扱はしむる爲地方法院出張所を設置せり

地方法院は民事及刑事に付第一審裁判を行ひ且非訟事件に關する事務を取扱ふ覆審法院は地方法院の裁判に對する控訴及抗告、高等法院は覆審法院の裁判に對する上告及抗告に付裁判を行ひ且高等法院は裁判所構成法に定めたる大審院の特別權限に屬する職務を執行す

地方法院は判事單獨にて裁判を爲すも確訴訟物の價額千圓を超過する民事事件、人事訴訟事件、破産事件、刑法第七十四條及第七十六條の犯罪事件、本刑死刑無期又は短期一年以上の懲役若は禁錮に該る犯罪事件（裁判所構成法に定めたる大審院の特別權限に屬する事件を除く）短期一年に滿た

さる有期の懲役者は禁錮又は罰金に該る犯罪事件にして豫審を経たるもの並此等の刑事事件の共犯事件にして本事件と同時に審判する場合は三人の判事、覆審法院は三人の判事、高等法院は五人の判事を以て組織したる部に於て合議裁判し且各裁判所に検事局を併置し檢察事務を掌らしむるものとす

從來朝鮮に於ては判事に對する身分の保障なく朝鮮總督は必要と認むる時は休職を命ずることを得たるも大正十年制令第十二號に依り之を廢止し以て其の身分を保障すると同時に一面在職年齢を制限す即ち高等法院長は六十三年其の他の判事の職に在る者は六十年に達したるときは退職とすることとせり然れども朝鮮總督は高等法院の總會の決議に依り五年間仍在職せしむることを得るものとす

裁判所一覽

高等法院	覆審法院	地方法院	地方法院支廳	地方法院出張所
		京城	×開城 驪州	×水原 ×仁川 ×春川
				廣州、議政府、鍾川、抱川、加平、楊平、利川、金良場、安城、平澤、永登浦、金浦、江華、汝

京城

平壤		京城		
海州	平壤	咸興	公州	
×瑞興 載寧 松禾	定州 寧邊 江界 楚山	×北青 ×元山 永興 江陵 ×*清津	×大田 ×江景 洪城 瑞山 天安	鐵原 原州
院、 長洲、 延安、 安岳、 信川、 沙里	慈城、 厚昌、 浦州、 昌城、 碧潼、 渭原	鍾城、 穩城、 慶源	餘津、 溫陽、 陰城、 堤川、 大川、 青陽、 禮山	山、 長湍、 麟蹄、 楊口、 淮陽、 旌善、 平昌、 寧越、 橫城、 洪川、 華川、 金化、 平康、 伊川
	黃州、 順川、 孟山、 陽德、 成川、 江東、 中和、 江西、 永柔、 价川、 寧遠、 義州、 龜城、 泰川、 雲山、 熙川、 博川、 宣川、 鐵山、 龍岩	通川、 高城、 襄陽、 定平、 高原、 文川、 安邊、 洪原、 利原、 端川、 新興、 長津、 豐山、 三水、 甲山、 鏡城、 明川、 吉州、 富寧、 茂山	報恩、 沃川、 永同、 鎮川、 槐山、 陰城、 堤川、 丹陽、 鳥致院、 扶餘、 舒川、 大川、 青陽、 禮山	

支廳なり 本表中*印を附したるは合議部の制ある地方法院支廳にして×印は豫審を取扱ふ地方法院				高等法院
	大邱			覆審法院
	光州	釜山	大邱	地方法院
	錦山 南原×井邑×群山 ×順天×*木浦×長興 濟州×*全州	蔚山×*馬山 密陽×統營×*晋州 居昌	盈德 蔚珍 金泉 尙州×安東 義城×慶州	地方法院 支廳
珍島 羅州 密城 谷城 高敞 鎮安 茂朱 長水 任實 淳昌 咸平 靈光 長城 莞島 咸順 康津 海南 靈巖 求禮 光陽 麗水 高興 金堤 裡里 潭陽	山清 咸陽 陝川 宜寧 咸安 昌寧 梁山 東萊 金海 固城 泗川 南海 河東	鬱陵島、三陟 善山 開慶 醴泉 榮州 乃城 慶山 清道 高靈 星州 倭館 軍威 青松 英陽 浦項 永川	地方法院 出張所	

第二節 適用法規

適用法規は明治四十五年四月一日より施行の朝鮮民事令朝鮮刑事令に於て民法刑法其の他主要なる内地法規に依るべき旨を定めたり

民事に付ては民法中能力、親族、相続に關する規定は之を朝鮮人に適用せずして從來の慣習に依ることとし又不動産に關する物權の種類及效力に付ては民法に定めたる物權を除くの外仍慣習に依ることとせり然れども時勢の推移は上記の事項亦漸くにして慣習に依據せしむるを不適當とするに至りたるを以て大正七年以來改正委員會を設け之を調査審議を遂げたる結果今次最も改正の急を要する朝鮮人の能力、後見保佐人無能力者の爲に設くべき親族會に關する事項に付具體的成案を得たるを以て之を法令改正の手續中に屬す

刑事に付ては明治四十五年四月刑事令施行の際當分の内殺人罪、強盜罪に限り朝鮮人に對し舊韓國刑法大全の效力を有せしむることとせしか大正六年十二月之を改正して此の規定を削除し又獨り朝鮮人に對してのみ古くより行はれたる管刑制度も時勢の推移に伴ひ之を存置すること妥當ならざるを認め大正九年三月三十一日朝鮮管刑令を廢止し以て從來内鮮人間に存せし刑罰法上の區別を撤去

したり又同年四月勅令第百二十號を以て特に朝鮮人に對し恩赦を行はせられたり其の他適用法規の改正せられたるものの中主なるものは左の如し

一、大正十年四月制令第八號を以て朝鮮刑事令第一條に「十三刑事訴訟費用法」を加へたること

民事、刑事 豫審及検事捜査事件新受件數

種別	大正七年	同八年	同九年
民事 第一審事件	三二、三二七	三二、四六三	四〇、一一七
控訴事件	二、二三八	二、三〇一	二、四一六
上告事件	三九四	三九七	三七二
計	三四、九三九	三五、一六一	四二、九〇五
刑事 第一審事件	二七、四七九	二二、九八二	一九、九六〇
控訴事件	一、九二九	二、九八二	二、三四三
上告事件	一五二	一、〇五七	一五六
計	二九、五六〇	二七、〇二一	二二、四五九
豫審事件	六六四	六七七	八一四

總計	刑事			民事			總計
	上計	控訴審	第一審	上計	控訴審	第一審	
一、〇五五、四九〇	二、七七〇	五四八	八	九二五、九三五	二六	二	六、〇七四
一、一六三、三五七	二、九五四	八九一	四	一、〇四三、二五五	七	七	五三、三九八
一、一八八、七〇九	二、五三二	七〇一	七	一、〇六一、九四七	八	七五	五七、二六八

本表には故障及再審事件を包含す
 民事及刑事事件欄に掲記したる事件の種類左の如し

民事 抗告、和解、督促、假差押、假差分、強制執行、不動産競賣、破産、禁治産、準
 禁産及失踪の宣告、各種登記、非訟事件手続法に依る非訟事件、公證、確定日
 附の付與、共助及其の他の申請事件
 刑事 抗告、私訴、共助、忌避申請、加重刑決定請求、刑の執行猶豫取消請求等の事件

第三節 不動産登記制度

不動産の登記に關しては明治四十五年三月朝鮮不動産登記令を發布し原則として不動産登記法に依ることを定めたり抑朝鮮に於ける不動 所有權の得喪に關しては古來文記又は文券と稱する私署證書の引渡に由り之を行ふに過ぎざりしを以て併合前韓國政府時代既に土地建物證明規則並土地建物所有權證明規則を發布し質買、贈與、交換、典當の各事項の外所有權の保存に付府尹又は郡守をして之に證明を與へしめ其の權利の確保を期する方法を講じたりしか爾來時勢の推移に伴ひ複雑なる權利關係を生じ之を確保する上に於て缺如する所尠からず仍て明治四十五年改めて朝鮮不動産證明令を發布し府尹郡守を以て證明官吏と爲し證明すべき權利を所有權、典當權の二種に限りたること舊規則に異らずと雖朝鮮民事令施行の結果證明を以て第三者に對抗するの要件となし權利確保上舊規則の缺點を補へり元來朝鮮不動産證明令の施行は土地臺帳の設備に至る迄一時權宜の處置たるに過ぎざるを以て土地調査の進行に伴ひ土地臺帳を設備したる地域に對しては朝鮮不動産登記令を施行と同時に證明事務を廢止するの順序とし大正七年七月を以て朝鮮全土に之を施行を了せり

第四節 民籍事務

朝鮮に於ける民籍は李朝成宗の朝に式年の制を定め毎三年(子、卯、午、酉)に一回戸口の數を調査せしめたるに始まり爾來四百有餘年此の遺制を襲踏し來りしか明治二十八年に至り之を改めて戸口調査の規程を設け府尹郡守等管掌の下に面長、洞里長等をして戸口を調査せしめ一方人民に申告義務を負担せしむることとしたれども、民籍は依然其の實を擧ぐるに至らざりしか、其の後明治四十一年民籍事務を警務機關の管掌に移し尋て明治四十二年民籍法を制定發布し人民の申告を督勵し且つ警察官をして戸口の實査を爲さしめ翌四十三年五月に至り民籍の形式茲に漸く成れり其の後地方行政機關漸次備はり府面の事務亦其の面目を一新するに至りしかは大正四年四月民籍法を改正し此の事務を府尹面長の管掌に移せり而して近時人民亦權利思想の發達に伴ひ漸次民籍の重要にして苟且に附し難きを自覺し自ら進むて申告を爲すの傾向を呈し昔日の面目を一新するに至れり然れども民籍法は朝鮮人に限り適用せらるるものなるを以て朝鮮在住の内地人は其の適用を受くることなく一に戸籍法に依りてのみ身分に關する届出を爲すべきものとす而して内鮮人間の婚姻は共通法第二條に依り民法及朝鮮の慣習に依據して行はるべきものなれども從來内地朝鮮相互間民籍の送付に關

する手續規定を缺如せる爲共通法第三條の施行を留保せられたる結果完全有効に行はるることを得ざりしか大正十年六月府令第九十九號を以て之が手續規定せられ共通法第三條及戶籍法第四十二條の二の規定の施行と同時に同年七月一日より内鮮人の婚姻に關する民籍手續は茲に愈完全に行はるることなれり

第五節 公證事務

大 二年五月朝鮮公證令を施行し公證人の職務は専ら地方法院及同支廳に於て取扱ひ來りたるも翌三年五月地方法院出張所の設置と同時に出張所に於て亦之を取扱ふことなるに至れり然れども京城の如き都會に在りては專務の公證人設置の必要あり大正四年三月府令を以て朝鮮公證令施行規則及朝鮮公證手数料規則に改正を加へ同四月一日京城地方法院所屬の專務公證人一人を任命し裁判所外に於て其の事務を取扱はしめ同院(支廳及出張所を除く)に限り該事務の取扱を廢したり

第六節 執達吏事務

執達吏に屬する職務は内地に於けるが如く純然たる專務の執達吏の職制を設けず之を裁判所書記の

職務に屬せしめ且裁判所及檢事局の長は警察官吏其の他適當と認むる者をして該職務を行はしめ得るの定にして當初は主として警察官吏をして兼掌せしめたるも逐年事務増加に伴ひ専務の執達吏職務取扱者の必要緊切なるに至りたるを以て非官吏執達吏職務取扱者を任命し漸次地方法院及主要なる地方法院支廳所在地に事務所を設置せしめ以て時勢の要求に適應せしむる所あり現に非官吏執達吏職務取扱者設置の箇所は左記の如くにして其の他の箇所には仍警察官に於て其の事務を取扱ひつつあり

京城、仁川、江景、北青、元山、平壤、鎮南浦、大邱、釜山、馬山、密陽、統營、晉州、光州、順天、木浦、長興、全州、南原、井邑、群山、

(以上執達吏事務全般を取扱ふ)

定州、寧邊(以上送達事務に限り取扱ふ)

第七節 監獄

監獄は警察の一部として舊韓國内部の管轄に屬し其の事務は警察官の兼掌する所なりしか明治四十年十二月監獄官制を公布し法部の所管に屬せしめ典獄以下の職員を置き明治四十一年一月京城監獄

の事務を開始し次て七箇の監獄及十二箇の分監を開設したり越けて明治四十二年十一月に至り統監府監獄を開設するや舊韓國監獄及内地人囚徒を收容したる理事廳監獄の事務一切を承繼し明治四十三年十月之を朝鮮總督府監獄と改稱す爾來獄舎の改善獄務の刷新を爲したるもの洵に尠しとせず大正九年三月朝鮮管刑令廢止せられたるを以て之に應ずる爲監獄の擴張を計畫し永登浦外四分監を本監と爲し新に分監七箇所を開設し典獄及判任官の増員を行ひ典獄補を新設せり目下朝鮮に於ける本監は京城、西大門、永登浦、公州、大田、咸興、清津、平壤、新義州、海州、大邱、釜山、光州、木浦及全州の十五箇所分監は開城、仁川、春川、清州、元山、江陵、鎮南浦、金山浦、瑞興、金泉、安東、馬山、晉州、濟州及群山の十五箇所なり而して開城、金泉の兩分監は特設監として十八歳未満の囚徒を收容する見込みなり而して司法制度の整頓に伴ひ在監者漸次増加し大正八年三四月の候全鮮各地に互り妄動事件勃發するや保安法違反及騷擾罪にて檢舉せられ入監したるもの多く大正八年末迄に實に一萬二百五十九名に達し其の拘禁處遇に付困難を極めたりしか大正九年四月勅令第百二十號に依り減刑の恩典に浴したる受刑者二千六百餘名に達し一時在監者の減少を見たるも一面答刑令廢止に伴ひ逐次再び増加を見るに至り現時監房の設備に於ては在監人の種類、罪質、犯數、年齡、性格等の法定分類を嚴行すること能はさるも監獄當局の行刑及作業上に銳意努力せる結果囚情平穩

にして改過遷善の兆候を認むるもの多きに至れり最近の在監人員及假出獄人員左の如し

一日平均在監人員

大正十年九月

年	受刑者		刑事被告人		勞設場留置者		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
大正七年	10、665	750	963	56	29	5	11、457	91	12、348
同八年	11、767	654	3、205	86	13	3	14、983	743	15、726
同九年	11、640	534	1、965	76	50	1	13、655	601	14、256

假出獄人員

年	人員	年	人員
大正七年	六七七	大正十年九月三十日迄ノ分	二二九
同八年	1、103		
同九年	六九六		

監獄作業に付ては疾病又は事故に依る休役を除く外受刑者全部を就役せしむるに至り年々其の收入を増加したるも大正九年五六月の候より急劇なる財界の變動を來し作業經營上に影響を受けたること尠しとせず左に最近三箇年の統計を掲ぐ

受刑者就業人員

種別	大正八年度	大正九年度	大正十年上半季
就業人員一日平均	一一、六〇五	一一、二八三	一三、一一一
受刑者百に對する歩合	八五・六	九〇・八	九四・八

監獄作業收入

年度	囚徒工錢	製作收入	農業收入	合計
大正七年度	一三六、〇一四 円	二二一、九四三 円	一四五〇〇 円	三七二、四五七 円
大正八年度	二二〇、二七一	二六九、一七八	三三、二〇七	五二一、六五六



公 州 業 院 作 業 實 況

同 九年度

二四〇、三六五

三三三、九九二

二八、三六三

五九三、七二〇

監獄に於ける指紋の徴收は明治四十三年八月之を開始し其通法の施行に伴ひ大正七年十二月より内地と指紋共通の途を講し同九年八月より看守若干名を本府に召集して指紋事務を講習し之を各監に配置せしより指紋事務の進歩著しく其の誤謬の歩合亦内地と大差なきに至れり

指紋徴取及前科發見數

年	徴取指紋原紙數	同上前科發見數	警察官署其他 對照指紋原紙數	同上前科發見數
大正八年	二二、四四七	八七三	三六二	一九一
同 九年	一四、四七四	七五五	八一三	三六七
同 十年六月迄	七、八一三	三五九	七〇七	二八三
備考	大正十年六月末日現在保管指紋原紙數は十四萬七千九百九十六枚なり			

第八節 免囚保護事業

從來朝鮮に於ける出獄人保護機關は微微たりしか故に十分なる効果を擧ぐるを得ず而も一面出獄人は比年其の數を増加するを以て本機關の完備を圖るは頗る緊要なりと大正二年五月免因保護事業補助金下付手續を制定し同年度より毎年金五千圓を交付し來りしも大正九年度に至り之を金一萬圓に増額し其の發達促進に力を致せり其の結果總督始政の當時に在りては僅に一保護團體の設立ありたるのみなりしか爾來官民有志の協力に依り各地相踵て設立せられ大正九年末に於ては其の數二十一を算し事業の成績亦面目を一新するに至れり

出獄人保護機關

大正九年度

保護團體	所在地	收容保			收			資
		護人員	非收容保人員	一時的保人員	入	支	産	
京城救護會	京城	一〇二	一一七	四一六	五、〇八五	三、九二四	一、九二五	
仁川救護院	仁川	五	一	六	一、〇九〇	一、五〇八	一、六八一	
春川保護會	春川	一一	一	一五	八五六	二九七	一、四四二	
公州慣業院	公州	三〇	八	一六五	五、四〇九	五、三九四	三、六三八	
忠北有隣會	清州	一	一	七五	一、六四六	一、五一四	二、〇三八	

第二十二章 司法

大田自縣會	群山保護會	全州有終會	木浦成美會	光州有隣會	晉州扶掖館	馬山保護會	釜山輔成會	大邱常成會	海州保護會	平北保護會	鎮南浦獎善院	平壤同	清津同	元山同	咸興保護會
大田	群山	全州	木浦	光州	晉州	馬山	釜山	大邱	海州	新義州	鎮南浦	平壤	清津	元山	咸興
1	1	6	7	8	15	6	8	25	2	6	3	18	1	1	1
1	1	2	1	1	1	2	3	2	5	6	14	8	2	1	1
4	6	36	196	106	37	9	66	370	64	64	4	236	18	57	31
1,984	761	2,274	1,006	4,813	424	634	1,041	7,910	1,307	1,339	3,784	2,444	1,104	411	1,106
71	111	3,408	408	3,652	81	187	971	6,268	853	1,652	3,938	1,184	303	79	641
1,913	3,233	4,538	3,840	4,663	2,116	2,970	4,604	4,858	3,875	6,132	1,647	6,654	2,906	2,031	3,441

四九七

總計	保護團體	收容保護人員	非收容保護人員	一時的保護人員	收入	支出	養	產
	所在地	二八二	一七一	一、九八一	四六、四二八	三六、四四四	八一、一四五	



朝鮮總督府博物館本館

第二十三章 古蹟及遺物

(イ)古蹟調査 本府に於ては明治四十二年以來韓國政府に於て著手したる古建築物並古蹟の調査を繼續し大正四年一旦其の終結を告げ既に「韓紅葉」「朝鮮藝術の研究」「同續編」「古蹟調査略報告」等を發行し別に「朝鮮古蹟圖譜」と題する圖録を公にせし朝鮮に於ける古來の遺蹟及遺物は其の數極めて多く從來の調査は其の一斑を闡明したるに過ぎざるのみならず比年交通機關の發達並産業の勃興に隨ひ遺蹟及遺物は漸次散逸又は湮滅に歸する虞あるを以て速に之を調査を遂げ且保存の方法を講ずる必要あるを認め大正五年四月計畫を更新し五箇年を期して一應の調査を遂ぐることをし調査事項を先史遺蹟(貝塚、遺物包含層、遺物散布地、堅穴)古墳(高麗以前に屬する墳墓、朝鮮中期以前に屬する)史蹟(都城、宮殿、城柵、關門、交通路、驛院、烽燧、官府、祠宇、壇廟、主要なる墳墓の形狀の調査)寺刹、陶窯等の遺址、戰跡其の他主要なる史實に關係ある遺蹟の調査並遺物(古建築物(歴史上又は工藝上參考となるべき宮殿、城門、樓臺、祠宇、壇廟、客館、校舍、寺刹、橋梁等の調査)金石其の他考古物(佛像、燈碑、石刻、幢竿、石獸、石人、石槽、鐘、香爐、鏡、祭器、樂器、繪畫、冊板、懸額、陶磁器、漆器其の他歴史上又は工藝上の參考となるべき金石製作物、木製品等の調査並蒐集)

古文書（歴史その他考事の資料とな）等に分ち調査地域を第一年度は漢置郡及高句麗の遺蹟並有史前の遺蹟に付黃海道、平安南道、平安北道、京畿道、忠清北道、第二年度は三韓、伽倻、百濟及有史前の遺蹟に付京畿道、忠清南道、忠清北道、慶尙南道、慶尙北道、全羅南道、全羅北道、第三年度は新羅並有史前の遺蹟に付慶尙南道、慶尙北道、全羅南道、全羅北道、第四年度は畿嶺、沃沮、渤海、女眞等の遺蹟並有史前の遺蹟に付江原道、咸鏡南道、咸鏡北道、平安南道、平安北道、第五年度は高麗並有史前の遺蹟に付京畿道と定め朝鮮期に屬する調査は各年度に於ける地域の區分に依り便宜之を行ふこととし各時代の遺蹟にして豫定の地域外に屬するものは其の地方の調査を爲す際便宜之を行ひ臨時急速を要する事情あるとき及博物館陳列品として急遽蒐集の必要あるものは豫定地域外と臨時に調査を爲すこととし大正五年九月より調査に着手し十年三月末を以て一應完結せり而して毎年の調査は報告書を印刷して公にすることとし既に第一年度の調査報告書及同年度に屬する平安南道に於ける漢置郡及高句麗の遺蹟に關する特別報告書並第二年度の調査報告書を發行せり、又古蹟調査の計畫並實行の方法、順序等を審議し及古蹟の保存、遺物の蒐集、古蹟、遺物、名勝地等に影響を及ぼすべき施設に關する事項並古文書の調査蒐集に關する事項を審議し及實地の調査に當らしむる爲古蹟調査委員を置き委員長及幹事を任命して隨時委員會

を開くこととし、五年七月古蹟及遺物保存規則を制定し、貝塚、石器、骨角器類を包有する土地及堅穴等の先史遺蹟、古墳、以都城、宮殿、城柵、關門、交通路、驛院、烽燧、官府、祠宇、壇廟、寺刹、陶窯等の遺址及戰跡其の他の史實に關係ある遺蹟年代を經たる塔、碑、靈、金石佛、幢竿、石燈等にして歴史、工藝其の他考古の資料となるべきものの中保存の價值あるものに付名稱、種類、形狀大小、所在地、所有者又は管理者の住所氏名若は名稱、現狀、由來、傳説、管理保存の方法等を臺帳に登録し此等の古蹟又は遺物を發見したる者は三日内に届出てしめ臺帳に登録したる物件に付現狀を變更し移轉、修繕、處分等を爲すには總督の許可を受けしむることとし必要な遺物を登録し同時に主要なる遺蹟及遺物に付順次保存工事を施行せり

以上第一次及第二次の調査に依り朝鮮に於ける遺蹟遺物の主要なるものは略ぼ其の調査を遂げたりと雖既に判明せる遺蹟遺物の調査を要するもの猶ほ太た多きのみならず調査の進行に伴ひ新に之を發見すること亦少からざるべきは疑なき所なるを以て之の調査を繼續して過去の文化を闡明し其の形跡を保存するは國家當然の責務なりと云はざるべからず殊に朝鮮の如く主權の所在に異動ありし地域に在りては前代の文化を煙滅することの最も戒むべきと同時に之の保存を計るは甚必要なる事項なるを以て依然調査を繼續することとし調査の方法を一般調査、特別調査、臨時調

査の三種に分ち一般調査に於ては一道を劃し其の地域内に於ける未調査の遺蹟遺物を遺漏なく踏査し特別調査に於ては物件を特定して精密の調査を行ふこととし臨時調査に於ては物件の破壊、古墳の盜掘等の虞あり急を要する場合に於て隨時之に調査を爲し物品を蒐集し又は遺蹟遺物の保存方法を定むることとせり

毎年の調査は報告書を印刷して公にすることとし、既に大正五年度の調査報告書及同年度に屬する平安南道に於ける漢置郡及高句麗の遺蹟に關する特別報告書並大正六年度の調査報告書を發行し大正七年度の調査報告書、大正八年度の調査報告書及大正八年度に屬する西比利亞に於ける朝鮮民族の遺蹟に關する特別報告書は目下印刷中なり

尙前記の方針に依り古蹟及遺物を調査し當初より登錄せるものを擧ぐれば京城塔洞公園圓覺寺址十層塔外三百八十四件にして其の修理保存を了したる主なるもの左の如し

名	稱	年	代	保	存	方	法	所	在	地
開泰寺址	鐵釜	高麗		朝鮮總督府博物館内に保存す				忠清南道論山郡連山面		
智光國師玄妙塔		高麗		同				江原道原州郡富論面		

開國寺址七層石塔	高麗
弘法國師寶相塔	高麗
同 碑	高麗
彌勒菩薩石像	新羅
阿彌陀佛石像	新羅
藥師如來石像	新羅
朗空大師塔碑	高麗
葛項寺址東三層石塔	新羅
葛項寺址西三層石塔	新羅
講堂寺址釋迦鐵像	新羅
寂照寺址釋迦鐵像	高麗
大鏡大師玄機塔碑	高麗
敬天寺十層石塔	高麗
眞鏡大師塔	新羅

同 同

京畿道開城郡青郊面
忠清北道忠州郡東良面
同
慶尙北道慶州郡內東面
同
同
同
同 榮州郡榮州面
慶尙北道金泉郡南面
同
忠清南道瑞山郡雲山面
京畿道開城郡嶺南面
忠清北道堤川郡寒水面
京畿道開城郡豐德面
慶尙南道昌原郡上南面

名	稱	年	代	保存方法	所在 地 又は原所在地
眞鏡	大師塔碑	新羅		朝鮮總督府博物館内に 保存す	慶尙南道昌原郡上南面
鑿藏	寺碑	新羅			慶尙北道慶州郡内東面
誓幢	和上塔碑	新羅			同
眞空	大師塔碑	高麗			江原道原州郡地正面
女眞	字碑	高麗			咸鏡北道慶源郡東原面
新興	里鐵佛像	新羅			慶尙南道河東郡花川面
元宗	大師悲眞塔碑	高麗			京畿道驪州郡北内面
碧蹄	館	朝鮮		修理を爲す	京畿道高陽郡碧蹄面
南大	門	朝鮮			同 京城府
華虹	門	朝鮮			同 水原郡水原面
訪華	隨柳亭	朝鮮			同
南大	門	朝鮮			同 開城郡松都面

曾通門	練光亭	三墓里古墳	双楹塚	統軍亭	七層磚塔	彌勒寺址石塔	盛石樓	眞興王巡狩碑	眞興王巡狩碑	百祥樓	東明館及降仙樓	大塚	蕪華塚
朝鮮	朝鮮	高句麗	高句麗	朝鮮	新羅	新羅	朝鮮	新羅	新羅	朝鮮	朝鮮	高句麗	高句麗

同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

修理を爲す
木柵を設く
碑閣を修理す

平安南道平壤府
同
平安南道江西郡江西面
同 龍岡郡池雲面
平安北道義州郡義州面
慶尙北道安東郡一直面
全羅北道益山郡益山面
慶尙南道晉州郡晉州面
咸鏡南道咸興郡岐川面
京畿道高陽郡恩平面
平安南道安州郡安州面
同 成川郡成川面
平安南道龍岡郡池雲面
同 江西郡普林面

名	稱	年	代	保	存	方	法	所 在 地
獵	塚	高句麗		修理を爲す			平安南道龍岡郡大代面	所 在 地
星	塚	高句麗		同			同	新寧面
大	蓮華塚	高句麗		同			同	同
四	神塚	高句麗		同			同	大代面
滿	月臺	高麗		同			京畿道開城郡松都面	同
清	太宗功德碑	朝鮮		同			同	廣州郡中空面
中	央塔	新羅		同			忠清北道忠州郡可金面	同
鳳	山養洞里古墳	漢		同			黃海道鳳山郡楚臥面	同
嶺	南樓	朝鮮		同			慶尙南道密陽郡密陽面	同
陽	陵里古墳	高麗		同			京畿道開城郡青郊面	同
松	溪洞古墳	高句麗		同			平安南道順川郡北倉面	同
龍	頭寺址幢竿	高麗		同			忠清北道清州郡邑內	同

名稱	年代	保存方法	所在 又は原所在地
法鏡大師普照慧光塔	高麗	修理を爲し木柵を設く	京畿道開城郡嶺南面
佛日寺址舍利塔	高麗	同	同 長湍郡津西面
洞真大師寶乘塔碑	高麗	同	全羅南道光陽郡玉龍面
新月洞三層石塔	新羅	同	慶尙北道永川郡琴湖面
武烈王陵碑	新羅	木柵を設く	慶尙北道慶州郡慶州面
陵山里古墳	百濟	修理を爲し木柵を設く	忠清南道扶餘郡扶餘面
雙陵		石標を立つ	全羅北道益山郡八峰面
莊義寺址幢竿支柱	新羅	木柵を設く	京畿道高陽郡恩平面
昌林寺址三層石塔		同	慶尙北道慶州郡内南面
九政星古墳			同 内東面
貞栢里古墳	漢	木柵を設く	平安南道大同郡大同江面
石巖里古墳	漢	同	同

龍井里古墳	葛城里古墳	校洞里古墳	星山洞古墳	普門里古墳	大安里古墳	德山里古墳	新村里古墳	陵山里古墳	道項里古墳	未山里古墳	湖南里古墳	土浦里古墳	魯山里古墳
高句麗	漢	伽倻	伽倻	新羅				百濟	同	伽倻	高句麗	高句麗	高句麗
同	同	同	同	同	同	同	同	石標を立つ	同	同	同	同	木柵を設く
同	平安南道龍岡郡海雲面	慶尙南道昌寧郡昌寧面	慶尙南道昌寧郡昌寧面	同 星州郡星州面	慶尙北道慶州郡內東面	同	全羅南道羅州郡潘南面	全羅南道羅州郡潘南面	忠清南道扶餘郡扶餘面	同	慶尙南道咸安郡伽倻面	同	平安南道大同郡柴足面

館日とし觀覽料を金五錢と定めて觀覽券を發賣し同伴の小兒は無料とせり又二種の特別觀覽券(無料)を發行し一種は使用を一回限とし一種は使用期間を一年とせり

開館當時に在りては共進會の際新に建築せし美術館を以て本館とし故寺内伯爵の寄附に係る朝鮮古來の書畫、佛像、佛具、食器、服飾品、婦人用具、陶磁器、漆器の外本府に於て購入せし物品並古墳調査に依り蒐集したる物品及遺失物法に依り國に歸屬したる埋藏物等を陳列し又共進會の陳列館たりし審勢館(各道の産業、教育等の進歩の狀況を示すべき現品圖表統計を陳列す)及鐵道館(鐵道に關する模型、寫眞、地圖、繪畫其の他の參考品を陳列す)を存置し鐵道館には土木及通信其の他交通に關する參考品を併せて陳列し名を交通館と改め思政殿及勤政殿廻廊に石碑、鐵製及石造の佛像、石棺及兵器類を陳列し庭園には石塔、石碑の類を配置し案内圖を發行せしか翌五年五月久原房之助氏の寄附に係る西域蒐集品(大谷光瑞師が前後四年に互り支那新疆省及甘肅省地方にて蒐集したるもの)を修政殿に陳列し年末に至り其の後購入したる物品蒐集したる物品並發見埋藏物、寄附品、寄託品を加へ陳列替を爲し七月審勢館を閉鎖し六年末に至り康寧、慶成、秋成の三殿を修理して陳列室を増設し蒐集したる古墳壁畫、同模寫、金石文、並之に關係ある蒐集品、古墳出土品、先住民の遺物及對照地圖、繪畫、寫眞等を陳列し七年末に至り之を勤政、思

政、萬春、千秋の四殿に移し九年交通館を閉鎖して各館の陳列替を爲し陳列品中優秀なるものを擇ひて寫眞版と爲し又館内の建物及陳列品を繪葉書と爲し之を發賣せり開館以來の觀覽人一日平均百數十名にして晴雨寒暑に拘らず一日として觀覽者を見ざるこゝなし

本府博物館は朝鮮に於ける唯一の官設博物館たる地位に在るを以て其の陳列品は朝鮮を主とし支那・印度等の參考品を併せて陳列する方針にて陳列品の種類を概ね制度、風俗、文藝、宗教、美術、工藝其の他歴史の徵憑及參考となるべき物品並先住民に關する遺物とし専ら之が充實完備に力を效せり



開島公立善通學校

第二十四章 在外朝鮮人に對する施設

在外朝鮮人の大部は滿洲、西比利亞に在り龍井村、吉林、奉天、ハルビン、安東縣、浦潮、ニコリスクを中心として各地に散在し就中安東縣局子街及龍井村、奉天、浦潮に多く滿洲、西比利亞を通じて其の數百餘萬と稱せられ多くは滿洲西比利亞に於ける生活の安易を傳聞し農耕適地を求めて移住したるものなり従て滿洲、西比利亞在住の朝鮮人は多く農業に従事し其の間島に於ける農業の如きは朝鮮人の獨占と云ふも過言に非ざる狀況なるも此等の移住民中には又往往にして不逞者混入し絶えず朝鮮の獨立を唱へて或は良民を煽動し或は脅迫し浦鹽、上海の獨立運動者と相連絡して畫策至らざるなく而も外國領土内に居住するを以て我が警察權の及ばざるを奇貨とし良民を困惑せしめつつあり而して近年前記對岸地方の不逞者は隊伍を組み武器を携へ威鏡北道國境を越て侵入し警備機關を襲ひ人畜を殺傷し家屋を毀ち財貨を奪ひ良民を拉去し又平安北道國境地方に於ても同様なる暴虐を逞しくするの外官公吏の暗殺を試むる等實に人道に許すべからざる行動を恣にし特に大正九年九月十月の二回間島彈劾に於ては彼等不逞者と馬賊團との混合隊よりなる賊團は數回の襲撃を爲し來りて内地人の家屋を破壊し財物を強奪し之を爲に殺戮せらるる内鮮支人二十餘名負傷者十餘名に達

する慘害を惹起せしめたるを以て帝國は直に出兵して此等賊徒の討伐に當り支那も亦兵を送りて我軍と共同討伐に従ふに至れり其の結果間島地方の不逞團は漸く其の影を收め漸次平穩に歸し賊徒にして歸順するもの又多く一般朝鮮人の我軍を歓迎する事厚く永く其の駐兵を希望して止まざりしか我國は善隣の誼を重んじ支那側に於ける治安の保持を信頼して幾何もなく撤兵を敢行したるに爾來間島地方は靜謐に歸し朝鮮内の國境地方も亦警察官の努力により漸次平穩なるに至れり

更に上海、布哇、北米合衆國等に於ける在住朝鮮人中には併合當時不平を抱きて其の地に遁走せしものも尠からず移民中の誠實なるものも亦獨立運動者の脅迫に依り所謂獨立資金の供給を餘儀なくせられつつあるの現況にして此等は情狀擧る憫むべきものあり、彼の上海に於て所謂假政府を樹立し後佛國官憲の強制に依り其の解散をせられたる一派は尙各地に出沒し或は朝鮮内に潛入し來りて運動資金の募集に努め或は遂に海外より不穩なる文書を送りて良民の煽動に従事しつつあるも今や漸く一般朝鮮人の信望を失ひ此等不逞者間に於ても互に中傷讒誣を事とし目下四分五裂の慘狀を呈し西伯利亞方面に於ける武斷派と米國方面に於ける文治派の軋轢の如き布哇に於ける獨立派と委任統治派の分裂の如き、多く資金の私消、勢力の競争、獨立思想の放棄等を動機とするものにして纏て此等獨立運動者も漸次自滅の運命に陥りつつあり在外朝鮮人殊に滿洲、西比利亞在住者に對

しては總督府は努めて其の啓發扶掖に努むる事とし或は普通學校、書堂を設置し病院を設け隨所に又醫師を駐在せしめ救療に従はしむるに共に巡回施療を施し朝鮮人會を設立せしめて之に補助を爲し朝鮮銀行、東洋拓殖會社等をして同地方に於ける金融の疏通に任せしむる外又別に開島に在ては救濟會及金融會を設けて細農者間の金融を圖り農耕の改善を扶くる等各種の施設を爲し時に旱水害遭害あるに當りては恩賜雜種救助基金の利子を以て之を救恤を爲しつつあり而して之を保護撫育事務に従事する爲には滿洲駐在本邦領事をして總督府事務官を兼任せしめ又必要地點には一面領事館事務兼掌の關係に於て本府判任官を駐在せしめ専ら總督府施設の實現と在住朝鮮人の指導保護とに當らしめつつあり

여 백

第二十五章 軍事

第一節 陸軍

併合の際に於ては駐劄軍在りて其の主なる諸部隊は龍山、平壤、大邱、大田、羅南、咸興等に駐屯したりしか。政府は朝鮮に二箇師團を増設するの必要を認め大正四年臨時帝國議會の協賛を経て之を實施に着手したり。増設師團は即ち第十九、第二十の兩師團にして大正五年四月其の編成に著手し大正十年四月完成し平壤に於ける航空第六大隊は目下増設中に在り。

朝鮮軍隊は併合の際朝鮮歩兵隊、同騎兵隊と改稱せられ駐劄軍司令官の隸下に入り次て大正二年朝鮮騎兵隊は廢止となり目下同歩兵隊は李王宮の守衛及儀仗に任しつあり。

朝鮮に於ける憲兵は駐劄憲兵條例の制定ありて明治四十三年九月同條例の改正せらるるや京城に憲兵隊司令部を置き各道に憲兵隊本部を置き其の他須要の位置に分隊及分遣所等を配置し治安維持に關する警察及軍事警察を掌り其の管轄は陸軍大臣に屬したりしも其の職務執行に付ては總督の指揮監督を承くるの規定なりしか。是より先同年七月憲兵警察官の兩機關統一せられ以て韓國治安の維持

に當り次て併合の際警務總監部を京城に置き憲兵隊司令官たる陸軍將官を以て警務總長に充て各道に警務部を置き該道憲兵隊長たる佐官を以て警務部長に充て警察官署の職員を指揮監督し而して憲兵將校、准士官下上等兵は總督の定むる所に依り在職の儘警察官の職務を執行せしむることを得るの制なりしも大正八年總督府官制改正の際朝鮮憲兵條例廢止せられ爾來憲兵は主として軍事警察を掌り國境の監視に任し其の國境監視に係るものは朝鮮軍司令官の指揮を受くることとなれり

朝鮮軍所在地

名	稱	所在地
朝鮮軍司令部		龍山
鎮海灣要塞司令部		鎮海
永興灣要塞司令部		元山
陸軍倉庫		龍山
同 支庫		龍山
龍山齋戒病院		龍山

朝鮮步兵隊	同	同	同	陸軍運輸部釜山支部	工廠	東京砲兵廠	衛戍監獄	威興衛戍病院	大邱衛戍病院	會寧衛戍病院	羅南衛戍病院	平壤衛戍病院
	出張所	出張所	出張所									

在朝鮮師團配備表

京	元	清	釜	平	龍	威	大	會	羅	平
城	山	津	山	壤	山	興	邱	寧	南	壤

備考 當分の内は規定の衛戍地外に分屯せしむることを得るものごとす 航空第六大隊は平壤に増設中	第十 二 第				第九 十 第			師團	
	龍 山				羅 南			師團司令 部所在地	
	第十 四 第			第三十九	第三十八	第三十七		旅團 部所在地	
	山 龍			平 壤	羅 南	咸 興		旅團司令 部所在地	
	第十 八 第			第七十九	第七十七	第七十五	第七十四	聯 隊	
	第三大隊	第二大隊	第一大隊	聯隊本部	第七十八	第七十六	第七十三	兵	
					第二十八		第二十七	騎兵	
					第二十六		第二十五	野砲兵	
	馬山							重砲兵	
					第二十	第十九		工兵	
馬山	大田	大邱	龍山	平壤	羅南	會寧	咸興	羅南	衛戍地

朝鮮憲兵隊管區表

名稱	管區	區	
京城憲兵隊	京畿道、江原道(通川郡鶴三面を除く)		
清州憲兵隊		忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道	
大邱憲兵隊		慶尙北道、慶尙南道	
平壤憲兵隊		黃海道、平安南道	
義州憲兵隊		平安北道	
咸興憲兵隊		咸鏡南道、江原道通川郡鶴三面	
羅南憲兵隊	咸鏡北道		

第二節 海軍

日露戦役の際、巨濟島松真に假根據地防備隊を置き後之を鎮海防備隊と改め、又元山にも防備隊を置き、明治四十年十月元山防備隊を廢し更に鎮海灣及永興灣に防備隊を置き鎮海防備隊及永興防

備隊と稱す、鎮海防備隊は明治四十五年四月松真より鎮海に移轉せり明治四十四年一月帝國の海軍區を改め、從來の四海軍區を五海軍區と爲し、第五海軍區を對島及朝鮮の海岸海區とし其の軍港を朝鮮慶尙南道昌原郡鎮海に定む、鎮海には當分鎮守府を置かず佐世保鎮守府をして第五海軍區を管せしむ、此の月朝鮮咸鏡南道永興を要港とす永興には當分要港部を置かず、大正五年四月鎮海軍港に要港部を置き鎮海要港部と稱す、此の月永興防備隊を廢す

鎮海要港部に驅逐隊艇隊及艦船等を附屬し又修理工場及病室等を置き主要の職員としては司令官及幕僚、知港事、工場主管等あり、司令官は天皇に直隸し麾下の艦船隊を統率し海軍大臣の命を承け軍政を掌り艦政に關しては其の所在海軍區を管する佐世保鎮守府司令長官の區處を受く、鎮海防備隊に司令及必要の職員を置く、司令は鎮海要港部司令官に隸し隊務を總理す

大正十一年一月二十七日印刷

大正十一年一月三十日發行

朝鮮總督府編纂

京城府觀水洞百三十五番地

印刷所 大和商會印刷所